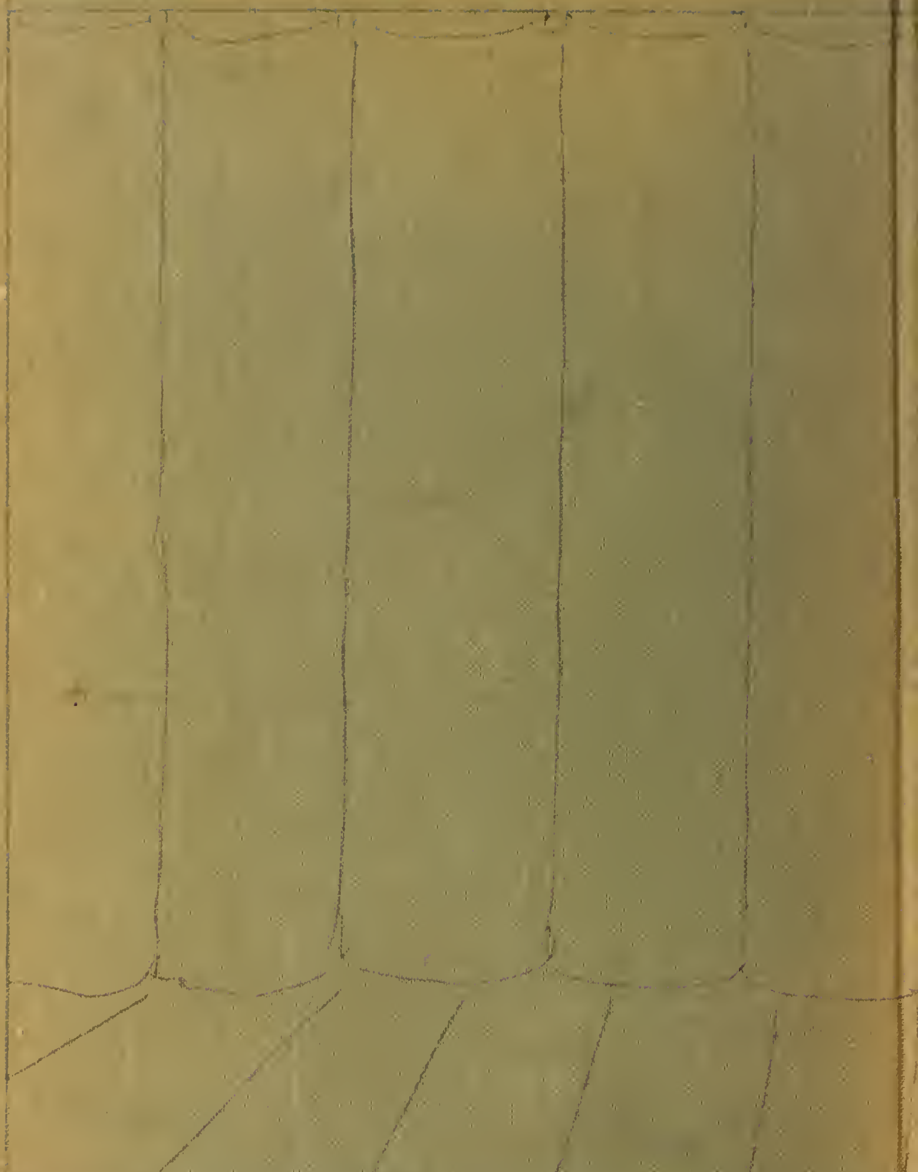


日本戲曲全集

第四十五卷

武者小路實篤

正宗白鳥

現代篇第十三輯

東京

春陽堂版



「佛陀と孫悟空」芽生座演出



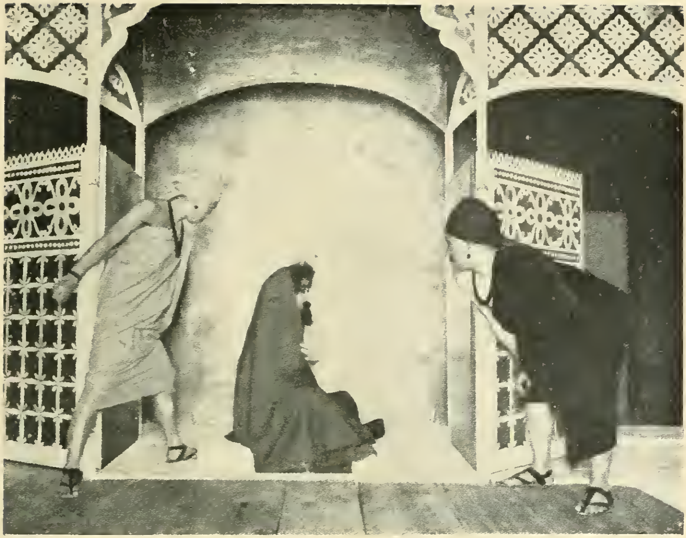
「桃源にて」舞臺面



「三和尚」築地小劇場演出



「桃源にて」佐々木積の老人・守田勘彌の男



「だるま」里人尾上菊五郎・達磨坂東彦三郎・里人尾上伊三郎



「隣家の夫婦」畑中一座演出



「安土の春」右 信長 市川左團次・左 村瀬 市川猿之助



「光秀と紹巴」畑中一座演出



正宗白鳥



武者小路實篤

日本戯曲全集　第四十五卷　目次

武者小路實篤篇

武者小路實篤篇

愛慾（四幕）

人物

野中英次（二十九）
野中千代子（二十五）
野中信一（三十六）
小野寺夫婦

第一幕

一

英次の室、午後一時頃

英次　僕のことは安心してくれ給へ。僕は自分のことは自分で考へたいのだから。
友　君は短氣なことはすまいね。
英次　誰が短氣なことをするものか。僕はそんな人間に見へるかね。
友　なんだか君は非常に淋しいやうに見へる。
英次　淋しくないとは云はないが、しかし今の世に生きて淋しくない人間がゐるかね。暗のなかに一人でおつぽり出されたやうな氣のしない人間がゐるかね。一體、今の人は何を信じたらいゝのだ。しかし何も信じることが出來ないでも死ぬやうなことはない。僕はまだ僕に見切りをつけないからね。之から何か面白いことをしやうと思つてゐるのだから。
友　それをきいて僕も安心したよ。僕達は君の未來を信じてゐるからね。君に今死なれることは僕達にはつらすぎるからね。
英次　ありがたう。しかし僕は死にはしないよ。死ねれば樂かと思ふが、中々この世に強い執着をもつてゐる。何にしても始まらない氣もするが、何にもしないでも始まらない。僕は今に君達によろこんでもらへるやうな仕事をするつもりだよ。
友　是非やつて見てくれ玉へ。
英次　出來るか、どうか。
友　君なら出來ると思ふね。
英次　何にか僕の内に生きたがつてゐるものがあるから、僕はそれを生かす迄は死ねない。
友　皆は君に感心してゐるよ。
英次　さうかね。僕は皆に笑はれてゐると思つてゐるよ。
友　わかる人にはわかる。

英次　しかしわからない人が多いからね。そして僕自身だつて自分の取つてゐる態度がいゝと許りは思つてゐない。あまり意氣地のなさすぎる話とも思ふよ。怒るのが本當ぢやないかとも思ふのだ。それを怒らないのは意氣地がないからとも思ふよ。

友　しかし皆は君を信じてゐるからね。たゞ君が淋しさの前に力をおとすことを恐れてゐる。

英次　それは大丈夫だ。僕だつて他人の出やうで自分をまげやうとは思はないよ。他人がどう出て來ても、自分を生かすこと切り考へないよ。その點僕はエゴイストだよ。それは僕だつて一時參つたよ。皆が感づく前に僕は感づいてゐたからね。半信半疑ではあつたがね。しかしその御かげで皆が感づいた時分には僕の度胸はきまつてゐたよ。そして物好きな奴をよろこばすわけにはゆかなかつた。僕はなほ勇氣を得たね。僕はなほ決心をしたからね。そして僕は兄や妻にも同情してゐる。無理はないと思つてゐる。僕は獨身の生活をしてゐるつもりになればいゝのだ。

友　君の決心をきいてうれしく思つたよ。皆もさぞ安心するだらう。それでは失敬する。

英次　それでは皆によろしく云つてくれ玉へ。僕のことは心配しないでほしいつてね。僕の氣になるものはたゞ兄に食はしてもらつてゐると云ふ點だ。その點で僕は兄に怒れないのだと思つて常に輕蔑されてゐるやうに僕はついひがむのだが、まあさう思ひたい人にはさう思はしておく。事實、まあさうだからね。

友　それでは失敬する。

英次　又來たまへ。

友　ありがたう。

（二人退場、英次まもなく登場、おちつかない形、信一登場。）

信一　英次、一寸話したいことがあるのだ。

英次　なんですか。兄さん。

信一　千代子さんは何處にゐるか、知つてゐるなら敎へてほしいのだがね。

英次　千代子はお兄さんと一緒ではなかつたのですか。

信一　千代子さんは一昨日一寸僕の所へ顏を見せたきりだ。

英次　僕の處へは一昨日から歸つて來ません。お兄さんと一緒だと思つてゐましたよ。

信一　千代子さんにへんな所はなかつたかね。僕は心配してゐるのだよ。

英次　僕は千代子の番人ではありませんからね。法律上では千代子の夫かも知れませんが、事實は僕は千代子とは赤の他人ですからね。千代子のことは知りませんよ。

信一　千代子はいつもお前のことをほめて話してゐる。
英次　千代子はお兄さんのことは僕の前ではほめたことはありませんよ。
信一　さう一々皮肉には出ないでくれ、俺がわるいのだから仕方がないが、今日は俺は本當に心配してゐるのだ。
英次　僕はお兄さんを尊敬してはゐますが、お兄さんが策略をつかう人だと云ふことを僕は知つてゐるのですからね。僕はお兄さんの云ふことを眞正面には信じられないのです。たとへばです、角までお兄さんが千代子と來てゐながら、お兄さんは今お兄さんが云つたやうなことを平氣で云へる人だと僕には思へるのですから、僕は、お兄さんと一緒になつて千代子のことは心配出來ません。
信一　お前にさう言はれても一言もないが、しかし千代子さんは。
英次　千代子さんなぞとは云はないで下さい。尤もさんをつけたければおつけになつてもかまいませんが、わざとらしくなく云つて下さい。僕は千代子をお兄さんの妻だと思つてゐるのですからね。
信一　それなら千代子さんの話はよさう。しかしお前は千代子さんのゆくへを本當に知らないのかね。何か恐ろしいことが何處かで行はれたやうな氣がして仕方がないのだ。今にも千代子さんが血みどろになつて出て來はしまいかと思ふのだ。
英次　この縁の下からでもですか。
信一　さうだと云はないが。
英次　さうでないとも思へないのですか。
信一　千代子はお前を恐れてゐたよ。
英次　千代子の恐れてゐたのはお嫂さんです。
信一　たづ子をお前は疑つてゐるのか。
英次　あなたのゆか下を疑つてはゐませんよ。だがお兄さんが本氣になつて千代子のことを心配してゐらつしやるのを見るのは僕には意表外ですよ。僕は千代子なんかお兄さんにとつては十數人の女の一人にすぎないと思つてゐましたよ。
信一　そんな男に見へろかね。
英次　何しろお兄さんは一代の人氣役者ですからね。女には不自由をなさつたことはないでせうからね。
信一　僕は千代子さんが死にさへしなければいゝのだ。
英次　お兄さんは本當に千代子が死んだかも知れないと思つてゐるのですか。誰かに殺されたとでも思つてゐるのですか。
信一　さうは思つてゐないよ。だが昨日へんな夢を見たのだ。
英次　千代子のですか。僕は千代子はお兄さんと一緒だと

許り思つてゐたのですよ。

信一　夢だと、千代子さんはお前に殺されたやうに云つてゐたよ。この室でね。

英次　この室で殺さうと思つたことはありましたよ。だが殺すわけにはゆきませんでした。

信一　夜中にお前が短刀を見つめてゐたのを千代子は見たと云つてゐたよ。

英次　そんなこともあるかも知れません。しかし僕は千代子を全部的に愛することが出來るのです。千代子の缺點も皆。千代子はその時、その時で全部的に動いてしまうのですから、あいつが私を愛してゐる時には、その心を疑ふことは出來ないのですから。

信一　たしかにあいつはお前を愛してゐる。お前がもう少し嚴重に見張つてゐてくれたら、こんな所におちこまなくつてもよかつたのだといつか云つてゐたよ。

英次　あいつはどんなことだつて云ひますよ。私が何度あいつに死ぬことをのぞまれたでせう。女は後家になるまで樂が出來ないといふのはあいつの口ぐせです。あいつは又お兄さんの死ぬことをのぞんでもゐました。僕はあいつに殺されはしないかと思つたこともありましたよ。だがあいつは又氣がよわいのですから、僕が一寸指に負傷でもすれば、まるで僕は生命にかゝはるやうな大負傷をしたやうにさわいで、そして泣いて心配してくれるのです。あいつは死ぬやうなことは出來ませんよ。

信一　だが誰かに殺されさうな氣がすると云つてゐたよ。

英次　それはあいつの自惚れです。そんな事が云つて見たいのがあいつのくせです。

信一　それならお前はあいつが生きてゐると思つてゐるのだね。

英次　勿論、生きてゐると思ひますよ。だが死んだつてお兄さんは別に困りはなさらないのでせう。

信一　死なれては困るよ。お前は死なれてもいゝのか。

英次　死んでくれたら、それも反つていゝと思ひますよ。ですが、僕にとつてはともかくもあいつは唯一の女です。浮は氣ものであつても。

信一　お前の畫を見せないか。

英次　だめです。

信一　だめでもいゝから見せないか。

英次　それなら見せますかね。

信一　中々うまくなつたね。

英次　それはお世辭ですか。正直に云つて下さい。

信一　俺には畫のことはわからないが、前よりうまくなつたことだけは分る。

英次　まあ、少しづゝはうまくなるでせうが、中々ものに

ならないものですね。
信一　なんだつてさうだよ。さうらくにものになるものぢやない。
英次　最初の作から、何處かに天才のひらめきがなくつてはものにならないと思ひますね。お兄さんの始めの舞臺を見た時から、僕は感心したものでしたよ。自分のものにはそんなひらめきがないやうに思ふのですがね。
信一　不意に出てくるものだね。お前はものになると思ふね。
英次　それは僕だつてものにならないと思へば畫はやりませんよ。僕は他のことにはなほ望がないのですから、畫だけにかぢりつくより仕方がないやうなものですからね。しかし僕は自分がせむしに生れたことを後悔はしてはゐませんよ。それだけ僕は運命にハンブルになつて、自分の仕事を一心にやつてゆけばいゝと思つてゐますよ。女のことなんか、僕は考へるだけでも身の程知らずだと思つてゐるのですよ。
信一　さう云はれると一言もないがね。
英次　僕はお兄さんを一面憎んでゐるかも知れませんが、しかし僕はお兄さんを天才として尊敬してゐるのですよ。お兄さんの藝は日本の傲りだと思つて、よろこんでゐるのですよ。その他の點は別としても、お兄さんの藝のます／＼進んでゆくのに感心し切つてゐますよ。
信一　お前にさう言はれると本當に嬉しいよ。僕は世界の内ではお前の前だけ頭をさげたいのだ。
英次　そんなことは云はないで下さい。お兄さんは空高くとんで下さい。女のことなんか氣にしないでね。僕のことなんかも氣にしないで下さい。僕は地にしがみついて何か其處からほり出して見るつもりです。
信一　僕はお前を尊敬してゐる。二人は一面敵かも知れないが、一面は實に尊敬しあふ。この上ない兄弟だと思つてゐる。
英次　お兄さん、僕は一つの覺りをひらいてゐるのですよ。他人は自由たらしめよ。よしそれが妻であつても、自分の自由になると思ふな。自分の自由になるのは自分だけだ。それも許された小さい範圍内の話ですがね。僕はその範圍内で出來るだけ、立派な人間になるつもりですよ。僕の手を見て下さい。決して血によごれてはゐません。僕は千代子も可哀さうな人間と思つてゐるのですよ。お兄さんも、お嫂さんもね。人間と云ふものは、さう出來てゐるのですからね。
信一　さう云はれると一言もないよ。
（外で誰か來た氣はいする。英次ゆく。まもなく登場。）
英次　お兄さん一寸手つだつて下さい。

信一　なんだ。
英次　面白いものを買つたのです。
信一　さうか。
（二人退場。まもなく大きな支那カバンを二人で運んでくる。）
信一　ヘンなものを買つたね。
英次　古道具屋の店さきにあつたら不意に買ひたくなつたのです。買つた後では後悔しましたがね。
信一　隨分大きいね。いくらした。
英次　十三圓でしたよ。
信一　それはやすかつたね。
英次　お兄さんは藝たけは大事にして下さいよ。そして皆に純粹な藝術的なよろこびを知らしてやつて下さい。僕は一人になつて靜かに書がかきたくなりました。
信一　それなら又くるよ。今日は失敬する。
英次　千代子の消息がわかつたらすぐ知らせますよ。
信一　生きてゐることだけでいゝよ。
英次　正直なことをおつしやつてもいゝでせう。お嫂さんによろしく。
（二人退場。まもなく英次登場。）
英次　俺は他人の出やうで自分の生命をあげさげはしないぞ。

（友、登場。）
友　さつき手帳を忘れたのでとりにきたよ。
英次　さうか。兄にあつたか。
友　あつたよ。
英次　君は兄を知らないのかね。
友　君の兄さんは舞臺で見たゞけだ。
英次　俺の兄弟とは思へないだらう。兄弟にもいろ〳〵あるものだね。
友　しかし何處か似てゐるよ。
英次　口が似てゐるだらう。
友　口が似てゐる。
英次　兄は母に似てゐる。そして僕は父に似てゐる。その上に一人女の子があつたが死んでしまつた。僕はせむしでなかつたら、もう少しのび〳〵育つことが出來たらう。そしたら兄にもつとよく似たかも知れないが、感じがまるでちがつてしまつたよ。よく父に兄は鶴に比較され、僕は蟇に比較されたよ。隨分ひどい比較だが、あたつてゐる。
友　…………。
英次　返事が出來ないかね。あたつてゐるからね。だが僕はさう云はれてもあまり腹が立たず、ます〳〵兄を崇拜したものだよ。子供の時はね。今になると僕には又僕の

いゝ處があると思つてゐるがね。たゞ他人に通じないだけの話しだがね。しかしこんな僕に女難があるとしたら滑稽だらう。あるわけでもないが、僕は身の程を知れば幸福になれるのだよ。僕は僕に相當な仕事をしてゐればいゝ。僕だつて、僕相當な仕事はいくらでもある。

友　………。

英次　君は僕を同情してゐるかも知れないが、僕は一人で心のどかに畫がかける、自分の心に感謝してゐるよ。僕は之でも一方間拔けた呑氣ものらしいよ。誰か來たらしい。

（英次退場、英次は常に千代子の歸りを人知れず待つてゐる。まもなく登場。）

英次　たれもゐなかつた。僕は賢者には悲劇がないと云ふことを聞いたことがあるが、自分も出來るだけ賢者になるつもりだ。蟲のいゝ要求を出しさへしなければ悲劇は起らずにすむ。僕だつてさうだよ。妻が僕に滿足しないと云ふのは當然すぎることだ。妻が僕の處へ來た方がまちがひだ。だからそのまちがひからなほしてゆけばいゝのだ。處が僕は妻の美しい肉體に愛着を感じてしまつた。其處で悲劇が起りたがるが、悟つて見ればなんでもないことだ。何處に風が吹くと思へばそれでいゝはづだ。だが中々口で云ふ程うまくゆかないがね。しかしいくらうまくゆかないからと云つて、事實をまげるわけにはゆかない。僕は依然としてせむしで、依然として蓋た。そして依然としてあまりさばけない、いや味な男だ。だが僕は畫をかけば、僕のいゝ處が出てくれると思ふのだよ。僕だつて人間だ、いゝ處は持つてゐるからね。其處で僕は花や、果實を相手にしたり、山や水を相手にしてゐると心のどかに仕事が出來るのだ。だから僕は自分を不幸だとは思つてゐない。

友　大きな支那カバンがあるね。どうしたのだ。さつきは氣がつかなかつた。

英次　之か。氣がつかないわけだよ、今來たのだ。昨夜ふと見つけて買ひたくなつたのだよ。今とゞけて來たのだ。中々立派だらう。だが買つたあと何となくよけいなものを買つたと後悔したよ。誰か來たやうだね。

友　氣のせいだよ。

英次　さうかね。僕は妻が歸つて來たのかと思つたよ。僕の兄は妻を僕が殺しはしないかと思つて心配してゐるのだよ。一寸無理もない處もあるが、僕だつて一思ひにやつてやらうと思つたこともまるでないとは云へないからね。だが人殺しするには、あとのことが目に浮びすぎるし、無理心中するには、自分に仕事がありすぎるからね。だが妻は僕に殺されるのを怖かつて逃げてゐるのかも知

れない。馬鹿な奴だよ。だが自分の知らない內、夢遊病者にでもなつて妻をやつけて氣がつかずにゐるのかも知れないがね。それは冗談だよ。今に妻は歸つて來るよ。だが僕は妻のことなんか何とも思つてゐないのだ。久しぶりに君と碁でもやらうかね。どんなに僕がおちついてゐるか君に示して見やう。

（碁をやり出す。）

二

英次の室、妻千代子三味線をひき、英次はうたをうたつてゐる。友登場。

英次　よく來たね。妻は昨晩おそく歸つて來たよ。矢張り自家(うち)は忘れなかつたと見える。

妻　小野寺さん。隨分あなたに御心配をかけたさうですみませんでした。私はなんだか不意にうちへ歸るのが怖くなつて箱根へ逃げていつたのですが、金がなくなつたので、まあ殺されたら殺された時と思つて歸つて來ましたら、主人がよろこんでくれたので、私は生きかへつたやうな氣がしましたよ。

英次　俺も生きかへつたやうな氣がしたよ。首でもくゝられちや寢ざめがわるいからね。そのかはりこいつがゐると畫がかけないで困るよ。

妻　たまに歸つて來ると、すぐ畫がかけないなんて云ふのですからね。

友　畫なんかかけなくたつていゝでせう。

妻　私が生きてゐたのをよろこんでくれたかと思ふと、すぐ又畫がかけないが始まるのですよ。

英次　何しろ朝から三味線をひき出すのだからね。

妻　三味線をひけとは誰がおつしやつたの。

英次　さう云はすやうに持ちかけたのは誰かね。何しろ畫ももう一息でものにならうと云ふ處なのでね。だが氣持が呑氣になつてしまつたので、今朝、一寸やつて見たが駄目になつてしまつた。

友　その內には又うまくゆくよ。

英次　又いつか逃げ出してくれるとか。

妻　私はもう逃げはしなくつてよ。いくら逃げてくれとおつしやつても。

英次　だれも逃げてくれなんて云はないよ。

妻　畫が出來ないでもいゝの。

英次　又ちがう畫が出來るさ。

妻　あなたは私が居ても居ないでも一向平氣たからいやになるわ。

英次　そんなことはないよ。だがお前を座敷に押し込むわけにもゆかないからな。

妻　押し込んで下さればいゝのだわ。私のやうな人間はほつたらかしておくと何するか自分でもわからないわ。
英次　困つた奴だな。自分で自分を制御することはお前には出來ないのだね。
妻　あつと思ふと、もうすべつてゐるのですから罪はないわ。
英次　(怒らずに)　馬鹿。
妻　私を座敷牢に押し込んで、御馳走食はしてくださらない。さうすれば私は反つてらくだわ。
英次　それも三日とつゞくまい。
妻　あなたの方がね。あなた酒上らない。
友　僕はのめません。
英次　トランプでもしやうか。
友　今日はよさう。もう一時間程するとゆかなければならない處があるから。
英次　何處へゆくのだ。
友　山田と約束してあるのだ。
英次　山田つて小說をかく奴か。
友　さうだ。
英次　君はあいつを知つてゐるのか。
友　知つてゐる。
英次　逢つたら敬意を示してくれ、僕はあいつのものをいつか一つよんで感心したことがあるよ。だがあんな處へゆくよりはうちにゐろよ。今日はね。僕は何となく愉快なのだ。それに二人切りになるより三人がいゝのだ。トランプやらう。
友　山田と君の兄さんの芝居を見にゆく約束をしたのだ。
英次　芝居にはまだ時間があるよ。山田は僕の兄貴のことを何か云つてゐたか。
友　ほめてゐたよ。あの位いあかるい人を見たことはないよと云つてゐたよ。
英次　さうか。兄は藝にかけては天才だ。女にかけてはならず者だが。人間と云ふ奴は不思議な同居人を二つ持つてゐるやうなものだね。兄貴の藝は僕は誰にも負けずに讃美するが、兄貴の品性はほめるわけにはゆかない。尤もあゝ女にもてればあゝなるかも知れないがね。兄貴の内の愛すべきものを殺さずに、兄貴の内の憎むべき方面だけを殺すことが出來たなら、僕は兄貴の半分を殺してやるのだがね。
妻　そんな話はおやめなさいよ。
英次　やめやう、やめやう。折角いゝ氣持がこわれて馬鹿氣てゐるからな。だが俺の兄弟程、面白い兄弟はないだらうな。僕は子供の時から兄貴の讃美者だが、いつも兄貴を憎んではゐたやうだ。よさう、よさう。さむけがす

るよ。

妻　そこの戸が開いてゐるからよ。本當にあなた身體を大事にしなくつては駄目よ。私はあなたが大事で大事で仕方がないわ。

英次　それも本音でないとは云はないが、次ぎの瞬間には俺が生きてゐなければいゝと思ふのだらう。

妻　あなたの內には意地の恐ろしくいゝ處とわるい處とあるわ。

英次　お前にもさう云ふ處はないかね。お前のことを思ふと、大がいの人間はすてたものではないと思ふよ。

妻　よくつてよ。

英次　わるくつたつて仕方がない。俺はお前が誰よりも可愛いゝが、誰よりも憎い。

妻　醉つたのぢやないの。

英次　醉ふものか。だがもう酒もなくなつたね。

妻　あんまりのむといけないわ。

英次　だがあと一合位いのんだつていゝだらう。一寸とつて來てくれ。

妻　およしなさい。よした方がよくつてよ。

英次　そんなこと云はずにとつてこいよ。今日は久しぶりだからね。

妻　そんならとつてくるわ。（退場）

英次　どうだい。あいつを見て君は惡人と思ふかね。

友　思はないよ。

英次　善人ぢやないが、惡人ぢやない。僕はあいつを見ると自分が僞善者のやうな氣がすることがある。あいつ位露骨に自分の心のまゝにふるまふ奴はないからね。

友　君は細君をもう少し束縛する方がいゝ。一人で步かさずに、一緒に出あるくがいゝ。

英次　このセムシぢやね。

友　君位いなら別に氣がつく人はないよ。よしあつてもかまはないぢやないか。

英次　そんなことはどうでもいゝ。僕の不名譽にはならない。エソツプもセムシだつたさうだね。セムシを僕は恥とは思つてゐないよ。だが見ていゝものぢやないが、しかし僕はあまり出步くのは嫌ひなのだ。又他人（ひと）を束縛するのは嫌ひだよ。僕は千代子を妻とはよんでゐるが、妻だとは思つてゐない。友達たと思つてゐる。妻だと思へば腹が立つことも、友達と思へば感謝出來る。僕は自分を一人ものと思つてゐるよ。僕は自分の仕事を持つてゐる人間だからその他のことは問題にしてゐない。

友　それだつて君の細君自身のために君は暴君になる必要がある。あの人は自分で自分を束縛することの出來ない人だ。

英次　他人なら束縛出來ると云ふのかい。
友　たしかに君の細君は君に束縛されたがつてゐる。
英次　それも噓ぢやあるまい。だが僕があいつを一度も束縛しなかつたと思つてゐるのかい。あいつは束縛されゝばおとなしくしてゐると思つてゐるのかい。又僕を細君の番人そのものにしたいのかい。僕はもうそんなことはあきあきした。來るものは來るがいゝし、去るものは去るがいゝ。
友　それで君は滿足してゐるのかい。
英次　それで滿足しなかつたらどうすればいゝのだ。
友　しかし夫婦つてそんなものぢやないだらう。
英次　人によるよ。一緒にゐてお互に信じあへる夫婦、疑ひたくも疑へない夫婦、たまにははなれてくれるといゝと思つてもいつもくついてゐる細君をもつ夫、そんなものも世間にはいくらでもあるだらう。しかし僕はそれを羨やましいと許りは思はないよ。どつちもいゝ處と、わるい處とある。僕は他人は他人だと思つてゐるよ。自分のわきに居たくない人間をわきに居させやうとは思はない。
友　本當にさう思つたことはないのかい。
英次　君は察しがあまりよくないね。だが僕は自分の細君だつて獨立した一個の人間であることを疑ふことは出來ないよ。ある程度の嫉妬や、束縛や、いたわりあひは必要がないとは云はない。それ等をわるいとは思はないが。しかしお互に生きてゐるのがいやになる程束縛する必要があるとは思はない、お互に嫉妬や、嫉妬されることや、束縛から解放されて、一人の人間の味を嚙みしめるのもわるいとは思はないよ。
友　どつちにころんでもいゝのか。
英次　さうだよ。本當にころがつた者は起き上る時は何か得をしてゐるものだと云ふのが僕の主義で、まちがひがないと思つてゐる。僕は太平な夫婦生活を讃美するよ。だが特種な自分の結婚もわるいと許り思つてはゐない、その內に面白味があるよ。歸つて來たかな。ちがうらしい。もう歸つて來さうなものだ。それとも又逃げたかな。
友　逃げても平氣かね。
英次　平氣でなければならないと云ふことはない。平氣でないから何か其處から美しいものが生れろと云ふこともあるものだ。他の人が見たら僕程、あまい馬鹿者はないだらうと思ふだらうな。だが僕には僕の生き方がある。逃げたら又あの畫がつゞけられる。わるくないなあと思つてゐる。それにしてもおそいな。一寸見てくるよ。
友　酒屋はそんなに近いのか。
英次　すぐその角だよ。十間もあるまい。一寸見てくるよ。

（英次退場。まもなく登場。）

英次　兄貴と角で話してゐたよ。（無理に笑ふ）兄貴の奴、へんに心配してゐるのだよ。僕があいつを殺しはしないかと思つてゐる。馬鹿な奴だよ。兄貴も、あいつには本氣に參つてゐるのかも知れない。馬鹿な奴だ。（無意識に酒をのまうとしてカラなのに氣がつき）早く酒をとゞけさせりやいゝのにな。自分で持つて歸らなくつたつていいのに。（間）僕の性質が君にのみこめるかね。淺ましい境遇にゐて、おちつきはらつてゐる氣持がね。さう云つても君は信じまい。一つ三味線でもひいて一つ奧の手でもきかして上げやうか。（三味線をとる）何をやらうかね。（何か唄ひかける）

（千代子登場）

英次　お待ち兼ねだ。

千代子　遅くなりました。一寸酒屋の上さんに話しこまれたので。

英次　さうか。それは運よくあへてよかつたね。

千代子　あの酒屋のお上さんは中々器量よしですね。

英次　さうかね。

千代子　何かやりませうか。

英次　やつてもいゝね。だが酒をのんでからにしやう。

友　僕は今日はこれで失禮するよ。

英次　もう少しゐたまい。もう十分、いやもう二十分程居たまい。人間は時々二人切りになると危險な時のあるものだ。僕の氣分がおちつくまでゐたまい。

千代子　氣持がわるいの。

英次　わるいこともないが、いゝともゆかない。

千代子　それなら酒はおやめになつた方がいゝわ。

英次　ともかくのまう、そして何か靜かな氣持のいゝ唄でもやつて、小野寺君に聞いてもらはう。（酒をのみながら）英雄閑日月ありと云ふが、僕には僕の心の修業がある。靜かに、靜かに、心のどこかに、この一日をおくりたいものだ。

（三味線をとりあげ、ひき出す。）

三

夜、英次千代子の姿を鉛筆ですけつちしてゐる。千代子そばで着物をぬつてゐる。

英次　畫をかく呼吸がのみこめて來たやうだ。

千代子　それはよろしいね。

英次　こんな天下泰平な日がつゞくとは思はなかつたよ。

千代子　私もすつかりおちつきましたわ。

英次　あらしが過ぎたのだね。

千代子　本當ね。

英次　もう嵐が來ないといゝ。
千代子　あなたもさう思つてゐらつしやるの。
英次　思つてゐるよ。そして畫もうまくゆきさうだ。之から畫も賣れ出すかも知れない。
千代子　賣れたら、何か買つて頂戴ね。
英次　買つてやるよ。だがいつのことか。
千代子　ですが、賣れないでも、いゝ畫が出來れば私うれしいのよ。
茂次　どうして。
千代子　でも、あなたの御機嫌がよろしいもの。畫が出來損なうとすぐ癇が起りますからね。あなたの癇は本當に閉口よ。
英次　もう、癇なんか起らないよ。俺も少しは利口になつたよ。
千代子　本當に、あなたはこの頃おちついていらつしたわ。
英次　人間は持つてゐるものを一ぺん皆すてゝしまうと利口になるのだな。自棄を起し切りに出來ない人間はいろいろの目にあふのも惡いと許りは云へない。
千代子　あなたにとつてはなんでもいゝのね。子供が出來ない、それもいゝだらう。私がゐなくなる、それもいゝだらう。私が歸つてくる、それもいゝだらうでしよ。
英次　さうなればいゝと思つてゐるのだよ。いろ／＼のことにぶつかるたびに自分の心が研かれてゆけばね。だが俺は癇持ちだからまだだめだよ。自分でどうすることも出來ない時がある。
千代子　あの時、あなたは本當に私を殺さうと思つてゐらつしたの。
英次　かつとした時は何をし出かすか、俺の內には恐ろしい血が流れてゐるのかも知れない。俺の大祖父さんと云ふのは自分の子供があんまり泣くと云つて石の上にたゝきつけて殺したと云ふ噂がある。本當かどうか知らないが、恐ろしい話だ。そしてあとでその子のこと許り云つて泣いてゐたさうだ。實際その子を一番愛してゐたのださうだが、話には少し誇張があると思ふが、俺にもどうかするとその血が流れてはゐないかと思ふと怖くなる。その血と戰ふのが自分の一つの修養のやうな氣がしてゐる。
千代子　氣ちがひの筋なのね。怖いわね。
英次　だから僕の兄は僕を恐れ、僕は兄貴を恐れてゐるのだ。
千代子　なんだか氣味がわるくなりましたわ。
英次　本當は今のはつくり話だよ。そんな奴が先祖にゐはしなかつたかと一寸思つたゞけだよ。だが氣違ひにどうしてもならないと云ふ人間はないやうに思ふね。たゞ氣

違ひになりやすい人間と、なりにくい人間があるだけだね。

千代子　あなたは氣違ひになりやすいの。

英次　俺のやうなのは反つてならないと思ふがどうかね。この前お前が目をさました時、短刀を見てゐたと云ふのは、お前を殺さうと思つてゞはなかつたが何となく短刀が見たくなつた。俺の内には矢張り武士の血がのこつてゐると見える。

千代子　いやな血がのこつてゐるのね。

英次　血のせいではないかも知れないよ。誰でも一寸夜半に短刀が見たくなると云ふやうな氣持は持つてゐるものぢやないかね。

千代子　どうですかね。そんなことはないでしよ。

英次　お前は夜中に鏡が見たいと云ふやうなことはないか。

千代子　夜中に鏡を見るのはなんだか怖いわ。

英次　怖いからなほ見たいと言ふやうなことは。

千代子　あなたと話してゐると世の中が何んだか凄くなつてくるわ。

英次　お前は幽靈と云ふものを認めるかね。

千代子　そんなものはないものでしよ。

英次　お前も人殺しはしたことはないと見えるね。

千代子　あなたは人殺しをしたことがあるの。

英次　そんなことはないよ。だが人殺をした人は幽靈の存在を信じるだらうと思ふのだ。殺した人の姿が見へるだらうと思ふのだ。壁を見ても天井を見ても、窓を見ても、その人の姿がまざ／＼と見へると思ふのだよ。殺した時の姿がね。

千代子　氣味がわるいわ。

英次　だから人を殺さないものは仕合せだと云ふのだよ。

千代子　死ぬつてどんなものでせうね。

英次　深い眠りだね。さめない。

千代子　それなら惡くないものね。

英次　死の恐怖さへなければね。それに死の苦痛も大變だと思ふね。生命と云ふ奴は中々生きたがるものだから樂には死ねないね。

千代子　首しめられるのは樂ですつてね。

英次　女の肉づきのいゝ手で靜かにしめられるのは樂かもしれないが、息の出來ないのは樂ではあるまい。

千代子　だが私の兄が柔道をやつて、よく喉をしめられたさうですが、なれるといゝ氣持になると云つてゐましたよ。

英次　お前の兄は嘘つきぢやないかね。

千代子　だつてそれは本當だと思ふわ。

英次　嘘ぢやないかも知れないが、本當とは思へない。呼吸が出來ないのが氣持かいゝとは思へない。鷄の首をしめるのだつていゝものぢやない。
千代子　見たことあつて。
英次　見たことはないがね。
千代子　あなたの話は、皆想像ね。
英次　だがまちがつてゐるとは思はない。何時かな。
千代子　八時よ。
英次　まだ早いな。だが誰か來ると厄介だから、今日は早くねるかな。
千代子　えゝ、寢ませう。
英次　お前のうしろに誰か居るよ。
千代子　あつ。
英次　あはゝゝゝ。
千代子　いやな方。びつくりしたわ。
英次　あはゝゝゝ。
千代子　あなたの後ろにだつてゐるわ。
英次　影法師だらう。
千代子　女らしくつてよ。
英次　背むしの女かね。
千代子　あなたは又そんなことをおつしやる。
英次　セムシと云ふ言葉をきくだけでもいやかね。
千代子　あなたのそんなことを云ふ氣持がいやなのですよ。
英次　いやかね。この姿の方は嫌ひぢやないかね。
千代子　わざとそんな風をしなくつたつていゝわ。
英次　したつていゝだらう。俺にはお前のいやがるのが面白いのだよ。
千代子　いやなくせね。
英次　毒蛇の感じもわるくないね。
千代子　私大嫌ひよ。あなたのその趣味は。
英次　さうかね。お前に似合はないね。俺は今晩、お前を殺してやる。
千代子　そんな冗談は云はないものですよ。
英次　安心かするがいゝ。殺すと云ふ時は殺さないからね。
千代子　殺さないと云ふ時は殺すの。
英次　それはどうかわからないよ。
千代子　あなたは私をおどかすのね。
英次　どうかね。明日の朝がくれば許してやるよ。
千代子　あなたのその目が私は怖いわ。
英次　俺の背中が怖いと云ふ方が本當だらう。
千代子　もうそんな恰好するのはいやよ。
英次　あはゝゝ。お前の顏には死相があらはれてゐるよ。
千代子　あなたの顏には氣違ひ相があらはれてゐるわ。冗

談はよしませうね。冗談から駒が出ると大へんですから
ね。

英次　さあおいで、今日はお前と俺は生死の戰ひだ。

千代子　ゆくわ。死んだつていゝわ。

（千代子英次にとびかゝらうとする。）

――幕――

第二幕

一

小野寺の室、西洋間。小野寺、何かかきものをしてゐる。細君芳子登場。花をもつて來ていける。

小野寺　いゝ花があつたね。

芳子　あんまり奇麗だつたので買つて來ました。

小野寺　本當に美しいね。矢張り秋の花は何處か秋らしいね。

芳子　今日はいゝ天氣ね。何處か散歩なさらない。

小野寺　行かうかね。

芳子　私をつれていつて下さる。

小野寺　それはつれてゆくよ。

芳子　うれしいわ。何處へゆきませう。

小野寺　何處へ行かう。

芳子　何處へでもいゝわ。あなたとなら。あなたは。

小野寺　俺も何處へでもいゝよ。お前となら。

芳子　まあ。

小野寺　こんな天氣なら何處へ行つたつて氣持がいゝ。郊外に出さへすれば。

芳子　本當ね。そんなら私、着物着かへてくるわ。

小野寺　そのまゝでいゝよ。

芳子　羽織だけかへてくるわ。（退場）

（まもなく芳子登場。）

芳子　それなら出かけませう。誰かくると出かけられなくなると困りますから。

小野寺　それなら出かけやう。

女中　郵便が參りました。

（小野寺うけとる、女中退場。）

芳子　何處から。

小野寺　野中からだ。

芳子　なんて。

小野寺　こないだいつた禮と、いたつて無事だから安心してくれ、繪もかけるから安心してくれろと云つて來た。

芳子　それはよかつたわね。野中さん夫婦は無事におさまるでせうか。

小野寺　それはわからないね。

芳子　私、野中さん氣味がわるいわ。あなたの親友の惡口を云つてはすみませんが。

小野寺　氣味のわるくないこともないな。あいつは隨分いい所をもつた男だが、少し趣味が病的だよ。なんだか不安心な所がある。あまり思ひつめる質なのだね。

芳子　あゝ云ふ人は吞氣になれないものですかね。

小野寺　吞氣に酒のんだり、三味線をひいてゐる時でも、何處か不氣味だね。

芳子　それではゆきませう。

小野寺　行かう。だが一寸野中にハガキをかいてからにしやう。

芳子　どなたもその間にいらつしやらなければよろしいけど。

小野寺　來たつて出かける處だと云つて斷ればいゝ。

（女中登場。）

女中　野中さんと云ふ方がいらつしやいまして一寸おさしつかへなかつたら話したいとおつしやいました。

小野寺　野中が來たのか。

女中　いつもの野中さんとはちがひます。大へん立派な方です。

小野寺　それなら野中の兄さんが來たのだらう。お通しゝてくれ。

女中　はい。（退場）

芳子　お通しするの。

小野寺　野中の兄さんぢや仕方がない。

芳子　私大嫌ひよ、色魔なんか通さなければいゝのに。

小野寺　何にわるい奴ぢやないよ。

芳子　それだつて私大きらひだわ。

小野寺　嫌ひで幸ひだよ。

（二人笑ふ。）

芳子　まあひどい。（退場）

（信一女中につれられ登場。女中退場。）

信一　始めてお目にかゝります。いつも弟が世話になりまして。

小野寺　いゝえ、僕の方こそ。どうぞおかけ下さい。

信一　僕は一寸急ぎますから、用事だけ短刀直入に云ひますが、失禮な所や、聞き苦しい所がありましたら、許して下さい。

小野寺　どうぞ遠慮なく。

信一　實は弟のことですがね。君も御存知の通りの人間で、僕は弟を誰にもまけずに信用し、又尊敬すべき點は尊敬し、望みをおくべき處には望をおいてゐるのですが、

小野寺　本當に英次さんはすぐれた才をもつた方として、僕達は尊敬してゐるのです。

信一　ありがたう。兄としてあゝ云ふ弟をもつてゐることは一方傲りにしてゐるのです。

小野寺　英次さんもあなたのことをいつも自慢してゐらつしやいます。

信一　恥かしい話です。僕は弟に天才的な處のあるのを認めて、それをどうかして生かしてやりたく思つてゐるのです。しかし御存知のやうにあいつは變りもので、一方非常にあかるい、すなほな氣質を持つてはゐるのですが、その反對の性質も強くもつてゐるのです。その性質がこの頃、頭をもたげて來てゐるやうに思ふのですが、どんなものでせうかね。

小野寺　さう思へばさう思へないこともないと思ひますが、今もハガキを戴きましたが大へん氣持がおちついて仕事も出來ると書いてありましたから。

信一　さうですか。それを伺へば安心ですが僕は弟の妻からへんな手紙を出しなに受けとつたのです。それをうけとつたので實は急にあなたの處に伺ふことにしたのですが、弟の妻から是非あなたにあつて相談してくれとかいてありましたから。

小野寺　さう云つては失禮ですが、千代子さんのおつしやることはそのまゝ信じていゝでせうか。

信一　あれはたしかに病的な處があるかも知れませんが、しかし弟の妻の云ふことも滿更うそだと許りは思はないのです。弟は妻と僕との間を疑つてゐるやうですが、又疑はれても仕方がないと云へば云へないこともないのですが、弟の思つてゐる程深入りしてゐるわけでもないのです。尤もあの細君は僕に始め近づいて來、僕を愛したために弟も愛したと云つてもいゝのかも知れません。僕は弟のことをあの人にほめて話しましたからね。今になつて見るとそれがよくなかつたのですね。あの人と弟の性質がどんなにこんがらかりあふか、僕は考へても見なかつたのですし、考へやうとも思はなかつたのです。第一弟の妻になるなぞとも考へてゐなかつたのです。しかし二人が夢中に結婚したがつた時、僕は弟のためによろこんだものですがね。まあそんな話はすんだ話ですが。弟の妻の手紙には、どうも近い内に殺されさうな氣がして仕方がないと云ふのです。そして君と僕とで、どうか助けてほしいと云ふのです。自分が死ねば弟だつて一生を棒にふるにちがひないと云ふ意味のことがかいてありました。自分も死にたくはないが、逃げれば殺されさうだし、一緒にゐても殺されさうだと云ふのです。それに逃げることも出來ず、一緒にもゐられない。どうしていいかわからないともかいてありました。

小野寺　それは嘘ではないかも知れません。こないだあつ

た時はさとつたやうなことを云つてゐましたがね。坂をごろがりおちたがつてゐる大石を藁繩でやつととめてゐると云ふ感じが何處かにしてゐました。

信一　どうしたらいゝかと道々考へたのですがね。轉地でもしたらどうかと思ふのですがね。あの家はよくないと思ふのですよ。

小野寺　たしかにあの家はよくありませんね。

信一　それに私の考へでは、弟の畫が少し賣れたりしだすと、又氣分がかはるかと思ふのですがね。金は僕が出してもいゝのですが、君や僕が買はさしたとしたら反つて侮辱されたと思ふでせうからね。あれは同情されることを實に嫌つてゐますから。

小野寺　本當にあの意こ地な處が英次さんのよくないくせですね。

信一　あれがあるので生きてもゆけるし、仕事も出來るのでせうが、困つたものですね。

小野寺　轉地すると云へば何處ですかね。

信一　心あたりはないのですが、あかるい、眼界の廣々した、つまらないことにこせ〳〵してゐられないやうな、そして誰にもきがねせずに、二人で日なたぼつこでも出來るやうな。

小野寺　さうですね。そしたらいゝかも知れませんね。

信一　葉山あたりはどうですかね。

小野寺　いゝでせう。

信一　今度あつたらおすゝめ下さい。

小野寺　おすゝめしませう。しかしその前にいゝ家があるかどうか、さがして見ませう。

信一　お氣の毒ですが、どうぞよろしく、私が暇な身體ですと家位いさがしにゆけるのですが、一寸今、急がしい最中で。

小野寺　こないだ芝居、拜見に上つて感心しました。

信一　いやどうも。

小野寺　畫を買ふ方は僕の友達の山田次郎が買ふかも知れません。

信一　あの方、御存知なのですか。

小野寺　先日山田と芝居見物に行つたのでした。山田もほめてゐました。

信一　あの方にほめられゝば光榮です。いつかあの方のものをやりたく思つてゐるのですが、お逢ひでしたらよろしく。

小野寺　山田も、あなたにやつて戴ければよろこぶでせう。

信一　弟のこと、何分よろしく願ひます、誠に申し兼ねますが早い程、結構なのです。もしものことがあつてはとり返しがつきませんから。

小野寺　今日之から葉山へ行つて見てもよろしい。

信一　それではあまり……。

小野寺　いや別に用はないのですから。

信一　本當に感謝します、弟夫婦がおちついてくれないと僕もおちつけないのです。弟の妻の手紙を持つてゐますから、一度よんで戴きますか。

小野寺　かまひませんか。

信一　あなたを僕は絶對に信用しますから。

（小野寺よむ。）

小野寺　之は少しひどすぎますね。英次君も。

信一　火と油と一緒になつたやうなものですからね。へんに執着する質が二人よつたのですからね。それに私の家には氣狂ひすぢがないことはないのです。この三代程は出ませんでしたが。

小野寺　英次さんはあんまり優しすぎるのですね。呑氣になれないのですね。

信一　困つたものです。それは弟の妻の云ふことには誇張はあると思ひますが、夜なかに短刀を研がれたりしたら、一寸ねむれませんからね。

小野寺　あんまりいゝ癖ぢやありませんね。今度短刀は僕がもらつてくることにしませう。

信一　さうして下されば本當に僕も安心します。

小野寺　それでは之からすぐともかく葉山へ行つて見ます。

信一　本當になんとも御禮の申しやうがありません。それでは之で失禮いたします。

小野寺　いづれ二三日の内に上つてお話します。うまくゆくことをのぞんでゐます。

信一　萬事よろしく願ひます。さやうなら。

小野寺　さよなら。

（二人退場、芳子登場かたづける。まもなく小野寺登場。）

小野寺　之から葉山にゆくことになつたよ。

芳子　どうして。

小野寺　野中が今の家にゐては碌なことがないだらうと云ふのでね。野中のために家をさがしてやらうと思つてゐるのだ。

芳子　まあ、それでは散歩はやめになつたのね。つまらないわ。

小野寺　そのかはり葉山へつれていつてやるよ。

芳子　葉山へつれていつて下さる、本當？

小野寺　久しぶりに海岸を歩かう。そして今夜は月がいゝだらうから一緒に海岸へ出て月を見よう。

芳子　それなら本當にうれしいわ。久しぶりに海を見るこ

とが出來るのね。野中さん夫婦のなかは面白くないの。

小野寺　まあ、大したことはないと思ふが細君が殺されさうに思ふのださうだよ。

芳子　あの方は少しへんね。

小野寺　だが野中も一寸氣味のわるい處があるよ。

芳子　一寸すごいのね。あんな方は執念深いでせうね。

小野寺　よくはわからないがね。あつさりしてはゐるとは云へまい。

芳子　野中さん兄弟はまるで反對ね。

小野寺　だがあれで何處か似てゐるよ。野中がセムシでなかつたら。

（女中登場。）

女中　野中さん御夫婦がいらつしやいました。

小野寺　お通しゝてくれ。

（女中退場。）

小野寺　うはさをしてゐると影と云ふが、何んだか氣味がわるいね。野中が兄さんと逢はなければよかつたが。

（小野寺夫婦迎ひにゆき、二人をつれてくる。）

小野寺　どうかおかけなさい。

英次　それなら失禮して腰かけたらいゝだらう。

芳子　どうぞおかけなすつて。

千代子　ありがたう。

（四人腰かける。）

英次　今、兄が來たらう。

千代子　嘘ですわね。

英次　合圖はよせ。兄は君の所へよくくるのかい。

千代子　兄によく似た人が角をまがる後ろ姿を見て主人は兄だと云ふのですが、私はそんなはづはないと云つたのです。

英次　そんな云ひわけはしないがいゝよ。僕は兄と小野寺と仲よくなることを望んでゐるのだ。兄が君の處へ來た用がなんだかも僕は大がいわかつてゐる。だから遠慮なく云つてくれ玉へ。兄は何しに來たのだか。

小野寺　君のことを心配して來られたのだ。

英次　僕のことかい。まあそんなことはどつちでもいゝ、どんなことを心配してゐたのだ。

小野寺　君の兄さんは君がもつと明るい、氣持のいゝ處に住むことを望んでゐられたよ。

英次　兄らしい考へだね。そして君は贊成したのだらう。

小野寺　贊成したよ。

英次　（冗談らしく、しかし皮肉に）それで僕達は何處ですめばいゝと云ふことになつたのだ。

小野寺　葉山から三浦の方にかけて何處かいゝ處はないかと思つたのだよ。

英次　志はうれしいが、僕は當分あの家からどかないつもりだよ。僕は引越は考へたゞけでも閉口だ。それに淋しい處へ行つていゝかどうか。

小野寺　しかし東京をはなれるのも惡くはないと思ふがね。

英次　それなら君達こそ東京をはなれたらいゝぢやないか。僕は東京をはなれたくはないのだ。また僕は兄にそんなことまで心配してもらひたくないのだ。僕は今の家で滿足してゐるし、妻だつてあの家は氣に入つてゐるわけだ。さうだらう。

千代子　あまり氣に入つてもゐませんわ。

英次　葉山の方がいゝのかい。近所に家もたく泣いたり、わめいたりしても聞き手のない所がいゝのかい。

千代子　ですけど、明るい氣持になれますわ。きつと。

英次　僕は何と云つたつてゆきたくない。お前一人でゆくなら勝手だが。

千代子　私一人家なんかもてませんわ。

英次　お前は持てるよ。

千代子　だつて一人では、怖いわ。

英次　だが俺と一緒にゐるよりは怖かないだらう。千代子は僕を人殺しのやうに思つてゐるのだからな。

千代子　まさか。

小野寺　君のそんな考へ方はつまらないと思ふね。

英次　僕だつていゝとは思つてゐないが、しかし僕は當分あの家から去りたくはない。

千代子　こないだ引越したいと云つてゐらつしつたわ。

英次　兄がどうしてそのことを知つたのだ。(急に何か思ひついたやうにおとなしく)お前が兄に手紙を出したのだね。

千代子　出しはしませんわ。

英次　夫婦なかに祕密があるのを君の前で知らせるのは不愉快だから、そんな話はよさう。君だから別に知らせたつて恥とは思つてゐないがね。僕は他人の祕密にはふれたくはないし、他人に噓をつかせるやうに持ちかける自分の趣味をいゝものとは思つてゐないのだが、白々しくやられるとつい皮肉に出たくなるのだよ。謹まうとは思つてゐるが。

小野寺　引越したいと云ふ話があるとは君の兄さんは云つてゐなかつたよ。

英次　君も噓つき仲間かね。君の方が僕よりくわしいだらう。細君の心理を夫より他人の方が知つてゐると云ふことに平氣になりたいと僕は思つてゐるのだよ。

小野寺　君の考へ方は、君が普通の人より神經が發達してゐるからと思ふが、あまりいゝとは思はない。もう少し

呑氣になれないかね。

英次　僕もなりたいと思つてゐるのだよ。探偵の眞似はいやだからね。君は境遇もいゝが、昔からその點君に感心してゐるよ。君は氣がついても氣がつかない顏をしてゐる。だから馬鹿な人間は君を馬鹿にして組みしやすく思つてゐるが、しかし君をだませる人間は少ないことを知らない。お世辭つかはれてよろこんだ顏して、相手の腹をのみこんですまして馬鹿にされてゐる點に感心してゐるが、僕だつて大がいのことには平氣でゐられるが夫婦となると、赤の他人のあつまりと思つても、つい要求が過大になるからね。君達の前だから、かくしてもおひつかないから云ふが、僕は今後君の忠告を入れて何處へ出かけるのもなるべく二人で一緒に出かけることにしたよ。疑惑の入る餘地をつくつて、くるしむのは馬鹿氣てゐるからね。

小野寺　僕は海岸へゆくのはわるくはないと思ふがな。

英次　僕は浪の音がひどいとねられない質なのだ。

小野寺　さうかね、僕は浪の音をきくと氣持がいゝがね。それなら山へ行つたらどうだ。

英次　僕は淋しい處は嫌ひなのだ。それに引越は厄介だよ。引越し好きの人の氣持は僕にはわからない。

小野寺　さうかね。尤も僕でも一寸は何處かへ行かうとは思ふが、この家から出たいとは思はないから。

英次　兄はあの家にはいやな連想をもつてゐるらしい。あの僕の床下から血にそんだ千代子の死骸が出て來た夢を見たのださうだ。

千代子　いやよ。そんな話。

英次　(冗談のやうに)　あんまりいゝ夢ぢやないが。そんなことが起らなければ僕もいゝと思つてゐるよ。

小野寺　そんな冗談はよくないね。

芳子　冗談にもそんなことをおつしやるのはよくないわ。

千代子　主人はあんなことを云つて人をおどかすのがすきなのですよ。主人は今度兄をよんでこないだ買つたトランクを室において、そのトランクに兄をこしかけさして、そのトランクのなかには私の死骸が入つてゐるやうな暗示を與へておいて、兄をおどかすことなんか想像してよろこんでゐるのですよ。

芳子　まあいやな方ね。

千代子　私はなんだかそんなことが本當に行はれてそして私の死骸が本當にトランクのなかに入れられてゐるやうな氣がすることがあるのですよ。

芳子　まあ。

小野寺　それは本當によくない趣味だよ。

英次　僕のなかには、兄に似て役者の血が流れてゐるのか

も知れない。
小野寺　活動にでもやつたら面白いかも知れないが。
英次　活動は僕は見たことがないよ。だがあの支那カバンに死骸が事實入つてゐないで、あのなかに酒や御馳走でも入つてゐたら、一寸兄をおどかして兄がどんな表情をするか見るのもわるくないね。兄にとつたつて芝居の時の參考にもなるからね。
小野寺　狂言としたら面白いかも知れない。
英次　君も賛成するなら、一つ端役をつとめないか。
小野寺　本當にやる氣なら是非やめてほしいね。
英次　まだ本式にやつて見ようとは思はないがね。千代子、芳子さんにお願ひして買ひ物に行くなら一緒にいつて戴いたらいゝだらう。
芳子　何處へいらつしやるの。御一緒に參りませう。
千代子　それでは失禮ですけれど、おさしつかへがありませんでしたら、お作さしていたゞきませう。
小野寺　天氣がいゝからどこへでも行つて來たらいゝだらう。そして歸りに果物のいゝのがあつたら買つて來てもらはう。
千代子　それでは失禮いたします。
芳子　一寸行つて參ります。
英次　どうもありがたう。

（千代子、芳子退場。）

英次　僕はね、千代子がこの頃へんに可愛いくなつて來た。僕は今迄、あいつを愛することを恐れてゐた。愛すれば逃げられた時に困るからね。逃げられても困らない程度でとめておかうと思つた。しかしこの二三日の内に不意にあいつをもうどうしても失ひたくなく思ふやうになつてしまつた。僕は困つてゐるのだ。
小野寺　困ることはないぢやないか。
英次　いや、玉も下らないと思つてゐる間はキズがさう氣にならなかつたが、玉を愛すれば愛するほどキズが氣になり出した。僕はキズがあるから自分のものになつたと云ふことは百も承知しながら、そのキズがます〳〵自分をくるしめるのだ。そして僕はこの頃今迄よりも兄が憎く。その上に兄を恐れるやうになつた。兄はあいつのことを忘れてゐないのだ。あいつも亦兄を愛してゐるのだ。
小野寺　そんなことはないと思ふね。
英次　いや、たしかにさうなのだ。僕は二人の愛をうたがへないのだ。二人は僕にせかれるのだ。ます〳〵愛してゆくのだ。そして妻も兄もそれを恐れながら、どうすることも出來ないのだ。妻は僕に殺されることを恐れてゐるのは、僕から逃げやう、逃げやうと思つてゐるからに過ぎないのだ。兄はまたあいつの死ぬこと許り心配して、

どんなことでもして、あいつを生かしたがつてゐる。その氣持が僕にわかりすぎるから、恐ろしいのだ。僕はあいつを失つていゝのなら、何にも問題は起らない。僕は斷じてあいつを失ひたくない。僕はこの頃すつかりおちつかなくなつた。夜もあいつの逃げ出す夢を見てびつくりして目をさますことが何度あるか知れない。その時の氣持のわるさと云つたらない。僕はとう〳〵しくくらしたいと思つても、その力がなく、嫉妬と憎惡が時々僕の胸をはりさくやうに苦しめる。そしてどうすることも出來ないのだ。僕はおちつきがなく、とう〳〵あいつの看守人になつてしまつた。一人ですが〳〵しくくらしたいと地獄の人間で墮落してどうすることも出來なくなつた。僕は之にかつ方法はたつた三つ切りない。あいつを殺すか、兄を殺すか、自分を殺すかだ。僕は三つの內どれを撰ぶかね。僕が死ぬのが本當かも知れないが、僕が死んだら誰が僕の仕事をする。僕は自分の仕事のために死ねない。兄を殺すことも考へるが、下手人が僕だと云ふことはすぐわかるだらう。兄の行衞がわからないでは誰もすませないからね。旅行してゐると云つてごまかすわけにはゆかない。僕は兄を殺して一生を棒にふる氣はない。それならあいつを殺すより他仕方がないことになる。だがあいつを失はずにあいつを殺すことが出來ない。そしてあいつなしには僕は生きられなくなつて來てゐる。僕はどうしたらいゝか見當がつかないのだ。君にも見當がつくまいな。

小野寺　旅行したらどうだ。二人で。

英次　同じことだよ。あいつが逃げることを信じてゐる間は。いつかあいつは逃げる。それはまちがひのない事實だ。僕が殺してしまはない限りはね。僕はあいつを愛すれば愛する程あいつを信用することが出來ないのだ。この氣持は家庭の幸福な、貞淑な妻をもつ君にはわかるまい。いくら小說家でもね。僕は一瞬間でもあいつから目をはなすことが出來なくなつた。少しの疑惑も僕は入る餘地をつくりたくない。しかしあいつに嫌はれたくもないから、手紙をかくぐらいの時間はぬすまれたかも知れない。あいつはすばしこいのだから。君は斷じて兄とぐるになつては困る。君だけは僕は信じてゐるのだからね。僕は疑惑を一番恐れる。疑惑は魔物だからね。正體をつかめない處にはいたる所に姿をあらはす奴だからね。

（芳子、千代子登場。）

芳子　唯今。

英次　どうもありがたう。買ひものはすんだかね。

千代子　すみました。

英次　それなら失禮しようかね。

千代子　えゝ。

芳子　まあいゝぢやありませんか。

英次　之から又時々二人でよせて戴きます。

芳子　どうぞ、又いらつして下さい。

千代子　ありがたう御座います。

英次　それぢや失敬する。

小野寺　さうかい。

（四人あいさつ退場。まもなく小野寺夫婦登場。）

小野寺　本當に困つたものだな。

芳子　千代子さんていゝ方ね。

小野寺　中々いゝ人だね。だが何處か運のわるさうな所があるね。

芳子　隨分よわつてゐらつして、すぐ涙ぐんでゐらつして困りましたわ。

小野寺　どうかしたいな。しかし他人の夫婦の間のことは手の出しやうがないね。

芳子　だつて見てゐるより他仕方がないわ。

小野寺　お前はどう思ふ。野中が細君を殺すか、殺さないか。

芳子　それはわかりませんね。

小野寺　殺される前に逃げ出すか。逃げ出す前に殺されるか。俺にもわからない。

芳子　平和におさまるわけにはゆかないのですかね。お二人ともいゝ方ぢやありませんか。

小野寺　三人ともわるい奴ぢやないが一寸困るね。あゝ執着してはね。氣がめいつてしまつた。散歩でもしよう。

芳子　果物を買つて歸つて來ましたわ。

小野寺　それはすつかり忘れてゐた。歸つてから食ふことにしよう。

（退場しようとする。）

――幕――

第三幕

一

英次の室。英次書をかいてゐる。千代子小説を讀んでゐたが、不意に泣く。

英次　馬鹿。小説を讀んでそんな大きな聲出して泣く奴があるか。

千代子　だつて悲しいのですもの。

英次　身につまされたのだらう。

千代子　さうよ。身につまされましたの。

英次　だから小説なんかよむなと云ふのだ。

千代子　小説でもよまなければなほ淋しくなりますわ。

英次　何か働くといゝのだ。
千代子　女中もおかずに働いてゐるぢやありませんか。この上働いたつて、金が出來るわけでもありませんし、さきにたのしみがあるわけでもありませんものね。
英次　お前は子供が出來ないと云ふのは本當かね。
千代子　醫者はさう云ひました。子宮がどうかしてゐるつて。子供が出來ない方が仕合せだと思つてゐますわ。
英次　なぜだ。
千代子　子供がこの上出來たら私の身體がつゞきませんわ。
英次　お前は死にたがつてゐるのぢやないかね。
千代子　あなたは私が死ぬ方がいゝのでしよ。
英次　俺の手から逃げられるよりはね。
千代子　私だつて今のやうな生活を一生つゞける位いなら死んだ方がよろしいわ。
英次　今に俺の畫が賣れるやうになる。一つ二三百圓にね。
千代子　一つ十錢にだつて賣れる時は來ないと私は覺悟をもうきめてゐますから、そんなことをおつしやつたつて信じません。
英次　まあ見てゐるがいゝ。
千代子　それにいくら金持になつたつて、私はこんな生活はいやです。
英次　それならどうしようと云ふのだ。
千代子　ゆきたい所にもゆけないやうな。
英次　お前が信じられないことをするからさ。
千代子　私はもうあなたの顔や姿を見て胸がわるくなりますわ。
英次　とう〳〵本音をはいたね。
千代子　もうあなたなんか怖かないのですもの。私は死んだ方がいゝのです。こんないゝ天氣にそとへも出られないでこんな所にとぢこもつてゐる位いなら。
英次　お前は俺が早く死んでくれゝばいゝと思つてゐるのだらう。
千代子　まあさうね。私は自由にとび歩きたいのですよ。あなたが自由さへ下されば、私はあなたの所へ歸つてくるにきまつてゐますわ。ですがあなたのやうに私を殺すと云つておどかして私の自由をすつかり奪はれてしまへば私だつていつかとび出して見せると腹の底で思はないわけにはゆきませんわ。
英次　何とでも云ふがいゝよ。蛇が見込んだ鼠がどんな泣き聲を出したつて逃がしはしないぞ。
千代子　あなたは本當にひどい方ですね。
英次　どつちがひどいのだ。
千代子　それは私がわるかつたかも知れません。だが今は

あなたの方がわるいのです。ずつと〳〵わるいのです。私はあなたを憎惡し切つてゐます。人を束縛するにも程があります。

英次　俺が好んでお前を束縛してゐると思つてゐるのか。俺の苦しい氣持はお前だつて知つてゐるはづだ。

千代子　それを知つてゐるので今まで我慢して來たのです。

英次　もう我慢出來ないと云ふのか。

千代子　私だつて生きなければなりません。

英次　俺を殺してもか。

千代子　あなたは死ぬやうな方ぢやない。私を殺したつてあなたは死ぬやうな方ぢやない。あなたは心中なんか出來ない方です。私を殺すことは出來てもね。私の死ぬのを笑つて見ることは出來てもね。

英次　それはさうかも知れない。俺は今死んでは俺の仕事はものになることを誰にも示すことが出來ないからね。俺の仕事が後世にのこしても心ある人には笑はれないだけにはしておきたいからな。

千代子　あなたは私を殺しても罰がかければいゝのでせう。あなたはさう云ふ方です。

英次　それはあたりまいのことだ。

千代子　なにがあたりまいです。くやしい。

英次　泣けるだけ泣け、誰が同情してやるものか。

千代子　あなたに同情なんかしてもらひたくありません。私はもうあなたを私の夫だとは思つてゐません。あなたは暴君です。恐ろしい暴君です。

英次　小說にそんなことでもかいてあるのか。

千代子　小說がなんです。私は出てゆきますから。

英次　出る勇氣があるなら出て見ろ。

千代子　出ますとも。

英次　もう一ぺん云つて見ろ。

千代子　何度でも云ひます。出ますとも。

英次　よく云つたな。

（英次、千代子にとびかゝらうとする。小野寺登場。）

英次　よく來たね。今（苦笑して）喧嘩してゐた所だよ。誰かくればいゝがと思つてゐた所だよ。

小野寺　夫婦喧嘩は犬も喰はないと云ふが、僕も喰ひたくないよ。

英次　まあいゝよ。あんまり人を馬鹿にするから。

千代子　小野寺さん。きいて下さい。夫は私を朝から晩まで看視して、そして私に少しの自由も與へてくれないのです。夫にそんなことをする權利があるものなのですかね。妻の生きるよろこびを全部奪つてしまふやうな。そして自殺しないではゐられないやうな目にあはせるやう

な。

英次　俺はお前をよろこばしたくどんなに思つてゐるか、お前は知つてゐるはづぢやないか。君だつて知つてゐてくれるね。

小野寺　知つてゐる。

英次　それなのに、こいつは、こいつは僕を呪つてゐるのだ。そして僕と一緒にゐる位いなら死んだ方がいゝと云ふのだ。夫にとつてこんな侮辱があるだらうか。（泣く）

千代子　私だつてどんなにあなたを愛さうとしたでせう。だが私にはその力はないのです。あなたの要求が無理すぎるのです。

英次　それなら出てゆけ。

千代子　出てゆきますとも。

小野寺　奥さん、そんな馬鹿なことは云ふものぢやありません。

千代子　それだつて出てゆけと云ふのですもの。私だつてこゝで死ぬのはいやです。

英次　僕だつて男だ。出てゆけ。

小野寺　君もそんな馬鹿なことを云ふものぢやない。千代子さんにゆくさきのないことは君だつて知つてゐるぢやないか。

英次　ゆくさきはいくらだつてある。もうゆくさきが出來てゐるから、俺に喧嘩をふつかけたのだよ。

千代子　そんなことはありません。私はゆくさきなんかなくたつていゝのです。

英次　ゆくさきの心あたりがなくたつてお前は出かけるかい。

千代子　あなたゞつて、私にゆくさきがあつたら出てゆけとはおつしやらないでせう。

（二人顏を見合せて苦笑する。）

小野寺　だから夫婦喧嘩は犬も喰はないと云ふのだよ。よかつた。よかつた。どつちがわるいのか知らないが、雨方から折れるのだね。

英次　誰が折れるものか。

千代子　私だつて折れはしません。

小野寺　あはゝゝゝ。面白い。もつと喧嘩したらいゝだらう。

英次　こんな餘計なじやま者が入つたから、僕は折れてもいゝから、お茶でも入れておいで。

千代子　はい。

英次　一昨晩菊を買つて來たのを一つ見ようか。

小野寺　あゝ。

（二人退場。）

千代子　（獨白）あゝ。もう少しの處でのがれられる所

を私はまたくもの巣にかゝつてしまつた。

――幕――

二

同じ室、數日後の午後、千代子一人で掃除してゐる。英次入つてくる。

千代子　どうでした。

英次　いやすばらしいものがあつたよ。この頃は畫かきになつたことが時々心細くなつたがいゝものを見ると矢張り畫かきの仕事程たのしい、立派な仕事はないと思ふね。僕は今日程、たのしく畫を見たことはこの頃まるでなかつた。支那には實にすぐれた畫家がゐると思ふが、日本だつて中々馬鹿に出來ない。今日二つ見た雪舟なぞはさすがにすぐれたものだつた。雪舟でもあんないゝ畫を見たのは始めてだつた。金があつたら買ひたかつた。あいつを買つてかけておいたら隨分仕事に刺戟が出來ると思つた。兄貴が東京にゐれば買ふことをすゝめるのだがな。北海道ぢや仕方がない。畫かきはその人の本當の價値がすぐ世界的にわかるし、後の人にもわかつて、少しのいつはりもゆるさないから氣持がいゝ。畫は言葉とちがつて嘘がつけないから氣持がいゝ。留守に誰も來なかつたか。

千代子　だれもいらつしやいません。

英次　俺は立派な畫かきになりたい。山がかきたくなつた。久しぶりに旅行して見たいな。金はいくらある。

千代子　三十圓程、ためてあります。

英次　感心だな。それとも逃げる用意かね。

千代子　もうあきらめましたわ。逃げてゆく處もありませんものね。

英次　その三十圓をもらつてもいゝかね。

千代子　えゝ。

英次　それなら久しぶりで旅行して、山でもかきにゆくかな。

千代子　その方がおよろしいわ。身體のためにも。

英次　留守はどうする。

千代子　弟に來てもらひませう。

英次　それはいゝだらう。それなら明日出かけるよ。

千代子　急ね。

英次　善は急げと云ふからね。之から一寸小野寺の處へ行つてくるよ。そしてあいつに俺の元氣な處を見せて、よろこばしてくる。

千代子　小野寺さん御安心なさるでせう。私も小野寺さんの處に御一緒に行つていけなくつて。

英次　行かう。行かう。

千代子　えゝ。
英次　俺はさう柄にないことは考へずに、一心に畫をかいてゆきたくなつた。
千代子　あなたは本當に立派な畫家になるわ。
英次　大へんおだてるね。
千代子（媚びるやうに）だつて何となくそんな氣がするのですよ。
（二人退場。）

——幕——

三

同、信一と千代子話してゐる。

信一　英次からたよりはまだありませんか。
千代子　ありません。
信一　どうしてゐるのでせう。
千代子　いろ／＼考へてゐるのだと思ひます。私と本當に別れたがつてをりました。御仕事に夢中になつてゐらつしやるのかも知れません。
信一　それでは又來ます。
千代子　まだいゝぢやありませんか。
信一　僕はこの室であなたと二人切りでゐるのはおちつかないのです。英次がいつ歸つてくるかわかりませんから。
千代子　大丈夫よ。主人は本當は病氣してゐるのですから。
信一　病氣ですか。それであなたは見舞にゆかないのですか。
千代子　ゆきたくも金がありませんから。
信一　金ならかしますよ。
千代子　本當は私も病人なのですよ。明後日まで。あなたが東京にゐらつしやる間。
信一　それはよくありませんね。
千代子　それだつて仕方がありませんわ。尤もあなたが私にどうしても主人の處へゆけとおつしやれば、私、死んでもゆきますけど、私だつて生きてゐるたのしみが少しはなくつては。私はもう主人のそばにゐるのにはもう本當に閉口してゐますの。さう思ふのは悪いと思ふのですが、愛さうとすればする程、嫌氣がさして來ますの。どうしたつてもう辛抱は出來ませんのですが、何處もゆく處はありませんものね。それに殺し兼ねない樣子を見せるのですから。あなたの兄弟でゐながら、あなたとまるでちがつて私に執着し切つて下さるので、私はありがたいとは思ふのですが。
信一　僕だつてあなたを愛してゐなかつたらこんなに苦勞はしませんよ。今度の旅興業は隨分あたつて、次ぎ次ぎと申し込みがあつたのですが、あなたのことが氣になつ

て、やつと六日の暇をつくつて歸つて來たのです。之から父青森の方へ出直さなければならないので、皆私の歸ると云ふのに反對だつたのですが、私はそんなことはきくわけにはゆかつたのです。

千代子　私が死んだら泣いて下さる。

信一　僕はあなたを殺したくないのです。そのためにはどんなことでもします。

千代子　私はあなたと一緒に死ねたらとよく思ふのですが、あなたはそんなことを考へたことはないでせう。

信一　僕はあなたと一緒に生きることは考へますが、死ぬことは考へたことはありません。

千代子　私は幸福に生きると云ふことを考へたことはありません。もとはありましたけど。始めてあなたにお逢ひした時はね。私はあんなに嬉しいことはありませんでした。あれからいろ〳〵のことが起りましたわね。

信一　僕はあなたにあやまりたいことだらけです。

千代子　そんなことはありません。あなたが生きてゐられるのですから。それにこゝに來たのも、私が意久地がなかつたからです。あなたの家庭と名譽と人氣を氣にして、私の愛したのはあなたの弟さんだと見せかけようとしたのがいけなかつたのです。しかしすんだことは仕方がありませんわ。あなたは別としても、私達の不幸は虚僞な愛からうまれた結果にすぎないのです。狂言の仕損ひです。誰もうらみやうはないのですが。

信一　もうそんな話はよしませう。だが私はなんだかこの室はおちつかないのです。

千代子　あなたは氣がよわいのね。あなたは幸福だからだわ。私は生きてゐるのがつまりませんから、何にも怖いものはありませんわ。

信一　英次の病氣は大したことはないのですか。

千代子　えゝ、大したことはないのです。私は二三日の內には病氣がなほつてゆけると思ふと手紙を出しておきましたから安心ですわ。あなたが不意に歸つていらつしたことを聞いて私はどんなにうれしかつたか、あなたにはおわかりにならないでせう。何しろ私は監督づきで、あなたとはもう一生、お目にかゝれないだらうと思つてゐました。

信一　まだ私達は若いのですから。

千代子　だつて私はなが生きは出來ないと思ひますわ。今のまゝでは。主人が私が居なくつても生活が出來る時が來なければ私は本當に生きてゐるのが、いやになりますわ。

信一　英次はいゝ人間ぢやありませんか。

千代子　私だつてそれはよく知つてゐますわ。ですが人の

わるいあなたのお顏を見てゐると私は時間のたつのを忘れてしまうのに、あの方の顏や、すがたを見ると本當に身ぶるひしてしまひます。人間にとつて何が不幸だと云つて毛蟲や蛇と同じ室にすむ程いやなものはないと思ひますわ。私は二三月前まではそれ程にも思はなかつたのですが、この頃は本當に顏見るだけでもさむ氣がしてしまひます。之は嘘ではないのです。わるいと思つてゐるのですけど。主人のすることなすこと、又主人の云ふ一言一句、私を病的に不愉快にしてしまうのです。どうしてですか、私にはわかりませんが。

信一　それは困つたものですね。それが本當なら別れるより仕方がないでせう。

千代子　私もさう思ひますの。ですけど別れてどうしていいのか。

信一　別れたさきのことは心配しないでもいゝでせう。しかし別れる時が心配ですね。

千代子　別れるだけなら私はどうにでもなると思ふのです。

信一　僕は弟がどんなによわるか、そのことを考へないわけにはゆきません。僕は弟を愛してゐます。自分は弟を苦しめすぎてそんなことを云ふのは蟲がよろしいがね。

千代子　主人はあなたの死ぬのをのぞんでゐます。

信一　それは本當ですか。

千代子　本當です。さう云つてゐます。主人は三人の內誰か死なゝければならない。そして第一にあなたの死ぬことをのぞんでゐるのです。

信一　それも無理はありません。だが僕は今死んでやるわけにはゆきませんよ。

千代子　主人は私の死骸をこのカバンに入れたやうに見せかけてあなたをおどかすことをいつか眞劍に考へてゐましたよ。そしてあなたが私をどの位愛してゐるか見たがつてゐました。

信一　一種の復讐でもしようと云ふのでせう。あいつならその狂言をうまくやりこなすでせう。なんだか、不氣味な所がありますからね。舞臺の上でそんな所をあいつにやらしたら私よりもつとうまくやるだらうとよく考へたことがあります。

千代子　私は主人のことはすつかり忘れてしまひたいのです。

信一　あなたは隨分やせましたね。

千代子　みにくゝなりましたね。

信一　あなたを僕は本當に幸福にしたかつた。

千代子　主人もよくさう申します。

信一　あなたこそ、弟のことを忘れることが出來ないので

すね。

千代子　思ひたくないと思ふとなほ思ひ出します。あの人が死んでくれたらと私はよく思ひます。しかしさう思へば思ふ程、あの人は丈夫になります。あんなに心の強い人は滅多にありませんね。呪はれても、呪はれても生きかへつてくるやうな方ね。時々氣味がわるくなりますわ。あなたの弟さんにあんな方があるのは不思議ですね。

信一　誰か來たのぢやありませんか。

千代子　鼠の音ですわ。何にも怖いことはありませんわ。二人切りでお話出來る時がくるとは思ひませんでしたわ。私の本當に心の底から凍りついてゐた淋しさが、だんだんとけて來ましたわ。人間はこんなにもうれしくしてゐられるのに、毎日毎日、いやな思ひして生きてゆかなければならないのでせうか。

信一　そんなことはありません。

千代子　私は地獄におちてもいゝわ。あなたとなら。主人と一緒に極樂にゐるよりどんなにいゝでせう。

信一　そんなことは云ふものではありませんよ。

千代子　いつまでもゆつくりしてゐていゝのでしよ。私、お酒を買つて來ますわ。

信一　今日は早く歸りますよ。

千代子　そんなことは云はないで下さい。せめて今晩だけは私生命の洗濯がしたいのですから。

信一　何かたしかに音がしましたよ。

千代子　大丈夫ですよ。鼠ですよ。あなたに似合はないのね。

信一　僕は世界中で弟が怖いのですよ。あいつの顏を見ると、魂が凍りつきます。

千代子　私の魂はいつでも凍りついてゐるわ。（笑ふ）

信一　たまりませんね。

千代子　私を一緒に旅行につれていつて下さらない。

信一　弟はどうします。

千代子　主人は男ですから自分で生きてゆくでせう。

信一　それでも病氣の時逃げるのはよくありませんよ。

千代子　今逃げなければ逃げられませんわ。私だつて死ぬのはいやですわ。今逃げなければ私きつと殺されます。

信一　…………。

千代子　私は死んでもいゝの。私はもう死にものぐるひですわ。私はもう死んでもこゝにゐるのはいやです。私を助けて下さい。私を生かして下さい。どうぞ私を見殺しにしないで下さい。（信一の膝に泣きふす）

信一　さう泣かないだつていゝ。私もあなたを殺すわけにはゆかない。あなたの決心が強いなら私も覺悟をきめます。弟だつてまさか死ぬやうなことはしますまい。

千代子　ありがたう。ありがたう。それで私本當に生きかへりましたわ。それなら今日之から私、用意しますから、明日の朝さそひに來て頂戴ね。それまでにあと始末しておきますわ。

信一　承知しました。それなら今日は之で歸ります。

千代子　それなら明日の朝九時頃きつと來て頂戴ね。

信一　えゝ、來ます。それでは又明日。

千代子　本當に私うれしいわ。今晩は私きつとねむれませんわ。それでは又明日ね。

信一　それではさようなら。

千代子　それなら私も其處までゆくわ。

（二人退場、英次登場。支那カバンの上に腰かけ、氣味のわるい笑ひをする。千代子いそ／＼登場。始め氣がつかないが、ふと氣がつき、聲をあげておどろく。辛うじて氣絕せず、勇氣を奮ひ起して戰ひをいどむやうに口をきく。）

千代子　いつお歸りになつたの。

英次　（つめたく）さつき。

千代子　（反って度胸をする）御病氣はどう。

英次　お前の病氣はどうだ。お前の病氣が氣になつて無理して歸つて來たのだ。

千代子　それはありがたう。

英次　俺が歸つて來たのをうれしく思つてゐるのかい。

千代子　そんなことは云はなくつたつてわかつてゐますわ。

英次　どうわかつてゐるのだ。

千代子　あなたのおよろしいやうに。

英次　お前は病氣たと云ふ電報を受けとつてどんなに心配したか。俺はお前の病氣がなほるやうにどんなに神に祈つたか。そしてあんまり心配になつたので無理して歸つて來た。そして俺は何を見せられたのだ。

千代子　（冷靜に）私だつて生きたいのです。

英次　俺を瞞しても生きたいのか。なぜ正直なことを云はないのだ。

千代子　正直なことを云つて逃がして下さるとは思へませんからね。

英次　兄をよろこばせたのか。

千代子　それはちがひます。信一さんは私のことが心配になつたので、不意に歸つていらつしやつたのです。ですがおそかれはやかれ私は今日のくるのを知つてゐました。又待つてゐました。

英次　お前は私のことはなんとも思はないのだね。

千代子　あなたは一人で生きてゆける方です。

英次　俺の病氣の最中に逃げないでもいゝぢやないか。

千代子　あなたの御病氣もケ病だと云ふことは知つてゐました。
英次　俺の病氣はケ病ぢやない。
千代子　それだつて旅行が出來ないから來てくれとかいてあつたのは嘘ぢやありませんか。
英次　醫者はぢつとしてろと云つたのだ。だが俺はお前の病氣だと云ふ電報を見たら、何んだかお前が死にはしないかと思つたのだ。
千代子　あなたが歸つていらつしやらなければ、私は死ぬやうなことはありません。
英次　俺はお前が淋しく一人でねてゐると思つたのだ。
千代子　信一さんが歸つていらつしたことを、お友達からでも知らせてもらつて歸つていらつしやつたのでせう。
英次　馬鹿！　それは嘘だ。
千代子　あなたは私の死ぬことをのぞんでいらつしつたくせして。（泣く）
英次　勝手に泣け。泣いたつて誰が同情してやるものか。俺にはお前の心はもうすつかりわかつてしまつた。
千代子　それなら綺麗に別れることにしませうね。
英次　（言葉は冷たく）お前が兄と手を切ることが誓へるなら俺はわかれてやつてもいゝ。
千代子　そんなさきのことはわかりませんわ。

（二人默つてにらみ合ふ。）

千代子　そんな顏したつて、ちつとも怖かありませんわ。
英次　（立ち上り）お前はどうしても俺からわかれる氣なのだね。
千代子　それより他仕方はありませんわ。
英次　俺がそれを許すと思つてゐるのか。
千代子　許すも許さないもないわ。私はどうしたつて出てゆくことにきめたのですから。
英次　俺が承知しないでもか。
千代子　えゝ。
英次　出られるなら出て見るがいゝ。俺はお前を許せるだけ許さうと思つたが、そしてお前の氣持を察してやれるだけ察してやるつもりだつたが、もう俺もお前の侮辱に我慢が出來なくなつた。
千代子　我慢が出來なければどうしようと云ふの、私を殺さうと云ふの。私を殺して生きてゆけると思つてゐるの。牢屋に入つてもいゝの。皆に笑はれてもいゝの。それとも無理心中でもしようと思つてゐるの。私を殺したあとのことを考へても、私を殺さうと云ふの。
英次　………。
千代子　妻は夫のものなの。妻は夫の奴隷で、夫が殺してもいゝの。又夫が妻を箱のなかに押しこんで、逃げると

殺すなどと云つてそれが夫の權利のやうに思つてゐるの。私だつてどの位いあなたを愛したく思つたかわかりませんわ。ですけど、それは神樣が許して下さらなかつたので、私にはどうすることも出來なかつたのです。私はそれを仕方がないと思つてゐます。私はあなたに隨分すまない氣もしないことはありません。ですけど、私は決心しました。それでは之からおいとまします。お身體を大事にして下さい。

（千代子、靜かに退場しようとする。その後ろ姿を憎惡の目で見おくつてゐた英次はとう〳〵辛抱が出來ずにとびかゝる。氣違ひのやうに、なぐる。千代子も遂に抵抗する。その内に發狂したやうになり英次千代子の首をしめる。千代子死んでしまう。それでもまだしばらくしめながら、へんな笑ひ聲を出す。暫くしてやつと立ち上る。）

英次　（死骸を見つめながら低い聲で）俺のしたことはやむを得ないことだ。之より他、どうすることも出來なかつた。お前は殺される資格のある奴だ。誰も俺のしたことを尤と思ふだらう。靜かに死んでゆけ。

（英次はおちつかないやうに歩きながら氣違ひのやうに頭をふつたりたゝいたりして、又死骸の前に立ちどまり、千代子の死に顏を見つめる。英次不意に泣き出す。）

英次　（低い聲で）お前は不幸な、不幸な女だつた。俺はどんなにお前を幸福にしてやりたかつたか。だが俺には他にどうすることも出來なかつた。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛……。

（急に英次は千代子の死骸にかぢりつきなほ一層泣き、顏を見、急に生きかへらしたく人工呼吸をやつて見、ます〳〵あわてて出す。）

——幕——

第四幕

一

翌朝、同じ室、英次落つきを失なつて室のなかをうろつき、カバンの前へ來て頭を壘にすりつけるやうに御辭儀をしては、頭髮をかきむしつたりする。外で信一の「千代子さん」と呼ぶ聲がする。英次の態度急にかはりカバンの上に腰かける。

信一　千代子さん。（とよびながら登場、英次と顏をあはせる）

（沈默、お互に心をうかゞう。）

英次　千代子は今朝早く出かけましたよ。お兄さんの處へ

でもいつたのかと思ひましたよ。（沈默）

信一　お前はいつ歸つて來たのだ。

英次　お兄さんはいつ歸つて來たのです。

信一　二三日前だ。

英次　私は昨晩おそく歸つて來ましたよ。お兄さんが東京にゐらつしやることは少しも知りませんでした。千代子は何にも云ひませんでしたから。

信一　それで俺の處へ來たと思つたのかい。

英次　お兄さんの聲をきくとすぐさう思つたのです。千代子はゆきませんでしたか。

信一　來なかつたよ。

英次　本當ですか。

信一　來れば千代子さんなぞと呼びはしないだらう。

英次　わざとお呼びになつたのかと思つたですよ。

信一　嘘つくのはお前の方が上手らしいな。

英次　芝居することではお兄さんには叶ひませんよ。

信一　どうだかね。千代子は何時頃出かけたのだ。

英次　六時頃でせう。

信一　何て云つて出たのだ。

英次　一寸、其處までゆくと云つて出かけたまゝ、まだ歸つて來ません。

信一　それは本當かい。

英次　どつちですかね。何しろ千代子は居ないのです。

信一　さうか。（退場、まもなく登場）千代子の下駄があるよ。

英次　他の下駄をはいて行つたのでせう。まさか足袋裸足では出かけないでせうから。

信一　お前は昨夜、ねなかつたね。

英次　僕は病氣なのですよ。大したことはありませんが。

信一　それはいけないね。

英次　醫者に旅行することは禁じられてゐたのですが、千代子から病氣だと云ふ電報が來たのでびつくりして歸つて來たのですが、反つて身體にはよかつたやうです、少しもわるくはならないやうです。

信一　千代子さんは病氣だつたのか。

英次　お兄さんは御存知ないのですか。もう千代子も病氣はいゝさうで、今朝早くから起きてさむいのに外へ出てゆきましたから、さう悪いことはないのでせう。

信一　千代子さんはお前に殺されることを恐れてゐたよ。

英次　自分に疚しいことがあるからでせう。

信一　お前は千代子さんをどんな人間と思ふかね。

英次　それはお兄さんに聞きたい處ですね。しかしわるい女とは思つてゐません。あまり正直すぎる女とは思ひますがね。人間はまだ正直になり過ぎてはいけないやうで

すね。
信一　おそすぎたかね。
英次　何がです。
信一　俺は千代子を生かしておきたかつたのだよ。
英次　千代子は死んではゐませんよ。
信一　(よろこんで)　本當かね。まさか噓はつくまいね。
英次　あはゝゝゝ。お兄さんは僕が千代子を殺したかと思つてゐるのですか。
信一　どうも俺にはさうとしか思へない。
英次　あはゝゝ。お兄さんは千代子が僕に殺される資格があると思つてゐるのですね。僕に人殺しが出來ると思つてゐるのですか。僕は今日のやうな場面に何度も逢つたやうな氣がしますよ。それにしても千代子の歸りはおそいですね。
信一　喧嘩でもして出て行つたのか。
英次　少しは云ひあひをしましたよ。僕が歸つて來ても少しもよろこばないのですからね。反つて迷惑さうな顏をしてゐましたからね。僕だつて氣持よくは思ひませんでした。それでつい荒いことを云ひ、少しは手荒いことをしたのですが、いつものことですからその內歸つてくるとは思つてゐるのです。
信一　何處へ行つたか、あてはないのだね。
英次　僕にはあてはありませんがね。どうせすぐ歸つてくるでせう。二三十圓の金は持つて行つたかも知れませんがね。
信一　許してくれ。俺はお前が本當に殺したのかと思つたのだ。しかし千代子さんは生きてゐてくれたとは、ありがたい。僕はお前に心から禮を云ふよ。俺はお前の顏を見た時、ぞつとしたよ。おそすぎたと思つたよ。どうしてい丶かわからなかつた。
英次　お兄さんは千代子を僕の手から奪はうと思つてゐるのでしよ。
信一　そんなことはない。僕は千代子さんを愛してゐないとは云はない。しかしそれ以上、千代子さんの死ぬことを恐れてゐたのだ。あんまり殺されさうなこと許り云つてくるのだからね。俺も氣にならないわけにはゆかなかつた。千代子さんをお前に世話したのは俺だから、俺に責任があるやうな氣がするし、それにお前を人殺しにするのはいやだからね。人殺しになつてはたまらないからね。お前がそんなことをする人間とは思はないが、さつきのお前の顏にはおどろいたよ。
英次　だつてお兄さんは、私の留守なのを知つてゐらつしやるはづなのに、千代子の名を云つて入つていらつしやつたのですからね。
信一　わるかつたよ。わるかつたよ。昨夜なんだかいやな

夢を見たのでね。夢は忘れてしまつたがね。あんまり氣になつたので。

英次　お兄さん。お兄さんは死にたいと思つたことはありませんか。

信一　別にないね。

英次　お兄さんは仕合せな方ですね。私なんかよく死にたいと思ひますね。

信一　死んではいけないよ。

英次　お兄さんは私の死ぬことを望んだことはありませんか。

信一　お前はどうだ。俺の死ぬことを望んだことがあるだらう。

英次　御同樣でせうよ。お兄さん、死は一たいどんなものだと思つてゐます。

信一　死のことはよくわからないな。

英次　死んでしまつたら幸福でせうか、不幸でせうかね。

信一　死んでしまつたものは幸福だらうね。

英次　どうしてゞす。

信一　二度と死なゝくていゝからね。

英次　お兄さんもさう思ひますか、死んだものは幸福だつてね。

信一　だが人殺しがいゝとか自殺がいゝとか云ふのぢやない。生きてゐる人間は死ぬのは嫌ひなのは當然だからね。

英次　だが死の關所をこしたものは平和だと思ひますね。死んだものを生かすと云ふことは、生きてゐるものゝ執着としては尤ですが、死んだものにはありがためいわくですね。

信一　だが生き返つてしまうと、又よろこぶのが人情だね。

英次　それはもう生きてしまつたからでしよ。死んでしまつて生きかへらないものを時々僕は羨やましく思ひますよ。

信一　千代子さんが歸つて來たらしいね。

英次　千代子に何か用があるのですか。

信一　いや一寸歸つて來たかと思つたのだ。

英次　もうぢき歸つてくるでせう。九時頃に一寸用があるやうに云つてゐましたからね。

信一　さうか。もうぢき十時になるよ。

英次　何處へ行つたのですかね。もうぢき歸つてくるでせう。

信一　本當に千代子さんは生きてゐるのだね。

英次　お兄さんは疑ひ深いのですね。

信一　お前の表情の內に、俺の腑におちないものがあるからね。お前は正直もので、いつもお前の表情と、言葉とは一致してゐたが、今日のお前の表情は四分五裂してゐる。

英次　お兄さんに對する私の感情がどんなものか知らないからです。僕はお兄さんを憎んでゐる。そのくせ愛してゐる。輕蔑し切つてゐる。そのくせ尊敬し切つてゐる。正直に云つて僕はお兄さんの顏を見たくないのです。そのくせお兄さんのことが氣になるのです。お兄さんがこゝにゐることを僕は嫌つてゐる。だがお兄さんがこゝから出てゆけば、千代子と何處かで逢ひさうな氣がしてお兄さんをいつまでもひきつけておきたいのです。僕の表情が一つでないのは當然です。私の留守にお兄さんはいそいで歸つていらつしやつたのですから。

信一　お前が留守だと云ふことは俺は知らなかつた。

英次　本當ですか。

信一　それは本當だよ。

英次　でも僕の留守にこゝに上つて行つたことは事實でせう。僕の留守を知つてこゝに上り込んで、僕の歸つてくるのを恐れていらつしたことはないとは云へないでせう。私はこんな空想をすると、身を八つざきにされるやうですよ。男と女、夫婦、他の人の立ち入ることを絕對に嫌ふ氣持、お兄さんはさう云ふ氣持はおわかりにならないでせう。泥棒猫のやうにしのびこんで、あとで口をふさいでおけばいゝと云ふ流儀は僕は嫌ひなのです。ましてそれが血がつゞいてゐる人だとね。なほ我慢が出來ないものです。僕は嫉妬はいゝものだとは思つてゐませんがね。肉親のそれも不具の弟に嫉妬をさせるのは罪が淺いとは云へませんね。ね、お兄さんはさうお思ひになりませんか。僕は一度思ひ切つていろ／＼のことをお兄さんに云つて見たかつたのですよ。ですけどはつ切り證據をつかんだと云ふわけでもなかつたのですし、そんなことを疑ふのは男として恥づべきことゝ思ひましたから、辛抱出來るだけ辛抱したのです。お兄さん、この僕の氣持を、十二分に味はつて下さい。

信一　……………。

英次　お兄さん。お兄さんは僕を人殺しと云ひましたね。

信一　そんなことは云はない。

英次　さつきさうおつしやいました！

信一　人殺しはよくないと云つただけだ。

英次　それなら姦通はいゝのですか。姦通は。

信一　よしてくれ。そんな風をして强迫するのは。

英次　私が精神上にうけた苦痛にくらべれば、お兄さんの罰は重いとは云へませんよ。

信一　なんとでも云ふがいゝ。お前がさう云ふ態度で出るなら、俺も正直に云ふよ。俺はお前に同情して千代子さんをお前にやつたのだ。それが俺の一番のしくじりだつたのだ。自分の愛してゐる女を、愛してゐない男に世話

した。それが僕の一番の罪だつた。その他の罪はその結果にすぎない。お前はそれを知つてゐたはづだ。それでもお前は結婚したがつたのだ。それがお前の罪であり、罰であつたのだ。一人の男は二人の女を愛することはよくない。そのために愛しない男に世話した。二人の女を愛する方が罪が重いか。愛しない男に女を世話する罪が重いか、お前にはわかるかね。俺は道樂者かも知れない。しかし自分を愛しない女を自分のわきにカン禁したことはない、それこそ一番、男らしくないことだと思つてゐるよ。

英次　あはゝゝゝ。理窟はどうでもつくものですね。しかし僕は、妻は僕を嫌ひながら矢張り僕を愛してゐてくれたと思つてゐますよ。お兄さんがいくら何とおつしやつたつてね。千代子は矢張り僕のものです。お兄さんのものではありません。

信一　千代子さんを殺さない限りそんなことは出來ない。

英次　それなら千代子を殺す許りです。

信一　千代子を殺す？　そんな馬鹿があるか。千代子を殺したらお前だつて生きてはゐられないぞ。

英次　餘計なお世話です。僕は生きてゆきますよ。僕には大事な仕事がありますからね。

信一　人殺しと云ふ名は、どの位ゐ恐ろしい名か知つてゐるか。その名が一生お前についてはなれないぞ。どんな時でも、一人ゐる所では殺された者が生きて來て、その人の目に姿を見せるだらう。そして全世界はその人に向つて叫びかけるだらう。人殺し、人殺し、人殺しつてね。(強迫するやうに)人殺し、人殺し、人殺し、人殺し、人殺しつてね。人間の生命、それも若くつて、生きたがつてゐる生命を無理にたち切つたものは、一生呪はれるにちがひない。人殺し、人殺し、人殺しつてね。

英次　いくら呪はれたつてかまひません。僕は千代子をあなたにはわたしません。

信一　(靜かに)お前は人殺しだね。お前は千代子をやつつけてしまつたのだらう。

英次　そんなことはありません。

信一　それなら、そのカバンをあけてくれ。開けることは出來まい。

英次　そんなおどしにはのらない。

信一　それなら訴へてもいゝか。

英次　千代子が生きてゐたらどうしますかね。

信一　そしたら、俺はお前になんでもやるよ。

英次　いのちもですか。

信一　千代子さんがそれでなければ生きてゆけないと云ふなら生命でもやるよ。

英次　そんなに千代子をお兄さんは愛してゐるのですか。
信一　俺はどうしてか、あいつが可哀さうで仕方がないのだ。今死なしてはあんまり可哀さうだ。
英次　でも死んでしまへば同じですよ。
信一　英次、許してくれ、たのむ、あいつは生かしてやつてくれ。俺はあいつに死なれては本當に困るのだ。
英次　大丈夫です。殺すやうなことはしませんから。
信一　ありがたう。それをきいて安心したよ、それなら又あとでくるよ。
英次　千代子にもしお逢ひでしたら、私はもう怒つてはゐないとさうおつしやつて下さい。そしてすぐ歸るやうにさうおつしやつて下さい。
信一　承知したよ。本當にお前に何と禮を云つていゝかわからない。之で俺も安心して旅興行にも出られる。
英次　いつ行くのですか。
信一　明後日どうしてもゆかなければならない。
（信一退場、英次送つてゆく。英次登場。）
英次　あゝ、つかれてしまつた。もう何も考へる力もない。
（ぶつ倒れるやうにねる。）

二

惡夢の場、うすぐらい塔の一室、英次塔のなかに迷ひ込んでくる。
英次　（あたりを注意しながら）こゝまで逃げれば安心だ。（奥へ入らうとする。扉自づとしまる。英次おどろいてたちどまる。扉に大きく「人殺し！」と云ふ字があらはれる。同時に室の壁に「人殺し」と云ふ字が、あつちこつちにあらはれて消える。まもなく全部消える）俺はたうとう人殺しになつてしまつた。俺の歴史には人殺しの焼印がよくおされてしまつて、いくらどうしても消すことが出來ないのだ。あつ、俺の手に血がついてゐる。血がつくわけはないのに。あゝ水があつた。（大急ぎで洗ふ）消えない、消えない、益々はつきりしてくる。神樣、神樣、お許し下さい。お許し下さい。この手の血を消して下さい。（あわてゝ洗つて明りの所へもつていつて見る。ますます手が赤くなる。氣がくるふやうに手をあらう。始め片手だつたのだが、兩手までが赤くなる）許して下さい、許して下さい。あゝ、どうしたらいゝだらう。（又人殺し！の字があらはれたり消えたりする。手はます／＼赤くなる。ます／＼あわてる。人殺し！人殺し！人殺し！の聲が聞えてくる。逃げやうとするが、四方の扉がかたくとざして逃げ道がない。驅けづりまわる）助けて、助けて！（この時一人の女うづくまつたまゝの姿をあらはす。英次氣がつき、不氣味に思ひ注視す

る。女泣いてゐる。英次そばにより同情して）

英次　何を泣いてゐるのです。何か悲しいことがあるのですか。

（女默つて泣いてゐる。英次肩に手をかけて慰め。）

英次　どうしたのです。どうしたのです。

（女、顏をあげる、目も鼻もない。）

英次　あつ。（あとずさりする）

女　人殺し、あはゝゝゝ人殺し、あはゝゝゝ。

英次　助けて、助けて！（逃げ廻る）

（不意に扉あく、英次其處からのがれやうとする。千代子眞靑な顏して其處に立つてゐる。）

英次　（その前に跪づき）許して下さい。許して下さい。

千代子　英次さん。私は最後に、私は矢張りあなたを愛してゐると云ひたかつたのよ。それなのにあなたは私の喉をしめて私に何も云はさなかつたのね。私が云ひたくつて云ひたくつて仕方がなかつたことをね。

英次　許して下さい。許して下さい。

千代子　だつていくら私が許してゐると云ひたくつたつて、あなたは私をしめて私に一ことも云はしては下さらなかつたのね。

英次　許して下さい。許して下さい。

千代子　さあ許してあげるわ。だから私についていらつしやい。（手を出す）

英次　いやです。いやです。僕は死にたくはないのです。

千代子　英次さん。私だつて死にたくはなかつたのよ。さあ一緒にいらつしやい。

女　人殺し、人殺し、あはゝゝゝ。

英次　あゝ。（倒れやうとする）

（千代子、英次を引ぱりこまうとする、英次のがれやうとする。その爭ひの最中菊の花と紅葉が散つてくる。千代子少しうれしさうな顏になる。）

小野寺の聲　野中君しつかり／＼！　野中君野中君しつかり！　しつかり！

（英次、千代子の手からやつとのがれる。）

三

英次の室、英次倒れたまゝ。信一と小野寺登場。

信一　あつ。

小野寺　どうしたのです。

信一　（英次のそばにかけよる）英次！　英次！

小野寺　どうしたのです。

信一　大丈夫です。生きてゐます。

（英次、うなされる。）

信一　英次！　いや、英次はこのまゝにして今の内にカバ

ンをしらべて見ませう。千代子さんは僕の處へも、あなたの處にも來なかつたとすると、どうも僕の恐れてゐたことが起つたとしか思へません。

小野寺　そんなことはないでせう。

信一　千代子さんは何かことがあつたらあなたの所へゆくはづです。それがあなたの所へゆかない所を見ると、そして弟のさつきの表情とてりあはすと、百が百まで僕の想像はあたつてゐます。

小野寺　それでもあなたをおどかすやうなことを云つてゐました。

信一　それは千代子さんから聞きました。しかしあれがもしおどしだつたら、弟は役者として天才以上です。僕なんか足もとにも及びません。人間に、あんな狂言が出來るとは思へません。カバンをあければ、十が十まで私の想像があたつてゐます。思ひ切つてあけて見ませう。

小野寺　あけて見て何か他のものでも入つてゐたら。

信一　そしたら私はどんなによろこぶでせう。なんでもおごりますよ。僕は死んでもいゝから、あいつは生かしておきたかつたのです。しかし恐らく生きてはゐません。

（カバンをあけやうとする。あからない。中を注意して判斷しやうと思つてあけて見やうとする。）

信一　何處かにカギはありませんかね。

小野寺　英次君が持つてゐるのでせう。

信一　さがしてくれませんか。

小野寺　どうも氣になります。

信一　しかしもしこのなかに死骸が入つてゐたら、このままでおくわけにはゆきません。どうにかしなければ、英次一人ではかつぎ出すことも出來ません。僕は英次の一生を人殺しとして葬りたくはありません。

小野寺　どうも氣がひけますがさがして見ませう。死骸が出てもあなたは英次君を憎みませんか。

信一　それは憎みます。復讐がしたくなるかも知れません。ですが、僕は死んでしまつたものにとつては復讐は何にもならないことを知つてゐます。それにエゴイストの話ですが、僕の名譽も重んじます。復讐する勇氣はありません。もしものことがあれば弟だけでも助けてやります。

小野寺　それを聞いて安心しました。

信一　あなたも矢張り、僕と同じ考へですか。このなかに死骸が入つてゐるとあなたも思ひますか。

小野寺　十が八までは思ひます。

信一　十が八までゝすか、まだ望みがあると思つてゐるのですか。

小野寺　えゝ、僕はまだ望みをおいて居ます。今にも千代子さんが歸つてくる。

信一　千代子さんが歸つてくる。僕はもうそんな望みはすてゝゐます。
小野寺　ありました。カギはありませんか。
信一　右の手にちやんと持つてゐます。
小野寺　持つたまゝ倒れてゐるのですか。いよ〳〵望みはありませんね。
（英次うなされる。）
小野寺　あの聲をきくと望みがありませんね。
信一　いよ〳〵恐れてゐたことが來たのですね。
小野寺　（カギを持ち）あなたがあけますか。
信一　僕にはあける勇氣はありません。どうかあけて下さい。
小野寺　僕だつてそんな勇氣はありません。
信一　どうか、そんなことを云はないで。
小野寺　ともかくあけずにすませると云ふわけにもゆきませんから、あけて笑ひ話ですめばよろしいが。
信一　そんな希望のあることは云はないで下さい。
小野寺　（カギをあける）ふたをあけますよ。
信一　まつて下さい。私はとり亂したくありませんから。
（目をつむり祈る）どうか。
小野寺　（あけて）あつ！
信一　矢張り、矢張り、本當でしたね。あゝゝゝこんな、こんな目を見やうとは。（泣き出す）不幸な奴だ。本當に本當に不幸な奴です。弟も馬鹿すぎます。だが之も皆、僕がわるかつたのです。僕はどうしていゝかわかりません。（泣く）仕方がありません。すんだことです。とり返しのつかないことが出來たものです。生きかへる見込はないでせうね。
小野寺　（目をしらべたり、他をしらべたりしてゐたが）ありません。もうお死にゝなつてから十時間以上たつてゐるでせう。
信一　馬鹿です。馬鹿です。まさかこんな馬鹿なことはしまいと思つてゐました。ですがやむを得ません。私達は生きてゆかなければなりませんから。（死骸に禮拜する。死骸の前に兩手をついてお辭儀する）許してくれ。千代子さん。あなたをこんな目にあはした、不甲斐ない私を。
（泣く）
小野寺　それならふたをしますよ。
信一　どうか。
小野寺　どうしませうかね。
信一　之は僕がもらつてゆきます。
小野寺　大丈夫ですか。
信一　大丈夫です。僕にはいろ〳〵の仲間がゐます。英次のことはあなたにお任せします。自動車をよんで來ますから。

（退場。）

小野寺　あゝ。こんなことが前世に起つたことがありさうだ。今の時代の話ではなさゝうだ。千代子さん。千代子さん。皆を皆を、許してやつて下さい。そしてどうすることも出來なかつた私達を許して下さい。

（英次うなされる。）

小野寺　英次君！　英次君。

（額にさはつて見、おどろいて蒲團を出して來て、きせ、水をくんで來て頭をひやす。信一、菊の花と紅葉したもみぢの枝をもつて登場、默つてカバンを開け、花と葉でうづめ、默禱し、カバンのふたをし、かぎをかけ。）

信一　さあ、やつて來て手つだつてくれ玉へ。

（男二人登場。）

信一　このカバンだ。

（男默つてカバンを運んで退場。）

信一　熱がありますか。

小野寺　隨分高いやうです。

信一　それなら僕の友人に信用の出來る醫者がゐますから電話をかけませう。何んでもうちあけて安心な男です。弟は大馬鹿者ですが、生かしてやりたく思ひます。よろしく願ひます。

小野寺　出來るだけはやります。（看病しながら）

信一　それを伺つて安心しました。それでは失禮します。

（二人丁寧にあいさつする。信一退場。英次うなされる。）

小野寺　しつかり、しつかり、氣をたしかに。

英次　（やつと半ば目をさまし）あゝ小野寺、來てくれたのか。（カバンのなくなつたのに氣がつき）カバンは、カバンはどうした。

小野寺　君の兄さんがあとしまつをつけてくれることになつて持つていつた。死骸のことは安心するがいゝ。

英次　君はみんな知つたのか。

（小野寺、合點して見せる。）

英次　それで君は僕をすてないのか。

小野寺　ます／＼捨てない。

（二人顏を見あはせる。）

英次　ありがたう。

（英次泣き出す。）

――幕――

或る畫室の主

『愛慾後日譚』

人物

野中英次
東
小野寺
下島
山田

一

英次の大きな畫室。英次花をかいてゐる、東、窓から庭を見てかいてゐる。

東　先生。

英次　なんだ。

東　先生。僕にはどうしても松葉の色が出ないのですがね。

英次　それは自分で工風するがいゝ。君の日にどう見えるかね。日かげの松葉と、日のあたる松葉、若い木の松葉の色と、古木の松葉の色、そのお互の關係の面白さ。それを他人に教はつたつてだめだよ。自分で滿足するまで追求しなければ。

東　庭の松を見てゐると實に美しく思ふのです。かくと少しも美しくないのです。

英次　それはまだ苦心がたりないのだよ。僕だつてまだだめだ。每日少しづつ會得してゆくだけだよ。

東　先生は私達と同じ繪具をつかつてゐらつしやるのに實に自由自在の色を出されるのにおどろきます。

英次　齡の効だよ。僕なんか君の齡位ゐには君の半分も自由にかけなかつた。この頃の若い人の進歩の早いのにおどろく。

東　この色はどうしたら出るのでせう。どうもさえてこないのです。

英次　色と色との關係がよくないのだよ。かうすれば少しはいゝ色になる。

東　本當ですね。

英次　色と云ふものはお互に助けあつて美しくなるものだよ。人間と同じことだよ。どつちの色を殺しても駄目だよ。どの色もいきなければ。

東　しかしそれが中々、さううまくはゆきませんね。

英次　あたりまいだよ。なんだつて修業がゐるよ。のらくらしてうまくならうと思つたつて駄目さ。

東　本當ですね。僕は先生の勉强家なのにおどろきます。
英次　僕には他のたのしみはないからね。
東　本當に先生は羨やましいと田島ともよく話します。
英次　羨やましい人間なんてあるものぢやない。
東　だつて誰だつて先生の畫をほめない人はありません。
英次　僕はどんなに悪口を云はれてもセムシでなかつたことをのぞむね。かう云つたら君は一言もあるまい。だがセムシでなかつたら僕はこんな畫はかけなかつたらう。ロートレークのやうにね。
東　先生は少しもひねくれてはゐらつしやらない。
英次　あたりまいさ。自然の美しさは僕にひねくれることを許さないのだ。だが僕はやゝもするとひねくれるのを恐れてゐる。
東　先生は隨分禪をおやりになつたのですつてね。
英次　なに、なまかぢりだよ。だが白隱なんかの傳はよむといゝ。少なくも勉强家になる勇猛心を起してくれる。
東　それでは私もよんで見ませう。
英次　よんで見たまい。僕の處に本があるはづだ。
東　白隱は勉强家だつたのですか。
英次　日本人には珍らしい勉强家だね、その修業に熱心なことゝ、こまかいことにはおどろくべき所があるよ。僕も時々よんで見て勇氣を得る。少しでも敎はりたいことがあれば千里を遠しとしない。又得たものを實際に生かすことが出來ない間は少しも滿足しない。すつかり自分を自分の理想的人物にきづき上げなければおさまらない所がある。
東　さうですかね。
英次　俺たちも之からだよ。
東　さうですね。僕も一生懸命になつてやりますよ。
英次　自分を信じて進んでゆかなければいけない。敎はるものは遠慮なく敎はるがいゝが、自分の心と頭と目だけは自分のものにしておかなければいけない。
東　さうですね。若いとつい、他の人の議論に動かされます。
英次　足さへ地面からはなれなければ、たまにうかれるのもいゝがね。
東　先生は會心の作が出來た時はうれしくありませんか。
英次　うれしくないこともない。だがすぐさびしくなるよ。俺の力は之だけなのかと思ふとね。そのかはり少しづゝは進歩してくれるが。
東　さうですかね。先生のやうに畫がかけても淋しいのですかね。
英次　あたりまいさ。道は遠いよ。上には上がある。いつだつてもう一歩と思はない時はないね。それだからこそ、

つぎつぎと仕事がしたくなるのだ。今度こそは、今度こそはと思つてね。だが實力だけの仕事切り出來ない。しかし少しは進歩してくれるがね。しかし面白味は其處にある。十年前には、こんな畫たつてかけるとは自分では思つてゐなかつたからね。

東　先生は隨分死にもの狂ひの時がおありになつたのですつてね。

英次　誰がさう云つてゐた。

東　何かの評にかいてありました。

英次　批評なんてあてになるものぢやない。だが俺のやうな人間は畫をかくより取り柄のない人間だからね。之で身體さへよかつたら他の仕事をしたかも知れないが。

東　先生が畫に熱中されたことは私達のよろこびです。

英次　今時のやうなさわがしい時代に畫をかくのには餘程しつかりした覺悟が必要だ。俺のやうにやぶれかぶれの人間は別だがね。しかし今時でもおちついてよろこんで立派な畫をかく人間がゐたら、俺は尊敬するがね。

東　畫をかいてゐる時だけ僕は時間を忘れます。

英次　君は畫かきだよ。君は今に僕達にまけない畫かきになるだらうよ。

東　もしさうなれたら、全部先生のおかげです。僕は先生にお逢ひしなかつたら今時分漁師になつてゐたでせう。そして力のない漁師として輕蔑されて一生をおはつたでせう。先生が、私の濱でのいたづらがきをしてゐるのを認めて下さつた時、私は本當に泣きました。

英次　僕もうれしかつたよ。始めあの畫を見た時、本當の畫かきがかいたのだと思つた。そしたら、かいたのが君だと云ふことがわかつた時、僕はおどろいた。そして君がよろこんで畫かきになると云つた時、僕はうれしかつた。本當の掘り出しものをしたと思つたよ。

東　先生の御期待には背かないつもりです。進歩のおそいのがはがゆい氣がします。

（呼鈴がなる。）

英次　誰か來たやうだね。

東　えゝ。（退場）

（東まもなく登場。）

東　下島さんがお見えになりました。

英次　お通しゝたらいゝだらう。

東　はい。（退場）

（東、下島直子、登場。）

下島　先生、お仕事の御邪魔ではありませんか。

英次　いや大丈夫。仕事は今のり氣ぢやなかつたので、東といろ〳〵話してゐた所です。畫が出來たのですか。

下島　はい。あんまり下手なので、先生にお目にかけるの

は氣まりがわるいのですけど。

英次　そんな遠慮はいりませんよ。

下島　それでは見て戴きませう。

（畫を出して見せる。英次見る。）

英次　どうもまだものになつてゐるとは云へませんね。

下島　きつと先生はさうおつしやると思つてゐたのですよ。

英次　リンゴはこんなに平べつたくはないはづです。

下島　そしてリンゴはこんなくさつた色はしてゐないとおつしやるのでせう。

英次　まあさうです。

下島　どうしたらかけるのか。私にはどうしてもうまくゆかないのです。

英次　さうたやすくはゆきませんよ。

下島　先生の靜物の畫を拜借出來ませんか知らん。

英次　それはいくらでも貸しますがね。あんまり參考にもなりませんよ。やつぱり本物のリンゴを見てかいたらいいでせう。しかしとにかく畫をお貸しするだけはしてもよろしい。しかしあなたは一生畫かきでやつてゆくつもりぢやないのでせう。

下島　私よかつたら一生やりたいと思つてゐるのです。だめでせうか。

英次　結婚すればそれまでゝすよ。

下島　私、結婚なんかしないつもりです。

英次　なぜです。

下島　だつて私は一生畫がかきたいのですから。

英次　僕はあなたになるべく結婚することをすゝめますよ。

下島　それだつて、私、結婚したいとは思ひません。

英次　無理に結婚しなければいけないわけでもありませんが、したい人が出來たらする方がよろしい。

下島　それはその時ですわ。

英次　畫でやつてゆくのは大變ですからね。

下島　それは私だつて知つてゐますわ。

英次　東、今何時だね。

東　いま三時です。

英次　さうか。それぢや僕は一寸失禮して小野寺の處へ出かけてくる。約束になつてゐるから。

下島　それでは私、失禮いたします。どうか先生、私を見すてないで下さい。私は先生許りをおたよりにしてゐるのですから。

英次　僕より他にいゝ人があると思ひますがね。

下島　先生は私に愛想をつかしてゐらつしやるのですね。

英次　さう云ふわけではないのです。しかし僕よりもつ

と親切に手びきしてくれる人があると思ふのです。僕は正直に云つて、女の方の相手は不適當なのです。

下島　先生のアトリエは女人禁制と云ふ噂がありますが、本當なのですか。

英次　さう云ふわけではないのです。だが僕は女の人が畫かきになるのに反對ではないのですが、女の人は女らしい畫をかく方がいゝと思ふのです。それには僕は不適當な人間ですからね。

下島　それでも私は先生の畫が一番好きなのですから仕方がありません。

（呼鈴がなる。東退場。）

英次　しかし僕のやうな畫を女の人がかいたら滑稽ぢやありませんか。

下島　それでも私の畫を見て下さつたつていゝでせう。

英次　正直に云つて、僕が見たつて何にもならないと思ふのです。

（東登場。）

東　（少し笑ひながら）先生小野寺さんがいらつしやいました

英次　へんな奴だな、俺がゆくことになつてゐるのに。

（東、下島、一寸笑ふ。小野寺登場。）

英次　よく來た。今僕の方から出かけようかと思つてゐたのだ。

小野寺　さうか。

英次　之は下島さんと云ふ畫をかく方だ。之は小野寺君です。

小野寺　始めて。

下島　始めまして。

小野寺　新しい畫が出來たね。

英次　あゝ、少しづゝはものになつて來たらう。

小野寺　本當に美しいね。

英次　まあ、僕もやつと物になりかけて來た。之も君のおかげだ。まただめだがね。東、紅茶でも入れて來ないか。

下島　先生、それでは失禮します。

英次　まあ、紅茶でものんでいらつしやい。

下島　ありがたうございます。

英次　下島さん、一つあなたの畫でも小野寺君に見せたらどうです。

下島　いゝえ。お目にかけられるものでは。

小野寺　いゝでせう。見せて下さい。

下島　もう先生に散々惡口を云はれたので。

英次　小野寺はほめないとも限りませんよ。

下島　それではお笑ひ草に見ていたゞきますか。

小野寺　是非拜見さして下さい。

（下島、畫を見せる。）

英次　隨分下手な畫だが、女としてはました方だらう。

小野寺　さうだね。

英次　色だつて惡くない。

下島　先生、どうか冷やかさないで下さい。

英次　まあ素人としてはましだらう。

小野寺　中々感じが出てゐて、綺麗だ。

英次　リンゴの平べつたい處なんか、面白いね。

下島　いやな先生。

英次　まあさうとでも云つて、ほめておくより仕方がありませんからね。しかし正直な處、前よりはうまくなりましたよ。

下島　本當ですか。よろこぶと、あとで、おひやかしになるのではないのですか。

英次　ともかくまだ畫にはなつてゐませんがね。玩具位ゐにはなつてゐますよ。

下島　先生は隨分ひどいことをおつしやるのね。その内に先生に感心して戴くやうな畫をかきますわ。

英次　そんなことはよして下さい。太陽が西からのぼると困りますからね。

（皆笑ふ。）

下島　よろしいわ。（畫をしまう）

（東、登場。紅茶をもつてくる。）

英次　どうも御苦勞さん。

下島　どうもありがたう。

英次　小野寺君。僕は最近個人展覽會をやらうかと思つてゐるのだよ。

小野寺　それは是非やるといゝね。

英次　君に發起人になつてもらひたいのだ。

小野寺　元よりよろこんでなるよ。

英次　山田にもなつてもらはうと思ふのだ。

小野寺　それはよろこんでなるだらう。

英次　僕も十年、苦勞したから、もうそろ〳〵世間に自分の存在をはつきりさせてもいゝと思ふのだよ。

小野寺　それは勿論いゝね。

英次　苦しい十年だつた。

小野寺　わきで見てもくるしさうだつた。

英次　精神一到何事かならざると云ふのは嘘ぢやないね。

下島　それでは先生、失禮いたします。

英次　さうですか。それでは又畫が出來たら持つていらつしやい。

下島　ありがたう。それでは皆さん失禮いたします。

小野寺　さよなら。

（下島退場、東おくつて退場、外から笑ひ聲聞える。）

小野寺　あの人、中々書がうまいね。
英次　大したことはないが、女としてはました方かも知れないね。ともかく熱心だからね。
小野寺　こないだ山田にあつたら君の書を随分ほめてゐた。
英次　こないだ來て二枚買つてくれたよ。
小野寺　見せてもらつた。
英次　僕の書も賣れるやうになつたから不思議だ。人殺しの書がね。知つてゐる人は少ないだらうがね。
小野寺　君はまだそんなことにこだわつてゐるのか。
英次　こだわらないわけにはゆかないよ。
小野寺　もうすぎたことだ。
英次　とり返しがつくことなら僕はとつくにとり返しをつけてゐる。
小野寺　君はそのことでは苦しみすぎた。
英次　千代子は生きかへつては來ない。
小野寺　死んだ人間は君の云ふ通り生きかへらない方がいいだらう。千代子さんはもうとつくに生れない前にかへつてゐる。
英次　だが夢のなかでは生きてゐるよ。僕は人間が死んでしまうとすつかりこの世から緣がなくなるものとは思へない時がある。僕は千代子の墓へお參りをしてあやまつたつて始まらないことは知つてゐるが、どうしてもゆかないと氣がおさまらない。へんだね。
小野寺　千代子さんがもし君のことをまだ思つてゐるなら、もうとつくに君のことは許してゐるよ。
英次　それはさうかも知れない。しかし殺されると云ふことはどうしたつていゝことゝは云へない。僕は閉口だ。
小野寺　それは誰だつて生きてゐるものは閉口さ。平氣で死んでゆくやうに出來てゐたら困るからね。
英次　誰が困るのだよ。
小野寺　そしたら人類はとつくに亡びてしまう。
英次　人類が亡びて誰がよわるのだ。
小野寺　君はよわらないかい。
英次　死ぬのが平氣につくられてゐたら、人類が亡びるのも平氣だと思ふね。第一僕達は生れなくつてよかつたらう。生れなかつたら困りやうもないからね。
小野寺　それなら人間は平氣で死んでゆけるやうにつくられてゐればいゝのかね。
英次　時々はその方がいゝと思ふね。しかしいくらいゝと思つたつて、死ぬのがこわいと云ふ事實はなくならないがね。この事實も面白い處がある。だが要するに死ぬのがこわいとか、苦痛が耐らないとか、恐怖はいやなものだとか、云ふ處に人間らしい處がある。それがなくなつ

たら人間は幽靈のやうなものだね。僕は肉體をもつて生きてゆくことには不服はない。そして僕は美しい肉體を讃美する。ガマだつて美しい人間を讃美してわるいわけはないからね。

小野寺　君の精神はすつかり健全になつてゐるね。僕達はそれに感心してゐる。

英次　修業でやつと健全をたもつてゐるだけだよ。まだあやしいものさ。

小野寺　君のやうな心がけと、生活をしてゐれば、何も恐ろしいことはないと思ふね。

英次　中々どうして、さうはゆかない。一たい藝術家と云ふものは仕事の性質上なが生きのしたいものだ。少しでも完成した仕事をしてゆきたいと思つてゐるからね。從つて死にたくない氣の強いものだ。そして死にたくないものは、何にも恐ろしくないとは云へないで、何にも恐ろしい。恐ろしいから用心すると云ふ方が本當だよ。

小野寺　だが君の生活には、名僧のやうな處があると山田が云つてゐたよ。

英次　それは大した買ひかぶりだね。僕はさうなりたいと思つてゐるが、どうして中々だよ。

小野寺　だが君はすべてをすてゝかゝつてゐる。快樂も、金も、不平も。

英次　快樂は向ふで逃げていつたのだよ。僕はそれに未練をもつのを恥ぢるだけだ。金はこの頃たまつてゐても入つてくるが、快樂に逃げられた僕には金は役にたゝない、もつと役に立つ人が持つてゆくのが至當だと思ふね。

小野寺　それが中々出來ないことだよ。それに君は惡評されても、不當に輕蔑されても少しも腹を立てないね。そして不安も感じない。

英次　あたりまいさ。僕は死刑になつても苦情の云へない人間だよ。惡評や輕蔑位ゐですめば、ありがたいことだ。それに僕はへんに自信があるから、最後の勝利を信じてゐるから、不安なんか感じない。自分に見へてゐる世界が、かけないのをはがゆく思ふだけだ。喰ひ込みたりないだけが問題だよ。僕はすてるものをすてゝかゝつてゐる。それだけが僕の強味かも知れない。だが笑つてくれるな。僕は女だけが怖いのだ。他のものは卒業出來たが、女だけはいけない。少し綺麗な女を見ると、自分が首をしめやしないかと云ふ強迫をうけるのだよ。君にはこの氣持がわかるまいね。一寸しめて見たくなるやうな強迫觀念におそはれるのだ。だから僕は女だけを恐れてゐる。夢中に締めたりしたら大へんだからね。

小野寺　それは強迫觀念だけにすぎないね。

英次　それは僕も知つてゐる。高い所にのぼると、ついと

びおりたくなつたり、死ぬのがあんまり怖いとつい自殺したり、毒藥だときくとついのみたくなつたり、蛙が蛇ににらまれると蛇の方へ歩いていつたり、まあそんなたぐひだね。早くそんなことに超越したいと思ふが、まだ超越出來ない。

小野寺　しかしそんなことはなんでもないと思ふね。誰にでもあることだよ。

英次　だが程度がちがうだらう。實行しないにきまつてゐる人間と、實行しかねない人間と。

（東、戸をたゝく。）

英次　はい。

（東、登場。）

東　郵便が參りました。（わたして退場）

英次　（それを見）又畫の注文が來た。あいつがゐたらよろこんだらう。一人ですきなものを買はしてやつたらよろこんだらうと思ふと。つい涙が出てくるよ。小野寺、一寸そのまゝでゐてくれ。僕に君の顏をスケッチさしてくれ。生命の恩人のね。

（スケッチブックをとりあげる。）

――幕――

二

同じ場、英次花の畫をかいてゐる。呼鈴がなる。英次一寸氣にしたが、畫をかきつゞけてゐる。又暫くして呼鈴がなる。

英次　（畫をかきながら）うるさい奴だな。留守だと思つて歸ればいゝのに。馬鹿な奴だな。

（戸をたゝく音がする。）

英次　はい。

（下島登場。）

英次　默つて入つて來たのですか。

下島　だつていくら呼鈴をおしても、聲をおかけしても誰も出ていらつしやらないのですもの。

英次　皆留守なのですよ。

下島　あなたも。

英次　（眞面目で、少し怒つたやうに）あたりまいです。呼鈴ならして誰も出て來なければ留守にきまつてゐます。

下島　それはどうも失禮。

英次　本當に仕方がない人です。

下島　それでは私、おいとまいたします。

英次　いや、歸らなくつてもよろしい。（畫をかくのをやめる）

下島　どうか、かいてゐて下さい。私先生のかいてゐらつしやる所が拜見したいのですから。

英次　それでは失禮して、もう少しかゝしてもらひます。

（英次かく、下島、感心して見てゐる。英次、急にやめる。）

英次　あなたに見てゐられちや矢張りかけない。

下島　どうしてゞす。

英次　僕の畫は女の臭ひが嫌ひなのです。（沈默）

下島　（よわって）どうもすみません。

英次　いや、今のは冗談です。

下島　いやな御冗談ね。

英次　噓でもないのです。

下島　東さんは御留守なのですか。

英次　東は寫生にゆきました。東に御用がおありなら、あの裏の橋の處にゐます。

下島　（急にうちけし）いゝえ、東さんに用はないのです。

英次　僕に用があるのですか。

下島　えゝ。又畫を見ていたゞきたいのです。

英次　よくかくのですね。あなたは。

下島　先生はなほよくおかきになりますわ。

英次　あたりまいです。僕は他に用はないのです。

下島　私だつて他に用はありませんわ

英次　なまけものですね。

下島　畫をかくのはなまけものなの。

英次　料理の手つだひはしないのですか。

下島　先生は女を輕蔑してゐらつしやるのね。

英次　輕蔑しないわけにはゆきませんからね。

下島　どうして。

英次　それでも女にいゝ畫かきがゐますか。

下島　さうおつしやればさうですが。

英次　モリソやローランサンではね。だが可愛いゝ處はあるにはありますがね。

下島　可愛いゝ畫もたまにはあつてもいゝでせう。

英次　家庭の仕事をしたあひまに、かくならね。

下島　先生は本當にひどい方ね。

英次　まあ、怒らずに見せて御らんなさい。

下島　どうせ、つまらないものですわ。

英次　見せないためにもつて來たのぢやないでせう。早くお見せなさい。

下島　さうして早くお歸りなさいでしよ。

英次　まあそんな所です。

下島　私が先生に畫を見てもらうと云ふと、皆おどろいてゐますわ。

英次　僕が怖くないのはあなた許りですか。

下島　皆、先生のお口のわるいのにおどろいてゐるのですよ。私はそのお口のわるい所を信用しておりますの。他

の方は女だと思ふと始めつから程度をさげて、中々よくかけてゐると云つて甘やかして下さるから、信用が出來ませんわ。

英次　僕なら出來ますか。

下島　それは出來ますわ。

英次　それは感心ですね。まあ、お見せなさい。

（下島、こわさうに見せる。）

英次　可愛いゝ貧弱な花をかきましたね。

下島　いつか先生が一本の枝でも本當にかければ大したものだとおつしやつたので、小さい花を二つだけでもいゝから、本當にかいて見たいと思ひましたの。

英次　之で本當にかけてゐるつもりなのですか。

下島　さうは思ひませんけど、力がありませんから。

英次　正直にかいてありますが、色も形も單調ですね。畫面があきまだらけで、貸地の廣告でも出したいやうですね。畫面を充實さすことが大事ですよ。それからこりすぎても面白くありませんね。あんまり臆病になるといぢけますからね、自然は少しもいぢけてはゐないものです。

下島　（少し泣き聲で）えゝ。よくわかりました。ありがたう。今度はもう少し上手にかいて參ります。

英次　力をおとすことはないのですよ。どうせあなたがものにならない人間なら、僕は惡口は云ひません。

下島　よくわかりました。

（戸をたゝく音。）

英次　はい。

（東登場。）

東　先生、唯今。（下島にあいさつする）

英次　畫が出來たか。

東　はい。

英次　見せないか。

東　どうもうまくゆかないのです。

英次　まあ、見せないか。

東　はい。

英次　矢張りしつかりかけてゐる。少し物質感の方が勝ちすぎてゐるね。

東　さうですか。僕は見てゐる内に物質の美しさにおどろいたので、なるべく物質感を出して見たく思つたのです。

英次　少しものがお互に孤立してゐる。

東　僕はその孤立した所に面白味を感じたのです。

英次　面白い處に面白味を感じたね。

東　（反抗的に、それをなるべくかくして）先生と僕の性質のちがひが少しはつきりして來たやうに思ふのです。先生は矢張り都會の方で、私は矢張り漁師の子だと云ふことがわかつて來たと思ふのです。

英次　さうか。それもいゝだらう。
東　僕は今迄先生に全部おいかぶされて動きがとれませんでしたが、やつと自分の道がわかつた氣がするのです。
英次　少し早やすぎはしないか。
東　先生、僕だつていつまでも子供ではありません。もう二十四になつたのです。まだ畫は隨分幼稚ですが、見える世界が少しづゝ先生から獨立して來たことを感じてゐるのです。
英次　それもいゝだらう。本當に自分に忠實になれゝばね。
東　僕もさう思つてゐるのです。
英次　もう君もそろ〳〵獨立してもいゝ時が來たのだから、僕に滿足出來ない所が出て來たのも當然かも知れない。
東　僕は先生に滿足しないわけではないのです。先生の畫を尊敬してゐることは少しもかはらないのです。ですけれど、烏のくせに鵜の眞似をするのは見ともないと云ふことに氣がついたゞけなのです。
英次　それはいづれ君の特色が出るよ。しかしわざと自然を無理に自分で見るには及ぶまい。特色は自づと出るのがいゝのだ。出さうとして出た特色には無理がある。
東　先生にはさう見えるかも知れませんが無理に特色を出した覺えはありません。
英次　それさへなければいゝのだ。本當に君には僕は望みをおいてゐるのだ。君は僕とちがつて身體もいゝし、いくらでも大作の出來るたちだから、正々堂々と正面からやつてもらへばいゝのだ。
東　僕は先生より野蠻だと云ふことを今迄恥ぢてゐたのです。この頃、野蠻も悪くないと思つて來たのです。
英次　それは悪くないさ。
東　怒濤のおしよせてくる荒磯のやうな感じも面白いと思つてゐるのです。
英次　それは面白いさ。
東　私もやつと自覺が出來て來たやうに思ふのです。その内には先生がよろこんで下さるやうな畫をかけると思つてゐます。
英次　反抗のための反抗は馬鹿氣てゐると云ふだけなのだよ。
東　僕は先生に反抗してゐるでせうか。
英次　君は一本立ちにならうとしすぎてゐる。
東　さうでせうか。僕は自分のお弟子根性がいやになつてゐるのです。
英次　君はもう僕がうるさくなつて來たのだ。
東　さうかも知れません。先生が私をおいかぶさつてゐるやうな感じが僕には息ぐるしくなつて來たのです。

英次　齡が齡だからさうなるのも無理がないだらう。君の信じる通りゆくがいゝだらう。

東　それより仕方がありませんからね。

英次　それはさうだらう。だが特色は無理に出さないがいい。

東　僕もその位ゐなことは、先生知つてゐます。

英次　それならいゝのだよ。

東　僕には昨日まで先生の御批評は絶對だつたかも知れませんが、今日から僕も先生のおつしやることでも腑に落ちないことは、腑におちないと云ふ方が本當だと思ふやうになつたのです。それでこそ先生は先生であり、僕も僕であると思ふのです。

英次　君の考は正しい。しかし正直に云つて君の畫はまだ、すつかり物になつてゐるとは云へない。

東　それなら私も正直に申します。先生の畫には僕はあきたらない所が出來て來たのです。

英次　鼻をあまり高くしないがいゝぞ。

東　先生もあんまり一人天下におなりにならない方がようございます。

英次　ふゝん。

東　先生は私を輕蔑なさるのですか。

英次　いや、僕は自分を笑つたのだよ。

東　なぜ御自分をお笑ひになつたのです。

英次　いや、俺も馬鹿だと思つたのだよ。

東　先生は私を輕蔑してゐらつしやるのですね。

英次　そんなことはないよ。それは一面輕蔑してゐるかも知れないが、他では大いに君を認めてゐるつもりだよ。あと二三年、君がハンブルでゐられたら、君は大物になると僕は思つてゐるのだ。

東　あと二三年ですか。

英次　さうだよ。僕のうちにもあと二三年は君に役に立つものがあると思つてゐる。自然をすなほに深く見ることが、最初だと思ふね。それからあと、自づと自分の味が出る。自分の味の出るのはおそい方がいゝ。

東　僕にはさう思はれません。

英次　もう、そんな話はよさう、下島さんの前で、そんな話はよさう。

東　（赤面して）僕もつい云ひすぎたかも知れません。

英次　何に、僕の方も云ひすぎたかも知れない。お互にあんまり利口ぢやない。下島さんおどろいたでせう。

下島　いゝえ、面白く伺つてゐました。

英次　面白くですか。

下島　それでもいろ〳〵參考になることをきかして戴けたので。

英次　あんまり參考にもなりませんよ。
下島　男の方のお話はキビ〳〵してゐて氣持がようございます。
英次　あんまり氣持のいゝ話でもありませんよ。男同志は殺風景なものですよ。
下島　だがそれでなければ矢張りいゝ仕事は出來ないのだと思ひますわ。
英次　下島さん、あなたを二人にかゝしてくれませんか。東、かいて見る氣はないか。
東　是非かゝして戴きたいものです。
下島　えゝ。それは先生にかいて戴けば、私も光榮ですわ。
英次　(腰掛椅子ないゝ處におき)　それならこゝへ腰かけて下さい。
下島　はい。今日からお始めになるの。
英次　えゝ。急に今、かきたくなつたのです。いゝでせう。
下島　それは私はかまひません。(腰かける)
英次　東、君の位置はどうだ。
東　こゝで結構です。
(二人かき始める。)

三

同じく、英次小野寺と話してゐる。

英次　男つてあさましいものと思ふね。僕は内心さとつた人間のつもりでゐた。もう何にが來ても平氣だと思つてゐた。僕は何にもかもすてゝしまつた人間。自分の仕事より他のことは全部思ひ切つた人間だと思つてゐたよ。處がこの頃は、あの東のやうな子供とムキになつて議論したり、又ムキになつて競爭したりする氣になるのだからね。女のゐる前でさ。恥かしいと思つても、すぐムキになる。神樣と云ふ奴は、男を餘程のろくつくつたと見へるね。僕はもう女のことはとつくに思ひ切つてゐるつもりなのだ。僕のやうな人間は女のことを少しでも考へる資格がない人間だと云ふことを自分ははつきり知つて來たつもりなのだ。人殺しで、セムシで、さばけない性質、仕事のことは死んでも忘れられない、悟つた人間のつもりでゐた。處がどうだ。下島がやつてくるやうになつてから、そして東が僕に反抗的な態度を見せて、下島さんの前に自分の存在をはつきりさせやうと努力してゐるのが見えてから、僕はそれに超越しなければ恥だと知りながら、超越出來ないのだ。そして東と同じレベルにたつて、云はなくつていゝことを云つたり、しなくつていゝ態度をしたり、そしてそれに氣がつくと、自分で淺間しいと思ふが、しかしどうすることも出來ないのだ。逢ひ見ての後の心にくらぶればと百人一首の歌がある

が、實際そんな處だね。
小野寺　君は結婚する氣はないのかね。
英次　まさか、そんな氣はないよ。
小野寺　下島さんは君に氣があるのぢやないのかね。
英次　そんなことはないにきまつてゐるよ。たゞ僕を聖者のやうに崇拜してゐるのだね。少なくとも僕を天才と信じて、僕の一言一句を信じ切つてゐる。男の弟子はどうかしたらふみにじつておひこしてやらうと云ふ處が見えて、小生意氣な感じがするのだが、其處へゆくと女の弟子は神妙で氣持のいゝものだ。どつちがいゝのかわからないがね。僕を油斷したら征服してやらうと思ふ者のゐてくれるのも惡いとは思はないが。
小野寺　東と云ふ男は少し生意氣になつたね。
英次　それも女のためさ。尤も男は少し生意氣な所もあるのも惡いとは云へないが、結果をあせりすぎるのは利口とは云へないね。
小野寺　東は何處へ行つてゐるのだ。此の頃よく留守だね。
英次　何とか口實をさがして、下島さんの處へ出かけるらしいのだ。下島さんは閉口してゐた。
小野寺　下島さんに氣があるのか。
英次　それは大ありさ。
小野寺　君はそれを寬大に見てゐるのかい。
英次　それより仕方がないぢやないか。まさか子供ぢやあるまいし、ゆくなとも云へないからね。
小野寺　それでも下島さんがいやがつてゐるのだらう。
英次　少なくも今の所ではね。だがあてにはならない。
小野寺　君は出かけないのか。
英次　僕は出かけないよ。相かはらず僕はこのアトリヱに籠城してゐるのさ。僕は勿論下島さんに氣があるわけではないつもりなのだよ。あんな無垢な處女に氣があつてはたまらない。しかし東と結婚するのを望んでゐるのかと云へば、それは勿論うそさ。僕はこの頃東の顏を見るのさへいやになつてゐる。自分で自分に愛想をつかしてゐる。個人展覽會までにはうんと仕事をしやうと思つてゐるのだが、下島さんの來ない時には何んだかおちつかないのだ。そして下島さんがくると我ながら恥かしい位い、快活になり、冗談が云つて見たくなる。厄介な奴さ。しかし之も一つの修業だと思つてゐる。あながち超絶しやうと許りは思つてゐない。何か、うんといゝものを生みだす起緣にしてやらうと思つてゐるのだ。
小野寺　それはいゝ思ひつきだ。君らしい考へ方だ。しかし僕は君が下島さんと結婚したつていゝと思ふね。あの人なら純粹に君のことを思つてゐるよ。
英次　だがね。（首しめるまねして）之がおそろしいよ。そ

れに千代子を殺した告白せずに結婚するわけにはゆかない。だが告白は出來ない。下島さんの方から僕と結婚したいと云つてくれゝば別だが、僕からは云ひ出せない。

小野寺　女の人からは云ひ出せないだらう。

英次　女の人か本當に僕を愛してゐてくれゝば云ひ出せると思ふね。

小野寺　どうだかね。女は本當に愛されてゐることを知らなければ、中々心は動かさないものだらう。

英次　僕が下島さんを愛してゐることは下島さんは知つてゐるはづだ。

小野寺　結婚したいと云つて見なければだめだね。

英次　さうかね。しかし僕は正直な所結婚したくない。僕はたゞ下島さんが一生獨身で、僕の仕事を尊敬して、兄妹のやうに氣らくにしてくれることを喜んでゐるのだ。

小野寺　それならうまくゆきさうなものだね。東だつて、今すぐ結婚するわけにもゆかないからね。

英次　それはさうさ。そして東はまだ海のものか陸のものかわからないからね。その點で僕は安心してゐるのだよ。だが僕がまたそんな事を考へるやうになつたかと思ふとへんな氣がするよ。

（呼鈴がなる。英次退場。まもなく衣裳屋の番頭と登場。）

番頭　毎度ありがたう御座います。御注文のお品をもつて參りました。之ではいかゞで御座いますか。

（恐ろしく立派な幕を出して見せる。）

英次　結構です。立派だらう。

小野寺　隨分立派な幕だね。なににするのだ。

英次　こゝへお伽噺の女王樣の玉座をつくることにしたのさ。これが玉座の前の幕なのだ。

小野寺　君に一寸似合はないね。

英次　そりやあ、人間の心のなかにはいろ／＼のものがかくれてゐるものだよ。僕たつてベロネゼーや、チ、アンが嫌ひとは限らないよ。着物も出來ましたか。

番頭　はい。之ではいかゞで御座いますか。

（お伽噺の女王らしい着物を出して見せる。）

英次　（調べて見て）結構です。一寸御面倒ですが、この幕をあのひもに通して見せて下さいませんか。

番頭　承知しました。

小野寺　さつきからあのひもは何かと思つてゐた。

（番頭、幕をたらして見る。）

番頭　いかゞで御座いますか。

英次　結構です。それから冠は持つて來て下さいましたか。

番頭　持つて參りました。（出して見せる）いかゞで御座いますか。

英次　結構です。
番頭　それでは失禮いたします。
英次　さうですか。
番頭（小野寺に）どうも失禮いたしました。
（小野寺丁寧にあいさつする。番頭、英次退場。小野寺、幕や、着物、冠を見る。英次風呂敷包をもつて登場。）
英次　一寸君手つだつてくれないか。之を臺に敷くのだ。
小野寺　よし來た。
（二人で敷く。）
英次　君、失禮だけど、この長椅子を手つだつてのつけてくれないか。
小野寺　よし來た。
（臺へのつける。）
英次（その上にキレをおほひ）これで女王樣が横になつて、戀人のことを夢みてゐると云ふわけなのさ。（花が豐富に挿されてある花瓶を足の方へおく）之でもう女王樣さへ御いでにさへなればいゝわけなのだ。（幕のひだをなほしたりいろ〳〵愉快さうにしたくをする）
小野寺（少しあつけにとられながら、同情して見てゐる）
英次　レンブラントのダナエの向ふを張らうと云ふのさ。思ひ切つた構圖だね。

小野寺　まさか裸になつてもらうわけにもゆかないからね。又東と一緒にかくのかい。
英次　いや、今度は僕一人だよ。誰にもこの畫が出來上るまでこの畫は見せないつもりさ。百號にかいて見ようと云ふのさ。僕の柄にないかね。
小野寺　いや面白いものが出來るだらう。そして下島さんは承知したのかい。
英次　それはよろこんで承知したさ。光榮だと云つてね。
小野寺　面白いものが出來るだらう。
英次　頭のなかでうんといゝものがかけるつもりでゐるが、いざとなるとさうもゆくまい。だが僕はこの頃へんに元氣さ。僕のうちにもこんな快活な精神が生きてゐてくれるのかと、自分でおどろいてゐる。東には氣の毒な氣もするが、僕は自分の仕事のため、大きな仕事のためには、小さい同情は殺してかゝるつもりだ。しかし正直を云へば、東に同情なんかしてゐない。ふみにじることに快感さへ何處かに感じてゐる。小生意氣な奴、僕に反抗出來るなら反抗して見ろつてね。戀と云ふものは一面へんな性質をもつてゐるものだね。
（鈴がなる。英次、退場、まもなく下島と登場。小野寺と挨拶する。）
英次　どうです。中々立派でせう。

下島　本當に立派ですわ。
英次　之があなたの着る着物で、之をあなたがかぶつて、あすこに靜かに横つて下さると云ふわけです。
下島　大したことになつたのですね。私よりもつと適當なモデルがありさうに思ひますわ。私ぢやあんまり。
英次　そんなことは斷じてありません。あなたの顏や、身體つきや、感じから思ひついたのですから、他の人ではだめです。
下島（着物をいぢりながら）なんだか恥かしい氣がしますわ。
英次　そんなことはないでせう。内心よろこんでもゐて下さるでせう。
下島　それはね。
英次　それならそれを着て見て下さい。
下島　又今度にいたしませうね。
英次　まあつけるだけはいゝぢやありませんか。小野寺だからかまひませんよ。
下島　小野寺さまがゐらしつても、それは少しも氣にはしてゐないのですけど。
小野寺　僕は今日は失敬する。又くる。
英次　さうかい。それは失敬したね。
小野寺　それぢや、さよなら。
英次　さよなら。
（小野寺下島と默禮し、退場。英次も送つてゆく。下島、鏡の前へ行つて冠をつけて見る。英次そつと登場。鏡のなかの下島と顏を見あはす。）
下島　まあ、びつくりしました。
英次　どうしてゞす。
下島　だつて、先生があんまり靜かに入つていらつしたので。
英次　あなたがきつと鏡を見てゐるだらうと思つたので。
下島　いやな先生ね。それでは着物を着て見ますかね。
英次　どうぞ。
下島　先生、一寸目をつむつてゐて頂戴。
英次　よろしい。
（下島、着物をぬぎ、鏡の前で下着の上に着物を着る。）
英次　まだですか。
下島　まだよ。
英次　大へんおそいのですね。
下島　まあ、まつてゐらつしやい。（着物つけおはり、冠をつける）
英次　まだですか。
下島　せつかちですね。先生は。
英次　なんだか、目をつむつてゐる内に、美しい世界があ

らはれたり、消えたりしさうに思ふのですよ。

下島　さう思つていたゞければ、なほ目をつむつてゐていたゞきたいわ。目をおあきになると、現實の貧弱さにおどろきになりますからね。（もうけの段々あがり長椅子の上にねて、居ずまひをなほす。沈默）

英次　まだですか。

下島　もう本當はいゝのですよ。

英次　（目をあけ鏡の方を先づ見、それから下島を一寸さがして、もうけの席の上に下島のゐるのを氣がつき歡聲をあげる）あゝ、本當に素敵です。僕の夢は實現されました。

（戸をたゝくものがある。）

英次　誰だ？

外　（東の聲）僕です。

英次　何か用か。

東　別に用ぢやありません（云ひながら戸をあけやうとする）

英次　戸をあけちやいかん。（戸に走つていつていきなり戸をしめカギをかけやうとする）

下島　先生！　何をなさるのです。

英次　安心して下さい。僕はたゞ他の人に自分のイリュジヨンをこわしてもらひたくないのです。

下島　カギをかけるのはよして下さい。つまらぬ誤解をされてはいやですから。

英次　それでも。

下島　仕事中は入つてはいけないと云ふ札をお出しになればいゝぢやありませんか。

英次　さうでしたね。僕にはそれが氣がつかなかつたのです。馬鹿ですね、許して下さい。

下島　私は何とも思つてはおりませんわ。先生を信じ切つておりますから。

（英次、いきなり机のところにゆき、ペンで紙に字をかく。）

四

同じ場、英次百號に下島の前の場と同じ形で横になつてゐるのをかいてゐる。

英次　少し休みませう。

下島　えゝ。（下島、畫を見に來、英次の後ろに立つ）

英次　どうです。

下島　本當に美しくかけましたわね。私ぢやないやうですわ。

英次　あなたの内にかくれてゐるあなたです。私一人が知つてゐる。あなた自身も知らないあなたです。

下島　それではこの畫の方が私よりもなほ私なのですか。
英次　まあさうですね。僕は純粋のあなたをかかうと思つてゐるのです。力はまだ足りませんが、しかし入り込めるだけ入りこんで、純粋のあなたを生かせるだけ生かして見るつもりです。
下島　純粋の私と云ふのは、あなたの見た私と云ふことになるのですね。
英次　さうも言へるかも知れませんがね。だがさうと許りも云へないでせう。あなたより僕の方がより深いあなたの美を見てゐるとも云へますからね。つまり客觀的にもより本當を見てゐると云へるでせう。
下島　先生のおつしやることはよくわかりませんわ。
英次　まあ腰をおかけなさい。一體人間は自分が自分を一番よく知つてゐると思ふのはまちがひなことがよくありますよ。花は、自分の美しさを自覺してゐるかも知れませんがね。だが天才のある畫家が知つてゐるだけには知らないでせう。僕なんか、自分の内の美しさを知るのは、たゞ他のものに反映する自分によつて知るだけです。僕は僕が他の内に見出し得る美によつて、自分の内に藏された美を知るのです。だから僕はあなたによつて僕の美を知ることが出來たと云ふのです。僕はそれをあなたに感謝してゐるのです。人間は單なる鏡ではない。心靈の鏡です。しかしその鏡は自分の深さだけにきりものをうつすことが出來ないものです。
下島　それでは私の深い私は私にわからないで先生だけにおわかりになるの。
英次　まあさうです。人間は自分を愛してゐないからです。
下島　先生のおつしやることはわかりませんわ。
英次　人間は自分を愛してゐると思つてゐますが、實は自分を盲目に愛してゐて、あまやかしはしますが、本當の意味で自分を尊敬したり愛したりすることは中々出來ないのです。たとへば、あなたは僕を先生として尊敬し、信用してくれてゐる。しかし僕はそれ程自分を尊敬しても、信用してもゐないのです。ごくあたりまいの人間にすぎないと思つてゐます。あなただつてさうでせう。自分を特別に美しいとも、優れてゐるとも思はないでせう。よし思つたにしても僕が知つてゐる程は知らないでせう。あなたの美をあなたは僕程愛してゐないからです。
下島　…………。
英次　僕の云ふことはわかりましたか。
下島　いゝえ、ちつともわかりませんわ。
英次　困つた人ですね。
下島　どつちが。
英次　あなたですよ。

下島　つまり私は馬鹿だとおつしやるのでせう。
英次　つまりあなたは自分の美を知らないと云ふのです。
下島　それだつて、この畫の方が私より美しいのは事實です。
英次　あなたは自分を愛してゐないからです。
下島　そんなことはありませんわ。私は隨分エゴイストですわ。
英次　あなたには僕の云ふ意味がちつともわからないのですね。それともわからないふりしてゐるのですか。わからない方がいゝので。
下島　先生のおつしやることは時々わからないことがあると、東さんも云つてゐらしつたわ。
英次　東はこの頃も時々ゆきますか。
下島　めつたに。東さんはこの頃、何か怒つてゐらつしやるやうよ。
英次　僕があなたと二人切りで、一時間も二時間もゐるからですよ。
下島　そんなことはないでせう。
英次　東はあなたを戀してゐますからね。
下島　だつて先生と二人切りだつてちつともおこることはないわ。
英次　自分で人を想像するのです。僕があなたを愛してゐるとでも思つてゐるのでせう。
下島　おかしな方ね。
英次　何がおかしいのです。
下島　だつて先生のやうな女嫌ひな方が。
英次　僕を女嫌ひにきめてゐるのはあなた許りですよ。
下島　だつて先生のやうな方から見れば、私は赤坊のやうなものでせう。
英次　あなたは利口ですね。
下島　なぜです。
英次　だつてうまくとぼけますからね。
下島　今日は先生のおつしやることが少しもわかりませんわ。
英次　あなたは矢張り獨身主義ですか。
下島　えゝ。
英次　そして畫を一生やるつもりですか。
下島　自分ではやりたいと思つてゐるのです。
英次　是非おやりなさい。
下島　望みがあるでせうか。
英次　大いにあります。獨身でゐればね。
下島　先生が保證してくだされば、私一生獨身で畫をやりますわ。
英次　僕を信じ切つて下さい。さうすれば僕はあなたをも

のにして見せます。
下島　それは私、先生を信じ切つておりますわ。
英次　僕があなたを殺してゞもですか。
下島　先生はそんなことをなさらない方だと云ふことを知つてゐます。
英次　たとへですよ。
下島　たとへなら、殺されても信じますわ。
英次　何を信じるのですか。
（下島、笑ふ。）
英次　ともかく安心して あなたの 一生を僕に お任せなさい。
下島　それはお任せしますわ。
英次　條件なしにですか。
下島　それは私、先生を信じ切つてをりますもの。
英次　何を信じてゐるのです。
下島　先生は私を愛してゐて下さることを。
英次　本當ですか。
下島　えゝ、私の父のやうにね。
英次　あなたは鰻見たやうな人間ですね。
下島　なぜです。
英次　つるりと逃げ出すからです。
下島　何が逃げ出すの。

英次　あなたは子供ですね。
下島　先生から見るとね。
英次　さあ、又畫を始めませう。
下島　えゝ。
（モデルの座につく。）
英次　（見つめて畫をかゝうとして、筆をまだおろさない）僕は本當にあなたのやうな弟子を一生もつ事が出來ることを實に幸福に思つてゐます。
下島　私も先生のやうな方の一生弟子にして戴けることを光榮に思ひます。
（英次、畫をかゝうとしてゐたが突然立ちあがり、戸をあける。其處に東が立つてゐる。）
英次　探偵の眞似はよせ。
（東入つてくる。）
東　先生には僕の氣持はわかるはづです。
英次　わかつたつて同情はしない。俺は自分の仕事のよくゆくことを喜ばないやうな男に同情はしない。さあ早く出てくれないか。入つては困るとちやんとかいてある。
東　戸の前にたつてはいけないとはかいてありませんね。
英次　あたりまいさ。カギの穴からのぞくなとかく奴があるか。小便無用とかく奴があつても、泥棒無用とかく奴はない。

東　…………。
英次　さあ、出ていつてくれないか。
東　…………（默つて退場）
英次　さあ、畫を始めませう。
下島　先生は隨分、暴君ね。
英次　私は自分の仕事を尊敬する、仕事の忠實な奴隷にすぎないのですね。さあ、始めませう。（沈默）あなたは東に同情してゐるのですね。僕の仕事と、東の感情と、どつちを尊敬するのです。
下島　私にはわかりませんわ。
英次　今日はやめませう。あなたは東が、ぬすみ見たり、ぬすみ聞いたりする、卑劣を尊敬するのですか。
下島　私は女ですもの。
英次　あなたは、一生畫をかく氣なら、そんな女らしい同情はすてなければいけません。
（下島、モデルの座からたち上る。）
英次　（怒つたやうに）もう少しそのまゝにしてゐて下さい。
下島　はい。
英次　（かきながら）あなたは僕の仕樣がひどすぎると思つてゐるのですね。
下島　一寸そんな氣がしましたの。
英次　もうしませんか。
下島　えゝ、よく先生のお氣持がわかりました。
英次　本當にわかつたのですか。
下島　先生はさすがに偉い藝術家でゐらつしやることがはつきりしました。そして藝術の仕事と云ふものは本當にしつかりしなくてはいけないものだと云ふことがわかりました。
英次　（皮肉に）それは結構です。しかしあさましい氣もしませんか。
下島　いゝえ、だけどなんだか血みどろのやうな氣がしますわ。
英次　血みどろ、僕の手に血がついてゐるやうに見えますか。
下島　いゝえ、先生の心臟は裸ではないかと云ふ氣がしたのです。
英次　僕はおちついて、東にたいしてももつと先生らしい寛大な氣持がもちたいのですよ。だが時々あんな態度に出て、あとでわるかつたと思ふのですよ。
下島　しかし先生位ゐのはげしさがなければ畫も中々かけないと思ひます。
英次　さう云はれると赤面します。人間て隨分面白いものですね。

下島　私、さつきは本當にどうなるかと思ひましたわ。

（戸をたゝく音がする。）

英次　誰だ。

外で（東の聲）　僕です。

英次　何か用か。

東　（戸外で）　先生。今迄實にお世話になりました。僕は少し考へることがありまして、之からお暇をいたゞきたいと思ひます。どうぞ先生もお身體を大事になさつて下さい。

英次　（戸をあけ）　さつきの僕の言葉が原因なら、出かけるのはよしてほしい。僕は自分の云ひすぎたのを後悔して、君にあやまりたい氣もちになつてゐるのだから。

東　えゝ、先生のお氣持はよくわかつております。しかし私もいろ／＼の點で、之以上先生のお世話になるのは心苦しいのです。もう一本立ちになつてやれる處まで、やつて見たく思つてゐるのです。

英次　君の決心は強さうだから、僕も無理にはとめない。もし歸りたくなつたらいつでも遠慮なく歸つて來てほしい。それから金の方の仕事でもさがす必要があつたら、小野寺や、山田にたのむといゝ。なるべく畫で金をとつて質素にくらす方がいゝと思ふ。

東　御注意ありがたう御座います。恩をあだで報するのはいやで御座いますが、私も獨立した以上、あくまで先生とたゝかふつもりでおります。先生のおともだちのお世話にはなりたくないと思ひます。

英次　それもいゝだらう。

東　それでは失禮いたします。

英次　君もたつしやでゐたまい。

東　ありがたう御座います。僕は先生を尊敬してゐることには少しもかはりはないと思ひます。たゞ僕はあることで先生とは何處までも戦ふつもりです。

英次　藝術の名においてか。

東　それと戀の名においてゞす。（退場）

英次　あいつは立派な男だが、惜しいことをした。

下島　先生、私おいとまをいたしますわ。

英次　いけません。もう少しそのまゝにしてゐて下さい。

下島　私、なんだか東さんのことが氣になります。一寸お逢ひしに行つていゝでせう。

英次　（心の内のたゝかひをかくして、冷靜に）　いけません。

下島　なぜいけませんの。

英次　僕は今畫にのり氣になつてゐるのですから。

下島　一寸です。

英次　それならいつていらつしやい。

（下島いそいで退場。英次傲慢な態度で歩いてゐたが、急にしやくり泣く。下島登場。）

下島　先生どうかなさつたのですか。

英次　いや、たゞ急に淋しくなつたのです。

下島　御尤ですわ。先生、お一人になつておしまひになつたのですもの。

英次　……………（何か云はうとする）

——幕——

五

同じ場。英次一人で坐禪をくんでゐる。戸をたたくものがある。

英次　はい。

（下島登場。）

英次　昨日は來ませんでしたね、今日ももう來ないかと思ひましたよ。

下島　昨日は出やうとする所へ東さんが來て話しこんで、どうしても歸らうとなさらないので困りました。

英次　困つた奴ですね。

下島　私、東さんに同情しましたわ、あの方本當に偉い方ね。

英次　なぜです。

下島　だつてこの頃、勞働してゐらつしやるのですよ。

英次　さうですか、そしてそれが偉いのですか。

下島　苦しくつたつて折れないのは偉いぢやありませんか、その上畫をかいてゐらつしやるのです。

英次　それはまあ感心ですね。しかしあなたが僕のうちにくるのを邪魔しに出かけて、いつまでも歸らないなんて、あんまりほめたことではありませんね。

下島　東さん、少し身體の具合がわるかつたのです。熱をはかつて見ましたら八度三分ありました。

英次　さうですか。それは氣の毒でしたね。そしてどうしました。

下島　私はおとめしたのですが、夕方、無理におかへりになりました。

英次　さうですか。それでは早速ですが仕事を始めませう。

下島　えゝ、もう何日位いで出來上りますの。

英次　個人展覽會が來月末にありますからそれまでにかき上げたく思つてゐるんです。

下島　隨分かゝるのですね。

英次　毎日僕の處へくるのは閉口ですか。

下島　そんなことはありません。

英次　この畫がかけたあと、又あなたをモデルにして畫をかきたいと云つてもなつてくれますか。

下島　それはよろこんでなります。
英次　東は僕のことを何とか云つてゐますか。
下島　いつも先生のことをほめておいでゝす。今度のことでも自分がわるかつたのだとおつしやつておいでゞす。自分が賤しかつたので先生の御心を曲解してゐたとおつしやつてゞした。しかし先生の處から出たのはやむを得ないとおつしやつておいでゝした。そして先生の處には又いゝお弟子さんが出來て、神妙に世話をやいてゐる話をしたら大變安心しておいでゝした。先生のことをいつも二人で夢中になつてほめておりますの。
英次　東はたしかにいゝ奴です。有望な奴です。あんな奴は滅多にゐません。だがあいつは喰へない所をもつてゐます。あいつは中々策略をつかふ男で、目的のためには手段を選ばない男です。僕はあの男を愛してはゐますが、あのへんな獨立心と、目的のためには馬車馬的で手段を選ばない所はどうも氣に入りません。あの男の病氣のことをきいた時も僕はあてにはしてゐませんでした。
下島　それでも熱が八度三分ありましたもの。
英次　熱許りは身體の熱でなければ上らないものぢやありませんからね。
下島　それだつてまさか。
英次　僕は今にきつと東は假病をつかつて、あなたの同情心に訴へ自分の處にあなたを來させるやうにするだらうと思つてゐましたよ。そしてあなたはきつと同情して出かけて行くと思つてゐましたね。
下島　それはゆくかも知れません。
英次　行つてはいけません。
下島　なぜ。
英次　東にだまされなければならないと云ふ必要はないからです。
下島　それでももし本當に御病氣だつたらどうなの。
英次　本當の病人に東か自分をつくりあげたら、あなたはゆく方がいゝと思つてゐるのですか。
下島　先生のさう云ふお考へ方には私贊成出來ませんわ。
英次　東と云ふ男はさう云ふ男なのです。あいつは利口な男ですからね。
下島　私にはそんな方とは思へませんわ。
英次　それはあなたが馬鹿だからです。
下島　それでは先生は私が東さんの處へいくら東さんが御病氣の時でも行つてはいけないとおつしやるの。
英次　斷じて。
下島　本當の御病氣の時でも。私はいくら行つたつて大丈夫と思ひますわ。先生こそ私を信用してゐらつしやらな

いやうに思ひますわ。

英次　男には腕力があります。巧言令色に女はすぐだまされますからね。

下島　東さんはそんな方なの。

英次　そんな男ですよ。

下島　東さんは又先生を用心しろとおつしやつてゐらつしやいましたわ。

英次　さうでせう。そんな男です。

下島　先生の他の點は皆信用するが、女のことだけは信用出來ないと云つてゐらつしやいましたわ。

英次　人間は自分のこと切りわからないものです。

下島　(冗談のやうに)　それなら東さんが假病をつかうことがわかるのも、先生にさう云ふ處があるからなの。怖いわね。

英次　僕にもさう云ふ根性はないことはないのです。たゞ實行出來ないのです。東はそれが實行出來る男です。

下島　男の方のお話をきいてゐますと、怖くなりますわ。

英次　その人に何にもかも許してゐる場合は別です。その他の時は、男にはあまり親切にしたり、男に氣があると自惚させるそぶりは、用心しないといけませんよ。

下島　先生は矢張り、私を獨占なさらうとしてゐらつしやるのですのね。

英次　さうかも知れません。それがどうと云ふのです。

下島　私はそんなことはないと思つてゐましたの。

英次　あなたがさう思つてゐるなら、僕もさうなりますよ。僕はあなたを束縛する資格はありませんからね。たゞ注意するだけなのです。東とあなたと結婚する氣があれば別です。

下島　そんな氣は少しもありませんわ。だけど御病氣なさつたら、見舞に位い上らないとわるいやうに思ふのですよ。

英次　ゆくなら誰かと一緒にいらつしやい、惡いことは云ひません。

下島　それはさうね。それではゆく時は弟をつれてゆくことにしませう。

英次　それがよろしい。

下島　私、馬鹿ですから、いろ／＼注意して下さい。私、先生のおつしやることならなんでもきいてまちがひないと思つてゐるのですが、つい馬鹿なので、先生のおつしやる意味をとりちがへてしまうのです。之から注意いたしますわ。

英次　僕もまちがひのないことだけを云ふことに注意します。僕はたゞ、あなたが畫をやめることを心配してゐるのです。僕の所へあなたが來なくなることを恐れてゐる

のです。僕は少し淋しすぎるのですから。
下島　先生のやうな悟つた方でも、淋しいことがあるの。
英次　僕は悟つてはゐませんよ。
下島　私には先生は本當にさとつた方としか思へませんわ。いつもおちついて、しつかりして、自分の道を迷はずに歩いてゐらつしやる方だと思つておりますわ。私は先生位い心の鍛へられた方を見たことはありませんわ。浮いたことはちつともおつしやらないし、いつも嚴肅で、快活で、頭がよくお働きになるのにはおどろきますわ。
英次　僕の快活になれるのは、あなたのゐる時だけですよ。その他の僕の生活は冬の最盛りのやうな生活です。
下島　さう云ふ生活をつゞけて、平氣でゐらつしやるのに私は本當に感心しておりますわ。
英次　あんまり平氣でもないのですよ。ついよけいなことをしやべりました。畫を始めませう。
下島　えゝ。
英次　畫をかゝずに、呑氣にしてゐるのもたまにはいゝものですが、もう少し喰ひ入らないと我慢が出來ませんから。ぬきさしの出來ない、何處もかしこも充實し切つて、しかも最も深い處で全體が一つになつて落ちつきはらつて、神祕の世界を暗示してゐる、さう云ふ處まで入つてかきたいのです。

（下島着物を着かへやうとする。）

六

同じ室。英次、小野寺、山田話してゐる。
英次　人間と云ふものはへんなものですね。特別に僕がへんなのではないかと時々思ひますがね。悟つて見ればなんでもないかも知れませんが、悟らない所に又面白味がありますね。藝術と云ふ仕事は、悟つて許りはゐない方がいゝやうですね。東洋の畫のいゝ所はさとつた所がある處と思ひますね。西洋のいゝ畫は、さとらない所から生れたものゝやうに思ひますね。兩方のいゝ所を調和させるのは、悟る方がいゝ時は悟り、悟る必要がない時は悟らない所にあるやうに思ひますよ。あてにはなりませんが。
山田　さうも云へるでせうね。死ぬまで悟る必要のない人間も、見ともないかも知りませんが、いつも悟つてゐる人間許りも困りものですね。人間は矢張りこの地上の生活をたのしく出來たら、した方がいゝと思ひますね。尤も本當に悟つた人間は、世界をよくしやうと云ふ熱情にます〳〵燃えてゐるものかも知れませんがね。
英次　社會をよくすると云ふことはどう云ふことですかね。私の考へでは皆か人間になることゝ思ふのですが、

こないだ僕の處へ金をもらひに來た主義者の話ではプロレタリヤの世界になると云つてゐましたがね。僕はその方のことはよくわからないせいか、よくのみこめなかつたのですよ。それで僕はかう云つて聞いて見たのです。プロレタリヤの運動と云ふものは、益々プロレタリヤがプロレタリヤになる運動なのですか。それともプロレタリヤがブルジョアになりたい運動なのですか。それとも貧人になりたい運動なのですか。さう云つて聞いてもはつきりした返事は得られませんでしたよ。へたな說教されて時間をつぶされるのがいやで、二三圓の金をやつて歸つてもらひましたが、あんなのは本當の主義者ではないでせうが、頭のよくない男でした。僕は人をおどかすのが好きな男ですから一寸おどかしてやりました。

小野寺　君の處へはくるだらう。

山田　さうは來ない。何しろ僕の生活を見たら、一寸金のことは云ひだせまい。

小野寺　君はなぜあんな生活をつゞけてゐるのだい。

山田　女と云ふものはいくら神妙でも、贅澤にはなれやすいものだからね。折角貧しい生活になれて來てゐる美德を失なはすのもいやだからね。又妻の父もそれをいやがるのだ。しかし僕は、貧乏生活が人間の理想とは思つてゐない。たゞいゝ世界が來た時、すぐ金持の生活が出來るものとは僕は思はないからね。

英次　しかし山田さん位いになつたら、贅澤なさつていゝと思ひますがね。

山田　わるいとも思ひませんが、趣味から云つても質素がすきなのです。

英次　僕はこの頃少し贅澤がすきになつて來てゐるのですよ。その方が精神活動が豐富になれさうに思つてゐるのです。

山田　それはあなたが畫家だからではないですかね。殊に洋畫家だからではないですかね。

英次　さうかも知れませんね。

小野寺　それは山田君は贅澤にあきた人だし、君は又貧乏にあきた人だからだよ。

英次　さうかも知れないね。山田さんは贅澤からとれるものはとつてしまつた方で、僕は又貧乏で鍛へられるものは鍛へられ過ぎてしまつたのかも知れませんね。あまりに私の生活には冬が多すぎますからね。少しは春の日に憧がれたくなるのです。又夏の盛りにね。

山田　本當にさうですね。僕の生活にも冬もありましたが、この頃はあまりに春らしい生活がつゞきすぎたかも知れません。

英次　自分の內にかくれてゐたものを生かすのは氣持のい

いものですね。

小野寺　君の畫はいつ出來るのだ。

英次　もう大概出來たのだ。

小野寺　まだ見せる氣にはならないかい。

英次　いや、もう見せてもいゝ。昨日かき上げたやうなものだが、今日もう一度よく見ようと思つてゐるのだ。

小野寺　それぢや見せたまい。

英次　それぢや見てもらはうかね。

（畫のおほひをとる。二人見とれる。）

山田　野中君、君がこの畫をかいたことを僕は日本人にかはつて感謝したく思ひますよ。

英次　山田さんにさう云つて戴くと、僕は本當にありがたく思ひます。

山田　日本の女性の美が、實に深く完全に出てゐると思ひます。愛してかいたと云ふのはこんな畫を云ふのでせう。

英次　僕は讃美してかいたのです。憧憬してかいたのです。

小野寺　熱愛してかいたのではないかい。何處かに執念深い所がある。

英次　そんなことは云はないものだ。

小野寺　僕はほめたつもりで云つたのだよ。

英次　あまりほめたことにはならない。

（三人笑ふ。）

山田　野中君は、之を手ばなす氣はないでせうね。

英次　いえ、ないことはないのです、賣る氣ではゐるのです。少し金もほしいのです。第二のくわだてもしてゐるのです。

山田　いくら位いなら手ばなす氣なのですか。

英次　まあ、二千圓と云ふフダでもつけやうかと思つてゐるのです。

山田　それなら僕に賣つてくれませんか。父に買はしますから。

英次　あなたが買つて下さるなら、もつとまけてもよろしい。

山田　いゝえ、まけて戴く必要はありません。父に買はすのですから。

英次　あなたのお父さんにお氣に入るかどうか。

山田　金は父に出さして、僕がとりあげるのですよ。もし父が出さなければ、父からもらう金を出さして買ふだけです。

小野寺　よかつたね、野中。おごらなくつてはいけないよ。

英次　おごるとも、下島さんもよろこぶだらう。

山田　もう二時になる。もう下島さんのくる時分だらう。失禮するかね。

小野寺　えゝ、歸りませう。

山田　それでは金は今日明日にもとゞけます。歸りに一寸父の處へよつて見ます。家にゐればすぐ出させて、後刻にとゞけさします。
英次　少しも急ぎません。
山田　他へ賣られると困りますからね。
（三人笑ふ。）
山田　それでは失禮します。
英次　またどうぞ。
（三人退場、英次まもなく登場、英次自分の畫を見てゐる内に、涙ぐみ、よろこびのあまりおどるやうに歩く。戸をたゝく音。）
英次　はい。
（下島登場。）
英次　いゝ話がありますよ。
下島　どんな。
英次　あなたもきつとよろこぶでせう。
下島　どんなお話。
英次　あなたは小野寺と山田さんにお逢ひでしたでせう。
下島　えゝ、其處でお逢ひしました。
英次　山田が僕の畫にすつかり感心してくれたのです。
下島　お見せになつたの。
英次　えゝ、もう出來上つたやうなものですからね。見せてはいけないのですか。
下島　いゝえ、そんなことはありません。
英次　何かあなたは氣になることがあるのですか。
下島　いゝえ。
英次　東の病氣はどうですか。
下島　もう大概おなほりになりました。
英次　もうそれなら看護婦も免職ですね。
下島　えゝ。
英次　それから山田があの畫を二千圓で買つてくれたのです。
下島　まあ、もうお賣りになつたの。
英次　でも今後いくらでも、もつといゝ畫がかけますからね。それにあなたに合作のお禮もあげたいと思つてゐるのですよ。今度の畫はあなたと僕の合作のやうなものですからね。千圓たけ差し上げたいと思つてゐるのです。とつて下さるでせう。
下島　それは戴くわけにはゆきませんわ。
英次　なぜです。
下島　それでもあまり多すぎます。
英次　僕のすることは、なんでもよろこんで承知して下さるのが、賢いことです。遠慮なんかするのは、つまらないことです。

下島　それは先生のおつしやることは何んでもおきゝするのが、一番いゝとは思ひますが、さうもゆかないことが御座います。先生にお金をいたゞく理由はありませんわ。
英次　それでも今度の畫は合作ですからね。
下島　それだつて私は先生に教へていたゞいてゐる、お禮にモデルになつたゞけなのですもの。
英次　お禮に仕方がなしになつたのですか。いやいや。
下島　そんなことはありませんわ。
英次　僕の云ふことはきくものです。何にも云はずにとつておいて下さい。
下島　そんなことはいやです。
英次　たせいやなのです。あなたは僕の厚意を侮辱するのですか。
下島　先生はなぜそんなに澤山の金を私に下さりたがつてゐらつしやるのです。
英次　僕はたゞあなたにお禮がしたかつたゞけなのです。
下島　私、先生の御心もちがはつきりわかりませんわ。
英次　僕は無邪氣なつもりです。
下島　先生は私を占有したがつてゐらつしやるやうに私は時々思へるのです。
英次　それは僕の空想たつたこともあります。しかし僕にそんな資格はないことを知つてゐます。だから僕は何にもあなたに要求はしません。
下島　畫におかきになりませんか。
英次　あなたも無邪氣によろこびをわけて下さつていゝと僕は思つてゐるのです。この畫がよく出來上つたことを。この畫は二人の子のやうなものなのですからね。
下島　それが賣れたので、おうれしいの。
英次　あなたは東にかぶれましたね。もつと無邪氣になつたつていゝでせう。無邪氣によろこび、無邪氣に人の厚意をうけとると云ふことはいゝことゝ思ひます。
下島　本當に無邪氣にいたゞいていゝの。
英次　勿論です。
下島　私は先生を信じていゝのですね。先生に少しも野心のないことをね。
英次　勿論です。
下島　矢張り私が勝つたわ。
英次　なんです。
下島　私と東とよく議論するのです。東さんは先生が私に野心があるにちがひないと云ふのです。私は先生は鏡のやうにすんだ心を持つて、くもりのない玉のやうな親のやうな愛をもつて私のことを心配してゐて下さるだけだとさう云ふのです。私の方が勝ちましたわ。
英次　それなら金はとつて下さいますね。

下島　え、戴く方がよければ戴きます。
英次　それで僕も安心して畫がかけます。
下島　ですけど一寸まつて下さい。私、相談してからはつきり御返事しますわ。
英次　誰にです。
下島（一寸びつくりし、何げなく）父にです。
英次　あなたは嘘つきですね、あなたは東と相談しようと云ふのでせう。
下島　…………。
英次　かくしても駄目です。
下島　…………。
英次　祕密にして、僕をだまさうと約束したのですか。
下島　さう云ふわけではありません。たゞ東が先生にあまり早くお知らせすることを恐れてゐるのです。
英次　なぜ恐れてゐるのです。
下島　先生の今度のお仕事の邪魔になつてはわるいと思つて。
英次　いつ約束したのです。
下島　昨晩でした。
英次　…………。
（沈默。）
（下島、着物を着かへる、英次默つてゐる。泣きさうな顔をするのを辛く耐える。下島、モデルの座につく、英次、畫筆をとり畫をかかうとして、泣き出す。下島もだん／＼悲しくなり、すゝり泣く。）
英次　下島さん、泣かないで下さい。僕だつて男です。與へられた運命を耐えて見せます。僕は正直に云つて東の思つてゐる通りあなたを愛してゐたのです。專有出來たらしたいと思つてゐました。しかし僕は正直に云ひますが、人殺しなのです。千代子は病氣で死んだのではなく、僕が嫉妬で殺したのです。その上、僕は片輪です。僕はいくらなんでもあなたのやうな處女を專有する資格のないことは十分知つてゐたのです。だからあなたが僕の處に來た時、僕はあなたからなるべく逃げやうとしてゐたのです。下島さん、矢張り僕はだめです。すぐ歸つて下さい。僕は一人になりたいのです。
下島　先生！　本當にすみませんでした。
英次　すむも、すまないもありません。自業自得です。早く歸つて下さい、私は人殺しを實に嫌つてゐますが、私の手はあなたの首をしめたがつてゐますから、早く逃げていらつしやる方がよろしいよ。
下島（恐怖におそはれて英次の前に跪づく）先生、許して下さい。許して下さい。
英次　僕はあなたを殺して、自分も死にたいのです。

（下島おどろいて逃げ出す。英次、戸のかぎをかける。）

下島　先生！　私、先生のおつしやることならなんでもききます。どうか殺すのだけ許して下さい。

英次　それなら、（かぎをほりなげ）戸をあけその着物をもつてお逃げなさい。そしてもう二度と來てはいけません。來いと云つても來ないでせうがね。

（下島、着物をかゝへ、かぎで戸をあけやうとするが、ふるへて開かない。）

英次　かぎをおよこしなさい。あけてあげませう。

（下島、こわ〲かぎを與へる。英次いきなり、下島に接吻する。下島、半ば抵抗し、半ば服從する。英次、戸を靜かにあける。）

下島　先生！

英次　下島さん、僕をにくまないで下さい。僕の內には惡魔もゐますが、神もゐますからね。

下島　先生！　私（瞬間的に英次に屈從しやうとする）

英次　馬鹿！（戸からつき出さうとして）可哀いゝ馬鹿！幸福でゐろ、（戸からつき出し戸をしめる、始め靜かに）人殺し人殺し、セムシ、セムシ、天才、天才、色魔、お人よし、悟つた男、何處までも生きてゆく男、お前はうまくやられたな。たが石にしかみついても生きてやるぞ。いくぢなし、いくぢなし、いくぢなし。……（とうとう淋しさに壓倒される）

——幕——

（三六、八、一〇）

後書き

「或る畫室の主」は一、二、を第一幕、三、四、を第二幕、五、六、を第三幕としてもいゝと思ひます。

その妹（五幕）

この一篇を亡き姉に捧ぐ

登場人物

野村廣次　盲目（二十八歲）
靜子　廣次の妹
西島（三十三歲）
芳子　西島の妻
高峯（二十七歲）
綾子　高峯の妻
小間使、女中、老婆、古本屋

時
現代（冬）

第一幕

廣次の室

廣次机の前に坐つて手さぐりで何かかいてゐる、靜子登場。

廣次　靜ちやん。
靜子　えゝ。
廣次　手紙が來たやうだね。
靜子　さうですか。一寸見て來ませう。
（靜子退場、まもなく登場。）
廣次　來てゐなかつたかい。
靜子　叔母さんの處へ手紙が來たゞけです。
廣次　さうかい。どうして來ないのだらう。
靜子　本當に。もういくら何んでも來さうなものですね。
廣次　つまらないので返事をよこす氣がしないのかも知れないね。
靜子　そんなことはありませんわ。旅行でもしていらつしやるのでせう。
廣次　それならいゝけど、僕にはさうは思へないよ。
靜子　きつと御らんになればおよこしになつてよ。
廣次　あの人の處にはいろ〳〵の人の處から見てくれと云つて可なり原稿がゆくらしいから、いつでもとりつぱなしにして讀まないかも知れないね。讀めば何とか云つて來さうなものだがね。お前の手紙はいくら何んでも讀みさうなものだがね。
靜子　きつと今に來ますよ。待つてゐる內は中々來ないものですね。一寸忘れてゐる時に來るものですわね。

廣次　忘れる暇は一寸なささうだからな。

靜子　それでも今日は來ると思ひますわ。

廣次　昨日も靜ちやんはさう云つたよ。一昨日もさう云つたよ。

靜子　本當にハガキ一つでも下さればいゝのにね。

廣次　自分の價値を他人の手に任せてゐるやうな氣がして心細くつて仕方がないよ。送らなければよかつたのだ。

靜子　そんなことをおつしやつてゐたら切りがありませんわ。私はきつと今にいゝ御返事があると思ひますわ。あの方があれをよんで感心なさらないわけはないと思ひますわ。萬一感心なさらなくつたつて厚意をお持ちにならないわけはありませんわ。あの方はお兄さんの名を御存知なわけなのですもの。

廣次　それはもう忘れてゐるよ。もう四五年前の話たからね。

靜子　それでもお兄さんの畫をあんなにお賞めになつたのですもの。さうしてお兄さんが戰爭で盲目におなりになつた時あの方一人、簡單でしたけれど惜しいことをしたとお書きになりましたわ。

廣次　あれからもう三年になる。あの人は今では他の人を賞めてゐる。

靜子　それでもお兄さんのことを忘れてはいらつしやらなくつてよ。きつと。

廣次　目さへちやんとしてゐれば、俺は今時分皆を驚かすやうな畫をかいてゐるのだが、高峯なんかに負けてはゐないのだが、しかしそんな話はよさうね。俺にはお前がゐる。さうして俺は新らしい仕事を始めた。さうしてその仕事がものになることをやつと感じて來た。

靜子　さうそ。高峯さんと云へば、こなひだ綾子さんにお目にかゝりましたわ。

廣次　何處で。

靜子　通りで。赤ちやんを抱いていらつしやいましたわ。丸髷に結つていらつしやいましたわ。

廣次　高峯も一緒かい。

靜子　いゝえ。

廣次　話したかい。

靜子　はい。お兄さんのことを聞いていらつしやいましたわ。

廣次　なせ、だまつてゐたのだい。

靜子　忘れてゐましたの。

廣次　高峯のことを云ふのを恐れたのだらう。（間）綾子さんの顏はまだこんな顏をしてゐるかい。

（鉛筆で簡單にかいた女の顏を見せる。）

靜子　よく似てゐますわ。何時おかきになつたの。

廣次　今さつきだ。お前の顔もかいたよ。
靜子　よく似てゐますわ。
廣次　お前はこの時まだ十五だつた。もう隨分ちがつただらう。
靜子　それ程ちがひませんわ。
廣次　之は俺の自畫像だ。まだ目がある時だ。
靜子　どうしてかけます。
廣次　ちやんと頭にしまつてあるからね。はつきり目に見えるよ。色つやもわかる。光線の工合もわかるのだよ。だけど之以上はかけないのだ。之だつて目や口が何處についてゐるかわからない。
靜子　ちやんとかけてゐますよ。
廣次　しかし之ちやものにならないから仕方がない。だけどもうあきらめてゐるよ。三年たつたのだからね。お前を隨分泣かせたね。俺も泣いたけど。もうさう癇癪は起らなくなつた。いくら起したつて疲れ切るより仕方がないのだからね。それに今では叔父さんの處に厄介になつてゐるのだから、さう癇癪を起すわけにもゆかないからね。しかしそれが反つてよかつたのだ。俺はもう本當に目のことはあきらめた。それに新らしい仕事が出來かけて來たからね。西島君からあの作をほめてさへくれれば、俺は嬉しいのだ。俺だつてかき足りないことは知つてゐるがまだ初歩だからね。その内にものになることさへはつきりわかればそれでいゝのだ。俺は一人前の人間ぢやないのだから何よりも根氣が大事だからね。
靜子　本當に私、いゝ御返事があるといゝと思つて祈つてをりますのよ。
廣次　馬鹿！　しかし祈りたくもなるね。俺がどうしてかう意氣地がないのかと自分でも不思議だよ。今度のが駄目だと云はれたつて失望はしないよ。何んと云つても今となつてはこの仕事にかじりつくより仕方がないのだからね。だけど希望だけは見せてもらひたい氣もするよ。俺の内にあるものは何時かきつとこの世に出るとは思ふけど、もう待ちどほしいよ。皆が仕事をしだして世間が活氣づいてゐるらしいからね。本當にうつかりしてはゐられないよ。叔父さんや叔母さんだつて親切にはして下さるけど、どうしたつて食客だからね。癈兵の金だつて知れたものだからね。他人に慈善事業をさして生きてゆくのはたまらないからね、それにお前だつて肩身がせまくつて叔父さんが嫁けと云ふ處へゆかなければならないからね。俺の自由もお前の自由も俺の仕事の成功するかしないかできまるのだからね。さう思ふと俺はもうぢつとしてゐられないよ。その内にお前も俺からひきさかれてつれてゆかれさうな氣がして仕方がない。それさへな

ければ俺はこんなにまであせらないかも知れない。俺は自分の書が世間から賞められ出した時も、之で自由が得られるやうになるかも知れないと、それを一番喜んだのだつた。今の時代には生活の安定を得なければ自由は得られないからね。

靜子　私どうしたつてお兄さんのわきを離れはしませんわ。きつと今にお兄さんの仕事は私を幸福にして下さると思ひますわ。私はそれを疑つたことは御座いませんわ。それは一日でも早い方がよう御座いますが、私急ぎはしませんわ。私安心して待つてゐますわ。（何か思ひついて）それはさうとしてお兄さん、私今日へんなこと聞きましたのよ。

廣次　へんなことゝはなんだ？

靜子　お怒りになつてはいやよ。お兄さんは今朝小間使の手をお握りになつて？

廣次　誰がさう云つた？

靜子　叔母さんが見ていらしつたのですつて、なぜそんなみつともないことをして下さつたの。

廣次　わるかつたよ。俺は女の顏や姿や手や足を見ることが出來ないのでね。一寸さはつて見たかつたのだよ。たださはつて見ればよかつたのだ。心のなかのことは知らないけど。さはるぐらゐなことは盲目の俺には許されていゝと思つたのだよ。叔母さんが見てゐると云ふことは知らなかつたのだよ。

靜子　御飯たきなんかも笑つてゐましたわ。叔母さんは小間使に「怖かつたらう」とおつしやいましたよ。

廣次　さうか。仕方がない。

靜子　叔母さんはもう小間使に人がゐない時にお兄さんのそばにゆくとあぶないから行くなとおつしやいましたわ。

廣次　さうか。仕方がない。

靜子　仕方がない、ではありませんよ。本當に見つともない。私聞いてゐて顏から火が出るやうな氣がしましたわ。

廣次　許しておくれ。

靜子　口惜しいとはお思ひにならなくつて。

廣次　思ふ資格も今はないからね。

靜子　本當にしつかりして頂戴よ。

廣次　するよ。俺はさつき新らしい仕事を考へてゐた。お前が今暇なら一寸かいて貰ひたい。

靜子　えゝ書きますわ。（机のわきによる。廣次座をゆづる）

廣次　いゝかい。

靜子　はい。

廣次　今度は俺が演説してゐる處だよ。いゝか俺がある會

場で演説をしてゐるのだ。
靜子　えゝようございますよ。
廣次　いゝかい。本當に演説をしてゐるやうにして云ふよ。
靜子　はい。
廣次　始めるよ。（立ち上り）笑つてはいけないよ。
靜子　笑ひさすものですか。
廣次　本當に笑ふ暇はないね。俺達は死にもの狂ひにならなければならないのだ。少しぐらゐ書きおとしがあつてもあとでなほせるから聞きなほさず書いておくれ。
靜子　はい。
廣次　本當にはじめるよ。（演説をするやうにしかし筆記出來るやうにゆつくりしやべる）私は盲目です。戰爭で盲目になつたのです。かう云へば諸君は死なゝかつたのを幸に思へとおつしやるかも知れません。たしかに私は死なゝかつたことを幸と思つてゐます。しかし私にとつて目を失ふことは少しつらすぎます。（廣「書けたかい」靜「はい」）諸君はそんなことは云はないでもわかつてゐると、お思ひになるかも知れません。しかし私にとつて目を失ふことは、諸君の察して下さるよりもつらいことだつたのです。諸君私は畫家だつたのです。どうせ下手な畫かきだとお思ひになるでせう。どうせ目がわるくなくとも、大した仕事はしないにきまつてゐるとおつしやるでせう。それを考へると、私は口惜し涙をこぼします。（廣「書けたかい」靜「はい」）私はさうでないと云ふ證據をあげることは出來ません。又私は今後さうでないことをお知らせすることは許されない身の上です。私は諸君に何と思はれても私は默つてそれを受け入れなければならないのです。（廣「書けたかい」靜「はい」）諸君にとつては私が盲目になつたのは何事でもありません。日本にとつても何事でもありません。第一私の生きてゐることが諸君にとつて何になりませう。私が戰爭で死んだ處が、諸君はいさゝかも痛痒を感じられないでせう。（廣「書けたかい」靜「はい」）諸君はいかなる天才の若死をも心から痛むことをされないでせう。まして私のやうなものが、死なうが生きやうが、盲目にならうがなるまいが、諸君にとつては何事でもないでせう。私から泣言を聞かされるのさへ、不快に思はれるでせう。（「書けたかい」「はい」）それを私は決して無理だとは申しません。決してそれを不當だとは申しません。しかしそれだけ私にとつては淋しい氣がいたします。今は少しあきらめてゐます。しかしあきらめるまでは一通りのことではありませんでした。（「書けたかい」「はい」）永遠に私の目は開きません。諸君の顏を見ることは出來ません。想像はします、しかし心細い氣がします。見たいもの許りです。私がよ

し畫かきでなかつたにしろ私は盲目になつたことを悲しみます。不自由です、他人に迷惑を與へます、一人前ではなくなります、見たいものが見えません。よみたいものがよめません。（「書けたかい」「はい」）私の世界は手にさはるものと、耳に聞えるものと、香ひのするものとです。さうしてその度に見たいと思ひます。大事なものが一つかけて居るやうな氣がします。さうして私の希望はそれの爲にすべてこはれました。（「書けたかい」「はい」）私は畫かきです。私の希望は畫をかくことによつてのみ滿たされると思つてゐたのです。私の運命は私の畫が進歩する事によつて開けてゆくと思つてゐたのです。私は今でも目の前に自分のかきたいと思ふ幻をはつきり見ることがあります。夢の內には美しい色と形とを見ます。しかし私はそれをかくことは出來ません。（「書けたかい」「はい」）私の五六年の苦心はもう一歩と云ふ時に消えてしまひました。もうとり返すことが出來ないのです。他の人は知りません。私と私の唯一の妹は泣きました。何度泣きましたでせう。互に抱きあつて泣きました。口惜しいのです。なさけないのです、もうあらゆる希望はなくなつたのです。絕望です、私は召集される前に一つの畫をかいてをりました。妹が立つてゐる姿です。諸君はどうせ碌な畫ではなかつたとお思ひになるでせう。（間「書けたかい」「はい」）さう思はれても、私はどうすることも出來ないのでせう。この目がどうしても開いてくれないやうに。諸君よ、假りに假りに私を有望な畫家だつたと思つて下さい。さうしてどうかそれを疑はないで下さい。どうせ／＼私の畫はまだものにはなつてゐなかつたでせう。しかしもう一步進めば、ものになる處だつたと思つて下さい。少くも私はその仕事をしてゐた時、自分の未來に希望を認めてゐたと思つて下さい。（「書けたかい」「はい」）私はその畫を描きながら妹に云ひました。俺は勝つよ、きつと勝つよ、俺の運命もお前の運命もひらけるよ、俺の畫かきになつたことを叔父さんも喜んでくれるだらう、叔母さんも輕蔑はしないだらう。二人はいつまでも叔父さんの家の食客になつてゐる必要はないのだ。幸運は私達を待つてくれるのだ。俺はそれを今感じてゐる、目の前に勝利の幻を見てゐる。もう少しの辛抱だ。私は本當にさう思つたのです。私は自覺を得つゝあつたのです。さうして妹も私のその言葉を信じてゐてくれたのです、妹許りではありません、友もそれを信じてくれました。（「書けたかい」「はい」）ある展覽會に出した私の畫は私の尊敬する批評家から可なり程度の高い賞め言葉すらもらつたのです。かう云つても、諸君は知れたものだとお思ひになるでせう。しかし

假りに私を有望な人間だと思つて下さい。有望な人間が、もう一歩と云ふ勝利の自覺を得た時召集されて、戰爭に行つて盲目になつて歸つて來たと思つて下さい。それはあり得ないことではないでせう。（間）諸君はその人に同情することを禁じないでせう。しかし私がその人だと云へば、諸君は自惚(うぬぼ)れてゐると思はれるでせう。私は情けない氣がします。しかし、さけることの出來ない運命を呪つて許りもゐられません。私は體がもう二三日で出來上ると思つた時召集されたのです。私はその場合召集されるのはいやでした。しかし私は抵抗することは出來ません。妹は泣きました。私も泣きました。しかし私は戰爭にゆかなければならなかつたのです。（「書けたかい」「はい」）私は戰爭へゆきました。私は大の非戰論者でした。人を殺すことは嫌ひな男です。又人に殺されることはこの上なく嫌ひな男です。私は國家が戰爭をしたことにも不服だつたのです。私は友とその話をしてゐました。私は兵隊にとられた爲に、少し進歩がおくれたのです、さうしてそれをやつととりもどしたと思ふ時に戰にとられたのです。（「書けたかい」「はい」）戰爭にゆきました。鐵砲もうちました。憐れな敵の軍事探偵を銃殺する群にも入りました。私は心のなかで謝罪し、その人の爲に祈りながら、さうしてねらひをはづしましたが私はその人の生命をたすけることも、死の恐怖からゆるめることも出來ませんでした。私はなぜあんなことをしなければならなかつたのでせう。今でもその人の顏が目に浮びます。何かの力が私にそれをさしたのです。何の力か私は知りません。私はそれに抵抗することが出來なかつたのです。自分の死ぬのが怖(こは)かつたからでせうか。それだけだつたでせうか。

靜子　そんなに早くかけませんわ。

（小間使登場。）

小間使　靜子さま。奧さまが一寸。

靜子　すぐ參りますと云つて下さい。

小間使　はい。

（小間使退場。）

靜子　一寸行つて來ますよ。

廣次　行つておいで。

（靜子退場、廣次鉛筆をとりあげ字を書かうとして自棄をおこし。）

廣次　あゝあ。（仰向けにたふれる。暫く沈默）

（小間使登場。廣次起きる。）

小間使　お客さまがいらつしやいました。

廣次　誰？

小間使　西島さまとおつしやいました。

廣次　なに？　西島？　すぐこゝにお通ししてくれ、きたない處ですがと云つて。さうして靜子に西島さんが來たと云つておくれ。

小間使　はい。

（女中退場。廣次一寸默禱する。）

（西島小間使に案内されて登場。）

小間使　どうぞお敷になつて。（座蒲團をすゝめる）

西島　ありがたう。

小間使　いらつしやいました。

廣次　よく來て下さいました。

西島　どういたしまして。（二人挨拶する。一寸沈默）もつと早く御返事すればよかつたのですが、昨日まで一寸旅行してゐましたので失禮いたしました。今朝お作を拜見しましたので早速手紙を書かうかと思ひましたがそれよりお目にかゝつた方が話がよくわかるやうに思ひましたので來ました。お宅は近いのですから。

廣次　どうもありがたう。

西島　お作はいゝものだと思ひました。君でなければかけないと思ひます。まだ書きたりない處はあるでせうが、君の心の苦しみが、よく出てゐると思ひました。君は君の血や涙や君の全生活を作の内にしぼりだすことの出來る少數な人の一人と思ひました。君の書をこの前拜見した時もさう云ふ氣がしましたが、今度君のお書きになつたものを見て矢張りあゝ云ふ書をかいた方の作だと思ひました。私は同情はぬきますが御不自由なのによくあれだけかけたと思ひました。

廣次　ものになつてゐるでせうか。

西島　なつてゐると思ひます。まだむらな處がないとは云へませんかもしれませんが、何しろ君の心の苦しみがよく出てゐます。さぞ苦しかつたらうと思はれます。

廣次　本當にもう少しで自殺しやうかと思ひました。生きてゐるのが不思議なやうです。戰爭で死なゝかつたのも不思議ですけど、盲目になつてから自殺しなかつたのも不思議です。妹が居てくれたからです。私がどんなにみじめに生きて居ても、妹は私の生きてゐることを喜んでくれました。さうして私の死ぬことを望んではくれませんでした。私がどんなに癇癪を起しても妹は私を憎んではくれませんでした。私は他人手を借りないでは生きてゆかれない人間になりました。今から盲目の字をならふ氣もしませんし、ならつたつてそれを目あきの字になほすのには他人手を借りなければなりません。本をよむのでも盲目の本と云ふものには碌な本はないと思ひますからね。矢張り讀んでもらはなければなりません。その癖私の頭はへんに頑固に出來てゐますので、自分のよみたい

もの切り讀めない質なのです。それに自分の生きてゐることが他人に迷惑をかけることになるのですから、氣がひけていけません。幸ひ妹が居てくれるので助かつてゐます。もし妹が居ませんでしたら私は生きてゐることに希望は爪の垢程ももつことは出來なかつたでせう。

西島　本當に御同情します。本當に隨分苦しかつたでせう。

廣次　何しろ一人前の人間になるのが大變な努力なのですからね。塙保己一なぞと云ふ人のことがこの頃よく考へられます。まるで忘れてゐたものですが。さうして慰められてゐます。馬琴だとかミルトンだとかも盲目になつて、自分のかきたいものを口述したさうですが、齢とつて仕事をし上げて皆から尊敬されたあとで盲目になつたのですからさう慰めにはなりませんが、ヘレン・ケラーのやうな人のことを考へると鼓舞してくれます。盲目になつてしまつた以上、今更不平を云つても始まりませんから、どうかして盲目でも出來る仕事で、自分の運命を切り開いてゆきたいと思ひます。根氣では他人に負けない心算です。死ぬ覺悟は出來てゐます。どうにかしてものにならうと思つてゐます。なりたいと思つてゐるのです。ですが、自分ではまだよくわからないのです。畫の方だと、少しはわかつてくれたのですが、畫も五六年はわかりませんでした。やつとわかりかけた時に目をやられたのですから、少し可哀さうな氣もします。今だつて頭の内には時々畫が出來ることがあるのです。夢のなかでよく畫をかいてゐる夢を見て目を覺して怒鳴ることもあります。あの小說の內にもかきましたが聾が作曲は出來ても、盲目で畫はかけない氣がします、色をつかはない簡單な畫ならかけてもいゝと思ふことがありますが、思ふやうにはゆきません。それでも時々こんな畫を退屈まぎれにかいて見ることもあります。自分には見えませんが。（さつきの畫を見せる）

西島　之は自畫像ですね。

廣次　えゝ。まだ目のあいてゐる時のです。目に未練があるわけではないのですが、と云つてないことはありませんが、目がつぶれてからの自分の顏は見えませんからね。

西島　あゝ。之は高峯の細君ですね。

廣次　わかりますか。

西島　よく似てゐます。

廣次　もう子供が出來たさうですね。

西島　えゝ。

廣次　隨分變つたでせう。

西島　いゝえ。さう變つてはしません。之は妹さんのですか。

廣次　さうです。

西島　之によく似た貴君のおかきになつた油畫をもつてゐます。

廣次　さうですか。

西島　高峯の細君からもらつたのです。

廣次　今見たらたまらない畫でせう。

西島　そんなことはありません。今でもいゝ畫だと思つてゐます。

廣次　せめてもう十年も畫がかけたらと時々思はないことはありません。しかしもうあきらめてはゐます。

西島　あの小説にかいてありましたが、畫は大概お破りになりましたか。

廣次　えゝ大概小刀で切りさいてしまひました。

西島　あすこを讀んだ時惜しい氣がしました。

廣次　その方の未練はありません。あんなものが殘つてくれたつて何にもなりませんからね。どつちにしろ知れたものですからね。（間）それから少しあつかましい氣もしますけど、私のものを貴君の雜誌にのせて戴くわけにはゆかないでせうか。

西島　私一人の考へではおのせしたいと思ひますが、私一人の考へでもゆきませんから。

廣次　無理にとは申せませんけど、よかつたら載せて戴けるとありがたいのです。

西島　なるべく載せるやうに骨折つて見ませう。しかしあの作一つでさう反響を得ることは出來ないでせう。

廣次　それは私も知つてゐます。

（靜子お茶と菓子をもつて登場。）

廣次　靜子かい。

靜子　はい。

廣次　妹です。

靜子　よくいらつしやつて下さいました。

西島　始めて。

（二人挨拶する。靜子お茶をついですゝめる。）

靜子　よく來て下さいました。（間）御返事がないので兄は心配してをりました。

西島　旅行をしてをりましたので、今朝拜見しましたので早速お伺ひしたのでした。

靜子　兄のものはどうですか。

西島　いゝものだと思ひました。

靜子　それは本當で御座いますか。

西島　お世辭は申しません。

靜子　出して戴けますか。

西島　友と相談して見ませう。

靜子　あなたお一人のお考へではどうお思ひになりますの。あなたお一人のお考へでどうにでもなるのでは御座

いませんの。
西島　さうもゆきません。
靜子　それでもあなたが是非出さうとお思ひになれば、ゆかないことはないのでしよ。
廣次　靜ちやん！
靜子　それでも、私今出すとおつしやつて戴かないともう出して戴けないやうな氣がするのですもの。
廣次　そんな勝手なことを云ふものではないよ。
靜子　私はいゝものだと伺つた以上は日參をしてゞも出して戴きますわ。皆さんはあんな盲目に何が出來ると云つていらつしやいますわ。それに私一寸心配なことも御座いますのよ。二人が氣兼ねして一寸の時間をぬすんでやつと書きあげたものが、西島さんのお考へ一つでどうにでもなるのだと思ふと、私おすがりしたい氣もしますわ。それも物になつてゐない物なら仕方がありませんけど。
廣次　默つておいで。西島さんの方にもいろ／＼御都合がおありになるだらうし、あの作は出したつてどうせ思ふやうな反響があるわけもないからね。それに私達の仕事はゆつくりするより仕方がないからね。
靜子　お兄さん。そんな呑氣なことを云つてはゐられませんのよ。私、もしかしたら近い内におよめにゆかなければならないかも知れませんのよ。
廣次　そんなことが。
靜子　それでも叔母さんがさうおつしやいましたわ。叔父さんが大變お世話になつてゐる方の息子さんが私を是非もらひたいとおつしやるのですつて、叔母さんは喜んでいらつしやいましたわ。私のことを果報者だとおつしやいましたわ。
廣次　靜ちやん。お前はゆく氣があるのかい。
靜子　いゝえ。私はお兄さんのわきを今はなれることは出來ませんとさう申しましたの。お兄さんのお仕事の手だすけをしなければなりませんからとさう申しましたの。
廣次　さうしたら。
靜子　とも倒れになるやうなことはよせとさうおつしやいましたわ。（忍び泣く、暫く沈默）
廣次　お前は本當にゆきたくないのか。俺のことを思つてくれるのは嬉しいけれど、俺は俺で又どうにかするだらう。俺の仕事は氣長な仕事だ。どうにかするだらう。お前は俺の犠牲にならない方がいゝ。
靜子　本當に私はゆきたくは御座いませんの。お兄さんのお傍にゐたいの。
廣次　（嬉しさをかくし切れず）それは本當か。さうしてお前は何と返事をしたのだ？
靜子　もう二三年待つて戴きたいと申しましたの！

廣次　さうしたら？

靜子　待てばきつと結婚するかとおつしやつたの。

廣次　お前は何と云つた？

靜子　それはわかりませんわ、と申しましたの。

廣次　さうしたら。

靜子　さうしたら大變お怒りになつて、先樣にそんな御返事が出來ますか、とおつしやいますの。それで私それならお斷りして下さいと申しましたの。さうしたら叔母さまは本當にお怒りになりましたの。さうしてそんな御返事が出來ますか。さうしてもし叔父さまがそれで免職をされたらどうしますとおつしやるの？

廣次　お前どうした。

靜子　そんなことはあるわけはありませんわと申しましたの。

廣次　うん。

靜子　さうしたら叔母さんは、いえさうにきまつてゐますとおつしやるの。

廣次　それから。

靜子　私、泣いてしまひましたの。

廣次　（歎息をつく）あゝあ。

靜子　叔母さんは自分の娘たつたらこんな氣ずゐな眞似はさせないとおつしやいましたわ。

西島　失禮ですがその話の方のお名前を聞かして戴くことが出來ますか。

靜子　相川とおつしやるのです。

西島　相川三郎と云ふ方では御座いませんか。

靜子　さうで御座います。御存知でいらつしやいますか。

西島　その人なら知つてゐます。

廣次　どんな人ですか。

西島　正直に云ひますと、僕より六つ下の級にゐた人でよくない噂で退校された人です。

靜子　そんな風評は存じてゐます。叔父さんがよく惡口を云つていらつしやいました。相川さまも三郎さまにはお困りでいらつしやると申してゐました。

廣次　そんな人の處へゆけと叔母さんが云ふのか。

靜子　さもなければ私のやうなものを相川さまでもらひたいとはおつしやりはしませんわ。

廣次　よし。それならどうしてもいつてはいけないよ。

靜子　それでももし叔父さまが免職をさせられたら。

廣次　そんな不當なことで免職になつたつて。

靜子　それでもその時私達はどうして生きてゐられますの。

廣次　そんな話はもうよさう。（西島に）いやなお話しばかりおきかせしました。こんな話はお聞かせしたくはな

かつたのですが。

西島　いゝえ。ちつとも。

靜子　兄の小說は出してはいたゞけませんでせうか。

西島　出しませう。原稿はお返ししやうと思つて持つて參りましたが、それならば戴いてゆきます。

靜子　失禮なこと許り申しました。御作をよく拜見して居りましたので、もうよく知つてゐて下さる方のやうな氣がしますもので、私の方許りで存じてゐると云ふことをつい忘れますので。

西島　いゝえ。私の方でも野村さんのことは勿論、あなたのことも存じてゐます。野村さんのおかきになつた貴君の肖像は私の室にかゝつてをります。

靜子　まあ！兄のかいた畫をかけてゐて下さるのですか。

西島　えゝかけてゐます。高峯の細君からもらつたのです。

靜子　高峯さんの綾子さんはよくいらつしやいますか。

西島　えゝ。妻とも友達なので。

靜子　お逢ひになつたらよろしくおつしやつて下さい。

廣次　高峯君にあつたら僕からもよろしく云つたとおつしやつて下さい。もう少し元氣になつたらお目にかゝりたいと思つてゐるとおつしやつて下さい。今まだ畫の話をするのがつらい氣がしますから。

西島　さう申しませう。それなら失禮します。それからこんなことを申すのも變ですが、御入用の節は餘分のことは出來ませんが、どうか御遠慮なく。

廣次　ありがたう。又よかつたらこんな處ですが、どうか。

西島　ありがたう。私の處にもおいで下さい。少しは蓄音器のいゝ盤も御座いますから。

廣次　ありがたう。

靜子　今日來て下さつたのでどんなに兄が喜んだで御座いませう。どうか又おこりなくおいで下さい。

西島　ありがたう。

廣次　お送りして上げておくれ。

靜子　はい。

西島　さよなら。

廣次　さよなら。

（西島と靜子退場。靜子登場。）

廣次　歸つたかい。

靜子　お歸りになりました。お兄さんのお作がいゝと云ふことを聞いて私本當に安心しましたわ。

廣次　さうかい。俺は西島君があの小說を出すやうになつた動機が少し氣に入らないのだよ。しかし今そんなことを云つてゐる時でもないが。西島君はお前がたのんだから出す氣がしたのだ。お前が醜かつたら西島君は僕の小說を出すとは云はなかつたらう。

靜子　お兄さんはすぐそんな厭味なことをお考へになるのね。

廣次　しかしそんなことはどうでもいゝ。結婚の話と云ふのは本當なのかい。

靜子　本當ですとも。

廣次　さうして何時までに返事をすればいゝのだ。

靜子　早い程いゝのださうです。もう向うではくるものにきめていらつしやるのださうです。是非くれ、不服はないだらうね。とおつしやつたのださうです。

廣次　そんな馬鹿なことが。

靜子　それでも相川さまはそれは頑固な方なのですつてね。自分の云ひ出したことは理でも非でも通さうと云ふ方ですつてね。少くも下なものに對しては。さうして叔父さまが本人に聞いて見ますとおつしやつたら、君の處の食客ぢやないか。本人に相談をする必要が何處にあるのだ、それとも君は三郎に不服があるのか、とおつしやつたさうです。

廣次　叔父さんはどうしたのだ。

靜子　叔父さんはそれでもはつきりした返事はなさらなかつたのださうです。すると君の處にゐる娘をどうしてもくれなければ、その結果はどうなるか君は知つてゐるだらうね。君は働があるから僕の會社でつかつてゐると思つてゐるのか、まあ考へておいてもらひたい。とさう云つたさうです。

廣次　そんなことを云つたのか。なぜさつき其處まで云はなかつたのだ。さうすれば少しは金のさいかくをしてもらつて最後の決心をしなければならなかつた。

靜子　最後の決心とは。

廣次　二人で何處かで家をもつのだ。

靜子　そんなことは出來ませんわ。

廣次　そんならお前はどうする心算だ。

靜子　どうしていゝかまるでわかりませんの。お兄さんは私がゐなくなつたらどうなさつて。

廣次　お前はゆく氣があるのか。

靜子　お兄さんは。

廣次　俺はゆくことは斷じて反對だ。しかし俺には不服を云ふ資格はない。

靜子　私だつてさうですわ。

廣次　お前は俺がゐなかつたらすぐ承知をするだらう。

靜子　それは承知するかも知れませんわ。私一人さへハイと云へばそれでいゝのですからね。

廣次　だけど俺がゐる。俺の仕事がある。承知してはいけないよ。

靜子　はい。

廣次　今お前がゐなくなつたら俺の希望は消えてしまふよ。もう一歩と云ふ處だからね。お前がどうしてもゆきたいと云ふ處なら俺はあきらめるかも知れない。だが今度のことはお前も不服なのだからね。お前も本心は叔父さん一家の犧牲になりたくないのだらう。
靜子　はい。本當は。
廣次　俺の犧牲になつてくれろ方を喜んでくれるだらう。俺は無理なことは云はないつもりだ。お前の一生を犧牲にしやうとも思はない。俺はお前の爲にも仕事をしたいと思つてゐるのだ。お前を喜ばしてやりたいと心の底では思つてゐるのだ。この三四年の間お前にかけた苦勞は非常だつた。俺はそれを自分の仕事で酬いたく思つてゐたのだ。さうしてその希望がかすかではあるが見えて來たと思つてゐたのだ。俺はそれを喜んでゐたのだ。俺は自分の爲にも仕事の成功を願つてゐる。しかしお前の爲にも願つてゐた。お前こゝにおいで！　お前には本當に苦勞をかけた。さう何時迄も苦勞はかけない。俺も男だ。（靜子の目に指をさはり）お前は泣いてゐるのか。今は泣く時ではない。心を鬼にする時だ。
靜子　それでも免職になつたら叔父さまもお可哀さうですわ。本當にいゝ方なのですもの。
廣次　さうか。矢張りお前はゆきたいのだな。ゆきたければゆきたいと云へ。
靜子　お兄さん。何をおつしやるの？（泣く）
廣次　ゆきたくないのか。それなら泣くことはないぢやないか。力のない意氣地なしと、不正な人間の犧牲になつては馬鹿氣てゐるよ。
靜子　それでもお兄さん、叔父さんが免職になつたら、どうして食つてゆくお心算。
廣次　二人だけならどうにかやつてゆける。西島さへ本氣に力を入れてくれゝばどうにかなるにちがひない。しかし一體相川はなぜそんなにお前をもらひたがるのだ。お前は相川に逢つたことがあるのか。
靜子　えゝ。十日程前に電車でお目にかゝりましたの。叔母さんのお伴して電車にのりましたら三郎さんがお友達と御一緒にいらしつたのです。
廣次　敬語なんかつかうのはよせ、馬鹿？　それで。
靜子　御怒りになつてはいやですよ。それで叔母さんが丁寧に御挨拶をなさつて私をこれは私の家に厄介になつてをります姪で御座います。御見知りを願ひますとおつしやつたの。
廣次　それでお前は丁寧にお辭儀をしたのか。顏を赤くして。（間）それが氣に入つたのだ。
靜子　それからもつといやなことが御座いますの。

廣次　なんだ。
靜子　私、一昨日叔父さんの御伴して相川さんの所へ參りましたの。
廣次　なぜ行つたのだ？
靜子　私何にも知らなかつたのです。たゞ叔父さんの御伴をして行つたのです。行く時叔母さんが何時になく御機嫌がよくつて、着物のことやお化粧のことをやかましくおつしやるので變だとは思つたのですが私のことでしたから、別に氣にもかけずに御伴して行つたのです。途中まで行くと叔父さんが一寸相川さまの處へおよりしやうとおつしやるのです。私は何氣なくついてゆきましたの。立派なお家でしたわ。いゝ趣味の家とは思ひませんでしたが、如何にも金がかゝつたと云ふお家でしたわ。
廣次　さうして相川のお父さんやお母さんにもあつて丁寧にお辭儀をしたのだらう。
靜子　えゝ。しましたの。
廣次　馬鹿！
靜子　しかしそれだけならまだいゝのです。もつとずつとひどいことが御座いました。今になつてはつきりわかります。
廣次　どうしたのだ？
靜子　湯に入れとおつしやつたのです。
廣次　それは本當か。さうしてお前は入つたのか。
靜子　叔父さまも是非入れて戴くといゝ、結構なお湯だからとおつしやつたのです。
廣次　それでお前は入つたのか。
靜子　はい。
廣次　一人でか。
（靜子泣く。）
廣次　泣いてゐてはわからないぢやないか。誰と入つたのだ。
靜子　あとで奥樣が入つていらつしやいましたの！
廣次　馬鹿！　馬鹿！　お前は恥知らずだ。
靜子　さうして私が湯から出ました時、其處に三郎さまが何氣なく立つていらつしやいました。
廣次　お前はどうしたか。
靜子　私はまさか故意とだとは思ひませんでした。あつと申しました。その時三郎さんはあわてゝお逃げになりました。
廣次　さうしてお前は御かげでいゝ氣持になりましたと禮を云つて歸つて來たのか。
靜子　はい。
廣次　俺が盲目にならなかつたらそんなことはさせなかつた。俺が西洋に生れてゐたら三郎と決鬪してやる。たゞ

はおかない。泣かないでもいゝ、策略にかゝつたのだ。それを聞いたら俺はなほ承知は出來ない。皆くるだ。もしお前が相川の處へ行くならその前にこの俺を殺してくれ。あんまりだ。あんまりだ。

靜子　それでも私よりもつと可哀さうな女がいくらでもありますわ。

廣次　俺は恥知らずにはなれない。いゝ。其處までしてくれたのは俺達にとつて仕合だつた。何時までも負けてはゐないぞ。俺だつて男だ。畫にかけては天才だと迄云はれた人間だ。石にかみついたつて負けてはゐない。行かう。行かう。

靜子　何處へ。

廣次　西島君の處だ。

靜子　何しに?

廣次　お前も來い。

靜子　何しに。

廣次　お前は默つて叔父さんの伴をするのぢやないか。默つて俺のあとをついておいで。

靜子　はい。

（二人退場。）

——幕——

第二幕

西島の室

二階蓄音器あり。壁に畫がかけてある。西島帽子をかぶつたまゝ登場、帽子を疊の上になげる。

芳子　おかへり遊ばせ。どうでした。

西島　行つてよかつた。いろ〳〵のことを考へさせられた。

芳子　目はまるでお見えにならないの?

西島　さうだ。

芳子　隨分御不自由でせうね。

西島　たゞの人間だつて目が見えなくなつてはたまらない。まして畫かきだつたのだからね。

芳子　もう畫はかけませんわね。

西島　それはかけないさ。

芳子　あなたがいらしつたので喜んでいらしつて?

西島　喜んでゐた。しかしそれ處ではないのだ。

芳子　何かあつたのですか。

西島　あゝ。妹に縁談が起つてゐるのだ。

芳子　妹さんがゐなくなつたら不自由でせうね。

西島　それはどうすることも出來ないだらう。筆記する人をやとふことも出來ないだらうし、讀んでほしい本をよんでもらふことも出來ないからね。

芳子　妹さんはこの畫に似てゐますか。
西島　之よりは大人らしくなつてゐるが、よく似てゐる。
芳子　それでは綺麗でせうね。
西島　まあ綺麗な方だ。
芳子　それでは行つた甲斐がありましたね。
西島　馬鹿！
芳子　ですが、およめにゆくのではお困りでしよ。
西島　それがどんな處へゆくのだと思つてゐる。先日芝居の歸りに電車にのつた時、俺の前に酒に醉つて居眠りしてゐる奴がゐたらう。いやな顔した。
芳子　道樂者らしい。
西島　俺が相川三郎と云ふのらくらものだと云つたらう。
芳子　えゝ。
西島　その人の處へゆくかも知れないのだ。
芳子　どうしてゞす。
西島　あいつのお父さんのやつてゐる會社に、野村の叔父さんが出てゐるのだ。野村の叔父さんと云ふのはあんまり働きのない奴らしいのだ。それで相川のおぼしめしにそむくと、職を失ふかも知れないのだ。それで是非野村の妹を相川の三郎にやりたく思つてゐるらしいのだ。
芳子　野村さんはそれを承知なさつてゐるのですか。
西島　承知はしないさ。いくら盲目になつたつて、野村は男だからね。だけどしまひには承知しなければならないと思ふのだ。野村は叔父の處に半分食客になつてゐるのだからね。
芳子　野村さんのお父さんやお母さんは？
西島　もう兩方ともゐないのだ。
芳子　それでは隨分お困りでせうね。
西島　お前が野村の妹だつたら相川の處へゆくかへ？
芳子　あんな人の處はまつぴらですわ。見た處から淺薄な顔してゐるのですもの、それにあんな下品な顔は閉口ですわ。
西島　お前がもしあの人にどうしてもゆかなければならなかつたらどうする？
芳子　逃げますわ。
西島　俺は道々考へた。あんな男の細君になるよりは淫賣婦になる方がいゝと思つたよ。まだ自由があるからね。あゝ云ふ奴と一生一緒にゐると云ふことはたまらないことだ。
芳子　本當にさうですよ。
西島　野村の妹もとんでもない奴に見こまれたものだ。
芳子　どうにかならないでせうか。あの人を見なければさうも思ひませんが。少し御氣の毒ですわね。
西島　野村が目をあいてゐたらどうにか出來たらう。しか

しどうせゆくものなら目が見えない方が野村にとつて仕合かも知れない。

芳子　妹さんはお氣の毒ですわ。どうにかならないでせうか。

西島　矢張りまだ金の世の中だからね。それに野村の妹のやうな位置が一番いけないのだ。もつと貧乏してゐればまだどうにかなるのだ。しかし野村の位置ではむづかしい。叔父さんに働きがあつたとしても職を失なつたら一寸めんくらうだらう。まして働きがないのだからね。

芳子　隨分お氣の毒ね。

西島　俺は道々どうしたらいゝかと考へたよ。しかし俺には考へられなくなつた。野村は金をとることは一寸出來ないからね。叔父さんが職を失なつたら、それも自分の妹の爲に職を失なつたのだからね、もう叔父さんの世話にはなつてゐられないからね。金がなければ今の世には生きてゆかれないからね。

芳子　それではどうしても相川と云ふ人の妻にならなければならないでせうか。

西島　まあ、暫らくあいまいにしておくより仕方がないね。その內に野村が少しでも有名になれば、又どうにかならないと云ふこともないからね。しかしそれもあてにはならない話だが、俺は野村の處へ行つて野村が目の不自由なこと許りに拘泥して、目さへあれば目さへあればと思つてゐるのを見て自分に目のあるのを今更に勿體なく思つたよ。さうして野村の兄妹が金の爲に苦しんでゐるのを見ては、なほ自分がすまなく思つたよ。本當に野村は運のわるい奴だ。さうしてその運ととつくみあひをしてゐる野村の有樣を見ると悲壯な感じがする。勝たしてやりたいと云ふ氣がする。

芳子　本當に勝たして上げたい氣がしますわね。

西島　この小說にもかいてある樣に、實際畫をかいてゐる夢を見て泣いたり、疳積を起したりしたらしい。どうかして起き上らう起き上らうとしてゐるらしい、それに較べると俺なんか勿體ない程運がいゝ、俺の境遇にゐて何かしなければ餘程の馬鹿だ。俺はいゝ土地におちた種だ。さうして最も確かに誰に頭をおさへられることもなく生長して來た。野村はその反對だ。少し芽を出しかけるとすぐ運命にたゝきつけられた。畫かものになりかけた瞬間に戰爭にとられて盲目になつた。やつと文學をやりだして、希望が少し見えだした時は妹を奪はれかけてゐる。あんまりいゝ目をもちすぎたので恨まれたやうに、今度はあんまりいゝ妹をもつてゐたので恨まれたのだ。

芳子　原稿は持つて歸つていらしつたの。

西島　あゝ。今度雜誌に出すことにしたのだ。野村の妹が

是非出してほしいやうに云つたので。

芳子　本當に出してお上げなさいよ。

西島　だけど出したつて反響はないよ。そればかりではない。きつと悪口を云はれるにきまつてゐる。何時になつたら原稿でくらせるやうになるかわからない。野村は之から隨分苦しまなければならない。

芳子　何をしても隨分大變ですわね。

西島　當人になれば又決心がちがふだらうが、はたで見ると心配なものだ。

芳子　誰かいらつしやいましたわ。

西島　高峯夫婦が來たのだらう。

芳子　（窓からそとを見）さうですよ。

西島　くるだらうと思つてゐた。（窓にゆき聲かける）おい。

（二人退場、間もなく西島と高峯二人登場。）

西島　君がくるだらうと思つてゐた。

高峯　旅行はどうだつた。

西島　別に面白いこともなかつた。それより今日面白い人にあつた。

高峯　誰に？

西島　野村に。

高峯　野村？　盲目の？

西島　あゝ。

高峯　どうして？

西島　昨日遲くかへつて來たので、今日不在に來た手紙を見てゐたのだ。すると女の手の手紙があるのだ。見ると野村廣次拜とかいてあるのだ。僕ははつとした。野村の妹がかいたのだなと思つたのだ。僕はすぐ封をあけてよんだら簡單に小說をかいたから見てくれ。もし雜誌にのせて戴けるとありがたいとかいてあるのだ。僕はおどろいてすぐ小說をよんで見た。野村の妹がかいたにちがひない。綺麗に淸書してあつた。僕はよんで泣いてしまつた。

高峯　よくかけてゐるかい。

西島　まだむらはあるけれど、野村の氣持はよくわかる。自分のことがかいてあるのだ。妹の大きい畫をかいてゐる時に召集されたことや、盲目になつて家に歸つて來て、癎癪を起して畫をやぶくことや。妹達にどなりつけることや、絕望して死にかけることなぞが書いてあつた。君のことも少しかいてあつた。

高峯　なんて？

西島　君がいゝ畫をかいたと云ふことを聞いて心細く思ふことがかいてあつた。

高峯　綾子のことは？

西島　別に君の細君のことはかいてなかつた。しかし細君の簡單な畫をかいてゐたつけ。

高峯　畫をかいてゐた？

西島　どうせ目が見えないのだから簡單な畫きりかけないらしいが、自分の顏や、妹の顏もかいてあつたつけ。目やなんかの位置が少し狂つてはゐたが、中々似てゐた。

高峯　妹は中々綺麗になつたらう。

西島　あゝ隨分綺麗になつてゐる、身なりはかまはないけれども。

高峯　あのくらゐ綺麗な女は珍らしいだらう。

西島　この畫によく似てゐる。本當に美しい。それに處女らしい淸さがある。

高峯　何處にゐるのだい。

西島　五六町はなれた處だ。

高峯　だうりで何時か妻がこの近處であつたと云つてゐたつけ。

西島　さうだ。君によろしく云つてゐたつけ。君に逢ひたいけれど、逢ふのは矢張り恐ろしいやうなことを云つてゐたつけ。畫の話をされるのが恐ろしいやうなことを云つてゐたつけ。

高峯　それはさうだらう。盲目になることは考へるだけでも恐ろしいからね。僕達の世界は半ば以上目の世界だからね。色や光が見えなかつたらたまらない。

西島　ミケルアンジエロやレンブラントの畫も見るわけにはゆかない。僕のかくものを妹がよんで聞かせるらしいが、天才の作品を讃美してゐる處をよむ時は妹の人も苦しいだらう。

高峯　こゝにある之等の畫が見えないのだからね。さうして自分のかいたものをもう見ることが出來ないのだからね。あいつは特別に美しい目をもつてゐた男だつた。俺の妻なんかはよくそれを云つて惜しがつてゐた。不幸な奴と云ふものはあるものだね。

西島　だけど野村だから起き上つて來たのだね。

高峯　さうだ。あいつは實際意志の強い、負け嫌ひな男だからね。あのくらゐ負け嫌ひな男は珍らしいだらう。徴兵にとられて出て來た時の勉強と來たら大したものだつた。何時行つても畫をかいてゐた。俺は畫かきだ。畫さへかけばいゝのだ。しじゆうあいつはさう云つてゐたそのくせ人が一寸でも惡口云ふとすぐ喰つてかゝつた。一寸でも默つてはゐられなかつた。目さへやられなければ今時分可なりの仕事をしてゐたらう。僕も絶えず野村に刺戟をされたらう。今の僕よりも大きい仕事を少しはしてゐたかも知れない。思へば戰爭と云ふ奴は恐ろしい。

西島　しかし野村の不幸はそれ許りではないのだよ。今ま

た大きい不幸が野村の妹を目がけておちかけてゐるのだ。僕はそれで隨分いろ〳〵のことを考へさせられた。
高峯　どんなことが起りかけてゐるのだ。
西島　野村の妹を相川三郎と云ふ奴がもらひたがつてゐるのだ。
高峯　相川でもらひたがるのなら野村の叔父さんは大喜びだらう。
西島　三郎と云ふ人を知つてるかい。
高峯　知らない。
西島　本當ののらくらものなのだ。手くせがわるいと云ふので學校を逐ひ出された奴なのだ。こないだ電車でのりあはせたが、誇張なしに見てゐると胸がわるくなつた。精神が少しも顏面に生きてゐないのだからね。
高峯　そんな奴が野村の妹をもらひたいと云ふのか。
西島　さうだ。恐ろしい侮辱だ。
高峯　世間にはそんなことが澤山あるだらうね。
西島　それはあるだらう。しかし兩方知つてゐるだけに僕は今更に恐ろしい氣がした。それに野村だつて今妹を奪はれるのはどんなに苦しいか知れやしない。妹がゐればこそ仕事が出來るのだからね。實際野村も云つてゐたが、妹がゐるので生きてゐられたやうなものだ。それに今度の小說だつて妹がゐたから書けたのだ。それに妹がゐなくなつたらどんなに不自由かわかりはしない。野村にとつて、妹は目であり、杖であり、唯一の相談相手であり、唯一の喜びと悲しみを別つものだ。
高峯　野村はその話を聞いてどうしたのだ。
西島　どうしたか、僕のゐる時野村の妹がその話を聞いて來たのだ。さうしてそのことを云つたのだ。野村は隨分おどろいたらしい。しかし妹がゆきたい處ならゆけと云つてゐた。しかし相手がいやな人間だと聞いた時、決してゆくなと云つた。しかし叔父さんが免職された時のことを考へさせられた時、野村は目に淚をためて默つてゐた。
高峯　さぞつらかつたらう。今の世は實際金の世の中だ。金がなければどうすることも出來ない。
西島　本當だ。僕も今更に金の力と云ふものゝ馬鹿に出來ないことを知つた。どうにかなると云つたつて、どうにもならないのだからね。野村も自分は一人まへの人間ぢやない。他人に慈善事業をさせて生きてゆかなければならないのだからたまらないと云つてゐたが、實際さうだ。この問題がもう二三年あとに起つたならばまたどうにかしやうがあつたらう。今起つたのは少し無慈悲だ。
高峯　だけど、もう少し前に起つたらもつと可哀さうだつた。
西島　僕はかう云ふことも考へてゐるのだ。僕が偶然行つ

てゐる時にこの話が起つたのだらう。それは野村の運命に僕が手をさへなければならないからではないかと思つたのだ。いくら考へても僕はあの妹を相川にやるのは不服なのだ。僕が知らなければいゝ。知つてゐながら見す見す野村の妹を相川にやるのはあまり意氣地がなさ過ぎるやうな氣もするのだ。僕ももう卅三だ。二三年前の僕ではない。どうかすれば金がとれないこともない。僕は助けられるものなら助けてやりたいと云ふ氣もしてゐるのだ。

高峯　本當に助けられるものなら助けてやるといゝのだ。

西島　處がいろ／＼考へたが考へれば考へる程心細くなつて來た。僕は兄から毎月五十圓もらつてくらしてゐるのだ。僕は時々金まうけをするけれど、それは一ヶ月苦しんでやつと三十九圓六十錢なのだ。さうしてとつた金はマイナスの方に消えてしまふのだ。僕の處へでも時々金の無心を云つて來る人がある。僕は五圓以上人にやれたことは殆んどない。さうして五圓でも人にやると月末にきつと五圓くらゐ金に困るのだ。僕は死にもの狂ひになればどうにかなると云ふ氣のする時もあるが、今は死にもの狂ひになつてもどうにもならない氣がする。いやな人間にでも頭をさげてゆけばどうにかなるものかも知れない。しかしそれは耐へられない。僕は文壇にでも少しは名が知れてからもう五年になるがさうして自分は決して怠けた心算はないがそれでさへ金とはこんなに縁がないのだ。だから人を二人養ふと云ふことはとても出來ない。又野村が之から文學で食つてゆくと云ふことはなほ望めないことだ。僕は殘念だけれど、之は救はれないと思つた。矢張りしまひには野村の妹は相川の處へ自分から進んでゆくことになると思つた。野村自身の爲にもさうしなければならないときつと僕は思ふにちがひないと思つた。さう思ふことは耐へられない侮辱だ。僕は相川の奴が思ふやうになると思つてゐるだけでも癪にさはるのだ。まして事實思ふやうになるのはたまらない。それが野村のやうな天才とまで云はれた、しかも美しい清い妹なのだから。

高峯　本當にどうかしてやりたいね。さもないと野村はあんまり可哀さうだ。

（芳子登場。）

西島　何か用か。

芳子　蓄音器をやつてはいけなくつて？

西島　やつてもいゝ。

芳子　こゝでやつてもよくつて？　下にもつてゆくのは厄介ですから。

（高峯に。）

西島　いゝね？
高峯　僕も聞きたいと思つてゐるのだ。
西島　いゝよ。
芳子　はい。（退場）
西島　何しろ金の力と云ふものがさう云ふ所まで跋扈するのは癪にさはるよ。人の一生に無遠慮にさはつてくるのだからね。
高峯　本當だ。
西島　本當にどうにかしてやりたい氣がするよ。どうにもならないと云ふことがはがゆくつて仕方がない。どうにもならないと云ふのは云ひわけのやうな氣もする。
（西島の妻。高峯の細君「綾子」登場。）
綾子　野村さんにお逢ひになりましたつて？
西島　えゝ。
綾子　野村さんは本當にお氣の毒ですね。
西島　本當に氣の毒です。
綾子　靜子さんも御氣の毒ですね。
西島　本當です。
綾子　運のいゝ方は何處までも運がおよろしいし、運のおわるい方は本當に何處までも運がわるいのですね。
西島　本當にさうです。野村君も目さへわるくなければ運のいゝ人間になれたのでせうが。

高峯　しかし野村だから其處まで來られたのなら今に起き上るだらう。
綾子　小說が御座いますの。
西島　えゝあります。今度雜誌に出さうかと思つてゐるのです。
（原稿を綾子に渡す。綾子ひろひ讀みをする。）
（芳子、蓄音器をよくしながら。）
芳子　何をしませう。
綾子　何んでも。本當に御氣の毒ね。
高峯　讀むのはよせよ。
綾子　靜子さんに緣談がおありになるのですつて。
西島　えゝ。
綾子　相手の方が面白くない方なのですつて。
西島　えゝ。
芳子　何をしませう。
綾子　何んでも。
（女中登場。）
女中　盲目の方が美しい女の方といらつしやいました。
西島　名は何と云つた。
女中　野村とかおつしやいました。
西島　野村が來たのだ。こゝに通していゝかい。
高峯　野村さへよければ。しかし用ぢやないか。

西島　開いて見よう。

綾子　階子段をお上りになるのは厄介でせう。

（西島と芳子退場。）

高峯　隨分野村に逢ふのは久しぶりだ。

綾子　本當でございますね。

高峯　戰爭にゆく前に逢つた切りだ。その後向ふからも音さたがなかつたから。（間）お前は。

綾子　私も。一度逢ひにゆきましたら、誰にも逢ひたくないとおつしやつて、その內に默つて故鄕にいらしつてしまつたので。

高峯　お前は野村を愛したことはないのかい。

綾子　いゝえ。

高峯　厚意は持つてゐたのだらう。

綾子　それは厚意は持つてをりましたわ。

高峯　野村が目さへわるくなかつたら、お前は野村の妻になつたらう。

綾子　そんなことはありませんわ。

高峯　あてになるものか。

綾子　野村さんは私のことなんかなんとも思つてゐませんわ。

高峯　お前の方は思つてゐたのかい。

綾子　私の方も思つてはしませんわ。

高峯　野村はお前を思つてゐたかも知れないよ。

綾子　そんなことはありませんわ。

高峯　しかし野村は今でもお前の顏をかいてゐるさうだよ。

綾子　そんなこと。畫なんかかけるわけはありませんわ。

高峯　だけど西島はさう云つてゐたよ。又簡單な畫なら盲目でもかけるよ。

（階子段を人があがる音がする。二人沈默する。西島をさきに、靜子に手をひかれて廣次登場。女中座蒲團を持つて來る。）

靜子　お兄さま。高峯さんと綾子さんですよ。

廣次　暫らく。

高峯　暫らく。

（四人がお辭儀する。）

廣次　高峯君とは隨分暫らくお目にかゝりませんでしたね。お噂はよくうかゞつてをりました。

高峯　小說をおかきになつたさうですね。

廣次　どうせ恥かしいものです。新まいですからね。

芳子　靜子さん。先日は失禮しました。

靜子　私こそ。あんまり思ひがけない處でお目にかゝりましたもので。

（西島妻。座蒲團とお茶を持つてくる。）

芳子　私はまだ故郷(くに)にいらつしやるのかと思つてゐました。
靜子　父がなくなりましたもので、去年上京いたしたのですが。兄が何處にもお知らせしてはいけないと申しますので。
芳子　蓄音器をいたしませうか。
西島　野村君はどうです？
靜子　聞かして戴きませう。
西島　御用は？
廣次　あとで一寸。
高峯　もしなんなら僕達は下へゆくよ。
廣次　いえ君ならゐて下さつてもかまひません。しかし蓄音器をきかして戴きませう。
靜子　お兄さん、それでもあんまりおそくなりますと。
廣次　まだいゝよ。お前のやうにこはがつたら切りはないよ。
西島　それなら蓄音器は又今度にしませう。
廣次　いゝえ。どうかやつて下さい。
芳子　それなら高峯さんのお好きなのをやりますよ。
高峯　えゝ。
（蓄音器をする。西洋の唄。芳子と高峯一緒にうたふ。）
芳子　うらもやりませうか。
西島　よせよ。
芳子　はい。
西島　お前下へ行くといゝ。
綾子　私も下へまゐりませう。
廣次　どうぞこゝにいらしつて下さい。皆さんに御相談したいのですから。
西島　あれから叔父さんから又お話があつたのですか。
廣次　いゝえ。別に。
西島　私がお伺ひした話だけは、高峯君なんかにお話しました。かまはないだらうと思ひましたので。
廣次　さうですか。かまひません。實はその事で急にもつとお話したいことが出來たのでした。聞けば聞く程相川のやり方が腹が立つのです。人を人とも思はないやり方なのです。それで私は心から腹を立てたのですが、何しろごまめの齒ぎしりで、何にも役に立たないのです。自分の腑甲斐(ふがひ)ないこと許りが目立つのです。どうしていゝか自分にはわからなくなつたのです。厭味ではなしに私のやうな人間は何されても默つてゐなければならない人間かとよく思ひます。私は盲目になつてから疳積も強くなつたかも知れませんが、忍耐がなほ強くなつたと思つてゐます。その必要があつたからです。私は翼を折られた鳥です。いくらどんな目にあつても、恥かしめられても

飛ぶことは出來ません。たゞ默つて運命に手向ふだけです。死なゝかつたのが不思議だつたのですから、それで不服も云へないかも知れません。私はよく自分に「お前は死んだはずの人間だ。生きてゐるのを勿體ないと思へ。さうして忍耐せよ」さう申します。それが私にとつて美德ではないのです。力がないくせに悲壯の感じを味はひたいからです。さうして自分を慰めたいからです。今度のことも考へれば考へる程私は不服の云へない人間です。齒ぎしりしながらそれも仕方がない、と云つて泣きね入りするべき人間です。そのことは重々知つてゐる心算です。それにもかゝはらず私は今度のことは默つて見のがしすることが出來ないのです。妹が可哀さうです。さうして自分が可哀さうです。(間) 尤も自分の可哀さうなだけならば私は辛抱が出來る心算です。又時によつては立派に辛抱してお目にかける心算です。しかし今度のことはたへられません。西島君がおかへりになつてから妹からいろ〳〵のことを聞きました。相川のやり方がひどいのです。妹が。

靜子　お兄さん。あのことは、だまつてゐて。

廣次　いゝぢやないか。云はなければ話がわからない。

靜子　それでもあのことだけは。

廣次　默つておいで。妹が叔母と一緒に十日程前に電車にのつたら、相川にあつたのださうです。さうして叔母に紹介されたのださうです。さうして一昨日叔父が妹をだまして相川の處へつれて行つたのださうです。

靜子　叔父さまがだましたと云ふ程ではありませんわ。

廣次　だましたのと同じぢやないか。默つてお前をつれて出かけて途中で相川の處へ行かうなぞと云つたのは。さうして妹を相川の處へつれて行つたのです。さうして妹は相川のお父さんにもお母さんにもあつたのです。さうして。

靜子　お兄さん。

廣次　一生のことだよ。(間) さうして湯に入れとすゝめられたのです。さうして湯に入つてゐると相川のお母さんが湯に入つて來たのださうです。相川のお母さんはもと玄人だつたさうで、女中と一緒に風呂に入るやうな人なのださうです。つまり妹は體のいゝ體格檢査をされたやうなものなのです。

靜子　お兄さん。本當にお兄さん。

廣次　默つておいでと云つたら。さうして妹が風呂から出ましたら、其處に相川三郎が立つてゐたのださうです。妹は馬鹿ですから、故意だとは思はなかつたのださうです。私はそれを聞いたらもう我慢が出來ませんでした。さもなくとも我慢は出來ないのですけど皆ぐるなので

す。私達を馬鹿にし切つてゐるのです。

高峯　(獨言のやうに)　それは我慢が出來ないのがあたりまへだ。

綾子　あんまりですわ。

芳子　本當に。

西島　許せないことだ。

廣次　私はそれを聞いた時、かう云ふ時西洋人は決鬪するのだと思ひました。又私は相川の體格檢査をしてやりたいと思ひました。しかしそんなにされても私達はどうすることも出來ない氣がするのです。

西島　徵兵の金は。

廣次　それは叔父の手に任せてあるのです、私の實印も、叔父に任せてあるのです。さうしてこの緣をこはせば私達は叔父の家にはゐられません。

西島　(一寸沈默)　かまはないでせう。お出なさい。少しの金ならば當分どうにかなるでせう。その先はその先です。きつと餓ゑ死にはさせません。

廣次　それでも。

西島　そんなことを云つてゐる時ではないでせう?

靜子　叔父さま達はどうなさるでせう?

西島　二月三月返事をまつてもらうことは出來るでせう。斷り切るとどんな邪魔をされるかわかりませんから。野村君の仕事を一先完成するのを口實にして二月か三月家出をしたらいゝでせう。さうすれば叔母さんはぬけぬけくうまいことを云つてくれるでせう。その間に免職されればそれまでゝす。反つていゝかも知れません。さもなくもその内に野村君の仕事も少しは目鼻が出來るかも知れません。その時になつて斷然たる處置をとつても遲くはないと思ひます。返事を急ぐ必要はないかと思ひます。

靜子　お兄さん。そんなら西島さんのおつしやる通りにいたしませうか。

廣次　…………。

靜子　私、それが一番いゝかと思ひますわ。

廣次　それでもあまり蟲がよすぎるからね。

靜子　それでもそれより他、仕方がありませんわ。

西島　金の方の心配ならおよしなさい。明後日迄に三十圓だけはつくりませう。君のかいた小說の原稿料としてとつて下さい。

廣次　それでもあんまりですから。

靜子　お兄さんは急に元氣がおなくなりになつたのね。三十圓はいりませんわね。

高峯　本當にさうしたらいゝでせう。私もいざと云ふ時には出來るだけお手つだひします。

廣次　それでも蟲がよすぎるから。

靜子　それでもお兄さんはその心算でいらしつたのでしよ。

西島　それとも外にいゝお考があれば、御遠慮なく云つて下さい。

廣次　いゝえそれで不服があるのではないのです。なんだか金の無心に來たやうな氣がして氣がとがめるのです。

西島　それならさうしませう。

靜子　十五圓もつくつて戴けばさしあたりよろしいわね。

西島　それならば明後日までに二十圓だけつくりませう。その内に十圓だけつくりませう。決して御心配はいりません。

廣次　それでも戴くわけはないのですから。

靜子　それは戴くわけはありませんけど。

西島　ありますよ。それで君達が相川の手からはなれることが出來れば、私はどんなに嬉しいかわからないのです。お話を伺ふと、貴女がいらつしやらないからと云つて叔父さんが免職されるやうなことはないと思ひます。

高峯　それはきつとそんなことはないね。叔母さんはしつかりものだからね。

廣次　僕もさうも思ふのです。しかし相川の爺が爺だから、しかし僕は叔父の一家のことはかまはないと思ふのです。僕は叔父のことをかまつてゐられる人間でもありませんし、叔父もきつとぐるだと思ひますから勝手にしろと云ふ氣はあるのです。

西島　本當にさうだ。君の叔父さんは君の犧牲にしてもいい方のやうな氣がする。君の方が犧牲になる必要はない。

靜子　それでもお子さんなんかも御座いますから。

廣次　可愛氣のない子ぢやないか。俺が盲目だと思つて人の前にそつと來て不意に耳のわきでラッパをふいたり、人が見えないと思つて、赤んべをしたり、なぐる眞似をしたりひどい時には小便をひつかける眞似までする。話にならない。

靜子　それでも子供が二人よれば仕方がありませんわ。惡氣ぢやないのですもの。

廣次　惡氣ぢやなくつてもいゝ氣はしないよ。どうせ碌な者にはならないよ。犧牲になつてやるやうな代物ではない。

高峯　それはかまう必要はないね。

芳子　本當にありませんわ。

綾子　靜子さんはあんまりお優しいからいけないのですよ。

靜子　あんまり優しくもありませんわ。それなら、おいとまいたしませうか。

廣次　あゝ。

西島　もつと居たつていゝのだらう。
廣次　もつと蓄音器でも聞いて行かうか。
西島　よければきいてゆきませんか。
靜子　折角ですが又今度にいたしませうね。
廣次　高峯君は今日は赤ちやんをつれてこなかつたのですか。
高峯　今日はおいて來ました。
廣次　今度家をもつたらどうか君も來てください。
高峯　ありがたう。
靜子　綾子さんもね。どうぞ。
綾子　ありがたう。是非上ります。
廣次　それならさよなら。
靜子　大變お邪魔をしました。
西島　それなら明後日又來て呉れ給へ。
廣次　ありがたう。
皆　さよなら。
（靜子、廣次の手をとり、あとの人皆送る。暫して西島、高峯兩夫婦室に歸る。）
西島　隨分同情をするだらう。
高峯　本當にたまらないね。
綾子　靜子さんはお氣の毒ですね。始終涙ぐんでいらつしやいましたわね。
芳子　本當に妹さんはお美しい方ですね。
高峯　それにしても相川のやり方はひどいね。
西島　惡氣ぢやないのだらうけど、たまらない。まるでわかつてゐないのだ。
高峯　何んでも勝手になると思つてゐるのだね。さうして自分の方のことだけ考へてゐるのだね。
西島　本當に相川の體格檢査もしてやるといゝのだ。きつと花柳病になつて、まだなほつてゐないのにちがひない。考へれば恐ろしい。先日俺は病院に入つてゐる友達を訪問したら、「いたいよう、いたいよう」と子供のやうな叫び聲が聞えるのだ。なんだと聞いたら、梅毒患者で夜も晝もうなつてゐるのだと云つてゐた。始めの夜なんかその聲を聞いたらねられなかつたと云つてゐたつけ。そのあとで又行つたらもう聲が聞えなかつた。死んぢやつたのだと云つてゐた。六〇六號もうきかないのださうだ。金持の子なんださうだがね。あんな目にあふ人間は滅多にないのだらうけど。ありふれてゐると云ふことで、あんまり馬鹿には出來ないからね。相川の方こそ體格檢査をしてやるといゝのだ。しかしそんなことをしてくれと云へば、叔父さんは免職されるにきまつてゐる。考へれば考へる程、野村の叔父は相川の奴隷のやうなものだね。どんな無理でも聞かなければならないのだ。

高峯　ありがたがつて聞いてゐるのだらう。
西島　それはさうかも知れない。その犠牲になつてはたまらない。
芳子　本當に。お氣の毒ですね。
綾子　本當に、しかし西島さんがあゝ云つてお上げになつたので御安心なさつたでせう。
西島　俺は早く仕事がしたい。金の力をかりるのはいやだ。しかし金持になりたいとも時々は思ふ。金でもつて惡勢力に勝つことは出來ないことは知つてゐる。今更に釋迦や耶蘇の道は實に本當な道だつたとも思ふ。しかし自分なんかまだ、今の世では金の力を要求することがある。さうしてその方では殆んど無能力者だからね。
高峯　本當に僕達の仕事は、金には緣はないね。アトリヱ一つまだ建てることが出來ないのだ。
綾子　もうお暇しませうか。子供が泣いてゐはしないかと氣になりますよ。泣き聲が聞えるやうな氣がしますわ。
高峯　それなら行かう。
西島　又來給へ。
高峯　ありがたう。君もその内に來給へ？
西島　近い内にゆく、畫も見たいから。
綾子　その時、あなたもよかつたらきつといらつしやいね。
芳子　ありがたう。きつとゆきます。

皆　さよなら。
（四人退場、まもなく西島と芳子登場。）
芳子　（蓄音器をかたづけながら）廣次さんの妹さんは隨分美しい方ね。
西島　あゝ。
芳子　さつきそんなにも美しくないやうなことをおつしやつた癖して、（間）明後日迄に二十圓をどうしておつくりになる心算。
西島　うちにいくらある。
芳子　二三圓切りありませんわ。
西島　郵便局には。
芳子　十圓切り。
西島　それでは今月はどうする心算なのだい。
芳子　來月分を拜借しやうと思つてゐましたの。それより仕方がありませんわ。貴夫はちつともかまはないのですから。
西島　どうにかなるよ。
芳子　明後日迄に三十圓つくるやうなことをおつしやつていらつしやいましたが、お出來になる心算だつたの。
西島　出來なかつたら本を賣る心算だつたのだ。この本でも皆賣れば二三百圓にはなるよ。
芳子　皆お賣りになるおつもり。

西島　さうでもないけど、いざとなれば賣つてもいゝと思つてゐるよ。本は買へる時に買へばいゝ。どうせさう讀めはしないのだから。
芳子　いつまでお世話なさるお心算なの。
西島　必要がなくなるまでだ。
芳子　そんな呑氣なことをおつしやつては困りますよ。私に許り心配かけて。私は夜も碌に眠れませんわ。昨晩だつて、私は自分のもつてゐる着物をならべて見て、皆三四年前につくつた着物で、一つも着られる着物がないので泣いてる夢を見ましたわ。
西島　そんな贅澤なことを云つたつて仕方がないよ。
芳子　贅澤ではありませんよ。本當に一つも着物がつくれないのですもの、すまして外をあるくことの出來る着物はありませんわ。皆古いはやり許りですわ。
西島　そんな呑氣なことが云つてゐられるかい。
芳子　あなたは野村さんの妹さんが綺麗なもんでそんなことをおつしやるのですわ。
西島　そんなことはないよ。
芳子　きつと貴夫はあの方があんなにかゞやくやうに美しくなかつたら、金なんかつくらうとはおつしやりません。
西島　默らないか。
芳子　本を皆お賣りになるといゝわ。
西島　賣らなければならない時がくれば、賣るとも。
芳子　野村さんの妹さんは貴夫の顏許り見てあなたには何んでも云へると思つていらつしやるのですわ。さうして貴夫にあまへてゐるのですわ。今日初めてお逢ひになつたのに。
西島　お前は同情しないのかい。
芳子　同情しますわ。ですけど貴夫があんまり同情なさるのですもの。きつと私がゐなかつたらいゝと思つていらつしやると思つたら腹が立つて來ましたわ。
西島　そんな事があるものか。お前は野村の話を聞いても、俺のすることがまちがつてゐると思ふのかい。お前を餓ゑ死させるやうな眞似をしてまで俺は野村兄妹を助けようと思つてゐると思ふのかい。着物なんかどうだつていい。着物のことなんか考へる餘裕があるなら、野村のことを考へてやるがいゝ。俺一人の答へでどうでもなるのぢやないか。お前は自分のこと切り考へてゐない。廣次の妹が相川の處へ行つてもいゝ。いけばいゝ氣味だぐらゐ思つてゐるのだらう。
芳子　そんなことはありませんわ。ですけどもあんまり美しすぎますわ。心配になりますわ。
西島　大丈夫だよ。
芳子　それに一月や二月のことぢやありませんからね。私

心配ですわ。貴夫は少しもかせがうとなさらないし。

西島　俺はどんなことがあつたつて、餓ゑ死にさしてもらへないことを知つてゐるからな。お前だつて、お前の實家がお前を餓ゑ死させやしない。俺達は自分のことを心配しなくつてい丶人間だ。

芳子　私はそのこと許りを心配してやしませんよ。

西島　お前は俺を信用出來ないのかい。

芳子　今は出來たつて、あとで出來ない時が來さうな氣がしますわ。それに毎月金をつくるのは大變ですね。本がなくなるのも淋しいわ。

西島　それなら俺は廣次に、妹を相川にやるより仕方がないと云へばい丶のかい。馬鹿。

（本をとつてた丶きつける。お客がゐた時ののみかけのお茶がこぼれる。瞬間沈默。）

西島　茶をふけ！

（芳子不平さうな顏をして涙ぐむ、しかし從順にお茶をふく。）

第　三　幕

廣次の借間

二階至つて粗末、天井低し、廣次一人で氣をむさくさ

させてゐる。さうかと思ふと耳に注意をあつめてゐる。

まもなく靜子登場。

廣次　どうだつたい。雜誌は出てゐたかい。

靜子　え丶。二つ三つ出てをりました。

廣次　俺のもの丶評は出てゐたかい。

靜子　い丶え。

廣次　出てゐなかつたのかい。

靜子　はい。

廣次　矢張西島の云つた通り反響がなかつたかな。

靜子　まだ出ない雜誌もありますから。

廣次　俺は矢張空想家だ、あの小説が出たら、何處からか手紙がくるかと思つてゐた。又誰かゞ俺をたづねて來はしないかと思つてゐた。もう世間では俺の名は忘れてゐるのがあたりまへだ。覺えてゐると思ふのが蟲がい丶のだ。

靜子　それでも兄さんのいらつしやる處がわからないのですから仕方がありませんわ。

廣次　本屋か、西島の處へ手紙をよこしさうなものだと思つてゐたのだ。俺はあの作が不滅なものと思つてはゐない。しかしどうかしたら俺の運命をもう少しは切り開いてくれるかと思つてゐた。しかしそれは蟲がい丶のだ。

靜子　なんでも氣長におやりにならなければ。

廣次　俺達は氣長にやつてゐられる身分ではないよ。俺達はさう何時までも西島の世話に許りはなつてゐられない。
靜子　そんなことをおつしやつたつて仕方がありませんわ。西島さんはお兄さんがさう思つて無理をなさることを心配していらつしやいますわ。
廣次　西島はその心算だらう。しかしそれで安心はしてゐられないからね。
靜子　それはさうですわ。ですけどお兄さんはこの頃少しあせりすぎてゐらつしやるやうな氣がして。
廣次　あせらないではゐられないからさ。俺はもう一日でも早く安心がしたいのだ。俺はものになる人間だと云ふことをしつかりつかみたいのだ。俺は西島に世話になる甲斐のある人間だと云ふことを知りたいのだ。さもなければこんな生活をしてゐるのは男として恥づべきことだ。あんまり蟲がよすぎる。
靜子　西島さんはお兄さんの心をよく御存知ですから、やきもきなさることはありませんわ。それより頭でもおこわしになつたらそれこそ大變ですよ。
廣次　俺の頭はそんなことでは參りはしないよ。大概の修業はつんでゐるからね。俺の頭は苦しむことには馴れてゐる。
靜子　それでもこの頃は夜も碌におねにならないでしよ。
廣次　それ程のことはないよ。しかし少し寢不足かも知れない。お前も寢たりないのだらう。
靜子　私は平氣ですよ、私は頭はつかひませんから。私は利口になる必要がないのですもの。
廣次　お前はどうしてさう野心がないのだらう。
靜子　私の希望は皆お兄さんが一人で脊負つて下さるのですもの。
廣次　（皮肉らしく）たよりになる兄だからな。
靜子　私、本當にたよりにして安心してますわ。
廣次　俺はこの頃、自分が少したよりにならなくなつてゐる。
靜子　そんな心細いこと。
廣次　俺はお前が留守の間いろ／＼のことを考へた。俺は本當に心細くなつた。俺は西島に手紙を書かうと思つた。俺は昨日お前に俺のかいた小說をよみなほしてもらつたね。あの時以來、俺は希望をとり返すことが出來ないでゐる。もつと書けてゐるとばかり思つてゐたのだ。處がまるでかけてゐない。あんなことで何時になつたら、俺の仕事に目鼻が出來るかわからない、叔父さんの家にゐる間時間さへ俺のものだつたらと思つてゐた。しかし今は時間は俺のものになつたが、俺の仕事は少しもはかど

らない。
靜子　それでもこゝにいらつしやつてから二つおかきになりましたわ。
廣次　あんなものはかいた部類には入らない。
靜子　それでも西島さんも、高峯さんもお賞めになりましたわ。
廣次　それは俺に厚意があるからさ。俺に希望が與へたいからさ。
靜子　そんなことはありませんわ。私も本當にいゝものだと思ひますわ。
廣次　駄目だ。俺の運命を切りひらいてくれる力のない作が何になる。皆腹の底で俺を盲目だと思ふのであんなものを賞めるのだ。厚意は嬉しくないことはない。しかし厚意を喜ぶ理由は今はない。
靜子　西島さんになんと云ふ手紙をおかきになるつもり？
廣次　俺は本當のことを聞かしてもらひたいのだ。それから俺は金をとる道をさがしてもらひたいのだ。
靜子　なんで金をとるお心算なの。
廣次　俺はそれを何度と云ふことなく考へた。俺は商賣しようかと思つた。何かつまらない話でも書かしてもらはうかと考へた。併し本當云ふと俺は何にもいゝ考は浮ばなかつた。
靜子　矢張そんな迷ひを起さずに、今の仕事をしてゐらつしやるより仕方がありませんわ。その內にうまい話があるかも知れませんわ。
廣次　俺もさう思つてゐた。誰かうまい話をもつてくる人がありさうなものだとも思つた。所がない、あれば隣りの婆さんが何處からか聞いて來た話のやうなものだ。
靜子　もうおよしなさいよ。あの話。
廣次　相川の話よりは不愉快ぢやなかつた。實際いやな奴の妻になるより妾になる方がいゝ。
靜子　いやなこつてすわ。
廣次　今に藝者になれ、女郎になれ、プロステイチユートになれなぞと云つてくる奴があるだらう。
靜子　いやな方ね。本當に。
廣次　あはゝゝゝ。情けないと云ふより滑稽だ。俺は昨晩思つたよ。今にお前は內證で夜はかせぎ晝は俺の仕事を助けるやうになるか知れないと。
靜子　お兄さん。およしなさいよ。そんな話。
廣次　それでも相川の妻になるよりいゝ。
靜子　相川の妻になるとは誰も云ひませんわ。
廣次　お前の心の內で一滴でも相川の妻に、思ひ切つてならうか知らんと思ふ心があつたら承知しないよ。
靜子　ありませんわ。

廣次　なければいゝ。

静子　お兄さんは本當に變に疑ひ深いのね。

廣次　盲目になると人間は疑ひ深くなるよ。お前の顏が見えないと、殊にお前の目が見えないと、お前の心のある場所が不安心でいけないことがある。どうも耳へ入るものだけでは信用が出來ないからね。怒つてはいやだよ。俺は先日からかう思つてゐる。もしかしたら俺のかいたものにたいして恐ろしい惡口が何處かに出てはしまいかと思つた。それをお前が知つてゐながら俺にかくしてゐるのではないかと思つた。今日もそんな氣がした。お前が何にも出てゐないと云つた時、俺の腹の底に力がなくなつた。他人の惡口では俺はへこたれ切りはしない。しかし盲目のかなしさに、いろ〳〵の空想が浮ぶ。さうして浮んだ空想は消えない。お前がさうでないと云つても、女々しい愛から默つてゐてお前一人が心をいためてはしまいかと思ふのだよ。此頃お前の事を思ふとなんだか淋しいよ。お前の泣いてゐる姿許りが目の前にちらつくよ。俺も淋しいが、お前はなほ淋しくはないかと思ふよ。

静子　そんなことはありませんよ。お兄さん、私は段々希望をはつきりもつて來ましたわ。さうしてこの頃嬉しいのですよ。

廣次　お前の手はこの頃水仕事をするのでこはくなつたね。

静子　いゝぢやありませんか。

廣次　お前の手の美しさは俺を喜ばしてゐた。目の見える間は勿論、目が見えなくなつてからも。その美が段々こはれて行く氣がする。

静子　指なんかどうなつたつてよろしいわ。

廣次　それはなつたつていゝけれど、惜しい氣もするよ。

静子　ちつとも惜しかありませんわ。それよりお兄さんは少し神經衰弱におなりになつたのね。寢不足がいけないのですわ。少しおやすみになつたらどう。

廣次　さうだな。寢たら少し元氣になるかも知れない。俺も元氣にするから。お前も元氣におしよ。

静子　えゝ私は元氣にしてゐますから。本當にお兄さんも元氣にして頂戴よ。お兄さんがいやなことをおつしやると私も心細くなりますわ。本當に安心して、自分の仕事をしていらつしやればいゝのですわ。

廣次　どつちにしろ、それより外に道のひらけようがないのだ。安心おし、きつとものにするから。實際西島は俺の心を知つてゐる。俺がいゝ氣になつて西島の世話になつてゐないことを知つてゝくれるから安心だ。

静子　蒲團を敷きませうね。

廣次　あゝ。

（靜子、粗末な蒲團を敷く。）

靜子　敷きましたわ。

（廣次、手さぐりで、ねる。）

靜子　お寒くなくつて？

廣次　あゝ寒くはないよ。

（一寸沈默。）

廣次　靜ちやん。

靜子　えゝ。

廣次　何をしてゐる？

靜子　何にも。

廣次　何か考へてゐる？

靜子　何にも。

廣次　叔父さんのうちのことを時々考へるかい。

靜子　時々は考へますわ。

廣次　しかし出たことは後悔しないかい。

靜子　後悔しませんわ。

廣次　今靜ちやんは西島が來るかも知れないと思つてはしなかつたかい。

靜子　どうしてわかるの。

廣次　俺もくるかと思つたからさ。

靜子　お兄さんは綾子さんを戀したことがおありになつて？

廣次　どうして不意にそんなことを云ふのだい。

靜子　私はこの頃時々さうではないかと思ひますのよ。

廣次　正直に云へばおもつたことはある。さうして今でも思つてゐると云つても噓ぢやない。

靜子　矢張りさう？　こないだ綾子さんにあつてどうお思ひになつて？

廣次　嬉しかつたよ。もつと逢つてゐたい氣もしたよ。

靜子　あとで隨分お苦しかつたでしよ。

廣次　馴れてゐるからね。

靜子　あの晩、一晩お泣きになつていらつしやつたわね。

廣次　あゝいろ〳〵のことが考へられたのだ。お前も泣いてゐたらう。

靜子　はい。お兄さんがなんとなくお氣の毒な氣がしたので。西島さんのお宅にゆくといろ〳〵のものがありましたから。

廣次　さうしてそれが俺に見えないからか。

靜子　一緒にお話が出來ないので。

廣次　二人(ふたり)はあの日歸つて來て殆んど何にも饒舌(しやべ)らなかつたね。

靜子　本當に。

廣次　俺達は淋しいね。

（沈默。二人のすゝりなく聲がかすかにする。）

廣次　この淋しさから何か生れなければあんまり悲慘だ。
（沈默。）
廣次　靜ちやん。枕元へおいで、さあ。
（廣次右の手を出す、靜子兩手で大事さうにそれをさする。）
廣次　俺の一生の仕事はお前にさゝげるよ。
靜子　そんなことを云ふとお兄さんの奥さんになる方がお氣の毒ですわ。
廣次　俺の妻になるやうな奴がゐたら、どうせその女は幸福ぢやない。
靜子　そんなことありませんわ。
（沈默。）
靜子　お兄さん。
廣次　もう默つてゝおくれ、眠むられさうだから。
靜子　はい。
（沈默。）
靜子　お兄さん。（返事がない）もうお寢になつたの。
（靜子室をかたづける。婆さん登場。）
婆　お客さんです。
靜子　さうを。お通しゝて下さい。
婆　はい。（退場）
（靜子少しして迎へにゆく。西島登場。）

靜子　今さつき。おいでになるかも知れないと兄とお噂してをりましたのです。
西島　野村君は。何處かおわるいのではないのですか。
靜子　いゝえ、昨晩少しも寢ませんでしたのでたつた今寢したのです。（廣次の方を向いて）兄さん。西島さんが。（起さうとする）
西島　もつと寢さしておいておあげなさい。
靜子　それでもあんまり失禮ですから。
西島　僕はかまひません。どうせ今日は暇なのですから、雜誌屋へ一寸よりましたら。
（靜子口に指をあてる。）
靜子　（小聲で）あのことはまだ兄には申してないのです。
西島　（小聲）　さうですか。
（二人障子をあけて外を見ながら。）
靜子　兄は反響がないので氣をくさらしてをりました。
西島　さうですか。
靜子　（少し小聲で）云はうとも思ひましたのですが。あんまりひどい批評ですから。
西島　腹が立つたでせう。
靜子　もう少しで本屋で泣く處でした。あんまりですから。あんなことを云はれたつて大丈夫、兄のものはいゝものですね。

西島　大丈夫です。誰だつてあの位の悪口は云はれるものです。心細く思つてゐらつしやるといけないと思つて上つたのです。

靜子　ありがたう御座います。あなたの雜誌を兄のものが汚したやうに書いてありましたわね。なぜあんなくだらないものを平氣で出したのだらう。出すものも出すものだ。載せるものも載せるものだとかいてありましたわね。

西島　馬鹿ですよ。野村君のやうな人があることが考へられないもので、つくりものだ、誇張だ、素人まるだしのセンチメンタルなものだと云つたのです。あすこに出てゐる、實感がわからなかつたのです。生きる苦しさが感じられないのです。しかしどんな悪口を云はれたつて安心です。云ふものは亡びますが、云はれるものは勝ちます。

靜子　それでもこの前新聞に出てゐた評と同じやうなことが書いてありましたのでなほ心細い氣がしました。

西島　安心です。私なんかも隨分いやな評をされたことがあります。四五人に同じやうな悪評をされたのです。文學はやめるがいゝと云はれた許りでなく、下等の强がりな、見得坊の、淺薄な、新らしがりに思はれたのです。しかし批評された私はあまり下り坂にもならず、どつちかと云へば勝利の道を歩いてゐます。批評した奴は皆滅亡してしまひました。二三年前までは少しはうろついてゐましたが。

靜子　本當にあなたがそんな悪口を云はれたのですか。

西島　えゝ。「小さき超人」と云ふ小説でした。

靜子　あれですか。妾はあれを兄によんで聞かせて二人で泣きましたわ。いゝものだと兄は感心し切つてをりましたわ。

西島　批評家は頭から本ものを見ると疑つてかゝるのです。そんなにいゝものがこの世にころがつてゐるわけはないと頭からきめてかゝつてゐるのですからたまりません。

靜子　あなたのお話を伺つて安心しましたわ。兄はこの頃頻りにあせつてをります。

西島　それはさぞおあせりになるでせう。しかし氣長にやるより仕方がありません。二三年は反響がない覺悟でなければ。

靜子　兄は、あなたのお世話になつてゐるのを頻りに氣にしてをります。

西島　それはいけません。十分なことは出來ませんけれど、そのことは安心して下さい。

靜子　私はあなたにおすがりして親舟に乗つたやうな氣でをりますのですけれど。

西島　あんまりいゝ親舟でもありませんけれど。この室はおうろさくはありませんか。
靜子　いゝえ。
西島　もつといゝ室がありさうなものですが。
靜子　兄は、こゝがやすかつたので氣に入つたのです。私も氣に入つたのです。こゝからあなたのお家の屋根が一寸見えます。
西島　さうですか。
靜子　あすこの二階家のうしろに一寸屋根が見えますね。
西島　えゝ。
靜子　あれがあなたのお家です。
西島　本當にさうですね。あの二階家が僕の家のすぐ向ふにある家です。
靜子　私は來た時からさうではないかと思つてゐましたが、二三日前に本當にさうだと云ふことを知りました。
西島　よくわかりましたね。
靜子　それはわかりますわ。
西島　こゝは中々見はらしがよろしいね。
靜子　えゝ。（一寸沈默）もう兄を起しませうか。
西島　僕はかまひません。
靜子　本當に、いろ〳〵お世話になりましたわね。
西島　いゝえ。
靜子　兄も、早くいゝものをかいてあなたの御信用に背かない事がしたいと申してゐましたわ。
西島　さうですか。
靜子　あなたは鴨居に頭がおとゞきになりますわね。
西島　えゝ髮毛で鴨居の掃除が出來ます。
靜子　本當にね。あの時、あなたが來て下さらなかつたら私は今どうしてゐるでせうとよく考へますわ。
西島　本當にあの日あなたの處へ行つたのは偶然とは思へない氣がします。
靜子　私。どうかして兄を安心させたいと思ひますの。兄はあせつてゐますし自分について少し疑ひ出してゐます。本當に心細いらしい時があります。私も時々本當に心細くなる時が御座います。兄がものになつてくれたらどんなに嬉しいだらうとよく思ひます。
西島　大丈夫だと思ひます。
靜子　あなたは私達に金をくださる爲に本をお買りになるやうなことはないのでせうね。
西島　なぜです。
靜子　私はそれが一寸氣になつてゐるのです。
西島　どうしてゞす。
靜子　始めて上つた時に見覺えてゐました本がつぎに上りましたら見つかりませんでしたから。

西島　誰か持つていつたのでせう。

靜子　それならよう御座いますけれど、永い間のことですから御無理をなさると困りますよ。

西島　大丈夫です。なが年の功で、働けば金がとれるのですから。

靜子　早く兄もさうなるといゝと思ひますの。（間）あなたの處には大變御本がおありになりますが、あんなに勉强しないと、いゝものが書けないと云ふことはないでせうね。

西島　そんなことは決してありません。私だつて讀んだ本はあの内の十分の一もありません。さうして讀んでもすぐ忘れてしまひます。

靜子　兄は少しは横文字も出來たのですけれど。

西島　出來ないでも大丈夫です。

靜子　あなたは私達をあはれんでそんなことをおつしやるのではないでせうね。

西島　私は有望でない人には同情しません。

靜子　あなたは私に同情して下さるのではないでせうね。失禮なことを申しますけれど。

西島　貴女がゐなくなつてもお兄さんを信用するには變りはありません。

靜子　私はあなたを信用してをりますわ。

西島　どうか信用して下さい。

靜子　私は兄が可哀さうで仕方がありません。あなたも、高峯さんも立派にやつてゐらつしやるのに。高峯さんの綾子さんをかいた畫は隨分評判で御座いましたわね。

西島　えゝ。

靜子　今。高峯さんは綾子さんの裸體畫を畫いていらつしやるのですつて？

西島　えゝ。

廣次　それは本當かい。

靜子　（おどろき）いつお目ざめになつたの。

廣次　たつた今だ。

靜子　西島さんがゐらつしやつてゐますよ。

廣次　よく來てくださいました。ちつとも知りませんで、失禮しました。なぜお前は知らせなかつたのだ。

靜子　よくねてゐらつしやるのですもの。今の話を聞いてゐらつしたの。

廣次　夢のやうに聞いてゐた。

靜子　いやな方ね。ぬすみ聞きして。

廣次　つい聞いたのだよ。（起きる）蒲團をかたづけておくれ。

靜子　はい。

廣次　今日は、君が來て下さるかと思つてゐたのです。

西島　さうですか。
廣次　雜誌は何時頃出來ますか。
西島　明日頃でせう。
廣次　私のものを又出しても不服を云ふ人はありませんか。
西島　えゝありません。この前は皆賞めてゐました。
廣次　世間では何とも云はないさうですね。
西島　えゝ。
廣次　それがあたりまへですが、淋しい氣もします。
西島　反響がまるでないと思ふ時に、ぽつ〳〵反響のあるものです。
廣次　君はどうでしたか。
西島　少しほめられだしたのは三年のちでした、世間で存在を認めだしたのは五年目でした。もつと早い人もありますけれど、それは先輩に認められた人に限るやうです。今の先輩に認められるやうでは心細い氣がします。どうしても後輩に認められるやうなゆき方をするものは二三年辛抱しなければならないでせう。苦しいこともあるでせうけれど、辛抱が必要です。
廣次　私は辛抱にかけては人にまけない心算でしたが、この頃はへんにあせつていけません。お茶をおくれ。
靜子　はい。まだ西島さんにお茶もあげませんでしたわね。御免あそばせ。
廣次　お菓子でも買つておいで。
靜子　はい。
西島　それには及びません。
廣次　買つておいで。
西島　（遠慮するやうに）本當に……。
靜子　（笑ひながら）お兄さん。私今氣がつきましたわ。お兄さんはお氣がつかないの。
廣次　なんだ。
靜子　お菓子を買ふお金は誰から戴いたの。
廣次　それだつていゝぢやないか。俺の處にあるものは一つ殘らず西島君に買つて戴いたやうなものだ。今更それを可笑しがる程のことぢやないぢやないか。
靜子　それでも、西島さんが遠慮なさつて、お兄さんが買へとおつしやるのが可笑しいわ。
廣次　馬鹿。默つておいで！
靜子　はい。（蟇口をさがす）
廣次　少し遠くへ行つて、いゝのを買つておいで！
靜子　はい。（退場）
廣次　（沈默小聲で）妹は行きましたか。
西島　えゝ。いらつしやいました。
廣次　許して下さい。實は私はまだすつかり寢てはゐなか

つたのです。うと〳〵とはしてゐましたがさうしてお話を殘らず聞いたのです。

西島　殘らず。

廣次　えゝ。殘らず聞きました。盲目になつてから疑ひ深くなりました。妹が私を起しましたけれど、その起しかたは、私の寢てゐることを望むやうな起しかたの氣がしたのです。さうしてあなたの御返事も、私の寢てゐるのを幸に思つてゐらつしやるやうに思へたのです。それで私もさう思はれてゐたいやうな氣がしたのです。どうか、怒らないで下さい。私達兄妹が互に信用してゐないやうなのも不快に思はないで下さい。

西島　不快に思ひたくも思へません。

廣次　私にはこの頃いろ〳〵のことが考へられるのです。私はこの頃本當に心細くなつて來ました。惡口を云はれるのが心細いのではありません。尤も心細くないこともありませんけれど、それはどうにでもなります。いつまでも負けてはゐません。私の心細いのはいつまでもあなたのお世話になつてゐなければならないことです。

西島　そのことなら安心して下さい。

廣次　本當にそれでいろ〳〵御迷惑をかけてゐること〻思ひます。それに私はへんなことを聞きました。氣にすることではないのです。ですが御迷惑をかけはしないかと思ふのです。妹はそのことを知つてゐるか、知つてゐないか知りません。

西島　何です。

靜子　あなたが聞いたらおおどろきになるやうなことです。

西島　なんです。

廣次　近處の噂だと妹をあなたの妾だと云ふのです。

西島　えゝ。そんな。

廣次　隨分馬鹿にした噂です。私はそれを聞いてあなたにすまないと思ひました。

西島　僕にすまないことはありませんけれど、隨分ひどいことを云ふものですね。さぞ腹が立つたでせう。

廣次　私は一月ぶり位ゐに湯に行つて、その話を一寸聞いたのです。私の耳は他人よりはよく聞えます。小聲だつたのですが、聞えたのです。私はかつとして、身ぶるひがいたしました。其處にたふれるかと思ひました。

西島　御尤です。

廣次　私は歸つてから、すぐあなたの所へ手紙を出して、あなたのお世話になることをお斷りしようと思つたのです。そんな噂をたてられて、それが新聞にでも出たら、さぞ御迷惑だらうと思ひました。又奧樣も、さぞ腹をお立てになるだらうと思ひました。私はどうなつてもいゝ

から御斷りしなければならないと思つたのです。ですが考へてゐる内にお斷りしたあとのみぢめさが目に浮んだのです。さうなれば妹はきつと相川の處へゆくでせう。私にはそれは又堪へられないのです。

西島　それなら私さへ來なければいゝでせう。私があんまり何度も來たものでそんな噂が立つたのでせう。そんな噂が立つと知つてゐたらそんなに來なかつたでせうが。

廣次　あなたが來て下さらなかつたら、私は勿論、妹も淋しがるでせう。どうして私はかう不運なのかと情けなくなります。私はどうせものにならない人間なのかと思ひました。私は生きてゐても死んでも同じ人間ではないかと思ひました。そんなことはない、そんなことはない、私は自分に何度もさう云つて自分を慰めます。しかしそれはたゞ慰めにすぎないのかと思ひます。自分はどうなつてもいゝ。たゞ妹が可哀さうだと思ひます。二三日前です。妹が歩いてゐましたら隣りの婆さんが或人に頼まれたのだと云つて、月三十圓位ゐで妾にならないかとすすめられたさうです。妹は可笑しくつて腹も立たなかつたと申しました。しかし妹の泣いてゐることは私には感じられました。恐ろしい侮辱です。

西島　こゝはきつと處がいけないのです。何處かへ引越したらいゝでせう。

廣次　さうも思つて見ました。ですけれど私の心細いのは、さう云ふ噂許りから來るのではないと思ふのです。この樣子でゆけば、二月たつても、三月たつても、私は決心がつかなくなる許りです。私にはいろ／＼の恐ろしい空想さへ浮びます。進むことも退くことも出來ない時が來さうな氣がします。現在私は事實を正視することが出來ないやうな氣持になつてゐます。どうにかなると云ふ氣持は今はしません。私は本當に臆病ものになりました。

西島　心配しないで下さい。僕の方はどうにかなると思ひます。さうしてこゝへはなるべく來ないやうにします。淋しかつたらどうか君の方から來て下さい。

廣次　ありがたう。（間）私は時々どうしてかう運命にいぢめられるかと思ひます、私より運のわるい人はあるでせう。しかし私は隨分運命には從順なつもりです。さうして出來るだけのことをやつてゐる心算なのですが、いざと云ふ時になると何時も思ひがけない不幸が起つて來ます。さうして私に致命傷を與へようとします。これでもか、これでもか、これでもまだくたばらないのか、運命はそんなことを囁いて嘲笑つてる氣がします。きつと今に何か起つて來さうな氣がします。さうして私を世話する人間も運命から睨まれてゐるやうな氣がします。さうして運命はあなたから私をひきさきさうな氣がします。

西島　私は大丈夫だと思ひます。
廣次　あなたは大丈夫でせうが、奥さんが。
西島　………。
廣次　妹が歸つて來ました。昔の運命劇にありますやうに私の一家は何かに呪はれてゐる氣さへします。そんなこともないでせうが。
（靜子登場。）
靜子　唯今。
廣次　早かつたね。
（靜子菓子を紙にのせて出す。）
靜子　さうを。それなら又何處か散歩して來ませうか。なんだか西島さんがお歸りになりさうな氣がしましたので。
廣次　散歩してこないでもいゝよ。（西島に）私は先日妹にイフイゲニエの譯をよんでもらつて自分の家にもあんな呪ひがありはしないかとさへ思ひました。それとも、私が今度出した小說にあります通り、敵の探偵を殺したのが祟つて居るのかと思ひました。他の人は殺した瞬間に致命傷は受けなかつたでせうが、私はその瞬間には致命傷を自分が受けたやうな氣がしました。さうして私の一生は狂ひ出すかも知れないと思ひました。私が盲目になつたのはそれからまもなくでした。見てはならないことを見たのかと思ひました。まだ碌に戰爭もしない內でしたからなほ氣かとがめたのかも知れません。
靜子　お兄さん。それは神經ですよ。そんなことはあるわけはありませんわ。お兄さんの運命はきつと今にひらけますよ。私はそれを疑ひませんわ。もう一息と云ふ處に來てゐらつしやると思ひますわ。
廣次　生意氣なことを云ふな。お前にはそんなことがわかるものか。
靜子　わかりますわ。ねい西島さん。
廣次　俺だつてもろくは負けはしないよ。俺だつてお前が俺を信用する以上に俺を信用してゐるよ。「今に見ろ」と云ふ氣はたえずしてゐる。石にかみついてもと云ふ氣もたえずしてゐる。しかし俺には俺を十重二十重にとりかこむ見えない禍があるのだ。俺はそれを感じてゐる。
靜子　妾。その見えない禍をとつてあげますわ。
廣次　お前にとれるかい。
靜子　とれますわ。昔からさう云ふ禍をとるのは女のつとめですわ。イフイゲニエがさうですわ、橘姬だつてさうですわ。私だつてそれが出來ないことはありませんわ。
廣次　お前は何を考へてゐるのだ。
靜子　（笑ひながら）何んでもありませんの。たゞふと私にさう云ふことが出來さうな氣がしましたの。

廣次　それなら早く禍をとつてくれ。

靜子　そんなにせいたつて駄目ですわね。西島さん。時がありますわね。いざと云ふ時が。

廣次　お前は相川の妻になつてはいけないよ。

靜子　誰がなるものですか。(西島に) ね。(間) 兄はこの頃よく不意にお前相川の妻になつてはいけないよ。どうしても相川の妻になつてはいけないよと申しますの。本當にどうかしてをりますの。(氣をかへたやうに) お兄さん。今日も隣りの婆さんが私に妾になる氣はないか、月四十圓でと申しましたわ。二三日前からくらべると十圓あがりましたわね。

廣次　又そんなことを云つたか?

靜子　本當にうす氣味のわるい世の中ね。

西島　本當に引越したらどうです。

靜子　引越したくはありませんわね。お兄さん。私金で私が自由になると思つてる人が出れば出る程面白いと思ひますわ。何時か西島さんがおつしやつたやうに金で自由にならない女のゐることを知らせてやりたいのですよ。私もつと〳〵侮辱されて見たいのですよ。私、きつとかちますわ。さうしてさう云ふ奴をぢり〳〵させてやりますわ。

廣次　お前は何と返事したのだ。

靜子　よく考へておきますとさう云つてやりましたわ。さうしたらもつと詳しく話さうとするので、閉口しましたわ。なんでもさきの男と云ふのが四十幾つとか云ふのですつて。本當に面白いことがありますわね。今にどんなことを云つてくるか知れやしませんわ。

廣次　お前はどうかしてゐるね。

靜子　どうかしないではゐられませんわ。私、本當はもつと可笑しなことを聞きましたの。

廣次　なんだ。

靜子　西島さんは耳を押へてゐて頂戴よ。聞かないふりをして頂戴よ。隣りの婆さんは、今の旦那からはいくら貰つてゐると申しましたわ。

西島　(立ち上り) 私は歸ります!

靜子　なぜ? お怒りになつたの。

西島　いゝえ、怒りはしませんが、頭痛がしますから。

靜子　さうですか。それでは又ね。

西島　ありがたう。さよなら。

靜子　さよなら。

廣次　さよなら。

(靜子送らうとする。)

西島　どうか送らないで下さい。

靜子　(小聲で) お怒りになつてゐらつしやるの。

西島　いゝえ。たゞ急に一人になりたくなつたのです。
（二人ふと手を握りあふ。）
靜子　（小聲で）近い内に二人だけでお話したいと思ひますが。御都合のいゝ時をお知らせ下さい。
西島　（小聲で）お知らせしませう。（普通の聲で）さよなら。
靜子　さよなら。
廣次　さよなら。
（西島退場。一寸沈默。）
廣次　なぜお前はあんなものゝ云ひ方をするのだい。
靜子　それでも、それでも、氣が狂ひさうだつたのですもの。あんまりですわ。（泣く、廣次も涙ぐむ）
――幕――

第四幕

西島の室

第二幕に同じ、たゞ本棚に白い布がかぶせてある。

西島　皆でいくらになります。
古本屋　皆で二十圓五十錢です。
西島　さうですか。（本棚をしらべて三四の本の選擇に迷つたあとで大きい本一册とる）之を加へるといくらになります。
古本屋　いくらの本ですか。
西島　十圓の本だつたと思ひます、書いてあるでせう。
古本屋　（本をしらべ）えゝ書いてあります。十圓です。四圓にいたゞきませう。
西島　（又一册を出してくる）これは二圓の本です、
古本屋　それなら八十錢に戴いておきませう。
西島　全體で二十五圓三十錢になりますね。
古本屋　えゝさうです。
西島　それなら今日はそれだけにしませう。
古本屋　ありがたうございました。
（蟇口を出し金をとり出し勘定する。）
（女中登場。）
女中　高峯さんがゐらつしやいました。
西島　お通ししてくれ。
女中　はい。（退場）
古本屋　それならばこれで二十五圓と三十錢で御座います。
西島　たしかに。
古本屋　（本をつゝみ）それならば本を戴いてゆきます。
西島　どうか。
（高峯登場、會釋して古本屋退場。）

西島　（坐つたまゝ）失敬。

高峯　（坐りかけながら）失敬。

西島　暫らく逢はなかつたね。こないだ不在に來てくれたさうだけれど失敬した。明日頃でも行かうかと思つてゐた。

高峯　昨日あたり君がくるかと思つてゐた。病氣か知らんと思つてゐた。

西島　病氣ではなかつたのだけど、この頃は身體がへんにつかれて出不精になつた。

高峯　何かやつてゐるかい。

西島　金もうけに小說を書いて見ようと思つたけれど、しくぢつてしまつた、頭がつかれてゐるのでこの頃は夜がよく眠れないのだ。

高峯　それはいけないね。

西島　君はあれは出來たかい。

高峯　出來た。氣持ちよくいつた。近い內に見てくれ給へ。

西島　是非行かう。（時計を見る）

高峯　何處かへゆくのかい。

西島　いゝや。人がくるのだ。

高峯　僕がゐてもいゝのかい。

西島　二時にくる約束だから。

高峯　今何時だい。

西島　一時一寸すぎだ。

高峯　それなら僕は一寸ゐて失敬しよう。

西島　失敬だけど、一寸二人だけで相談がしたいと云ふのだから、今晩か明日の朝ゆくよ。

高峯　野村にこの頃逢つたかい。

西島　あゝ、三四日前に逢つた。

高峯　どうしてゐる。

西島　相變らずよわつてゐる。あいつのことを考へると、どうしたらいゝのかまるでわからなくなる。

高峯　今度の小說は面白かつたね。野村でなければ書けないね。

西島　あゝ、君はそのことを書いてやつたかい。

高峯　まだ書いてやらない。

西島　書いてやると喜ぶだらう。自分の力について隨分疑つてゐるらしいのだ。

高峯　目が見えなくなつては自分で字が書けないので困るだらう。夜中に書きたくなつても妹を起すわけにもゆかないだらうし。妹は飯の用意なんかもしなければならないだらうし。

西島　なにしろ目をやられてはたまらない。なほしたい處も碌になほせないだらうし。讀みなほすのも厄介だし。妹に知られたくないことは書けないし。いろ〳〵僕達に

はわからない苦しみがあるだらう。

高峯　野村の書いたものにはそれが何處となく出てゐて、それに打ち克たう、打克たうとしてゐる處が悲壯な感じを與へるね。生きることは苦しいとゴオホが云つたさうだが、野村なんかも本當の意味で生きることを苦しんでゐるのだから、それが何處ともなく出てゐるね。時々はいたましい感じがする。

西島　本當に逢へば逢ふ程氣の毒な氣がする。見てゐても苦しい。本人はさぞ苦しいだらうと思ふよ。それにキタナイ處に住んでゐるのだらう。いろ／＼噂を起てられてゐるらしいのだ。それがまた、たまらない噂なのだ。

高峯　それは近處の噂の種になるだらうね。何しろ盲目(めくら)と美しい娘とだからね。

西島　それに貧乏なくらしをしてゐるのだらう。それだものだからへんな誘惑を受けるらしいのだ。靜さんなんかお妾(めかけ)さんになつたらどうだと勸める人がゐるのださうだよ。隨分馬鹿にしてゐるね。

高峯　それはたまらないね。

西島　又見そめた奴でもゐるのだらう。しかしそれもいゝが、もつとひどい噂さへあるのだ。僕が何度も行つたもので、僕を靜さんの旦那だと近處では思つてゐるのださうだ。僕より他の人はめつたに行かないからね。

高峯　僕もゆきたくは思つてゐるのだけど、淋しさを與へさうな氣がしてゆかないのだ。

西島　僕はさう云ふ噂をたてられるのを困りはしないけど、二人に氣の毒で仕方がない。それで僕はもう暫く行くのをやめようと思つてゐるのだ。二人は又そのことが新聞にでも出ると大變だと云つてゐるのだ。出ないとは限らないからね。僕はその話を野村から聞いておどろいてゐた。すると貰ひものに出かけた、靜さんもそれを聞いて來たのだ。僕はそれを聞いて座にゐたたまれない氣がした。僕はすぐ立ち上つて野村の處を辭して一人で何處と云ふことはなしに歩きまはつた。泣きたいやうな氣がしたのだ。恐ろしいことが近づいて來たやうな氣がしたのだ。かくすのもいやだから白狀するがね。今日二時からくると云ふのは野村の妹なのだ。二人で相談したいことがあると云ふのだ。僕はこの頃野村の運命には自分は手をさへることが出來ない人間のやうな氣がするのだ。

高峯　僕の畫が若しかしたら賣れるかも知れないのだ。さうしたら半分野村に送りたいと思つてゐるのだ。

西島　今は金の方のことはどうでもなるのだ。正直に云ふと僕は金の心配は自分一人だけでしたいとさへ思つてゐるのだ、かう云へば君には恐ろしいことが近づいてゐる

ことがわかるだらう、一言で云ふと僕は久しぶりで又戀と云ふことを知つたのだ。

高峯　……………。

西島　恐ろしいことだ。さうしてこの恐ろしいことから恐ろしいことが生れさうな氣がするのだ。僕は近い内に、妻と遠い處へ旅行しようかと思つてゐるのだ。僕はその爲にも金もうけをしようかと思つてゐるのだ。しかし僕の一番恐れるのはそのことではない。そのことならば僕さへ辛抱してればいゝのだ。そのくらゐなことが出來ないことはない。恐ろしいのは野村の妹が自分からすゝんで相川の妻になりさうな氣がするのだ。さう思ふのは僕許りぢやない。野村もそれを恐れてゐるらしい。しかももつと恐ろしいのは自分の心の内のあるものと、野村の心の内のあるものが、それを望んでゐることだ。さうして野村の妹がそれを感じてゐることだ。

高峯　…………。

西島　恐ろしいだらう。僕はこの頃それで少しもおちつかないのだ。

高峯　僕にはよく君の云ふ意味がわからない。

西島　簡單に云ふと、僕には野村の兄妹を養ふ力が今になくなりさうなのだ。半年ぐらゐはやりくりがつくかも知れない。しかしそれ以上やりくりはつかないだらう。僕は今迄に金のとれる口は皆自分の方からこはしてしまつた。原稿の値上げをせまつたり。尊敬が足りないとおこつたりして、さうして、僕はこの頃、創作をやりかけるとしくぢつて許りゐるのだ。僕も野村も今に自分を生かす爲には犧牲者を要求するのだ。それは二人の女の誰かだ。僕の妻か、野村の妹かだ。さうしてそのことを野村の妹は感じてゐるのだ。

高峯　恐ろしいね。

西島　僕は第三者の救ひをたのまうかと思つた。僕はいろいろの人を頭に描いた。だが僕はいゝ人も見つからなかつた。その上にいゝ人を見つけたくもなかつたのだ。僕は自分をこんなに恐ろしい人間だとは思はなかつた。僕は靜さんに最後の手段としてよき夫を世話しようと思つた。いゝ人が見つからなかつた。さうして自分は見つからないことに凱歌を上げた。（時計を見る）あゝもうぢき二時だ。今日は僕の失禮を許してくれ給へ。僕の頭はどうかしてゐる。君と共處まで散歩をしよう。

（無言で二人退場。女中登場。あとかたづけをする、暫くして。）

女中　はい。（返事をして下へゆく）

（靜子女中と登場。）

女中　ぢきに歸つてゐらつしやいます。貴方がゐらつしつ

たら待つてゝ戴きたいとおつしやいました。高峯さまがゐらつしやつたので送つてゐらつしやいました。
静子　さうですか。西島さまと高峯さまによく似た方が角をおまがりになる所を見ましたつけ。矢張りさうで御座いましたのですね。
女中　きつとさうで御座いませう。(座蒲團をすゝめ)どうぞお敷きになつて。
静子　ありがたう。
(女中退場、静子おちつかないやうに歩きまはる。そつと自分の肖像畫の前に立ちどまる、足音かするので本棚の處にゆき、たれてある布をあげ見つめる。女中茶を持つてくる。)
静子　又古本をお賣りになつたの?
女中　えゝ。さつき古本屋が來まして、こんなに本をもつてゆきました。
静子　さうですか。勿體ない。
(女中お茶をついですゝめる。)
静子　ありがたう。奥さまは?
女中　實家へ行らつしやいました。
静子　さうですか。
女中　きつと旦那さんはもう歸つてらつしやるでせう。
(女中退場、静子障子をあけ外を見たが、耐へ切れずにしのび泣く。急に氣をとりなほし、涙をふく。まもなく西島登場。)
西島　どうも失禮しました。(走けて來たらしく息がせはしい)
静子　たつた今上つた處です。
西島　さうですか。
静子　高峯さんがいらしつたのですつて?
西島　えゝ。
静子　いついらしつたの。
西島　一時頃でした。
静子　早くお歸りになつたのね。
西島　歸つてもらつたのです。
静子　私がくるからとおつしやつて?
西島　えゝ。
静子　あなたは正直な方ね。
西島　それでも相手が高峯ですからね。隱すのは氣がひけます。
静子　先日は失禮しました。
西島　僕の方こそ。
静子　あとで兄におこられましたわ。
西島　おかくしになつたので。
静子　何を?

西島　雜誌に評が出てゐたことや何んかを。

靜子　いゝえ、まだ兄は知りませんですよ。

西島　いゝえ御存知ですよ。こないだ二人で話したことを野村君は皆聞いてゐらしつたのですよ。

靜子　皆？　私には聞かないふりしてをりますよ。私もさうかとも思ひましたわ。あとで。

西島　野村君は元氣ですか。

靜子　何んだか淋しがつてゐます、頭をこはしたらしいのです。

西島　それは御心配ですね。あんまり無理をなさるから。

靜子　本當に。ですが無理もしたくなるでせう。あなたも今日は神經質の顔をしてゐらしつてね。

西島　さうですか僕はわりに元氣です。

（風が少しふきこむ。）

西島　寒くはありませんか。

靜子　いゝえ、別に。

西島　障子をしめてよろしいか。

靜子　えゝ、兄は今日私があなたの所へ上るのを心配してをりました。

西島　なぜです。（障子しめに立ちながら）

靜子　なぜですか、私にもよくわかりませんの。兄はこの頃よく私のことを心配しますの。病氣になつてはいけないよ。やけを起してはいけないよ。思ひ切つたことをしてはいけないよ。と申しますの。私が兄について心配することを兄は私について心配しますの。

西島　本當にあなたはやけを起したくはなりませんか。

靜子　ならないことも御座いませんが。出來るだけ辛抱したいと思つてをりますの。

西島　本當に辛抱してください。

靜子　ですけれど隨分長い辛抱ですわね。さうしてあなたに御迷惑をかける辛抱ですわね。

西島　僕はちつとも迷惑はうけません。

靜子　本がある間は、でせう。さうして本がある間ももうぢきですわね。あなたはこの頃少しもお金をおとりにならないのですね。

西島　とる必要がありませんから。

靜子　（無理にほゝゑみながら）　とれないからでは御座いませんの。本が段々なくなつては奥さまもお淋しいでせうね。

西島　本はあなたが思つてる程なくなつてはしません。

靜子　私はもうだまされてゐる顔はしませんわ。本當の事おつしやつて下さつていゝでせう。

西島　どうか心配しないで下さい。この上あなたに心配かけたくはないのですから。

靜子　そんなことおつしやると皮肉に聞えますよ。

西島　（立ち上り歩きまはる）決して皮肉ではありません。

靜子　（西島の方を見ず、坐つたまゝ）なぜあなたは私の事をそんなに心配して下さるの。

西島　失禮かも知れませんが、あまりお氣の毒に存じますから。

（沈默。）

靜子　本當のことをおつしやつて下さい。私はどうしたら一番いゝので御座いませう。どんな殘酷なことでもよろしいからおつしやつて下さい。

西島　今のまゝにしてゐらつしやるのが一番いゝと思ひます。

靜子　本當にさうお思ひになるの？　どうか本當のことをおつしやつて下さいな。私どんなことを云つて下さつても嬉しいのですから。

西島　…………。

靜子　おつしやることが出來ませんの。

西島　どうか今のまゝにしてゐて下さい。

靜子　今のまゝにしてゐても決して恐ろしいことは起りませんの？

西島　どうか今のまゝにしてゐて下さい。つらいこともあるでせうが。

靜子　恐ろしいことが未來に待つてをりませんでしたら。私、今のまゝを幸福と思つてゐますわ。ですけれど私にはいろ〳〵のことが私達を待つてゐるやうな氣がしますわ。

西島　どんな所でどんな幸運が待ちぶせしてゐるかわかりません。今のまゝより仕方がないでせう。今迄のやうにしてゐて下されば僕はよろこんで出來るだけのことはします。

靜子　それを私は恐れてをりましたのですわ。私はあなたに出來るだけのことはして戴きたくはなかつたのです。たゞ餘分だけで助けて戴けるものなら助けて戴きたいと思つたのです。それに恐ろしい噂が奥樣に聞えましたら、奥樣もいゝ氣はなさらないでせう。私達の爲にあなたは共倒れになつてもいゝと云ふ氣を起してゐらつしやいます。私にはそれがよくわかつて參りました、それが何より恐ろしいのです。本當のことをおつしやつて下さい。今の內にどうかしなければならないのでせう。

西島　そんなことはないと思ひます。その內に道が開けるだらうと思ひます。

靜子　私にはさうは思へませんわ。今にとり返しがつかなくはならないでせうか。本當のことをおつしやつて下さい。私は決心しなければならない氣がするのです。

西島　もう少し辛抱して下さい。
靜子　辛抱ならいくらでもいたしますわ。ですがこのまゝで行つたら恐ろしいのでせう。
西島　………。
靜子　きつと私、今にあの事が新聞に出るかと思ひますわ。兄ではありませんけれど、私達は本當に災ひにとりかこまれてゐる氣がしますわ。私達は本當に心細う御座いますの。あなたももう私の處へは來て下さらないでせう。あの噂が奧さまの耳に入つたら私もう上れませんわ。本當に私はどうしたらいゝのでせう。
西島　あなたは私が世話する力もないのに餘計なことを云つてあなた達を苦しめたとは思ひませんか。
靜子　決してそんなことは思ひませんわ。
西島　私もあんな噂をたてられた今、お世話するのが心苦しい氣もします。ですがよかつたらどうか世話さして下さいませんか。世話することを許して下さつたらどんなに嬉しいでせう。
靜子　あなたは、あのいやな噂を奧さまにお話しになつて？　さうして私達を世話する事を奧さまは喜こんでゐらつしやいますの。今日本をお賣りになつたことは奧さまは御存知なの？　さうして私が今日一人で上ることを奧様は御存知なの？
西島　………。
靜子　隱してゐらつしやるのでせう。（間）奧さまは私を憎んでゐらつしやるのでせう。
西島　そんなことはありません。
靜子　あなたはなぜ本當のことをおつしやつて下さいませんの。私を信用して下さらないの。私は本當にどうしたらいゝのでせう。知つてゐらつしやるの。あなたはそれを知つてゐらつしやるのでせう。知つてゐらつしやるならおつしやつて下さいな。相川の處へゆけとおつしやつても私はお恨みはいたしませんわ。
西島　あなたはもう僕の世話になるのはいやなのですか。さうしてお兄さんはどうなさります。
靜子　本當にこの頃のやうでしたら。
西島　あなたは僕に力がないのをびつくりしたのでせう。
靜子　そんなことはありませんわ。ですけれど私の思つてゐるよりは、（微笑み）金持ではおありにならないのね。
西島　僕はまだ捨て身にはなりません。まだ力を出し切りはしません。金だつてまだとれる餘裕があります。
靜子　それならなぜ本をお賣りになるの。
西島　一番簡單ですから。さうしてなくなつてもちつとも仕事に差支へがないのですから。
靜子　本を書いた方がそんなことを聞いたら怒るでせう

ね。

西島　怒りはしません。

靜子　へんなことを聞きますが、あなたは兄の爲に金を出して下さるの？　私の爲に金を出して下さるの？

西島　兩方です。

靜子　私、もつとさきが聞きたい氣もしますけれど、本當は聞いてはいけないことですわね。ですが兄はものになりますわね。

西島　あなたさへわきに居れば。

靜子　私がゐなくなつたつてものになるでせう。もし筆記する人がゐましたら。妻の代理をつとめるいゝ人がをりましたら。

西島　萬一、さう云ふ人がをりましたら。

靜子　あなたは私がゐる爲に兄を有望だとおつしやるのではありませんわね。

西島　決してそんなことはありません。

靜子　私が居なくつても金を出して下さいますか。

西島　あなたがゐないとは。

靜子　假定で御座いますわ。

西島　あなたが兄をたのむと一ことおつしやつたら。

靜子　さう申しませんでしたら。

西島　…………。

靜子　御免遊ばせ。

西島　（ふところから紙づつみを出し）これたけ今日持つて歸つて下さい。

（蛇足。以上西島の會話は立つたり坐つたりして話されたものと思つて下さい。靜子は火鉢によつて火箸をいぢりながら獨言するやうに云つてゐると思つて下さい。今西島は又立つて歩いてゐると思つて下さい。）

靜子　（受けとり）ありがたう御座います。（それを見ず自分のわきにおく）

（沈默。）

靜子　私。かうやつてゐますと、本當に氣が落着きますの。御邪魔にはなりませんわね。

西島　なりません。

靜子　奥さまは何時お歸りになるの。

西島　晩飯頃でせう。

靜子　朝からいらしつたの。

西島　えゝ、十二時頃でした。

靜子　それならもうお歸りになるかも知れませんわね。

西島　大丈夫です。

靜子　それでもお留守に上つてお留守に歸るのは變で御座いますわね。

西島　それでも留守に來て、留守に歸ることがあるのです

から仕方がありません。
靜子　私は本當にどうしたらいゝでせう。
西島　（歩きまはつてゐたが、充血した目をして、靜子に近づき）すべて私にまかせて下さい。（靜子の肩に手をかけ、接吻しようとする）
靜子　（驚いて立ち上り）何をなさるの。
西島　………。
靜子　あなたは矢張り私を妾にしようと思つてゐらつしやるのね。本當に恐ろしい方ですわ。
西島　（良心に恥ぢて）許して下さい。許して下さい。決してさう云ふ心算ではなかつたのです。
靜子　どつちにしろ、同じことですわ、私歸りますわ。
西島　怒つてゐらつしやるの。
靜子　怒つてはしませんわ。ですけど悲しい氣がしますわ。
西島　本當にもう決してしません。許して下さい。一言許すと云つて下さい。本當にとりかへしのつかないことをしました。
靜子　障子をあけて下さい。
西島　はい。（障子をあける）
（沈默。）
靜子　明日の午後二時に來て下さい。
西島　上つてもよろしいのですか。
靜子　二時よりあまり早くつてはいけません。二時よりあまりおそくつてもいけません。
西島　えゝ時計を見てちやんとその時分に上ります。
靜子　うちの前に立ち止つてゐらつしたり、うちの前を行つたり來たりなさつては困りますよ。
西島　しません。
靜子　それならお暇します。
西島　之をもつて歸つては下さいませんか。
靜子　いりません。
西島　どうしても許して下さらないのですか。
（靜子默つて金をとる。）
西島　（嬉しさうに）許して下さつたのですね。
（靜子西島の手を握り。）
靜子　私を憎まないで頂戴よ。（急に身を轉じ俯向く）さよなら。
西島　又あした。
靜子　（退場しながら）きつと二時ですよ。
西島　えゝ。
（西島送つてゆく。まもなく西島登場。障子の處から靜子の後姿を見送り、障子をしめ溜息をつき、机の上にうつぶす。暫くして。）
西島　おい。

外　はい。
（女中登場。）
西島　かたづけてくれ。
女中　はい。
（女中かたづけて退場。）
西島　（獨言）あゝ俺は馬鹿だ、馬鹿だ。思ひちがひしてゐた。（髪毛をかきむしり）許して下さい。彼女の運命に狂ひがないやうに。（沈默、不意に頭をかきむしる。不意にやめる。芳子登場）
芳子　唯今。
西島　大變早かつたね。
芳子　ですけど丁度いゝ時に歸つて來たのでせう。
西島　何を云ふのだい。
芳子　もつと早かつたらお怒りになるでせう。
西島　………。
芳子　今迄、誰がこの室で貴夫とさし向ひになつてゐたか知つてゐますよ。
西島　それが何んだ。
芳子　それだつて私の留守に、すましてこゝへ上げるなんて。貴夫は今日私が實家へゆくかと何度も念を押しになつたわね。私の留守にわざとお呼びになつたのではなくつて。さうでせう。

西島　相談があつたのだ。
芳子　私が居てはいけない御相談。
西島　お前がゐれば野村の妹は遠慮するからね。
芳子　をかしな方ですわね。
西島　何が。
芳子　靜子さんのことだとすぐお怒りになるのね。
西島　お前が角のあるもの云ひ方をするからさ。
芳子　それでも女は女同士で相談するのがあたりまへですわ。
西島　女が女同士相談が出來るかい。まして細君になつてゐる女と。
芳子　細君のある男の方と話しするのが可笑しいわ。へんな噂があるつて實家の父や母は心配してをりましたわ。
西島　どう云ふ噂だ。
芳子　云ふとお怒りになるから云ひませんわ。
西島　野村の妹が俺の妾だと云ふ噂だらう。誰に聞いたのだ。
芳子　御存知なの？　知つてゝ靜子さんも貴夫も平氣なの。
西島　噂がなんだ。
芳子　外の噂とはちがひますわ。
西島　お前は誰に聞いたのだ。
芳子　そんな噂と云ふものはすぐ傳はるものですわ。實家

の知つてゐる人があの近處に住んでをりますのですよ。貴夫と靜子さんが一緒に歩いてゐるのを見たと云つてゐましたわ。私辯解しましたら笑はれましたわ。

西島　笑ふ奴は笑ふがいゝさ。

芳子　靜子さんは貴夫の思つてゐるやうな方ではなくつてよ。靜子さんは噓つきですよ。

西島　何が？

芳子　叔父さんの家には足ぶみもしないと仰しやつてゐらつしやいましたわね。

西島　それが噓だと云ふのかい。

芳子　噓ですわ。

西島　證據があるのかい。

芳子　ちやんと見ましたわ。

西島　本當に見たのかい。

芳子　そんなこと噓はつきませんわ。

西島　何時見たのだい。

芳子　たつた今！

西島　今？　たうとう行つたか。

芳子　ちやんと入る所を見ましたわ。今迄だつて何度もいらつしやつたに違ひありませんわ。

西島　本當に見たのだね。

芳子　えゝ。

西島　………。

芳子　そら御覽あそばせ。

西島　默れ！　野村の妹は相川の妻になることにきめたのだ。

芳子　私きつとさうだらうと思ひましたわ。

西島　お前にわかるかい。たつた今きめたのだ。この俺がきめさしたのだ。野村の妹は俺のたよりにならないことを知つたのだ。俺の最も恐れてゐたことが起つたのだ。お前はそれを見て默つてゐたのかい。

芳子　それだつて驅けていつて留めることも出來ないぢやありませんか。貴夫之からすぐ行つて留めてゐらつしやればいゝわ。（本棚のそばに行つて本棚を見る）本をお賣りになつたのね。

西島　賣つた。

芳子　いくらでお賣りになつたの。

西島　二十五圓だ。

芳子　そのお金をどうなさつて？

西島　皆野村の妹にやつた。

芳子　まあ。うちはどうなるお心算（つもり）。

西島　お前の方はどうだつた。

芳子　だめでしたわ。

西島　どうにかなる。

芳子　うちなんかどうなつたつていゝのでせう。私なんかどうなつたつていゝのでせう。私なんか心配して死んでしまう方がいゝでせう。噂は矢張り本當なのですね。（泣く）

西島　嘘だ。明日になれば皆わかる。お前は野村の妹には感謝していゝのだよ。萬事過ぎた！

芳子　（ヒステリー的に靜子の肖像を見て）この額を外して頂戴。

西島　外さう。（額をはづす）俺は之から一寸散歩してくるよ。（退場）

――幕――

第五幕

廣次の室

廣次、一人で靜子の歸りの遲いのをまちかねてゐる。電燈がぼんやりついてゐる。足音する。

廣次　靜ちやんかい

靜子　はい。（登場）唯今。（お辭儀をする）

廣次　何をぐづ〳〵してゐたのだ。俺が一人でゐればどのくらゐ不自由たと云ふことはお前は知つてゐるのだらう。それなのに今日は何時もに似あはずゆつくりのそつと歸つて來たのだね。

靜子　之でも急いで歸つて來ましたのよ。目がなくつたつて耳があるからね。

廣次　そんな嘘ついたつて駄目だよ。目がなくつたつて耳があるからね。急いで歸つて來た奴の呼吸の違ひぐらゐはわかるからね。それに今日は何時もに似合はず足音が低かつたよ。まるで泥棒見たいにそう〳〵とあがつて來た。俺に逢ふのが恐いやうな歩き方をしてゐる。

靜子　そんなことはありませんわ。

廣次　金をもらつて來たか。

靜子　はい。二十五圓だけ戴いて來ましたわ。

廣次　そんなにもらつて來たのか。拂はなければならないものは拂つておけ。

靜子　はい。

廣次　お前は俺の時間を尊敬しなければいけないよ。お前の留守にどんな事があつて俺に書きたいものが出來るかも知れないからね。用がすんだらさつさと歸つて來てくれないと困るよ。

靜子　はい。

廣次　それは遊んでくるのもいゝさ。たまだから、だけど、俺達はまだそんな呑氣なことを云つてゐられる人間ぢやないのだからね。それは歸りたくないこともあらう。俺の顔許り見てゐても面白くはないだらうから。

靜子　そんなことはありませんわ。
廣次　そんなら何をぐづ〳〵してゐたのだ。俺は何度癇癪を起さうとしたか知れやしない。俺はそれをぢつとこらへてお前の歸るのをおとなしく待つてゐたのだ。無理はないと思つてゐたのだ。だけど四時がうつてもまだ歸つて來ない、きつともうぢき五時だらう。俺は心細い氣がして來た。お前まで俺を馬鹿にしてゐると思つて來た。俺はお前に馬鹿にされたつて苦情は云はない。俺はお前の運命を兄らしく荷ふことも出來なければ、お前を幸福にすることも出來ないのだから。お前はこんな兄をもつたことを後悔するのも尤だと思つてゐる。
靜子　何をおつしやるの。お兄さん。
廣次　俺は本當のことを云つてゐるのだ。
靜子　それが本當のことですつて。私はお兄さんを輕蔑したことがありまして。
廣次　輕蔑してゐる？　お前は俺が世間から惡口を云はれた時、默つてゐた。云へば俺が絶望するとでも思つたのだらう。お前ぢやあるまいし、俺は自分の力を知つてゐるよ。西島に聞かなくつたつて知つてゐる。お前は俺を憐れんでゐるのだ。
靜子　さうぢやありませんわ。お兄さんがあまりあせつてゐらつしやるので、お知らせする氣がしなかつたのですわ。
廣次　さうだらう。それで、俺が寢たふりしてゐると西島に、本當に兄はものになりませうかなんて聞く氣になるのだらう。俺は目が見えないだつてお前の心はわかつてゐるよ。
靜子　そんなに憎まれ口がおつしやりたければおつしやるといゝわ。
廣次　俺は憎まれ口を云つてはしないよ。俺はお前にも苦情の云へない人間だ。俺は世界中の皆に輕蔑されていゝ人間なのだ。俺は自分一人では生きてゆけない人間だからね。
靜子　ひがんでゐらつやるのですわ。
廣次　ひがますやうなことを誰がしたのだ。
靜子　誰もしませんわ。
廣次　お前は本當に俺を馬鹿にするね。（机の上のインキ壺をいきなり妹にぶつける。インキ壺こはれる）
靜子　（泣き聲）何をなさるの。
廣次　お前が俺を馬鹿にするからさ。いくら盲目になつたつて、俺は俺だ。それが腹が立つなら出で行つてくれ。
靜子　（インキ壺のこはれを集め、インキをふきながら）お兄さんにはどうして私の心がおわかりになりませんの。（泣く）

廣次　泣くがいゝ。そんな讒におどかされないよ。お前はどんなことをしたつて俺はお前に怒る資格がないと思つてゐるのだらう。それはさうだらう。けれど、俺にだつて意地はあるからね。居たくなかつたら出て行つてもらはう。

（靜子むせびなく。）

廣次　もう泣かなくつていゝ。廣次びつくりしてそばにより。）云ひすぎた。許してくれ。ね。お前の心はわかつてゐる。たゞ俺は、お前についていろ〳〵心配なことが心に浮んだのだ。途中で負傷しやしないか、惡者にどうかされやしないか、お前は心細くつてやけを起しはしないか、とかいろ〳〵のことを考へてゐたのだ。其處へお前がのこのこと歸つて來たのだ。俺は安心したと共に急に腹が立つて來たのだ。實はさつきから書いてもらひたいものがあつたのだ。それでなほお前の歸るのを待つてゐたのだ。さあ機嫌をなほしておくれ。お前がどのくらゐ俺の事を思つてゐてくれるかと云ふことは俺だつて知つてゐるのだ、許してくれ、惡かつた。

靜子　（やつと泣きやみ）お書きになりたいものがあるのですつて。

廣次　あゝ。しかしいゝ。

靜子　書きますわ。

廣次　書けるかい。

靜子　書けますわ。

廣次　それなら書いてもらはうかね。飯を食つてからでもいゝけれど。

靜子　まだ四時半ですよ。書きますわ。（机に向ひ鉛筆で）さあ、云つて頂戴。

廣次　いゝか。

靜子　はい。

廣次　AとBの會話だからね。

靜子　はい。

廣次　「お前はどうして食つてゐるのだ」「或人に食はしてもらつてゐるのだ」「或人と云ふのはお前の身內のものか」「友達だ」「友達はどうしてお前を食はす氣になつたのだ」「俺に同情したのだ」「どうして同情したのだ」書けたかい。

靜子　はい。

廣次　「どうして同情したのだ」「妹がいやな男と結婚をしなければならなかつたからだ。その結婚をやぶる爲には俺は妹と一緒に食客になつてゐる家を出なければならなかつたのだ」「それならその友は君に同情したのか、君の妹に同情したのか」書けたね。

靜子　はい。

廣次　「兩方だ」「兩方か、俺にはさうは思へない。君の妹は美しいのだらう」「美しいのだ」

靜子　そんなことを書くのはいやですわ。

廣次　書け！　本當のことだから書け。出す出さないは別だ。

靜子　………。

廣次　お前は俺の云ふことさへ書けばいゝのだ。手が頭に苦情を云ふ奴があるか。書け！

靜子　はい。

廣次　「それならば兩方ではあるまい」「その男は僕の仕事を信用してゐる。さうして妻をもつてゐる」「その男は非常な金持か」「さうではない」「その男の名は○○と云ふだらう」「さうだ」「世間では君の妹をその妾(めかけ)だといつてゐる」

靜子　なんの爲にそんなことをお書きになるの。西島さんにあてつけるやうな氣がしますわ。

廣次　默つて書け。俺は解決しなければならない問題にぶつかつてゐるのだ。俺は今迄それにさはらないやうにしてゐた。しかしいつまでもそんなことはしてはゐられない。俺はこの問題と何處までとつくめるかを、自分で知らなければならない。書けた具合で見せなければそれでいゝ。書くのがいやなのか。

靜子　いゝえ。書きますわ。

廣次　「……妾(めかけ)だと云つてゐる」「世間が何と云つても恐れない」「しかし君の妹の緣談はそれでこはれはしないか」「こはれゝばなほいゝ」「しかしいゝ緣談があつた時こはれたら困るだらう」「世間の噂を恐れる奴にはいゝ奴はない」「それでもその噂が本當らしい時には誰もいゝ氣がしないからね。一體妻をもつ男が若い女と友達になると云ふことは許せないことなのだ」「Cはあたりまへの人間ではない」「君はCを信用し過ぎてゐる」書けたかい。

靜子　はい。

廣次　「妹もそんな人間ではない」「君は妹を信用しすぎてゐるな。今は信用していゝだらう。しかし長の月日の内にはどうかな。君がCの位置にゐたらどうだ。少くもCの家庭を亂すやうなことはないか。君は默つてゐるね」

靜子　お兄さん私頭痛がして來ましたわ。

廣次　もう少しだ。之からが大事なのだ。之からが問題なのだ。書けるだらう。

靜子　書きます。

廣次　「……君は默つてゐるね。返事が出來ないのだらう。Cの家庭にたしかに君達の爲に亂されてゐるよ。そのくらゐのことは小說家でない僕たつてわかることだ。疑ひ

と云ふものはどんな處だつて入るからな。又今後のことを人間は心配する動物だからな」B怒鳴る「どうすればいゝのだ」「君は自分の力で食つてゆけないのか」「ゆけない。俺は盲目だからな。それに餓めくらだ」「君はどうしていゝか知らないのだね」「知らないのだ」「妹を金持と結婚させるのだな」「馬鹿！」「それならCの世話になるのか。さうしてその内に何處からか牡丹餅の落ちてくるのを待つてゐるのだね。その内にひどいめにあふことはないか」「俺は苦しい、俺の理想は俺が早く自分の仕事をある處まで仕上げることだ。」

靜子　そんなに早くおつしやつちや書けませんわ。

廣次　お前は泣いてゐるね。俺達は泣てゐられる身分かい。俺達は死にもの狂ひにならなければならない時ぢやないか。しをれてゐる時ぢやない。戰爭に出て、敵にとり圍まれたと云つて泣いてゐる奴があるか。いゝか。

靜子　はい。

廣次　「俺は苦しい。俺の理想は早く自分の仕事で食へるやうになることだ。自分の力で自分達の運命を荷へるやうになることだ」「お前にはそれが出來るか」「出來ないことはないと思ふ」「本當にか」「俺だつて男だ。さうして妹がゐる。俺は死にもの狂ひだ。もう一歩と云ふ處にゐてくたばり切るやうな男ではない。侮辱と誤解は俺を淋しくする。俺の書いたものは恐ろしい惡口を云はれた。救はれないものゝやうに云はれた。だが俺はそれでくたばり切つて、最初の一念を通さないやうな男ではない」「君の妹は？」「妹だつて俺の妹だ。金の爲にいやな男に一生を賣るやうな女ぢやない」

（靜子聲出して泣く。）

廣次　なぜ泣くのだ。泣くことはないぢやないか。俺を憐れむのか。俺は憐れまれたくない。泣く奴があるか。書け。

靜子　は、はい。

廣次　「妹だつて俺の妹だ。金の爲にいやな男に一生を賣るやうな女ではない。およそそれは卑しいことだ。淫賣婦になることは一瞬間を賣ることなら、妻になることは一生を賣ることだ。それはこの上なく恥づべきことだ。妹はそんな妹ではない」なぜそんなに泣くのだ。默つてゐてはわからないぢやないか。お前は矢張り俺が心配してゐたやうに下等な心をもつてゐたのだな。それで疚しいのだな。まさか叔父さんの處へ行きはしまいね。（間）なぜ默つてゐるのだ。

靜子　は、はい。

廣次　行つたのか。

靜子　…………。

廣次　行かないのか。

靜子　はい。

廣次　行かなければいゝ。俺は今日お前の歸りがおそいのでお前のことを思つてゐたら、お前の姿が目に浮んだ。それはうつむいてしをれて、死にゝでもゆく人のやうな恰好をして道側をのこ〳〵歩いて行く姿だつた。さうしてそのお前は何處に入つたと思ふ。西島の處ではなくて叔父さんの處だつた。まさか行きはしまいな。行つたら承知しないよ。お前の位置の苦しいことは知つてゐる。お前は時々相川の處へ思ひ切つてゆきたくなりはしないかと俺はそれを恐れてゐるのだ。俺も男だ。お前も俺の妹だ。思つても腹の立つ相川の處へゆく氣は起すなよ。苦しいことは澤山あるだらう。しかしとりかへしのつかないことをしてはいけないよ。何といつたつて俺のことを思つてくれるのはお前許りだ。お前のことを思ふと力がわくのだ。俺は時々疳癪も起す。つまらぬことでお前を泣かすこともする。俺は他の人には自分の憂さをもらすことが出來ないのだからね。さあ泣くのはよしておくれ、お前が泣くと俺まで心細くなる。それは實際泣きたくなることもあるだらう。俺でさへ時々どうしていゝかまるでわからない時がある。西島がゐてくれなかつたら實際どうすることも出來ない。西島は俺の心を知つてゐる。西島に世話になるのは心苦しいが、西島だから一方安心もする。西島が何かに書いてゐたが、ドミーエはコローの世話になつて、コローにだからこそ世話になつても氣がとがめないと云つたさうだが、俺も西島だから安心してたよれるのだ。いやな噂が立つたからと云つて、西島は世間の噂にまけるやうな男ではないからね。さうしてその内には俺にも力が出來るからね。心配することはないよ。

靜子　お兄さん。

廣次　なんだ。

靜子　西島さんはさう金持ではありませんのよ。

廣次　それでも毎月二十圓の金ならどうにかなるだらう。

靜子　さうもゆきませんのよ。西島さんは私達に下さる金をつくる爲に本を片端から賣つてゐらつしやるのよ。

廣次　それは本當かい。

靜子　本當ですわ。

廣次　さうか。

靜子　本當に私どうしていゝかわかりませんわ。

廣次　…………。

婆　西島さんがいらつしやいました。

廣次　西島が來た？　お前は西島の處へ行つたのだらう。

靜子　え。西島さんがいらつしやるわけはありませんわ。

誰かのまちがひぢやなくつて。
婆　いゝえ。西島さまです。
廣次　お通しして下さい。
（婆さん退場。）
廣次　何の用で今時分來たのだらう。
靜子　本當に變ですわ。
（西島登場。）
廣次　よく來て下さいました。
西島　一寸、散歩のついでにおよりしましたのです。
廣次　さつきは靜が出まして。
西島　どういたしまして。（靜子の方を向き）さつきは失禮しました。
（靜子、顏をそむける。）
西島　君と二人だけで一寸お話したいことがあるのですが。
廣次　それなら靜ちやん下へいつておいで。
靜子　はい。（默つて退場しようとする）
西島　（小聲て）怒つてゐらつしやる。
靜子　（小聲て）なぜ約束をおたがへになつたの。
西島　（小聲で）餘程今日は御遠慮しようかと思つたのですが。まだ貴女はお留守かと思つて。
靜子　留守のわけはないぢやありませんか。
西島　私の處の歸りに何處かへおよりになつたのでせう。
靜子　（びつくりするしかしそれをごまかし）いゝえ、何處にもよりませんでしたわ。
西島　それは本當ですか。それなら私の妻が見ちがへたのかも知れません。
廣次　何です？
靜子　なんでもないです。
廣次　早く下へおいで。
靜子　もう私下にはゆきませんわ。
廣次　なぜだ。
靜子　だつて、西島さんがどんなことをおつしやるかわかりませんもの。
廣次　下へおいで。
靜子　（小聲で）そのことをおつしやつては承知しませんよ。
西島　（小聲て）それなら矢張り本當なのですね。
靜子　（小聲で）餘計なお世話ですわ。あなたは明日の午後二時前にはいらつしやらない御約束ぢやありませんか。
西島　それでも。
靜子　（小聲て）あなたは、私をいぢめる爲にいらしつたの。餘計なことをおつしやつたら私一生お恨みします

よ。本當に今日いらつしやるのは少しあつかましくつてよ。

廣次　何をぐづ〳〵してゐるのだ。

（靜子拜む眞似をし。）

靜子　ね。

（廣次沈默、靜子、沈默を守るしるしに口に指をあて、形で念を押す。）

廣次　早くゆけ。

（靜子、又口を指にあて、拜む眞似をして退場。沈默、廣次は何か考へながらぢつと坐つてゐる。西島立ちながら考へて居る。二人の目に涙がやどる。）

廣次　西島さん。本當ですか。

西島　何がです。

廣次　妹が叔父の處へ寄つたと云ふのは。

西島　よくは知りませんが。

廣次　妹はあなたの處に何時迄ゐました。

西島　三時頃でしたらう。もつと早かつたかも知れません。一時間はゐらつしやいませんでした。

廣次　さうですか。私は又君の處に妹はゆつくりしてゐたのかと思ひました。

西島　もつと早くお伺ひしたかつたのですが、明日の二時に上るお約束をさつきしましたので、その時お妹さんは二時前に來ては困るとおつしやつたので、この前を一度通りながら三十分程歩いて來ました。それでもとう〳〵お寄りしないではゐられなかつたのです。そのくせ私は何と君に云つていゝか知らないのです。

廣次　…………。

西島　今日お妹さんが叔父さんの處にお寄りにならなかつたにしろ、その內、お妹さんは叔父さんの處へいらつしやる決心だと思ふのです。私はそのことを今日お話してゐる內に感じました。そのくせどうすることも出來なかつたのです、今のまゝにしてゐて下さい。今のまゝにしてゐて下さいと私は云つたのですが、お妹さんには、それが不安で仕方がないらしいのです。何しろいろ〳〵のことが起つて來て、それが一つになつて、妹さんを。

廣次　さうです、さうです。本當にさうです。私もそれを恐れてゐたのです。今一人でゐて今更にどうすることも出來ないことを感じたのです。私はどうかしてその恐ろしいことに勝たうと思ひました。あんまり侮辱ですからね。私だつて男です。盲目ですけれど男です。たつた一人の妹をこんなにまで思つてどうすることも出來ないのは殘念です。侮辱です。そのくせどうすることも出來ないのですからね。私は相川と云ふ人間が、そんなに恐ろしくない人間ではないかと時々思つて見ます。しかし私

は人のことを思ふとすぐその容貌が目に浮びます。それは事實あり得ない程醜いものに浮びます。それに相川のやり方は今思つても侮辱です。人を馬鹿にしてゐます。私は相川の子を妹に生ますのはいやです。さうしてそんなにまで思つてゐるものに妹をやるのは相川にたいしたつて罪のやうな氣がします。恐ろしい侮辱です。私はその侮辱をだまつて受けなければならない人間でせうか。私はそんなに賤しい人間でせうか。私はそんな不淨なことをしなければ生きてゆかれない人間なのでせうか。私の仕事はそんな不正なことをしなければ出來ないのでせうか。私の仕事は妹を幸福にする仕事ではなくつて、妹を不淨なものにしなければ出來ない仕事なのでせうか。思へば思ふ程たまりません。私は目のいゝ時によくたまらない人間の顏を見ました。それは生々した所のない。美しい處の少しもない、ふやけた顏です。不良少年らしい顏です。神經のない愛のない顏です。

西島　それでもそんな男ならば妹さんを愛しはしないでせう。

廣次　さうも思はないことはありません。しかし私は今度の結婚は相川よりも叔母が進んでゐるのだときめてゐます。妹でも相川の處へやらなければ叔父の家はどうなるかわかりません。叔父の位置はあぶないのですから。叔父は働きのないくせに餘計金をとつてゐます。從つてつッかい棒がゐるのです。それには妹が入用なのです。今度のことは向うがたつてほしがつてゐるよりも叔母がたつてやりたがつてゐるのです。さうして叔父もその氣になつたのです。私達は叔父の犧牲になる必要は斷じてありません。尤も妹はそれを知つてゐながらも、無理はないと云つてゐました。妹は叔父と私との仲たがひを默つて恐れてゐるのです。妹は廢兵の金をほしがつてゐるのです。私は廢兵の金もあまり氣持のいゝ金とは思つてゐないのです。私は好んで戰爭へ行つたのではありません。又私はまだ自分を廢人だと思つてゐませんから。

西島　……　……。

廣次　ですけど、ですけど、そんな強いことを云つてもなにゝなるでせう。實力は廢人と同じことです。私は蟲のいゝことを云つてゐながら、何をする力もないのです。妹を怒つたり泣かしたり、いぢめたり、するより外何にも出來ないのです。さうして疳積を起すより外力がないのです。私は時々生きてゆく資格のない人間ではないかと思ひます。少くも現代は私の生きてゆくことは望みません。それは私に力があり過ぎるからではなく、無さ過ぎるからです。自分ながら發狂しないのが不思議な時があります。

西島　妹さんはそれを心配してゐらつしやいました。それだけ可哀さうです。

廣次　さうでせう。妹の心はわかります。それだけはがゆいのです。妹は下で心配してゐるでせう。私は自分達程不幸な人間はないとは云ひません。私は自分を不幸な人間とはまだ云ひたくありません。私はいくら運命にたゝきつけられたつて、生きてゐる間は、かうやつてこの世に坐つてゐます。さうしてあはよくば起き上つてやらうと思つてゐました。もし得られるものならば勝利も二人で苦しんで來たのです。二人で喜びたかつたのです。今迄の妹の私に對する愛や私の爲の苦しみはどんなものでせう。どんな酬いをもつてもそれを報いることは出來ません。それなのに、私は今それをこんな風に報いなければならないのでせうか。私はどうすることも出來ないのでせうか。私が死ねば妹が幸福になるなら死んでやりたい位ゐに思はないことはないのです。それなのに、どうすることも出來ないのです。こんな意氣地のないことがあるでせうか。こんなはがゆいことがあるでせうか。

西島　どうか僕に任せて下さい。

廣次　それは妹が承知しませんでせう。

西島　（心に恥ぢる）

廣次　時々、どうでも勝手になれと云ふ氣がします。私は何事も與へられることは耐へなければならない人間です。（間）妹の泣き聲が聞えやしませんか。

西島　いゝえ。私には聞えません。君には聞えますか。

廣次　耳のせゐかも知れません。さつきから泣かして許りゐたのです。逃げ路のない所に逐ひこんでおいて、それで泣かして許りゐたのですから妹もたまりません。何しろ十重二十重にとり圍む災を一刀兩斷しないではゐられない氣持になりながら何うすることも出來ないので、それが癇積になつてもらす所がないので妹の上にばかりもらすのですから、妹もたまりません。

（靜子、靜かに音をさせずに登場、さうして西島を見て淋しく微笑む。）

廣次　其處にゐるのは靜ちやんかい。

靜子　えゝ。さうよ。

廣次　なぜ上つて來たのだ？

靜子　それでも下にゐると淋しいのですもの。お兄さんに怒られても上の方がよろしいわ。

廣次　お前は叔父さんの處へ行つたのだらう。

靜子　いゝえ。誰がそんなことを云ひましたの。

廣次　本當に寄らなかつたのかい。西島さんの處には二時迄切りゐなかつたのだらう。

靜子　よくは知りませんけれど、そんなものだつたかも知

れませんわ。

廣次　お前の歸つて來たのは四時半だつたらう。その間一時間半は何處にゐたのだい。

靜子　私、たゞ歩いてゐましたの。

廣次　本當かい。

靜子　明日まではさうしておいて頂戴ね、西島さん、私一生恨みますよ。あなたはいゝお考があつてゐらつしつて下さつたの。それとも私をいぢめるためにいらしつたの。

廣次　何を云ふのだ。お前、矢張り本當なのだね。

靜子　知りませんわ。

廣次　お前は俺に何故默つていつたのだい。

靜子　自殺する人は、默つて自殺してもいゝと思ひますわ。自殺しろとはどんな方でもおつしやるわけにはゆきませんものね。西島さんだつて私を助けることがお出來になりもしないくせして、お出來になるやうな顏してゐらつしやるのですもの。

西島　許して下さい。

廣次　靜ちやん何を云ふのだい。あんなにお世話になつてゐながら。

靜子　それだつて私の心を御存知のくせして、さつき知らん顏してゐらしつて、今になつてすましてお兄さんの處へ相談しにいらつしやるのがをかしいわ。

西島　明日が待てなかつたのです。まさか私の所の歸りにおよりになるとは思はなかつたのです。そんなにあてつけなことして下さらないでもいゝと思つてゐます。

靜子　あてつけではありませんよ。私は今日はお暇乞ひ見たいなつもりで上つたのです。皆さんが見たがらないことを私は見ましたわ。私は私が一日も早く自分のゆきつく處へゆきつかないとどんなことが起るかちやんと知つてゐますわ。私のしたことは恥知らずですわ。私往來を歩くのでも小さくなつてゐましたわ。私程賤しい女はないやうな氣がしましたわ。ですが仕方がありませんわ。お兄さん、お腹が立つならどうぞ、私を打つて頂戴。お蹴りになつてもよくつてよ。ですけれど、私を妹だと思つて頂戴。私お兄さんの傲をきずつけることを思ふとたまりませんわ。私が一人賤しいのですわ。私は一生を賣つたのですわ。私愛してゐない、寧ろ憎んでゐる人に一生を賣つたのですわ。私のしたことはどんな女だつて恥ぢますわ。ですけれど私は悲しくはありませんの。私は生きてゐてお兄さんの仕事を見ることが出來るのですもの。お兄さんはいくら私を賤しんだり憎んだりして下さつたつて私は蔭でお兄さんの爲に祈つてゐますわ。

廣次　俺の世話を誰がするのだ。

靜子　お兄さんに手を握られた小間使がしますわ。

廣次　承知したのか。

靜子　喜んでゐましたわ。叔父さんも叔母さんも喜んでゐらつしやいましたわ。皆喜んでゐましたわ。私は賤しんでくださらつしやいませんでしたわ。さうして私を賤しんで下さいませんでしたわ。私は賤しまれませんでしたつてもかまはないと思ふ方には賤しまれませんでしたわ。西島さんもう歸つて頂戴ね。明日は來てくださらなくつてもよろしいわ。

（西島、默つて歸らうとする。）

靜子　お歸りになるの、私を輕蔑してゐらつしやるの。私のわきにゐるのはもうおいやなの。

西島　そんなことはありません。私はあなたの前には罪人です。あなたが歸れとおつしやれば歸ります。（居殘る）

靜子　あなたはちつとも私にわるいことをなさらなかつたぢやありませんか。あなたはいつでも私に力を與へて下さいましたわ。私は御恩は忘れはいたしませんわ。あなたは餘計なことをしたとお思ひになるでせう。ですけれど私はどんなに嬉しかつたか知れませんわ。之から今迄よりも兄の友達になつて下さいますわね。本當は今日來て下さつた方がよかつたかも知れませんわ。明日あなたがゐらつしやる時分には私はゐなかつたかも知れませんわ。私、兄に置手紙して明日逃げようかと思つたのですわ。さうしてあなたに來て戴くのは、たゞ私の置手紙を讀んで下さる爲でしたわ。あなたにも手紙を書いておくつもりでしたの。さうしてあなたがこゝに來て下さつてゐる時分に私は何をしてゐるか、御存知？　その時分私は叔父さんにつれられて相川さんの處へ行つてゐますわ。

廣次　それは本當かい。

靜子　九分通り本當なの。今晩叔父さんが相川さんの處へゐらつしやるの。

廣次　お前はそんな約束までして來たのかい。

靜子　それでもおせきになるのですもの。

西島　私に來いとおつしやつた時は、もうそれがわかつてゐたのですか。

靜子　まさか相川の處へゆくと迄は思ひませんでしたけれど、叔父の處へは行つてゐる心算でしたわ。さうしてお兄さんのお許しを得てから歸つて來ようと思ひましたわ。明日小間使をつれて來ますわ。あの子はいゝ娘ですわ。それに字も書けますわ。さうして可哀さうな娘ですわ。私ゐなくなるまでにきつとよくしこみますわ。

廣次　靜ちやん。俺は強いことを云つたけれど、お前の決心をかへるだけの力のないことを許しておくれ。俺はかうやつてがんばつてゐるだけだ。俺には力はないのだ。お前のすることは、いゝことかわるいことか俺は知らない。だが俺はどうしろとも云へないのだ。恐ろしいこと

は遂に來た。俺はどうしていゝかわからない。反對していゝか、賛成していゝかそれもわからない、その力もない。

靜子　お兄さん、許して下さつて。やつぱり妹だと思つて下さつて。

西島　僕は失禮します。

靜子　お怒りになつてゐらつしやるの。

西島　怒るどころですか。恥かしい氣がするのです。私は本當にあなた達にすまない氣がするのです。私はまだどうかなるかと思はないことはありませんが、それは自分の良心に對する云ひわけにすぎないでせう。

靜子　西島さん。本當に、あなたの處へ行つた歸りに叔父の處へ行つたことを許して下さいね。私、叔父の家を出て、かうしてゐたのを無意味とは思ひませんわ。あなたの澤山の本を賣らしてそんなことを云ふのはすみませんけれど、あなたには仕事はありますわね。あの偉い詩人が戀が報いられないことを感謝して、詩が書けると云つたさうですわね。私、理窟では一番あなたに濟まない氣がいたしますのよ、ですがあなたは大概のことには負けない方ですわね。私がそんなこと思ふたけでも生意氣の、氣かしますわ。又何時かお目にかゝれますわね、私御恩は嬉しく思ひ出しますわ。

西島　ありがたう。野村君。それなら又。

廣次、それならば又。どうか。

西島　ありがたう。さやうなら。

廣次　さようなら。

（行かうとしてふりかへる、靜子と手を握る。）

西島　（小聲で）どうか許して下さい。

靜子　（小聲で）氣にすることはありませんわ。

西島　（小聲で）氣になつて仕方がないのです。

靜子　氣にしないで下さい。私、御親切を嬉しく思つてるのですから。

西島　それなら又何時か。

靜子　え。奥さまによろしく。

（西島退場。靜子送らうとする。）

西島　（辭退するやうに）どうか。

（二人退場。靜子まもなく登場。）

（沈默。）

靜子　怒つてゐらつしやるの。

廣次　怒つてはゐない。

靜子　許して下さつて。

廣次　許す力も反對する力もない。

靜子　私の心はわかつて下さいますわね。

廣次　わかる。

靜子　私のしたことは惡いことでせうか。

廣次　知らない。俺はどうしていゝのかわからない。お前をとりかこんでゐる災をとりのぞいてやりたい。だがその力はない。力がないのですましてゐるのをすまなく思ふ。だがこの目では仕方がない。身體（からだ）を大事にしておくれ。僕の仕事もその内に目鼻がつくだらう。

靜子　あせらないで頂戴ね。私生きて見られるのだと思ふと嬉しくつてよ。

廣次　俺はあせらない。

靜子　泣いてはいやですよ。

廣次　俺はこんなにまでしなければ生きてゆかれない人間か。さう思ふと情ないよ。

靜子　…………。

廣次　俺は力がほしい。

――幕――

みないい鳥（一幕）

現代

人物

父

娘

友

母

一

父仕事場で小さい木彫をしながら何か考へてゐる。娘芳子靜かに登場。

芳子　お父さん。許して下さい。

父　なんだ。芳子か。どうして歸つて來た。

芳子　私、あの人にすてられましたわ。

父　それ見ろ。

芳子　それで私、歸つて來たのよ。

父　歸つて來ただけ感心だ。つかれたらうからねろ。

芳子　私、ねたかないわ。私、本當に馬鹿だつたわ。

父　お前が正直すぎたのだ。

芳子　あの人をわるい人とは思はないのですが。

父　一目見たつていゝ人でないことはわかつてゐる。だがお前にわからないのは仕方がない。お前が齡頃になつた時、お父さんが注意してお前と一番よくあひさうな、いい男の人と交際させなかつたのがいけなかつた。お前があんな男と交際してゐるのは知らなかつたのがお父さんが馬鹿だつたのだ。

芳子　私、本當にとりかへしのつかない馬鹿なことをしたわ。

父　とりかへしのつかないことはない。早くすてられてよかつた。之でお父さんも今夜から安心して眠られるよ。

芳子　お父さんは私のことを心配してゐて下さつたのですか。

父　それは心配してゐたさ。誰だつて子供のことを心配しない馬鹿はない。親と云ふものは暇の時は子供の心配をするものだよ。

芳子　本當にすみません。

父　すむもすまないもないよ。すんだこつた、之から利口になればいゝのだ。

芳子　だつて私、子供が出來てゐるかも知れないのよ。

父　それですてられたのだらう。

芳子　さうよ。

父　お前も隨分苦勞したな。だがよく歸つて來てくれた。お母さんもさぞよろこぶだらう。今日は一つ赤の飯でもたかう。そしてお前のすきな饅でもとつてやらう。

芳子　私、お父さんに怒られるつもりで歸つて來たのよ。

父　誰が怒るものかね。子供が親を忘れずに歸つて來て、怒る親なんかない。

芳子　本當にすみませんでした。

父　すむもすまないもない。すんだことはすんだことだ。利口な奴はすんだことはくよ〳〵思はないものだ。

芳子　私、歸つて來てよかつたわ。

父　あたりまいよ。俺が生きてゐる間はお前に苦勞はさせないよ。

芳子　お母さんは何處へいらつしたの。

父　あいつは相變らずお寺へお參りしてゐるよ。お前が無事にしてゐるやうにな。之は內證の話だがね。あれも心配してゐたよ。

芳子　本當にすみませんでしたわ、之から私お父さんや、お母さんの云ふことを本當にきくわ。

父　俺がまちがつたことを云つてもきくか。

芳子　お父さんは矢張り私より利口だと云ふことが氣がついたの。

父　あんまり俺も利口ぢやないよ。だが之から、お互ひになんでもうちあけて相談することにしよう。お前もつかれたらう。あとの事は心配しないがいゝ。

芳子　心配なんかしても、私にはどうすることも出來ませんわ。

父　そんなこともないさ。だが俺に任せておけ。もうすんだことは考へないがいゝ。

芳子　敏子ちやんはどうしました。

父　あいつは元氣にしてゐるよ。お前のことを始終云つてゐたよ。お姉さんがゐて下さるといゝつてね。

芳子　私は敏子を隨分いぢめたものですがね。

父　親身なものは惡いことはすぐ忘れてしまふものだよ。おまけに若い內はなほさら、惡い方は忘れてしまふ。敏子はお前に可愛がられたことだけ覺えてゐるよ。

芳子　なにもかも夢のやうですわ。

父　子供はいつ生れるのだ。

芳子　もう五月になつてゐるのです。

父　さうか。

芳子　………。

父　心配することはない。お母さんと相談していゝやうにするからな。まあ、ねたらいゝだらう。蒲團はいつものところにある。お父さんは今いそがしい仕事をしてゐる

からね。明日までにこの鳥をつくらなければならないかちな。

芳子　それでは私、失禮してねますわ。安心したらすつかりつかれが出て來ましたから。お母さんが歸つていらつしたら起して頂戴。

父　いゝとも。

芳子　それでは失禮しますわ。

父　安心してねておいで。

（芳子退場。父木彫で小鳥をつくつてゐる。友達登場。）

友　や、相變らず勉强だね。

父　うん。今日中につくらなければならないからね。

友　なんだ、それは。

父　河セミさ。

友　さうか。

父　こなひだある所でエヂプトの女面の小鳥の小さい木彫を見たが、すばらしく美しいものだつたよ。それを見てから小さい木彫も馬鹿に出來ないと思つた。それよりあいつが歸つて來たよ。

友　誰だい。芳子さんかい。

父　あゝ。

友　本當かい。

父　あゝ。

友　それはよかつた。

父　うれしかつたね。

友　さうだらう。あんなに君は待つてゐたのだからね。

父　生きてゐてくれたのだからね。一年たよりがなかつた。俺も怒つたのがよくなかつたのだがね。

友　それで芳子さんはどうしてゐる。

父　今、ねてゐる。

友　君の奥さんもよろこんだらう。

父　まだ知らないのだ。安心したら怒り出すかも知れないがね。よろこぶことはよろこぶだらう。

友　男はどうした。

父　芳子をすてゝ逃げたらしい。

友　君の云ふ通りだね。

父　その手で今迄食つて來た男だからね。

友　ひどい奴だね。

父　なに芳子が馬鹿だつたのだよ。そして俺達も馬鹿だつたのだ。娘が鮐頃だと云ふことをつい忘れてゐたのだ。熟し切つた果物だといふことをね。しかしすんだことはすんだことだ。

友　もう男とは縁が切れたのか。

父　それは切れたのだらう。男に未練があるとは思へないし、娘たつてもう未練もあるまい。

友　だが早くいゝ處があつたら、かたづける方がいゝね。
父　いゝ處があればね。だがなければ仕方がない。
友　だがぐづ〳〵してゐると又未練が出る。男は又やつてくる。
父　いゝ處があつて、娘がゆく氣になつてくれゝばいゝが、當分は駄目だよ。
友　さうか。
父　かくしてもどうせわかることだから云ふが、子供が出來たのだ。
友　赤ちやんをつれて歸つて來たのか。
父　腹にゐるのだ。
友　それは困つたね。
父　しかし仕方がない。
友　仕方がないにはちがひないね。男はそれで逃げたのか。ひどい奴だね。
父　ひどい奴さ。だが逃げただけが仕合せさ。そんな奴にくつかれちや大へんだ。墮胎でもさせられて、一生だにのやうにすひつかれても仕方がないが、まあ、運のいゝ方さ。
友　芳子さんは本當にいゝ方だがね。
父　人がよすぎて、馬鹿なのさ。うまい口にのせられたのだ。そして蜘蛛にとつかまつた蝶のやうに、ぢたばたすればする程、男の思ふ通りになるのだ。生理的に女は男にだまされるやうに出來てゐる。だから早くいゝ男と交際さしておけばよかつたのだよ。
友　僕の知つてゐる男に、芳子さんを戀してゐる男があつたのだが、惜しいことをした。その男なら僕は保證していゝ男だつたが。
父　もうすんだ話さ。だが芳子も之から仕合せにならないとも限らない。幸運と云ふものはやけさへ起さなければ、又いつかやつてくるものだ。
友　それはさうだ。絶望することはない。
父　さうとも、捨てる神あれば、拾ふ神ありだ。僕は樂天家だから、今にいゝことがあるだらうと思つてゐる。ただ生れてくる子が父に似られては一寸困るが、しかしどんな子が生れてくるかわからないのに、悲觀許りはしてゐられない。樂觀許りも出來ないが出來てしまへば又可愛いかと思ふ。
友　そりや、可愛いだらう。
父　たゞこのさい、少し金をつくつておきたいと思ふのだが、この前、君が話してゐた人が、もしまだ僕のものをほしがつてゐるかどうか聞いてくれないか。このさいだから少しは安くつてもいゝから大勢、お得意をとりたいと思ふのだ。

友　一つ君の作品の展覧會でもやつたらどうだ。

父　展覧會をやるには金がかゝるだらう。

友　やりやうによるよ。ちひさい美術店をかりてやればさう金もかゝるまい。もしやる氣があれば骨折つてもいゝよ。

父　それはありがたいね。それでは一つ奮發して少し餘計つくつて見よう。

友　きつとよろこぶ人がある。

父　どうかね。だが芳子のため、孫のためなら僕も全力を出してみるよ。

友　さうすれば禍ひ轉じて福になるかも知れない。

父　僕は本當に生きてゐてくれてうれしかつた。死んででも見給へ、僕は今時分どうしてゐるだらう。本當にありがたかつた。我子ながら生きてゐてくれたのは本當に感心だ。そして意固地をはらずに歸つて來たのは本當に感心だつた。僕は本當にうれしいのだよ。僕はこなひだから何んだか芳子が死にさうな氣がして仕方がなかつた。夢にも見た。夢に見てもゐる所さへわからなかつたのだからね。生きてるか、死んでゐるかもわからなかつたのだからね。僕はたまらなかつたよ。だがもういゝ。その心配にくらべれば、他の心配なんかなんでもない。親といふものはへんなものさ。子供に死なれることを考へるとから意氣地がなくなるよ。まあよかつた。今日は久しぶりで晝、鰻でも食つてゆかないか。

友　それはありがたいが、僕は今日は失敬する。展覧會の方は是非やるといゝね。僕が骨折るから。

父　ありがたう、是非やつてくれ給へ。

友　それぢや失敬する。本當によかつたね。

父　本當によかつた。

友　さよなら。

父　さよなら。

（父友を送つてゆく、まもなく父だけ登場、仕事をはじめる。少ししてやめて。）

父　一つ久しぶりに芳子の寢顔でも見てやるかな。

二

同じ室。二月後。父仕事をしてゐる。小さいいろ〳〵の鳥の彫刻が澤山出來てゐる。

父　芳子！

芳子　はい。（登場）なに、お父さん。

父　見ろ、こんなのが出來た。

芳子　まあ可愛いのね。何と云ふ名の鳥。

父　ミナイ鳥と云ふのだよ。

芳子　へんな名ね。

父　見たことがない鳥だから見ない鳥さ。
芳子　まあ。（笑ふ）
（父も大聲出してうれしさうに笑ふ。沈默。）
父　皆ならべて見るかね。
芳子　えゝ。ならべて見ませう。
父　せい順にならべようかね。
芳子　えゝ。せい順にならべませう。
父　芳子。この鳥をあの小畑が三十圓で買ふと云ふのだよ。こんな小さい鳥をね。
芳子　まあ。それはようございましたね。
父　俺は二十圓でいゝと云つたのだが、どうしても三十圓だすと云ふのだ。あいつも馬鹿だ。
芳子　本當に親切な方ね。
父　あいつは又。おつと。
芳子　なに、お父さん。
父　いや、之はお前には內證の話だよ。
芳子　なに。
父　お前に話すと、お前が怒るといけないからね。
芳子　おこらしないわ。
父　まあいゝ。
芳子　よかなくつてよ。子供のこと。
父　（急いてうちけし）さうぢやない。もつと滑稽な話しさ。
芳子　なに。お父さん。
父　お前には內證にしておくと小畑に云つたからね。
芳子　なんなの。惡いことぢやないの。
父　惡いことぢやない。
芳子　心配なことぢやないのね。
父　心配なことぢやない。たゞあんまり馬鹿々々しいことだからね。
芳子　そんなら話してもいゝぢやありませんか。
父　それは俺だつて話したいのだよ。だがもう半年たつたら話すよ。
芳子　それぢや聞きませんわ。
父　話してやらうかな。
芳子　いや聞きません。
父　お前は怒らなければ話してやる。
芳子　それは怒るかも知れないわ。
父　それぢや話さないよ。
芳子　えゝ、きゝたかありません。
父　それと之とせいがちがつてゐるよ。
芳子　こつちの方が高かないの。
父　低いよ。
芳子　いゝえ、高くつてよ。

父　低いよ。

芳子　いゝえ高くつてよ。

父　低いにきまつてるよ。

芳子　いゝえ、かうやつてならべたつて高いわ。

父　馬鹿！　俺がつくつたのだから俺の方が知つてゐる。

芳子　だつて見ればわかるわ。

父　馬鹿。（もどかしがつて）何と云ふ馬鹿だ。

芳子　それだつて。

父　相變らず強情張りだな。それがいけないのだ。

芳子　之はお父さんからのおゆづりよ。

父　馬鹿。（怒つてゐるのでは勿論ない）だがそれは一厘の半分この方が高いのだ。

芳子　一厘の半分位ゐ高くつたつて低くつたつていゝぢやありませんか。

父　だが、高い方は高いよ。

芳子　どうしてそんなことがわかるの。

父　それは木材を俺が切り損つてこつちが一厘の半分だけ長く切つたのだよ。

芳子　それぢや負けておくことにするわ。

父　感心々々。

芳子　それでさつきの話はどうなの。

父　さつきの話か。俺には云つていゝのか、わるいのかわからないのだよ。

芳子　何の話。

父　馬鹿な男の話さ。

芳子　もうあの人の話はいや。

父　いや、こいつは馬鹿でも人はよすぎるのだ。

芳子　そんな話、きゝたくないわ。

父　さうだらうね。

芳子　だが聞いて上げてもいゝわ。

父　恩にきせるね。

芳子　だつて、お父さんは話したいのでしよ。

父　それは話したいさ。

芳子　そらごらんなさい。

父　今度は俺の方がまけかな。

芳子　それは負けにきまつてゐますわ。

父　どうせ親はまけるよ。

芳子　世間と反對ね。

父　さうかね。世間のおやぢと云ふものは偉いものだな。

芳子　ちつとも偉かないわ。

父　さうかね。

芳子　お父さんの方がずつと偉いのよ。

父　今度はいやにおだてるな。

芳子　之ですつかりならんだわ。

父　この中に、お前のほしいのがあるか。

芳子　それはあるわ。

父　さうか、どれが一番ほしい。

芳子　私の一番ほしいのは、このミナイ鳥よ。今日出來た。

父　感心々々。俺もそれが一番好きだ。

芳子　え、くださらない。

父　惜しいね。それは五十圓で賣つてやらうと思つてゐるのだ。

芳子　同じものつくればいゝわ。

父　同じものか。

芳子　それなら少しちがへたらいゝわ。

父　さうするかね。（いぢくりよく見）さうだね一寸かへて見るのも面白いかも知れない。（見とれる）

芳子　それでさつきの話はどうなつたの。

父　さうそ、さつきの話は、下らない話なのだよ。

芳子　さうお。

父　實はね。小畑の知つてゐる若い男にお前に惚れてゐる男がゐるのだよ。

芳子　そんな話なの。

父　それが面白い男で、お前に隨分同情してゐるのださうだ。

芳子　同情なんかされたくないわ。そして私そんな話、今きゝたくないわ。

父　それ見ろ。だから俺は云ひたくなかつたのだ。だが云つた以上はともかく俺は皆云ふよ。いやでも云ふだけは云ふよ。

芳子　それならきくだけはきいてもいゝわ。

父　腹立てることは少しもないのだよ。先方の男は隨分遠慮してゐるのだ。決してお前を疵ものだと思つてゐるわけぢやないのだ。もう三年もまいから、お前のことを思つてゐたのだ。そして今でもお前のことをどうしても思ひ切れないのださうだ。たゞそれだけの話なのさ。向ふでお前をもらへるとは思つてはゐないのだ。たゞ前のやうにお前を愛してゐることを告白するのがおくれるのを恐れすぎてゐるだけなのだよ。今どうのかうのと云ふのぢやないのだ。

芳子　それだけの話なら私も腹は立てもしませんわ。

父　お前に腹を立てろ資格はちつともありはしないよ。

芳子　それだつてそんな話、氣持がよくないわ。

父　だがあの、人をあんまりほめない小畑がその男のことは隨分ほめてゐた。

芳子　いくら小畑さんがほめてゐたつて私そんな話、今ききたくはなかつたわ。

父　だから俺もそんな話はしたかなかつたのだよ。もうそ

れでおしまひだよ。どうだ皆でいくつあるかね。
芳子　お父さん知らないの。
父　一寸かぞへてくれたつていゝぢやないか。
芳子　えゝ、それはいゝわ、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、二十三あるわ。
父　十八からとんだね。
芳子　それぢや十八からよみなほしますわ。
父　十九からよんでくれ。さもないと不公平だから。
芳子　さうね。十九、二十、二十一、二十二、二十三。
父　さうだ。二十三つくつたのだ。それが平均十五圓に賣れると、いくらになるかね。
芳子　一寸まつて頂戴よ。（鉛筆と紙をとつて）えゝ、三五の十五、二五十、三百四十五圓になりますわ。
父　さうか。あともう十もつくれば一寸いゝな。
芳子　平均、二十圓位ゐに賣つたつていゝわ。
父　二割うは前をはねられるのだよ。會場がたゞのかはりにね。
芳子　さうお。皆賣れるわね。
父　皆、賣れなければ、小畑がおし賣りしてくれることになつてゐる。
芳子　さうお。それはいゝのね。お母さん、お母さん、一寸いらつしやい。
（母登場。）
母　なんだね。
芳子　よくならんだでしよ。
母　よくならびましたね。
父　中々綺麗だらう。
母　本當に綺麗ですわ。
父　俺の知らない男が、こんなにつくつてならべて展覧會でもやつたのを、俺が見にいつたら、きつと感心するね。おどろくだらう。
芳子　本當に美しいわね。お母さん。
母　本當に綺麗だね。
芳子　お母さん、皆で二十三あつてね。之を一つ十五圓に賣ると四百五十圓に。
父　四百五十圓ぢやない三百四十五圓だ。
芳子　三百四十五圓になりますのですつて。そして賣れのこりがあると小畑さんが世話して下さるのですつて。
母　本當に小畑さんは親切ないゝ方ですね。
芳子　だが一寸世話やきすぎますわね。
母　そんなことを云ふと罰があたりますよ。
芳子　罰なんかあたらないわ。それからお母さん、之が見ない鳥ですつて。

（幕おりかゝる。）

芳子　まだ見たことがないので見ない鳥なのですつて、そして之を小畑さんが三十圓で買つて下さるのですつて、そして……。

話終らない内に　幕

（二六、七、二八）

母親の心配（五幕）

登場人物

時　重（十八歳）
藤　子　時重の母
瀧　子　時重の叔母、時重の家の長屋に居る
杉　子　瀧子の處に世話になつてゐる娘（十六歳）
清　子（杉子の姉）

第一幕

瀧子の家

藤子　瀧さん一人(ひとり)。
瀧子　え。
藤　お清さんや、お杉さんは？
瀧　まだ學校から歸つて來ません。
藤　時重が度々伺つて本當に御邪魔でせう。伺はない方がいゝだらうと云ふのですが、自家(うち)に居ても面白くないと見えて、いつのまにかお邪魔に上つてゐるのです。
瀧　いえ。ちつともかまひません。妾の方でもちつともおかまひしないのですから。
藤　どうか、かまはないでおいて下さい。
瀧　いらしても妾は殆んどおかまひしないのです。お清さんやお杉さんを相手に遊んでゐらつしやるのですから。お清さんも、お杉さんもおいでにならないと却つて淋しがります。いくらおいで下さつても妾の方は少しもかまはないのです。
藤　それでもお忙しい處を邪魔するやうなことが御座いませう。
瀧　いえ別にそんなことも御座いません。
藤　（一寸あたりを見廻はし、心持聲をひくめ）時重は毎日こゝに來て何をしてゐます。
瀧　お清さんや、お杉さんを相手にして呑氣な話をして笑つたり、一緒に歌を唄つたり、からかつたりしてゐるです。
藤　お五月蠅(うるさ)いでせう。
瀧　いえ。ちつとも。
藤　一たい時重は兄とちがつて氣のおちつかない、勉強の出來ない性質なのですが、この頃こちらに上るやうになつてからなほおちつかなくなつて、この頃は本も碌に讀

まないのです。新聞のくだらない小説なんかをかゝさず讀んで、ちつとも勉強をしないのです。さうして何か一言小言を云ふとすぐ怒るのです。元はあんなでもなかつたのですけれど。

瀧　自家にいらしつてもよく小説や講談を讀んで二人におきかせになります。

藤　どうも妾はあの二人とつきあふのがよくないのではないかと思ふのです。

瀧　それはさうかも知れません。

藤　二人。中でもあの妹の子は愛嬌があるので、時重がつい勉強をおろそかにして、家にぢつとしてゐられないのではないかと思ふのです。

瀧　さうおつしやればさうかも知れません。お杉さんと時重さんが話してゐらつしやる時は、それは嬉しさうな顏をしてゐらつしやいます。さうしてお杉さんがゐないと何んだかお淋しさうで、すぐお歸りになります。

藤　本當に妾もそれで心配してゐるのです。もしものことがあつたら、とり返しがつきませんからね。瀧さんだつてあづかつてゐるものに、傷でもついたらそれこそ大變ですからね。

瀧　だつてまだお齡がお齡ですから。

藤　まだ時重は十八ですから、妾も安心だとは思ふのですけれど、あてにはなりませんからね。何しろ大事に大事をふめばまちがひはありませんからね。

瀧　本當に、それはお姉さんのおつしやる通りです。

藤　ですから、時重が來てもなるたけ無愛想にして頂きたいのです。さうして出來たらなるべくお杉さんに逢はさないやうにしてほしいのです。

瀧　本當に出來るだけはさうしませう。もしものことがあつたら、お杉さんの家に對してもすみませんから。きつと出來るだけのことはします。

藤　それを聞いて安心しました。まだ大丈夫だとは思ふのですけれど、大丈夫な內に用心しないと何にもなりませんからね。

瀧　本當にさうですよ。

藤　それに時重は中々の强情ばりで、その上死んだ父に似てそれは疳積持ですからね。もしものことがあつたら、どんなことをするかわかりませんからね。

瀧　本當に大事に大事をふまなければいけません。妾も少しはそのことを考へてはゐたのです。ですけど、時重さんのあの嬉しさうな顏を見ると、喜ばして上げたいやうな氣もするのです。

藤　それはね、喜ばしてやりたくないことはありませんけれど、勉強もしないでのらくらしてゐてくれては、それ

こそ氣にかゝつて仕方がありませんからね。今度でも今迄になく、いやな成績だつたのですからね。妾も本當に心配になります。父がゐないのですから、なほ立派にやつてもらはないとね。とかく世間ではあの子は後家育ちであまやかされてゐるからと云はれますからね。それにもしものことがあつたらそれこそ大變ですからね。そんなことはまさか時重はしてはくれないと思ひますけど。

瀧　お姉さん。そのことならもう御安心なすつてよくつてよ。きつと妾がお姉さんに御安心なさるやうにしますから。

藤　どうぞね。

外　只今。

（格子戸のあく音聞ゆ。）

瀧　お歸りなさい。（藤子に）お杉さんが歸つて來ました。

（杉子登場。二人に丁寧に辭儀をする。）

杉　お姉さんは！

瀧　まだですよ、

杉　さうお。妾、勝つたわ。

瀧　何をそんなに息を切らしてゐるのです。

杉　お姉さんと廻りくらをしたのです。お姉さんは番町を廻る方が近いと云ふの、妾は麹町通りの方が近いと云つたの、それでどつちが勝つか廻りくらをしませうと云つて廻りくらをしたの。尤もね、駈けてはいけないと云ふ約束をしたのでしたが、負けるといやですから、一生懸命駈けて歸つて來たの。

瀧　（冷淡に）　まあ？

藤　それならさつきのことをたのみますよ。

瀧　え。まだいゝぢやありませんか。

藤　それなら又來ます。（杉子に）　時重が毎度お邪魔をします。

（杉子氣まりわるさうに默つてお辭儀をする。）

藤　さよなら。

瀧　さよなら。

（藤子退場。二人玄關まで送り歸つてくる。）

杉　まだお姉さんは歸つていらつしやらないわ。妾、見て來ますわ。妾が駈けて歸つたことは默つてゝ頂戴よ。（行かうとする）

瀧　お杉さん。

杉　え？

瀧　一寸話があるから、こゝにいらつしやい。

杉　はい。（瀧子の前に坐る）

瀧　今ね。藤さんのお姉さんが來てね、時重さんが遊びに來てもね、貴女になるたけ遊んでくれるなと云つていらしつたのだよ。

杉　そんなことをおつしやつたつてだまされませんわ。時重さんは今日はまだいらつしやらないの？
瀧　冗談ぢやないのですよ。この頃時重さんがあんまりこに遊びにくるのでね、勉强がまるで出來なくなつたので隣さんの姉さんが心配してね、なるたけこゝへ遊びに來ないやうにしてくれとおつしやりに來たのですよ。
杉　それなら御自分がおよこしにならなければいゝのに。
瀧　そんなことは出來ないのですよ、何しろ時重さんはお母さんの云ふことなぞは聞かないたちだからね。
杉　それなら時重さんがいらしつたらおひ返すの。
瀧　そんなことは出來ないがね。時重さんが來たらね、お杉さんは何か用がある顔して臺處へゆくなり、庭にゆくなりして時重さんをさけてもらひたいのだよ。
杉　そんなことをするのはいやですわ。
瀧　だがさうしてくれないと妾が困るのだよ。
杉　なぜでせう。
瀧　なぜつてね、そのわけはわからなくつたつていゝのだよ。
杉　たゞいらしつた時、さければいゝのね、妾とつきあふと時重さんが下等になるときつと思つてゐらつしやるのよ。妾は商賣人の娘で、時重さんは華族さまでゐらつしやるから。よろしいわ。妾の方だつて時重さんにつきあへば人間かわるくなるわ。商賣人の方が華族樣より人がわるいと云ふことはないわ。
瀧　そんなことを云ふものではありませんよ。
杉　お姉さんはどうしたのでせう、本當に。お姉さんは時重さんとお話してもいゝの。
瀧　時重さんは、お杉さんにあひにくるのだからね。
杉　うそよ、お姉さんと一番よく話がおあひになるのよ。
瀧　お淸さんには妾から又注意をしておくよ。
杉　時重さんがおいでになつたら妾どん〳〵逃げて上げるからいゝわ。面白いわ。妾お姉さんを見て來ますよ。
外　唯今。
杉　（玄關にとび出し）お姉さん、隨分おそいのね。
淸　（上りながら）お友達にあつたので一緒に遠廻りしたので遲れたのだよ、だけど番町の方が近いよ。
杉　うそ、うそ、そんなことを云つたつて駄目。
淸　お前証けたらう。
杉　いゝえ。
淸　だつてお前が証けた證人があるよ。
杉　誰？
淸　時重さんさ。
杉　時重さんにあつたの、何處であつたの。
淸　門の處で、時重さんが買ひものにいらつしやる處で。

杉　さうお、妾もう少しであの角で時重さんにぶつかる處だつたのよ。あの角を駈けてまがらうとしたら、時重さんがぼんやり立つてゐらつしやるのでしよ、もう少しでぶつかる處でしたわ、時重さんと話しておくれたの。

清　さうぢやないよ、とめ子さんに逢つておくれたのだよ。

杉　さうお。お姉さん、面白いことがあるのよ。

清　何に？

杉　今度からね。時重さんがいらしつたら姉さんも妾も逃げるのですつて。

清　どうして。

杉　逃げないといけないのですつて。妾達とあそぶと時重さんが女のくさつたやうな人間になるからいけないのですつて。今主家(おもや)の御後室さまがいらしつてさうおつしやつたのですつて。

清　（瀧子に）本當で御座いますの？

杉　なに、さう云ふ意味ぢやないのだよ、だがね、時重さんがあんまり毎日こゝにいらつしやるのでね、勉強がまるで出來なくなつたつて藤さんの姉さんがわざ／＼來てね、なるたけこちらに來ても無愛想にしてくれと云ふお賴みだつたのだよ。

清　さうですか、御後室さまはあんまり御心配の性だからいけないのですわね、時重さん位御勉強なさればいゝぢやありませんか。

杉　本當ですわ。

清　お前がいけないのだよ、時重さんがくると、はしやぐから。

杉　お姉さんがあんまりお話をするからいけないのですよ。

清　ですけど、よろしいわ、何も妾達は時重さんとお話したいからお話しするのではないのですから、時重さんがいらしつて迷惑するのは妾達だわ、何も御後室さまに恨まれるわけはないのですから。

杉　さうですとも。

（格子戸あく。）

杉　（清に小聲で）時重さんよ、きつと。逃げませうね。

（時重やつてくる。）

杉　妾、臺處に用がありましたわ。

（時重とすれ／＼に出てゆく。）

杉　（臺處で）お姉さん、一寸。

清　はいよ。（出てゆく）

時重　（窓からそとを見）叔母さん、今日はいやな天氣ですね。

瀧　本當に。

時重　雨が降るでせうか。

瀧　どうだかね、天氣のことは叔母さんにもわからないからね。
時重　（獨り言のやうに）却つて降るといゝのだが。
（時重、其處等にある雜誌をいぢくつてゐる、暫く沈默、思ひついたやうに時重歸つてゆく、格子戶をいやに強く締める。）
杉　（臺處から出て來て）時重さんはもうお歸りになつて。
瀧　あゝ。
杉　御後室さまはさぞお喜びになるでしやうね。

第　二　幕

第一場に同じ。杉子一人窓からそとを見て、しのび泣きしてゐる。其處に淸子登場。
淸　杉ちやん、泣いてゐるのかい。
杉　泣いてはしませんわ。
淸　だつて淚が出てゐるよ。
杉　今ね、小說を讀んだら可哀さうで泣いたの。
淸　どの小說を讀んだの。
杉　何處か其處らにおつこつてゐるでせう、その雜誌に出てゐた。
淸　この雜誌にそんな可哀さうな話が出てゐるの。
杉　うそよ、本當は家のことを考へたの。
淸　故鄕（くに）に歸りたい？
杉　歸りたかないわ、だけどもお母さんはどうしてゐるでせう。
淸　お母さんのことを思つたら泣けたの？
杉　まるで巡査みたいなお姉さんね、人が泣いたつて一々訊問しないでもいゝでせう。
淸　だつて大きな身體して一人で忍泣きしてゐるからさ。
杉　姿だつて、いろ〳〵泣きたいこともあつてよ。
淸　泣きたいことがある？
杉　あるぢやありませんか。お母さんのことも氣になるでしよ。お父さんのことも氣になるでしよ、姿のことも氣になるでしよ。姉さんが學校を卒業して故鄕に歸ると姿一人ぼつちになるでしよ。
淸　それで泣いてゐるのかい。
杉　死んだお友達のことを考へてゐたら淚が出ましたのよ、そのくせ死んでみたい氣もするのよ。
淸　お前の云ふことは冗談だか、本當だかわからないね。
杉　姿にもわかりませんわ。だけど時重さんは今日で三日いらつしやいませんわね。
淸　怒つてゐらつしやるのだらうよ。
杉　今日は日曜なのにゐらつしやらないのは可笑しいわ。

清　こなひだお前が時重さんの姿を見るとすぐ怒つたやうな顔して出ていつたから怒つてゐらつしやるのだらうよ。

杉　だけど今にゐらつしやるわ。

清　いらしつたらどうする。

杉　いらしつたら逃げるわ。

清　それならいらつしやらない方がいゝぢやないか。

杉　だつて始終いらつしやる方がいらつしやらないのはいけないわ。それに他人(ひと)に不愉快を與へてゐるのはいやなものね。早くいらつしやるといゝのだわ。

清　だつて逃げれば同じことぢやないか。

杉　ちがひますよ、いらつしやると逃げても、いらつしやらないと逃げたくないわ、笑つて上げたいわ、さうしてこなひだのことを許して戴きたいわ。

清　お前は時重さんのことを考へてゐたのだね。

杉　うそよ。うそよ。

清　それはいけないよ。時重さんのことなんか思つてはいけないよ。

杉　思はしなくつてよ、ですが思つていけないと云ふのは可笑しいわ。思つたつてだめだつて、思つたつていゝわ。

清　(杉子の頭をさすり) お前は本當に可哀さうだね。

杉　可哀さうぢやないわ。妾は思ひたいことを思つてゐればいゝのだわ。さうして逃げればいゝのだわ、何も妾は他人(ひと)に迷惑はかけはしないわ、時重さんが怠けものになつたつて妾のせゐではないわ。

清　それは誰にだつてわかつてゐるよ。

杉　わかつてゐてそれで妾に逃げてくれと云ふの、妾は逃げますわ、さうして時重さんに不愉快を與へますわ、さうして憎まれますわ。それだつて誰も妾を可哀さうだとは思つてくれないわ、思つて戴きたかないけれど。(忍び泣く)

清　泣かなくつていゝよ。

杉　妾、さつきからこゝから見てゐると時重さんは何度あの玄關の前にいらしつたか知れないわ、そのくせ、入(はひ)る勇氣がおありにならなくつて歸つてゐらつしやるのだわ。昨日だつてさうよ、妾すまなく思ひますわ。誰が何と云つたつて妾、今度時重さんがいらしつたら玄關へ出て「いらつしやいな」と云はうかといつも思ふのよ。そのくせいらつしやると何んだか知らない力に押へつけられてこゝに立ちすくんでしまふの、「いらつしやいな」と妾が云つて笑つて見せて上げればどんなにお喜びになるかと云ふことはわかりすぎてゐるのですもの。

清　今度いらしつたら本當に呼んでおあげ、今妾達二人切りだから、かまひはしないよ。

杉　お呼び申したつていゝわね。
淸　いゝとも。
杉　本當にお姉さんはいゝお姉さんね。
淸　いらしつてよ。
杉　さうお。
淸　早くいつておいで。
杉　いゝわね。
淸　いゝとも。
（杉子、玄關にゆく、時重くる。）
杉　昨日も一昨日もいらつしやいませんでしたわね、怒つてゐらしつたの。
時重　怒つてはゐなかつたのです。たゞあんまりきては御迷惑だと思つたのです。
杉　迷惑ではありませんわ、だけどね。
時重　叔母さんがいやな顏をするのですか。
杉　いゝえ。
時重　何しろあんまり來ない方がいゝのでしよ。
杉　いらしてもいゝのよ、だけどね。
時重　來ない方がなほいゝのですか。
杉　そんなことはありませんわ、何かして遊びませう。
時重　かまはないのですか。
杉　かまひませんとも、さあお入りなさい。

時重　え。
（時重入る。）
淸　お淸さんは何かしてゐらつしやるのでせう。
時重　何もしてやしないのです。どうぞこつちにいらつしやい。
杉　お姉さん、何かして遊びませう。
淸　あゝ。
杉　何をしませう、トランプがあるといゝのですが、トランプはありませんし、雙六でもしませうか。
淸　雙六はつまらないぢやないか。
杉　（時重に）つまらなくつたつてよろしいわね、何も………。
淸　（少し微笑み）それなら雙六をしませう。
時重　叔母さんは何處へ。
杉　お買ひものよ、まだ仲々歸つてはいらつしやらなくつてよ、歸つてゐらしつたつてかまひませんけど。
淸　雙六を出しておいで。
杉　今出してよ。
（杉子、雙六を出して、おく。）
淸　（時重に）貴方からおやりなさいな。
杉　いけなくつてよ、ぢやんけんよ。
三人　石、紙ぢやん。

三人　いゝはさみなしぢやん。
三人　石なしぢやん。
杉　まけましたわ、妾なぜ紙を出したのでせう。
時重　馬鹿だからですよ。
杉　馬鹿でもよろしいわ、さ二人でぢやんけんをおしなさい。
（二人でぢやんけんをする。）
杉　お姉さんが勝つたの？　生意氣ね。それならお姉さんから。
（暫くの間、かはり番に羹んなげる、出た數によつて杉子得意になつたり、よわつたり、からかつたりする。）
杉　矢張り雙六はつまりませんわね、なんだかやつてゐると淋しくなりますわ、今にも誰か怖い人が來さうな氣がして。
時重　誰？　叔母さん？
杉　いゝえ、誰でもないの、たゞそんな氣かするだけなの。妾本當に臆病なのよ。
時重　それなら何をして遊びませう。
杉　目かくしがよろしいわ。
清　お杉！
杉　え？　お姉さん、かまひませんわ、かまはないでしよ。お姉さんいいや、してもいゝでしよ。

清　してもいゝことはいゝけれど。
杉　しませうね、さあぢやんけんしませう。
三人　なんでもありぢやん。
杉　時重さまの鬼ですわ、よろしくつて。
（杉子、手拭をもつて、時重の目をかくす。）
杉　こつちですよ。
二人手をたゝき、笑ふ。やゝあつて杉子つかまる。）
時重　お杉さん。
杉　（姉の聲色をつかひ）ちがひます。
時重　そんな聲を出しても駄目ですよ。
（時重手拭をとり、杉子にわたす。）
清　杉ちやんにしめさしたら駄目ですよ、ずるいから、妾にお貸し。
（清子手拭をとり、堅く杉子の目をくゝる。）
杉　いたいわ、お姉さん。
清　辛抱おし。
（杉子こはさうに逐ひかけ廻る、初め二人手をたゝいたり、聲をかけたりする。なかなかつかまらない。）
時重　（清子に）默つてゐませう。
清　え。
（二人默る。）
杉　默るのは卑怯よ、ずるいわ、男のくせして。

（時重。杉子の耳のわきで不意に手をたゝく、杉子おひかける。淸子も逃げる。三人笑ふ。この時格子戸をあけて、瀧子入つてくる。三人ぴつたり靜かになる。杉子あわてゝ手拭をはづす。）

淸　お歸り遊ばせ。

杉　お歸り遊ばせ。

（二人お辭儀をする。）

杉　さ、つゞけてしませう、妾、鬼でやめるのはいやですから。

（杉子自分で手拭で目かくししようとする。）

淸　それでは見えるよ。

杉　見えませんわ、目をつぶつてゐますから。

淸　それではだめよ、妾がしばつて上げよう。

杉　お姉さんはいや。痛いから、

時重　それなら僕がしばつて上げませう。

杉　え、どうぞ。

（時重しばる。）

杉　もつときつくしないと見えてよ。

時重　それなら之では。

杉　いたくなくつてよ。

時重　痛くして上げませうか。

杉　澤山、さあつかまへてよ。

（暫くして。）

杉　妾、もういやになりましたわ、あんまりつかまらないのですもの、よしませうね。

（杉子手拭をとる。）

時重　お杉さんは隨分我儘者ね。

杉　それでも妾、自棄（やけ）つぱらなのですから。

時重　なぜ？

杉　だつてつかまつて下さらないのですもの、妾、わざとつかまつて下さつてもいゝと思ひますわ、貴方は本當に不親切な方ね。

（時重默す。）

杉　うそよ。

（杉子一寸瀧子の方を見、顏をあはせおどろく、何氣ない風をして。）

杉　妾、本當に我儘者だと云つて、姉によく叱られますの。妾、なんだか泣きたくなりましたわ。妾どうして皆に嫌はれるのでせう、妾そんなにいやな人間なのでせうか。

時重　誰が貴女をいやな人間だと云ひました？　僕は貴女が我儘者だと云つたのは、貴女がいやな方だと云つたのではありませんよ。

杉　それは知つてゐますわ、だけど、學校でも、何處でも皆樣にね、下等な人間だと云はれますの、妾とつきあふ

と人間が下等になると云はれますの、よろしいわね、妾とつきあつて下等になるやうな方は下等になる方がいゝのですわね。

時重　貴女とつきあつて人間が下等になる？　そんなことは誰が云つたのです、そんな人間こそ下等な人間です、そんな人間は僕の母位ゐなものでせう。

杉　何をおつしやるの、御後室さまはいゝ方ぢやありませんか。

時重　可哀さうな人間だと思つて同情はします。しかし生意氣ですよ。

杉　貴君は妾の云つた意味を誤解してゐらつしやいますわ。

時重　いゝえ、僕は僕だけのことを云つてゐるのです、僕の母は貴女とつきあつてはいけないと云つたのです、僕は怒つたのです、僕を輕蔑してゐますからね、それに貴女を輕蔑してゐますからね、母は生意氣ですよ。

杉　御後室さまは妾が貴方の御勉強のさまたげをするのを氣にしてゐらつしやるのですわ、ね、なほ勉強して上げて頂戴ね、妾とつきあふと怠け者になると思はれてはいやですからね。

時重　本當に勉強もしますよ、今迄よりも勉強する氣がしてゐるのですよ、たゞお杉さんが……（默す）

杉　なに？

時重　母は人を怠けものにしようと思つてゐるのですよ。自分の子供の苦しむのをよろこんでゐるのですよ。

杉　そんなことはありませんわ。

時重　母の心配と云ふものは皆そんなものですよ、世間から自分がほめられたいのですからね、外のことなんか考へてやしないのですからね。

杉　貴方がそんな考を持つてゐらつしやればお母さまのお心配なさるのもあたりまへですわ。妾だつて世間からほめられたいわ、さうして貴方が世間からほめられるやうな人間になつて戴きたいわ。

（時重默つて歩きまはる。心の嬉しさをかくさうとして。）

時重　さよなら、又來ます。

杉　（そばにゆき）怒つてゐらつしやるの。

時重　怒つてゐるものですか、之から勉強するのです。

杉　本當にね、勉強して頂戴。

時重　難有う。

（時重退場。）

瀧　お杉さん。

杉　はい。

瀧　貴女は妾の云つたことを聞いてはくれないのですね、

妾が居る時許り妾の云ふことを聞いてくれても何にもなりませんよ、却つて妾が迷惑するだけですよ。

杉　それでもいらしつたのですもの、それに妾は妾につきあふから怠けものにおなりになると云ふわけはないと思ひましたの、妾にだつて時重さまを立派な方にする力があるやうな氣がいたしましたの。

瀧　貴女は妾の云つたことを誤解してゐるのです、妾は何も貴女とつきあふと時重さんが下等になると云つた覺えはありませんよ。

杉　だつて怠け者になるとおつしやつたので御座いませう。

瀧　それは云つたかも知れません、だけどそれはその場の體裁に云つたゞけの話なのですよ。本當は時重さんももう十八になつてゐるし、貴女だつてもう十六になつてゐて見ると、之が男同士だとか、女同士だとかならいゝけれど、さもなければ誰だつて親になつて見れば心配しますよ、貴女の御兩親に對してだつて、妾の姉に對したつて妾は今のやうな有樣を見て默つてゐるわけにはゆきませんよ、お清さんもお清さんです、一緒になつて目かくしして遊ぶものがありますか。

（杉子默つてゐる。）

瀧　一たいお杉さんはあんまり子供だからいけないのですよ、貴女達も今は勉強さへすればいゝのですよ、明日の勉強はしたのですか。

杉　まだしませんの。

瀧　なぜしないのです。

杉　してもつまりませんもの。

瀧　面白い爲に勉強があるのではありませんよ。

杉　勉強して何になるのでせう。

瀧　そんな考へを起すものではありません、勉強さへすればいゝのです。

杉　勉強して仕合になるのは男の方許りだと思ひますわ。仕合にならない勉強がなにになりませう。つまらない苦しみだと思ひますわ。

瀧　貴女はどうかしてゐますね、勉強がおいやなら故郷に歸つたらいゝでせう、さうすれば妾も安心します、貴女はもう妾の手にはおへませんからね。

（杉子泣く。）

清　お杉、泣くのはおよし、さうして妾がわるう御座いましたとさうお云ひ、お前は生意氣でいけないよ。

杉　わ、わたしがわるう御座いました、之から勉強をいたします。

瀧　何もあやまらなくつたつていゝよ、妾が世話し甲斐があるやうにあつてくれゝばそれでいゝのだよ。

（瀧子立つて退場。）

杉　あんまりですわ、あんまりですわ。

清　仕方がないよ、姿達には力がないのだから、それよりお前本當に立派な人間におなりね。之から今迄よりもなほ勉强もし、働きもおしね、さうしてこれ見たかと云ふ人間におなりね。

杉　なりますわ、なりますわ、妾は本當にいい人間になりますわ、お姉さん妾を可愛がつて頂戴ね。

清　可愛がりますとも。

杉　妾、仕合ですわ。

――幕――

第三幕

第一場　藤子の室

瀧　お姉さん。

藤　え。

瀧　一寸御相談したいことがあるのですよ。

藤　なんです。

瀧　時重さんのことでね。

藤　時重がどうかしましたか。

瀧　いゝえ、さう驚きになることではないのですが。

藤　この頃もお邪魔に上るやうですね。

瀧　え、毎日いらつしやいます。

藤　本當に困りますね。

瀧　何しろあの妹娘が人の機嫌をとることが上手ですからね、人の氣をそらさないやうにいたしますからね。さうして仲々の强情ばりで妾の云ふことなんか馬鹿にしますからね。それはこの頃は今迄になくよくしてくれますし、勉强もちやんちやんとしてゐますけれど、それだつてどう云ふ心算でしてゐるかわかりはしません、妾に對しても今迄のやうに無邪氣ではありませんからね。

藤　それは困りましたね。

瀧　それに私のゐる處ではすました顏をして、居ない處ではぺちやくしやべつてゐるのですから本當に困りますす。それに姉娘も姉娘で、しきりと妹をかばふのですからね。妾一人ではどうすることも出來ません、妾はお姉さんに御心配をかけないで妾一人でどうにかしようと思ひましたがとても手にあはないのです。どうかすれば妾に喰つてかゝりかねないのですからね。

藤　それは困りますね。

瀧　それに時重さんも妾を烟たく思つてゐらしつて、妾のゐる時にはよりつかないやうにしてゐらつしやいます。格子戸の前や裏の處へ時重さんがゐらつしやるとお杉さ

んは何氣なく其處へ出かけてゆくのです、今迄よりももしかしたら進んではしないかとさへ思ふのです。なまじつかのことをすると却つていけないやうな氣もします。

藤　時重にも困ります。勉强はしてゐるやうですが、妾には殆んど口もきゝません。何か云ふとすぐ怒ります。さうして今迄見たことがないやうな落ちつかない目つきで妾の顏を見ます。本當に子供一人育てるのはつく〴〵骨が折れるものと思ひました。

瀧　それにね、一寸心配なことが御座いますのです。實はね、今朝お杉さんが一人で何か紙切れを見てゐて紙切れに唇をつけてゐるのでしよ。さうして注意してゐるとそれを机の抽斗にしまつてゐたのです、それで學校へ行つた不在に見ましたら、それは時重さんからの手紙で、お淸さんが今に居なくなつて淋しいだらうが、私をお淸さんのかはりに兄と思つてたよつてもらひたいとかいてありますの。

藤　それは本當ですか、妾達の心配してゐることにだんだん近づきますね、本當に今の內にどうにかしなければ。その手紙を持つてゐますか。

瀧　え、こゝに持つてゐます。

藤　早くお見せなさい。

（瀧子手紙を渡し。）

瀧　無邪氣なことをかいてはありませんが。

藤　まだこのくらゐなら、別に心配なこともないでせうが、しかし見逃がすことは出來ませんね。もしかすると、お杉さんの返事も、時重の机の中に入つてゐるかも知れません。さがして見ませう。

（藤子退場、暫くして登場。）

藤　矢張りありましたよ、どうか妹のやうに思つて下さい、妹のやうに思つて下さればどんなに嬉しいでせう、ですが勿體ない氣もしますと書いてありますよ。

瀧　どれ。

（藤子、手紙を渡す。）

瀧　（讀みながら）もう本當にどうにかしなければいけませんね。

藤　どうしたらいゝでせう。

瀧　妾の考へではあの娘の家に手紙をやつて姉の方が歸る時、一緖に歸して、もうこつちに來さゝないやうにしてもらへばいゝと思ふのですよ。

藤　それが出來ればよろしいが。

瀧　それは出來るでしよ、妾がうまくかいてやりさへすれば。

藤　時重のことは書かないでせうね。

瀧　そんなことはかきませんとも、お杉さんに傷がつくや

うなことも書きません。向うでも學問させる氣はもともとないのですからね。家の手だすけをしてもらふ方がいいのですからね。それにもうぢき嫁にやらなければいけないのですからね。田舎がいやだなぞと云ふやうになることを心配してゐますのですから、その方を少しにほはせてやればあわてゝつれて歸ります。何しろあの娘はあの娘の母の里のあととりの嫁にする氣でゐるのですからね、たゞあの娘が是非東京にゐたがるので東京においてゐるのですからね。

藤　さうしてもらへれば、なにも云ふことはありませんがね。あの娘かすなほに田舎にゐるでせうか。

瀧　それは妾達の知つたことではありませんからね。きつと親がうまくやるでせう。だけど時重さんが本當に戀してゐらしつてそれをおうちあけになつたら何しろ若いのですから、どんなまちがひが起るか知れないと思ひますが。

藤　その方なら安心して下さい。時重はその内兄と旅行にゆきますから、その不在にうまくやればよろしいからね。さうして時重が歸つたら、お杉さんの家から不意に迎へに來てつれて歸つた、お杉さんもよろこんで歸つていつた、さうしてお前によろしく云つてゐたとさう云ひさへすればそれでおしまひですからね。それで無事にすみますよ。

瀧　それならさう云ふことにしませう。本當に之で妾も安心しました。

藤　早く氣がついてよう御座いましたね、さもないとどんなに面倒がおこつたかわかりませんからね。

（藤子、マッチに火をつけ、火鉢の上で手紙をやかうとする。）

瀧　お藤さん、何をなさるの。

藤　かう云ふ證據はない方がよろしいからね。

瀧　それでも何とかおつしやらなくつて。

藤　自分の思ひちがひで何處かへなくなしたのだらうと思ひませうよ。又なくなつたからつて聞くわけもありませんからね。

（手紙は燃えてしまふ。）

藤　子供を敎育するには本當にいろ〳〵骨が折れるものですね。

第二場　時重の室

時重登場、机の抽斗を少しあけ、なかをさがす。搜してゐるものがないのでぬき出してさがす。何度もさがす。その時藤子登場、時重何げなく机の抽斗をしまひながら。

時重　唯今。

藤　早かつたね。

時重　え。（出かけようとする）

藤　何處へ行くのだい。

時重　（平氣を裝つて）叔母さんの處へ。

藤　一寸お前に話したいことがあるのだよ。

時重　なんです。

藤　お前はへんなことをしてくれたね。

時重　なんです。

藤　お前はお杉さんに手紙をやつたさうだね。

時重　やりました。それがなんです。

藤　それがなんですとはなんです、妾はお前は若いから、お杉さんと遊んでも安心だと許り思つてゐたのだよ。

時重　私は何もわるいことは書いたとは思ひません。

藤　それはさうだらうよ、だが兄のやうに思つてくれと書いてあるさうぢやないか。叔母さんはおどろいてゐましたよ。

時重　勝手におどろくがいゝでせう、一たいどうして叔母さんは他人(ひと)の手紙を見たのです。

藤　まるめて机の下にすてゝあつたのださうだよ、叔母さんはそれを紙くづかごに入れようと思つてふと見たのださうだよ。

時重　まるめてすてゝあつたのですか。

藤　さうだよ。

時重　さうですか。

藤　お前はあの娘(こ)を温和(おとな)しい娘(こ)だと思つてゐるのだらう、さうしてお前を本當にたよりにしてゐると思つてゐるだらう。だけどあの娘(こ)は誰にも優しいのだよ、誰にも人なつかしいのだよ。誰にも可愛がられたいのだよ。どうせ商賣人の娘(むすめ)だからね、如才がないよ。

時重　お母さん、僕の前でお杉さんの惡口を云ふのはよして下さい。

藤　お前は本當にどうかしてゐるね。

時重　どうもしてはしません、僕はお杉さんを愛してゐます。（少し泣き聲になる）愛してゐる人の惡口は他人(ひと)には云はれたくないのです。お杉さんは誰に優しくつたつていゝぢやありませんか。お母さんの知つたことぢやありませんよ、商賣人の娘だと云ふことが何になります。

藤　わるかつたよ、もう何も云はないから、勝手にするがいゝ、どうせお前は妾のことは何とも思つてゐないのだらうから。さうしてひどい目にあひたければ勝手にあふがいゝのだ、皆に笑はれたければ勝手に笑はれるのがいゝだらう。

時重　笑ふ奴かまちがつてゐるのです。僕は何も惡いこと

とは思ひません。

藤　それならそれでいゝよ、勝手にゆくなら、おいき、妾はもう知らないから。

時重　行くのはやめます。

藤　なぜだい。

時重　人が眞面目にかいた手紙をまるめてすてるやうな人の處へ行くのがいやですから。

藤　どうせ商賣人の娘だからね。

時重　お母さん、お杉さんの惡口を云ふのは御損です。

藤　わるかつたよ、もう何も云はないよ。

（行かうとする。）

時重　お母さん。

藤　なんです。

時重　お杉さんからの手紙を何處かへかくしましたね。

藤　妾は知らないよ、お杉さんからも何か手紙が來たのかい、だまされてはいけませんよ。

時重　知らなければよろしい、向うへ行つて下さい。

藤　お前は妾を何んだと思つてゐるのだい。

時重　お母さんだと思つてゐますよ、人を子供だと思つてゐるお母さんだと思つてゐます。

藤（嘆息をつく）あゝあ、本當に妾は自分の子供からあんな女の子の爲に馬鹿にされるとは思はなかつたよ。（退場）

（時重、泣きながら癇癪をおこし抽斗をひつくりかへしてさがし、あふむけにたふれて兩手で顏をおほひ泣く。）

第三場　瀧子の室の緣側

緣側に杉子腰をかけてゐる。其處に清子來る。

清　お杉さん、何を考へてゐるの、時重さんが暫くおいでがなくつてね。

杉　えゝ。

清　どうしたのでせう、明日から旅行をなさると云ふ話ぢやありませんか。

杉　御旅行なさるつて？　お姉さん、誰に聞いたの？

清　御隱居さんがさうおつしやつてゐらしつてよ。

杉　さうお、妾ね、心配なことがあるのよ。

清　なに。

杉　怒つちやいやよ、お姉さんに內證にしてあつたのですがね、實はね、時重さんからお手紙を戴いたの。

清　どう云ふ。

杉　お姉さんが居らつしやらなくなつたら、お淋しいでせう、もしよかつたら僕のやうなものでも兄のやうに思つて下さいつて。

清　そんな手紙を戴いたの、さうしてお杉さんはどうしたの、矢張返事を出したの。
杉　姿ね、よかつたら妹のやうに思つて頂戴と書きましたの。
清　そんなことをしてもし見つかつたらどうするのです。
杉　それがね、大變なの、もしかしたら見つけられましたの。
清　どうして？
杉　たしかに机の抽斗に入れておいたのが無くなつてゐますの。
清　なぜ机の抽斗に入れておいたのです。
杉　まさかごらんになるとは思ひませんでしたから。
清　そんなことをするからいけないのですよ、きつと見つかつたのですよ。
杉　さうしたらどうしませう。ですが見つかつたら何かおつしやるだらうと思ひますわ。姿何處かへ入れて忘れたのではないかとも思ひますの。
清　もし見つかつて、それで默つてゐらつしやるのなら用心しないといけないよ。何かきつと考へがおありになるのだらうから。
杉　主家の御後室様にそのことが知れたらどうしませう。姿は時重さんがいらつしやらないのは何かそれが原因になつてゐるのではないかと思ひますの。
清　本當に仕方がない子だね。
杉　あゝ、時重さんがいらしつてよ。
清　どうして？
杉　あの足音でわかるわ。
（時重、裏庭から登場。）
杉　（お辭儀なし）いらつしやい、暫くお見えにならなかつてね、なぜそんな顏して姿をごらんになるの？　怒つてゐらつしやるの。
時重　怒つてはしません。
杉　明日旅行をなさるんですつて？
時重　え。
杉　なぜ旅行をなさるの。
時重　お兄さんが一緒に旅行しようと云ひますから。
杉　幾日許り？
時重　一週間程。お淸さんはまだ東京に居るのでせう。
清　大丈夫居ますよ。
時重　何時頃歸るのです。
清　まだはつきりはわかりませんけれど、まだ二三週間はゐます。故郷に歸るともう一寸東京に出られませんから。
時重　本當にもう少しお故郷が近いといゝのですね。
杉　貴方は一週間できつと歸つていらしつて。

時重　きつと歸つて來ます。
杉　歸つていらつしやらないと怒りますよ。
時重　きつと歸つて來ます。（杉子の手を何時のまにか握つてゐる）
杉　さあ、指切りをしますよ。
時重　え。（二人指切をする）
（清子退場。）
杉　一週間お目にかゝらないと隨分お目にかゝらない氣がしますわ、貴方は平氣でせうが。
時重　僕はゆきたくはないのですよ。ですが、東京にゐたくもなかつたのです。
杉　なぜ。
時重　怒つてはいやですよ、僕はもう何とも思つてゐないのですから。
杉　なに。
（小聲で。）
時重　お杉さんは僕の手紙をどうしました。
杉　（小聲で）それで妾この頃心配してゐましたのよ、貴方に戴いた手紙は何時のまにかなくなつてゐますの？
時重　なくなつた？
杉　え。
時重　（段々聲を大きくする）どうしてなくなつたのです。
杉　それがわからないのです。
時重　何處かへ落したのでしよ。
杉　そんな事はありませんわ。机の抽斗の奥にちやんとしまつておきましたの。
時重　それは本當ですか。
杉　本當にしまつたと思ひますの。
時重　机の抽斗にしまつたのが無くなるわけはないでしよ。
杉　（小聲で）妾もさう思ひますの、ですが……。
瀧　（障子の内で）お杉さん。
杉　はい。
瀧　一寸通りにゆきますが一緒に來てはくれませんか。
杉　參りませう。
清　（内で）妾でよければ妾、通りに用がありますからお伴させて戴きませう。
瀧　それなら三人でゆきませう。
（時重、默つて下を向いて下駄で地面をこすつてゐる。）
杉　（小聲で）本當に一週間で歸つて來て頂戴よ。
（小聲で。）
時重　僕の手紙は本當に机の抽斗に入れておいたのですか。

杉　それは本當よ。
時重　さうですか、僕はきつと一週間で歸つて來ますよ。
杉　身體を大事にして頂戴ね。
時重　きつと身體をよくして、勉強して歸つて來ますよ。
杉　どうか勉強して頂戴ね。妾も本當にいゝ人間になりますわ。
瀧　（內で）お杉さん！
杉　はい。
淸　お杉はうちにおいてゆきませう。
瀧　お杉さん、貴女は通りに行くのがいやなのですか。
杉　いゝえ。
瀧　それならお早く支度をおしなさい。
杉　はい。（小聲で時重に）明日の朝何時におたちになるの？
時重　五時です。
杉　そんなに早く？　それではお目にかゝれませんわね、おたつしやに。
時重　きつと一週間たてば歸つて來ますからね。
杉　歸つて來て頂戴よ。さもないと妾、淋しいのですから。
時重　さよなら。
　それでは又。
杉　さよなら。

（杉子、內に入る。時重ぼんやり立つてゐる。）
瀧　さあ行きませう。
淸・杉　はい。
（時重、歸りかける。）

――幕――

第四幕

第二幕と同じ。杉子と、淸子。淸子はいたづらに絵をかき杉子は何か縫つてゐる。

杉　お姉さん。
淸　え。
杉　時重さんがおでかけになつてからまた二日切りたちませんのね。
淸　さうだね。
杉　妾、昨日も今日も不意に時重さんがお歸りになるやうな氣がして仕方がないのですよ。
淸　さうかい。
杉　もう隨分お目にかゝらない氣がしますわ。
淸　もうぢき歸つていらつしやるよ。
杉　あと五日たてばきつと歸つていらしつてね。

清　それはきつと歸つていらつしやるだらう。

杉　早く歸つていらつしやればいゝのに。妾、かうやつてゐると今に何時もの足音が聞えやしないかと思つてゐるのよ、そんなことはないと云ふことは知つてゐますけど。

清　歸つていらつしやらないと云ふこともないだらう。

杉　本當に歸つて來て下さるといゝのですわ。妾この頃何んだか淋しいのですもの。それにもうぢきお姉さんが故鄉に歸つてしまふと、それは淋しいわ。

清　妾がゐなくなつてから本當にしつかりしないといけないよ、妾この頃心配になつてゐるよ。

杉　お姉さん、それはしつかりしてよ、姉さんがゐらつしやると安心するもので、つい我儘なことをするのよ、一人になれば心がけがちがつて來ますわ。

清　大丈夫だとは思ふけど。

杉　大丈夫よ、きつと大丈夫にしますよ、もしものことがあつたら、東京にゐられなくなりますからね。

清　本當に溫和しくおし、さうして皆さんに御心配をかけないやうにね。

杉　え、本當に御心配はかけませんよ、妾、本當に我儘許りしてゐましたわ、だけどお姉さんがゐなくなると本當に淋しいわ、こんなことを云ふと罰があたるかも知れませんが、この頃御隱居さまのそばに居るのがなんだか怖いのですよ、親切にして下されば下さる程、うす氣味わるい氣がするのですよ、だけどそんなことは何でもありませんわ。

（瀧子、手紙をもつて登場。）

瀧　お內から手紙が來ましてね。

清　はい。

瀧　お清さんに明後日の晩迄に是非歸るやうにさせてくれと書いて御座いました。

杉　え、お姉さんに明後日の晩までに歸れと云つて來ましたか、どうしてゞす。

瀧　どうしてか、妾にはわかりません、さうして其時お杉さんに送つて來てくれと書いてありました。

杉　妾に送つてくれつて？

清　妾、一人で歸れますわ。

瀧　それでもお手紙で是非、お杉さんを送りがてらに歸らしてくれとかいてありますからね。

清　かまひませんわ、妾自家（うち）に歸つてからよく話しますから。

瀧　だつて親の方（かた）がお逢ひになりたいので歸れとおつしやるのに、自分の都合でこゝに居ると云ふのはいけませんよ。お杉さんは御兩親にお逢ひになりたくないかも知れませんが、そんなことを云ふと罰があたりますよ。

杉　それでも、妾、故郷に歸つたらもう出してくれないやうな氣がするのですもの。

瀧　そんなことはないぢやありませんか、また貴女は一年學校にゆかなければならないぢやありませんか。

杉　それでも父は女に學問は不必要だとよく云つてをりましたから、きつと妾に一寸歸れと云つて、歸つたらはなさない心算なのですわ。妾の母のやり方は何時でもさうですもの、さもなければ妾に歸れと云ふのは可笑しう御座いますわ、迎へにくると申してゐたのですもの。

瀧　それでも御用がおありになるのだから仕方がないぢやありませんか。

杉　用のあるわけはないのですわ。

瀧　それなら、貴女は親の云ふことを聞かないのですね、貴女は妾の云ふことも親の云ふことも信用をしなければ聞きもしないのですね。

杉　なぜそんなに急ぐのでせう。

瀧　そんなことは妾は知りませんよ。

清　手紙には何もかいて御座いませんの？

瀧　たゞ都合があるからとかいてあるだけです、だが必ず歸してくれとかいてあるのです。この通り。（手紙を清子にわたす）

清　之ではまるで理窟にあひませんわ。

瀧　理窟にあふもあはないもないぢやありませんか、たゞ歸ればいゝのですよ、それから理窟が云ひたければおつしやればいゝでしよ。

杉　四五日遅れたつてよろしいわね、お姉さん。

清　それはかまはないけど。

瀧　そんなことはいけませんよ。家から云ふ手紙を戴いてゐる以上は、明後日の晩までに歸らなければいけません。

杉　無理ですわ。

瀧　何が無理なのです。

杉　だつて買ひものもありますし、歸る支度もありますから。

瀧　そんなことは明日一日で出來るぢやありませんか。

清　お杉、安心おし、妾一人で歸るから。

瀧　そんなことはいけません。

清　なぜいけないので御座います。

瀧　齡ごろの貴女を一人で歸すことは妾には出來ません。

清　お友達にきつと一緒に歸つて下さる方が御座いませう。

瀧　なぜお杉さんを故郷に歸すのがいやなのです。

清　それでもわかつてをりますのですもの。

瀧　何がわかつてゐるのです。

清　故郷に歸れば、きつと東京に出さないにきまつてゐますから。

瀧　そんなわけはないぢやありませんか。

清　それがあてにはならないので御座いますから。

瀧　どうして貴女達はさう親を信用しないのです。

清　だつて、妾達の父も母も都合のいゝことを云つて、あとで言葉をかへることなぞは平氣なのですもの。わかつてゐますわ。

瀧　そんなことは御兩親に向つておいひなさい。妾にあてこするやうなことをおつしやつたつて、何にもなりませんよ。

清　妾、あてこすりは申しませんわ、さうおとりになつては困りますわ。

瀧　それでも、貴女達は妾の云ふことを信用しないのでせう。

清　そんなことはありませんわ。

瀧　少くも、お杉さんは妾の云ふことを信用しないのです。

杉　そんなことは御座いませんわ。

瀧　それなら惡いことは云はないから、姉さんを送つて明後日一ぺん故郷にお歸りなさい、さうして學校がはじまるまでに歸つていらつしやい。

杉　もしうちで出さないやうだつたら、御隱居さまから東京に出すやうに云つて下さつて?

瀧　それは云ひますとも。

杉　御隱居さまから云つて下されば、うちはきつと出しますわ。それでは妾、明後日の晩姉を送つて故郷にゆきますわ、御隱居さまがどうしてもゆく方がいゝとおつしやるなら。そのかはり、もし妾が東京に出られなくなつたら呼んで下さいね。

瀧　それはきつと呼びます。

杉　そして聞けば妾、安心ですわ。妾、本當に今迄我儘許り申しましたわね、之からきつと心を入れかへます。御隱居さまのおつしやることはきつときゝますわ。生れかはつたやうに温和しくしますわ。

瀧　そんなことはないでせうけど、もし東京に出られなくなるやうだつたら、さう云つて下さい、きつと來られるやうにして上げますから。

杉　本當にさうして頂戴ね、今迄隨分御隱居さまのお氣に逆ふやうなことをいたしましたらうけれど、どうか見逃して許して頂戴ね、さうしてどうか妾を可愛がつて頂戴ね、妾もう生意氣なことはきつと云ひませんわ、口ごたへもいたしませんわ、おいやな處はきつとなほしますわ、御隱居さまが妾をもてあましてゐらつしやるやうな氣がして心配ですわ。

瀧　決してそんなことはありません。妾だつて貴女達がゐなくなれば本當に淋しくなるのですからね。それなら明日の晩たちますか、明後日の晩でもかまひませんが。

杉　もう四五日のばしては戴けないでせうか。

瀧　なぜです。

杉　なぜつてことはないのですけど、時重さんが歸つていらつしやる時に家に居ないとわるい氣もいたしますの？

瀧　なせです。妾からよろしく云つておきますよ。

杉　妾、故郷（くに）にゆくのは何んだか恐ろしい氣がしますわ。

瀧　御安心なさい。

杉　安心はしてゐますけど、妾、どうしたらいゝかわかりませんわ。（泣く）

瀧　それなら明後日歸ると返事を出しておきますよ。

（瀧子退場。）

杉　お姉さん、妾、どうしたらいゝのでせう。あんなにお約束しておいたのに時重さんがお歸りになつて妾がゐなかつたら、どんなにお怒りになるでせう。お恨みになるでせう。妾程わるい人間はないときつとお思ひになるわ。妾本當にすまないわ。妾、どうしていゝのかまるでわかりませんわ。又東京に出てこられますわね、お姉さん。

（泣く）

――幕――

第五幕

瀧子の室

瀧子は手紙を見てゐる。其處に藤子が入つてくる。

瀧　丁度いゝ時、いらつしやいました、妾の方からお伺ひしようかと思つてゐたのです。

藤　さうですか、それはよう御座いました。妾も一寸うちあはせをしておきたいことがあるのですから。

瀧　さうですか、今、お杉さんのお母さんからと、お淸さんからと、お杉さんからと手紙がとゞいた處なのです。

藤　さうですか、樣子はどうですか。

瀧　うまく行きました。お杉さんの親もあんまりお杉さんが東京に出たがるので、何かあるのだと思つて、なほ東京に出さないやうにきつぱり云ひ切つたらしいのです。母親からは安心して下さい、杉も上京をあきらめましたからとかいてあります。ですがお淸さんからは、杉が上京したがつて上京してはいけないと云はれてから泣いて許りゐます、わきに見てゐても可哀さうで仕方がありません。どうか出來ましたら、上京するやうにさせて下さいと書いて來ました。お杉さんからは、「案の通り親は上京などうしても許してくれません、妾は上京をあきらめよう、あきらめよう、と思ひますが、どうしてもあきら

められません、氣隨だとか、我儘だとか云はれます、なぜそんなに上京したいのかとも云はれます、妾にもわかりません、けれど上京を思ひ切ることはどうしても出來ません。たゞ〳〵御隱居さまのお情けあるお言葉を賴りにしてをります。どうか妾をお見捨てなく、妾が上京出來ますやうにお骨折り下さい、もしどうしても一年の間上京することがいけませんければ、一月でも二月でもよろしう御座います。それもいけませんければ、せめて三日か、四日上京したいとさへ存じます、心殘りなこと許りで御座います。學校にゐた時のことや、お家にゐた時のことなぞを一人で思つて泣いてをります、どうぞ〳〵お見捨てなく、上京の出來ますようお願ひいたします、勝手なこと許り申します」とかいて來ました。可哀さうだとも思ひますが、歸してよかつたと思ひます。何しろこんなに上京したがるのは、たゞ時重さんに逢ひたいのではないかとさへ思ひますからね。

藤　さうにきまつてゐます。さもなければいくら東京がいいと云つてもそんなに來たがるわけはありません。本當にお藤でたすかりました。さもなければ心配で仕方がなかつたでせう。之で妾も安心が出來ますからね、ほつたらかしておいたら、どんなことになりましたか知れやしませんからね。

瀧　本當ですよ。

藤　それで時重のことですがね、もし時重がそんなにお杉さんの來たがることを知りましたら、さうしてそれを皆して東京に來さゝないやうにして居ることを知りましたらどんなに怒るか知れません、さうしてどんなことを仕でかすか知れません、それでもし時重が歸つて來まして、お杉さんのことを聞きましたらよろこんで故鄕に歸つたやうにしておかないといけないと思ふのです。それで貴女もその心算でゐておもらひしたいのです。

瀧　承知しました。

藤　それで二人の云ふことがちがふといけませんからね、一寸相談しておきたいと思つたのです。

瀧　本當に時重さんは何にも氣がつかないやうな顏をしてゐらしつて、なか〳〵氣のつく方ですからね。

藤　本當にさうですよ、氣がつかないことは馬鹿に氣がつかないのですが、氣がつくことになるといやに氣がつくのですからね、馬鹿正直で他人の云ふことは頭から信用する性質ですけど、少しでもあいまいな處や矛盾した處があつては承知しませんからね。

瀧　それでももし文通をなさるやうでしたらどうなさります。

藤　實はね、妾もそれを心配してゐるのですよ。一寸した

手ぬかりから皆がばれた日には仕方がありませんからね、妾はそれで時重がお杉さんのことを思ひ切るやうにしたいと思ふのですよ、それでお杉さんは縁談があつたので喜んで歸つていつたとでもしたらどうかと思ひますが、少しあいまいな云ひ方をしてよろしいが、さう時重が思ふやうにする方がいゝと思ひます。

瀧　それだと時重さんもおあきらめになることはなるでせうが、お杉さんも未だ十六ですからね。

藤　かまひませんよ、妾達の目から見れば十六七は子供に見えますけど、昔なら皆かたづく齢ですからね、それに時重の目から見れば立派な齢ごろに見えますからね、それにさもないと一寸上京しない理由がはつきりしませんからね、すぐそれを信用しますよ、さうしてあきらめるでせう。

瀧　それならさうしませう。

藤　さうして時重が來ましたら、お杉さんがくれ〴〵もよろしくと云つて喜んで歸つて行つたといふやうに云つて下さいませんか。

瀧　さうしませう、時重さんはさぞ驚くでせう。

藤　本當におどろくでせう。可哀さうに思はないこともありませんけど。本當に子供を育てるのは骨の折れる怖いものだと思ひました。お杉さんの荷物はどうするのですか。

瀧　一先づ一まとめに片附けておいてもらひましたから、二三日の內に送りとゞけようと思つてゐます。

藤　之から貴女の處も淋しくなりますね。

瀧　え、居ると隨分うるさく思ひますが、居ないと又淋しい氣もします。何しろ妾に氣に入らないと逐ひ返されると大變だと思つてしきりに機嫌をとつてくれましたからね。

藤　お杉さんは歸る時、もう上京の出來ないことを、かんづいてゐたのですか。

瀧　え、かんづいてはゐました。ですが出られるかも知れない、どんなことをしても上京して見せますと云ふ氣はあつたらしいのです。妾もさう思はせるやうに仕むけたのです。

藤　今時分どうしてゐるでせう。

瀧　妾からいゝ返事でも來はしないかと首をながくして待つてゐるでせう。妾の手紙が行つたらさぞ失望するでせう。

藤　何とかくつもりなのです?

瀧　貴女の手紙を見て出來るだけ御上京が出來るやうに骨折りたいとは思ひましたが、お母さまからのお手紙でいろ〳〵の事情をうかゞつて見ると矢張りお母さまのおつ

しやることをおとなしくきく方がいゝと思ひます。どうしても親の方がゆく末のことをよく考へてゐらつしやいますから、親の云ふことはその時はひどいと思はれることでも、あとになつて、本當にさうだと思ひあたることがあるでせうと書いてやらうと思つてゐます。

藤　本當にさうですよ。

外（時重の聲、元氣に）唯今。

（時重、元氣に格子戸をあけ、元氣に入つてくる。さうして清子と、杉子のゐないのに先づ氣がつき、清子の荷もつのないのと、杉子の荷物のいやに片づいてゐるのに不安を感ずる。瞬間皆沈默。）

藤　大變早かつたね。

時重（少し淚聲、それを無理にかくし、なるべくゆつくりと話す）え、お兄さんと喧嘩して早く歸つて來たのです。（一寸默し）皆は？

藤　歸つたのだよ。

時重　お淸さんはもう歸つたのですか、大變早かつたのですね。（又一寸默し）お杉さんは何處へ行つたのです。

瀧　お杉も歸つたのです。貴女によろしくと云つて居ました。

時重　そ、さうですか。

藤　お杉さんはいゝ緣談があるとかで、急いで喜んで歸つて行つたのだよ。

時重　もう來ないのですか。

瀧　え。何しろその內に結婚するのださうですから。

（時重は、耐へられずに淚ぐみ默つて退場、藤子心配さうに窓から見て。）

藤　之ですみました、どうも難有う、時重のことが氣になりますから、一寸行つて來ます。さよなら。

瀧　さよなら。

藤（行きかけてふりむき）それから手紙をね。

瀧（送りながら）え、すぐ書いて出しておきます。

――幕――

（一四、四）

運命と碁をする男（五幕）

人物

吉峰
三好
森村
吉峰の妻
和尚
玉菊
其他

第一幕

宿屋の一室、吉峰は碁盤を前に置いて何か考へてゐる。そして會心の笑を見せ、煙草を一服して盤を見又會心の笑を見せる。

吉峰　相手がよし鬼神であつても、之以上の考は出まい。もし出たらよろこんでまけてやるぞ。

（女中登場。）

女中　三好さんと森村さんがお見えになりましたが、お通ししてもよう御座いますか。

吉峰　待ち兼ねてゐたのだ。早く通して下さい。

女中　はい。（退場）

（吉峰、まだ盤を見てゐる。三好、森村女中に案内されてくる。）

三好　先生、いゝ考が浮びましたか。

吉峰　うかんだよ。まあ見てくれ。

三好　はい。

森村　はい。

吉峰　敵は今度はどうしてもこゝに打ちこんでくると思ふ。之より他に道があるとは思はない。敵も中々のくせものだから、こゝに打つてくるにちがひない。

三好　私もそれを心配してゐました。森村とも話してさう敵が打つて來たらどうしたらいゝだらうと話してゐました。

吉峰　いゝ考が浮ばなかつたか、君達にも。

三好　えゝ、浮びませんでした。

吉峰　こゝにかう石を打つのだ。この考がふと浮んだ時の僕のよろこびはどんなものだつたか。あんまりうれしくつて昨晩はぢつとしてゐられなかつた。つい眠りそこなつた。この考はいくらあいつでも考へつく手ではないと

思ふがどうだ。

三好　恐れ入りました。こんな手があるとは思ひもよりませんでした。ね森村、本當に恐ろしい石もあるものだな。

森村　僕達にはとても考へつけませんでした。

吉峰　僕だつて考へつけたのは奇蹟だと思つてゐる。相手がよし鬼神であつても、この次ぎの石はこゝに打つより他仕方があるまい。今度の勝負は之で九分通り勝つたと云ふものだ。

三好　それは大丈夫で御座います。味方の勝利疑ひなしで御座います。

吉峰　もうよろこんでも早くはないだらう。敵の奴等も考へぬいて、この石を考へついて勝つた氣でゐるだらう。しかし僕達の考にはまだ不足はないとは云へないが、僕には之以上はもう考へられない。

三好　こゝに石をうつことを考へられただけでも、私達には人間業とは思へません。今更に先生の頭には感服します。

吉峰　今度は我ながら感心したよ。はつはは。

（三人會心の笑をもらす。）

（女中登場。）

女中　電報が參りました。

吉峰　さうか。（電報を快活にあけて見る）なんだ、オクサンガカミオカトユクエフメエ、なんだつて、オクサンガカミオカトユクエフメエ。

（讀み方がまづいので初めわからなかつた意味が先づ三好、森村にわかる、つゞいて吉峰にわかる。三人沈默。）

吉峰　（出來るだけ冷靜に）誰かのいたづらだ。わるいいたづらをする奴があるものだな。長距離電話をすぐかけて見てくれ。だが（時計を見て）もう時間がない。惡いいたづらをする奴だな。卑怯な奴だ。相手がこの電報を打たしたとは俺も思ひたくはない。僕がまける方にカケでもした奴のいたづらだらう。僕はなほ負けてはやらない。（沈默）だが俺は一寸散歩してくるよ。五分程。だが心配なことはない。あまりよろこんで得意になりすぎてゐたので、不用心に電報を見たのがいけなかつた。この手を喰ふとは豫期してゐなかつたからな。だがこの石に打ちかつ石のおき處を一寸考へてくるからね。出かける用意をして待つてゐてくれ給へ。すぐ歸つてくるから。

（退場）

三好　困つたことが出來たものだね。上岡も馬鹿なことをしたものだ。

森村　奧さんがわるいのだね。だがこの電報は嘘かも知れない。

三好　本當らしいよ。だが電報を打つた奴は、どうして知つたのかな。
森村　何處に敵がゐるか、わかつたものではない。だが敵も卑怯な眞似をしたものだね。
三好　敵が打たしたのだらうか。
森村　先生の云ふことが本當かも知れない。
三好　先生はうす〳〵事實を知つてゐたのかね。
森村　それもわからないね。知らなかつたのぢやないかね。
三好　先生は噓たと思つてゐるらしいね。
森村　少くも今日一日は噓にしておく方がいゝね。
三好　僕はあの時、餘程、噓だと先生に思はせるやうなことが云ひたかつたのだが、どうも何と云つていゝかわからなかつた。
森村　僕も君が何とか云つたら、僕も何とか云はうと思つてゐた。困つたことが出來たものだ。先生もお氣の毒だな。
三好　何かいゝ考はないかね。あとはあととしてもこのさいだけは安心して勝負にのぞまれるやうにしたいものだね。
森村　奥さんと上岡の間は少しも疚しいことがないことにしたいものだね。そして電報はカケをした奴が勝手につくり出したものにしたいものだね。

三好　まあ、さう云ふことにして、安心して先生が勝負に出られることにしたいものだね。少しでも氣にかゝることがあつては一生一代の勝負に傷がついては困るからね。
森村　何とかうまくごまかしたいものだね。
三好　まあ、上岡が今何處かへ旅行してゐる事にでも出來るといゝのだがね。
森村　どうも噓らしくなつても困るからね。
三好　どうにか二人でごまかすことにしよう。

（吉峰登場。）

吉峰　さつきは失禮した。もう大丈夫だ。安心してくれ給へ、さつきはあんまり不意だつたからおどろいたが、もう心がおちついたから大丈夫だ。まだ時間はあるね。
三好　大丈夫あります。本當に質のわるい奴がゐたものですね。
吉峰　質のわるい奴はいくらでもゐるものだよ。油斷してゐたのがこつちの手おちさ。あんまり得意になりすぎると、えて罰をうけやすいものだよ。どんなことが起つて來たつておどろかない用心をしておかないと人間はいけないものだよ。大事な時に、とり亂したざまを見せたことを恥かしく思つてゐる。
三好　噓にもことによりますから。

吉峰　本當も、ことによるし、時によるよ。
三好　よくもあんな嘘パチの電報がよこせたものですね。
森村　本當にたちのわるい嘘つきもゐるものですね。
吉峰　僕に云はすと、質のわるい嘘つきだとは云ひたくないね。質のわるい正直者もゐるものだと云ひたいね。馬鹿な恥知らずの正直者とでも云ふかね。だが今頭を疲れさせると、大事な時に頭が疲れると困るから、その話はよすとするかね。（沈默）いや饒舌つてしまふ方がよささうだ。僕もまだ悟り切つてゐる人間ぢやないからな。
三好　先生はまさか電報を信じてはいらつしやらないでせうね。
吉峰　君達も信じてゐるのだらう。
三好　滅さうもない。
森村　そんなことは信じられません。
吉峰　さうかね。君達は本氣にさう思つてゐるのかね。知らないふりしてゐるのは亭主許りかと思つてゐたが、君達も知らないふりしてゐるのか。
森村　知らないふりなんかはしません。
吉峰　嘘は云はないでもらはう、僕はうすうす知つてゐるのだ。誰よりも先にね。だが知らない顔をしてゐる方が子供のためにも、又あいつのためにも、この僕のためにもいゝと思つてゐたのだよ。あいつは浮は氣ものだが、僕のことを思つてゐることは嘘とは思へないからね。それに三人の子供を、動物のやうに愛してゐるからね。そして仕合せなことは三人ともどうやら僕の子らしいからな。
三好　先生は奥さんを誤解していらつしやいます。そして電報をうつた男は、先生の疑惑をうまく利用したのにすぎないと思ふのです。
吉峰　君の云ふ通りであればなほ結構としておかうよ。しかし僕はそんなあいまいな所でおちつくわけにはゆかない。君は家にお母さんがゐて監督してゐるから心配なんかする必要はあるまい。森村は又細君を信じ切れる仕合せものだからそんな心配なんかしたことはあるまい。だが僕は心配するのにはもうあきが來てゐるのだよ。俺の留守は勝手にするがいゝ。さう思はなければ安心してはゐられないからゐるのだよ。さう思つて家を出ね。だから今日のやうな電報を見たつて今更おどろかないでもいゝ覺悟は出來てゐるはずだつたのだよ。處が矢張り駄目だつたね。電報は嘘にしろ、本當ではないかと云ふ疑惑を起させるには十分役に立つた。そして殘念なことには電報を打つた奴の望む通りに、僕の心は平靜を失ひかけた。だが見てゐてくれ、僕はどの位おちついて碁が打てるものか見せてあげよう。勿論、僕は妻の貞操

を信じ切つてゐたら、あの電報を笑つてすますことが出來なかつたらう、今時分、何處へ姿をかくしてゐるか知れない。今の十分の一もおちついてはゐられないだらう。かうともかくおちついてゐられるのは、僕が生れつきのやきもちやきで十年の間、修業がつんで來たからだらう。僕は夫婦だつて、他人は他人だと思つてゐるよ。相手を牢獄に押しこまない限り、又自分が年が年中見はりが出來ない限り、疑へば切りがないことを知つてゐる。どうせ自分の勝手にはならないのだから相手の自由に任せるより仕方がない。君達は幸福者だからそんなことは考へたことはないだらうね。君達はなぜだまつてゐるのだ。まだ時間が早いやうだね。今日は碁の話よりも夫婦哲學の話でも聞かせようかね。あんまり聞きたくもなささうだね。（呼鈴をおす）

（女中登場。）

吉峰　もう三十分程したら自動車をよこして下さい。

女中　はい。

吉峰　それから自動車がくるまでこゝに誰も來ないやうにして下さい。一寸話がありますから。

女中　はい。（退場）

吉峰　かうしておけば安心だ。僕は碁の方ではともかく一人前以上だと云ふことは皆認めてゐてくれるらしいが、夫婦のことにかけては小僧にだつて笑はれてゐる人間だがね。僕が往來を歩くと、こんな十二三の小僧まで僕の顔を見てへんな笑ひをする。知らぬは亭主許りと云ふ顔をするね。氣のせゐもあるかも知れない。しかし僕に云はすと、知つてゐるのは亭主許りと云ひたいね。なぜかと云ふと、他の人の知つてゐるのは外見の事實だけで、內面の心の動きを知つてゐるのは、當人だけだからね。そして知らん顔をしてゐなければならない馬鹿氣た役をする氣持なんて云ふものは、他の人にはわかるわけはない。あまりいゝものでもないが、滿更、惡いものでもないよ。どう云ふ風に生活を生かしてゆく方がいゝか、君達は知つてゐるかね。僕にはわからないことが多い。姦通した妻は去るのが本當だと多くの人は云ふだらう。だが姦通にもいろ／＼あるだらうし、家庭の事情、夫婦の愛情なぞと云ふものにはいろ／＼なことがあるものだからね。この小さい碁盤の上にだつて、石の生かし方はいくらでもある。碁は勝負がすぐつくものだから、皆、わからないでも、勝つ方がうまいのだらうとは思ふ。さうとも限らない時もあるが、しかしまあ、大たい考のいゝ方が勝つ、しかし碁がもし一生かゝつても勝負のつかないものだつたら、名人が苦心して石をおけばおくほど、他の人には見當がつかなくなつて、罵倒するのがおちだ

らう。生活は一生かゝつたつて勝負のつくものではない。子供が立派な人間になつてくれゝば夫婦はいゝとするより仕方がない。そして夫婦になつたとこで、夫婦がお互ひの一生を墮落させるのはよくない事だとしか僕には思へない。他にいゝ方法があると君は思ふかね。石なら、何處へうてばいゝかは僕にははつ切りわかる時もあるが、生活になると中々さうはゆかない。しかしわからないことをわかつたふりしてやることは棊でも禁じられてゐるが、生活の方だつて禁じられていゝことだと思ふね。君達が僕の位置にゐたらどうすると思ふ。矢張り、すまして棊の勝負をやつて、出來るだけ立派な勝負をして、そしてそれがすんだら、すぐ夜行で歸つて、ことの眞相を見て、きめることはきめる。之より他に方法があると思ふかね。

三好　一言も御座いません。それが一番男らしい、立派な態度だと思ひます。

吉峰　森村はどう思ふ。

森村　私も先生の御心を察し、尊敬いたします。

吉峰　君達がさう云つてくれゝば千人力だ。さうぢやないか。他に仕方があるか。はれの勝負の最中、妻には姦通され、勝負には負けたとあつてはどうだ。勝負に負ければ家庭の幸福が得られると云ふのなら又考へやうがあるだらう。だが今の場合、他に方法はない。勝負に勝つより仕方がない。電報をよこした奴は、俺と云ふ人間を知らなすぎる奴だ。もし今日の勝負の場にあの電報がとゞいたことを知つてゐる奴がゐたら、その男の期待はやぶられるだらう。今日の勝負にはなほ眞劍になれるだらう。相手がいくら俺をじらした處か、俺はその手は喰つてはやらない。俺の血の出るやうな戰ひのさまを君達は見てゐてほしい。

三好　私達も眞劍な氣持で拜見します。

吉峰　なんだか久しぶりに眞劍になれた氣がする。今迄も冗談ではなかつたがね。

（女中登場。）

女中　自動車が參りました。

吉峰　さうですか。それならゆかう。

三好　えゝ。

森村　はい。

——幕——

第二幕

吉峰の家、茶の間、吉峰の妻新聞を見てゐる。

妻　ばあや。

乳母　はい。（登場）
妻　旦那さまが、おかちになつたよ。三つのちがひでゝ
乳母　まあ、さうで御座いましたか。それはよう御座いましたね。
妻　私があんなに心配してゐたのに、電報をうつて下さらないのはひどいね。
乳母　それでもお勝ちになつたお祝ひやなんかで御急がしかつたので御座いませう。
妻　いくらお急がしいと云つたつて。處で今何時だい。
乳母　もう十時頃です。
妻　それぢや、私又出かけるからね。留守をおたのみするよ。
乳母　奥さま、私がこんなことを云ふのもへんで御座いますが、今日は一日おうちにいらつしやる方がおよろしう御座いませう。今におよろこびのお客がお見えになりますかも知れませんから。
妻　だが御約束してあるのだから、お客さんが見えたら、いゝやうに御斷りしておいておくれ。
乳母　それでも。
妻　もう何にも云はないでおいておくれ。私だつて何にもかも知つてゐるのだからね。私のよくないことも、旦那さまにすまないこともね、だが之も前世の因緣と見えて、私はどうしてもあの人のことは思ひ切れないのだよ。旦那さまも碁許りに夢中になつていらしつて、私が居ても居ないでも一向平氣でいらつしやるのだからね。私だつて少しはたのしみや、氣はらしがなくつてはね、お前だつて私の氣持はわかつてゐてくれるはずぢやないか。勝負に勝つても私に電報一つお打ちにならない方ぢやないか。
乳母　それはさうでも御座いませうが、世間もうるさう御座いますし。
妻　それは大丈夫だよ。私だつて馬鹿ではないからね。私がどんなにこゝへ來た當座、旦那様を愛してゐたかはお前だつて知つてゐるたぢやないか。私はどんなに旦那さまを愛したつて、旦那さまは私のことなんか結婚するとまもなくお忘れになつて、碁許りに夢中でいらつしやるのだからね。いくらそれはお仕事だからと云つて、あんまりつめたすぎることはお前だつて怒つてゐたぢやないか。
乳母　それはさうで御座いますが。
妻　まあ何にも云はないでおくれ。私だつて旦那様のいゝ方だと云ふこと、御仕事に熱心なことを悪いことゝは思つてはゐない。今だつて私は旦那様のことをいつでも思つて、今度だつて毎朝、毎晩、おかちになるやうにお祈

りしてゐたのはお前だつて知つてゐる通りぢやないか。だが私がどんなに淋しくくらしてゐたかはお前も知つてゐる通りぢやないか。いつだつて家にいらつしたことはない。たまに歸つていらつしやるのでよろこんでゐると、又すぐ夜ふかしのお客さまで、ろくにお話しする暇もなく、又すぐお出かけになつてしまふ。家にいらつしやる間だつて、ねる時だつて頭の内にあるのは碁盤と碁石だけなのだからね。あんな方が結婚なさつたのはまちがひと思ふね。又誰と結婚なさつてもちつとも困らない方なのがはつきりして、私は本當にがつかりしたよ。私が尼さんの生活でも出來る質ならそれもいゝだらうがね。旦那様がよりもよつて私のやうな女と結婚なさつたのは、兩方の不運たつたのだね。そのくせ私は旦那様の一番いい處にはすつかり參つてゐるのだから、困つたものだよ。旦那様が、默つて何か考へていらつしやる時のあの淋しい様子を見ると、私は死んでも旦那様のために働きたいと云ふやうな氣になるのだよ。すると旦那様も、すぐそれを感じて、二人は泣きながら、許しあつたり、愛しあつたりするのだが、それが三十分も續かない中に旦那様は又碁のことを考へていらつしやるのだから、いやになつてしまふ。それでは私は出かけてくるからね。何にも云はないで、大目に見ておいておくれ。

（女中あわてゝ登場。）

女中　旦那様がおかへりになりました。

妻　えゝ、旦那様が。

（吉峰登場、女中退場。）

妻　お歸りあそばせ。

乳母　お歸りあそばせ。

吉峰　子供達はどうしてゐる。學校か。

妻　えゝ、皆、學校へゆきました。何か用でも御出來になつたのですか。

吉峰　あゝ、くたびれた。（沈默）お前はずつと家にゐたのか、

妻　えゝ。おかちになつたさうですね。

吉峰　どうして知つた。

妻　新聞で見て知りました。電報を下さらないので、今怒つてゐる最中でした。

吉峰　さうか。俺は又お前は家には居ないと思つたのだよ。

妻　家にゐない?

吉峰　ずつと家に居てくれたのか。

妻　あたりまいですわ。勝負はどうでした。

吉峰　やつと勝つたよ。敵も思つたよりは强かつたよ。

妻　それはよう御座いましたね。

吉峰　昨日俺が會場へゆかうとした時、一通の電報が來て、

お前と上岡とがゆくへ不明になつたとかいてあつたよ。
妻　まあ。
吉峰　ひどい、いたづらをする奴もあるものだと思つたよ。
妻　あなたはそれをお信じになつたの。
吉峰　半分信じたね。
妻　まあひどい。
吉峰　ひどいのは俺かお前かね。だが家にゐてくれたので、俺はうれしいよ。
妻　歸つていらしつたので私もうれしいわ。
吉峰　本當かね。俺の歸つて來たのを見て、お前がよろこんだとは思へなかつたよ。
妻　あんまり不意なので、何か事が起つたのかと思ひましたよ。
吉峰　ばあや、朝飯の用意をしてもらはうかね。
乳母　はい。（退場）
吉峰　あんな電報をうけとつても俺が安心し切つてゐられたら俺はどんなに幸福かと思つたよ。
妻　あなたのやきもちやきの質がいけないのですよ。
吉峰　お前と上岡の間を疑ふ方が馬鹿だと云ふのかい。
妻　だつて疑ふことは何にもないぢやありませんか。
吉峰　俺が氣がついてゐないと思つてゐるのか。
妻　それだつてそんなことはないことですもの。
吉峰　俺も證據をつかんでゐるわけではないから、俺はあとはお前の心に任せるとするよ。だがその電報は思つたよりきいたよ。
妻　そんな電報を御らんになつてそれでも、おちついて勝負をなさつたのね。
吉峰　お前は、俺のおちつかないことをのぞんでゐるのか。
妻　あなたは何處かで矢張り信じてゐて下さるから。
吉峰　口は調法なものだね。
妻　もうあなたとは何にも云ひたくありませんわ。
吉峰　俺だつて何にも云ひたくはないよ。だがそんな電報を見て、すました顔して勝負をしなければならない自分が可哀さうだつたのだよ。
妻　（少し皮肉を裝つて）御同情しますわ。
（沈默。）
妻　私だつて口惜しいわ。（泣く）
吉峰　なくのはよせ。泣かなくつたつていゝぢやないか。電報は嘘だと云ふことがわかつたのだから、それでいゝぢやないか。
妻　本當にあんまりですわ。ひどい人もゐたものですわね。
吉峰　電報を見た時、俺はとんで歸りたく思つたよ。だが嘘だつたらこんな馬鹿なことはないからね。それに俺の今度の勝負はあそびではなかつたからね。俺には事實の

有無はともかく、その電報をうつた奴の氣持は露骨に感じられたからね。俺は、それにまけるわけにはゆかなかつたよ。だが勝負しながらも、さすがに頭がおちつかないので困つたよ。やつと碁にしがみつくやうな氣で、碁盤にしがみついて、勝負がついた時には氣絶しさうな氣がしたよ。

妻　本當に大へんでしたね。誰でせうかね。そんな電報をうつたのは。

吉峰　誰かね。誰かわからないだけ、なほ用心しないといけない。お前は祕密を握られないやうにしないといけない。

妻　（さぐるやうに云ふ）大丈夫ですわ。そんなことはないのですもの。

吉峰　そんなことがなければいゝが、何處に敵がゐるか、わからないことだけは知つておく方がいゝ。

妻　おつかれになつたでしよ。一寸お休みになつたら。

吉峰　あゝ、休まう。蒲團を俺の室に敷いてくれ。

妻　はい。（退場）

（乳母登場。）

吉峰　御飯の用意が出來たか。

乳母　もうぢきで御座います。

吉峰　灑子は毎日家にゐるか。

乳母　毎日お出かけになります。

吉峰　さうか。

乳母　私はあなたに御同情いたします。あんまり御氣の毒で。

吉峰　そんなことは云はないものだぞ。

乳母　はい、はい。（退場しようとする）

吉峰　すぐ出かけるから御飯の用意はもういゝよ。それから子供はどうしてゐる。

乳母　相變らずお元氣で御座います。

吉峰　俺は子供のために知つてゐても知らないふりしてゐるのだからそのつもりでゐろ。

乳母　はい、はい。（退場）

（妻登場。）

妻　蒲團がとれました。

吉峰　俺は又出かけてくるよ。

妻　何處へ。

吉峰　お客まはりをしてくる。少しでも早い方がいゝから。そして又夜行で大阪にゆくことにする。

妻　まあ。お休みになればいゝのに。

吉峰　一寸思ひ立つたことがあるのだ。

妻　さうですか。それではいつていらつしやい。

吉峰　上岡にあつたらよろしく云つてくれ。

妻　はい。いつお歸りになります。
吉峰　馬鹿つ！（妻の頰を打つ）
妻　何にをなさるの。
吉峰　一寸打ちたくなつたのだよ。今度、なぐりたくなくなつたら、又歸つてくるよ。
妻　本當にすみません。
吉峰　何にも云はないでくれ。俺も無理はないとも思つてゐるのだ。子供だけは大事にしてやつてくれ。
妻　はい。（何か云はうとする）
吉峰　お前の氣持はよくわかつてゐる。この氣持がつゞいてくれゝばね。だがそれは無理だらう。お前と俺との關係は前世の因緣とでも云ふのだらう。身體を大事におし。
妻　あなたも御身體を御大事にね。

――幕――

第三幕

田舍の寺の庭先。秋。和尚庭を掃除してゐる。吉峰も箒をもつて出てくる。
吉峰　御精が出ますね。
和尚　一人で結構ですから。
吉峰　いえ。私も掃除がしたくなつてゐたのです。
和尚　さうですか。それなら一緒に、話しながら掃除をしませう。
吉峰　氣持のいゝ天氣ですね。
和尚　本當に氣持がよろしい。あなたの顏色がよくなりましたね。
吉峰　さうですか、あなたの顏色もよろしい。あゝ紅葉の反射ですね。
和尚　さうですか。しかしあなたは今日は元氣さうですよ。
吉峰　すつかり呑氣になつたと云ふ方が本當でせう。今まで氣になつたり、ムシヤクシヤしてゐたことがすつかりなくなつてしまつてぼんやりしてゐます。
和尚　それは結構です。
吉峰　あんまり結構でもありませんね。自分の妻が他の男とあひ引きしてゐるのに呑氣でゐるなんてあんまりいゝ事とは思へませんね。しかし呑氣になつてゐるものを無理にやきもちをやかうと思つても駄目ですね。
和尚　そんなことは無理する必要はないでせう。無理してまでやきもちはやく程のものでもないでせう。
吉峰　さうですかね。我ながら呑氣になつたものと思ひますね。山とか、川とか、草とか、木とか見てゐると、つい呑氣になるものですね。淋しい時もありますが、それも靜かで、氣持がわるくはないのです。子供のことを考

へると一寸逢ひたくもなりますが、無事にしてゐるさうですから、あんまり氣にはなりません。

和尚　あなたは何にが御仕事なのですかね。

吉峰　別に何にと云ふことはありません。

和尚　私にはいつもあなたは何にか考へていらつしやるやうに見えるので、何にを考へていらつしやるのかと時々考へてゐます。

吉峰　碁のことを考へてゐるのです。

和尚　さうですか。誰でも碁のやりたては、碁盤が目について困るものですね。

吉峰　本當にさうです。あなたにあんまりすゝめられて、あなたに碁を教へていたゞいたのが病つきで、この二三日碁のことが頭について困つてゐます。

和尚　それであなたは、他のことに呑氣になれたのですよ。碁をやると親の死に目にも逢へないと云ひますからね。

吉峰　そんな話ですね。

和尚　あなたは、今迄碁をやつたことがないさうですが、中々たちがよろしいね。

吉峰　さうですかね。

和尚　御世辭ではありませんが、あなたはしつくり考へておやりになりますね。始めの人には中々、しつくり考へることは出來ないものです。

吉峰　さうですかね。馬鹿の考へ休むに似たりですかね。

和尚　あと二三年もおやりになると、私と同じ位ゐになるでせう。

吉峰　さうですかね。あなたはどの位ゐお強いのですかね。

和尚　田舍初段に三目ですね。永い間やつてゐますが、中中うまくならないものです。

吉峰　さうですかね。

和尚　一つそれなら碁でもやりませうか。

吉峰　しかしあんまり下手で面白くおありにならないでせう。

和尚　正直な處、まあさうですが、しかし研究しながらやれば又面白いこともあります。

吉峰　さうですかね。しかし今日はあんまりいゝ御天氣ですし、まだ半分もはきませんから、またあとで願ひませう。

和尚　いえ、庭は全部はく必要はないのです。私は、はいた庭もすきですが、はかない庭も好きなのです。たゞ氣まぐれにはきたくなるとはくのです。まあ私のひげのやうなもので、不精ひげをはやしてゐますが、時々どうかしてひげがうるさくなるのです。するとはさみでぶつぶつ切りますが庭をはくのもそれと同じなのです。たゞ氣まぐれにすぎないのですから、いつやめてもいゝのです。

吉峰　しかし半分ひげを切つてあとやめるのもへんでせう。

和尚　それは切り方によりますよ。

吉峰　いくら切り方によつても、ながい短かいが出來すぎては可笑しなものでせう。尤もあなたのおひげは時々長い短かいがあつて滑稽な時がありますがね。あなたのおうはさを友達に聞いてゐましたが。

和尚　さうですか。どんな噂です。

吉峰　あなたは大へん不精な方で、風なぞはかまはない方だと聞いてゐましたよ。そしてあの位ゐ呑氣な方も少ないと聞いてゐましたよ。

和尚　それだけですか。

吉峰　あと云ふと御世辭になりますからね。

和尚　御世辭は至極結構です。

吉峰　それでは云ひますが、あの位ゐさとれば大したものだと思ふと云つてゐました。

和尚　そんなことを云ふ人間は利口ぢやありませんね。そしてあなたはそれを信じて、わざ／＼來て下さつたのですか。

吉峰　さうです。

和尚　それはお氣の毒でしたね。

吉峰　しかし來てよかつたと思つてゐます。あなたとあつてゐると、實際心がのどかになりますから。

和尚　春の風のやうなものですね。

吉峰　春の日のやうだと思つてゐました。

和尚　それは大したほめ方ですね。碁をたゞで敎へて上げた御禮ですかね。

吉峰　まあそんな處でせう。

和尚　少し休んでお茶でものみませう。

吉峰　ありがたう。あなたは碁についてどう考へますか。碁打ちで一生をはる人がありますが、私はどうも男の仕事としては面白くないやうにも思ふのですが。

和尚　それは人によりますよ。あなたや私なんかはいくら碁打ちになりたくつたつてなれませんが、その方に生れついた人なら碁打ちもわるくはないと思ひますね。昔の名人の話なぞを聞くと大したものだと思ひますね。近頃でも吉峰七段と大崎七段の勝負なぞは大したものだつたさうです。吉峰、吉峰と云へばあなたと同じ名ですね。その吉峰七段は三目勝つたさうですが、勝つと目まひがしてもう少しで倒れさうになつたさうです。もうさうなつたら碁も遊びではありませんね。昔の勇士の一騎打のやうな話をきくやうな氣がします。

吉峰　さうですかね。それなら吉峰七段位ゐになれば碁を一生やつてもいゝとお思ひですか。

和尚　それは思ひますね。なんでも名人の話は面白いものです。
吉峰　今の時勢でもですかね。
和尚　それはあの位ゐになれば、どんな時に生れても碁許りやつてゐていゝと思ひますね。又あゝ云ふ人は變り種ですから、他のことをやらしたら、馬鹿見たやうなものでせうね。
吉峰　さうですかね。
和尚　あなたは大へん考へ込んでしまひましたが、まさか碁打ちにならうとはお思ひでないでせうね。
吉峰　私では駄目でせうね。
和尚　それはだめですよ。いくらあなたがたちがよくつたつて、私とさうちがひませんからね。
吉峰　私は碁をやめようかと思つてゐたのですよ。
和尚　あそびにやるのは、やめる必要はありませんよ。
吉峰　しかし私はこの歳して他の仕事も出來ませんからね。
和尚　碁はなほ大へんですよ。
吉峰　さうですね。今迄、あなたにかくしてゐましたが、私は實は碁打ちなのです。
和尚　あなたが。
吉峰　えゝ。

和尚　あんなに下手なあなたが。
吉峰　私は本當のことを云つて、多くの方から碁を敎へてくれと云はれては修業の邪魔になると思つてかくしてゐたのです。私がその吉峰七段なのです。
和尚　それは本當ですか。それではわざと下手なふりしてゐたのですか。
吉峰　正直な處、百目まけようと思つて昨日やりましたが、あなたの打ち方が見當がつかないので隨分骨が折れました。
和尚　隨分ひどい方ですね。あなたは。
吉峰　すみません。他に仕方がなかつたのです。碁は修業中斷たうと思つたのですが、碁石の音をきくと、つい誘惑されてしまつたのです。
和尚　それではこの町で、田舎二段だと云つて威張つてゐて、私が三目おいてどうしても叶はない人がゐるのですが、一つやつつけてくれませんか。
吉峰　どうも少し質のわるいいたづらですね。
和尚　それでもあんまり得意なので、親も誰か勝つ人があるといゝと云つてゐるのです。そして私の考では、どんな人でもその男に勝てるとは一寸思へないのですがね。
吉峰　それは田舎にどんなうまい人がゐないとも限りませんが、五六日前にあなたとやつてゐた人でしたら、初段

の力がやつとゝ思ひますね。隨分無理なこと許りしてゐました。

和尚　さうですかね。しかし私があなたに碁を敎へたのは痛快でしたね。

吉峰　すまないと思つてゐたのです。私は碁なんか打つても始まらないやうな氣がしてゐたのです。

和尚　そんなことはありません。大いにおやりなさい。世間のことは考へやうによつてはなんだつてつまりませんよ。しかし人間の頭がどの位ゐまで動くものかを、示してくれることは隨分よろこびですね。あなたが碁をやめたら殘念がる人がどんなに多いでせう。そしてやめて他に何かおやりになれますか。

吉峰　さうおつしやられゝば、さつきのお話のやうに馬鹿にひとしいにちがひありません。もうこの齡ではね。それでは之から今迄よりもなほ專心に碁をやりますかね。

和尚　さうして下さい。

（小僧登場。）

小僧　三好さんと云ふ方が見えて、吉峰さんにお目にかゝりたいとおつしやつていらつしやいます。

吉峰　さうですか。

和尚　こゝへ御案內したらいゝだらう。

小僧　はい。（退場）

和尚　私は一寸手をあらつて來ます。

吉峰　さうですか。

（和尚退場。三好登場。）

三好　先生！

吉峰　よく來てくれたね。

三好　御元氣らしくつてうれしく思ひます。

吉峰　この通り元氣だよ。君にいろ〳〵心配かけたが、皆、無事ださうだね。

三好　えゝ、皆さん御元氣です。先生は碁をおやめになると云ふ噂をきゝましたが。

吉峰　一寸そんな氣もしたが、のりかけた舟だ。何處までもやつて見るつもりだよ。

三好　それをきいて安心しました。

吉峰　今やめては恥だよ。後世碁の名人が出て來て、吉峰と云ふ奴はこんな粗雜な碁を打つてゐたのかと云はれては恥だからね。それに僕だつて途中でとまると云ふわけにもゆかないからね。之から大いにやるよ。

三好　おうちの方が金に困つていらつしやるやうです。

吉峰　さうかね。もうこゝに來て三ヶ月になるから、困つてゐるだらうね。氣の毒なことをした。

三好　それではいつお歸りになりますか。

吉峰　それでは今晚一緒にたたうかね。僕はこゝに來てす

つかり氣持がよくなつた。もう運命がどんな石をうつて來ようと、僕は自分の考へた通り石をうつて安心してゐられると思ふよ。少くも他人や世間は恐れずにすめるね。それだけ立派な石をうちたく思ふがね。運命と碁をするのは面白いね。

（和尚登場。）

吉峰　三好君。この方がこゝの住職だ。いろ〳〵お世話になり、導いていたゞいたのだ。

三好　さうですか。初めてお目にかゝります。私は三好と云ふ、吉峰先生の弟子で御座います。

和尚　さうですか。初めて、お名前だけはよく知つてゐました。

吉峰　このお方は大へん碁のおすきな方なのだ。

和尚　そして私は吉峰さんに碁まで敎へてあげたのですよ。はつはつは、吉峰さんはたちがわるくつて少しも碁を知らないやうな顏してゐるのですからね。

三好　それでは私は又弟子と云ふ處ですね。

吉峰　和尚さん。私は今晩おいとましようかと思つてゐるのです。

和尚　今晩はやめて下さい。今晩は一つ盛んに碁の會をやりませう。もう皆に案内を出したのですから。逃げられては困ると思ひましたので。

吉峰　さうですか、それでは今晩は大いに遊ばして戴くことにしませう。

和尚　どうもありがたう。

吉峰　それから一つおたのみがあるのですが。

和尚　なんですか。

吉峰　一つ字をかいて戴きたいのですが。

和尚　何とかくのですか。

吉峰　運命と碁をする男あり喝とかいて戴きたいのです。

和尚　それは面白い句ですな。すぐかきませう。

（和尚紙と硯箱をとり出し、字をかく。それを襖にはり。）

和尚　運命と碁をする男あり喝。どうも下手な字ですな。

吉峰　いや、美事の出來です。ありがたう御座いました。

（三人見る。）

――幕――

第四幕

寺の室、第三幕の翌朝和尚碁を一人でやつて見てゐる。

小僧登場。

小僧　和尚さん。玉菊さんが來てお逢ひしたいと云つてゐます。

和尚　通しておあげ。（碁石を音のしないやうにしまふ）

（玉菊登場。）

玉菊　暫らく。

和尚　隨分ながい間顏を見せなかつたね。怒つてゐるのかと思つてゐたよ。

玉菊　それは怒つてゐましたわ。

和尚　それで今日は仲なほりに來たのか。

玉菊　今日はあなたに用があつて來たのではないのですよ。

和尚　それはいゝ御あいさつだね。それならまだ怒つてゐるのか。

玉菊　本當に怒つてゐると思つていらつしたの。怒つてゐるのはあなたぢやないの。

和尚　俺は怒るわけはない。

玉菊　私だつて怒るわけはありませんわ。

和尚　それならなぜ來なかつたのだ。

玉菊　來たくありませんでしたから。

和尚　それでは今日なぜ不意に來たくなつたのだ。

玉菊　あなたにも似合はない察しのわるい方ね。私は今日は吉峰さんと云ふ方に碁をしへて戴きたいと思つて上つたのです。

和尚　聞いて見れば尤だ。

玉菊　聞かないで見ると。

和尚　聞かない內は俺にも色氣があるからな。

玉菊　柄にあはないことは見ともないものですよ。

和尚　本當にさうだよ。どうして吉峰さんが來てゐることを知つたのだ。

玉菊　昨夜おそく旦那が久しぶりに大勢の方と見えて、吉峰さんのことをあんまり皆でおほめになるので一寸來たくなつたのですよ。

和尚　お前も中々苦勞したと云ふ話だね。

玉菊　旦那が若い子がすきになつたからと云ふのですか。

和尚　まあ、さうだね。

玉菊　それは一時は腹を立てましたがね。私だつて同じやうなことをして來たのですからね。まあ自業自得たと思つてゐますよ。

和尚　中々感心な心がけだね。

玉菊　一時はだまされてゐることを知つてのぼせ上りましたがね。今ぢや反つて氣らくになりましたよ。あんな旦那の何處がよかつたのかと、今ぢや思つてゐますよ。

和尚　ひどい奴だな。

玉菊　お互ひさんですよ。あの人は珍らしい中だけ可愛がるのですからね。今ぢや私の方から出てゆくのを待つてゐるのですからね。向ふから逐ひ出すことになると、金

が中々いりますからね。私も初めつから長いこととは思つてゐなかつたのですよ。十七の時から二十五の今日迄、隨分ながい方だと思ひますが。それに子供もないのですからね。

和尚　それで今日は吉峰と碁をやりたいと云ふのか。

玉菊　えゝ。

和尚　それで出來たら誘惑でもしようと云ふのぢやないのかね。

玉菊　まあ、そんな處かも知れませんわ。

和尚　まだ俺の云ふことは聞く氣になれないのか。

玉菊　そんな柄にないことは云はないものですよ。坊主の色氣程いやなものはありませんよ。

和尚　どうもひどい奴だな。坊主だつて人間だよ。

玉菊　それなら人間らしく、髮毛(かみのけ)をのばしたらどう。

和尚　俺だつて髮毛(かみのけ)位ゐ、のばしたつていゝと思ふが、しかしすりつけると、のばすとうるさいよ。

玉菊　獨身がなれると女なんか持つのはうるさいものださうですね。

和尚　さうかも知れないが、さうでないかも知れない。

玉菊　あなたのやうな圖々しい方はありませんよ。この前なんか、人をさんぐくどいておいて、斷られても一向平氣な顏していらつしやるのですから、張りあひのないことと云つたら。

和尚　それならあの時泣いて見ればよかつたのか。殘念なことをしたな。水でも用意しておいて目につければよかつたのだね。

玉菊　あなたのやうな方は、枯木のやうにすましてゐると、私も感心するのですがね。

和尚　困つたね。どうも枯木になるわけにもゆかないからね。

玉菊　だから女のことなんか、すつかり思ひ切つてゐる方がいゝのですよ。

和尚　君の顏さへ見なければ、俺はさとりすました名僧なのだがね。

玉菊　あなたが私と一緒になつたら町の人は隨分笑ふでせうね。

和尚　町の人に笑はれて見たいよ。枯木にされては困るからな。

玉菊　あんまり困つてもゐないのでせう。

和尚　どつちだつて困りもしないが。どうも俺の腹物が尊敬されてゐるやうで、いゝ氣もしないよ。

玉菊　惡い氣もしないのでせう。まあそんな話はどうでもよろしいが。吉峰さんに一つたのんで見て下さいませんか。

和尚　たのんで見よう。吉峰さんは運のいゝ人たな。
玉菊　そんないや味は云ふものではありません。
和尚　今の言葉がいや味に聞えるやうぢや、俺の修業も足りないと云ふものだな。
玉菊　それなら今の私の言葉はとりけしますわ。
和尚　とり消さないで結構だよ。（手をたゝく）
（小僧登場。）
和尚　吉峰さんと三好さんに御用がなかつたら一寸來て戴きたいと云つてくれ。
小僧　はい。（退場）
玉菊　三好さんはどうでもいゝのですよ。
和尚　そんな露骨なことは云ふものではない。
玉菊　はい。
和尚　君は隣りの室にゐてもらふ方がよささうだね。
玉菊　それなら隣りにゐませう。（退場）
（まもなく吉峰、三好登場。）
吉峰　何か御用ですか。
和尚　およびしてすみませんでしたが、今一人の女の人が來てあなたに一度碁を教へて戴きたいと云ふのです。
吉峰　上手なのですか。
和尚　私より一寸上手ですが、まあその位ゐな程度です。
吉峰　私は一寸用がありますから、三好君におたのみしませう。
和尚　處が當人はあなたと話のたねにやつて見たいのださうです。私の顔の立つやうにして下さい。
吉峰　さうですか。
和尚　それは女の人ですが、もういゝ齡したみつともない女なので、お相手なさるのも御迷惑とも思ひますが、あんまりその人が熱心なので、つい私がひきうけたのですが、御めいわくでも。
吉峰　さうですか。それではお相手をすることにしませう。
和尚　ありがたう。玉菊さん、お許しが出ましたよ。
玉菊　ありがたう御座います。（襖をあけて登場）
和尚　之が玉菊と云ふ、この町では有名な碁の上手な藝者です。この方が吉峰さんで、この方が三好さんだ。
玉菊　初めてお目にかゝります。今日は又御無理な御願ひをしまして。
吉峰　和尚さん。あなたはどうも質がよくありませんね。
和尚　あなたに隨分ながい間だまされてゐた仕返しですよ。
玉菊　それではお願ひいたしませう。
吉峰　それではやりませう。
（玉菊石をならべる。）
吉峰　そんなに石をならべてどうするのです。

玉菊　それでもこの位ゐならべないと負けますわ。
吉峰　それでは少しひどすぎますよ。いくら私でも。
玉菊　いゝではありませんか。私はあなたがどの位ゐ、私達に出來ないことがおやりになれるか拜見したいのです。
吉峰　私たつて普通のこと切り出來ませんよ。
和尙　まあ、云ふ通りさしておおきなさい。
吉峰　それではやりませう。
（二人默つて始める。）
和尙　三好さん。昨日はおかげで私の讐をうつて戴いてうれしく思ひました。あの男はそれは自惚れの強い男ですが、昨日はあなたに子供あつかひされて氣の毒でもあり、痛快でもありましたよ。
三好　どうも大人氣ない處をお目にかけました。
和尙　あなたと吉峰さんの勝負には皆おどろいてゐました。
三好　私は先生には今更におどろきましたよ。隨分長い間先生は碁をなさらないので、昨日は勝てると思つてやつたのですが、矢張り齒がたちませんでした。
和尙　私が敎へて上げたからですよ。はつはつは。
玉菊　和尙さん。そんな大きな聲を出さないで頂戴。今大變な處ですから。

和尙　もう大變なのですか。
玉菊　私の方ぢやないのですよ。先生の方ですよ。一寸待つて頂戴。
和尙　待つのはいけないね。
玉菊　それでも死ぬのはなほ面白くありませんもの。
三好　先生はあなたとやつて百目まけたいと思つたら九十七目切り負けられないで殘念したと云つていらつしやいましたよ。
和尙　私が下手すぎて何處にうつか見當がつかなかつたのでせう。はつはは。
玉菊　うるさいぢやありませんか。一寸待つて頂戴、いゝでしよ。
吉峰　まあ、いくらでも待つてあげますからおちついておやりなさい。
玉菊　先生はずるい方ね。こゝは今度、私が石をうつ處ですから、打たないで頂戴ね。いゝでしよ。
吉峰　そんな我儘を云ふとやめますよ。
玉菊　それならもう我儘は云ひません。どうも先生の打ち方はへんですね。
吉峰　これは定石ですよ。
玉菊　さうすればもう生きるのですか。殺すのにはどうしたらいゝのですか。

吉峰　それはこゝに打たれない前に、こゝにうてばいゝのです。
玉菊　どうも私にはわかりませんね。
吉峰　三好君、あと一つ君がやつたらいゝだらう。僕はこんな相手とやつたことはない。
玉菊　まあ、もう少し辛抱して頂戴。私だつてあなたのやうな方とやつたことはないのですから。
和尚　そんな處にうつては駄目ですよ。
玉菊　あなたにそんなことがわかるの、それなら何處に打てばいゝのですか。
和尚　三好さん、こゝがいゝのでせう。
三好　其處では駄目ですよ。
玉菊　そら御らんなさい。三好さんこゝがいゝのですね。
三好　其處も駄目ですよ。
玉菊　それなら何處がいゝのです。
三好　こゝですね、先生。
吉峰　まあさうだらうね。しかし其處へ打たれては私の方が死ぬから困るよ。
玉菊　さうお、それはありがたいわ。
三好　しかしそのさきが大へんですよ。
玉菊　矢張りまだ駄目ですわね。お氣の毒ですからもうやめにしませう。

和尚　それなら三好さん、あなたと一つやりませう。
三好　えゝ、やりませう。
吉峰　それでは一寸失禮します。（退場）
和尚　どうぞ。
（和尚と三好やり出す。玉菊見てゐたがそつとぬけ出る。二人氣がつかない。）
和尚　本當にあなたは質がわるいですな。から云ふ時、どうすればいゝのです。
三好　矢張り、こゝへ打つより仕方がないでせうね。
和尚　さうですかね。しかし一度位ゐ教へて戴いても助かりませんね。
三好　大丈夫助かりますよ。
和尚　さうですかね。碁をやつてゐるとよく思ひますが、私達の日常生活はヘボ碁のやうなものだとよく思ひますよ。見當つかずにゆきあたりばつたりやつて、ゐるのですからね。生きてゐられるのが不思議位ゐですね。おや、玉菊の奴何處かへゆきましたね。
三好　さうですね。
和尚　あいつは吉峰さんに一寸氣があるのですよ。
三好　それもいゝでせう。先生も淋しいですからね。
和尚　先生の奥さんてどんな方です。
三好　人は非常にいゝ方なのですがね。人を愛しすぎるの

ですね。すると前後を忘れてしまふ傾があるのですね。妻を見ると自分が僞善者のやうな氣がすると、よく先生は云つてゐますよ。又何かかけてゐるのではないかとも云つてゐます。瞬間々々に感情が全部的に働いて、統一や責任觀念に、少しよわい所があるのかと思ひますね。それに先生はあんまり放任主義で、留守が多すぎますね。

和尙　悪い人ではありません。愛嬌のある、性質の溫和しい、あゝ云ふ稼業の人としては珍らしく出來のいゝ方です。

三好　中々綺麗ぢやありませんか。

和尙　わざとキタナイと云つて見たのですよ。

三好　先生と昨晩ねながらいろ〳〵話しましたが、もう女のことにはすつかり卒業して、ともかく碁打ちとして立つた以上は、その方に全力をつくして見たいと云つておいででしたよ。

和尙　運命は何處に待ちぶせしてゐるかわからないものですよ。昨日私か運命と碁をする男ありなぞとかゝされた時、吉峰さんはあんな女がやつてくるとは思はなかつたでせう。

三好　今、先生は運命と碁を打つてゐるわけですかね。

和尙　まあ、さうでせう。

三好　かつでせうか、まけるでせうか。

和尙　私なら負けますね。しかし負けるが勝ちと云ふこともありますからね。

三好　先生は自分は女に好かれない質なので大いに助かる、と昨晩云つてゐましたよ。女に好かれては自分程もろい人間もないだらうからなーと云つてゐましたよ。

和尙　しかし吉峰さんは安心ですよ。

三好　私もさう思ひますよ。

和尙　勝つて負ける人と、負けて勝つ人とがありますが、吉峰さんは負けて勝つたちですね。

三好　碁の方では中々負けませんよ。

和尙　しかし運命との碁では負ける事が多いやうですね。私なんかは運命に見はなされて負けたくとも負けられないと云ふ人間ですね。

三好　私なんかもまあさう云ふ處ですね。

（玉菊登場。）

玉菊　まだ碁ですか。先生が三好さんに來てくれと云つてゐましたよ。

三好　さうですか。（退場）

和尙　玉菊！

（玉菊も行かうとする。）

玉菊　はい。

和尚　そつちの勝負はどうだつた。

玉菊　勝負なんかしませんわ。荷物をつくるお手つだひをしただけ。だけどあの方は本當にいゝ方で、淋しい方ね。私はあんな人のいゝ方を知りませんわ。

和尚　それで矢張り今晩たつつて云つてゐたかい。

玉菊　えゝ、今晩はどうしても歸るとおつしやつていらしつてよ。

和尚　さうかい。

玉菊　他にもう御用は御座いませんの。

和尚　他に用はないよ。

玉菊　それでは一寸お手つだひして來ますわ。

和尚　手つだひしておいで。

（玉菊退場。間もなく吉峰登場。）

吉峰　和尚さん。あなたはひどい人ですね。

和尚　どうしてです。

吉峰　あんな女に逢はせるのは罪ですよ。

和尚　私だつてあなたに逢はしたくはなかつたのですが。當人が逢ひたいと云ふのですからね。

吉峰　私はこの二三日實に平和ないゝ氣持でゐたので、自分で感心してゐたのです。處があなたがあの人に逢はせたので。

和尚　まあ、私を恨むのはよした方がいゝでせう。そしてあなたは私に御禮をおつしやる方が本當かも知れませんよ。

吉峰　どうしてゞす。

和尚　ながい目で見ていらつしやい。あなたは今はおちついてゐますが、家に歸つたらどうですかね。おちついてゐられますかね。その時、あなたは玉菊を知つたことをよろこぶでせう。

吉峰　私は女を斷ちたく思つてゐたのです。

和尚　あなたに女が平氣で斷てますかね。そして一人の女が好きになつたからと云つて別に、仕事の邪魔にはなりませんよ。

吉峰　それならなぜあなたは女を斷つていらつしやるのです。

和尚　私は好んで斷つてゐるわけではないのですよ。好きな女に好かれないだけの話ですよ。どつちだつて大したことではありませんからね。好かれたくつても好かれなければそれ迄ですよ。あなたのやうに、好かれて困るなぞと云ふのは少し卑怯ですね。それにあなたなんか、さう云つては失禮だが、女に好かれるなんて滅多にないことですから、うろたへるのも尤もですが、千載の一遇の不平を云ふなんて云ふのは、運命と碁をする男とも見えませんね。本當の碁ではあなたの足もとにも及ばないが、

運命との碁なら私の方が上手なやうですね。少くも心のなかでは内々よろこんでゐながら、先入主で恐れて見る手なんか、うまいとは云へませんよ。

吉峰　悟つて見ればそんな處ですかね。しかし私はあつさり出來ない質ですからね。

和尙　いゝぢやありませんか。玉菊はあなたにほれてゐるのですからね。

吉峰　どうもそんなことは考へられませんよ。

和尙　私だつて不思議な現象だとは思つてゐますが、思案の他ですから仕方がありませんよ。それともあなたの方で玉菊をお嫌ひなら、それは又不思議な現象ですが玉菊に思ひ切らせるより他はありませんが、あなたもいゝ齡して居るのですから、本音をはいて、成佛した方がいゝやうですよ。私は別におすゝめはしないが、本心をいつはつて生きてゐる人間を見るのははがゆいのでつい口を出すのですが、自分より下手な碁打ちの石のうち方が氣になるやうなもので、默つてゐる方が骨が折れますよ。私があなただつたら、今日は東京へは歸りませんね。

吉峰　あんまり不意ですから、私は考へて見ませう。

和尙　一週間も坐禪をなさつたらわかるでせう。その内に玉菊の方の心がかはらないとも限りませんよ。人は碁石とはちがひますから。

（玉菊登場。）

玉菊　（和尙に）お客さまです。應接間にお通ししました。

和尙　さうですか。（退場）

玉菊　あなたは決心がおつきになつて。

吉峰　あなたの來かたがあんまり不意なので。

玉菊　私だつて昨晩までは何にも考へてゐませんでした。昨晩皆さんの話を伺つてゐる中に、不意に私を救つて下さる方はあなたより他にないと思つたのです。

吉峰　私も自分を救つてくれる女を一人私かに求めてはゐたのです。しかしそれはあまり蟲がよすぎるのです。

玉菊　まあ、話して見て下さい。

吉峰　笑はないで下さい。私は自分の心が淋しすぎる時、自分の事を思つてゐてくれる女の人のゐてくれることをのぞむのです。私が晴の勝負をする時、私のために祈つてくれる女です。それも誰も氣がつかない處で。

玉菊　そんなことならよろこんでいたします。

吉峰　それから私は、その女が私より他の男のことは思はないことです。いつも私のことを思つてゐてくれることです。

玉菊　それは私には出來ると思ひます。

吉峰　私がいつ不意に歸つても、安心して雨戸があけられることです。

玉菊　そんなことはあたりまいと思ひます。
吉峰　それから、私の妻に同情し、姉のやうに妻を愛してくれることです。
玉菊　奥さまの方さへ、御承知なら出來ると思ひます。
吉峰　それから生活を出來るだけ質素にして、私の仕事を愛し、私の歸つてくるのを靜かに待つてゐてくれる人です。そしていつもは快活で、隣りの人たちと平和につきあつてゆける人でず。私の重荷にならないで、私の仕事本位の生活をゆるしてくれて、私の幸福を靜かに望んでくれる人です。私はその人の住んでゐる家と、その人の生活を想像することで自分の心が淸まり、行ひがつゝしみたくなり、そして自分の仕事に專心になれることです。そして私が時たま歸つて來ても不平も、嫉妬も起さない人です。私はそんな女のゐることを望むことが、いゝことか、わるいことか知らないのですが、そんな人がゐてくれたら、自分はどんなに、心丈夫であり、淋しい時、慰められるだらうと思つてゐるのです。しかし私はあまりに自分本位なので、その望みを笑ふのです。
玉菊　あなたの お望みは 私には 大へんうれしく思はれます。私は又母や弟と靜かに生活して、何か小さい仕事をしながら、旅に出てゐる夫の歸りを待つてゐる自分の姿をよく思ひました。私はこの町はづれの川岸に、小さい家をたてゝ其處で、小さい店でももつてあなたのおいでを氣ながに待つてゐたく思ひます。私は人を待つのにはなれてをります。
吉峰　店を出すのにはどの位ゐかゝるでせう。
玉菊　その御心配は御無用です。私は金は持つてもゐますし、もらふ金もありますから。その方は私に任せていただきたいのです。たゞ私は時々、月に一度位ゐ、來ていたゞければうれしいのです。
吉峰　それはくるなと云つても來ますが、私はなんだか話がよすぎて信じられないのです。
（和尙、三好と隣室から登場。）
和尙　吉峰さん。そのことは御安心なさい。玉菊は有名な男ぎらひの、堅人なのですから、旦那大事にすることは有名なのです。たゞいけないのはかたすぎるのと、なまざとりのへらず口で私をよわらすことを自慢にしてゐる點たけです。
三好　先生、私は今日は一人で歸ることにしますよ。察しがよすぎることを不快に思はれるかも知れませんが、私達は先生をよろこばしたいのですよ。
吉峰　よろこばしてもらふ資格もないが、もう僕は他にとる道もなくなつたから、運命に導かれる處まで行つて見るよ。

和尚　玉菊、お前もうれしいだらう。
玉菊　私も之で、身がおちつきましたわ。
（小僧登場。）
小僧　吉峰さん電報。
吉峰　電報？　なんだらう。電報と云ふとぞつとする。（あけて見る）よし子病氣すぐ歸つて下さい。困つたな。エキリぢやないかね。
三好　大丈夫でせう。
玉菊　それは御心配ね。すぐお歸りになつたらいゝでせう。
吉峰　それではすぐ歸りますよ。そして病氣がなほつたらすぐ又來ますよ。なんだか運命に罰をうけたやうな氣がする。
和尚　大丈夫そんなことはないよ。運命はそんなに氣の小さいものでも、神經過敏なものでもない。
吉峰　もし死なれでもしたら。
三好　大丈夫と思ひますね。一寸した御病氣たと思ひますね。たゞあんまり芳子さんは先生に逢ひたがつていらつしたから。
玉菊　本當に早く行つてお上げなさいまし、そしておなほりになつたらすぐ歸つて來て頂戴。
吉峰　きつと歸つて來ます。それでは大急ぎで支度をしよう。大したことはないだらうね。あなたもなほるやうに祈つてゐて下さい。
玉菊　えゝ、一生懸命に祈りますわ。
（和尚の他皆出てゆく。）

――幕――

第五幕

三好の家。森村と三好話をしてゐる。

森村　昨日先生の處へ行つたが隨分元氣だつた。先生のあんな元氣なのを見たのは初めてだらう。
三好　さうだらう。先生もこの頃は大得意さ。何しろ、非常な美人が先生にほれたのだからね。
森村　さうかね。そんな珍談があるとは知らなかつた。
三好　君はまだ知らなかつたのか、先生から何とも話がなかつたのか。
森村　なかつた。僕は先生はお孃さんの病氣がなほつたので元氣なのかと思つてゐた。
三好　それもよろこびにはちがひないだらうが、二重のよろこびなのだ。
森村　さうか。
三好　旅行するやうな話はなかつたかね。
森村　あつたよ。四五日の内に又旅行すると云つてゐた。

三好　さうだらう。先生はこの頃少しのぼせてゐるのだよ。無理もない、五十近くなつて若い美人に惚れられたのだからね。先生にとつては未曾有のことだからね。空前絶後と云つてもいゝよ。それが中々の美人で、碁好きな、藝者なのだから、おどろくだらう。そして神妙に先生の幸福を祈つてゐると云ふのだから大したものさ。

森村　なんだか話が少しうますぎて不安だね。

三好　だがあの女なら信用がおけると思ふよ。藝者にはちがひないが、おちついた女だからね。それに先生の泊つてゐた寺の和尚さんが中々ひらけた面白い人で、それがその女を保證してゐるのだからね。

森村　さうかね。道理で先生は珍らしく快活なのだね。女の力つてひどいものだね。君はその女に逢つたのだね。

三好　あつたよ。先生と一緒に、そして僕も感心した一人だよ。あんな町にあんな和尚や、藝者がゐるのは不思議だね。もつともあの地方は美人の多い處ださうだがね。

森村　先生も隨分淋しい時を過して來たのだから、今度のことがうまくゆくといゝね。

三好　うまくゆくだらうと思ふね。女もよろこんでゐた。そしてそれはうそではなささうだつた。

森村　それはよかつたね。

三好　先生も初めは不安に思つてゐたが、その內すつかりのぼせてしまつて、面白かつたよ。あなたのやうな女が何處かにゐてくれる事を夢みて居たが、本當にこの世で逢へるとは思はなかつたなぞと御世辭を云つてゐた。

森村　中々先生も隅におけないね。あんな顏して。

三好　その前まではもう自分は一生獨身でゐるつもりだなぞと云つてゐたのだから、可笑しなものだね。

森村　奧さんは知つてゐるのかね。

三好　反つてそんな人が居てくれるといゝと思つてゐたと云ふ話だよ。

森村　さうかね。尤も奧さんも上岡のことは忘れるわけにもゆかないだらうからね。

三好　先生も、之で上岡とも氣らくに逢へる。あいつは中中有望ないゝ人間だ、なんて云つてゐたよ。

森村　そりや、上岡は人は珍らしくいゝね。それに腕だつてあるよ。あいつは少くもへんに憎めない奴だ。

三好　何しろ皆、世間的に云ふと少し足りない人間に屬してゐるからね。正直すぎると云ふか、赤坊すぎると云ふか、ともかく惡る氣のない連中だから、憎みやうがない。困つたものではあるが、しかし今度のことで歪なりに萬事よくいつたので僕はよろこんでゐるよ。

森村　久しぶりに碁をやらうか。

三好　やつてもいゝね。

（三好碁盤をひきよせる。森村先手で打ち始める。三好の妻登場。）

妻　かう云ふ坊さんが來て、あなたに一寸お目にかゝりたいとおつしやいますが。

三好　（名刺を見）さうか。一寸待つてくれ給へ。さつき話した和尚が來たのだよ。何の用か知らん。

（三好夫婦退場。まもなく三好和尚をつれて登場。）

三好　よく來てくれましたね。

（三好の妻座蒲團をもつて來て。）

妻　どうぞお敷きになつて。

和尚　ありがたう。それでは失禮します。

三好　僕の妻です。

和尚　初めまして。

三好　この方は森村君で吉峰先生の僕と兄弟弟子で、至つて氣らくな友達なのです。

和尚　初めまして。

森村　今おうはさしてをりました。

和尚　さうですか。

三好　今度はどうも先生のことでいろ／＼。

和尚　三好さん。それで實は來たのですがね。大變困つたことが出來てしまつて、私はどうしていゝかわからないので御相談に上つたのですが。

三好　どうしたのです。

和尚　あの玉菊ですね。何にもかもこゝでお話していゝのでせう。

三好　えゝ、どうぞ。

和尚　あいつはひどい奴で、すつかり昨日は腹を立てましたよ。

三好　どうしたのです。

和尚　まあ順を追うてお話すると。昨日吉峰さんからお手紙を戴いたのです。大へん氣持のいゝ手紙で私はすつかりよろこんだのです。そして玉菊への手紙が同封してあつたので私は大急ぎで、玉菊をよろこばしてやらうと思つて行つた處が、玉菊がもう別れてゐるはずの旦那が其處に居るのですよ。そして私を見ると大笑ひして、玉菊の計略にすつかりかゝつてしまひましたよと云ふのですよ。何のことかわからないので、聞いて見たら、玉菊から旦那にわかれ話をもち出したら、旦那が今更に玉菊に未練が出てしまつて、旦那が平あやまりにあやまつてやつと玉菊の御機嫌がなほつたと云ふのです。私は隨分人を馬鹿にするにも程があると思つて、玉菊とさし向ひで逢はしてくれと云ひましたら、玉菊は、和尚さんにはすみませんが、私はあの時は本氣に吉峰さんのお世話に一生なるつもりでしたが、今はもうそんな氣は少しもない

のです。夢がさめたやうなものです。とかう云ふのですから、私も腹が立つて、思はず玉菊を打たうとしましたが、自分の頭の手前ついこらへて家をとび出して、思はず泣きましたね。私は自分が失戀しても笑つてすませるだけの修業はつんでゐたのですが、今度だけは私はすつかり參つてしまひました。私は本當に、吉峰さんになんとおわびしていゝのかわからなくなりました。吉峰さんからあんまりよろこんだ手紙をいたゞいたあとなのでね。

三好　それは本當にひどすぎますね。玉菊つてそんな人とも見えませんでしたがね。

和尙　私もそんな女とは夢にも思はなかつたのです。尤も私は少し女にあまい方かも知れませんがね。それに今だから正直に云ひますが、私はあの女にほれたことがあるので、なほ買ひかぶつたかも知れません。しかし今になつて玉菊を買ひかぶつてゐたでは吉峰さんにすみませんからね。私が餘計なことを云つたのがよくないので、私は吉峰さんに顏をあはせる資格もないやうに思ふのです。吉峰さんの手紙では四五日の內に私の處へいらつしやるやうにかいてあつたので、ともかく事實をお知らせするより仕方がないのでやつて來たのですが、どうしたらよろしいかね。私は吉峰さんに手紙をかいて持つては來たのですがね。手紙だけではすまないので、あやまりに來たのです。

三好　それは大へんでしたね。しかし今も森村君とも話してゐたのですが、先生はそれは玉菊に逢ふのをたのしみにしていらつしたのですからね。隨分およわりになると思ひますね。

和尙　御尤もです。私もこんなことにならうとは夢にも思はなかつたのです。どうも私の一生のしくぢりで、何とも申しわけがないのです。

三好　さうおつしやれば僕だつて責任があります。あの電報さへ來なかつたら、萬事よくいつてゐたかも知れませんね。

和尙　それも今となつてはわかりません。玉菊が旦那を愛してゐるのは本當らしいのですから、旦那の方から未練が起られては一寸困るのですが、その方は大丈夫のやうなことを玉菊が云ふので、尤も吉峰さんの御手紙がもう四五日早かつたら、どうにかならないまでも、玉菊はもつと責任を感じたらうと思ひますがね。

（三好の妻登場。）

妻　先生から御電話で、之から御伺ひしていゝかとおつしやつておいでゝす。

三好　來て戴くことにしませうね。どうせお知らせしなけ

ればならないのですからね。先生のあの話が駄目になつたさうだよ。

妻　まあ、それは本當、お氣の毒ですわね。それならお待ちしてをりますと御返事しておきますよ。

三好　あゝ。

（三好の妻退場。）

和尙　私は吉峰さんが來たら、となりの室にゐさしてもらひます。そしてこの手紙を吉峰さんにお目にかけた上で、お逢ひする方がよければお逢ひしたく思ひます。かう云ふことは手紙の方がいゝと思ひますからね。手紙はこんな風にかいたのですがね。一つ開いて戴きますかね。實はこの手紙を出さうと思つてかいたのですが、書いて見たらこつちへ自分で來なければ、わるいやうな氣がしたのです。それではよんで見ますから。

三好　どうぞ。

和尙（手紙をよむ）「前略、用事のみ申します。實はこの手紙はどうかいてよろしきや、私にはすつかりわからないのです、どうお詫びしていゝやら、私にはわからないので。實はお手紙を戴き、大よろこびいたし、早速玉菊の處へよろこばしに參りましたが、私はすつかりおどろき、うろたへ、腹を立て、どうしていゝかわからなくなり、あなたになんとお詫びしていゝかわからなくなり、今更に自分の不明を悔いてをりますが、事實はいかんともしがたく、どう申していゝのかわかり申さず、生れて始めて今度はまゐりました。一言で云ふと玉菊の旦那が玉菊に急に未練を起し、玉菊の要求を全部入れたので、玉菊はすまして旦那の手に歸り、私の處には何のさたもなく、平氣な顏してをりました。私は思はず玉菊をぶちたくなりましたが、坊主の手前やつとこらへました。あんなにニブイ女とは思はず、又そんなに無責任な女と思はなかつたのが、私の一生のをちどで、何とも申しわけがなく、こんなに心ぐるしい氣持は何年と味はつたことなく、申しわけする言葉も、おわびする言葉もなく、偏へに恐縮し、あやまります。あなたの御氣持がわかるので、自分の無責任を深く恥ぢてゐます。こんな恥辱を心の底から感じたことは今迄にないやうに思ひます。さすがの呑氣ものも、今度と云ふ今度は、自分の出しやばりすぎたことを後悔して、本當に穴に入りたい氣もちでゐます。右御返事迄、頓首再拜。」どうも他にかきやうがないのです。隨分吉峰さんをおよろこばしすることが出來ると思つたのが、私の一生のしくじりでした。そして他人の責任まで持つた罪は助かりやうがないと思ひます。

三好　しかしあの場合、あなたがすゝめないだつて結果は同じことになつたでせう。あんまりその點は氣になさら

ないでいゝでせう。

和尚　それでも吉峰さんは私を信用し切つてゐて下さるので。

三好　しかしやむを得ません。すんだことはすんだことです。先生があまりおまゐりにならないことを願ふ許りです。

森村　本當に御氣の毒な先生だね。

三好　先生はまゐり切る方とは思はないが、今度のおよろこび方が、異樣なだけ、私は氣になるのです。

和尚　私がいけなかつたのです。柄になく女に同情したり、吉峰さんに同情したり、始終お逢ひ出來て碁を教へて戴けるなぞと思つたので、すまないことをしました。

森村　本當に先生は女運のわるい方だね。

和尚　ともかく私はこの手紙をあなたにお任せしておきますから、いゝやうに願ひます。私は一寸散歩して來ます。隣りの室でぬすみ聞きするのもいやですから、吉峰さんは通を出てどつちからいらつしやいます。

三好　右の方からいらつしやいます。

和尚　それでは卑怯ですが、一寸散歩して來ます。

三好　どうぞ。

（和尚、三好退場、三好夫婦まもなく登場。）

妻　どうも困りましたね。

三好　厄介なことが出來たものだ、だが仕方がない。

森村　あんまり話がうますぎると思つたよ。

三好　だがあの場合、勢ひがさう來てゐたからね。そして女の云ふことは噓ではなかつたのだからね。それに女のことだと、つい理想化したくなるからね。それにへんに調子がよかつたのだから。

妻　男の方はすぐ自惚れになるから、いけないのですね。

三好　さあ、さつきの勝負でもやつて居よう。その方が先生の顏を見ずに話が出來るからね。

森村　それなら始めよう。

（碁を始める。妻退場。）

三好　和尚もすつかり閉口してゐたね。

森村　人のよさゝうな人だね。

三好　一寸調子のりの、野狐禪と云ふ處があるが、人はわるくない。先生こそいゝ面の皮だ。しかし參り切つては可哀さうだ。

森村　先生もいゝ齡して、女にさう惚れられると思ふのがまちがひだね。

三好　それは、妻の言葉ではないが、誰でも自惚れと云ふものはあるものだからね。先生だつて碁では日本一のつもりだからね。それにあの顏にも、滿ざら自信がなくもないのだらう。心ある女が見ると美しく見える顏だ位ゐ

にね。
森村　だがあの顏はわるくはないね。
三好　男にはすかれて、女には好かれない顏だね。たまには例外もあるものと思つたが、矢張り駄目たつたのは、お氣の毒だね。
（妻登場。）
妻　先生がいらつしてよ。
三好　さうか。
（吉峰登場。）
吉峰　中々勉強だね。
三好　えゝ、久しぶりにやつて見たのですが、相手が相手で本氣にはなれません。
吉峰　さうかね。森村は少しは強くなつたかね。
森村　大いに強くなりませんね。
吉峰　強くなつたのかと思つたら、ならないのか。
森村　二月や三月でめき〳〵進む齡は通りすぎましたね。
吉峰　今からそれでは困るね。二月か三月たてば、君の齡ならまだ進んでいゝはずだが。
三好　先生、森村はたしかにすゝみましたよ。自分では氣がつかないでせうが。
吉峰　それは大いに有望だね。まあしつかりやつてもらはなければね。

三好　お孃さんもすつかりおよろしくなつてよう御座いましたね。
吉峰　本當に一時はどうなるかと思つたよ。瀧子とよく泣いたものだが、よくなりだしたら、めき〳〵とよくなつた。僕も今度は神樣と云ふものはこの世にあるものだと思つたよ。祈りと云ふものは馬鹿に出來ないと思つたよ。
三好　本當によう御座いました。
吉峰　僕も死なれたらどうしようかと思つた。いぢらしくつて、僕が歸つた時はそれはよろこんでくれて、少しも僕をはなさないのだから、いぢらしくて困つた。
三好　さうでせうね。あなたがいらつしやらないと、おうちも火の消えたやうなものですからね。
吉峰　それで僕は今晩、あすこへ行かうと思つてゐるのだよ。今度は一寸行つてすぐ歸つてくるつもりだがね。又留守のことは萬事君にたのむよ。僕は君と和尙さんには何と云つていゝかわからない程感謝してゐるよ。女一人でこんなにまで氣持がかはるものかと今更におどろく。淋しさなんか、どこかへ行つて、うれしい空想許りが、起るのには自分ながら愛想がつきるね。齡甲斐もないと思ふが、この道たけは別だと思つたよ。君は何か和尙さんにことづけはないかね。
三好　和尙さんはさつき來ましたよ。

吉峰　さうか、和尙さんが來たのか、それでどうした。なぜ君はそのことを云はなかつた。
三好　つい碁に夢中になつてゐましたから。それに和尙さんはなんだかすつかり參つてゐましたよ。
吉峰　どうしてだい。あの和尙さんでも參ることがあるのかね。寺でもおひだされたのかね。
三好　そんなことではないのです。あなたにすまない、實にすまない、お逢ひする力もないと云つて、この手紙をあなたにも見せてくれとおつしやつてでした。
吉峰　玉菊のことを何か話してゐたか。
三好　えゝ。
吉峰　まさか心がはりしたと云ふのではないだらうね。もしそんなことがあつたら。（手紙をあけてだまつてよむ）
三好　和尙さんは、なんだか大變すまながつてゐました。
（吉峰、よみつゝ段々泣き顏になる。）
吉峰　三好、この手紙を見てくれ、俺はどうしたらいゝのだ。之でもぢつとして辛抱しなければならないのか。俺の內の力がしなびてゆくやうだ。
三好　御尤もです。御尤もです。
吉峰　だから俺は云はないことではなかつた。俺はあの和尙に發人にされてしまつた。あの和尙とあの玉菊とがぐるになつて俺を發人にしてしまつた。このうらみと侮辱をはらしてやらないでは我慢が出來ない。今になつて、やむを得ない、あきらめろとはどの口から云はれるのだ。和尙がこゝにゐたら俺はなぐつてやる處だつたが。
（和尙登場。）
和尙　御尤もです。どうぞ思ふ存分なぐつて下さい。
吉峰　よしなぐれないで、（なぐらうとしてやめる）和尙さん、あなたは本當にあの女を信じてゐたのですか。
和尙　えゝ、恥かしい話ですが、信じてゐました。私はあの女の不幸を同情しすぎたのです。そしてあの女をもすくつてやりたかつたのです。私もあの女を愛してはゐたのですから。つい買ひかぶりすぎたのです。しかし今になつて云ひわけはしません。どうか思ふ存分、ぶつて下さい。あなたの信用をうら切つたのですから。
吉峰　打つてあの人がかへつてくるならね。私はあなたを信用して安心してゐたのです。こんな目にあはされると思ひませんでしたから。
和尙　御尤もです。御尤もです。
吉峰　おかげで私は極樂から地獄におちましたよ。私は馬鹿でした。他人を信じ切るなんてね。どうせ他人は他人なのですからね。
和尙　馬鹿つ！（吉峰をなぐる）わからずや。
三好　あなたは何をするのですか。氣でも狂つたのです

か。（和尚が又なぐらうとするのをあわてゝとめる）

（吉峰と和尚お互ひに見合ふ、和尚先づ大笑。殆んど同時に吉峰も大笑。）

——幕——

（二四、一二、九）

生命の王（一幕）

登場人物

いろ／＼。澤山。

黒幕の前。作者登場。

作者　作者が出しやばると云ふのは甚だ面白くないことで御座いますが、舞臺が出來上るのにまだ十分位ゐかゝるさうで、もう時間が來てをります。それで十分程しやべらして戴きます。私は芝居をかくのが道樂ですが、舞臺の規則なぞと云ふものはまるで知らないので、たゞ面白ければいゝと思つてゐるのです。しかし面白いものをかいて皆さんと一緒になつて夢中になつてよろこぶと云ふことは中々むづかしいことで、私もさう云ふものをいつかかきたいと思つて十何年心がけてゐるのですが、どうもうまくかけないのです。今度のものは、自分では少しは面白いかと思つてゐるのですが、あてになりません。皆さんに見ていたゞいてわるい處はなほし、そして一つ面白い芝居をつくり上げて、皆さんと一緒によろこびたいと思つてゐるのです。もし私のが、ものになつてをりませんでしたら、どうかどなたでもよろしいから一つうんと面白いものをつくつて、日本人は勿論、全世界の人間のこらずを、よろこばすやうなものをかいて戴きたく思ひます。私の力は足りないかも知れませんが、皆さんの力を私は見かぎりたくないのです。もうぢき始めます。少し馬鹿々々しい出鱈目な處もありますが、しばらく御辛抱を願ひます。最後まで辛抱づよく見て下さる方には何んのためにこんなものをかいたか、おわかりになるだらうと思ひます。それでもおわかりになりませんでしたら、家へおかへりになつて三日程お考へ下さるとわかるだらうと思ひます。皆さまは賢い方ですから。（鈴がなる）それでは之から始めます。

（舞臺眞暗。）

聲　太陽！　出て來い。

太陽　はーい。

（急にあかるくなり、太陽赤の衣を着、黑の衣の星を五六人つれて登場。皆男。）

太陽　私は太陽であります。本當の太陽には耳も言葉もありません。たゞ恐ろしいうなり聲だけであります。人間には聞えないのは仕合せで御座います。私は本當の太陽ではありません。本當の太陽がこんな處に出て來ました

ら、皆さんは燒け死んでしまひます。この立派な劇場もやけてしまひます。第一地球があめのやうになつたり、がすのやうになつたりして、とても人間なぞは歩くことは出來ません。私が本當の太陽でない事はお互ひに仕合せで御座います。私は一人の詩人の空想にあらはれた太陽にすぎないのであります。（まうけの席につく）

聲　月！　出て來い。

月　はーい。

（月、白い或は支那風の衣を着、うす赤、水色、白の衣を着た星を五六人つれて登場。皆、女の方よろしからん。）

月　私は月で御座います。本當の月では御座いません。本當の月はいくら小さくも、この舞臺の上には入り切れません。それで假りに私が月になつたのであります。私はなりたくはなかつたのですが、是非なれと云ふのでなつたのであります。私が月らしくなくともどうか私を攻撃しないで下さい、罪は私にはないことに約束して參つたのです。（扇で顔をあふぎながらまうけの席につく）

太陽　お月さん。

月　なんです。太陽さん。

太陽　いゝ處でお逢ひしました。

月　本當にお久しぶりですね。お變りはありませんか。

太陽　えゝ、相變らずです。今日は久しぶりに地球の話をしませう。

月　えゝ。いたしませう。

太陽　地球と云ふ星は、私の祕藏つ子で、あれを見てゐると退屈しません。

月　本當に地球は面白い星ですね。私もあれは大好きです。見れば見る程面白い。殊に夜の地球は、私大好きです。

太陽　夜の地球。私は晝の地球きり見たことはないのですが、夜の地球なぞと云ふものがあるのですか。

月　ありますとも。夜の地球は實に面白いものです。靜かで、美しくつて、神祕で、まるで一色に見えますが、其處に又夢のやうな美しさがあります。そして人間達はごく少しの他は皆、深い眠りにおちてゐます。

太陽　それは本當ですか。

月　本當ですとも。そして町々にはあかりがとぼり、小さい星のやうにそのひかりが弱くかゞやくのを見ると、人間て可愛らしいものに思ひますね。

太陽　へー。私は地球を出來た時から見てゐますが、そんな世界を見たことはありません。

月　それはさうです。あなたが地球を見ると地球は晝になるのです。そして、いろ〳〵のあかりは消えてしまふのです。そして人間達は起きて働き出すのです。

太陽　人間てよく働くものですね。
月　なまけてゐるものも隨分ありますよ。
太陽　だが働いてゐるものゝ方が多いでせう。働かなければ食へないわけですからね。
月　いや働かないでも、金さへあれば食つてゆけます。
太陽　その金は働かなければ得られないのでせう。
月　いや働いて得る金はごく少しですよ。何にかわけのわからないことをしてゐるうちに金をうん〳〵ためる人もありますよ。
太陽　さうですかね。だがよく働く動物なのには感心しますよ。尤も働かないで食つてゆくには數が多すぎますがね。
月　何しろ人間て、へんなものですね。
太陽　あなたは人間は好きですか。
月　すきです。隨分いやな奴も、馬鹿な奴も、ゐますがね。それ以上殺しあつたり、同じ人間を隨分ひどい目にあはす奴もゐて、人間は今にどうなるかと思ふ時もありますが。大體はすきです。あなたはどうですか。
太陽　僕だつてすきですよ。あいつの生命が全部的に生きたら、すばらしいことをやりますよ。見ていらつしやい。今に人間の內の生命が全部生きる時が來ますからね。
月　そんな時が來たら人間は一人のこらず、賢くなつて、馬鹿な眞似や、理窟にあはないことはなくなりますかね。
太陽　それはなくなりますよ。
月　一寸さうはなりさうもありませんね。
太陽　いやになりますよ。もう一寸の間ですよ。
月　まだ隨分さうなるのには間があるでせう。
太陽　たか〴〵二三千年もたてば、立派に人間の生命が生き出すでせう。
月　さうでせうかね。
太陽　僕はさう思つてゐるのです。時に久しぶりにあなたのをどりを見たいものですね。
月　いや、お目にかけるやうなものではありません。
太陽　そんなことを云はずに見せて下さい。
月　それではお目にかけますかね。
太陽　どうぞ。
（月。お作の星をつれてをどる。）
太陽　うまい、うまい。
（詩人滑稽な風采、登場。月雛ひなはろ。）
太陽　相變らず上手ですね。
月　どうしまして。
太陽　お月さん。そこにゐる詩人は僕が可愛がつてゐる詩人です。
月　さうですか。初めて。

詩人　（最敬禮なして）初めまして。
月　とんでもない、をどりをお見せしました。
詩人　いえ、いえ。實に、實にお立派です。
太陽　詩人に酒をやれ。黃金の杯を持つて來い。
星一　はい。
太陽　詩人、いゝ處に來た。この頃はどうだ。
詩人　相變らず貧乏で困つてをります。
太陽　貧乏は詩人につきものださうぢやないか。
詩人　つきものでもどうも困ります。空氣を食つても生きてはをれませんから。
太陽　人間てあはれなものだな。食へないのか。
詩人　どうにか食つてはをりますが。
太陽　それならいゝぢやないか。
詩人　どうも時々困るのです。さつきも隨分困つてゐたのです。しかしいくら考へたつて金はとれないので、あなた方のことを夢見てゐたのです。その內金のことは忘れてしまひましたが、どうも內にゐると、妻に泣きごとを云はれるので閉口し切つてゐるのです。
太陽　困つた奴だな。
月　お子さんは何人あるのですか。
詩人　五人御座います。
月　それぢや大へんですね。
詩人　本當に大へんです。子供の可愛いことは非常ですが。
月　詩ぢや金はとれないのですか。
詩人　とれません。
太陽　詩は食へないものかね。俺の祕藏つ子も食へないぢや困るだらう。
詩人　困ります。どうにかならないものですかね。
太陽　金とは、俺は緣がないからな。
（星一、黃金の杯に酒を入れて持つてくる。）
詩人　ありがたう御座います。（のみほす）
太陽　どうだ。
詩人　すつかりいゝ氣持になつて來ました。
太陽　滿足か。
詩人　この上金があつたら滿足以上ですが。
太陽　困つた奴だな。お月さんあなたは金をもつてゐますか。
月　いやそんなものは持つてゐません。
太陽　誰か金をもつてゐる奴はゐるか。（間）誰もないのか。お前はどうだ。
星二　もつてをりません。
太陽　どうも仕方がないな。人間て餘計なものがいるものだな。そして他の人間は皆金をもつてゐるのか。
詩人　持つてゐるものも少しはゐますが、大部分は持つて

ゐません。
太陽　それで食へるのか。
詩人　金をとるために皆働いてゐるのです。
太陽　お前は働かないのか。
詩人　私は働きたくとも働けないのです。
太陽　どうして。
詩人　誰もやとつてはくれません。
太陽　やとふとはどう云ふことだ。
詩人　一寸說明が出來ません。
太陽　それではお前は人間に生れたことを後悔してゐるのか。
詩人　後悔はしません。しかし人間の世界がもう少しよくなつてくれたらと思ひます。
太陽　よくならないのか。人間は自分の世界を自分に都合よくつくる力があるはずだ。
詩人　しかし中々さううまくはゆきません。
太陽　働かずに食ひたいのか。
詩人　自分のしたい仕事をして、食つてゆけるやうにしたいのです。少くも一日に三四時間働けば、あとは自由をたのしめるやうにしたいのです。さうなれば實にうれしいのです。しかしいつのことですか。
太陽　人間は思つたより馬鹿なものだな。
詩人　馬鹿なやうで利口で、利口のやうで馬鹿です。愛想をつかして見ると中々いゝ方面をもつてゐます。しかし信用して見ると實に馬鹿な方面をもつてゐます。救はれないと時々思ひますが、しかし人間の內には自分を救ふ力がないことはないと思ふのです。
太陽　それはさうだ。人間はたしかに自分の力で自分を救ひ得る。
詩人　しかしいつのことですか。
太陽　あと二三千年だらう。
詩人　二三千年。隨分さきの話ですね。
太陽　なに二三千年なんか、またゝく間にくるよ。
詩人　さう早く來られては困りますよ。
太陽　どうして。
詩人　それでも私達はあと四五十年は生きられさうもありません。二三千年がすぐだつたら四五十年は一瞬間です。
太陽　それはさうだね。しかし人間にとつては四五十年はわりにながい年月だらう。
詩人　すぎて見れば一瞬間です。
太陽　お前は今いくつだ。
詩人　四十です。
太陽　生れて今迄一瞬間か。
詩人　一瞬間のやうでもあり、永遠に生きて來たやうな氣

もします。

太陽　それ見ろ。四十年は人間にとつて短い年ぢやない。

詩人　だが苦しんだあげく、まもなく死病にとつゝかれて苦しみぬいて死ぬことを考へるとあまりいゝ氣はしません。

太陽　それなら人間に生れたことは不服か。

詩人　不服に思つたつて仕方がありません。人間が苦情が云へるのは人間にたいしてだけです。しかし人生にはたしかによろこびもあります。生命が内にもえ上る時のよろこび、そのよろこびを味はふ時、私は滿足します。だが人間にはそれにもおとらず、悲しみが與へられ、又苦しみが與へられてをります。

太陽　悲しみや、苦しみ、僕にはそんな言葉の意味がわからないが。いやなものださうだな。

詩人　あなたは悲しみや、苦しみを知らないのですか。本當に。

太陽　知らないよ。誰か知つてゐるかね。お月さん、あなたは知つてゐますか。

月　知りません。

太陽　他のものたちはどうだ。

星達　知りません。

詩人　それでたいくつはなさらないのですか。

太陽　退屈なんか知らない。常に滿ち足りた心もちで生きてゐる。

詩人　涅槃の心もちですか。

太陽　まあ。さうだね。

詩人　何の心配もなく。

太陽　あたりまい。

詩人　死滅の恐怖もなく。

太陽　あたりまい。

詩人　生きてゐるよろこびだけを感じて。

太陽　それも意識せずに滿足してゐる。

詩人　うらやましいですね。

太陽　死ねばお前達も私達の仲間になる。

詩人　ですけど、私は死にたくないのです。

太陽　あはれな奴だ。

詩人　私は自殺するものをよろこびません。

太陽　誰も自殺しろとは云はない。

詩人　生きられるだけ生きること。それは人間らしいよろこびです。そして死ねばあなたたちの仲間入りを自づとする。それもわるくはありませんね。

太陽　わるくはないさ。

詩人　だがあなたには人間のことが本當にはおわかりにならないやうに。

太陽　それなら月にはわかるか。

詩人　お月さまも月のない暗夜のことは御存知ありません。

月　私の知らない世界、そんなものがあるのか。

詩人　あなたが地球を一番よく御らんになる時は、月夜の時です。

月　それはさうかも知れませんね。私も私の見た世界きり知らないのですね。

詩人　お日さまも、お月さまも自分の見られる世界きり御存知ありません。しかし私達人間も、又動物も植物も、あなた方が見て下さるので生きてゆけるのです。あなた方が見て下さらなければ私達は生きてはゐられないのです。

月　私なんか、何の力もないのです。

詩人　そんなことはありません。あなたも私達には大した力をもつておいでゝす。あなたが居て下さらなかつたらどんなにさびしいでせう。その上地球のいろ／＼のものにあなたの影響は實に澤山あります。お日さまにはおかなひにならなくつても。

月　さうですかね。あなたは嘘はつかないでせう。しかし、人間は、滿足して生きてゆけないものですかね。

詩人　悟つた人は滿足して生きてゐるさうですが、私達はいろ／＼の目にあふことで、いろ／＼の感じを抱きます。そして時には滿足もしますが、反對に時にはどうしていいかわからない悲しみや、とてもたへられない苦痛に壓倒されます。人間の神經は敏感すぎます。尤もそれで人間は生々してゐられるのですが、感じがにぶくなつたら人間は生々は出來ないでせう。

月　私達にはそんな氣持は、しつくりわかりません。

太陽　僕にもわからない。悲しいとか、痛いとか云ふのはどんなものかわからない。

月　どうしていゝかわからないとか、とても耐へられないとか云ふことも私にはわかりません。

太陽　俺にもわからない。

詩人　それはあなた方は完全に生きていらつしやるからです。當然、必然、自然の道を歩いていらつしやるからです。そして天の法則に背かずに生きていらつしやるからです。しかし下界に生きてゐるものはちがひます。

太陽　さうかな。どうちがふのだ。

詩人　彼等は運命に支配されますが、その運命は氣まぐれです。

太陽　運命が氣まぐれだ。運命は必然なものではないのか。

詩人　少くも我々の目から見た下界を支配してゐる運命は氣まぐれです。

太陽　それぢや困るだらう。

詩人　だから困るのです。

月　もし私達の運命が氣まぐれだつたらどうでせう。

太陽　星と星はたえずぶつかるだらう、そして宇宙は渾沌たるものになるだらう。

月　それでは下界は始終ごたごたしてゐるのでせうね。人間社會も。

詩人　さうです、人間は他の動物より智慧があるだけなほ關係が複雜になり、こんがらかり、なほお互ひに衝突しあふのです。

太陽　とても想像がつかないな。だが人間の内にある生命はお互ひに調和するやうに出來てゐるはずだ。

詩人　しかし其處まで目ざめてゐる人間は實に少いのです。大部分はでたらめな運命に支配されてゐるのです。

太陽　さうかな。人間のことは僕達にはわからないよ。

詩人　あなたたちの生活が私は實に羨やましいのです。あるがまゝに滿足していらつしやる、まよはない生活。

太陽　羨やましがられることもないが、僕達の生活には迷ひはない。

詩人　迷ひのない生活、私はそれをのぞんでゐるのです。

太陽　悟ればいゝのだらう。

詩人　だが中々悟れません。又悟り切りたくない所もあるのです。人間らしいよろこびが、私をひきつけるのです。

太陽　人間らしいよろこびとはどんなものだ。

詩人　一寸言葉では云へませんが、男女の愛とか、仕事をするよろこびとか、自分を完成さしてゆくよろこびや、自然に接するよろこびなど、又いくらでもあるでせう。

太陽　さうかね。俺は人間と云ふものをもつとよく研究して見たいのだ。一つ人間仲間をもう少しよんで來て、人間と云ふものはどんなものか、俺達に見せてくれないか。

詩人　それは中々むづかしいことです。人間は一人々々ちがつた性格と運命をもつてゐます。

太陽　いや、さう云ふくはしいことは知りたくはない。お月さんあなたも見たいでせう。

月　えゝ、是非もつと人間のことを知りたく思ひます。

詩人　それでは無理と思ひますが、人間の一端でもお目にかけませう。あとは察していたゞくことにして。

太陽　是非さうしてもらはう。

詩人　それでは私の友人に役者がゐますから、それ等をよび出して、一つ人間とはこんなものだと云ふ有樣を演じさせてお目にかけませう。しかしうまくゆけばよろしいがうまくゆかないかも知れません。

太陽　出來ないことをしろとは云はないよ。

詩人　それなら仲間をよんで來ます、そして私がかいた「人

間」と云ふ、ごくたわいないものをお目にかけませう。

太陽　それならお前の友達をよんで來てほしい。

詩人　承知しました。

太陽　おい、烏出て來い。

烏　はい。（三本足の烏登場）

太陽　この詩人をつれて車におのせして、下界へ行つて、この詩人の仲間を車にのせて來い。

烏　はい。

（詩人と烏退場。）

太陽　人間に生れなくつてよかつた。

月　本當ですね。人間に生れないのはよう御座いました。

太陽　氣まぐれの運命にひつぱり廻されて、あつちへぶつかり、こつちへぶつかりしてあげくの果、苦しみ死に〻、死んでしまふ。何が其處にとり柄があるのでせう。

月　それでも人間に生れたい人もあるのですね。

太陽　つい生れるのでせう。

月　それでも生れたことは後悔しないとあの人は云つてゐましたね。

太陽　後悔しないやうに、つくられてゐるのでせう。自然と云ふ奴はぬけ目のない奴ですからね。

月　自然は冷酷なものなのですか。親切なものなのですか。

太陽　どつちでもないのです。生命力にあふれてゐて、すき間があるとは、何んでも生かしたがるものなのです。そしてあとのことは知らないのです。死ぬ奴は勝手に死ね、苦しむ奴は苦しめ、生きる奴は生きろ、よろこぶ奴はよろこべ。とさう云ふ奴です。

月　苦しむものは氣の毒ですね。

太陽　あなたもちと人間かぶれしましたね。

月　人間て同情心の强いものですか。

太陽　呑氣な程度においては同情心をもつてゐるやうですよ。だが知れたものですね。しかし人間と云ふ奴は苦しんで平氣と云ふわけにはゆかないのですから、苦しんでゐる人間は、自分達を苦しめるものと、戰ふだけ戰つて、自分を幸福にしようとします。人間はそれで救はれると僕は思つてゐるのですよ。だが今の人間はまだ駄目でせう。

月　氣まぐれの運命に引つぱりまはされてはいくらたつても幸福にはなれないでせう。

太陽　人間が本當に賢くなり協力すれば、人間の運命は氣まぐれではなくなるでせう。人間の支配を運命がうけるやうになるでせう。僕は人間を買ひかぶつてゐるかも知れませんが、人間の素質の內にはそれだけの力があると思つてゐるのです。

月　それなら今の人間は賢くないのですか。

太陽　まだ人間の力が充分に生きてゐないのです。それで生きるのがやつとの人間が多いのです。又他人を利用して得をしようと云ふ人間が多すぎるのです。

月　ともかく人間と云ふものはおとなしい、臆病もののやうですが、一方隨分殘酷で、無情で、意地わるですね。

太陽　何しろまだ力が充分に生きないで、いぢけてゐるのです。そして小さい世界の内に入りこんでごたごたやつてゐるのです。時々見てゐて、人間程いやな奴はないと思ひますね。一思ひに殺してやつたらさつぱりするとね。しかし一人々々の心のなかを見てやると可愛さうにもなり、同情も出來るものです。平和に生きてゐる人間も多いやうですが、隨分氣の毒な人間もゐますから、憎むわけにはゆきません。

月　本當にさうです。私は時々人間が可哀さうになります。

（詩人、監督、男女俳優を十二三人つれて登場。大きな箱を星が二人でもつてくる。皆太陽と月に敬禮する。）

詩人　つれて參りました。

太陽　早かつた。（俳優達に）どうも御苦勞さん。

監督　お招きにあづかり光榮に存じます。

太陽　それでは早速、見せてもらはうか。

監督　畏こまりました。

詩人　舞臺は之ではせまいだらう。

監督　少しせまいね。

詩人　それでは誠に恐れ入りますが、もう少しおさがりを願ひます。

太陽　よしよし。

（太陽や月たち、あとに席をうつす。）

監督　それぢやすぐ始めることにしよう。

詩人　一寸衣裳をつけます間、お待ち下さい。

（俳優達箱をあけ各自自分の衣裳をとり出す。）

太陽　よしよし。

詩人　なんでもいゝから、どうせわかりはしないのだから、いゝ加減でいゝだらう。その着物のまゝでいゝだらう。

（皆大さわぎをやりながら着物をつける。）

監督　椅子を三つ程ほしいがね。

詩人　よしよし。椅子が三つ程ほしいさうです。

太陽　椅子を三つもつて來い。

星　はい。

（星、三人椅子をとりにゆき、赤くぬつた椅子をもつてくる。）

詩人　ありがたう、ありがたう、之でいゝか。

監督　結構々々。

（椅子を舞臺の眞なかに三つならべる。）

監督　自然はこゝに。

（自然。岩のやうな風をして頭から布をかぶり顔だけ出してゐる。指定された席につく。上手の椅子。）

監督　神様。どうぞこゝに。

（神様。中央の椅子に腰かける。）

監督　惡魔はこゝに。

（惡魔。下手の席につく。詩人出てお辭儀し。）

詩人　一寸說明さしてもらひます。こゝにをりますのは自然で御座います。自然と云ふものはどんな形をとつてあらはしていゝか、無形、無色、無味、しかも、あらゆるものを產み出す力をもつてゐるもの。形にあらはすのは無理ですが、かりにこれを自然といたします。次にをりますのが、神樣で御座います。神樣も見た方がありますかどうか。この神樣は人間界において想像されてをりま す神樣の姿によりました。次ぎにをりますのが、惡魔で御座います。之も私は見たわけではないのです。之も人間によつて想像された姿にいたしました。お日樣や、お月さまや、お星さまが御覽になつたらさぞ貧弱なものと御らんになるでせう。又人間と云ふものは、神樣も惡魔も人間の姿以外には考へられないことをあはれに思はれるかと思ひますが、大目に見てほしく思ひます。之からは各自、自分で自己紹介いたします。（お辭儀する）

自然　わしは自然ぢや。人間共はわしを冷酷なものと思ひをる。しかしわしは冷酷なものぢやない。わしはまだ完全ぢやないだけだ。わしのつくつたものにも既に完全になつたものがある。安全にならうとしてゐるものがある。完全になる見こみなく亡びゆくものもある。天上界もわしからうまれた。わしの法則に從つてすなほに生きて滿足してゐるものそれは天上界ぢや。太陽、月、星はわしにつくられたまゝで滿足してゐる。だが下界のものは、わしがつくつたにはちがひないが、彼等もわしの法則に從つてはゐるが、其處には極樂も地獄もある。平和も戰亂もある。生みの苦しみも、死の苦しみもある。下界では山水、岩石、彼等はわしにつくられたまゝで滿足してゐる。草木も決して自分の運命を嘆かない。動物に至つて、平和と生の喜びは苦痛と死の恐怖に倒されがちになる。しかし彼等はわしを批評しようとはしない。彼等はいかに慘酷な運命にやつけられて、なきさけぶとも運命を呪ひもせず、わしを呪ひもしない。そして神や惡魔をうみ出しもせず、運命の飜弄に甘じる。生意氣なのは人間ぢや。彼等はわしを輕蔑し、或るものはわしを罪のかたまりのやうに思ひ、わしに抵抗するのを善だと心得てゐる。彼等はわしのつくつた法則では甘じられないで、何か他のものをうみ出さうとしてゐる。そのくせわしがやつたよろこびだけは出來るだけぬすみとらうとする。

わしの子であるが、わしに背かうと常に心がけてゐる子だ。そして自分の力を買ひかぶりすぎてゐる。そして少しでも都合のわるいことがあると、わしのせゐにして逃げようとする。だが彼等はこのわしの手からはのがれることは出來ないのぢや。わしの許しを得ずに彼等に何が出來る。わしの恩と、わしの意志を尊敬することを忘れる人間共よ。罰をうけるぞ。

神　次にひかへた私は神様である。私は人間によつてつくり出されたものだ。だが私は事實は自然の一部にすぎない。人間は私をない處につくつたのではない。ある處につくつた。私は人間から生れたが、同時に自然から生れた。私は人間を支配するものだが、人間が望む程、まだ萬能ではない。私のことを本當に知らないものは、私を萬能だと思ひ、そして人間界におこるあらゆる不幸を私のせゐにして私を呪ひ、私を否定する。だがそんな處に私はゐない、私がゐるのは人間が萬能ではないからだ。人間が不完全だからだ。人間が不幸におち入りやすいからだ。そのくせ人間が完全を目ざして進まうとしてゐるからだ。人間の不幸は私のせゐではなく、私を信じないものゝせゐである。私を生み出す力のないものゝせゐである。完全なものには私は不用なものだ。不完全の域から脱する意志をまるで持たないものにも私は不用なものだ。心に理想を持たず、あこがれを持たず、全體と調和して生きたいと思はぬものには私は縁のないものだ。人間の內に私はゐるのだ。私は人間の神様であり、人間が完全を欲する所から生れた。私は人間の愛から生れ、人類が全部的に生きたがる意志から生れた。私に愛されることは人類に祝され、よしと見られる心をもち、又その道を歩く時に限る。私に導かれようとするものは、人類に祝される心の持ち主になることが必要なのである。

惡魔　次にひかへた俺は惡魔だ。人間は俺を呪ふが、俺を愛してゐるのだ。人間は俺の奴隷になりたがつてゐる。俺は人間の心のうちに神と一緒に住んでゐるものだ。だが多くの人間は神よりは俺の云ふことをきく、その方が面白いからだ。醉ふことが出來るからだ。あとのことはどうでもいゝ。他人のことなんかくそ喰へだ。快樂こそ萬能だ。酒と女こそ人間の最もつよいたのしみだ、俺は自然の不完全を利用し、人間社會の不完全を利用し、又人間のつくり方の不完全を利用し、人間を何處までも墮落させようとするものだ。俺は平和と勤勉を嫌ふ。俺はあくどいもの、病的なもの、無情、冷酷、慘酷を愛する。人間の生命を不健全にし、破壞する傾向のあるもののこらずを愛する。健全な本能を滿足するだけでは俺は滿足をしない。なるべく病的な域に人間を落し入れるのが俺

の仕事だ。そして自分の生命と他人の生命を破壞しつくすものこそ、俺の愛する弟子である。さあ、俺達三人の中の誰が一番多くの人間をひきつけるか、勝負をして見よう。

自然　よろしい、勝負をして見よう。

惡魔　誰か人間がくるといゝな。あ、やつて來たぞ。

（青年三郎登場。神の前に跪づく。）

三郎　神樣。私はどうしたらいゝのです。私達の兄弟の爭ひは益々はげしくなります。弟達は太郎兄さんを殺したがつてをります。太郎兄さんは何んと云つても改心してくれません。弟達が自分を殺しにくれば逆さまに殺してやる許りだと云つてゐます。私はどつちの味方にもつく事が出來ないのです。そして兩方から敵のまはし者のやうに思はれてゐます。私も太郎兄さんに腹をたてる事はあります。しかし次郎兄さんや、他の弟達のやうにムキになつて太郎兄さんをやつつけようとは思ひません。それに次郎兄さんも僕は信用してゐないのです。しかしこの儘にほつたらかしておいたら、恐ろしい事が起るに違ひありません。私は太郎兄さんにも忠告して見ました。次郎兄さんその他弟達にも注意して見ました。しかし誰も聞かうとはしません。そして怖ろしい方に向つて進んでゆきます。私にはどうしていゝかわからないのです。

神　お前にわからないことは私にもわからない。

三郎　私は實際困つてゐるのです。其處へゆくと、太郎兄さんにしろ、次郎兄さんにしろ、その他四郎にしろ、五郎にしろ、六郎にしろ、七郎にしろ、少しも迷はずに生きてゐます。太郎兄さんは何處までも金をとることを考へてゐます。そして贅澤なくらしをして少しも恥ぢません。そして次郎兄さんや四郎、五郎、七郎は太郎兄さんを憎み切つてゐます。そして太郎兄さんの早く死ぬことをのぞんでゐます。太郎兄さんが死ねば、自分達は金持になれると思つてゐるのです。次郎兄さんは自分の金になれば、皆に公平にわけるといつてゐます。しかし、太郎兄さんの金だつて一つか二つの家庭をたもてば少しは餘裕があるかも知れませんが、皆でわけたら、その金は知れたものです。勿論、それだけの金でもほしいにはちがひないでせうが、しかし次郎兄さんが自分のものになつたら、皆にわけるか、どうかは私は信用しません。しかし皆は信用してゐるのです。勿論私が次郎兄さんの味方をしないのは、次郎兄さんが金をくれさうもないからではないのです。私は兄を殺すことに反對なのです。それに兄の一人子も一緒に殺すことを計畫してゐるのです。そして五人殺しや、三人殺しの泥棒の記事をよむと、次郎兄さん達は太郎兄さんの一家がさう云ふ風にやられ

るといゝのだかと次郎兄さんと四郎とは話しあつて、へんな笑ひをするのです。その笑ひを見るとぞつとします。何げなく云ふのですが、其處に二人の根性があらはれるのです。そして六郎は一層質がわるくつて太郎兄さんにお世辭つかつて、何んとかうまい汁をすひ、そして次郎兄さん達のかげ口を太郎兄さんに告げ口したり、太郎兄さんのかげ口を次郎兄さんたちに知らせたりするのです。私はその間にたつて何にも出來ないのです。私はどうしていゝかわからないのです。太郎兄さんが改心して、他の兄弟たちのことを少し考へてくれるといゝのですが、さうすればせめて五郎、七郎は騷動のなかにまきこまれずにすめると思ふのですが。

（太郎と六郎登場。）

太郎　さうか。そんなことを云つてゐたか。

六郎　あすこに、三郎兄さんがゐます。三郎兄さんは實に陰險な人です。

太郎　三郎！　お前は何にしてゐるのだ。早く行つて働いてこい。畑の草を貴様がとらないので、作物は全滅だぞ。

三郎　お兄さん。いゝ處で御逢ひしました。

太郎　何か俺にいひたいことがあるのか。

三郎　お兄さんはよく考へて御らんになりましたか。

太郎　何にをだ。

三郎　私達は兄弟だと云ふことを。

太郎　それがどうしたのだ。

三郎　弟達に不平をあまり起させないやうにして戴きたいのです。

太郎　不平を起させるのは貴様のくせして。次郎だつて、四郎たつて五郎だつて、七郎だつて入智慧するものがなければ、不平なんか起しはしない。貴様が入智慧して、皆は兄弟だ、兄弟としての平等のわけまいをもらふのが至當だといひ出したのだ。

三郎　僕はお兄さんにだけさう云ふのです。他の人にはそんなことを云つたことはありません。

太郎　他の兄弟のゐる所で、聞えよがしにさう云つたのはお前だ。

三郎　私は他の人のゐるのを知らなかつたのです。

太郎　嘘をつくな。早くいつて働かないと家からおひ出すぞ。

三郎　お兄さん。僕はお兄さんのことも考へてゐるつもりです。

太郎　おためごかしはよせ。さつさとゆかないか。ゆかないとこのムチでぶつたゝくぞ。

三郎　お兄さんは恐ろしい時の近づきつゝあるのを御存知

ないのですか。
太郎　次郎達を中傷しようと云ふのか。あいつはこの頃、いやにおとなしくなつたぞ。俺の力をあいつたちは知つたのだ。
三郎　それは反つて恐ろしい前兆かも知れませんね。どつちにしてもお兄さんはお兄さんとして弟達のことを考へて、自分のゐることをよろこんでもらへるやうにならないといけないと思ひます。
太郎　うるさい奴だな。（ムチで打つ）兄の云ふことをきかないか。戸主の云ふことをきかないか。
三郎　それでは私もよく考へますが、お兄さんもよく考へて下さい。（退場）
太郎　馬鹿な奴だ。
六郎　本當にムチでお兄さんがおぶちになつた時は胸がすきました。三郎兄さんの僞善者なのには皆あいそをつかしてゐます。
太郎　あいつの顔を見ると胸がわるくなる。何處かで酒でものまう。
六郎　おともいたしませう。
太郎　何處がいゝかな、お前のいゝ人のゐる處にゆかう。
六郎　えゝ。ゆきませう。お兄さんのいゝ人もゐますからね。

（太郎、六郎退場。次郎、四郎登場。）
次郎　また二人であそびに行きやがつたな。
四郎　えゝ、ゆきました。
次郎　俺達に散々働かしておいて、そしてその金を全部とり上げて、勝手な眞似をしてやがる。今に思ひ知らしてやる。
四郎　本當にひどすぎますね。しかし威張らしておくのももう一寸ですね。
次郎　一寸の間だ。威張らしておくさ。
（二人顔見あはし笑ふ。三郎登場。）
三郎　次郎兄さんはこゝでしたか。
次郎　何か用か。
三郎　別に用ぢやないのですが、僕は心配で仕方がないことがあるのです。
次郎　なんだ。
三郎　次郎兄さん。
次郎　なんだ。
三郎　恐ろしいことはやめて下さい。
次郎　何を云つてゐるのだ。
三郎　僕は心配なのです。憎惡を燃しすぎてする行爲を恐れるのです。
次郎　俺は何にも恐ろしいことはしないよ。

三郎　きつとですか。
次郎　何にを恐れてゐるのだ。
三郎　お兄さんの心のうちで思ひあたることがあるでせう。
次郎　ないね。
三郎　お兄さんは太郎兄さんのことをどう考へてゐます。
次郎　なんだ、兄貴のことか。兄貴のことなんか何んとも思つてはしない。兄貴は父親のあとをついで、俺達をつかひたい放題使つたつて、それは兄貴の權利だから何んとも思つてゐない。一時は腹もたてたが、この頃はまあ、仕方がないと思つてあきらめてゐるよ。
三郎　本當ですか。
次郎　疑ふのか。
三郎　………。
次郎　貴樣はスパイ見たやうな奴だな。その顏はなんだ。早く向ふへ行け、貴樣は俺のことをあることないこと兄貴につげるさうだが、そんなことをしたら承知しないぞ。
（三郎、あきらめて退場。）
次郎　いやな奴だな。あいつは。
四郎　本當に油斷の出來ない男ですよ。
（太郎の妻、子供をつれて登場。）
太郎の妻　いゝお天氣ですね。
四郎　えゝ、いゝ天氣です。
太郎の子　叔父ちやん、お父ちやん何處へ行つたか知らない。
次郎　知らないよ。
太郎の子　僕は之からお母ちやんと目高しやくひにゆくの、叔父ちやん來ない。
次郎　叔父ちやんは働かなけりやならないからね、
太郎の妻　本當に大へんですね。
次郎　こちとらは働かなければ食へませんからね。
太郎の妻　それでは失禮します。
（太郎の妻、子退場。）
次郎　あいつ達もどうせながくは生きてゐないね。
四郎　あはゝ。（空虚な笑ひ）
次郎　しかし餘程うまく殺さなければ見つかつては何んにもならないからね。
四郎　泥坊が入つたやうにするのですね。
次郎　俺達はどうしても疑ひをかけられるからね。うまく逃げみちをつけておかなければ。
四郎　三郎にでも罪をきせたらどうですかね。あいつの僞善者なのは誰も知つてゐますからね。反つてあゝ云ふ奴が恐ろしいのだと世間の奴に思はせればよろしいからね。

次郎　さううまくゆくかね。
四郎　ゆきますよ。太郎兄貴が殺された時「三郎！」と云ふ聲がしたのを誰かゞきいたことにすればいゝでせう。
次郎　しかし聞いて知らん顔してゐるのもへんだらう。
四郎　其處で、とび込んだら三郎の逃げてゆく姿を見たとしたらどうです。
次郎　あとでよく考へて見よう。泥坊のせゐにするか、三郎のせゐにする方がいゝか、又どう云ふ時に殺したらいいか、よく考へて見よう。しかしこのことは六郎は勿論、五郎や七郎にも云つては駄目だよ。
四郎　大丈夫です。
次郎　そのかはりうまくいつたら、お前には特別褒美をやるよ。
四郎　まあうまくやることが第一です。
（次郎、四郎退場。）
惡魔　あはゝゝゝ。自然さんどうです。人間といふ奴はあなたの子ですかね。隨分あなたの考とはちがつた考をもつてゐるものですね。神樣！　あなたは何んのために其處にゐるのです。あはゝゝ。愉快々々。
太陽　人間て馬鹿なものだな。
月　いやなものですね。
詩人　まあ、待つて下さい。あんな人間が全部ぢやないんです。
太陽　何にしろあさましいものだ。
月　本當にあさましいものですね。
（三郎、五郎登場。）
五郎　三郎兄さんは太郎兄さんが私達を人間あつかひをしないでもいゝと思つてゐるのですか。
三郎　いゝとは思つてゐない。
五郎　それなら私達の味方ですね。
三郎　ある處まではね。
五郎　太郎兄さんをやつけることには贊成なのですね。
三郎　反省させることは贊成なのだ。
五郎　太郎兄さんは腕力でやつけるより他目がさめない人です。
三郎　それは俺も認める。
五郎　それぢや暴力でやつけることには贊成なのですね。
三郎　勝つにきまつてゐればね。そして太郎兄さんを憎まず、同情し反省させるためならね。
五郎　太郎兄さんが反省しない場合はどうなのです。
三郎　兄弟の生命を尊敬しない點はたしかに太郎兄さんがわるい。その點反省しなかつたら制裁出來たら、制裁していゝと思ふ。
五郎　それなら僕と三郎兄さんの考は同じです。

三郎　しかし次郎兄さん達の考はちがふのだ。

五郎　そんなことはありません。

三郎　次郎兄さんは太郎兄さんの一家のものを殺したがつてゐる。

五郎　そんなことはありません。次郎兄さんは何處までも私達が不當に太郎兄さんに虐待されてゐるのに腹を立ててゐるだけです。

三郎　それだけぢやないのだ。僕はそれを恐れてゐる。

五郎　僕はさうは思ひませんね。次郎兄さんはそんなにひどい方ではありません。姉さんや、子供を殺すやうな。罪もない子供を殺すやうな。

三郎　だが子供まで殺さなければ財產は子供のものになることを次郎兄さんは知つてゐる。

五郎　しかし太郎兄さんがどうしても云ふことをきかない時太郎兄さんを殺すことはやりかねないと思ひますがね。子供を殺す必要はないと思ひますね。太郎兄さんさへ征服してしまへば、あとは問題にする程のことはないと思ひます。

三郎　殺さなくつたつていゝ。

五郎　だが向ふで殺してくれれば別です。私達は人間らしく生きなければなりません。兄だと云つて弟を奴隷にしていゝと云ふ事はありません。私達は弟です、奴隷ではないのです。私達は人間です、動物ぢやないのです。太郎兄さんの方で私達を人間としてあつかひ、私達を兄弟としてあつかつてくれゝば私達は太郎兄さんを愛するでせう。

三郎　五郎お前の考は大體として僕も贊成だ。僕の兄弟が皆、お前のやうな考へ方をするなら萬事よくゆくはずだ。しかし實際さうはゆかない時、我々はすぐ太郎兄さんをやつければいゝと思ふのは早やすぎるし、簡單すぎる。もう少し考へて見る必要がある。

五郎　何を考へるのですか。

三郎　うちの農場にしろ、工場にしろだ、太郎兄さんがなんでも自分の思ふ通りやつてゐて、ともかく今日の狀態に到達していく分かまうけもあるやうになつた。之は太郎兄さうが私達と力を一つにしてくれない時がくるとどうなるかわからない。太郎兄さんをやつけてしまつて他の人が實際にぶつかつて農場や、工場をやつたら、損が大きくなつてつぶれてしまはないとも限らない。だから私達は太郎兄さんのその才だけは尊敬し、それから教はるものは教はつて、まづ自分達が獨立して仕事が出來るやうにしなければならない。たゞ兄さんだけをやつければいゝと云ふやうな簡單な問題ぢやない。太郎兄さんだつて、中傷する人があるのは面白くないが、惡い許りの

人とは思はない。僕達を人間としてあつかふ方が利益が上ると云ふことがわかつたら、僕達を今のやうに奴隷のやうにはしまい。
五郎　そんなことはあてになりません。
三郎　いや利害關係さへはつきりすれば、太郎兄さんも折れるにちがひない。
五郎　あてにはなりません。
三郎　それは皆が一致してゐないからだ。たゞ樂がしたい、得がしたいと云ふ人が多いから、太郎兄さんも油斷が出來ないのだ。もし僕達が僕達の要求を入れたらもつと立派に働き、そして少くも太郎兄さんに損をかけない。少くも今のまゝだと我々は太郎兄さんの云ふ通りにならず損をさせるが、我々の要求を入れたら少くもいくらか得させると云ふことになつたら太郎兄さんも承知するだらう。いや／＼ながい時間働くよりは、自ら進んで働く方が結果もいゝわけだ。
五郎　農場ぢやさうかも知れませんが、工場の方は機械の奴隷ですから、なまけるとすぐわかりますからね。ともかく機械の働く時間だけは仕事がはかどりますが、機械の働く時間がへつたらそれだけ仕事ははかどらないのですから。太郎兄さんは承知はしません。
三郎　それなら太郎兄さんがゐなくなつてもお前達は今のやうに働かなければならない。
五郎　そのかはり太郎兄さんにうは前をはねられずにすみます。
三郎　だが品物が賣れなければ仕方がないだらう。つくればいゝと云ふものぢやない。賣るのには一つの才がいる。
五郎　次郎兄さんには十分やれますよ。
三郎　だが皆怠け出したらそれつ切りだ。
五郎　なまけたりはしません。
三郎　第一勞働時間をへらしたいのだらう。
五郎　それはさうです。
三郎　そしてまうけはへらしたくないのだらう。
五郎　それだつて金よりは生命の方が大事ですからね。
三郎　お前はそれを本當に知つてゐるから僕はうれしいのだ。だが他の人は十分それを知つてゐない。七郎の他はね。次郎兄さんや、四郎は太郎兄さんより慾が少ないとは云へない。
五郎　僕はさうは思ひません。
三郎　さう思へないお前は仕合せだよ。
五郎　ともかく僕は僕達を人間あつかひしないものの存在は認めません。
三郎　だが太郎兄さんも人間にはちがひないよ。
五郎　僕達を人間あつかひにすれば、僕達も太郎兄さんを

人間あつかひにしますよ。

（太郎登場。）

太郎　またこんな所に來て何をぐづ〳〵云つてゐるのだ。

五郎　お兄さんが僕達を人間あつかひしない不平を云つてゐたのですよ。お兄さんの方で僕達を人間あつかひしなければ、僕達の方でもお兄さんを人間だとは見ませんからさう思つて下さい。

太郎　三郎にまた入智慧されたのか。

五郎　入智慧なんかされませんよ。三郎兄さんは、お兄さんの味方をしてゐるので僕達に嫌はれてゐるのです。

太郎　どうかね。

五郎　ともかく僕達を人間あつかひしてもらひませう。

太郎　人間あつかひとはどう云ふあつかひ方なのだ。

五郎　ムチなぞでおどかさないで下さい。それからすぐ首を切るなぞと云はないで下さい。それから十分な休息を下さい。それから健康を害しないやうな設備と、生々した精神のなくならないやうにして下さい。つまり疲れすぎないやうにしてほしいのです。

太郎　俺なんか若い時もつと働いたものだぞ。今のお前達の働き方でぐづ〳〵云ふのは生意氣だぞ。もう一度云つて見ろ。

五郎　何度でも云ひますよ。

太郎　俺に手向ふのか。

五郎　手向ひます。

太郎　馬鹿！（横面なぐつ）

五郎　それが人間あつかひでないと云ふのです。

太郎　生意氣云ふな。（又ぶつ）

五郎　私もたゞ默つて打たれてはゐませんよ。

三郎　よせ〳〵。

（次郎、四郎、七郎登場。）

次郎　なんだ。なんだ。

五郎　太郎兄さんが僕をなぐつたのです。

太郎　生意氣なことを云つたからさ。

五郎　どつちが生意氣だ。僕だつて人間だぞ。

次郎　人間だと云つたのでなぐられたのか。

五郎　人間なみにあつかつてくれと云つたら太郎兄さんが僕をなぐつたのだ。（泣く）

次郎　お兄さん、僕達を人間ぢやないと思つてゐるのですか。

太郎　人間なことは知つてゐるよ。人間だからこそ怠けたり、生意氣なことを云つたりするのだ。

次郎　どつちが生意氣なのです。

太郎　次郎！　お前は五郎の味方をするのか。

次郎　あたりまいです。

四郎　太郎兄さん。僕も五郎の味方をします。

太郎　貴樣達が何人よつたからと云つて、俺はちつとも怖かない。

次郎　やつけちやはう。

四郎　合點だ。

（四郎短刀をぬく。）

三郎　いけない。（とめようとする）

次郎　二人をやつてしまへ。

（次郎と四郎、二人をつき殺す。）

次郎　二人は決鬪したことにしよう。（短刀を兩方にもたせる）

五郎（ふるへながら）そんなうそはつけません。

次郎　お前も殺してほしいのか。死んだ奴は用はない。さあ兩方生きてゐる者だけ生きてゆかなければならない。さあ兩方の手に血をぬつておけ、そして短刀に二人の指紋をつけておけ。內側に血をぬる奴があるか。

詩人　この場は之でおしまひですから、死んだもの達をどけます。

（死人達起き上り退場。）

太陽　面白くないな。もつと面白いものを見せてくれ。

詩人　まあもう少し見てゐて下さい。

太陽　まだこの芝居はすんだのぢやないのか。

詩人　之から始まるのです。

太陽　さうか。

月　殺さなくつたつてよささうなものね。

詩人　人間と云ふものは、人を殺したり、殺されたり、お互ひに又押へつけたり、押へつけられたりしてゐる者だと云ふ事をお目にかけたかつたのです。

太陽　三郎でいくぢのない奴だな。

詩人　えゝ。意氣地のない奴です。お靜かに。

惡魔　人間て救ひのない處に段々落ち入るものだ。どうだ神樣、之でもあなたは人間を信用なさるかね。

（五郎登場。）

五郎　神樣、私をお救ひ下さい。次郎兄さんも、四郎兄さんもつかまりました。遠くから姉が見てゐたのです。そして二人とも死刑になつてしまひました。私が一家の主人になつたのです。私はどうしたら私の家がたもつてゆけるか、每日考へてゐるのですが、どうしたらいゝかわからないのです。昔の生活の方が反つてらくでした。六郎は相變らず怠けてゐます。七郎はよく働いてくれます。しかし私達は工場も、農場もやつてゆけないので、大部分人手に渡しました。自分の理想的な工場と、農場をつくりたいと思つてゐるのですが、私には力がありません。どうかいゝ助手を一人下さいまし。

（七郎登場。）

七郎　お兄さん。勞働者の人が一人お逢ひしたいと云つて來ました。

五郎　さうか。それではこゝにお通ししてくれ。

七郎　はい。（退場）

（勞働者風の男登場。）

勞働者　一寸おたのみしたいことがあるのです。

五郎　なんですか。

勞働者　私は今迄働いてゐた印刷場を首になつたのです。あなたの話を或人に伺ってやつて來たのです。

五郎　それはいゝところにやつて來て下さいました。

勞働者　私達仲間が五人首になつたのです。あなたの所で働かしてもらひたいのです。

五郎　よろしい。しかし私の方は今金を出してあなた方を雇ふことは出來ないのです、たゞあなた方の食ふものと、それから小さい印刷場が使はずにそのまゝになつてゐるのがありますから、それを全部あなた方に任せますから、それで一つ何か仕事を始めて下さい。純益があつたら、それはあなた方の勝手にしていゝことにして、しかし損が三月以上つゞいたら、お斷りします。しかし三月の間の損は私が責任をもつて拂ひます。私は勞働者の方だけで仕事がうまくゆくものか、どうか見たく思つてゐるのです。勿論、工場は非常に小さくつて十人位ゐきり働けないのですが。初めは五人でもやつてゆけると思ひますが。

勞働者　全部私達に任せて戴ければ私達は立派にやつてゆけると思ひます。

五郎　私達は他の仕事で食つてゆけるのですから、其處で毎月いる費用と、君達の仕事がうまくゆくまでの僕の方の出費とを君達で拂つてくれゝば、それ以上はいらないのです。工場や機械は勿論たゞでおかしします。しかし機械の今後の破損は君達の方の責任です。まだ機械はいたんではゐないと思ひます。又仕事の注文なぞには出來るだけ便宜を計りたく思ひます。そのかはり君達が人をやとつて金まうけをするやうな時が萬一あつたら、其時はたゞではおかし出來ないことにお約束しておきます。

勞働者　承知しました。

五郎　それでは之からすぐ工場へ御案内いたしませう。

（二人退場。太郎の未亡人と七郎登場。）

太郎の未亡人　五郎さんは本當に親切な方ですね。

七郎　兄は理想家で、夢想家です。あれで實際家の手腕があればいゝのですが、天は二物を與へずと云ひますが、本當です。其處で僕は實際家になつて、兄の夢想をある所まで實現してやらうと思つてゐるのです。

未亡人　本當にあなた方お兄弟の仲のいゝのにはおどろきます。私は初めどうなるかと思つてゐました。

七郎　本當に僕もどうなるかと思ひました。僕は今になつて三郎兄さんのことが思はれて仕方がないのです。

未亡人　あの方はお氣の毒でした。

七郎　太郎兄さんも人はいゝ人でしたが。

未亡人　私は正直に云つて、死んだ夫を愛してはゐなかつたのです。夫は恐ろしく冷酷な處がありました。偉い處があると思ひましたがね。私の夫や、次郎さん、四郎さん、六郎さんのお母さんと云ふ方は、餘程しつかりした人だつたと見えますね。

七郎　僕の小さい時に死んだので僕は自分達の母の方切り知りません。私達の母は隨分氣のいゝ女でした。

未亡人　さうださうですね。

七郎　父も二つの方面をもつてゐたらしいのです。夢想家と實際家の、そして五郎兄さんは夢想家の方をうけつぎ、僕は實際家の方をうけついだと自分では思つてゐるのです。

太陽（あくびして）人間てつまらないことをくよ〱云ふものだな。詩人、もう少し話をいそいだらどうだ。

詩人　まあ、もう少し辛抱して下さい。

太陽　それならもう少し辛抱してやらう。

（詩人、七郎の處へゆき何か囁く。）

七郎　それではお姉さん、あつちへ參りませう。

未亡人　えゝ、ゆきませう。

（六郎と五郎登場。）

六郎　どうしても金はくれないのですか。

五郎　そんなことにつかふ金はやれないよ。

六郎　しみつたれですね、あなたは。太郎兄さんが生きてゐてくれたらどんなによかつたか。兄さん、あなたは太郎兄さんが殺されるのを見てゐてうれしかつたでせう。

五郎　そんなことはない。

六郎　それだつてあなたは太郎兄さんが死ぬのをのぞんでゐたのでせう。

五郎　太郎兄さんに私は怒つてはゐた。

六郎　さうでしたね。あなたと太郎兄さんと喧嘩したのがもとで、太郎兄さんも、三郎兄さんも殺され、次郎兄さんも、四郎兄さんも死刑になり、そして四人の死んだ原因になつたあなたが、家の財產を全部繼いだのですね。運のいゝ人ですね。

五郎　何にが運がいゝのだ。

六郎　あなたは內心よろこんだにちがひない。

五郎　馬鹿なことを云ふな。

六郎　あなたは四人の兄さんが死んだので金がどつさり手

に入つたのぢやありませんか。

五郎　だから僕は自分の金だとは思つてゐないよ。

六郎　それなら誰の金だと思つてゐるのです。

五郎　社會の金をあづかつてゐるのだと思つてゐる。

六郎　へゝ社會の金ですつて。うまいことを云ひますね。

五郎　僕は自分の金とは思はないから、生活は少しもかへない。

六郎　それはあなたがケチだからですよ。あなたの性質には面白い處がちつともない。そしてあなたは僕を腹ちがひの兄弟として憎み、そして七郎だけを愛してゐる。

五郎　腹ちがひなぞと云ふことは問題にしてはゐない。僕が君を嫌ふのは腹ちがひだからぢやない。君の心がくさつてゐるからだ。

六郎　僕の心がくさつてゐるのですつて。

五郎　くさつてゐるよ。

六郎　そして兄さんを四人殺した、あなたの心はくさつてゐないのですか。

五郎　俺は兄貴を殺しはしない。

六郎　手をくださなかつただけです。

五郎　俺は心に疚しくないぞ。

六郎　自分が兄の死の原因になつてもですか。

五郎　仕方がなかつたのだ。

六郎　なぜとめなかつたのです。

五郎　とめる暇がなかつた。

六郎　本當ですかね。

五郎　うるさい。あつちへゆけ。

六郎　金を下さい。

五郎　やれない。お前は人間と云ふものはあそんで食へるものと思つてゐる。そんなものぢやないぞ。

六郎　遊んで食つてゐるのは僕一人ぢやありませんよ。

五郎　まちがつた生活には俺は同情はない。お前の性根がなほるまでは金は一文だつてやらない。

六郎　よろしい。それなら僕にも考がありますよ。おゝあすこを見て御らんなさい。姉さんと七郎が花をつんでゐますよ。あの二人は遊んでゐていゝのですか。

五郎　七郎はもう今日の仕事はしてしまつたのだ。

六郎　姉さんと七郎の間がへんでもかまはないのですか。

五郎　僕は二人を信用してゐる。

六郎　そして僕だけ信用しないのですか。

五郎　信用しない。君は兄達の生きてゐる時中傷許りしてゐた。僕はその時から君を輕蔑し切つてゐた。

六郎　あなたは私が憎いのですね。

五郎　輕蔑してゐるのだよ。

六郎　なんだつて。

五郎　僕と喧嘩する氣かい。
六郎（急に媚びて）喧嘩なんかしません。兄さんにはどうせ叶ひっこありませんからね。僕はもう降參することにします。そして明日から心を入れかへて働きます。だから僕を憎まないで下さい。本當に僕はわかつたのです。
惡魔　其處だ、しつかりやれ。
自然　だまされちや駄目だぞ。
五郎（自然に）大丈夫ですよ。しかし私もこんな男と喧嘩する氣にはなれません。だまされたふりしておきますよ。
自然　それもいゝだらう。
五郎　君が本當に改心してくれゝば僕もうれしく思ふ。明日から二時間づゝ働く癖をつけたらいゝだらう。そして身體が出來たら四時間か、五時間働くやうにしていつたらいゝだらう。さうすれば褒美をあげるよ。
六郎　えゝ、働いて見ます。
（五郎退場。）
六郎　あいつは本當にいやな奴だな。あいつこそ死ねばよかつた。（退場）
太陽　人間てなんてこせ〳〵した馬鹿々々しいものでせうね。
月　本當にさうですね。

詩人　あんな人間許りぢやないのです。
太陽　もつと立派な人間を見せてほしいな。
詩人　僕はあの五郎が好きなのです。
太陽　さうかね。人間てへんなものだな。
（五郎と七郎登場。）
五郎　七郎、お前は姉さんを愛してゐるのか。
七郎　愛してゐます。
五郎　さうか。それもいゝだらう。しかしもつとお前に適當な人が出てくるかも知れないから、その時困らないだけの用心はしておく方がいゝ。
七郎　大丈夫です。姉さんも馬鹿ぢやありません。
五郎　安心はしてゐる。
七郎　姉さんはお兄さんに感心してゐます。
五郎　今の生活で不平は云つてゐないか。
七郎　えゝ、少しも云つてゐません。
五郎　六郎も明日から働くと云つた。あてにはならないがね。
七郎　さうですか。それは感心ですね。あてにならないにしろ。
五郎　働かないものには金はやらないと云つたのでね。
七郎　兄さん僕は本が買ひたいのです。農業を一つ本氣になつて研究して見たく思ふのです。

五郎　いくらでも買つてやるよ。
七郎　私も一生、農業の研究に沒頭することにきめました。
五郎　それはありがたい。お前だつたらきつと物になる。
七郎　まあ出來るだけやつて見ます。溫室もたてゝよろしいか。
五郎　いゝとも。
七郎　助手を一人さがしたく思ふのです。學校へ行つて一番しつかりしてゐさうな人を雇ひたく思ふのです。
五郎　それはいゝだらう。
七郎　少し月給を多く出してもいゝでせう。
五郎　いゝとも。少しでも人間の生活に役にたつためなら、よろこんで出すよ。そして貧乏すれば、又勞働者の群へ入ればいゝのだ。今になつて見ると太郎兄さんに動物のやうに虐待されて十時間以上も働かされたのもわるくない。へんに自信が出來た。
七郎　しかし私はそのおかげですつかり頭をわるくしましたよ。近頃やつと自分の頭が自分のものになつて來ました。
五郎　大いにやらうぜ。
七郎　やりませう。
五郎　愉快だね。
七郎　愉快です。

（惡魔、誰かを招くやうな手ぶりをする。六郎來る。惡魔、六郎に何か囁く。六郎、ほゝゑみながら默つて去る。五郎達は氣がつかない。）

五郎　一時僕は人間に生れたのがいやになつてゐた。太郎兄さんの死に顏が目について閉口した。三郎兄さんの死に顏はへんに平和で美しかつたが、太郎兄さんの顏には恨がもえて居た。人間を殺すことの恐ろしさを實に知つた、同時に死なゝければならない人間に生れた自分達が呪はしかつた。だがこの頃はへんに內から力がわいて來た。捨て身になれたからかも知れない。それにしたいことが多すぎるからね。
七郎　本當にしたいことだらけですね。
五郎　何處までも力を一つにしてやつてゆかうね。
七郎　えゝ。さつきの勞働者の方はどうしました。
五郎　よろこんでくれた。立派にやつて見ると云つた。たのもしい男だつた。たのもしい男と云ふものは一目でわかるもののやうな氣がする。

（六郎登場。）

六郎　兄さん。
五郎　なんだ。
六郎　女の方が逢ひたいと云つて來ました。
五郎　さうか、それではこゝに來てもらはう。

六郎　はい。（退場）

七郎　いやにおとなしくなりましたね。

五郎　本心ならいゝが、しかし僕はまだ信用しない。ものになるかどうか鍛へて見るつもりだ。

（美しい、しかし何處か惡魔の弟子らしい女。）

女　初めてお目にかゝります。一寸御話ししたいことがあるのです。

五郎　なんですか。

女　お二人でお話ししたいのです。

五郎　之は僕の弟で氣のおけない、祕密のない仲間です。

女　さうですか。私は本當は太郎さまに大へんお世話になつた女なのです。

五郎　さうですか。

女　それで今大へん困つてをりますので、よかつたら女中にでもおいていたゞきたいと思つてゐるのです。

五郎　そんなことは出來ません。

女　たべさしていたゞければいゝのです。

五郎　どうも御氣の毒ですが、駄目です。

女　（泣きさうになり）私は今非常な不幸な目にあひかけてゐるのです。ひどい男に今ねらはれてゐるのです。太郎さまさへゐて下さつたら。

五郎　一寸六郎をよんで來てくれ。

七郎　はい。（退場）

（六郎、七郎登場。）

六郎　なんですか。

五郎　お前はこの女の人を知つてゐるか。

六郎　はい知つてゐます。

五郎　どうして知つてゐるのだ。

六郎　太郎兄さんのお伴して二三度逢ひました。

五郎　何處でお逢ひしたのだ。

六郎　カッフェーです。

五郎　太郎兄さんがこの方を愛してゐたのか。

六郎　えゝ。

五郎　お姉さんはそのことを知つてゐるのか。

六郎　いゝえ御存知ありません。

五郎　金さへあればどうにかなるのでしよ。

女　私は今の境遇からのがれたいのです。金なら少しは持つてをりますのです。持つてゐるので反つて惡者にねらはれてゐるのです。

五郎　六郎、この方が家においてくれと云ふのだがね。

六郎　それはおいて上げたらいゝでせう。

五郎　しかし僕の處は質素にくらしてゆかなければならないのだから。

女　私たつて家は百姓でした。貧しい生活にはなれてをり

ます。

五郎　七郎、どうしよう。

七郎　おいて上げたらいゝでせう。

女　ありがたう御座います。

五郎　それぢや六郎、家の方へ案内してお上げ。

六郎　はい。

（六郎と女退場。）

五郎　僕はあの女を好かないね。

七郎　だが氣の毒ですからね。

五郎　あいつの云つてゐることは本當かな。しかし俺達さへしつかりしてゐれば心配なことはない。

詩人　こゝで一休みします。

太陽　どうも面白くないね。何んとか面白いものを見せてくれ。

詩人　もう少しの辛抱です。

太陽　あーあ。（欠伸し立ち上り）今度は俺達がをどつて見せてやらう。

月　どうかお見せ下さい。

詩人　一寸まつて下さい。

太陽　あんまり坐つて許りゐたのでねむくなつた。ねむけざましにをどつて見せよう。

詩人　困りましたね。

太陽　俺の方こそさん〴〵困らされたからね。

（太陽、星達とをどり出す。）

詩人　困つた奴だな！

太陽　さあ、之で氣がはつきりした。さあ始めてもらはう。

（太陽などりをはる。皆手をたゝく。）

詩人　困つた奴たな！

太陽　ちつとも困ることはないよ。

詩人　（監督に）それぢや始めよう。なるべくはしよつて大車輪でやらう。時間や空間は無視してやらう。

（美人登場。）

惡魔　どうだつた。

美人　だめよ。

惡魔　何がだめなのだ。

美人　あの人は墮落しません。

惡魔　どうしてだ。

美人　あの人は馬鹿です。

惡魔　どうして馬鹿なのだ。

美人　平氣なのです。

惡魔　お前に誘惑されないのか。

美人　えゝ、誘惑されても、一向平氣で又起き上るのです。

惡魔　お前を愛しないのか。

美人　他に愛してゐる人があるやうですよ。

悪魔　どうしたら堕落するかね。
美人　あの人は駄目です。
悪魔　なぜ駄目なのだ。
美人　罪と云ふことを知らないのです。
悪魔　罪を知らない。
美人　あの人は動物であり、そして神でもあるのですか。人間ぢやないやうです。
悪魔　へんな奴だな。
美人　へんな奴です。
悪魔　お前はそれで降参したのか。
美人　馬鹿々々しくなつたのです。
悪魔　それなら逃げて見ろ。
美人　私もこゝにゐるのがいやですから、逃げようと思つてゐるのです。
（六郎登場。）
六郎　どうです。
美人　だめ〳〵、あんないやな人はない。
六郎　石のやうな奴ですね。
美人　石だかあめだか私にはわからない、私はもう逃げることにしました。
六郎　逃げるのですか。いくぢがないぢやありませんか。
美人　ちつとも面白くない、魂を食はしてくれないのですから。（退場）
（五郎登場。）
六郎　お兄さんあの女の人は逃げましたよ。
五郎　さうか。面白い馬鹿だね、あの女は。何しに僕の處なんかに來たのかな。
六郎　あれはお兄さんを誘惑しに悪魔がよこしたのですよ。
五郎　餘程呑氣な悪魔だね。時代おくれの悪魔だね、女なんかつかふのは。女に誘惑されるのは生々してゐない男にかぎる。俺はあの女で女て美しいものだと云ふことを知つて神を讃美した許りさ。
六郎　神を讃美したのですか。
五郎　あたりまいさ。あらゆるよろこびと、あらゆる美は神のおくりものだからね。
六郎　そして生々した精神は。
五郎　それは自然からさ。悪魔なんてケチな奴で、人がよわつてゐる時でないと入りこめない、バイキン見たやうな奴さ。人間を堕落さしてよろこぶなぞと云ふのが、馬鹿な考さ。
六郎　だが人間に堕落する傾向があるのはどう云ふわけです。
五郎　それは生々してゐないからさ。日かげの人間になる

からさ。太陽の子にならないからさ。

太陽　賛成！

六郎　人間は健全な心をもてばいゝのですか。

五郎　いゝのさ。うちに生命をみなぎらせばいゝのだ。何かに心をひつかけずに、朗かな心をもつて生きればいゝのだ。

六郎　さう云ふ風に生きられない人はどうすればいゝのです。

五郎　其病氣の原因を皆で無くなすのだ。個人的な病氣だつたら個人的に、社會的な病氣なら社會的に癒せばいゝのだ。

六郎　なか〳〵なほらないでせう。

五郎　なか〳〵なほらなくつてもなほす努力と希望は失はない。

六郎　世界はお兄さんのやうな人許りではありませんよ。

五郎　それが結構なのだ、僕のやうなもの許りでは仕樣がない。あらゆる人間の內に生きてゐる生命を僕は尊敬してゐる。

六郎　お兄さんは、神樣と自然とどつちを尊敬なさいます。

五郎　神は自然の一部だ。さもなければゼロだ。僕は自然を信じる。自然は完全ぢやないが、自然の內に我々の求めるものはすべてある。そのうちの最も深く我々の生命を支配するものを假りに神と名づけてゐるのだ。だから神は信じていゝものだ。本當の神ならね。それは最も我我の生命に忠實なものだから。

六郎　惡魔はどうです。

五郎　惡魔は馬鹿だよ。足りないのだよ。病的なものさ。しかし惡魔があるから神がある。神があるから惡魔もある。時に惡魔は可愛いものだよ。

惡魔　生意氣なことを云ふな。

五郎　人間の內に惡魔の奴隷もあり得る、だがそれは陰險な子だ、暗の子だ、何處か生々した處のない、いぢけ魂だ。我々を導くものではない。我々はそんな人を見る時、更に決心を新にする。

六郎　兄さんは仕合せですね。人類の運命を信じるのですか。

五郎　信じるよ。生々した人間のゐる間、世のなかはよくなる。

六郎　お兄さんは野蠻人が好きなのですか。

五郎　精神の鍛へぬかれた生々した人間を云ふのだ。我等は目標を常に忘れずに進んでゆく人々を知つてゐる。惡魔は一時的にそれ等の人をやつけるかも知れない。だがそれ等の人は更に強い力をもつて起き上る。

六郎　お兄さん達が死んだのはよかつたのですか。

五郎　勿論よくない。皆生きてゐてもらひたい。しかし死んだ人は死んだ人だ。生きてゐるものは更に力づよく、まちがひなく生きてゆくより仕方がない。

六郎　今、お兄さんを殺さうとするものがあつたらどうします。

五郎　逃げられるだけ逃げるよ。

六郎　相手を殺せば生きられる時はどうします。

五郎　殺すね。他人を殺していゝと思ふ奴は自分の殺されてもいゝことを斷言してゐるものだからね。

六郎　それなら死刑はいゝものなのですか。

五郎　人殺しを是認してゐるものは、自分の殺されることを是認してゐるものだ。だがその考のまちがつてゐる事を本當に知つたものは殺す必要はない。後悔は出來るだけ認めなければならない。

六郎　お兄さんと話してゐるとなんでも簡單に見えますね。

五郎　多くの人は簡單なことを無理にむづかしくしてゐるのだ。人間の生命を尊敬する思想、行爲を自分は是認し、それに反するものには人間の生命の名によつて戰ふつもりだ。

六郎　病的な文學や、畫もお兄さんは嫌ひぢやないのぢやありませんか。

五郎　それは人間の生命の領土を深くしてくれる、罪の内にかくれた美と寶を掘り出してくれて人生を豐富にしてくれるからさ。廢物だつて利用出來るだけ利用しようと云ふことはいゝことだ。どんなごみためのなかの寶でもすてないのが人間らしいところだ。

六郎　それなら私の内にも取り柄がありますか。

五郎　ないとは云はないよ。馬鹿とハサミは使ひやうで切れるさうだからね。

六郎　私は馬鹿ですか。

五郎　もう少し油斷の出來ない處がある。だが可愛い處がある。

六郎　ありがたい仕合せですね。

五郎　まあもう少し賢くなるのだね。

六郎　賢く？

五郎　まあいゝ。お前のやうな男にはムチも必要だと云ふことを僕は知つてゐるからね。

六郎　私の方が腕力が強くないのは殘念です。

五郎　あつちへ行かう。

六郎　えゝゆきませう。私はこの頃兄さんが不思議に好きになつて來たのですよ。

五郎　ムチがかい。

（五郎と六郎退場。七郎と未亡人登場。）

七郎　それはお兄さんだつてよろこぶでせう。
未亡人　よろこんで下さるでせうかね。
七郎　それはよろこびます。お兄さんはたしかに峰子さんを愛してゐます。
未亡人　嫌つてはいらつしやらないやうですね。
七郎　峰子さんはお兄さんに本當に似合つておゐでです。
（未亡人と七郎退場。峰子登場。五郎も登場。二人出あふ。）
峰子　お姉さんにお逢ひになりませんか。
五郎　今其處で逢ひました。
峰子　さうですか。
五郎　一寸話したいことがあるのです。
峰子　なんですか。
五郎　あなたは正直に自分の思つたことは何んでも云ひますか。
峰子　さうね。なんでもと云ふわけにはゆきませんが、大概のことなら云へます。
五郎　嫌ひなものは嫌ひと云へますか。
峰子　それは云へるつもりです。
五郎　それなら僕は嫌ひですか。
峰子　あなたは。
五郎　僕ですか。あなたからさきに云つて下さい。
峰子　それは、あなたの方からさきに云つて下さい。
五郎　それならジヤンケンできめませう。
峰子　えゝ。
二人　ジヤンケンポ。
（峰子勝つ。）
五郎　それなら仕方がないから云ひますが、驚いちやいけません。それから嘘を云つちやいけません。僕は事實の前にはおどろかないのを矜りにしてゐます。嘘を云つてなぐさめてもらひたくないのです。
峰子　それでどうなのです。
五郎　僕はあなたを愛してゐるのです。
峰子　それで私もあなたを愛してゐるのです。
五郎　嘘ついたら承知しませんよ。
峰子　嘘なんかつきませんわ。
五郎　それならよろこんでいゝのですね。
（二人接吻しようとして五郎やめる。）
峰子　どうしたの。何を考へていらつしやるの。
五郎　僕はあなたを愛してゐることは事實ですが、あなたの決心をきく前に僕はあなたと夫婦になることは出來ないのです。
峰子　なんでも聞いて頂戴。
五郎　あなたは僕が貧乏人になるかも知れないことを知つ

てゐますか。
峰子　知つてゐますわ。
五郎　僕は一文の金も自分の自由になる金は持つてゐないのです。
峰子　それがどうしたの。
五郎　あなたは僕を金持だと思つてゐると困るのです。
峰子　誰も思つてゐないわ。
五郎　僕はあづかつてゐる金は自分の家庭のためにつかひたくないのです。そして自分のとれる金と云ふものはまるでないのです。
峰子　知つてゐます。
五郎　僕のする仕事はなんでも反對しませんか。
峰子　あなたを信用してゐます。
五郎　僕の仕事を輕蔑した時、あなたと僕とは他人です。
峰子　承知しました。もう他に云ふことはないのですか。
五郎　ありません。あなたの方に何か要求がありますか。
峰子　私はあなたを心の底から信じてゐます。
五郎　ありがたう。それなら之から二人で、働くことにしませう。
（二人つれだつて退場しようとする。七郎登場。）
七郎　印刷場の人が見えました。
五郎　こゝへ御案内してくれ。

（七郎、勞働者をつれてくる。）
五郎　どうです景氣は。
勞働者　相かはらずいゝ方です。
五郎　それは結構です。
勞働者　今日はおたのみがあつて來たのです。
五郎　なんですか。
勞働者　私達の純益の半分を受けとつて戴きたいのです。
五郎　そんな必要はありません。
勞働者　私達が相談して差し上げることにしたのですから。
五郎　それは何かの時の用意につみたてゝ下さい。
勞働者　私達は各自自分の月給をもらつてあとあまつたのは用意にとつてあるのです。しかし小屋や機械までたゞで戴いて知らん顏してゐるのは心苦しいのです。取つていたゞかないと侮辱されたやうに思ひます。
五郎　それではよろこんで戴きませう。
勞働者　それはどうもありがたう、皆も安心すると思ひます。それでは失禮します。
五郎　皆さんによろしく、私の敬意をおつたへ下さい。
勞働者　ありがたう。（退場）
五郎　中々しつかりした男でせう。
峰子　本當ね。

五郎　この金も僕に托された金です。よく生かしたい。僕の仕事は人間は正當な仕事をすれば必ず食つてゆける社會をつくることです。それは容易ぢやないのですが、不可能なことではないと思ふのです。
峰子　それは出來ますわ。きつと。
五郎　あなたもそれを信じてくれますか。
峰子　えゝ。
五郎　人間の內に、人間を救ふ力が必ずあることを僕は信じてゐます。
（二人退場。）
太陽　もうおしまひか。
詩人　もう少しです。
太陽　何か面白いことがあるのか。
詩人　一番しまひに皆さんにをどつていたゞきます。
太陽　しまひに皆でをどるのか、月も星も人間も一緒にか。
詩人　えゝ、そして惡魔や神や自然もをどり出します。
太陽　それは面白いだらう。早くをどりたいものだ。
詩人　もう少しまつて下さい。
自然　どうだ惡魔、少し元氣がないな。
惡魔　今に見ていらつしやい。
自然　何を見てゐるのだ。
惡魔　人間は墮落しやすいものです。
自然　だが又すぐおき上るよ。
惡魔　神の奴、ねてゐやがる。
自然　人間は滅多に神の目をさますことは出來ないのだ。
惡魔　俺は神がうらやましい。
自然　なぜだ。
惡魔　だつてねてゐられるから、私なんか安眠は出來ない。
自然　ざまあ見ろ。
惡魔　なんだ。人間が俺を愛しすぎるからねてゐられないのだ。
自然　神は安眠してゐても人間は段々よくなる。お前はのべつ働いてゐても人間は段々よくなる。
惡魔　人間がよくなる。誰がそんな馬鹿なことを云ふ。人間はます／＼殺人器の巧妙なものをつくり出した。今に世界中の人間が一度に死ぬやうなものをつくり出すだらう。
自然　人間は馬鹿ぢやない。生きる道を見出す。
惡魔　少くも利口ぢやないね。馬鹿なこと許りしてゐる。
自然　馬鹿と見えて利口な處がある。
惡魔　利口に見えて馬鹿だ。
自然　今にものになる。今に皆利口になる。
惡魔　今に皆くさつてしまふ。
自然　そんなことはない。

惡魔　少くも人間は段々ずるくなり惡くなる。
自然　馬鹿なことを云ふな。人間は段々生命を重じ、立派になる。
惡魔　人間が立派になる？　あはゝゝ。
（神目をさましキヨロ／＼する。）
自然　神さん。目がさめましたな。
神　えゝ。
自然　神さん。今私と惡魔と議論してゐるのですが、人間は段々よくなりますか、わるくなりますか。あなたはどう考へます。
神　人間は段々私を利用しなくなつて來ましたね。
惡魔　それ見ろ。
神　だが惡魔の存在も人間は段々認めなくなつて來たでせう。
惡魔　いや私は相變らず繁昌ですよ。相變らず人殺し、暴行、墮落、泥棒、詐僞、人命無視、嘘、僞善、野心、貪慾、そんなものが人心を支配しつくしてゐます。
自然　そんなことがあるものか。それは例外で病的な奴に限る。大槪の人間は勤勉で、自分の仕事を勵み、平和を愛し、生々した心をもつて隣人のために働き、自分の生命のために働いてゐる。
惡魔　へー大槪の人がですか。見渡した所人間は立派な心をもつて、隣人のことを考へてゐますかね。それとも隣人はどうなつてもいゝ、自分さへ仕合せになればいゝと考へてゐますかね。
自然　他の生命を傷つけることをよろこぶものはまれだ。自分の生きることを最初に考へるのは當然だ。先づ人間は生きなければならない。しかし平和に勤勉に生きてゐるものゝ方が多いぞ。
惡魔　神さま、あなたはどう思ひますかね。
神　人間の心は愛に餓ゑてゐる。人間の魂は友達を求めてゐる。
惡魔　そして力を一つにして相手をやつゝけたがつてゐるのでせう。
神　皆と平和に生きたがつてゐるものが多い。
惡魔　それは力のない連中でせう。
神　私の意志に叶ふものも段々ふえてゐる。
惡魔　あなたを利用する人がへつてもですか。
神　私は利用されるのはすきぢやない。御利益のためにのみ、私を祈るものは私を愛することは出來ない。私のために利益をすて、生命もいらないと思ふものが私に愛される。
惡魔　そんな人がゐますかね。
神　たまにはゐるよ。

悪魔　ごくたまにはでせう。
神　だが私を利用せず、私を心ひそかに求め愛してゐる者は決して少くはない。
悪魔　決して多くもありませんね。
神　私を本當に愛し得るものは、さう多くなくても今の所は仕方がない。しかし今に私の眞價はつきりするだらう。そして人間は私に愛される生活をすることによつてのみ生き甲斐を感じることを知るだらう。
悪魔　生き甲斐ですか。死に甲斐ですか。
自然　大生命を得た時、大往生するものだぞ。生き甲斐を得て、始めて死に甲斐が出來るのだぞ。
悪魔　そんな人間は一萬人に一人もないでせう。
自然　今にそんな人間だらけになるのだ。
悪魔　その前に死にたえますよ。
自然　生きぬくまでは人類は死にたえない。それは私が保證する。
悪魔　その前に人類が亡びることを私は保證する。
神　人類が亡びた時、お前も俺も亡びるのだ。亡びないのは自然だけだ。
悪魔　新しいものが生れ、新しい仕事が生れる。
自然　人類は大生命を得る。完成する。それまでは亡びはしない。私はそれを信じてゐる。

悪魔　私は信じませんね。人類は少し馬鹿すぎます。
自然　いや馬鹿ぢやない、たゞ若いだけだ。
悪魔　若いのですつて。
自然　わかいよ。之からさ。
悪魔　私は人類は年よりだと思ひますね。
自然　若い。
悪魔　としよりです。
自然　若い。
悪魔　年よりです。
自然　若い。
悪魔　年よりにきまつてゐる。
自然　若いのだぞ。それをとしよりだと思ふのはお前は亡びてゆく方許り見てゐるからだ。
悪魔　そしてあなたは生れてくる方許り見てゐるのでせう。ともかく人間が利口でないことはたしかです。
自然　今に利口になることもたしかだ。
悪魔　どうですかね。
自然　神さま、あなたはどう思ひます。
神　私にはわかりませんね。たゞわかつてゐるのは人間どうしがもう少しお互ひに愛しあひお互ひの生命が共に生きられるやうに骨折らなければいけないと云ふことですね。

悪魔　しかしそんなことは望む方が馬鹿ですよ。人間はますく決死の爭鬪をします。ますく憎みあひ、殺しあひます。
自然　俺にはさうは思へない。人間の生命が全部的に生きられる時に最大、最善、最美の望をおいてゐる。
悪魔　あはゝゝゝ。
（五郎、峰子と登場。七郎、反對の方から登場。）
七郎　お兄さんお姉さん、今日はお目出たう。
五郎・峰子　ありがたう。
（お客達登場。）
お客達　（各自）お目出たう。お目でたう。（挨拶する）
五郎　ありがたう。ありがたう。（挨拶する）
（峰子はたゞ默禮する。）
五郎　皆さん、今日はよく來て下さいました。皆さんにお祝ひして戴く資格があるか、どうかわかりませんが、ともかく私達は幸福に思つてをります。深く感謝してをります。私達は出來るだけ皆さんの恩を感じて生きてゆきたく思ひます。勿論いぢけようとは思ひません。また自分の生命を殺さうとは思ひません。私達は善人でも、お人よしでも、又聖者でもありません。私達は時にエゴイストでもあり、我儘者でもあるでせう。しかし自分達が生きられる間、そして少しでも心に餘裕のある間、皆さんと人間に生れたことをよろこべるだけよろこべるやうに骨折りたく思つてゐます。私達の力は少なすぎるでせう。しかしその心がけだけは一生ぶつ通してもちこたへて見るつもりです。出來たらますく生々として、人間のために働きたく思ひます。君達生々した人間諸君、君達の一生はらくであるか、苦しいか知りませんが、出來るだけ人間に生れた宿命を人間のために立派に生かしてください。そして人間のためにお互ひに働きませう。人間は面白いものです。どの位ゐ我々は能力をもつてゐるか計り知ることが出來ません。そのあらゆる能力を生かして人間のために働きたいものです。金のために働く許りでは滿足せず人間の生命のために働きたいものです。そして生れた人間は正しき仕事を欲すればすぐ得られ、正しい生活をすれば生活の心配せずにすめる社會をつくるやうに協力して働きたいものです。
客の一人　五郎君夫婦萬歲。
他の客　萬歲。萬歲。五郎君を胴上げしろ。
（皆、五郎を胴上げする。）
太陽　もうをどつていゝのか。
詩人　もう少し待つて下さい。
詩人　（見物の方へ向つて）私のかいた脚本はこゝで終つ

てはゐないのですがしかし五郎君の結婚後の生活は他日にゆづり、私は作者として一言さしてもらひます。人間と云ふものにはいろ／＼あります。私にはとても人間のことは十分にかけません。たゞ私は人間に生れたことをよろこび、そして皆さんと共に人間として生きてゐることを光榮に思ふものです。そしてお互ひに人間として生れて來た以上、地上を出來るだけ人間にとつて美しいもの、氣持のいゝもの、生々したものにしたいと思ふのです。私の力は少なすぎます。しかし諸君の力は少なすぎないことを私は信じます。だがこの望みだけは人類の望みだと思つてゐます。そして太陽や、月や星や、山や川や、海を讃美し、そしてそれ等のものが、人間のます／＼ほがらかに生きることをのぞんでゐてくれることを感謝するものです。そして我等人間の何處までも生きてゆくことをのぞむものです。そして同時に我々全部の親である生命の王を讃美したく思ひます。生命の王よ出御めされ。

（御輿に若者達にかつがれて生命の王出御する。老人達之を導き、少女や子供はいろ／＼の花や木の枝をもつてその周りを守護してゐる。生命の王は夏なら半裸體の青年。寒い時はギリシャ風の衣をまとふ。他にいい考があればお任せする。）

皆　（歡迎し叫ぶ）　生命の王、萬歳、

詩人　さあ、太陽さん、をどつていゝ時が來ました。

太陽　よし來た。

詩人　皆さんもどうぞ生命の王をかこんで、をどつて下さい。元氣に元氣にをどりぬいて下さい。見物の方もお氣が向いたらどん／＼入つてをどつて下さい。をどりぬいて下さい。

（元氣な舞踏曲が始まり、皆をどり狂ふ。生命の王の輿は眞中に直立して動かない。それを守護する人達も動かない。をどりはだん／＼はげしく出鱈目になり、人間萬歳、生命萬歳とどなつて手をふつたり、をどり上るものもある。）

——急ぎ　幕——

（二六、一〇、八）

二つの心

登場人物

殿樣
腰元
近習
武士數人、甲、乙、其他

舞臺

城中の森の內の空地、正面に一つの磔刑臺あり、その兩側に甲、乙、拔身の槍を持つてひかへてゐる。

甲　あいつも馬鹿なことをしたものだ。
乙　あの女も馬鹿なことをしたものだ。
甲　見つかれば殺されるにきまつてゐる。
乙　さうして見つかるにはきまつてゐるのだ。
甲　殿樣も今度は非常に御立腹だつた。
乙　今度の殿樣になつて磔刑になつたものは一人もなかつた。
甲　いくら家老樣が法律でございますからと云つても、磔刑と火刑はいやだとおつしやつてお許しがなかつた處が今度だけは御自分からどうしても磔刑にするとおつしやつた。さうして吾々に强ひてこのいゝ役目をお命じになつた。
乙　いくら御辭退してもおきゝ入れがなかつた。
甲　殿樣はあの女によほどお心があつたらしい。
乙　さうだ、奥樣がまだゐらしつた時からお心があるらしいと云ふ風評があつた。
甲　奥樣はあまりお氣に入つてゐなかつた。なにしろあの殿樣には少しおつとりしすぎてゐた。
乙　おかくれになつた時も、さうひどくお嘆げきにはならなかつたさうだ。
甲　あの女は奥樣がおかくれになつた時、氣絶したと云ふ話だ。
乙　奥樣について來た女の內でも一番御氣に入りらしかつた。
甲　利口で、しつかりして、美しいからな。
乙　あの女がなぜあの男にそんなに惚れたのだらう。
甲　あれはあれで女に氣に入る顏をしてゐるからね。
乙　氣に入つたのでとんでもない目にあふことになつたのだね。
甲　何が不仕合になるかわからない。
乙　女はおとなしく殿樣のお心に從へばいゝのに。

甲　蟲が好かなかつたのだね。
乙　殿樣は今だにあの女によほどお氣があるらしい。
甲　大きな聲では云へないが、今度のおさばきには嫉妬が九分通り占めてゐる。
乙　さうだ。それにしても磔刑臺が一つでいゝとおつしやつたのはどう云ふお心算なのだらう。
甲　どつちかを、助けるお心算なのだらう。
乙　眞逆そんなことも出來まい。
甲　しかし女が男を思ひ切つて殿樣の心に從へば、罰はゆるしてやると女におつしやつたと云ふ話だぜ。
乙　あの殿樣ならやりかねないね。もしかしたら男を先に磔刑にして、女にそれを見せて女の意氣地をくぢいて心に從へようと思つてゐるのかも知れない。
甲　きつとそんな所だらう。
乙　男は後悔してゐると云ふ風評もあるね。女の方は磔刑にすると云つても、びくともしなかつたさうだが、男の顏は土色になつて今にも氣絶しさうだつたと云ふ話だね。
甲　何しろこんな道にかけると男より女の方が度胸があるよ。
乙　まるで自分が經驗したやうなことを云ふね。
甲　あはゝゝゝ。
乙　殿樣は男をきつと出來るだけ殘酷に殺したく思つてゐるだらう。
甲　しつ。殿樣がおゐでになつた。之から沈黙して、生きた芝居を見なければならない。
乙　さうして俺たちはいゝ端役につかはれたものだ。
（二十五六の顏色靑ざめた殿樣、太刀持の小姓一人つれて登場、まうけの座につく。小姓に向つて。）
殿　お前は見てはいけないものだ。お前はかへつていゝ。ぐづ〳〵しないで早く向ふへおいで。（小姓太刀を殿樣にわたし、ちうちよしながら去る。殿樣、甲、乙に向ひ）お前たちはとんでもないお役目、御苦勞である。
甲乙　はつ。
殿　（獨白）もう來さうなものだ、俺は自分でもわからない。たゞあの女をあまり戀しく思ひすぎてゐたことだけをかすかに覺えてゐる。もう來さうなものだ。來た、來た。磔刑臺を見た。あの目、あの目。實にすごい許りに美しいあの目。あのむすんだ口、どうしても、どうしてもあれは磔刑臺の上にのる心算だ。よし。俺もまけてはゐない。どうしても生かして見せる。生かして見せる。
（白無垢の着物着たる二十三四の美しい近習と二十の美しい腰元、後ろ手にくゝられ侍に警護されて登場、暫く無言。）

腰　（無理に冷かに笑つて）殿様！　磔刑臺はたつた一つでございますね。二人を一緒にお殺しにはなりたくはないのですね。御心はわかつてをります。妾をあとにお殺しになるお心算でしやう。妾をおどして心を入れかへやうと思つてゐらつしやるのですね。今になつても、今になつても、よう御座います。しかしそのお望みを叶へるわけには參りませぬ。妾は既にあなたを御見さげました。見さげました。あはゝゝ（狂へる笑ひ）殿様お氣の毒で御座いますね。

殿　俺はお前を先きに殺さうと思つてゐるのだ。お前の死ぬ様をこの男にも見せたいのだ。この男と二人で見たいのだ。どつちが強くかなしむかを見たいのだ。俺はこの男を許さうと思つてゐる。この男の一生を俺と同じ運命にしてやらうと思つてゐるのだ。

腰　殿様、それで復讐が出來ると思つておいでなのですか。お目出たいお考へでゐらつしやいますね。殿様は自殺と云ふものを御存知あそばさないのですか。

殿　この男がもし自殺すれば俺はこの男の家のものを殘らず殺させる許りだ。俺にそんな手ぬかりがあると思つてゐるのか。利口と云つてもさすがに女だ。

腰　なんとおつしやつても妾は磔刑臺にのぼります。喜こんでのぼります。殿様のやうに無情な方に身體をまかせるくらゐならば、磔刑臺にのぼる方がどのくらゐ嬉しいでせう。殿様、はやく殺して下さいまし。

殿　どうせまもなく殺してやる。俺はお前を生かさうとは思はない。（男に向ひ）お前は磔刑臺にのぼりたいか。さぞのぼりたいだらうな。

腰　誰がのぼりたいものですか、あれば殿様位のもの。

殿　默れ！（さすがの女も少しちゞみ上る許りの聲）お前に何にも聞いてはしない、この男に聞いてゐるのだ。お前の爲に誘惑されたこの男に云つてゐるのだ。男の心をお前は疑つてゐるのだな、だから卑劣にも男の決心を鈍ぶらさないやうに口を出すのだな。この女を磔刑臺にのせろ。（女は自ら進んで磔刑臺につけられる。ふるへてゐる男に向ひ）お前は生きたいか死にたいか。親には逢ひたくはないか。……俺は今までお前を殺したく思つた。しかし今といふ今お前は憐な男だと云ふことを知つた。お前はあの女にあやつられて居たのだ。今度のことはお前には罪のないことを知つた。俺はお前の罪をゆるしてやる。三年の間遠慮を申しつけるけれどもそのあとはもとのやうにとりたてゝやる。命をないものと思つて、親に孝行してやれ。

近　（聲がふるへてゐる）難有たう御座います、今になつて私は目がさめました。あの女に私はひきずられて思は

ず不忠をいたしましたのでした。私は今後必ず心を入れかへます。どうぞお許し下さいまし。

殿　よしよし、お前は道理のわかつた奴ぢや。目がさめたら許してやる。この男の手をといてやれ。（手紙をかいて渡す）これをもつて家老の處へゆけ。

近　はつ。（男、磔刑臺をぬすみ見る）

腰　（わざと男にやさしく）お先きへ行つてまつてをります。（殿樣に）どうか早く殺して下さい。

（男去る）

殿　喜んでゆくわい。（磔刑臺の上を見る）

腰　本當に喜んでゆきますこと。（涙ぐむ）早く殺して下さいまし。

殿　お前は許してもらひたくないか。

腰　あはゝゝ。

殿　あの男と夫婦にしてやらうか。

腰　早く殺して下さい。早く殺して下さい。

殿　まだ殺してほしいか。

腰　なほ殺してほしう御座います。妾はどんなことされても心は變りませぬ。

殿　きつとかはらぬと云ふか。

腰　かはりませぬ、妾には殿樣の御心が見えすいてをかしくなります。さぞ妾をお許しになりたいでせう。

殿　あはゝゝ。まあそんな處だね。

腰　（狂へるやうに）殺して下さいまし、早く殺して下さいまし、なぜ突いて下さいませぬ、なぜついて下さいませぬ。

殿　あの女をおろせ、俺は手づから殺してやる。この太刀で女の首を切つてやる。

腰　どうか切つて下さいまし。（磔刑臺からおろされる、殿樣の前に西に向つて坐り、首をさしのべる）

殿　（甲、乙、及び警護の士に向ひ）お前達は暫く向ふへ行つてゝくれ、俺はこの女を殺す前に一寸話したいことがあるのだから。

侍　はつ。（侍達皆退場、殿樣と女と二人のこる）

殿　お前は死にたいか。

腰　死にたう御座います。

殿　お前は俺を誤解してゐるだらう。

腰　なにもう申しませぬ、早く殺されたう御座います。

殿　俺はお前の心を知つてゐる心算だ。お前は俺を誤解してゐる。お前は俺が妾の死にかける時に、お前を口說いたことを腹の底から不快に思つたのだらう。

腰　はい、それがまちがつてをりませうか。御自分の奥樣が、はたで見ても苦しさうに苦しんでゐらつしやる時にあんなことをかりにも口に出すことが出來る方を畜生よ

りもおとつた方と思ふのが、どうして誤りで御座いましやう。妾は奥様に御同情いたしました。さうしてあなたを心からにくみました。え、心からさげすみました。口のお上手な、見かけは佛のやうな、心は畜生よりも鬼よりも劣つたあなたさまをさげすむのになんの不都合が御座いませう。

殿　さうだ。お前の云ふことは尤だ。しかしお前は一を知つて二を知らなかつたのだ。

腰　そんなことを聞く耳はもつてをりませぬ。今になつてまだ妾を口説かうと思つてゐらつしやるのですか。磔刑臺をもち出したり、本當に御手數のかゝるお口說き方、妾はます〳〵あきれる許りで御座います。早く妾の首でもお切りあそばせ、さうすればちつとはお見上げ申しますかも知れません。さあ、どうぞ、思ふ存ぶんに切つて下さいまし。

殿　お前は俺を愛してゐるのだ。なんと云つても俺はそれを見ぬいてゐた。あの時、お前の心は從ひたがつてゐた。俺はそれをよく知つてゐた。さうしてお前は今でも俺を愛してゐるのだ。

腰　おだまり遊ばせ、それは皆うそでございます、あなたのお考へちがひで御座います。妾はただの一度もあなたを愛したことは御座いません。

殿　默れ、お前はいくらその事實を否定した處がそれは駄目だ。お前は俺を見くびらうと骨折つてゐるけれど、もう駄目だ。俺の顏を御らん。

腰　妾はもうあきれて口があきませぬ、早く〳〵殺して下さいまし。

殿　なぜ、そんなに死にたがるのだ。それが第一俺を愛してゐる證據ぢやないか。馬鹿、お前はいくら俺に背かうと思つてもそれは駄目なのだ。死を前に見る時に、お前のごまかしは皆はげてしまつた。お前はどうかして俺に背かうとした。さうしてあの美しい男の力をかりた。しかし駄目だ。もともとあの男とお前の戀はつくりものだ。强情なお前はそのつくりもので勇んで死なうとした。ただ勇んで死なうとした。しかしそれはお前の眞心でない。眞心は俺がつかんでゐるのだ。

腰　あなたのおつしやることはわかりませぬ、早く殺して下さいまし、早く殺して下さいまし。

殿　今にどうせ死ぬのだ。ちつとは正直になる方がよささうなものぢやないか。あたりに誰もゐはしない。最後の前に一寸許り、本當のことを云つてはくれないか。お前を殺すことの出來ない、俺の心を察して、一寸許り眞心を見せてくれないか。

腰　殿樣。いえ〳〵妾は默つて死にます。どうか何にも聞

かずに殺して下さいまし。

殿　それは駄目だ。きくまではどうしても殺せぬ。聞けば、すぐ殺してやる。

腰　きつと殺して下さいますか。

殿　きつと殺してやる。

腰　お殺し下さらなければ妾は自害いたしますよ。

殿　きつと殺してやる。

腰　本當は、妾は奧樣のお伴してまゐりまして、殿樣のお顏を一目見ました時から、戀しう存じました。こんな立派な方が又とあらうかと思ひました。女に生れた甲斐にはこんな殿方とそひぶししたいと思ひました。妾はどのくらゐその心に苦しめられましたらう。奧樣が重い御病氣遊ばした時、妾はなんだか望みが叶つたやうな氣がしてをりました。驚きあそばすでせうが。妾は妾の心が神樣にとゞいて奧樣が御病氣におなりになつたのではないかとさへ思ひました。妾はなんだか恐ろしくなりました。奧さまがおくるしみになる度にすまないくと思ひました。奧樣が御機嫌のおよろしい時にお優しくして戴いたことを思ひ浮べては本當にどうして妾はこんな恐ろしい心になりましたらうと思ひました。そのくせ奧樣が、…おかくれになることを心待ちしてをりました。段々御病氣がひどくなつてお苦しみがはげしくなりました時、妾はとうく神樣におちかひしてしまひました。妾は心を入れかへます、どんなことがあつても殿樣のことを思ひ切ります、どうかく奧樣の御病氣をおなほし下さいましと誓ひました。妾は泣いてくちかひました。その翌日にあの事があつたので御座います。あのことがせめて二日か三日早かつたならば、妾は自分の身體を殿樣にさゝげたかも知れません。妾はあれから苦しみました。隨分苦しみました。奧樣の御病氣は段々重くなります。殿樣のお言葉は耳から消えませぬ。まもなく妾はとうとう思ひ切つてあの男が妾に云ひよつたのを幸に身をゆだねてしまひました。妾はその時から殿樣のお手にかゝることを存じてをりました。それで奧樣の御病氣のなほることをたゞお祈りしてをりました。その甲斐もなく奧樣はおかくれになりました。妾は心のおくで何度奧樣にお詫びいたしたで御座いませう。さうしてどうしても殿樣には身をまかせませんと幾度びお誓ひ申しましたでせう。

殿　お前は大事な時に氣がよわつたのだ。俺はそれをせめはしない、しかしお前の不幸はすべてそれから起つてゐるのだ。しかし仕方がない。お前は心を入れかへて俺に身を任せる氣にはなれないか、お前の罪の重荷を俺に荷はしてはくれないか。

腰　妾にはそれだけの力が御座いませぬ。どうかお殺しになつて下さいまし。妾は大それた考をもちましたのです。妾は何もかも默つて殿樣に憎まれて死にたう御座いました。さうすればせめて奥樣にお詫がかなふと思ひました。妾の心もそれでやすらかになれると思ひました。

殿　お前はどうしてさう氣がよわいのだらう。お前は奴隷に生れついたのだ。磔刑臺の方が俺のねどこよりもなつかしいのだらう。心がやすらかなのだらう。

腰　ほんとに〳〵さうで御座ります。妾にはわかりませぬ。殺していたゞかないと妾は困ります。妾は云ふだけのことは申しました。どうかお殺し下さいまし。

殿　お前はどうしても生きてはゐられないか。お前は俺と一緒に生きたくはないか。

腰　はい、生きたくは御座いませぬ。妾は殺していたゞきたう御座います。あなたのお手にかゝつて死にたう御座います。せめて死んだあと憐なものと思つて下さいまし。

殿　俺は誰に笑はれてもいゝ、俺は誰に嫌はれてもいゝ、俺はお前と生きてゐたいのだ。俺は眞心にうゑてゐるのだ。俺の心を察してくれるものにうゑてゐるのだ。皆は俺を恐れ、俺をうやまつてゐるだらう、しかしそれは俺の心を知つてうやまつてゐるのではない。俺の心は彼等にとてもわからないのだ。俺は淋しいはかない生活に生きてゐるのだ。お前は俺の爲に生きてはくれないか。俺の奴隷になつてはくれないか。

腰　殿樣、本當にあなたはおやさしい方で御座ります。妾は殿樣の爲にならばなんでもいたしたう御ざいます。しかし妾は生きる力だけは御座りませぬ。妾には死ぬ力はございます。生きる力はございませぬ。どうぞ一思ひにお殺し下さいまし。ほんとに一思ひに、妾は笑つて死にたう御座ります。

殿　お前、ほんとに生きる氣はないか。この俺をよろこばせてくれる氣はないか。この俺の爲に皆に笑はれたり、誤解されたりすることを甘んじてくれる氣はないか。この俺に心ゆく限り可愛がらしてくれる氣はないか。俺はお前の爲にどんなに心をくるしめたらう。俺の顏をごらん。俺の心はお前にはわかるだらうね。

腰　わかります。あなたはお人のわるい方、何も恐れない方、思ふまゝに氣樂にふるまつてゆく方。しかし妾はさうは參りませぬ。妾は生きてあなたのおそばにゐればいつでも心ぐるしくて仕方がありません。妾には樂しいことと、安樂なことは何となく親しむことが出來ません。あなたのおそばに生きてゆくのは針のむしろに坐つてゐるやうな氣がいたします。妾はどうしても死ぬ人間でございます。生きてはゐられない人間で御座います。

殿　俺にはお前の心はよくわかつてゐる。しかしどうかして生きてゐてもらひたいのだ。

腰　（急に又元の傲慢な態度にかはる）殿樣、本當は今迄申したことはうそで御座います。妾は殿樣を戀したことは本當はたゞの一度も御ざいませぬ。妾は早く殺していたゞきたい許りにつくりごとをしやべつたのです。妾は本當はあの男の方にほれてゐたのです。妾は殿樣を昔も今も輕蔑してをります。犬猫にもおとる方と思つてゐます。法律も、國も、世間も、殿樣の眼中にはありませぬ。あるものはたゞ、妾許り、妾をなぐさまうと思ふ心許り。犬猫にもおとつた方とは殿樣のことです。お殺しになりたくなければ殺して戴きたくはありません。誰が殺されるのを好みませう。妾が死にたがつたのも皆うそで御ざいます。どんなことをしても殿樣に妾を殺すお力がないことを重々知つてをりました。女のくさつたやうな殿樣にどうして妾が殺されませう。妾はそれをよく知つてをりました。それで狂言をいたして居りましたのです。このぐらゐあなたをもてあそべば妾もいくらか腹がすきました。殿樣、さよなら。隨分と餘興を見せていたゞきました。もうこの上見せて戴くには及びますまい。さよなら。お人のよすぎる殿樣、さよなら。（退場しようとする）

殿　まて！　そんな狂言を演じても、俺は殺してやらうとは思はない。

腰　難有う、この上もない蟲のいゝ方。まだなぶられ方がたりませぬか。さよなら。

殿　まて！　矢張りお前を殺してやらう、お前は生きてゐるより死ぬ方が本當らしい。お前のやうな女を生かしておくのは迷のたねだ。

腰　切れるならお切りあそばせ。

（殿樣本當に切る眞似をする、女は動じない。）

腰　貴君には切れないにきまつてゐます。さよなら。

（殿樣狂へるやうに。）

殿　お前の思ひは叶へてやる。（立派に首を切り落とす）あはゝお前の望みは叶へてやつた。俺はお前のことを思ひだす度に強くなるだらう。それにしてもお前はあまり弱かつた。（首を手にとり見つめながら）美しい顏だ、又とない淸い顏だ。（暫く見つめてゐる、狂へるやうに）誰か！　誰か！

（遠くて答へあり、すみやかに。）

――幕――

或る日の一休

登場人物
一休和尚
寺男
土器賣
武士
野武士

山の小さい庵、冬。晝近かく。

庵の眞中に圍爐裡あり、一休圍爐裡のわきに蒲團着てれてゐる。寺男圍爐裡にあたつてゐる。一休目をさまし欠伸をする。寺男一休に話かける。

寺男　和尚さん。和尚さん。
一休　なんだ。
寺男　腹がへりましたな。
一休　腹もへるだらう。一昨日から何にも食はないからな。しかしもう暫く我慢しろよ。その内にいゝ小鳥でもひつかゝるだらうからな。
寺男　それでも隨分腹がへりましたな。
一休　そんなことを云ふなよ。そんなことを云はれると、どうやら俺も腹がへつて來たやうだ。
寺男　和尚さんも隨分お腹がへりましたらう。
一休　お前の方が働くだけなほへつたらう。俺は寢て許りゐるからな。だが可笑しなもので腹がへつて來たよ。何か入れてやらないと腹の蟲が承知しさうもなくなつて來た。
寺男　和尚さん、本當に何時になつたら御飯にありつけましような。
一休　もう何處かで人が死んでもよさゝうなものだ。その内引導でもたのみにくるだらうよ。
寺男　それがあてになりませんからな。
一休　何處か近處にお前の知つてゐる奴はないか。
寺男　處が一人もありませんので。
一休　さうか困つたな。（一寸考へて）しかしまて、何處かに心張棒があつたな。
寺男　ありますよ。
一休　それをよこせ。
寺男　なにをなさるので。
一休　うまいことを考へたのだ。
寺男　どんなことをお考へになつたのです。
一休　飯にありつけることを考へたのだ。

寺男　この心張棒で。

一休　さうだ。それにお前の手ぬぐひをよこせ。

寺座　なにをなさるのです。

一休　一寸鉢卷をするのだ。

（一休和尚起きあがり鉢卷をして心張棒をもち下駄をひつかけ家をとび出て、山路を急いで下りてゆく。）

寺男　氣まぐれの和尚さんは又どんなことを考へたのだらう。あゝ腹がへつた。しかし思ひ切つて和尚さんがどんなことをするか見に見かう。和尚さんのすることだからまちがひもあるまいが、今の有様は一寸氣にかゝる。

――舞臺廻る――

山道。山道を土器賣が土器をかごに一ぱい荷つて歩いてくる。

土器賣　あゝくたびれた。

（荷をおろして休む。この時一休が手ぬぐひで鉢卷をして、心張棒をもつてしのび足で登場、土器賣を見ると、一休「やい、その土器を貸さないか、俺は一昨日(をとゝひ)から何にも食はないのだぞ。」と大音に叫びながら心張棒をふりまはして土器賣に打つてかゝる、土器賣おどろいて品物をすてゝ逃げうせる。一休土器賣の逃げうせたのを見送り、微笑みながら鉢卷をとり、心張棒をすてゝ土器賣の荷物を荷つて心張棒をひろひあげ杖のかはりにそれをつきながら、土器賣の逃げた反對の方へ急ぎ足に行かうとする。さうして寺男にばつたり出逢ふ。）

寺男　和尚さん。その土器はどうなさつたのです。

一休　あはゝゝ、この土器か、この土器は土器賣から借りて來たのだ。

寺男　借りてどうなさるのです。

一休　これを店へ持つて行つて、その金で飯を食はうと云ふのだ。お前にも食はせてやるよ、あとからついておいで。

寺男　よくかしてくれましたね。

一休　あはゝゝ、それはこの手ぬぐひと心張棒のおかげで貸してもらへたのだ。

寺男　その手ぬぐひと心張棒をどう云ふ風におつかひになつたのです。

一休　この手ぬぐひで鉢卷をしてな、この心張棒をふりまはしてな、土器賣をぶんなぐる眞似をしたのだ。さうしたら人のいゝ土器賣は土器をおいて逃げていつたのだ。

寺男　そ、それではつまり和尚様は追ひはぎをなさつたのですね。

一休　見やうによつてはさうなるかも知れない。
寺男　訴へられてつかまつたらどうなさります。
一休　さうなれば一興だ。まさか餓ゑ死させもしまいからな。
寺男　和尚さん。本當にひどいことをなさりましたね。
一休　なにもひどいことはしないよ。俺のすることにまちがひはないから安心するがいゝ。土器賣はあんまり金持顔もしてゐなかつたが、今朝の飯は食つて來たやうな顔をしてゐた。この土器を一寸借りたつてまさか二日間飯の食へないこともあるまい。
寺男　それでも追ひはぎは餘りよくはありませんね。
一休　いや餓ゑてする泥棒はわるいことではない。自分の身體を餓ゑさすより泥棒する方がいゝのだ。餓ゑずに泥棒をすることは俺でも賞めはしない。しかし餓ゑてする泥棒は賞めていゝ。俺は前から餓ゑたら泥棒をしてやらうと思つてゐた。さうして餓ゑた奴の手本にならうと思つてゐた。
寺男　和尚さん、それでも貴君がおたのみになればよろこんで金をくれる人が御座いませう。何にも土器賣のやうなものゝその日〳〵の商賣道具をおとりにならないでも。
一休　さうではない。その日ぐらしの土器賣のやうなものの商賣道具でさへ餓ゑたものはぬすんでいゝと云ふことを俺は皆に知らしてやりたいのだ。俺のすることにまちがひはない。安心するがいゝ。さ腹がへつたらう。これを賣つて飯でも食はう。なんなら一杯のましてやつてもいゝ。さあ行かう。
寺男　和尚さん。なんだか氣になりますな。
一休　物の道理のわからぬ奴だ。さあ行かう。
寺男　それでも。
一休　氣にすることはない。腹がへつたものは何にしてもかまはないのぢや。さあ行かう。腹がへつて動けないか。
寺男　動けますことは動けますが。
一休　氣になるのか。顔にも似合はない臆病者だな。
（この時一人の武士登場、うや〳〵しく一休に近づき。）
武士　御貴殿は一休さまでは御座りませんか。
一休　さうぢや、一休ぢや、何か御用かな。
武士　はつ。實は私の父が今朝身まかりまして。
一休　さうか、それはいけなかつたな。
武士　父が臨終に引導は是非一休さまにお願ひしたいと申しましたので。
一休　さうか、それは殊勝な御心がけぢや、きつと極樂往生なさるやうに引導をして進ぜよう。

武士　早速御承知下さいまして有難う存じます。

一休　實は一昨日から一文なしで、この男もわしも一昨日から何にも食はないので腹がぺこ〳〵なのだ。もし金の持ちあはせがあつたら、御禮を今もらひたいのだが、金の持ちあはせがあるかな。

武士　はつ。わづかばかりなら持つてをります。

一休　わづか許りで結構、御遠慮なくお出し下さい。

武士　はつ。（武士持ちあはせの金を皆一休にわたす）

一休　あはゝゝゝ、貴君は正直な方だ。なにも全體およこしになるには及ばない。三人で山わけにしましよう。（一休金を三つにわかち、その一つを武士にわたし、他の一つを寺男にわたし、あとの一つを自分のふところにしまふ）

一休　それぢや早速參らうかな。（寺男に）お前は氣の毒だがこの土器をさつきの土器賣りにかへして來ておくれ、（土器を寺男にわたし）このかごに處と名がかいてあるからな。さうしてもう不用になりましたからお返しします。先刻は失禮いたしましたと、よく〳〵禮を云ふのだ。それで向ふがおこつたらあの僧主は一休といふ狂ひ坊主で餓ゑればぬすみをしてもいゝと高言して、よくこんなことをして毎度私が困るのですとか何とか云つて頭をぺこ〳〵さげて來てくれ。さうしてお禮のしるしとしてこの金を渡してやつてくれ。（一休いくらかの金を武士から紙をもらつてそれにつゝんで渡す）さうして何處かで飯を食つておいで、酒がのみたければのんでもいい、しかし空腹（すきはら）にのむのは遠慮しろよ。

寺男　はい。

一休　この金を渡すから歸りに米と麥と味噌と大根を買つて來てくれ。

寺男　はい畏りました。

一休　（武士に）おまたせしました。御一緒に參りましよう。

武士　お仕度は？

一休　いや、口さへ持つてゆけばそれで御尊父を極樂往生させるのには充分です。しかし引導を渡す前に飯を戴きたいのですが。

武士　畏りました。

一休　何しろ一昨日から何にも食はないのですからな。わしの顏を見てもおわかりになるだらうが、（寺男に）お前は御苦勞だな。

寺男　どういたしまして。御飯にありつけると思ひましたら腰に力が入つて參りました。それでは行つて參ります。

一休　なるべく怒らさないやうにしろよ。

寺男　はい。

（一休と武士は武士の出て來た方へ。寺男は土器賣の逃げた方へ退場。）

――二三分假りに幕をおろす――

幕あがると第一場と同じ舞臺。同日夕。圍爐裡のわきに寺男心持ち醉つていゝ心持に居眠りしてゐる、一休の着てゐた蒲團を着てゐるが、半ば蒲團がはづれてゐる。圍爐裡の火は殆ど消えてゐる。其處へ一休歸つてくる。寺男の寢てゐるのを見て、そつと庵に登り、蒲團をちやんと寺男に着せてやり、圍爐裡に火をたいてそれに鐵瓶をかけ明りをつける。さうして暫く沈默。覆面の野武士おとづれる。

野武士　おたのみ申す。

一休　何に御用。

野武士　金の無心ぢや。

一休　面白い處に金の無心に參られたものだ。

野武士　さうぢや、破戒の坊主の處に無心に參つたのぢや、有金を皆よこせばよし、さもなければ貴殿の細首をもらひ受けるまでぢや。

一休　恐ろしい勢ひですな。何にもそれ程迄に云はずとも有金はのこらず出します。まあ湯でも一ぱいおのみ下さい。

野武士　そんなものはのみたくない。

一休　さうですか、それならば暫らくお待ち下さい。今のこらず有金を差し上げますから。しかし差上げると云ふ程はありませんよ。

野武士　ないものは出せとは云はぬ。

一休　中々道理のわかつた方だ。（一休自分の懷中から一つの紙づゝみを出し、寺男の枕元においてある紙づゝみをとつて中をあらためずに野武士にわたす。野武士あらため見て）

野武士　之でのこらずのことはあるまい、まだかくしてゐるだらう。

一休　疑がふならさがして御覽なさい。

野武士　本當は拙者は金がほしくて參つたのでは御座らぬ。貴殿の首がほしくつて參つたのぢや。（野武士太刀に手をかける）

（この時寺男目をさましおどろいて蒲團をかぶる。）

一休　わしの首がほしい、こんな首が何かになりますかな。

野武士　さうぢや、貴殿を生かしておくのは國を亂す基ぢや。

一休　なぜかな。

野武士　貴殿は生佛とあがめられる位置にありながら、酒

をのみ、肉をくひ、殺生をなし、遊廓にかよひ男の兒をもてあそび、詐欺をなし、おひはぎをなし、春畫にひとしい詩をつくる、貴殿のやうな坊主を生かしておくのは拙者の腹の蟲が承知せぬのぢや。

一休　御尤なお考ぢや。しかしわしは酒をのんだ方がいゝと思つた時に酒をのんだのぢや、肉を食ふ方がいゝと思つた時に肉を食つたのぢや。殺生をした方がいゝと思つた時殺生をしたのぢや。すべてしていゝと思つた時にしたのぢや。一體之等のことはお前さんの思つてゐる程の罪ぢやないのぢや。釋迦が何と云はうとも。

野武士　どう云ふ時に酒をのんだり肉を食つたりしていゝのか。

一休　たとへば自分が私かに酒をのんだり肉を食つたりしておきながら他人の酒をのむだり肉を食つたりするのを墮落呼ばはりするやうな男の前では、酒をのんだり肉を食つたりしてやるのぢや。

野武士　僧侶の身でありながら殺生をしてもいゝ時があるか。

一休　さうぢや、殺生をすると地獄におちると善男善女をおどしつける男の前では殺生をすましてして見せるのぢや。

野武士　遊廓に行つていゝ時があるか。

一休　道樂者でも遊女でも心の持ちやうでは覺りを得られることを知らしにゆくのがなぜわるいのぢや。わしはお前さんのやうに他人に嚴格な武士よりは遊女が好きぢや。

野武士　なぜ男の兒を弄ぶのがいゝのぢや。

一休　男の兒を弄ぶのはいゝことではない。しかしいやな男にねらはれてゐる男の兒を奪ひとるのはいゝことなのぢや。わしは男の兒が可憐で弄ぶ氣にはなれなかつたが、弄びながらでも立派な男にしこむことは出來るものだと思つてゐる。

野武士　なぜ詐欺をした。

一休　食ふに困つてゐる奴を助ける爲だつた。又世の中のおろかな奴の目をさます爲でもあつた。又腹の蟲を喜ばせる爲でもあつた。

野武士　なぜ追ひはぎをした。

一休　一昨日から飯を食はなかつたからぢや、わしは何時ぞや、餓ゑた一家の主人が自分の小供の腹がへつたので火のつくやうに泣くのを見兼ねて大福もちをぬすんで、ひどい罰を受けた話を聞いてたから、餓ゑたらぬすみをしてやらうと思つてゐたのぢや。お前さんは二日飯を食はなかつたことがあるかな。お前さんに小供があつて、それが餓ゑ死しさうになつたらどうなさるかな。わしは

餓ゑてする泥棒をひどく罰する奴が腹が立つのぢや。
野武士　どんな時に春畫のやうた詩をつくつたのぢや。
一休　若い僧侶達が淫慾を恐れ過ぎる爲にどのくらゐ苦しんでゐるか、お前さんは知るまいがな、わしはそれを知つてゐるのぢや。さうしてさう云ふ人々に同情してゐるのぢや。わしでさへ淫慾を時々燃やす事があると知つたら、彼等は幾分か安心するだらう。わしはさう思つてゐるのぢや。（一寸間おいて）人間は互に責むべきものぢやない、助けあふべきものぢや。それともお前さんは罪にけがされたことのない男かな？　もしさうならばわしは生れて始めて罪にけがされたことのない人間を見るのぢや。とつくりお顔を拜まして下され。

（野武士金のつゝみを一休の前にそつとほりなげて一目散に逃げて行く、一休は何事もなかつたやうに手をあぶる。寺男蒲團から首を出し。）

寺男　和尚さん助かりましたな。私はどうなるかと心配してをりました。
一休　あはゝゝ。簡單な人のいゝ可愛いゝ野武士だ。お前のはうの首尾はどうだつた。
寺男　上々で御座いました。あなたの一休樣だと云ふことを云ひましたら、さうおつしやつて下さればよろこんで土器を進上いたしましたのにと申しました。實にいゝ奴でした。
一休　さうか、どうしてわしはかう皆に愛されるのかな。

（寺男起きかける。）

一休　もつとねるならねてゐろ、まだねむさうな顏をしてゐる。
寺男　それでも御飯の仕度を。
一休　いや、それはわしがするからいゝ。二日もかゝらずに飯をちやんとつくつて見せるわ。
寺男　それならおたのみして、もう一眠りいたします。（寺男又ねむる）
一休　今度お前が目をさます時分には飯の仕度が出來てゐるだらう。（暫く間おいて）どれ米でもとがうかな。（一休立ち上る）

――幕――

わしも知らない

登場人物

釋迦
目蓮
流離王
その寵姫
好苦梵士
小供、侍、僧侶、腰元等大勢

一

釋迦一人何か考へながら靜かに林の内を歩いてゐる。目蓮、釋迦を搜しに來て見つける。目蓮は心配にたへかねてゐる。

目蓮　一寸御話いたしたいことが御座いますが。御邪魔にはなりませんか。

釋迦　目蓮か、なんだ？

目蓮　はい。（釋迦と顏を見合せ、涙ぐむ）

釋迦　……………。

目蓮　世尊の御心の内を御察しいたします。

釋迦　目蓮、御前もさぞつらいだらう。人々はまだ氣がつかないらしいな。

目蓮　人々はたゞ恐れてをります。しかしまだ望みはもつてをります。

釋迦　さうか。いぢらしいことだな。

目蓮　どうしても助かりませんか？

釋迦　今度は助かるまい。

目蓮　あなたはどうなさる御つもりです。

釋迦　わしは默つて見てゐる心算(つもり)だ。それより他(ほか)はわしには許されてゐない。

目蓮　それでも、それではあまりむごたらしくはおぼしめしませんか。

釋迦　むごすぎる、さすがのわしも今度は少し迷つてゐる。だがそれはわしには許されてゐない、わしはたゞ人々の虐殺されるのを見てゐなければならないのだ。

目蓮　流離王と云ふ人間は恐ろしい人間ださうで御座います。

釋迦　流離王が恐ろしいと云ふよりも、流離王の内に燃えてゐる恨が恐ろしいのだ。流離王は先年わが釋種の爲に恥かしめられたことを報いないでは我慢が出來ないのだ。さうして今この城の内に樂しさうにくらしてゐる人

人は皆それが爲に近い内に虐殺されるのだ。殊に可哀さうなのは男の子や女の子だ。目蓮、あすこに樂しく遊んでゐる子供等は皆近い内に流離王の軍勢につかまへられて弄殺にされるのだ。
目蓮　はい私もさうかと存じてをりました。あの子供等の可愛いゝ姿を見るにつけて私は涙がこぼれます。
釋迦　わしもだ。あの子供等はあまりに可愛すぎる。わしはあの子供等の顏をまともに見ることが出來ないのだ。
目蓮　私もで御座います。
釋迦　わしは人間の運命はすべて知つてゐる。わしはわしの力で助けることの出來ない多くの人間の運命を知つてゐる。わしはそれを見る度に可哀さうだと思はぬことはない。だが今度程可哀さうだと思つたことはない。だがわしはたゞ見てゐるより仕方がないのだ。
目蓮　それでも。
釋迦　さうだ。それでもだ。しかしそれでも見てゐるより仕方がないのだ。お前はまだ眞に自分の力を知らない。わしの力を知らない。運命の力を知らない。だからどうかすればどうにかなると思つてゐられる。しかしわしにはわしの力がわかり過ぎてゐる。だからわしは今度はただ見てゐるより仕方がないのだ。
目蓮　それならばどうしてもあの可憐な人々をたゞ見殺しにするより仕方がないのでございますか。
釋迦　さうだ仕方がないのだ。
目蓮　あの人達の最後の希望も消えたので御座いますか。
釋迦　さうだ、消えたのだ。
目蓮　世尊！
釋迦　目蓮。
目蓮　恐ろし過ぎることで御座いますね。
釋迦　さうだ。
（小供の群、遊びながら顯はれ、二人を見、二人を圍んで環をつくつてぐる／＼廻りながら遊ぶ。）
釋迦　可愛いゝ奴だ。
目蓮　本當に……（目蓮涙ぐむ）
男の子一　小父さんが泣いてらあ。
女の子一　何が悲しいの？
男の子二　目にごみが入つたの！
目蓮　あゝ目にごみが入つたのだよ。
女の子二　見て上げましやうか。
目蓮　いゝよ。もうとれたから。それよりいゝ子だから向ふへ行つてお遊び。小父さん達は今用があるのだから。
男の子一　向ふへ行かう。
皆　行かう。行かう。（なだれるやうに駈けて消える）
目蓮　世尊！　私はもうどうなつてもよろしい。どうかあ

の子供等をたすけて下さい。たすけて下さい。

釋迦　わしだつて助けたい。しかし助けることは出來ない。それがこの世の運命なのだ。

目蓮　どうしてもあの子供等は皆、殺されるのでございますか。

釋迦　さうだ皆殺されるのだ。一人のこらず殺されるのだ。それも一通の殺され方ではない。

目蓮　默つてゐて下さいまし。默つてゐて下さいまし。

釋迦　お前は人の運命を見るのが怖ろしいのか。しかし可哀さうな小供達た。何も知らない。何も知らない。だが殺されなければならない。

目蓮　あゝ、私にはどうしていゝかわかりませぬ。私の信仰の弱いことはいくらでもせめて下さい。私はどうしていゝかわかりません。

釋迦　（嚴かに）目蓮！

目蓮　はい。

釋迦　すべてのことは過ぎてゆく。過ぎてゆく嵐た。過ぎてゆく洪水だ。過ぎてゆく戰た。死屍はいくら山を築かうとも、血はよし川の如く流れやうとも、斷末魔の叫びは天地に響かうとも必ず過ぎてゆく。さうしてゆく先きは海だ。涅槃だ。

目蓮　（他の事に心を奪はれてゐる者のやうに）涅槃で御座りますか。

（と云ふと同時に何か會得したやうに嚴かな表情をする。二人沈默。退場。）

二

迦毘羅城の一室。始め誰もゐない。たゞ下の方ではげしき戰ひの有樣、のゝしる聲、わめく聲、つるぎの音、この時あわたゞしく二人の女、極度の恐怖におそれながらかけ込み、逃げまはる。それを追ひかけて、好苦梵士四人の兵士をつれてをどり込む。

好苦　この室を血でけがしてはいけない。その女子供を窓から投げ捨てよ。

（兵士ども女を室から投げすてる。）

好苦　よし〳〵。（窓の處にゆき）味方の大勝利ぢや。敵はのこり少なになつた。王樣もさぞ御滿足であらう。（一時に下て萬歲の叫び聲聞える。好苦梵士も窓から下に向つて手をふる）どれ、王樣をこゝに御案内申さう。室をかたづけておけ。

兵士皆　はつ。

（好苦梵士退場兵士室をかたづけながら。）

兵士一　王樣の恨みも之ですつかりはれた。

兵士二　はれ過ぎたやうなものだ。

兵士三　男も女ものこらず殺した。子供は皆つかまへた。
兵士四　それで王樣を恥かしめた奴はのこらず死んだわけだ。
兵士三　なにを王樣はそんなにお憤りになつてゐるのだい。
兵士一　君はまだ知らないのかい。先年王樣がこの城にお客樣で御いでになつた時、うつかりと新築の講堂があつたので、お入りになつて、さうして其處でお休みになつたのだ。
兵士三　あゝ。
兵士一　處がその家は元來こゝの王樣になるべきはずの釋迦の爲にたてたもので、釋迦が入る迄は誰も入ることが禁じてあつたのだ。其處へ釋種の奴が兼々生れが卑しいといつて輕蔑してゐた、我等の王樣が入つたので、釋種の奴等はすつかり怒つたのだ。さうして皆で王樣を恥かしめたのだ。さうして王樣のお歩きになつた處は穢れたと云つて皆けづりとつたのだ。さうしてお休みになつた處はすつかりつくりなほしたのだ。だから王樣はすつかりお怒りになつたのさ。
兵士三　さうかそれではお怒りになるわけだね。
兵士一　それでつまり今度はその復讐なのだ。腹いせなのだ。
兵士二　（口を入れ）だからのこらず殺せと云ふ御命令だつたのだ。
兵士三　さうか。それですつかりわかつた。（兵士四。窓にゆき）
兵士四　隨分高いよ。さつきの二人の女はひしやげてしまつてゐる。女を殺すのは勿體ないな。
兵士二　何を云つてやがるのだ。（窓により）隨分死んでゐるな。敵の死骸許りだ。
兵士一　（窓にゆき）今迄あいつ等が皆生きてゐたのだと思ふと可笑しいね。
兵士三　何人位ゐ死んでゐるのだらう。
兵士四　五六萬はゐるだらう。見渡す處、死骸許りだからな。大勝利だ。
兵士二　足音がする。きつと王樣だ。

（皆、お出迎ひに入口の方にゆく。流離王、好苦梵士等をつれて機嫌よく入つてくる。流離王、窓より下を見る。下で兵士共の狂へるやうに萬歲を叫ぶのが聞える。王樣それに會釋する。）

流離王　（好苦梵士に）味方は大勝利だつた。之で數年來のわしの胸の中のうさもはれた。子供の外は一人殘らず殺したらうな。わしを恥かしめた奴は一人のこらず殺したらうな。

好苦　御意の通りで御座います。

流離王　それでわしの胸もはれた。小供は何人位ゐ捕虜にいたしたかな。

好苦　男と女、各々五百人づゝで御座います。

流離王　小供は何にも知らない。許してやつてもいゝと思ふが、お前はどう思ふ。

好苦　御言葉に背きまして恐れ入りますが、決してお許しになつてはいけないと存じます。彼等は何時までも子供では御座いません。さうして一生、自分達の生命の助けられたことを難有がらずに、親兄弟の殺されたことをうらみます。さうしてどんなことをたくらむかわかりませぬ。之はどうしてもお殺しになるより仕方がないと存じます。

流離王　何時もながらお前の云ふことは尤だ。早速殺させることにいたさう。

好苦　それがよろしう御座います。どうして殺させましやう。何か面白い、お樂みになるやうな、さうして後世にまで語り傳へられるやうな趣向で殺させましやうか。さうして意久地のない釋迦の度膽をとりひしいでやりましやうか。

流離王　それは面白いだらう。

好苦　私にお任せ下さいまし。

流離王　よし。

（好苦梵士、兵士の長を呼び何か囁く。兵士の長畏つてさがる。）

流離王　どう云ふ趣向ぢや？

好苦　面白い殺させ方をいたさせますから、御覽下さいまし。

流離王　お前の趣向なら、さぞ面白いことであらう。兵士共、苦しうない。見たければ見るがいゝ。

兵士皆　はつ。

（流離王、好苦梵士と窓より下を見、兵士達は他の窓にゆき下を見る。）

流離王　死骸の山を築くのか。

好苦　いえ、空地をつくるので御座います。

流離王　さうか。この土地はさぞ肥えることであらう。穴をほり出したな。生きうづめにする心算なのか。

好苦　まあ見てゐて下さいまし。

流離王　穴の數は千はないな。

好苦　五百で御座います。

流離王　さうか。一つの穴に男の子と女の子を入れるのだな。

好苦　さうでは御座いません。女の子の方は國へ土產に持つて歸つて、あの波咤羅の池に投げ込まうかと存じてを

ります。

流離王　それもよからう。あの池はどうせうめることになつてゐるからな。その上に宮殿でも建てさせようか。穴はあれでもういゝのか。餘り淺すぎはしないか。

好苦　まあ見てゐて下さいまし。（好苦梵士下に向つてなにか合圖をする。暫くして）

流離王　あはゝゝゝ子供等は皆わしの方を見てゐる。あの何とも云へない顏はわしに助けてくれと云つてゐる。

好苦　助けろとおつしやつてはいけませんよ。

流離王　誰が助けるものか。（暫く沈默）皆首だけ出してゐるな。之からどうしやうと云ふのだ。段々面白くなつて來たな。

（好苦、再び合圖をする、下の方にて數百人の士卒が重いものをころがすやうなカケ聲聞ゆ。暫くして不意にやむ。）

流離王　あの何千貫あるかわからないやうな車はどうしたのだ。

好苦　あれは先き程見つけた車で御座います。釋種の奴等が地ならしにでもつかつたものかと思ひます。

流離王　あの車をどうするのか。あゝさうか。あの車であの子供等の頭をひきつぶすのだな。

好苦　御意の通りで御座います。

流離王　さすがはお前の考へぢや。

（好苦梵士三度目の合圖をする。下で再び以前のカケ聲聞ゆ。窓によつて見てゐる、さすがの兵士達も餘りの殘酷さにおどろいてゐる。一人の兵士は腦貧血を起してしやがんで頭を押へる。）

流離王　好苦梵士。面白く子供の頭がつぶれてゆくな。釋迦にこの有樣が見せてやりたい。

三

「世尊には拘拘留園におはしまして、流離王が爲す業の一伍一什を御覽じ給へど、只一言も宣はず、十大弟子五百の阿羅漢皆お側に侍りて默然」たり。暫くして目蓮釋迦の前に進み。

目蓮　矢張り私達はこゝにかうしてをりますればいゝので御座いますか。

釋迦　いゝのぢや。

目蓮　今、七萬の釋種は皆殺しにあひ、五百の童男、五百の童女の生命は流離王の弄ものにならうとしてをります。それでこゝにかうしてゐりましていゝので御座いますか。

釋迦　いゝのぢや。

目蓮　阿羅漢の内には親兄弟を見殺しにするのがつらくつ

て、自ら縊死ぬ方がいゝと思つて居りますものも澤山御座います。それでもこゝにかうして皆を見殺にしてもいいので御座りますか。

釋迦　いゝのぢや。

目蓮　阿羅漢の内には迷を起しかけてをるものも御座ります。なにとぞ、こゝにかうしてをります理由を教へて戴きたう御座ります。

釋迦　目蓮。お前にも似合はないことを云ふな。我が教は過去、現在、未來を通じて宇宙の調和に從がふ道ぢや。數十萬の人の生命、何萬の子供の生命がよし惡人の手に失なはれやうと、我が教は儼然と聳えてゐる。我が教は現在のみの教へではない。我が教はやがて失ふこの世の生命を無上のものとはしてゐない。我が教は我等の生命によつて失はれはしない。又流離王の虐殺で失なはれもしない。もしわれ、現在の情にうごかされて流離王の手許に走れこむか、或は流離王の前に憐みを請へば、我が教は立ちどころに崩れるのである。わが教は宇宙の教ぢや。過去、現在、未來の教ぢや。一時のこの世の愛によつて亂されるべき教ではない。もし汝等の内に我が教に心を滿すことが出來ず、今虐殺されつゝある憐な人間の爲に自分の身を捨てないでゐられないものがあれば、われとわが身を捨てるがいゝ。だがわが教、過去、現在、未來をつらぬくわが教に從がふものはこの處にわれと共にゐるがいゝ。さうして亂されかけたるこの世の狂ひをくひ留めるがいゝ。すべてのものは消えてゆく、しかしわが教は消えてはゆかない。わが教に從がふものは、宇宙の心を心にしなければならぬ。涅槃の心を心にしなければならない。今、何萬の人は歸るべき處に歸つた。目蓮。お前はさうは思はないか。

目蓮　はつ。（目蓮、畏まり禮なし、座にもどる）

釋迦　（まぼろしを見るやうに）今五百の男の子は首だけ出して生きうづめにされてゐる。鐵の車にその首をつぶされてゐる。あのわめく聲、あの骨のくだける音。あれが流離王や好苦梵士の出來る最も強い仕事なのぢや。彼等はわが教をあのやうにくだきたがつてゐる。しかしわが教はくだかれない。あゝ。すべては恐ろしい靜かさに歸つた。五百の男の子は生れた處に歸つたのぢや。憐れなのは五百の女の子ぢや。彼等は救ひを求めて救ひを得ない。だが波陀羅の池は彼等を故郷に歸すであらう、さうして流離王も、好苦梵士もやがては自らきづく高樓と共に燒け死ぬのぢや。

（誰れ云ふともなく、嬉しげの息聞え、嬉しげに「それは本當ですか」と云ふ聲聞ゆ。）

釋迦　お前達には流離王や、好苦梵士の燒け死ぬのが嬉し

いのか。彼等は燒かれて死ぬ。しかしそれは喜んでいゝのか、悲しんでいゝのかわしは知らない。彼等はわしとちがう力に導かれて生きてゐる。彼等は燒かれなくともやがて死ぬ。しかし彼等は燒き殺される。さうして彼等と共に何千と云ふ可憐な男や女、小供や老人も燒け死ぬのぢや。わしは彼等も憎めない。

（沈默。）

四

黑い幕の前。土地の若い男三人。

甲　いゝ月だ。

乙　今日も亦あのお城では酒宴だ。

丙　今日は七日目ぢやないかい。

甲　何が。

丙　七日の内に必ずあの七重のお城が燒けて、あすこにゐるものが殘らず燒け死ぬと云ふ風評があつてから。

乙　さうだ七日目だ。

甲　燒けさうもないね。

丙　俺はきつと燒けると思ふよ。あんな慘酷なことをして建てたお城だからね。

乙　あのお城の床下では今でも女の子の泣き聲が聞えるさうだ。何しろ五百の女の子があの下に生き埋めにされてゐるのだからね。

甲　何にしろ恐ろしいことだつた。

丙　あのお城は燒けないはずはない。きつと燒ける。

甲　燒けないよ。

丙　賭をしやうか。

甲　しやうとも。

乙　あの人達は何時でもあの七重の塔の一番高い室で酒宴をしてゐるね。もし火事があつたらどうする心算だ。

丙　あいつ達は流言を輕蔑してゐることを人々に見せてゐる心算でゐるのだ。それが天罰なのだ。

甲　天罰なんかあるものか。

丙　天罰はなくともお城は燒けるのださうだ。さうしてあすこにゐる人々は皆燒けるのださうだ。王樣も好苦梵士も。

乙　勝手に燒ける奴は燒けるがいゝ。しかし又新らしい王樣がくるだらう。

甲　それは來る。

乙　流離王樣よりいゝ王樣がくればいゝが。どうでもいゝや、勝手になるがいゝ。

甲　何しろ燒けないよ。

丙　何しろ燒けるよ。

乙　今日は亦盛な酒宴をやつてゐるらしい。

甲　燒けない方がいゝ。
乙　どつちでもいゝや、俺に損得はないからね。
丙　燒ける方がいゝ。
丙　もう少し向ふへ行かう。

（三人退場。黑い幕とれる。流離王の宮殿の最も高き一室。酒宴の最中。）

流離王　好苦梵士、今日は七日目だやな。七日目ももうぢき過ぎる。
好苦　さやうで御座います。七日目も殆んどすぎました。
流離王　あはゝゝ。火事もないやうぢやな。
好苦　流言と云ふものは かうしたものにきまつて をります。
流離王　大いに飮まう。皆遠慮をするな。（側に侍つてゐる寵姫に）お前はまだ怖いか。
寵姫　はい。どうもまだ氣がおちつきません。早く夜があけてくれゝばいゝがと思つてをります。
流離王　もうぢき夜もあけるだらう。（舞踏をする男女等に）又舞へ。

（男女數名音樂にあはせて舞ふ。腰元共見てゐる人々に酒をついで廻る。舞はをはる。）

流離王　御苦勞。酒をついでやれ。（寵姫に）久しぶりに今夜はお前の舞を見せてもらひたい。皆のものに見せてやれ。
寵姫　今夜だけはお許し下さい。
流離王　いや、今夜だから是非舞へ。
好苦　是非私どもゝ拜見いたしたく存じます。
寵姫　それでも今夜だけは、胸さわぎがしてとても舞ひ終ることが出來ませんから。明日になればお祝ひに……。
流離王　今日だから是非舞へ。わしの命令だ。

（寵姫是非なく立ち上り舞ふ。まさに舞ひの終らんとする時、不意に風が起り、家をゆすぶる。寵姫顏色を失ひ、自失して立つ。又心づきからく舞ひ終る。風は益々ふく。寵姫席にもどり流離王の手をかたく握る。一寸皆無言、風の音に耳をすませる。流離王氣がついたやうに。）

流離王　あはゝゝ。皆そんなに風が恐ろしいのか。臆病どもだな。風がなんだ。七日目と云ふ流言が恐ろしいのか。風よ。もつと吹けよ。吹けるだけ吹け。さうして臆病共を嘲笑へ。あゝゝ面白い。好苦梵士お前は風を恐れはしまい。
好苦　御意の通りで御座います。私達は天も恐れません。地も恐れません。死も恐れません。恐れるのはたゞ我が君の御心に背くこと許りで御座います。釋迦を信じてゐる人々はこの風を喜びましやう。さうして今にもこの宮

殿が燒けるかと心待ちをしてゐるで御座いましやう。しかし夜があけて見ると風はやんでをります。うらゝかな朝が來ます。さうしてこの宮殿は以前にもまして安らかに麗はしく輝くことで御座いましやう。さうして我が君の光はいやが上にも輝き渡ることで御座いましやう。
流離王　よく云つた。好苦梵士、お前は本當に我が片腕だ。我が子だ。我が友だ。我が師だ。お前がわしのそばにゐてくれるのは獅子が翼を得たやうなものだ。（寵姬に）さあ好苦梵士に酒をついでやれ。
寵姬　はい。
好苦　難有く戴きます。皆、一緖に我が君の萬歲をおとなへいたしましやう。
（皆立つ。）
好苦　萬歲！
皆　萬歲！
（萬歲を三呼す。）
流離王　さあ。皆遠慮なく酒をのめ。今晚は無禮講ぢや。わしは今晚程嬉しいことはない。皆、わしと一緖に喜んでくれ。心おきなく酒をのんでくれ。（寵姬に）お前も腰元どもと一緖に皆に酒をついでやれ。今夜は無禮講ぢや。
（風一きははげしくなる。沈默。）
流離王　（立ち上り）さあ人々舞へ。出來るだけ賑かな曲をやれ。
（人々亂れをどろ。さうして調子にのり切つた時、「火事だ、火事だ」と云ふ聲何處ともなく聞え、あわてる人々の足音亂れ聞こえる。音樂はばつたりやみ、同時に人々舞をやめる。）
流離王　何んだ。火事ぢや？　皆のもの苦しうない。早く逃げろ。好苦梵士、逃げられるか逃げられないか見てまゐれ。
好苦　はつ。
（人々は戶口からとびだし、又室に逃げこみ、窓から下を見たり、戶口から出て見たり、うろたへ切つてゐる。この時一人の腰元飛びこみ、恐怖のあまりうは言のやうに。）
腰元　火事です。火事です。放火です。一人の女が氣か狂つて火をあつちこつちにつけたのです。火事です。火事です。
（人々は決心せるやうに、戶口から消え或は窓からとびおりる。腰元も、無氣味に走り廻つてゐたが、戶口から消える。のこつたのは流離王と、流離王にかぢりついてゐる寵姬と、方々見廻つて歸つて來た好苦梵士の三人。煙は入り出す。）
流離王　（寵姬の耳をおさへ、寵姬の顏を強く胸にあて好苦

梵士に）どうだ望みはあるか。

好苦梵士　御覺悟が大事かと存じます。下はすべて火の海で御座います。

流離王　さうか。

（流離王。いきなり寵姫を突きとばし、寵姫の「あれつ」と言ふ言葉の出るか出ない內に、刀をぬき寵姫をさし殺す。）

好苦梵士　我が君には氣でもお狂ひになりましたか。

流離王　いや、こんなことでは氣が狂はぬわ。わしは流離王ぢや。たゞわしが戀する女の見苦しい樣が見たくなかつた迄ぢや。

好苦　恐れ入りました。

（烟はます〳〵はげし。）

流離王　お前はこの火事をどう思ふ？　天罰だと思ふか。

好苦　いえ、いえ、私はたゞ臆病な女が七日目の內に必ず燒けると言ふ流言を信じ切つて、不安のあまり氣が狂ひ、自ら火を放つたのだと存じます。天罰では決して御座いません。偶然なことで御座います。

流離王　さうぢや、偶然ぢや。偶然ぢや。わしもさう思ふ。釋迦を信じる人々に偶然のことだと云ふことを知らすことが出來ないのが無念ぢや。（戸口からまひ込む煙を見て）だがいゝ。覺悟はいゝか。お前の劍をぬけ。

好苦　はつ。（劍をぬく）

流離王　わしが合圖とともにお前はその劍をもつて美事にわが胸をつらぬけ。わしはこの劍をもつてその時お前の胸をつらぬく。

好苦　畏まりました。

流離王　勇士の最後を後世にまで語り傳へるものがないのが恨みぢやな。

好苦　御意の通りで御座います。

流離王　足の下がそろ〳〵あつくなつて來たやうぢや。覺悟はいゝか。いざ！

（合圖の終るやいなや、互に胸をつらぬき倒れる。煙はます〳〵はげし、三十秒許りして、一人の女逃げこみ、この場の有樣を見て。）

一人の女　王樣が死んだ。王樣が死んだ。王樣が死んだ。

（室の內を逃げまはり、又戸口から逃がれやうとして、煙にまかれたふれる。風一きは強くふく）

五

林、朝早く、うらゝかな天氣、昨夜の嵐を、倒れた木、散つた枝が語つてゐる。小鳥が嬉し氣にさへづつて居る。釋迦、目蓮靜かに登場。

目蓮　うらゝかな天氣で御座います。

釋迦　嬉しさうに小鳥が囀(さへづ)つてゐる。

目蓮　昨日の嵐によく死なゝかつたものでございますね。

釋迦　死んだものがないとも限るまい。生きてゐるものだけがうたつてゐるのだ。

目蓮　昨夜の風は夢のやうで御座いますね。たゞ倒れた木や、散つた枝だけが昨夜の嵐を語つてをりますが。

釋迦　………。

目蓮　世尊。流離王の宮殿も燒けたさうで御座いますね。

釋迦　燒けた。

目蓮　さうして皆燒け死んださうで御座いますね。

釋迦　皆燒け死んだ。

目蓮　すべてのことは夢のやうで御座いますね。

釋迦　曾つて二人のまはりを廻つた子供等も今は安らかに眠つてゐやう。惡夢の後の安らかな眠りのやうに眠つてゐやう。わしはあの子等のことを忘れはしない。だがそれはわしの敎を弱くはしない。流離王や好苦梵士も今となればわしの夢の色を濃くしに來たやうなものだ。消えてゆけばお前達の恨みものこるまい。さうして彼等は火事に燒けずともやがて消えてゆくのだ。

目蓮　すべてことが過ぎました。

釋迦　しかし又生れる。何度でも生れる。わしの敎を覺らぬものにとつてはこの世に生きることは迷の内に生きることだ。さうして平和な夢を見るものは稀だ。今、朝日は輝きわたる。だが今に夕べがくる。すべてはめぐる。死ぬ、生れる。生れる、死ぬ。流離王の許に親兄弟、或は子供を仕へさせてゐた人々は今はさぞ悲しんでゐるであらう。誰が仕合(しあはせ)か、誰が不幸か、誰か知らう。わしの敎がゆきわたらない内は人々は無意味に惡夢を生んで、われとわが身を苦しめることであらう。さうして他人を苦しめることであらう。小鳥は啼いてゐる。日はうらゝかに照り渡つた。すべてのものは何事もないやうな顔をしてゐる。さうして道ゆく人に逢へば多くの人は何事も知らないやうな顔をしてゐやう。迦毘羅城の滅亡も流離王の宮殿の燒けたことも彼等はたゞ笑ひ話にすますであらう。わしは彼等の爲にそれを喜ぶものだ。だがわしはわが敎に從つてすべての人が調和して生きてゆくことを望んでゐる。さうしてさう云ふ時の來るのを夢想してゐる。

目蓮　さう云ふ時が參りましやうか。

釋迦　くる。

目蓮　いつさう云ふ時が參りましやう。

釋迦　それはわしも知らない。

（沈默。）

——幕——

二十八歳の耶蘇

登場人物

　惡　魔　一
　惡　魔　二
　耶　　　蘇

山路。惡魔二疋往來の眞中の地の中からはひのぼる、まぶしがる。

惡魔一　あゝまぶしい。
惡魔二　本當にまぶしい。あいつはこゝにくるのだね。
惡魔一　あゝもうぢきこゝに來る。
惡魔二　來たらどうするのだ。
惡魔一　俺の云ふ通りにするのだ。
惡魔二　よし。
惡魔一　俺はゐざりに化けるからお前は盲目に化けるのだ。盲目に化けられるだらう。
惡魔二　そんなことはお茶の子だ。
　（惡魔一、ゐざりの眞似をする。）
惡魔一　どうだ之れならいくらあいつでもゐざりだと思ふだらう。
惡魔二　うまい〳〵、それなら大丈夫だ。
惡魔一　これであいつの手が俺の頭にさはるか、俺の手があいつの着物にふれるかすると俺はかうやつて腰を立てるのだ。さうしてあいつの前にかうやつて跪くのだ。さうして難有がるのだ。あなたは神樣です。本當に神樣の御子です、とさう云ふのだ。其處へお前がやつてくるのだ。するとおれがお前に「おい兄弟俺の腰は立つたぜ」と嬉しさうに云ふのだ。するとお前が笑ひながら「そんなことを云つてもだまされないよ」とか何とか云ふのだ。其處で「噓だと思ふなら俺の腰にさはつて見ろ」とか何とか俺が云ふのだ。お前は俺の腰にさはつて見る。それからうまくやつてお前が今度はイエスに目をあけてもらうのだ。さうして二人でよろこぶのだ。さうしてあいつを自分はもう奇蹟の出來る神の子だと思はせてやるのだ。わかつたら一寸稽古にとりかゝつて見よう。
惡魔二　よし來た。
惡魔一　お前はまああいつの眞似をして向ふから歩いて來い。俺はこゝにかうやつていざりの眞似をしてゐるから。
惡魔二　よし。
　（惡魔一、ゐざりの乞食の眞似して道端に坐る。惡魔二、下手に行き二十八歳の耶蘇の眞似して歩いてく

る。）
惡魔一　うまいぞ。そつくりだ。
惡魔二　からかうなよ。
惡魔一　さあ本當に始めるよ。
（惡魔二、行きすぎようとする。）
惡魔一　神の子イエス樣、どうぞ少しお待ち下さい。
（惡魔二、聞えないふりして行かうとする。）
惡魔一　大工のイエス樣、一寸お願が御座います。一寸私の云ふことをお聞き下さい。どうか。
惡魔二　あなたは私をお呼びになつたのですか。何の御用です。
惡魔一　少しうますぎるぜ。
惡魔二　兄貴だつてうますぎるぜ。
（二人見合して笑ふ。）
惡魔一　まあいゝ、どん〳〵進めよう。その内にくるからな。
惡魔二　よし。
惡魔一　昨日私はへんな夢を見たのです。私がこゝに居りますと其處に（惡魔二の足もとをゆびさし）神樣が現はれていらして「お前はわしを信じてゐるゝいゝ奴だ。明日の朝こそお前の願ひをかなへてやる。わしの子イエス、今かりに大工の子になつてゐるが、あれはわしの子だ。そのイエスが明日の朝こゝへ來てお前にあふ。お前はそのイエスにたのんで手でお前の身體にさはつてもらへ、さうすればお前の腰はたつ。夢々うたがつてはいけない。」とおつしやつたのです、私は難有さに耐へかねて泣きました。さうして目がさめました。さうして日がのぼるまへにこゝに參つてあなたのいらつしやるのを今か今かと待つてをりましたのです。どうか御手にふれさして下さいまし。
惡魔二　私は神の子ではない。
惡魔一　いゝえ。あなたは神の子でゐらつしやいます。どうか御手にふれさして下さいまし。（手をのばしてふれやうとする。惡魔二、身をよける）
惡魔二　私にはそんな力はない。そんなことは許されてゐない。私は力のない人間だ。お前の腰はなほしてやりたい。しかし私にはその力がない。
惡魔一　まあそんなことをおつしやらずにためしにやつて見て下さいませんか。
惡魔二　神をこゝろみるやうなことは私には出來ない。
惡魔一　そんなことをおつしやらずに、あなたのお父さまのおほせなので御座いますから、さわつて戴けばそれで氣がすみます。
惡魔二　氣がすむならさはつてもいゝ。しかし腰がたゝな

くてもわが父をうたがつてはいけない。

惡魔　どうして疑がひますものですか。難有たう御座います。

惡魔二　（目をつむつて惡魔一の手をにぎり）立て！

惡魔一　（靜かに立ち上り、立ち上つてからおどろき、惡魔二の前に跪き）立てました。立てました。

（惡魔二。おどろいて目をつむり祈る。）

惡魔一　さあ今度はお前の番だ。めくらの眞似してやつておいで。

惡魔二　合點だ。

（惡魔二、姿を一寸かくし、盲目になつて杖をつきながら出てくる。）

惡魔一　おい兄貴！

惡魔二　だれだい。ゐざりのヤコブさんかえ。

惡魔一　さうだ。

惡魔二　それにしては聲が高い處から出るな。

（惡魔一、惡魔二の處へあるいてゆき、親しさうに惡魔二の手をとり。）

惡魔一　兄弟喜んでくれ！　俺の腰はかう云ふ風に立つたのだ。

惡魔二　え、腰が立つた。どれ。（惡魔一の腰をさすり）こいつは豪氣た。どうしたのだ。どうして立つたのだ。

惡魔一　喜んでくれ兄貴！　神樣のお手でなほして戴いたのさ。

惡魔二　お前は何かと云ふとすぐ神樣をもち出すが、俺には神樣は用がないのだ。

惡魔一　だからお前は何時までも盲目なのだ。俺は神樣を信じてゐる。俺は神樣の子イエス樣を信じてゐる。

惡魔二　イエス樣とはなんだい。

惡魔一　そんな勿體ないことを云ふと罰があたるぜ。

惡魔二　（少し返事をさがしてゐたが）其處で俺はなんと云はう。

惡魔一　あはゝゝ大事な處でつかへては仕方がねー。少し前からやりなほすとしやう。

惡魔二　まだ大丈夫かい。

惡魔一　まだ少しは時間がある。だがもうぐづ〳〵はしてゐられない。お前が「そいつは豪氣た。どうしたのだ、どうして立つたのだ」まではそれでいゝ。其處で俺は「喜んでくれ兄貴、このやうに歩けるのだ、これも神樣のおかげだ。こんな難有いことはない」とさう云つて俺が歩いて見せるのだ。さうするとお前が泣くのだ。其處で俺が「兄貴どうして泣くのだ」と云ふのだ。するとお前は「お前の歩く姿が見たい。俺は目が見えない。お前はたてたのに、俺は矢張り盲目なのだ。お前には義理がわる

いがつい淚が出たのだ。許してくれ」と云ふのだ。其處で俺がお前をなぐさめて何とかうまくイエスの處へつれてゆく。さうしてお前が何とか云ふ。俺もとりなす。さうしてイエスの手がお前の目にふれる。するとお前がぼんやり目をひらく、跪づく、喜ぶ。二人でおどる。あとはその時の臨機應變だ。其處でイエスが自分をもう神樣の子だと思ふ。さうして神樣の子になつたつもりになる。さうしてしくぢる、墮落する。

惡魔二　さうだ。あいつは人がいゝから狂言通りになるだらう。

惡魔一　そこでおれ達が安眠が出來る。そろ〳〵やつて來たぜ。いゝか。

惡魔二　大丈夫だ。それなら向ふへ暫らくの間行つてゐよう。

惡魔一　それがいゝ。俺がイエスをおだて切つた時出てくるのだ。

惡魔二　合點だ。

（惡魔二、上手に姿をかくす。惡魔一、いざりの眞似をして道端にすわる。暫くしてイエス何か考へながら下手より登場、その歩き方惡魔二の眞似したのによく似てゐる、惡魔一の前を通りすぎやうとする。）

惡魔一　神の子イエス樣、一寸お願ひが御座います。

（イエス聞かないふりしてゆき過ぎやうとする。）

惡魔一　大工のイエス樣。一寸お話したいことが御座います。

イエス　（立ちどまり、ふり向き）何か御用ですか。

惡魔一　はい。一寸おたのみしたいことが御座います。

イエス　何にです？　私に出來ることですか。

惡魔一　はい。たゞ一寸御手で私の身體にさはつて戴けばいゝのです。

イエス　なぜさはるのです。

惡魔一　實は私が昨晩夢を見たのです。丁度私が夢でこゝにまゐりました時、神樣にお目にかゝつたのです、御覽になります通りの私は躄で御座います。毎時も足が立ちますやうにと神樣にお願ひしてをりましたので、神樣の御姿を見ると同時に、私は神樣に跪いて「神樣、神樣、どうか私の足のたつやうにして下さいまし。」さう申したので御座います。すると神樣が「わしはかね〴〵お前の望みを叶へてやりたいと思つてゐた。しかしまだ時がこなかつた。しかしお前の眞心は天に通じた。明日の朝早くこゝに來い。すると大工のイエスがきつとこゝに來る。あれはわしの子だ。あれの手がお前の身體にふれて、あれが『立て！』と云へばきつとお前の足はなほる、夢々疑つてはいかん」とおつしやつて下さつたのです。さう

して私は目がさめたので御座います。私はどんなに喜んだで御座いましやう。私は難有がつて泣きました。私はまだくらい内から家を出て、やつとの思ひでこゝに參りました。さうして貴君のいらつしやるのを今か今かと待つて居りました。さうして貴君の御姿の見えた時助かつたと思ひました。どうか私を助けて下さい。どうかその手で私にさはつて「立て！」とおつしやつて下さい。私を一人前の人間にして下さい。神の子イエス樣。

イエス　私にはまだ力がない。私はお前の腰をたゝせることは出來ない。

惡魔一　それは御遠慮です。貴君は神の子です。神樣が御自身でさうおつしやいました。貴君はあまり臆病です。貴君は御自分の力を出すことを惜しんでゐらつしやいます。たゞ一寸御手でさはつて下さつて「立て！」とおつしやつて下さればそれですむのです。

イエス　私にはまだ許されてゐない。

惡魔一　そんな難なことをおつしやるものでは御座いません。私の心も察して戴きたう御座います。

イエス　何といつてもそのことだけは出來ない。私には力がない。

惡魔一　まあためしにやつて見て下さい。

イエス　神をこゝろみることは私には出來ない。

惡魔一　貴君は本當に無情な方です。私はわざ〳〵こゝまでまゐりましたのです。この腰でこゝまで參つたのです。さうして腰が立つと許り思つて喜んで參つたのです。どうか可哀さうに思つて、一寸お手をふれて「立て！」とおつしやつて下さいまし。

イエス　貴君に同情します。しかし私にはそのことは出來ません。

惡魔一　まあそんなことをおつしやらないで下さい。この可哀さうな私を見捨てないで下さい。どうか私に未練を殘さないやうにして下さい。どうか助からないでもよう御座いますから、夢のお告げのやうにして見せて下さい。さもないと私は貴君を恨みます。一生恨みます。

イエス　恨むなら恨んで下さい。私には出來ません、許されてないことは出來ません。

惡魔一　それならば私がこんなにおたのみしてもきいては下さいませんか。私の望みは叶へられないので御座いますか。（惡魔一泣くまねをする）私はどうしてかう因果なもので御座いませう。たつた一つの望みも消えました。たゞ一寸私にさはつて下さればそれでいゝのでは御座いませんか。さうして「立て！」とおつしやつて下さればいゝのでは御座いませんか。どうぞ〳〵私の望みを叶へて下さい。

イエス　叶へられるものならば叶へて上げたい。しかし私には神様を試みることは許されてゐない。
惡魔一　神樣を試みるのでは御座いません。たゞ私の夢のお告げの通りにやつて下されば、私は立てないでもあきらめます。さもなければ私はあきらめられません。どうかあきらめられるやうにして下さいまし。
イエス　腰が立たないでもあきらめられますか。
惡魔一　あきらめます。あきらめられます。どうか私の迷ひをとつて下さいまし。さうしてあきらめられるやうにして下さいまし。
イエス　それならば貴君があきらめられるやうにして上げましやう。（惡魔一の頭に手をあて祈るやうに）父よ。あなたをこゝろみるのでは御座いません。この憐な人間にあきらめを得させるためで御座います。どうか私の許されてないことをするのをお許し下さい。さうしてこの憐な人間に憐れみをかけて下さい。（權威あるものゝやうに）立て！
（惡魔一、夢見るやうに立ち上り、立ち上つたことに氣がつき、足を見、足に力を入れて見。）
惡魔一　立てました。立てました。この通り立てました。
（イエスはぼんやり立つて居る。自ら行つた奇蹟の前におのゝいてゐる。惡魔はイエスを見、その前に跪づく。）
惡魔一　神さま、神さま。神の子イエス樣、難有たう御座いました。難有たう御座いました。（立ち上り）私は御かげでこのやうに立てます。このやうに立てます。このやうに歩けます。（歩いて見せる）本當に貴君は神の子でゐらつしやいます。
（イエス默つてゐる。）
惡魔一　昨日の夢は正さ夢で御座いました。私は之れから神社に參りましやう。さうして御禮を申しましやう。神の子イエス樣本當に難有たう御座いました。一生この御恩は忘れません。
（この時惡魔二、盲目の眞似をして出てくる。惡魔一、目ざとくそれを認め。）
惡魔一　兄貴。
惡魔二　誰だ。ゐざりのヤコブか。
惡魔一　さうよ。
惡魔二　今日は高い所で聲を出すな。さうしてなんだか嬉しさうだな。
惡魔一　嬉しがらずにゐられるものか。俺の足が立つたのだ。こゝにゐるイエス樣に足をなほしていたゞいたのよ。
惡魔二　なにお前の足が立つ？　そんなことは信じられない。神樣でもお前の足と俺の目だけは駄目だ。

悪魔一　所が、ちやんと俺の足はこの通り立つのだ。この通り歩けるのだ。兄貴それ見ろ！　俺の足はなほつたらう。

（悪魔二の所へゆく、悪魔二さすつて見ておどろく。）

悪魔二　本當に立つたのか。これは豪氣だな。

悪魔一　それ見ろ。こんなに歩けらあ、こんなに人間らしい足音がすらあ。（悪魔二泣く眞似をする）　おや兄貴。どうしたのだ。

悪魔二　お前の話を聞いて、俺は嬉しいのだ。嬉しいよりも羨ましいのだ。もしお前の足が立つたやうにこの目がなほつたらどんなに嬉しいだらうと思つたら涙がひとりでに出て來たのよ。堪忍してくれ。

悪魔一　兄貴そんなに嘆くなよ。今こゝにわしの足をなほして下さつた方がおいでになるのだ。その方は神さまのお子さまなのだ。御名前はイエス樣とおつしやるのだ。大工の御子で豫言にもある通りこの世の人をお救ひになる方なのだ。その方に俺の足はなほして戴いたのだ。お前もそのお方におたのみしてなほしく頂くといゝ。

悪魔二　お前その話は本當なのか。嘘ついたら俺はがつかりして氣絶してしまうよ。本當にそのイエス樣とおつしやる神樣のお子さまは其處にゐらつしやるのか。さうしてお前はその方になほして戴いたのか。かうやつて手をあはさあ。その方に逢はしておくれ。さうしてその方に願つてこの目をなほしておくれ。もしこの目がなほつたら、どんなだらう。本當にお前はうまくやつたね。早くその方にあはしておくれ。おがむよ。

悪魔一　まあまつてゐろよ。私が一つたのんで上げやう。

悪魔二　どうかたのんでおくれ。もしこの目がなほつたら一生お前に感謝するよ。本當にこんな難有いことはないからね。

（悪魔一、恐懼したふりをしながら、沈默してこの有樣を見てゐるイエスの處へゆき。）

悪魔一　神の子イエス樣、御らんになりますやうにあすこにをりますのは私の友達で、至つていゝ奴なので御座いますが、御らんの通り目が見えないので困つてをります。なんでも九つの時とかにひどい眼病をわづらつてそれから盲目になつたさうで、この世の中の美しいことをなまじつか知つてをりますもので、あけくれ目が見えないのを嘆いてをります。どうぞ御慈悲ですから御助け下さい。

イエス　私にはその力がない。

悪魔一　どうぞそんなことをおつしやらずに、どうぞ助けてやつて下さいまし。目がひらきましたらあいつもどんなに喜ぶかわかりません。どうぞ目をなほしてやつて下さいまし。

イエス　私にはあなたの足をなほしたことだけでも何んだか恐ろしいのです。恐ろしくつて仕方がないのです。あなたのお友達の目をなほすことはとても出來ません。

（惡魔二、杖でさぐりながら近づき、このイエスの言葉を聞いて泣く眞似をする。惡魔一、それを慰めながら。）

惡魔一　兄貴。がつかりするなよ。私は生命をかけてもお願ひして上げるからね。（イエスに向ひ）どうかそんなことをおつしやらずに、どうぞお助け下さい。二人を助けると思つてお助け下さい。

イエス　助けられるものなら、助けたい。しかし私にはその力がない。

惡魔一　又そんなことをおつしやる。あなたは神の子でゐらつしやいます。あなたにおなほしになる氣さへあればきつとこの目は開きます。きつと開きます。

イエス　もう許してくれ。私にはその力がない。そんなことは許されてゐない。

惡魔一　そんなことをおつしやるのは罪です。本當に無慈悲です。こいつは私の無二の友達で御座います。どうぞどうぞお助け下さい。目をなほしてやつて下さい。

イエス　神に許されてゐない。

惡魔一　愛でなさることを神樣がお許しにならないことはありますまい。

（イエス去らうとする。）

惡魔一　あなたは何處へ行らつしやるのです。どうぞ見捨てないで下さい。どうぞ兄弟の目をなほしてやつて下さい。たゞ手をこいつの頭にふれて「目を開け！」とおつしやつて下されば、きつとこいつの目はなほります。

イエス　私は恐ろしい。私は恐ろしい。

惡魔一　どうぞ助けてやつて下さい。助けてやつて下さい。（跪づく）

惡魔二　お慈悲です。お慈悲です。（跪づく）

イエス　神樣、私はどうしたらいゝのです。神樣私はどうしたらいゝのです。

惡魔一　たゞあなたは私の友達の頭に手をのせて、「目を開け！」とおつしやればそれでいゝのです。それでいゝのです。

イエス　もし目が開かなかつたら。

惡魔一　開かないわけはありません。あなたは神の御子です。しかしもし開かないでもその時はあきらめるでしやう。兄貴、さうだらう。

惡魔二　もし神の御子樣の力でもなほらないやうな罪深かいものでしたら、きつとあきらめます。あきらめます。

イエス　私は神の子ではない。

惡魔一　いゝえ神の御子です。

イエス　しかしお前の信仰はお前を助けるかも知れない。しかしそれは私の力ではない。やむを得ない。お前の望みは叶へてやる。しかし目が開かなくとも神をうらんではいけない。私の力のないことは恨んでもいゝが、私は神をこゝろみるのではありません。このあはれな人間に同情する許りで御座います。父よ御心のまゝにして下さい。（惡魔二の頭に手をおき）目よ開け！

（惡魔の二、目をぱつと開き、あたりを見る。暫くして氣がつき、目をこすり、しばたゝく。）

惡魔二　おい目があいたよ。目があいたよ。

惡魔一　どれ、どれ。本當に目があいた、目があいた。神様、難有たう御座います。こいつの目があきました。

（イエス沈默してゐる。）

惡魔二　神の子イエス様、難有たう御座います。こんなに嬉しいことは御座いません。何と云つてお禮を申していいかわかりません。兄弟喜んでくれ。

惡魔一　喜ばないでゐられるものか、俺の腰は立つ、お前の目はあく。俺はかうやつて歩ける。お前はさうやつてゐて、木でも空でも水でも俺の顏でもわかる。神の子イエス様のお顏もおがめる。

惡魔二　本當にさうだ。今日は何と云ふ吉日だ。こんな嬉しいことはない。

惡魔一　本當だ、こんな嬉しいことはない。

（二人嬉しさあまつたやうに出たら目におどる、イエスそれを見て涙ぐみ、だまつて立つてゐる。この時何處からか聲聞える。）

聲　わが愛し子よ、其處にゐるのは二人とも惡魔だ。お前に力のまだ出來ない內にお前を誘惑して十字架を荷はさうとしてゐる惡魔だ。お前にはまだ十字架を荷なふ力はない。お前は今彼等の言葉を信じ旣に自ら神の子になつたと思へば、お前の滅亡は目の前にある。我にめされる迄はお前はまたなければならない。わが愛し子よ。

（イエス目がさめたやうに目をひらき惡魔を見、叱る。）

イエス　惡魔よ、退け！

（惡魔をどりをやめ、地面の內にとびこむ。イエス耻ぢ、うちくだかれる。）

――幕――

佛陀と孫悟空

一

佛陀　お前は中々利口でもあるし、實力もある。しかしまだお前は若い。知らなければならないことを知らない。

孫悟空　なに、私が知らなければならないことを知らないのですつて。私は何にもかも知つてゐますよ。あなたよりはいろ〳〵のことをして來ましたからね。天界のことも、地獄のことも、龍宮のことも皆知つてゐます。仙人の術もちやんと知つてゐます。私に知らないことがあるなぞと云ふ者こそ、何にも知らないものです。

佛　それなら、なぜお前は天界へ行つて、務めをおろそかにしたのだ。自分のあづかつてゐる桃の實を食つたり、人が大事にしてゐる物をこわしたり、天界の支配者に手向つたり、それ等は、前が何にも知らないことを示してゐる。

孫　さうは云つてもらひますまい。私が強すぎるからと云つてもらひたいものですね。私を押へつけるものがないからと云つてほしいものですね。

佛　お前を押へつけるものはお前だ。そのお前がゐないのが、お前の罪なのだ。

孫　私が私を押へつける！　そんなことは出來ませんよ。私はどうも強いのですからね。桃の實を食ひたいと思へば、食へるのですからね。怒られるのが怖くないのですから仕方がありません。

佛　お前の一番いけないのは、自分の弱いことを知らないことだ。

孫　私が弱いと云ふことは始めて聞きましたよ。私より強いものが何處にゐるでせう。

佛　お前はすぐ一人々々を頭におくからいけない。いくらお前が力んだつて、宇宙を支配してゐる力には叶はない。その力に祇抗することが出來たとしても、それは自分の重荷をふやす許りで、やがてお前をつぶしてしまふ。

孫　あなたの云ふことは私にはわからない。

佛　お前は、他の人がよろこんでゐるのを見てなほよろこばしておきたいとは思はないか。

孫　思ひませんよ。私は他の人のことなんか何とも思つてはゐません。他の人はいく地がないので他人のこと許り氣にしてゐるので、くよ〳〵して生きてゐるのでせうが、私はさうはゆきませんよ。嵐に桃の實を落さないやうに

吹いてくれと云つたつて、嵐は強いのですから仕方がありません。火に蟲を焼くなと云つたつて、焼けるものを焼くのは火の性だから仕方がありません。火も小さければ水にでもやつけられるのでせうが、私は小さい火ではないのですから。

佛　お前は嵐や、火ぢやない。嵐や火と同じだと思ふのが、お前のおろかな證據だ。お前は食ひたくないものは食はないだらう。そして怒りたくない時は怒らないだらう。

孫　あたりまへさ。しかし食ひたい時は食ひ、怒りたい時には怒りますよ。

佛　しかし食つていゝものと、食つていけないものがある。

孫　私は強いのですから、食ひたいものは食つてもいゝもので、食ひたくないものは食つてはいけないものです。その他のことは私は知りません。

佛　お前は人の喜びを尊重しなければならない。

孫　しかしその前に自分をよろこばさなくてはなりませんからね。

佛　お前はその自分と云ふものが、そんなに大丈夫なものと思つてゐるのか。

孫　しかし世の中に自分より大事なものがありますかね。ともかく自分はつまらないものとしても、他のものは自分よりもつとつまらないものとしか思へませんね。

佛　そこがお前の一番馬鹿な處だ。

孫　この私を馬鹿だと云ふのですか。もう一度云つてごらんなさい。

佛　何度でも云ふよ。お前の一番いけないのは馬鹿だからだ。

孫　なんだと。（佛陀を打たうとするが、打つ勇氣は出ない）

佛　お前の一番馬鹿な點は、他人を打つと云ふことはお前自身を打つことだと云ふことを知らないことだ。木の枝が木の枝と喧嘩してお互になぐりつこしたとして、その時片方の枝が、片方の枝に勝つた處が、うれしくはあるまい。淋しいやうな、氣の毒なやうないやな氣がするだらう。

孫　そんな寢言はやめてもらはう。ともかくお前さんは私より馬鹿で、私より意氣地なしで、他の人の氣に入ること許り考へてゐるのだ。私はその手にはのらない。

佛　お前は自分だけがすべての人からはなれて生きてゆけると思つてゐるのが馬鹿で、そして桃の實一つ食ふよりは皆をよろこばす方が、更に大きいよろこびを味はふことが出來るのを知らないのが馬鹿なのだ。私達は天界を支配してゐる人の意志に從つて生きて、始めて安心して喜んで生きてゆけるのだ。お前は自分で強いとか、賢い

とか思つて、苦勞の種ばかり生んで、一番お前にとつて大事なお前を苦しめて得意になつてゐるのだ。それが馬鹿の骨頂だ。そしてその自分の馬鹿を自慢してゐるのだから皆、閉口してゐるのだ。桃をとつて食つて一番損したのはお前だと云ふことを本當に知らなければならない。

孫　そんなことは知るものか。俺は誰を敵にしたつて、少しもこはくない。

佛　だが皆に嫌はれるよりは、愛される方がいゝだらう。

孫　窮屈な思ひをするよりは、嫌はれた方がいゝ。

佛　それはお前は皆を愛するよろこびを本當に知らないからそんな氣になるのだ。

孫　なんとでも云ふがいゝ。お前さんには私の心はわからないのだから。お前さんのお弟子はいくらでもゐる。私はあんな仲間に入つて生きてゆくよりは死んだ方がいゝのだ。私は何と云はれたつて、お前さんの弟子にはならない。お前さんの口にはだまされない。私はお前さんの知らない法則に支配されて生きてゐるのだ。

佛　孫悟空、お前はまだこの俺を本當に知らないのだ。俺の云ふことに反抗するのは、お前を不幸にする許りだ。いくらお前がぢたばたしたつて、この手のひらからそとには出られないのだ。

孫　馬鹿もいゝ加減にしてくれ。俺は一秒に八千里はとぶ。

佛　いくらとんだつて無限にはとべまい。お前はまだ〳〵知らなければならないことを知らないのだ。だから子供らしいことを云つたり、したりして得意になつてゐるのだ。そして大事なお前自身を苦しめてゐるのだ。もつとのんびりした、大きな心をもつて、つまらない反抗はすてゝ、大きく生きたらいゝだらう。

孫　お前さんはなんでも反對なことを云ふな。世の中に私程自由なものがあるだらうか。私はしたいことをすればいゝのだ。天の軍勢さへ私をどうすることも出來ないのだ。

佛　お前の自由はわしの手のひらの上だけだ。お前の自由は岩に頭をぶつけて岩をわることが出來ると云つて、自分の頭に出來たたんこぶを自慢にするやうな自由だ。何處へ行つても、塵やほこりを起して得意になつてゐるが、塵やほこりを吸ふものが自分だと云ふことを知らないのだ。お前はいくら利口なつもりだつて、宇宙をにぎるこの私に手向へないことを知らなければならない。

孫　よし、お前さんは、私がどうしてもその手のひらよりもとび出せないと云ふのだな。もしとび出せたらどうする。

佛　とび出せないにきまつてゐるから、お前の云ふ通りに

なつて上げる。

孫　それなら俺の弟子になるか。

佛　なつてもいゝ。お前が俺より賢ければいつでもお弟子になる。しかしいばらをなぐつたり、岩に頭をぶつけたり、爭動を起してつまらない所で苦しんで得意になつてゐるお前が俺に勝てると思ふのはをかしい。

孫　何とでも云ふがいゝ。俺はお前さんをやつつけて、ぐの音も出ないやうにしてやる。いくらお前さんが威張つたつて、一瞬間に八千里はとべるのだから。

佛　よろしい。とべるだけとんで見たらいゝだらう。そして俺の知らない世界に入りこんだら、俺は降參してやる。そのかはり、俺よりもお前の馬鹿なことがはつ切りしたら、惡いことは云はないから俺の云ふことをきくがいゝ。さうすればお前はどんなに皆に喜ばれ、愛されるかわからない。そしてお前の珍らしい力は、この世の爲にどんなに役に立つかわからない。俺はお前のその力をいゝ方に使ひたいのだ。

孫　何と云つたつて、俺は窮屈なことは嫌ひだ。お前にまけたとあつては俺は死んだ方がましだ。それなら之から大界のはづれまで行つて、お前を一つ俺の弟子にしてやるかな。三千世界の大先生のお前を弟子にするのは、一寸面白い。それではとび出すぞ。（用意する）

二

孫　佛陀の奴の生意氣なのにはおどろいたな。この俺をつかまへて手のひらの上から とび出せないと云ひやがつた。人を馬鹿にするにも程がある。あいつは俺がこんなにとぶことが出來ると云ふことは知らないのだ。あいつはなんでも事なかれ主義で、惡いことをしてはいけない。喧嘩をしてはいけない。戰爭してはいけない。人を殺してはいけない。怒つてもいけない。嘘を云つてもいけないと云つてゐる。あいつの云ふ通りにしたら、生きてゐるのか死んでゐるのかわからなくなつてしまう。誰があいつの弟子になるものか。あいつより利口なものが一人はあることを示してやらなければ腹の蟲が承知しない。俺程偉い奴はないのだから、天帝さへ俺には手がつけられないのだ。それを佛陀の奴、口でまるめようとしてやがる。あいつは三千世界をまるのみにしたやうな面をしてやがる。あの面からしやくにさはる。今度はいくらあいつでもまゐつたらう。今迄あいつを負かした奴はないのださうだが、俺だけはとう〳〵あいつをやつつけてやつた。いくらあいつでも俺がこゝまでくるとは思つてはゐまいからな。おやあの天のはづれに五本の柱があるな。何んと云ふ美しい立派な柱なのだらう。あの眞中の一番

大きな柱に俺の來たしるしをつけて、俺が佛陀をやっつけた記念を永遠にのこしてやらう。あの柱なら俺の名をかいても惜しくはない。（孫悟空、五本の指の柱の眞中に、俺はこゝまで來たぞ孫悟空とかいて、得意になりそれを見、よむ）俺はこゝまで來たぞ孫悟空。之でいゝ、之でいゝ。どうだ俺のやうな偉い奴がどうしてこの世に生れたのだらうな。（などり出す）俺ををがめ、をがめ、皆俺ををがんでいゝはずだ。佛陀の奴もさぞおどろきやがるだらうな。（威張つて退場、五本の指引こむ）

三

佛陀　孫悟空の奴、俺の指に何とかいたかな。俺はこゝまで來たぞ孫悟空。孫悟空らしい字をかくな。おゝ、威張つてやつて來たぞ。

（孫悟空、威張つて登場。）

孫　行つて來ました。

佛　御苦勞さん。

孫　どうです。之でもまだ私は馬鹿ですかね。

佛　お前は思つたより利口だ。

孫　思つたよりですつて。私は何處までとんで行つたか御存知ですか。

佛　お前は知つてゐるなら話してもらはうかね。

孫　勿論、私は知つてゐます。私は今度程思ふ存分飛んだことはありません。私は天空のはづれまで行きました。まだ誰もが行つたことのない處にゆき、見たことのないものを見て來ました。

佛　それは偉かつた。

孫　さすがの私ももう之以上ゆけない處までゆきました。すると肉色した大きな五本の柱がありました。その美しさは何と云つていゝかわかりませんでした。さすがの私もその美しさに見とれました。そして記念に私の名を其處にかいて來ました。俺はこゝまで來たぞ、孫悟空。とかいて來ました。あなたに見せたい程、立派な柱ですが、あなたにはあすこまで行けますまい。

佛　俺にはゆけないだらう。

孫　どうです。もう降參したらう。

佛　孫悟空、お前はその五本の柱を讚美したね。

孫　えゝ、いくらでも讚美します。あなただつてあの柱を見たら讚美したくなるでせう。私はその柱に名をかきつけた時、自分の名を永遠に殘すにもつてこいの柱たと思ひました。

佛　よろしい。

孫　よろしいぢやすまされないぞ。さあ約束通りにしてもらひたいものだ。

佛　お前はその五本の柱をなんだと思つてゐたのだ。その五本の、お前が讃美した柱は、指のやうな形をしてゐなかつたか。

孫　あまりに大きく、あまりに美しいので、形は忘れた。しかし指のやうな形はしてゐたやうだ。それがどうしたと云ふのだ。ごまかさうと思つてもだめだぞ。

佛　お前が柱だと思つたのは、實は俺の指なのだ。

孫　馬鹿云ふな。お前の指は其處にあるぢやないか。

佛　俺がどの位ゐ大きいかそれはお前にはわからないだらう。俺は三千世界に充滿するものだ。お前の目にはこの指が小さくも大きくも見える。

孫　何云つてゐるのだ。もしその指が本當の柱なら、俺のかいた字が其處にかいてあるはずだ。そんなことはあるわけはない。

佛　かいてあつたらどうする。

孫　かいてなかつたらどうする。

佛　かいてあつたら俺の云ふことをきくか。

孫　かいてなかつたら俺の弟子になるか。

佛　かいてあつたら、お前は自分のまだ知慧の足りないことを知らなければならない。

孫　かいてなかつたら、お前の知慧の足りないことを知るか。

佛　孫悟空。

孫　佛陀、なんだ。

佛　お前はお前の一生を愛することを知らなければならない。

孫　そんな泣きごとを云はずにいさぎよく、その指を見せろ。生命だけはゆるしてやる。

佛　かいてあつたらお前は心を入れかへなければならないぞ。皆に不愉快を與へることはよくないことだ。皆のよろこびをこわすのはよくない。それよりも。

孫　もう、だまつてゐろ。この老ぼれ。それより早くその指を見せろ。論より證據だ。

佛　孫悟空、俺はお前を愛してゐる。

孫　そんなこと云つたつて駄目だぞ、指を見せろ。

（佛陀默つて指を見せる。孫悟空反抗しようとするがつい泣いて平伏する。）

佛　孫悟空、お前はまだ若いのだ。しかし人々のよろこぶ人間になれよ。お前は實に珍らしい力をもつて眞理の爲に働け。お前のもつ貴い力をもつてゐる。その力をよく生かして神と人とのよろこびとなれ。恥かしがることはない。俺だつて一朝一夕に俺になれたのではない。自分の足りないことを先づ知るがいゝ。

孫　恥かしくつてどうにもなりません。

佛　恥ることはない。俺の指を見とゞけたのはお前許りだ。お前は自分に失望することはない。お前のその無比な力を光明の爲に働かせよ。すればお前は天界と人界の愛兒となつて、いたる處、お前をよろこび迎へる。お前にはその力はあるのだ。その力をよこしまに使ふな。それはどんなに勿體ないことだと云ふことを知れ。愛する孫悟空よ。正しいものゝ味方になり、すべてのものを愛してやつてくれ。

孫　はつ。

――幕――

三和尙

登場人物

一休
白隱
澤庵
釋迦
達磨

浄土の一部。林のかげ。一休は皆にかくれてよく其處に來る。今も其處に來てゐる。つれづれに自作の江口を謠つてゐる。

一休　……月も影さす棹の歌、歌へや歌へうたかたの、あはれ昔の戀しさを、今も遊女の船遊び、世を渡る一節を歌つていざ遊ばん。夫れ十二因緣の流轉は車の庭に廻るが如し。鳥の林に遊ぶに似たり。前生又前生曾つて生々のさきを知らず。來世なほ來世。更に世々の終りをわきまふることなし。

（白隱登場。さまたげると惡いと思つて退場しようとする。一休それを認め。）

一休　白隱さんか、逃げないでもいゝぢやないか。

白隱　お邪魔かと思ひましたので。

一休　邪魔なものか。君でも來てくれるといゝと思つてゐた處だ。一つちよぼくれでも聞かしてくれないか。君のつくつたちよぼくれは聞きものださうだから。

白隱　中々さうたやすくはやれませんよ。それよりお暇でしたら何か浮世に居た時のお話でもいたしませう。

一休　それも面白いだらう。しかし是非ちよぼくれも聞かしてほしいね。

白隱　それは又今度にしませう。

一休　又今度は情けないね。

白隱　それならあとにしませう。

一休　してくれるか。

白隱　まあ、あとの具合で。

一休　きつと聞かしてもらふよ。

白隱　一休さん。あなたが浮世にゐた時分何か一番お苦しみでした。

一休　矢張り女だらうね。白隱さん。

白隱　さうですか。あなたは蜷川さんの奥さんをどうかしようとなさつたさうですが、本當ですか。

一休　本當だよ。あぶない處だつたよ。蜷川の妻かわしに氣があるやうについ自惚れたのだね。處が蜷川の妻はい

ざとなつたらさすがに堅かつたのでものにならないですんだのだよ。あぶない處だつたよ。

白隱　あとで蜷川さんの奥さんが來たときあなたは逐ひ歸したと云ふので皆ほめてゐましたよ。

一休　あはゝゝゝ。それはわしのすることはなんでも賞めればまちがひのないと思つてゐる人々だらうよ。だけどいくらわしだつて逐ひかへさないわけにはゆかないぢやないか。わしは蜷川の細君が身をけがさずに歸つたことを喜んでゐたのだよ。さうして感心だと思つてゐたのだよ。可愛いゝ。さすがに女だと思つてゐたのだよ。蜷川の爲に喜んでやつたのだよ。わしだけがわる者のやうな氣がしてすまない氣さへしてゐたのだよ。其處がまた面白くも思つてゐたのだよ。其處へひよこつと蜷川の妻が出て來て、蜷川が是非わしの處へ行つて泊つて來いと云つたと云ふのだらう。蜷川と云ふ奴は何處まで馬鹿な奴なのかと思つて腹が立つたよ。來る奴も來る奴だと思つたよ。「生覺め」わしはさう怒鳴つてやつて逐ひ歸した。わしはその時はもう淸いわしになつてゐたからね。あとで蜷川に逢つた時は二人で笑つたが。あいつの生覺には時々閉口したよ。しかし人は珍らしくいゝ奴だつたがね。蜷川の妻が來た時にはさすがのわしも驚いたよ。あはゝゝゝ。それより君には何か面白い話があるさうぢやないか。なんでも非常に美しい娘に子をうましたとかうまさないとか。

白隱　そんなに美しい娘ではありませんでした。しかしいい娘はいゝ娘でした。

一休　おのろけかね。

白隱　のろけ處ですか。その話が實に滑稽な話で、あなたにお聞かせするのも恥かしいやうな話なのです。處が話がうまくゆきすぎて美談の一つにされてしまつたのです。

一休　それは結構ぢやないか。

白隱　處があまり結構な話ではなかつたのです。實はその子は私の子ぢやなかつたのです。

一休　お前さんの子ぢやなかつたのか。

白隱　私もどうも自分の子ぢやないやうに思つたのですよ。手を出した覺えはなかつたのですからね。

一休　ふん。

白隱　たゞ可愛いゝ娘だ位ゐは確かに思つたのですがね。或日いきなりその親爺にどなり込まれてこの生臭さ坊主なぜ俺の所の娘をはらましたと云はれたのですよ。おどろきましたね。そんな覺えはないがと思つたのですがね。餘りきめてかゝられたので自分の知らない內に、そんな眞似でもしたのか知らんと思つてしまつたのですね。

一休　お前さんならさう思ひさうなことだな。もつともわしでもさう思ふかも知れないが。あはゝゝ。

白隱　笑ひ處ぢやなかつたのですよ。しかしさう云はれるのにさうぢやないとも云へないのでつひ「さうですかね。娘さんがさうおつしやるならさうかも知れませんね」と云つてしまつたのです。處が「知れませんね」と云つたのが親爺さんをすつかりおこらしましてね。「他人を馬鹿にするな」と云つて頭を一つなぐられましたよ。

一休　お前さんの頭ならさぞなぐり甲斐があつたらう。あはゝゝ。

白隱　私はその勢に辟易したわけでもなかつたのですが。とう〳〵私の子だと云ふことを認めたことになつてしまつたのですね。尤もその內にはあの娘の爲なら一苦勞してやつてもいゝと云ふ柄にない婆婆氣があつたかも知れませんがね。

一休　あはゝゝ。

白隱　それでもう村中に私が娘の子をだましてはらましたと云ふことが知れ渡つてしまつたのです。どうも私が通るとあぶないと云つて娘つ子は逃げ出すと云ふさわぎになつてしまつたのです。しかし私は身に覺えがあんまりなかつたせゐかわりに平氣でゐられたので、反つて時々は面白いやうな氣もして來ましたよ。それで子供が生れるとまもなく親爺が私の處へもつて來たのです。子供が泣きますし、小便はたれますし、乳をもらはうとしても、助平和尙と云ふ名をとつたので、同情を失なつてしまつたので、隨分困りましたよ。尤も助平和尙と云はれても不服も云へませんがね。

一休　あはゝゝ。

白隱　その內に娘が氣がさしたのか。なんでもあとで聞くと私が子供を抱いてゐる後姿を何處かで見て泣いたとか云つてゐました。矢張り子供のことが氣になつたので、遠くから一日でも見たい位ゐに思つたのかも知れません。それで親爺に泣いて實はあの子は白隱の子ぢやないと白狀したのですね。白隱の子だと云ふと親爺に怒られずにすむとでも思つたのでしやう。親父がそれ迄私をいやに信用してゐたのださうですからね。親爺はそれを聞いて眞靑になつてとんで來ましたよ。淚までこぼして平あやまりにあやまりましたよ。私はやつと助かつたと思ひましたよ。

一休　あはゝゝゝ。

白隱　しかしその子を親爺に渡した時は一寸淋しい氣もしましたよ。いつのまにか自分の子供のやうな氣にもなつてゐましたのですからね。

一休　あはゝゝゝ。

白隱　處かそれが非常に有名になりましてね。それからの信用と云ふものは大したものになりましたよ、急に自分の身から後光でもさして來たやうに皆が大事にしてくれるので、何だかすまないやうな氣もしましたよ。あとでその娘の親爺がなぜあの時そんなことは決してないとおつしやつては下さらなかつたのですと云ひましたから。自分にはよくわかりませんからね。そんなことはないやうには思ひましたが、自分の知らない內にどんなことをしたかわかりませんからね。あなたの處の娘さんがさうおつしやるならまちがひもないだらうと思ひましたからね。反對することも出來なかつたのですよと云つて大笑ひしましたつけ。

一休　あはゝゝ。それは面白い。それでその娘はどうしたかね。

白隱　娘は私が骨を折つて、と云つてさう骨を折つたのではないのですがね。私が口をきいてその子の父親と一緒にしてやりましたつけ。

一休　それなら喜んだらう。

白隱　それは喜んでくれました。子供の爲にもそれが一番いゝと思つたのです。しかし何處かで鳶に油揚をさらはれたやうな氣もしないことはありませんでした。あはゝゝ。

一休　あはゝゝ。之はいゝ話を聞いた。

白隱　皆に吹聽しちや困りますよ。つぶしのきかない奴がゐますからね。

一休　大丈夫だよ。そのかはりちよぼくれを聞かしてくれるだらうね。

白隱　どうも困りましたね。

（澤庵登場。一休氣がつく。）

一休　澤庵さん、いゝ處に來た。之から白隱さんが御經をよむ處だ。

澤庵　何の御經です。

一休　阿呆陀羅經とか云ふ御經ださうだ。

白隱　噓ですよ。澤庵さん。

一休　本當なのだよ。澤庵さん。さあやり給へ。白隱さん。君だつて男ぢやないか。やると云つた以上はやらないのは卑怯だ。ね、澤庵さん。

澤庵　それは是非聞きたいものですね。

一休　澤庵さん。一寸他の話だがね。お前さんは娑婆にゐる時は澤庵と云ふ漬物をつくられたさうだね、どうも話に聞くと私の大好物のものらしい。いゝものを考へ出されたね。白隱さんの阿呆陀羅經にしろ、お前さんの澤庵にしろ、どうも早く生れすぎたものは損なやうだね。

澤庵　白隱さん。是非伺ひたいものですね。

白隱　一休さん。澤庵さんのつくられた澤庵は是非あなたにあげたいと思ひますよ、それは何とも云へないいゝ味のするものですよ。お茶づけにしてたべると何とも云へない味がしますよ。私なんかは大好物で、あれがあるので隨分助かりましたよ。さうしてたべる度に澤庵さんのことを思ひ出しましたよ。私も澤庵さんの澤庵にまけないやうな白隱と云ふ漬け物でも考へ出さうと思ひましたが、駄目でしたよ。
一休　食ひものを考へ出すのは偉い。私なんかも考へ出さうと思つたが、中々いゝ考が出なかつた。
白隱　本當にさうですよ。中でも澤庵と來ますと。
澤庵　もう澤庵の話はよしませう。どうも自分の名前を云はれてゐるやうで。
一休　あはゝゝゝ。私は又土呂からどうかして食物をつくることは出來ないかと内々やつて見たことがあつたが、どうもものにならなかつたよ。
白隱　さうですか。私も實は内々考へて見たことがあるのです。
澤庵　それは本當ですか。私も考へて見たのですよ。さうして内々食べて見たこともあるのですよ。
一休　何のことはない三馬鹿だね。
（三人笑ふ。）

一休　本當に面白い。こんな面白いことは近頃ない。あゝ、白隱さんごまかさずに一つおやりなさい。
白隱　それなら一つ思ひ切つてやりますかね。
一休　感心々々。
白隱　どうも大概忘れましたよ。覺えてゐるだけやつて見ますかね。
一休　覺えてゐるだけで結構。
（白隱。笑ひながら容をあらため。）
白隱　女郎の誠とたまごの四角、みそか〳〵のよい月夜。天ぢや〳〵と皆樣おしやる。天の尤もいやでそろ。文のかず〳〵戀こがれても、わしは當座の花はいや。數の男の思ひもこはい。見目の好いのも氣の毒ぢや。器量よしめと譽めそやされて。男ぎらひの獨寢を、命取りめと皆樣おしやる。わしは命はとらぬもの。那須の與一は矢さきで殺す。おふくが目もとで人ころす。かずの殿子はかぎりもないがわしがいとしはたゞひとり。婆が小唄は面白かろが。ふくがしらべは知りやるまい。知音どしなら歌ふもよいが。やぼな客には御遠慮めされよ。歸命頂禮七佛傳來。我等の親玉釋迦牟尼如來も、俺と聽くより首だけ嵌り。戀にこがれて命も抛つ。肝心要の小唄の文句を。老男さん老女さん皆樣聞きない。諸行は無常ぢや。是生滅法。生滅滅已で寂滅爲樂と。有つても知れぬで弘法大

師がいろはにほへとにさばいて置かれた。夫でもすめずば標木運坊主が。大小取雑せ喋舌るをきかんせ。眞に浮世は夢ないものでな。人間萬物山でも川でも。日月星辰竹木世界も。花咲きや散ります。盈れば虧けます。生れりや死にます。有るもの無くなる。それでも皆様千年萬年。此世に居るぞと思ふでござろが。うろ／＼する間に無常の嵐が。何處から來るやら俄に起ると。鬼とも組むよな剛毅な男も。天人見るよな美しい少女も。出る息一囘とまるが境で最早傍へもよれぬ容だよ。そこで地水火風の四大は。元へ歸つて無くなるやうだが。さしひき殘つて一つの含藏識。一生なしたる善業惡業。これには本より形がないから。土にもならねば灰にもならねば。善業は善所へ惡業は惡所へ。幕が替りて衣裳を著けかへ因緣次第で六つの衢の。天堂人間地獄や餓鬼趣や。牛にもなつたり馬にもなつたり。死んだり生きたり。定まり無ければ。こゝの道理で諸行は無常ぢや。是生滅法と申したものだよ。是れでは透切安氣はならぬと。佛や菩薩の教に隨ひ、精しく進で修業に身をいれ。貪瞋痴慢の根を涸枯して。六道生死の緣が切るれば。これが卽ち生滅滅已で。こゝに到るとこの身がこの世で。眞實無相の安閑恬靜月を枕に虛空に安臥。華嚴世界を一と目に見はらし。（白隱。不意にぷつつりとうたふのをやめて）まあこんなものです。

（一休、時々白隱の言葉にあはせ、時々まちがへては又眞似してゐたが。）

一休　面白い。面白い。さすがは白隱さんのちよぼくれだけある。見上げたものだよ白隱さんは。（と調子にのらうとして澤庵に氣がつき）澤庵さん、あなたも一つ隱し藝をやつて見せて下さい。

（澤庵默つてへんな恰好をし、手をうごかす。）

一休　なんです。そのへつぴり腰のをどりは？

澤庵　をどりではありません。お三どんが澤庵をつけて重しをおいた處です。

（三人笑ふ。一休たち上りてをどりだす。）

一休　（ふし長短をつけ）おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。おもしろい。……

（釋迦、達磨靜かに登場。始め白隱澤庵氣がつき微笑む。一休氣がつかずにをどつてゐる。ふと氣がつきおどろき立ちどまる。）

釋迦　なにですか。それは？

一休　之はおそろひでよくいらつしやいました。今のは日本のをどりで御座います。

釋迦　おもしろいをどりあります。遠慮せずにをどつて下さい。

一休　ありがたう。もうをどらないでもいゝので御座いま

す。

釋迦　あまり面白さうだつたから一寸來て見ましたのです。あとで皆に日本のをどりを見せてやつて下さいませんか。

一休　畏りました。

釋迦　之から一寸ゆかなければならない處がありますから皆さん失禮します。

（皆默禮する。）

釋迦　だるまさんゆきませう。

（釋迦。達磨退場。一寸沈默。）

一休　あゝ。とんでもないことを約束してしまつた。

澤庵　一休さん。あなたでもお釋迦樣には頭が上りませんね。

一休　上りませんよ。さがる許りですよ。子供の時からの癖か、つい難有い氣がして來ますよ。

隱澤　本當に難有い氣がしますね。ついお釋迦さんの顏を見ると淚が出て來ますよ。

一休　本當だ。それにしても踊らなければならないかな。うるさい奴が出て來て又侮辱だなんて云はなければいゝかな。

（三人笑ふ。）

——幕——

だるま

登場人物

だ　る　ま

A　・

B

僧　侶

だるまの修業して居る小さい堂の前、A、B登場。

A　この堂に住んでゐる男を君は知つてゐるかい。

B　知らない。

A　さうか。この堂の内には珍らしい男が住んでゐるのだ。

B　どんな男だい。

A　八九年の間壁許り見てゐると云ふ男が住んでゐるのだ。

B　壁を八九年見てゐる？　何の爲めだい。

A　何の爲めだかわかれば珍らしい男ぢやないことになるが、誰も何の爲に壁とにらめつこしてゐるかを知つてゐるものはないのだ。皆の云ふ處だと白痴だらうと云ふことになつてゐる。

B　そんな大きな聲で云ふと内へ聞えやしないか。

A　大丈夫、白痴でその上、つんぼと來てゐるのだからね。

B　つんぼなのかい。

A　つんぼなのさ。

B　それで壁許り見てゐるのかい。

A　さうだ壁許り見てゐる。

B　どうして食つてゐるのだい。

A　近處の人間が、飯だけはかゝさずもつて來て入れてやつてゐるらしい。

B　それは感心だね。

A　それは時々は、飯を運ぶのを忘れる時もあるだらう。三日や四日運ぶのをわざと忘れて見た時があつたが、平氣で矢張り壁を見てゐたさうだよ。

B　悶々しい奴だね。

A　だが白痴としたら出來のいゝ白痴でわるいことは何にもしないのだ。そしてたゞ壁だけ見てゐるのだから、始末はいゝのだ。飢死されると困るので、飯は食はしてゐるが、それもごく少し切り食はないのだから、別に困ることはないのだ。

B　だが飯をやらなかつたら、何處かへゆくだらう。

A　處がそんなことが考へられる男ではないやうだ。飯を入れてやらなければ出て食ふなんて云ふ考へは起らない

らしい。

B　珍らしい馬鹿だね。

A　その癖、顔だけは中々怖い顔してゐる。賢さうな顔してゐる。こんな話がある。何年前かに戰爭があつた時、敵の兵隊がこゝをあらしたことがあつた時、この内にゐるやつこさんだけは、逃げないで矢張りこゝで壁を見てゐたさうだ。皆が逃げろと云つたつてつんぼだらう、だから平氣でゐるので、皆も死ぬなら勝手に死ぬがいゝと思つて逃げたのださうだが、やつこさんはそんなことは一向平氣で、相變らず顔を壁に向けて坐つてゐたら、敵兵が入つて來て、首を切らうとしたさうだが、やつこさんは平氣でゐたさうだ。あんまり平氣なので兵隊の方が怖くなつて、之は餘程偉い人にちがひない。聖者にちがひないと思つてお辭儀して逃げたさうだ。誰だつて顔を見ると、白痴だとは思はないからね。

B　どんな顔してゐるのだい。

A　見たければ見せてやらう。(戸をあけやうとする)

B　默つて戸をあけてもいゝのかい。

A　いゝとも、聾かけたつて聞へやしないからね。時々人が來ると僕はこゝをあけて見せてやるが、自分の首が落ちかけたつて、平氣な男だから、戸位あけたつて、おどろきはしないよ。(戸をあけやうとする) 中々かたい戸だよ。(あける) どうだ中々偉さうな顔してゐるだらう。

B　白痴とは思へないね。中々するどい顔してゐるね。一寸見ると白痴といふより氣違ひに見へるね。

A　だが、氣違ひとしてはおとなしすぎるのだから、矢張り白痴なのだらう。

B　さうかね。見かけは中々堂々としてゐるね。白痴とはどう見ても見えないね。

A　人は見かけによらないと云ふが、本當だね。僕は始め、こいつはきつと利口な人間なのだが、心願のために無言の行をしてゐるのだと思つて、内々尊敬してゐたが、あんまり鈍いのでがつかりしてしまつたよ。この前、僕がこゝを通つた時、一人の男があいつの頭をなぐつて、いい音がするだらうと云つてゐたがね。僕はあいつが起き上るか、どうかするだらうと思つてゐたが、少しも表情が變らなかつた。つまり何にも感じなくなつてゐるのだね。

B　さうかね。しかし人間も、其處まで馬鹿になれゝばいいね。

A　本當だよ。僕もその點では、こいつに感心してゐるのだよ。何んだつて怖いものはないのだ。飢死にすることも、殺されることも、平氣なのだからね。なぐられたつ

て惡口されたつて、蚊がとまつた程にも思はない。そのかはり樂しみなんかも何にも感じないだらう。何のことはない金でつくつた彫刻のやうなものだね。もう生きながら死んでゐるやうなものだね。たゞ息がかよつてゐると云ふだけにすぎないね。人間もかうなつてはおしまひだよ。だがそのかはり心配もないだらう。苦勞なんかもないだらう。この位呑氣な人間はないだらう。

B　しかし本當にあれで馬鹿なのかね。僕にはさうは思へないね。

A　しかし利口な人間が、今時に、こんなことを八九年もつゞけることは出來まい。だつて壁を見てゐたつて何になるだらう。何にもなるわけはないぢやないか。

B　それはさうだね。しかし頭をたゝかれても本當に顔色をかへないかね、たゞかへないふりをしてゐるだけなのぢやないかね。

A　いや。たしかにかへないね。僕はよく見てゐた。

B　しかし遠くで見てゐたのだらう。それぢや、目玉の動きなんかよくわかるわけはない。

A　それなら僕が一つ頭をたゝいて見るからよく見玉へ。

B　たゝいても大丈夫かい。この男にいきなり、怒鳴られたら腰をぬかしさうだよ。何しろこんな怖い顔は滅多に見たことはないからね。

A　大丈夫だよ。いゝかい。なぐるからよく見て居玉へ。

B　大丈夫かい。本當に。

A　大丈夫とも。よく見てゐたまい。

R　よく見れば見る程、珍らしい顔だね。どうもこいつが、怒り出したら、しめ殺されて喰はれさうだね。

A　いや。こいつは實に温和しい奴なのだ。恐いのは顔だけだよ、それならなぐるよ。

B　よし。

（A、頭をなぐる。）

A　どうだ。

B　不思議だね。どうも不思議だ。もう一度なぐつて見てくれないか。（そばによる）

A　よし。（又なぐる）どうだ、矢張りかはらないだらう。

B　かはらない。不思議だね。生きてゐるのかね。

A　生きてゐるにはきまつてゐるよ。

B　どうも矢張り君の云ふ通り、この男は白痴だね。神經がないのだね。僕はこんな男を見たことはない。土產話に一つ僕にも打たしてもらはうかね。

A　あゝ、かまはないから遠慮なく打ちたまい。

B　まるで君のものゝやうだね。はつはつは。

A　はつはつは。

B　一つそれではなぐらしてもらはうかね。

A　遠慮なく。
B　それでは今度、君が見てゐてくれ玉へ。
A　よし。
B　なぐるからね。（なぐる）どうだ。
A　なんともない。
B　本當にこの頭はなぐるといゝ音がするね。もう一つなぐつて見てもいゝかね。
A　いゝとも。
B　お許しが出たからなぐるかな。だが氣の毒だね。
A　感じないのだからかまはないよ。
B　一つうんと力入れてなぐつても大丈夫かね。
A　君の力位いなら大丈夫だらう。
B　不意に感じて、飛び上られてはびつくりするね。
A　大丈夫だよ。この前なぐつた奴は、君より力が強さうな男だつたよ。
B　それなら、これが最後だから、話のたねに力一杯なぐつてやらう。（力をこめてなぐる）
だるま（同時に）喝つ。
（二人腰をぬかす。）
A　許して下さい。
B　許して下さい。
（だるま、默つて立つて外へ出て便所にゆく。）

A　なんだ小便に行つたのだ。びつくりしたな。あの聲にはおどろいたな。何て云ふ聲だらう。
B　本當にびつくりした。逃げ出さうか。
A　あんまりびつくりしたので腰が立たなくなつてしまつた。
B　俺の腰も云ふことを聞かなくなつた。だからよせばよかつたのだ。君があんなことを云ふので。ひどい目にあつた。どうなるだらう。
A　ともかく逃げられるだけ逃げやう。（いざりながら逃げやうとする）
（だるま、歸つて來て、又以前の處に坐る。）
A　こいつは逃げないでも大丈夫だよ。やつこさんびつくりして聲は出したものゝ其處が馬鹿本性でなぐられたことは氣がつかず。俺達のゐることは知らないのだ。不意に小便にゆきたくなつたゞけなのだ。君があんまりひどくたゝいたので、ひよつと氣がついたら、小便にゆきたくなつたのだらう。何んでもなかつたのだ。
B　隨分おどろかされたな。あの聲には、一時はどうなるかと思つた。
A　もう一度なぐる元氣があるかね。
B　もうとてもない。腰はたつかね。
A　やつとたちさうだ。隨分おどろいたね。壽命が三年も

ちゞこまつたやうだ。

B　どうもいくぢのない話だね。

A　いゝ話の種が出來てうれしいだらう。

B　しかし腰をぬかした話は內證にしておかう。

A　あんまり名譽なことでもないからね。

B　君はもっと度胸があるのかと思つたよ。

A　しかし僕にはもう一度位いなぐれる元氣があるね。

B　本當かい。

A　本當とも。だが君がおどろくと可哀さうだからやめておかう。

B　なに僕はあの戶口で見てゐるから、なぐれるなら一つなぐつて見せてもらはう。だがなぐる勇氣は君にはないだらう。さつきのやうぢや、とてもそんな勇氣か君にあるとも思へない。

A　なくつてどうする。一つ俺の勇氣を見せてやらう。（こはぐだるまに近づき、手なふり上げる）

（だるまふり向く。）

A　（跪づき）お許し下さい。お許し下さい。

だるま　今日は何日かな。

（A、B、びつくりして口をもがもがする。）

だるま　お前さん方は、つんぼなのか。

A　いえ、いいえ。

だるま　今日は何日かな。

A　へい、へい、今日は十一月の十二日で御座います。

だるま　さうか。それでは今日でまる九年、こゝにゐたわけだな。

A　へい、へい。

だるま　（立ち上り）鈍骨の俺も九年でやつと覺りの道を得られたわけだ。佛さんのおつしやつたことは本當だつた。ありがたし、ありがたし。

（二人あつけに取られて見てゐる。）

A　あなたはつんぼではなかつたのですか。

だるま　つんぼではない。

A　さつきの失禮をどうぞお許し下さい。

だるま　お前さんは私に何にもわるいことはしなかつたぢやないか。

A　それでもあなたの頭をお打ちして。

だるま　あゝお前さんだつたか。それはどうもありがたう。お前さんに頭をぶたれたので、私は悟りに入れたのだ。佛さんが、お前さんにのりうつつて私をぶつて下さつたのだ。

（若き立派な僧侶、一人登場。だるまに最敬禮なする。）

僧侶　佛さまよりのおつげでお迎へに參りました。

だるま　さうか、それなら一緒に行かう。（二人に氣輕にお辭儀し）さつきはどうもありがたう。

（僧侶とだるま退場、二人あつけにとられる。）

――幕――

桃源にて

所
支那

時
昔

人物
男
少年（おとで武人）
少女（おとでその妻）
老人
その他

第一幕

少年　流れゆく桃の花。そして都にゐる人にことづけてくれ。この山の奥に私達が咲いてゐますつて。そしてお兄さんの今迄の苦心を都の人に語つておくれ。流れる水よ、私もお兄さんにまけないだけの仕事をして見せる。私はまたいゝ處を見つけて、いたる所に梅の花を咲かせて見せる。

男（登場）お前は何をしてゐるのだ。

少年　桃の花の流れてゐるのを見てゐるのです。お兄さん何處にゐらつしやつたのです。

男　山に桃をうゑに行つてゐたのだ。一本でも多く桃の木を植ゑたい。なへ床の桃の芽生へは早く自分の居處に根をはりたがつてゐる。そして私に植ゑてくれ植ゑてくれと云ふからね。

少年　お兄さんはこんなに桃の木をうゑて、まだ植ゑたりないのですか。

男　さうさ。どんな仕事だつて、上には上があるものだ。そして之でいゝと云ふことはない。まだあの山に千本の桃の木が植ゑられるだらう。あの川岸にもまた桃がある方がいゝ。まだ俺の一生をかけても、おひつかない程の仕事がのこつてゐる。

少年　しかしお兄さん。天下にこんな美しい桃の山があるでせうか。

男　ないかも知れない。あるかも知れない。しかし益々美しくすることはいくらでも出來る。人間の力の限りをつくしたら、この山の何倍も美しい山をつくり出すことが出來るだらう。たゞさう云ふ人がこの世には居ないだけ

だ。私はこの仕事をやり出した以上は美しい上にも美しくする。そしてこんなにも美しい桃の山を見たことはないと云ふ仙境をつくつて見る。見る人はおどろくだらう。そしてこの世にゐるとは思はないだらう。この世にはいくらでも美しいものがある。それの眞價値を生かしさへすれば何處だつて仙境はひらけるものだ。

少年　私はお兄さん。お兄さんにはまけないやうな、山をさがして、滿山を梅の林にして見せます。

男　しかしこの仕事は樂ではない。たゞ桃を植ゑればいゝと云ふのではない。土質や、地形をよく見なければならない。それより厄介なのは前から生へてゐるいろ〳〵の樹だ。私は山火事に燒かれたこの山を見つけて、仕事にかゝつてから今日で二十三年たつ。皆、私のことを氣違だとか、仙人だとか、隱者だとか云つてゐた。私のその間の苦心は中々大へんだつた。俺は二度とこの仕事をしようとは思はない位ゐだ。たゞ私には他に仕事がなかつた。繪もかけない。詩もつくれない。學問も出來ない。勿論、今この世に得意になつてゐる男位ゐなことは出來るだらうが、それが男子の仕事として誇れるかどうか。私は天下に類のない、私でなければ出來ない仕事をさがした。幸ひ私は比類のない丈夫な身體と、それ以上に根氣のいゝ性質をもつてゐる。それに私はどうしてか桃の花を前生からの因緣のやうに愛してゐる。だから私はこの仕事をしたのだ。お前は私とちがつて、身體も弱いし、他に才もある。私の根氣と、目的に忠實な點だけでは眞似るがいゝが、こんな仕事は眞似しないで、もつと自分に適當な仕事をおし。

少年　お兄さん。本當にさうおつしやれば、之れだけのことをするのは大したことでしたらうね。

男　まあ、好きだから出來たのだ。又他に才がなかつたから出來たのだ。私は始めの二三年はよろこんでこの仕事をした。その時は希望に燃えてゐた。だがついでおこる困難と、それにもましてこんなことをしてゐてもいゝのか知らん。天下は亂れてゐて、多くの人は燒け出され、或は餓え死してゐるのに、自分だけは呑氣にこんなことをしてゐていゝのか。自分も劍をとるのが本當ではないかと思つたりした。又自分の力と、自分の根氣をもつてしたら王になれないとも限らない。そしたら何萬人の人をつかつて、一朝で自分の今出來ない仕事をやつてのけることも出來るのだとは思はないこともなかつた。しかし私は、さう云ふ僥倖の世界へ入るのはいやだつた。他人を又つかうと云ふのも自分の性質には向かなかつた。自分は誰もに顧みられずに、こつ〳〵仕事をするのが好きだつた。それから私は五六年の間は、たゞ働いてゐた。

折角植ゑた木の芽を鵯や兎にやられてがつかりしたこともあつた。蟲がついて全滅したこともあつた。だが私はこの道より他に、自分を生かす道があるとは思へなかつた。それでやつとこゝまでやり通して來た。

少年　私もお兄さんから招いて下さつても、こんなに美しい世界を見るとは思ひませんでした。あの峠にのぼつてこの世界が一目に見られた時、私はどんなに驚き、どんなによろこんだでせう。世界中の人にこの世界を見せたく思ひました。見せたらどんなによろこぶでせう。

男　私はまだ世界中の人に見せたいとは思はない。私の夢の内に咲いてゐる世界はこの世界より何倍美しいかも知れない。もう十年か、二十年、私は、誰れにも知られずに、人々のよろこびをつくつておきたい。

少年　その時は皆、どんなに喜ぶでせう。

男　どれ、もう少し植ゑて、それから晝飯を食ふとしよう。

少年　お兄さん、僕にも手つだはして下さい。

男　晝飯を食つたら、つれていつてやらう。お前には私のあとはついて來られない。私は之からあの山まで急いで行つて來なければならないのだ。それが私の今朝の日課なのだ。私は自分のきめたたけのことはどんなことがあつてもやることにしてゐるのだ。

少年　それでは飯を食つたあとつれていつて下さい。

男　飯を食つたらつれていつてやる。（退場）

少年　（あとを見おくり）あれでなければこんな仕事は出來ないのだな。

（少女あわてゝ登場。）

少女　早く私をかくして頂戴。私は惡者（わるもの）に追ひかけられてゐるのです。

少年　あの家のなかにかくれていらつしやい。

（少女かくれる、あらくれ男四五人登場。）

甲　こゝに女の子は逃げて來なかつたかね。

少年　來ましたよ。

乙　何處へ行つた。

少年　あつちの方へ逃げてゆきましたよ。私を見たらびつくりして、あの森のなかにとび込んでゆきましたよ。

丙　嘘ついたら承知しないよ。

少年　僕は嘘なんかつきません。

（あらくれ男、森の方へゆく。）

少年　（家の方へゆき）早く今のうちに今來た方へ逃げていらつしやい。

少女　ありがたう。

少年　いゝ處を知つてゐますから、僕が教へてあげませう。（二人退場）

（少年まもなく戻つて前の通り川岸に立つ。甲乙二人

戻つてくろ。）
甲　お前は嘘をついたな。
少年　いゝえ。僕は嘘なんか云ひませんよ。
甲　今お前が娘と一緒に走けてゆくのを見たぜ。
少年　僕はさつきからこゝにゐるのです。
乙　嘘つけ！（なぐる）
甲　正直に云はないか。
少年　僕は本當にあの森に逃げ込んだのを見たのです。
乙　嘘をつくとかうだぞ。（又打つ）
少年　僕は知らないことは知りません。
乙　強情張り。（又打つ）
甲　あゝあすこに家がある。あれを一つ捜して見よう。
乙　まあさがして見よう。しかしこいつが逃げるといけないからゆはひつけてやらう。
甲　さうしやう。（甲乙少年をゆはひつけ、家の方へゆく）
乙　あいつが知らないわけはないと思ふのだがな。
甲　あいつは殺したつて白狀しないと云ふ顏してゐたよ。
乙　本當にあゝ云ふ泣き面をする奴は、強情張りだね。（予あたりに桃の枝を折る）
（家をさがして出てくろ。）
乙　お前は知つてゐるのだらう。白狀しないと承知しないぞ。

少年　だから僕は正直にあの森へ行つたと云つたのです。
乙　まだ強情はるつもりだな。（桃の枝をとつて打つ）
少年　知らないものは知りません。
甲　強情はると殺すぞ。
少年　いくら殺されたつて知らないものは知りません。
（丙、丁、出てくろ。）
甲　居たか。
丙　何處にも居ない。
乙　こいつが嘘ついたと思ふのだ。
丁　きつと嘘つきあがあつたのだね。子供だと思つて馬鹿にしたのが、こつちの手ぬかりたつた。
甲　しかしまだ遠くにはゆかないと思ふのだ。きつとこの近所にかくれてゐると思ふのだ。
丙　さがすだけさがして見やう。さう遠くへは行くわけはない。
（皆さがしにゆく。）
甲　（乙と登場）矢張り居ない。どうもこの家があやしい。他に行く處はない。一つこの家のゆかをはがして見よう。
乙　天井にゐるかも知れない。
（家のなかを出たらめに捜す。）
丙　（丁と登場）お前は誰とこの家に居るのだ。
少年　兄さんと一緒に居ます。

丙　兄さんは何處へ行つた。
少年　山へゆきました。
丁　狩に行つたのか。
少年　いゝえ、桃を植ゑに行つたのです。
丙　桃を植ゑに。
少年　えゝ。
丁　この山の桃は全部、お前の兄が植ゑたのか。
少年　さうです。
丙　噓だらう。こんなに桃が一人で植ゑられてたまるものか。
少年　二十年以上かゝつたのです。
丁　それならお前はあの評判の桃の仙人の弟か。
少年　さうです。
丙　桃を生命よりも大事にしてゐると云ふのは本當か。
少年　本當です。
（甲、乙出てくる。）
甲　見つかつたか。
區　見つからない。
甲　あの小倅がどうしても知つてゐると思ふが。
丙　僕はきつと、こいつの兄貴の、桃氣違ひが、山へつれて行つたのだと思ふ。
甲　桃氣違ひ。
丙　あの評判の桃仙と云ふのが、こゝに住んでゐるのださうだ。
甲　さうか。お前の兄さんは何處へ行つた。
少年　山へゆきました。
甲　何しに。
丁　桃を植ゑにだつてさ。
乙　呑氣な奴だな。
丙　きつとそいつが、娘を隱してゐるのだと思ふのだ。そいつをつかまへれば、きつと娘の居處がわかるにちがひない。
甲　さうにちがひない。そいつを見つけろ。
丙　お前の兄さんは何處の山へ行つた。
少年　僕は知りません。
乙　又強情はるな。（打つ）
甲　さがして見やう。
丙　捜がさう。こんなわからずを相手にしたつて仕方がない。
（皆、退場、暫らくして男をつかまへて登場。）
男　お前は娘を本當に知らないのか。
少年　知りません。あの森の中に入つたと思ふのです。
男　さうか。この人達はその娘を俺がかくしたと云ふのだ。そしてそれを白狀しなければ、この桃をのこらず切つて

しまふと云ふのだ。知つてゐるなら云つてくれ。
少年　僕は知らないのです。
男　さうか。それならこの俺の二十何年の苦心がなくなつてもいゝと云ふのだな。
少年　知らないものは仕方がありません。
男　さうか。お前がさう云ふのなら本當に知らないのだらう。私は二十何年桃を愛して來ました。しかし之も運命でせう。桃をのこらず切つて下さい。私は知つてゐれば必ず云ひますが、知らないのですから仕方がありません。
甲　よろしい。それならあの桃を一つ切り倒さう。
乙　それがいゝだらう。
（丙、家へ行つて鋸を持つて來、一番美しい木を切らうとする。丁は劍をぬいて男と少年を見はりしてゐる。）
男　その木たけは許してくれ。
甲　切り倒せ。
（切り出す。）
男　お前は本當に知らないのだな。
少年　知りません。
男　あゝ、私は自分を切られるよりつらい。私は毎日あの桃の木をさするのをたのしみにしてゐた。
少年　お兄さん。お兄さんのお氣持はよくわかります。
男　その木を切るのはよしてくれ。それを切り倒す位ゐならこの俺を殺してくれ。
少年　お兄さん。そんなことをおつしやるものではありません。お兄さんは生きてゐらつしやれば、まだどんな木でも植ゑることが出來ます。
男　お前はさう思つてゐるのか。お前は桃には魂がないと思つてゐるのか。桃の木を本當に愛する氣持はお前にはわからないのだ。
少年　それだつて、お兄さん、お兄さんの生命にくらべたら桃の木がなにゝなりませう。こんなに澤山桃の木があるぢやありませんか。
男　いくらあつたつて、あの桃は、あの桃だ。他の桃ではない。あの枝ぶり。あの花の咲きかたは他の桃には出來ないことだ。それにお前には、桃の泣き聲が聞えないか。桃の木から流れ出る血が見えないのか。あの全身をふるはしてゐる姿はあはれとは思はないのか。私の生命のこもつてゐるあの桃の木が倒されるのを何とも思つてゐないのか。
少年　私はお兄さんに同情してゐます。
男　だがお前には俺の氣持はわからないだらう。わかれば娘のゐる處を知らせてくれるはずだ。
少年　知つてゐれば知らせます。
男　本當に知らないのか。

少年　知りません。

男　（丁に）矢張り、弟は本當に知らないと思ひます。

丁　知らないわけはない。あの娘の足でさう遠くへゆくわけはない。お前があの林のなかの何處かにかくして來たにちがひない。

（桃の木、切り倒される。花が流れに澤山散る。）

甲　さあ、まだ白狀しないか。しなければこの木を切るぞ。

男　知つてゐればいひます。知らないことは云へません。

少年　お兄さんは知つてゐるわけはないのです。娘の方があの森へ逃げ込んだ時、お兄さんは山にゐらしつてこゝにはゐらつしやらなかつたのです。

甲　白狀しなければ、この桃をのこらず切り倒し、あの山に火をつけるがいゝか。

男　そんなに無理なことを云へば、嘘つくより他仕方がない。だが嘘つけば、君達はまた怒り出すだらう。

甲　あたりまへさ。嘘ついたらそれこそ、この山を殘らず燒いてやる。そしてお前も、弟も殺してしまう。

男　だから知らないと云ふのだ。君達がぐづ／＼してゐる内に娘さんは遠くへ逃げてしまつたのだらう。あの森のなかに入れば中々見つからないのはあたりまへだ。

甲　桃をのこらず切り倒せ。

男　それは許して下さい。それは殘酷です。

甲　白狀すれば許してやる。白狀しなければ切り倒すより仕方がない。

男　あゝゝもう見てゐられない。あの音は聞いてはゐられない。だが私達力のないものはどうすることも出來ないのだ。之が人間なのだ。桃よ許してくれ。私にはどうすることも出來ないのだ。

（切り出す。桃が倒れかける。）

男　お前は本當に知つてゐるのだらう。白狀してくれ。たのむから白狀してくれ。

少年　お兄さん。僕は知りません。お兄さんはさつき、人間はさけられない災難はしのばなければならないと云ふやうなことをおつしやつたぢやありませんか。

男　だがそれがどの位ゐつらいかお前は知るまい。

（又桃が倒れる。）

男　私はどうしたらいゝのだ。天よ私をたすけて下さい。お前は知つてゐるのだらう。お願ひだ云つてくれ。

少年　お兄さん何をおつしやるのです。僕は知らないと云つてゐるではありませんか。又よし知つてゐても僕には云へません。人間の生命にかへれば桃か何んです。

男　お前は自分で心血をそゝいだ仕事にたいする男の愛を知らないのだ。畫家が自分の最大の傑作の内にある人物の顔に一々墨をすりつけられるのは、どんなにつらいこ

とかお前にはわかるまい、天下の寳かこわれてゆくのだ。天下の寳にくらべれは、他人の娘か何になる。それも殺されると云ふのぢやない。賣られゝば其處で又その花が咲かないこともない。

少年　お兄さん。僕はお兄さんを憎みます。

男　お前は知つてゐるのだな。

少年　いゝえ、僕は知りません。

男　知つてゐて云はないのなら、お前は今日から、もう俺の弟ではない。

少年　お兄さん僕はお兄さんを輕蔑します。

男　お前はまだ仕事と云ふものゝ力を知らないのだ。俺は自分の一生さへ、仕事のためにすてゝをしいとは思はないのだ。

少年　そして他の人の生命もそのためには惜しくないでせう。

男　お前は、この仕事が天下の誇りになり、又喜びになることを知つてゐるか。

少年　私は、何にも知りません。たゞお兄さんが、恐ろしい方だと云ふことだけはつ切り知りました。

男　俺のくるしみをお前が知つたら。

丁　誰か人がくるやうだよ。

甲　さうか。それなら一寸見て來やう。

（甲退場。まもなく登場。）

甲　大變だ。大變だ。逃げろ、逃げろ。

乙　何んだ。

甲　五六人の武士がやつてくる。逃げろ、逃げろ。

（甲乙丙丁逃げる。）

（男、少年の繩をとき。）

男　お前は知つてゐたのだらう。

少年　勿論知つてゐました。

男　早くゆけ。逃げないと打殺すぞ。

少年　さようなら、お兄さんもうお目にかゝらないでせう。

男　早く行け。

（少年逃げる。）

（男、桃の木にすがつて泣く。）

（王、狩の姿で家來五六人と登場。男かくれる。）

王　こんな所にこんな立派な桃の木があるとは思はなかつた。さつきあんなに桃の花か流れて來たのできつと桃の林があるのだらうと思つたか、こんなに美しいとは思はなかつた。この桃の木をのこらず離宮にうつしたら、さぞ立派だらう。

家來一　それは誠に結構で御座います。桃もさぞよろこぶで御座いませう。

王　どうしてこんなに立派な木が切り倒されてゐるのだら

う。

家來一　本當に惜しいことで御座います。

王　木こりでも切つたのだらう。このまゝにしておいたら、今にこの桃ものこらず切られてしまうだらう。早速人夫をよこして、こゝにある桃の木は全部、離宮に持つていつてあすこを一つ大きな桃園にしてやらう。皆もさぞよろこぶだらう。今日は何にもとれなかつたが、こゝに來たのは大出來だつた。どうも桃の花が澤山流れてくると思つた。俺の思つた通りだつた。

家來一　本當に私許りでしたら氣がつかずにすませる所でした。

王　すぐ歸つて、人夫をよこずとしやう。（家來二に）お前が案內役をしろ。そしてこんな山の桃たから誰も持ち主はあるまいが、あつたら、十分に金をやつて、持つて來るやうにしろ。

家來二　はい。

王　それでも聞かなかつたら、私の云ふことを聞かない不忠者として罰してもいゝ。

家來二　それは王様のお目にとまつたと云へば、ありがたがつてすぐ献上すると申しませう。之程、名譽なことは御座いませんから。

王　早く歸つて皆に話してやらう。こんな美しい處は見たことがない。珍らしい所もあつたものだ。この桃を皆持つていつて離宮にうゑたらさぞ美しいだらう。

（王達退場。男泣く。）

――幕――

第二幕

翌年の春同じ場所。すつかり荒廢してしまつてゐる。桃の木は一本もない。男見すぼらしい風して川で釣をしてゐる。老人登場。

老人　何をしてゐるのだ。

男　釣をしてゐるのだ。

老人　釣れるかね。

男　何にも釣れない。

老人　こゝにあつた澤山の桃の木はどうしたね。

男　皆、王さんの所へ引越した。

老人　随分運ぶのが大へんだつたらう。

男　運べない奴は切り倒していつたよ。一本でも殘つてゐるのが見つかると重い罰をうけなければならないと云つて皆切つていつたよ。

老人　お前さんも随分金持になつたらう。

男　御らんの通りさ。

老人　高く賣りつけてやればよかつたのに。
男　王様は高く金を出して買つたつもりでゐるだらうよ。だが俺は金はほしくなかつたからたゞでくれてやつた。
老人　隨分やせたね。
男　生きてゐるのがいやになつたからな。
老人　意氣地のない奴だな。
男　二十何年の苦心が消えてゆけば、誰だつて少しはやけになるだらう。
老人　それが凡夫のかなしさと云ふ奴だね。
男　まあ、そんな所だらう。
老人　やけを起すといゝことがあるかね。私はお前さんが、元氣がないと聞いて心配してやつて來たのだ。
男　（氣のない返事）それはありがたう。
老人　人間は自分に出來ないことには責任もつ必要はない。
男　そんなことは僕だつて知つてゐる。
（小さい魚をつり上げる。）
老人　君が桃を植ゑることにあきたのならそれは仕方がない。だが他人に奪はれたからと云つて、しよげるのは男子として恥だね。
男　君だつたらしよげないかね。
老人　私だつたらしよげるだらう。だが一年たつてもまだしよげてゐるとは思はない。
男　あなたならどうする。
老人　私だつたら、又桃を植ゑるね。
男　植ゑたつて又持つてゆかれてしまう。
老人　もつて行くのを君の力でとめることが出來なければ、もつてゆかれるのに君の責任はない。勝手に持つてゆかすより仕方がない。だが生きてゐる限り、自分の仕事をやめるのは恥だ。男子としてそんなことは出來ない。持つて行く奴は持つてゆけ、切りたい奴は切れ、勿論それがとめられるものならとめるのもいゝ。しかしとめる力がどうしてもない內は、それは甘じてそして自分のするだけのことを執念深くするのが、男子の仕事ぢやないかね。私はそんな男子が居たらよろこんで頭をさげる。しかし二十何年ぽつちりの苦心が無駄になつたからと云つてしよげて何にもする氣が出ないやうな男はたのもしくない男と思ふよ。何度しくじつても君はまゐらなかつた。その點で僕は今時に珍らしい男もゐてくれたものと思つた。そして君の仕事を默つて見てゐた。そして君の仕事が立派に出來上りつゝあるのをどんなに感心して見てゐたらう。すると去年あんなことがあつた。私は君の心を察して泣いたよ。しかし君のことだから、今に又桃を平氣で植ゑはぢめるだらう。それをたのしみにしてゐる

た。その時こそ、去年の美しさを見るよりもなほ感心して見て上げやうと思つてゐる。處が私はがつかりしたね。それで私は辛棒が出來ずにやつて來た。切られた桃からはちやんと芽が出てゐる。處が君はどうだ。すつかり力を失なつてゐる。尤もまだ私は君に失望してゐない。君はきつと、又更に大きな考を起して仕事にとりかゝつてくれるだらう。生きてゐる間は、失望することを知らない男であつてほしい。死ぬまではいくら切られても、折られても、又生きかへる男であつてくれ。さう云ふ男のゐてくれることは、人間に生れたよろこびなのだ。あの桃の芽を見てやれ。

男　あなたの云ふことは本當だ。しかし私に力がなくなつた。元氣がなくなつた。そして桃をうゑたつてそれが何にゝなると、懷疑的な氣持になつた。

老人　無理はない。君はまだ若いのだから。だが君は少しづゝ仕事を始めて見るがいゝ。その内に元氣になるだらう。人間はさう云ふ風に出來てゐるのだ。君はあの切られた桃から、はえ出したあの元氣のいゝ芽の美しさをまだよく見ないのだね。

男　どれ。（釣をやめて樹の方へゆく）あゝ本當に芽が出てゐますね。お前は本當にまだ死なゝかつたのか。そして再び前のやうな立派な木にならうと思つてゐるのか。お前も之から大へんだね。

老人　君はこの木が大きくなつた時のことを考へるから大へんなのだ。この小さい芽を出す。その勇氣に感心し、この小さい芽の美しさに感心すれば、之たけでどの位い美しいものか知れない。私はこの桃に禮拜する。（お辭儀する）桃の勇氣が半分でも君にあつたなら、僕は君に御辭儀するよ。

男　だがすべては空だと云つた男がある。何にもしない方がいゝと云つた男もある。

老人　そんな男はない。それに似たことを云つた男はある。君が元氣がないからそんな聞き間違ひをするのだ。人間は死んでしまへば別だ。生きてゐる間は何かしようとしなければいけない。自分の仕事をやり通さうとしなければ、私の若い時學問をするのがいやになつて、山をおりやうとした時道ばたで、斧を石にあてゝゐた男を見た。私は何をしてゐるのだと云つたら針をつくつてゐるのだと云つた。私はそれを聞いて、その男を馬鹿とは思はず、すつかり感心した。その意氣でやらなければ駄目だと思つた。私の友達は二十年かゝつてこしらへ上げた本の原稿を燒かれてしまつた。私の友達は其時、お前さんのやうに參つたが、更にいゝものを十五年かゝつてかき上げた。それが人間の人間たる所で、さう云ふ話を聞

いてよろこべるのが人間だ。失望したり、自棄をおこしたり、一寸したことで勇氣を失なう話を聞くと私は腹が立つてくる。それが人間と云ふものだ。その力がなくつて、人間は進んではゆけない。參るのも人間だらうが、それで折れないのも人間だ。私は君にたのむ。君は再び君の仕事をやつてほしい。今度又桃の木をぬすまれるかも知れない。だが生きてゐる間は失望しない男になつてほしい。

男　なりませう。

老人　ありがたう。私は君を禮拜する。

男　いや私こそあなたを禮拜します。

老人　それなら又來ます。

男　どうか私の力がなくなつた時來て下さい。

老人　生きてゐたら又來ます。（退場）

男　（桃をさすりながらあかず芽をながめ）この美しさ。私もお前に負けないよ。お前は私の先生だ。私はきつとやりぬく。

――幕――

第三幕

桃は第一幕よりもなほ美しく咲いてゐる。第二幕より十數年後。男、東家(あづまや)で琴（他のものでもいゝ）を彈じてゐる。老人登場靜かに桃を見る。男、琴を彈じをはり、老人に氣がつきおどろいて立ちあがり、うれしげに聲かける。

男　よく來て下さいました。ちつとも氣がつきませんでした。

老人　見事に花が咲きましたね。

男　おくたびれになつたでせう。あすこで休みませう。

老人　ありがたう。

男　こんな花をこゝで見ることが出來たのは全くあなたのおかげです。

老人　どうしまして、僕があんなことを云はないでも、あなたはやがて元氣をとり戻したでせう。

男　そんなことはありません、あなたの御かげで元氣をとり戻したのです。私は今度どうせ花は見られないものと思つてゐました。又どうせ持つてゆかれるものと思つてゐましたから、今でもまだ、いつ何時、この桃を全部獻上しろと云つてくるかわからないやうな不安をうけます。夢で時々そんな目にあつて、本當にがつたりしたことがあります。しかし腹の底では覺悟が出來てゐます。今度はいくらとり上げられても、笑つて持つてゆかせるでせう。

老人　本當にあなたの態度には感心しました。その感じがこの山の美にあらはれてゐるやうに思ひます。今度はすべてが自然で、無理がないやうに見えます。見てゐると氣がゆつたりして來ます。このまゝ成佛してしまつてもいゝやうな氣がします。

男　私もさう云ふつもりで仕事をしてゐました。私はすべてを何かに任せてゐました。萬事あなた任せの春のくれ、そんな氣持で、ゆつたりとした氣持で仕事をしました。前にはおどかしたいとか、感心させたいとか云ふ氣が何處かにありました。それ以上、すべてに執着が强すぎました。今度はすつかりおちついてゐます。之もあなたの御かげです。

老人　そんなことはありません。しかし少しは御役に立つたかと思ふと、私はなほうれしいのです。この桃の木たちが自分の孫のやうな氣がします。この處に來たものはあなたの話を聞いて勇氣を得、又この景色を見て、心をすなほにし、又やすらかにするでせう。

男　あなたの心の反映が其處にもあらはれてゐます。之はあなたと私の作です。（家へゆき酒を持つてくる）どうぞ一杯上つて下さい。

老人　ありがたう。それではお祝ひしませう。こんな靜かな夢のやうな世界がこの世にあるとは誰も思はないでせう。私は本當にうれしくなりました。

男　あんまりこの景色に執着すると、又嵐がやつて來ないとも限りません。だが私は安心してたのしめることをよろこんでゐます。

老人　何しろ愉快です。こんな愉快なことはありません。

老人　杯をかへしませう。靜かな、靜かな日ですね。

（この時、立派な武人、その妻をつれて登場。）

武人　あゝ兄さん。

男　誰だ。

武人　兄さん。僕です。

男　お前か、隨分あはなかつた。その後どうしてゐるかと思つた。

武人　あれからいろ〳〵のことがありましたが、とう〳〵こんなものになりました。私は惡者には武力より他仕方がないと云ふ氣になつたので、とう〳〵こんなものになりました。

男　身體があんまり强くなかつたやうだがな。

武人　すつかり丈夫になりました。お兄さん、之が僕の妻です。

男　始めて。

妻　この前の時は大へんおさわがせしまして。

男　私には思ひ出せませんが。

武人　お兄さんは、御存知ないはずです。だが、これが十六年前逃げて來て私がかくした娘だつたのです。

妻　あの時は本當に御迷惑をかけまして。

男　あの時のことは云はないで下さい。弟、よろこんでくれこの通りものになつた。あの時よりはもつと深い優れた美しさを持つてゐるだらう。

武人　本當に私はこゝに來ておどろきました。お兄さんのことですから、又起き上られるとは思ひましたが、王樣がこゝの桃を全部離宮にうつされたことを聞いた時、私は心配してゐました。

男　一時は氣かぬけたやうに參つたが、この方が來て力を與へて下さつたので、又やりなほしをした。之は僕の弟です。

老人　始めてお目にかゝります。

武人　ありがたう御座いました。

男　あの時、お前の强情なのには感心したが、憎らしくさへ思つたが、今になればお前が强情だつたのはよかつた。

武人　あの時のことを思ふと、私は本當にお兄さんにすまなく思ひます。

男　あの時は、俺の心が少し狂つてゐた。

武人　あの時僕はもう少しで云はうかと思つた時がありました。ですがこれに決して云はないと約束したので、男が約束をたがへる位なら死んだ方がいゝと思ひました。それからお兄さん、王さまがかうおつしやいました。お兄さんがこの山を美しくするために人夫が御入用ならば、いくらでもつかつていゝ、費用は皆、王樣が出すとおつしやいました。

男　さうか、よろしく申してくれ。だが私は一人で氣樂につくる方が呑氣でいゝ。人夫の力はもつと人民にとつて急務なことにつかう方がいゝだらう。かう云ふ仕事は一人でやる處に面白味がある。尤も、自分一人で、出來ない仕事でもあつたら、おたのみするかも知れない。よろしく云つてくれ。

武人　承知しました。（妻に）どうだ美しいだらう。こんな處を見たことはあるまい。

妻　はい。本當に美しいのでおどろきました。

武人　お兄さんの三十何年の御苦心の之が結晶なのだ。

妻　この前の時は何にもわかりませんでした。何が仕合になるかわかりませんのね。

武人　人間は何が又不幸になるのかわからないものだ。

妻　そんな緣起のわるいことは云はないものです。

武人　しかしどんな不幸が來たつて、決心したものは、道をひらけるだけひらいて、進めるだけ進む。そして進めない時には勇ましく死んでゆくものだ。

妻　本當にさうね。

男　お前の云ふ通りだ。私達は力がよわすぎる。何かの許しがなくては何一つ出來ない。だがやる所までやつて見るだけだ。何事が來ても恐れないで、お互に進んで行かう。私は死ぬまでこの山を美しくするだらう。お前は、お前の信じた方に戰つてゆけ、さあ二人とも腰かけて祝杯を上げよう。

武人　はい。

（四人祝杯をあげる。）

――幕――

一日の素盞嗚尊

大昔の田舍家の内外、内に母坐つて、娘立つて柱により泣いてゐる。外で父劍をとぎながら泣いてゐる。

娘　お母さん。もう私はあきらめてゐます。泣かないで下さい。お母さん。お父さんは何處にいらしつたのでせう。お父さん、お父さん。

父　私か、私はこゝにゐるよ。

娘　なにしてゐらつしやるの。

父　別に何もしてゐないよ。

娘　さあ早く上つて頂戴。

父　今ゆくよ。

娘　お父さん何してゐらつしやるの。（庭におりやうとする）

父　（かくしながら）今ゆくよ。

娘　（父のそばに來）あゝ劍をといでゐらしつたのね。

父　嘘だよ。

娘　お父さん。もし劍を研いだのなら、妾はお父さんを恨みますよ。あの男がもしそれに氣がついたら、妾の心配してゐることはすぐ起りますからね。

父　大丈夫だ。あいつに知らすやうなことはしない。

娘　なぜ劍をといでゐらつしやるの。あいつを殺さうと思つてゐらつしやるの。

父　殺すことが出來たらな。

娘　出來ませんよ。あれを殺さうとした人は何人あるか知れません。しかしその度に罪のない人間が復讐をされるのです。決して手向つてはいけませんよ。

父　大丈夫、手向ふやうなことはしないよ。

娘　それから、お父さん、妾がつれてゆかれても死んではいやですよ。妾は殺される迄は希望は失はないのですから、何處から救ひが來るかわかりませんから、大概は駄目でも、その望みはすてないで下さい。

父　俺達は待つてゐるよ。あいつがどうかした拍子で死んで、お前が歸つて來ないとも思はないから。

娘　私は望みを失なつてはしないのです。あの男だつて人間だと思つてゐます。今迄毎年々々、一人づつ女をさらつていつて一年たつとその女を殺すにした處が、人間は一年の間に死なゝいといふことはありません。又心がかはらないといふことはありません。私はどんな時だつて絶望はしません。死んだつて生きかへる位に思つてゐます。ですから悲しいにはちがひありませんが、私は心の

底には喜びさへ感じてゐるのです。何もかも私に任せて頂戴。そして私達はあの男を怒らさないやうにして、今迄のどの家でもしたことのない程おちついてあの男を迎へてやりませう。

父　お前のしたいやうにするがいゝ、私達はお前の氣に入ることとならなんでもするよ。

娘　そんなやさしいことは云つてはいけません。私は泣きたくないのです。私は決心してゐるものです。どうか私の出たがつてゐる涙を出さないやうにして下さい。私は笑つて、私はあの男についてゆきたいのです。さつきから泣いたので、私の顏は醜くなつたでせう。私は出來るだけ綺麗にして、そしてあの男を迎へてやります。さあ、家に入りませう。

父　あゝゆくよ。俺のこの腕さへ强かつたらな。

娘　さうしたらあなたは今時分生きてはゐらつしやいませんわ。

父　さうかもしれない。しかし生きてゐなかつた方が仕合せだつたらう。

娘　まださうきめるのは早くつてよ。私は覺悟してゐますの。私の手はふるへてはゐませんわ。

父　お前が男だつたらな。

娘　私が男だつたら、いや私が女ですから、私はあの男を。

父　お前はあの男を殺さうと思つてゐるのだね。

娘　殺せる時があれば殺しますが、あの男だつて油斷はしないでせう。（母に）お母さんもう泣かないで頂戴ね。私は先刻まで悲しくつて、悲しくつて仕方がなかつたのです。所が今泣いてゐる內に段々氣持がおちついて來ましたの。自分でも不思議な位、そして私は絕望し切つた所からやつと希望をとりもどしましたわ。私は他の女のやうにあの男を恐れて許りはやらないつもりです。あの男を愛してゐるやうに、そしてあの男の所にゆくのをよろこんでゐるやうに見せてやります。あの男だつて、人間である以上、私はあの男の心をなほせないものとは思つてはゐませんの。男が戰場にゆくやうな氣持で、私はあの男を待つことにしましたの。

母　お前は本當に恐ろしい氣になつたのだね。だけど無鐵砲なことをしてはいけないよ。お前が生きてゐる間、私達も生きてゐるからね。

娘　本當に生きてゐて頂戴よ。私はどうもどこからか救ひが來るやうな氣がして仕方がないのです。

母　それは來ないとは限らないよ。未來のことは私達にはわからないのだから、だからやけを起さないで、身體を大事にして生きられるだけ生きておくれ。

娘　えゝ、殺されるまでは生きてゐますわ。殺されても生

きかへるつもりでゐますわ。私は急に強くなりましたの、泣けるだけ泣いたら、反つて強くなつて來ましたわ。あの男を見たら氣絶するだらうと思つたのですが今なら笑つてゐることも出來るやうですわ。私は着物を着かへて出來るだけ美しくしてあの男を迎へてやりますわ。（奥へ入る）

（あと見送つて父と母泣きじやくりする。奥から娘の泣き聲が聞える。素盞嗚尊登場。泣き聲を外で立ち聞きする。）

母　私は生きてゐるのがいやになりました。

父　俺もだ。

母　娘の生命は助かることもあるでせうか。

父　俺にはわからない。

母　つれられてゆくとしばりつけられて牢獄の中にぶちこまれて、あの男が死ねば餓え死するやうに出來てゐるさうぢやありませんか。

父　そんな話だが、誰も見たものはないのだからあてにはならない。

母　いや、見たものがあるさうです。あの男の古い住家に偶然行つたものがあつたさうです。

父　もうそんな話はやめてくれ。

母　あゝ、娘はあんな強いことを云つてはゐますが、どうしたらいゝのでせう、娘は泣いてゐます。どうしたらいゝのでせう。

父　どうすることも出來ない。あの男の力と來ては誰も手向ふことが出來ないのだ。

素盞嗚尊　（怒鳴る）そんなことがあるものか。（父と母びつくりする素盞嗚尊無遠慮に家に入る）

素盞嗚尊　今の話は本當か。（沈默）こゝに強い男がゐるといふのは本當か。

父　本當で御座います。

素盞嗚尊　お前達は何を泣いてゐるのだ。

父　どうか、ほつたらかしておいて下さい。

素盞嗚尊　ほつたらかすわけにはゆかない。俺は泣き聲を聞いては默つてゐられない男だ。誰かが來て、お前達の娘を奪つてゞもゆかうといふのか。

父　はい。

素盞嗚尊　なぜその男を殺さないのだ。

父　殺せるやうな男ならば誰も心配はしないのですが、その強さと來たら人間とは思へないのです。そして今迄にも手向つたものはあるのですが、さうすると家中が皆殺されるのです。

素盞嗚尊　許してはおけない奴だ。

父　しかし他にいたし方がないのです。

素盞鳴尊　なぜ娘と逃げないのだ。
父　逃げれば罪のない近所の者が十人なぶり殺しになります。
素盞鳴尊　よろしい、俺がその男を殺してやる。安心するといゝ。
父　あなたはまだその男を知らないから、そんなことを云ふのです。どうか、もうかまはずに歸つて下さい。
素盞鳴尊　その男を殺したつて迷惑になる人はないのだらう。
父　ない所ではありませんが、殺しそこなつたらそれこそ大へんです。村中の者は手を切られ、足を切られ、目をぬきとられ、家はやかれ、子供は池にたゝきこまれます。隣り村で一度そんなことがあつて、村中すつかり燒かれ、半分からの人は殺されてしまひました。生き殘つた人間も大概片輪にされました。
素盞鳴尊　許してはおけない奴だ。
父　しかしどうにもすることが出來ないのです。
（娘盛裝して登場。素盞鳴尊を見ておどろく。）
素盞鳴尊　あれがお前の娘か。
父　左樣で御座います。
素盞鳴尊　あの娘をその男は奪つていつて、なぶり殺しにしやうといふのだな。
父　左樣で御座います。
素盞鳴尊　さうしてお前達はそれを默つて見てゐるのか。馬鹿！
父　他に仕方か御座いませぬ。
素盞鳴尊　他に仕方がない。あつたらどうする。
娘（立ちながら）あるわけはありませんわ。
素盞鳴尊　ないと云ふのか。
娘　ありませんわ。
素盞鳴尊　もう一度云つて見ろ。
娘　他に道はありません。
素盞鳴尊　俺かその男を殺してやる。
娘　あなたに、あの男が殺せる。
素盞鳴尊　殺せる。
娘　あなたはその男を御存知なの。
素盞鳴尊　知らないが殺せる。
娘　あの男はあの石を持ち上げるだけの力があります。
素盞鳴尊　俺にあの石が持ち上らないといふのか。お前の目は何處についてゐるのだ。
（庭へとびおりて、大石を樂にもちあげる。皆おどろく。）
娘　あの男はその石を持つて三間歩いて、その石を元の所におろす力があります。

素盞嗚尊　そんなことが俺に出來ないと思つてゐるのか。（その通りする。歸つて來て）どうだ俺にあの男が殺せないと云ふのか。

娘　（笑ひながら）あなたの力はあの男と同じです。

素盞嗚尊　默れ！　俺と同じ力を持つ奴は人間にはゐないはずだ。

娘　あの男も同じことを云ひます。

素盞嗚尊　お前はその男を愛してゐるのだな。それなら勝手にするがいゝ。俺はかまつてはやらない。さわがして氣の毒だつた。さよなら。

娘　あなたは本氣でさうおつしやるのですか。あゝあなたはあの男が怖くなつたのですね。早くお逃げなさい。此處は生命の惜しいやうな男のゐる處ではありません。早くお逃げなさい。

素盞嗚尊　お前の望み通り俺はのこつてやる。俺は逃げると云はれた以上、こゝからはなれることは出來ない。酒があつたら俺についでくれ。（家に上る）

娘　さあついで上げませう。（つぐ）必ず勝つて下さい。

素盞嗚尊　お前のその一言きけば、俺はもう勝つたやうなものだ。

父　油斷をしてはいけません。あの男は決して弱くはありません。私はあなたがあの男より弱いとは思ひません。しかしあの男があなたより弱いとも思ひません。たゞ向ふがあなたを馬鹿にして油斷さへしてくれゝば必ず勝つでせう。しかしあなたは油斷してはいけません。

素盞嗚尊　心配しないで下さい。私は油斷はしません。私はその男が來たらかくれてゐて樣子を見てやります。その男の慘酷な話をして下さい。そして私がどうしてもその男を殺さないでは我慢が出來ないやうにして下さい。

娘　それはわけないことです。あの男の古巢を偶然見出したものがあるのです。そこには、人の繩にしばられた眞裸の女の死體がありました。半分程くさつてはゐましたが腹をさかれ胸をくりぬかれその上云ふことも出來ないやうな死にざまをしてゐたさうです。そして私もやがて同じやうな目にあふでせう。あの男が死なない限りは。そしてあの男が死なない限りは、私は死ぬ迄の一年間にどんな目にあはされるか知れません。

素盞嗚尊　それだけ聞けば十分です。私は今迄力が強過ぎた爲に、いろ〳〵の人に心配かけました。今日こそ私は力が強く生れたことをよろこびます。私の力があなたの一生の役に立たない位なら、私は死んでしまふ方がましな男です。どうか皆さん、心配しないで下さい。私がもし殺されたにしても御迷惑はかけないやうにします。私は何も知らない旅人で、偶然こゝに來たことにします。

そしてあの男と力をくらべて見ませう。まけた時はもとのまゝです。私さへ死ねばいゝのです。勝ちさへすればあなたたちを救ふことが出來るのです。

母　ありがたう御ざいます。神樣は私達をお助け下さる爲にあなたをおよこし下さつたので御座いませう。

素盞嗚尊　およろこびになるのはまだ早いやうです。すべてがうまくいつた時、よろこんで下さい。

父　うまくいつたら、私の娘をあなたに捧げます。

素盞嗚尊　ありがたう。私はそれを聞いて、千人力を得た氣がします。私の心はよろこびに滿ちて來ました。

娘　お酒をつぎませうか。

素盞嗚尊　えゝ戴きませう。（飲みほし）私はきつと勝ちます。私の心のよろこびはそれを知らしてくれます。

母　もうぢき來るでせう。

素盞嗚尊　こゝにかくれてその男が來たら裏から逃げます。

娘　あゝ、あすこから來ます。

素盞嗚尊　それでは又あとで。（退場）

父　俺はまだあんな男らしい男を見たことはない。

母　本當にたのもしい若者ですね。

父　あの男が勝つてくれたら。

娘　きつと勝ちますわ。きつと勝ちますわ。もしあの人が負けたら、その時は私の覺悟する時です。あの恐ろしい男が來たら、私達はよろこんでもてなしてやりませう。今に死んでゆくあの恐ろしい男の爲に。

（恐ろしい男登場。三人庭に出て平伏する。）

恐ろしい男　さあ迎へに來た。

娘　よくゐらしつて下さいました。どうぞおあがり下さい。

恐ろしい男（娘のあごに手をかけ、顏を見、肩にさわつて見）お前は俺がこわくないか。

娘　私はあなたのおいでになるのをお待ちしてゐました。私は他の人達のやうにあなたを恐れて許りはをりません。私達はあなたを尊敬してをります。あなたのやうな強い方を女と生れて崇拜しないわけにはゆきません。私はあなたの奴隷になる爲に生れた女です。今日の來るのを待つてをりました。

恐ろしい男　感心な心がけだ。お前達のやうにものゝわかつた奴ばかりだと、俺も亂暴なことはしないですむのだ。爺、婆、俺の足をあらへ。（威張つて足を二人にあらはせ家に入る）さあ、その酒の毒味をして、俺に酒をのませろ。

娘　畏まりました。

（娘のみ、男にわたす。）

恐ろしい男（のみほし）中々うまい酒だ。もう一杯つげ。

娘　はい。
恐ろしい男　お前の手はふるへてゐないな。感心な女だ。
娘　この前、つれてゐらしつた女はどうなさりました。
恐ろしい男　あれか、あれはもう用がないから今出しなに殺して來た。面白かつた。死ぬのをこわがつて許してくれと泣き叫ぶ奴を、殺してやつた。面白かつた。
娘　今にあなたは私もお殺しになるのでしよ。
恐しい男　正直に云へば殺してやる。來年の今日になつたら殺してやる。若い女を殺す程、面白いことはないから。
娘　殺されるものは面白くはないでしよ。
恐ろしい男　殺される者はどうだつていゝ、殺すのは面白い。
娘　あなたでも人を殺す時に、氣の毒だと思つたことはあるでしよ。
恐ろしい男　ないね。俺はそんな意氣地なしぢやない。
娘　私だけは殺さないわけにはゆかないの。私はあなたの爲にならどんなことでもしますわ。殺すのだけ許して頂戴ね。
恐ろしい男　まあ、生かしておく方が面白い間は生かしておいてやる。
娘　なぜあなたはしまひにはゆるしてやらないの。生命だけは助けてやることをなさらないの。死ぬのをいやがるものを殺さないでもいゝぢやありませんか。どうせ手向ひはしないのぢやありませんか。
恐ろしい男　殺すのが面白いから仕方がない。それに他の男にやるのも惜しいからな。
娘　私はどうか殺さないで頂戴ね。いゝでしよ。さもないとお父さんや、お母さんが氣の毒ですから。
恐ろしい男　もしそんなに氣の毒なら、今こゝでお前の親を二疋とも殺してやつてもいゝ。お前の親なんか、生きてゐたつて穀つぶしになるだけだ。だが生かしておいてやる。それだけでもありがたく思はなければならない。
娘　あなたの力はどの位あるのでせう。あの石、あなたに持てゝ。
恐ろしい男　あんな石を持てないでどうする。
娘　本當？　いくらあなたでもあの石は持てないでしよ。
恐ろしい男　あんなものを持てないでどうする。
娘　一寸持つて見せて戴けて。私はあなたがどの位強いか、村の人に語りつたへたく思つてゐるのですよ。本當にあなたのやうに強い方はこの世界に一人もないと思ひますし、今後も、出ることはないと思ひますわ。ですから一つ話の種に力を見せて頂戴な。
恐ろしい男　そんなに見たければ見せてやつてもいゝ。驚くなよ。

娘　え〻見せて頂戴。

（恐ろしい男。石を持ちあげる。やつと頭の上にもちあげてあわて〻おろす。）

恐ろしい男　どうだ。强いだらう。

素戔嗚尊　あは〻〻〻。（無雜作に出て來ながら大聲で笑ふ）

恐ろしい男　貴樣は誰だ。

素戔嗚尊　俺は旅の者だ。

恐ろしい男　何がをかしいのだ。

素戔嗚尊　今そこで見てゐると、こんな石をあげるのが、やつとのくせして、强いだらうといふのが可笑しいから笑つた。一たいこの村には力の强い奴がゐないと見える。あは〻〻〻。

恐ろしい男　貴樣にこの石があげられるか。あげられなかつたら、貴樣の腕と腰を折つてやるぞ。

素戔嗚尊　俺は默つて腕や腰を折らしてはやらないよ。俺だつて痛い目にあふことは嫌ひだからな。

恐ろしい男　この石が持てるなら持つて見ろ。

素戔嗚尊　俺の村ぢや、こんな石をもち上げて三間、四間步ける奴はいくらだつてゐる。こんなものをやつとあげて自慢にするやうな奴は一人だつてゐはしない。

恐ろしい男　そんならあげて見ろ。あがらなかつたら生かしてはおかないぞ。

素戔嗚尊　お前さんは可笑しいことを云ふね。生かしておかないとはどういふわけなのだい。そんな言葉は强いものが弱いものに言ふ言葉で、弱い方が强いものに云ふ言葉ぢやないよ。

恐ろしい男　お前は俺を誰だと思つてゐるのだ。俺は今迄に何百といふ人間を殺した男だぞ。

素戔嗚尊　人殺しの自慢か。は〻〻〻。お前さんに殺される者は女か子供か年よりか、病人だらう。俺は女でもないし子供でもない。年よりでもなければ病人でもない。

恐ろしい男　貴樣は旅の人間だから俺のことを知らないのだ。天下に俺より强い奴はないのだ。生意氣なことを云ふと手足をへし折つてなぶり殺しにしてやるぞ。

素戔嗚尊　お前の云ふことは一々可笑しい。お前は俺の村にはまだ來たことはないはずだ。俺の村にはお前さんのやうな弱い男をさがす方が骨が折れる。俺はその中でも少し强い方だ。俺達の知らない所では威張るのもいゝが、俺達の前ぢや威張らない方がい〻よ。俺は人殺しはあまりすきではないが、あんまり威張ると一寸やつつけたくなるからね。

恐ろしい男　もう許してはおけないぞ。（わきにある手ごろの石をもち上げやうとする）

素盞嗚尊（指でそれを押へ）上らないよ。
恐ろしい男　生意氣云ふな。（取組む）
素盞嗚尊　生命知らず。
　（兩方取組む。中々勝負がつかない。）
娘（段々見てゐて心配し、狂氣のやうになり）しつかりして頂戴。しつかりして頂戴。あなたが負けたら私は生きてはゐませんから。お父さん、さつきの劒はどこにあります。早くかして頂戴。
父　いけない。お前の出る所ではない。
娘　お父さん。お父さんは男ぢやありませんか。早くあの男を殺して頂戴。
　（父劒をもち、恐ろしい男をさしにゆく。）
素盞嗚尊　大丈夫です。こんな男をたほすことなんか樂です。たゞかうしてやつてゐるだけです。ころがさうと思へばこの通りです。（ころがす）あすこにある藤づるを持つて來て下さい。
　（娘もつてくる。）
娘　よかつてね。ありがたう。
素盞嗚尊　こんな弱い男には私は始めてあひました。
娘　お母さん。皆を呼んでいらつしやいな。この男にひどい目にあつた人たちを。
母　そんなら呼んで來ますが。大丈夫でせうね。

素盞嗚尊　大丈夫です。少しでも動いたら殺してやります。こんな男を殺すのはなんでもありません。
　（素盞嗚尊。男を大木にゆはへつけ、あまつた藤づるをのどにまきつけ、その兩はじを自分でもち。）
素盞嗚尊　さあ、これでもお前は俺を殺すことが出來るといふのか。俺の手足をへし折つてなぶり殺しに出來るといふのか。出來るならやつて見せてくれ。
恐ろしい男　あなたはなんといふ強い方なのだらう。私はあなたのやうな方に逢つたことはない。私は今からあなたの家來になつて、あなたの云ふことならどんなことでもします。
素盞嗚尊　お前は俺の手足をへし折ると云つたね。
恐ろしい男　どうか許して下さい。
素盞嗚尊　俺がさつき立ち聞きしてゐたら、お前は出しなに抵抗することの出來ない女を殺したと云つたな。
恐ろしい男　許して下さい。
素盞嗚尊　お前はあの娘を弄んだ上に殺すと云つたな。
恐ろしい男　許して下さい。
素盞嗚尊　そして人を殺すのは愉快だと云つたな。俺もお前のやうな人殺しを殺すのは嫌ひではない。逃げやうとすれば足を折つてやるぞ。
恐ろしい男　私は悪う御座いました。どうぞ御許し下さい。

素戔嗚尊　お前は人を殺すことは平氣でありながら、殺されることは平氣ぢやないのだな。お前は人を苦しめることは好きだが、苦しめられることは矢張り嫌ひなのだな。お前に殺された何十何百人も矢張り殺されたくなかつたことをよく知るがいゝ。

恐ろしい男　私はもう決して惡いことはしません。あなたの爲に働きます。そして今迄の罪ほろぼしをします。

素戔嗚尊　それがあてになると思つてゐるのか。狼は野に放てば又人を喰ふ。お前のやうな男、おとなしい男や、女や子供、お前に何一つわるいことをしないものを殺す人間、そんな人間を俺は許すことは出來ない。さうだらう。（娘に）お前の考へはどうだ。

娘　私はこの男が可哀さうになつて來ました。もしこの男が本當に改心したら、私はあなたに許してやつて下さいとお願ひするのですが。

素戔嗚尊　それがあてになれば俺だつて許してやる。しかしこの男にひどい目にあつた人は許すことは出來まい。手向はない人間を平氣で殺すといふことは恐ろしいことだ。骨の髓から腹の立つことだ。俺は亂暴者だが、溫和しいものをいぢめたことはない。おとなしく働いてゐるものを殺し、抵抗の力のない女や子供を殺すものは、俺には辛抱が出來ない。

娘　もしあなたが負けた時のことを考へたらどうでせう。この男はどんなにあなたをひどい目にあはせ、そしてなぶり殺しにしたでせう。

素戔嗚尊　そしてお前をつれていつていくら泣いたつて、わめいたつて、なほ面白がつていぢめる男だ。こいつは。俺は自分に從ふ者は皆、許してやる男だが、この男だけは俺の虫が承知しない。お前が俺の位置にゐたらどうする。手足を切つたり、胸をさいたりして、目玉をくりぬいたり、鼻をけずつたり、胸をさいたりして、樂しみにするのだらう。そして俺がゆるしてくれと云つたら、お前は大きな聲を出して笑ふだらう。

恐ろしい男　あなたの云ふことは皆、本當だ。私にも自分のしたことが、よくないことがわかつて來たやうだ。

（母登場。）

母　近處の人は皆戸をしめて小さくなつてゐました。私が戸をたゝいたら、皆ふるへ上つてしまつたさうです。そして皆に本當のことがやつとわかつた時、皆それはきつと神様が助けにいらしつたのだと云つて、どんなによろこんだかわかりません。今に皆來ます。

娘　それはようございましたね。

（村の男女登場。）

娘　よくいらつしやいましたね。この方が退治て下さつた

のです。お禮をおつしやつて下さい。

村の男女（平伏し）ありがたう御座います。

素戔嗚尊　さあ安心して、こつちにいらつしやい。もうこわいことはありません。少しでも手向ふやうなことがあつたら、私がこいつを殺つてしまひます。

村の男女　ありがたう御座いました。

男一　やいお前はよくも俺の娘を奪つていつて殺したな。

（杖でぶつ）

恐ろしい男　弱虫、お前はあの時、平伏しながら娘を俺にくれたぢやないか。今になつて威張つたつてお前の娘さんは歸つて來ないわ。

娘　お默り。そんなことを自慢にするなら、お前の生命を助けてあげないからいゝ。

恐ろしい男　どうせ俺の生命はたすからないのだ。もう俺は生命を惜しんではゐないぞ。この男さへゐなければ、俺はお前達を一人だつて生かしてはおかないのだ。お前達のいくぢなし、弱いものには強い顔して、強いものには媚びへつらうのはお前さん達のくせだ。私が死んだらお前さん達はよろこぶだらう。だが俺より恐ろしい男のゐることをお前さん達は段々知るだらう。

娘　お默り。この方はお前のやうな弱いもののいぢめの方ぢやない。いゝ人の味方をなさる方だ。可哀さうな人がゐれば助けやうと云ふ方だ。さもなかつたら私は承知しない。さあ、皆さん、あなた達を本當に苦しめた男に恨みをかへしておやりなさい。

女一　お前はよくも私の夫を殺したな。

恐ろしい男　まあ何でも云ふがいゝ、死んだものは歸つちや來ない。

男二　お前は俺の赤坊をまる煮にして食つたといふが、本當か。

恐ろしい男　一々覺えてはゐないよ。お前さんの赤坊だと思つて食つたのぢやないから。

素戔嗚尊　もういゝ。俺はもうそんな話をきくのはいやだ。この藤づるの兩方のはじを皆で持つがいい。そして俺が命令を下したら一勢に引くがいゝ。（娘に）お前は俺にかはつてこの男を裁いてやれ。

娘　罪のない人を殺すものは又殺されます。皆さん人を殺すことは大きな罪であるといふことを知つて下さい。本當に人を殺すことがわるいことがわかり改心の實が本當にあがつたものは殺されないですむでせう。しかしこの男は、生かしておいたら、必ず又人を殺します。しかもおとなしい、優しい、よく働くものや、美しい女や、可愛いゝ子供をも平氣で殺すのです。平氣で人を殺すものは又平氣で人に殺されなければなりません。少しでもよ

ろこびを感じて人を殺すものを私は許すことは出來ません。皆さん、それに御同意でない方があつたら、意見を聞かして下さい。

素盞鳴尊　それではよろしい。私から皆さんに云ひます。私がもし、この男のやうに人を平氣で殺し、罪のない善良な人間を殺すやうなことがあつたら、この男のやうに私を殺して下さい。その時は又私より強い男がどこから か來て私を押へつけてくれるでせうから、私は之からは今迄よりも謹んで、そして皆さんのお役に立つやうに働きます。そして皆さんの正しい安寧を邪魔するものがあつた時、その時だけ私の力を役立たせます。

娘　お酒を持つて來ませうか。

素盞鳴尊　それはあとにしやう。俺はなんだかへんな氣がして來た。腕力だけをたよる人間のいかにあはれであるかをまのあたり知つた。引け！　お前も勇士らしく死ね。俺はお前を他人だとは思はないぞ。やすらかに往生せよ。

恐ろし男（身體中に力を入れると立ち上る　いきなり縄が切れる。娘の他皆おどろく）誰もかれも皆殺してやるからさう思へ。

素盞鳴尊（いきなりとびついて）往生際のわるい奴たなお前は。（おさへつけ締め殺し、靜かに起き上つて）皆おどろかないでもいゝ。俺は切れるやうに結いておいたのだ。手向はない奴を殺すのは、面白くないから。酒を持つて來てくれ。

娘　はい。（杯をもつてくる）

素盞鳴尊（飲みながら快活に）お父さん。さつきの約束を果してもらひますよ。皆さん私はこの娘をもらふことにしました。誰でもそれに不服な人は申し出て下さい。私に勝つ人があつたらよろこんでさし上げます。不承知な人はありませんか。あるなら早く云つて下さい。

（沈默。）

素盞鳴尊　ないのですね。それならお前にこの酒をやらう。

娘（酒をのみ）あつたつて私はあなたのものです。ですが、私はあなたにこゝで皆にもう一度誓つて戴きたいのです。

素盞鳴尊　なんだ。

娘　あなたは餘り強すぎます。皆はあなたを恐れてゐるのです。あなたは皆が恐れないやうに、罪のないものは殺さない。惡いことをしないものは決して苦しめない。平和に生きるものゝ味方をする。そして皆の爲に働けるだけ働きたく思つてゐる。もう一度さうおつしやつて下さい。

素盞鳴尊　よろしい。俺は皆に誓ふ。俺はお前達の平和は奪はない。罪のないものを殺したり、ひどい目にあはし

たりはしない。俺は旅人だが、こゝにゐる限りお前達の爲に恐ろしい人間にはならずに、役に立つ、なくてはならない人間になるやうに骨を折る。之でいゝか。

娘　ありがたう。それからあなたのお名前は。

素盞嗚尊　素盞嗚尊!

娘　素盞嗚尊、いゝお名前ですこと。

素盞嗚尊　名なんかどうだつていゝ。さあ死骸を片づけてくれ。はゝゝゝ怖いのか。大丈夫もう生かへりはしない。（皆死骸をかたづける。尊、酒だるをもち出し）さあのめるだけのんで、をどつてくれ。俺はをどりが大好きなのだ。

母　皆さん。どうか酒をあがつて、一つ陽氣にをどつて下さい。こんなにうれしいことはありませんから。

父　本當にさあ、のめるだけのんで、をどつて下さい、皆さん。俺達もをどらうかね。

娘　をどつて頂戴、皆さん。皆さんの讐はほろびたのです。もう怖いものはありません。村も之からは榮えるでせう。之からは安心して働けます。皆さんをどつて頂戴。

皆　（皆酒をのみ）をどらう。をどらう。もう何も怖いものはない。

（素盞嗚尊と娘の外、をどり出す。）

素盞嗚尊　俺もをどりたくなつた。

娘　私もをどりますわ。

（をどり出す。）

——幕——

正宗白鳥篇

人生の幸福

人物

安城豐次郎
水島喜多雄　弟
かよ子　異母妹
寺島某　學者
別莊番藤七

一

初夏の頃の夜明け前。芝生の庭園。その一端にある日本建ての別莊の雨戸はまだ鎖されてゐる。庭園の一方は山の方へ接してゐる。豐次郎（四十近い風采のよろしき男。寢卷の上に羽織を着てゐる）山を下りて、何か考へてゐる態で、ブラ／＼庭へ入つて來る。やがて、ステッキの先きで雨戸を叩きながら聲を掛ける。返事がない。彼れは部屋の方へ耳を留めて、再び山の方へ行かうとしてゐるところへ、喜多雄（三十餘歳で、兄よりも健康らしい。同じやうに羽織を着てゐる）が入つて來る。

豐次郎は弟を見て、驚いた表情をして見詰める。

喜多雄　（努めて懐つこさうに）兄さんは朝が早いと聞いてゐたが、こんなに早いとは思はなかつた。

豐次郎　お前はいつ此方へ來たのだ？（詰問するやうに云ふ）

喜多雄　昨夕遲く來たのさ。あんまり遲かつたから此方へ知らせなかつたのだ。來ると直ぐに、一人でビール二本ばかり飲んで寢たら、熟睡したものだから、今朝は馬鹿に早く目が醒めてね。寢床でもぐ／＼してゐても詰らないから、久振りに大磯の朝景色を見ようと思つて出て來たのだが、田舍はいゝね。

豐次郎　朝景色を見るにやまだ早過ぎらあ。あの通り月が照つてゐて、まだ夜のうちぢやないか。……お前は朝景色を見るよりおれの様子を見に來たのだらう。おれが狂人にでもなつてゐるかと思つて。

喜多雄　いやさういふ譯ぢやないよ。（努めて何氣ない顏をして）今朝兄さんがこんなに早く起きてゐようとは思ひも染めなかつたんだからね。（雨戸の方を見て）かよ子はまだよく眠つてるんだらうな。

豐次郎　あゝ。朝早く目を醒ますのはおればかりだ。今朝はあいつに夜明け前の田舍の靜寂な景色を見せようと思

つて、さつき聲を掛けたのだが、なか〱目を開けない。しかし、眠れるうちは眠らせといた方がいゝのだらうよ。

喜多雄　かよ子も此方へ來てから丈夫になつたんだらう。此間僕に寄越した手紙には、大變元氣のいゝ快活なことを書いてたよ。兄さんだつてこの前よりも血色がよくなつてるぢやないか。

豐次郎　血色なんぞどうだつていゝさ。……おれはお前にだけ話したいと思つたことがあるんだから丁度よかつた。家の者が起きるまで、此處で、夜明けの景色を見ながら話すことにしようか。

（豐次郎が芝生の上に無雑作に腰をおろすと、喜多雄も同じやうに腰をおろす。）

喜多雄　僕は煙草を持つて來ればよかつたのに、忘れたよ。兄さん持つてゐないのかい。

豐次郎　おれは一週間ばかり酒も煙草も止めてるんだ。コーヒーや茶も成るべく飲まないことにしてゐる。飲食物や外界の刺戟なんかでおれの心を濁らされないやうに用心してるんだ。さうして、本當のおれの心を磨ぎ澄まして考へてることをお前に話すのだから、お前も煙草なぞを吸はないで聽いて吳れろよ。……おれが何を云はうと、眞面目に聽かなきやいけないぜ。

喜多雄　それは眞面目に聽くがね。（强ひて笑ひを洩らして）しかし、膝の上に兩手を突いて畏つて聽くには及ぶまい。芝生の上に寢ころんでゐても、心が眞面目ならいいだらう。（芝生の上へ足を伸して）さつき家を出た時にや頭がボンヤリしてたが、冷つこいスガ〱した空氣を吸つたゝめに、頭のドン底までハツキリして來たよ。

豐次郎　（暫く冥想的な表情をしたあと）お前はかよ子のことをどう思ふ？

喜多雄　かよ子のこと？

豐次郎　僕は花が咲いてゐた時分に此處へ來て、一ケ月あまりもかよ子と一しよに暮してゐるんだが、かよ子は今のうちに死んだ方が、當人のためにも幸福だし、社會のためにもいゝと思はれるんだがね。お前はさうは思はないか。

喜多雄　（吃驚して）出拔けにそんなことを云はれちや、僕も面喰つちまふ。かよがどうかしたのかい。脅かさないで、詳しく譯を聞かせてお吳れよ。

豐次郎　あいつは丙午の生れだからね。俗に丙午の女は男を喰ふといふぢやないか。

喜多雄　何だい。眞面目な話つてそんなことなのか。（安心したやうに）お母さんがかよにケチをつけるために、時時そんなことを云つてたが、そんな舊弊なケチのつけ方

ぢや。われわれに反感を起させるばかりだからね。

豐次郎　そりや、母親はかよ子に難癖をつけるためのいゝ口實にさう云つたのだらうが、おれの云ふ丙午の意味はさうぢやないよ。……おれやお前は、かよ子がたとへ死んだ父親の罪惡の記念だつたにしても、たつた一人の妹として可愛がつて來たので、かよ子もおれだちを手頼りにしてゐるんだが、あの子はこの先生きてゐても幸福ぢやあるまいよ。

喜多雄　そんなことはないさ。容貌は惡かないし、人間も馬鹿ぢやないし、相當な家へ緣づかせれば、幸福に世が渡れるだらう。寺濱さんも、此間いゝ緣談の口があるやうなことを云つてゐるだよ。僕だちは、一人の妹のために、理想的の男子を搜して花々しく結婚させるんだね。しかし、僕等が傍からおせつかいをするまでもない。かよ子は、ちやんとした當てがあるんぢやないかな。まだ子供だと思つてるうちに、案外なことがあるものだからね。……兄さんは此方へ來てから、何か勘付いたことがあつて、さつきのやうなことを云つたのぢやないか知らん。

豐次郎　お前はいつものやうに世間的のことを云つてる。百人のうち九十九人までが云ひさうなことを云つてる。女が年頃になりや結婚させる。結婚させれば幸福になる。それに、十九にもなつたら、自分の好きな男のことを考へてるかも知れないなんて。さういふ風に手輕く事を極めてしまつていゝのなら、おれも頭を痛めて物を考へたりなんかしないよ。……かよ子の胸の中には、まだ戀の芽は少しも萌してゐないね。それはおれが斷言するよ。

喜多雄　いくら兄さんが烱眼でも、その點はどうだかな。僕には信じられないからね。しかし、かよの胸中が白紙のやうに純白で、まだ男子の影で汚れてゐないといふのなら結構ぢやないか。

豐次郎　今日の日までは、あれの胸の中が純白でも、明日の日何處で誰れを見つけて、俄かに戀の芽が萌えださんとも限らないのをおれは恐れてるが、おれの恐れてるのはそればかりぢやないんだ。かよ子は一人前の女になるとゝもに、おれやお前にも復讐しようとするのに違ひないよ。生みの母親の靈魂があれの腹の中には完全に宿つてるんだが、それが今はまだ眠つてゐても、いつ目を醒ますかも知れない。いや、今日を醒ましかけてゐるやうにおれには思はれるんだ。

喜多雄　何のための復讐？　死んだ親爺に對する怨みを僕等にむくいるだらうと云ふのかい。女つて執念深いから、かよの母親は死ぬる間際に、どんな恐ろしい遺言をしたかも知れないが、あの子は、怨みや憎みはどんな者だか、皆目分らないやうな女に生れついてゐるんだからね。時々

お母さんに邪慳な仕打をされても、いつも無邪氣に受けてるぢやないか。（ふと氣づいたやうに調子を變へて）こんな下らない話はもう止さうよ。僕は久振りで此方へ來たのだから今日は三人で愉快に遊ぶことにしようぢやないか。僕はこゝで朝餐を御馳走になるから、飯を喰つたら三人で千疊敷へでも登つて見ようぢやないか。僕は土産に苺のいゝのを持つて來てるから、あとで屆けよう。

豐次郎　お前は悠長な顏をしておれに氣休めを云つてる。かよ子が手紙で何か云つてやつたために、お前はおれの身體を氣遣つて來たのに違ひない。隱さなくつてもいゝよ。……おれの頭は狂つてやしないから安心しろ。不斷よりも頭の中がハツキリしてる位だよ。たゞ、かよ子は早く死んだ方が、當人のためにも、傍の者のためにも幸福だと、おれが思つてるのを、あの子が多少勘付いて、お前にそんな手紙を送つたのだらう。

喜多雄　なに、かよが此間寄越した手紙には、無邪氣な事が書いてあつたゞけだよ。あんまり退屈だから、兄さんに五目並べを敎はつたとか、朝早く起きて、曳網を見に行つて、鰺を買つて來て、自分で料理をして食べたが、まだピク／＼動いてる魚に庖丁を當てるのは氣味が惡いから、一度で懲り／＼したとか、その時兄さんが鰒を一尾漁夫に貰つて來たけれど、食べずじまひで打遣つたとか、さういふやうなことが書いてあつたゞけだ。

豐次郎　それだよ。かよ子もいくらか勘付いてるんだな。（獨言のやうに云ふ）

（喜多雄はふと、兄に對して不安な感じを起して、思はず後退りをする。藤七（水島家の別莊番、五十歲ぐらゐ）が裏木戸の側へ現はれ、此方を覗く。夜は明けかゝる。）

豐次郎　何のためにおれがかよ子を連れて曳網を見に行つたと思ふ？　何のために鰒を貰つて來たと思ふ？

喜多雄　何のためだか、僕はそんなことまで研究しやしないがね。（立上つて）さあ、もう家の中へ入らうぢやないか。東の方が薄明るくなつた。何處かで雨戸の開く音がしてる。

豐次郎　まあ、もつと其處にゐて、おれの話すことを聞け。まだ誰れも起きやしないよ。おれの眞面目な考へを打明けられるのはお前一人なんだから。……かよ子を生かして置けば、あれのためにもおれ達のためにも決してよくないんだよ。おれは長い間考へ拔いた揚句にさう思つてる。（重々しく云ふ）

喜多雄　（笑ひ／＼）だつて殺す譯にや行かないでせう。

（二人は足音を聞きつけて、そちらへ目を向けると、藤七が入つて來る。豐次郎は吃驚する。）

喜多雄　（怪訝な顔して）おれに急用でも出來たのかい。
藤七　いえ、別段用事があつて參つたのぢや御座いません。少し氣にかゝることが出來まして、旦那樣はどちらへいらつしやつたのかと思ひまして。
喜多雄　氣にかゝることつて何だい。おれが家を出た時にや、お前はまだよく眠つてたやうだが、急に何か異つたことがあつたのかい。
藤七　戸倉さんの御別莊の裏で、若い女が殺されてゐるんで御座いますよ。隣りの婆さんが、御嶽さんへ朝詣りに出掛ける途中で見つけて、近所で大騷ぎになつてゐるんです。喉を締められたらしいんですが、女は土地の人ぢや御座いません。東京か濱の可成りに身分のいゝ人らしいんですよ。
喜多雄　それは大變だな。しかし、その人殺しがおれと關係がある譯ぢやあるまい。（口輕く云つたが不愉快を顏に現はす）
藤七　それは旦那樣の御存知のことぢや御座いませんが、……その婦人の方が男の人と一しよに、昨夕夜汽車で東京の方から來たのを見たといふ者が御座いますから、若しも旦那樣もその人だちと同じ汽車にお乘りになつて、顏を知つてゐらつしやるのぢやないかと思ひまして。
喜多雄　知らないね。お前はいゝ加減なことを人に話しちやいけないよ。（叱るやうに云ふ）
藤七　はい。……私も久振りに死人の顏を見ましたが、死人なぞ見るものぢや御座いません。怨めしさうな目をして、鼻汁を垂らして。……旦那樣はあんな者を御覽にならない方がよろしう御座いますよ。
喜多雄　誰れが死人なぞ見に行くものか。……あゝさうだ。お前は、昨夕おれが持つて來た莓の箱を直ぐに此處へ屆けて呉れ。
藤七　承知いたしました。（會釋して出て行く）
喜多雄　あいつは、慾に掛けちやすばしこいくせに、人間が少し拔けてるから、馬鹿なことを云つていけないよ。
豐次郎　藤七はおれだちの話を立聞きしてゐたのだよ。油斷が出來ないよ。
喜多雄　聞かれて惡いことを云つてやしなかつたから、それは關はないがね。
豐次郎　いや、さうでない。おれ達はこゝで、大切な祕密を話してゐたのだから。
喜多雄　（はじめの快活さを失つた人間らしく）兄さんは獨りでいやなことばかり考へて、それを僕に押付けるからいけないよ。僕には誰に對しても祕密なんかありやしない。
豐次郎　おれはこの頃、頭のなかゞ澄んでるから、いろん

なことが分るんだ。かよ子の身に附纏つてる運命も、おれには分つてる。お前が藤七の云つた死人の話を氣に掛けてることも、おれにはちやんと分つてる。

喜多雄　僕は氣に掛けてやしないよ。僕が夜汽車で大磯へ來たことや、今朝早く山の方を散歩したといふことが、ちつとも死人と關係があるんぢやないからね。

豐次郎　それはさうさ。おれはお前よりももつと早くから山の方を散歩してゐたんだよ。御嶽さんの側の暗い森の中も確かに歩いた筈だ。……しかし、喜多雄、お前は、ある女を殺さうと思つたことはなかつたか。（弟を見詰める）

喜多雄　ないねえ。男だつて女だつて、人間を殺さうなんてことは、僕は一度も思つたことはないよ。そんな質問をされるのは今がはじめてだよ。兄さんは、なぜ、眞面目らしくそんな不愉快な事に拘はるんだね……（空を見上げて）僕は久振りに夜明けの景色を見るんだが、兄さんも詰らない考へに凝らないで、このよく澄んだ空でも見るといゝ。

豐次郎　お前に教へられなくつたつて、澄んだ空なら、おれは毎日よく見てるよ。日の出も日の入りも、此方へ來てからよく見てるよ。……だけど空を見たつて、朝日を見たつて、おれの考へが變る譯ぢやない。お前は本當に、女でも男でも殺さうと思つたことはなかつたか。憎いから殺したくなるばかりぢやない、その人間の幸福のためにも殺したいと思つたことはなかつたのか。

喜多雄　ないよ。僕は蟲けらだつて殺すのは嫌ひだ。

豐次郎　臆病だねえ。……おれは藤七が知らせに來た女殺しが、お前の所爲だと極つても、そんなに驚きやしないよ。

喜多雄　（顏を蹙めて）馬鹿云つちやいけない。（兄の側を離れて）兎に角家の中へ入ることにしよう。

（喜多雄は雨戶の側へ寄つて、かよ子に聲を掛ける。その間に、豐次郎は庭から外へ出て行く。）

喜多雄　ぢや、此方へ出ておいでよ。散歩したきや一しよに散歩してもいゝから。

（喜多雄は兄のゐないのに氣づいて、あたりを見廻す。そして、却つてそれをいゝこととしたやうな態度で、空を見上げたり口笛を吹いたりする。そこへ、かよ子（十九歳の可愛らしい女、不斷着のまゝ）が、横手から入つてくる。）

かよ子　豐兄さんはゐないの？（不思議さうに見廻す）

喜多雄　あゝ。

かよ子　さつき、何だか、二人で面白さうな話をしてゐたわね。わたし、話聲を聞いて喜い兄さんにちがひないと

思ふと、直ぐに出て來て、お話の仲間に入れて貰ひたかつたのだけど、髮が壞れてゐたから、大急ぎで直してゐたのよ。わたし、寢相が惡いから、毎晩頭をぐちやぐちやにしてしまふの。

喜多雄　ぢや、お前はさつきから起きてゝ、おれだちの話を聞いてたのか。

かよ子　えゝ、よく聞取れなかつたけれど、今日は三人で箱根へ遊びに行かうつて、そんな相談をしてゐたでせう。わたし昨夕の夢見がよかつたと喜んでゐたのよ。

喜多雄　（笑つて）うまいことを云つてらあ。眞顏でそんなことを云つて、かよもずるくなつたなあ。

かよ子　では、わたしの聞きちがひだつたか知ら。若し聞きちがひだつたと分つたら、わたし大變に失望してよ。

喜多雄　そりや、事によつたら、箱根へでも修善寺へでも連れてつてやらないこともないがね。お前は身體の加減はいゝのかい。

かよ子　えゝ。わたし東京にゐた時よりも太つたでせう。千疊敷くらゐなら一息で登れるわ。

喜多雄　えらいなあ。……此方へ來てからは、氣を使ふやうなことはないんだらうね。兄さんと仲よく暮してるんだらうね。

かよ子　えゝ、それは。……豐兄さんと喧嘩を一度したこともないわ。わたしの養生にもよく氣をつけて呉れるのよ。

喜多雄　さうか……（腑に落ちぬやうな態度をする。そしてあたりを顧みて）此間のお前の手紙に、兄さんは暗いうちに家を出て外を歩廻つたり、六ケ敷顏して獨りで考込んだりしてゐると書いてあつたが、それだけのことで、兄さんの不斷の樣子に格別變つたところはないんだらうね。

かよ子　えゝ。（曖昧な調子で答へて）死んだ義姉さんのことでも思出してるんぢやないかと、わたしには思はれるんだけど、訊いて見たことないのよ。それで、兄さんが鬱いでる時には、わたし側へ寄付かないでソツとして置くのよ。……義姉さんがいくらいゝ人だつたにしても、死んだ人のことを考へるのは詰らないぢやないの。（はじめの無邪氣に似合はない皮肉な調子で云ふ）わたしも、豐兄さんの氣持が傳染したのか、此方へ來てからは、どうかすると、死んだ人のことが考へられたりするんですけど、それはいけないことだと思つて、成るべく忘れるやうにしてゐるのよ。

喜多雄　かよちやんも死人のことを思出すのかい。いやだねえ。お前のやうな、これから世の中の幸福ばかり味つて行ける女が、死人のことなぞ思出して、大切な純潔な

心を濁らすつてことがあるものか。

かよ子　嘘にでもさう云つて、力をつけて貰へると、わたしうれしいわ。豐兄さんと喜い兄さんとは云ふことが反對なのね。

喜多雄　なあに、兄弟だから性分はよく似てるんだよ。上の方は違つてゐるやうに見えても、腹の底は同じことなんだよ。（感慨を籠めて云ふ）おれはね、他所の家の人間になつてゐて、偶にしか會はないから、お前にもよく分らないのだらうが、おれは兄貴と同じやうに鬱ぎ込んでることもあるんだよ。

かよ子　いやなことねえ。ぢや、喜い兄さんも死んだ人のことを考へてるの？　でも、水島の義姉さんは丈夫で生きてゐるんだし、兄さんのお友たちで死んだ方もないやうだし、誰れのことを考へ出すのか知ら。

喜多雄　おれが物を考へて鬱ぎ込むと云つたつて、死人のことゝ極めなくつてもいゝよ。お前も今朝は少し變だ。（ふと嚴かな顔付をして、稍々聲を潜めて）それよりも、兄貴の精神狀態はどうも調子が外れてるやうだから、お前は氣をつけなきやいけないぜ。兄貴の云ふことや擧動に變なところがあつたら、一々おれに知らせるやうにして呉れ。

かよ子　豐兄さんの精神狀態がどうかしてゐるの？　今朝此處で會つた時の樣子が變だつたの？（物に驚いたやうに）それで、豐兄さんは今何處へ行つたんでせう。

喜多雄　御嶽さんの近くで、女が絞殺されてるさうだから、それでも見に行つたのだらうよ。

かよ子　女が殺されてる？　……嘘でせう。兄さんはわたしを脅かさうと思つて。

喜多雄　本當だよ。疑ふのなら見て來るといゝ。

かよ子　本當なら、わたし恐ろしい。（恐怖に震へながら空間を見て）……それは誰れが殺したんでせうか。殺した男は誰れだか分つたんでせうか。

喜多雄　加害者は誰れだかよく分らないだらうが、お前はなぜそんなに怖がるんだ。お前やおれに關係がある譯ぢやあるまいし。

かよ子　でも、わたし、急に恐ろしい氣がしてならないの。……殺された女の人の顔が見えるやうだわ。首を絞められるのはつらいでせうね。同じ殺されるにしても、首を絞められるのと、刄物で喉を突かれるのと、どちらが苦しいんでせう。

喜多雄　おれはまだ殺された經驗がないから分らないよ。……そんな役にも立たないいやなことを考へる必要はないれ。……あの車の音は牛乳屋だらう。おれの持つて來た苺に牛乳をかけて直ぐに食べることにしようぢやない

か。……穏かないゝ朝だ。

（喜多雄は努めて快活を装いてさう云ひながらも、不安な思ひが、隱しきれないやうに微見えてゐる。藤七、風呂敷で包んだ苺の箱を提げて入つて來る。）

喜多雄　御苦勞だつたな。そこへ置いて行けばいゝよ。

藤七　（苺の箱を下へ置く。そして、かよ子に目をつけて挨拶して）お孃樣は今度は一ぺんも爺やの所へお遊びにいらつしやいませんね。此方の旦那樣も寄つて下さらないし、何かお氣に障つたことがあるのぢやないかと、爺やは心配してゐたので御座いますよ。

かよ子　（返事するのが懶いやうに）わたし、この頃は滅多に外へ出掛なかつたのよ。

藤七　爺やは此間、太田の御隱居樣が東京へお引上げになる時、緋鯉や金魚を頂いてお池へ放しときましたから、今日でも御一しよに見にいらつしやいまし。お氣に召したのがあつたら買つて頂きたいと思つてるので御座いますよ。

喜多雄　金魚は食べられないから、賣つて金にして一杯やらうと思つてゐるのかい。かよちやんは用心してゐないと、詰らない金魚を爺やから高く賣付けられるかも知れないよ。

藤七　へゝゝ。旦那樣は直ぐにわたくしの申上げることをケナしておしまひなさると思ひましたから、旦那樣にはお願ひしないで、お孃樣に高く買つて頂かうと思つてるんで御座います。あの金魚は、御覽になつたら、屹度お孃樣のお氣に召すだらうと思はれます。

喜多雄　爺やも商賣の時機が惡かつたよ。もつと早かつたら買つて貰へただらうが、かよちやんは、今は金魚なぞ見たかあないんだ。

藤七　どうかなすつたので御座いますか。（かよ子を見詰めて）さう云へば、お顏の色もお惡いやうだ。

かよ子　（煩ささうに、顏を外して）わたし、どうもないのよ。そのうち爺やの金魚でも緋鯉でも見せて貰ふわ。

藤七　どうぞ御覽なすつて下さいまし。（歸りかけてまた後戾りして、喜多雄に向つて）さつきの女殺しの話で御座いますがね。伊豆屋の平吉が怪しい男を見たと云つて居ります。顏はよく見なかつたけれど、變な男が御嶽さんの方から下りて來るのを見たさうで御座います。どうも譯がありさうに思はれたから、突立つてあとを見てると、も一人の男が同じ道を驅けて來たさうです。それで、殺し手は一人ぢやあるまい、二人でやつた仕事だらうと、平吉は申して居ります。物取りぢやあるまいし、遺恨があつてやつたことで御座いませうが、若い女一人を、男が二人がかりで絞殺すなんてあんまりむご過ぎるやう

に、わたくしは思はれます。

喜多雄　さうだね。（空々しく云ふ）……お前は早く歸つて庭をよく掃除しといて呉れ。今日はみんなを誘つて行くから。

（藤七は出て行く。）

かよ子　爺やは何だつてあんないやなことをわたしだちに話して行くんでせう。

喜多雄　人殺しの話なんか、誰れでも話したがるものなんだよ。本當に、いゝ加減な想像なんだよ。平吉といふ男が見たつて云ふのも當てにやなりやしないさ。

かよ子　わたし、此間豐兄さんに誘はれて、御嶽さんの裏山へ登つたのだから、あの邊のことよく知つてるわ。山の上からは松原越しに海が見えて、そりや眺めがいゝのよ。……殺された人は、御嶽さんへ行くまでは、自分がどんな目に會はされるか、ちつとも知らなかつたでせうのに。わたし、殺された人が殺した人に隨いて何も知らないで、あの坂を上つてつた樣子が、今目の前に見えるやうなの。邪怪に絞殺されるくらゐなら、自分で海へ身を投げるとか、汽車の線路へ飛込むかして、早く死んぢやつた方がよかつたでせうのに、その女の人はなんにも氣がつかなかつたのね。

喜多雄　それは極つてるさ。殺されると知つて誰れが隨いて行くものか。（また不安な思ひに襲はれたやうに）折角暇をこしらへて保養に來たのに、朝から緣喜が惡いよ。兄貴ばかりぢやない、かよまでもどうかしてゐる。（雨戸の方を見て）おきよはまだ寢てるのか。もう起したらいいぢやないか。早く雨戸でも開けたらいゝだらうに。いつまで庭に立つてゝも爲樣がないから、家の中へ入つて、氣分を變へて、その苺でも食べることにしようぢやないか。

かよ子　（兄に促されても家の中へ行かうとはしないで）此方にはお母さんがゐらつしやらないから、下女も寢たいだけ寢かせるんです。

喜多雄　此方にはお母さんがゐないから、お前も氣が樂なんだらうね。（ふと柔しく云ふ）

かよ子　えゝ。（邪氣なく云つて）それは、時々は退屈して東京の戀しくなることもあるし、何かしら詰らない氣持のする時もあつたのだけど、大抵はスーッとしたやうな氣持で毎日日を暮してゐたのだわ。……でも、それは今朝までのことなの。兄さんに呼ばれて此處へ出て來てから、わたしはじめて氣がついたの。今までわたし無智だつたのね。豐兄さんは死んだ義姉(ねえ)さんの事を考へて鬱いでるのだとばかり思つてゐたんですもの。

喜多雄　それは、兄貴の樣子はちよつと變なやうにおれに

は思はれるんだが、おれがさう云つたからつて、お前は兄貴を怖がらなくつてもいゝよ。おれが餘計なことを云つたために、お前に心配をさせて濟まなかつたね。

かよ子　いゝえ。餘計なことぢやないの。(あたりを見廻して)わたし默つてゐられないから思つたこと云つちまふわ。豐兄さんの知つてる女の人がこの土地にゐるらしいのよ。暗いうちに外へ出て行くのは、その人に會ふためなんでせう。それで、しよつちゆうわたしに何か隱してるやうに氣兼ねをしてゐたのは、そのためだつたの。わたしに悟られやしないかと、豐兄さんがビク／＼してゐる譯が今やうやく分つたんです。……だから、わたし怖くなつたの。爺やの話を聞いて、恐ろしいことが考へられてならないの。わたしの思違ひならいゝんだけれど。……喜い兄さんも、豐兄さんの精神狀態が今朝は變だつて、さつきさう云つたわね。

喜多雄　兄貴にそんな祕密があるつてことは、おれは今まで知らなかつた。(信じかねる風)

(二人は陰鬱な顏して、めい／＼の思ひに沈む。やがて。)

喜多雄　しかし、平吉が見たつていふ男は、兄貴ぢやあるまいよ。おれも詰らない心配をしてゐた。……いくら兄貴の頭が變になつても、そんな馬鹿なことがあるものぢやない。

かよ子　男が二人通つたのを見たといつたわね。

喜多雄　偶然其處を通つたために嫌疑を受けちやたまらないね。

(豐次郎が入つて來る。二人に對して疑惑の目を放つ。)

喜多雄　何處へ行つてゐたの？

豐次郎　戸倉の別莊の側まで行つて來た。死骸には薦が掛つてたから顏がよく見えなかつた。

喜多雄　何だつてそんな者を見に行つたのだい。かよは非常に心配してゐたよ。

豐次郎　お前が何か餘計なことを喋舌つたんぢやないか。(詰問するやうに)

喜多雄　僕は餘計なことなんぞ云やしないよ。(ドギマギしながら)

豐次郎　だつて、かよ子はあの通り震へてるぢやないか。あんなに熟睡してゐたものが、三日も眠らなかつた人間のやうな元氣のない顏をしてゐるのに、おれが氣かつかないと思つてゐるのか。(怒りを含んだ聲で云ふ)

喜多雄　それは僕の所爲ぢやないよ。

豐次郎　ぢや、おれがちよつと出て行つた間に、お前の外の誰れかゞやつて來て、かよ子に何か云つたのか。

かよ子　わたしどうもしてやしないの。兄さんこそ氣を鎮めて默りしてゐて下さい。

豐次郎　おれこそどうもしてゐやしないよ。喜多雄が何か云つたか知らないが、誤解しちやいけない。

かよ子　（外の方を氣にして）こんな所にいつまでも立つてゐちやいけないから、家の中に入りませう。わたし、今雨戸を開けるわ。

　かよ子は顧み勝ちに、豐次郎の方を氣にかけながら出て行く。）

豐次郎　（弟に向ひ顏を和らげて）お前は本當にかよ子に何も云はなかつたのか。おれはあの子の生きてゐるうちは、無駄な心配はさせまいと思つて、此方へ來てからも、おれが思つてゐることは微塵も外へ現はさないやうにしてゐたのだ。それに、無邪氣な相が消えてしまつた。一日でも一刻でも時を延してゐるうちに、人間の心は不意に邪念が芽を吹いて來るものだが、一度芽を吹いたが最後、この頃の草や木のやうに、どし〳〵蔓つて繁つて行くのだ。昨日までは、苦しみの種から生れてゐながら、苦しみを感じなかつたかよ子も、今はそれを感じだしたのだ。あれの母親はおれだちの母親に虐殺されたやうなものだからな。

喜多雄　虐殺たなんて考へるのは、兄さんの頭がどうかしてるんだよ。親爺のしたくらゐなことは世間に有りがちのことなのだからね。……かよは兄さんが、死んだ義姉さんの事か何か考へて毎日鬱いでると云つて心配してゐたのだ。

豐次郎　おれはかよ子だけには、おまきのやうな苦勞をして死なせたくないよ。おれやお前の敵にしときたくはないよ……おれは今、氣にかゝつたから死人を見に行つたのだが、加害者は昨夕のおそい汽車で大磯へ來たのだと、みんなが噂をしてゐる。

喜多雄　それが僕にでも關係があるのかね。（反抗するやうに云ふ）

豐次郎　御嶽さんの邊は、人殺しをやるのにいゝ處た。おれはさう思つて、毎朝散歩してゐたのだ。

喜多雄　兄さんはどう思はうとも、僕はあすこが眺望がいいから、行つて見たゞけだ。かよもさつきあそこは眺めがいゝと云つてゐたよ。……しかし、朝からこんないやな話しをしてゐても爲方がないから、僕は一先づ家に歸つて出直して來ることにしよう。

（喜多雄が行きかけると、豐次郎はふと手をのばして引留める。喜多雄はこの手を振放して行かうとする。そのはずみに、二人は芝生の上にころぶ。）

二

二三十分後。前の幕の別莊の一室。食卓を圍んで、兄妹三人が苺を食べてゐる。かよ子の居室らしく、鏡臺や箪笥などあり、西洋畫の額が掛つてゐるが、それは、觀客の目には見えない。

かよ子　この苺は隨分おいしい苺ね。（匙を持つたまゝ、喜多雄の方を見る）

喜多雄　（夢から醒めたやうに）むん。うまいだらう。和泉屋へ頼んで特別にいゝのを選擇させたんだ。

豐次郎　この土地にはろくな果物がないんでね。（平靜な態度で云つて、皿の苺を見てゐる）

かよ子　水島の義姉さんでもおたまちやんでも、誰れか東京から遊びに來てくれゝばいゝと、わたし此間うち獨言のやうに云つてゐたのよ。だから、今朝喜い兄さんの聲を聞くと、飛上るやうに悦しかつたのだけれど、だし拔けに脅かされちやつたので、スッカリ悄げたの。藤七がいけないのよ。いけ好かない爺やだわ。死人があらうと人殺しがあらうと、係合ひもないわたし達の所へ、朝つぱらから知らせに來なくつてもいゝぢやないかね。

喜多雄　さうだとも。あいつ他所へ行つても餘計なおしやべりをしてゐるに違ひない。（それを氣遣つてゐるらしく忌々しさうに云ふ）

豐次郎　藤七のおしやべりくらゐは構はないが、お前は後暗いことはないのか。（聲を稍々低めて）おれ達の前ではもう祕密にするには及ばないよ。さつき草原に轉んでた時に、おれはお前の心臟に觸つて、激しく鼓動してゐるのを知つたのだ。お前の胸の底には、何か異常な事を實行したあとのやうな震へが殘つてゐるのを、おれはちやんと感じてるのだ。お前はおれだけには隱せないよ。二人は幼い時から一しよに育つて來た人間だもの、おれにお前の心の中が讀めないでどうする？……昨日までのかよ子になら、世間の者の恐ろしがるやうなことは決して聞かせたかないのだけれど、今はかよ子も、恐ろしいことが自分の廻りに起つてることを勘付いてるのだから、今更おれ達がかよ子の目に蓋をしてゐようとしたつてもう遲いんだ。だから、お前も、遠慮しないで正直に打明けて見ろ。おれは決してお前を非難しようとは思つてゐない。輕蔑もしない。都合によつたら、おれが責任を背負つてお前の身代りになつてやつてもいゝと思つてゐるのだ。

喜多雄　僕の身代りになると云つて、何のために身代りになるんだね。（自分の胸をおさへながら）僕はさつき芝生に轉んでた時、柔かい草が身體に觸つていゝ氣持だつ

たよ。あの上をいつまでもコロ〳〵と轉んでゐたかつたくらゐだ。動悸も打つてやしないし、手も震へてやしないよ。

豊次郎　お前はまだおれのこの目を眩ましてゐようと思つてるんだな。（詰責する語調）ぢや、かよ子に訊いて見ろ。

喜多雄　（強ひて笑ひを浮べて）おれの顏付が不斷に比べてそんなに違つて見えるか。かよの目でよく見て、公平に判斷して吳れないか。

かよ子　（よく見て）さう云へば、喜い兄さんも今朝は變ね。目付が凄いぢやないの。

（かよ子は、喜多雄が見た目を轉じて豊次郎の方をぬすみ見して、それから、額を見上げて、ひそかにおびえる。）

豊次郎　かよもいよ〳〵氣がついたのだな。お前があの親爺の肖像がよく出來てると云つて此處へ掛けた時から、おれは氣遣ひでならなかつたのだ。親爺は一生のうち二人も三人もの人間を殺してゐるのだよ。そのうちの一人は、西南戰爭で殺したので、親爺自身も自慢をして人に話してゐたのだが、生物を殺したのは何のためだつて同じことだ。殺す生すは戰爭の時に限つたことはない。（毅然として）喜多雄、お前は、戰爭でもない時に親爺と同じことをやつたな。他所の人間はどうか知らないが、親爺の一族は、一生に一度は親爺と同じことをやらなければ生きてゐられないと、おれは此間から考へてゐたよ。

喜多雄　親爺と同じことをやつたのならやつたでいゝから、兄さんは心を鎭めて下さい。

豊次郎　馬鹿、おれを狂人とでも思つてゐるのか。おれはこの通り落着いてゐるぢやないか。おれが狂人なら、親爺も狂人だつたのだ。お前も狂人だ。……かよ子でも喜多雄でも、おれに何事でも訊ねて見ろ。それで、おれの返答が間違つてゐるかゐないか試驗をして見ろ。この頃のやうに澄んでゐるおれの頭には、分り過ぎるぐらゐ何でも分つてるつもりだ。

かよ子　お父さんはいゝ方だつたのよ。だから、わたしもお父さんの肖像を此處に掛けてゐるんだわ。夜もお父さんに守つて貰つてるから、安心してよく眠られるやうにと思つて。

豊次郎　親爺の肖像が魔除けになると思つてゐたのか。人間にいろ〳〵な苦しみを與へた根本の神様を、人間が崇拜してゐるやうに、かよ子は自分に苦しみの種を授けてくれた親爺を有難い神樣にして奉つてゐるのか。……馬鹿だなあ。

（豊次郎、ふと立つて、肖像畫を取おろす。そこへ、

姿は見えないで、藤七の聲だけが、庭の方から聞えて
　來る。）
藤七　旦那樣、至急の御用がある方がいらつしやいました。此方へ御案内いたしましたが、此處へお通し申しませうか。旦那樣が直ぐにお家へお歸りになるでせうか。
（三人はふと目を見合はす。喜多雄は慌てゝ立上つて、「ちや、ちよつと行つて來よう。」と獨言のやうに云つて
　出て行く。）
豐次郎　（肖像畫を下に置いて）　彼奴はおれよりも先きに實行したのだ。（歎息する）
かよ子　喜い兄さんは何を實行したのよ。
豐次郎　何を實行したか、お前も分つてゐるだらう。この苺はおれのところへ手土産に持つて來て呉れたのか、外の者と一しよに食べた滓だか分らないのだ。
かよ子　ぢや、爺やの話してゐたことが喜い兄さんに關係があるつて云ふの。
豐次郎　あいつ今は、その事で調べられるのだが、言逃げるすべはあるまいよ。……あいつ、おれよりも先きに實行したのだ。（次第にかよ子を見詰める）
かよ子　（おど／＼しながら）　だつて、喜い兄さんのやうな快活な面白い人が、そんな恐ろしいことをする譯はないと、わたしには思はれてよ。水島の家に入つてからは、今まで幸福な日を送つてゐるのぢやないの。
豐次郎　世間の出來事の譯が一々お前なぞに分つてたまるものか。筋の通つた道を踏んで人間は日を送つてゐるんぢやないぜ。……お前は喜多雄のしたことを手はじめにこれから怖い世の中を見なければならないね。
かよ子　わたし、兄さんが怖い。（座を立つて庭へ下りようとする）
豐次郎　いよ／＼おれが怖くなつたのか。おれはお前を幸福にしてやらうと、いつも思つてゐたのだ。
（庭へ下りようとするかよ子を、豐次郎は手を伸して
　引留める。）
かよ子　兄さんは、わたしをどうするの？……勘忍して頂戴。
豐次郎　お前はまだ誰れに對しても惡事をしたことのない女だ。あやまるには及ばないよ。
かよ子　だから、兄さんは私を虐めないで下さい。
豐次郎　おれが虐めるものか。まあ、此處へ坐れよ。
（かよ子は手を執られてゐるので、逃げようとしても逃げられないで、おど／＼しながら、肖像畫の側に坐
　る。）
かよ子　わたしお父さんの側に坐つてゐてよ。
豐次郎　おれだち三人は、その親爺に生みつけられたのだ

からな。よくその肖像を見るといゝ。人間が神に似てるやうに、三人が親爺にどれだけよく似てゐるかを見るといゝ。

かよ子　わたし今から海へ行つて見たいのだけれど、兄さんは行きたくない？（隙間(すき)を見てゐるやうに目を左右に向ける）

豐次郎　まあ、も少し此處に坐つてゐろ。おれを恐れなくてもいゝよ。おれはたつた一人の妹の眞實(ほんたう)の幸福を考へてゐるのだ。

（豐次郎はやさしくさう云ひながら、出拔けにかよ子を後から抱へて、喉を締めようとする。かよ子は微かに聲をたてゝ藻搔きながら抵抗する。豐次郎は女の苦しさうな顏面を見ると、知らず〳〵手をゆるめる。すると、かよ子は猛烈な抵抗をはじめて、兄の手から脫出するや否や、鬼女の如く兄の喉佛を壓へ付ける。豐次郎は脆くも氣絕する。かよ子はよろ〳〵と食卓に凭れて俯伏(うつぶ)しになる。そこへ、喜多雄が入つて來る。二人の樣子を怪んで、かよ子の肩を叩いて。）

喜多雄　おい、どうしたのだ。

かよ子　（目を見上げて）わたし、兄さんに殺されかけたの。何の罪もないのに兄さんに喉を締められかけたのです。わたしどうもしたのぢやないの。兄さんがどうなつてゐてもわたしの所爲(せゐ)ぢやないの。兄さんは氣が狂つてゐるんです。（昂奮した調子で、しかしあたりを憚つてゐるやうに云ふ）

喜多雄　お前はよくそれで無事だつたな。兄貴は頭が變だと、今朝から思つてゐたのだ。

かよ子　兄さんの氣の狂つてゐることを、あなたはよく知つてゐるんでせう。

（喜多雄は氣絕してゐる豐次郎の樣子を側へ寄つて薄氣味惡さうに見る。）

喜多雄　兄さんは狂人だかどうだか、おれには分らない…。兎に角、早く醫者を呼んで來なきやならないよ。

かよ子　若しも豐兄さんが息を吹返したら、わたしまたどんな目に會はされるか知れないから此處にゐられないわ。

喜多雄　だつて、おれ達が打遣つといて逃出す譯には行かないよ。

かよ子　ぢや、お醫者と一しよに藤七をも呼んで、豐兄さんがあばれたしたら、取鎭めて貰はなきや恐(こは)いわよ。それに、喜い兄さんは、豐兄さんの狂人だつてことを、よく證明して下さいね。

喜多雄　おれにはよく分らん。とに角直ぐに醫者を呼んで來させよう。

（喜多雄が出て行くと、かよ子は、怖々豐次郎の側へ寄つて、警戒しながら、兄が氣絶してゐるか否かを檢査する。そして、あたりを見廻しながら、兄の喉をおさへつける。脆くも息の根の絶えてゐるのを認めたあとで、鏡の前に寄つて、亂れた髮を直しにかゝる。喜多雄が入つて來る。）

喜多雄　兄貴は寢てるんぢやないか。氣が變になつたからつて氣絶する譯はあるまいよ。

かよ子　さうかも知れないわ。兄さん、側へ寄つてよく見て御覽なさい。わたしは怖くつて寄りつけないわ。

喜多雄　（兄の側へ寄つて、その死相を注意して）變だなあ。昂奮して心臟痲痺でも起したのか知ら。

かよ子　さうかも知れないわね。（落着いた顏して振向いて）豐兄さんはもういやなことを考へてゐないで幸福ね。あんなことばかり考へて日を暮してるよりは、氣絶でもしてゐる方が幸福だつてことが、わたし今やうやく分つてよ。

喜多雄　お前はどうしてそんな呑氣なことが云つて居れる？

かよ子　さつき、急用があつて兄さんに會ひに來た人は誰だつたの？

喜多雄　おれはスツカリ忘れてゐた。お前も知つてゐる琴平の寺濱さんが、偶然此方へ來てゐておれを訪ねて來たのだ。兄貴の樣子があたりまへなら、此處へ通さうと思つて、外に待たしてゐるんだが、こんな風ぢや駄目だな。

かよ子　お通しゝたらいゝぢやないの。わたし、異つた人に會ひたくつてならないのよ。

喜多雄　かういふ時だ、寺濱さんの意見でも訊いて見るんだな。

（喜多雄が奥へ入つて行くと、かよ子は鏡面を見入つてクリームなどで顏の磨きに取り掛る。庭の方から藤七が入つて來て「旦那樣」と聲を掛ける。かよ子、聞耳を立てゝ、不安な態度で座を立つ。外を覗いて。）

かよ子　爺やだつたの？　まあいゝ處へ來て呉れたわね。此方の旦那樣はさつき不意に目を廻してお倒れになつたのよ。上へ上つて御樣子を見ておくれな。

藤七　それは大變た。お顏へ水でもぶつかけたら、息をぶつ返しなさるかも知れない。（上へ上つて、豐次郎の側へ寄つて）こりや、あたりまへの氣絶ぢやねえな。

かよ子　たゞの氣絶ぢやないつて。（驚いたやうに云ふ）

藤七　お醫者樣に見て貰ふまでもない。わたくしが一目見てさへ分りまさあ。全體旦那樣はいつの間にこんなにおなんなさつたんでせう。お孃樣は御存知ないんで御座いますか。

かよ子　わたしはちつとも知らないわ。朝御飯の支度に臺所の方へ行つてる間に、兄さんはそんなになつたのよ。……早くお醫者さんが來て下さればいゝのに。

藤七　晝間に外から人が入つて來て、御主人を絞殺して行くつてことはない譯だ。まさか、昨夕の女殺しぢやあるまいし。（獨言のやうに云つて）お孃樣、こりや、お醫者樣を呼ぶさきに、警察へ屆けなきやなりますまいよ。

かよ子　爺やは自分で警察へ屆けに行かうつて云ふの？（咎めるやうに云ふ）

藤七　わたくしの家の旦那樣のお差圖次第でどうにでもいたします。

かよ子　それで、御獄さんの人殺しの殺し手は誰れだか分つたのかい。

藤七　いゝえ、まだハツキリ分らないやうですよ。殺された女を連れて停車場を下りた男があつたらしいので、警察では昨夕のおそい汽車で來たお客を調べると云つてゐます。殺した男が、いつまでも、この土地に愚圖々々してやしまいと云つてゐますが、御獄さんの死人も絞殺されてゐるし、此方の旦那樣もこんなになつてゐらつしやるし……。

かよ子　わたし、此處にゐるのが怖いわ。

藤七　爺やも氣味が惡う御座いますよ。こりや、たゞ事ぢやない。

かよ子　喜い兄さんも氣が變になつてるやうだから、わたし怖いわ。

藤七　わたくしも今朝此方へお伺ひした時からさう思つてゐました。（耳を澄まして）旦那樣の聲がする。不斷のお聲とはまるで違つてる。お孃樣も御用心なさいませ。

（藤七は事があつたら庭の方へ飛出せるやうに身構へをする。）

三

ある田舍町の街上。夜。電柱につけられた街燈が暗い道をかすかに照らしてゐる。今樣の耳かくしに髮を結つて、派手な浴衣を着たかよ子が、一方から入つて來る。向うから寺濱某（四十餘歲、體格逞しき男）が入つて來る。行きちがひさま。

寺濱　かよ子さんぢやないか。

かよ子　あら。……先生が此方へ來てゐらつしやるとは、ちよつとも存じませんでした。

（二人は留つて、顏を向合つて立つ。しかし、かよ子の顏のみハツキリ電燈の光を受けて、寺濱の顏は光の外にあつて、絕えずボンヤリしてよく分らない。）

寺濱　避暑をかねてあなたに會ひたいと思つて、夕方此方

へ來たんです。明日の朝はお訪ねしようと思つてゐたのだが、此處で會つてよかつた。どうです、身體の工合は？

かよ子　おかげで大變よくなりまして、この頃はお藥も頂かないので御座いますわ。

寺濱　それは何よりだ。

かよ子　先生は最近に兄にお會ひ下さいまして？

寺濱　それについてあなたをお訪ねしたいと思つてゐたのだ。兄さんはこの頃は精神狀態がよつぽどよくなつてゐますよ。もう大丈夫でせう。此間會ひに行つた時には、あの時のことを夢のやうに思出して話してゐましたよ。それから、あなたのことも云つてゐました。安城家の血統はかよ子一人に殘つてるんだから、結婚をさせるやうに骨を折つてくれと、わたしに頼んでゐました。わたしは以前、自分から緣談を持出したことがあるくらゐだから、お受合ひはして置きましたがね。

かよ子　わたしの結婚のことなぞ仰有らないやうにして下さいましな。二人の兄が一度期にあんな恐ろしいことになつたのですもの。

寺濱　しかし、あの時の記憶を消すためにも、あなたは結婚なすつた方がいゝでせう。わたしのためにもいゝんですよ。わたしもあの時には關り合ひがあつたので、あの時の氣持が今でも頭の中に殘つてゝいけない。

かよ子　それで、若しも兄の精神狀態が完全に回復しても、罪人になるやうなことはないので御座いませうか。

寺濱　そのことは心配なさらなくつてもいゝでせうがね。……わたしはあの後、心の落着いた時分に時々思出しては、不思議でならないんですね。あなたによくお訊ねしたいと思ふこともあるんですよ。かういふことをお訊ねしちや、あなたがいやに思ひなさるか知れないが……わたしが門の外で會つた時には、不斷とそれほど變つてもゐなかつた喜多雄君が、その前から發狂してゐてあゝいふ恐ろしい犯罪をしたといふのも解らないことだし、ことに、御嶽さんの前の殺人が喜多雄君の所爲だと極つたのも、僕にはよく呑込めないんです、警官や檢事の訊問に對しては、わたくしは批評がましいことを口へ出すのは遠慮して、藤七の云つた通りに同意したのだつたが、警官や檢事の解決した問題が、わたくしにはどうも得心の行くまでに解決されてゐないのです。

かよ子　ぢや、先生は、兄の罪は寃罪だと思つてゐらつしやるんでせうか。

寺濱　わたしは疑つてゐる。……人間以外に、魔物とか何とかいふやうな物があつて、豐次郎君に仇をして生命を取つて、御嶽さんの側でも女の生命を取つたのだと信じられゝば、至極都合がいゝのだが、我々はさういふこと

を信じられなくなつたので、都合が悪い。喜多雄君は、御嶽さんの側の殺人も自分のしたことだと思つてゐるやうだが、わたしには、どうしてもさう思はれませんな。

かよ子　でも、上の兄なぞは、上べは何ともないやうでも、精神に異狀があつたのですから。

寺濱　喜多雄君の精神が何かの刺戟で突然狂つたにしても、理由のないのに、兄さんの喉を締めにかゝつたのは、不思議でならない。二人は不斷仲のいゝ兄弟だつたのだから。それに、豐次郎君が抵抗もしないで、たやすく息を引取つたのも、わたしには理解の出來ない問題なのです。……喜多雄君自身は、精神が鎭まつて來ると、自分が續けて二度も殺人をしたつてことを認めてゐるやうな口を利くので、當人さへさう認めてゐることを、わたし一人が疑ふのは變だが、かよ子さんはどう思ひます？　あなたはあの時側にゐたことだし、ことにあなたのやうな無邪氣な女の方の觀察は參考に訊いて置きたいと、わたしは思つてゐるんです。これはわたしとあなただけの間の話にして、決して外に洩らすやうなことはしないから、腹藏なく聞かせて貰ひたいんですがね。

かよ子　それでは、兄は自分を罪人として認めるので御座いませうか。（氣色ばんで云ふ）

寺濱　さうです。喜多雄君のやうな不斷快活だつた青年が、自分が犯したかどうか分らないやうな罪を自分で認めてゐるのが、わたしには、一層不憫に思はれるんです。むしろ狂人になり切つてる方が、兄さんのためには幸福なんでせう。なまなかに、ボンヤリした自意識があるのがみじめです。

かよ子　先生のやうな方がさう仰有れば、わたくしもさういふ氣がいたしますわ。死んだ兄は、兄弟に殺されたにしても、魔物とか何かの手で殺されたにしても、結局幸福なのぢや御座いますまいか。ですから兄は自分を手に掛けた者に逆らひはしなかつたので、恨んでもゐないのだらうと思はれますわ。

寺濱　ホウ、かよ子さんはあの事件をそんな風に考へてゐるんですか。（不愉快さうに云ふ）

かよ子　さう思つてゐちやいけないんで御座いませうか。

寺濱　いけないこともないだらうが、あなたは二人の兄さんのたつた一人の妹さんだ。兄さんがあんな死に方をしたのを幸福だといふのはあんまり無邪氣過ぎますね。

かよ子　わたし、先生にだけ、打明けてお話しいたしますわ。……精神に異狀があつた兄さんが、わたしを幸福にしてやるつて、わたしの喉を絞めようとしましたから、わたし、怖くなつて逃出さうとして、思はず知らず、兄さんの喉を壓へつけてやつたのです。御嶽さんの女殺し

は誰れの所爲か知りませんけれど、兄さんの死んだのは、喜多雄兄さんの所爲ぢやないんですわ。わたしのしたことです。

寺濱　かよ子さんはなぜそんなことを云ふんです。あなたがあんなことをする筈もないし、第一あなたのか細い手で、何で大の男の生命を取ることが出來るものですか。わたしが、心安立てゞ、出し拔けに變な事を訊いたのがいけなかつたか知れないが、昂奮しないで心を落着けて下さい。

かよ子　檢事も巡査も、誰もわたしに疑ひをかけないから、何も知らなかつたと云つて、藤七の云ふ通りに、喜多雄兄さんの所爲にしてすましたのですけれど、本當はわたくしのこの手が兄の喉を壓へつけたのです。それを喜多雄兄さんは御自分の所爲のやうに、今思つてゐるのなら、わたし怖う御座いますわ。喜多雄兄さんが、無實の罪だつたことも知らないで靑い顏して、狂人らしい目をして御自分の手を兄殺しの手としてボンヤリ見てゐることを思ふと、わたしぢつとしてゐられなくなりました。（自分の手を出して電燈の光で見ながら物狂はしい態度をする）

寺濱　そんな華奢な手で人間の生命が取れるものですか。（かよ子の手を執つて）あなたは安城家のたつた一人の相續者なんだから自重しなければいけませんよ。……わたしがこれからあなたの宿までお送りしませう。

（二三人の人間が薄暗いところを、影の如く通り過ぎる。一人の男、片端に立留つて此方を見てゐる。その男の顏は分らない。寺濱はかよ子の手を執つて歸りを促しても、かよ子は動かない。）

かよ子　わたしはあの時豐次郎兄さんにおとなしく絞殺されてゐたら、却つて幸福だつたかも知れませんわ。逃げようと思つたばつかりにあんな恐ろしいことをして……先生。わたしはこれからどうしたらよろしいのでせう。

寺濱　……あなたも兄さんのやうになつたんだな。（嘆息する）

（立つて見てゐた男、野卑な嘲笑を洩らして行く。寺濱驚いてその後姿を顧る。）

――幕――

隣家の夫婦

人物

美戸野昌一　吉村家の寄食者。風采よろしからず、むしろ惡相を帶びてゐる（二十七歳）

石川貞吉　美戸野と同じくらゐな年輩、文學者、弱々しい男

吉村寅藏　容貌醜くして痩身。相場師（四十二歳）

たみ子　吉村の妻君。肉體が年齡よりも老けてゐる（三十歳）

一

十月末の午後。

別莊建ての小さな家の一室の、あたりまへより廣い縁側に、贅澤な寢臺のやうな椅子が持出されてゐる。部屋の中はすべての粧飾物を剝取られてガランとしてゐる。

美戸野は庭へ下りて、板塀の近くに立つて、隣家の二階を見上げてゐる態度をして、

石川さん。（と聲を掛ける）

やあ。……此間うちは大變お忙しかつたやうですね。（といふ聲が隣家の方から聞えて來る）

いやどうも大混雜でしたよ。僕は今日は非常に退屈してゐるんですが、遊びにいらつしやいませんか。

えゝ、お邪魔でなければおうかゞひしませう。

どうぞ。

（美戸野はさう云つて板塀の側を離れて家の方へ戻つて、奥から、椅子を一つ持つて來て縁側に置く。）

（石川が庭の横手からノソ〳〵入つて來て、懷つこい目を向ける。）

石川　今日は久振りによく晴れましたね。

美戸野　さうですね。いゝ天氣になりましたね。……さあお掛けなさい。（椅子に手を掛けて勸める）

（石川は縁側へ上つて、突立つたまゝ荒れた部屋の内を見廻はす。美戸野は反對に庭の方へ目をつける。）

美戸野　庭も汚れたまゝで打遣らかしとくんです。コスモスもみんなへし折つて近所の子供にやりました。裏の柿の木には大分實（み）が生（な）つてるから、もつとよく熟したら自分で食べようと思つて樂しみにしてゐたんですが、昨夕（ゆうべ）

のうちにすつかり盜まれてしまひました。油斷がなりませんよ。

石川　（相手の言葉を身を入れては聞かないで）家の中はすつかり片附けておしまひになつたんですか。

美戸野　え丶。

（二人は向合つて椅子に腰をおろす。）

美戸野　一昨日の晩、あの雨のしよぼ〳〵降るなかを、大あわてで荷造りをして、貨物自動車に積込んで送出したのが、夜中の二時頃でした。ちよつと戰爭のやうでした。僕はすつかり疲れちやつて、昨日は一日寢て暮しましたよ。

石川　あの晩、わたしは眠つきが惡かつたものですから、たび〳〵起きちや窓を開けて、此方の騷ぎを覗いて見たんですが、吉村さんの昂奮した聲が時々聞えて來ましたよ。……御主人が商賣に失敗なすつたつて、本當ですか。

美戸野　今度は、どうも本當らしいですね。（感慨を籠めて）どうせ商賣が商賣だから、いつかこんな目に會ふのは當然なんでせうが、主人に取つちや時期が惡かつたので、もう浮び上られないでせう。……この別莊だつて、大きな顏して住んでゐたつても、自分の物ぢやないんですからね。こんな小さな家一つだつて、いろ〳〵に入組んだ事情が絡んでるくらゐですから、商賣の方のいきさつは複雜で、我々にはまるで解らないんですが、家庭の內情――と云つて、夫婦きりの關係ですが――それが近頃變挺になつてるので、主人は今度は二重に苦しまされてる譯なんです。……全體こんな空屋同樣で、しかも自分の所有物でもない家に、僕がわざ〳〵留守番をしてゐるのは滑稽なんですが、そこが破產者の憎むべき心理狀態なんでせうね。こ丶の地所は酒屋の梅屋の所有で、家は、相場をやつて銀行の金を費込んで銀行を破產させた東陽銀行の重役の坂本の名義になつてゐますが、主人は僕を此處に頑張らせといて、地主からは移轉料をせしめて、坂本にも何か因緣をつけていくらかせしめようと企んでゐるらしいんです。いや實際企んでるんです。坂本の奴も喰へない奴で、東陽銀行の破產の時には、僕の主人と共謀して、自分の財產はうまく隱蔽して自分の損害を輕くしたやうですよ。

石川　ひどい奴ですね。あの銀行は休業したつきり、一年經つても目鼻がつかないんで、土地の者は非常に迷惑してるやうですが。

美戸野　（尤もらしく重々しい口吻で）それは銀行は無論不都合ですが、田舍の人間は狡猾なくせにあまいんですね。家の大將はよくさう云つてゐましたよ。……家の店でも今まで田舍のお客をうまく騙しちや捲上げたんでせ

うが……。

石川　（相手の言葉を身を入れては聞かない風で、部屋の方を顧み勝ちで）此方には贅澤ない、道具が澤山あつたのに、みんな運んぢやつたんですね。

美戸野　え丶、無我夢中で運べるだけ運びました。明日にも債權者に差押へられるかと恐れて急いだのでせうが、主人の頭の調子も、今度は金槌でどやされたゝめに、いくらか狂つてるやうです。あの雨ぢや大切な荷物が大分汚されたでせう。（ふと、自分が腰を掛けてゐる寢椅子へ目を落して）御覽なさい。この椅子だけは、僕が妻君に歎願して殘して貰つたのですよ。……昨日は一日この上で晝寢をしました。このクッションは柔くて大變寢心地がいゝですよ。

石川　（今度は言葉に惹かれて目をそちらへ注いで）さうでせうね。……奥さんはこの上でよく新聞なんぞ讀んでゐらつしやいましたね。

美戸野　（言譯らしく）これは妻君專用の椅子といふ譯ぢやありません。主人は一週に一度此方へやつて來た時に、頭や身體を休ませるために、この上でよく寢てゐました。商賣の掛引も此處で考へてゐたらしいですよ。全體僕の主人は、大磯へ來ても、海水浴を一度やるぢやなし、散歩するぢやなし、無論書物を一ページも讀みやしないし、寢ても醒めても金の事ばかり考へてるんだから、不思議な動物ですね。

石川　動物はひどいですね。（微笑して）しかし、御主人も藝者遊びはよくするやうぢやありませんか？

美戸野　主人が藝者狂ひをすると云ふんですか。（怪訝な顏をして）それは誰れにお聞きになりましたか。

石川　誰れに聞いたつてことはありませんが、さういふ風評がありますよ。

美戸野　そりや石川さん御自身の空想の產物ぢやないですか。（面白さうな笑ひを洩らして）相場師なら藝者遊びはするだらう。藝者なら役者買ひくらゐするだらうといふのは、平凡な、誰れでも思ひつきさうなことなので、敢て、賢明なるあなたの想像力を俟たなくつてもいゝ譯ですね。……しかし、石川さん、空想といふ奴は面白いものですね。こんな柔いクッションに橫たはつて、秋の日に浸つて、空想を恣まゝにするのは、惡かありませんね。

石川　さうですとも、だから、僕も內々かういふ贅澤な寢椅子を欲しがつてゐたのです。

美戸野　ハヽヽヽ。全く坐り心地がいゝですよ。ためしに腰を掛けて御覽なさい。

（美戸野は立つて、石川をその椅子に腰掛けさせて、

（自分は石川の腰掛けてゐた方の椅子に腰をおろす。）

美戸野　さういふいゝ椅子を僕のために置いて行つてくれた主人夫婦の惡口ばかり云つちやいけませんね。……實際相場師に謹直な君子はないでせうが、家の大將は割に女には淡白らしいです。金錢慾が旺んなために、女慾の方は比較的衰へてるんでせう。……いや、本當はさうでないかも知れないな。（考込む）

石川　それで、あなたはいつまでも此處で留守番をしてゐらつしやるんです？　お一人で此處にゐちや淋しいでせう。

美戸野　なに、獨住ひも昨日からだから、まだ淋しいつてことは感じませんが、しかし、僕も長らくかうしちやゐられませんよ。七月のはじめから大磯へ來て、七八九十と、四月も居候で暮してゐたのだから、主人が失敗しなくつたつて、僕は僕で方針を立てゝ引上げようと思つてゐたんです。……そこで、石川さん、今日は一つ、僕やおたづねした時に、ちよつと机の上を拜見したら、「隣の夫婦」といふ題で何か書いてゐらつしやつたが、今日は主人の内輪話をしますから聞いて下さい。此間あなたをその隣の夫婦の材料を供給しませう。

石川　あれはこちらの御夫婦のことぢやありませんよ。

美戸野　それはどうでもいゝです。僕はあなたに聞いて頂きたいことがあるんですよ。今朝からこの椅子の上に寢ころんで、雨上りの秋の空を見ながら、久振りで自分一人で靜かに物を考へてると、僕のやうな愚鈍な人間の頭にでも、いろんな面白い感想が浮ぶんですからね。……さうだ。一昨日荷物の整理をした時に、一本だけこつそり葡萄酒を取つときましたから、今日はその口を開けて、聞き賃として御馳走しませう。

（美戸野はさう云つて奧へ入る。石川は寢椅子に身體をのび〳〵と伸して快感を覺えてゐると、そこへ吉村の妻君たみ子が、飾りつ氣のない、そして容色に年齡よりも老けた生地を現はして入つて來る。着てゐるお召縮緬も雨に汚れたものらしい。側へ寄つて來るのを、石川は暫く氣づかないでゐる。）

たみ子　石川さん、お話しに來てゐらしつたの？（愛嬌を見せて云ふ）

（石川はそれに氣がつくと、慌てゝ身を起して、極りの惡さうな顏して挨拶する。）

たみ子　いゝお天氣になりましたね。戸外を歩くと溫か過ぎるくらゐですよ。

（彼女は緣側へ上つて部屋の中を見ると、口を噤んで感慨に打たれる。そこへ美戸野が、奧から葡萄酒の罎とコップ二つを提げて入つて來る。）

美戸野　（驚いて）奥さん、どうなすつたのです。お一人ですか。（口早に云ふ）

たみ子　（何氣ないやうに）急に此方に用事が出來たから、一人で飛出して來たのよ。……あの晩あんな思ひをして持つて歸つた荷物はね。彼地へ着くと、そつくりそのまま、待つてゐましたと云はないばかりで差押へられたんですよ。だから、わたしが云つてたやうに、此方で始末をつければよかつたのに、間の拔けたことつたらありやしない。

美戸野　そいつは馬鹿を見ましたね。

たみ子　おや葡萄酒があつたの？　それはよかつたわね。わたしもあとで頂くから、石川さんに差上げなさいよ。わたしはちよつとあちらへ行つて見て來ますわ。

（たみ子奥へ入つて行く。美戸野はコップを石川に渡して酒を注ぐ。）

美戸野　僕の今朝からの感想も、奥さんがやつて來たので、やり直しだ。

石川　（相手の言葉には耳を留めないで、葡萄酒にちよつと口をつけたゞけで、コップを下に置いて）わたしはお暇しませう。晩にでもお遊びにいらつしやい。

美戸野　折角僕の感想を聞いて頂かうと思つてゐたのに、生憎でしたね。ぢや、晩にでもこの罎を提げてお宅へうかゞつて、ゆつくり飲むことにしませう。

（石川が庭へ下りて歸つて行くのを、美戸野は見送つたあとで、奥の方へ耳を留めながら、自分のコップへ酒を注いで一息に飮んで、椅子に身體をもたらせる。しかし、絶えず奥の方へ氣を留める。）

（たみ子は、前よりも生氣を含んだ態度をして入つて來る。）

たみ子　石川さんは？

美戸野　あなたに遠慮して歸つて行きました。

たみ子　わたしが落ち目になつたところを他人に見られるのをいやがつてると思つての御遠慮なの？　詰らない御遠慮ね。……そのくせに、あの人はわたし達のことを氣にしてるやうな目をして、遊びに來るたんびに家の中なんぞじろ〳〵よく見てゐるんですよ。獨りで室借りしてゐると、かういふ家の生活でも羨ましいのか知ら。

美戸野　わたしの境遇をさへ羨んでたことがありましたよ。

たみ子　同い歳だつていふけれど、あなたとは體格が大ちがひね。若い盛りに肺が悪くつちや可哀想ね。どうせ長持ちはしないんでせう。

美戸野　それはさうと、あなたは何か大切な忘れ物を捜しにいらつしやつたんですか。

たみ子　さうなのよ。

美戸野　お忘れ物はありましたか。

たみ子　えゝ。ありましたとも、それについて、あなたに手助けして貰はうと思つてるの。

美戸野　わたしが何かお役に立つんですか。

たみ子　夜逃げの荷造りや留守番なんかとは違つて、あなたも張合ひがあることなの。

美戸野　（乗出して）それは何ですか。

たみ子　あとで分るわ。（寝椅子へ腰をおろして）わたし疲れてゐるんだから、その葡萄酒を饗んで下さいね。（黒い縮緬の羽織を脱いで抛出して）下手なことをしたものだから、わたしの衣服までもみんな捲添を喰つて押へられちやつて、雨に濡れたこんな衣服一枚きりになつたのよ。吉村のしをれ方は、それはひどいんだけど、わたしだつてあなたの目にはどんなにか見窄らしく見えるでせう。昨夕寝なかつた上に、お湯にも入らなけりや、顔さへろくに洗はないで來たんですもの。

（美戸野は默つて、たみ子の顔をぬすみ見しながら葡萄酒を注ぐ。たみ子それを快げに飲干す。）

たみ子　零落した人間はいやなものだと、あなたは、昨日とは違つたわたしの様子を見て、さう思つてるんぢやないの？……わたし、今日は疲れてゐて、面倒くさい思ひはしてゐられないから、あなたに謎を掛けたり豫防線を張つたりなんぞしないで、自分の思つてることを勝手におしやべりしてしまひませうよ。……あなたには、わたしの不斷の氣持は分らなかつたでせうけれど、わたしは、今度のやうなことを、今か〳〵と待つてゐて、準備はちやんと出來てゐたのよ。（ゆつくり自分の話を自分で樂しむやうな態度で）……吉村といふ人はね、世間並みに藝者を落籍せて圍つたりしてゐるけれど、お金の事では一分一厘の抜け目のない男で、それで、どんな女にも鼻毛を讀まれるやうな男ぢやないやうに、世間の人からも云はれて、自分でも己惚れてゐたんですがね。本當は間の抜けたところがあつたの。利口さうに見える男だつて、案外利口ぢやないものよ。……だからさ。あの人は今度破産する目に會つたのでせうし、わたしは、自分で一生口過ぎの出來るやうな準備が平生に出來てゐたのよ。……お體裁はどうだらうとも、眞實のところを云ふと、吉村の有つてるお金と結婚したやうなんだから、吉村にお金のなくなつた時が、お互ひの縁の切れ目になるのがあたり前ぢやありませんか。吉村の方だつて、疾つくの昔わたしには倦いてゐたのだけれど、大して邪魔にはならないし、それに世間體もあるものだから、事を荒立てないで、今まで妻といふ名義を取上げようとはしなかつた

のだわ。わたしの方だつて、吉村の家を出て行つても、お膳立てしてわたしを待つてゐて吳れる者が何處にもある譯ぢやないのだから、遊んで生きてゐられゝば、それだけが得だつていふ氣持で、今の今まで辛抱してゐたのですよ。（ふと、目を上げて）あなたよく聞いてゐるの？

（美戸野「よく聞いてゐる」といふ樣子を目顏に現はす。）

たみ子　わたし座興に話してるのぢやないのよ。親身に聞いて下さいね。……遊んで生きてゐられるだけが得だつていふ氣で、夫の妻として、今まで辛抱してゐたんです。わたしが變り者だからさう思ふだけで、世間の奧さんはさうぢやないのか知ら。……そんな理窟はどちらでもいいとして、美戸野さん。わたし、これから吉村の側を離れて、一人立ちで世を渡らうと思つてゐるのよ。あなたはわたしの味方になつて下さらなくつて？　お金はちつとは持つてゐるのよ。（少しの間口を噤んで、何かを索るやうに相手の顏を見て）吉村といふ人は、お金にかけちや敏い男で、人の懷中にもしよつちゆう索りを入れてゐて、わたしの預金帳の金高でも、わたしの持つてる指環でも衣服でも、ちやんと頭の中に覺えてゐて、必要な時には、自分の商賣の資金に融通させようとするのだから、あたり前ぢや、祕密でしまつとく譯に行かないの。……でも、美戸野さん。わたしえらいでせう。一萬や二萬のお金は、あの吉村の目を晦ませてしまつてあるんです。

（美戸野は興味をもつて聞いてゐたが、二萬三萬のお金といふ言葉を聞くと、昂奮して相手の顏を見据ゑて。）

美戸野　そんな大金をあなたは何處に持つてゐらつしやるんです？（詰責するやうな語調で云ふ）吉村さんは、今度二萬いくらとかの金が急場の間に合ふやうに手に入らなかつたゝめに、今まで持ちこたへてゐた風船玉が破れたと落膽してゐたぢやありませんか。あなたはなぜ、御自分が祕密で持つてゐるといふ大金を投出して、主人の危急を救はなかつたのです。第一吉村の店が破產すりや、あなた御自身も非常な損害を受けるんぢやありませんか。

たみ子　（動じないで、しかし、今までよりも言葉に力を入れて）わたしを夫婦の情愛のない女だと云つて、あなたは怒つてゐるの？　美戸野さんがそんなことを云つてわたしを責めるのは滑稽に思はれてよ。……それはね、わたしだつて、此處で吉村の前へ有りたけのお金を差出して喜ばせようと思はないぢやなかつたのですけど、こゝが大切な時だと、心を鬼にして引こたへたんですよ。あなたはわたしがさう思つた心根を責めるんですか。

美戸野　心を鬼にして何の得になるんです？　あなた夫婦は敵同士といふ譯ぢやないんでせうに。

たみ子　そりや敵同士ぢやないでせうね。不倶戴天の敵が、ダイヤの指環を買つて呉れたり、時節々々の流行の衣裳を買つて呉れたりすりやしないでせうから。（少しの間口を噤んでから、じれつたさうに）わたし、どう云つたら自分の腹の中の氣持が人様に分るやうに云へるんでせう？　石川さんにでも智慧を借りたら、いゝ言葉が見つかるかも知れないけど……。

美戸野　あなたの惡口を御主人の口から聞かされたことはありませんでしたよ。

たみ子　さう？……吉村は女にはお金さへやつて置けばいいと思つてゐたのだから、破産したゝめに女に逃げられるのは、自業自得で當然なの。去年でも一昨年でも、吉村が羽振りがよかつた時に、わたしの方から逃出したなら、吉村は、勝手にしろと、猫の子一匹ゐなくなつたくらゐに思つて、またお金の力で他の女を連れて來て、平氣でゐたにちがひないの。だから、わたし、今まで蟲を殺して我慢してゐたのだけど、今度は吉村も思ひ知るだらうと思つてよ。

美戸野　それは殘酷ですね。假りに敵同士だつたにしても、相手の弱つた時を狙つて苦しめるのは卑怯ぢやありませんか。

たみ子　（冷笑して）誰れでも上べでは云ひさうなことを云つてるのね。……美戸野さん。わたしが吉村にねだつて、特別に造らせたこの柔かい寢椅子は、寢心地がよかあなくつて？（媚びを寄せる）

美戸野　（ドギマギして）柔くていゝですね。しかしそれがどうしたのです？

たみ子　わたしを卑怯だと責めても、男のあなただつて、隨分卑怯だわよ。白ばくれてゐても、わたしにはちやんと分つてるわ……（自分の話を自分で樂んでるやうに）あなたは、吉村の手下になつて相場師の修業をしようつて氣があるのぢやなし、他所の會社へ勤めようと思へば勤められない人でもないのに、なぜわたしの家の居候なんぞになつて、詰らない小僧か書生つぽの役目なんか勤めてゐたのです？　それに何のために、大磯に三月も四月も愚圖々々して日を暮してゐたのです？　身體が弱いから養生のためだつて？　噓仰有いよ。石川さんぢやあるまいし、そんな頑丈な身體をしてゐるくせに。……わたしには、あなたのお腹の中は分り過ぎるくらゐ分つてゐたんですよ。

（美戸野、相手の目を煩たがり、首垂れて、目を噤んでゐる。たみ子會心の微笑を洩らしてゐる。）

たみ子　もう遠慮することないわ。……わたし、正直に云つちまひますがね。わたし、最初のうちは、あなたがいやでならなかつたの。氣味が惡いやうにさへ思はれて、吉村をつゝいてあなたを追出さうとしたこともあつたのですけれど、家へ出入りをしてゐるいろ／＼な男のうちで、あなただけが慾も得も忘れて、わたしの側にゐたがつてることが分ると、不思議にあなたが好きになつたのです。生れてからはじめて、あなたのやうな人に出會つたんですからね。だから、あなたになら、掛引なしに、わたしのお腹の底の底にしまつてることでも打明けていいといふ氣持になつてゐたのだけれど、さつきのやうに、わたしの云ふことにケチをつけられちや、わたし當てが外れちやつた。

美戸野　奥さんがさうお思ひになるのは止むを得ませんが、不斷お世話になつた吉村さんをどういふ意味でゞも辱めるやうなことは、わたしには出來ません。（ポツリポツリ云ふ）

たみ子　（意外に感じたらしく稍々氣色ばんで）ぢや、あなたはわたしが今打明けたことを吉村に知らせようと思つてるんですか。わたしが祕密のお金を持つてることを、吉村に告口しようと思つてるんですか。

美戸野　いや、そんな餘計なことは云ひたかありません。地主や家主から移轉料をゆすらうとするやうな惡辣な人に、手近な金の在所を敎へるやうな同情心を、わたしは持つちやゐないんです。（稍々力づいて云つて、今まで外らしてゐた目を動かして正面に相手を見る）

たみ子　同情心は持つてゐないかも知れないけど、あなたは吉村を恐れてゐるのね、あの一文無しになつた吉村を……。

美戸野　わたしはあなたが恐ろしくなつたのです。

たみ子　わたしに關合ひをつけちや、あとが怖いと思つてゐるの？（ふと笑つて）可笑しいわね。長い間わたしの側にゐたあなたぢやありませんか、たとへ、わたしが惡人だつたにしても、わたしの賴み事を聞いて、わたしに力を貸して吳れたつて、別段あなたが迷惑する譯はないのでせう。世間の人に爪はじきにされる道理はないと思はれるわ。現在あなたは、性のよくない、人聞きの惡い役目を吩咐かつて、その吩咐を後生大事に守つて、こんな所にしよんぼり留守番をしてゐるんぢやないの……それとも、あなたは、わたしの味方になつて關合ひをつけられるのを、變な風に考へてるのぢやないか知ら。わたし、吉村を離れて自由な身になつたからつて、あなたを誘惑しようと思つてやしないわ。誤解しないやうにして下さいね、それは奇麗な氣持であなたに關合ひをつけようと

思つたゞけなの。吉村のやうな男からでも離れると、女一人ぢや、何かにつけて心細いんですもの。

（歳に似合はぬ甘たれた言ひ方をして、全身に媚態を現はす。美戸野はまた極りの悪い思ひをして目を外らす。）

美戸野　……外の事はとに角、あなたは何萬といふ大金を、御主人に隱して銀行にでも預けてゐらつしやるんですか。

たみ子　（首を振つて）吉村の側にゐてお金を銀行へなぞ預けて、いつまでも祕密にしてゐられるものぢやない、あの人は家の中にある紙幣の匂ひまで嗅ぎつける人なんですもの……。わたし、あの人から貰つたお金は、みんな自分のお粉飾に費つたり娯み事に費つたり、氣前よく懇意な人に播き散らしたりしてゐたのぢやないの。あの人もそれはよく知つてるのよ。

美戸野　（好奇心を起して）ぢや、奥さんは、そんな大金をどんな手段でこしらへて、どこにしまつてゐらつしやるんです？

たみ子　大金々々と、あなたも二萬や三萬のお金に驚くやうぢや、將來大金持になれさうぢやないわね。

美戸野　わたしの將來をさう輕率に極められちや困りますよ。……御主人に取つても、二萬といふ金は、店の浮沈に關するほどの大金だつたぢやありませんか。

たみ子　わたしに取つても、生命の種の大金なのよ。……だから、わたしの賴みも聞いて呉れない信用のない人に、その大金の在所なんぞうつかり明かされないわね。……（相手の熱心な態度を眠つたさうな目で見て）わたし、此間からの疲れが出て、眠くつて爲樣がないから、この椅子の上で一眠りしませう。その間に何か三品ばかり、おいしい物を蓬龍館へ誂へといて、目が醒めたら直ぐに御飯が頂けるやうにしといて下さいね。葡萄酒のせゐで眠くつて慾も得もなくなつちやつた。

（寢臺椅子の上に身體をのばして、ハンケチを顏にあてゝ目をつぶる。美戸野はたみ子の方へ身を寄せて。）

美戸野　吉村さんは東京の何處にゐらつしやるんです？

たみ子　何處と云つて、お妾さんの家の外に泊る所はないぢやないの。お妾さんが、今までの御恩返しのつもりで食べさせて呉れるんでせう。感心ね。（眠さうな聲で云ふ）

美戸野　それであなたは安心して眠つてゐられるんですか。二萬圓の大金さへ御自分で持つてればいゝんですか。

たみ子　二萬圓々々と、大きな聲で云つて、若しも泥棒や借金取りに聞かれたら大變ぢやないの？（眠さうに）

（そこへ、電報と呼ぶ聲と、門の戸を叩く音が聞える。）

（美戸野、返事をして庭へ下りて、片隅へ姿を消す。）
電報配達の聲　伊藤たみ子といふ人が此方に居りますか。
美戸野の聲　伊藤たみ子？　家が違ふんぢやありませんか。……あゝさうか。吉村方としてあるな。ぢや、此方だ此方だ。
（美戸野、電報紙を見ながら元の所へ戻つて來る。）
美戸野　奥さん、電報ですよ。（と、二度續けて云ふ。たみ子が目を醒まさないので、肩に手を當てゝ搖起す）奥さん、電報が來ましたよ。
たみ子　（横になつたまゝ、寢呆聲で）誰れから來たの？　讀んで下さいな。……澤井からぢやない？
美戸野　（電報紙の封を切つて）今歸れ、あしこで待つ梅浦、とありますよ。それで宛名は伊藤たみ子としてあります。
たみ子　梅浦？　へえ……よく分つてよ。有難う。
美戸野　（椅子の側に添つて立つて）ぢや、あなたは今夜東京へお歸りになるんですか。
たみ子　どうだか分らないわ。（また眠りに落ちかける）
美戸野　梅浦といふのはどんな方なんです？　わたしの聞いたことのない名前ですね。
たみ子　さう？　今度紹介するから會つて御覽なさい。大した人ぢやないの。
美戸野　奥さんは、もう吉村の姓を棄てたんですか。
たみ子　……だから、わたし、もう奥さんぢやないのよ。
美戸野　（氣を變へて）ぢや、わたしは料理を誂へて來させう。電報の返事は出さなくつてもいゝんですか。
（たみ子は答へないで熟睡に落ちる。美戸野は、他の椅子に腰をおろして、電報紙を穴の開くほど見詰めて考へてゐたが、やがて、それを抛出して庭へ下りて外へ出て行く。）
（自動車の音や荷馬車などの物音が、閑寂な空氣を破つて聞える。）
（奥の襖が開く。背廣を着て中折帽子を横つちよに被つた吉村が、著るしく憔悴した顏して入つて來る。美戸野の腰掛けてゐた椅子に、倒れるやうに腰をおろして、暫くたみ子の寢姿を見る。やがて立上つて、彼女を搖動かす。容易に目を醒まさないので、烈しく搖動かす。）
（たみ子、薄目を開けて吉村の顏を夢のやうに見ながら、だるさうに身體を起して。）
たみ子　ぐつすり眠つてゐたのに（と呟いて、不平らしく）あなた何しに此處へいらしつたの？
吉村　おれも大磯へ寢に來たのだ。昨夕も一昨夜も二晩つづけて一睡もしなかつたのだから。
たみ子　ぢや、そこでお休みなさい、葡萄酒でも飲んで。

吉村（はじめて葡萄酒の罎に目をつけて）これはいゝものがあつた。（コップに酒を注いで、一息に飲干して）お前はいつ此處へ來たのだ。

たみ子（眠り足らない頭を興奮させて）わたし、今來たばかしなの。……あなたはわたしのあとを追つて來たんですね。

吉村　いや、さうぢやない。昨日の朝お前に別れてから、おれは方々駈ずり廻つて、いろ／＼後始末をして、いよいよ素裸になつて、何か小さな事業でもやりださうかと決心をしたのだが、どうにも身體が疲れてならないから、不意に思ひついて此處へ眠りに來たのだ。……おれは何十年の神經の疲れが一度期に出たのか、東京のやうな騒騒しいところではとても眠られない。汽車の中でも眠れなかつた。

たみ子　でも、あなたは東京でよくお休みになれる所が一軒あるぢやありませんか。わたしには落着いて寝られる所がどこにもないのだけれど。

吉村　おれにだつて、落着いて寝られる所はどこにもありやしないよ。

たみ子（皮肉に）高砂町にはお立派な御別宅があるぢやありませんか。

吉村（相手の皮肉を感じないやうに）かうなつたらあしこも他人だ。（力なく云つて）おれももう二日持耐へてゐたならこんなに襤褸を出さないで濟んだのだが。……昨日と今日の二日ぶつ續けに、天まで屆くぐらゐに相場が騰つた。おれも、今度こそ、いよ／＼運に見放されたことが分つたよ。

たみ子（夫の言葉には感動しないで）高砂町ではあなたを寄付けないんですか。そんな薄情な女なんですかね。（獨言のやうに云ふ）

吉村　さうぢやないが、あいつの事は今云つて呉れるな。おれは此間うちから色々なことで頭がゴタ／＼して目が眩んでゐたから、頓間なことばかりやつて、取返しのつかない大失敗をやらかしたのだが、おれはもう諦めてる。それで、當分は此處にすつ込んでゐようと思ふ。お前も此處にゐるつもりなんだらうな。（親しみを持つて云ふ）

たみ子（呆れた顔して）わたしは今夜のうちに東京へ歸るつもりにしてゐるんです。あなたは當分此處にすつ込んでゐるんですつて？……へえ、不思議ねえ。あなたの量見が分らないわ。……昨日あなたとあんなに打明けたお話をして、今度の事を機會に、わたしはわたしの道を歩いて行くやうに、お話が極つたのぢやありませんか。あなたに拵へて頂いた衣服をそつくり差押へられて、わたしだつて、今日から裸同様の身になつてるんです。そ

れで、わたしのやうな者が側にゐちや、足手纏ひで、あなたも御迷惑でせうから、昨日お話しゝたやうに、これを限りにわたしに取合はないやうにして下さい。……今日此處であなたにお目に掛らうとは、わたし夢にも思はなかつたんですからね。

吉村　お前が昨日云つたことは自暴自棄と云ふものだ。その年齢になつておれを離れていゝ事のあらう筈はないんだ。……此間うちお前が時々云つてゐたやうに、腐れ緣なら腐れ緣でもいゝ。その腐れ緣を一生續けて行つた方が、お前のために結句いゝことなんだよ。

たみ子　（目の前の虻か蚊を拂ふやうな手付をして）親切ごかしはもう澤山です。……わたしをこんな所に押籠めて置いて、あなたは東京で勝手な眞似をしてゐたのだけど、これからはあなたの思惑通りにはなりませんよ。高砂町の女や東京の惡意な人に見くびられたからと云つて、わたしの後を追つてなぜこんな所へやつて來るんですよ？（憎さげに云つて）……意氣地のないつたらありやしない。

吉村　（威厳を保つた聲で）此處はおれの家だ。おれの家へおれが入つて來たのがどうしたと云ふのだ。

たみ子　へえ、こゝがあなたの家ですつて？　わたしにそんなチヤラツポコを云つたつて駄目よ。

吉村　（淋しい笑ひを洩らして）さうだな。おれにもお前にも家はない譯だつたな……。（ふと、疲れてゐる目を光らせて）しかし、お前はまだちやんとおれの家の籍に入つてる。夫婦といふ名義はしつかり殘つてるぢやないか。

たみ子　（ふと不氣味に感じて）それがどうしたと云ふんです？　法律を楯にいつまでもわたしを御自分の者にして置かうとするの？　勝手な時には法律を潜つて人の物までも自分の懐中へ入れたり、法律を楯に人を虐めて來たりしたあなただ。あちらもこちらも八方塞りになつたから、せめてわたしをでもふん掴まへて、お金になるものならお金にしたいと思つてるんでせう。（わざと戲談らしい口調で云ふ）

吉村　お察しの通りだ。お前の身體が金になるものなら、手を切つてゞも耳を削いでゝも金にしたいと思つてるよ。……これは戲談ぢやないぜ。……おれは美戸野を相手に一杯やつて、一晩ぐつすり眠らうと思つて大磯までやつて來たのだが、お前に會つたのは不思議だ。腐れ緣でもお互ひに離れきれい緣があるんだね。お前は東京の何處かで、その濡れた衣服を脱いで、汚れた顔を拭いてお化粧でもしてゐるのだらうと、おれは邪推してゐたのだが、お前が昨日別れた時のまゝで此處に來てゐたのは、意外だつた。……（意外に感じてゐるやうな目で相手を

見据ゑる）

たみ子　（相手の目差しを眩しがつて）　わたしは氣兼のない所で眠りたいと思つて此處へ來たゞけなの。……折角いゝ氣持で眠つてゐたのに、眠入りばなを起されて、氣持の悪いつたらない。（獨言のやうに言つて、目をつぶつて、頭を椅子にもたらせる）

吉村　眠たきや遠慮なしに寢るがいゝ。おれも我慢にも目を開けちやゐられなくなつた。……大事な話は一眠りしたあとのことだ。

（吉村も椅子に頭をもたらせて目を閉ぢる。が、二三度止切れ／＼に薄目を開けて、相手がそこにゐるのを見て安心したやうに、また目をふさぐ。たみ子も二三度薄目を開けて相手がそこにゐるのを氣にしては、また目をふさぐ。やがて、二人とも寢息を洩らして、前後不覺の眠りに落ちる。）

（そこへ、美戸野が入つて來る。二人のだらしない寢ざまを、あちらを見こちらを見して、呆れた顏をして、二人の間を通つて奥へ入る。）

――幕――

二

同じ家。元妻君の化粧部屋であつた部屋。今は序幕の部屋と同じやうに荒れてゐて、何の粧飾もない。疊を上げて床板が一枚めくられてゐる。

美戸野が床の下から埃に汚れたまゝの身體を起して、顏の塵を手の平で拂つて、大きく息を吐く。

そこへ吉村は、かの電報紙を讀み／＼入つて來る。

吉村　君は何だつて床の下なんぞへ潜込んだのだ。さつき目を醒ますと、ゴト／＼音がしてゐたから氣になつて見に來たのだよ。

美戸野　此處へ落し物をしたから取りに入つたのです。

吉村　落し物をした？　何を落したのだ？　（床下を覗く）

美戸野　（ドギマギして）　銀貨を落したのですが、暗くつて分りません……なに、十錢銀貨一つだけだから、どうでもよろしいです。

（美戸野が上へ上つて、床板を元のやうにしようとしかけるのを、吉村は抑止めて。）

吉村　この中へ金を落したつて？　いゝ加減な事を云つちやいけないぜ。この部屋はたみ子のお化粧部屋で、おれにも迂濶に足を入れさせなかつたところだ。こゝに何か祕密が潜んでるに違ひない。（ふと電報紙を美戸野に見せて）これを見ろ。今、これがおれの足に觸つたので取つて見たのだが、君はこの電報を知つてるんだらう。

美戸野　えゝ、それはわたしが受取つたのです。

吉村　君はこの梅浦といふ男を知つてるだらうな。

美戸野　いゝえ、知りません。

吉村　頓貫に知らないのか。……夏から、君に大磯にゐて貰つたのは、梅浦のやうな奴の來るのを監視させるためだつたのだ。君が若しもたみ子に買收されて知らん顏してゐるのなら、おれを裏切つたことになるんだぞ。（目顏で脅かす）

美戸野　斷じてそんなことはありません。

吉村　（獨言のやうに）しかし、いゝものがおれの手に入つた。……この電報は落ちてたところに置いといて呉れ。そして、今夜たみ子を東京へ歸らせないやうに、君も監視して呉れ。……この電報だつて金儲けの足しにならんとは云へないんだ。

美戸野　（不平らしく）わたしは、奥さんの監視をするために、この別莊に置いて頂いた筈ぢやなかつたのですが。……そんな不愉快な役目を吩咐かるくらゐなら、わたしは、今夜にでも東京へ歸らせて頂きます。

吉村　（怒を含んで）おれが零落したから、君までもおれを見棄てようと思つてるんだな。大して役に立たない人間を、長い間食はしてやつて、氣儘にさせといたのだが、恩を恩とも思つてやがらない。

美戸野　（動じないで）わたしは、あなたの周圍の人だちのやうに、それほど現金ぢやありません。しかし、今まで大きな勝負をやつてゐらつしやつたあなたが、急にケチ臭いさもしいことを仰有るのを、心外に思ふんです。（稍々聲を強めて）奥さんを監視させたり、電報を金にしようとしたり、家主から移轉料を取らうとしたり、いくら商賣に失敗したにしても、考へ方があんまりケチ臭いぢやありませんか。……それが平生の吉村商店の御主人の本性だつたのですかね。

吉村　それをケチ臭いと思ふなら、勝手にさう思ふがいゝ。おれは大きな勝負に負けたから、小さな勝負にでも勝ちたいと思つてるのだ。

美戸野　（冷嘲を浮べて）あなたは、まだ物に勝てる自信を持つてゐらつしやるんですか。……監視しなければならんほど奥さんはあなたの心を離れてゐるし、わたしだつて……。（相手の顏を見て言淀む）

吉村　おれも此間から、金にも家にも、いろんな人間とも、一人々々絶交して來たやうなものだが、君にまで侮辱されりや申分のない譯だね。高が、自分の家の居候の美戸野昌一くらゐに……。（自から嘲けるやうに云ふ）

（美戸野は、また床板を元のやうにしようとする。吉村は、饑ゑたる犬が食物を嗅廻つてゐるやうな樣で、部屋を見廻してから床の下へ目をつけ、鼻をビクつか

せて、何か思ひついたやうに、卑しい笑ひを浮べる。）

吉村　君は十錢銀貨を一枚落したと云つたね。……（勢よく）よし、おれが中へ入つて拾つてやらう。君も一しよに捜さないか。たみ子が目を醒さないうちに早く。

美戸野　そんなものはどうでもいゝぢやありませんか。衣服が汚れますよ。

吉村　こゝから何か出て來るかも知れないよ、金鑛の脈はどんな所にあるかも知れないんだ。おれも多少思當ることがあるんだからね。

（吉村は渾身の力を揮つて床板を剝ぎ取る。美戸野は手出しをしないで、不安な樣子をして傍觀してゐる。）

吉村　たみ子の奴、此間家を片付ける時に、頻りにこの部屋を氣にしてゐた。おれがこゝへ入つて來るのさへ頻りに氣にしてゐやがつた。あいつのことだから、この床の下を掘つて金でも溜めてゐるのかも知れない。さつきのあいつの口吻は、祕密で多少の金でも持つてゐさうな人間の口吻だつた。一錢の金のない奴にあんな氣强い口が利ける筈はないよ。おれも、今思當つた。（美戸野を顧みて）君はおれの手助けをしろ。見當がついたら直ぐに掘出すのだから、向うの米屋からでも、シヤベルか鍬か借りて來なきやなるまい。

美戸野　そんな下らないことは止した方がいゝでせう。（不安な態度で相手を見てゐる）

吉村　何が下らないことがあるものか。（ますます意氣込んで）さういふことでもなけりや、あいつが今日わざわざ大磯まで來る譯がないのだ。

（床の下に入つて姿を隱す。）

吉村　（床の下から）君がさつき此處へ入つてゐたのもうなづけた。君までも勘付いて、おれたちが眠つてる間に、どうかしようと思つてゐたのぢやないか。油斷がならないな。

（美戸野も氣に掛けて、知らず知らず床の下を覗く。）

吉村　有る有る（悅しさうに）たしかに何か埋めてあるよ。間違ひなしだ。……早くシヤベルでも借りて來て呉れ。素手ぢや掘れないよ。

美戸野　本當に何か埋めてあるんですか。驚いたなあ。あなたは慾にかけちや嗅覺が强いんだからかなはない。金のにほひがしますか。

吉村　金のにほひか何か、馬鹿に臭いよ。……オイ美戸野。無駄口を利かないで、早くシヤベルと蠟燭とを持つて來て呉れ。

（吉村は汚れた半身を現はし、苦しげに息を吐く。）

美戸野　眞實なら奧さんに訊いてからにしたらいゝぢやありませんか。

吉村　（汚れた手で額の汗をこすつて、威嚇的な目顔をして）それは正體を見屆けてからのことだ。告白をしちや承知しないぞ。……君は信用の出來ない人間になつたのだから、一歩も此處から外へ出す譯に行かない。おれが自分で臺所を搜して何か持つて來よう。君は此處で番をしてゐろ。

（吉村は嚴命を下して出て行く。その姿が見えなくなると、美戸野は慌たゞしく床の下へ入る。）

（たみ子、寢呆顏で氣だるさうな樣をして入つて來る。）

たみ子　床板をめくつてどうしたのだらう。（獨言を云ふ）

（美戸野、汚れた半身を現はす。）

たみ子　（噴出して）その顏つたら、そこで何をしてゐるの？

美戸野　（眞面目で）大將が金を見つけたつて、これから掘出すところなのです。

たみ子　お金を？　吉村がこんなところへお金を隱してるといふんですか。本當にさうなの？　わたしにも債權者にも隱して落ちぶれた時の用意に、こんな所へお金を埋めてゐたのか知ら。……呆れつちまふわ。强慾なあの人の考へさうなことだけれど。

美戸野　さうぢやないんですよ（聲を潜めて）あなたは、祕密で何萬圓とか持つてゐると仰有つたぢやありませんか。その金は此處に隱してあるんぢやないですか。

たみ子　（笑つて）何時誰れがお金を床の下なぞへいけて置くものですか。あなたも馬鹿な人ねえ。

美戸野　さういへばさうですね。御主人のやうな人は、なほ更そんな馬鹿な眞似はしないでせう。（と云つて、腑に落ちない樣子であたりを見て）だけど、奧さん。さつき、あなたがこの家へいらつしやつた時に、わたしが偶然この部屋を覗くと、疊が上つて床板をめくつてあつたんですよ。

たみ子　あなたも、吉村と同樣に、今日はどうかしてるのね。この部屋は此間うちにひどい雨洩りがして、疊は疾つくから上げてあつたのぢやないの。

美戸野　あゝさうか。

たみ子　あなたも慾に目が眩んだのね。（氣遣はしさうに）でも、あなたを自分の味方だと思つてさつきお話したことを、まさか吉村に打明けやしないでせうね。

美戸野　それは斷じて云ひません。（床の下へ目を落して）だけど、たしかに此處には何か埋めてありますよ。

たみ子　吉村が祕密でお金をいけてるんぢやないんですね。……ぢや、何でせう。お金らしいの？

（吉村が錆びた鍬を持つて入つて來る。たみ子を見る

と、「しまつた」といふやうな表情をしたが。）

吉村　（威壓的な口調で）お前も手傳ひをしろ。……話はあとのことだ。掘出すものを掘出したあとのことだ。

（吉村は床下へ入つて、鍬で土を掘る。美戸野も助力をする。たみ子は好奇心を寄せて覗いてゐる。）

吉村　そら出て來た。……壺だ〳〵。（活氣づいて叫ぶ）

美戸野　壺だ〳〵。汚ない壺だな。金なんか入つてゐさうぢやないな。

吉村　まあ、中を見てから云へ。……そら出すぞ。

（吉村はどす黑い小型の壺を抱へて上へ上る。三人はその壺を圍んで一しよに目を注ぐ。）

吉村　祕密の正體をよく見ろ。

（吉村はたみ子の方をちらと見てから蓋を取る。三人は一度期に中をのぞく。）

（美戸野は笑ふ。吉村は苦澁な表情をして目を壺から離さない。たみ子は呆氣に取られる。）

美戸野　石ころ一つ入つてゐないぢやありませんか。

たみ子　何のためにこんな者が此處に埋めてあつたんでせう。

美戸野　何かのおまじなひかな。

たみ子　でも、氣味の惡い物が入つてゐなくつてよかつたわね。

（吉村は絕望の表情をして口を噤み、壺を取つて床へ叩付ける。壺は壞れないでころがる。）

たみ子　祕密の正體はこれだつたの？

（吉村は默つてゐる。）

たみ子　この中に小判か何かゞ入れてあるとでも思つてゐらしつたの？……大の男が鍬を持つて、二人がゝりで、隨分なお骨折だつたわね。……御自慢のあなたの目や鼻も泥細工の目鼻と同樣になつたのぢやないの？　わたしの耳や鼻なら、削ぎ取つてもいくらかになるかも知れないけど、あなたの身體は潰しにしても三文にもなりやしませんよ。（笑ふ）それよりも、あなたも美戸野さんも、早く着物の埃を拂つて、顏でも洗つて、いらつしやいよ。二人のざまつたらない。（可笑しくてならない仕草をして）人が見たら何と思ふでせう。

吉村　（悄然として、言葉にも力なく）お前は今夜一人で東京へ歸るのか。

たみ子　（ふと氣を取直して）えゝ。わたし、どうせ爲方がないわ。

吉村　梅浦から電報が來たゝめなのか。

たみ子　梅浦の名前なぞ云つて脅したつて駄目よ。（吉村がかの電報紙を指差すのを見ても動じないで）あなたがそんなものを脅かしの種にしようと思つてゐるのなら、

大事にしまつといて、梅浦さんの所へ持つていらつしやいよ。いくらかに買つて貰へるかも知れないわ。

吉村　（強ひて力を揮つて）　おれはお前の夫だぜ。法律上、お前はおれの妻で、おれはお前の夫だ。

たみ子　（負けない氣持を見せて）　法律のうしろ立てゞ、わたしに向つて、威張つてるつもりなの。……いくら威光を見せようとしたつて、あなたは、吉村寅藏と云つてた人の木乃伊よ。幽靈ですよ。貨物自働車の荷物を差押へられた時のあなたには、まだ血の氣が通つてゐたけれど、あれからどこをどううろついて血の氣を無くしたのやら、錆びた鍬を持つて床の下を掘つてるあなたは骸骨見たいだ。お金に執念の殘つた幽靈見たいよ。……美戸野さんにでもよく聞いて御覽なさい。

吉村　（強ひて力を揮つて）　勝敗は時の運た。おれのやうな男の心は、お前には分らないのだ。

たみ子　ぢや、こんな窮屈な汚い床の下なんぞを嗅ぎ廻つてゐないで、どこか大きな金山でも掘當てゝ御覽なさい。その時には、どんな美しい女でも、あなたの御機嫌を取りに寄つて來ますよ。だけど、木乃伊になつたあなたの鼻には、眞實の金の匂ひは嗅げなくなつてるのね。

吉村　（今度は、薄ら笑ひを浮べながら、勢ひの弱い聲で）　利口ぶつてあたり前のことを云つてやがる。おれも夫婦の由縁で教へてやらうか。お前はその顏でそのしなびた身體で、外の男が誘惑出來ると思つてゐるのか。お前は昔のお前ぢやないぜ。おれに生血を吸はれたあとの出し殼だ。（ふと、美戸野の手を執つて引寄せて、たみ子の顏を指差して、やゝ震へた聲で）君は第三者としてよく見てよく批評して呉れ。この顏に男が迷はされるか、この艶のない荒れた皮膚に男の心が惹寄せられるか。遠慮なく云つて見て呉れ。……今直ぐ君がおれを棄てゝ出て行つても、おれはもう苦情は云はないから、長年のよしみに、今おれの訊いたことに、眞實の返事をして呉れ。おれとたみ子の前で、ハツキリ君の批評を聞かせて呉れ。

（美戸野、目を外して默つてゐる。）

たみ子　（兩手で耳を塞いで）　下らないこと聞かせて貰はなくつたつていゝのよ。（暫くして）　わたし此處を出て行くから、あとから來てわたしを摑へないやうにして下さい。（部屋を出ようとしながら、何となく心殘りがするやうに出かねる）

吉村　（ふと命令的に）　美戸野、さつき君に頼んだやうに、たみ子を監視して呉れ。

美戸野　（顏を上げて、泰然として）　それよりも、わたしが留守居役を御免被つて、これから東京へ歸りますから、お二人は此處で御一しよにお暮しになつたらよろしいぢ

やありませんか。……東京のお家は債權者に差押へられてゐても、此處は、たとへ移轉料は取れないにしても、當分立退かされやしないでせう。飯米はわたしが昨日どつさり買込んであります。當分は、ぢつとしてゐらつしやつても、餓死する心配はありませんよ。……奥さんがお誂へになつた料理も、疾つくに來てゐますから、お二人でお上んなさい。料理は臺所に置いてあります。それからわたしのために殘して頂いた柔かい寢椅子をもお返ししますから、お二人は安心してお休みになれるでせう。……（獨言のやうに）わたしには貨物自働車なんか入らない。鞄一つぶら下げて出りやいゝのだ。

たみ子　美戸野さん、本當に行つちまふの？　わたしがあれほど賴んでゐたのに。

吉村　君に行つちまはれると寂しいよ。

美戸野　僕は東京へ行つて、中味の空つぽでない壺を掘出しませうよ。……いろ／＼お世話になりました。

（美戸野は二人に挨拶して未練なく出て行く。二人は呆然として無言で見送る。）

――幕――

三

その夜。

吉村夫婦は緣側の椅子に對坐してゐる。部屋にはちやぶ臺が出てゐて、すべて食事の濟んだあとの有樣。

吉村　蟲の音が細くなつたね。

たみ子　あなたが蟲の音の強い弱いに氣がつくのは可笑しいわね。

吉村　さうだな。……今日は月もよく照つてゐる。かうしてると、おれは今島流しにされてるやうな氣持がするよ。（氣怠るさうに）腹が空いてたところへ、どつさり詰込んだから、おれはまた疲れが出て眠くなつた。お前もまだ疲れてるやうだが、どうしても今夜歸らなきやならないのか。一しよに飯を食つて一しよに葡萄酒を飲んだのだから、おれも心殘りがない譯さ。……本當に今夜歸つて行くのなら、停車場まで見送つてやらう。これが最後だ。一生お前に會はれないかも知れないな。

たみ子　（氣遣はしさうに）そして、あなたはこれからどうなさるの？

吉村　さつき云つた通りだ。

たみ子　ぢや、日當てのつくまで、當分は一人ぽつちで此處にゐらつしやるの？　お氣の毒ね。美戸野でもゐて呉れるといゝのだけれど……。

吉村　おれやお前はあいつにまでも馬鹿にされてゐるのだ。ひどく落ちぶれたものさ。美戸野が出て行く時に、

振返つておれたちを見た目付は、今も目の前に見えるやうだよ。
たみ子　わたしもあの男に馬鹿にされたんですかねえ。（歎息して）……美戸野の奴、スリ見たいな顔をしてるくせに生意氣ぢやないの？
吉村　おれは金があつた時に、威張りやうが足りなかつた。かうと知つたら、金のある時に、金の力で威張れる限り、思ふ存分に威張つとけばよかつた。今は美戸野のやうな男の前に膝を突いて頼んでも、云ふこと一つ聞いて貰へなくなつたのだ。
たみ子　あなたも可哀相ね。（憐む如く夫の顔を見て）わたしが耳を塞いでた間に、美戸野はあなたに何を云ひました？
吉村　奨つたことは云やあしないが、あいつはお前をも侮辱してるんだよ。お前に美戸野を買收する金力も、男を蕩す若さもなくなつたのに氣がついてるからね。
たみ子　（我れを忘れたやうに）嘘ですすく。美戸野の奴、たびくわたしにいやらしい素振りを見せたんですもの。それに、わたしがお金を持つてることもよく知つてるんです。
吉村　美戸野がお前に對していやらしい素振を見せたつて？　出鱈目を云つちやいけないよ。

たみ子　出鱈目ぢやないのよ。この寢椅子を美戸野が熱心に所望したのは、わたしが不斷この椅子を使つてゐたからなんです。椅子よりもわたしの移り香を慕つたためなんだわ。あなたには察しがつかなかつたの？
吉村　（苦笑して）ちよつと信じられないが、それならそれでいゝさ。
たみ子　あなたは詰らないことにはよく邪推を廻すくせに（じれつたさうにして）それにわたしにはお金があることを、美戸野はよく知つてゐるんです。二萬圓くらゐ持つてることをよく知つてるんです。
吉村　（ふと、驚きと喜びに勢ひづいて）二萬もの金をお前が持つてゐる？　それは本當かい。
たみ子　（俄かに我れに返つたやうに、口を噤んだが）現金が手元にある譯ぢやないんですけれど、ある人に預けて利廻りのいゝやうに運轉して貰つてるんです。
吉村　さうか。……現金は手元になくても、證書か何かは持つてるだらう。
たみ子　預證書はわたしの部屋の袋戸棚に仕舞つてあつたのを、此間忘れてゐたのです。誰れにも取られなくつてよかつた。（氣乘りのしないやうに云ふ）
吉村　（目を据ゑて）證書は今持つてるのか。おれに見せないか。……利廻りのよしあしをお前も考へる女だつた

のか。

たみ子　さういふお金をわたしが祕密で持つてゐたことを喜んで下さる？

吉村　（微笑して）それは極つてるさ。

たみ子　……（獨言のやうに）大きな金儲けをして贅澤したり威張つたりしようとは思はないで、持つてるお金で、田舍でヒツソリ暮したらいゝかもしれない。（夫をよく見て）お互ひに身體が衰へてるし、年齡も取つてゐるのだし……。

吉村　（もどかしさうに）全體誰れに預けてるのだ？

たみ子　（何氣なく）澤井さんに……。

吉村　澤井に？（身體を震はせる）

たみ子　店員のうちで、あの男だけは頭もいゝし、信用が出來ると、昔あなたが云つてらしつたぢやないの？

吉村　昔はどうだつたにしろ、今はおれには敵だ。おれを潰した仲間の一人見たいなものだ。

たみ子　そんなことわたし知らないわ。

吉村　……ぢや、不斷澤井と共謀になつて、おれの身代を削つてゐたのだな。此間ぢゆう澤井が倒れりやおれがよくなる、おれが倒れりや澤井がよくなると、おれとあれとは、揃つていゝ目は見られないことになつてゐたのが、お前には分らなかつたのか。（興奮してさう云つたが、ふと怒りを鎭めて）しかし、以前おれが、澤井は頭もいゝし信用が出來ると云つてゐたのを、お前は一圖に信じてゐたのだから爲方がないやうなものだ。……兎に角、その證書をおれに見せてくれないか。

たみ子　あなたの前でうつかり口に出したのだから、もうどうしようもない。（後悔しながら帶の間から證書を取出して）粗末にしちや困りますよ。大切なんですよ。……さあ。（と、ソッと渡す）

吉村　（奪ふやうに受取つて、熟視してさも悅しさうに）兎に角、おれだちはこれで餓ゑないで濟むのだ。

たみ子　（不思議さうに）ぢや、あなたはわたしが祕密で澤井さんにお金を預けてたことを怒らないのね。

吉村　（その言葉を聞流して、獨言のやうに）おれは明日の朝、澤井の所へ行つて、貰へるだけの金を貰つて來なきやならん。（その證書を大事さうにポケットへしまつて）おれに葡萄酒をもう一杯飲まして吳れ。

たみ子　驚いた。あなたは斷りなしにわたしの財產を沒收するの。

吉村　お前がこれを持つて行つたつて、澤井が素直に金を渡すものぢやない。おれにまかせとけよ。……十日も早く、これがおれの手に入つてゐたら、おれもこんなみじめな境涯に落ちてやしなかつたのだが、おれは今になつ

て役に立たない愚痴を云つて、お前を責めることは止さう。
たみ子　さうして、わたしは何時までもあなたの側で、生命だけつないで行くんですね。(他人事のやうに云つて)どうせ爲樣がないわ。
そこへ石川が入つて來る。「美戸野さん」と遠くから聲を掛ける。)
たみ子　(そちらを見て快活な聲で)　石川さん、いらつしやいましな。
石川　(近寄つて吉村に挨拶して)　美戸野さんは居りますか。
たみ子　美戸野は急に思ひ立つて東京へ歸りましたよ。もう此方へはまゐりますまい。(自分の柔い椅子を離れて)まあお掛けなさいましな。
石川　いえ、わたしは此處で結構です。(緣側に腰を掛けて)美戸野さんは晝間會つた時には、そんなに早く歸りさうな話はしてゐなかつたのですが、變ですね。
たみ子　あの人も氣紛れな人なんですよ。あなたと御懇意にして頂いて、お蔭で學問が出來ていゝと喜んでゐましたのに、お別れの挨拶にも伺はないで、隨分失禮ぢや御座いませんかね。
吉村　(ふと思ひついたやうに)　さうだ、石川さんが遊びに來て下すつたのは丁度よかつた。あの壺を持つて來て見て頂かう。(獨言のやうに云つて、椅子を離れて奥へ入る)
たみ子　それは汚らしい詰らない壺なんですか。
石川　壺と云つて、何か由緒のある壺なんですか。
たみ子　それは汚らしい詰らない壺なんですよ。吉村は商賣に手ちがひをしたためですか、神經病み見たいになつてゐますの。壺を掘出したのを金の茶釜でも掘出したやうに思つてこれから商賣にいゝ運が向いて來るやうに思つてるらしいんですから、石川さんは、吉村に力をつけておやりになるやうに、壺を御覽になつたら、何とか吉村の喜びさうなことを仰有つて下さいましな。馬鹿らしくお思ひになるでせうけれど。
石川　えゝ、……どうせわたしには、骨董品の鑑定は出來やしないんですがね。でも、そんなものをお掘出しになつたのは珍らしいですね。
たみ子　(突然に)　今は何時頃で御座いませうか。
石川　今七時が鳴つたばかりですよ。
たみ子　まだそんなに早いんで御座いますかね。わたし、もう夜が更けてるやうに思つてゐました。
石川　今夜は此方にお泊りになるんですか。
たみ子　さうしてはゐられませんのですが、美戸野に歸られちや留守番が御座いませんから……。

（吉村が汚い壺を提げて入つて來る。石川は、壺より吉村の不樣な態度に注意の目を向けてゐる。たみ子も夫の態度をのみ氣にしてゐる。）

吉村　これですがね。見て鑑定して下さい。たゞの壺ぢやないと思ふ。

石川　拜見しませう。

（汚い壺を手に取つて、橫にしたり逆さにしたり、指先でコツ／＼音をさせて見たりする。夫婦は、專門家の鑑定を見てゐるやうに敬意を寄せて左右から見てゐる。）

石川　可成り古い時代の者ですね。形も面白いぢやありませんか。

吉村　（喜んで）相當に價値のあるものでせうね。わたしなぞ無風流で一向分らないが、しかし形が面白い。こゝの凹んでゐるところがいゝ。何に使つたものでせうな。

たみ子　（も目を留めて）何に使つたものでせうね。（手に取つて、石川のしたやうに指先で叩いて見て）いゝ音がするぢやありませんか。美戸野は馬鹿ねえ。あの男なぞ、學問がないから、かういふ者を見ても價値が分らないのね。

吉村　何に使つたものでせう？　人間の骨を入れたのでもあるまいな。

たみ子　まさか。……屹度何か尊いものが入つてゐたんですよ。

吉村　もつと尊いものつて。……ぢや、誰れかの先祖が、子孫が零落した時の用に立つやうに、小判でも入れといたのかな。

たみ子　何にも入つてゐなかつたのは變ですね。

吉村　誰れかゞ中味を取つたのかも知れないよ。惜しいことをした。

石川　（考へ深さうに）人間の害になる何かを、おまじないに、この中へ封じて、土の中へ埋めたのかも知れませんね。西洋の昔のお伽噺には、惡魔を壺に封じたなんてことがありますよ。

吉村　（はじめて分つたやうに）成ほどそれだ。はじめて分つた。鬼か惡魔か、人間に仇をなすものをこの中に封じ込めたものに違ひない。（壺を取つて庭へ抛投げて）こいつを掘出して蓋を開けてから、美戸野はおれの側を逃出した。おれもお前も氣拔けがしたやうに萎びてしまつた。

たみ子　さう云へば、わたしもあなたに見せなくつていゝ者を、うつかり見せてしまつた。今日此處へ來た時のわたしは、こんなぢやなかつたのに。

石川　惜しいことをしましたね。その壺がおいやなら、わ

たしが頂いて行けばよかつたのに。
吉村　壺の格好がよくつても面白くつても、こんな緣喜の惡いものはお止しなさい。（さう云ひながらも惜しさうな目付で、壺の壞れた見入つて、獨言のやうに）見たところ雅致があるのだから、封をしたまゝで誰れかに賣りつけてやればよかつた。
たみ子　石川さんには、緣喜の惡い壺よりも、この寢臺椅子を、おいやでなけりや差上げませう。美戸野がゐなくなつたんですから、この椅子も不用になりましたよ。
石川（喜んで）それが頂ければ何よりですが、頂いてもよろしいんでせうか。
たみ子　わたしは大磯生活の最後の遺物をあなたにでもお讓りすれば、それで、わたしせい〳〵しますわ。わたし、外には何にも自分の物は御座いませんのよ。
吉村（苦笑して）美戸野の欲しがつてたものを石川さんに差上げるのか。お前はそれでいゝのかい。いろ〳〵に註文をつけて拵へさせて、長い間お前の氣に入つてたものだつたが。
たみ子　わたし、これでもう何にもないんです……石川さん、今直ぐにでもこの椅子を持つていらつしやい。……もうわたしのものぢやない。今からあなたのもんなんだから。（と云つて、椅子から立上つて、自分の着てゐる衣服を見下して）わたしは、着たつきりの無一物なんですよ。
吉村　その椅子が無くなると、今夜此處で寢ることが出來ないぜ。やはり今夜のうちに東京へ歸るつもりなのか。
たみ子　どちらでも。
吉村　おれと一しよに此處で一夜を明かしてもいゝつていふ氣になつたのかい。
たみ子　だつて、わたし無一物なんですもの。どうしようもないわ。
吉村　おれが東京へ歸るなら、お前も一しよに東京へ歸つてもいゝと思つてるのか。
たみ子　爲方がないわ。無一物のわたしは、生殘つた自分の身體はあなたにおまかせする外ないぢやありませんか。

（石川は居づらさうにして庭の方を見てゐる。）
たみ子　石川さんにこんなことをお聞かせして、可笑しな夫婦だと思つてゐらつしやるでせうね。
石川　いや、わたしこそお邪魔しました。（つと立上つて）わたしは、差迫つた書き物を今夜ぢゆうに仕上げなきやならないんですから、もうお暇しませう。
吉村　それは御勉強ですなあ。
たみ子　それでは、椅子は誰れかに賴んで、あとからお屆

けしませう。あなたのやうな方に使つて頂ければ、わたし大變悦しいんですわ。（最後の媚びをおくる）

石川　たゞ頂くのは何ですから、御不用なら、相當な代價で讓つて頂くことにしませう。……いづれ後ほど……（挨拶して出て行く）

吉村　（たみ子に向つて皮肉に）椅子に染みてるお前の身體のにほひを、あの男に嗅いで貰はうと思つてるのか。

たみ子　どうせそんなものなのよ。……あの椅子はあの肺病患者の臨終の寢床になるかも知れないの。

吉村　いろ／＼な文句を云つてあの椅子を造らせた時には、まさか他人の臨終の床に使はうとは思つてゐなかつたらう。……（調子を變へて）邪魔が入つて話が止切れたが、梅浦は今夜お前が來るのを待つてるんぢやないか。お前はあの電報を見ても打つちやらかしといていゝのか。（詰問するやうに云ふ）

たみ子　梅浦さんだつて、わたしのお金を待つてるんです。お金のないわたしが、こんな、雨で汚染の出來たやうな衣服を着て、青い顏してころげ込んで行つたのぢや、何で歡迎して呉れるものですか。

吉村　ぢや、今からは梅浦なぞに寄付かないで、おれと生死を共にしようと思つてるのだな。お前も氣まぐれで、云ふことが當てにならないよ。

たみ子　……わたし、長い間手頼りにしてゐたものを。わたしの生命同樣のものをあなたにうか／＼渡したんですもの。

吉村　なるほど。お前が長い間懷中に入れて育てゝゐた生命はこれなのだな。（かの證書をポケットから出してつく／＼眺める）

たみ子　その生命同樣の者をあなたに渡したつて、あなたからその代りの、お金以上に尊いものを授かるやうな氣持はしないのだから、心細いつたらありやしない。……いつそその證書をあなたの面前で破いてしまひたいわね。

吉村　（急いで證書をポケットへしまつて）これを破られてたまるものか。

たみ子　破りやしないわよ。（微笑して）それでも破いちやつたら、お金で買へないものが、わたし達に授かりやしないかと思つたゞけなの。

吉村　お前も愚に落ちたものだね。

たみ子　本當にさうだ。（ふと親しみを含んだ口調で）此處にゐるとも歸るとも、あなたの御自由になさるといゝわ。わたし、髮でも解付けて、顏でも洗ひませうよ。（頭に手をやつて）埃だらけで、見つともない樣して。（と呟く）

吉村　それがいゝ。おれも顔でも洗はう。美戸野の奴、あんなざまで飛出して、今時分どこへ行つてやがるだらう。

――幕――

安土の春（三幕）

時代
天正九年三月十日頃
人物
織田信長
柴田勝家
村瀨新八
堀內三郎、
四郎兵衞
小姓源吾
同七之丞
侍女夕月
同花野
同若菜
老僧

一

湖水に近い街道。路傍に松や柳が植ゑられてゐる。桃や櫻も咲いてゐる。旅人の裝ひをした四郎兵衞、（三十歲前後）荷物をおろして、大きな松の木に凭れて居眠りをしてゐる。

安土城內の侍女、夕月、（二十歲あまり）花野（二十歲以下）あたりの春景色に見惚れながら、うか〳〵と出て來る。

花野（ふと氣づいたやうに、不安らしく）こんなに遠くまで遊びに出てもよろしいのでせうか。お天氣はよし、あなたのお話があんまり面白いので、ついうか〳〵とこんなところまで來てしまつて。わたし、何だか恐ろしいやうに思はれますわ。

夕月（お轉婆らしい身振り）まあ、花野さんのお氣の小さいこと。大丈夫で御座いますよ。上樣が御參詣になつた竹生島は、こゝからは陸と海とで片道十五里もの遠いところぢや御座いませんか。たとへ、上樣が韋駄天のやうにお驅け遊ばしても、日のうちにお歸りなさる氣遣ひはありませんよ。それに、羽柴樣がお待受けなされて、賑かなお持做しがあるに極つて居りますから、今夜は、御小姓衆も御一しよに長濱に御逗留遊ばすだらうと思はれますわ。

花野　皆樣はさう仰有つて、大勢で御安心なすつて、桑實寺のお藥師樣へもお詣りになつたりしたのですけれど、

留守のうちは氣をつけろと、お殿樣がお出掛けの時に、大きな聲で岩淵樣にお吩咐けになつた、あのお聲が、わたしには氣になつてなりません。

夕月　それは、あなたが御城内の生活にお馴れなさらないからですよ、わたしなぞもはじめのうちは、お上のお聲を襖の外で聞いてさへ身震ひしたこともあつたのですけれど、馴れるとそれほどでも御座いませんわ。今の時世では、この御城内に住まつてゐるほど安心なことはないのださうです。わたしの叔母は朝倉樣に御奉公してゐたために、敗軍の飛ばつちりを受けて亡くなつたのださうですわ。今の時世では御威勢のつよい信長公のお側にゐるほど、氣丈夫なことはないと、父がさう申してゐました。あなたもお迷ひにならないで、此方に御辛抱なさいましな。

花野　さうは思つて居りますけれど……。

夕月　それに、上樣は、先日京でお馬揃へを遊ばしてから、大變に御機嫌がよろしいんです。竹生島からお歸りになつたら、幸若太夫をお召しになつて舞ひを御覽になる手筈になつて、わたしどもまでも見せて頂けるのですから、樂みで御座いますわ。

花野　（ふと元氣づいて）わたしはまだ世間で評判の幸若太夫の舞ひを一度も見たことは御座いませんの。

夕月　同じ太夫の舞ひでも、外で舞ふ時と、信長公の御前で舞ふ時とは、舞振りがまるで違ふと、お侍衆がよく申して居ります。上樣もお氣が向いた時には、御自分で小鼓をお打ちになつたり、女踊りをお踊りになることもありますのですよ。

花野　（微笑して）あのお殿樣が……。

夕月　（向うを見上げて）此處から見たお城の眺めの立派なこと。御覽なさい。高欄の擬寶珠が春の日できらめいて。……キリシタンのお說法で聞いた天國とかは、あんなところぢや御座いますまいか。

花野　はじめて父に連れられて此地へまゐりました時に、丁度この邊からお城を見上げてあのやうな立派な所に御奉公が出來たならと、わたし、どんなに喜んだか知れませんでした。

夕月　同じ町人でも、このお城下の町人ほど仕合せなものは御座いませんの。（ふと旅人に目をつけて、面白さうに）花野さま。御覽なさい。この旅商人がいゝ氣持で眠てゐますこと。……わたしだちも此處で休んで、往來の旅の人でも見て、ゆつくり歸ることにいたしませう。まだ日は高いし、今日を過ぎたら、いつまた外へ自由に出られるか分らないのですから。

（二人は松の木蔭に腰をおろす。旅人は薄目を開けて

二人を見る。）

（そこへ眉目美くしき村瀬新八（二十歳あまりの青年）瀟洒たる身裝をして現はれる。考へ事をしてゐる。）

夕月　新八さま、何方へいらつしやいました？

（新八、足を留めて訝しげに二人を見る。）

新八　あなたこそ、此處で何をしてゐなさる？

夕月　風は吹かず、花は眞盛りで、ホカ／＼と溫くなつて、こんないゝ日和は、一年のうちに、今日の外にまたとあるもので御座いませうか。

新八　それで、お前さまだちは、鬼のゐぬ間に生命の洗濯に出なすつたのか。鬼でも、今日のやうな長閑な春風に誘はれると、氣保養がてらの神詣でをする氣になるのだから。

夕月　鬼とは？……新八さまは何故そんなことを仰有る？

（夕月が顏色を變へると花野はおびえた顏をする。）

新八　あなたがさう思ひなさらなければ仕合せだ。（口調を變へて）わたしは、今日は愛智川べりをひとりで步いてゐました。花も花だが、堤には若草が萌出て、空には雲雀が鳴いてゐました。わたしは、堤の上に寢ころんで元氣のいゝ雲雀の聲を聞きながら、目を閉けて面白い夢を見てゐたのです。

夕月　面白い夢と仰有るのは？……あなたは岐阜の若殿樣のお供をして、甲州征伐にお出掛けなさる筈ぢや御座いませんか。目醒ましいお手柄をなさるやうに、戰場の夢を見てゐらつしやつたの？

新八　ハヽヽ。さう思ひたければさう思つてゐなさるがいい。……わたしが、城之助樣にお願ひして安土へ來たのは、この頃、寢ては夢醒めては思つてゐることを爲し遂げたいと思つたからなんです。ロームとかリスボアとかは、同じ下界の都でも、安土や岐阜とは違つて、人といふ人は神の子らしく睦じく暮してゐるさうな。

夕月　あなたも物好きな。南蠻へお渡りになりたいと思つてゐらつしやるの？　オルガンチノ和尚樣にしろ、フラテン破天連にしろ、鬼か獸のやうな身體してゐるぢや御座いませんか。あんな人ばかり住んでゐるところへ、あなたのやうな柔しい方がいらつしやつたら、頭から食はれてしまひますわ。異人の女子はまだ見たことはありませんけれど、さぞ雲をつくやうな大きな身體をしてゐるので御座いませう。

花野　夕月さま。いつまでもこんな所にゐて、人に見られてはいけませんから、もう歸りませう。（旅人の方を氣にする）

夕月　えゝ、もう行きませう。眞晝間、街道の眞中で新八さまとお話なんぞして、（ふと、氣にしだして立上つて）

さう云へば、先日、上様は、新八が岐阜から來たら直ぐに呼べと、岩淵様に仰付けになつてゐました。

新八　上様がわたしを？（顏を曇らせて）わたしのことは、誰れにも云はないやうにして下さい。

（二女出て行く。新八も物を考へながら行きかけたが、ふと、旅人に目を留めて。）

新八　お前さんは何處から來なすつた？

旅人（訊かれるのを待受けてゐたやうに）わたくしは甲州から漆桶をかついで京へ商ひにまゐりまして、これから歸るところなので御座います。

新八　甲州者だなどと、大きな聲で云ふものぢやないよ。お前も生命知らずだな。遠州の武田方の高天神の城も德川勢に攻めまくられて今日にでも落城してゐるかも知れないのだ。甲州征伐の用意は大びらに出來上つてゐるのだ。勝頼どのがいくらジタバタしても今となつては、籠の中の鳥も同然なのだ。お前はそんなところへ歸つたつて爲様がないぢやないか。第一甲州境は、四方八方道といふ道は塞つてしまつて、歸りたくも無事に歸られまいよ。

旅人（氣樂さうに）いや、それはわたくしもよう存じて居ります。先日、京の町で此方のお殿様のお馬揃へを拜見して居りますと、側にゐて世間話をしてゐた男が、甲州言葉で物を云つてゐましたので、わたくしは懷かしくなつて、故郷の様子をよく訊ねました。その男は信玄公御在世の頃の御威勢が影も形もなくなつたのに諦めをつけて、御奉公先から出奔して、いゝ御主人を搜しに京に來たと申して居りました。わたくしは、親も子も女房もないので御座いますから、世の亂れた危かしい山奥へ、わざ〳〵歸つて行かうと思つては居りません。今の世に住めば安土と、世間の人の申してゐますやうに、わたくしは、成らうことなら、このお城下で生活を立てゝ行きたいので御座います。……かう申してはあまりに不しつけでお叱りになるかも知れませんが、あなた様のお屋敷でどうも使つて頂く譯にはまゐりますまいか。どんな御用を仰付けになつても、骨身を惜まないで御奉公をいたします。

新八　おれなどを主人と頼んでは出世する見込はないよ。上様にお仕へ申したらよからう。お前は身體構へもしつかりして一くせありさうだ。戰場へ出ても役に立ちさうだな。（相手をよく見る）

旅人　御威勢の強い此方のお殿様にお目通りいたすのは恐れ多う御座います。お馬揃への折のお姿を一目拜見しただけで、目がつぶれさうに思はれました。

新八　ハヽヽ。皆んなが衣服で脅かされるのだ。……前代未聞の馬揃ひの儀式だつて、大きな虎が綾や錦で着飾つ

て、小さな虎を引連れて驅廻るだけのことだ。（獨言のやうにさう云つてから、親しみをもつた口調で）世間では何と云つてゐるか知らんが、上樣は氣さくな方だ。お前の面つきを一目御覽になつたら、こいつ役に立つ奴だと、餘計な穿鑿をなさらないで直ぐにお召抱へになるかも知れない。さうしたら、お前も羽柴筑前どののぐらゐに出世しないとも限らないな。ハヽヽヽ。

旅人　何ぼわたくしが世間知らずの山猿でも、そんな痴人の夢見たやうな大それたことを考へるもので御座いませうか。さつき、ホカ／＼した天道樣のお光を浴びて、いい氣持で夢を見て居りますと、お女中樣のお話のうちに、あなた樣は、岐阜のお殿樣のお供をなすつて、甲州征伐へお出ましなさるとか承りましたが、若しもそれが本當で御座りますなら、わたくしをあなたのお伴になされて下さいませ。お草履を持つなり、馬の轡を取るなり。何なりと生命をかけて御奉公をいたします。

新八　さうして、虎の威を借りて、自分の生れ故郷を荒らさうと云ふのか。（相手が氣にするのを見て）なに、おれはお前を咎めるんぢやないよ。昨日まで莫大な知行を頒けて吳れた主人に、今日は自分の都合で弓を引くのは、當世有りうちのことなのだ。それはそれでいゝのかも知れないな。……しかし、旅の人。武家奉公は、まあ止しにした方がよからうぜ。御主君から相應にお目を掛けられてゐるおれでさへ、この大小の人斬刀は抛出して、戰爭騷ぎのないところで暮したいと思つてゐるのだよ。土百姓や素町人から、一國一城のあるじと成上つた人を、傍で見てゐると、あれこそ人の中の人だと羨しく思はれるであらうが、さて成上つて見ると、さま／＼な苦勞があるのだ。あの陽氣な羽柴どのも戰場で、水攻火攻の掛引に智慧を絞るよりは、お上の御機嫌を害ねまいと、その屈託に骨身を削つてゐられるのだ。德川どのも、虎狼の牙齒を退けるためには、惣領の信康どのに無理往生に腹を切らせた。お前も武家奉公なんぞ思立たないで、何處か安穩な土地を見つけて、こつそり生活を立てることにしろ。あの山に光つてゐる七重のお城も、いつまであのまゝ立つてゐることやら。四日市の濱で見える和のわたり（蜃氣樓）見たいなものだ。

旅人　安穩な土地を見つけろと仰有つても、安土の町の外に、何處に安穩な土地が御座いませうか。

新八　小田原か山口はまだ榮えてゐるさうだが、それとてもいつまでも安穩ぢやあるまいよ。大きな虎や小さな虎があばれてゐる世の中だ。おれも安穩な土地を搜さうと思つてゐるのだが、ローマかリスボアか？……（夢見るやうに天の一方を見る）

旅人　さつきからあなた樣の仰有るやうなことを承つたことは御座いませんので何とも合點がまゐりません。……わたくしのお願ひをお聞屆け下さらぬのなら、外の奉公口を搜しませうが、戰場へ出て氣おくれのするやうなわたしぢや御座いません。わたくしの祖父も父も、名もないもので御座いましたが、武田家御先代のお伴をして、人並の働きはいたしました。

新八　(微笑して)　それはえらいな。それなら、信長公の竹生島詣のお歸りを此處でお待受けして、直々にお願ひするといゝ。

(そこへ堀内三郞(新八と同年輩で、彼れよりは質素な服裝をしてゐる)が入つて來る。)

三郞　新八とのは此方に來てゐられたのですか。キリシタンの學校の建築も大分墓取つてゐるから、それを見にお出でなされたのですか。建築が落成したら、あなたは御入學なさるのであらうと噂をいたして居りました。

新八　安土にセミナリオが建つたら、早速入學して異國の學問を修業したいと思つて、城之助樣にお願ひしてゐたのだが、それはもう止めにした。わたしは大望を胸に持つて、岐阜から出て來たのだが。……そんなことをあなたに話しても爲方がないな。……それよりも、此處にゐる旅の人は奉公口を搜してゐるのだが、あなたは、お世話しておやりなさらぬか。

三郞　いや、此頃は諸國からいろ〳〵な奴がやつて來る。今に安土から八幡へかけて、野にも山にも、人間がウジヤウジヤするやうになるであらう。(旅人を見詰めて)しかし新八どの。この男はたゞの商人ではありますまい。油斷のならない面をしてゐる。

新八　たゞの商人でも、何處かの落武者でも、どちらでもいゝではないか。

三郞　淺井か朝倉の殘黨が、旅商人に姿を窶して、信長公を附狙つてゐると思つて見ると一興だが。(刀を拔いて、旅人の前へつきつけて)貴樣は亡君の恨らみを晴らさうと企んでゐるのか。

旅人　これは飛んでもないことを仰せられます。(警戒しながら)こちらの旦那樣は、わたくしの身の上をよく御存じなんで御座います。

新八　(笑つて)　心配するな。戲れだよ。……豫讓や景淸のやうな男は昔噺の中の人物ぢやないか。しかし、それだから、上樣もお仕合せだ。死んだ主人の恨みを返したい男があちらにも此方にもあつた日にや、信長公が首を百も持つてゐらせられても足りないくらゐだ。……三郞どの、脅かしはもうお止しなさい。

三郞　わたしはこの土地にすつ込んでゐたゝめ、暫く血の

にほひを嗅がなくつて退屈してゐたのです。春の日をノラリクラリ遊暮したゞけで、このまゝ屋敷へ歸つちや興がないと思つてゐたのだが。(刀を鞘に收めて)新八どののお言葉がなかつたら、斬り榮えのする此奴を、見のがしてなるものぢやない。

旅人　わたくしは決して迂散な者ぢや御座いません。どうぞお許しなすつて下さいまし。

(旅人は二人に向つて恭しく挨拶して、荷物を背負つて急ぎ足で出て行く。)

新八　可愛相に。(旅人の後を見送つてゐたが、何かを見つけたやうに當惑する)

三郎　春の日長に毎日因循としてゐちや退屈でなりませんよ。武田征伐には是非ともお供しようと思つて居ります。

(そこへ、侍女若菜(二十歳ばかり)が道を急いで入つて來て、二人の青年と顏を見合せる。)

新八　若菜どのはお一人で、どこへ行つてゐなすつた? 今日は若い女が供をも連れないで、よく出歩いてゐるから驚く。

三郎　天下泰平の日出度いしるしでせう。それに、今日はお上の御不在をいゝ汐時にして御城内も奥御殿はガラ空きで、御女房だちも山をお下りなさらぬまでも、二の丸までお出でなされて、春の日を樂んで居られます。

若菜　わたくしは、皆様と御一しよに桑實寺へお詣りしてゐました。只今、長老様が皆様のために御説法をなすつてゐらつしやいます。わたし、何だか聞きづらく思はれましたから一人でそつと聽聞の座を脱出してまゐりました。

新八　それでは、あの梅干坊主が、黴臭い佛の道を説いて、廻らぬ舌でキリシタンの毒口を利いてゐたのだな。若菜どのもなぜ桑實寺などへお詣りなされた? 先日のおたよりでは、オルガンチノ様のお導きで、まことの道が朧ろに分りかけたと云つてゐられるではないか。それを、わたしはどれほど喜んでゐたか知れないのに。

若菜　わたくしの心が弱う御座いました。……わたくし、外の方のやうに、氣保養にお寺まゐりをいたしたのでは御座いませんの。新八さまは若殿様が御召連れになつて、甲州の征伐にお出でなされると、皆さまがさう仰有つてゐましたから、お身體にお怪我のないやうに、人に傑れたお手柄をおあげ遊ばすやうにと、一心にお祈りしたので御座います。

新八　(にが〳〵しげに)若菜どのは何を云はれる? 古い木の株や石ころで作つた佛に祈つて御利益があると思つてゐられるのか。愚かなことだ。

(三郎は二人の睦じい様子を羨ましげに見てゐる。)

若菜　長老樣のお說法を承つてゐるうちにふとわたしの迷ひに氣がついて、急いで逃げてまゐりました。どうぞ勘忍して下さいまし。

新八　それに、わたしは、戰場へは行くまいと思つてゐるんです。春の光のやうにまことの神の光に包まれてゐる國をたづねて行きたいと思つてゐるんです。

若菜　それはどこで御座いますの？

新八　……ローム、リスボア、ヴェネチヤ、（あこがれてゐるやうに云ひ）高麗大明天竺よりも遠いところで、女子などの行けるところぢやないんです。

若菜　（悲しさうに）なぜ、さういふところへいらつしやいますの？

三郎　新八どのは南蠻へお渡りにならうと思つてゐられるんですか。上樣の天下統一の大事業を見ようとはなさらないで……。

（そこへ、織田信長（四十八歲。黑い南蠻笠をかぶり、唐錦の服裝にて虎の皮の向はぎを腰に當つ）駿馬にまたがつて氣をせはしく入つて來て、若菜と新八とを見ると、馬を留める。三人は愕然として、匐ひつくばふ。）

信長　（眉を顰めて）女郎は此處へ何しに來た？　新八、うぬも、おれの目通り許さぬさきに、どんな面してこの街道をほつついてゐた？……どいつも面を上げろ。

（三人は恐る〳〵顏を持上げる。）

新八　今朝參着いたしましたが、上樣は御他出と承はりまして。

信長　それで女郎を引張出して、氣儘な遊びをしてゐるのか。

（彼れはつか〳〵と新八の側へ寄つて、鞭を上げて、その顏を打つ。）

新八　（痛みを忍びながら）若菜どのは桑實寺へ參詣せられて、只今偶然此處で行合ひましたので御座います。

信長　なに、桑實寺へ？

三郎　大奧の方々がお揃ひで桑實寺へお詣りになつて居ります。

信長　不埒至極だ。三郎、其方はこれから桑實寺へ行つて、一人殘らずふん縛つて來い。坊主どもが留立てしても用捨するな。急いで行け……此奴等二人はおれが此處で成敗する。

（三郎は、ハッと答へる間もなく、一さんに、後をも見ずに驅けて行く。）

（信長は馬から飛下りるや否や、刀を拔いて、すでに半ば死んだやうな若菜をさきに、新八をも、大根でも切るやうに斬倒す。）

（斬られると同時に、「ジエス、キリスト」と呼ぶ新八

の哀切な聲が聞える。信長その聲に耳を留めてあたりを見廻す。そして、刀にしたゝる血汐を振つてゐるところへ、かの旅人が、松の木蔭から恐る〳〵近づいて、死骸の上衣を取つて刀を拭はうとする。)

信長 (聲に心惹かれてゐた彼れも、ふと旅人に氣づいて)誰れだ?

旅人 御奉公いたしたいと存じまして、上様の御歸城をお待受申して居りました。

信長 さうか。……死骸を片付けて後から隨いて來い。

(そこへ、二三人の小姓、馬に跨つてへと〳〵になつて入つて來る。)

信長 オヽ、源吾、七之丞。急いでおれより先へ歸つて、城外へ遊びに出てゐる女子どもをふん掴まへて、珠數つなぎにくゝつて置け。……(獨言のやうに)こんなことがあらうと思つて、長濱の饗應を打やつて、馬を飛ばして戻つて來たのだ。

二

安土城內。信長の居室。襖には瓢簞から駒の出た繪が描かれてゐる。

銀燭まばゆきなかに信長は寛ろいだ服裝にて、夕餐の膳に向つて、盃を取つてゐる。

小姓、源吾、七之丞など傍に侍す。

信長 其方だちも今日はくたびれたであらうな。

源吾 ハイ。……上様のお姿を見失つてはならないと思ひまして、無我夢中で驅けました。

信長 おれもやがて五十になる筈だが、まだ若い時分と異はないよ。今日は一つ根氣だめしと思つて、十里の道を一息にやつゝけたが、左程に疲勞もしなかつた。二十年前に桶狹間へ驅けつけた時のことが思ひだされる。……思ひだすと云へば、今日の歸り道に街道で遊んでゐた百姓の子を二人ばかり踏潰したやうに思ふが、其方だちは氣がつかなかつたか。

七之丞 わたくしも無我無中で驅けましたから、何處の村であつたか、見分けはつかないので御座いますが、百姓共が大勢で、血みどろになつた子供を抱へて騷いで居りました。それでは、あの子が上様の御乘馬の蹄をお汚し申したので御座いませうか。

信長 人間は脆いものだな。(ちよつと感慨に打たれたやうに云つて、小姓に酌をさせて)おれが長濱泊りを止したために、其方だちは御馳走を食べ損なつて殘念であらうな。秀吉のことだから、氣の利いた料理を拵へて待つてゐたであらうのに。……そのかはり、このおれの膳の物を頒けてやらう。

（信長は箸を取つて、皿の肴をはさんで、源吾に突きつける。源吾は、恐縮してゐる。）

七之丞　わたくしどもは、後ほど御膳部のお餘りを頂戴いたしたう存じます。

信長　馬鹿な奴だ。さあ手を出せ。小笠原流とかの禮儀作法を心得てゐるつもりか。馬鹿め。人間が食ひたくつて食ふのに儀式も作法もあつたものか。おれが許す。肴を摑んで食へ。

（恐る／＼差出した二人の手へ、肴を與へる。二人は謹ましやかに食べる。）

信長　將軍らしく、公卿らしくと、酒を飲むにも氣取つてゐた奴等は、おれの馬の蹄にかけると、今日長濱街道で踏潰した餓鬼見たいなものだ。

（そこへ、三郎が入つて來て平伏する。）

三郎　仰せつけ通りに、桑實寺詣りの御女房だちを、召捕つて御城内へ連れて、歸りました。

信長　中庭へ出して、一人殘らず首を打て。

三郎　かしこまりました。……あの、桑實寺の長老様が、お願ひの筋があつてお目通りいたしたいと、お次の間に控へて居りますが、いかゞ計ひませう。

信長　枯木のやうな坊主に會ひたくはないが、來てゐるのなら、ちよつと會つてやらう。そこへ顔を出せと云へ。

三郎　ハイ。

（三郎が行きかけると。）

信長　坊主にはかまはずに、其方は早速女郎どもの成敗に取りかゝれ。一刻も猶豫はならんぞ。

三郎　仰せつけ通りにいたします。

（三郎出て行く。）

信長　（小姓達に向ひ）其方どもゝ腕試しがしたければ、三郎の手助けをして、罪人の首を斬つて來い。

源吾 }
七之丞 }　ハイ。（箸へたゞけで座を立たない）

（そこへ、老僧が球數を手にして入つて來ようとする。）

信長　そこでよい。用事を聞かう。

（老僧襖の外で平伏する。）

老僧　上様のお慈悲をお願ひ申したう存じます。

信長　それはならぬ。重ねて申すな。

老僧　せめて、皆様のお生命だけはお助け下さいますやう、愚僧の身にかへてもお願ひ申します。

信長　くどく云ふな。

老僧　皆さまは、上様の御武運を佛に祈願してゐられました。その心根をお酌取り遊ばして。

信長　タハケたことを申すな。おれの武運か木や石に刻ん

だ佛と何の關係がある？　おれはおれの力で、手向ふ奴を片ぱしから征伐して來たのだ。其方たちに現世の勝利や死後の冥福を祈つて貰はうとは、夢にも思つてゐないのが、其方にはまだ分らぬのか。うつけ者め。

老僧　愚僧の身につきましては兎に角。……上樣も竹生島へ御參詣遊ばした當日で御座いますから、か弱い女性の方々を御成敗遊ばすのはいかゞかと存ぜられます。

信長　何だ〳〵。おれに意見するのか。おれは怒りたければ怒り、斬りたければ斬るのだ。それがどうしたといふのだ。

老僧　左樣なれば、罪をお恕しなさりたく思召してお恕し遊ばしますやうに。

信長　くどい。……それほど女郎どもを庇いたければ、其方も一しよに冥土へ行つて、極樂へでも淨土へでも、勝手なところへ連れて行け。……源吾、この坊主を引立てて、三郎の手に渡して首を打たせろ。おれの目ざはりだ。早く引立てろ。

（源吾、直ちに行つて、老僧を捉へる。）

源吾　御上意だ。お立ちなされ。

（邪慳に老僧を引張つて出て行く。）

信長　（ふと耳を留めて）七之丞、あれを聞け。中庭から泣喚く女子の聲が聞えて來るではないか。……人間は脆いものだ。（盃を口にしたが前へ抛出して）酒がぬるくなつた。溫めて來い。

（七之丞出て行く。信長、何かの聲を拂ひのけるやうな態度をする。）

信長　（獨言）新八ももうこの世にはゐないのだな。……人間は脆いものだ。

（そこへ源吾、入つて來る。）

信長　坊主は三郎へ渡したか。

源吾　たしかに三郎どのへお手渡し申しました。

信長　あんな枯木のやうな坊主は、斬つても血は出まいな。

源吾　柴田修理亮樣が只今參着いたされました。明朝お目通りがかなひませうかとお訊ねになつて居ります。

信長　（喜んで）修理亮が來たか。丁度いゝところだ。直ぐに呼べ。……それから膳部は、先づ次の室へ下げて、其方達はおれが呼ぶまでそちらで休息しろ。

（源吾、膳部を持て出て行く。）

（信長、長押から槍を取下して、幾たびかしごく。）

（そこへ、柴田勝家（五十二歳、無骨な身裝）が小姓に導かれて入つて來て槍の手なみに感心しながら座に就く。）

信長　よく來た。（槍を收めて）近う寄れ。今まで京で遊んでゐたのか。

勝家　上樣の御威光をもちまして、京の町も靜謐になりましたので、此たびは、罷出ました次手に、神社佛閣名所古跡の見物をいたしました。それよりも御馬揃へのお催しは前代未聞言語に絶した御盛況で、老後の思出、これに過ぎたことは御座いません。上樣の御威光によつて、天下がかやうに泰平に相成りましては、わたくし如きは、もはや御馬前の御奉公をいたす場合もなくなりました。先日拜領いたしました姥口の釜に湯を沸らして、北國の遲櫻でも眺めて、この年までの手柄話でも若武士に聞かせることにいたしませう。

信長　ハヽヽ。其方は愚直だから、そんなことを云つてゐられて氣が樂だ。何が天下が治まつてゐる？

勝家　高天城はまだ開城いたしませぬか？

信長　いや、昨日家康から早打を寄越して、あの手剛い城も今日か明日かの生命だと知らせて來た。あの城が潰れたなら武田四郎も翅をもがれた小鳥同樣だ。あの武田の小悴なぞ、おれは最初からさして心に掛けてはゐないのだが、中國の毛利勢には一骨折らされさうだ。四國には長曾我部がゐる。九州には島津が居る。腹に一物ある高野の坊主どもの始末も何とかしなければならない。（焦込むやうに云つて）北國の景勝などは其方に任せてゐても安心だが……。

勝家　上樣もお心弱うおなり遊ばしましたな。（微笑する）

信長　何だと。

勝家　今日の上樣の御威勢では、毛利如きは春の日に照らされる殘雪のやうなものでは御座りませぬか。（獨言のやうに）羽柴め、幸福な男だ。中國征伐を一手に引受けやがつて。

信長　筑前には筑前の役目があるのだ。其方はおれに代つて北國を押へてゐて吳れ。（勝家の顏を見詰めて）つい忘れたが、修理亮は今年幾歳になる？

勝家　五十二歳に相成ります。

信長　さうだつたな。おれも人間の定命が近くなつたのだ。

勝家　でも、上樣は十年の昔と今日と少しもお變りにならないぢや御座いませんか。わたくしなどはこの通り頭が白くなりました。……でも、元氣だけは昔と變らないつもりで御座いますが。

信長　おれも元氣だけは、今時の若い奴等には負けないつもりだが、年齡は年齡だ。おれも夢幻の世の中に、五十間近まで無事に生きて來たのだが、年齡のことを考へると、何となく氣が焦かれる。毛利や長曾我部をわが膝の前に匐ひつくばはせるのは、あと一年か二年か。おのれが定命に達するまでには日本統一の大業も略目鼻がつくと、おれは信じてゐる。……しかし、修理亮。このこと

は今日はじめて其方に話すのだが、おれは日本統一だけで滿足は出來なくなつてゐるのだ。高麗や大明に馬を驅けてゐる夢を、おれは每夜のやうにこの頃見てゐるのだ。

勝家　（驚いて）では上様は、御馬揃へを異國の都でお催しなされたいので御座いますか。

信長　異國と云つても、高麗だけではない、明だけではない。先日も愛智川べりへ鷹狩に行つた歸りに南蠻の寺へ寄つて、伴天連どもの異國話を聞いたので、ひどく面白い思ひをしたのだが、その時から、南蠻の國々をも殘らず、おれの手のうちに收めたくなつたのだよ。

勝家　（呆れて）わたくしには、南蠻の國々は、佛者の說かれる十萬億土と同樣な遠い所にあるやうに思はれます。

信長　遠くも近くも下界の中にあるのぢやないか。

勝家　わたくしども雪の中に埋つてゐる田舍武士は、異國のお宗旨は薄氣味が惡いやうに思はれますが、上様には御信心遊ばすので御座いますか。

信長　日本の佛も異國の神も、おれに信心が出來ると思ふのか。しかし其方も明日にも伴天連に會つて聞いて見ろ。南蠻の坊主どもの話は、日本の坊主どもの古くさい話よりや、どれほど面白いか知れやしないぜ。

勝家　城之助樣や三七樣をはじめ、當地の若い方だちは、伴天連のお宗旨に凝つてゐらせられると承りましたが、それは本當で御座いますか。

信長　若い奴等は直ぐに珍らしい者にかぶれるが、淺はかなものだ。……おれは伴天連の說法はたびたび聞いた。……聞いてゐると、おれはそのジュースといふ異國の神と角力を取つて見たくなつたのだ。異國の神の前に匐ひつくばつてお慈悲を願ふなんて以ての外だ。

勝家　それはわたくしも御同意申上げます。角力なら、わたくしとても異國の神と取組んで負けることぢや御座いません。（快げに笑ふ）

信長　（快げに笑ひ）おれも今日はうかと夢話をしてしまつたな。……さうだ。明日は其方が歸國いたすのなら、別れに何か御馳走しよう。溫い春の宵だ。誰れかに舞はせて見せようか。

（信長は手をたゝく。源吾入つて來る。）

信長　膳部を調へて來い。修理亮にも相伴をさせるのだから、その用意を吩咐けて來い。それから酒興を助けるやうに踊り子をも呼べ。三郎はどうした？　死骸の後片附は他の者にまかせて、直ぐに此方へまゐれと云へ。骨折賃に鬼柴田の酒の相手をさせて武勇にあやからせてやると申傳へよ。

（源吾出て行く。）

勝家　御城內に何か變事があつたので御座いますか。

信長　なに、些細なことだ。其方などに話すほどのことでもないよ。

勝家　今日は御城内は何となくお淋しいやうでは御座いませんか。

信長　この頃の京の町の賑はひを見た目には、安土の町はいくらか淋しく見えるのかも知れないな。淋しいと云へば、おれは何ぼ歳を取つても、樂隱居して公家衆のやうに歌でも作つて、泰平を樂しむ氣持にはなれないよ。一日でもぢつとしてゐると氣が滅入つて來る。今日も長濱から竹生島まで五里の海上が退屈でたまらなかつた。小波も立たない鏡のやうな湖水は、見てゐても退屈なものだぜ。龍巻でも起ればいゝと思はれたよ。だから、南蠻の坊主どもが、世界のはてから萬里の波濤を凌いで來た話を聞くと、おれの心が湧立つのだ。

勝家　上様にお目通りいたすたびに、勝家の全身にも活氣が湧いてまゐります。

（そこへ、三郎が入つて來る。）

信長　罪人どもの首は刎ねたか。

三郎　仰せの通りいたしまして御座います。死體は右近どののお計ひで、御新參の四郎兵衞どのなどに運ばせて、桑實寺へ埋葬いたすことにいたしました。

信長　左様か。（輕く首づいて）さつきから其方に訊ねたいと思つてゐたが、新八と若菜とは云ひかはした仲でゝもあるのか。隱さずに云つて見ろ。

三郎　わたくしはよく存じませんが、今日の二人の話を傍で聞いて居りますと、二人の間には何か譯があるやうにも思はれました。

信長　おれもあの時、咄嗟にさう睨んだのだ。二人はどんなことを云つてゐたか、修理亮への御馳走に話して聞せたらどうだ。今時の若い男女の戀話は、おれや修理にも皆目見當がつかないのだよ。

勝家　新八とは村瀨左門の遺子のことで御座いますか。

信長　さうだ。城之助がおれにないしよで引立てゝゐた奴だ。

勝家　文武兩道に傑れてゐると承りましたが。……その若者は御城内へまゐつてゐるので御座いますか。

信長　おれが城之助に命じて新八を呼寄せたのは、戰場へ引連れるためではなかつた。新八には敦盛の舞を舞はせたかつたのだ。あれが舞つたなら、おれが鼓を打つてつかはしたのに。幸若太夫や清洲の友閑は、いつ舞はせても藝はうまいが、新八なら、敦盛か生れかはつて眼前に現はれたやうであらうな。

勝家　新八どのは舞も勘能なので御座いますか。

信長　知らなければ習はせる。敦盛の舞なら太夫の手をか

るまでもない、おれが傳授してやる。……三郎、其方のまづい面では、牛若にも敦盛にもなれまいな。人の戀話を指をくはへて立聞きしてゐるのが相應してゐる。（嘲笑をもらす）

勝家　武士たるものは顏形などどうでもよろしいでは御座いませんか。三郎どのも、上樣へさうお答へなさい。

信長　修理は自分の身に引くらべて、左樣なことを云つてゐる。其方も大勢の美女や少人を弄んで來たのであらうが、當世の若い男女のやうな、まことの戀の情は知らないだらう。

勝家　これは異な事を仰せられる。勝家とても戀の口說は身に染みて心得て居ります。

信長　これは面白い。話して見ろ。鬼柴田の戀物語は面白い。

（そこへ、小姓たちが酒肴を運ぶ。）

信長　皆んな聞けよ。殿軍にかけては天下に類のない鬼柴田が、戀物語を聞かせてくれるぞ。

（信長、小姓をして勝家に酒をすゝめさせる。勝家鯨飲す。）

勝家　（生眞面目で）まだ三郎どのくらゐの若さで御座いました。はじめて上洛いたしました時、供をも連れず、吉田山あたりを遊び歩いてゐましたところ、上﨟とは思はれませぬ女房が、白綾の肌着に平絹の袴を裾短かくつけて、薄色の短册をさげて、小童を一人連れて宮司の家へまゐるのを見つけました。あまり床しく思はれたので、その女房のあとを隨けてまゐりますと、女子の方でも艶めいた目でわたくしの方を見返りました。わたくしは目はまばゆく胸は騷いで、心も空になりました。流石は京の町だ、那古野や清洲の田舍町とは違ふと思ひましたが、その女房の姿は今でもまざ〳〵と、わたくしの目さきにちらつくので御座います。

信長　女子は京の女子に限るのだ。それから其方はいかゞいたした。その女房と戀仲にでもなつたのか。

勝家　いや、それは勝家一生の心殘りのある思出となりました。その日はうか〳〵と宿へ歸り、あくる日から每日、吉田山あたりを夢心地でうろつきましたが、再び行會ふことは御座いませんでした。

信長　權六も腑甲斐ない奴だな。掟も法度もない市街にゐて、何の遠慮が入るものか。なぜその女房を引かついで戻らなかつた？

勝家　恐れ入りました。

信長　權六と云つてゐたその頃の勝家は、おれの弟の信行に加擔して、おれを殺さうとしたのではないか。どんな身分の女であらうとも、女の子の一人や二人、奪つて來

るのを詮議するには及ぶまい。……三郎などは知るまいな。この勝家も、三十年の昔にはおれに手向つて、おれを九死一生の危い目に會はしたのだぜ。おれは負けなかつた。おれが勝つたからこそ、勝家も頭を剃つて詫びに來た。母上のお取做しで罪を許して、おれの臣下に加へてやつた。それが今では織田家第一の忠臣になつてゐるのだから不思議ではないか。……三郎、其方だちはまだ若いから知るまいが、これが世の中だ。おれが强かつたからだ。おれに力があつたからだ。おれの力にヒヾが入つたら、おれも最後だ。おれの足許からでも敵が飛出して來るのだ。

勝家　若い昔のことを仰せられてはわたくしの身體にも冷汗が流れます。大罪はお許し下された上に、三十年の間、須彌大海にもたとへられぬ御高恩を蒙つたわたくし、未來永々、弓矢八幡、日本はおろか、南蠻の神にまで誓をかけ、上様に忠勤を怠ることは御座いませぬ。この勝家を筑前などと御同樣に御覽遊ばされては、勝家も御恨みに存じまする。

信長　陳腐な臺詞は止めにしろ、おれは誓言はきらひだ。たつて誓ひたければ、織田信長にかけて誓へ。佛も神も踏みにじつた信長の力にかけて誓へ。力のあるうちは神と角力の取れる信長だ。力の衰へた信長は、藁人形の内大臣だ。鳥おどしにしきやなりやしないよ。ハヽヽヽ。室町の案山子將軍の喜びさうな臺詞は止して、今夜はうんと飲め、おれが酌をしてやらう。醉つて槍踊りでも踊つて見せろ。

（信長、勝家に酌をする。勝家感謝して受けて快く飲み干す。）

勝家　冥加にあまるお持成しのお禮として、わたくしが無樣な舞ひの手振を御覽に入れませう。踊り子だちの仕度の出來るまでのお座興として御覽下され。

信長　修理亮の舞ひは珍らしい。舞つて見せろ。

勝家　ハツ。

（勝家、立つて謠ひながら舞ふ。）

「この世はつねの住家にあらず、草葉に置く白露、水に宿る月よりなほあやし。……人間五十年、化轉の内をくらぶれば夢幻の如くなり。一度生を受け滅せぬもののあるべきか。これを菩提の種と思ひ定めざらんは口惜かりき次第ぞと……」

（信長、感に堪へ恍惚として見てゐたが、ふと。）

信長　そこで止めろ。それで充分だ。

（勝家舞ひを止めて平伏す。）

勝家　見苦しきものを御覧に入れました。

信長　いや面白かつた。其方がかやうな隠し藝を有つてゐようとは思ひもつかなかつた。

勝家　上様の敦盛の舞を見やう見眞似に覺えましたので御座います。

信長　（恍惚として）「人間五十年、化轉の内をくらぶれば夢幻の如くなり」（と謡つて）一たび鞭を上げると、百萬の人馬を集めることの出來るおれも、明日とも云はず、今夜のうちに誰れかに寢首を掻かれないともかぎらないのだ。（と云つて、座中をじろりと見渡して、三郎に目を留め）三郎、其方たちは修理亮の舞ひを見てゐたのであらうが、おれは新八の敦盛の舞を見てゐたつもりだ。其方はあの時、なぜ新八と若菜とをおれの目から遮らなかつた。新八は其方を恨んでゐるぞ。人の寢首でも掻きさうな面をしてゐやがつて。

（長信は、さう云ふや否や、つと立つて、長押の槍を取りおろし。）

信長　この鋒先を、除けられるなら除けて見ろ。其方生死の境だ。

（三郎、突きつけられる槍の穂先を外して。）

三郎　御免遊ばせ。上様の御馬前で討死いたすまで、三郎の生命を三郎にお預け下さいまし。

信長　よく云つた。今夜は許してやるから、勝家にあやかつて、戰場で功名をしろ。

勝家　（不思議さうに）新八どのはどうかしたので御座いますか。

信長　あの男はもうこの世にはゐないのだ。……人間は脆いものだな。

勝家　（合點の行かぬらしく）御意に御座います。

信長　（小姓たちに向ひ）今夜は踊りは止めにするから、さう云つて來い。勝家の舞だけで澤山だ。

——幕——

三

その翌日の早朝。

城内の庭園の一部。

四郎兵衛、仲間男らしい新しい服装をして、庭を掃いてゐる。

そこへ、三郎が出て來る。

四郎兵衛　お早う御座います。

三郎　お前こそ馬鹿に早く起きて働くぢやないか。忠實な働き振りが上様のお目に留つて、今に出世するだらうよ。

四郎兵衛　わたくしなんぞ、大した望みは持つてゐやしません。寒い思ひ、ひもじい思ひをしないで、今日がおく

れゝば、それで滿足して居ります。

三郎　口先ではそんなへり下つたことを云つてゐても、腹の中では、天下を望んでゐるんだらう。しかし、お前は運がよかつた。昨日いゝところで上様のお目にかゝつて。

四郎兵衞　さう思つて喜んでは居りましたが、何だか寢醒めが惡う御座いますよ。あの時新八さまとかは、わたくしに親切に御意見を聞せて下すつた上に、わたくしがすんでのことにあなた樣に生命を取られかけたところを助けて下すつたのですから、わたくしに取つてはあの方は大恩人なので御座います。その大恩人が、どういふ罪があるのか存じませんが、上様のお手打になつたのぢや御座いませんか……。

三郎　本心からさう云つてゐるのか。どうも眞に受けられないよ。おれが刀を突付けて脅かした時に、お前は上べだけは驚いた風をしてゐたが、腹の中は泰然自若としてゐた。おれはお前の度胸を見屆けたつもりだ。

四郎兵衞　ハヽヽ。それは、今の時世に、刀や槍の光に目が眩むやうぢや生きてゐられませんからな。……しかし、今後はあんな怖い脅かしは、眞平御免蒙りますよ。

三郎　昨日の無禮は謝るよ。おれも街道でお前に會つた時には、血のにほひに饑ゑてゐたのだが、天罰覿面、いやな首斬役を仰付かつた上に、自分の土手つ腹まで、槍の穗先で抉られようとしたのだ。それで、昨夕は變な夢に襲はれ通しだつたが、朝の冷つこい風に當ると、おれの頭もやうやく自分の頭のやうになつた……あ、何處かで鶯が鳴いてゐる。

四郎兵衞　今日もいゝお天氣で御座いますな。此處から湖水を眺めますと、繪のやうに思はれます。

三郎　たとへ繪のやうでも、おれだちは此處の生活には厭いてしまつた。あいたのは今日にはじまつたことぢやないが、今日は格別お城住ひがいやになつたよ。

（萎れてさう云つてゐるところへ、花野が入つて來る。）

花野　三郎さま、上様がお召しで御座います。

三郎　え。上様はもうお目醒めになつたのですか。

花野　三郎を呼べと、お寢間のうちで仰せられたさうです。

三郎　早朝わたくしに御用のあつた例はなかつたのだが……。（訝しげに思ひながら入つて行く）

花野　（四郎兵衞に近づいて）あなたは昨日街道でお荷物をおろして居眠りをしてゐた方ぢやありませんか。

四郎兵衞　左樣です。あなたが今一人のお方とお話をなすつていらつしやるのを、居眠りをしながら、いゝ氣持で承つて居りました。

花野　あの時の旅の方が御城内に御奉公をなさらうとは思

ひませんでした。

四郎兵衛　昨日のお連れの方も此方にいらつしやるんで御座いませうな。

花野　（親しさうに）それが、わたしたち二人ともに仕合せだつたのですわ。皆樣と御一しよに桑實寺にお詣りしないまでも、あの街道で、もう少し長く休息してゐたなら、若菜さまと同樣な、恐ろしい目に會つたのに違ひありませんの。

四郎兵衛　ほんとうにあなたはお仕合せで御座いました。若菜さまとかはあんなにお美くしくつて、お歳も若くつていらつしやつたのに、おいたはしい目にお會ひなされたが、でも、戀しい方と御一しよにお手打ちになつたのですからお心殘りは御座いますまいよ。

花野　それでは、ほんとうに新八さまは若菜さまと睦まじいお話をしていらつしやつたんでせうか。夕月さまはじめ、お知合ひの方は、それはまことか空言かと、疑つていらつしやるんですけれど。

四郎兵衛　いや、わたくしは松の木蔭で、すつかり立聞きをいたしましたから、よく存じて居ります。（輿に乘つて）天が裂け地がわれても、二人の仲は變らないと云つてゐました。眞晝間街道の眞中であゝいふやうなお睦まじい樣をお見せになつては、上樣が御立腹遊ばすのは御無理も御座いますまい。

花野　（興奮して）そんなはしたないことを云つて、何方かのお耳に入つちや大變ですわ。あなたのためにならないからお愼みなさいよ。

四郎兵衛　恐入りました。……でも、新八さまはわたくしどもでさへ惚々するやうなお美しい方で御座いましたな。お姿が美くしいばかりではなくつて、お氣立ては優しくつて武藝もお出來になるに違ひない。上樣のなされ方もあんまり無慈悲ぢや御座いませんか。

花野　さう思ひなさるのなら、あなたは何故この御城內に御奉公をなすつたのです？

四郎兵衛　食へないからでさあ。（投付けるやうに云つて）明日の日お上の氣紛れで、首が胴から離れようとも、今日食へなきや困りますからな。いや、危い綱渡りだ。

花野　たゞ御飯を頂くためだけの御奉公なら、こんな恐ろしいところにゐなくつても、よさゝうに思はれますけれど。……あなたがほんとうにその氣でゐなさるなら、今夜にでもわたしを連れて兩親の家へ送屆けて下さいませんか。兩親は京の町外れで豐かに暮してゐるのですから、あなたに相當のお禮はいたしますわ。

四郎兵衛　飛んでもないことを仰有る？　わたくしはかりではない、あなたやあなたの御兩親がどんなお咎めを受け

るか分りません。

（彼は、あたりに目を注いで、花野には取合はないやうにして掃除に取りかゝる。）

（そこへ、夕月が入つて來る。）

夕月　花野さまはそこで何をボンヤリ考へてゐらつしやるの？

花野　何も考へてやしませんわ。

夕月　危い生命を助かつたらばこそ、今日一日でも、こんな美しい春景色が見られるのぢやありませんか。……三郎さまも昨日のお手柄の御褒美に、上樣から何か拜領なさるのですつて。

花野　三郎さまはどんなお手柄をなすつたのでせうか。

夕月　それは桑實寺參詣の方をお召取にいらつしやつて、首斬役までも首尾よくお勤めなすつたからぢやありませんか。

花野　武士衆の上樣への御奉公は、そんなことなので御座いませうか。昨夕中庭から聞えて來たあの氣味の惡いうなり聲が、三郎さまのお手柄になつたのでせうか。不斷は陽氣だつた桂木さまや顛霧さまの、今際のお聲は、わたしの耳に染みついて、何時までも離れませんわ。……夕月さま、どうぞあなたから岩淵樣へお願ひなすつて、わたしがお暇を頂いて、兩親の家へ無事に歸られますやうにして下さいまし。（歎願する）

夕月　（呆れたやうに）お氣の弱いにも程がある、……あなたがお手打ちになるのぢやなし取越苦勞をなさらなくつてもいゝぢやありませんか。今の時世では、あなたの御兩親のお家よりも、この御城内にゐた方がどれほど安穩であるか知れないんですわ。日本の内でも、信長公のお城だけは、敵に攻められる氣遣ひはないんですから。

花野　あなたは御親切にわたしに力をつけて下さいますけれど、わたしはどうしても恐ろしくつて、よく晴れた春の日も暗闇のやうに思はれますの。そこで鳴いてゐる鶯の聲も昨夕の中庭から聞えた氣味の惡い聲のやうに思はれますの。（恐怖に震へる）

夕月　あなたはそんな聲を正直にお聞きになるからいけないの。わたしなんぞ、兩手で耳を塞へて、いやな聲を耳に入れないやうにしてゐるんです。さうすれば、大風の吹通つたあとも同樣になるんですもの。

（四郎兵衞、さつきから箒の手を休めて、二人の方を見てゐたが。）

四郎兵衞　昨夕は御奉公はじめに、大勢樣の死骸の跡片付をさゝれましたが、これぢや武家奉公も隱亡のやうで御座いますな。新八さまの仰有つたこともほんとうだ。

夕月　新八さまはどんなことを仰有つたの？

（四郎兵衛が何か答へようとしてゐるところへ、三郎、前とかはつた立派な身づくりして、馬を牽いて出て來る。）

三郎　（得意らしく）おれは、岐阜のお城へお使者として出立するのだ。大切な御用を承つてゐるのだ。

（これ見よと云はぬばかりに、所謂武士らしい氣取つた態度をして、馬に乘つて。）

三郎　上様御寵愛のお馬に跨がつて、春の街道を岐阜まで驅付けるのだ。おれが使者の役目を果すと、天下にいかなる騷ぎが起るか、四郎兵衛、よく見て居れ。（芝居の武士らしく氣取つて云ふ）

四郎兵衛　無事に行つていらつしやい。（手輕く云つて挨拶する）

（三郎、わざと庭の中を一廻りしてから、馬に鞭打つて驅出す。）

四郎兵衛　三郎さまはうまくやりましたな。（羨ましさうに見送る）

花野　また戰がはじまりますの？

夕月　だからこの御城内にゐるのがまだしも安心なんですわ。

四郎兵衛　大戰（おほいくさ）がおつぱじまつたら、おれも、どうかして自分の手で死骸の山を築きたいものだ。他人の斬つた死骸の跡片附だけぢや詰らない。（獨言のやうに云ふ）

（鶯鳴く。）

――幕――

勝頼の最後（二幕）

人物

武田勝頼
跡部勝資
土屋惣藏
甚三郎
市之助
又平
御臺所
百合野
その他無名の武士數名

一

「やうやくその日は、柏尾（かしはを）といふ山里へ着かせたまひ、怪しげなる土民の蝸屋に、柴引結び宿らせ給ひけり。御供の人々も、木の蔭岩の狹間に、薦を張り筵を敷いて泣伏してぞ居たりける。樂盡きて悲來る。天人すら猶ほ五衰の火に逢へり。況んや人間に於てをや。哀なりし次第なり。」（甲亂記）

天正十年三月三日の夜。

木の間の薦を開けて、武田勝頼の從者一人現はれ、あたりを見て、急ぎ足で出て行く。やがて、他の薦の間からも、一人の武士が姿を現はして、キヨト／＼しながら出て行く。

相木甚三郎（三十前後の元氣な男）。薦を開けて出て來て、闇を透して、脱走武士の後を見送つてゐると、木の間の薄暗いところから、笠山市之助（四十代の疲勞してゐる男）が出て來て、互ひに顏を見合はせる。

甚三郎　お前は氣が冴えて眠られないのか。夜が更けると、宿の騷ぎも止んで、誰れも彼れも正體なしによく眠つてるぢやないか。

市之助　おれも、晝間の疲れで、さつきまで前後不覺に眠つてゐたのだが、何か大きな音がしたので目が醒めたのだ。まだ夜討が來たのぢやあるまいな。

甚三郎　まだ大丈夫だ。敵が幾ら疾風（はやて）のやうな足をもつてゐても、高遠（たかとほ）から此處まで今日（けふ）のうちに押寄せて來る氣遣ひはないよ。だけど、明日（あす）は分らないな。足弱（あしよわ）を大勢連れてノロクサしてゐると、明日の日が氣遣はれる。おれだちが目を開けてかうして生きてゐられるのも、今夜

だけだと思ふと、おれは變な氣持がする。

市之助　變な氣持と云つてどんな氣持だ。お互ひに戰に出りや生命を的だ。敵を斬るか敵に斬られるか、そんなことは不斷から覺悟がついてる筈ぢやないか。

甚三郎　お前だから打開けるのだが、(あたりを見廻して)おれは負け戰ばかりしてゐるのはつく〴〵いやになつたよ。お前は若い時分から、信玄公のお供をしてゐて、たび〳〵戰に勝つた樂みを知つてゐるのだが、おれなぞは、長篠の大合戰以來、今のお屋形樣のお供をして、勝利の歡樂は、たつた一度だつて味はつたことはないのだから、武士になつた甲斐がないよ。逃げることが上手になるだけなら、武士のやうな危い商賣をするにや及ばない。身延の山中で樵夫でもしてゐた方がよかつた。今日も、新府を飛出して、重い葛籠を背負はされて、無我夢中で此處まで驅けて來たのだが、荷物をおろして、一息吐くと、こんな馬鹿なことはないと思はれたよ。

市之助　さう思ふのも無理はないよ。おれも十何年の間先代に御奉公をして來て、その間に、お上の御領地は廣くなるし、勝軍のお祝ひ酒もたび〳〵頂いたし、甲州武士に一人だと自慢の鼻を高くしてゐたこともあつたのだが、世渡りが下手なせゐか、智慧が足りぬせゐか、おれは何時まで經つても平武士で、かつ〳〵喰つて行けるくらゐな知行にしか有りつけなかつた。……逍遥軒殿や右衞門太夫殿や、お身内の士大將でさへ、お上を見捨てゝ散り散りばら〳〵に逃げて行つたのに、おれ達のやうな滿足な御恩を受けてゐないものが、負け軍のどん詰りまでお供をして行くのは、馬鹿正直のやうに思はれてならんよ。

甚三郎　お屋形樣とは從弟同士の左馬之助殿でさへ、假病をかまへて、評定の席へ出なかつた上に、こつそり信州の方へ落ちて行つたと云ふぢやないか。

市之助　おれ達小身者が、負け惜みの忠義を盡したつて、亡びるお家が起上る譯はないんだからな。……お上がたつた一本の賴みの綱にしてゐらつしやる小山田殿だつて、當てになるかどうだか。おれには、あの郡内の大將の腹の底が危なかしく思はれるのだ。

甚三郎　どうせこの先は駄目なんだ。……兄貴。逃げてしまはう。

市之助　お前と一しよなら心丈夫だ。おれも宵のうちからさう思つて、傍の奴が寢息を搔くのを見てゐたのだ。

甚三郎　おれは宵から迷つてたゞけお前よりやお人よしだつたのだな。さう極つたら愚圖愚圖しちやゐられないが、ちよつと待つて吳れ。おれは新府から背負つて來た葛籠を持ち出すから。

市之助　慾の深い奴だ。早くしろ。

甚三郎　あの中には、御臺樣や女房達の晴着がやたらに詰込んである筈だ。十年もたゞ奉公をした埋合せに頂いて置かう。

（甚三郎、葛籠の中へ入つて行く。市之助は草鞋を穿直し、逃仕度をしてゐるところへ、土屋惣藏（二十代）が、木の間の暗いところから、あたりを警戒しながら出て來て、市之助を見つけると、目を怒らせて側へ寄る。）

惣藏　お前は市之助ぢやないか。

（市之助、それに氣づいて驚く。）

市之助　ハイ。土屋樣はお見廻りをしていらつしやるのですか。御苦勞樣で。

惣藏　貴樣、逃げるのだな。

市之助　（聲を震はせて）決して左樣なことは……わたくしは、お上をはじめあなた樣方がどう遊ばしていらつしやるかと氣遣はしくなりまして。

惣藏　それで草鞋を穿いて裾をからげて逃げ仕度をしてゐるのか。……逃げられるなら逃げて見ろ。不忠者め。（惣藏は市之助の襟首を摑まへて引倒し、市之助の起上るところを斬下げる）

（甚三郎は葛の間から、そつと顏を出して見てゐる。）

（惣藏は死骸を木蔭へ押やりながら奥へ入る。甚三郎は、その後姿を見詰めてゐたが、やがて、葛籠を背負つて葛の間から出て來る。横田又市（三十前後）あとから隨いて出て來る。）

甚三郎　危いところだつた。慾を出して葛籠を取りに行つたお蔭で、おれの生命は助かつたのだ。……さあ、この隙間に急いで行かう。あの崖道を上つたら大丈夫だ。

又市　まあ、待て。今夜は薄つ氣味が惡いよ。明日の晝間にいゝ機會を見つけて身體を隱した方が無事だ。

甚三郎　いや、かういふ時には早い者勝ちだ。一日遲れると人數が減るから、逃げるにも人目に立つて逃げ損ねるよ。思立つたら一ときも早い方がいゝ。

又市　ぢや、お前だけ先きへ行け。

甚三郎　市之助の最後を見て臆病風に吹かれだしたのだな。

又市　何とでも云へ。……しかし土屋殿も、餘計なおせつかいをするぢやないか。逃げ腰になつた者を引留めてお供に連れたつて何の足しにもならないだらうのに。

甚三郎　あいつの忠義自慢は勝手だが、おれ達を無理やりに犬死の仲間に引込まうとするのが癪に障らあ。あいつへの面當てにでもおれは逃げて見せる。……ぢや、おれは一足先きへ行くぜ。生命があつたらまた會はう。

（甚三郎、葛籠を背負つて出て行く。又市はそれを見

迯つて、自分も後を追つて行かうか行くまいかと迷つてゐたが、ふと、ある人影を見つけて、あたふたと薦の中へ入る。）

（上手の鎖されたる茅屋の側から、武田勝頼（三十七歳）が跡部大炊助勝資（五十代）と、話をかはしながら出て來る。）

勝頼　雜兵どもが逃失せるのは逃がして置け。穴山入道をはじめ、肉縁の者すべてに見棄てられたおれだ。最後はおれ一人になることは分つてゐる。雜兵が何千何萬おれのまはりに隨いてゐようとも、敵の大軍に勝てる筈はないのだ。其方や長坂は今日になつてもまだ、おれを甘やかして、雲を掴むやうな空な望みを掛けさせて呉れたが、おれは、腹の底まで其方だちに誑らかされてはゐないのだぜ。

（勝頼、木の根に腰をおろす。勝資その側に坐す。）

勝資　お上は、心弱いことを仰せられる。小山田は籠城の準備をしてお迎へにまゐる筈では御座いませんか。要害堅固な岩殿の城に籠つて、わたくしどもが力を合せて守つてゐれば、たとへ敵の大軍が押寄せてまゐつても、大丈夫當分は引こたへられます。そのうちには、長坂やわたくしどもが、何とかいゝ分別をめぐらして、御運の開くやうにいたしませう。

勝頼　おれも未練がましく、一日でも生き延びようと思つて、其方たちの勸めを入れて、小山田を手頼る氣になつたのだが、……しかし、勝資。父上御他界の後十年の間。たつた一度でも、おれの希望が遂げられたことがあると思ふか。おれは全心全力を盡して働いて來たのに、みんな無駄骨折だつたのだ。法性院殿御寵愛の老臣どもや、肉縁の誰れ彼れがおれを無能呼はりして、てんでに勝手な意見を持出して、武田家の非運をおれ一人の所爲になすりつけるのだが、おれの身にもなつて見ろ。

勝資　それは、不斷からよくお察し申して居ります。

勝頼　（興奮して）無能呼はりが癪に障つてならない。おれの不運は、武田信玄の後嗣者として生れた時から極められてゐるのだ。おれの一番の失策は、あんな軍に強い親爺の子としてこの世へ生れて來たことなんだ。……其方も覺えてゐようが、三年前に、おれは親讓りの諏訪法性の甲を前に据ゑて斷言した。織田と德川と北條と三人が連合してこの勝頼一人を推し倒さうと企てたなら、遲かれ疾かれ、勝頼の滅亡することは日が西へ落ちるに極つてゐると同樣に、極つてゐるが、たとへ滅亡するまでも、信長如きの旗下には斷じてならないと、おれは云つた。おれは滅亡を覺悟の上で、今日まで生きて來たのだ。……それにしても今日のみじめな樣は何と云ふことだら

う。高遠落城の際に驚いて、苦勞して築いた城もむざむざと燒拂つた。……（感慨を寄せて遠くの空を見詰める）

勝資　御臺樣が草鞍をかけた百姓馬にお乘り遊ばして、女房たちが徒步跣足で御供をしてゐるのを見ますと、おいたはしうて、わたくしはたびく落涙いたしました。

勝頼　おれは平家の都落ちを思出してゐたのだ。……しかし、勝資、平家は一門揃つて退去したのだ。西海の藻屑になるまで、肉身緣者は、互ひに扶け合つてゐたのぢやないか。おれには、數の多い身内のうち、誰れが隨いて來てゐる？　幼い信勝とおれと、父子二人で壇の浦に向つてゐるのだ。

勝資　さう世の中を惡くお觀じなさらなくつても、明日の日どんな御運が向かないとも限りません。今日の敵は明日の味方で、幸運が幸運で終らず、惡運が惡運で終らないのが浮世の實相だと思はれます。ことに、源平二つに分れてゐた昔とは違つて、今日は四分五裂の時勢ぢや御座いませんか。何時敵軍に内輪揉めが起らないとも云へますまい。頑丈な謙信法師でさへ、厠の中で不慮の頓死をしたので御座いますから、織田信長の壽命だつて何時どこで盡きるか、人間業では分りますまい。

勝頼　そんなことが當てに出來るか。だが、おれも氣力が弱つたのか、こなひだうち、そんなことを考へてゐたこともあつたよ。

（そこへ、惣藏が木の間から出て來る。勝資を見ていやな顏をする。）

勝頼　惣藏はあれから夜番をしてゐたのか。

惣藏　ハイ。

勝頼　御苦勞だつたな。別に異つたこともなかつたか。途中の疲れでみんなよく眠つてゐるだらうな。

惣藏　どこの假屋もヒツソリとして居ります。春の夜の明けるにはもう間も御座いますまい。

勝資　土屋殿は、お見廻りをしてゐられるのは感心だが、御臺樣の お身の廻りを警護してゐなければいけますまい。

惣藏　それはあなたの御注意を受けるまでもないことだ。……御臺樣はお寺の御本尊にお祈りを上げていらつしやる。

勝頼　來世を願つてゐるのか。

惣藏　御本尊の藥師如來の前でお通夜をしたいと仰せられました。

勝頼　どうせ心が昂ぶつて眠れないのだらうから、佛の前にゐた方がまだしも心が安まつていゝだらう。おれも、一度目が醒めてからは、どうしてもあの寢床に入つちやゐられなくなつたよ。

勝資　御尤もで御座います。あんな穢るしいところへお寝間を設けましたのは申譯が御座いませんが、明け方の山風は急に冷えてまゐりましたから、茅屋の中でも御辛抱なすつて暫くお休みなすつた方がよろしいかと思はれます。

勝頼　なに、おれは此處で夜を明さう。此處で夜番をしながら、春の曙を待つことにしよう。其方だちは、おれの假屋へ入つて、發足の知らせのあるまで、心置きなく眠つたらよからう。遠慮には及ばない。今朝からの其方だちの心遣ひはおれも察してゐるよ。

勝資　恐れ入ります。それでは御意に甘えて一眠入りさせて頂きませう。土屋殿もお休みなさい。明日の日もあることだから。

惣藏　わたくしは少しも眠くはありません。（ブツキラ棒に云ふ）二日や三日、眠りを缺いたために氣力の衰へるほど虛弱に生れついてやしません。

勝資　末頼もしい若武者とは、あなたのやうな方だ。甲州武士のお手本だ。我々がたとへ窮境に陷つてゐようとも、あなた方御兄弟のやうな血氣盛んな忠臣が、お上に附添つてゐられる間は、決して失望落膽するには及びますまい。

惣藏　跡部殿は何を仰有る？　わたくしは左様な氣休めの悅しがらせは聞きたくありません。武田家の昔の榮えを再びこの世で見ようとしてお伴してゐるのぢやありません。新府の館で織田の大軍を待受けて、刀の折れるまでも敵を斬つて／＼斬りまくつて、華々しく討死しようと覺悟してゐたのに、敵に後を見せて落ちのびたことは心外です。若君信勝様も無念に思つてゐらつしやる。わたくしどもは、お上の御生害の時に、潔く腹搔切つて、死出のお供をしたいために、無念を忍んで今日の日を生きてゐるんです。（涙を落して）あなたや長坂殿とは違ひます。外に何の望みを有つてゐるものですか。

勝資　心をお鎭めなさい。御前間近かで不吉な言葉はお愼みなさい。

惣藏　何が不吉です？　死すべき時に死するのがなぜ不吉なんです。敵軍襲來の噂に怯ぢて逃出すこそ、武士として見苦しい不吉の事なのではありませんか。

勝資　あなたの勇氣は感心だが、死急ぎをしなくつてもよろしからう。人間は死ぬるのは何時でも死ねる。敵軍に對し朋輩に對する外見で、稍々もすると討死を言張るのは淺はかなことではあるまいか。

惣藏　それでは、跡部殿は、我々が新府中に踏留まらうとしたのを、外見のためだと仰有るのですか。（目を怒らせて詰寄る）

勝資　いや、さうは云はない。あなた方が、目醒ましい討

死をして、名譽を後世に殘したがるのも、昔ながらの武士の道で、至極結構なことだ。しかし、他人をも强ひて、生きられる者までも一しよに死なせようとするのは、わたくしには同意が出來ない。……木の根を枕にしても、我々主從は今夜此處で生きてゐることを、わたくしは喜んでゐるのです。

惣藏　それは腰脱け武士の言草だ。

勝賴　腰脱け武士と思ひたければ、さう思つてゐなさい。（極めて冷靜に）しかし、わたくしは生きてゐればこそ明日の日の光が見られると思つてゐる。お上も、春の曙を此處でお待ちになつてゐらつしやる。あなたがいきり立つて御自分の絶望の息を他人の肺腑にまで吹込まなくつてもよろしいではないか。

惣藏　……名譽ある武士が、城を棄てゝ野の末山の隈を逃廻つて、それでも、生きのびた甲斐があると、あなたは思はれるのか。小山田殿がどれだけ手賴りになると、あなたは思つてゐられるんです？　二十日や三十日は必ず持ちこたへると當てにしてゐた高遠の城さへ、一たまりもなく落城した今日、わたくしなどは、空な望みには飽き果てました。

勝賴　小山田は、あなたも聞かれた通り、自分の領內へお上をお迎へする準備をすると堅く受合つて行つたぢやありませんか。あの男がどれだけの力になるかならんかは、行つて見なければ分らない譯だが、今からケチをつけるには及びますまい。どうせ駄目だと早合點して絶望してゐた日にや、人間といふ人間が、みんな一日だつて安閑と生きてゐられない譯なんです。平家を滅ぼして天下を我が物にした賴朝公だつて、三代とは家が榮えなかつた。運がよくて日の出の勢ひで慢心してゐる織田信長だつて、何時哀れな最後を遂げないとも限らないが、さう先きから先きを案じてゐたら、どんな大英雄も戰爭を一度する氣にもならないでせう。……空がよく晴れて、明日も天氣がよさゝうなのをまだしも仕合せだと思つてゐなさい。

惣藏　天氣がよくつても、百姓馬の一匹も見つからないんですから。大勢の女房だちは、か弱い足でどうなさることやら。

勝賴　二人とも言合ひは止して與れ。疼いところへ障られるやうで、おれは聞きづらいのだ。以前のおれなら、一槪に惣藏の意見に同意するのだが、今のおれは勝賴の言葉も無下に斥けられなく思はれるのだ。長篠の大合戰の折は云ふまでもなく、先頃、膳の城を素膚で攻めた折の勝賴は、今の勝賴ではなかつた。（歎息する）

惣藏　上州の膳の城を乘取つた時の、お上のお勇ましいお

妾は、今日の前にちらつくやうに思はれます。紫綾の羽織を召されて、白熊織の毛笠をお着しになつてゐらせられた。（恍惚としていふ）

勝頼　あの時、其方は、緋緞子の羽織を着て、白手拭で鉢卷をして、采配を取つてゐたであらうがな。

惣藏　土屋惣藏一番乘りと名乘つて、二の門の内へ乘り込みました。（得意らしく云ふ）

勝頼　その時の其方の悦しさうな聲は、今でもおれの耳に殘つて居るよ。其方のやうな勇者もおれの臣下になつてゐるために、一番乘りの勝利の樂みを、たつた一度しかしなかつたのだ。おれは不憫に思ふよ。

惣藏　（首垂れて沈默）

勝頼　あの勝利も瞬く間の夢であつた。零落した人間が昔の勝ち軍の夢を思ひ出すのは心淋しいものだ。勝資はさう思はないか。

勝資　御意の通りで御座います。上州征伐の折には、わたくしもお供いたしました。

勝頼　あの時には、左馬之助も右衞門大夫も我軍に加はつて働いてくれたのだ。わづか一年經つか經たぬに、おれの身のまはりが、どれほど淋しくなつたか。左馬之助はおれの從弟だ。おれの娘の舅だ。それがくされ草鞋をすてるやうにおれをすてゝ逃げた。……それでも勝資は、人の世が頼みになると思ふのか。

勝資　御心中はお察し申します。しかし、浮世の眞實の相を御覽になつたのは、萬卷の書籍をお讀み遊ばしたにもまさつた、尊い御學問では御座いませんか。

勝頼　滅亡の淵に落ちかけてゐる人間が、浮世の學問修業をしたつて、何の役に立つものか。ハ、、、、。（淋しく笑ふ）もう夜の明けるには間がないだらうが、其方だちは少しの間でも休息しろ。……皆んなよく眠つてゐるのか、おれを捨てゝ逃げ失せたのか。あたりがヒツソリとしてゐるぢやないか。

勝資　それでは、わたくしはお暇を頂いて、一休みいたしませう。土屋殿はいかがなさる。

惣藏　わたくしは、今一度見廻りをいたしませう。……一晩や二晩眠らなくつても、やがて腹でも切つて死んだら、何萬年でも、飽きるだけ眠られるのだ。こんなところで眠り急ぎをするには及ばないや。

（惣藏奮然として出て行く。勝資靜かに出て行く。）

（勝頼、物思ひに耽つてゐる。又平。蔀の間から、そつと頭を出す。あたりに誰れもゐまいと思つて、二三歩出かゝつたところを、勝頼に見つけられて驚いて平伏する。）

勝頼　誰れだ、其方は。

又平　小原下總守樣に御奉公いたして居ります者で御座います。

勝頼　うん。下總の家來か、見覺えない顏だが、何時から下總に仕へてゐる？　名は何と云ふ？

又平　又平と申します。昨年の暮れ、躑躅ヶ崎お引上げの折から御奉公いたして居ります。

勝頼　左樣か、（相手の顏を見詰めて）其方のやうな新參者が、よく主人を見棄てないで此處まで隨いて來たものだ。感心な奴だ。褒めて遣はす。

又平　冥加にあまるお言葉を頂きまして、恐入ります。わたくしは、主人と一しよに、何處までもお屋形樣のお供をいたす覺悟をいたして居ります。

勝頼　よく云つて呉れた。世が變つたら、其方のやうな忠義な武士は、心行くばかり取立てゝやりたいのだが、……其方も今日の有樣を見たら心元なく思ふだらうな。

又平　下賤なわたくしも、御武運の開く時を蔭ながら、神佛に祈願いたして居りました。

勝頼　それで思出したが、御臺所は、山の麓のお寺で通夜をしてゐるさうだ。其方これから、お寺へ行つて、おれが目を醒ましてゐると云つて、御臺所を此處へ連れて來て呉れ。少し話したいことがあるのだから。

又平　畏まりました。

勝頼　早く行つて呉れ。

又平　ハツ。

（又平は、藪の中へちよつと入つて、包んだ者をコツソリ取出して、袂で隱して、勝頼に會釋して一散に驅出す。勝頼がそちらを見送つてゐると、間もなく、又平が入つて行つた方から、勝頼の御臺所（十九歳）が侍女百合野（二十歳ぐらゐ）とともに出て來る。）

勝頼　丁度いゝところだつた。今、又平といふ下郎を迎へにやつたのだが、其處で會つたらうな。

御臺　今、其處で見馴れない男に行會ひましたが、何とも云はないで、アタフタと驅けだしました。

勝頼　それは變だな。……おれは、そこの見ぐるしい家に安閑と眠つてはゐられないので、さつきから此處に出てゐたのだが、いろ／＼な感慨が胸に迫つて、急にお前に會つて話したくなつたので、お寺へ迎へにやることにしてたのだよ。……まあ、そこへ腰をおろしなさい。（侍女に向つて）百合野、お前は、その家へ入て、暫く休息してゐろ。

（侍女出て行く。御臺所、勝頼のとなりに腰をおろす。）

勝頼　お前は藥師如來に何を祈つてゐた？　今日の大難が明日の榮華と變るやうに祈つてゐたのか。

御臺　いえ、さうでは御座いません。後の世の事を佛樣に

お頼み申してゐました。南無藥師瑠璃光如來。わたくしどもの最後はすでに近づいて居りますゆゑ、後の世では、一つ蓮の臺の緣を結ばせて下されと、そればかりを一心に祈つてゐました。(邪氣なく云ふ)

勝頼　お前は諦めがいゝな。不意の災難に會つたら氣でも狂ひはしないかと、かね／＼案じてゐたのだが、思ひの外お前は氣丈夫に生れついてゐる。まさかの時には男子よりも女子の方が諦めがいゝのかも知れないな。……しかし、後の世の事は兎に角、三日でも五日でも、生きてゐる間、お前と艱難辛苦を共にしてゐられるのをおれは悦しく思つてゐるよ。生甲斐があると思はれるのだ。……昨夜新府の館で大評定があつた時に、信勝をはじめ、多數の者は、館を枕に討死をすると、しやにむに言張つたのを、おれはそれに同意しないで、跡部の勸めを容れて、小山田を頼つて落ちのびることにしたのは、お前の事を思つたためなのだ。……お前は、まだ二十にも足らない年齢ぢやないか。いはゞ蕾の花だ。お前の顏を見ると、春を待つてゐる梢の花のやうに思はれて、ムザ／＼散らすのは忍ばれないのだ。お前といふものがなかつたら、おれも新府にじつとしてゐて織田の大軍を待受けたかも知れなかつた。

御臺　それでは、わたくしのために館をお棄てなされたので御座いますか。それが武田家の名折れになるのではありますまいか。

勝頼　名折れになつてもいゝではないか。どうせおれの名前は十年この方傷だらけだよ。……退去するにしても、眞田昌幸はあの男の領地の上州阿賀妻へ來て籠城しろと勸めて吳れたが、おれは其方へ行かないで、此方へ落ちて來ることにした。これも釣閑の說を容れたのだが、釣閑の爺いや大炊之助は、おれの心をよく酌取つて吳れる。高阪や土屋のやうな理窟一遍の頑くなゝ忠義者とは違つて、人情がよく分つてゐる。

御臺　それはどういふ譯なので御座いませうか。此方を差して落ちていらつしやつたのがなぜお上の御心にかなひましたの？

勝頼　(微笑して)お前にもよく分らないのか。長阪は口に出して云はなくつても、おれの心をよく察して吳れたよ。……分らなければ云つて聞かせようか。今日此處まで來る途中で、お前がついぞ乘つたことのない馬に乘せられて惱ましさうにしてゐるのを見るにつけても、こんな可愛い女を、どうして、荒武者と一しよにして、籠城の苦しみがさせられる者かと思つたのだが、今度手頼つて行く小山田の領內都留の郡は、お前の故鄕の相模に近いのだ。

御臺　相模に近いところへまゐりましたら、どうなりますの？

勝頼　何とか手だてをして、お前を小田原の城へ送り屆けて、安穩に暮らさせたいと思つてゐるのだよ。氏政とおれとは敵味方に分れてゐても、お前は氏政の妹だ。妹が兄の側へ歸つて行くのは耻ではないし、氏政だつてお前を粗末にはしないだらう。お前は長い間、寒さ暑さの酷しい山國で暮した。それで、たび／＼幼い時分の記憶を思出して、海が見たい／＼と云つてゐたぢやないか。おれも、親爺に負けないくらゐに運がよかつたら、海道一帶を切取つて、駿河か遠州の濱邊へ、龍宮のやうな城を築いて、お前に龍宮城の乙姫様にも負けないくらゐな榮華をさせようと思つたのだが、それも愚かな夢となつてしまつたよ。お前はおれに氣兼ねをしないで、小田原へ歸るがいゝ。

御臺　お上はひどいことを仰有る？　たとへ、兄の氏政が、輿車をもつて迎へにまゐりませうとも、お上にお別れして故鄕へ歸らうなんて、わたくし、思ひもそめないことで御座います。それに、兄の人情があるなら、織田や德川の味方をして、甲州へ矛先を向ける筈はないので御座いますもの。

勝頼　それは戰國の習ひで爲方がないよ。氏政ばかりを咎めることは出來ない。おれもお前をこそ望んで貰受けたのだが、北條家の幕下になる氣はなかつたのだ。

御臺　この世の中では、女は夫より外に手頼りになるものはないのでせうか。……でも、わたくしは幸福で御座いました。七年の間、可愛がつて頂いたのですから。

勝頼　おれは七年の間、今日ほどお前を戀しいと思つたことはなかつた。錦の褥に坐つて琵琶の音や琴の音を聞いてゐた時よりも、木の根に腰を掛けて、木の葉の音を聞いてゐる今しみ／＼とお前の戀しさが感ぜられる。（御臺所の手を執つて）五日でも十日でも、二人で生きられるだけ生きてゐよう。……もう夜の明けるに間もないだらうから、此處にゐて、二人で久振りで春の曙を見ることにしよう。夜が明けて見たら、供の人數が半分に減つてゐるだらうが、それがどうなるものか。お前を無事に小田原へ屆けて吳れる者が殘つてゐてくれゝばと思つてゐたが、お前が故鄕へ歸りたくないのなら、その心配は無用だ。……おれは今朝新府を立つ時から、最後はおれ一人と覺悟をしてゐた。

（ふと。喧しい叫び聲が起る。勝頼夫妻驚いて顧みると、後の方に火の手が上つてゐる。それに驚いて、あちらこちらの叢の中から、武士が飛出して馳けて行く。）

勝頼　誰れかゞわざと火を掛けたのだな。こちらは風下だ。

油斷してはゐられない。さあ彼方へ行かう。

（勝頼立つて御臺所を急立てる。御臺所うろ／＼する。勝頼彼女を背負つて出て行く。）

（薦の中から、寢呆け面をした武士が出て來る。）

その武士　こりやたまらない。敵がもう攻めて來たのか。

（慌てゝ逃出さうとするところへ、土屋惣藏が驅けて來て、その武士に向つて。）

惣藏　お屋形樣はどうなされた？　其方は存じないか。

その武士　わたくしは宵からグッスリ眠つてゐましたので、何が何やら、サッパリ分りません。合戰がはじまりましたか。

惣藏　貴樣、氣樂な奴だな。しつかりしろ。

（さういふが早いか、彼れは、武士の横つ面を毆る。その武士、しかめつ面をして出て行く。）

（惣藏はなほ、あたりを見廻してゐると、そこへ、侍女百合野が跣足のまゝ出て來る。）

惣藏　オヽ、百合野殿。お上は何方へお越しなされたか、あなたは知つてゐられないか。

百合野　お上は。御臺樣をお背負ひ遊ばしてあちらへお逃げになりました。（可笑しさを面に現はして云ふ）

惣藏　（今までの張詰めた顏を綻ばせて）なに、御臺樣をお背負ひになつて？

百合野　ハイ。世界が火焔となつても、血の池となつても、二人の中は離れないと云つたやうに、お二方の御樣子はお睦じさうで御座いました。

惣藏　さうでしたか。御臺樣はいつ此方へお出ましになつたのか知ら。

百合野　破れ寺での御勤行は、氣が滅入つてなりませんから、わたくし、御臺樣をお誘ひ申して、お上の御座所へお連れ申したのでした。わたくしはお邪魔にならぬやうに、あの家に身體を隱してゐたのですが、あまりに夜が靜かなので、お二方のお話は殘らずわたくしの耳に入りました。そのお睦じいことゝ云つたら。（調子に乘つて云ふ）

惣藏　お睦じいのは結構です。（興もなさゝうに云つて）わたくしはそんな話を承らなくつてもよろしい。（行きかける）

百合野　まあ、お待ち下さいまし。わたくし、土屋樣に是非お訊ね申したいのですが、小山田樣はほんとうにお上のお力になる方なのでせうか。

惣藏　それは、わたくしにもよくは分りません。お上のお望みで、我々はお供してゐるまでゝす。

百合野　お上は、御臺樣をお里の北條家へお歸し遊ばしたいために、相模に近い小山田の領內へ身を退けることに

したと、さつきお話になつて居りました。

惣藏　それは初耳だ。本當ですか。

百合野　長阪釣閑様も、さういふお上のお心を察して、新府落ちの道を此方へ取るやうにお勸めしたのださうです。

惣藏　釣閑の諂ひ武者め。またしてもお上のお心の弱點につけ込みやがつて。

百合野　お上の御臺様孝行は結構なことなんですけれど、そのために、あなたをはじめ忠義に厚い方々や、わたくし達までも、無用な艱難辛苦をするのは、あんまり情けな過ぎるぢや御座いませんか。……土屋様、まあ、わたくしの足を見て下さいまし。（衣服の裾を上げて白い脛を見せて）今日一日御臺様のお伴をしてゐた間に、小石につまづいたり荊棘に刺されたりして、こんなに傷をして血だらけになつたぢやありませんか。わたくし、明日の日や明後日の日が案ぜられてなりませんわ。こんな苦勞をして、當てにならないところへ行くよりは、いつそ早く死んだ方がいゝと思はれます。

惣藏　（獨言のやうに）卑怯に城を落ちて、十日二十日生延びたつて、詰るところは討死なんだ。

百合野　お上は、その十日か二十日かを、御臺様とお二人で、世の人の十年二十年の生活にもまして、睦じく樂んでお過ごしなさらうとなさるんです。わたくし達もさういふ心掛けで、明日の生命は分らない今日の日を樂しんではいけないのでせうか。

惣藏　さあ、どうですか。わたくしにはそんな六ケ敷ことは分りませんな。

百合野　あなたは、お上の御生害のお伴をすることばかり考へてゐらつしやるの？……あと、十日か二十日しか殘つてゐないわたし達の生命をよくお考へなさいましな。……（ふと感慨に迫つたやうに）百合野は、五年この方の胸の思ひを匿へて、殘り少い日を送らなければならないのでせうか。

惣藏　百合野どのは變なことを云はれる？

百合野　わたくしの心はよくお分りになつてゐるくせに、（満面に媚びを現はして）今朝の新府のお館の大混雜や、途中の騒ぎのうちに、わたくし一人は、うはべは泣いてゐても心の中ではコツソリ喜んでゐました。

惣藏　（相手の媚態に稍々心を惹かれたらしい様にて）あなたは氣味の悪い人だ。早くお寺の方へ避難して、朝の食事の仕度の手傳ひでもなさるがいゝ。

百合野　この騒ぎに、女の一人歩きは怖う御座いますわ。足も疲れました。背負つて行つて下さいまし。

（彼女は惣藏の肩につかまらうとする。惣藏は百合野

を振拂ふ。）

惣藏　はしたないことをなさるな。わたくしには妻も子もあるのだ。

百合野　明日の生命もわからぬ身で、お家の法度やお國の掟を恐れてゐらつしやるの？　どうせ死ぬのぢやありませんか。死ぬ時が來るまでに、お互ひに氣儘な戀を樂むのが、なぜいけないんです。……わたくしを背負つて行つて下さい。

惣藏　お謹みなさい。人が見たら嗤はれますよ。

（惣藏は彼女の側を離れて向うへ入りかけたが、入り際で、彼女のことが氣にかゝつてゐるらしい態度で振向く。）

百合野　これから奧樣のお側へ行つて、忠義の御講釋をなさるの？

（彼女が冷笑すると、惣藏は不快な顔をして入つて行く。火炤ます／＼盛んになる。）

――幕――

二

「柏尾へ着かせ給ひて、待たれけれども、小山田出羽守、御迎に參らざりければ、爰は餘り無用心なりとて、それより駒飼といふ山家へ、引籠らせ給ふ。其夜、人質とて召され置きし小山田が母、行方知れず闕落す。それよりして、すはや、小山田敵になるといひければ、上下惑亂して、さては郡内へ入ること、叶ふべからず。さらば天目山へ入らんとて、田野といふ所まで、辿り行き給ひければ……」（甲亂記）

三月十一日の明け方。

山麓に假りに設けた粗末な陣屋に幕を張つてゐる。所所に櫻の木があつて、花が散りかゝつてゐる。二三の武士、あたりを警戒しながら行過ぎる。

跡部勝資、物を考へながら出て來て、山の方を見上げる。

横田又市、山を下りて來た樣子をして、息もせか／＼と入つて來て、跡部を見て一禮する。

勝資　敵はまだ見えないか。

又市　敵兵らしいものは、まだ影も見えません。

勝資　さうか。山には、人の通れるやうな道がついてゐるだらうな。

又市　ハイ。この山から山續きに武藏の國へ越えられさうで御座います。お屋形樣は、山越しに何處かへお忍びになるので御座いませうか。

勝資　イヤ、もう此處が勝頼公の一番おしまひの御陣所だ。

敵に追詰められたばかりでなく、土地の者にまで反かれて逃げ道を塞がれてゐるのだから、もうどうしやうもないよ。一人々々なら、岩を攀ぢても、流れを渡つても、外へ落ちて行く術もあらうが、手足纏ひの女童を大勢連れてゐては、どうしやうもない。此處が武田家のドン詰りだ。

又平　御威勢の盛んだつた武田家の御運も今日限りとなつたので御座いませうか。(歎はしげに云ふ)

勝賴　(相手の顏を不思議さうに見て)　お前の妻子はお前と一緒にお供に加はつてゐるのか。

又平　わたくしには妻子なんかありやしません。一人ぽつちですよ。

勝賴　それは却つて幸福だつたな。かういふ時には、妻子のあるものは、苦勞の上にも苦勞をする。……しかし、妻子のない身輕なお前が、よく今日まで辛抱して來たものだ。新府を出て以來、柏尾、駒飼と、宿を重ねるたびに、お供の人數が減つて、ことに、小山田の心變りが分つてからは、お前も知つての通り、皆んなが我れ勝ちに逃出した。昨日の朝、鶴瀨から此處へまゐる時には、下郞一人さへ見つからなくつて、土屋殿がお上のお馬を引出したくらゐだつたのに、身分の低いお前が、よくも此處までお隨き申して來たものだ。(感心するよりも、不思議さうに云ふ)

又平　今だから申上げますが、柏尾ではいく度も逃げようとして、機會を伺つて居りました。それが不意にお屋形樣にお目通りすることになつて、わたくしの腹の中を御存知のないお屋形樣は、お前は忠義者だ〳〵と、過分なお褒めの言葉を直かにお下し賜つたのでした。わたくしは、その時は冷汗を掻きましたよ。あの時の火事騷ぎに紛れて、とに角半里ばかり逃げるには逃げましたが、お屋形樣のお言葉を思出すと、勿體ないやうな、空恐ろしいやうな氣持がしましたので、思返して後戾りをしたので御座います。

勝賴　それで、最後のお供をする氣になつたのだな。

又平　かうなつたら度胸は据ゑて居ります。今にも敵がやつて來たら斬死にをする覺悟をして居ります。

勝賴　死んでも生きても、さういふ覺悟がしつかりとついてゐりや仕合せだ。

又平　わたくしは、自分を幸福な人間だとは思はれませんが……。

勝賴　見たところ、お前はまだ三十になるかならずの若者だ。若い盛りに、迷はないで、生死の覺悟がちやんとついてゐるのだから感心だよ。

又平　さうお褒め下すつちや恐縮いたします。……さつき

山の上から、方々を見廻はしてゐると、身延のお山が目につきました。柏尾で一しよに逃げる約束までした朋輩の甚三郎は、あの山の中に逃込んでゐる筈だが、今時分は何をしてゐるかと、思はれて、何だか氣が滅入つてなりませんでした。……わたくしがお上のお供をして立派に討死をしたことを、あいつだけには知らせてやりたいので御座いますが、今日此處で討死をなさるお歴々の方のお名前と御一しよに、わたくしのやうな卑しい木つ葉武者の名前も、世間に傳はりますでせうか。

勝資　それは世間に知れないことはあるまい。此處には四十人ばかりしか踏留つてはゐないのだから。……しかし、念のために、今のうちに、木か石へ自分の姓名をしつかりと書きつけて置いたらどうだ。

又平　成程。いゝ考へだ。それで安心して討死が出來ます。……殿樣、今日は天正十年三月十一日で御座いましたな。

勝資　さうだ。何年何月何日何の又平、名譽の討死と書きつけて置け。

又平　おや、早速書いて置きます。……おれも今日がこの世の見收めだ。（と呟いて出て行く）

（勝資、また山の方を見上げてゐる。と、そこへ、百合野が、前の霧よりも窶れた樣をして入つて來る。）

百合野　（ふと櫻を見て）オヽ、よく咲いてゐること。新府を落ちてから、何處へ來ても世の中には櫻の花が咲いてゐる。

（その聲を聞いて、勝資は振向く。）

勝資　百合野殿か。上樣はまだお眠りになつてゐますか。

百合野　一どお目醒めになつて、またお横におなり遊ばしました。

勝資　御心勞が積もつてゐるのだから、御無理のないことだ。

百合　跡部樣は、この美しい野山の朝景色に見惚れていらつしやつたのですか。

野勝　（苦笑して）わたくしにはそんな風流氣はありませんよ。

百合野　躑躅ケ崎のお館で、こんな美くしい春の曙を眺めてゐましたなら、御臺樣から和歌のお題を賜はるのでせうけれど。

勝資　あなたは氣樂なことを云つてゐなさる？　一刻々々と近づいてゐる我々の運命を思つたら、春の曙も野山の景色もそれが何になります。我々は籠の中の鳥か網代の中の魚と同樣なんです。

百合野　だつて、あなたがお上をおそゝのかし申して、網代の中へ〱とお入れ申したやうなものぢや御座いませんか。あなたの御老巧なお目鏡で、小山田殿の忠か不忠

のお見わけがつかなかつたとは思はれませんわ。

勝資　わたくしにだつて、人の心はその時になつて見なければ分りませんよ。

百合野　お上も御臺樣も、小山田殿心變りの知らせをお聞きになつた時には、恩知らずの人非人よとお腹立ちになりましたが、そのあとでは、跡部や長坂があゝ云つて勸めたから當てにならぬものを當てにして來たと、歎息していらつしやいました。

勝資　かうなつたら、わたくしなどはどちら向いても恨まれ役だ。（歎息して）おれの力でやうやく掻立てゝ來た希望の燈火が消えてしまつたら、それをおれの所爲にしやあがる。おれの所爲ぢやなくつて、油や燈心のなくなつたためなのに。（と獨言のやうに云ふ）

（そこへ、土屋惣藏が出て來て、憎みを含んだ目で、勝資を睨めつける。）

惣藏　跡部殿、あなたは今になつても、まだ生きのびた甲斐があると思つてゐなさるか。明日の光が見られると思つてゐるんですか。僅か四五日生きのびたいために、小山田の罠に罹つて、我々主從はこんなところで見じめな最期を遂げなければならないぢやありませんか。どうせ滅亡するにしても新府の城で華々しい討死が出來たものを。……城を棄てゝ恥を曝らして、乞食のやうになり下つて。（口惜しさうに云ふ）

勝資　今になつて、あなたと爭つたつて爲方がない。何とでも仰有い。

惣藏　（激昂して）云はいでか。この頃胸につかへてゐた思ひを、今こそ吐出してしまはなければ、……貴樣や長坂は武田家の奸賊だ。獅子身中の蟲だ。小山田と云ひ貴樣だちと云ひ、憎むべき敵は却つて味方のうちにあつたのだ。口あたりのいゝ言葉でお上を誑かして、こんな所へお誘ひ申して、武田家の末路を汚したのは、跡部大炊之助長坂釣閑二人の所爲だぞ。言譯があるなら云つて見ろ。（刀の柄に手をかける）

（勝資默つてゐる。）

百合野　土屋樣、そんなひどい事を仰有るものぢや御座いませんわ。

（彼女は、いきり立つ惣藏を鎭める。）

（勝資默つて出て行く。）

百合野　わたしだちの生命は、いよ〳〵今一日と縮まりましたのね。

惣藏　あなたはなぜ何處へでも身を隱さなかつたのです？女のあなたは、强ひてお上の御最期のお供をしなくつてもいゝのだから、今からでも、コツソリ何處かへ落ちて行つたらいゝぢやありませんか。

百合野　落ちて行けと仰有つても、女の身で何處を當てに出て行けませう？　山の中で野たれ死にするか、荒武者に掴まつてむごい目に會はされるか……。

惣藏　それでは、御臺樣の死出のお供をなさるがいゝ。健氣なお覺悟だ。

百合野　わたしは、御臺樣の冥土のお供がしたさに、よろめく足に力を入れて、こんな片田舍まで落ちて來たのぢやありませんわ。生命にかけて思詰めてゐたあなたの影身に添つて、トボ〳〵と此處までまゐりましたの。この世ではあなたの片意地から思ひが遂げられないと極つたのなら、あなたのお討死の時を見て、わたしも同じ時刻に自害して、あの世へまゐります。生死の境を越しても、わたしの一念は遂げないでは置かないと思つてゐるのですもの。わたくし、もう、鐵砲の音も刀の光りも恐ろしくは御座いませんの。

惣藏　（當惑して）　あなたは恐ろしい女だ。跡部をやつつけて、胸がすいたと思つたら、今度はあなたのために心を亂されなければならない。……百合野どのはわたくしの目には鬼女に見える。

百合野　あなたのその目付だつて佛樣のやうぢやありませんわ。鬼でも佛でも、わたしの一念はあの世まであなたに隨いて行きます。

（そこへ、ふと、又平が入つて來て、いぶかしさうに二人を見る。惣藏極りが惡さうにする。）

惣藏　貴樣は何をしてゐた？

又平　山の方で見張りをして居りました。跡部樣が木の間隱れに山を登つていらつしやいましたが、御樣子が變で御座いました。

惣藏　彼奴、逃げるのだな。卑怯者め。（と云つて、陣屋の方へ向つて、聲高く）お屋形樣、跡部勝資は脱走を企てました。打取りませうか。

勝頼　（陣屋の中にて）　なに跡部か逃げた。不埒至極だ。追駈けて、打取れ。

惣藏　畏りました。

（弓矢を持つて駈けて出る。）

百合野　（又平に向つて）　あなたは餘計なことを云ふぢやないか。

又平　わたくしは、跡部樣がお逃げになつたと申上げたのぢや御座いません。

百合野　逃げたい人は逃げたつていゝぢやないか。

（陣屋の幕が開く。勝頼、總大將らしい裝ひをして端座してゐる。御臺所その側に侍してゐる。百合野と又平とは平伏する。）

勝頼　勝資が逃げたといふのは眞實か。

又平　どうもさうらしう御座います。

勝頼　知慧者の勝資も、いよ〳〵おれに希望の破片(かけら)もなくなつたのを見破つて、愛想を盡かして逃げ去つたのか。不忠者でも何でも、あいつが側にゐるうちは、まだ、どうにかなる道があるのぢやないかと、おれは思つてゐたのに。（二人を見下して感傷的に）武田家出頭第一の勝資でさへ、おれを見棄てゝ逃亡する有様なのに、又平、其方は新參者でありながら、よく辛抱してゐて呉れた。百合野だつてさうだ。世が世であつたら、おれが仲人になつて、其方だちを夫婦にしてやるであらうが、そんな望みもなくなつたよ。

百合野　（不平らしく）お戯れにも、左樣なことは仰せられないやうにお願ひ申上げます。

御臺　百合野は　先日(こなひだ)うちの樣子では、心に思つてゐる人があるらしいのよ。最後まで、よくわたくしの側にゐて呉れた。まだ夫と極つたものゝないお前は、今はの際に心淋しいだらうな。

百合野　ハイ、お二方(ふたかた)をお羨ましう存じます。

勝頼　（微笑して）只今、この勝頼を羨むものは、日本中に其方一人だ。

（そこへ、惣藏が勝資の死骸を抱へて入つて來る。）

惣藏　見事に射殺しました。まだピク〳〵して居りますが、いかゞ取計らひませうか。（死骸を下へ置いて、氣色ばんで）オヽ、それよりも、河尻肥前守の釣笠(つりがさ)の馬印(うまじるし)が遙かに見えたと、見張りの者の知らせが御座いました。

勝頼　敵はそんなに早くやつて來たのか、又平皆んなに左樣申し傳へて用意をさせろ。

又平　畏りました。（出て行く）

勝頼　（御臺所に向つて）この世でお前と言葉をかはすのも、これが最後だ。何か云ひたいことはないか。

御臺　一つ蓮(はす)の臺(うてな)の緣(えにし)を信じてゐるわたくしは、今更未練がましくこの世で申殘すことは御座いません。わたくしだちを遠いあの世へ乘せて行く紫の雲が目の先きに見えるやうで御座いますわ。（百合野に向つて）かねて、男子にても、女子にても、子供があつたならと、神佛に祈りを懸けて、お前だちも不斷さう云つて、わたしのために悲しんでお呉れだつたけれど、今となつては、子供のないのこそ幸ひだと思はれるよ。幼い者が一人でもあつたなら、この世に未練が殘つてならないだらうから。

勝頼　紫の雲が見える？（ふと向うを見て）おれには修羅の巷(ちまた)が見えるばかりだ。お前は敵軍が間近く寄せて來ないうちに心靜かにあの世へ行け。惣藏、其方に御臺の介錯を頼むぞ。

惣藏　その仰せは御辭退いたしたいので御座いますが、只

今の場合、心苦しくも御介錯のお役を勤めさせて頂きます。

御臺　いえ、わたくしはお上の御介錯をお願ひ申します。人目のないところで、心靜かに生害を遂げたう御座います。

勝頼　承知した。百合野、陣屋の幕を引いてくれ。

（惣藏と百合野とが、幕をおろす。勝頼夫妻の姿は、幕の中に隱れる。）

惣藏（愁然として）御臺樣のやうなお美しい方も、この世から無くなるのだ。

百合野　お上が御臺樣の御最期の御介錯をなさるやうに、あなたはわたくしの介錯をして下さるでせうか。

惣藏　あなたがいつまでも此處にゐて、敵の刃にかゝるのは見てゐられない。あなたは御臺樣と御一しよに早く、あの世に行きなさるといゝ。

（惣藏、夢心地で咄嗟に百合野を引寄せて喉を突いて殺す。百合野は何か云はうとしながら云ふひまもなかつた。惣藏彼女を崖の方へ押やり、身震ひしながら合掌する。）

（勝頼、幕の中から出て來る。）

惣藏　御臺樣は御生害遊ばされましたか。

勝頼　この後は、おれが切腹するまでのことだ。七年の間、飽きも飽かれもせず連添つてゐた御臺の首を落す時にも、おれには紫の雲も見えなかつた。……だが、惣藏、何十年來戰をし通して來たおれだから、無用なことではあるが、行きがけの駄賃に、五人や十人の敵は斬り捨てよう。其方もその覺悟だらうな。

惣藏　申上げるまでもなく、敵に一矢も放たないでは死にきれません。

勝頼（ふと、勝資を見て）勝資はまだ蟲の息でうめいてゐるのか。その息では、もうおれに空な望みを吹込んでくれる力もあるまいな。

惣藏　こいつはいかゞいたしませう。

勝頼　打やつて置け。そのうちに息が切れるだらうよ。

――幕――

光秀と紹巴

人　物

明智光秀
紹　巴
明智左馬助
同　次右衛門尉
齋藤内藏助
藤田傳五
溝尾勝兵衛
野武士三人
侍者、飛脚など

（一）ノ一

時は、五月二十八日夜。
所は、愛宕山の西の坊。

晝間の連歌興行に用ゐた文臺が、書類筆硯などを載せたまゝ置かれてある。その側にほの暗い燈火が置かれてあつて、寢床を並べて寢てゐる二人の姿をかすかに照らしてゐる。一人は明智光秀（五十五歲）で、一人は連歌師里村紹巴（五十歲くらゐ）である。光秀、ふと何者かに脅かされたやうに起上つて、室内を見廻し、やがて窓を開けて外を見る。紹巴も頭を持上げて、迂散くさい目で光秀の方を見る。光秀、何か考へながら寢床へ戻つたが、横になるのを忘れてゐるやうに、蒲團の上に坐る。

紹巴、起上る。

紹巴　殿樣は御氣分がお惡いので御座いますか。

光秀　いや、氣分は惡くはない。（慌てゝ打消して）おれは面白い句を考へてゐたのだ。

紹巴　面白い句と仰有るのは？（光秀の顏を見守つて）今日の百韻の連歌のうちでも、殿樣のお作りなされた發句はことの外凜然としてゐるのに驚きましたが、それに飽足りないで、もつと奇拔な面白い句をお考へ遊ばしてゐるので御座いますか。

光秀　いや、年甲斐もなくあんな血氣に早つたやうな句を作つたことを、おれは後悔してゐる。古格に通じた其方などの氣にも入らないに違ひない。

紹巴　（感慨を籠めて）わたくしどもの守つてゐる連歌の道はもう末で御座います。誰れも彼れも、前人の摸倣ばかりをして、千篇一律無味乾燥になりましたから、近年

ます〳〵連歌の衰へるのも無理は御座いますまい。山崎宗鑑や荒木田守武の開いた俳諧の道に志す者を、一槪に下賤な好みとして嘲る譯にはまゐりません。

光秀　其方がそんなことを云ふのは不思議だよ。應安の新式目とか、宗祇や兼良卿の新式追加とか、舊來の連歌道の講釋を後生大事に聽かせて吳れてゐた紹巴先生が、今日の卑俗な流行を是認するのは可笑しいぢやないか。

紹巴　さう仰せられると一言も御座いません。……わたくしも今夜は眠つてゐながら、いろ〳〵と物を考へて居りました。

光秀　其方はさつきまでよく鼾を搔いてゐたよ。

紹巴　でも、あなた樣がをり〳〵溜息をお吐き遊ばすのを、夢のうちに耳に入れて居りました。

光秀　おれが溜息を吐いたか知ら。それは其方の夢ぢやないか。……おれは今日、連歌を終へたあとで、直ぐに丹波へ歸城すればよかつたのに、皆んなの風流な話に引込まれて愚圖々々してゐるうちに歸りそこねてしまつた。こんな靜かな所で考へ事をしてると、却つて頭の疲れるものだな。其方などは氣樂で羨ましいよ。

紹巴　それはあなた樣は中國筋御出陣の日が迫つて居りますから、何かとお氣遣ひをしていらつしやるので御座いませう。

光秀　おれも長い年月、戰場では艱難辛苦して來たのだ。今度の門出に格別に氣を惱ます譯はないのだが、この頃の蒸暑い鬱陶しい空模樣がおれの頭を壓しつけるやうで爲樣がないよ。今も外の爽かな夜風に吹かれて頭を冷すつもりだつたが、今夜は外の風もじめ〳〵していけない。……かういふ時には氣持のいゝ晴々とした句は思浮ばないものだな。

紹巴　左樣で御座いませうか。でも、「時は今天が下知る五月哉」……御元氣過ぎるほどのいき〳〵とした名句では御座いませんか。

光秀　あんな句が何で名句なことがあるものか。徒らに文字を並べただけのものだ。西の坊の脇も平凡であつたが、其方の附けた第三の句だけは、何だか譯がありさうだ。意味深長に思はれるよ。おれは、さつきも、獨りでその句の意味を考へてゐた。……「花落つる流れの末を關とめて」

紹巴　（慌てゝ打消すやうに）わたくしの句には何の意味も御座いません。

光秀　いや、さうであるまい。連歌興行の折から、其方の目がおれに何か云つてるやうに思はれてならなかつた。不斷は剽輕な風流人の其方の顏がおれには眩しくつてならないのだ。

紹巴　どうか左樣なことを仰せられないやうに（恐怖に打たれたやうに）わたくしには、今日はあなた樣の御眼力が胸に響いて怖う御座います。

光秀　いや、其方の眼力が恐ろしいよ、耳を留めて聞いて見ろ。何處かで梟が鳴いてるだらう。

紹巴（耳を澄まして）なるほど鳴いて居ります。それに一時止んでゐた雨の音がまた微かに聞えだしました。

光秀　外は眞暗だ。おれが生れてから見たことのないほどに氣味の惡い眞暗な闇の夜だ。その闇の中に梟が鳴いてゐるが、其方の目が梟の目のやうにおれには見えるよ。

紹巴　どうか左樣なことは仰せられないで、お心を鎭めておやすみ遊ばしませ。夏の短か夜は明けるに間も御座いますまいから。

光秀　おれはさつきは、夜の明けるのを待焦れて、窓の外を覗いて見たのだが、今其方の顏を見てゐると、もつと夜が續けばいゝと思はれるのだ。

紹巴　あなた樣の仰有ることが、わたくしにはどうも合點がまゐりません。

光秀　おれも合點が行かない。（燈火の方を見て）そこの弱々しい燈火を、おれの溜息で吹消したら、部屋の中も眞暗だ。外の暗さにまけない闇の夜になるのだ。おれと其方とが二人きり、闇の世の中に差向ひでゐることになるのだ。

紹巴　どうか燈火はお消しなさらないやうにお願ひ申します。

（ふと、窓から洩れ來る風で燈火が消える。舞臺眞暗になる。）

紹巴（震へ聲で）殿樣どうなされました？

光秀　おれはどうもしない。燈火は自から消えたのだ。……其方とおれとは暗闇の中に向ひ合つてゐるのだが、梟のやうな其方の目では光秀の心が見えるのか。

紹巴　わたくしはあなた樣の御最屓に預つてゐる平凡な連歌師で御座います。どうしてあなた樣のお心の中が分りませう。……わたくしは燈火を持つてまゐりませう。

光秀　まあ待て。……其方は晝間、連歌興行の最中に、おれが本能寺の溝の深さ淺さを訊ねたら、勿體ないお訊ねだとおれを咎めたではないか。この頃降りつゞく五月雨に、何處の溝も水量が增したであらうのに、それを訊ねたのが何故いけないのだ？

（紹巴答へず。）

光秀　オイ、紹巴、返事をしろ。……おれの心に疑ひを掛けてゐる者は、天下に其方一人だ……。おれが句作に心を取られて、粽を包葉のまゝ嚙つたのを、其方はうろんな目付で見てゐた。……おれの溜息の數までも數へてゐ

たのだらう。

（紹巴答へず。直ぐ側で梟が鳴く。）

光秀　貴様は誰までも梟の眞似をしておれを脅かすつもりか。

（そこへ、ふと、小姓吉之丞が手燭を持つて入つて來る。光秀一人が端座してゐて、紹巴の姿は見えない。）

光秀　紹巴は何處へ行つた？

小姓　わたくしどもの臥所へまゐつて居ります。

光秀　紹巴を此處へ呼べ。それから、夜明け前に出立するから、其方どもゝ今から仕度に取掛れ。

小姓　はい。……まだ眞夜中で御座いますが。

（小姓は燈火を點ける。）

光秀　晴ければ松明の用意をさせろ。闇にも雨にもかまはないで急いで丹波へ歸るとおれは決心した。

小姓　お供の衆に左樣申傳へます。

（小姓、次の間に入る。）

（光秀、文臺を引寄せて、連歌用の懷紙に向つて、發句を書きつける。）

（紹巴は恐る〳〵入つて來る。）

光秀　これを讀め。

（紹巴、懷紙を受取つて讀みながら、光秀の顏色をぬすみ見する。）

光秀　「時は今天が下知る五月哉」（凛然と言放つて）……おれは闇を冒して雨を冒して歸城する決心をしたよ。それで、其方をも一しよに連れて行かうと思つてゐる。

紹巴　（當惑して）わたくしに龜山までお供しろと仰有るので御座いますか。

光秀　いやとは云ふまいな。

紹巴　御仰せ付けは有難う御座いますが、旅の用意にいたして居りませんので、一度歸宅いたしました上で。

光秀　それはいかんよ。用意も何も入るものか。……其方の目付顏つき言葉つきの一つ一つが、おれの心を動かしてゐるのだ。梟のやうな其方の目がおれの心を突つゝいてゐる。おれは其方を離す譯には行かない、龜山へも連れて行く。戰場へも連れて行く。おれの發句の意味が實際にどう働くか、其方のその目でよく見るやうにしろ。

紹巴　臆病者のわたくしは、戰場は恐ろしう御座います。

光秀　今日のおれの心の動きをいろ〳〵に監視してゐた其方だ。これから先きも、おれの側に附添つてゐて、よく見てゐるといゝ。（脇差を手に執つて）おれはお前と寢床を並べて、連歌の話をしてゐる間に、いく度この刀に手を掛けようとしたか知れなかつたのだが、今は其方に對して毛頭害意を持つてゐないから安心してゐろ。

紹巴　（おど〳〵しながら）お殿樣は何故今日に限つてわ

たくしをお惜み遊ばすので御座いませうか。

光秀　安心しろ。只今は決して其方を惜んでゐないよ。躊躇逡巡してゐたおれを其方は刺戟して、行くところまで行くやうに決心させて呉れたやうなものだ。今書いた發句と、晝間書いて神前に收めた連歌の發句と、同じ文字でも、おれの心の現はれが違ふのが、其方に分らないことはあるまい。……晝間はまだ文字に遊びがあつた。

紹巴　何の御決心で御座いますか。

光秀　寢呆けるな。……其の方の首を出陣の血祭りに備へるかはりに、其方を召連れて、闇の夜を驅廻るのだ。おれの發句かおれの出陣の旗じるしだ。……さつき其方に云つたやうに、人眞似ばかりして古くさい文字の並べつこをしてゐる連歌師も、生命懸けの戰場を往來したなら、少しは活氣のある句か作れるやうになるだらう。

紹巴　いえ、わたくしどもは、師匠讓りの連歌の眞似事さへいたして居ればよろしいので御座います。大それた望みを持つては居りません。

光秀　自分で望まなくつても、其方はおれと一しよに行くところまで行かなければなるまい。其方はおれの目の屆くところから放す譯には行かないよ。覺悟をしろ。

紹巴　（やうやく決心したやうに）ハイ。……では、何處までゝもお伴いたしませう。

光秀　おれは馴染の深い其方を決して苦しめようとは思つてゐないよ。たゞおれの心に最初疑ひを挾んだ其方を打やる譯に行かないのだ。だから其方も覺悟をして、行く先々で面白い句でもつくつて、おれを慰めて呉れ。

（そこへ、小姓入つて來る。）

小姓　御出立の用意が調ひました。

光秀　さうか。……紹巴先生も丹波へ御同行なさるのだ。（紹巴に向ひ）さあ、行かう。一しよに闇の中をつゝ走らう。

（光秀、紹巴の腕を取つて引立てる。）

（一）ノ二

闇の中を松明で道を照らして、四五騎が駛せてゐる。そのうちの一人は光秀で、一人は紹巴である。紹巴は半死人の如く喘ぎ〳〵隨いて行く。

光秀　鬱陶しかつたおれの頭も次第に晴々しくなりかけたよ。東の空もいくらか白んで來たではないか。今日は久振りで五月晴のうらゝかな空が見られさうだな。

紹巴　御意に御座います。（苦しげに云ふ）

光秀　光秀はもう、昨夕のやうに溜息ばかり吐いてはゐないぜ。（ふと、向うを見つけて馬を留める）みんな馬を留めろ。向うから怪しい奴がやつて來る。……紹巴。其

方の目ではあれが何だと思はれる？

紹巴　さあ、何で御座いませうか。

光秀　吉か凶か。先見の明のある其方に分らないのか。……燈火を持つて夜道を急いで此方へまゐる奴は、おれの前途の運に關はりがありさうだ。

紹巴　御殿樣の御運に關はりのあるかないかは分りませんが、今時こんな淋しい野道を通つてゐる人間は、たゞ者では御座いますまい。……さう云へば、わたくしも、何のために殿樣にお隨き申して、こんな夜道を通つてゐるか、われとわが身が分らなくなりました。（泣言のやうに云ふ）

光秀　歌讀みといふ者はよく／＼意氣地がないものだ。（笑ふ）

（そこへ、飛脚某が急足で入つて來て、ふと、光秀の一行を見て驚く。會釋して道を避けようとする。）

光秀　オイ、待て。其方は何者だ？

飛脚　龜山のお城へまゐる者で御座います。

光秀　龜山の城へ？……おれはさつきからさうだらうと思つて見てゐた。……其方はいゝところでおれに會つたのだ。龜山まで行くには及ばん。用事を云へ。聞いてやらう。

飛脚　（相手の顏を注視して）あなた樣は龜山のお殿樣でいらつしやいますか。

光秀　おれが光秀だ。おれの顏も知らないやうな雜兵を使者に寄越したのか。……そんなことは兎に角、早く用事を云へ。

飛脚　森お亂所樣からの御書狀を持參いたしました。

光秀　何。蘭丸からの手紙？（昂奮して云つて）見せろ。

（飛脚、背負つた包の中から文箱を取出す。從者の一人、それを光秀に捧ぐ。光秀それを開けて、從者の差出した松明の光にて讀む。）

光秀　承知した。

（讀終るとさう云つて、ふと、手紙を松明の火にて燃す。）

飛脚　（それに驚きながら）お亂所樣への御返事は承はらせて頂く譯にはまゐりますまいか。お殿樣へ確かにお屆申上げた證據を頂きたう存じます。

光秀　おれの返事が欲しいといふのか。欲しければ返事をしてやらう。

（光秀、咄嗟に飛脚を斬殺す。紹巴、その他の從者驚く。）

光秀　信長公の御上意に、中國出陣の用意が出來たなら、人數のたきつき、家中の馬などの樣子を見たいから、早速引連れて京へ上れと仰せられたと、蘭丸からおれに知

らせて來たのだ。主君の御寵愛を笠に着て、權柄づくでおれに物を云ふ猿の小忰の手紙を燒いて、使者を斬つた。(泰然として云つて) 紹巴にはおれの心が分つてゐるだらうな。

紹巴　虚弱なわたくしは、疲勞して夢のやうでございます。

光秀　もう一走りだ。みんな急げ。

(光秀馬を走らす。)

(一)ノ三

龜山城外の廣場。六月朔日の夕暮。

明智光秀、小姓吉之丞を連れて出て來る。

光秀　紹巴は城内の何處にもゐないと云ふのだな。

小姓　午の刻までは、あの方(かた)は死人のやうな顏して寢てばかり居りましたが、暫くたつて部屋を覗くと、何處へか行つて姿が見つかりません。

光秀　出陣の準備に取りまぎれて、あの男のことは忘れてゐたのだ。……あの臆病者。逃げたつてどうもしないだらうが、念のため、も一度搜して見ろ。

(小姓出て行く。光秀床几に腰を掛けて、五月晴れの夕空を仰ぐ。そこへ、明智左馬助、同次右衛門尉、齋藤内藏助、藤田傳五、溝尾勝兵衞が入つて來る。)

左馬助　皆んなを召連れてまゐりました。

光秀　(ふと元氣づいて) かうして五人の揃つたのを見ると、おれも非常に心丈夫だよ。

左馬助　殿には人拂ひをなされて、我々五人の者に、火急な御談合があると云ふのだ。(他の仲間に向つて云ふ)

光秀　おれ一人でよく／＼物を思つてゐるよりも、早く其方だちに相談すればよかつた。長い間おれと艱難を共にして呉れた其方だちに、おれの心中を打明けるのを躊躇したのは愚かなことであつた。

内藏助　殿には先日來、ひどく物を案じていらせられたやうに思はれました。愛宕山御參籠を終へて御歸城なされた時には、殿の御顏色はひどくお窶れなされたやうに拜察いたしました。

光秀　愛宕山中の一夜は、おれも氣が狂つたかと思はれるほどの苦勞をしたよ。一夜のうちに頭の髮も白くなつたかと思はれる。(苦笑を洩らして、ふと調子を變へて) さつきこの廣場で人數調べをした時に、内藏助は、大丈夫一萬三千人は揃つてゐると斷言したが間違ひはあるまいな。

内藏助　それに相違は御座いません。皆んなよく食つて充分に休息してゐる元氣者ばかりで御座いますから、中國へ押出しても、羽柴殿の軍勢に勝るとも劣る氣遣は御座いますまい。

光秀　それは賴もしいな。（喜色を浮べて向うを見る）

次右衞門尉　（もどかしさうに）我々五人の者への內密の御談合は何事で御座いませうか。出陣の手配りはすでに出來上つてゐるので御座いますが。

光秀　……まあ、おれの申すことを心を落着けてよく聞いて吳れ。……おれも上樣のお取立てゞ、三千石の小身から、俄かに二十五萬石も拜領いたすやうになつたのだが、岐阜表で三月三日の節句には、大名高家列座の前で、面の皮を剝がれるやうな目に會はされたし、その後、信州上諏訪の御本陣では、欄干に頭を押付けられて毆り飛ばされて、衆人稠座の中で恥を掻かされた。今度は今度で、德川殿御饗應のことから、無殘なお叱りを受けて、俄かな西國出陣を仰せつけられた。こんな有樣では、この次には、どんな我身の大事に及ぶかも知れないと、おれは案ぜられるよ。

次右衞門尉　殿の御胸中は御推察申上げて居ります。

傳五　わたくしども、人知れず無念の淚を呑んだことも御座いました。

光秀　この年齡になつて、子供か何ぞのやうに、打擲されてゐるのを見た者は、さぞ腑甲斐ない奴だとおれを嘲るだらうな。

勝兵衞　上樣はかやうな御氣象だとお思ひになつて、御忍耐遊ばしたらよろしからうと存ぜられます。上樣は特別に殿に對しておにくしみを持つていらせられるのでは御座いますまい。

光秀　勝兵衞はおれを忍耐力の薄弱な男とでも思つてゐるのか。

勝兵衞　決して左樣のことは……。

光秀　いや、今はくど〳〵と愚痴をこぼすために、其方どもを寄集めたのではないよ。おれは非常な決心をしてゐる。

（五人は目を凝らして光秀を見上げる。光秀は床几を下りて、敷皮の上に居直り、五人の者に近く接す。五人は光秀の言葉を待設けてゐる。）

光秀　……老後の思出に、一夜なりとも天下をおれの者にしたいと決心をしてゐる。（獨言のやうに云ふ）

（五人の者驚いて言葉を發せず。）

光秀　有爲轉變、榮枯盛衰の世の習ひだ。一日たりとも望みを遂げればそれでいゝと覺悟を極めた。……其方だちが同意して吳れなければ、おれ一人で本能寺へ斬込んで、腹を掻切るまでのことだ。……其方だちは何と思ふ。

（少時沈默の後。）

左馬助　殿御一人の御胸中で左樣思召された上は、天知る地知る我知ると申すたとへの通り、そのまゝでは濟みま

すまい。まして、五人の者にお打明けなされたのだから、御實行遊ばす外はあるまいと思はれます。

内藏助　これほどの大事をよくも御決心遊ばしました。

次右衞門尉　お目出たう存じます。私ども、多年の胸のつかへが下つたやうに存ぜられます。

傳五　わたくしも双手を擧げて御同意申上げます。

光秀　（勝兵衞を見て）其方は何と思ふ。おれにもつと忍耐しろと申すか。

勝兵衞　どういたしまして。明日から、わが殿を上樣として仰ぎ奉られるやうに相成ました。こんな喜ばしいことは御座いません。……この上の御談合は御無用かと存ぜられます。

光秀　五人が五人とも同意してくれて、おれも滿足だ。こんな時には、一人や二人は、唐人の古い言葉など持出して諫言立てをしたがるものだが、皆んなが符節を合はせたやうに意見が一致したのは愉快だ。

左馬助　この頃は夜が短かう御座いますから。これから直ぐに發足いたしませう。ほの〴〵と夜の明ける頃に本能寺をひた〴〵と取卷いて、成べくなら、五つより前に本能寺を片付けて、それから妙覺寺の若大將を討果すやうに手順をつけることにいたしたう御座います。

光秀　おれもさう思つてゐた。……人數の少い本能寺を片付けるに手間暇は入らないが、何よりも味方の士卒に二心を起させぬやうに注意するのが肝心だよ。

左馬助　その御心配は御無用で御座います。右へ向はうと左へ向はうと、士卒どもの出陣の氣持にかはりは御座いません。毛利の軍勢へ斬込むのも、本能寺へ矢を向けるのも彼等の氣持に差別は御座いません。……京近くなつてから、殿が天下樣にお成り遊ばすと觸れ廻らせませう。下々の者草履取り以下にいたるまで、手柄次第で知行を與へると觸れましたら、皆んな揃つて喜び勇むに相違御座いません。

内藏助　かう極つたら一刻も時を遲らせてはならない。速刻出陣のお觸れを廻さなければならん。

（皆々立上る。）

光秀　氣おくれをするな。

（あとから立上る。）

（二）ノ一

六月十日の日暮れ頃。

下鳥羽の陣屋。

光秀、入浴後の輕装にて、例の陰欝な顔して獨酌でチビ〳〵やつてゐる。

そこへ、侍者が入つて來る。

侍者　紹巴とのがお目通りを願つて居りますが、いかゞいたしませうか。

光秀　紹巴が來ようとは思ひも掛けぬことだ。

侍者　上樣は御多用でお疲れ遊ばしてゐるからと、一應は斷わりましたが、たつてお目通りいたしたいと申しますので。

光秀　會つてやるから直ぐに此方へ通せ。

侍者　ハイ。

（出て行くと、光秀また、物を考へながら盃を舐める。をり／＼團扇をも使ふ。）

（紹巴、恐る／＼入つて來て、恭しく平伏する。）

光秀　其方にまた會へるとは思はなかつたが、あの後何處で何をしてゐた？

紹巴　戰場を見せてやらうとの仰せに背きまして、お許をも乞はないで、龜山のお城を退去しまして、申譯のいたしやうも御座いません。

光秀　それはもうすんだことだよ。……しかし、今度の事には其方も關係があるのだから、時々は其方のことを思出してゐたよ。

紹巴　恐れ入ります。（やゝ安心して）上樣がわたくしを憎んでいらつしやるやうに思はれましたので、お城を拔出して、丹波の山中に二三日潜んで居りました。路用の金は持つてゐませんので、喰ふや喰はずのひどい思ひをいたしました。

光秀　馬鹿な奴だ。其方には骨折賃を與へようと思つてゐたのに。

紹巴　上樣の御大業に何一つお役に立たなかつたわたくしにまで、御勝利をお裾分けをして下さるので御座いますか。天下樣におなり遊ばしたお噂を、山中で承りまして、それでは、お祝ひに上らなければならないと思ひまして、急いで京へ戻つてまゐりますと、洛中の地子御免恕の有難い御高札を拜見いたしまして、御仁政に感涙を催しました。

光秀　梟のやうな目をした其方も、おれの側に隨いてゐなかつたから、眞相はなんにも分らないのだな。……まあ一杯やれ。……愛宕山の西ノ坊の一夜のことが、おれには遠い昔の夢のやうに思はれるよ。

（光秀の差す盃を紹巴は受ける。）

紹巴　上樣お手づからのお酌は勿體なう御座います。それに、あまり御酒をお嗜みにならない上樣が、今夜はお一人で召上るのは不思議に思はれますが。

光秀　成程さう思ふだらう。おれもこの頃は連歌をつくる氣持にはなれず、外に鬱憤晴らしの手段がないから、酒でも飲むことにしたのだよ。

紹巴　さすがは風雅の道を辨へていらせられるので、偉い御身分で、お手酌を樂んでいらせられるのは恐入ります。

光秀　ところが、かうしてゐても、なか／＼風流な氣持にはなれないのさ。酒といふものは人の心を浮立たせるものと極つてゐるので、その名前に惚れて無理に飲んではゐるものゝ、ちつともうまくないよ。心が浮立ちもしない。……酒と云へば、おれは七杯入りの大杯を內府殿に押付けられたことがあつたのだ。御辭退すると、酒を吞まんのなら、これを吞めと、鼻先へ白刄を指しつけられたので、おれは夢心地で大杯を吞干したが、內府殿は、さては生命は惜しいものなんだなと冷笑なされたよ。

紹巴　內府樣は殘忍な方で御座いました。

光秀　最早おれに、飲めない大杯を押付けるものは、天下に一人もなくなつた譯なんだが、それがおれに取つていいことだか惡いことだか、おれにサツパリ分らなくなつた。

紹巴　それはお身分が偉くお成り遊ばすほど、お心遣ひも多う御座いませう。わたくしどもは、上樣御仁政の下に安穩に日が過されますれば、それで滿足いたすので御座います。

光秀　其方はおれの力で天下がをさまると思つて訪ねて來たのか。愛宕の山を闇の中で突拔けて來たおれの名が天下に輝きだしたのを慕つてやつて來たのか。

紹巴　もはやわたくしに對するお疑ひは解けたことゝ存じまして。

光秀　其方があの時おれの事を本能寺へ注進するか知れないと氣遣つてゐたのだが、それはもう濟んだことだ。……これからおれの側にゐて吳れ。決して無慈悲な取扱ひはしないよ。……たとへ、また連歌の遊びをする氣にはなれなくつても、其方のやうな男が側にゐて吳れると、おれは好きでもない酒をチビ／＼飲むよりは、氣晴らしになつていゝのだ。

紹巴　上樣のお側に置いて頂ければ、これほど仕合せなことは御座いませんが、戰場のお役に立たないわたくしが、お側でまご／＼してゐましては、却つてお目障りになりさうに思はれます。

光秀　いや、其方も知つてる通り、おれは、內府殿や以前の朋輩とは好みが違つて、女子供を側に置いて酒宴を催すことには、あんまり興味をもつてゐないのだよ。其方のやうな男と、とぼけた話でもしてゐる方が、おれの柄に合つてゐるのだらうな。……ところで、紹巴、おれはひどく人氣の惡い男だよ。大望を遂げた今日、しみ／＼それに氣がついたよ。松永彈正でもおれほどには世間から毛嫌ひされてはゐなかつたらうな。

紹巴　わたくしには左樣存ぜられませんが……。
光秀　其方は愛宕の山でおれの心を見破つた最初の男だが、今日以後のおれの運勢をどう思つてゐる？（相手を注視する）
紹巴　わたくしはたゞの連歌師で御座います。上樣の御運勢のよろしいやうにと願つて居りますばかりで、世上の事は何事も分りません。
光秀　今まで神隱しに隱されてゐたやうな其方が、今日だし拔けにやつて來たのは、何か深い譯がありさうにおれには思はれるのだが。……兎に角、今夜から、おれの陣所へ留めて置くから、その覺悟をしてゐて呉れ。荒武者ばかりに取りまかれてゐるので、おれの息が詰りさうなのだ。
（紹巴當惑してゐる。そこへ、内藏助が入つて來る。）
内藏助　紹巴殿か。悠長らしく酒のお相手などして。……早くお立ちなさい。
光秀　さう六ヶ敷云ふな。この男は陣屋に留めて置いて呉れ。この男はおれの運を左右する魔力を持つてゐさうに思はれてならないのだから。……今日だし拔けに訪ねて來たのが、おれの仕事に關係がありさうに思はれてならないのだよ。この男を歸さないで留めて置いて呉れ。……紹巴、其方は暫く次の間に控へてゐろ。

（紹巴、おど〳〵して入つて行く。）
内藏助　あんな坊主をなぜお相手になさいます。（不機嫌に云つて）……只今、郡山から使の者が歸りましたが、筒井順慶はお味方に加はる望みは全くなくなりました。郡山の城内に兵糧を貯へて、我々に敵たふ準備をしてゐるさうで御座います。此方から持出した有利な條件さへ受入れる見込みはなさゝうで御座います。
光秀　あの打算的の男がさう思つたのは、いよ〳〵わが軍勢に勝目がないと見込んだのだな。
内藏助　どうせ他人は頼みになりません。われ〳〵だけでやれる所までやるより外爲樣が御座いますまい。
光秀　婿の忠興にさへ憎まれたおれだが、かうまで四方八方から愛想を盡かされようとは思はなかつた。……しかし、内藏助、其方たちはまだおれに背かうとはしないか。
内藏助　何を仰せられます。衣服に火のついたやうな只今の場合に、無用な口を利いてはゐられません。
光秀　それもさうだ。速刻皆んなを集めて置け。今後の方針を極めよう。……どうせ、龜山出立の際のやうに、衆議一決といふ譯には行くまいな。
内藏助　しかし、仲間内は主君と生死を一つにする覺悟がついて居りますから、それだけは御安心遊ばしませ。
光秀　ウ、ン。（氣乘りのしない返事をする）

（内藏助出て行く。光秀はなほ盃を舐めてゐる。顏には憂悶の色が加はる。ふと側の團扇を取つて煽ぐ。やがて、隣室から唸り聲が聞える。光秀不思議さうに耳を傾けて座を立ちかける。）

光秀　誰れだ？　唸つてゐるのは。

紹巴　わたくしで御座います。紹巴で御座います。

光秀　どうしたのだ。腹痛でも起したのか。

紹巴　只今内藏助樣に手足を縛られました。

光秀　（微笑して）内藏助に縛られたのか。なぜそんな目に會はされた？

紹巴　生死の騷ぎの場合に邪魔つけだ、不吉な奴だとお怒りになつて、あの榮螺のやうな拳でわたくしの頬骨をお毆りになりました。それでわたくしを柱に縛りつけて、此處を動くなと仰有つて行かれました。

光秀　内藏助は素早い奴だ。……龜山ではおれが其方の身體を自由にさせて置いたから逃げられたが、さうして置けば大丈夫なんだ。

紹巴　どうかお揶揄ひ遊ばさないで、お小姓衆でもお呼びになつて、わたくしの縛めをお解きなすつて下さいまし。

光秀　連歌興行の折、おれの旗上げの心を最初に讀んだ其方だ。おれが、ドン詰りまで行つて腹でも切る時には、辭世の發句を讀むから、其方が脇をつけて呉れ。……連歌師は花見月見の句は讀めても、死生の境にはそれどころでないと云ふのか。……しかし、無意味に苦しめては可愛さうだ。おれが縛めを解いてやらう。

（光秀、座を立たうとしてゐるところへ、侍者某アタフタと入つて來て、跪くや否や。）

侍者　羽柴筑前殿の數萬の人數が、攝州境に近づいたとの御注進が御座いました。

光秀　なに、秀吉が、……秀吉がもう此方へ向つたのか。

（光秀慌たゞしく立ち上る。）

（他の侍者某入つて來る。平伏して。）

侍者　上樣には速刻御評定の席にいらせられるやうにと、内藏助樣がお願ひ申して居ります。

光秀　只今出掛けるところだ。

（光秀出て行く。）

（「どうぞ、わたくしの縛めをお解きなすつて下さいまし」と、紹巴の聲。）

（「それどころではないのだ」と、光秀の聲。）

（二）ノ二

陣屋の一室。あたりは薄暗い。

紹巴紐で縛られてゐる。

齋藤内藏助、溝尾勝兵衛と一しよに評定の室から出て

來る。

内藏助（昂奮して）此方が堅まつてゐないところへ、かう早く秀吉に乘込んで來られちや、味方に勝目はないよ。一先づ坂本へ退却して籠城して工夫を凝らすのが差當つての良策だが、おれの說を用ひないと、大將もあとになつて思當るだらう。

勝兵衞　しかし、秀吉に恐れて退却したやうで、味方の意氣が沮喪するかも知れないよ。どうせ此方には世間の人望がないのだから、破れかぶれでやつゝけるより外爲方があるまい。上樣も腹の中はさうなんだらう。お前も我慢して、多數の意見に從つて、やれるまでやつて見て呉れ。

内藏助　どうせ、おれ一人で退却する譯には行かないからな。

（二人はさう話しながら、ふと、紹巴の方を見る。）

紹巴　内藏助樣。お慈悲で御座います。この縛めをお解きなすつて下さいまし。

内藏助　坊主まだそこにゐたのか。

勝兵衞　紹巴どのぢやないか。何をして縛られたのだ。

内藏助　こいつ、大將のところへ胡麻を摺りに來やがつた。それで忌々しいからおれが縛つたのだ。

勝兵衞　可愛さうに。

内藏助　連歌師だの繪師だの禪坊主だの。今日の時世に煩い奴だ。大將もこんな奴に取合つてゐるから、勇氣が減つて氣が迷つていけないのだ。

勝兵衞　しかし可愛さうだな。風流といふ名は立派だが、贔屓の旦那がなければ生きてゐられないのだから。

内藏助　此處の大將が天下を取つたから御機嫌伺ひに來たのだらうが、今に、秀吉の軍が勝ちでもしたら、今度は猿奴のお髯の塵を拂ひに出掛けることだらう。

（さう云ひながら行過ぎる。勝兵衞も一しよに出て行く。紹巴怨めしさうに見送つて、自分で縛めを解かうとして藻搔く。）

（そこへ光秀が考へ事をしながら入つて來て、紹巴に氣付かないで行過ぎようとする。）

紹巴　上樣、お慈悲で御座います。

（光秀、ふとその方に氣がつく。）

光秀　其方はまだそこにゐたのか。

紹巴　どなたにお願ひしても紐をほどいては下さいません。

光秀　其方がもう少し辛抱してゐれば、戰場に連れて行つてやらう。

紹巴　さつき、上樣は縛めをほどいてやらうと仰有つたのをお忘れになつたのです。……さつきお手づから酌をし

て下すつたやうに、恐れながら、お手づから縛めをほどいて下さいまし。

光秀　さつきと今との間に、光秀の胸には槍の穂先きが突きつけられたのだ。其方の縛られた身體はおれの身體見たいだ。

紹巴　わたくしの目の前にも白刃が突きつけられてゐるやうに見えます。どうぞお許しなされて下さいまし。

光秀　なに、おれは其方を斬りも突きもしないよ。お前が秀吉の間者になつておれの軍の準備を索りに來たのぢやあるまいし。

紹巴　わたくしは上様の御勝利をお祝ひに上つたので御座います。

光秀　上様だの、御勝利だのといふ其方の言葉は、冷かしのやうにおれには聞えるよ。… 其處に坐つてゐて、おれのために辭世の句の用意でもしてゐろ。

（光秀行過ぎる。紹巴怨めしさうに見送つてゐる。）

（雜武者幾人も通過ぎる。怪訝、輕蔑、さまざまな表情をして紹巴を見ながら行く。）

紹巴　わたくしも戰場へお伴いたします。縛めを解いて下さい。

（皆んな默つて行く。あたりは暗くなる。暫くして、覆面した野武士三人忍んで來る。）

甲　大丈夫、この陣屋は空つぽだ。（次の室へ入つて行く）

乙　オイ、誰れか縛られてゐるぜ。（紹巴の方を見る）

紹巴　助けて呉れ。

乙　お前は罪人か。

紹巴　お前たちは野伏か。おれが案内して一儲けさせてやらう。それなら、この紐をほどいて呉れ。

丙　そんなことを云つて、この男を信用出來るだらうか。

乙　刄物を持つてゐないから大丈夫だらう。古ぼけた弱さうな奴だ。

紹巴　おれは歌讀みだ。安心して縛めを解いて呉れ。

甲　待て待て。今の時世に人間の云ふことが信用出來るか。此處の大將は大恩のある信長公を暗打ちに會はせたのだ。さういふ世の中に迂濶に他人の云ふことが信用出來るか。

紹巴　なに、羽柴筑前とのが其處まで攻寄せてゐるのだから、此處の大將の壽命はもう知れたものだよ。

甲　どちらが勝たうと、おれ達の知つたことぢやないよ。負け軍の落武者どもの物の具を剝取るのが目のつけどころだ。

丙　全體お前は何をして縛られたのだ？

紹巴　（氣取つた口調で）此處の大將を打取るつもりで、頭を剃つて連歌師になつて入込んだのだ。

乙　それがばれて縛られたのか。誰れに頼まれてそんな危いことをやる氣になつたのだ？

紹巴　信長公のお身内の方のお吩咐だよ。

甲　お前は見掛けによらない太い奴だな。信長公の仇討を一人でやらうとしたのか。

紹巴　おれを助けて呉れ。あとで御主君に御褒美を貰つてやらう。

乙　そんな方なら、兎に角お助け申さう。

（乙は手早く紹巴の縛めを解く。）

甲　さあ、おれだちを案内しろ。

紹巴　おれに随いて來い。

（紹巴あわたゞしく駈出す。）

（二）ノ二

十三日の夜、深更。

小栗栖の田舎道。

野武士三人。紹巴、疲勞した樣子で一しよに歩いて來る。

甲　おれだちの目を忍んで逃げようたつて駄目だ。信長公のお身内の家來だと云つたのが、嘘でもまことでも、光秀公の御陣所へ突出すことにしよう。大罪人を引捕へたのだから、いくらかの御褒美が貰へるだらうよ。

乙　いくらの御褒美になるもんぢやあるまいが、二三日騙されてゐた腹癒せに突出してやらう。此處でぶち殺したところで一文にもなるもんぢやなしさ。

丙　何か由緒のありさうな男だが、おれだちの仲間に入らせる譯には行かないし。

紹巴　お仲間にでも何にでも入りますから、どうぞ生命はお助けなすつて下さいまし。

甲　天下樣を暗打に會はさうとした奴が弱い音を吐きあがる。

紹巴　本當はわたくしは、詰らない連歌師で御座います。

甲　さう云つて、おれだちを誤魔化さうとするのか。お陣所へ連れて行つて調べて貰つたら分ることだ。……おれだちもこの頃はいゝ目に會はなかつた。

乙　何處かへ御奉公しようとしたつて、今日の時世ぢや、何處の大名が勝つか負けるか分らんのだから。

丙　いや、強い方を選つて行つたつて、戰場へ出て殺されちや三文にもならないからな。どうせ生命がけなら、追ひつかはれないで、隙間を見て野稼ぎをした方が氣が利いてゐる。

乙　それにしても、この頃のやうに不漁（しけ）が續いちや爲樣がない。

甲　まあ、こんな坊主でも飯の種にして見るか。

丙　しかし、此奴は本當に、磔刑になるほどの大罪人だらうか。空巣ねらひのコソ〳〵泥棒だつたら、陣所へ連れて行つたつて、三文にもなりやしない。

乙　この面魂はどうしてもたゞの者ぢやないよ。……さあ、行かう。

（紹巴を引立てゝ行かうとしてゐるところへ、馬の音聞ゆ。）

甲　オイ。こんな夜更けに馬の音のするのは變ぢやないか。

乙　落武者だな。……占めた。隱れろ。（紹巴を引連れて、皆んなが藪陰に隱れる）

（光秀、二三の從者と、疲れた馬に乘つて、トボ〳〵としてやつて來る。藪の中から槍の穗先が現はれて、グサと光秀の脇腹を突く。紹巴月光にて藪の隙間から苦悶してゐる光秀の顏を見て驚く。光秀もそちらを見て驚きながら、トボ〳〵と行過ぎる。）

（その行過ぎたあとで、野武士と紹巴現はれる。）

甲　たしかに、一人だけはやつゝけた筈だが。（と、あたりを見まはす）

乙　血が垂れてゐるぢやないか。おれが見て來よう。（入つて行く）

紹巴　今のはたしかに日向守どのだ。

丙　お前が暗討に會はさうとした光秀公か。いゝ加減なことを云ふな。

紹巴　たしかにさうだ。おれは、あの方の謀反のはじめからしまひまで見せつけられた。おれだけが見たやうなものだ。おれも恐ろしい世を見せつけられたものだ。あの方もおれの方を見てゐられた。（震へてゐる）

甲　あれが大將なら、占めた。……さあ行つて見よう。

丙　用心しろ。あれが天下様なら、お供の者も相當の腕利きだらうぜ。

甲　なに、落武者に大將も草履取りも差別があるものか。へと〳〵になつて、半死人も同樣だ。おれが行つて見る。お前、この男の番をしてゐろ。

丙　あれが天下樣なら、天下樣を暗討にしかけたこの男なぞ何處へ連れて行つたつて、もう寶物にならないぢやないか。召取つても御褒美の種になりやしない。

甲　成程さうだ。……この坊主、三文の値打もなくなつた。どこへでも行きあがれ。

（紹巴、悲しいやうな悦しいやうな顏して、トボ〳〵と出て行く。）

――幕――

農村二日の出來事

人物

喜　作（二十六歳くらゐ）
小よし（二十二歳くらゐ）
仲　吉（二十四歳くらゐ）
七　造（六十餘歳）
寅太郎（四十近い歳）
おたき（六十歳くらゐ）
子　守（十三四歳）

一

梅雨時の霽れ間。烈しい午後の日が耀いてゐる。連山や、麥の熟した畝を背景として、路傍に荷車が置かれてゐる。荷車には刈られた麥が積まれてゐる。その側には、喜作と、妻の小よしとが、辨當を食し終つて休息してゐる。

小よしが食器や土瓶などを、空になつた飯櫃に入れて、風呂敷で包んで荷車にしばりつけたり、脚絆のゆるんだのを締直して足袋を穿直して、亂れかけた頭髮をちよつと氣にしたりなぞしてゐる間に、喜作は默つて汚れた手でバットを吸ひながら、空か山か向うの方を見てゐる。

喜作　（ふと、小よしを顧みて）おや、おら今夜一つ走り行つて來べいか。

小よし　（夫の方を見て）さう慌てなくつてもいゝぢやないか。五日や六日遲れたつて構はないだらうから、もつと暇な時にしなさい。それに手紙を見て直ぐ出掛けちや、いかにも此方がガツ／＼してゐるやうに腹を見られて却つてよくねえだよ。

喜作　そんな遠慮は餘計なこんだ。おら達の爲めを思つて云つて來たのだから、おらの方でも腹の底を打ち明けて、先方のお情を受けた方がいゝと、おら思つてるだよ。幸ひ今日は仕事も早く片付きさうだから、今夜一つ走り行つてくべい。

小よし　（夫の側へ腰を卸して）たつて今夜行きたいのなら行つてもいゝが、當てにしない方がいゝだよ。今までも當てごとは外れてばかりゐたでねえかな。死んだ父ちやんの云つたことだつて、お前やわしのためになることは一つとしてホントになつたことはねえだから。わしはもう、いゝ知らせなぞ聞きともねえだ。

喜作　おめえは量見が狹いからいけねえ。お互ひにまだ若いぢやないか。これからいゝ運がめぐつて來るに違えねえだ。おら確かにさう思つてるだよ。眞壁の伯父が急に大事な話があると云つて來たのも、おら達にいゝ事のある手はじめだせ。おら今朝から默つてゐたが腹の中ぢやあ大抵察しがついてゐただよ。

小よし　察しがついたちうて、どう察しがついたちうだい。話して見ねえな。

喜作　おめえがケチをつけるだからいやだ。おら一人の腹のなかにしまつて置くべい。（樂しさうな顏をする）

小よし（微笑して）　いつものやうに、人で蟲のいゝ事を考へてゐて、あとで泣つ面をするといゝや。

喜作　ホーレ。もうおらにケチをつけてやがる。おめえの惡いくせだ。お天氣ばかり續いたつてお目出度かあない、たまにや雨が降らざいけねえと同じ道理で、人間もたまにや泣つ面をするがいゝだ。

小よし　それもたまにやいゝだか知んねえが、この頃の空のやうに、毎日々々ジメ／＼降つてゐちやたまんねえ。折角よく實が入つた麥だつて腐つちまふぢやないか。種を播き散らしただけで抛つといた譯ぢやねえ。寢てるうちに育つた麥ぢやねえだに、肝心な時に雨に責められて腐らされてたまつたものぢやない。それに滿足に取れたにしても、この頃のやうに値が安くつちや算盤に合はねえのだから、來年から桑でも植ゑた方がいゝだよ。

喜作　おめえがさういきり立つても駄目なこんだ。この畝に桑が育つものなら、これまで誰れが麥なんぞ播くものか。土地の柄にねえものは爲樣がねえ。お天道樣が雨ばかり降らすちうて怒つたつて效がねえと同じこんだ。

小よし　效があらうとなからうと、腹の立つた時にや怒らなけきやならねえだ。

喜作　それだからおらだつても、なさけない時にや泣つ面をするんだ。……だけど、今日のやうに久振りに日が照つて、朝つぱらからいゝ音信が來た時にや、泣つ面したくつても出來ねえだ。（空か山か、向うの方を見詰めながら獨言のやうに）眞壁の伯父も歳を取つて强慾の角が折れたらしいから、今だ一人の甥の貧乏をちつとは氣にして、どうかしてやりたいと思つてるのだ。親爺の臨終に賴まれたことを伯父も忘れてる譯ねえだから……。

小よし　お前の蟲のいゝのはあきれたものだ。伯父さんは强慾の角を持つて棺桶の中へ入る氣でゐるんだよ。お前もいつも人のお情を手賴にしねえで、自分の腕一つで何かしでかす氣になれねえものかな。

喜作　だつておらこんなに働いてるでねえか。親爺が死んでからは、おら、二人前の仕事をしてるだよ。それで貧

乏したとしたつて、おらの所爲ぢやあねえ。（稍々興奮して云ふ）

小よし　わしはこんなに細つこい身體してるのに、年中荒働きをさせられて。（不平らしく云ふ）

喜作　だから貧乏はおめえの所爲ぢやあねえや。お母あがあんなに長患ひをしたのがいけなかつたのかな。……おら、家の中に病人が出來るのは大きらひだ。親爺が病氣に取つゝかれた時から家の中にケチがつきだしたのだ。おらの家にや何處かに病氣が巣をくんでるんぢやなからうか。

小よし　わしも今年の夏は大病に取つかれさうな氣がしてならねえ。（顏を顰めて胸を壓へながら）ホレ今も胸元がチクチクと針で突かれるやうに疼んでくる。

喜作　フンとか。脅かすでねえ。今朝からいゝ氣持になつてゐたのに、脅かすでねえ。おらは病氣は大きらひだ。

（氣を變へて）　さあ、もう一ツ働きすべいか。

（喜作が鎌を持つて立上ると、小よしも隨いてゆく。彼等が舞臺から消えると、七造とその息子の仲吉とが刈つた麥束を背負つて出て來て、喜作夫婦の休んでゐたところに腰をおろして、汗を拭く。）

七造　こりや喜サ公の車だな。（後を顧みて脊伸びして）二人揃つて來てるわい。

仲吉　聲掛けるのは止して與んな。（慌てゝ留めて）おら、あいつと會ふと仕事する氣になんねえから。

七造　あに云ふだ。

仲吉　何でもいゝだ。おら、あいつに會ふと仕事する氣になんねえ。お前が喜サ公と此處で話をしたけりや、おら、麥つ束も此處へ抛つぽり出して家へ歸るだ。

七造　あに云ふだよ。貴樣可笑しな奴だぞ。

仲吉　可笑しけや笑ふがいゝ。おら、あいつに會ふと仕事する氣になんねえ。

七造　貴樣は此の頃何とか文句をつけちや怠けようと思つてやがる。おらの年齡は今年いくつだと思てゐる？　荒仕事は貴樣にまかせて、おらは啣へ煙管で鷄の世話でもしてればいゝと思つてるだに、貴樣はその若さで、この年寄りのおらに二人前も働かせようと思つてるのか、罰が當るぜ。

仲吉　おら、罰が當つてもいゝだよ。首へでも足へでも、罰の當りたいところへ當りやがれだ。（自棄に云つてうしろを顧みる）

七造　（考へて）さう云へば喜サ公はこの頃おらの家へ遊びに來ねえが、貴樣は喜作といさかひでもしたのか。

仲吉　…………。

七造　喜サ公は人といさかひするやうな男ぢやねえが、ハ

テナ。……（ニヤリと笑つて）貴樣はあれの嬶(おつか)あが羨ましいのか。あんなお多福面があにが羨ましいだか。貴樣の嫁には小よしよりも何層倍(なんぞうばい)もの容色(きりよう)よしを連れて來てやらあ。

仲吉　（極り惡るさうに）そんな容色のいゝ女は何處にゐるだな。

七造　この村には醜い面(つら)した女ばかりだけれどな。他所(よそ)の土地には美しい女が數へ切れんくらゐゐらあ。貴樣も精出して稼いだら、おれが他所の土地からいゝ嫁を連れて來てやらあ。おめえは喜サ公よりは何層倍もいゝ男だ。あんな者を羨むにや當らねえ。（ひとりで與がつて云ふ）

仲吉　（眞面目に）お前の云ふことは嘘ぢやなからうな。

七造　あにが嘘なぞ吐くものかハヽヽヽ。さあソロ〳〵出掛べえ、（立上らうとする）

仲吉　おら、もつと休んで行かう。腰つ骨がだるいだから。

七造　これつぱかりの荷を背負つて腰も足もだるいつてことがあるか。此間(こなひだ)うちの雨でなまけ癖がついたのだな。今日のやうなたまのお天氣に、若い者が愚圖々々してゐちや冥利が盡きらあ。……さあ出掛けべい。（仲吉の背をつゝいて促す）

（そこへ、守つ子が背へ赤ん坊をしばりつけて出て來る。）

子守　喜作さんはゐねえかの。

七造　あしこにゐらあ。（後を指差して）喜作に用があるのか。

子守　お客が來たから大急ぎで歸(けえ)つて來いとあしこのお婆(ばあ)あに言傳(ことづか)つたのだ。

七造　どんなお客だ。

子守　どんなお客だか、わしや知んねえだ。（子守が奥へ入ると、七造父子はその後を見送る）

七造　喜サ公はおらの方を見てらあ。…　あちらの路を驅けて行つた。（仲吉の方を見て）おいらも出掛けべえ。

仲吉　おら、もつと休んで後から歸(けえ)らう。お前一人で先きへ行つといて吳んな。直ぐにあとから追付(おつつ)かう。

七造　氣儘な奴だな。早く歸(けえ)らねえと、お八つの團子をおら一人で喰つちまふぞ。

（七造が麥束を背負つて歸つて行く。仲吉は暫く動かないで、後を顧みたり空を見上げたりする。ふと何かを見つけて石を投げたりする。）

（そこへ子守が再び現はれる。）

仲吉　オイ、此處で休んで行かねえか。いゝ話聞かせてやらあ。

子守　……（背の子を綾しながら仲吉の前に立つて）お爺(ぢい)は家(うち)へ行つたのか。

仲吉　むん。おらお前を此處で待つて居たゞ。お前と一しよに歸らうと思つて。……いやかい。

子守　わしと一しよに歸つてどうするだよ。

仲吉　お前にこの麥を背負つて行つて貰はうかと思つてるだ。

子守　この子を背負つてる上に麥が背負へるか背負へねえものか、考へて見るがいゝ。（せゝら笑つて）一人でそんなずるいことを考へてゐたのけえ。だから人がお前の事を利口者だつて云ふんだよ。

仲吉　背負つてる子が邪魔なら、そこの溝の中へでも拋込んだらよかつぺえ。

子守　呆れたこんだ。この子はお前の子ぢやねえだよ。

仲吉　極つてらあな。おらの子ならそんな汚ねえ面して生れちや來ねえ。……お前もそんな汚ねえ面して、ギアギア泣きやがる餓鬼は小うるさくてたまんねえだらう。溝の中へでも拋げ込んでしまひねえ。子供が背中であばれてひとりでに落ちてくたばつたと云やあ言譯が出來らあ。おら手傳つてやるべいか。

子守　（思はず後退して）本氣でそんなことを云ふのけえ。おつかない人だよ。（子供を庇ふやうな身振をする）

仲吉　ハ、、、、。おら、そんなおつかねえ人間ぢやねえだ、おら、あいつを溝の中へ叩込んでやりたいと思つてもどういふものだか叩込めねえんだ。

子守　あいつと云つて誰のことだい。

仲吉　誰のこんでもねえ。おら一人でさう思つてるだよ。……お前はしよつちう背負つてるその餓鬼が背中から溝へでも谷へでも落つこちたら、身が輕くなつていゝだらうにと、たまに思ふこたねえのか。お前のやうな細つこけた身體に、そんな肥つた餓鬼を縛りつけてゐちや、重かんべえと思はれてなんねえが……。

子守　この子は見かけよりや重いんだよ。それに一日々々重つたるくなるやうで、わしや難澁してるだよ。

仲吉　それ見ろ、その子さへなけりや、お前も子守なんぞしなくつてもいゝんだぜ。そんな身體の贅石は、早くとつちまひたいと、お前も思はねえことあるまい。

子守　この子を贅石だなんて云はうものなら、この子のお母さんにどやされるだよ。……お前がそんな事を云つたから、この子が急に重くなつたゞ。（子供が泣き出す）うるせいよ。泣くでねえつたら。泣くと溝の中へ拋込むぞ。（子守は邪慳に子供をあしらひながら入つて行く。）

仲吉　オーイ。おらの麥背負つちや呉れねえんだな。（さう叫んでから、首垂れて物を考へてゐたが、やがて立掛けると、そこへ、小よしが刈つた麥束を背負つて入つて來て、荷車に積まうとして、ふと、氣味の惡

い目で此方を見てゐる仲吉を見る。)

小よし　仲さん一人けえ。……お天氣が續くといゝがの。

仲吉　お天氣になつたから忙しいだらう。お前も一人かい。

小よし　喜作は急用で家へ行つたのだ。もう歸つて來るだらう。

(麥束を置いて行きかけると、仲吉が、「小よしさん」と聲を掛けて呼留める。小よしは足を留める。訝しげな目付で相手を見るので、仲吉はちよつと口が利けないやうである。)

小よし　何かわしに用事があるのけえ。

仲吉　用事つてねえだけんど、おらお前に約束したことを思出したゞ。

小よし　(警戒するやうに)　わし、お前に何も約束された覺えはねえだよ。

仲吉　お前は忘れつぽい女だな。おらが牛の子を牽張つて箒尾が原で草を喰はせるところへ、お前やお久がやつて來て、おらを揶揄つたことがあつたぢやないか。その時、おら牛を育てゝいゝ値で賣れたら、お前やお久に何でも欲しい者を買つてやると云つたのだ。さうすると、お前達二人は、帶だか衣服だか指環だか、欲しさうな者を喋舌くつて、口先だけで喜ばせといて、その時になつて知らん顏しつちや承知しねえつて、二人で云つてたぢやないか。おら、よく覺えてるのだよ。

小よし　(昔を思出して懷かしさうに)　そんなこともあつたつけな。だけどそりや何年も前の古いこつちやないか。……今は牛の子も親も一匹もお前の家にやゐないぢやねえか。

仲吉　疾つくに賣飛ばして、牛の小屋は物置きになつてらあ。

小よし　(戯談らしく)　お前が自分で約束したこと覺えてゐるんなら、牛を賣飛ばした時分に、なぜわしやお久さんに欲しい物買つて呉れなかつたのだい。

仲吉　牛はわしが育てたんだが、賣るとなると、わしの氣儘にやならねえのだ。それにな小よしさん。お前は知つてるかも知んねえが、家にや蔦屋に借金があつて、抵當になつてる田地を取られるのがいやなら、牛でもみんな賣つちまはにや片がつかなかつたんださうだよ。おら、田地なぞどうでもいゝから、牛は殘しといて呉んなと、父ちやんにさう云つたのだが駄目だ。先祖の田地は賣れねえつて老人が云やあがるんだ。おら爲様がねえと諦めたが、その時から畝の仕事はいやでなんねえのだ。……あんだつて家に借金があるだか、借金のためにあんだつて田地を取られなきやならねえのか、おらには譯がよく呑込まれねえだよ。……おらはやつぱり知慧が足りねえん

だな。

小よし　それで、牛のかはりに鷄を飼つてるのけえ。

仲吉　おら鷄の世話なぞしねえよ。

小よし　牛を飼ひたけりや、稼いでお金儲けに何匹でも買つたらいゝぢやないか。

仲吉　おらがどんな稼ぎをして金儲けするだね。年中野良で働いてゐたつて、牛の子一匹買へる錢は殘りやしねえ。お前に約束した者を買つて上げる當てもねえだよ。

小よし　お前は見掛けによらない義理堅い人だね。（笑つて）わしはそんなことを當てにしてやゐねえから安心してゐなさい。お久さんはお墓の中へ入つてるから、衣服も帶もなんにも入らないだらうし……（ふと感動したやうに）さう云へばお久さんは可哀さうなことしたでないかね。子供の時分には、わし誰れよりもあの人と仲よしだつたのに。

仲吉　お久が若くつて死んだのを、お前は可哀さうに思ふんかい。おら、さう思はねえだ。自分の思ふやうにならないぐれえなら、早くくたばつた方がいゝとおら思つてるだ。……おら、牛の子一匹飼ふことが出來ねえし、お前に約束した物を買つて上げることも出來ねえし、麥秋(むぎあき)を濟ましたあとぢや、田植ゑだの田の草取りだのしなきやならねえと思ふと、お久のやうにコロリと早く死んぢやつた方がいゝと思ふだ。おら、こんな刈つた麥を背負つて、畝から家へ行つたり來たりするために生きてゐたつて、ちよつとも面白かあねえ。

小よし　それや誰れだつておんなじことだよ。わしだつて、細つこい身體してこんな荒仕事をしてゐちや長生したくつても出來ねえだらうよ。喜作だつて算盤の取れねえ畝作りばかりしてゐたつて面白かあるまいよ。誰れだつておんなじこんだけれど、お久のやうに若死はしたかあねえだよ。

仲吉　喜サ公はいゝだ。喜サ公とおらとは違ふだから。（愁然とする）

小よし　仲さんは今日は心配事でもあるのけえ。

仲吉　心配事はねえけんど、おら生きてゐたつて面白くねえだ。

小よし　お前のやうに身體が頑丈で獨身(ひとり)なら、東京へでも何處へでも稼ぎに行けるだらうからいゝだらうにな。喜作を見なさい、病身なお母(つか)あやわしが邪魔になつて、他所(よそ)へ行きたくも行けねえのだよ。

仲吉　なあに喜サ公はいゝ。いつも悦しさうな顏してらあ。

小よし　あの泣き面が悦しさうに見えるのけえ。（輕く云つて、荷車の側へ寄つて獨言のやうに）早く來て與れなきや困るのに。わしには車は牽いて行けないし。

仲吉　おら牽いてやるべい。（仲吉は自分の麥束を荷車に載せて、車を持ち上げる。）

小よし　止して吳んな。氣の毒だから。

仲吉　なに構はねえ。家へ歸る次手だから。

（仲吉は欣然として荷車を動かしだしたので、小よしは後を押しながら行きかけると、そこへ喜作が急足で入つて來て、仲吉の擧動を見て呆氣に取られる。仲吉も足を留めていやな顏をする。）

小よし　仲さんも剽輕(ひやうきん)ぢやねえかな。人の車を牽かうて云ふんだもの。（何氣なく云ふ）

喜作　おらが來たからもういゝだよ。（無愛想に云ふ）

仲吉　おら、自分の分だけ持つて行くべい。（仲吉は自分の麥束を荷車からおろして背負つて、詰らなさうにして出て行く。）

小よし　あの人變な人だ。やつぱり人の云ふやうに、ちつとべい拔けてるのか知らん。

喜作　あいつはお前にどんなことを云つたゞ。云つて見ろよ。

小よし　（氣に留めないで）それよりも、お客は誰れが來たのけえ。まさか眞壁の伯父さんぢやあるまいな。

喜作　來たのは伯父ぢやねえが、伯父が來たのも同樣だ。

（泣きつ面をする）

小よし　（夫の顏に注意して）わし、ケチをつけるぢやないけれど、誰れもいゝことを知らせに來たのぢやあるまい。だから朝から當てにしない方がいゝと云つてたでねえか。（非難するやうに云ふ）

喜作　（怒りを含んだ口調で）おめえはおらにいやな思ひをさせて、自分でいゝ氣持がするのか。今日のお客はな、伯父が是非おめえとおらと二人連れで來いと言傳(ことづて)をしたつて、わざ〳〵知らせに寄つて吳れたのだ。その言傳てをおめえに知らせて喜ばせべいと思つて急いで來たのに、おめえは聞かねえさきから、おらにケチをつけるだな。

小よし　お前こそ何をそんなに怒つてるだ。（怒りを含んだ口調）わしはな、眞壁の伯父さんに呼ばれたつても、お前に隨いて行く氣はねえだよ。

喜作　一しよに行く氣はねえだと。……伯父はな、歳を取つたので、一人の甥が可愛くなつて、どうせあの世へは持つてかれねえ身代を今のうちにおら達に配けて吳れようつて腹なんだ。それでおらとおめえと二人を側へ呼んで、おら達が喜ぶ顏を見たがつてるんだ。それにちげえねえとおら思つてるのに、おめえは、伯父の側へ笑顏を見せに行きたくねえと云ふんだな。

小よし　わしは棚からボタ餅の落ちるやうなこと當てにしねえだから……この頃の野良仕事だけで、手足は拔けさうにだるいのに、山坂越えて眞壁まで、どうして行く氣になれるものか。

喜作　分らねえ奴だ、勝手にしやあがれ。てめえがさういふ氣なら、今日から畑の仕事なんぞして貰はんでもいゝんだ。麥一本刈つて呉れなくつていゝんだ。……見ろ。かうして呉れべい。

（喜作は荷車の上の麥束を掴んでは投げ／＼して、つひに荷車を溝の方へ倒す。小よしは呆氣に取られて見てゐたが。）

小よし　氣が狂つたのけえ。歸つてお母あにさう云つたら、お母あが杖をついて拾ひに來るだらうよ。わしやお前の拋出したものを拾つて廻るのはいやだ。

（小よしは怒りと冷笑とを含んだ目で夫を一瞥してサッサと出て行く。喜作は一時の激しい興奮のための息苦しさを現はして出て行く。）

（仲吉は再び現はれる。ニヤリ／＼笑ひながら二人の後を見送つてから、面白さうに荷車を元のやうに直して麥束を元のやうに車に積む。）

（そこへ七造が入つて來る。）

七造　馬鹿め、まだ此處にゐたのか。此處であにしてるだ。

仲吉　おら、さつきそこの麥畑の中へ隱れて面白いもの見てゐたゞよ。お前にも見せたかつたくれえだ。喜サの野郎、何が氣に入らねえだか、麥つ束を取つちや投げ／＼して大あばれにあばれてゐたゞよ。喜サは嚊あを好いてゐねえのかな。

七造　馬鹿め。貴様は自分の仕事を拋つちらかしといて、他所の夫婦喧嘩の後始末をするのか。……さあ來い。晩までにや刈つちまはにやならねえ。

（七造が急立てるのを、仲吉は振切つて、荷車を曳出さうと身構へをする。）

仲吉　喜サ公の家へ運んで行つたら、直ぐに歸つて來るよ。

七造　何だつてそんな馬鹿な眞似するだ。

（忌々しさうにさう云つたが、強ひて引留めようとはしないで、そこへ蹲んで、煙管を出して煙草を吸ひながら、疲れてゐる風で呆然としてゐたが、一服吸ひ終ると、横になつて眠りに就く。）

――幕――

二

喜作の家の庭。藁葺きの粗末な納屋の前には莚が敷かれて、麥が干されてゐる。

喜作の母親のおたきが埃だらけの顏して、ヨボ／＼し

た足取りをして出て來る。納屋への途をつくるやうに、莚などどけてゐるところへ、仲吉が荷車を牽いて入つて來たので、吃驚する。

仲吉　（車をおろして）伯母さん、この頃は丈夫になつたのけえ。

おたき　丈夫でもねえけんどな。（仲吉の方をじろ／＼見て）仲さん其車はどうしたのだな。

仲吉　（汗を拭きながら）これはの……お前さんところの麥だから、納屋の中へしまつときなさい。車ごと途中に落ちとつたから、おらが拾つて來て上げたのだ。（あたりを見て）喜サ公はまだ歸つて來ねえんだな。

おたき　喜作はさつきお客に會つて話をして、直ぐに野良へ出掛けたのだ。お前に車の世話を頼む譯はねえと思はれるだか……。

仲吉　おら別段喜サ公に頼まれた譯ぢやねえが、お前んとこの麥だと思つたから、自分の仕事を抛つちやらかしといて、わざ／＼此處まで運んで來たのだ。お前とこで入らねえのなら、おらの家へでも持つて行くべえ。

おたき　仲さん何を云ふだ？　お前いたづらをしたのだな。喜作が此方へ歸つてる間に、誰れにも斷らないでその車を牽いて來たんだな。さうとは知らないで喜作は心配して、車を捜してゐるだらう。仲さんも餘計なことをする人だ。（忌々しさうに云ふ）

仲吉　こんな暑い日に人の車を牽いて來てやつて怒られちや割に合はねえよ。

おたき　勝手に悪ふざけをしといて、割に合ふも合はんもねえもんだ。お前、早く行つて喜作に知らせて與んなよ。心配してゐるだらうに。

仲吉　おらいやだ、腰つ骨がだるくなつて、おら一足も歩くのがいやになつた。ちつとべい此處で休まして貰はう。（莚の端へ腰をおろして）おらは何たつて、頼まれもしねえのに、こんなものを引張つて來たゞか。腹が減つて腰つ骨がだるくなるばかりで、效のねえことだつた。おら、何が面白くつてこんな重い者を引張つて來たゞか。

おたき　お前もいゝ歳をして、性の悪い人困らせをするもんぢやない。餘計な口叩かねえで、早く行つて知らせて與んなよ。

仲吉　だつて、おら一足も動く氣になれねえから爲様がねえや。フントにおら、あにが面白くつて、自分の麥抛つちやらかして人の麥運んで來たゞか。おらにおらの量見が分んねえだ。

おたき　早く行かねえかよ。（怒を現はして、仲吉の背をつつく）わしや足が丈夫なら、自分で行つて來るんだが。

仲吉　知らせに行きたけりや、お前行つて來ねえな。おら

此處で留守番してゝ上げよう。腰つ骨がだるくつても、鷄を追拂ふことくらゐ出來らあな。

おたき　おのれ、わしを揶揄ふのかよ。この老人を摑まへて嬲り物にするんだな。

仲吉　糞面白くもねえ。皺くちや婆あを摑へて嬲つたつてあにが面白かんべい。

おたき　この野郞、餘計な頰桁叩かねえで、サッサと歸つて行きやがれ。

仲吉　歸るなと云つたつて、いつまで此處にゐるものか。草臥れが癒つたら、お前に云はれなくつても歸つて行かあ。（落着いて云ふ）

おたき（氣味の惡い目付で相手を睨んで、やゝ穩やかに）小よしが喜作の嫁になつたと云つて、逆恨みにおらの家を恨んでるんぢやあるまいな。

仲吉　恨んでるかも知んねえ。おら今日は、自分で自分の量見が分んねえだから。……自分の麥抛つちやらかして他人の麥運んだ來て、あにが面白いだか。（獨言のやうに）喜サ公が腹を立てゝ麥つ束を抛つちやらかしたのが、あんだつておらに面白かつたゞか。

おたき　おのれ、逆恨みに人を恨んで、こんないたづらをするんだな。

（麥搔棒を振上げて脅す。仲吉は平氣な態度でその棒を奪取つて抛りだすとゝもに、ふと勢ひづいて來る。）

仲吉　伯母さん見てゐなさい。喜サ公はこんな風にあばれてゐたゞよ。面白かつぺい。

（仲吉はさう云つて、麥束を取つては左右へ投げる。おたき憤怒の相をしてゐるのにも構はないで、やがて荷車を引くり返す。）

仲吉　こんなことして面白いのか。

おたき（憤怒から恐怖に變じて）仲さん、お前氣が狂つたのけえ。

仲吉　おら、喜サ公の眞似したゞけだ。だけどこんな眞似したつて面白かあねえ。……伯母さんは歲を取つてるから、人間は何したら面白いだか知つてるだらう。敎へて呉んなよ。

おたき　お前のやうな人を相手にしちやゐられねえだ。おつかねえ〱。（足を引摺つて出て行く）

仲吉　伯母さんどこへ行くだ。（と大聲で呼掛けたあとで獨言のやうに）誰れか呼んで來ておらを追拂はうと思つてるんだな。勝手にしろよ。

（おたきの出て行つた方とは違つた方から小よしが姿を現はす。仲吉はそれを見つけて急にニコ〱した顏する。）

仲吉　お前一人で歸つて來たのか。

小よし　（沈んだ顏して）わしはさつきから、お前のすることを見とつたのだ。お前も馬鹿な眞似するでねえか。

仲吉　それで喜サ公はどうしたゞよ。

小よし　どうしたゞか、わし知んねえけんど、仲さんは早く歸(けえ)つて吳んなよ。お前が何時までも此處にゐちや、わしが困るだから。

仲吉　なぜ、おらがゐちやいけねえ。……おらがお前と話をしてゐたのが喜サ公の氣に入らねえのか。それなら、おらの方で云ふことがあるだ。（ふと高い聲を出す）

小よし　（慌てゝ相手の聲を止めるやうな手振りをして）靜かにしてお吳れ、後生だから。話があるなら、外の日にわしが聞いたげる。それで今日は早く歸(けえ)つて吳んな。こんな處で愚圖々々してるとお前のためにもならねえだ。

仲吉　おらあ、誰れをも恐れることねえけんど、おらがゐてお前が困るなら歸(けえ)ることにしよう。畝へは行かないで家へ歸(けえ)つてひとりで寢るとしべい。いくらお天氣がよくつても、おら今日は働く氣ちつともねえだ。……どりや出掛けべいか。

（仲吉は大儀さうに立上り、小よしが散らかつてゐる麥束を始末して納屋の中へ運ばうとしてゐるのを顧み顧み行きかける。）

（そこへ、喜作は魚籠を提げて歸つて來る。仲吉が見ると意外にも笑顏をして。）

喜作　茶でも飲んで行きなよ。ちよつと話したいことがあるだ。

仲吉　（不思議さうに）おらに話があるんだと。

（仲吉は足を留める。小よしも不思議さうに二人の方を顧みる。喜作は莚の端へ腰をおろす。仲吉も側へ腰をおろしながら、魚籠をのぞく。）

仲吉　泥鰌だな、お前が取つて來たのか。……ピチヤ〳〵跳(は)ねてやがらあ。

喜作　幾造に貰つたんだが、おら料理するのがうるさいから欲しけりやお前にやらう。持つて行きな。

仲吉　貰つて行つてもいゝのけえ。吳れるのならおら遠慮はしねえだ。貰つて行くべい。

喜作　持つて行きねえ。……だが仲吉、おらはお前を惡く思つたことはねえだから、お前もおらを惡く思はねえやうにして吳れろよ。

仲吉　話したいことゝいふのはそんなことか。おらもすき好んで人を惡く思ひやしねえよ。だけど喜サ公。人を惡く思ふのも善く思ふのも自分の氣儘にならんものだと、おら思ふだよ。（考込んだ目付きをして）お前もおらを嫌つてるやうだが、おら誰れに嫌はれてもいゝだ。

喜作　おらはお前を嫌つてやしねえよ。

仲吉　ぢや、おらと仲よしにでもなりねえな。……だけど、喜サ公、先つきお前が麥つ束を地べたへ叩きつけてるのを見て、おら小氣味のいゝ思ひしただよ。おら父ちやんに追立てられて、爲様事なしに野良へ出るには出てるけんどな。おら野良の仕事なんぞしたかねえだ。麥を作つていくらになるだよ。田圃つくることおらには面白くねえだ。こんな物を作るために何時までも苦勞な思ひさせられると思ふと、おら、麥つ束を地べたへ叩きつけて踏んで／＼踏躙つてやりたいと思ふだよ。お前さう思はねえか。

喜作　貴様は呆れたことを云ふ。百姓が麥米を粗末にしてどうするだ。罰が當るだよ。

仲吉　だつて貴様も麥つ束を地べたへ抛り出して車をひつくら返してゐたぢやねえか。罰が當つてもいゝのか。

喜作　（極りの惡さうに）あの時や魔が差したのだ。おら惡いことしたと後悔してるだよ。今日はお天氣はいゝし、いゝ音信が聞かれたのだから、晩まで一生懸命に働いてあしこの麥だけは刈つちまはうと思つてゐたのに間が惡くつてあんな狂人見たいな眞似をしたゝめに、氣が腐つて仕事する元氣もなくなつていけねえ。おらの身に罰が當つたのだよ。

（喜作はさう云つて、ふと小よしの方を顧みる。小よしは仕事の手を止めて、麥つ束の上に腰をおろして浮かぬ顔して、二人の方を見てゐる。）

仲吉　いゝ音信つて何だな、金になることけえ。おらの所へは、昔からいゝ音信なんぞ來たことねえだよ。

喜作　お前は獨身だから、百姓がいやなら東京へでも何處へでも稼ぎに出掛けたらいゝぢやねえか。町へ行きやいい稼ぎが出來ると云ふでないか。

仲吉　先つき小よしさんも、おらに東京へ行けと云つとつた。二人でそんなことを勸めるのは、おらがこの土地を出て他所で暮すのが、お前達のために都合がいゝのか。

（あたり前の口調で云ふ）

喜作　（ドギマギして）そんなことがあるものかよ。お前のためを思つて云ふんだ。

仲吉　おら、東京へも何處へも、町へ行つたことねえから分んねえけんど、他所の土地へ行くのはおつかねえだよ。

喜作　（笑つて）臆病たな貴様も。今日の世に、日本中何處へ行かうとも、おつかねえ譯ねえぢやないか。まめに稼ぎさへすりや、誰れにも意地めらりやしねえや。

仲吉　（考へて）……お前に云はれたゝめぢやねえが、おら、そのうち他所の土地へ行く氣になるかも知んねえ。……だけどな喜サ公、おらこの村を出る時にや、一つ胸

の晴れるやうなことをやらかして出て行きたいと思ふだよ。

喜作　どんなことしたら貴様の胸が晴れるんだ。人に嫌はれることをすりやしめえな。

仲吉　どんなことしたら、おらの胸が晴れるだか、われとわが身で分らねえだ。おら、これから家へ歸つて、この泥鰌を料理して酒を飲んでよく考へて見べいよ。（ふと氣がついたやうに）今から家へ歸つて酒なんぞ飲む譯にや行かねえ。おらの父ちやんは煩せいだからな。日の高いうちからおらに氣儘をさせときやしねえだよ。……だからよ、喜サ公、お前の家で飲まして呉れねえか。おらこれから料理をして自分で酒も買つて來るだ。久振りでお前と一しよに飲んでもいゝだよ。……お前んところにや親爺がゐねえからいゝ。

喜作　おらは今から酒なんぞ飲んぢやゐられねえ。

（喜作もいやな顔をする。小よしもいやな顔をする。）

仲吉　（二人の顔付には氣を留めないで）お前がいやなら、おら一人で食つて一人で飲むだ。臺所だけ貸して呉んな。

（仲吉は魚籠を持つて納屋の横から入つて行く。）

（小よしは稍々手足をのび／＼させたやうな態度をする。）

小よし　お前はあんな狂人染みた眞似したあとで何處へ行つてゐたゞよ。

喜作　おら、一人で眞壁の伯父んとこへ行かうと思つて、よつぽどそつちへ行きかけたのだが、幾造に會つて話をしてるうちに、家の事が氣になつて戻つて來たんだ。

小よし　幾さんがなぜ泥鰌なんぞ呉れたのだい。

喜作　おらに頼みていことがあると云ふんだ。

小よし　あの娘を預つて呉れと云ふんだらう。子守にやつてもよく勤まらないさうだし、家に置いちや、繼母との折合が惡いだから、わしの家で使つてくれと云ふんだらう。それで、お前承知したのけえ。

喜作　ハツキリ承知した譯ぢやねえ。

小よし　なぜキツパリ斷らねえのだよ。そんな氣が弱いことでどうなるだ。……それに、折角貰つた泥鰌を仲さんに遣るつてことがあるものか。

喜作　おら仲吉を怒らせたくねえだから。

小よし　（嘲笑ふやうに）……お前のやうな甲斐性無しつたらありやしない。お前は仲さんの前で頭の上らねえ譯があるのけえ。

喜作　そんな譯はねえ。だけど、あんな男は成るべく怒らせねえやうにした方がいゝんだ。おら人と喧嘩すること大きらひだから。

小よし　そんなに氣の弱いくせに、よくあんな亂暴な眞似

が出來たものだ。わしあのくらゐなことで脅かさりやしねえだよ。

喜作　（しをれて）おら、馬鹿な事をしたものだ。後悔してるだ。誰にも云はねえやうにして吳れろよ。

小よし　馬鹿らしくつて人に話せるものかい。……（深く感じてゐるやうな口調で）わしはな、喜サさん。仲さんがさつき云つてゐたことが本當のやうに思はれてならねえのだよ。寒さ暑さにいぢめられて田圃作つたつて、苦勞の甲斐がねえと、仲さんの云つたことは噓でねえと、わしには思はれるのだ。……人に勸めるばかりが能ぢやねえ。お前も、こんな麥つ束は泥溝へでも叩込んで、東京へでも行かうつて氣にならねえのけえ。

喜作　おら一人で東京へ行けつて云ふのか。

小よし　女を連れてつちや手足纏ひで、存分な稼ぎが出來ないだらうから、わしや老母は抛つといてお前一人で行つたらいゝぢやねえかな。

喜作　行け〱とやたらに勸めても、當てのねえのに東京へ行つてどうするだ。（不機嫌さうに云ふ）それよりも眞壁の伯父の家へ、二三日うちに行かなきやなんねえだよ。

小よし　伯父さんなぞ何が當てになるものか。當てのない東京へ行くのが馬鹿なら、當てにならない伯父さんの家へ行くのは、なほの事馬鹿だ。

喜作　あにが馬鹿だ。（腹立たしくなるのを壓へながら）おらを他所の土地へ稼ぎに行かせてお前はあとで何して暮すつもりだ。ひとりで野良を稼ぐのか。

小よし　二人がかりで稼いでも手おくれになるものが、女一人でどうして稼げるものかよ。それにわしは身體が弱いだもの。さつきから胸がチク〱疼んでならねえだ。

喜作　だからよ、身體の弱いお前や、歳を取つたお母あを置いといて、おら一人で他所へは行かれねえぢやないか。（立上つて）こんな無駄な話してるうちに日が暮れらあ。どりや一ッ働きして來べいか。（つとめて元氣よく云つて、小よしを促すやうに）おらの家は仲公の家とはちがつてるで、何も苦にすることねえだから、餘計な事云つて迷ふには及ばねえだ。（奥へ向つて）おら達は野良へ行つて來るだよ。料理するのはいゝが、家のなかを汚さないやうにして吳れろよ。

（喜作は荷車に手を掛けて出掛けようとしたが、小よしは動かない。）

喜作　おい、出掛けねえのか。

（小よし默つてゐる。）

喜作　お前はおら一人を働きに出しといて、仲公と酒でも飲まうと思つてるのか。（聲を潜めながらも激して云ふ）

小よし　わしがいつ酒を飲んだだ。

喜作　だからおらに隨いて來いよ。荒い働きをさしやしねだ。

（小よしは不承々々に喜作に隨いて行く。喜作は、空車を挽きながら、仲吉のゐる臺所の方を振返つて出て行く。車の音が消えると、仲吉は納屋の横手から顏を出して二人の後姿を見送つたが、ふと、驚いて納屋の中へ隱れる。七造が入つて來て、あたりを見廻しながら舞臺を通つて納屋の横手から出て行く。やがて再び入つて來て、そこへ、子供を背負つて來合せた子守に向つて。）

七造　お前は仲吉が何處にゐるか知らねえか。

子守　わし知らねえだ。仲さんがどうかしたのけえ。

七造　（心配さうに）この家へ來てあばれたつて、こゝの婆あがおらに怒つてゐたのだが、何處へ行きあがつたのか。

子守　仲さんはこの頃は、小松屋へよく遊びに行つてるだよ。この間わしがあしこへ寄つたらこの子に飴を買つて呉れたゞよ。

七造　ぢや、小松屋へ行つて見べい。お前も仲吉を見付けたら、おらに知らせに來て呉れろよ。

（子守うなづく。七造は出て行く。子守が納屋の横手から家の方へ行かうとするところへ、仲吉は納屋から出て來る。）

子守　仲さんは此處にゐたのけえ。（不思議さうに見る）

仲吉　お前はうまい事を云つて父ちやんを歸して呉れたな。これから一杯やらうて所へ親爺なんぞに來られてたまるものぢやねえ。……お前が此處へ來たのは丁度よかつた。川口屋へ行つて、おらに賴まれたと云つて酒を二合ばかり取つて來て呉れろよ。お前の使ひ賃はあとで乾度やるだから。

子守　ホントに使ひ賃呉れるのなら、酒を買つて來て上げてもいゝけんど、（奥を覗いて）喜サさんも誰れも家にやゐねえのけえ。

仲吉　誰れもゐねえだ。おらが留守番してるだ。……喜サ公に何か用事があるのけえ。

子守　直ぐに返事を聞いて來いつてわし賴まれて來たのだけど、困つたなあ。

仲吉　どんな用事だ。おらに云つとけよ。

子守　お前に云つちや惡かんべい。

仲吉　なに惡いものか。おら喜サ公に賴まれて留守番してるだから、おらに云ふのは喜サ公に云ふのも同んなじこんだ。

子守　家のお旦那が、今夜喜サさんと主婦さんに御馳走するから仕事が片付いたら、晩餐は喰はねえで、二人連れ

で直ぐに來て呉れと云つてゐたよ。

仲吉　（忌々しさうに）何の因緣があつて、蔦屋ぢや喜サ公夫婦に御馳走するだ。

子守　お旦那は喜サさんを好いてるだから。

仲吉　喜サ公があしこのお氣に入つてゐたつても、鼻あまで呼ばれる譯あるめえ。

子守　譯があつてもなくてもお前の構つたこつちやないよ。

仲吉　おら、蔦屋に借金拂ひするために、牛の子をみんな取られたゞよ。あれがみんな育つてゐたら、今時分でかくなつて、おらもこの近在でいばつてゐられたのだ。西川の原はおらの牛を放飼ひにするにいゝとおら思つてゐたゞからな。（子守の笑つてゐるのを見て）おらが牛の話をすると、お前も笑つてゐるな。……おらが牛の事を云ふと、みんなが馬鹿にしやあがる。

子守　牛や豚はきたねえから、わしきらひだよ。この間この子の飲んでる牛の乳の殘りを、わし飲んで見たけれど、變な味がしてへどが出さうだから、二度と飲まうとは思はねえよ。

仲吉　その餓鬼の方が牛の子より汚いぢやないか。……早く酒を買つて來うよ。

子守　ぢや、使賃を先へ呉んな。

仲吉　今は持つてゐねえや。おらは嘘は吐きやしねえ。大丈夫だ。

子守　當てにならないけど、行つて來て上げようか。

（子守が行きかけると、擦違ひに、寅太郎（仲吉よりも一層逞ましい男。垢染みた單衣を着て、風呂敷を背負つて下駄を穿いてゐる）入つて來る。仲吉は不思議な人を見るやうな目付してその男を見る。子守もちよつと振返つて、不思議さうにその男を見てから出て行く。）

寅太郎　（仲吉に挨拶して、少し大柄に）お前さんは喜作さんだね。

仲吉　……（こいつ變な奴だといつた風で相手をマヂ〳〵見ながら默つてゐる）

寅太郎　わしは眞壁の寅太郎だよ。こゝの伯母さんに會へば直ぐに分るんだから、さう云つてお呉れ。今伯母さんや伯父さんはゐないのかい。

仲吉　（無愛想に）ゐないよ。

寅太郎　死んだのぢやあるまいな。

仲吉　死にやしねえ。

寅太郎　（縁の上へ腰を下して）わしも今日は長途を歩いて疲れた。……今日はお前の外にや誰れもゐねえのか。

仲吉　…………。

寅太郎　わしは親爺と喧嘩をして家を飛出してから、大阪

へ行つて神戸へ行つて、荷揚人足にもなつたし、いろんなことをやつたよ。それから朝鮮へも渡つて二三年藥賣りをやつた。一時は小金が出來たので、自分で小さな店を出したこともあつたのだが、火事に會つて元も子もなくしちやつたのでね。また日本へ戻つて、手當り次第にいろんな事をやつたのだ。たまにや運が向きかけたこともあつたが、よくなりかけると災難に會つて、子供にや死なれる。嚊には逃げられる。身代はすつちまうし、わしも他郷で働くのがつく／″＼いやになつちやつたよ。相當の金が出來たら女房子を連れて、生れ故郷へ歸つて來よう、それまでは村の土地は一足も踏むまいと思つてゐたのに、こんな樣で、お前の所へも土産一つ持たないで來ることになつた。家を出てから、二十年にもなるんだから、村は變つてるだらうな。……村へ歸るまでに、お前の家の樣子なんぞ聞いたり、旅の垢を落して小サツパリした氣持になつて歸ることにしようかと思つたりして、此家へ寄つたのだよ。

仲吉　眞壁は今も昔も同じことだ。お前は二十年も方々で働いてゐたと云つてゐながら、懷ろへ札の束を捻込んでもゐねえで、そんなざまをして村へ歸つて來たのか。眞壁なぞへ歸つたつてちつともいゝことねえだ。そんな無駄なことするよりや、これから、も一度出直して大阪へでも朝鮮へでも行つて、もう一稼ぎして來るがいゝ。

寅太郎　お前はわしにもう二十年働いて來いと云ふのかい。わしにはそんな根氣はないよ。もう二十年經つたらわしは六十になるんだ。……わしが眞壁の家を親爺と大喧嘩をして出た時にや、お前もまだ五つか六つだつたから、わしの顏は覺えてゐないだらうが、お前の兩親はわしをよく知つてるよ。わしが會つたら喜んで呉れるにちがひない。

仲吉　根氣がねえと云つても、お前はそんな大い身體をしてるぢやないか。腕つ節も強さうだ。

寅太郎　わしは腕一つで世を渡つて來たんだからな。力業なら何でもやつて來た。親爺と喧嘩した時は口の先の言合ひばかりだつたが、他所へ行つちや口の喧嘩だけぢやすまないよ。わしの此の腕は、三人や五人の生命を取つてるんだ。わしの身體に生疵の絶えない時もあつたのだ。(自慢さうに云つて脛をまくつて見せて)この傷はな、わしが十年前に神戸で五六人のゴロツキを相手に大喧嘩をした時の傷痕だ。出刃で抉られたのさ。

仲吉　よつぽど痛かつたらうな。お前はそんなひどい目に會ふほど他所の土地で苦勞してゐたのに、金は儲らなかつたか。……金を儲けねえで、そんなざまをして村へ歸たつて、誰れもお前を相手にすりやしねえよ。……お

らも他所の土地へ行くことは止しにすべい。お前のやうな身體してゐても金にならねえのなら、おらも駄目だ。二十年の間も遠い所へ行つて稼いでも、お前のやうなざまをして歸つて來なきやならんのなら、おら行きたくねえだ。

寅太郎　（不機嫌らしく）　わしもお前の身内の一人だよ。久振りに歸つて來たものを冷かすものぢやないよ。

仲吉　お前が眞壁へ歸つたつて、みんなに馬鹿にされるばかりだ。この家へ泊つて鐵くちやの婆あに會つたつて詰らねえや。おら惡いことは云はねえ。今に酒が來たら飲ませるから、一杯飲んで、どこへでも出て行きねえだ。

寅太郎　さうか。（憤怒と失望を現はして）　お前はおれの零落(おちぶ)れてゐるのを見て馬鹿にしてるが、わしには親爺がまだ生きてる筈だ。いくらわしが親不孝をして來たにしても、親爺だけはわしが生れ故郷へ戻つて來たことを喜んで呉れるにちがひないよ。

仲吉　うまいことを云つてるな、だけど親爺だつて當てになりやしねえ。おらの親爺はおらと喧嘩なぞしねえけんど、何云つても當にやならねえ。遥々親を慕つて歸つて來るなんて、お前も御苦勞さまなことだ。親だつて兄弟だつて、誰れがお前を相手にするものか。

寅太郎　（絶望した態で）　喜作（と呼掛けて、凄みを帶びた目付で相手を見て）……ぢやお前はわしが看守を叩斬つて監獄から逃げたことを知つてるんだな。十年の餘も北海道の懲役へやられてひどい目に會はされたことを知つてるんだな。それでわしを寄付けまいとしてるんだな。眞壁の親爺からもわしを寄付けるなと云つて來たのか。……それならそれで、わしにも覺悟があらあ。……わしは、どうせ明日までこの娑婆にゐられる人間だかどうだか分らないんだ。……監獄にゐるうちに、親爺だの身内のものだのが懷かしくなつてならないものだから、どうせ監獄で歳を取つて死ぬるのなら、思ひ切つて生命がけで逃出して、一目でもいゝ親爺に會つて、一言でも聲が聞きたくなつたのだ。自分の生れた家の中で蒲團の上で寢る譯に行かなけりや、せめて一晩は、自分の生れ故郷で野宿でもしたいと思つたのだ。それほどに思つて來たものを、お前はわしを一足も家へ入れまいとするんだな。親爺もさういふ量見なんだらう。……よし、それならわしにも覺悟があらあ。わしは、もう一度監獄へ追込まれてまで生きてゐようとは思つてゐないんだ。

（仲吉はいよ／＼不思議な人物を見てゐるやうに見てゐる。）

寅太郎　わしは警察でも知つてゐない惡い事をいくつもやつてゐる。お前なぞ、一生肥つ桶を擔ぐより外に能のな

い人間は、夢の中にでも見たことのないやうなことをやつて來たのだ。土ほぜりをしてケチ〳〵溜めたお前だちの端た金を貰ひに來たのぢやないぜ。勘ちがひするな。……一生に一度の人情に負けて、北海道から此處まで警察の網の目を潜つてやつて來たものを、みんなして、除物にしやがるのなら、わしの方でも量見があらあ。どうせ死ぬに極つたわしの身體だ。

仲吉　（面白さうに）覺悟があるの量見があるのつて、どんなことだ。云つて見ねえな。十年も懲役に入つてた人間の覺悟を、おら聞いて見たいだよ。

寅太郎　耳で聞かなくつても目で見せてやらう。

仲吉　面白いな、見せて吳んな。

寅太郎　………。

（獰猛な面相をして、突如として仲吉に飛びついて、捻伏せようとして。）

寅太郎　聲を立てると生命がないぜ。

仲吉　聲は出さねえ。（跳起きながら）おらを殺すのが、お前の覺悟か。馬鹿にしてやがらあ。

寅太郎　生命は取らんから安心しろ。……監獄でわしが苦勞してゐたのを、貴樣だちはいゝ氣味だと思つてゐやがつたのだな。貴樣に最初會つたから、貴樣がわしの身内の總代だ。わしのすることを見て、あとで身内の奴にさう知らせろ。

（再び仲吉を捻伏せて、手拭で猿轡をくはせる。仲吉はさして抵抗しない。）

（寅太郎は仲吉を引き摺つて、納屋の側へ連れて行つて、そこに落ちてゐた繩ですばやく巧みに彼れの手足を縛つて、柱にしばりつける。）

寅太郎　誰れかが歸つて來て解いて吳れるまで、ちつとの間そこで我慢してゐろ。わしはもう眞壁へは歸らないから、親爺なんかにさう云つとけ。

（仲吉うなづく。）

寅太郎　わしはこれから貴樣の家のもので、わしの役に立つものがあつたら持つて行くから、あとで何か無くなつてゐたら、わしが持つて行つたのだと思つてゐろ。錢一文貴樣に貰つて行くんぢやない。わしの腕で取つて行くんだから。さう思つてゐろ。

（仲吉うなづく。）

寅太郎　口惜しいだらうな。（惡魔的な笑ひを浮べて見る）

（仲吉首を振る。）

寅太郎　わしが死刑になつたと聞いたら、みんなして喜べよ。わしの顏はこれから何千年立つてもまた見られないんだから、よく見て置け。日本中を荒らした面だぜ。

（出來るだけの獰猛な相をして見せて、唾を前へ吐き

かけてから、あたりを見ながら、納屋の横手へ入つて行く。仲吉は首を曲げて家の方を氣にする。）
（やがて、子守が酒徳利を提げてやつて來る。何氣なく納屋の側まで來ると吃驚して徳利を抛出して驅けて出て行く。）
（おたきが入つて來る。納屋の側まで來ると吃驚して倒れかける。やうやく元氣を出して。）
おたき　仲さんは何をして縛られた。誰がお前を縛つたゞよ、亂暴なことするからそんな目に會ふだ。おつかないおつかない。
（繩を解いてやらうとはしないで、小氣味よげに見てゐると、仲吉は、目顏で、外へ出て行けと云ふやうな態度を頻りに見せる。早く出て行かなければ怖いぞといふやうな態度を見せる。おたきは何となく恐ろしくなつて出て行く。仲吉は家の方へ氣を留める。）
（やがて、喜作夫婦が子守やおたきと一しよに入つて來る。）
喜作　仲吉、誰れにそんないたづらされたゞ。
子守　さつき、見たことのない人が訪ねて來たんだよ。
（みんなが恐怖を現はしながら見てゐる。喜作は仲吉の側へ寄つて、繩を解く。仲吉は解けかゝつた繩を振落し、猿轡をも取つて、獨り面白さうに笑顏をする。）

小よし　（心配さうに）仲さん、氣をたしかに持ちねえな。縛られて笑ふちうことがあるかよ。
仲吉　おら、さつきから可笑しくてならねえだ。おらを縛つた奴はな、ふとりでえらさうなこと云つてゐたが、ひだるかつたせゐか、見掛けほど力のある奴ぢやなかつただ。あんな奴に勝手な眞似をさせねえでもいゝんだけど、何するだか、あいつに、好きなやうにさせて見べいと思つて、おらわざと、力を出さねえで大人しくしてゐたのだ。……たゞおらの縛られてる間に泥鰌汁を喰はりやしないかと思つて心配してゐたゞよ。鍋へぶち込んどいた泥鰌が煮え過ぎるぐらゐよく煮えてゐたゞらうから。
喜作　全體此處へ訪ねて來たつていふ奴は何處の誰れたよ。
仲吉　おら、名前は忘れたがの。お前の身内で北海道の監獄へ十年も入つてた奴だ。自分で大惡黨のやうに云つてたが、大惡黨だか知られえが、力は强かあねえ。
（おたきと喜作は驚いて顏を見合せる。）
小よし　此處の身内で監獄へ入つてる者なんかある譯ねえだよ。僞壁の寅さんとかゞ何十年も行方が分らんと聞いたことはあつたけれど。
仲吉　その寅だよ、寅太郎だよ。放火でも强盜でも人殺しでも、惡い事のありつたけをやつて十年も北海道の監獄

へ打込まれてゐたのださうだが、今度見張り人を叩斬つて逃げて來たと云つてゐた。お前なんぞあいつに會はねえでよかつた。掛り合ひをつけられたらたまらねえよ。

（みんな呆れた顏をする。）

おたき　それで寅太郎は何をしに此處へ來たと云つてた？

仲吉　お前の家のものを持つて行くと云つてたゞ。……あんな奴には欲しい物はやつときねえな。

おたき　わしがゐたら、あんな奴に麥つ粉一杯取らしやしねえに。何を盜んで行つたゞか。

（アタフタと家の方へ行く。喜作も心配さうにして隨いて行く。子守も興味をもつて隨いて行く。小よしだけは動かないでゐる。）

小よし（疑はしげに）仲さん、お前の云つたことは本當なのけえ。

仲吉　極まつてらあな。おら噓を吐いたことねえだ。（ふと可笑しさを感じて）おら噓を吐きやしねえけれど、あいつはおらを喜サ公だと思つて縛りやがつたのだ。おら默つてゐて喜サ公の代りに縛られたゞよ。あの監獄破りの奴、喜サ公をふん縛つて腹癒せをしたつもりになつてるだと思ふと可笑しくつてなんねえ。あいつ口で云ふほどなえらい惡黨ぢやねえにしても、いく度も人の家へ強盜に入つて人を縛つたことがあると見えて、縛り工合がうめえぜ。おらには眞似や出來ねえ。

小よし（鬱陶しい顏付して、獨言のやうに）眞壁の伯父さんといふ人は强慾だから、一人息子がそんなになつたんだらう。何十年も行方が知れねえなんて、家の老婆はよく譯を知つてゐながら、わしに隱してゐたんだな。……仲さん、寅さんといふ人はどんな顏してゐたけえ。

仲吉　おらのやうな顏してゐたゞ。（眞面目で云ふ）牢へ入つとつても喜サ公より立派な顏してらあ。

小よし（笑ひながら）お前は自分の顏がよく分つてゐるのかよ。

仲吉　そりや分らねえけんど、あいつの顏見てると、そんな氣がするだ。だけど、あいつおらよりは力が弱いだよ。

（喜作あわたゞしく出て來て、二人の樣子に注目する。）

喜作　簞笥を開けて、おらの絣の單衣一枚持つて行つたゞけだ。そのくらゐなことで濟みや何も氣を病むことねえだ。おらの心祝ひに、一杯飲まうか。仲さんとも久振りだ。今日はおらの家で、機嫌よく飲んで晩飯も食つて行けよ。……寅の奴が來てこのくらゐなことで濟みや、酒の一升くらゐ奢つたつて惜かあねえ。

小よし　眞壁の伯父さんが、せつせとお前を呼付けたのも、その寅さんとかのためなんだらう。お前のやうにいゝ氣

になつてると當てがちがふよ。わしが云はないこつちやねえ。

仲吉　ぢや、おら遠慮しねえで、御馳走になるべいか。（二人の何方へ云ふともなく）人にふん縛られるよりや、人をふん縛つた方が面白いにちがひねえな。（麥束を見て）そんな麥つ束は泥溝んなかへでも叩込んでしまへだ。麥刈つて何が面白いだ。

（そこへ、七造が入つて來る。）

七造（仲吉を見て）またこんな處へ來て遊んでるのか。老人に働かせて若い者がノラノラしてるつてことがあるか。……さあ來いよ。すぐに來うといふのに。（腹立たしく云ふ）

仲吉　駄目だ。おら此處で御馳走になつて行くだ。

（強く云つて家の方へ向って行く。七造當惑の樣。小よしは詰らなさうな樣。）

喜作（七造に向つて）今日は仲さんに骨を折らせただから、おら一杯奢らうと思つてるだ。お前も遊んで行きねえな。

七造　お前がそんなに仲吉と仲よくなつたのか。不思議なこんだな。（訝しげに云ふ）

——幕——

三

その翌朝。やうやく薄明るくなつた時分。

喜作の家の裏口。井戸端で小よしが米を磨いでゐる。おたきは東の空へ向つて合掌して、何か口の内で云つて祈つてゐる。祈りが濟むと。

おたき　お前は昨夕寢づらさうだつたの。譫言を云つたりして。

小よし　わしも怖い夢を見て困つたけれど、お母あも時々溜息吐いてゐたでねえか、寅さんのことを心配しとるのけえ。

おたき　寅太郎は仲吉の云ふやうな恐ろしい男ぢやねえだよ。何かの間違ひで牢へ入つとつたかも知れないけんどな。仲吉は智慧が足らないから勘ちがひしてるだ。それで餘計な噓つぱちを世間へ言觸らされちやわしの家でも迷惑するでねえか。

小よし　それは仲さんの云つたことも當てにならないかも知れないけど、寅さんは當り前の人間ぢやあるまいよ。樣子を知らないこの家へちよつと入つて來たばかりで、箪笥の奥へ仕舞つてた皮財布のお金まで取つて行つたんぢやないかいな。神樣でなけりや出來ねえこんだ。わしはこの家の身内にそんなおつかない人間があるとは知ら

なかつた。（皮肉な語調で云ふ）

おたき　わしや喜作が、寅太郎のことをわざとお前に隱してゐたのぢやないから惡く思はねえやうにして呉んな。（稍々聲を潜めて）わしは昨夕夜中に考へたのだがの。財布の金まで取られたのは寅太郎のせゐぢやない。仲吉が自分で家の中を搜して、大事なものを盜んで置いて、みんな寅太郎の所爲になすりつけたのぢやないかと、わし思ふだよ。喜作は氣がいゝから、氣がつかねえで、仲吉の云ふことを一々眞に受けてるだけれど。

小よし　（冷笑を洩らして）さう云へば、昨日寅さんが此處へ訪ねて來たといふのも、仲さんの拵へ事で、誰も來なかつたのかも知れねえな。

おたき　（萎れて）お前は昨夕から、わしや喜作に當り散らしていけねえ。わしはお前に惡いことした覺えねえだよ。

小よし　（興奮して）わしだつても惡いことした覺えねえだ。身體の加減が惡くつても精一杯働いてるだから、誰れにも文句は云はせねえよ。

おたき　（なだめるやうに）誰れもお前にいやな文句を云やあしねえ。仲吉を惡く云つたのがお前の氣に觸つたのけえ。

小よし　仲さんのことなんぞどうでもいゝだ。……だけどなお母あ。欲しい物も食べないで、着たい物も着ないで、あくせく働いて殘したお金を、二十年も行方の分らなかつた身内の者にちよつとの間に橫取りされちや、この先働く張合ひはないぢやないかな。これからまた二十年も稼いで、僅かなお金でも溜めてゐると、また行方の分らなかつた身内の男がやつて來て、かつぱらつて行くかも知んねえよ。

おたき　利口なお前に似合はねえこと云ふだの。……昨日取られたお金だつて、眞壁の伯父さんに譯を云やあ、そのくらゐなお金は惠んで呉れるだから安心してるがいゝだ。

小よし　みんなが眞壁の伯父さんと云ふ人を手頼りにしてるだから可笑しい。それほど手頼りになる人なら、これまでにどうかして呉れてさうなものだ。當てにならないものを當てにするのには、わしはあいたよ。

おたき　………………。

（何か云はうと躊躇してゐる。小よしは洗桶を持つて家の方へ行きかけると、そこへ喜作が外から入つて來る。）

おたき　寅太郎は昨日どちらの方へ行つたか、見たものはねえのけえ。

喜作　昨日は誰れも氣がつかなかつたらしいよ。いゝ加減

な噂してゐるだけど、見た者はなかんべい。おら、それで安心したゞよ。

おたき　仲吉の云ふことも眞に受けられねえでな。

喜作　どちらにしても、おらの家は災難を免れたゞ。昨日家の者がみんな家にゐない所へ、あの男が來たからよかつたのだ。……今日おらは眞壁へ行つて伯父さんによく譯を話して來べい。小よし、お前も一しよに行かねえか、伯父さんも身內の者が懷かしくなつてゐにちがひないよ。

小よし　わし、身體が弱つてるだから行かれないよ。

（無愛想に云つて裏口から家へ入る。おたきはそちらを氣にしながら、稍々聲を潜めて。）

おたき　寅は警察に捕まりやしねえのけえ。どうせ、また捕まつて牢へ入るに極まつてゐるけんど、この近在で縛られさへせにやいゝと、わしは思つてるだよ。眞壁では寅のことで警察のしらべが八釜しいんで、お前に內所で相談したいと思つてゐたのかも知んねえだ。あれが盜んで行つたゞけの金は、眞壁からでも取返さにや割に合はねえぢやないか。

喜作　だけど、おら、寅に會はなかつたゝめに生命の助かつたやうな氣がするだからな。（感慨に耽つたやうに）これでおらも厄のがれして、これから先きにはいゝ運が向いて來さうに思はれるだ。

おたき　寅の事をわし等親子が隱してゐたと云つて、小よしはえらく機嫌が悪いだからお前も氣をつけなきやいけねえよ。

喜作　（心配さうに）おらも、昨夕その事を氣にかけてゐたゞ。財布の金取られたことよりもその事を心配してゐたのだ。親爺が死んでお前が長患ひして、今度は小よしの事で面白くねえことがあるやうだと、おらの家もいよいよぶつ潰れるだあよ。おら一人で野良を働くことは出來ねえだから、小よしが家にゐなくなりや、おらは東京へでも行つちまはうと思つてるだ。

おたき　お前は飛んでもねえことを云ふ。わし一人を此處へ殘しといてお前は他所へ行かうと云ふのか。

喜作　そりや今のことぢやねえわな。

（母の所を避けるやうに、家の方へ入つて行く。）

（おたきは家へ入るのを躊躇して、物を案じてゐる顏してゐるところへ、寅太郎が入つて來る。前の幕とはちがつて小ザッパリした單衣を着てゐる。「伯母さん」と聲を掛けられて、振返つて見て吃驚する。しかし、周圍を憚つて聲を潜めて。）

おたき　お前さんはまだこの邊にゐたのか。（と云つて、怖怖相手を見る。）

寅太郎　昨夕は此處の納屋を借りて、麥藁の上で一晩寢かして貰つたのだよ。お前には會はないで、昨日直ぐにこの村を立つつもりだつたが、妙なものでね。この家へ寄つたゝめに氣がゆるんだのか、急に長い旅の疲れが出て、どうにも眠くつて溜らなくなつたから、斷りなしで一晩泊めて貰つたよ。それで、今朝は暗いうちに起きて出て行かうと思つてゐたのだが、久振りにいゝ氣持でグッスリ眠込んぢやつて、遲くなつた。……なにお前に迷惑を掛けやしない。その井戸で顏を洗はせて貰つたら直ぐに出て行かう。

（事もなげにさう云つて井戸の側へ行く。おたきは怖〻怖相手の顏や衣服に目を注ぐ。）

おたき　これからお前は何處へ行くだな。眞壁へ行きやすまいな。

寅太郎　おらの事だから、何處へ足が向くだか。

おたき　眞壁へは歸らない方がいゝだよ。わしが賴むだから、眞壁へも寄らねえで、この近在をもウロ〳〵してゐねえで、早く遠方へ行つて吳んな。（手を合はせて歎願する風をして見せる）

寅太郎　だけど、伯母さん。おれも昨日のおれぢやないから、眞晝間顏を曝らしてこの村の中は通れないよ。人に知れちや、お前らにも迷惑を掛けることになるんだ。だから、おれはさつき考へたのだが、麥藁か何かを俥に積んでその中へおれを隱して、村外れの人通りのない所まで、喜作に連れて行つて貰つたらどうだらう。さうしたら、おれも都合がいゝし、お前の家でも迷惑にならないでいゝだらう。

おたき　（身震ひして）　わしを脅かすやうなことを云つて吳れるな。そんなことをして、警察へ知れようものなら、喜作やわしは卷添へを喰つて懲役にやられるに極つてるだ。

寅太郎　（微笑して）　そのくらゐなことでビク〳〵して、お前は歲ばかり取つても甲斐性がないね。そんなことでよく世の中が渡れたものだ。おれはな伯母さん、二十年の間隨分いろんなことやつて來たせ。

おたき　（手を振つて）　その話聞かないでもいゝ。お前の顏見たゞけで、わしにはお前が怖いことしてゐたことが分るだから。……（再び手を合せて）この老人が手を合はせて賴むだから、早く遠方へ行つて吳んなよ。……喜作の衣服は着て行くがいゝ。金を返せとも云はねえだよ。わし、貧乏してゐてもいゝだから、穩かに暮させて吳んな。

寅太郎　ぢや、何も賴まないよ。おれだつて地の底を潛ることも空を飛ぶことも出來ないのだから、仕方がない。

大手を振つてこの村を出て行かう。……何處で捕まるも同じことだ。

（井戸の水で顏を洗つて、せい〳〵した顏付して出て行く。おたきは二三歩そちらへ寄つてそつと見送つてから、東の空に向つて合掌して口の內で何か祈つてゐる。）

（そこへ、喜作が入つて來る。）

おたき　お前が出て來ねえでよかつた。お前に會つたらどんな面倒なこと云ひ出すか知れねえと思つて、わしは心配でならなかつたゞよ。

喜作　……これから每晚納屋の戶締りはよくしとかなきやならねえな。お前にはまだ云はなかつたが、仲吉が昨夕から家にゐねえのだつて、七造爺さんえらく心配して方方搜し廻つてるだ。おら、さつき寅太郎が出て行つたのを見て、仲吉ぢやないかと、ふつとさう思つたのだよ。

おたき　（何とも感じないやうに）仲吉が昨夕からゐねえのけえ。……寅が身を隱して村を出たいと云つてゐたが、仲吉なら剽輕者だから、賴まれりや、俥を挽いて何處へでも連れて出たかも知んねえ。

喜作　仲吉は他所の土地へは行きたくねえと云つとつたが、氣が變つて出て行つたのかも知れねえな。……お母あ、彼奴なぞこの村にゐねえ方が、おらのためにもいゝんだよ。（空を仰いで）今日は麥をみんな刈つてしまはにやならねえ。精を出して、昨日怠けた分を取返さにやならねえ。

おたき　お前が身を入れて働いてくれさへすりや、わし何も云ふことねえだ。

（二人の顏は晴々しい。）

——幕——

雲の彼方へ

人物

庄三郎（二十七歳）
卯之助（二十五歳）
おしほ（二十歳）
ある男
ある女

時代

寛文の頃　初夏

場所

豐後のある村

（作者曰く。姉崎博士の「切支丹宗門の迫害と潜伏」を讀んでゐた時にふと浮んだ空想を、多少補綴して書いたもので、無論、歴史あるひは傳説上に根據があるのではない。この一卷の書より得た以外には、迫害時代に關係のある智識をも殆んど有つてゐないのである。）

一

時は七ツ時を過ぎたころ。

村はづれ。道祖神の小祠がある。そこには大きな鈴が垂下つてゐる。古草鞋が幾つも掛けてある。あたりには樹木が可成り茂つてゐる。

脚絆や甲掛けを着け野良働きの身裝をしてゐるおしほが、野菜物の入つた畚を側に置いて、頭に被つてゐた手拭を取つて、後向きで祈願をしてゐる。

そこへ、道中差しを一本差した庄三郎が旅姿をして、感じを籠めてあたりを見ながら入つて來る。おしほ足音を聞きつけ、振返つて見て驚く。

庄三郎　オヽ、おしほか。（懐つこさうに云つて近寄つて）四五年會はないうちに、すつかり大人になつたな。容色も大層ようなつたぞ。ハヽヽヽ。もう獨身ぢやあるまいな。お前のやうないゝ女子の匹偶になつた果報者は誰れぢや。

おしほ　（極り惡さうに）若旦那樣は人が惡うおなんなすつた。お歸りなさると、早々御戯談を仰有つて。

庄三郎　ぢや、まだ何處へも嫁に行かないんか。お前のやうな容色のいゝ女子を、村の若い者が今まで打つちやらかして置くのはどうも不思議ぢや。（小祠の方へ目をつ

けて）しかし、お前は今其處で拜んで居つたやうだが、どんな願を掛けてゐたのぢや。若い女子が幸の神に願掛けをするのは、大抵分つてゐるぞ。

おしほ　何を仰有います？　わたくしは肩休めに休んで居りましたのぢや。

庄三郎　それはまあどちらでもいゝ。言譯をせいでもいゝよ。しかし、おしほも幸の神を拜むやうじや安心ぢや。此方でも御禁制の宗門のお調べはます／＼嚴しうなつたであらうから。

おしほ　上方でもお調べが嚴しいので御座いますか。此方では、幸ひと、この二三ヶ月はお召捕りになつた者が御座いませんのですけれど、今年のお正月お飾り下しの晩には、それは大騷ぎで御座いました。この門田村だけでも十人も一度期に代官所へお呼出しになつて、罪が重いとかで、皆んな女房子も一しよに長崎送りになりました。

庄三郎　それは誰れと誰れぢや。（せき込んで訊く）

（道祖神の小祠の側に腰をおろす。おしほも腰をおろす。）

おしほ　九郎右衞門どんに、鬼松どんに、桶屋の孫四郎に、豆腐屋の彥兵衞爺さん、（指を折つて數へる）それから、……

庄三郎　彥兵衞が擧げられた？　あれがキリシタンで。……（驚きのあまりウヽンと唸つて）それでお處刑になつたのだな。あの年齡で。

おしほ　あの爺さんは、葛木村でお召捕りになつた人の伯父さんだと云ふので、最初にお調べを受けました。爺さんは、お佛壇の中に異人の佛樣の繪像を掛けて拜んで居たので、言拔けが出來ませんでした。それに、爺さんは剛情を張つて、どんな拷問に會うても、お上へお詫びをしないので、とう／＼長崎で焙殺されたさうで御座います。あの人のいゝ何時もニコ／＼してゐたお爺さんが御法度破りの恐ろしい人であつたとは、わたくしにはどうしても思はれないので御座いますわ。……その外には、……（と、新たにまた指を折つて數へ上げようとする）

庄三郎　（相手の言葉を遮つて）もういゝ／＼。不吉な名前をお前の口から一々聞かされなくなつてもいゝよ。おれの身内に掛合ひがなけりやそれでいゝのだ。……おれの家の者はみんな無事に暮して居るのだらうな。

おしほ　皆樣お丈夫で御座います。米良の御親類のお家では、花の咲いた時分、大旦那樣が本卦返りのお祝ひを盛大になさつて、此方からも皆樣お揃ひでお出掛けになりました。その時はわたくしも米良へお手傳ひにまゐりました。

庄三郎　さうか。それはよかつた。祝ひ事があるやうなら

結構ぢや。卯之助もこの頃は丈夫なんだらうな。

おしほ　あの方もお變りは御座いません。時々大野川へ魚釣りにお出でなされて、澤山お釣りになつた時には、わたくしどもへもお裾分けをして下されます。

庄三郎　（微笑して）あんな不器用な奴に魚が釣れるのかい。不思議なことだなあ。……しかし釣りでも慰みにやつて居ればいゝことぢや。旅へ出ると、一番おれの心に掛るのは卯之助のことなんだが。（感慨を籠めて獨言のやうに言ふ）

おしほ　それはどういふ譯で御座いますの？（相手の顏を見上げて訊く）

庄三郎　あれの身體には疫病がうつり易いんでな。

おしほ　でも、近年流行病はないので御座います。

庄三郎　ハヽヽ。無いと云うても、流行病の根はなかなか絶えさうぢやないな。卯之助は生れつきが珍らしい物好きだから、どうかした機會で、魔が差したやうに自分から進んで疫病を背負ひ込んで來ないとも限らないと、おれは旅にゐる間にも、何よりもそれを心配してゐたのぢや。たびたび夢にも見て、目が醒めて汗びつしよりになつたこともあつた。

おしほ　ホヽヽ。（無邪氣さうに笑つて）それは、卯之助樣がバテレンの魔法に掛つて誑かされるとお思ひになるので御座いますか。……まあ、阿房らしい。……卯之助樣はキリシタンのお宗旨は薄つ氣味が惡いとよう仰有つて居られました。

庄三郎　本當に薄つ氣味が惡い。お上もお手數が掛るだらうが、あゝいふ者は一日も早う根こそぎに無くならんと、世の中が陰氣でいけない。（氣持を變へて）いや、お前に此處で會つたので、おれも安心して家の閾が跨がれるよ。（立上つて）晩にでもお父ちやんに話しに來いと云うて呉れ。

おしほ　畏りました。

庄三郎　これから忙しうなるな。まあ、無理をせんやうに働けよ。

（庄三郎出て行く。おしほはその後姿を見送つたが、直ぐに立たうとはしないで心安げに休息してゐる。やがて、道の一方に何かを見つけたので、慌てゝ立上つて笊を背負つて行きかけたが、また思返して、笑ひを洩らして小祠の後へ身を隱す。）

（釣竿や魚籠を持つた卯之助が、同じくらゐな年輩の、粗服を着た或る男と入つて來る。）

卯之助　お話の面白さに、知らん間に此處まで歸つて來ました。うつかりしてあなたに無駄足を歩かせましたな。此處でお別れをせにやならない。（足を留める）

ある男　口下手な話をよう聞いて下された。萬事にかなひたまふ天地の御作者の御名譽の事（神の奇蹟の事）や廣大なるお慈悲は、なか／＼一朝一夕にはお話し盡されません。あなたが明日の日にもまた釣魚にお出掛けなさるやうなら、時刻さへお知らせ下されたら、わたくしは、釣竿を持つて今日の場所へまゐつてお待ち申ませう。眞萱村にはまだ四五日は逗留して居りますから、あなた方が聞いて下さるなら、何處へでもまゐります。何日の夜丑三つ時に、どこの森の中で會ひたいと仰有れば、間違ひなく其處へまゐります。八つ時の晝休みにどこの田の畔で、お茶を飲みながら聞きたいと仰有れば、その時刻に其處へまゐります。

卯之助　そのうち聞かせて頂くかも知れませんが、當分家の中の用事が手離せませんから、釣魚も暫く止めなければなりますまい。いろ／＼お話をして頂いたのにお禮もしないでお氣の毒ですな。……ぢや、此處で。（會釋して別れようとする）

ある男（殘惜しさうに）　御法の道理をあなたのやうに熱心に聽いて下さるのが、わたくしどもに取つては、金銀にも替へがたい謝禮になりますのぢや。これでお別れするのはお名殘惜しいが、それではさつき差上げた寫し物を、明日とも云はず、一時も早うよく讀んで下され。それは、年若な女子の心の手本にするためのお話の一つぢやが、あなたの心に天地御作者の明りの差す手蔓にもなりませうぞ。

卯之助（懷中へ手を入れて）　いや、あれはお返ししませう。何の氣なしに頂いたのだが、大切な書き物を粗末にしちやいけないから、お返しします。

（嵩の薄い書き物を取出して、相手に渡さうとしたが、ある男は兩手を垂れたまゝで受取らない。何かを念じてゐるやうに目を凝して卯之助を見詰める。卯之助は見られるのを氣味惡く感じながら、默して立つてゐる。おしほ、小祠の後からそつと顏を出して二人の樣子を見る。）

卯之助　ぢや、これでお別れします。お大事に。

（さう云つて、ある男に背を向けて行きかけたが、ふと、おしほを見つけたので驚いて足を留める。）

（ある男は天を仰いで、口の中で何か云つてゐるやうに、口をモグ／＼させてゐたが、間もなく、今來た方の道へ向つて出て行く。）

（おしほ、小祠の後から、怪訝な顏して姿を現はす。）

おしほ　あの人は何をする人で御座いますの？

卯之助（ある男の行つた方を見てから、おしほの方へ目を向ける。詰責するやうな口調で）お前はどうしてそんな

所にゐたのぢや。

おしほ　肩が疲れたから一休みして居りました。あなたよりも一足早うお兄様が此處をお通りになりました。上方からお歸りになつて。

卯之助　なに、兄が歸つて來た？

おしほ　それよりも、今の人はどうした人で御座いますの。わたし、一度もお見掛けしたことのない變な方だと思ひました。

卯之助　ちつとも變なことないぢやないか。あたり前に髮を結つて、あたり前の衣服を着て。……川の土手で會つて道連れになつたたけぢや。……それよりもお前は兄貴に何か話をしたのかい。

おしほ　お兄樣はあなたの事を心配していらつしやいました。

卯之助　おれの身體が弱いといふことか。

おしほ　いゝえ。（無關心な返事をして、相手の懷に挿んだ紙片に目をつけながら）さつきの方からお貰ひになつた御本は何で御座いますの。若い女子の心のお手本になるお話が書いてあると仰有つたが、どんな事が書いてあるのでせう。わたくし讀んで見たうなりました。

卯之助　（當惑して）こんな者はお前の見るものぢやないよ。

おしほ　女子の心のお手本になるといふお話を、何故わたしが讀んぢやいけないんでせう。貧乏な百姓の娘は身の敎へになる本なんぞ讀まないでも、牛か馬かのやうに野良へ出て働いてさへ居ればいゝと、あなたは思つていらつしやるんでせうか。

卯之助　こんな者は詰らないよ。それよりも、お前には、もつと讀易くつて身の爲めになる本を貸してやらう。

おしほ　そんな言抜けを仰有つて、あなたはまだその御本をお讀みにならないぢや御座いませんか。今此處で讀んで聞かせて下さいまし。

（おしほ、卯之助の懷へ手をやつて、書き物を取出さうとする。卯之助拒んで突離す。おしほころぶ。）

おしほ　（涙ぐんだ聲を潜めて）それはバテレンの魔法を書いた御本ぢや御座いませんの？　上べはあたり前の人と違はないでも、あの方の目はたゞの人の目とは思はれません。どういふ譯のあるお話か、わたしにはよう解りませんけれど、あなたも感心して聽いていらつしやつたぢや御座いませんか。

卯之助　（あたりを見廻して）魔法なんかの事が書いてあるものか。疑ふのなら讀んで聞かせてもいゝよ。しかし、お前も邪推を廻しておれの迷惑になるやうなことを云つちやいけないぢやないか。

おしほ　（起上つて）あなたの御迷惑になることを世間へ言觸す女たと、わたしを思つていらつしやるの？　わたしだからこそよかつたけれど、外の人が聞いてゐたなら、あなたのお身の上に恐ろしい疑ひが掛るかも知れないぢやありませんか。

卯之助　ハ、、、。お前もなか〳〵苦勞性たな。おれはどんな魔法にもかゝる人間ぢやないから安心しろ。いや、おしほの魔法だけは別ぢやが。……おれの目には、呂宋から渡つて來たバテレンよりもお前の方が恐ろしいよ。ハ、、、。

おしほ　そんなことを仰有つて、（物思はしげに）わたしは若旦那樣のお心の中がよう分りません。身の程も忘れて、思つてはならない人を思つたことはおしほは後悔することもあるので御座います。

卯之助　詰らないことを云ふものぢやないよ。おれは大名のお姫樣とお前とを取替へつこする氣にもなれはしないのぢや。家柄だの身分の相違など、世間で云ふやうな事はおれには何でもないことだと、よう云つて聞かせて居るぢやないか。もう少し辛抱してゐて吳れ。兄貴が戻つて來たのなら丁度いゝ。折を見てお前の事を兄貴によう話して見よう。

おしほ　さつき、この幸の神を拜んで居るところをお兄樣に見つけられて、何を祈つとるのだと揶揄はれました。……わたしは、親兄弟にも汙濶に話せることぢやないし、神樣にお賴みする外はないと思つて、此處を通るたんびに、幸の神樣に、自分の心の中で思うとることを打開けて居ります。どうぞ卯之助樣がお心變りをなさらないやうに神樣のお力を貸して下されと、さつきも手を合せて拜みながら、口の內で云うて居りました。

卯之助　（笑ひながら）さう云うて拜んでるところへ兄貴が遠方から戻つて來たのだから、お前の願ひを神樣がお聞屆けになつたのかも知れないな。

おしほ　それはどうで御座いますやら。それよりも、さつきお連れの方の仰有つたことが、わたしには氣掛かりになりますのぢや。お話の譯はよう分りませんし、何だか怖いやうにも思はれましたけれど、わたしに力を添へて下さるものなら、何にでも縋りつきたいと思はれてなりませんの。

卯之助　（あたりを見廻して）向うから誰れか來るらしいぜ。今日はこれでお別れとしようか。おれは一歩さきへ歸らう。

おしほ　その御本はわたしに見せて下さいませんの？

卯之助　お前はこれを魔法の本だと云つて居りながら、讀んで見たいのか。これに觸ると手が爛れるかも知れない

せ。

おしほ（空想に驅られてゐるやうに）若い女子の心のお手本になろお話。……わたしのやうな卑しい者もさういふお手本にならつたら、あなたにいつでも愛想を盡されない女子になるかも知れない。

（卯之助關はずにサッサと出て行く。おしほはなほ空想に驅られてゐたが、やがて思直して、畚を肩に背負つて行きかけると、誰れかに呼掛けられたやうな氣がして、足を留めて、あたりを見廻はす。「たしかにあたしの名が聞えたのに」と、獨言を云つて、耳を澄ましたが、其處にゐるのを氣味惡く感じたやうにスタ／＼と出て行く。）

二

その後數日を經過したある夜のこと。

土藏の二階。卯之助の居室。板の間に本箱や文庫が雜然と置かれてある。疊二疊ほど敷かれて、そこに支那風の机が置かれてゐる。

庄三郎と卯之助とは、行燈の光に淡く顏を照らされながら、對座してゐる。

暫く自分の感じに耽つて默つてゐたあとで、庄三郎が口を開く。

庄三郎　いや〻危いところぢやつた。おれもおぬしがキリシタンの嫌疑を受けて拷問にかけられとる夢を見たりしたものぢや。もうその外には疑ひを受けるやうな書類も繪像も持つて居らんのだらうな。

卯之助　うん、何もない。惜しいことだが皆んな、今年の正月の騷ぎの時に燒いて灰にしてしまつた。なに、萬が一、役人どもに見つけられたにしても、キリシタン御信心はいたしませんと云うて、デウスの繪像でも踏んで／＼踏躙つて、南無阿彌陀佛を喉の破れるまでも唱へたら、疑ひが晴れるのは極つとるのだから、先走りをして、あの面白い奇妙な繪像や、不思議な文字の並んどる異國の書物を灰にするには及ばなんだのぢやが、おれは臆病なのぢや。

庄三郎　大膽不敵も事による。おぬしもそんな詰らない好奇心は止しにするがいゝ。世の中には讀む者見る者が多いのに、御禁制の書畫を集めるには及ぶまい。

卯之助　ところが、二三日前に偶然こんなものが手に入つた。（寫し書きした數葉の綴本を机の上から取つて兄に見せて）これには異國のローマで、昔々、さる高貴な女子が、キリシタン信心のために、あらん限りの荒拷問を受けても屈服せいで、蟲の息になつても經文を唱へたといふ話が書いてある。おれはこれを讀んで落涙をした。

あの本箱に仕舞つてあるどの書物でも、この薄つぺらな寫し物ほどにおれを感動させたものはないのぢや。これに比べると、論語や孟子は砂や石ころを詰込んだやうな書物ぢや。

庄三郎（怖々手に取つて、行燈の方へ寄つて）女子の話を讀んで落涙する奴があるか。

卯之助　女子の話ぢやから尚更おれは感動したのかも知れない。おれにはその女子の美しい顏が、花をあざむき月をねたむと云つた姿が、目の前に見えるやうに思はれるのぢや。おれが燒棄てたサンタマリアの繪姿がその女子の色身となつて夜中の寢醒めに見えるのぢや。……まあかういふところを讀んで見い。（兄の持つてゐる綴本のある所を指差しして）「セススに對し申しては、このはかなき露の命を一たび捨つべき事は物の數にもあらず。叶ふに於ては、千度百度も捨つることこそあらまほしけれ。かへすぐ\恐れ玉はざれ。如何なる苛責打擲の中にてもゼスス離れ玉ふべからず。辛勞のやみは過ぎて、やがて悦びの明ぼのとなるべし」……一介の女性が骨を碎かれ血に染められても、辛勞のやみが過ぎて、悦びの明ぼのの來るのを信じて樂しんで居たのぢや。

庄三郎　それは妄信ぢや。愚夫愚婦の妄信ぢや。（その續きを口の內て讀み續ける）

卯之助　おれも妄信ぢやと思ふ。しかし、兄貴。おぬしは上方で學問もしたであらうし、いろ\/な名高い人にも會つたであらうが、悦びの明ぼのをおぬしに說明して吳れたものが一人でもあるか。あるまい。聖賢の本を讀んでも無駄なことぢやと、おれは思ふよ。

庄三郎「嗚呼强き御勘忍かな。さても恐ろしき責めかな。御胸御せ中は打擲にて破れ、御骨も顯はれ玉ふ程なり。御下り火炎に燒け玉ひ、すみになり玉ふ程なり。さても驚くべき强さかな。眞に天魔鬼人までも肝をけし、たましひを失ふ程なり。是程の大い苦痛を受け玉へども、少しも弱り玉はず」（書中の記事に心を惹かれたやうに、聲を出して讀んだが、ふと氣づいて恐怖に打たれて、綴本を下へ置いて）こんな者は一刻も早う燒いてしまへ。おぬしは大切にした繪像までも灰にしたと云ふぢやないか。

卯之助　幾度も讀んだあとだ。どうにでもするがいゝ。

（庄三郎、綴本に行燈の火をつけて、燃えだしたのを板の間に投げ出す。）

卯之助　千何百年か前にローマの國で火あぶりにあつた、マルチルの美しい姫が、日本の豐後でも一度火あぶりになつたやうなものぢや。ハ、、、。（淋しく笑ふ）

庄三郎　大きな聲ぢや云はれないが、おれもお上のキリシタン虐めはあんまりひど過ぎると思うて居る。彥兵衞の

やうな七十にも近いお爺さんを、火あぶりだの磔刑(はりつけ)だのと、そんなむごい目に會はさないでもいゝぢやないか。……しかし、おれ達は掛合ひさへつけなければ、お上のお考へに難癖をつけるに及ぶまいて。おぬしも輕はずみな口を利いて、詰らない疑ひを受けないやうにして吳れ。近年のやうに宗門のお詮議が嚴しうなつたら、どこにどんな風俗をした公儀の隱密が居るか知れないんだから。……兩親はまだ丈夫なんだし、おぬしが親の側に居つてくれりやおれは安心して、また京へ上つて二三年修業して來ようと思ふ。二三年が五年十年になつてもいゝやうに、今度は父上に譯をよう話して、おぬしに家督を繼がせて、おれは脫籍して氣儘に暮したいと思うとる。おれのやうな鈍物は聖賢の學問をしても、大した發明も出來やせんが、まあ、やりかけたことはやつて見よう。おぬしも同意して吳れるだらうな。

卯之助　望んで居ることなら何でもやるがいゝ。おれが同意をするもせんもあつたものぢやない。しかし、學問をして名前を賣つて、何處かの大名に抱へられたいと今も思ふとるのかい。どうせ林家の向うを張つて、天下のえらい學者になれりやせんぜ。

庄三郎　(不快な現はして)　馬鹿にするなよ。四五年別れてゐた間に、おぬしは人間が變つた。

卯之助　馬鹿にするんぢやない。惡う思はんやうにして吳れ。おれもたびたび、家を脫走して京大阪か、江戶までも行つて見たいと思うたことがあるんぢや。

庄三郎　おぬしが？　何のために？　おれの眞似がしたうなつたのか。

卯之助　うんにや、違ふ。おれは聖賢の學問して、學問を賣つて大名から扶持を貰はうとは思はない。道春點の論語一册讀んだだけで、おれは聖賢の學問がいやになつた。家業をぢつと守つて上べを大人しうして、公方樣が勝手に極めた世の掟てに逆らはないで、代官樣の前で頭を下げとりや、一生白い飯を食べて生きて居られるおれが、何を苦しんで砂を嚙むやうな聖賢の學問を種に、大名に仕へて窮屈な思ひをする氣になるものか。

庄三郎　(呆れて)　おぬしの言葉は亂心者の言草ぢや。聖賢の學問を習ふのは、扶持を取るためぢやない、人間の道を知るためぢや。そのくらゐなことは、おぬしには分つて居つた筈ぢやが……。

卯之助　おれの壽命はあと三十年か四十年ぢや。おれの通り道がどつちへ曲つてゐてもいゝよ。……しかし、おれは兄貴の考へに楯付きやしないから、おぬしはおぬしの好きな學問を、京大阪はおろか、唐へでも渡つてやつて來るがいゝ。

庄三郎　おれの心配は杞憂ぢやなかつた。おぬしは何時の間にか御禁制の宗門にかぶれて居るんぢやな。（憂はしげに云ふ）

卯之助　さうかも知れない。（淋しい聲で云ふ）おれは、燒棄てた書類を讀んだ時や、時々噂話に聞かされたバテレンの行狀や說法を、獨りで考出した時には、論語なんかにはどの隅を捜しても見當らないものが出て來ておれの胸を打つのぢや。本當のおれの生命の事が考へられてならないのぢや。三十年や五十年、飯を食つてお上に年貢を收めてモソクサと生きてゐるのは、「あだなる浮世の夢」ぢやと思はれるのぢや。本當のアニマがあるものなら、そのアニマの正體を知りたいのぢや。……こんなことも一人で考へて居るばかりで、口へ出して云ふのは今夜がはじめてぢや、兄貴にこそ遠慮なく打明けられるのだが、おれがこんなことを云ふのを誤解して心配しなくつてもいゝぜ。……おれは道春點の論語の前に噛ひつくばれないやうに、納來のデウスを拜めないのぢや。磔刑臺の上から夕燒の赤い空を見て、その空の向うにはハライソがあると云うて、喜んで死んだキリシタンの氣持にはおれはなれないのぢや。だから、親兄弟がおれのために巻添へを喰つて辛い目に會ふ氣遣ひは決してないよ。おぬしは安心して、また京へでも、江戸へでも行つて、好きな聖賢の學問をやるがいゝ。

庄三郎　さうか。……おぬしが物好きに心の中で何を考へてゐようと勝手だが、祕密で怪しい奴に會つて居るのぢやあるまいな。おぬしが日當りのいゝ廣々とした母屋から離れて、こんな薄つ暗い土藏に籠つてるのも、おれには變に思はれるが、今燒棄てたあの寫し物が偶然おぬしの手に入つたといふのも、おれの腑に落ちない。まさか道傍に落ちてゐたのを拾つた譯ぢやあるまい。

卯之助　ハ、、、。すつかり白狀しようか。

（さう云つたが、少し躊躇する。庄三郎は不安を現はして目を据ゑて弟の顏を見詰める。）

卯之助　おれにも祕密がある。御禁制の神佛を祕密で拜むのは、有難味が格別なのであらうが、世間や身内に祕密で好きな女子に會ふのも面白いものぢや。どうせおぬしには打明けようと思つてゐた。おれが獨りで靜かな所で學問をしたいと、兩親に我儘を云うて此處で寢起きをするのは、時々好きな女子に會ふためなんぢや。

庄三郎　（呆れながらも稍々安心して）おぬしが邪宗信心をすると云ふよりも、もつと意外ぢや、それでその女子は誰れぢや。

卯之助　作右衞門の娘ぢや。

庄三郎　おしほか。……それで分つた。あの子は先日幸の

神を拜んでゐたが、さういふ譯があつたのか。……あの子は不思議に容色がいゝが、おぬしはおしほと緣組みが出來るとは思うてはゐまいな。一時の慰みものにするつもりなんだらうな。

卯之助　うんにや。おれはおしほと夫婦にならうと思うた。

庄三郎　それで兩親や親類が承知すると思うて居るのか。馬鹿な。……米良ではおたつかおゆきか、二人の從妹のどちらでも娶つて吳れと云うて居るのを、おぬしは頑なに斷つとると聞いたが、さういふ祕密があつたのか。兩親はおぬしが二十五にもなつてまだ獨りで居るのを苦に病んで居られるが、おしほのことを聞いたらどんなに吃驚なさることか。

卯之助　兩親が、家名や世間體を氣にして、作右衞門に金でもやつて二人の仲を裂かうとしたら、二人は手に手を執つて駈落ちをするか。奧澤の森で首をくゝるくらゐな決心はしとつたのぢやが。……しかし、もう濟んだことぢや、おしほはもういやになつたよ。兩親がちつとも氣がつかない間に、おれの戀は、いろはから、ゑひもせすまで濟んだ譯ぢや。

庄三郎　どうせ家へ入れることの出來ないものを、早う思切つたのはいゝが、それではおしほが承知しまい。

卯之助　だからおれも當惑しとつた。兄貴が戾つて來てくれたのはおれには助け船ぢや。兄貴がおしほに會うて、何とかうまい言譯をして、おれを思切らせるやうにして吳れ。おれはどうあつてもおしほがいやになつたのぢや。

庄三郎　おしほも可哀相に。……容色はよし、氣立てもよささうだから、もつと身分がよけりや、家の跡取りの嫁にしてもいゝんぢやが。

卯之助　可哀相にも思はれるが、おれはこの頃おしほが怖うなつたのぢや。

庄三郎　あんな柔しさうな女子が、なぜ怖い？

卯之助　いや、怖い。女子といふものは見掛けによらない怖いものぢやと、この頃おしほに會ふたびにおれは思はれだした。……だから兄貴に賴む。近いうちにおしほに會うて何とかうまい手段で思切らせるやうにしてくれ。

庄三郎　面倒な役目だが、おれが引受けなきやならないな。……(ふと、聞耳立てゝ)おれを呼びに來たな。(と呟いて階子段の方へ行つて階下を覗き)おれに用事があるのか。……今直ぐ行かう。(と云つて、元の座へ戾つて)ぢや、今の件は改めて相談しよう。もう夜が更けたのに、父上はおれに何の用があるのであらう？

（庄三郎出て行く。卯之助はさつきから興奮した話に疲れたやうな樣子で、座を立つて、開放されてゐる窓の外を覗く。やがて、何物かを見つけて、困つた顏し

て元の座に戻つたが、また立上つて階子段の側へ行つて、階下の方へ聞耳を立てる。）

（「おしほか。……入つて來てもいゝよ。」と、聲を潜めて云つて、元の座に戻る。）

（ある男入つて來る。この前とは違つて、黒衣を着け、頸に神符を掛け、コンタツといふ念珠を持ち、態度が神々しい。）

（卯之助、驚愕と恐怖の感に打れる。）

ある男　先日は失禮しました。あのまゝでお別れするのはいかにも殘念ぢやで、暗い夜道を踏んで、眞萓（まがや）からお訪ねすることにしました。

卯之助　わたくしのことがどうして分つたのです？

ある男　（微笑んで）それは天地の御作者のお導きで自からお分り申した。暗い夜道も天上の光が導いて下さつたために、足を踏み迷ひもしません。

卯之助　それは遠路御苦勞で御座いましたが、わたくしに何の御用がおありなさる？　先日の話の續きを聽かせようと思つていらつしやるのですか。

（ある男、庄三郎の坐つてゐたところに坐り、燈火の光で卯之助を正視しながら、口の內で何か祈つてゐる。卯之助は相手の目を避けるやうに伏目になる。）

ある男　慈悲廣大な天上の御主（おんあるじ）は、かねがねあなたの上にお目を留められて居られまする。先日大野川の土手で、わたくしがお目にかゝつたのも、我々は偶然のことゝして、輕卒に見流しさうであつたが、決して偶然ではない、最上の御智惠を持ちたまふデウスのおはからひでありますぞ。あの時差上げたアナスタジヤ姫の物語はお讀みなすつたでせうな。

卯之助　よく拜見しました。感歎して落涙いたしました。

ある男　なる程。（喜んだやうに）姫の御作業に感歎なされたか。天上の御主が、豐後一國のうちでも、あなたの上に格別にお目を留められたほどある。有難いことぢや。千萬人のゼンチヨのうちに、特別にあなたをお選びになつて、天上のグロリヤをお見せになつた。豐後一國の領に主ならせられるよりも千倍萬倍の御恩惠ぢや。

（ある男、感激して天を拜しようとする。伏目になつてゐた卯之助、ふと顏を持上げて焦躁の思ひを現はす。）

卯之助　それで、あなたはわたくしにどうしろと仰有るんです？　（詰るやうに訊く）

ある男　わたくしは、あなたのやうな御聰明な方にかうせいと命令する力は有つてゐないのです。天上のお主のお使ひとして今夜おたづねしました。（右手を上げ、人差指を立てゝ）今デウスは慈悲の目をもつて天上からあなた

を見てゐらせられる。

（おしほ、階子段から顏を出して、ある男の樣子を見たが、驚き慌てゝ顏を引込める。）

卯之助　お說法はもう十分です。早速お引取り下さい。……最上のお智惠の持主も卯之助については見込ちがひをなすつたと、歸つてあなたの神樣へ御報告なさい。（激しく云ふ）

（ある男、悲痛な感じを現はす。）

卯之助　しかし、あなたがいつまで此處に滯在して、嚴しい掟を潜つて宗門を擴められようとも、わたくしの口からは決して人に洩らしやしません。あなたが今夜此處へお出でになつたことは二人だけの間の祕密にして葬りませう。

ある男　二人だけの祕密では濟みますまい。天上から慈悲の御目を曇らせて見てゐられる。あなたにはそれが見えないのぢやな。（薄氣味の惡い笑ひを洩らす）……わたくしは、この世の掟を毛頭恐れては居らない。あなたが人に洩らさうとも訴人しようとも、それはあなたの心のまゝぢや。（座を立たうとする）

卯之助　まあ、お待ちなさい。あなたの御姓名は何と云ひます？　御生國は何處です？

ある男　それを訊ねて何になさる？　わたくしは決して隱さうとは思はないが。

卯之助　わたくしの生涯のうちの大きな事件の一つだから、覺え書につけて置きたいんです。

ある男　この世の人の覺え書に姓名を殘すのは無用なことぢやが、たつて望まれるのなら云つて置かう。わたくしの日本名は天野半之進ぢや。父も祖父も島原の城に籠つて戰死してしまつた。

卯之助　ぢや敗軍者の御子孫ですか。（ふと興味を覺えたらしく）それでは幼い時からあなたの生涯は悲慘だつたのですな。

ある男　悲慘と思ひなさるか。終りなき生命を賜はつてゐる者を悲慘と思ひなさるか。（苦々しさうに云つて）原の城の敗軍を敗軍と思うて居るのは、物の上べしか見ない軍記作者や、蜉蝣に等しいゼンチヨどもの云ふことぢや。惡人どものために磔木にかゝらせ玉うたゼスキリシトは、「我すでに世に勝てり」と仰せられた。原の城の敗軍者も「我等はすでに世に勝てり」と互ひに歌ひて、一群のアンジヨに迎へられて、勇ましうハライソの門へ入つたことが、あなた達にはお分りにならんのぢやな。勝利者のつもりの寄手の軍勢の凱歌は、天の耳には亡者どもの泣聲も同樣ぢや。……それはかりぢやない。德川家光はじめ板倉重昌も松平信綱も、インヘルノの薪とな

つて、焔の消える終りもなく燃えて居るのが、あなたの目には見えないのぢやな。（嚴に云つて）ゼスキリシトがお召しになる。わたくしはこの居室にお暇しなければならない。

（ある男、十字を切つて、影の如く出て行く。）

（卯之助茫然として見送つたが、やがて、魔術に打たれたやうに、くら／＼として倒れる。）

（おしほは上つて來て、驚いて、介抱する。「若旦那樣どうなさいました。氣をしつかりお持ちなされ。」と、呼掛ける。）

（卯之助起上つたが、疑つた所は見えない。）

おしほ　もうおよろしいんですか。どうなさいましたの？

卯之助　お前は今來たのか。さつきから來て居つたのか。

おしほ　少し前にまゐりまして、梯子段の側に隱れて、あの恐ろしい方がどうなさるかと、そつと見て居りました。

卯之助　（顏を曇らせて）お前は隱密か隱し目付見たいに、おれの心を搜らうとしてゐるんだな。先日は道祖神の小祠の後でおれとあの男との立話を立聞きして居つたし、今夜は今夜で、おれの方で、約束もしないのに突然にやつて來て、立聞きをした。

おしほ　若旦那樣は邪慳な事を仰有います。……今夜は來いと呼んでも下さらないのに、押しつけがましくお目に懸りに來たのは、悪う御座いましたけれど、何であの方とあなたとのお話を立聞きしたいために來るものですか。どなたが來ていらつしやるか、ちつとも存じませんのでした。

卯之助　聞いたものは今更咎め立てしたつて爲方がないが、あれは何でもないのだよ。

おしほ　でも、何だか恐ろし相な方ぢや御座いませんか。あなたはあの方の魔法に當てられてお倒れになつたのぢや御座いませんの？

卯之助　お前はさう思ふのか。さう思ひたきや思ふがいゝ。

おしほ　わたくし、今夜は先日の御本の話を聞かせて頂きたいと思うてまゐりました。若い女の子のお手本になることを承つて、自分の心もそのやうになりたいと思ひますの。

卯之助　あれは大昔の南蠻のお大名の美しいお姫樣の話ぢや。

おしほ　さういふ尊い方の眞似は、水呑百姓の娘には出來ないと仰有るので御座いますか。

卯之助　さういふ譯ぢやないが。……おれは今夜は氣持が悪いのだから、氣の毒だが歸つて呉れないか。南蠻のお姫樣のお話は今度會うた時にでも話すことにしよう。

おしほ　歸れと仰有れば歸りますわ。（拗れたやうに見せ

て）でも、あの方がまだそこらにゐさうに思はれて、暗い夜道が怖う御座いますわ。

卯之助　おれは今夜は誰れとでも口を利きたうない。後生だから、おれを一人で此處に放つて置いてくれ。

おしほ　それでは、わたくしお暇いたしますわ。（不承々々に立ちかけて）……あの、お兄様にわたくしのことをお話しなすつたのでせうか。

卯之助　兄貴はお前に會ひたいと云うてゐた。……今夜はもう何も訊かないでくれ。（煩さゝうに云ふ）

（おしほ、しを／＼と出て行く。）

三

深夜の森の中。月光淡く樹の間を照らす。犬が一匹何かを嗅ぎつけたやうに樹間をうろついてやがて出て行く。卯之助が先に立ち、庄三郎を連れて入つて來る。

庄三郎　何年か來ない間に此處も木がよう茂つたやうぢやな。子供の時分には、この邊に狐が鳴くと云ふので怖がつてゐたものぢや。今は今でそんな祕密が行はれてゐるのなら、この森はよつぽど不吉な場所なんぢやな。木を切倒して開墾して畠にでもするといゝ。

卯之助　そんな面倒なことを言出すものはないな。この近在の草つ原でも開墾したら、米の作れるところはいくらでもあるのぢやが、そんな事を企らむものは一人もないよ。代官所へ願ひ出るのが第一煩いんだからな。いゝ事、惡い事、どちらにしても役人どもには關合をつけないのがいゝ。觸らぬ神に祟りなしぢや。

（二人は樹間に腰をおろす。）

庄三郎　さう云へば、眞夜中にこんな所で、ヒソ／＼話をして居るところを、役人どもに見つけられたら、謀叛の相談でもしとるやうに思はれるだらう。おぬしは物好きぢや。おれを引張り出してこんなところへ連れて來て。

卯之助　いや、この森の祕密は誰れにもまだ見破られないのぢや。……おれは、狐が人間を誑かすとは思はないし、妖怪變化がこの世界に存在しとるとは信じないから、夜中でも、退屈したり、眠れなんだりした時分には、獨りで此處へ遊びに來ることがあるのぢや。此處に寢ころんで、樹の間から空の星でも見て居ると、心が澄んで、世界に自分一人が生きて居るやうに思はれることもあるのぢや。それで、昨夕も、村の者の寢てしまつた時分に、家を出て此處へやつて來たのぢやが、おれは驚いた。繪圖で見て覺えてゐる妖怪が、此處を歩いてゐても、かうは驚かなんだであらう。……おしほが例の變な男の前に跪いてゐるぢやないか。その男は指で空を指して何か云うて居つた。おれは總身に水をぶつかけられたやうに感

じて、後も振向かないで逃げ出したのぢや。

庄三郎　おぬしに奇妙な本を呉れたといふ男か。

卯之助　その男ぢや。まだこの界隈をうろついて、自分の宗門へ人を引張込まうとして居るらしい。しかし、おしほが、狙はれて居るのは意外ぢや。

庄三郎　昨日話した通り、あの子はおぬしとの關係は、これまでの緣と諦めたと、おれに向つて素直に云うて居つたぜ。おれの拵らへ言を眞に受けて、おぬしを思切ると奇麗に云切つたので、おれの方で却つて不憫になつて淚が出さうになつたが、あの子も腹では泣いて居つたのぢや、それでバテレンの說法でも聞いて、心の中の悲みを晴さうとするのだらうが、あんな素直な可愛らしい女子がバテレンの魔宗門に誘はれて、いつか憂目を見るやうになつちや可哀相ぢやな。

卯之助　なあに、おしほはおぬしの思うて居るほど素直な女子ぢやないよ。おれはあの子のためにひどい災難に會ひさうに思はれてならないんぢや。……あいつ、おれが嫌つたと知つたら、おれが邪宗門の仲間に始終會つてゐるやうに言觸らして、訴人もしかねないと、氣遣つてゐたのぢやが、あいつが不思議なハメで宗門に凝りだしたのなら、なほ更、おれの身に災難がかゝつて來さうに思はれる。例の變な男は先日の晩おれを打負かして、勝利者らしい面をして行きやがつた。あの男がおしほの肩を持ちだしたらおれはたまらない。二人の人間に呪はれちや、おれは無事でゐられさうでないよ。

庄三郎　おぬしは此間の晩の譫言に似合はない意氣地なしになつたな。何もおぬしがキリシタンに改宗して、連名帳に血判をも捺した譯ぢやあるまい。キリシタンの證據になる紙片一つも持つてゐるのぢやあるまいし。

卯之助　それはさうだが、おしほが邪宗の嫌疑を受けて糺問されると、おれの名が出る。おしほがおれを抱込まうとしたら、どんな口でも利けるんだ。たとへ、言譯が立つにしても、あの女子と一しよに代官所の地べたへ土下座させられちや、おれもみじめぢや。

庄三郎　（恐怖を現はし）だから、おれが云はんこつちやない。假りに嫌疑を受けたら、おぬし一人の災難で濟むことぢやないよ。何にも御存知ない兩親をはじめ、一家一族も卷添へを喰ふぢやないか。

卯之助　例の變な男が、今におぬしの上に天罰が落ちるぞと云はぬばかりの目付をして行きやがつたが、あの男がおしほを手馴づけたのは、おれの頭に天罰の落ちる前觸れ見たいなものぢや。（思詰めたやうに）おれは一刻も早うおしほを、あの男の手から取戻さにやならない。おれは昨夕からそのことばかり考へて、一睡も出來ないん

だよ。

庄三郎　取戻すというてどうするのだ。一たん絶縁の言渡しをして置きながら、も一度縒を戻さうと云ふのか。……(憤りを現はして)どちらにしても、おぬしはおれ達一家の上に災難の種を播いたのぢや。おれが旅にゐた間の心配は杞憂ぢやなかつた。夜の明けるのを待たないで、直ぐにも家へ歸つて兩親にお話しなければならない。

卯之助　まあ待つて異れ、兩親に話しても驚かせるばかりで何の足しにもなりやしないぜ。……兄貴、人の知慧を借りようと思うて、わざ〳〵此處へ連れて來たのに、さう手輕に見棄てられちや困るよ。

庄三郎　おぬしはたとへ御詮議を受けても申開きが立ちさへすりやそれで濟むことぢや。一時の恥を忍めば濟むことぢや。おれを見い。血を分けた弟が天下御禁制の宗門に掛合つたと噂が立つたら、おれの立身の道は、一生涯塞かつてしまふのぢや。一度穢れたおれの名は生涯拭ふことが出來なくなるのぢや。

卯之助　それはおれにもよう分つて居る。無實にしても一度不淨な糺問を受けたもの丶兄弟を、どこの領主も大名も取り立て丶異れるものか。島原落城以來ます〳〵嚴しくなつた天下の御禁制には、上に立つ奴もみんなおぞ毛をふつて、領内にキリシタンの臭ひのするのも恐れて居るやうな時世ぢやないか。

庄三郎　それが分つてゐながら、おぬしは一人の兄を日蔭者にしてしまふつもりか。

卯之助　それを氣遣つて居ればこそ、おぬしを今夜此處へ連れて來た。い丶知慧はあるまいか。都へ上つて學問をして來たおぬしの腹からい丶知慧を絞り出せないものか。一生の浮沈の場合ぢや。

庄三郎　……(苦しみながら考へる)

卯之助　おしほの生命の根を絶つ外にどうにもしようがあるまいな。(獨言のやうに云ふ)

庄三郎　(訝りながら)何を云ふ?

卯之助　おしほをこの世から無いものにするのぢや。おれ達が三十年か四十年心安う生きるために、おしほを、一刻も早うキリシタンの好きなハライソとかへ送り出すのぢや。おれはおぬしに賴んでおしほを此處へ呼出して貰ひたい。

庄三郎　おぬしは恐怖のために氣が狂うたか。何の罪科もない若い女子を……。

卯之助　罪科もない者が、燒かれたり突かれたり蟲けら同様に鏖殺しに會うてるのが今の時世ぢや。聖賢を氣取つて人一人の生命を取るのに愚圖々々するには及ぶまい。……兄貴はさう思はないか。勝手に人間をつくつて苦し

みを與へるデウスほど殘酷なものが、外にあらうか。あれほど可愛かつたおしほが、いやで／＼たまらなくなつたのも、デウスが世にあるのならデウスの所爲ぢや。おれのせゐぢやない。（聲が高くなる）

庄三郎　大きな聲を出して、誰れかに聞かれたらどうする？

卯之助　（ふと耳を傾けて、小聲で）　おぬしは足音が聞えないか。落葉の音が幽かに聞える。……月があれだけ上つてゐるのを見ると昨夕と同じ時刻ぢや。今夜にも呼出さうと思うてゐたおしほが、此處へ自分からやつて來たのは天の助けぢや。

（卯之助、庄三郎を無理に引張つて奧へ入る。）

（さつきの犬が地べたを嗅ぎながら、ノロ／＼と入つて來て、二人のゐたところに足を留める。そこへ、おしほが何かを捜すやうに、あたりに目を留めながら入つて來る。犬が彼女を見て吠え立てる。おしほ犬を追ひながら行きかけると、ある男現はれる。おしほ平伏する。）

ある男　わたくしは急いで來たのだが、あなたを待たせて濟まなんだ。

おしほ　わたくしも今來たばかりなので御座います。宵からまんじりともせいで、お約束の時刻におくれないやうに、家を脱出てまゐりました。

ある男　わたくしも昨夕からあなたのことばかり氣に掛つてゐた。それで、今夜は無理を押して此處へ來ることは來たが、わたくしはもう眞萱には居られなくなつたのです。身の危いのを恐れはせんが、わたくしには、この世で天主の御教へを廣める大事な役目がまだ盡きて居らんので、明日にも外の土地へ行かねばならんのです。

おしほ　（失望したらしく）　不思議な御緣で折角お目にかかつたのに、もうお別れしなければならんので御座いませうか。

ある男　しかし、今夜お會ひ出來たのは人間業ではないんです。あなたもお喜びなさい。……それで昨夕お話したことはようお解りなすつたのであらうな。

おしほ　有難い御教へで御座います。いたらぬわたくしをもお仲間のはしに入れて頂ければ、何よりの仕合せだと思ひます。

ある男　（微笑して）　ゼンチヨの家に育つたあなたが、僅か一二度御教を聞いたばかりで、その決心が出來たのは、天主の厚いお惠みぢや。わたくしがこの御近所を立退いても、眞萱には、わたくしの仲間が二三人はあるのだから、その人達にあなたのことをよう話して置きませう。

おしほ　（跪いて拜しながら）　わたくしは、御威光の強い

天主様に一命をも差上げます。あなた樣の御恩も決して忘れはいたしませんが、お別れに、大事なお願ひをいたしたいので御座います。不憫と思うてお聞屆け下さいますでせうか。
ある男　何です？　遠慮なく云うて見なされ。（柔しく）
おしほ　あなたの持つていらつしやる魔法の極意をお授かりいたしたいので御座います。
ある男　魔法とは何の事ぢや。
おしほ　あなた樣のやうに、人間業では出來ないことが自由に出來ますやうに……。
ある男　愚かなことを云ふ人ぢや。天主のお心のまゝにアニマも色身もまかせることを知らないで、人間の及ばぬ力を得ようとするのは、惡魔天狗の心ぢや。……わたくしは惡魔のお使ひぢやない。あなたは昨夕わたくしがあれほど詳しうお話したことが、まだお解りにならないのぢやな。
おしほ　それではお仲間に入つても、人間の力の及ばない力を授けて頂けないので御座いますか。
ある男　わたくしは魔法使ひぢやないよ。
おしほ　それでも、先日の夜、卯之助樣をお睨みになると、あの方は氣絶なさいました。
ある男　氣絶したかせんか、わたくしの知らないことぢや。
おしほ　わたくしはお見違へしました。それが眞實なら、あなたは怖い方ではありませんわ。怖いのはお上の御法度で御座います。……わたくしは、これでお暇をいたします。
（おしほは、詰らない顏して、碌に挨拶もしないで逃げるやうに出て行く。）
（ある男、落膽した樣子で、ちがつた道を取つて出て行く。）
（庄三郎、卯之助、森の奥から、蜘蛛の巣など拂ひながら入つて來る。）
卯之助　天主のお使ひも見じめなものぢや。おしほに肬鐵砲を喰はされたやうなものぢや。
庄三郎　これでおれも安心した。しかし、おしほは何のために魔法を覺えたがるのだらう。まさか、おぬしを呪殺さうとするのぢやあるまいな。
卯之助　どうか分らないよ。……さあ、歸らう。
（氣拔けのしたやうな態度で出て行く。庄三郎隨いて行く。）

四

（二）と同じ土藏の二階。夜。
おしほが晴やかな顏して上つて來たので、卯之助はど

う取扱つたらいゝかと迷つてゐるところ。
おしほ　お學問の邪魔になるので御座いませうか。
卯之助　おれは先日から身體の加減が悪うて、誰れにも會はない。外へも出ないのぢや。お前は今夜何か用事があるのか。
おしほ　先日の御本のお話を承りたいと思ひまして。
卯之助　南蠻のお姫様のお話を聞きたいと云ふのか。
おしほ　心のお手本になる話だと仰有つたぢや御座いませんか。
卯之助　そのお姫様は魔法使ひぢやないよ。
おしほ　（笑つて）若い女子の心のお手本になる方が、魔法使ひである譯は御座いませんわ。それはわたくしでもよう分つて居ります。
卯之助　さうか。そんなによう分つて居るのなら、强ひて聞くには及ばんぢやないか。……魔法を覺えて男を呪はうとしたために、却つて自分が火焙りにされて死んだのぢや。
おしほ　あなたは御戯談を仰有る。心のお手本になるが方、そんな筈はないぢや御座いませんか。
卯之助　なあに、世の中には意外なこともあるものだよ。……お前はこの頃夜はよう眠れるのか。
おしほ　田植がはじまつて、一日働き通しに忙しいんですもの。夜眠れないやうではたまりませんわ。
卯之助　それはいゝ。おれは恐ろしいことばかり目について、この頃眠つかれなくつて困るよ。
おしほ　どんな恐ろしいことを御覧なさるのでせう。先日の方がまだ此處へ訪ねていらつしやるのでせうか。
卯之助　（相手の顏を訝しげに見て）あの男は此處へは來ないが。……まだ夜になるとこの邊をうろついてゐるのぢやないか知ら。
おしほ　さう云へば、見馴れない變な人が、毎晩この村をうろ〳〵して居ると、今日の晝休みに噂をしてゐた人が御座いました。今にお役人の目に留つたら、またお調べがはじまつて、今年の正月のやうな騒ぎが持上るかも知れないと、みんな心配して居りました。わたくし、噂を聞いただけでもぞつといたしますわ。
卯之助　お前を殺さうとしてゐるものもあるかも知れないからな。
おしほ　そんな恐ろしいことは仰有らないで下さいまし。わたくしは、村の人の誰からも恨みを受けた覺えはないし、悪う思はれたことさへないので御座いますから。
卯之助　お前はさう信じてゐるだけ仕合せだな。キリシタンの信者が、死んだ後でハライソへ行けると信じてゐるやうに仕合せぢや。……さう云へば、兄貴が先日お前に

會つて何か云つたさうだが。

おしほ　（少し萎れて）　それはお兄樣の仰有ることはよう承りました。お兄樣の仰有ることは御無理では御座いませんから、何とも申上げませんでしたけれど、あなたのお心が昨日と今日で手の裏返すやうにお變りにならうとは思はれないので御座いますわ。

卯之助　おれもお前の外の女子を思うて居る譯ぢやなし、お前に別れりや一人ぼつちぢや。

おしほ　お兄樣の御意見を承つたあとで、わたくしは父にも母にも、これまでのことを一切打開けました。

卯之助　打開けたら親爺は怒つたらうな。

おしほ　いゝえ。小言一つ云ふでもなし、おれにまかせて置けと申しました。

卯之助　ぢや、お前の親爺から直かに、おれの兩親か兄貴に話しがあるだらうが、老人どもはどうでも勝手に話をつけるがいゝ。だけど、お前はおれに隱しちやいけないせ。

おしほ　あなたに何も隱してゐることは御座いませんわ。

卯之助　いや、大事なことを隱してるんだらう。（責めるやうに訊く）

おしほ　（當惑しながら）　餘計な御心配をおさせ申して、お身體に障つちやいけないと思つて默つて居りましたけれど、この土藏のまはりに毎晩變な男が立つてゐると、噂をしてゐるものが御座いました。ほんとうでせうか。そのためにあなたが毎晩お眠りになれないのぢや御座いますまいか。

卯之助　おれの訊くのはそんなことぢやないよ。お前は昨夕も一昨夕も、奥澤の森の中で、あの男に會うて、魔法の傳授を頼んだらう。

おしほ　なぜ、そんなことを仰有るの？　わたし思ひもつかん事で御座いますわ。魔法だの、奥澤の森だの、わたし、考へても怖い。……あなたこそあの方の魔法にかゝつていらつしやるんぢやないでせうか。

卯之助　隱したつて駄目ぢや。兄貴を連れて來れば分ることぢや。兄弟一しよで見たことを、お前は魔法の所爲にして言拔けようと思ふのか。……魔法なんかあるもんぢやない。あの男が森の中で、人間は魔法など使へないと云うたのを、お前も聞いた筈ぢやないか。あの時、お前の心をよう見た。ふて〴〵しい奴ぢや。さあ云へ。眞實のことを。

（卯之助は、ふと興奮して、おしほに掴みかゝらうとする。おしほは相手を拂退けて階下へ驅け下りる。）

（卯之助も階下へ驅け下りかけたが、ふと踏留まつて、元の座へ倒れるやうに戻つて、努めて心を落着けよう

として目をつぶる。）

（目を開けると、おしほと同じやうな顏した女が、古代ローマの裝ひをして窓の側に月光に照らされてボンヤリ現はれる。卯之助啞然として見詰める。）

その女「此御主に思ひ替へ奉るべき至寶、何國にあるべきや。此御前にては、金銀珠玉も灰ほこりの如し。只偏に此君ばかりを望み奉るなり。汝達のおどす所の苦しみをば物の數とも思はず、命を捨てんこと露ちりよりも更に思はず。命を數多持つに於ては千たび百たびも捨てんことこそ本意なれ。われを美麗なりとの御褒美も、皆以て御迷ひなり。花をあざむき月をねたむよそほひとても、あたなる夢の浮世ぞかし。御いとま賜はりて御望みの如くはからひたまへ」

（その玲瓏たる聲に、卯之助聞き惚れる。）

卯之助　それはあの男から貰つた本の中にあつた言葉ぢや。（獨言のやうに云ふ）あなたは何のためにこんな所へ來たのです？

その女　あなたはわたしがあなたの目の前に現はれるのを望んでゐたではありませんか。

卯之助　あの話のなかにあつたアナスタジヤ姫のやうな美しい女子を、先日うち空想してゐたが、それが自分の目の前へ出て來ようとは思はなんだ。……愚夫愚婦の迷ひとばかり思つてゐたキリシタンの魔法はあることなのか。

その女　わたしは、千何百年以來、あなたのやうな人の前には、何度となく現はれてゐるのです。

卯之助　わざ〳〵わたしの前へ現はれて、わたしをどうしようと云ふんです。

その女　それはわたしの知つたことぢやありません。百年後にも、千年後にも、人間がこの世界に生きて動いてゐるかぎりは、わたしは、あちらの窓こちらの窓へ現はれなければなりません。わたしが受けた運命に泣いた人もあります。喜んだ人もあります。

卯之助（怖々側へ近づかうとして）アナスタヂヤ姫がおしほに似て居る。

（不思議さうに云つて、そちらへ心が惹かれて行くとともに、その女の影は消える。そして、彼れが振向くと、庄三郎が立つてゐる。）

卯之助　兄貴、今のを見たか。

庄三郎　今のと云つてなんだ。

卯之助　今までゐた不思議な女を。

庄三郎　おれは、今おしほに起されて飛んで來たのぢや。おぬしがバテレンの魔法にかゝつたと云つて、おしほは心配して居つた。そんな馬鹿なことがあるかとおれは云つて置いたが。

卯之助　おれは魔法に掛つてる。今も千年前の女子に出會うた。……おれはキリシタンにでもなる。デウスでも拜む。明日の日代官所で拷問に逢つてもいゝ。何よりも眞萱へ行つてあの男を直ぐに呼んで來て、このおれの身體を魔法から解いて吳れ。

庄三郎　おぬしは亂心したか。心を落着けろ。（卯之助の手を執つて下に坐らせる）

卯之助　おれは亂心してやせんぞ。昨夕奥澤の森の中へおぬしと二人で行つたとおれは思つてゐたが、あれはおれが魔法にかゝつて、有りもせんことを獨りで思つてゐたのぢや。おぬしは昨夕夜中に森の中なんぞへ行つた覺えはないのだらう。

庄三郎　おぬしはどうかして居る。おれはおぬしに誘はれて、薄氣味の惡い森の中へ入つて行つて、おしほが變な男に會つて、魔法の傳授をせがんでるのを見たぢやないか。

卯之助　おぬしも魔法にかゝつてるのぢやな。行きもしない森の中へ行つたと思つたりして。……聖賢の學問をした人間がバテレンの魔法にかゝつたのか。

庄三郎　馬鹿を云つちやいけない。

卯之助　おぬしこそ馬鹿ぢや。魔法にかゝつてゐながら、自分で氣がつかないのか。……眞萱からあの男を呼んで來られなけりや、此處で手を合せてお賴みせい。デウスを拜め。ゼスキリシトを拜め、バテレンを拜め、マルチスになつた豆腐屋の彥兵衞を拜んで、魔法から解かれるやうにお取做しをたのめ。おれは手を突いておぬしと一しよに拜む。

（卯之助、空を見て手を突いて屈從の意を現はす。）

庄三郎　みじめなざまぢや。全體こんな土藏に獨りでゐるのがいけないのだ。

（庄三郎歎息する。）

――幕――

歡迎されぬ男

人物

染井久三（三十歳前後）
伊東秀雄（三十餘歳）
大山明三（六十五六歳）
大山治助　明三の次男（二十五六歳）
夏江　久三の妻（二十六七歳）
くに子　秀雄の妻（三十歳くらゐ）
おちか（二十四五歳）
その他數人

初夏の頃

一

本郷彌生町大山明三宅の應接室。以前醫師の家だつたので、患者の待合室であつた部屋が應接室になつてゐる。疊の上にテーブルが置かれて、椅子が二三脚。壁に添つて、青いクションのついた長いベンチが置かれてある。大地震のための破壞の跡がまだ殘つてゐる。

染井久三（三十歳前後、風采の揚らない貧弱な男で、質素な洋服を着てゐる）ベンチに横はつて新聞を讀んでゐたが、退屈したらしく、欠伸をしながら起上つて、部屋の中をうろついてゐると、上手から、おちか（二十四五歳、大山の縁者だが、貧しいために、此家に寄寓して下女同樣に働いてゐる）が、風呂敷をもつて買物に行かうとして庭へ出て來る。

久三はおちかの顏を見ると、微笑して庭の方へ寄つて、

久三　何處へ行くの？

おちか　牛肉屋まで。

久三　もうそろ／＼お午飯仕度か。僕も大分腹が減つたが、牛肉の御馳走になれるか知ら。

おちか　さあ、どうですかね。（素氣なく云つて行過ぎようとする）

久三　ちよつとお待ちよ。（おちかを呼留めて）僕は聞きたいことがあるんだよ。

（おちかが足を留めると、久三は端近く乘出して、相手をも側へ寄せて。）

久三　（あたりを憚るやうに）治助さんの結婚問題が大分進んでるさうだが、どうなつてゐるんだね。伯父さんは

今度は望みを曝して、纏めようとしてゐるさうだが、どうなつてるのか知ら。治助さん自身はどんな考へでゐるのか知ら。

おちか　(不愉快さうに)　あなたはそれを聞いてどうなさるの？　どうだつていゝぢやありませんか。あなたには御自分の御用がいろ／＼おありなさるでせうのに。

久三　いくら僕が忙しくつても、人の結婚の噂を聞くぐらゐの餘裕はあらあね。おちかさんがさうツケ／＼邪慳な返事をするのは少し可笑しいね、……僕がこの頃一家團欒の茶の間へ入れて貰えないで、こんな殺風景な應接室でボンヤリ待たされてゐるのを、おちかさんだけは同情して呉れてもよささうなものだが。

おちか　(少し機嫌を直して)　でも、こゝの家では、一家團欒の樂みなんか、影もありやしませんわ。それはあなたも御存じなんだけれど、この頃はことに乾燥無味なんです。…dry as dust　あるひは氷の如き生活……久三さんこそ、室借り生活をしてゐらつしやつても、一家團欒のお温い家庭を樂んでらつしやる譯ぢやありませんか。

久三　お世辭にでもそんなことを聞かされるのははじめてだな。だけど、一家團欒でもお温い家庭でも、金がなくちや駄目だね。僕の求めてゐる金錢は、極めて僅少なものなんだけれど。

おちか　今日も、そのお金のことでいらつしつたの？

久三　「今日も」とはひどいね。僕はこの前來た時にも、金錢の無心なんか一言も云やあしなかつた。今日だつて、借金をしに來たのぢやない。僕の貧相な顏はいつも無心顏や乞食面に見えるのかな。

おちか　へえ。それは不思議ですわね。伯父さんも伯母さんも、久三が金を借りに來る／＼とたび／＼云つてらつしやつたから、わたしもさうとばかり思つてゐました。……それにあなたもお金の御用でもなければ、こんな家へいらつしやる必要はないぢやありませんか。

久三　成ほどね。金でも借りるためでなければ、僕がこんな家へ何しに來るのかと、おちかさんが思ふのも無理はないね。(大に感じたらしく)　僕は此處の伯父さんから金を借りようなんて、そんな不可能なことは思はなくなつてるつもりだが、腹の中で金が欲しい欲しいと思つてゐるから、その思ひが自から顏付や言葉の端々に現はれるのかも知れないね。

おちか　でも、あなたなんか男だから、いくらでもお金の取れる仕事が見つかるでせうのに。

久三　僕の家の奴がよくさう云ひますよ。男のくせにと云つて、我々男子をケナスのが女の常識なのかも知れない

が僕から云はせると、當節は女の方が金の蔓を摑まへることが手易いんぢやないだらうか。おちかさんほどの婦人がこんな家で牛肉買ひなんかに使はれてくすぶつた生活をしてゐるのを、僕は不思議に思つてるんだ。

おちか　でも、わたしたちに適當したいゝ仕事が何處にあるんでせう。あなたが御存じなら教へて下さいね。

久三　さうだなあ。戯談にも僕に職業の相談をしてくれる人は、あなたくらゐなものだ。……人間の職業はいくらでもありさうで、さて考へて見ると無いものだね。やつぱりこの家で辛抱してるのが一番いゝんだらうな。

おちか　……こんな天氣のいゝ日曜に、お午餐のお惣菜の買出しに出掛けるなんか、こんな詰らないことつたらありやしない。

久三　ハヽヽ。治助さんの結婚話を聞かうと思つたのに、あなたが云はないものだから、所帶染みた詰らない話になつてしまつた。……まあ、早くお使に行つていらつしやい。僕に好意を持つてるおちかさんには、もつと面白い話を聞かせたいんだが、僕にはそんな面白い話の持合せは全くないんでね。

おちか　ほんとに愚圖々々しちやゐられない。（ふと我に返つたやうに云つて、久三の側を離れて）御ゆつくりしていらつしやいと云ひたいけれど、あなたは、此處の家では、歡迎せられないお客樣なんですからね。

久三　それはあなたに注意されるまでもないことだ。何處へ行つてもあまり歡迎される男子ぢやないことは、御當人が百も千も承知してゐるよ。兩親がかういふ風に僕を生みつけたのだから、今更ジタバタしたつて爲方がない譯さ。

おちか　あなたが其處にさうしていらつしやるのを見ると、病人がお醫者の家へ來て御診察の順番を待つてるやうに見えますよ。（笑ひながら云つて行きかける）

久三　うまいいやがらせを云つたね。（淋しく笑ふ）

（おちか、下手へ入つて行く。久三、何か呟きながら、ベンチに腰を掛ける。と、そこへ明三（六十五六歳、體格は逞ましいが、リューマチスを病んで弱つてゐる）が足を引摺るやうに歩いて、訪問者島田某（四十歳くらゐの立派な男）を見送つて出て來る。久三立上つて、二人に向つて一しよにお辭儀をする。）

島田　オヽ、染井さんでしたか。（立留つて挨拶して）この頃はどちらへお勤めになつてゐらつしやる？

久三　お聞きに入れるほどのところぢや御座いません。

明三　（島田に向つて）染井は丸ノ内の信託會社に出てゐます。今度は落着いて勤まりさうです。

島田　それは結構です。……ちと、お遊びにいらつしやい。

（島田、沓脱ぎへ下りる。明三は足のだるさを忍んで玄關先に立つて、客が靴の紐を結ぶのを待つてゐる。久三は疊の上に坐つて叮嚀に見送る。）

（島田が出て行くと、明三は、苦痛を感じてゐるやうな顏付をして、椅子に腰をおろす。）

（久三、相手の樣子に氣を留めながら。）

久三　伯父さんはこの頃氣分がよくないんですか。

明三　ウヽン。陽氣の加減で持病が出ていけない。去年まではこんなぢやなかつたのだが。

久三　陽氣の加減と云つても、この頃は晴天續きで溫かくて、一年中の一番いゝ時節ぢやありませんか。

明三　お前だちにはよくつても、おれの身體にはよくないよ。

久三　それは病氣をもつてる人には、いゝ時候といふものはないんでせう。金に不自由してゐる人間にもいゝ時候はないんでせうがね。

明三　（相手の言葉には耳を留めず、外を見ながら、少しの間默つてゐたが）おれは今朝から二三人の來客に攻められて話疲れをしてゐるんだが、お前は何か急な用事でもあるのかい。

久三　（少しドギマギして）いや、差當つて用事があつてお伺ひした譯ぢやありません。……東京では身內は伯父さんのお宅だけだから、時々お伺ひしろと、故鄕（くに）の母がいつも云つて來まして、時々は此方の御樣子を、手紙で知らせてやらないと、叱られますので。

久三　それで、ちよいちよいおれの家の樣子を覗きに來るのかい。何のことだ。（不快な顏して）しかし、これからは、わざわざ來てくれるには及ばないよ。おれが死んだ時には、死亡通知を送らせるから、それでいゝぢやないか。

久三　わたくしがお伺ひすることが、そんなに伯父さんのお氣に障るのなら、御遠慮してもよろしいんですが。

明三　（少し言葉を軟げて）絕對に來ちやいけないとは云はないがね。……しかし、あゝいふ同棲者が出來た以上おれの家とは家風が合はないんだから、そのつもりでゐて吳れなきや困るよ。

久三　でも、故鄕（くに）の兩親の許可を得てるんですから、伯父さんも認めて下さらなければ……。

明三　だから、おれはお前がどんなことをしようとも妨害はしなかつた。そのかはり、お前もおれの家へ害を加へないやうにして吳れなきやいけないね。

久三　害を加へる？　へえゝ。わたくしは伯父さんの身內だつてことを、誰れにも云やしません。こんなヤクザな甥が東京で生きてゐることは、伯父さんの御名譽にもな

らないでせうが、別段不名譽にもならないだらうと思はれます。治助さんの緣談だつて、身内にわたくしのやうな奴がゐちや困ると、先方で肱鐵砲を喰はしたりなんかしないでせう。

明三　治助の緣談のことを、お前は誰から聞いた？

久三　さういふ話は、誰れの口から出たともなく、直ぐに知れるものですね。（ふと氣がついたやうに）さう云へば、今歸つて行つた島田さんは、緣談のことでやつて來たんですね。あの人は仲人稼業をよくやつてゐるやうだから。……伯父さん。わたくしの身についてもたまには考へて見て下さい。わたくしには島田さんのやうに緣談の世話をして吳れる者があるぢやなし、この年齢になつて獨身ではゐられないし、あなた方のお氣に入らないやうな同棲者でも拵へなければ爲方がないぢやありませんか。

明三　身勝手なことを云つてる。お前はあの事でまだおれを恨んでゐるのか。（不意に神經を尖らせる）

久三　あのこと？（考へて、ふと氣づいたが、詰らなさゝうに）ハ、ア。あのこと〻云つてくに子さんのことですか。隨分以前のことですね。今やうやく思出したくらゐで、平生わたくしの頭からは消えてしまつてゐたんですよ。あんなことは根に持つても葉に持つてもゐませんよ。伯父さんはお年寄りのくせによく覺えてゐらつしやる。

明三　おれがあの事と云つたのは、くに子のことぢやないよ。

久三　ハテナ。……しかし、何事についても、伯父さんを恨んでなんかゐませんから、安心していらつしやい。身内の者に恨まれてゐると思つたら、御病氣にも障るでせうから。

明三　おれは椅子に腰を掛けてゐると、足がだるくてたまらない。これで御免を蒙らう。（椅子を離れて）お前も用事がないのなら歸つたらよからう。

久三　（咄嗟に言葉に力を入れて）伯父さんにお願ひしたいことがあります。

明三　（驚いた顏をして振返つて）何だ？

久三　金を貸して下さいとは申しません。さう思つて心配していらつしやるかも知れないけれど。

明三　おれの家に有り餘る金がある譯ぢやなし、たとへ、貸してくれと云つたつて貸せるものか。

久三　わたくしは、伯父さんのお心はよく存じてゐますから、今日の米櫃が空になつてゐても、決して御無心は申しませんが、今お願ひしたいことは、全く別なことなんです。（首垂れて思詰めてゐるやうに）わたくしはこの應接室を拜借したいんです。

明三　この部屋を貸して與れつて？　妙な無心だね。それでどうしようと云ふんだ？　誰かに此處で會はうと思つてゐるのか。

久三　……誰れに會ふ必要があるものですか。わたくしは、この應接室の、あのクションの上に横になつて、永久に眠つてしまひたいんです。この世にお暇を告げたいんです。

明三　（噓とも思へないやうな相手の顔付を見入つて）戯談もいゝ加減にしろ。おれを揶揄ふつもりか、脅かすつもりか。

久三　どちらでもありません。今から何分間かの間、あのベンチを貸して頂ければよろしいんです。今生にわたくしが伯父さんから求めるところは、たつたそれだけなんです。

明三　馬鹿を云へ。自殺でもする奴が、豫め人に斷るつてことがあるものか。それに、死ぬと極まつたら、適當な死に場所はどこにでもあるぢやないか。

久三　いゝえ、わたくしにはあのベンチの上が何處よりもいい死に場所なんです。（と云つて、ベンチの方へ近寄つて）このベンチには、以前いろ〳〵た患者が腰を掛けてゐたんですね。この家の前の持主だつた醫者は山師で、いゝ加減な注射治療を賣物にして、一本の注射で二三十圓づゝも儲けたといふことですが、役に立たない治療を受けて、金ばかり取られて死んだ人間が隨分あるんでせう。……さういふ不幸なる患者の思ひの殘つてゐる椅子だ。（と、意味ありげな目をベンチに向けて腰をおろす）

明三　この家にケチをつけるものぢやないよ。以前はどうだらうと、買取つた今は、ベンチ一つでも椅子一つでも、おれの所有なんだから。……お前はさういふいやがらせを云つて、おれを脅かして、いくらかの金をまた持つて行かうと云ふんだね。……オイ。そこへ腰を掛けちやいけないよ。早く歸んなさい。

（彼れは久三の腕を捉へて立たせようとする。しかし、久三は動かない。）

久三　「また」と仰有つても、わたくしは、伯父さんから何も頂いた覺えはありませんよ。誰れにでも物をやることのお嫌ひな伯父さんも、眠つてる間には、わたくしなんかに金を下さる夢を御覧になることもあるんですね。さつき申し上げた通り、わたくしは、今日お金を惠んで貰はうなんて毛頭そんな考へをもつて參つたのぢやありません。

明三　ぢや、はじめからおれの家で自殺しようと企んで來たとでも云ふのか。馬鹿な奴だ。

久三　いえ、必しもさうぢやありません。（まだ彼れの腕を

提へてゐる伯父の顏をじつと見上げて）伯父さんがわたくしの申上げることを聞きたいと思つていらつしやるんならお話し丶ますが……。

明三　事によつたら、話を聞くだけは聞いてやつてもいゝが、おれの病氣に障るやうな話なら御免蒙るよ。

久三　（相手にかまはない獨言のやうに）昨夜から今朝まで、たまらない不愉快なことがあつて、わたくしは朝餐も喰はないで家を飛出したのです。天氣がいゝので、いくらか氣が紛れましたが、誰れかの所へ行つて、親身な話でも聞きたくつてたまらなくなつて、うか／＼と此方へまゐりました。伯父か伯母さんか、泰雄さんか、治助さんか、此方のどなたかに會つたら、元氣がつくだらうと、當てにもならないことを考へてやつて來たんですが、その結果はアベコベだつたんです。

明三　（そんな話には興味を感じないらしく）生きてる人間に愉快なことばかりあるものか。たまには不愉快なことのあるのは當り前だ。

久三　（目を空間へ注ぎながら、なほ獨言のやうな言葉を續ける）頑丈だつた伯父さんが病み疲れて、この前お目に掛つた時に比べてさへ見違へるやうになつてゐらつしやるのを見て、わたくしは、スツカリ無常を感じました。金があつても、子供が人並みに育つて嫁入り嫁取りをするやうになつても、かうなつちや、何の生きてる樂みがあるものか……。

（明三、相手の話に心を惹かれた態度をする。）

久三　年齢と病氣の重石に壓されて、ウン／＼呻きながら、辛うじて生きてゐるといふだけで、何の樂みがあるものか。わたくしなぞは、親の遺産が手に入る望みがあるぢやなし、自分で出世もしさうでないのに、伯父さん見たいになつちやたまらない。と、さう思ふと、昨夕からの不愉快なことが胸に一杯になつて、此處らで浮世におさらばをした方が結局自分に取つて得策ぢやないかと思はれるんです。

（彼れはさう云つて、今まで外へ向けてゐた目を明三の方へ落すと、明三は彼れの側を離れて、疊の上にへたばる。）

明三　そんな氣味の惡い目で、おれの顏を見て呉れるな。

久三　伯父さんの顏こそ、死相を帶びてゐるぢやありませんか。わたくしの顏なんか平凡ですよ。みんなに馬鹿にされて來た顏だ。

明三　餘計なことを云はないで早く歸れ。……今日は島田がおれの家の爲めになる話を聞かせて呉れたと喜んでる矢先きへ、お前のやうな奴がやつて來て、おれの頭を攪なしにしやがる。……早く歸んなさい。……たつて死に

たいのなら、上野の森で首をくゝるか、不忍池へ身を投げるかするがいゝ。おれの家に迷惑を掛けるな。……お前はおれを脅かさうと思つてそんなことを云ふが、自殺の用意に刄物でもピストルでも持つて來てるのか。

久三　此處にこんなものを持つてゐます。（ポケットから布片に包んだ小さな藥瓶を取出して見せる）

明三　（その藥瓶を見上げて）それを靈藥だといふのか。變な色をしてゐるぢやないか。消化藥か何かだらう。

久三　ぢや、さう思つていらつしやればいゝ。わたくしは、この消化藥を飲んで、このベンチを拜借して、一眠りさせて貰ひますから、伯父さんはわたくしに關はないで、奥へいらつしやつてお休みなすつて下さい。わたくしは誰れにも遺言することはないんです……（と云つて自分の心に向つて云ふやうに）遺言？　そんなものを殘す必要があるものか。

（そして、彼れは、もはや明三には關はないやうな態度で、何事かを思詰めながら、部屋を歩廻つたあと、咄嗟に藥瓶の藥を飲んで、ベンチに横たはる。）

（明三は不安らしく、側へ寄つて久三の寢顏を見詰める。そこへ、次男の治助（二十五、六歳の、可成り立派な容姿をした男）が歸つて來る。）

明三　オヽ、いゝ所へ歸つて來た。今、久三が自殺をすると云つて、變な藥を飲んで此處に寢てるのだ。何か目算があつて狂言を打つたのかも知れないよ。此處へ來て樣子を見て呉れ。

治助　呆れたものだ。久三さんが狂言をやるなんて。人間て分らないものだな。（驚いた風もなく、好奇心をもつてベンチに近づく）

明三　まさか、本當に毒を飲んだんぢやあるまい。

治助　さあ、どうですかね。（久三の顏をソッと見下して）オイ、君。（と、久三を搖動かす）

（久三、薄目を開ける。）

治助　戲談ぢやないよ、君。

久三　治助さんか。僕の心を亂さないやうにして呉れたまへ。

明三　爲樣のない奴だ。（稍々安心したが、急に足腰の苦痛を覺えたらしく）おれは腰つ骨が挫けさうに病みだした。あちらへ行つて休んでるから、お前が久三によく譯を訊いて、早く家へ歸すやうにして呉れ。……こいつ、一文にもならないのに、おれの胸にこたへるやうな不吉なことを云やあがつて。（獨言のやうに云ふ）

（そして、彼れは、足を引摺つて入つて行く。久三は目を閉ぢ兩手を胸の上で組合せてぢつとしてゐる。）

治助　君も滑稽な眞似をしたものだね。身體は何ともない

んだらう。サア、起きたまへ。僕の部屋へ行つてユックり話をしようぢやないか。

久三　僕の心を亂さないやうにして呉れたまへ。藥の利目(きゝめ)が出かゝつて、僕は今死と闘つてゐるんだから。

治助　君のその變挺な目付や口付が、死と闘つてる證據なのか。そんな風ぢや、生と死の爭も、莊嚴でも凄慘でもないね。道化(だうけ)た眞似はいゝ加減で止したらどうだ。……全體君の狂言自殺の原因はどんなことなんだい。僕の親爺に要求したことが入れられなかつたためなのか。……僕が紅茶でも入れるから、起きて話したまへ……サア、僕が今生に加勢して、死を追拂つてやるぞ。

（治助が元氣よくさう云つて、久三の手を捉へて、勢ひ強く引起すと、久三は、それと爭つたはずみにベンチから轉げ落ちたが、立上つて、憤怒を顏に現はす。）

久三　君は殘酷な人だ。僕に無用な口を利かせようとするんだね。……僕は伯父さんなんかに何も要求すりやしないよ。親類のよしみで、君の家で、僕の死骸の跡片付をして呉れゝばいゝと思つてゐるだけなんだ。僕の死生の問題に立入つて貰はなくてもいゝよ。

治助　君は氣が狂つてゐるやうにも見えないが、妙だね。まあ椅子にでも腰を掛けて、落着いて見たまへ。君がそんなに怒つた顏したのを見るのは、今がはじめてだが、不思議なものだ。

（そこへ、おちかが、久三の内縁の妻夏江（二十六七歳、世摩(よず)れのしたらしい卑しい女）と、一しよに入つて來る。）

おちか　ア、よかつた。久三さんはまだいらしつた。（と、夏江に向つて云ふ）

（久三は夏江を見て驚く。）

おちか　（久三に向つて）今そこであなたの奧さんにお目に掛りましたの。此方の家をお捜しになつてゐて、偶然わたしにお訊ねになつたのです。（夏江に向つて）さあ、お上んなさいましな。

（おちかは、買物の風呂敷を持つたまゝ上り口に腰を掛ける。）

（夏江は應接室へ上つて、恭しく治助に挨拶する。治助は訝しげな顏して會釋する。今まで憤つてゐた久三は俄かに打萎れてマゴ／＼する。）

久三　お前はこんなところへ何しに來たのだ？（力なく云ふ）

夏江　あなたこそ何しに此方へいらつしやつたの？　あたし、どんなに心配して方々を捜したか知りやしない。（ふと、ベンチの側に置かれた藥瓶に目をつけて訝しげに）あなた、そのお藥を召上つたの？

久三　今日になつて飲む時が來たのだ。（感慨を籠めたやうに云つて、よろけるやうにベンチに腰をおろす）

夏江　なぜ、そんなお藥を飲む時が來たんです？……今朝あなたが出ていらしつてから、ふつと氣がつくと、その藥瓶がいつも置いてあつたところに見つからないんでせう。おや、あなたが持つて行つたに違ひないと思ふと、こりや、打やつて置けないと、あたし慌てゝだしたんですよ。（袂の中から、同じ形をした小さな藥瓶を出して）でも、よかつた。かういふことがあらうと思つて、中味をすり變へて置いて。……あなたがお飲みになつたのは、あたしが松下先生から頂いた持藥なんですよ。……あなたは、また何だつて、此方のお家でそんなものを召上つたんです？

久三　おや、さつき僕が飲んだのは、婦人病の藥だつたのか。（苦笑を洩らして唾を吐出す）

（治助、聲を立てゝ笑ふ。夏江は侮蔑した笑ひを洩らす。おろかも何となしに笑ふ。）

久三　僕にあんな藥を飲まして、僕を笑ひ物にしようとしたのか。

夏江　でも、あたしがお藥をすり變へたお蔭で、あなたの生命は助かつたんぢやありませんか。此方のお宅にも御迷惑が掛らなくて濟んだのぢやありませんか。

治助　それはさうです。此方で本氣で自殺なんかされて溜つたものぢやない。……しかし、この家は元藪醫者の家だつたのだから、藥の間違ひぐらゐは有りさうのことなんですよ。

夏江　（馴々しい態度して）あたし、このお宅へ今日お伺ひしたのをいゝ機會に、あたしだちの內輪の事を、此方のお家の方に聞いて頂きますわ。（治助に向つて）失敬ですが、あなた様はどなたでいらつしやいますか。

治助　（相手を見下した態度で）僕は此處の家族の一人です。

夏江　ぢや、あなたに聞いて頂いてもよろしいんです。お身內の方に立合つて頂いて、わたくしだちの間の最後の解決をつけたいんで御座いますから。

治助　さういふ面倒な話には、僕なんかゞ關係しちやいけないでせう。

夏江　たゞお身內の方に聞いて頂きさへすれば。あたし、氣がすみますのよ。

久三　お前が持つて廻つた口を利くにや及ばない。僕が簡單に云つちまはう。簡單なことなんだから。

夏江　（慌てゝ遮つて）いゝえ、あなたはどうかすると根も葉もないことを仰有るからいけないわ。あたしに云はせて下さい。（口調に重味をつけて）あたしは自分の身

體を引當てに、五百圓の借金をしてゐるんです。久三さんが保證に立つてゐて、そのお金は二人の生活に費つたのですから、期限までにどうにか極りをつけて貰はなきや困るんで御座いますの。

久三　それで、その借金を拂つちまふまで、僕に魔藥を飲ませないやうに警戒してゐるんだね。御親切さまだ。

夏江　（悠然として）あなたは死にさへすりや責任がのがれるやうに思つてゐらつしやるんでせうけれど、若しもあなたが、今自棄な死に方をなすつたら、お國の御兩親をはじめ、譯を知らない方は、みんなあたしの所爲になさるに極つてるぢやありませんか。あなたが御自分でどうしても死にたいのなら、それは御勝手なんだけれど、あとの事はちやんとして置いて下さらなきやいけませんよ。

久三　それで、僕を摑まへにこんな所までやつて來たのか。……お前の借金拂ひが出來るくらゐに、金の工面がついたなら、僕だつて死ぬ氣にならなかつたかも知れないよ。（おちかに向つて）おちかさん、お茶を一杯裝んで下さい。水でもよろしい。あんな藥を飲んだので、胸の中がむかむかして來ていけない。

（おちか入つて行く。）

治助　兎に角、君は物騷な男だね。出鱈目に自殺なんか企てるやうなヒステリックな男には、婦人病の藥が利目があるかも知れないね。細君と二人でその藥を持藥にしたらいゝかも知れない。

久三　（前と違つて元氣づいて）僕はさつき伯父さんの顏を見てゐるうちに、ふつと死にたくなつたんだが、自分でも變だな。……しかし、もう大丈夫。もう決して死なない。人が僕を殺さうとしたつて殺されやしない。（自分に力をつけるやうに云つて）治助さん。僕はね……昨夕いく度、これを（夏江を指差して）殺さうとしたか知れないんだよ。いや殺さうとしたのぢやない。殺した方がいゝと昨夕いく度思つたか知れないんだよ。……ところが、敵をでも、惡人をでも一思ひに殺せるやうな昂奮狀態が、僕の心にはどうしても起つて來ないんでね。

（治助、久三の言語と態度とを研究的に見聞してゐる。夏江は、何を云つてゐるのだと思つてゐるやうな冷笑を洩す。）

久三　僕が柄にない過激なことを云つたのを變に思つてゐるんだらう。（誰れに云ふともなく云つて）こいつが戀人をほかに拵へてゐるとか、僕を欺いて僕を踏付けるやうなことを企んでゐるかしてゐるのなら、僕だつてムカムカとして極端なことが出來るんだが、さうぢやないんだからね。

夏江　何を詰らないことを仰有るの？

久三　そりや詰らないことさ。……だけど、昨夕から今朝へかけて、二人であんないやらしい喧嘩をしつゞけたことを考へて見るがいゝ。色男でも出來かゝつてゐるやうなことを云つて、僕の氣をひいて見たり、僕の側を離れたら、世間がちやんとお膳立をして、お前を待つてゐるやうな蟲のいゝことを云つたりしてゐるのを、お前は淺間しく思はなかつたのか。僕がお前の借金を奇麗に拂つてやつたにしたところが、拂はないで死んだにしたところが、お前の落行くさきは大抵分つてらあね。

夏江　（腹立たしげに）それは大きなお世話よ。そんなことを他人の前で云つて、事情を知らない人は、あたしといふ女をどんなに誤解するか知れないぢやありませんか。

久三　だつて、お前の方から望んで云ひだしたことぢやないか。……お前は僕を離れさへすりやどうかなると、さきを樂みにしてるか知れないが、僕は……。

夏江　（相手の言葉を慌たゞしく遮つて）何をくど〳〵と寢言見たいなことを云ふんです？　あなたの身内の家に來たからつて、急にえらさうな口を利いて。……あたしは當然取るべきお金は取らなきやなりませんよ。えらさうな口を利いて、人前であたしに耻を掻せたきや、出すべきお金を出したあとでなさい。

（夏江は久三を小突きまはす。久三はそれに抵抗して相手を突飛ばす。）

久三　昨夕のやうにお前に負けてばかりはゐないぞ。おれが能無しで小汚い男なら、お前だつて薄つ汚い女だ。

（夏江、昂奮して、身を起して、無我夢中になつて武者ぶりつく。）

（おちかは奥からお茶を運んで來て、さつきから二人の様子を、呆氣に取られて見てゐる。）

（治助は、おちかを見て、ニヤ〳〵笑つて、久三夫婦の醜態を見ろと目顔で知らせる。）

（そして、打遣つても置けないので、二人を引分けて。）

治助　僕の家へ來て夫婦喧嘩のおさらへなんかされちや迷惑だよ。

久三　いや、どうも濟まなかつた。（頭を下げて面目ないと云つた表情をする）

（夏江はテーブルに倚りすがつて泣く。）

（明三、足を引摺りながら奥から出て來る。）

明三　（威嚴を見せて）お前たちは直ぐに歸つてくれ。……人の家へ來て自殺の眞似したり、夫婦喧嘩の眞似したり。耻知らずにも程があると云ふものだ。おれから金を引出すための狂言だらう。馬鹿め。それがおれに分らな

いと思つてゐるのか。……さあ、早く歸つてくれ。（久三の背を突く）

久三　これは驚いた。……わたくしは芝居氣なんかちつとも持つてゐない人間だから、そんなこと夢にも思ひつかなかつたのですが、伯父さんにさう云はれて見ると、成程狂言のやうでした。わたくしも生れてはじめて、人の前で芝居をしたのですね。

明三　それに氣がついたのなら、今日は大人しく歸つて吳れ。

久三　歸りますとも（キッパリ云つて）大變御迷惑を掛けて申譯がありません。……しかし、伯父さん。わたくしは今日此方へお伺ひした時とはまるで違つた人間になつてお暇することが出來さうですよ。だから、狂言もわたくし自身に取つちや無駄でなかつた譯です。……（夏江の肩を叩いて）オイ、兎に角歸らう。伯父さんがあゝ仰有るんだ。

（夏江は、さつきから、自分の顔を明三に見られまいとしてゐる。明三は夏江の顔を見ぬ振りをしながら、コッソリ見ようとしてゐる。）

久三　小さくなつてゐるなんて、不斷のお前にも似合はないな。顔を上げて伯父さんに御挨拶して行け。一生にまたと伯父さんにお目に掛ることはないだらうから。（夏江を引抱へて、明三の方へ無理に顔を向けさせて）これが不斷お噂をしてゐた伯父さんだ、（明三に向つて）これが、かねてあなたの擯斥してゐらつしやつた女です、

（夏江は萎れた顔して挨拶する。明三は苦い顔して會釋する。）

（その時をいゝ機會として、おちかは、夏江と久三とにお茶を出す。）

久三　（茶を飲んで）おちかさん、面白かつたでせう。あなたは結婚してもこんな馬鹿な眞似はしないやうに、今から氣をつけていらつしやい。（明三などに向つて）御迷惑を掛けて濟みませんでしたね。……我々二人のほんとうの芝居はこちらの門を出てからなんですよ。……左樣なら。

（久三は附け元氣でさう云つて出て行く。夏江は、藥瓶をベンチの隅に置いたまゝ、それに氣づかないで、コソ／＼出て行く。）

明三　二人ともあつかましい奴だ。これからあんな奴は寄せつけちやいけない。（我れともなくベンチに腰をおろして、治助を見て、稍々機嫌を直して）さう云へば、さつき島田が來ていろ／＼話をして行つたよ。

治助　（冷淡に）さうですか。

明三　先方では非常に氣乘りがして、一日も早く話を極め

たいと云つてるさうだよ。此方でもあんまり迷はないで、早く極りをつけた方がいゝだらうね。

治助　さうです。（冷淡に云つて）お母さんは何處かへ出掛けたんですか。（おちかの方を見て）兄さんの家へ行つたのかい。

おちか　えゝ。何だか急に思立つてお出でになりました。

（彼女はさつきから、奥へ行かうとしながら、父子の話に心殘りがしてゐるらしく躊躇してゐる。）

明三　お母さんがゐなくつてよかつたのだ。あれがゐたら、久三やあの女の不しだらな樣を見てどんなにいやな思をしたことか。目をまはしたかも知れないよ。（おちかの方を見て）お前は早く午餐の仕度をしなきやいけないよ。おれも腹がへつた。

（おちか、不承々々に奥へ入る。）

治助　お父さんもお疲れになつてるやうだから、あちらでお休みになつちやどうです？

明三　ウン。……おれも今日はひどく疲れたよ。心の疲れが顔にまで現はれてゐるのだらうな。久三がおれの顔を見ていやなことを云つた。おれの顔に死人の相でも現はれてゐるやうなことを云つた。それに、あいつ、おれの胸にギツクリ應へるやうな氣持の悪いことを云つた。

治助　どんなことを云ひました？

明三　どんなことつて、別段珍らしいことぢやないんだが、……珍らしくないことでも、時と場合でひどく胸に響くこともあるものだ。

治助　あの人は無能で金もないんだから、自棄（やけ）な口を利くやうになつたんでせう。信託會社の方も免職になつたらしいのですね。

明三　さうだらうとおれも思つてゐたよ。身内にあんな男がゐると、おれたちの信用に關はつて困るんだか……。

治助　さうですね。（冷淡に云つて、ふと調子を變へて）わたしは今朝、木村さんの家へ寄つて頼まれたんですが、あしこでは、この頃手不足で困つてゐるから、少しの間、おちかさんを貸してくれないかと云つてゐました。貸して上げる譯に行きませんか。

明三　いや、それは困るよ。家では一日でもおちかに出て行かれちや困るよ。あれがゐなくなつちや、おれも飯も食へなくなるぢやないか。

治助　他所から手傳つて來てるおちかさんがゐなくなつてさへ、お父さんの日常生活に差支へがあるのなら、なぜ兄さん夫婦を外へ出して置くんです？　この家に住まはせて家の用事をさせたらいゝぢやありませんか。（責めるやうに云ふ）

明三　理窟はさうだが、春雄はこの家にゐたくないのだか

ら、どうも爲方がないよ。

治助　ゐたくないのは、兄さんばかりぢやないでせうね。

明三　お前も結婚したら、直ぐに別居するつもりだらう。それはおれも覺悟してゐるんだよ。

治助　結婚の話はまあ待つて下さい。……それよりも、たび／＼わたしが云ふやうに、この家は人に賣るか貸すかして、郊外にでも住みいゝ家を新築したらいゝぢやありませんか。……この家がいけないんですよ。お父さんの身體の加減の惡くなつたのも、一つはこの家の所爲なんですよ。舊弊な言草だが、この家が祟るのかも知れませんね。……山師の惡德醫者のために治療法をあやまつて死んだ者の怨みが、この家に殘つてるのかも知れませんよ。我々がこの家に移つてから、碌なことはないんだから。……今日だつて久三さんを哂ひ物にしてすんだやうなものゝ、危いところだつた。この後またどんな不吉なことがないとも限りませんよ。

明三　久三もお前の云ふやうなことを云つてゐたつけ。……お前だち若い者がそんな迷信を有つてゐるから不思議だ。この年齡で新奇に家を建てたりなんか、そんな面倒くさいことが出來るものか。此處は廉い價で買つて、あの大地震にも燒けなかつたやうな運のいゝ家ぢやないか。お前たちがどこへ行かうとも、おれはこの家の空氣を吸つて、生きてゐられるだけ生きてゐるつもりだ。新奇な家を建てたつて珍らしいのは當座ばかりだよ。……いや、かう身體が惡くなつちや、家の新しいか古いかよりも柔しい人間の手が欲しいよ。だから、おちかのやうな柔しい氣の利いた女に、出て行かれりやしないかと、おれは氣遣つてゐるのだ。お前だちもあの女に邪慳なことはしないやうにして吳れ。一日でも長くゐて貰はにや、第一おれが不自由な思ひをするんだから。

治助　お父さんは、そんなにおちかさんがお好きなんですか。

明三　あれが明日でも出て行きやしないかと、氣遣はれるのだが、お前はどう思ふ。

治助　（面羞げに）何をです？

明三　（あたりを憚るやうに）おちかにもこの頃は、心に思つてる男があるのぢやなからうか。急におめかしに身を入れだしたりして。樣子がどうも變だ。……年齡が年齡だから無理もないが。

（そこへ、坂本某（二十代の男）が訪ねて來る。）

坂本　伊東さんの奧樣は、お宅へいらつしやらなかつたでせうか。

明三　いえ、來てゐません。くに子はこちらへ來ると云つたのですか。（足を引摺つて訪問者の方へ行く）

坂本　奧樣は今朝からお家にいらつしやらないので、何處へお出ましになつたのかと、旦那樣がさつきから心配していらつしやいます。

明三　どうしたんでせう。何か事があつたのですか。

坂本　わたくしはよく存じませんが。

治助　（ふと、奧の方を見て微笑を洩して）姉さんが此方へ來たら直ぐお知らせしますから、あなたは外の心當りを搜して下さい。

坂本　ぢや、さういたしませう。

治助　抛つといても心配なことはありませんよ。迷ひ兒にはなりやしないでせう。

（坂本は、心配してゐる明三の顏を見上げて、挨拶して出て行く。）

（くに子（伊東秀雄の妻、三十くらゐ。神經性の女）奧から出て來る。）

明三　（安心して）くには其處にゐたのか、いつの間に來てゐたのだ？

くに子　あたしさつきから、あしこに立つてゐて、立聞をしてゐました。こちらにはお客樣がいらつしやるやうだつたから、裏からソツと家の中へ入つたんです。久三さんが女の人と一しよに歸つて行くのを、氣の毒な思ひして見てゐましたのよ。（と云つたあとで、直ぐに侮蔑したやうに）あんな人なんですかね、久三さんが同棲してゐるといふ人は。

明三　人の事よりも、お前はどうして無斷で家を飛出して來たのだ？

くに子　それがお父さんにはお分りにならないの。……治助はよく察してくれるわね。

治助　僕にも分りやしないさ。

くに子　さう？　あたしには……あたしだけには、治助が島田さんの持つて來た緣談に不同意なことはよく分つてゐるのに。

（くに子は不平らしくさう云つて、ベンチに腰をおろして、夏江の置いて行つた藥瓶を何氣なく手に取つて、指の先でいじくりながら。）

くに子　あたし、此處へ來たら慰めて貰へるだらうと思つて、家を飛出して來たのだけれど、お父さんの顏を見たら、とても望みの叶ふ見込みのないことがよく分つたの。治助が云つた通り、この家がいけないんですよ。改築するか、移轉するかしたらいゝでせうのに。

明三　どいつも勝手なことを云つてる……。それよりもお前が此處に來てゐることを、早く伊東へ知らせなきやなるまいな。

くに子　打つちやつといていゝのよ。

（おちか、奥から顔を出して。）

おちか　お膳立てが出來ました。くに子さんも召上るんでせう。

くに子　あたしはよろしいのよ。……おちかさんは相變らず一人で臺所仕事をして、お忙しいでせうね。お母さんは今日の日曜にもまた兄さんのお家へ行つてるらしいのね。煩がられに行かなくつてもいゝでせうにね。

治助　やうやく飯が食へるんだな。

明三　くにも一つしよに來い。食べながら話をしよう。

くに子　ほんとうにあたしは何も食べたくありませんの。……皆さんの御飯のすむまで、あたしはこゝで玄關番をしてゐますわ。

（明三と治助とが奥へ入る。今まで快活な口を利いたくに子も、俄かに萎れた様子をして、ベンチから立上つて椅子に腰をおろし、物を思つてゐるやうに空間を見詰める。そこへ、伊東秀雄（三十餘歳、不斷着で着こなしが亂れてゐる）下手からアタフタと出て來る。くに子を見つけると、悦しさが胸から込上げる樣にして上へあがる。）

秀雄　やはり此方へ來てゐたのか。……坂本はお前を捜しに來なかつたか。（くに子の側に腰を掛ける）

くに子　（顔を上げて）どうですか。……それよりもあなたは何しにいらつしやつたの？　あたしに何か御用がおありなさるの？

秀雄　空呆けてゐるね。……昨夕お前がヒステリーを起して、絶望的なことを云つてはゐたが、まさか世間の物笑ひになるやうなことはしないだらうと思つてゐた。

くに子　あたしはいくらあなたに侮辱されても、どうもしないで、泣寢入りに寢てしまふ女だと思つてゐらつしやるの？

秀雄　まだそんなことを云つてるのか。おれはお前を侮辱した覺えはないよ。……此處のお父さんやお母さんに訊いて頂かうか。おれは、たゞつゆ子といふ不仕合せな女を庇つてやつたゞけなんだ。それでもお前の氣に障るのなら、今後絶對にあの女を家へ入れないやうにしてもいいのだ。つゆ子はおれが世話をしてやらうとやるまいと、どつち道不幸に落ちる女なんだから、此方で世話をするのも無駄骨折見たいなものなんだよ。これから知らん顔してゐてもいゝんだ。

くに子　此處へ來てまで、そんな言譯なんぞ、聞かして貰はなくつてもいゝのよ。……今にお父さんが出て來て、あなたと一しよになつて、黴臭いお説法を聞かせるのだと思ふと、あたしたまらないんです。（相手を脅かすやうな目をして、言葉に力を籠めて）あたしは、親兄弟に愚

痴をこぼしたくつて、今日此處へ來たんぢやありません。あなたが、勝手でさう極めないやうにして下さい。……あたしの死骸は、伊東家の世話にならないで、兩親の手で跡片付をして貰ひたいと思つて、今日此處へ來たんです。……あなたはそつちへ行つていらつしやい。

（彼女はヒステリックにさう云つて、秀雄を押退けるやうな手付をして、椅子を離れてベンチに横たはつて、かの藥瓶を取上げて飲む。）

くに子　これは、この家の前の持主だつたお醫者から、兄さんが貰つたモルヒネなんです。眠りながらいゝ氣持で死ねるやうに調合してあるんですわ。あたし、兄さんの机の引出しから盗んで、死にたくなつた時にいゝ氣持で死ねるやうに、しよつちゆう自分の身につけてゐました。今丁度このお藥を役に立てる時が來たんです。（感傷的な口調で）あたし、こんな冷酷な人生に生きてゐるよりは、早く夢の世界へ行つた方が幸福なんです。……あたし、今いゝ夢を見かけてゐるんだから、誰れもあたしの側へ來て、あたしの夢を擾亂さないやうにして下さい。

秀雄　戯談もいゝ加減にしろよ。（氣遣はしげに傍へ寄つて）まさかモルヒネぢやあるまいな。芝居の眞似をして脅かすなよ。（くに子の身體に手を觸れる）

くに子　芝居なら、さう思つて棧敷に坐つて觀ていらつしやるといゝ。……それはいゝ夢をあたし見かけてゐるの。

（彼女は目をつぶつてさう云つてゐるうちに、ふと苦痛を感じたらしく。）

くに子　あたし變たわ。どうしたのだらう。オヽ、苦しい。

（胸を押へて藻搔きながら、ベンチからすべり落ちる。）

秀雄　馬鹿な眞似をするからだ。（と、小言を云つてから、奥の方を顧みて、大聲で慌たゞしく）誰れか來て下さい。早く。（と叫んで、くに子を抱上げる）

（くに子、秀雄にしがみついて苦悶する。治助を先きに、明三とおちかゞ奥から出て來る。）

秀雄　くにが今變な藥を飲んだのです。早くお醫者を呼んで來て下さい。

治助　（藥瓶に目をつけて）それは、久三さんの妻君が忘れて行つた毒藥ぢやないか。どうして、そんな者を飲んだのだい。……おちかさん、大急ぎで醫者を呼んでお出で……どうしてそんなものを。……今日はどうも變な日だ。

明三　早く醫者を。早く。

（明三、痛む足を引摺りながらウロ／＼する。おちか奥へ入る。）

くに子　（ます／＼苦みながら）あたし、お父さんの不斷

の持藥かと思つて、戯談に飲んだんです。……あたし、死ぬ氣ぢやないんです。……ア、苦しい。……早くお醫者を呼んで來て下さい。あたし、今死ぬるのはいや。……助けて下さい。

治助　指を喉へ突込んで、腹のものを吐出したらいゝでせう。

（治助と秀雄と力を合せて、くに子を部屋の端へ抱へて行つて、飲んだものを吐かせようとする。）

明三　何といふことだ。（溜息を吐いて）お母さんがゐたら目をまはすだらう。

（足を引摺りながら、皆んなの側へ寄つて行く。）

（くに子、うめき續ける。）

――幕――

二

バラック建ての伊東秀雄の住宅の客室。前の幕の大山明三の應接室よりも粗雜であるが、現代風で明るみがある。

油繪の額が掛つてゐて、蓄音器も置かれてある。

秀雄は獨りで蓄音器の側に坐つて、陽氣な西洋樂を聽いてゐる。そこへ、くに子が衰弱した樣子をして入つて來る。顏の面に現實離れのした、稍々凄味のある、普通人でないやうな粉色を施してゐる。

くに子　今日はお天氣がいゝのに、何處へもいらつしやらないの？

秀雄　今朝からさう極めてゐるぢやないか。

くに子　でも、一週に一度の休日に家にばかりいらつしつちや、身體のためによくないぢやありませんか。

秀雄　ハヽヽ。今日に限つてそんなことを云つてる。……お前が外出したい氣持になつたのなら、夕方から一しよに散歩に出てもいゝんだがね。

くに子　あたしに遠慮なさらなくつてもいゝのよ。……どうせ、あたしはもう人の中へは出て行けなくなつたんですから。

秀雄　下らないことを氣に病む必要はないぢやないか。新聞に出された譯ぢやないし、一時の戯談としてもう濟んでしまつてゐるぢやないか。

くに子　あなたがそんな空々しいことを仰有つたつて駄目よ。あたしにはちやんと分つてますわ。あたしが自殺なんか出來る人間ぢやないつてことを、あれ以來、あなたは見破つて安心していらつしやるんでせう。

秀雄　そんなことはどうだつていゝぢやないか。自殺の出來る人間がえらいつてことはないんだし。

くに子　あなたの思惑は兎に角、あたし自身、自殺の出來

ない人間だつてことが自分によく分つて、急に世の中が淋しくなりました。

秀雄　馬鹿なことを云つてゐる。自殺の出來ない人間こそ、世の中が面白く暮せるんぢやないか。……あの日のことは、もう忘れておしまひよ。

くに子　忘れようとしても忘れられるものですか。あたし、身體がよくなればなるほど、あの時のことがハッキリ思出されますわ。お父さんも治助もあなたも、おちかさんでさへ、みんな蔑視んだ目であたしを見てゐましたわね。

秀雄　蔑視んだのぢやない、心配して見てゐたのだよ。

くに子　本當は、あの時あたしはあのまゝで死んでた方がよかつたの。

秀雄　ぢや、以前のお前はあの時死んだことにして、新しいくに子が生れ出たことにしたらいゝぢやないか。

くに子　新しいくに子？　こんな頭の中に塵屑の詰つてる様な氣持をしてゐて、新しいくに子も何もあつたものですか。

（蓄音器はまだ響いてゐる。）

（そこへ、下女が名刺を持つて入つて來る。秀雄、その名刺を見て眉を顰める。）

秀雄　兎に角此處へ通してくれ。

（下女、出て行く。）

くに子　どなたが訪ねてゐらつしたの？

秀雄　あんまり會ひたくもない人間なんだが、斷る譯にも行くまい。お前はあちらへ行つてゐたらいゝだらう。

くに子　あたしが會つちやいけないの？（言葉を尖らせて）それ御覽なさい。あなただつて、あたしをお客様の前へ出すことをいやがるやうになつたぢやありませんか。あたしを劣等な人間扱ひして。

秀雄　（不快を忍んで）ぢや、此處にゐてもいゝよ、……染井久三が來たんだよ。あいつ何の用事があるのか。

くに子　（不快らしく）久三さんが？　何しに來たんでせう。

（そこへ、久三が入つて來る。服裝は序幕と同じなのだが、顏面に現實離れのした、普通の人間でないらしい印象を與へるやうな粉色を施してゐる。）

久三　今日はよく御在宅でしたね。（と、秀雄に挨拶してから、微笑を浮べてくに子の方を見上げて）くに子さんは身體がスッカリよくなつたの？　二三日前に、往來で治助さんに會つて、藥違ひの話を聞いて大笑ひをしたんですよ。

くに子　（不機嫌らしく）あなたはあたしを揶揄ひにいらつしやつたの？

久三　飛んでもないことだ。大笑ひしたことがくに子さん

のお氣に障るのかね。僕の獨り心中のしそこなひも大笑ひなんだから、お互ひさまです。

秀雄　（ます〳〵不機嫌らしく）君は滅多に僕の家に來たことのない人だが、今日は何か用事があるんですか。

久三　特別に用事がある譯ぢやありませんがね。一應くに子さんにお詫びをして置かうと思つて。……あんな藥をうつかり置忘れたゝめに、飛んだ御迷惑を掛けて濟みませんでしたね。

くに子　治助が餘計なお喋舌をするからいけない。自分の同胞のことを面白づくで人に話すなんてひどい奴ね。……（昂奮して）頑固なお父さんでさへ、あれから神經を病んで、一刻も早く家を變りたいと云つてるんぢやありませんか。兄は兩親を嫌つて外へ出てゐるし、治助はおちかさんに誘惑されて兩親の勸める緣談を嫌つてゐるし、あたしの實家は早晩破滅するでせうよ。

久三　なに、彌生町のあの家屋は破滅してもしなくつても、大山家は大丈夫だ。第一資產があるんだからな。

くに子　僅かな資產なぞ、手賴りになるものですか。

久三　ところが、僕は今、その僅かな金のためにも、百圓足らずの金のために苦勞してるんです。……僕はね。自殺をしそこねてから、生れ變つた人になつて、世間に對して威張つてゐたつもりだが、やつぱり駄目だつた。空威張をしたつて、Aといふ人間は何時までもAといふ人間で、AがBに變ることはないのかな。……（醉漢のクダ見たいに）いや、しかし、僕はあの時、藥の間違ひで、生命が助かつたと思つたのは間違ひで、本當は死んで、異つた世界に入つてるんぢやないかと、時々思はれることもあるんだ。……僕の飮んだのが眞實の毒藥で、くにさんの飮んだのが、婦人藥だつたのかも知れないて。ハヽヽヽ。

（秀雄は不機嫌だつた顏に笑ひを浮べる。くに子も機嫌を直して淋しく笑ふ。久三、自分が何處に來てゐるのかを見定めるやうに室内を見廻す。）

くに子　さう云へば、久三さんは、今日は人が違つたやうに陽氣になつてゐるのね。お金に不自由してるやうなところはちつとも見えないぢやないの。

久三　さう思はれるだけでも有り難い譯だね。でも、生れ變つたにしても、異つた世界に入つてゐるにしても、僕といふ人間はなさけない譯だ。……あの後は、僕が戶外へ出るたびに、僕のあとに、影が形に添ふ如くに僕にくつついて來る者があるんですよ。危險人物が刑事巡査に尾行されてるやうなものでせうな。

秀雄　（生眞面目に）君が警察の注意人物になつてる譯ぢやないんでせう。

くに子　あたしには分つてるわ。あなたの影も此處へ連れていらつしやるといゝわ。あなたの影には、あたし一度・お目に掛つたことがあるのよ。

秀雄　それは何のことだ。

久三　僕は自分の身を亡ぼさうとしたことはあつても、まだ殺人も強盗もしたことはないのだから、警察に御厄介は掛けないでせう。その點は安心して下さい。

くに子　その影はどこにゐるんでせう。（入口に目を注ぐ）

秀雄　二人で謎見たいなことを云つて。どうしたのだ。（呆れたやうに二人を見詰めて、二人の現實離れのした顔にギクッと胸を響かす）

久三　（くに子を注視して）不思議だ。自分の本當の影を眼前に見てゐるやうだ。（獨言のやうな感慨を洩らす）

くに子　（胸に應へたらしく）そんな目で人の顔を見るもんぢやないわ。（顔を外らしたが、すると、秀雄の注意深い目にぶつつかつたので）あなたもそんな目で人の顔を見るもんぢやないわ。

久三　僕はやはりあの時死んでゐたので、今地獄に住んでゐるのかも知れない。

くに子　（強ひて戲談らしく）地獄に住んでゐる人間に訪問されちやたまらないわね。

（そこへ、下女が入つて來たので、三人の緊張した態度が破れる。）

下女　お客樣のお連れ樣がいらつしやいました。

久三　（夢から醒めたやうに、そして當惑してゐるらしく）僕の云つたのは本當たつたでせう。

くに子　こちらへお通ししてお與れ。

（下女出て行く。）

久三　御迷惑でも爲方がありませんね。

秀雄　さつきから影々と云つてゐたのは、君の妻君のことですか。僕はまだお目に掛つたことはないんだが、君は妻君と此處で落合ふやうに打合せをしてゐたんですね。それなら早くさうと云つて與れゝばよかつたのに。

久三　打合せなんかしてゐた譯ぢやないんですが。

くに子　あたし、此間彌生町で、奥さんの後姿をちよつと覗いて見たつきりで、どんな方だか、よくは知りませんのよ。

久三　僕に取つて、名譽なことぢやない。（獨言のやうに云ふ）

（三人がそれ〴〵の思ひを注いで入口を見てゐるところへ、夏江が前よりももつと見窄らしい服裝をして入つて來る。しかし、來馴れてゐるところへ來たやうに、含羞(はにか)んではゐない。）

くに子　さあ、此方へいらつしやい。

（夏江挨拶する。秀雄は侮蔑を含んだ目を向けて答禮する。）

久三　お前の住みたい家はこんな家なんだらう。……よく見て置くがいゝ、……だけど、お前はおれに喰つゝいてゐようとも、おれの側を離れて行かうとも、こんな當世の文化的な家で、現代的の華やかな生活の出來る見込みはないだらうぜ。

夏江　あなたは人様の前であたしに恥を掻かせようと思つて、こんなところへ連れてゐらつしやつたの？（強い微笑を浮べながら云ふ）

久三　誰れが隨いて來いと云つた？　お前が勝手に隨いて來たのぢやないか。

夏江　嘘を仰有い。……あなたはあたしが隨いてゐなければ、一人歩きは出來ないぢやありませんか。今日此方へ來る途中でも、何度往來で倒れたか知れない。あたしが、抱起して介抱したからこそ、此處まで無事に來られたのぢやありませんか。

久三　お前こそ嘘つ吐きだ。

夏江　あなたは伯父さんのお家で死にそこねた時から、記憶力が惡くなつて、御自分のしたことや言つたことさへ忘れるやうになつたんです。……今日はお前の望み通りに、身内の者に立合つて貰つて、最後の解決をつけてやると仰有つたぢやありませんか。……彌生町から曙町に天神町に、あちらこちらと、あなたのお身内の家へ一軒一軒引張り廻されて、此方のお家であなたの御親類が品切れになるぢやありませんか。

久三　最後の解決とは金のことか、金なら何處へ行つても、おれのために出してくれる所はなさゝうだよ。此處には蓄音器もあるし本箱もあるし、油繪の額もあるし、いづれ、金庫には金が一杯詰つてるのだらうが、それはお前やおれには何の關係もないのだ。諦めるがいゝ。（秀雄やくに子に向つて）この女の身の代金が五百兩になつてるんださうですがね。全體それくらゐの値段がこの女にあるんでせうか。

くに子　久三さんの言葉はまるで無頼漢のやうね。自分のことでなくつても、あたし聞きづらくつてならない。何だか怖いやうだから、もう歸つて下さい。

久三　あなたの怖がるのは、僕よりも、僕の連れのこの女のことなんでせう。でも、怖がるには及びませんよ。こんなに見えても、この女はあなたに敵意を有つてはゐやしませんよ。

秀雄　用事がなければ、今日はこれで歸つて下さい。

久三　何處へ行つても歡迎されない僕だ。叩きだされないさきに歸りますがね。僕は強請に來たのぢやありません

よ。……本當は僕に影の如く隨き纏つてゐるこの女から奇麗に離れようとしてまご〳〵してゐるんですよ。自分の家にゐる間は、二人がてんでに勝手な獨言を云ひ合つて、お互ひに相手がゐなかつたらと思つてゐるくせに、僕が他所へ出ると、此奴は屹度あとから隨いて來るんだから不思議だ。そして、さつき云つたやうに、僕が往來で轉んだの辷つたのと、僕の歩き振りにまで餘計なおせつかいを云ひ出すのだから不思議だ。……どうも最後の解決が金錢だけで盡きさうぢやありませんよ。

夏江　盡くか盡かぬか、當然あなたの出すべきお金を出してから仰有るといゝ。人のことよりも、あなたこそ影のやうな人だわ。あたしはこの通り丈夫な身體をして、ちやんと生きてゐるぢやありませんか。

くに子　煩いね。……影でも形でもあたしたちの構つたことぢやないから、早く歸つて下さい。……あたし、この人の置いて行つたあの藥を飲んだのかと思ふと、今でも胸が苦しくつてならないんです。この人、あたしに飲ませるつもりでわざと置いて行つたのかも知れなかつた。そして、あたしがどうなつたかと、今日二人で樣子を見に來たのかも知れないんだわ。（身ぶるひする。そして、秀雄に向つて）あなた、この人たちを歸して下さい。怖くつて、あたしの頭が變になりさうだから。

秀雄　早く出て行つて下さい。

（彼れは座を立つて、久三に手を掛ける。）

夏江　あなた、また彌生町のお家のやうに追出されるの？（久三を勵ますやうに云つて）あなたはあつちでもこつちでも追出されて、しまひには、地球の外へでも追出されなければ收まりがつかない人なのね。……意氣地がないつたらありやしない。

久三　此處もおれの家ぢやないから爲方がないさ。

（久三は座を立ちかけたが、その際、冷笑憎惡を含んだ顏付をする。秀雄はふとその現實離れのした相手の顏に恐れを感じたらしく、我知らず久三の側を離れて、逃げるやうに奧へ入る。くに子も同じやうな態度で隨いて行く。）

久三　どうしたのだ？　可笑な人だ。追出さうとした人の方が逃げて行つたぢやないか。

夏江　あなたが彌生町の伯父さんの顏を見て死にたくなつたやうに、あの人たちはあなたを恐れたのよ。（ふと、惡辣な目を光らせて）さあ、この隙間に金庫のお金をさらつていらつしやい。（權威をもつて命令するやうに云ふ）

久三　金庫なんか何處にも見えないぢやないか。

夏江　あなたは目まで役に立たなくなつたの？　金庫はそこにあるぢやないの？

（一方を指差すと、久三は小さな皮文庫を見て、そちらへ寄つて行く。）

夏江　それを持つて、早く庭から逃げていらつしやい。

久三　おれはまだ泥棒をしたことはないよ。……お前はおれに泥棒までさせなければ承知が出來ないんだな。……地球の外へ追出される人間だと、お前に云はれたおれだ。泥棒を遠慮するには及ぶまい。

（そこに、くに子があたりを憚りながら顔を出して。）

くに子　久三さん、これを貸して上げますから、おとなしく歸つて下さいね。（情味をもつて云ふ）

（同時に紙包を拋出して引込む。）

久三　金か。

（紙包の方へ寄つて覗込む。夏江も不思議さうに覗込む。）

久三　おれは泥棒の代りに乞食にされたのか。……お前が欲しいのなら、それを持つて歸れ。

夏江　（喜んで）持つて行つてもよくつて？……あなたも早くお歸んなさい。途中で轉ばないやうに。

（彼女はスッと出て行く。久三はさつき開けかけた皮文庫をソッと開けて、中を覗いて合點の行かない顔付をして、それを閉ぢる。）

（くに子入つて來る。）

くに子　あなたはなぜお歸りにならないの？

久三　僕も物欲しさうな目をして、あつちこつちの身內を訪ねて行くものだから、乞食か強請のやうに思はれて……僕も落ぶれたものだね。（くに子の顔を見上げて）だけど、あなたゞつて隨分憔悴したやうだな。治助さんは何でもないやうに云つて笑つてゐたつけが、毒がまだ拔け切らないんぢやないか知ら。不斷のくに子さんとは思はれないほどに窶れてゐる。……大山家の一族のうちでは、類のないほど美しかつたくに子さんとは思はれないが、僕の目がどうかなつたのかな。

くに子　あたしのことよりも、あなたこそ、何といふみじめな顔していらつしやるの？　秀雄は、人間離れのしたあなたの顔を薄氣味惡く思つてるのよ。

久三　男の僕は鏡を見ないから、自分の顔がよく分らないのだけれど、女のあなたに自分の顔が分らないのは變たね。僕の連れの女も顔が荒んで來たのだけれど、あなたのやうぢやない。

くに子　あたし、そんなに窶れてゐるんですかねえ。あの方よりも見つともなく窶れてゐるんでせうか。（しみじみと云つて）秀雄はあたしの心を引立てようと思つて、あの後は每日あたしに口當りのいゝことを云つて與れるのですけれど、あたしもう駄目になつてゐるのね。あの

後一週間ばかりの間に、あたし十年も歳を取つたやうな氣持がしますのよ。……あたしがどうなつても、秀雄はちやんと候補者があるんだから、結句幸ひだと思つてるらしんです。

久三　それは秀雄さんは仕合せだ。僕には、あの女が行つちまつても、僕の道連れになる候補者は一人もないんだ。そして、あの女は、僕の體力でも過去の記憶でも、みんな奪つてしまつたのだから、新たに外の女に捧げる力は、僕には何も殘つてゐないんだよ。

くに子　ぢや、あの方をまだ思つていらつしやるのね。

久三　あの女には未練は殘つてやしないつもりだが、僕のいやな記憶のありつたけを持つて外の男に行かれるのは、僕のやうな男でも不愉快に思はれるね。

くに子　あたしだつて、自分の身はどうなつてもいゝとしても、秀雄の思つてる女とが一しよになつて、あたしを嗤ひ話の種にすることが、いま／＼しくつてならないの。

（二人は釘付けになつたやうに、相對して坐つて、相手の顔を見詰めながら、取りすまして話をしてゐる。）

久三　くにさんと差向ひで話をするのは、何年振りだらうな。

くに子　さうね。……でも、そんなことはどちらでもいゝぢやありませんか。

久三　成程、それはどちらでもいゝ譯だ。僕は昔から、誰れにも歡迎されない男だつたのだから。他人に、思出の夢を描かせる力もありやしない。……それで、今くにさんが僕に話しかけてたことは何だつたかな。……あゝ、さうか。（取りすました調子にかへつて）秀雄さんは品行方正だと聞いてゐたが、あなたの外にも、愛してゐる女があるんですか。

くに子　どうもさうらしいの。こなひだまであたしの家へよく出入りしてゐた若い女もあつたのよ。その現代的な女も少し怪しいんだけれど、それよりも、あたしの知らない女で、誰れか譯のある女が、外にありさうに思はれるの。

久三　それはあなたの邪推ぢやあるまいか。僕の女なぞは、外に手頼りになる男は、はしくれもありやしないのに、さもありさうなことを云つてるんだよ。

くに子　あなたの奥さんはさうかも知れないけれど、あたしの家の秀雄は、それとは違ふわよ。

久三　そりや、秀雄さんは御立派だからね。（皮肉らしく素直に云つて）それで、秀雄さんの女といふのは、何處の何方（どなた）だね。あなたが自分だけでそんな夢見たいなことを云つてヤキモキしてゐるんぢやないとすると。

くに子　秀雄のところへ、その女の手紙がいくつも來てゐ

るらしいの。そこの皮文庫を開けて見て御覽なさい。あなたはさつき覗いて見てゐたぢやないの？
久三　僕の女は、あれを金庫だと云つてゐたつけが、ぢや、秀雄さんの祕密の手紙があの中にしまつてあるのか。……ラブレターなんて、僕はかつて見たことがないが、後學のために、一つ讀ませて貰はうか。
くに子　御覽なさいな。その手紙を見たあとで、あなたにお頼みしたいことがあるのよ。
久三　何を？
くに子　その女の居所を突留めて貰ひたいんです。
久三　乞食同様の僕だ。暇にまかせて搜しますよ。
（彼れは座を立つて、皮文庫を開けて、中の手紙をいくつか取出して、どれが所謂ラブレーターであるかと云つた態度で選り分ける。そして、そのうちの一つを取上げる。）
久三　どうもこれらしいな……讀んでもいゝんだな。（と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら）なる程、女の文章だ。
くに子　（不思議さうに）女の文章ですつて？　かまはないから、あたしに聞えるやうに讀上げて御覽なさい。
（くに子、手紙の方を覗くと、さつきからそつと顔を出してゐた秀雄が足早に出て來る。）

秀雄　何を馬鹿な眞似をするんだ。それはおちかさんの寄越した見舞の手紙ぢやないか。（久三に向つて）君は早くお歸んなさい。奥さんが門の外で、さつきから君を呼んでゐますよ。
久三　さうですか。あいつ、まだそこらをウロ〳〵してゐるのか。
（久三、詰らなさゝうに出て行く。秀雄笑ふ。くに子も、今まで壓へてゐた笑ひを洩らす。）
くに子　あんな人だちに恐れて逃出すなんて、あなたも意氣地がないのね。あたし揶揄つて見たのよ。反古籠同様な皮文庫を、金庫とか祕密の手紙入れとか思つて、頻りに目をつけるんだから、滑稽でならないわ。
秀雄　あの人は貧乏ばかりしてゐても、不斷物を考へてるやうな男だから、突き詰めて氣でも狂つたのかと思つてゐたら、何のこつた。元來が骨までも愚鈍な人間だつたのだね。（笑ふ）
くに子　はじめからそのつもりで、もつと揶揄つてゐればよかつたのに、あんな人だちの云ふことを生眞面に聞いて、いゝ加減、頭を痛めたことぢやない。（笑ふ）
秀雄　でも、お前あの人に金をやつたのぢやないか。
くに子　五圓のお札をたつた一枚。……あの人たちはあの紙幣を百圓札とでも思つてゐたんでせう。（笑つたが、ふ

と氣になつたやうに）でも、あの人、あたしの顏を侮辱したやうな口を利いてゐたけれど、あたし、そんなに見つともなく窶れてゐるんでせうか。

秀雄　そんなことはないよ。もう四五日も休養してゐたら元のやうになるんだから、安心しておいでよ。

くに子　さうか知ら。

（そこへ、治助が案內も乞はず、帽子を被つたまゝ、突如として入つて來る。）

秀雄　君はそこで染井に會つたらう。

治助　染井？　久三さんにか。いや會はなかつた。どうしたのだ？

秀雄　今まで此處にゐて、今家を出たばかりなんだが。

治助　あの人が君の家なんかへ遊びに來るのは變だね。（それには興味を感じないらしく輕く云つて、それからくに子に向つて）それよりも、今夜姉さんに、彌生町へ來て貰へまいか。……お父さんが、われ／＼四人の兄弟を集めて、遺言見たいなことを云ひたがつてゐるんだよ。

くに子　遺言？　お父さんはそんなに病氣がいけないの？

治助　なに、遺言の必要があるほど惡かあないんだがね。われ／＼兄弟が親の言ふことを聞かなかつたり、いろいろ親困らせをしたりするものだから、親爺も失望してゐるんだらう。

くに子　だつて、あたしは親困らせなんかしないわ。結婚だつて親の命令に逆らはなかつたのぢやないか。

治助　ぢや、遺產は姉さんに全部やると遺言するか知れないよ。

くに子　まさか。

治助　ところで、兄貴なんかとも相談してゐるんだが、親爺が若し財產配けの話でもしだしたら、みんなが口を揃へて、財產なんか入りませんと返答したいんだよ。衆議一決してゐるんだから、姉さんもさう云つてお吳れよ。

くに子　（不思議さうに）なぜそんな詰らない相談をしたの？

治助　親爺が舊弊な頭でわれ／＼を見くびつてゐるから、皆んなでさう云つて思ひ知らせるのだ。……第一、姉さんは金なんか入らないだらうし。

くに子　あたしだつて、使ひ切れないほどのお金を持つてやしないよ。……それよりも、お前は、結婚でも何でも、自分の事は自分の勝手にしていゝだらうけれど、あたしのことを、面白づくで久三さんなんかに言觸らしちや困るよ。あたしが馬鹿にされるやうで……。

秀雄　そんなことはまあ、どうでもいゝぢやないか。そして、彌生町へはお前も今夜出掛けることにしたらいゝだらう。

くに子　彌生町の應接室のことを思ふと、あたしゾッとするわ。當分あしこへは行きたかありませんよ。
秀雄　だつて、お父さんの遺言を聞きに行かない譯には行くまい。
くに子　あたし、まだ家の外へ一歩も出る氣にはなれないの。
治助　ぢや、姉さんはまだ身體が囘復しないから來られないと云つて置かうか。
くに子　何とでもいゝやうに云つといておくれな。
治助　それで、用事は相濟みだ。今日は急ぐから、これで失敬しよう。
（治助は突立つたまゝそんなことを云つて、秀雄に會釋して出て行く。）
秀雄　あの男も不斷とは違つて、いやにそわ〳〵してゐる。今日は來る奴がみんな變だよ。……おれも何だか頭が疲れて來たから、氣晴らしに、そこらを散歩して來ようか。いゝだらう。（くに子の同意を乞ふやうに云ふ）
くに子　あたし、今日は一人でゐるのが、何だか淋しくなつた。
秀雄　ぢやお前も一しよに散歩するさ。
（彼れがさう云ひ棄てゝ奧へ入つて行くと、くに子も後から入つて行く。）

（間もなく、久三が庭の裏手から入つて來て、疲れた態度で、部屋の上り口に腰を掛ける。「誰れもゐないのか」と、獨言を洩らす。そしてふと、蓄音器に目を留めて、上へ上つて蓄音器をかける。偶然選んだのは悲調を含んだ音樂であつた。それに耳を傾けながら、彼れはその前に寢そべる。）
（と、そこへ、くに子が顏を出す。）
くに子　（吃驚して）あなたはまだお歸りにならなかつたの？　いつの間に何處から此處へいらしつたの？……そこにゐるのは、眞實の久三さんなのか知ら。（夢に魘されてゐるやうに云ふ）
久三　僕も、自分で本當の久三のやうに思はれないのだよ。本當の久三はやはり、あの時に死んだのだね。さつき秀雄さんの話だと、僕の連れの女が、僕を門の外で待つてるといふことだから、そのつもりで出て見ると、何處にもゐないんだ。それで、家のまはりをウロ〳〵捜してゐるうちに、またこの部屋へ入り込んだ譯なんだが……。
くに子　早く歸つて下さい。
久三　（泰然として）さういふくにさんも、本當のくにさんかい。あの時、彌生町の家で二人は同んなじ藥を分け合つて飲んだのだ。昔の久三とくに子の拔け殼が此處にゐるんだね。拔け殼同士が並んで昔の夢を見てるんだよ。

くに子　あたし、あのお藥はあなたのために飮んだのぢやないわ。

久三　僕だつて、あの藥をくにさんのために飮んだのぢやなかつた。……でも、自然にそんなことになつたのだよ。この蓄音器は、二人の夢を弔ふのに相應しい音樂だ。

（くに子は骸骨が倒れるやうに、久三の側に倒れて、非現實な顏を竝べる。）

（蓄音器は鳴りつゞける。）

――幕――

梅雨の頃（一幕）

山間の小都會のほとり。梅雨の頃。

疊は敷いてあるが、周圍を堅く遮つてゐるやうにつくられてゐる部屋。一方の窓は小さくて、ガラス戸で閉ぢられてゐる。入口も西洋風の扉で仕切られてゐる。

日本机の前ではA（四十前後の五分刈頭の男）が、胡坐を掻いて、机を食卓として飲み且つ食つてゐる。

部屋の様子は蕪雜だが、電燈は煌々と耀いてゐる。

A　（コップを持つたまゝ耳を傾けて獨白）梟が鳴いてるな。今夜は雨がひどかつたせゐだか、馬鹿に靜かだ。……あいつ、もう歸つて來さうなものだが。……（氣遣はしげな風）なに、おれの心臟の鼓動は酒のせゐだ。凶事の知らせぢやない。

（そこへソッとB（二十五六の銀杏返しに結つた、肥つた醜い、稍々低能らしい女）が入つて來る。）

A　（手を震はせて）吃驚するぢやないか。足音もさせないで戻つて來て、……途中は怖かあなかつたか。

（B、濡れた羽織を脫いで、机の側へベッタリ坐る。）

B　怖かないわ。あなたがいつもわたしの側に隨いてゐると云つてゐたから。

A　さうか。……おれの身體は此處にぢつとしてゐようとも、何處へ行つてゐようとも、おれの魂はお前の側にくつ隨いてゐるんだから、氣を落さないやうにしろ。氣を落して物を怖がつたりすると、鬼が來てお前の頭から嚙付くぜ。いゝか。それにおれの云ふことに一度でも背くと、その時にお前の生命は無くなるのだぜ。よく覺えてゐろ。

B　よく覺えてゐるわよ。あなたは同じことばかり云ふ。（笑つて）今夜は、わたし、あなたによく聞きたいことがあるの。

A　何だい。聞いてやらう。（コップをBの手へ押付けて）一杯飲んで見ろ。一杯飲めなきや半分でもいゝ。腹が減つてれば何でも食べなさい。……さつき雨がひどかつたから弱つたらうな。

B　（Aが注いでくれるビールを少し飲んで）あなた四五日うちにこの土地を出て、もつと大きな町へ行くと云つてゐるけれど、もつとこの土地に落着いてろ方がよかないでせうか。わたしも懇意な人が二人も三人も出來たのだから、成るべくならこの土地にゐたいと思つてるの。

A　（苦笑して）今夜大川に會つたのでそんな氣になつた

のか。……お前がさういふ氣になりかけたので、なほ更早くこの土地を立たうと思つてるのだ。

B　わたしがこの土地にゐたいと思つちやいけないの？（邪氣なく云ふ）

A　（きつい顔して）　お前はおれのゐる所を、何處でも極樂のやうに思つてゐなきやいけないよ。それで、人に云つちやならんとおれが不斷敎へてることを、一言でも口から出しちやならないんだ。……いつも云つてる通り、おれは當りまへの人間ぢやないんだぜ。おれと一しよにゐるお前もあたりまへの人間ぢやないんだぜ。お前はおれの側にゐるおかげで、大分魔法を覺えたのだから、あたり前の人間でなくなりかけてるんだ。……今夜はお前があたりまへの人間でないことを、得心の行くやうに見せてやらう。

B　わたし、そんなことを見たいとは思はないけれど、あなたの言葉に背く譯には行かないわね。

A　いくら云つて聞かせても、今に背きさうな氣ぶりが見えるから心配なんだよ。お前がおれに背いて破滅すりやおれの身も破滅なんだからね。おれはこんなことをやつてゐても、仲間と云ふものがない。お前一人がおれの魔術の助手で、おれの話相手で、お前一人がおれの浮世の道伴なんだから心細いさ。（Bには構はないで獨白の如く）昔の魔法使ひには、仲間があつた。猿とか蟇蛙とか、いろんな動物をも飼つて使つてゐたやうだが、おれは猫の子一匹手馴付けることも出來ない。自分で洞穴の中なんかに住んでゐられないし、蛇や蜥蜴のやうな異樣な物を鍋で煮て、グラ〳〵煮えたくさい汁を抄つて飲んで、舌鼓を打つことも出來ないのだ。……だけど、見ろ。このビールの泡へおれの息がかゝると、泡の色までもちがつて來る。

B　（ビールの泡を見て感心する）　三年前に、あの恐ろしい家からわたしを救出して下すつたことを考へると、あなたの魔法のえらいことはわたしにも分つてるのよ。……それで、今夜あなたによく聞きたいと思つてることは、あなたはなぜ、わたしをお母さんに會はせて吳れないでせう？　あなたの魔法を使つたなら、お母さんの居所を捜出して、そこへわたしを連れて行つて吳れることも出來るだらうし、お母さんを此處へ連れて來ることも出來るだらうのに、なぜさうして吳れないんです？　わたし此間からお母さんに會ひたくつてならないの。

A　お前も里心がついたのだな。此間からさうらしいと氣がついてゐたのだよ。……それは時が來たらお母にも會はせてやらうが、今ぢや駄目だ。第一お前が今お母に會つたらお母は吃驚して目を廻すかも知れないよ。お前は

元のお前ぢやないからなあ。

B　そんなにわたしは人間が變つたのか知ら。（自分の身體を見廻す）

A　變つてるとも。

（窓近く梟の聲がする。煌々としてゐた電燈も次第に暗くなる。ある男、扉を少し開けて顔を出す。）

A　誰れだ、お前は。（敵に對するやうな身構へをして咎める）

（ある男、遠慮なく室内へ入つて來る。脚絆を穿き雨合羽を着た昔の旅人姿をした四十がらみの男である。合羽を脱いで、からげてゐた裾をおろしながら、目をBから離さないで。）

ある男　この人に違ひない、さつきわしと道連れになつたのは。……暗がりで顔はよく分らなかつたが、たしかにこの女だ。親類に急病人があつて見舞に行つた歸りだと心細さうなことを云つてわしを道連にして、わしをよくもひどい目に會はせたな。雨がひどくなつたので、空家の軒下で雨宿りをしてる間に、わしはどうにも我慢がならないやうに睡くなつたが、醒めてから氣がつくと、それはお前の所爲だつたのだ。わしが眠つてる間にお前の姿は見えなくなつてゐた。それだけならいゝが、わしの路用の金子の入つてる胴卷が無くなつてゐるし、わしの寶の觀音樣のお姿までも見えなくなつてゐた。（力のない聲で云ふ）わしはやう〳〵此處を搜して來たのだから、おとなしく返して貰ひませう。わしは怒りもしない。手向ひもしない。返して貰へさへすれば、手を突いて頭を疊へすりつけて、お前さんたちにお慈悲を願つてもいいのだ。お前さん達の在所を世間へ知らせもしない。……だから、どうかわしの大切な物をわしの手へ返して下さい。

（Bはある男の顔をじろ〳〵見てゐたが、腹立たしい表情をして。）

B　お前さんこそひどい人だよ、わたしに言掛りをつけて。

ある男　あ、その聲だ。闇の夜で顔はハッキリ分らなかつたが、聲はその聲だつた。いよ〳〵お前に違ひないことが分つた。（少し元氣がつく）

B　それはね。途中でお前さんに會つて、お互に淋しいからいゝ道連れだと、お前さんの方から言出して、一しよに歩いたにはちがひないけれど、わたしお前さんの物は鼻紙一枚取りやしないよ。いゝ加減なことをお云ひでないよ。雨がひどくなつたから、雨宿りをすると云つて、わたしを空家の軒下へ連れ込んだ時に、お前さんの方でいやなことを云つたぢやないか。……何とか言掛りをつけてわたしをどうかしようと企んで、後を追駆けて來た

のだらう。……お前さんにも人並に目が二つついてるんだから、よく物を見るとい丶。わたしはヤクザの女に見えるか知れないけど、此處の家の人はお前さんなんぞに脅かされたり騙されたりする人ぢやないよ。よく目を開けて見て、足許の明るいうちにサッサと歸つておしまひよ。

ある男　何を云やあがる？　この賣女め。かうなりやわしも腕づくだ。

（ある男はわれ知らず興奮して、Bを目がけて、飛びかからうとする。Aはさつきから相關せざるやうに冷然としてゐる。）

B　あなた、默つてばかり見てゐないで、早くこの人をどうかして下さいよ。こんなづう／＼しい奴つたらあるもんぢやない。

A　お前はその觀音樣を奪つたのぢやあるまいな。

B　あなたはあんな奴の云ふことを信じてゐるの？

A　（ある男へ向つて）　懐へ收つてる物をやす／＼人に奪られるやうぢや、守本尊の御威光もない譯だな。全體、面相もよく分らないやうな女を道連れにしていゝ氣になつてるから、大切な物が紛失したりするのだ。何處か途中へ落したのだらう。こゝで愚圖々々云つてる間に早く行つて捜しちやどうだ。提灯くらゐ貸してやらう。

（ある男は懐を捜したりして腑に落ちない顔をする。）

ある男　わしはあの時軒下にしやがむと、急に眠くなつてたまらなくなつたのが、どうも不思議だ。麻醉劑を嗅がされたやうにも思はれないが、……何にしても、胴巻にしつかりしばりつけてゐたものを奪られて氣がつかなかつたのはたゞ事ぢやない。

A　狐にでも抓まれてたんぢやないか。さう云へばお前の顔付も身裝もよつぽど妙ちきりんだぜ。彌次郎兵衛が戸まどひして來たやうだ。今の時世にそんな風をしてこの邊を通つてゐる奴はありやしないよ。

ある男　さう云へば、この部屋は陰氣くさい妙な部屋だが、お前たちはまさか狐か狸が化けてるんぢやあるまいな。

（恐怖に襲はれてしをれる）

B　（笑つて）　何をトボけたことを云ふんだよ。お前さんはお金を一錢も持つてゐないだらう。それで路用に困つてわたし達に言掛りをつけて、いくらかにしようと云ふんだらう。物貰ひなら物貰ひらしくしたらいゝぢやないか。

ある男　（獨白の如く）　わしは今夜こそえらい目に會つたぞ。主人から依託された大金を無くしちや、わしの力で辨償する方法はないのだから、腹でも切つて申譯をせにやなるまい。

B　（やゝ同情したやうに）お前さんの云ふことは本當なのかい。ぢや、も一度よく途中を捜しておいでよ。若しか何處かへ置忘れたのぢやないの。

ある男　（考へて）前の宿の饂飩屋で晩餐を食べた時に、胴卷を出してソッと中を改めたのだが、あんな所へ置忘れる譯はないんだ。……こりやどうしても軒下で眠つてた時に奪られたのに違ひない。（ふとまたいきなり立つて）オイ、お前が饂飩屋でわしの胴卷に目をつけて後を隨いて來たのだな。柔しさうなことを云つてわしを誑かしやがつたのだな。

（ある男自棄になつて、Bに飛掛つて胸倉を摑まへる。Bは藻搔きがなら。）

B　あなた、早くどうかして下さいよ。わたし殺されさうぢやないの。

A　なあに大丈夫た。その男にはお前を殺す力なんかありやしないよ。おれ達はそんな男に殺されるやうな人間とは人間が違ふんだ。

ある男　こん畜生、わしの胴卷を早く此處へ出さないか。（兩腕に力を締めてBの喉を締める）これでも苦しくないか。こりや不思議た。四斗俵を片手で差上げるわしの腕で、こんな女の子の息を止めるのに、手間暇のかゝらう筈はないんだが。……これでもか〳〵。

（ある男は渾身の力を盡して汗みどろになつてBの喉を締めてゐるうちに、へと〳〵になつて卒倒する。Bは生返つたやうに太息を吐いて、襟を搔合せながら。）

B　わたし殺されるかと思つた。この人狂人か知ら。

A　お前があたりまへの人間でないことがこれで分つたらう。（食卓の下から胴卷と金色をした小さな佛像を出す）これはお前がこの男から波つて來たのだ。よく見るがいい。

B　（吃驚して、側へ寄つて見て）わたし今はじめて見るのよ。わたしそんな物を取つて來た覺えないわ。その人がさつき騷いでゐるうちに此處へ落したんぢやないの。

A　馬鹿を云へ。お前は自分でやつたことが自分で分らないのか。軒下で雨宿りしてる時にこの男がお前の手を握つたらう。お前の手に觸ると、この男は身體が痺れて睡くなつたのだ。眠つてる間に、お前は胴卷を索つて奪つて來たのだ。

B　でも、わたしそんな覺えはないの。

A　ぢや、お前はおれを信じないんだね。おれの云ふことを疑ふんだね。

（Aが嚴い目を向けると、Bは恐れて。）

B　疑やしないわ。……わたし奪つて來なければそんな物が此處にある譯はないのね。（卓上へ目を注いで）胴卷

にはお金がどのくらゐあるんでせう。出して見ちやいけない？

A　いゝとも。出して御覧。

（Bは胴巻の結び目を解いて、中の物を卓上へ振落す。紙幣や小判がバラ〳〵と落ちる。）

B　大變なお金だわ。（手に取つて數へながら、悦しさに堪へないやうな表情をして）これだけあつたら欲しいものが何でも買へるわね。

A　お前が夢にまで見てゐた東京の三越へ行つて、衣服でも帶でも指環でも日傘でも、當世流行の者をみんな揃へることが出來るね。さうしたら悦しいだらう。

B　あなたに叱られても、悦しくないとは云へないわ。この佛様だつて賣つたら大變なお金になるんでせう。

A　なに、これは金紙を貼つた誤魔化し物だ。泥細工の贋佛だ。こんなものを守本尊にしてゐるから災難に會ふんだよ。

（Aは佛像を取つて柱へぶつつける。佛様は粉碎する。その音によつてある男は目を醒ましたが、二人の顔を見ると恐怖を感じたやうに、アタフタと扉を開けて逃げる。）

B　あの人可哀さうぢやないの。お金が無くなつて。

A　早く窓を開けて見ろ。あの男が何處へ行くか。（あわただしく云ふ）

（B急いで窓を開ける。それと同時に舞臺暗黒となる。）

再び薄明るくなると、平坦な田圃道から小高い土手道が續く。遙か向うに小都會の燈火がちらつく。

ある男、トボ〳〵と田圃道を歩いて土手へ來ると、力の盡きたやうに草の上にへたばる。

田圃道の一端に、雨傘を提げた足駄穿きの男（甲）と、粗末な洋裝の男（乙）とが現はれる。

乙はをり〳〵懐中電燈で道を照らす。

乙　今の時世にそんな馬鹿げたことがあるもんぢやない。誰れか一人神經病患者が云つたことを眞に向けて噂が擴がつたんだよ。

甲　あるひはさうかも知れないが、おれの知つてる家の息子は、その女の手で觸られてから家へ歸ると、大熱を出して死にかけたのだ。その息子は身持が惡くつていろんな女に引掛つちや親爺を困らせてゐたんだが、今度變な熱病にかゝつてからは女に懲りたと云つてた。……その女の奴、足が恐ろしく早くつて、捕まへようとすると、もう遠方へスーッと逃げてるんださうだ。

乙 おれは一度會つて見たいよ。震ひつくほど奇麗な女だといふものもあるし、二た目と見られないやうな汚い女だといふものもあるし、若い女だとか婆あだとか、みんながいろんなことを云ふから可笑しい。…… そんな魔性の女にこの土地が詛はれてゐなくつても、かう雨が毎日續いて、ジメ／＼してゐちや、病氣になつたりする者が多い譯だ。

甲 病氣だけぢやない。そいつに目をつけられると、何時の間にか大切な物をかつぱらはれるんだとさ。それが金錢ばかりぢやなくて、金にやならない先祖の寶だとか、お祖師様の繪像だとか 佛壇の佛様だとかで、何時の間にか持つて行かれたり、そこらに引裂かれたり叩壞されたりすることもあるんださうだ。おれの隣りの御信心の深い御隱居は、この世は闇になつて、明日の日からお天道様が空へ出て來ないと云つて歎いてゐた。

乙 さうでなくつてさへ毎日鬱陶しいところへ、太陽が明日から出ないとなつちやたまらないな。お互に人間が腐つてしまふだらう。

甲 （空を仰いで） でも、今夜は珍らしくお星様が光つてらあ。案じたものでもないかな。明日は珍らしく日の目が見えるかも知れないね。

乙 （懷中電燈を向けて、その明りのなかにある男を見つけると、吃驚した顏して、甲に向つて小聲で） オイそこに妙な男がゐるぜ。

甲 （そつとのぞいて見て驚く） 變な男だな。この邊が物騷だと云つてたものがあつたからなあ。女一人の仕事ぢやない、仲間もゐるらしいといふ噂も聞いたよ。……オイ、此方を振向いて見てるぜ。

（二人は足を留める。ある男は二人の方を振向いて驚く。そして逃出さうとしたが、足に力がなくなつて再び地上へへたばる。）

乙 （小聲で） 見込まれたとすりや後戻りしたつて駄目だ。どんな奴だか、おれが行つて取つかまへてやらう。

（乙は一人ある男の方へ近づく。ある男オド／＼して憐れみを乞ふやうな態度をする。）

乙 （虚勢を張つて） お前は誰れだ。こんな所で何をしてゐる？

ある男 わたくしはかうしてゐるのが恐ろしい夢のやうで御座います。夢のうちに大金を取られるし、大切な守本尊は粉な微塵に壞されるし、いつそこの川へ身を投げようかと、さつきから考へてゐたので御座いますが、わたくしは川へ飛込む元氣さへなくなつて居ります。

乙 そんな事を云つておれ達に油斷をさせようとするんだらう。

ある男　あなた様はどういふお方で御座います？　あの恐ろしい奴の仲間ぢや御座いますまいな。

乙　おれ達は用事があつて此處を通りかゝつたのだが、恐ろしい奴つて誰れのことだ？　噂に聞いた變な女とかに、お前は此處で出會つたのか。

ある男　（ふと闇を透して向うを見て身震ひしながら指差して）あゝ、あすこから二人が此方を見てる。あの燈火の差したところを御覽なさいまし。……あの二人に見られてゐるから、わたくしは足が動かないのです。身動きが出來ないのです。

乙　（指差す方を振向いて）何も見えはしないぢやないか。いゝ加減なことを云ふな。

（次第に此方へ近づいて來た甲も、ある男の指差した方を見て。）

甲　何も見えないぢやないか。こいつこそ變な奴だよ。こんな丈夫さうな身體をして歩けないつてことがあるものか。貴様はおれ達を騙さうとするんだな。

ある男　（憐れを乞ふやうな手つきして）どういたしまして。……お慈悲で御座いますから、お二人のお力でわたくしを町の方へ連れて行つて下さいまし。

甲　ぢや、おれが貴様の身體に力をつけてやるから、自分で歩いて行け。

（甲はふと、手に提げてゐた雨傘を以つてある男の背を打つ。ある男、悲鳴を揚げる。乙は甲の暴行を止めようとして爭ふ。）

甲　此奴だよ〱。この町に災難を起したのは、此奴がゐるために町の者は安心して日が送れないんだ。この顔付や服裝を見たつて、此奴があたり前の人間でないことは分つてる。

乙　亂暴なことは止せよ。君こそ今夜はどうかしてゐるよ。この男が本當の魔法使ひだつたら何で君なんかに打たれてゐるものか。

ある男　（闇を透して向うを見て）あすこから二人がまだ此方を見てゐる。あの二人に見られてゐなければ、わしだつてこんな奴等に指一本差させはしないんだが……。

（無念な形相をする）

甲　何をこの野郎。

（甲はまた雨傘を振上げて叩きつける。ある男はそれを避けようとしたはずみに、足を辷らせて川の中へ轉げ落ちる。二人は驚いて川の方をのぞき込む。）

乙　オイ、聲も音もしないぢやないか。どうしよう？

甲　打ちやつときやいゝさ。おれ達の力で町の災難の元を斷つてやつた譯だからいゝぢやないか。威張つていゝ譯だ。ちつとも氣遣ふには及ばないさ。（しかし勢ひのない

聲）

乙　おれ達の力と云ふが、君一人でやつたことで、おれは知らないよ。おれが止めるのを聞かないからこんなことになつたのだ。

甲　君は卑怯だ。おれの所爲になすりつけようと思つて。

乙　何方が卑怯だか。はじめて見つけた時に君は怖がつて、容易に側へ寄つて來なかつたぢやないか。おれが正體を突留めたので、君は安心して側へ來て、急に强がりだしたのぢやないか。

甲　ぢや、おれが一人で責任を負うてやらう。町のために詛ひの源をおれが斷つたのだ。町の者におれが崇められる時に、おれを嫉むなよ。手柄の半分をおれに分けて呉れと云ふな。

乙　巫山戲たことを云ふな。乞食を一人毆つたのが何の手柄になる。君は今夜は、例の變な女の手で觸られたと見えて、頭が狂つたのだな。（ふと空を仰いで）いつの間にか空がまた曇つて、小雨が降りだした。こんな處で愚圖々々してちや、またどんな奴に出くはすかも知れない。兎に角道を急がうぢやないか。

（二人は慌てゝ向うへ姿を消す。）

（ある男、土手へ匍上る。）

ある男　（向うを見て）　窓の明りが消えた。おれの足はもう大丈夫だ。あの二人を取捕まへて今の仕返しをしなければならない。

（ある男が二人の後を追つて行きかけると、舞臺暗黑となる。）

再び元の部屋。

ＡとＢとは對坐してゐる。

Ｂ　あの人は可哀さうぢやないの。あんなに虐められて。あなたはあの人を可哀さうだと思はないのか知ら。

Ａ　お前は自分がどんな人間になつてるかよく分つたらうな。今見たことや聞いたことはおれの所爲であると同じやうにお前の所爲なのだ。

Ｂ　嘘を仰有い。わたしの知つたことぢやないわ。あの人の胴卷だつてわたしが取りたくつて取つて來たのぢやないわ。

Ａ　お前はいよ／＼おれを信じなくなつたのだな。お前がいくらあたり前の人間のつもりになつてゐても、お前のその手も、その足もあたり前の人間のと違ふやうになつてるんだぜ。お前の手がちよつとでもおれの外の人間に觸つたら、觸られた人間は熱病に罹るんだ。

Ｂ　（不安に襲はれながら）そんなこと無いわ。わたしのこの手は、世間の人の手と違つてやしないんですもの。（自分の手を前へ出して見る）

Ａ　違つてるとも。おれの目にはちやんと分つてる。ムクムクとよく肥つてゐて、ツルツルとすべつこいが、その手にはおれの吹込んだ毒が廻つてゐるんだ。さつきの男もお前の手に觸つたのだから、今時分熱病に掛りかけてゐるに違ひないんだよ。

Ｂ　あの人なぞどうならうと關はないけれど、それが本當なら大變だ。わたしどうしたらいゝだらう。（身悶えする）

Ａ　何も心配することないぢやないか、おれが側に隨いてゐるんだから。おれ達二人が此處にゐりや此處が極樂だ。明日の日他所へ移つて行けば其處がまた極樂なんだ。外の奴等が地獄の苦しみをしてゐても、お前が素直におれに隨いてゐれば、おれは先つきの男のやうな氣の拔けた人間にならないでゐられる。

Ｂ　（Ａの言葉を耳に留めない風で）それが本當ならどうしたらいゝだらう。わたしのこの手が觸つたゞけでも熱病になるといふのなら……。

Ａ　お前はおれに隱してることがあるんだね。……それを云つてしまへ。おれに隱し事をしたりしてると、頭から鬼に喰はれると言つて聞かせたのを忘れたのか。

（Ｂはその脅かしにも驚かない風で默つて何かを考へてゐる。）

Ａ　この町を立退いたら、東京へ行つて着物でも指環でもお前の好きなものを買つてやらう。だからお前の隱してる事を今此處で話して聞かして呉れろ。

Ｂ　わたし指環も着物も入らないの。それよりも、わたしの手があたり前の人間のやうになつて毒なんか無くなつたらいゝと思ふの。……後生だから、あなたの力でこの手から毒を取つて下さい。今直ぐに取つて下さい。（物狂はしく云ふ）

Ａ　おれの力でもそりや駄目だ。……お前は今夜大川に會ひに行つて、おれには云へない話をしたのだな。お前がこの頃人に馴染みだしたのが氣になつてゐたが、今夜お前はその手で大川の首つ玉に抱付いたのだな。（顏は憤怒の相を帶びる）

Ｂ　（茫然として夢見る如く）わたしの手が觸つたために、あの人が病氣になるのなら、わたしこの手を切つてしまひたい。

Ａ　人と違つた手を持つてるのを有難いとも思はないのか。

Ｂ　わたし、あたり前の人と同じやうな手を持つてゐたい

の。わたし、あなたの云ふ通りにしてみんなを困らせて罪をつくつたことを後悔してよ。今日まであなたをえらい人と思つてゐたのだけれど、何だかさう思へなくなりだしたの。

A　三年前に、あの鬼婆の家から助け出してやつた恩を忘れたのだな。無理無體にいろんな男の玩具にされて、食ふ者もろくに食はされないで、毎日泣いて暮してゐた時のことを忘れたのだな……お前を虐めた世間の奴に今お前は仕返しをしてゐるのを悦しいとは思はないのか。

B　（頑なに）わたし仕返しなぞしなくつてもいゝの。打たれても蹴られても、玩具になつてもいゝから、あたり前の人間になりたいの。……こんなジメ〳〵した家が何で極樂なことがあるものですか。わたしをダシに使つて魔法を使ふのが何で自慢になるものですか。

（Bが物狂はしくなるのを、Aはぢつと見詰めて黙つてゐる。）

B　あなたに背いたら、その時わたしの生命はなくなるのかも知れないけれど、爲方がないと覺悟してるんです。

A　（悄然として）ぢや、そんなに大川がお前の氣に入つたのか。たつた二三度會つたばかりなのに。……大川の家へでも母親の所へでも、行きたければ行くがいゝ。今直ぐにでも此處を出て、お前の行きたいところへ行くがいゝ。……おれは一人で外の土地へ出て行かう。

B　あなたは外の土地へ行つて、わたしのやうな女を使つて、また同じやうなことをしようと思つてるの？（邪氣なく云つて）その女の人は可哀さうに。

A　おれにまだそんな力があると思つてるのか。……お前には、おれの身體が今どんなみじめな樣になりかゝつてゐるか分らないのか。

B　分らないわ。

A　かうなつたら、お前が出て行く先におれの方から出て行く。

（Aが力なげに立上つたところへ、ある男が前と同じやうに扉を少し開けて顏を出す。Aはおびえて後退りする。）

B　お前さんまたやつて來たのかい。懲りもしないで。

（ある男、絶望した樣で入つて來る。）

B　お前さんは身體に變つたことはなかつたのかい。不思議さうに見廻す）

ある男　おれは自分がまだ生きてるのが不思議だ。

（ある男はふと胴卷を見つけると、我れを忘れて興奮して、前に立つてゐるAを突飛して、胴卷を取返して押戴いて懐へ入れる。Aは突飛されたまゝ起上れない。その無力な樣子を見たある男は、急に勇氣を出して、

Ａを足蹴にして鬱憤を晴らす。Ａは死んだやうに手向ひをしない。）

ある男　こんな意氣地のない奴を、なぜおれは怖がつたのだらう。（Ｂに向つて）貴様もよくおれを誑かしやあがつたな。

（ある男勢ひに乘じてＢに打つてかゝる。Ｂも微かな呻き聲を立てただけで倒れる。その樣は死人のやうである。）

ある男　手答へのない奴等だ。枯木が倒れてるやうだ。

（彼れは二人の樣を見て、ふと恐れを感じてアタフタと出て行く。）

（梟の聲がして、俄かに雨の音烈し。）

――幕――

勝敗

人

園田大造（三十歳ぐらゐ）
岩瀬俊一（四十歳ぐらゐ）
磯崎欽也（三十歳ぐらゐ）
同妻　とも子（三十歳ぐらゐ）
五百木龍子（二十三四歳）
河津仙吉（三十五六歳）

時

晩秋の頃

一

あるホテルの一室。

それは地下室である。天井は低く、周圍の白壁にはヒビがあつたり、汚點があつたりしてゐる。廢物利用の客室らしく、日當りや風通しの自然の恩惠は缺けてゐる。從つて部屋そのものは陰欝である筈なのだが、大ホテルの餘光によつて、靜かなしつとりした住居になつてゐる。敷物やベッドや、机や椅子や、箪笥や、電燈や電氣暖爐などが、小綺麗に配置されてゐる。

園田大造（三十歳前後の痩形な、しかし健康體な男）今、外から歸つて來たばかりといつた風で、黑つぽい背廣を着け、靴を穿いたまゝ、暖爐に當つて、金口の西洋煙草を吸つてゐる。……ふと、吸殼を床上に投じて、兩手で頭を抱へて、顏を蹙めて、踵でコツ／＼音を立てながら室内を小廻りに一廻りしたところへ、來訪者のノックが聞える。

彼れは「お入りなさい」と應へて、頭から手をおろして、身構へをする。

岩瀬俊一（大造の實兄で、歳は四十あまり、大造よりは肥つてゐて、髯がのびて穢らしく、紋付の羽織に袴を着けて、見るから田舍紳士然としてゐる男）外套と鞄とを持つて入つて來る。

二人は相見て互ひに微笑する。

大造　僕は今外から歸つて來たところだ。丁度よかつた。

俊一　わしも用事が大抵片附いたから、成べくなら、今夜の夜行で歸らうと思つて居る。二度も電報が來とるんだや。

（外套や鞄を下へ置いて、暖爐の側へ腰をおろす。大造は、大儀さうにそのほとりへ椅子を引寄せて腰をお

ろす。)

大造　こんな不景氣な時節に、兄さんの商賣は非常に繁昌してるんださうだね。ちよつと驚いたよ。

俊一　なあに、田舍の事業ぢや、儲かつても儲からなくつても、高が知れてらあ、お前なんぞの商賣のやうに、煙草を吸つて馬鹿話をしとるうちに、紙幣束が舞込んで來るやうなボロイことはないのぢや。(トゲ／＼した口調で云ひながら、袂から朝日とマッチを出して、一本火を點ける)

大造　何處にだつて、今時そんなボロイ儲けがころげ込んで來るものか。

俊一　だつて、東京の奴等はみんな金を有つてゐさうな面をしてるぢやないか。田舍の金はみんな都會へ捲上げられるんだからたまらないぜ。お前なぞも田舍者からさらつた金を東京へ持運んで來るのが役目なんだらう。銀行の重役だなんて、そんなことをしとれば役目が濟むんぢやから、うまいもんぢや。

大造　僕なんざ重役だか輕役だか分りやしないさ。

俊一　お前も園田家の養子になつて何年になるのぢや。まだ財産が自由にならんのか。意氣地がないぢやないか。第一東京に堂々とした自分の家があるのに、何だつて、田舍から東京へ出張するたんびにこんな宿屋に泊るのぢや。不見識だとは思はないのか。

大造　フヽン。(と、せゝら笑つて)兄さんは東京へ來て何處に泊つてゐたのだ？

俊一　(澁い顏して)わしは巣鴨に泊つて居つた。……いや、泊つたのか泊らなかつたのか分らないやうなものだが、兎に角、蒲團の上に寢かして貰ふだけは貰つたのぢや。ハヽヽ。

大造　巣鴨から毎日東京まで用足しに出るのは厄介だな。

俊一　そのくらゐなことは構やあせんが。……宿代が助かるんぢやから。

大造　高が中學の先生の安月給取りの家ぢや、田舍のお客にたび／＼泊られちや困るだらうからな。

俊一　空いた部屋へ寢るだけぢやないか。晩酌一本の無心を云ふんぢやないし、どれだけの迷惑になるんぢや。……わしは今度から宿屋へ泊ることにしよう。

大造　それがいゝよ。商賣で來るのなら旅費はちやんと豫算に入つてるんだらうから。

俊一　豫算なんぞ當てに出來るものか。……わしは、お前を園田の養子にしといたら、ゆく／＼子供の教育費くらゐは融通して貰へるだらうと、胸の中で豫算に組んでゐたのだが、そいつも結局水の泡になつたのだからな。

大造　その代り、僕には親爺の遺産が鐚一文たりとも分配

されなかつたんだからいゝだらう。

俊一　何だ。おぬしは、堂々たる銀行の重役の養子になつてゐながら、田舍爺の爪の垢ほどの遺産のことをまた考へとるのか。ケチ臭いことを云ふな。……遺産と云つても、あれは親爺を助けてわしがつくり上げたものなんぢや。

大造　だから貰はうとは云やあしないよ。（不機嫌さうに云つて）まあ、紅茶でも、御馳走しようか。

（さう云つて、椅子から立上つたところへ、五百木精助の娘龍子（今、美容院から出て來たばかりと云つたやうに頭髪と顔面とを美しく飾つて、ケバ〳〵した衣服を着けてゐる二十二三歳の豐麗な女）が、扉の間から半身を出す。）

龍子　あら。お客樣。（と、云つて、扉を締めて引込む）

俊一　（不思議さうに）　あの人は誰だ？

大造　僕の友人見たいな男と緣談が出來かゝつてる女だ。綺麗だらう。

俊一　綺麗と云ふよりも化物見たいぢや。

大造　どうせ女は化物なのさ。（獨りで感じてゐるらしく云つて）隣りの部屋に泊つてる僕の友人の從妹なんだが、折角の良緣がちよつと行惱んでるのだ。行惱んでるのが、僕だちには面白いんだが。

俊一　どういふ譯で？

大造　先方の男は醫學博士で風采も可成立派なので、女の方から飛付くほどの良緣なんだが。いよ〳〵見合も濟んで話が極りかけた時に、男の方から不意にある條件を持出したのだ。それは、直ぐにも病院を建てたいから、輿入れの時にお土産として十萬圓耳を揃へて持つて來て吳れと云ふことなんだ。無論女の兩親は驚いたね。何處へ出しても恥かしくないやうな大事な娘をやるのを有難いとも思はないで、大金を脊負つて來いなんて、太い奴だと、一度は怒つて見たものゝ先方が腕利きの博士だといふのにひかされて、手土産の何萬兩を何分の一かに負けて吳れと、仲人の手を經て交渉をはじめたんだ。幾らかの金をつけてやるのはまあいゝとしても、その金で藝者遊びなんかされちや溜らないから、遊蕩禁制の契約書でも書かせようかといふやうな話まではじまつてるんだから面白いだらう。

俊一　（にが〳〵しさうに）そんな話が何が面白いものか。呆れた奴た。金と結婚をするやうなものぢや。

大造　金と結婚が出來りや結構だが、我々は金のにほひばかり嗅がされて詰らないよ。……しかし、娘の結婚に、亭主の遊蕩禁止の契約書を書かせるのは奇拔たね。

俊一　當世の高等敎育を受けた奴は、そんなに慾の皮が突

張つとるのか、わしなぞは安氣に喰へさへすりや、餘計な金錢は不用だと思つてゐる。

大造　誰れでも云ひさうな御尤な理窟だが、必要な金と餘計な金との區別は分らないからね。

（そんなことを云つてゐる間に、靴を脱いでスリッパを穿く。）

大造　僕なぞは、目下のところ必要な金に不自由してるんだからね。

俊一　ハヽヽ。勝手なことを云つてらあ。こんな贅澤な西洋宿に泊つたりして居りながら。

大造　なにが贅澤なものか。……さうだ、紅茶でも御馳走しようか。

（さう云つて、暖爐の側のベルを押さうとしてゐるところへ、ノックが聞える。「カム、イン」と、聲をかけると、磯崎欽也（三十歳前後の稍々虚弱らしく見える男）葉卷をくゆらせながら、部屋着の寛やかな和服を着て入つて來る。）

欽也　入つていゝのかい。

大造　あゝ、いゝとも、これが、僕の一番上の兄なんだ。（と云つて、俊一の方を見て）この方が、磯崎欽也君といふ僕の友人なんだ、靜岡縣に廣大な果物畑を持つてゐる富豪の一人なんだ。

欽也　ハヽヽ。富豪はよかつた。（俊一に挨拶して）園田君からお噂は承つてゐました。

（俊一は恭しく挨拶して、袂から名刺を出して欽也に渡す。）

俊一　以後お見知り置かれますやうに（と、馬鹿叮嚀に自己紹介をするので、大造は苦笑を洩らす）

欽也　あなたのお家でもこの頃柑橘類の栽培を盛んにおやりになるさうですね。

俊一　いやまだ着手したばかりで御座います。その道の御經驗の深いあなた樣のやうな方から、是非御意見を承りたいと存じます。

欽也　いや、わたしどもは他人まかせで、自分にはなんにも分らないんですよ。

大造　（二人の話を遮つて、欽也の方を見て）君は僕に何か用事があるんぢやないか。

欽也　僕よりも龍子が君に用事があると云つてる。急に話したいことがあるらしいんだ。河津が訪ねて來る前に、何か君に相談しときたいんだらう。

大造　相談と云つて何だらう。（と、訝しげに云つて）ぢや、かうして呉れたまへ。龍子さんには此處へ來て貰つて話を聞くことにするから、君は兄貴を階上のパーラーへ連れて行つて、果物の話なり何なりすることにして呉

れたまへ。此方の話が濟んだら、僕が迎へに行くことにしよう。

欽也　それもよからう。

大造　それで、若しも河津が訪ねて來たら、君の部屋で待せて置くやうに、ボーイに吩咐けて置くんだね。

欽也　それがいゝ。ぢや、龍子を呼んで來るよ。（と、云ひ棄てゝ出て行く）

俊一　あの人はお前くらゐな年格好だが、富豪の息子さんなのかい。

大造　富豪といふほどぢやないが、兄さんの所謂喰ふに困らない財産はあるから、大きな溫室なんか作つて、メロンや葡萄を育てたりして、氣儘な趣味生活をしてるんだ。その方は詳しいやうだから、よく聞いて見なさい。參考になるだらう。

程一　わしだつて生果物の栽培には苦心して居る。あんな若い男の意見を拜聽しようとは思はんぜ。

（聲高にさう云つてゐるところへ、欽也と龍子とが顏を出す。）

欽也　（俊一を見て）ぢや、あちらへいらつしやいますか。

俊一　ハイ。お伴いたしませう。

（龍子に會釋して欽也に隨いて出て行く。）

（大造は、戶口から首を出して二人を見送つてから、外から開かぬやうに、扉に堅く錠をおろす。）

（龍子は窓際に添つて外を見てゐる。大造は取澄した目顏をして女の側へ寄つて來て、カーテンをおろす。そして、命令的口調で。）

大造　まあ、そこへお掛けなさい。

（龍子が椅子に腰をおろすと、大造も椅子に腰を掛ける。）

龍子　今の方あなたのお兄さん？

大造　さうです。僕は用事を片付けて歸つて來ると、磯崎の部屋を訪ねるさきに、自分の考へを極めて置かうと思つてゐたのに、兄貴が出抜けにやつて來て、例の田舍理窟を喋舌くるので、考へごとも何も出來やしなかつた。……それで、あなたの急用といふのはどんなことなんです？

龍子　（冷然として）あたし、あなたのお考へを承りたいと思つてますわ。

大造　今はゆつくり話合つてる時間はないんだから、他人行儀は止して、短刀直入に事を極めませう。……あなたは、河津の蟲のいゝ條件を容れて結婚する氣になつてるんですね。（咎めるやうに云ふ）

龍子　だつて、それはあなたがお勸めになつたんぢやありませんか。河津さんの人物をこの上もない人間のやうに

吹聽なすつて、あたしにも兩親にも頻りにお勸めになつたんぢやないの。
大造　だから、この縁談を成立させたらいゝでせう。
龍子　あなたはあたしに同情してさう云つてドさるのか知ら。あたし何だか怖いやうだわ。
大造　ハヽヽ、僕を怖がるんですか。僕はあなたの過去の弱點につけ込んで、あなたを脅迫するやうな卑怯な眞似はしませんよ。戸崎は完全に死んだのだから、あなたは平氣で博士夫人になれるんです。
龍子　あたし、博士夫人なんかになりたかありませんわ。どうせ田舍の商人の娘なんですもの。
大造　（冷笑して）博士夫人になりたくない顏ではなさゝうに見えるけれど。
龍子　（ふと險しい目をして）さう云つてあたしを侮辱なさるの？……ぢや、兩親が何と云つても、あたしこの縁談を斷わつてしまひますわ。
大造　それは御勝手だが、河津は僕の親友だから、河津の細君になる人を、僕は陥れやしません。河津の要求をあなたの御兩親に取次いで、要求の一部分でも聞入れて頂かうと、いろ〳〵と取做しをしてゐるのは、あなたの弱點に對して――あなたに云はせれば無論弱點ぢやないんだが――世間の道徳から見た弱點に對する賠ひにしてるつもりなんです。さうでなきや、あなたのやうな、東京の社交界へ出しても、直ぐクインになれさうな美人が、お化粧料自分持で結婚するつて法はないんですからね。……さう云つても、河津は何も知つてやしないんですから、あなたは安心していゝですよ。
龍子　有難うよ。あなたの恐ろしい御好意を受けて縁談を纏めて頂いたら、兩親も喜ぶでせうよ。
大造　……それで今日は、磯崎と僕と二人で、河津の意向をよく確めて、どちらかに話を極めようと思つてるんですが、その時に、龍子さんの本心をよく摑んどかなきや困りますからね。
龍子　だつて、今日はあの方があたしと二人きりで話をしたいと仰有つたんぢやなくつて？　あの方の意向は、あなたや欽也さんに確めて頂かなくつたつて、あたしからよく聞きますわ。それよりも、園田さんは何だつてあたし達の縁談にヤキモキしていらつしやるでせう。
大造　ヤキモキしてるなんて、いやなことを云ひますね。あなたの御兩親の熱心な依頼も受けてるし、河津は僕の親友ではあるし……。
龍子　御自分の御本宅があるのに、こんなホテルにお泊りになつたり……。
大造　それは氣樂だからですよ。別に意味のあることぢや

ない。

龍子　白ばくれていらつしやるわね。（笑つて）あたし、機會を待つてゐたのですけれど、もう愚圖々々してはゐられない場合になつたんですから、今あなたの前で云つちまひますわ。……死んだ戸崎があたしに云つてゐましたのよ。園田大造といふ男にだけは注意しろつて。

大造（意外な感じに打たれて）これは驚いた。どういふ譯なんです？

龍子　今となつては、それがたつた一つの遺言のやうに思はれますの。園田大造といふ男にだけは注意しろと、あの晩心底から戸崎が云つたのが、今耳元で聞えるやうですわ。

（さう云つて、龍子は耳目を凝らしたが、ふと、結立ての頭髪を荒つぽく壞しにかゝつた。）

大造（驚いて、座を立つて）なぜ、そんな亂暴なことをするんです？

（思はず彼女の手を執つて留めようとする。龍子は爭ひながら。）

龍子　こんな髮に結つてまで、河津さんにお目に掛らなくてもいゝんです。それよりも、戸崎が興津の海で溺死した時分の有樣があたしの目にはよく見えるんです。あなたのこの手が、波の中で惡魔の力をもつて動いてゐたのが、今見えるやうなの。……あなたは一生そのことを御自分一人の胸に藏めてゐようと思つていらつしやるの？

大造　あなたは飛んでもない掛り合ひをつけますね。ぢや、興津で戸崎君が溺死をしたのは、僕の所爲だとでも思つてゐるんですか。

（さも思ひも染めないことを云はれたのに呆れたらしく、彼女の手を放つて椅子にぐつたり腰をおろす。龍子は髮を壞しながら、昂奮して目に涙を浮べてゐる。）

大造　あの時は戸崎君と一しよに海水浴をやつてゐたに違ひないが、僕は泳ぎが未熟だから、水際でバチヤ／＼やつてゐたし、戸崎君は波を切つて沖の方へ行つたのです。泳ぎの下手な人間が泳ぎの上手な人間を海の底へ沈めることが出來よう筈はないし、第一、僕が何のために親友を溺死させる必要があるんでせう。……戯談にもそんなことを云つちや困りますよ。

龍子　でも、あの後のあなたの態度が證明してゐました。戸崎の注意を思合せてあたしは察したのです。女の直覺力をあなたは御存じないのね。

大造　恐ろしい邪推力をあなたは持つてる。邪推は御勝手だが、そんな馬鹿げたことを他人に云つちや困りますよ。戸崎とあなたとの關係は、僕だけが知つてゐたやうなものだから、それで、戸崎は僕を煩つたがつてゐたの

かも知れないが……。

（大造が考込むのに、龍子は目を注ぎながら、頭髪を亂したまゝ、椅子にぐつたり腰をおろす。）

龍子　でも、その手でよくあたしの災難の根を絶つて下すつたわね。戸崎が不意にこの世から消えてしまはないで、何時までも生きてゐようものなら、あたしの一生は破滅だつたのよ。あんな死に方をしたのは氣の毒だつたけれど、あたし、ホツトしました。……ホツと胸を撫で下したのはあたしばかりぢやないんです。兩親は夜が明けたやうに思つてましたわ。

大造　あなたは夢を見てるんですか。あなたやあなたの御兩親が戸崎の死を望んでゐたかゐなかつたかは、別問題として、僕は戸崎の死に關係はありませんよ。

龍子　まだ隱さうとしていらつしやるの？　ぢや、それはどちらでもよ御座んすわ。……あの時、あなたが戸崎を沈めなかつたら、戸崎があなたを沈めたかも知れませんでしたのよ。……關田さん、今年の夏の興津の海のことをよく思出して御覽なさいね。海へ入る前、海へ入つてゐる間、海から上つた時のことを、よく思出して御覽になるといゝ。

大造　さうですね。こんな穴倉のやうな都會の一室の暖爐の側であの日のことを思出すと、僕でも感傷的になつて來るから不思議ですね。あの日は土用の明けた頃で、興津の濱は少し荒模樣だつた。波が恐ろしさに海へ入つてゐる者は極めて少かつたが、不斷はあまり大膽でもない戸崎が、どういふものだか、その日は馬鹿に元氣がよくつて、そのくらゐの波にビク／＼するやうぢや、男子の面目にかゝはると云つたやうな顏して、僕を誘つて飛込みましたよ。（瞑想してゐるらしく）あの時、戸崎は胸に一物あつたかも知れませんね。

龍子　あなたは今はじめて氣がおつきになつたの？

大造　今日は思ふ存分波と鬪つて見るかなんて、笑ひ／＼云つてゐました。……それである所までは、僕も後から隨いて、負けん氣で泳いだんですがね。

龍子　その時あなたは、あたしの顏を見ていらつしやらなかつたの？

大造　（思ひ出の空想から目が醒めたやうに、彼女を見て）あの時あなたが濱にゐる筈はないでせう。

龍子　濱に立つてゐなくつても、波の上に浮んでたかも知れないわ。戸崎は確かにあたしの顏を見てゐました。

大造　そりや、戸崎は溺死の間際には、あなたのまぼろしぐらゐは見てゐたかも知れないが……（口調を改めて、）慌てた態度て）磯崎なんかゞ、もう歸つて來るかも知れないから、肝心な話を早く極めなきやなりませんよ。そ

れよりもそんな顔をしてゐちやいけませんよ。何事が出來たのかと怪まれますよ。
龍子　なぜ、そんなに慌てるんです？　與津の海を思ひ出すことがそんなにおいやになつて？
大造　溺死者の話はもう止しませう。戸崎は完全に死んでるんだから、あの男のことはもう忘れてしまひませう。死者をして葬らしめよと、聖書にも書いてあるぢやありませんか。
龍子　あなたは本當にさう云ふ氣持におなりになつて？（喜ばしさうに）
（そこへ、戸を叩く音が聞える。）
（大造は困つた顔して立つて行つて扉を開ける。そこにはボーイが立つてゐる。）
ボーイ　（名刺を出して）この方がいらつしやいましたから、お隣りの部屋へお通ししました。
大造　それでよろしい。
（扉を閉ぢて元の座へ戻る。）
大造　河津君が來たんです。……あなたも此處まで運んで來た話を、今になつて打壞さうと思てやしないんでせうね。
龍子　あなたこそ、この緣談を順當に運びたいと物好きに思つていらつしやるの？……あたしには、どうしてもあなたのお心が呑込めませんわ。……あたしを戸崎の毒手から救出して、河津さんの手へお渡しになるために苦勞なすつて、あなたに取つて、どういふ御利益がおありになるの？
大造　人間は慾得によつて動くとばかりは限りませんよ。
龍子　戸崎は園田大造には油斷するなと云つてゐましたのよ。與津の波の上ではあなたもあたしの顔を見ていらしつたんぢやない？
大造　あなたのその美しい顔をですか。（彼女を見詰めて、今までとちがつた心の震へを感じながら）ぢや、與津の波の上で、戸崎と僕との二人が、あなたの顔を見ながら鬪つてたとしてもよろしい。
龍子　戸崎はあたしの兩親よりもあなたの方を恐れてゐました。それで、あの人はあなたを恐れるたびにあたしを脅かしました。（無邪氣らしく）……あなたはあたしを信じて下さらない？　あたしは戸崎には蛇のやうに附纏はれてゐたのですけど、あたしの身體は淸淨潔白なんです。戸崎はあなたに勝利を誇りたいために、あたしの名譽を犧牲にして、自分勝手な揑造をしてお話したんでせうけれど、あたしは神樣の前へ出ても誓ひますわ。戸崎とあたしとの間には、後暗いことは決してありませんのよ。
大造　あなたがさう仰有るなら、僕はさう信じる外ありま

せん。

龍子　あなたがそれを信じて下さらなきや、あたし河津さんのお話も壞してしまひますわ。……今、二人でかうして差向ひでゐる一分か二分かの間は、あたしには一生の大切な場合なんぢやありませんか。あなたにも大切な場合のやうに思はれるんですけど、さうぢや御座いませんの？　あたし一生の運がこの一分間で極るやうに思はれますのよ。

大造　人間の一生の運が瞬間に極ることがあるんですね。

（二ノはもどかしさうにしてゐるところへ、戸の音が聞える。）

龍子　（耳を傾けて）お兄さんと欽也さんとが歸つていらしつたのね。あたし洗面所へ行つて顏を洗つて髮を直して來ますわ。

（龍子は扉を開けて、二人の側をくゞつて出て行く。欽也は彼女の頭髮の亂れを怪しみながら、俊一と一しよに入つて來る。）

欽也　どうだ、話は極つたのか。

大造　ウン。（曖昧に云つて、俊一の方を見て）面白い話があつたのかい。

俊一　あゝ、いろ〳〵と參考になるお話を承はつた。ホテルの中も方々案内して見せて頂いた。

大造　大勢西洋人がゐて珍らしいだらう。田舍の土産話に今夜一晩此處へ泊つちやどうだね。

俊一　柄にない事は止しにしよう。こんな宿に泊つちや、わしなどは草臥休めも出來やすまい。

大造　しかし親類の家に泊めて貰つて氣兼ねをするよりはましだらう。

俊一　いや、わしは用事さへ片附いたら、一刻も早う家へ歸るつもりぢや。魚でも野菜でも東京の物は古くつて味も何もありやしない。

大造　なに、東京にだつてうまい物はあるよ。久振りに會つたんだから、晩餐の御馳走くらゐしようよ。それに重要な話もあるんだから。

俊一　わしもお前にちよつと話しときたいことがあるんだ。御馳走なんかはどうでもいゝが。

大造　急いで故鄕へ歸るにしても、夜汽車で立つんだらうから、それまでゆつくりしてるといゝ。（欽也の方へ向いて）さつき河津が來て、君の部屋で待つてるよ。

欽也　もう來たのか。誰れかお相手をしてるのか。

大造　なに。君の奧さんはまだ歸らないやうだし、龍子さんはお化粧をしに行つてるのだ。

欽也　ぢや、僕がお相手をしてゐようか。

（さつきから、椅子にもかゝらないで、退屈さうにし

てブラリ／＼してゐた欽也は、懷手をしたまゝ、出て行く。）

俊一　わしは今夜夜汽車に乘つても、とても滿足に眠られやすまいから、その寢臺で寢かして貰はうか。

大造　あゝ。寢たけりや寢るがいゝさ。話すことがあるのなら、寢臺で寢ながら話したらどうだ。

俊一　それもさうだな。わしは袴なんぞ穿いてちや窮屈だ。

（袴を脫いだり羽織を脫いだりしてゐる間に、大造は、首垂れて物を考へてゐる。）

俊一　それはさうと、お前の夫婦のなかは圓滿なのか。兩親とも折合つとるか。

大造　相變らずさ。

俊一　相變らずといふのは、平穩無事に行つとるといふことなのか。

大造　張合のない平穩無事だよ。僕は今の今でも養家を飛出すくらゐな意氣込みは持つてるんだが、獨立して一仕事やりだす準備をしとかなきや駄目だからね。兄さんがこの頃うまく當てゝるんなら、少し資本を貸して貰へまいか。

俊一　馬鹿を云へ。……わしの方でこそ、お前に賴みがあるんぢや。順三は來年中學を出たら、どうしても東京へ出て修業したいと云つて、わしの稼業を嗣ぎさうでないから、お前の家の玄關番にでも置いて貰ひたいと思つてるんぢや。

大造　他所の玄關番なんぞさせるよりは、充分に學資を出して、寄宿舍へでも下宿屋へでも入れたらいゝぢやないか。僕は養子で懲りてる。順三を玄關番の居候なんかにならせたくないな。

俊一　お前を養子に出したのは、身内の者の面倒を見て貰ひたいためだつたのぢやぜ。

大造　蟲のいゝことを云つてらあ。僕は家族のために人身御供に上げられたんぢやないよ。養家に財產があつたつて、僕の自由になるんぢやなし、傍で思つてるやうな有難味はありやしない。

（俊一は落着きの惡さうに寢床に橫はつて。）

俊一　氣儘が出來ないくらゐ何だ。贅澤を云ふなよ。養父が何時までも生きとる譯ぢやあるまい。養父が死にや、あしこの大身代はみんなお前のものぢやないか。

大造　そんな夢でも見てゐるかな。……あの親爺は、大丈夫百までは生きてゐるさうだ。僕が運よくあの家を相續が出來たにしても、その時分には、僕の方がよぼ／＼のお爺いになつてるかも知れないよ。（心がムシヤクシヤしたらしく）養子なんかになるもんぢやない。傍から羨まれても、兄弟中で僕が一番貧乏籤を引いたやうなもの

だ。

俊一（激したやうに）勝手なことを吐かせ。威張つた顔をしたいのなら、少しは兄弟の世話でもしてからにしろ。

（大造、うるささうに顔を背けて、椅子にもたれかゝる。）

（そこへ、欽也がノックもしないで、扉を開けてノソノソ入つて來る。）

欽也　龍子が今、戸まどひして僕の部屋をのぞいたから、呼込んで河津君に會はせといたよ。それでいゝだらう。僕はあゝいふ才子のお相手にはなれないから、丁度よかつた。

（事もなげにさう云つて、電氣暖爐の側の椅子に腰をおろして、煙草を吸ふ。）

（俊一はちらと欽也を見たが、直ぐに頭から夜具を被つた。）

（大造は突如としゝ、不安に襲はれたらしく、そして、聞えないものを聞き、見えないものを見ようと努力してゐる。）

欽也　時節が時節だから、結婚披露が幾組もあるらしいね。そこらを歩いてると、絢爛な色彩が、田舍者の目には眩しいくらゐだが、しかし、晝間でも燈火をつけなきやならないやうな、こんな地下室に押籠められてゐるのは、僕にはなほ息苦しいよ。やはり、果樹園か野菜畑を見廻つてるのが、僕には適してゐる。こんな所に一週間もゐようなら、僕の健康は臺なしだ。

（大造は、それに答へないで、椅子を離れて、神經の亂れた態度で、部屋を歩く。）

（俊一は、早くも高い鼾を洩らす。欽也は、その鼾を聞いて顧みて微笑す。）

欽也　あんな風に雜作なく熟睡が出來ると結構だね。兄さんと君とは顏立は似てゐないやうでも、話つ振りはなかなかよく似てるよ。兄弟は爭はれないものだ。

大造　河津は君に何か云つてゐたか。

欽也　君からいろいろ聞いてるので、龍子さんは改めて會ふ必要はないんだが、お約束だから多忙な時間をさいて來たなんて云つてたよ。僕なぞは並び大名同樣の傍觀者なんだが、兎に角この緣談は首尾よく纏まりさうだね。つまり君のお蔭なんだよ。

大造　しかし、まだ持參金の打合せが殘つてるぢやないか。龍子さんの兩親は何だつて、娘に大金を附けて結婚させようとするんだらう。

欽也（訝しげに相手を見上げて）だつて、それは君が勸めたのぢやないか。河津君は世間に稀れな立派な人間であるにしろ、龍子だつて、大威張りで誰れとでも結婚の

出來る資格のある女だ。ひけ目を感じる點はちつともない譯だと、僕は思つてる。
大造　君達はさう確信してるのかい。
欽也　君はさう思つてゐないのか。
大造　女といふものは分らないものだね。
欽也（微笑して）君がそんなことを云ふのは變だね。……僕の家內なんかは、龍子を一癖ある女のやうに云つてケナしてるけれど、單純な女ぢやないか。
大造　さうだらうね。
（落着かない足取りで扉の方へ寄つて行つたところへ、龍子が顏を出す。）
龍子（欽也を見て）今姉さんからあなたに電話がかゝつて來たから大急ぎで來て下さい。
欽也　何處からかけたんだらう。
（欽也は急いで出て行く。龍子も直ぐに行きかけるのを、大造は慌しく呼留める。）
大造　ちよつと待つて下さい。一言あなたに云つときたいことがあります。
（龍子は、さして動じない態度で入つて來る。大造は寢臺の方を一瞥しながら、龍子に向つて聲を潜めて話しかける。）
大造　あなたは河津君にどんな返事をしました？
龍子　どんな返事と云つて、あの方のお訊きになることを承つただけですわ。（邪氣なく云ふ）
大造　あとで、僕が河津君に會ふんですが、この緣談については、あなたは異存はないと、河津君に云つていゝんですね。
龍子　それはあたくしの方からあなたに伺ふことですわ。
大造　だつて、僕はあなたと河津君との間の紹介者に過ぎないんだから、（イラ〳〵した心を現はして）兎に角、あなたのお話が濟んだら、此處へ河津君を寄越して下さい。
龍子　お逢ひになりたきや、今直ぐにでも伺はせますわ。
大造　ぢや、直ぐに此處へ寄越して下さい。此處でちよつと河津に話をした後で、一しよに共方の部屋へ行つて、皆んなで珈琲でも葡萄酒でも飮んで祝意を表することにしませう。
（龍子首づいて出て行く。大造は傍一の側へ寄つて寢息をうかゞつてから、暖爐の側の椅子に腰をおろす。）
（河津仙吉（三十五六歲。フロックコートを着した美しき男。大造よりは氣障に見えるほどに粉飾してゐる）がノックして入つて來る。そして、大造と顏を見合せると、互ひに親しげに會釋をして、椅子を竝べる。彼れは、寢臺の方へは少しも氣がつかない。）

仙吉　いろ〳〵御面倒をかけたね。
大造　なあに。……君は龍子さんと二人つきりで話をしたいと云つてゐたが、もう話は濟んだのかい。
仙吉　大して話もしないが、話はもう濟んだやうなものだ。……僕は持參金の件を讓歩してもいゝよ。
大造　讓歩したと云つて、いくらほど？（訝しさうに訊く）
仙吉　（ほゝ笑みながら）事によつたら零點まで引下げてもいゝね。
大造　どうして？
仙吉　清淨潔白な美しい女を、金の問題なんかを持掛けて汚すのは慘酷だと思はれるよ。
大造　ハヽヽ。本心で君はそんなことを云ふのかい。君の人生觀か一朝にして引くり返るのは不思議だね。
仙吉　人生觀なんか何時變るか分つたものぢやない。變つたのを、僕は自分で祝してゐるよ。
大造　さうすると、君の要求を正面に受けて周旋してゐた僕が馬鹿を見た譯だね。（不機嫌な顏付や口調に現はす）
仙吉　どうして？　君も仲介人として喜んで吳れてもいゝぢやないか。僕が金の問題を撤廢したのだから。
大造　さうすると、君の病院の建築はどうなるのだ？
仙吉　病院など急いで建てる必要はないよ。當分今の病院の一醫員として働いてゐて、そのうち時期を見て獨立すればいゝ。僕はまだ若いんだもの。
大造　あんなに熱心に計劃してゐた事業に一頓挫を來たしても後悔をしないのかい。
仙吉　事業は事業。結婚は結婚さ。（呑氣さうに云つて）僕に話があるといふことだが、內密話なのかい。
大造　（相手の心を搜らうとするやうにヂロリと見て）それよりも、龍子さんは君にどんなことを云つた？　自分の身の上に關して何か重要なことを云はなかつたか。
仙吉　あの人の身の上？　無論そんな話はしなかつたよ。……あの目とあの唇とあの手は、醫學上から觀察しても純潔なものだよ。君など素人には分らないだらうが、我我醫學者には直感で知れるんだ。（悅に入つてゐるらしく云ふ）
大造　大したものだね。（嘲るやうに云つて）お醫者さんには、肉體の判斷は出來るかも知れないが、心理の觀察は不得手なんぢやあるまいか。龍子さんが心の中でどんなことを思つてるか、君には洞察出來まいね。
仙吉　ハヽヽ。そんな閑問題は他日に讓つて、君は仲介者の義務として、持參金撤廢のことを、一刻も早く先方の兩親に傳へて吳れたまへ。
大造　さう知らせたら、先方の親爺は大恐悅だらう。折角出しかけた物も引込めてしまふだらう。僕が口を酸ぱく

して說得させたのが、無駄な努力になつてしまつたんだね。田舍の金持が貪つては蓄へてる財產を捲上げて、病院でも建てれば、死んでる金を生かして使ふ譯になるのに、君は馬鹿だなあ。（戲談らしくない口調で云ふ）
（俊一ふと薄目を開けて、二人の方をぬすみ見して、また目を閉ぢる。二人は氣づかないでゐる。）
仙吉　無論君のお骨折は感謝するよ。何かの方法で感謝の意を表はすつもりだ。
（今まで希望の光に包まれてゐる人のやうであつた仙吉は、大造の不機嫌な樣子を見て、不思議さうに。）
仙吉　君はどうかしたのか。先日會つた時よりは憔悴してるやうぢやないか。
大造　いや、御心配には及ばない。身體は健全だ。
仙吉　さうか。それならいゝが。……兎に角、あちらへ行つて、皆んなと祝盃を擧げようか。
大造　いや、まだ祝盃を上げるのは早い。（氣六ヶしさうに云ふ）
仙吉　なぜ早い？　先日の君の話によると、先方の兩親は、金錢上の要求まである程度までは受入れるくらゐに乘氣になつてゐるさうだし、龍子さんの氣持も今五六分間會つてゐた間によく分つたのだ。僕は話は略々決定したものだと自信してゐる。

大造　フヽン。（皮肉な笑ひを洩して）君はあまりに人がよ過ぎる。少しじれつたくなつたから云はずともの事を云ふんだが、人並以上に容色（きりやう）のいゝ娘を、嫁（めあ）はすのに、大金をつけてやらうといふのには、何かそこに曰くがなくちやならないと勘付きさうなものだ。
仙吉　曰くがある？（氣に留めないらしく云ふ）
（俊一、ふと咳をして身體を持上げる。仙吉は顧みて、はじめて寢臺の人に氣づいて驚く。）
大造　故鄕から來た客だ。
仙吉　（立上つて）外に特別な話はないんだらう。僕はあちらへ行つてるよ。君も差支へがないのなら直ぐに來たまへ。
（俊一へ挨拶もしないで急いで出て行く。）
（俊一、寢臺から下りて大造に近づく。）
俊一　お前達の話が夢のやうに耳に入つたが、呆れたものぢや。
大造　そんなことに呆れなくつてもよからう。兄さんも隣りの部屋へ行つて、皆んなと一しよにコーヒーでも飮まうぢやないか。
俊一　さつきから前觸ればかりで、わしはまだお茶を一杯饗（よ）ばれて居らん。
大造　さうだつたな。今度は大丈夫御馳走するよ、さあ、

行かう。
俊一　いや、わしはこんな所に愚圖々々しとるよりや、一刻も早く故郷に歸つた方がいゝ。電報も來とることぢやから、直ぐに停車場へ行つて、急行の出るのを待つて乘ることにしよう。
大造　何を感じて慌てるんだい。誰れも兄さんの財布を狙つてりやしないよ。
俊一　わしは、見ること聞くことが胸くそが惡い。
（急いて仕度に取掛る。）
大造　ぢや、東京驛まで見送つて行かう。
俊一　それには及ばん。
大造　何が氣に障つたのだい。
俊一　……巢鴨へも牛込へも暇乞ひをせんで立つから、おまへからよくさう云つといて呉れ。
（手早く袴を着けて鞄を持つて出て行く。）
大造　兎に角自動車で停車場まで見送ることにしよう。
（隨いて出て行く。扉は開けつ放しのまゝになつてゐる。）
（卓上の電話が鳴りつゞける。隣室へ外出を知らせに行つた大造は、廊下でそれを聞きつけて、俊一を廊下に待せて置いて、急いで部屋に入つて、受話器を手にする。）
大造　モシ〱……さうです。いや、お知らせしないで相濟みませんでした。實は據ろない賴まれ事があつて此方へまゐりましたので……さうです。その緣談で、大勢が一しよにまゐつて居ります。ちよつと身體が外せないんですが、明日も此方に逗留いたすやうでしたら、暇を見て伺ひます。……ハア。ぢや失禮します。
（電話を切つて、帽子を被つて、扉を締めて出て行く。）
――幕――

二

前の場の隣りの部屋。室内も略々同樣であるが、寢臺暖爐家具などの配置が相違してゐる。卓上には紅茶が用意されてある。龍子、欽也、仙吉、及び欽也の妻とも子（三十歲前後の丸髷に結つた女）の四人が、それぞれに氣樂な明るい態度で椅子に腰を掛けてゐる。
とも子　龍子さんはわたしが外へ出てゐる間に髮を壞したのね。折角綺麗に結つてゐたのに、なぜ壞したの？
龍子　だつて、園田さんの意地惡があたしの髮を侮辱するんですもの。
とも子　子供見たいなことを云つてゐる。
欽也　さつき僕は隣りの部屋へ、園田の兄たと云ふ人と一しよに入つた時に、龍子さんの髮が滅茶々々に壞れてる

のを見て吃驚したのだよ。

仙吉　園田は時々惡戯をする男ですからね。わたしが結婚に不潔な金錢問題を持出したといふことも、園田の惡戯なんですよ。決してわたしの本心ではありません。

欽也　園田は、園田家の養子になつてゐながら、金のにほひを嗅されるばかりで、ちつとも財產が自由にならないんだからな。……だから何かにつけて金錢を問題にしたがるんだよ。

仙吉　園田はわたしと共謀(ぐる)になつて、龍子さんのお父さんからお金を出させて、そのうちの何割かを御自分の懷へ入れようと企んだのぢやありませんよ。（輕薄に笑つて）その點は誤解なさらないやうに願ひます。

欽也　それはよくわかりました。家へ歸つたら、わたしから龍子さんの兩親にさう傳へませう。

とも子　今度こそ、針で突いたほどの障りもなくつて、日本晴れで事が運ぶやうに、あたし達は淺間樣に願を掛けて來たので御座いますわ。

仙吉　（龍子を見て）先日はじめてお目にかゝつた時に、何だか見たことのある顏たと思つたのですが、わたしは、龍子さんにお目に掛つたことがありますよ、興津の濱の水浴場(みづあびば)で、水浴着(みづぎ)を着けて砂の上に腹匐ひになつてるあなたを見たに違ひないんです。八月初旬でした。

（何氣なくさう云ふと、龍子は極りの惡さうな顏をする。欽也はふと心に打擊を受けた顏をする。）

龍子　あたし、ちつとも存じませんでしたわ。……今年は、二三度海へ入つたきりなんですけど。

欽也　ぢや、あの時、溺死した戶崎の死體を最初に檢死したのは、河津さん、あなたでしたか。園田はあの時、興津に來合せてゐた懇意な醫師を直ぐにお呼びして診て頂いたさうですが、その方はあなたでしたか。……ぢや、戶崎の溺死についちや、あなたがよく御存じの筈ですね。

仙吉　まあ、さうです。しかし、今日は溺死者の話なんか止さうぢやありませんか。そんな話はどなたもおいやでせうから。

とも子　（人のよささうに）でも、あの人の溺死はあたり前の溺死で、別段變つたことはなかったんぢやありませんか。

欽也　それはどうだか分らないね。（と云つて、皮肉に）しかし、興津の海の事が今度の緣談に關聯してるやうに思はれだしたから不思議さ。……河津さんは御存じぢやないでせうが、あの戶崎といふ男は色魔と云つてもいゝやうな男でしたよ。あれは死んでよかつたのです。あいつが何時までも生きてゐたら。いろんな所に迷惑が掛つたかも知れないんでした。

仙吉（冷淡に） さうでしたか。色魔でも聖人でも死體に變りはありませんね。…… 今あなたは、興津の溺死人のことが今度の緣談に關聯してるやうに仰有つたが、關聯してゐるとすれば、それは他所ながら龍子さんにお目に掛つたことなんですよ。それが緣の糸口になつたんですね。

とも子（人のよささうに） 緣といふものは不思議なもので御座いますわね。

仙吉（腕時計を見て） わたしはこれでお暇いたしませう。……それで、今度わたしに御用がおありになる時には、園田君を經ないで、あなたから直接に、わたしにお話し下さるやうに願つて置きませう。園田君は聰明な男だが、時々、云はずともいゝ餘計なことを云つていけませんよ。

欽也 承知しました。

仙吉 明日も此方に御滯在のやうだつたら、どこか、もつと落着いた所で御一しよに食事でもして、ゆつくりお話を承りませう？

（立上つて挨拶して出て行く。欽也、義務として見送つて行く。）

とも子 河津さんは御立派な方ね。心掛けも、園田さんに聞いたよりも、綺麗で優しさうぢやないの？

龍子 さうね。……でも、姉さん。あたし園田さんが怖いのよ。何か魂膽がありさうで。

とも子 魂膽と云つてどんな事？…… 園田さんはなぜ、あなたに髮を壞させたりなんかしたんでせう。河津さんにお會ひするために、わざ／＼美容院で氣をつけて結つて貰つたのに、……あなたも、園田さんがどう云つたからつて、なぜ、そんな馬鹿な眞似をしたの。

龍子 あたし自棄になつて、あの方には會はないで、一人で靜岡へ歸らうと思つたのよ。

とも子 呆れた龍子さんね。あなたがそんな無茶なことをしたら、わたし達が伯父さんに申譯のないことになるぢやないの。

龍子（懷つこさうに） 姉さんや欽也さんはわたしを信じて下さるわね。

とも子 改まつて何を云ふんです？……あなただつてわたしだつて、ちつとも後目たいところのない女ぢやないの。

龍子 姉さんは何時もさう思つて威張つてゐられるから氣樂ね。

とも子 わたしは威張つたことなんか一度だつてありやしないよ。可笑な龍子さん。

龍子 あたしは、何時誰れかに脅かされやしないかと思つていつもビク／＼してるのよ。

とも子 あなたを脅かす人なんか、何處にもゐないぢやあ

りませんか。氣の弱い龍子さん。

龍子　ぢや、姉さんは、假りに、誰れかしら、今年の夏の與津の溺死は園田さんの所爲だと聞いても驚かなくつて？　死んだ戸崎の下手人は園田に違ひないといふ人があつても驚かなくつて？

とも子　そんな戯談に驚くものですか。

龍子　でも、世の中には根も葉もないことを云ふ人があるんですからね。

（そこへ欽也が不機嫌な顏して入つて來る。）

とも子　（微笑して夫を迎へて）今ね、龍子さんが恐ろしいことを云つたんですよ。今年の夏の與津の溺死は園田さんの……。

欽也　（慌てゝ、妻の口を壓へるやうな樣をして、遮つて）止せ、そんな不吉な話は……。

とも子　（氣がついて）本當に不吉ですわね。そんな話止しませう。

欽也　おれもよつぽど迂濶だつたよ。何にも知らないで隨いて來たんだから。……あの河津といふ男にしても案外の曲者かも知れないね。最初は第一の條件にしてゐた金を、今になつて入らんと云出したのも變たが、あゝ綺麗な口を利いて、うまく緣を結んどいて、後でもつと大きく吹掛けるつもりかも知れないね。「白浪五人男」の日本駄右衞門見たいな、それこそ園田のうは手を行く惡黨かも知れない。

とも子　あなたこそ不吉なことを云つていらつしやる。

龍子　欽也さんの仰有ることは、ちつとも不吉なことぢやない。わたしには疾つくからそんな氣がしてゐたんです。あたしは、園田さんと河津さんとの間に取引されてゐた商品見たいに思はれますのよ。

欽也　（慌てゝ龍子の口を壓へるやうにして）そのあとは云はん方がいゝよ。明日にも花嫁さんになる女が、そんな過激なことを云つちやいけないよ。あなたは何も知らない顏して澄してゐればいゝんだ。おれが引受けた。

とも子　御大層なことを云つていらつしやるのね。……紅茶でも入れかへて貰ひませうよ。

（さう云つてベルを押さうとすると、大造が忙しげに入つて來る。）

大造　河津はもう歸つたのか。（あたりを見廻す）

欽也　君は馬鹿に早かつたね。兄さんを見送つて來たのか。

大造　發車時間にはまだ餘程間があつたから、停車場で別れて來た。河津がそんなに早く歸るんだつたら、見送りになんか行くんぢやなかつたのに。

欽也　（昂奮した顏して）河津君はまた君に會つちや面倒だと思つて、早く出て行つたのかも知れないよ。……そ

こで、僕は短刀直入に云つてしまふがね。今度の縁談には、君にもいろ〱お骨折を願つたのだが、今日限り手をひいて呉れたまへ。龍子の兩親に代つて、僕が君に強要するんだよ。

大造　（素直に）爲方がない。

欽也　君が二人を引合せて呉れたのは有難いが、當人同士に異存がないとすると、君の役目は濟んだやうなものだ。君の手を經ないでも、話は此方で運ぶやうにしよう。

大造　それがいゝだらう。（苦笑して）龍子さんが勝つたんだね。

欽也　誰れに？

大造　いや誰れに勝つても勝つたのは結構さ。……僕なんかは、餘計なませつ返し屋にされてしまつた譯だね。ハ、、、。……死んだ人間のしたことや、僕の頭の中にあることは、この世の中で何處へ行つても通用されないものにされてしまつた譯だね。……明日、河津が來たら、皆んなで——僕を除いたみんなで——改めて祝盃を擧げたまへ。僕はこれでお暇して、獨りで家へ歸ることにしよう。……いや、今から出掛けると、兄貴の汽車に一しよに乗れるかも知れないな。……左樣なら。

（大造は、三人を平等に見て會釋して出て行く。龍子は、心でその足跡を追つてゐるやうである。）

とも子　（夫に向つて）あなたは、隨分ひどいことを仰有るのね。園田さんを怒らせてもいゝんですか。わたしが行つてあやまつて來ませうか。

欽也　なに、いゝよ。怒るなら怒らせとくさ。（龍子に向つて）龍子さんには、僕があのくらゐなことを、園田に云つてもいゝ譯があると思つてるだらうね。

龍子　えゝ。（氣のない返事）

欽也　あなたは勝利者と云はれてる女ぢやないか。もつと元氣よく威張つてゐなきや駄目だよ。河津さんとの縁談についても、ビクともしなくていゝんだからね。龍子さんの方でいやでなければ。

龍子　よく云つて下すつたわ。有難う。あたしこれから元氣よく威張つてゐてよ。……姉さんもしつかりなさいよ。

（龍子は突如として立上つて、とも子の手を取つて立上らせる。とも子ヨロ〱しながら立上つて。）

とも子　どうしたのさ。わたし轉んぢまふぢやないの。

（龍子面白さうに笑ふ。）

（ふと、卓上の電話が鳴る。龍子が受話器を執る。）

龍子　モシ〱。……あたし、龍子です。……さうですか。……承知しました。……こちらでは、姉さんとあたしとでダンスでもはじめようとしてるところなの。……いらつしやらないの。……左樣なら。奥

樣によろしく。

（電話が切れる。）

欽也　誰れの電話だ？

龍子　園田さん。これから隣の部屋を出て行くところですつて。

とも子　わたし、ちよつと行つて樣子を見て來るわ。

欽也　止せ〳〵。

とも子　だつて。（出て行く）

欽也　（突立つてゐる龍子に向つて）生きてる者が死んだ奴に負けちやたまらないよ。僕は人間の死を喜ぶなんていやな心を起したのははじめてだが、今はそんな氣持がしてゐるのだ。龍子さんはさう思はないか。

（龍子直ぐには答へないでゐる。）

欽也　死んだ奴に負けてなるもんぢやない。

龍子　さうですとも。

（龍子力強く云ふ。欽也微笑す。）

――幕――

老醜（四幕）

場　所
相州のある村
時　節
十月頃
人　物
吉　兵　衞（六十歳くらゐ）
妻　おしも（同上）
長男　辰　松（三十くらゐ）
銀　太　郎（四十くらゐ）
ゆ　み　子（二十餘歳）
村の婆さん
村の若い者

一

資産の豐からしいある農家の庭。庭と云つても、そこは穀類の干場に當てられてゐるので、草花などはなくつて、日本の秋の田舍といへば、直ぐに連想されるやうな俳句味の風趣は、何處にも見られないのである。六十歳くらゐの老主人吉兵衞が、庭先にしやがんで、鷄の毛をむしつてゐる。

中年の農夫銀太郎がそこへ入つて來る。

銀太郎　旦那、殺生をやつてゐなさるね。

吉兵衞　こいつは玉子を生まねえ穀潰しだから、思切つて絞めちやつたよ。こんな肉は堅さうだから、忰どもに御馳走して、おれはソップの汁でも啜ることにしよう。人間も齒を惡くしちや駄目だせ。

銀太郎　それでも、旦那はいつもお大丈夫だから結構でさあ。

吉兵衞　なあに、見かけ倒しだよ。おれは今まで病氣は一度もしたことのねえ男だつたがこの頃はどうもいけねえ。何處が惡いちうことはねえだけんど、心が弱つて來たゞ。

銀太郎　そりや、いくら頑丈な人でも、五十を越しちや、若い時分のやうにはいきますまい。たまには湯治にでも行きなすつたらどうだあ。この頃は熱海や湯河原へも汽車が通つて、えらく便利になつたゞから。

吉兵衞　おれもさう思はんでもねえが……湯治といふやつも退屈で、どうもおれの性に合はねえたよ。

銀太郎　さう云へば、旦那は松田の競馬に行つてなすつた

やうだが、あの後はどこへも行きなさらんのですか。

（吉兵衞は、邪慳に鷄の毛をむしつてゐた手を留めて、相手を見上げて。）

吉兵衞　小田原でやつた時にや、おれも三日ぶつ通しで行つたよ。十兩ばかりの損ですんだゝから安い道樂だ。もう競馬の呼吸はちやんと呑込んだから、この次から損はしねえつもりだ。お前はどうだな。

銀太郎　わしは今日大船へ行つて馬鹿な目に會ひました。懷中をスッカリはたいちやつて歸りの汽車賃を連れの男に借りて歸つたんでさあ。あんな出鱈目な競馬にぶつ付かつちや。馬の明るいものは却つて馬鹿な目を見るんですが。

吉兵衞　（冷笑して）お前なぞ馬に明るいなんて、大きな口を利く柄ぢやねえ。田舍競馬の小博打に夢中になつて、身代をすらねえやうに氣をつけろよ。

銀太郎　ハヽヽ、さう見くびりなさるなよ。これでも、松田ぢや、百兩の餘もせしめて、懷の中は懷爐を入れたやうに温くなつたんですぜ。（調子に乘つてさう云つたが、ふと氣づいたやうに）だけど、小田原と大船とで思惑違ひをやつて、折角取つたものをスッカリ吐出してしまひましたよ。

吉兵衞　それ見ろよ。百姓がこの忙しい時分に、野良を放つちやらかして、旅費を使つて賭事に日を暮すと云ふことがあるものか。

銀太郎　いや、わしだつて競馬なんぞに凝つてやしませんよ。此間うちから一つ大計畫を立てゝ居ります。それについて旦那のお力を借らにやならないと思ひまして。

吉兵衞　そいつは御免だ。（頭を振つて、全然取合はない風をして）おれはお前達と共謀になつて仕事をしようたあ思はねえ。やりたい仕事がありや一人でやるだよ。お前もいつまでも意氣地がねえぢやないか。

銀太郎　自分に意氣地のないのは、十年も前から知つてゐますよ。東京に三年もゐた間にわれとわが身が意氣地のないことだけを學問して來たんですからね。……だけどな、あんたがわしの企んでることに、一錢一厘たりとも、オイソレと資本を融通して下さらないくらゐなことは、わし、百も千も承知してゐますよ。わしは親爺の殘して呉れた田地をスッカリ賣飛ばして、そいつを資本に、自分の思ひついた仕事をやつて見るべいかと思つてゐますだ。

吉兵衞　フヽン、いくらも殘してやしねえくせに。……それで、その田地をおれに買つて呉れと云ふんだな。

銀太郎　お察しの通りでさあ。今の時節だから、決して法外な價で引取つて頂かうとは思つてやしません。

吉兵衞　まあ御免にしよう。高くも賺くも、人の田地などに手を出す氣はもうねえだよ。自分の物でも賣れるものなら賣つちまひたいぐれえだ。
銀太郎　へえ、旦那がそんな氣におなんなすつたのか。ほんとですかい。
吉兵衞　おれの心變りをおめえに話したつて詰らねえな。
（彼れは、あらまし毛をむしり取つた鷄を提げて立上つて、相手の方へは目もやらないで、橫手から入つて行く。銀太郎は「チエッ」と舌打ちして、庭をまごまごして、やがて、緣側に腰を掛けて、袂から煙草を一本出して吸つてゐると、そこへ、奧から年齡三十ばかりの若主人の辰松が出て來る。）
辰松　話聲がどうも銀公らしいと思はれた。（快活に云つて側へ來て）君は親爺に何かねだり事があつて來たのかい。
銀太郎　まあさうですがね。今日は旦那はわしの話に唾液も引掛けて下さらない。
辰松　親爺に話す前におれに云へばいゝのに。
銀太郎　へゝえ。（苦笑する態を見せる）
辰松　ハ、、、。相變らずおれを侮どつてゐるね。此間からおれは、おれに賴み事をした最初の奴の賴みを、生命に懸けても聞屆けてやらうと、大決心をしてゐたのだよ。

銀太郎　さうでしたか。そいつはしまつた。……今から改めてあんたにお願ひしちやいけませんかな。
辰松　おれを信用してやしないくせに。
銀太郎　決してさう云ふ譯ぢやありません。（眞面目に云つて）それはさうとあんたは、何時までも此方に尻を据ゑてゐなさるんですか。よく退屈をなさらないでぢつとしてゐらつしやるものだ。
辰松　銀公にはそれが不思議か。君が東京でしくじつて村へ歸つて來て、齷齪してるものだから、おれが半歲もこんな田舍に籠つてゐるのを、さぞ退屈だらうと、身に引くらべてちよつと思遣りを出したのだね。おれは君のやうに、暇潰しの野良仕事も出來ないし、賭博も打てないし、成程、傍から見たら所在ない日を送つてるやうに見えるだらうさ。だけど、銀公、他人にうつかり同情なぞするものぢやないぜ。おれにはおれ相應な日の送り方があるんだぜ。
銀太郎　それはどういふことでせう。離れ座敷へすつ込んで學問してゐなさるんですか。
辰松　まあ、さうとでも思つてゐるさ。
銀太郎　學問もよろしいで御座んせうが、家にばかりゐなすつちや、身體のためによかありませんぜ。どうです？競馬でも見にお出でなすつちや。わしがお伴しませう。

辰松　競馬だ？　長い面をした馬の駈けつくらを見てどこが面白いんだ？　どちらが勝つたつていゝぢやないか。

銀太郎　さう云つちや話にならねえ。

辰松　縁も由緒もない長面獣の競爭を悦しがるやうな子供ぐさい眞似は止して、自分で思つてることを遣り通して、自分が勝つたらいゝだらう。

銀太郎　馬の駈けつくらを、口を開いて見てやしません。財布をはたいても、自分の見込んだ馬に賭けてゐますよ。

辰松　はした金の小賭博が自慢にやなるまい。おれの親爺までも、この頃は競馬通ひをやりだして、馬の通を話しだしたから可笑しくてならないよ。

銀太郎　小賭博でも大賭博でもやつて見ない人には、どんなに面白いか分りつこはないな。

辰松　賭事がそんなに面白いのか。おれも可成りいろ〳〵な事をやつて見たが、まだ金錢を賭けた勝負事はやつたことがないよ。一度試しにやつて見ようか。君の手引きで。

銀太郎　へゝゝ。あんた方はそんな品の惡いことは、まあお止しになつたらいゝでせう。

辰松　親爺の脛つ嚙りだと思つておれを見くびつてるね。ところが、この頃は剛情だつた親爺も無常を感じて、おれに世を譲らうとしてゐるんだよ。

銀太郎　それは眞實ですかい。

辰松　もう少し經つたら分ることだ。兎に角今からせいぜいおれの御機嫌を取つて置けよ。君の小賭博の資本くらゐは貸してやるよ。

（彼れはさう言放つて、ツカ〳〵と奥へ入つて行く。銀太郎は詰らなさうに縁側を離れ出て行きかけたが、そこへ、二十を可成り過ぎてゐるらしいゆみ子、日本髷で、都會の流行に外れた服装で、平凡な、むしろ痴鈍な顔付をして入つて來る。）

ゆみ子　長沼さんと仰有るお家は此方で御座いませうか。（銀太郎に挨拶して訊ねる）

銀太郎　えゝさうです。（訝しげに女を見詰めて）あなたはこのお家の誰れを訪ねて來なすつた？

ゆみ子　辰松さんと仰有る方は、まだ此方にいらつしやるんでせうか。

銀太郎　ゐますとも。……あなたは東京から來なすつたんだね。

ゆみ子　えゝ。

銀太郎　わたくしが若旦那に取次いで上げませうか。

ゆみ子　どうぞ、さう仰有つて下さいまし。葺手町からまゐりましたつて。

銀太郎　葺手町？　さう云つたら分るんですね。

（彼れは忿を押して、庭を横切つて向うへ入つて行く。ゆみ子はそつと家の樣子を覗き見するやうな風をして、片隅にしやがんでゐる。そこへ、辰松の母おしもが、粗末な勞働服を着け、藁草履を穿き、さつま芋の入つた籠を背負つて入つて來て、うさん臭い目でゆみ子を見る。ゆみ子が氣おくれした態度で挨拶をすると。）

おしも　あなたは何處から來なすつた？（尖つた聲で訊ねる。）

ゆみ子　東京からまゐりました。

おしも　東京から？　そんなら辰松を訪ねて來なすつたんだね。（稍々顏を和らげて）さうでしたか。（籠をおろして、慌てた樣子をして）それなら、わたしが秘密であなたに話したいことがあるだから、ちよつと此方へ來て下せいまし。……さあ早く。誰にも見つからないうちに。

（躊躇するゆみ子を急立てゝ出て行く。吉兵衛は何かか搜すやうな目をして奥から出て來て、庭へ下りると、上手から、辰松と銀太郎とが、何か小聲で話しながら出て來て吉兵衛を見て當惑した顏をする。）

吉兵衛　今誰れか女の聲がしたやうだつたが、（と獨言のやうに云つて、籠を見つけて）おしもが歸つて來たのかい。

銀太郎　主婦さんは芋を掘りに行つてゐなすつたんですか。

吉兵衛　お前は今まで此處にゐたのだらう。誰れか來なかつたか。

銀太郎　知りません。

吉兵衛　ハテナ。……おれが鳥の身をたゝいてる間に、何だか、女の聲らしいものが聞えたのだ。

銀太郎　旦那は齒は惡くつても耳はまだお丈夫なんだね。おや、旦那の近くで、うつかり秘密話は出來ませんね。

吉兵衛　どうも不思議だ。おれは身體の心が弱つて來ると、耳だけが感が強くなるんで、時々は飛んでもない聲がおれの耳に入つたりするんだ。

銀太郎　（微笑しながら）わたくしの耳へは、主婦さんの聲も聞えませんでしたよ。旦那のお耳にはどんな女の聲が聞えました？　いゝ女の聲でしたか。

吉兵衛　何を。將もねえ。（にがい顏して）銀公はもう用事はねえだらう。今日はこれで歸つて出直して來いよ。

銀太郎　でも、わたくしはまだ用事を濟まさないんですが。

吉兵衛　さつきの話はいくら云つても駄目だ。おれがいやだと云つたらいやだ。

銀太郎　旦那の御機嫌の惡い時にぶつつかつちやかなはない。おや、今日はこれで御免蒙りませうよ。

（銀太郎は辰松の方へ氣遣はしげな目を送つて出て行く。）

吉兵衞　銀公はおめえに何を話した？　あんな男に鬪り合ひをつけられちやいけねえ。お前なぞいくら分つた顏してゐても、まだ／＼世の中の修業は足りねえよ。油斷しとるとひどい目に會はされるぜ。

辰松　銀公はなにも云やあしませんよ。

吉兵衞　（ふと氣づいたやうに）お前何を考へとる？

辰松　何も考へてやしません。

吉兵衞　お前がそんな顏をしとる時には、ろくなことを考へやしない。……あゝ、さうだ。鳥の肉は爼の上にのつけたまゝだ。泥棒猫に取られるかも知れねえから、行つて見て吳れ。

辰松　お父さんは外に用事が出來たんですか。

吉兵衞　何でもいゝから、早く行つて見て吳れ。そして、火でも燃しといてくれ。

辰松　僕はまだ腹が減らないから、午餐の仕度はゆつくりでよろしい。

吉兵衞　愚圖々々云はないで、早く見ろよ。お前に喰はせるために、鳥を潰したんぢやないか。

辰松　あんな脂つ氣のない鳥を食つたつて爲樣がないな。泥棒猫が狙つてりや食はしてやつた方がいゝくらゐなものだ。

（辰松不承々々に、庭から上へ上つて、顧み勝ちに奥へ入つて行く。吉兵衞は不安な樣子をして、外へ行きかけると、おしもが入つて來る。）

おしも　お前さん何してるだね。

吉兵衞　お前こそ何處へ行つたゞ。こんな所へ籠を抛放（おつぽり）散らかしといて。

おしも　……長谷甚の婆さまに一言云ひたいことがあつで、思出して直ぐに行つて來たゞ。

吉兵衞　ほんとか。

おしも　何を氣にしてるだな。お前さん今日は變だな。

吉兵衞　何でもねえだ。（安心したやうに云つて）やつぱりおれの空耳か。

おしも　辰松は家にゐるんだらうな。

吉兵衞　ゐるとも。今日はおれが午餐にうまい物を拵（こさ）えといたよ。

おしも　わしも早く田圃から歸つてよかつた。もうちよつと遲かつたらいやな思ひをせざならなかつたのに。（獨言のやうに云つて、籠を持つて行きかける）

吉兵衞　いやな思ひをせざならねえ？　ぢや、お前、誰れかに會つたのだな。まあ待て（籠に手を掛けておしもを留めて）ぢやおれの思つた通り、さつき此處へ誰れか來

てゐたのだな。どうも女の瞞かしたと思つた。……なぜ、おれに隱すだ。おれの事はおめえ達に始末して貰はねえだ。（ふときつい聲を出す）

おしも　可笑なこと云ひなさる。（相手の顏を見てゐるうちに、自分も不快な表情をして）ぢや、何だな。お前さんは、小田原のあの女が、わざ〳〵お前を呼出しに此處までやつて來たと思つてるんだね。まだそんな馬鹿げたことを考へてるのかい。自分の年齢を數へて見なさるがいゝだ。自分のその顏を水鏡にでも映して見なさるがいいだ。

吉兵衛　人の顏よりや自分の顏を見ろよ。

おしも　わしの顏は、十六年働いて生きて來た顏だよ。馬鹿にして貰ひますまいよ。お前さん、人で仕上げた身代ぢやねえだから。

吉兵衛　何を。身代つくるに、てめいがいくらの足しになつた？　大きな口を利くでねえ。（少し萎れたやうに）おら、どうでもいゝだ。たとへ百萬兩の財産があつたつて、おらもうどうでもいゝだ。

おしも　呆れた人間だ。あの小田原の圑子見たいな不祿な女に愛想を盡かされたつて、自分の身代にまで愛想を盡かす法があるだか。……二十や三十の若いものぢやあるまいし。人が聞いたら正氣の沙汰とは思やすまいよ。

吉兵衛　世間が何と云はうと、おれの知つたこつちやねえ……お前なんぞがいくら惡對ついても、おれには何とも感じねえだ。田畑一切賣りはたいて大盡遊びしたつて、おら、もう面白かねえだ。

おしも　面白からうとなからうと、そんな無茶なことされて、女房子が路頭に迷はされて溜るものぢやない。お前さんが、年甲斐もない眞似をしたいのなら、譲るものは辰松にでも譲つて、自分一人で何處へでも出て行きなさるがいゝ。

吉兵衛　だから、明日にでも身代を辰松にそつくり譲つてやると云つてるぢやねえか。おら、金使つて遊んだつて面白かねえだ。競馬の小賭博で思惑が當つて儲けたつて、その金何に使ふだかと思ふと、競馬に行く張合もねえだよ。

おしも　何と云ふこつた。人に話したくつても、氣はづかしくつて話せることぢやない。（歎息して）實はな。事が面倒になつちやいけないと思つて、わし、今まで秘密にしてゐたのだけんど、さつき、東京の女が辰松をたづねて來たのだよ。

吉兵衛　あの女が來たのか。若い聲がしてゐると、夢のやうにおらの耳へ聞えたのだが、辰松をたづねて來た女の聲だつたのか。辰松は若いからな。

おしも　手切金まで出して緣を切つた女が呼出しにくるつて、法はねえぢやないかね。

吉兵衞　それで、お前の一存で追歸したのか。

おしも　あとで沙汰をすると云つて、長谷茜の家へ休ませといたよ。汽車賃くらゐ包んでやつて、おとなしく歸したいと、わし思つてるだ。

吉兵衞　そんなこつちや歸るめえよ。

おしも　お前さんに話したら、一圖に怒つて、女の子を打擲もしかねまいと思つて默つてゐたのだけど、お前さん怒らないのかい。

吉兵衞　そりや、怒らうと企んでも怒れねえ時もあるし、怒るまいと思つてもひとりでに怒る氣になることもあるんだ。その女には、お前もおれも、まだ會つたことなかつたんだから、今日この土地へ來とるのなら、おら、早速會つて見たいな。どんな女だ。

おしも　顏付はおとなしさうな女だけんどな。……お前さんが會ふにしても、女の來てることは、辰松に知らせねえ方がいゝだらうよ。

吉兵衞　辰松はもう知つてゐる。さつき銀太郎が來てゐたんだが、彼奴が女を見つけて、辰松に知らせたらしいんだ。隱したつて駄目なこんだ。

おしも　それは困つたことになつた。

吉兵衞　兎に角おれが會つてやるべい。

おしも　まあ待ちなよ。此方の量見をよく極めてからでなきやいけない。東京女に迂濶なことを云はうものなら、逆捻ぢを喰はされるだよ。

（辰松が奥から出て來る。）

辰松　火は熾しましたよ。

吉兵衞　さうか。おや、兎に角飯にすべい。

（吉兵衞が二人を誘つて、家の中へ入りかけるところへ、長谷茜の婆さんが入つて來て誰れに渡さうかと惑ひながら。）

婆さん　あの女の方がこれをお屆けして呉れと仰有いました。

（と云つて手紙を出すと、吉兵衞は引たくるやうに手紙を取る。辰松やおしもは緊張した顏してその方を見る。）

吉兵衞　（封を切つて）「お宅の御樣子を外からなりとも拜見いたしたいと思ひましておうかゞひいたしました。只今お目に掛るのも皆樣の御迷惑と存じまして、今日はこれでお暇いたします。近所の人にじろ／＼顏を見られますので、氣樂に休んでもゐられません。いろ／＼お話し申したいことが御座いますが、またの御緣をお待ちして居ります。お身お大事に遊ばしませ。」（考へ／＼讀んで）

その女はもう歸つたのか。

婆さん　この手紙をお渡しなさると、直にお歸りになりました。お伜が大井戸の側に待つてゐました。

吉兵衞　折角來たものを、おら、目も見ねえで惜いことしたゞ。（も一度手紙に目をつけて、目の内で讀みかける）

おしも　お婆あにも御厄介を掛けたゞね。成べくたら、人に云はないやうにしてくんなさい。

婆さん　畏りました。ぢや、お手紙はたしかにお屆けいたしましたから、これで御免蒙りましよう。（籠の芋に目をつけて）もうお芋を掘りなさつたんで御座いますか。

（誰れも返事をしない。婆さんは鄭重に挨拶して出て行く。）

おしも　おとなしく歸つて吳れてよかつたけんどな。……この手紙誰れに宛てゝ來たゞか。

吉兵衞　名宛てはおれに宛てたんぢやねえ。

おしも　極つてらあね。わしが會つてようく話しといたゞから。

吉兵衞　お前の名も書いてねえだ。おめえが會つて話したつてなにがに役に立つものか。

（さつきから不快な感じに襲はれてゐた辰松は、ふと、父親の持つてゐる手紙を、奪取るやうに取つて。）

辰松　こんな手紙は破つちまひませう。（と云つて、やたらに引破いて、手の平で丸めて庭へ拋出す）

（吉兵衞の目は、丸められた反古の方へ惹かれる。）

おしも　手紙が來ても何が來ても、お前はもうあんな女にかゝり合ひをつけるぢやないよ。

辰松　ハ、、、。（やうやく氣輕になつたやうな顏して笑つて）僕は此方へ歸つてから、あんな女に端書一本やつた覺えはありませんよ。もうやつて來りやしないでせうけれど、あんな奴は、見付け次第遠慮しないで追拂つて下さい。

おしも　でも、あの女はわざ〱東京から來たといふのに、家の中を覗いたゞけで、直ぐに歸つて行くのは、わし、どうも腑に落ちねえだ。

辰松　そんたことどうでもいゝぢやありませんか。

（その女の話を、いつまでも自分の前でされるのを嫌やがつた辰松は、親のくどいのを咎めるやうに云つて、奥へ入つて行く。）

おしも　（吉兵衞を見て）ぼんやり何を見てゐるだね。あんな女が飛込んで來たゝめに、いつかのやうに、えらい親子喧嘩がおつ始じまりやしないかと、わし、どれほど心配したことだか。

兵衞お　おら、辰松ぐれえな若い歲に、あんな手紙一本拋込まれたこともねえだよ。おら、何のために齷齪して、

金残すことばかり考へてゐたゞ。馬鹿なおれだ。歯のいいうちに食べたい物も食べないで、ちつとべい田地田畝殖やしたつて、それが何になるだ。おら、さつき鳥の肉叩いてゐるうち、そんなこと思つて俎の上へ涙落したゞよ。……庖丁を下へ置いて涙拭いてると、若い女の子の聲が聞えたから、氣の迷ひだと思ひながらも、聲に引張られて庭へ下りて見ると、それはおれを呼びに來た聲ぢやねえ。あたりめえだ。おら、三十年前のおれぢやねえ。

おしも　何を世迷事並べるだ。（ふと憤りに燃えて）小田原の梅毒(かさ)つかき女が戀しいのなら今から追掛けて行くがいゝや。六十にもなつて、しよつちうそんな汚らしいことを考へてる人間と、わし一つ家にゐられねえだ。一しよに御飯食べたり、一しよに寝起きしちやゐられねえだ。……さあ、今から出て行つて呉んな。……あゝ、汚ない〳〵。

（おしもはさう云ひながら、興奮して吉兵衛の胸倉を取つて小突きまはす。）

吉兵衛　こら、汚ねえものになぜ觸るた。（おしもの顔を見据ゑて）てめえのやうな女が、何十年もおらの身體にダニのやうに喰付いてゐたゝめに、おら、一生面白い目をしそこねて、白髪頭の皺くちや爺いになつてしまつた。

おしも　何を云やあがる。この恥知らずの淫亂爺い。

（ふと吉兵衛に突飛ばされたおしもは、傍にあつた籠の芋を掴んでは、夫に向つて投付ける。吉兵衛は妻の狂亂を見据ゑたまゝ、抵抗しないでゐたが、投げられた芋の一つは、そこへ、奥から出て來た辰松の足のほとりに落ちる。辰松は呆氣に取られてゐる。）

―― 幕 ――

二

その夜おそく。

母屋と離れた部屋に辰松は眠つてゐる。窓近い空地の小暗い所へ、銀太郎とゆみ子とが現はれる。

銀太郎　若旦那は此處にいらつしやるんです。

ゆみ子　何だかお淋しさうなところですわね。いつもお一人でこちらにいらつしやるんですか。

銀太郎　さうです。妹さんは昨年お嫁に行きなすつたし、弟さんは東京の學校へ入つてゐなさるんです。それで、この頃は、母屋の方にはお老人御夫婦が住まつてゐて、此處には、若旦那お一人でいらつしやるんです。弟さんが夏休みが濟んで東京へ出なすつてからは、若旦那お一人で家にばつかりすつ込んでゐなさるんだが、退屈しねえでよく辛棒してゐられるこんたと、わたしは感心してゐるんですよ。……わたしが聲を掛けて見ませうか。

ゆみ子　えゝ。どうぞ。

（銀太郎は窓際へ寄つて、「若旦那々々々」と二三度小聲で呼掛ける。部屋の中の辰松はふと寢床から身を起して窓の方を見やつたが返事をしない。）

銀太郎　よく眠つていらつしやるやうですね。……おや、わたしが彼方へ廻つて起しませう。

（銀太郎は奥へ入る。ゆみ子は淋しさうにして窓際にしやがむ。）

（やがて、辰松は起上つて「誰れだい。そこは引張つたら開くんだよ」と云つて、戸口へ寄つて行く。）

（戸が開いて銀太郎が入つて來る。）

辰松　銀公だつたのか。今時分何をしに來たのだ。

銀太郎　戸口に鍵もかけず、心張棒もかはないのは、不用心ですね。

辰松　いや、この頃は泥棒でも化物でも入つて來れゝばいいと思ふことがあるんだよ。しかし、君がこんなに遲くやつて來たのは意外だ。何か事業をはじめるんださうだが、その話でも聞かせて貰はうか。

銀太郎　自分の用事でお伺ひしたんぢやありません。（聲を潜めて）晝間の女の方を御案内して來ました。

辰松　（當惑したらしく）　君もおせつかいだね。晝間、あの事はうまく片付いてゐたのに。全體君は何處からあの女を連れて來たのだ。

銀太郎　あの方もわざ〳〵東京から訪ねて來なすつたんだから、わたしはお氣の毒に思つて、大井戸の側に待つてゐて、今夜此方へ御案内をする約束をしたんですよ。……しかし、若旦那の御迷惑になるのなら、わたしがよく譯を云つて、あの方をお返ししませう。

辰松　だつて、こんな夜中に追返す譯には行かないだらう。

銀太郎　わたしの家に泊めて上げます。野宿させやしません。

辰松　まあ、連れて來て呉れ。來てるのなら爲方がないよ。

銀太郎　ぢや、お連れ申してもよろしいんですね。……わたしはこれでお暇しませう。

（銀太郎は出て行つて、再びゆみ子の側へ寄つて、部屋の入口を敎へて出て行く。）

（その間に、辰松は夜具を一方へ片付ける。態度が少しおど〳〵してゐる。）

（ゆみ子は奥へ入つて行つて、部屋の入口からソツと顏を出す。）

ゆみ子　御免なさい。

辰松　こゝでお前に會ふ義務はないんだがなあ。

ゆみ子　この部屋へ入つちやいけないの？　こゝでいけなければ、何處へでも行きますわ。……山の上へでも、森

の中へでも。
辰松　夜中に、だし拔けにやつて來るなんて、何かゞお前に化けて來たやうなものだね。
ゆみ子　あなたこそどうかしていらつしやるわ。御迷惑になるのなら、今日はお目に掛らないで歸らうと思つてましたら、さつきの方がわたしを呼留めて、あなたがわたしに會ひたがつていらつしやるから待つてゐろと云つたのですよ。
辰松　それはあの男の獨斷だよ。……しかし、今更そんなことを云つたつて爲方がない。兎に角こつちへお入りよ。
ゆみ子　此方は淋しい暗いところなのね。こんなところによくお一人でぢつとしてゐらつしやれるわね。わたし、あの方に連れられて此處まで來る間に、隨分淋しい怖い思ひをしましたのよ。
（彼女が部屋へ入つて座に就くと、辰松は頭を出して入口の外を見やつてから戸を鎖す。）
（座に就いてはじめて女の顏をよく見る。そして、何か云はうとして、適當な言葉を見つけかねてゐる有樣である。）
ゆみ子　あなたはあの時分から見ると、却つて痩せていらつしやるやうぢやないの。
辰松　そんなことがあるもんか。空氣のいゝ田舍でうまい物を食つてゐるのだ。痩せる譯がないよ。……それよりも、お前は何をもくろんで僕の家へ來たのだ。池の中へ石をぶち込んだやうに、僕の家を騷がせに來たのかい。
ゆみ子　わたしの來たことがそれほどあなたの御迷惑になつたんでせうか。わたし、湯淺さんなぞが間に立つて、どんな口をお利きになつたか、氣遣ひで爲樣がたくなつたから直かに此方の御兩親にお目に掛つて、自分のお腹の中のことを申上げようと思ひましたの。手紙では間違ひが出來るし、わたしには思ふやうに字が書けないんですもの。
辰松　僕の迷惑よりも、お前のぶち込んだ小石のために、僕の家には一騷ぎが起つたのだよ。
ゆみ子　晝間あなたのお母さんにも、申上げて置いたのにどうしたんでせう。わたしから一伍一什を御兩親に申上げて、御得心が行つたら、直ぐにお暇しますと申上げといたのにどうしたんでせう。田舍の人は疑ひ深いのね。わたしにはなんにも魂膽がありやしないのに。
辰松　半年經つた今になつての申譯も變だが、まあそんなことよりも、お前の來たことが變な結果になつたのだよ。お前の豫想しない結果なんだ。僕もそのために今夜は非常に幽鬱になつてゐる。今朝までの僕はこんなに幽鬱な人間ぢやなかつたんだよ。お前と金錢づくで緣を切つて

田舍にすつ込んでるから、悲觀して身體が痩せて幽鬱な顏してゐると當推量してると、それは大間違ひだよ。

ゆみ子　わたしのお訪ねしたことが變な結果になつたんですつて、わたしに分るやうにその譯をよく聞かせて下さいな。

辰松　その譯を自分の口で喋舌るのは御免蒙りたいんだ。その事は僕の頭の中から追拂つてしまはうと思つてるんだから。

ゆみ子　でも、わたし何だか氣掛りだわ。

辰松　お前が聞いたつて何の役にも立たないことなんだよ。……それよりも、お前は今夜はこの僕の部屋へ泊るより爲方がないんだね。お前が眞實に東京からやつて來たゆみ子といふ女なら、山の中や森の中に野宿する譯には行かないだらうし。

ゆみ子　あなたがお前には用はない。一言も口を利きたくないと仰有れば、直ぐにもお暇してよ。都合によつたら、さつきの方の家に泊めて貰ふやうに約束がしてあるの。

辰松　そりやいけない。銀太郎の家なんかに泊つちやいけないよ。（強く云ふ）

ゆみ子　なぜいけないの？

辰松　……今夜は僕の部屋に泊めてやるよ。しかし、明日の朝は、夜の明けない前に起きて歸らなきやいけないよ。

ゆみ子　えゝ。あれから後のお話をしてゐたら、話してるうちに夜が明けるでせう。あなたのお噂が時々耳に入るたんびに、わたしは身を切られるやうな思ひをしてゐたんですわ。

辰松　僕はまだ歳が若いから、切られた傷は半年の間にすつかり癒つてるよ。たかゞかすり傷ぐらゐなものだつたのだからね。それで、この頃は、も一度東京へ出て行つて、一仕事やり出す手順がついて、いゝ氣持になつてゐたのに。……お前もおれに會ひたけりや、東京へ行つたあとで會ひに來ればよかつたのだよ。僕はまだ獨身で自由な身體だから、女とのかゝり合ひを恐れて逃隱れをしたりなんかしないよ。

ゆみ子　あなたにそんな元氣がおありになつたのなら、わたし獨りで氣を病んでゐなくつてもよかつた譯ね。

辰松　お前はあれから面白いことがあつたんだらう。少し話して見ろよ。何でも聞いてやろよ。僕は歸つた當座東京の新聞を讀むと、お前の名が何處かに出てやしないかと氣になつたものだ、身投げをしたとか毒を呑んで死んだとか。誰れかに殺された女といふのはお前のことぢやないかと邪推したこともあつたんだから可笑しいだらう。お前のやうな女は世間に何萬人でも何十萬人でもあることが分らなかつたんだね。お前は、僕見たいな男が

そこら中にころがつてることを、早くから知つてゐたのだらうけれど。

ゆみ子　あなたのやうに遊んで生きてられる身分ぢやなし、そんな浮氣なことを考へてゐる暇は、一分間だつてありやしませんよ。弟だつて妹だつて、わたしから貰いでやらなきや、浴衣一枚着れないんですからね。

辰松　オイ。所帶染みた話は御免だよ。嘘でもいゝからもつと色氣のある話を聞かせて呉れろよ。僕もこんな田舍で謹愼してるんだから、女の話には餓ゑてゐるんだ。

（はじめは女に對して反抗した態度をしてゐた彼れも、次第に親しみを寄せて來る。）

ゆみ子　色つぽい話なんぞあるものですか。それよりも、わたし、どうしたらいゝかと困り切つてゐるのよ。あなたのお察しのやうに、身投げしようか、猫入らずでも呑んで死なうかと思つてるところなの。

辰松　それで、死場所を捜しにこんな田舍へやつて來たのかい。

ゆみ子　さう思つてらしつてもいゝのよ。

（眞面目にさう云つて、さも心配のあるらしい顏をする。）

（そこへ、寢衣のまゝの吉兵衞がある聲に導かれてゐるやうに、フラ／＼と出て來て窓際へ寄る。）

辰松　死際に、次手だから僕の所へ寄つたのかい。だけど、今夜この部屋で猫入らずなんかを飲まれちや困るよ。

ゆみ子　冷かさないで聞いて下さい。……わたしには生死の問題なんだから。

辰松　（ふと窓の外の物音に耳を留めて、小聲で）ちよつと待つて呉れ。（と、相手の話を遮つて）銀太郎がまだ外にゐるんぢやないか。……彼奴いやな奴だ。（と呟いて、窓際へ寄つて）誰れだ？　そこにゐるは。

（吉兵衞は窓際を離れる。返事がないので、辰松は戸を開けて外へ見屆けに行かうとすると、そこへ、吉兵衞がムッツリした顏して入つて來る。辰松は倒れんばかりに驚く。）

（吉兵衞は辰松の方よりもゆみ子の方に目を凝らす。ゆみ子は恐れて、顏を背けて震へてゐる。）

吉兵衞　晝間訪ねて來た女はこの人か。

（誰れも返事をしない。吉兵衞が女の顏をよく見ようとして側へ寄つて行くと、ゆみ子は怖がつて逃出さうとする。吉兵衞は女を摑まへて坐らせる。）

吉兵衞　おれはどうもしねえだよ。ぢつとしてゐなさい。（わざとらしい笑ひを浮べる）おれは今夜に限つて眠つかれねえで、寢返り打つちや物を考へとると、どつからか女の聲が聞えて來たんで、こんな夜中にどうも不思議

だと思つて、鐐の在所を捜しに出て、此處までやつて來たのだ。お前さんは何しに來なすつた？　辰松が戀しくつて來なすつたのか。手切金を云ひなり次第に出したおれ達を甘く見くびつて、もう一度金をせびりに來なすつたか。

ゆみ子　さうぢや御座いませんわ。あの時だつてお金なんか頂くつもりぢやなかつたんです。みんな間に立つた人が勝手に極めたことなんです。そんなサモしい女と思はれるのが殘念でなりませんから、一度此方の皆樣にお目に掛つて、わたしの眞實の心持を申上げて、お詫びすべきことはお詫びしたいと思つて、今日お伺ひしたんで御座いますの。

吉兵衛　おれは、今はじめてあんたの顏を見た。いろ〱な男を誑らかした性質の悪い女だと聞いとつたが、今會つて見ると、そんな女とは思はれねえ。（辰松の方を見て）おい辰。お前が戀しがつとる女はこの人か。

辰松　（憂鬱な有樣で）いや、さうぢやありません。

吉兵衛　だつても、書間あんな柔しい手紙を寄越した女はこの人ぢやねえのか。

辰松　（煩さうに）大勢ゐる女の中の一人が、偶然訪ねて來たゞけなんですよ。今夜寢る場所がないから泊めてやらうとしたゞけで、明日の朝は他所へ行つちまふんだから、氣に掛けるには及びませんよ。

吉兵衛　お前が思ひを掛けてゐた女は、どれほどに美しいだかと、おら、不斷思つてゐたゞよ。おら、女の顏のよし惡しを見分ける眼力はもつてるつもりなたんけれど、夜のせゐだか、この人の顏さう美しか見えねえだ。……辰もこの人のために、おれの讓る身代を棒に觸りやしめえな。戀しがつとる女はこの人ぢやねえと、今おめえの云つたのは空言ぢやあるめえな。

（今まで小さくなつてゐたゆみ子、憤りを感じる。辰松、默つて茫然と見てゐる。）

ゆみ子　わたしはあなたにただちに馬鹿にされに來たのぢやありません。お暇しますわ。

（彼女は腹立たしげにさう云つて、父子の間を潜つて、外へ驅出ようとすると、辰松は慌てゝ飛付いて引留める。）

ゆみ子　離して下さい。

辰松　夜中に何處へ行くんだ？

ゆみ子　何處へ行かうとわたしの勝手です。

辰松　銀太郎の家へでも行くのか。あんな家へ泊つちやいけないよ。銀公なんかのところへ行くとどんな目に會はされるか分らないんだ。お前はあの男の性質を知らないんだ。

ゆみ子　わたしがどうならうと構つたことないぢやありませんか。赤の他人のあなたに干渉して貰はなくつてもいゝんです。

辰松　まあ、待て。お前にはいろ〳〵話すことが殘つてるのだ。

（彼れは戸を堅く鎖して、その前に立つてゐる。ゆみ子は爭ふ力が衰へて、ぺつたりその前に坐る。目に涙を含んでゐる。吉兵衞は一方に立つて、二人の樣子を見詰めてゐる。）

辰松　さつきお前の話しかけた生死の問題といふのは何だ？

ゆみ子　それを聞いてどうなさるの？　わたしのやうな詰らない女の一人が死なうと生きようと、あなたにはどうでもいゝぢやありませんか。

辰松　いや、どうでもよかなくなつたのだ。……稻毛の宿屋の離れでこんなことがあつたことが思出されるよ。あの時戸が開いてゐたら驅出して海へ飛込んだに違ひないお前だ。今夜だつてさう昂奮してると、どんなことをするか分りやしない。

ゆみ子　わたしが何をするか、自分でも分りませんの。……でも、この邊には海はないんですわね。（死場所でも空想してゐるらしい目付をする）

辰松　海はなくつても、深い井戸があるし、裏山には首のくゝれるやうな松が何本でもあるんだからね。

ゆみ子　晝間車の上から見た大井戸はそんなに深いんでせうか。

辰松　詰らないことを考へないで、此處でゆつくり寢て、朝早く歸つて行くといゝよ。明け方の田舍の空氣を吸つたら、頭が澄んで詰らない考へはなくなつてしまふよ。

ゆみ子　……わたし死にたくつても死ねないの。わたしが今死んだら、妹も弟も路頭に迷ふでせうから。

（辰松は安心して腰をおろす。が、父親の顏を邪魔にしたらしく、父に向つて。）

辰松　この人を一晩だけ此處で夜を明かさせてやりませう。若い女を暗闇（くらやみ）の中へ追出す譯には行きませんから。

吉兵衞　なぜ追出す譯に行かねえだ。（と、ふときつい聲を出す。そして、驚く二人を凄く見据ゑて）オイ辰松、こんな女の口車に乘せられて馬鹿を見るな。おめえ、さつき何と云つた。おれを騙したんぢやあるめえな。

（辰松默つてゐる。）

吉兵衞　よし。お前がこのすべたを追出さねえんなら、おれが叩出してやる。

（彼れはさう云ふや否や、ゆみ子の襟元を掴へて、戸を開けて引摺出す。すると、辰松は父親の身體を押退

けて、つか〳〵と外へ出て行く。）

（あとで吉兵衞は氣拔けがしたやうにへたばつて、空間を見詰めてゐる。）

（突出されたゆみ子は、奥から廻つてとぼ〳〵と出て來る。あとから辰松も出て來て肩を並べる。）

辰松　何處へ行く？

（默つて急ぎだしたゆみ子の袂を捉へて引留める。）

辰松　親爺がどう云つたつて、僕が泊めてやるから安心してゐろ。……口に出して云ふのもいやらしいんだが、親爺はあんな狂人染みた眞似をして、自分の胸の中の欝憤を晴らしてるんだ。お前は親爺の憎んでる奴の身代りにされたやうなものなんだよ。……そこらを一廻り散歩して來よう。そのうちに、お前の安心して寢られる場所を工夫してやるよ。おれは今日は、おれに物を賴んだ者の賴みを聞いてやらうと、獨りで極めてゐたんだが、賴み手がお前であつたとは意外だ。

（さう云つてゐるうちに、二人は相添つて向うへ入つて行く。）

（吉兵衞はふと立上つて、離れから出掛けようとすると、おしもが入つて來る。）

おしも　お前は、此處へ來てゐたのかい。夜中に何處をうろついてるのかと思つて、さつきから捜廻つてゐたのだよ。

吉兵衞　お前は、おれを家から追ん出さうとしたでねえか。おれが何處へ行かうと心配して呉れるな。

（煩さうに云つて、おしもを相手にしないで出て行かうとすると。）

おしも　辰松に何話しに來たゞね。自分の子息に、夜中にこつそり話しに來るのはたゞ事ぢやあるまい。お前は、女房を棄てゝ、小田原の女の尻を追つて行く氣になつたのだな。

吉兵衞　煩せいな。何度同じことをほざきやがるんだ？

おしも　（部屋の中を覗いて）辰松はゐないのかい。

吉兵衞　辰は女狐の跡を追つて行きやがつた。

おしも　エツ。……おや、晝間の女とないしよで打合せでもしてゐたのかい。……お前さんが惡いんだよ。晝間に餘計な騷ぎをおつぱじめるからいけねえんだ。

吉兵衞　騷いだのは、おらとおめえとどつちだ。

おしも　辰松の置手紙でも此處にあつたのかい。

吉兵衞　そんなものはありやしねえ。……（元氣のない聲で）若いものは面白いんだ。親から金を出させて緣を切つた筈の女が訪ねて來りや、二人でまた仲のよさゝうな話をしてるだよ。

おしも　辰松がゐなくなつたのも、お前は打遣つて置くの

かい。

（吉兵衛はおしもに構はないで、部屋を出て、辰松などの行つた方へトボ／＼と歩きだす。おしもは不安らしくその後に隨いて行く。）

——幕——

三

暗黒なる野道。

辰松とゆみ子、影の如く暗い所へ出て來る。

辰松　お前は失望することはないよ。……親爺は自分を嫌つた情婦のことを思出してるんだ。その情婦に惡對を吐いてるつもりでお前に何か云つてゐたんだ。

ゆみ子　……どうでもいゝの。……あたしを打やつといて下さい。

（彼女は辰松の手を振切つて、一方へ入つて行く。辰松追つて行く。）

（吉兵衛とおしもが影の如く暗い所へ出て來る。）

おしも　何處へ行つたゞか。……近所の人起して搜して貰ふべいか。

吉兵衛　近所の人に知らせるにや及ばねえ。……二人で勝手に遊んでやがるんだ。

おしも　こんな暗闇に誰れが遊んでられるものか。お前さんは心配でないのかい。間違ひでもあつたらどうするんだ。

吉兵衛　彼奴等二人連れだ。暗闇でも淋しかあるめえよ。……あしこを見ろ。二人が並んで歩いてるぢやないか。

おしも　（夫の指差した方を見込んで）誰れもゐねえぢやないか。あれは松の木だよ。人間らしいものは何處にも通つてやしねえよ。

吉兵衛　松の木でもいゝ。おら、あしこへ行つて見るだ。お前はおれのあとへくつついて來ないでもいゝよ。

おしも　二人の居所を搜しもしないで、あんな所へ何しに行くだ。

吉兵衛　何しに行かうと構つてくれるな。お前は勝手な方へ二人を搜しに行け。

（彼れは足を早めて入つて行く。おしも追ひすがつて入つて行く。）

（銀太郎、村の者と出て來る。）

銀太郎　さあもう大丈夫だ。（苦しさうに息を吐いて）二階から飛下りた時にや、足の骨がボキッと折れたと思つたよ。

村の者　おら、夢我夢中で何處を飛んで來たか分らねえが、あとの奴は皆んな摑まつたゞな。

銀太郎　今思ふと、梯子段の音は巡査だか何だか分りやし

ない。……だけど、おれはもう今夜で懲りた。またと小賭博の仲間にや入らないよ。

村の者　懲り〴〵はおめえの口癖だ。おめえ、これから家へ歸るんか。

銀太郎　おれはこれからちよつと寄つて見るところがあるんだ。此處で別れるぜ。

村の者　今時分、何處へ寄るだな。

（銀太郎答へないで入つて行く。村の者は銀太郎の行く方を暫く見てから、異つた方へ入つて行く。）

（辰松とゆみ子とが出て來る。）

辰松　詰らない眞似をしておれを脅かすなよ。

ゆみ子　死ぬ眞似しか出來ない人間と思つてらつしやるんなら、打つちやつといたらいゝぢやないの。

辰松　でも、こんな暗闇の中へ、女一人を放つて置く譯には行かないからね。おれの部屋がいやなら、晝間お前が休んでた長谷甚の家にでも泊らせることにしよう。

ゆみ子　あんな汚い狹い家に泊りやしない。あんな意地の惡さうな婆さんの側で寢るよりや、野宿した方がましなくらゐだ。

辰松　銀公の家はもつと汚いよ。……しかし、野宿する元氣があるんならいゝところを教へてやらう。

ゆみ子　何方向いても眞暗なのね。

辰松　急いで歩いちや危いよ。おれの手にしつかり摑つてゐろ。

（ゆみ子、男に縋りつく。）

ゆみ子　（ふと懷つこさうに）こんなところ、とても女一人で歩けやしないわね。

（二人は入つて行く。）

（おしも、吉兵衛の袂を捉へて出て來る。）

吉兵衛　何處までおれに隨いて來るだ。離せつたら離さねえか。

おしも　わし聲を立てるだよ。

吉兵衛　聲立てたけりや立てろ。喉の裂けるまでわめいて見ろ。おら、そんなこと恐りやしねえ。

おしも　さつき、わしがあつちを見てゐた間に、お前はあの松の木で首を釣らうとしたでないか。

吉兵衛　それでおれの手を離さねえのか。……人間は生きてゐるうちは、一生に二度や三度、首でも釣つて死ぬべいと思はねえものはあるめえ。だけど、おら、今、自分の首を掛ける氣で松の木見たんぢやねえ。……おら、松の木に人の顏見たゞ。獄門にかゝつた人の顏見たゞよ。だけどそれもおれの氣のまよひだ。……さあ、もう家へ歸れよ。おれも後から歸るだから。……いくら搜したつて、この暗闇の中に人つ子一人ゐるもんぢやねえ。辰松

も家へ歸つて手足を伸しとるに違えねえだ。

おしも　さきへ歸れたつて、こんなところ、とても女一人で歩けやしないよ。

吉兵衞　六十にもなつて何が怖いんだ。

（二人は歩み疲れた老人らしくトボ〳〵と歩いてゐると、そこへ、銀太郎が入つて來る。）

銀太郎　旦那は今時分何處へ行きなすつた？

吉兵衞　お前こそどうしたんだ？

銀太郎　お宅の側を通つたら、離れの方は明けつ放しで、どたたもいらつしやらないぢやありませんか。

おしも　辰松が晝間の女に誘はれてどこかへ行つたんだよ。早く捜して吳れなよ。

銀太郎　それは大變た。

（おしもが銀太郎に話してゐる間に、吉兵衞足早く出て行く。）

――幕――

四

その翌日。

場面も時刻も（一）と同樣である。

吉兵衞は、（一）と同じやうに庭先にしやがんで鷄の毛をむしつてゐる。

そこへ、銀太郎が入つて來る。

銀太郎　旦那、お宅の鷄を每日潰しなさるんですか。

吉兵衞　なあに。昨日は折角料理までした奴を、ゴタクサ騷ぎで放つといたら、スッカリ隣りの犬にやられてしまつたのだ。（むしつてゐた手を留めて）あの女は無事に二ノ宮から汽車に乘つたのだらうな。

銀太郎　大丈夫です。東京までの切符を買つて乘りましたよ。

吉兵衞　それで一安心だ。お前にも御苦勞を掛けたやうなものだから、一杯御馳走してもいゝ譯だが、……まあ止しにしとかう。

銀太郎　御馳走して下さらんでもよろしいが、昨日お話しかけたことを聞いて頂きたいですが、旦那に御損は掛けやしません。

吉兵衞　その話は駄目だ。……おれがウッカリ柔しい口を利くと、直ぐにつけ上つて蟲のいゝことを云やあがる。（苦笑を洩らして）昨日からお前のしたことは、みんな自分の物好きぢやねえか。餘計なおせつかいをさへしなければ、たとへ、あんな女が家を覗きに來たつて、大した騷ぎは持上らねえで濟んでゐたのだ。鳥だつて、犬にも猫にも食はれねえで濟んだのだ。

銀太郎　（ムッとして）そんな勝手な言草はあるもんぢや

ない。わしがあの時出て來なけりや、若旦那はあの女の後に隨いて何處まで突走つたか分りやしないんだ。……まかり間違や、二人で首でもくゝつてたか知れないですせ。

吉兵衛　若い者の首つくゝりの手傳ひでもしかねない貴樣だ。

銀太郎　さう思ひたきやさう思ひなさるがいゝ。……わしも馬鹿なことだ。昨夕夜つぴて寢ないで、氣を使つて、それで餘計なおせつかいのやうに思はれちや……。

（そこへ、辰松が寢呆け顏して入つて來る。それを見た銀太郎は吉兵衛の側から離れる。）

銀太郎　離れにいらつしやつたんですか。

辰松　今まで寢てゐたのだ。君も疲れたらうね。一杯飮んで晝寢でもしろよ。

銀太郎　へゝゝ。……晝寢なんぞするよりや、また競馬にでも出掛けようかと思つてゐるんです。

辰松　また競馬か。おれも君に隨いて行かうか。

銀太郎　若旦那がいらつしやるのなら、早速お伴しますよ。今日から橋本の競馬場が開くんです。

辰松　おれも暫く家にすん込んでたから、馬でも人間でも、威勢よく飛んだり跳ねたりするところを見たいやうな氣もするんだが、しかしまあ、今日は止さう。

銀太郎　どうしてゞす？　今日はお天氣がいゝから、氣晴らしにもなりますよ。

（吉兵衛は鷄の毛をむしつてゐる。）

吉兵衛　銀公も今日は邪魔をするな。今日こそ、親子でこの鳥を料理して、午餐を食べようと思つてるんだから。……競馬なんかへ連出すと承知しねえぞ。

銀太郎　わたしは、若旦那が競馬へ行かうと云ひなさるから誘つたまでゝさあ。（冷笑する）

吉兵衛　おらもな、銀公。競馬でもやつて、氣を紛らせようと思つたことあつたゞが、勝負事したつて役に立たねえた。大賭博をやつて百萬兩儲けたつて、なんにもならねえだからな。おら、六十年の間使ふ道のねえ金をコツコツ溜めて來たゞ。……さう云ふと、そんな金があるんなら、わしの商賣の資本に貸して吳れろと、お前は云ふだらうが、おら、お前なんぞを喜ばせたかねえだ。

銀太郎　さうですか。……旦那の御機嫌の惡い時にぶつゝかつちやたまらないな。

吉兵衛　……さあ、これから料理だ。辰。お前も手傳へ。

（彼れは辰松に目くばせして奧へ入る。）

辰松　親爺もこの頃は殺生が好きになつていけない。百姓を止めて獵師にでもなるといふんだね。（緣側に腰を掛けて、緊張した顏をして）……銀公、昨夕あの女が、離れの裏の松の木に首を釣らうとしたのを見たと君が云つ

たのは眞實なのか。

銀太郎　眞實ですとも。あの人も一時逆上してそんな氣になつたんでせう。

辰松　噓を吐け。昨夕は君にさう云はれゝばさうかと思つて、僕も慌てたんだが、今朝ぐつすり眠つたあとで目が醒めて考へると、君の云つたことが一切信じられなくなつたよ。

銀太郎　ぢや、お互ひに夢を見てゐたとでもしときませうかね。……昨夕巡査に踏込まれたと思つたのも、わたしだちの勘違ひだつたんですからね。

辰松　兎に角、僕もつくづく田舍がいやになつたから、近日何處かへ出て行くよ。君もこんな所にまごまごしてゐないで、も一度東京へ行つたらいゝぢやないか。

銀太郎　そのうち東京へ出掛けるやうになつたら、あなたにお力添へをお賴み申しますよ。

辰松　僕が親爺の身代を相續すると云つたものだから、さう云ふんだらうが、僕は親爺の手から一坪の田地も一握りの紙幣も貰はうと思つてやしないよ。素手で出て行くのだ。

銀太郎　へえ、それはえらい御決心ですね。（冷笑的に）

辰松　僕を見くびつて笑つてらあ。……僕には昨日來たやうな女は、東京にはいくたりでもあるんだよ。

銀太郎　結構ですな。……あなたはまだお若いからいゝですね。わたしなぞ、三十代に百姓を止めて東京へ行つて、東京言葉のはしくれを習つて來たばかりなんですよ。

辰松　君だつてまだ若いよ。……まだいゝ主婦さんが見つからないのかい。ないしよでいゝのが出來てるんだらう。

銀太郎　わたしのやうな貧乏人のところへは誰れも訪ねて來て呉れないから駄目ですよ。

（互ひに元氣のない平凡な調子で、こんな話しをしてゐるところへ、おしもが野菜の入つた籠を背負つて、心身とも疲勞したらしい老醜そのものゝやうな相をして入つて來る。）

銀太郎　主婦さんは今日も野良へ行きなすつたのか。（驚いたやうに云ふ）

（おしも、弱つてゐる足で急いで椽側近くやつて來て。）

おしも　お父さんは居るかい。（不安らしく訊く）

辰松　ゐますよ。

おしも　何してゐるだね。

辰松　また鳥の料理をしてゐる。

おしも　また生物の首を絞めたゞな。自分の首絞めるかはりに鷄の首絞めたゞね。

辰松　いやなことを云ふもんぢやありませんよ。

おしも　お父さんは昨夕も自分の首絞めようとしたゞよ。あの女の首を絞めること、ようしないで、自分の首絞めようとしたゞ。……それで、わし、田畝へ出てゐても心配でならないから、大急ぎで歸つて來たのだ。（銀太郎を見て）銀公は辰松に何を話しに來たゞね。

銀太郎　わたしは旦那に頼まれて、あの女を停車場へ見送つて來たんでさ。あの女は無事に歸りましたよ。

おしも　わしも野良で考へたゞが、お父さんの云つた通り、あの女の顔した厄病神は、銀公お前がこの家へ連れて來たのだ。無事に歸つたもねえもんだ。

銀太郎　主婦さんまでそんなことを云ひなすつちや困りますね。……わたしも惡いところへ來て詰らないかゝり合ひをつけられたものだ。もう歸りませうよ。

（おしも、ふと銀太郎の袂を捉へる。銀太郎氣味惡く感じる。）

おしも　あの女、なぜ家へ連れて來たか、わしの腑に落ちるやうによく話して呉んな。

銀太郎　わたしよりも、主婦さんの方がさきにあの女に會つたんぢやありませんか。

（彼れは煩さうに云つて、捉へられた袂を振離さうとすると、おしもは力を入れて捉へる。）

おしも　わしをそんなに汚がるのか、昨日一人で考へて思出したゞが、わし、そんなに汚らしい女ぢやなかつたゞよ。家の人が身代殖やすために、こき使はれて、三人もの子供育てた上に、野良の仕事もやつて來たゞよ。面白い目一度しねえうちに、年齢ばかり取つてこんな顔になつたゞ。若い時にはお前の父ちやんは荒仕事で荒れたこの手で握つてやつた握飯を、わしの手の指あとのついたのを喜んで食べたゞよ。その時のお前の父ちやんは、お前ぐらゐな歳たつた。だから、わし「それを今思出したゞ。

銀太郎　（獨言のやうに）こんな時に人間の耳が聾になるといゝ。

おしも　わしが今朝鏡で見た顔は、あの時分のわしの顔ぢやねえ。わし、こんな顔になるために齷齪働いて來たゞ。

銀太郎　昨日來た女は、わしのためにも厄病神だつた。

辰松　人の事よりも、おれが松の木に首を釣りたくなつたよ。

（その時、吉兵衛奥から顔を出して。）

吉兵衛　辰。料理出來たゞよ。早く來て喰はねえか。

銀太郎　わたしは、居酒屋で一杯やつて、歸つて午睡でもしますべい。左樣なら。

（彼がおしもの手を強く離して行きかける。おしも倒れる。）

――幕――

保瀨の家

人

保瀨健一（六十五歲）
長男　久（四十餘歲）
妻　みや子（四十歲くらゐ）
次男　勉（三十五歲）
妻　くら子（二十歲くらゐ）
三男　直（三十餘歲）
四男　四郎（三十未滿）
妻　さは子（二十五歲くらゐ）
塚原萬助（五十くらゐ）
番人　源七（四十くらゐ）
おしま（三十餘歲）
乞食　ある男
同　ある女

時

晩春

（一）ノ一

保瀨健一の別莊の庭園の四阿。

健一の三男直（三十餘歲）が其處に腰を掛けて、所在なささうに煙草を吸つてゐる。瀟洒たる衣服を身につけてゐるが、袴は着けないで、後から出て來る兄弟達にくらべると稍々ダラシのない樣をしてゐる。

長男久の妻みや子（四十近い年齡の、肉附の豐かな女）が、直の方を目差して出て來る。

直は無關心で迎へる。

みや子　（ニコ〳〵して近づいて）　あなたがいつの間にか影を隱しておしまひになつたから、多分こんな所で晝寢でもしてゐらつしやるんだらうと思つてましたのよ。……廣間では皆さんのお話がはずんで、大變に賑やかなんです。

直　さうですか。（氣のなささうに答へて）　お祭しの通り晝寢でもしたいんですが、今日は落着いて寢てゐられる部屋は、何處にも見つからないし……さうかと云つて、眠氣醒ましに裏山の方へ登るには大儀だし、さつきから、半分うたゝ寢をしてるつもりで、かうしてるんです。

みや子　氣樂ねえ、あなたは。（身心の疲勞してゐるやうな態度で腰をおろして）　あなたは、今夜は此方にお泊りに

なるんでしたね。

直　いや、歸りませう。みんなと同じ汽車で歸ることにしませう。獨りものだから後へ殘つて泊つて行つたつていいんですが、親爺に取つつかまつて、愚痴の聞かされ役にされちやたまりませんからね。

みや子　でも、あなただけでも、二三日くらゐは泊つてゐてお上げにならなければ、お父さまがお淋しくお思ひになるでせう。今日こんなに賑やかだつたあとだから尙更。

直　しかし、親爺の慰め役を僕一人に押付けるのは、少しひど過ぎますね。（生欠伸を洩らしながら）親爺が獨り者で、僕が獨り者だから、話が合つていゝなんて思はれちや、割に合ひませんよ。

みや子　誰れもそんなこと思つてやしないでせう。（輕く云つて）……それに、あなたの獨身は、外の人の獨身とはよつぽど譯が違ふんですからね。此間くら子さんから、あなたの最近の御消息を聞いて感心しちやつたの。若いうちはあなたのやうにして日を暮した方が面白いんですわね。

直　面白いものですか。（そんな話はしたくなささうに云つて、相手の顏を見上げて）姉さんが僕の後を追つてこんな所へ來て、話を持掛けるのは珍らしいことだが、皆んなの代表となつて僕に何か言聽かせようとするんですか。……今日は親爺の誕生日だから、この機會に僕を取つちめて、僕の身體を縛りつけようと企んでるんぢやないですか。

みや子　あなたを取つちめる？（訝しげに云つて）變なことを仰有るのね。あなたが罪人でわたし達がお巡りさんの役目を勤めるんですか。變ですわね。

直　ぢや、姉さんは、僕に用事があつて此處へ來たんぢやありませんね。……さうですか。僕は、兄貴や姉さん達が僕に相應した婦人を見つけて結婚させるやうに計畫してるんぢやないかと思つてゐたんですよ。（戲談らしく云ふ）

みや子　たつて、わたし達に勸められておとなしく結婚するやうなあなたぢやないんですもの。

直　（戲談らしく）なあに、腹の中では世間並に結婚したくつて溜らないのかも知れませんよ。上べは超然とした風をしてゐてもね。

みや子　うまいことを云つてゐらつしやる。（笑つて）でも、あなたが嘘にでもそんなことを仰有るやうになつたのは不思議ですね。

直　いや、不思議と云へば、あなたが懷つこさうに僕の所へ來てこんな話をするのが不思議ですよ。義姉（ねえ）さんのすべてが、僕を除け者にしてゐたんぢやありませんか。

みや子　いゝ加減なことを仰有い。……外の方はどうだか知りませんが、わたしは直さんを除け者になんかした覺えはありませんよ。この機會にそれだけはよく云つて置きますわ。（眞面目に云ふ）

直　ハ、、。そんなに六ヶしく氣に掛けなくつたつていゝんです。僕は除け者にされるのを不平に思つちやゐないんですから。（ふと快活に云つて、遠くを見やつて）まあ、山の方を見て御覽なさい。晩春の景色はいゝぢやありませんか。僕は家庭がないせゐか、若葉の山を見てると、次第に感傷的な氣持になりますよ。

みや子　（相手の見てゐる方を見て）本當に今日はいゝお天氣ですわね。

直　風がなくて溫か過ぎて、何だか眠くなりさうですね。……姉さんも眠つたさうな目をしてるぢやありませんか。

みや子　わたし、昨夕はまんぞくに寢てゐないんですもの。それに、あなたと顏を見合つてゐると、催眠術でも掛けられてるやうに、ひとりでに眠くなつて來ますわ。

直　ぢや、芝生の上へでもベンチの上へでも横になつてお休みなさい。僕が此處で見張りをしてゐますから、安心して眠るといゝんです。

みや子　まさか。……（座を立つて）わたしは廣間へ歸りませうよ。默つて出て來たのだから。……あなたもあちらへいらしつちやいかゞ？

直　後からまゐりますよ。

（みや子出て行く。）

（直は、無關心で見送つて、煙草を一本吸ふと、別莊番源七（四十歳くらゐ）が、四阿へ煙管で、ノツ／＼入つて來て、直を見つけると、目顏を曇らせて、四阿へ近づく。直は、無關心で迎へる。）

直　今日はいゝお天氣だね。

源七　左樣で御座います。昨夕の空模樣では、今日は危かしいやうに思はれましたが、日本晴れに晴れて、皆樣も大助かりで御座いましたな。

直　降られちや、折角の誕生日も臺無しだつたのだよ。お目出度い譯だね。……お前も此間うちは掃除に忙しかつたらうね。暫く誰れも來ないで打つちやつてたんだから。

源七　お掃除は毎々ボツ／＼やつてますから何でも御座いませんが、……わたくしは今日は大變に心配いたしました。あなた樣には申上げても御機嫌を惡く遊ばさないから申上げてもよろしう御座いますが、昨夕、その四阿に夫婦連れの乞食が寢て居りました。

直　このベンチの上にか。（不快な目で腰掛けを見る）

源七　ハイ。二人とも惡い病氣を持つてゐますのでせうか。

眉毛が抜けて、頭の髮も薄くなつて、見ても氣色の惡いやうな顏付をして居りました。

直　なぜそんな奴が庭の中へ入り込んだのだらう？

源七　何處にも泊めて吳れる所がなかつたので御座いませうが、二人ともシヤア／＼として、わたくしが朝早く氣がついて、追拂はうとすると、出て行くから飯を喰はして吳れと云つて、たゞぢや動きませんのです。

直　それで、飯を喰はしてやつたのか。

源七　爲方が御座いません。……四國では、さういつたお遍路さんが幾組も八十八ヶ所詣りをして居りますが、お大師樣の御利益願ひに皆んなが、御報謝をいたします。

直　それで、お前も慈善事業をやつたのだね。（夢見るやうに）遍路笠を被つた巡禮姿を空想してると、おれには風流に思はれるが、さういふカツタイ面を、實際に目の前へ見せつけられちや、さぞいやなものだらうな。

源七　寢起きにそいつを見せつけられた時の氣味の惡さつたら御座いませんでした。……今日は大旦那樣の御誕生日で、お祝ひがあるのだから、そのお祝ひの施行のつもりだと云つて、御飯を惠んでやりましたが、その乞食夫婦の仲のよろしいことゝ云つたら、私は見てゐて感心いたしました。

直　さうかね。（感心したやうに云つて）しかし、お前は何だつて、そんないやな話をおれに話すのだ？

源七　御誕生日の話を聞かせて惠んでやつた後で、氣に掛ることが御座いました。それで心配して居りましたが、もう大丈夫でせう。

直　何のことだ？

源七　その二人が、今日お祝ひの御馳走のお餘りを頂きにまゐりやしないかと存じまして。……女の乞食が、歸りがけに、身内が寄つて集つて誕生日を祝ふやうな人間が、世の中にはあるのか、さういふ人間にあやかりたいものだと申しますと、男の乞食が、おれには、一年の内で誕生日が一番の惡日だ。こんな日が世の中になければよかつたのだと申しました。それからおれの誕生日は、四月の三十日だが、今日は何日になるのか、昨夕は滿月のやうだつたが、新の曆の日取りは月では分らないと申しますから、わたくしは、うつかり、今日は四月の三十日だと、云はずともいゝ餘計なことを云ひました。さうしますと、乞食夫婦はビツクリしまして、それは不思議な御緣だ。この御別莊の旦那とおれと、同じ月同じ日に生れたのかと、いやなことを云つて出て行きました。

直　成程、それは不思議な御緣だ。しかし、その乞食はいつまでもこの土地に逗留してはゐまいよ。二人は何處へ行くか、行先をお前に話さなかつたか。

源七　身延（みのぶ）のお山へまゐるつもりだと申してゐました。……氣になつて、後で下町へ行つた時に訊ねましたが、今日そんな人間は通つてゐなかつたと云ひますので、わたくしは氣掛りでならなかつたので御座います。裏山にでも隱れてゐて、お祝ひの御馳走の出來た時分に、勝手口に、あの顏を二つ並べて覗きやしないかと存じまして。

直　源七もよつぽど苦勞性なんだね。（さう云つて笑ひながらも、氣になるらしく）兎に角、そんな奴の寢てゐた所に腰を掛けてるのは不愉快だ。おれも彼方へ行かう。（立上つて）このベンチは汚れてるぢやないか。おれはさうと知らないで、こんな所で休んでゐたのは馬鹿だつた。黴菌にでも取つつかれちやかなはない。（次第に神經を惱ましながら、衣服をふるつたりして）後でよく拭いといて呉れ。

（彼れが奥へ入つて行くと、他の一方から源七の妻おしま（三十餘歳）が、夫を搜し〳〵入つて來る。）

おしま　こんな所へ何しに來てるだね。またあの乞食のことが氣になるのかい。お前もよつぽど苦勞性なんだね。

源七　直樣もさう仰有つた。おれはどうもあの二人がまたやつて來りやしないかと思はれていけないよ。二人がお屋敷の何處かへ隱れてやしないかと思はれてならないよ。

おしま　いやなことだ。お前が生（なま）じつか憐れみを掛けて御飯を食はせたり、いたはつたりするからいけないんだ。わたしの云つたやうにお巡りさんに云つて追つぽり出しやよかつたのに。

源七　（妻に叱られて恐縮しながら）本當にさうした方がよかつた。あの時、おれは一生に二度や三度の善根は積んどきたいと思つたもんだから。

おしま　善根が笑はせらあ。今から老人見たいなことしてどうするだ。

源七　ハ、、。おれ達には善根も慈善も柄にないことだな。……今直樣がこのベンチは汚れとるからよく拭いとけと仰有つたよ。また誰れか此處へ來なさるかも知れないから、お前は雜巾を持つて來てよく拭いて置け。

おしま　あんな乞食の寢てた所を掃除するなんていやなことだ。お前はまた、何だつて直樣なんかにあのカツタイ乞食のことを云つたのだな。餘計なこつちやないか。そんなことよりも先つきのやうないゝ機會に、肝心なお給金の値上のことでも頼めばいゝのに。氣が利かないたらありやしない。默つとりや、百年立つたつて、上げて呉りやしないよ。

源七　そりや直樣にお賴み申すこつちやないや。

おしま　ぢや。誰れにお賴み申さうと思つてるんだい。奥

様を持つた人に、お給金の値上話を持出したつて、お取上げになりやしないよ。此方の若旦那の御連中は、みんな鷹爪らしい顔をしてゐても、太郎も三郎も、みんな奥様次第なんだから、駄目なのさ。それで、奥様の御連中は氣を揃へて吝くつて細かくつて、お話になつたもんぢやない。……直樣は御獨身だから、譯を云つてうまく持掛けりや、案外此方の話に乘つて呉れるかも知れないよ。……それに今日はお祝ひ日だ。此間から毎日わたしが云つてるのにお前はまだ身に染みて感じないのだね。今日のやうな日に誰れかを取掴まへて切出さなければ、またと再び、こんないゝ機會があるものぢやない。

源七　さう八釜しく云ふなよ。お祝の最中にそんな話が言出されるものか。今夜どなたかお泊りになつたら、お暇な時を見計つて、おれが上手にお願ひすることにしよう。默つて見てゐろ。

おしま　危いもんだな。（奥を覗みて）あゝ勉様御夫婦がいらつしやつた。わたしはあちらへ行つてゐよう。あの奥樣はギスギスしてゐて、わたし大嫌ひさ。

（おしまは、遽かに會釋して出て行く。次男勉（三十五歳）紳士然たる扮装して、妻のくら子（三十歳未滿）と並んで、何か話しながら出て來る。）

（勉は、行きかける源七を呼留めて。）

勉　煙草を忘れて來たから。持つて來て呉れ。マッチも一しよに。それから冷水を一杯斟んで貰ひたいよ。汲立ての新しい奴を直ぐに持つて來て呉れないか。

源七　ハイ。（足早に出て行く）

（夫婦はベンチに腰をおろす。）

くら子　あたし、二三日此方へ泊つて行かうと思ふのよ、あなたもそのつもりでゐて下さらなきやいけないわ。

勉　だつて、お前はさつきまでは、今日のうちに歸りたがつてゐたぢやないか。

くら子　でも、あたしは姉さんやさは子さんなんかと、同じ汽車で歸りたかないんですもの。

勉　どうせ二時間ばかりの道だ。誰れと一しよだつて、そのくらゐな辛抱は出來さうなものだ。

くら子　だつて、たとへ一時間でも半時間でも、無意味な辛抱をして神經を痛めるのは愚かなことぢやありませんか。あたしは、さは子さんが御亭主に對する緩慢な態度を見るに忍びないの。

勉　四郎もあれで滿足してるんだから結構だよ。あの夫婦はおれ達よりも一時代若いんだね。

くら子　あたしのことをくら姉ちやんなんて、甘つたれた聲で云はれるだけでも、あたし溜らないの。

勉　情味があつていゝぢやないか。

くら子　あなたはさは子さんのことゝ云ふと、何時も贔屓目に見るのね。（目顔に角を立てゝ）あの甘つたれた聲に情味なんかあるものですか。あれはあたしを馬鹿にした聲なんだわ。……さつきピアノを彈いた時の御自慢らしい樣子を見て御覽なさい。お前達には西洋音樂は分るまいと云つた顏付をして、あたしの方を見てたぢやありませんか、それにあなたはいゝ氣になつて、あんなまづいピアノに感心してゐたのね。先日新井さんに訊くと、さは子さんのピアノなんか全くなつてゐないんですつて。そんな者に感心するあなたがよつぽどお目出たいのよ。

勉　どうせ素人の餘興なんだから、さう六ケしく考へなくつたつていゝだらう。（妻の目を避けるやうに山の方を見る）

くら子　そのくせ、隨分打算的なのよ。兄さんや姉さんには、いやにおべつかつかつてるの。（夫の目の前へ進み出て）だから、皆んなを返して、あたし達だけ後へ殘つてゐるやうぢやありませんか。

勉　しかし、親爺の愚痴を聞かされるのは閉口だよ。

くら子　お父さんの愚痴くらゐ何でもないわ、さは子さんの生意氣や姉さんの常識自慢を見せつけられることを思へば。

（そこへ、源七が吩咐けられた物と、雜巾とを持つて入つて來る。勉はコップを取つて冷水を一息に飲み干して、煙草に火を點ける。源七は雜巾で圓卓やベンチを拭ふ。くら子は話の邪魔者として煩さうに源七の所行を見てゐる。）

勉　この頃は釣魚は出來ないんだらうね。

源七　さあ、どうで御座いますか。

くら子　源七は殺生は嫌ひだと何時か云つたことがあつたのね。釣魚なんかしたことがないんだらう。

源七　ハイ。わたくしは海の漁も山の獵もしたことが御座いません。……若旦那は殺生がお好きでゐらつしやいますか。

勉　二三日此方に泊るやうだつたら、退屈さましに釣魚でもしようかと、今ふつと思ひついただけなんだ。

源七　あなた樣がお泊りになるので御座いますか。

くら子　あたし達は暫く此方に來たことがなかつたのだから、今度は一日二日泊つて行くことに極めてるのよ。

源七　それはお珍らしう御座いますね。

勉　（向うを見て）みんなが庭へ下りて來るやうだよ。

くら子　あたし、あなたと打合せときたいことがあつたのに。（源七に向つて）大旦那樣が此處へいらつしやるんだらうから、お前は肱掛椅子を此處へ持つてお出でよ。

源七　ハイ。（出て行く）

くら子　老婢とおすみには、お父さんのお世話をさせなきやならないんだから爲方がないけれど、外の人はみんな東京へ歸らせるやうに話をして下さいね。本當にお父さんの傍にゐたい人は一人もないんだから、あたし達が後を引受けたと云へば、みんな喜んで歸つてよ。姉さんは、御自分の子供をあたしやさは子さんに接近させちや教育のためによくないと思つてるんだから、子供達が此方で遊んで行きたかつても、連れて歸りますよ。舊弊な型を有難がつてる大變な教育家なんだから恐れ入つちまふわ。（夫に向つて口早にさう云つた後で、奧の方へ二三步寄つて）皆さん此方へいらつしやいな。（と快活に云つて手招きする）

――幕――

（一）ノ二

（一）と同じい庭園の一隅。山に添つて樹木が茂つてゐる。（一）の四阿(あづまや)は、遠くに一端を現はしてゐる。

直が、木陰に置かれた腰掛椅子に身を投げかけて午睡をしてゐる。

そこへ、惡疫の乞食姿の男女（同行二人と記した古びに通路笠を被り風呂敷包を背負つて、草鞋脚絆の旅仕度をしてゐる。杖は自然木を用ひてゐる）が、あたりを憚つてゐるやうな態度で入つて來る。

その男　おらがあしこへ出て行つたら、みんなが吃驚するだらうか。おら、先つき谷川を越える時に、水鏡で自分の顏を映して見たのだが、鬼のやうにも亡者のやうにも見えなかつたぜ。

その女　さうだとも。人間は人間に違ひないのさ。……お前だつて、年中一しよに暮してゐても、わたしの顏に愛想を盡かしやしないだらうね。

その男　馬鹿なこと云ふもんぢやない。長い間苦勞を分合(わけあ)つて來た仲ぢやないか。

その女　わたしはガラス窓の側を通つても、自分の顏が映りやしないかと思はれて、身震ひすることがあるよ。

その男　おれもお前も、長い間鏡といふものを見たことがないのだな。（と、感じたやうに云つて、ふと氣持を變へて）イヤ、おれも詰らないことを云ひ出したものだ。

（直が夢に魘されたやうな聲を出す。男女がその聲に氣付いて、直の方を見る。）

その男　こんな所に人が眠つてゐる。このお屋敷の方だらうな。

その女　こんな御立派な廣いお家を持つてゐながら、わざわざ外へ出て窮屈さうに午睡なんかしたりして、酔興な

人ぢやないかね。
その男　この人は恐ろしい夢でも見てゐるんだね。大變に魘されてゐる。
その女　起して上げようか。
その男　まあ打遣つて置け。おれ達がだし拔けに聲を掛けたら、ビックリするだらう。（四阿の方を見て）見ろ、皆様があしこへお出掛けになつとる。丁度いゝよ。
（二人が行きかけると、直はふと目を醒まして、異様な二人を見る。そして、今まで見續けてゐた惡夢がまだ醒めきらないやうな氣持で、默つて二人の後姿を見詰めてゐたが、やがて、夢を振拂つて椅子を離れる。）
直　オイ待て、何處へ行くのだ。
（二人は足を留める。直はその方へ近づく。）
その男　今日は大旦那様の御誕生日のお祝ひをなさると承りましたからわたくしどもゝお惠みに預りたいと存じまして。（恭しく會釋しながら、上目で直を見る）
直　（相手の目使ひに恐れを感じながら）お前達は昨夕この四阿に寢てゐたと云ふぢやないか。……またこの邊に愚圖々々してゐたのか。
その男　先を急ぐ譯ぢや御座いませんから、この裏山で一日草臥休めをして居りました。この裏山にはわたくしどもの休息に誂へ向きの洞穴が御座いますが、あゝいふ所が昨日見つかつてゐたなら、此方様の四阿なぞを拜借いたさなくつてもよろしいので御座いました。（シヤア／＼した態度で云ふ）
直　他所の庭へ無斷で入つちやいけないぢやないか。
その男　わたくしどもを泊めて呉れる家が御座いませんので。
直　……これから身延の方へ行くんださうだな。それなら汽車に乘つたらいゝぢやないか。……汽車賃がないのか。
その女　使ひ殘しの金がない譯ぢや御座いませんが、汽車にはなか／＼乘せて貰えません。（哀れつぽく云ふ）
その男　わたくしは強ひて身延へお詣りしたいとは思つてゐないんで御座います。遙々身延まで足を運んだつて、變つた御利益があらうとは思はれませんが、家内が寢言にまで身延々々と申しますので、そちらを當てに出てまゐりました。
直　……使ひ殘りの金を持つてるのなら、お祝ひのお餘りなんかをせがみに來なくつてもいゝぢやないか。
その女　お仕合せな此方の大旦那様の御運にあやからせて頂きたいんで御座います。
直　（男の方を見て）今日がお前の誕生日ださうだね。
その男　左様です。……わたくしと同じ日にこの世に生れた此方の御主人のお顏を拜ませて頂きたいと存じます。

直　だつて、今朝お前に會つた別莊番の話によると、お前は今日の誕生日を詛つてたと云ふぢやないか。……おれは今いやな夢から醒めたと思ふともつといやな者を見せつけられた。早く出て行つて呉れ。（手眞似で押しやらうとする）

その男　（冷笑して）門前拂ひを喰はされつけてるわたくしだ。あなたなんぞに怒鳴られたくらゐではビクともいたしませんよ。

その女　門番の人が親切で、溫い御飯を裝んで下すつたのだから、御主人樣はよつぽど情け深い方に違ひないと思つてゐました。（男に向つて）出て行けと仰有るものを、無理に入つて行く譯には行くまいよ。此間の晩のやうに突飛ばされない前に出て行くことにしよう。

その男　おらは、誕生日のお祝ひの樣子を、外からでもちよつと覗いて見たいと思つてたのに。

（心殘りのしてゐるらしく四阿の方を見やると、女はその手を執つて引張るやうにして出て行く。）

その男　おら、もう歩くのが大儀になつた。またあの洞穴へ行つて、居られるだけ居ることにしよう。

その女　わたしは一足でも先きに行かなきや氣が濟まないよ。

その男　おらには先きも後もありやしない。

（二人の姿は見えなくなつたが、かういふ話聲だけが聞える。）

（直はその話聲に耳を留めてゐると、木の間から源七が出て來る。）

源七　彼奴またつやつて來た。（と、いま〳〵しさうに云ふ）

直　お前は蔭で聞いてゐたのか。

源七　ハイ。あなた樣が此處にゐらつしやらなかつたら、彼奴無遠慮に、皆樣のゐらつしやる所までまゐつたかも知れません。

直　おれも餘計な邪魔をしないで、彼奴等の行きたいところまで行かせた方がよかつたかも知れないよ。さうして皆んなを脅してやりやよかつた。（本心らしい口吻で云ふ）

源七　いや、そんなことになつたら、わたくしが皆樣に叱られます。

直　あの二人の夫婦仲のいゝのには呆れたよ。氣色が惡くなるよ。あんな化物見たいな顏をしてゐても、夫婦となると仲がいゝものなんだらうか。

源七　あんな顏でも毎日見てろと、馴れつこになつて、何ともなくなるんぢや御座いますまいか。

直　さうさ。……その代り、どんないゝ女でも毎日見てると、馴れつこになつて、何ともなくなるんだらうね。詰

りは同じことなんだね。

源七　詰りは同じことだと仰有つても、若旦那樣も、汚い女よりや奇麗な女の方がよろしう御座いませう。

直　それはさうさ。一つお前に奇麗な女を見せてやらうか。……此方に集つてる奧樣は、揃ひも揃つてお容色はあまりいゝ方ぢやないんだが。おれだけは、まだ獨身者だから、殘り者に福が授かるかも知れないせ。

源七　若旦那樣は御兄弟中で一番の美男子でゐらつしやるから、美しい奧樣がお出來になるに違ひないと、わたくしの家内が申しとります。

直　有難いな。いやな奴に會つて胸を惡くしたあとで、さういふいゝことを聞かされると、いくらか氣が晴れるよ。……さあ、あちらへ行つて、葡萄酒でも一杯やつて、そろ〳〵歸り仕度に取掛らうか。

（元氣よくさう云つて行きかけるところへ、みや子が入つて來る。）

直　僕は此處で午睡をしてゐましたよ。もう歸る時刻なんでせう。

みや子　あなたは悠長に午睡なんかしてる場合ぢやないのよ。早くあちらへいらつしやい。重要な會議がこれからはじまるところなんです。

直　重要な會議？……そんな者があるんですか（氣輕に云つて）ぢや行きませう。（と、行きかけると）

みや子　まあ、お待ちなさい。（と、引留めて）重要な會議は何だか、あなたは御存じないんでせう。

直　知りませんね。

みや子　それが意外なんですの。わたし達もちつとも氣がつかなかつたんです。……お父さんは誕生日を機會に、皆んなを此處へ集めたのは魂膽があつたんですよ。

直　成程……今年の誕生日のお祝ひが少し大袈裟なのが、少し變だと思つてゐた。（熱心になつて）それで、姉さんは今親爺の魂膽に氣がついたんですね。

みや子　今のところ、わたしだけがいくらか察してゐますのよ。……お父樣は今度隱居の決心を極めて、今日の誕生日に家族の前でその發表をしようと思つてゐらつしやるの。

直　成程。……それで、姉さんはなせ會議の題目を僕に豫告しようとなさるんです？

みや子　お父樣は兄弟の中で、あなたを特別に愛してゐらつしやるのです。……お父樣はあゝいふ方だから、不斷顏にも口にも現はしてゐらつしやらないけれど、直さんだけは愛してゐらつしやるに違ひありません。

直　それは僕にも腑に落ちませんね。僕は親孝行をした覺えはない筈なんだが。

みや子　いゝえ、一つだけ親孝行をしてゐらつしやるわ。それは大切なことなの。

直　何だらう？

みや子　あなただけが、いつまでも獨身でゐらつしやるぢやありませんか。

直　それが親不孝でなくつて却つて、親孝行になるんですかね。

みや子　お父様はわたしをはじめ、くら子さんをも、御自分の息子さんのお嫁さんを一人殘らず嫌つてゐらつしるんですもの。

直　ハ、ア。みんなが自分の女房ばかりを大事にして、一人の親を粗末にするといふのですね。（得心したやうに微笑を浮べる）

みや子　それはお父様のヒガミなんですよ。あなたはさうお思ひにならないわね。

直　そりや、久兒さんやあなたはさうぢやないでせうが……

……。

みや子　それで、お父様はこれから皆んなの前でどんなことを仰有るか知れないんですから、割にお父様に愛されてるあなたは、取做し役になつて下さらなきやいけませんよ。さうしなさきや、兄弟の間にどんな恐ろしい内輪もめがあるかも知れませんわ。

直　姉さんは僕を買被つてるんですね。僕にはそんな役は勤まりませんよ。……兎に角會議の席へ行つて見ませう。

みや子　今朝から皆んなが誕生日氣分でいゝ氣になつてる間に、わたしだけはお父様のお腹の中が心配でならなかつたんです。

（直は先に立つて出て行く。みや子隨いて行く。）

―― 幕 ――

（一）ノ三

別莊の廣間。

老主人保瀨健一（六十五歳。顏面軀甚しく衰弱な現はしてゐる。羽織袴を着してゐる）が上座に端坐し、長男久、次男勉、三男直、四男四郎、久の子供二人（十歳前後）など、及びみや子、くら子、さは子など、それ〴〵に祝日にふさはしい服裝をして、左右に居並んでゐる。庶務掛塚原萬助も末座に控へてゐる。

健一　おれの誕生日の祝ひも目出たく濟んだ。家族が一人も殘らないで此處に集つて呉れようとは思はなかつたのに、よく揃つて來て呉れたな。おれも仕合せたと云つていゝ。還暦の祝ひの時にはお前達のお母さんがまだ生きてゐて、此處におれと並んで坐つてゐたのだが、おれはあののち四度も五度も誕生日が祝へようとは思はなかつ

たよ。割合に丈夫であつたさだ子が急病で亡くなつたのに、老衰してゐたおれが、よくこの年まで生き續けて來たものだと、おれは今日も獨りで不思議に思つてゐた。（目顏に何の喜びもないやうな表情で一座を見廻して）お前達はみんな丈夫さうで結構だ。みんな平和で暮らしてゐるやうで、保瀨一族には災難の影もないやうだな。……あなたはお仕合せだと、他人もよくお世辭を云つて吳れるよ。あなたの御子息は皆んな出來がいゝと褒めて吳れる。親兄弟に迷惑を掛けるやうなヤクザ者が一人もゐないのを喜んで吳れてる者が多い。……おれが今日の日倒れても、保瀨の一家の基礎はぐらつく氣遣ひのないやうに思はれてゐる。おれは今の今此處で安心して目を瞑つてもいゝ譯だ。今から三十年前に、おれの親爺がさう云つて、さも安心したやうな顏して、おれの顏を見守りながら死んで行つたのだ。……その親爺の死に際の平和な顏が、今目の前に見えるやうだ。（それを見詰めてゐるやうな顏して、暫く言葉を噤む。やがて）親爺は仕合せな人間だつたよ。さうして、自分の築き上げた世を、次の時代のおれに渡して吳れた。親爺は身體は死んでも、自分の生命（いのち）はそのまゝにおれに讓つたつもりだつたから、仕合せな人間だつたよ。……しかし、おれは親爺とは違ふ。親爺と同じ心持にはなれないんだ。：　お前達もさう思つてゐて吳れ。（一座を見廻して）……おれは今日の誕生日を境にして隱居することに極めた。それでこの別莊に住むことに極めてるのだ。お前達はみんな一人前になつてるんだから、今後はおれを心當てにするな。親爺は今日の誕生日に息を引取つてもうこの世には生きてゐないと思つてゐて吳れ。若い者には老人は目障りだらうから、結句さうした方がお前達のためにもいゝに違ひない。今日の誕生日にお前達は親爺を生きながら埋葬したと思つてゐればいゝのだ。どうせもう五年か六年の壽命も覺束ないおれだ。お前達に別れるのに名殘りが惜しいとは思はないが、お前達の方では尙更さうだらう。老ぼれのおれの顏が見られなくなるのが、お前達の不幸になる譯はないのだから。

（彼れは聲に力を籠めてかう云つてゐるうち、次第に疲勞を感じる。）

健一　（强いて微笑を洩らして）おれの演說はこれでおしまひだ。お前達の意見は贊成でも反對でも聞きたくないよ。云ひたいことは後で、お前達同士でいくらでも話合ふことにしろ。：　財産の處分やその外の事務上の事は塚原に訊いて吳れ。

（彼れは、これだけを云つて、一座の人々には目も向けないで、力のない足取りで入つて行く。）

（一座の人々は、呆氣に取られて老人を見送つた後で、互ひに顔を見合はす。）

久　おれにはお父さんの意思が分らないよ。誰れか思ひ當つたことがあるか。（聲は潜めながら険悪な顔して訊く）

勉　おれにも分らない。お父さんの云ふことがあんまり世間外れがしてるので、おれ達兄弟は親爺の實子ぢやないのかと思つてゐたよ。

直　親爺は氣が狂つたのぢやあるまいな。多少變な目付はしてゐたけれど。……（四郎を見て）四郎はどう思ふ。お前の新思想で判斷してどう思ふ？

四郎　僕にも分らないさ。……しかし、お父さんがあゝ思つてるのならそれでいゝぢやないか。

直　さうだ。あゝ一圖に思ひ込んでるのなら、勸告したつて駄目だらうよ。

久　兎に角、塚原君から實務のことについて聞かなきやなるまい。（と云つて、塚原君の方を見て）君お父さんから吩咐けられてることがあるのなら、皆んなの前で報告して呉れたまへ。

塚原（當惑した顔して、心持座を進めて）それがどうも、皆様の前では甚だ申上げにくいので御座います。大旦那様は獨りでお考へ遊ばして、處分法を明細にお書留めになつて、わたくしにお渡しになりました。それを今日皆様の前で讀上げろといふ御命令なんで御座いますが、どうも困りました。明細書は此處に持つて居りますが、（懐から書付を取出して）是非皆様に御覽に入れなければならないものなら、何方かに代讀して頂きたいので御座います。

四郎　ぢや、僕が讀上げようか。その書き物を寄越したまへ。

（塚原に最も接近して坐つてゐる四郎は、塚原から書付を受取つて。）

四郎　僕が代讀してもいゝんですね。（と、一座を見廻す）

久（不安を感じてゐるらしく）まあ待て。四郎が讀むべきものぢやあるまい。

四郎　重大な一家の處分法を若輩が讀んぢやいけないと云ふんですね。……僕も強ひて讀みたかありません。兄さんお讀みなさい。

（四郎は書付を持つて、久の所へ行つて手渡しする。皆んなが緊張した目でその方を見る。久は書付を一瞥すると顔色を變へる。）

久　これは一先づ塚原君に預けといた方が穏當だらう。（と云つて塚原を招く）

塚原　わたくしもさう思つて居りました。（久の側へ進んで、書付を受取る）

久　こんな非常識なものを、我々が眞面目に聽くのは馬鹿なことだ。
勉　親爺は精神に異狀があるんぢやないか。
四郎　どうだつていゝぢやないか。僕等は自分々々の道を歩めばいゝんだ。お父さんもさう云つてたぢやないか。
勉　兎に角、我々四人だけで塚原君の部屋へ行つて、その書付を見て打合せをしようぢやないか。
久　さうだ。お互ひに重大な事なんだ。
四郎　重大な事と云つてどんな事だらうな。財産は一錢たりとも我々に讓らないと云ふのだらうか。
（皆んな沈默して不安な思ひに捉はれてゐる。）

――幕――

（二）ノ一

一年後の同月同日の朝。
庭園は元のまゝである。四阿は元の通りである。
着古した衣服を着けた直は、源七と話をしながら入つて來る。
直　去年の今日は大變溫かゝつたが、今年は薄ら寒いぢやないか。
源七　昨年は溫かう御座いましたか知ら。わたくしは些とも覺えてゐませんが。
直　天日に照らされるのが暑くつて、草原に寢ころんぢやゐられなかつた。それで、この四阿で日を避けて休息してゐたことをおれは覺えてるよ。
源七　今日もよく晴れて居りますから、次第に溫かくなりませう。
直　兄貴の連中は正午前にはやつて來るんだね。
源七　ハイ。もう汽車にお乘りになつてる筈です。
直　おれは、あの後間もなく旅に出たので、殆んど一年間は身內の誰れにも會はないのだが、この一年の間にはいろ〳〵な事があつたものだね。
源七　大旦那樣があんなに出し拔けにお亡くなりになつたことは、夢のやうに思はれます。
直　おれも、親爺の死亡の通知には驚かされたよ。……さう云へばあの時、變な乞食が來て脅かしたぢやないか。迷信家だつたら、親爺はあの乞食に呪はれたやうにでも思ふだらう。……あの乞食はあの後どうしたらう。夫婦連れで仲よく身延へお詣りしたのかしら。
源七　さあどうで御座いますか。あいつは氣味の惡い奴でした。
直　しかし、今考へると、彼奴の云つたことは大して氣味の惡いことぢやないよ。却つて、親爺の云つたことが氣味が惡いよ。

源七　わたくしは大旦那の御演說は承りませんでしたが、あの後大變な騷ぎのやうで御座いましたね。……さう云へば、あの時、あなた樣は、お美しい奧樣をお迎へになつて、わたくしどもに見せてやらうと、お約束なすつたぢや御座いませんか。

直　お前も詰らないことをよく覺えてるね。（相手の戲談を生眞面目に聞いて不快を感じたらしく）おれも今は美しい奧さんなんか考へてもゐないよ。

源七　なぜお考へになりませんのです？　御兄弟のうちで、あなた樣ばかりがいつまでもお獨りでゐらつやるのを、わたくしや家内はいつも不思議に思つてるんで御座いますよ。

直　おれは一年の間、親爺が乞食に物をくれるやうなざまで投げつけて吳れた僅かな金を持つて、他郷をうろついていろ／＼なことをやつて來たか、今は一文無しだ。それで、此處の軒下にでも四阿にでも寢かして貰はうと思つてやつて來たのだ。昨夕の夜汽車の三等の堅い腰掛の上で小さくなつて、まんぞくに眠ることも出來ないでやつて來たのだから、實は兄貴達が着くまでに一睡りさせて貰ひたいくらゐなんだよ。

源七　ぢや、あちらで御ゆつくりお休みなすつちやいかゞでせう。

直　昨夕からおれは飯も食つてゐないのだ。さつきから、お前に溫い飯を一杯惠んで貰ひたいと思つてるんだよ。

源七　御飯前なら、早くさう仰有ればよろしかつたのに。

直　お前は相變らず、慈悲深いんだね。……（ふと、重々しく）しかし、源七。おれは、一年前にお前を脅かしたあの男と同じ人だぜ、上べにあんなカッタイ面はしてゐないだらうが、あの男と同じなんだ。……あの男には生死を共にする女房があるのに、おれにはさういふ結構な者のないのが違つてゐるだけだ。

源七　御戲談仰有る？　ハ、、。

直　ぢや、まあ戲談にでもして置け。……しかし、おれの正體が分つた時に吃驚しないやうに用心をしてゐろ。吃驚するのはかまはないが、おれを突出さないやうにして吳れ。

源七（相手の樣子が眞劍らしいので、少し氣味を惡がる）飛んでもないことを仰有る。……あなた樣は今の旦那樣と血を分けた御兄弟ぢや御座いませんか。

直　六十五歲にもなつた實の親でさへあゝなんだからね。兄弟が何だ。（力強く云つたが）ハ、、（と輕く笑つて、ふと調子を柔らげて）一年の間、獨りでいろ／＼な世を見て多少修業して來たおれだ。力み返つてそんなことを云つたつてはじまらない。

源七　朝御飯を召上るのなら、早速支度をいたしませう。

直　次手(ついで)に煙草を惠んで貰ひたいものだな。昨夕から煙草にまで餓ゑてゐるんだよ。

源七　承知しました。

（出て行きながら、そつと直の方を顧みる。直は疲れてゐるやうにベンチに横たはる。すると疲勞が一時に出たらしく、寢息を洩らす。）

（そこへ、おしまがみや子を誘つて入つて來る。みや子は前よりも華美な服裝をして、前よりも富豪の女主人らしい態度を保つてゐる。）

みや子　直さんが今日此處へ來ようとは思ひも染めなかつたのよ。

おしま　皆樣が今日お揃ひになるやうにお打合せをしてゐらつしやるのかと、わたくしどもは思つてゐました。

みや子　わたしは直さんが何處で何をしてゐるのか知らなかつたの。（直の傍へ近づいて）あそこで寢てゐるぢやないの。

おしま　さつき出し拔けにいらつしやつた時、大變お疲れになつてゐらつしやるやうで御座いました。

みや子　（憐れむやうに）旅疲れをしてゐるやうね。……眠つてるのなら、寢かしときませうよ。（目を轉じてあたりの景色を眺めながら）久振りに此方(こちら)へ來ると、せい〱する。

おしま　あ、旦那樣もいらつしやいました。

（久、入つて來る。前よりも富豪の主人らしい堂々とした態度を保つてゐる。）

みや子　あちらへ行つてお茶の用意でもしてお吳れな。

おしま　ハイ。（出て行く）

久　（直に目を留めて）なんだ。直がこんな所へ來てゐたのか。

みや子　よく眠つてるんだから起さないでゐらつしやい。

久　親爺の葬式にも歸つて來ないで、今日何のために此處へ來たんだらう？

みや子　それは分つてゐますさ。あの人も文無しになつたのぢやありませんか。

久　直も無能な點ぢや、おれの兄弟中で御多分に洩れない方だが、よく何時までも獨身でフラ〱暮してゐられることだ。

みや子　（あたりを憚るやうに）でも、直さんが今日といふ今日、不意に歸つて來て吳れたのは、わたし達には天の助けなのよ。直さんだけはわたし達の味方になつて吳れる望みがあるの。だから、直さんが目を醒ましたら、優しくしてお上げなさい。わたしは、去年の今日、偶然直さんに話したこともあるのだし、あの人にはお嫁さん

の世話をしたいと思つてゐますの。

久　この男はおれ達が勸めたくらゐで、オイソレと結婚するかどうだか。

みや子　結婚したくなつてるんですとも、あの顔を見て御覽なさい。前に似合はない淋しい元氣のない顔してるぢやありませんか。あれは浮世の苦難に疲れたつていふ顔ぢやなくつて。男はいくら威張つても、いつまでも獨身でゐるとあんなに元氣がなくなるんですよ。

久　久振りで會ふと、おれでも直が懷かしく思はれるよ。

みや子　さうでせうとも。（いかにも同感したやうに云つて）伯さんや四郎さんは、傍に隨いていろんな惡智慧を貸す人があるんだけれど……。

久　おれには、くら子やさは子の目が怖いよ。（憂鬱になる）

みや子　それはあなたの氣のせゐなんです。（冷笑して）いつまでも迷つてゐちや、男として意氣地がないぢやありませんか。お父さんが早く亡くなつたことは、あの人達の得にもなつたんですもの。……わたし達に詰らん疑ひをもつたにしても、お腹の中では決してわたし達を恨んでやしません。わたくしが保證しますわ。

久　成程お前に保證して貰ふ外、天にも地にもおれの心の安心を保證して呉れるものはないんだからね。

みや子　さう云つて、あなたもわたしの所爲にしちやいけませんよ。御自分の所行は御自分で責任をもつてゐらつしやらなきやいけませんよ。

久　おれの責任とお前の責任とに區別はつきやしないよ。

みや子　此處へ來てまで理窟詰めの言合ひをしたつてはじまらないわ。……お互ひに詰らないことを云つて氣持を惡くするよりは、直さんを起しませう。

久　それもさうさ。（直の傍へ寄つて聲を掛ける）オイ、起きないか。こんな所で寢てると風邪を引くぜ。

（直、驚いて目を醒ます。そして、不思議さうに久の顏を見る。

久　（笑ひ〳〵）何だ、寢呆けてゐるのか。今日はよく來て呉れた。偶然お前の歡迎會を今日此處で開くやうな譯になつたね。

直　僕の歡迎會を？　それはどうも不思議だ。

みや子　（微笑して）わたしはどれほどあなたをお待ちしてゐたか知れませんのよ。

直　何故です？

みや子　わたしは、昨年の今日、あなたにお約束したことがあるぢやありませんか。

直　そんなことがありましたかね。（思出せないらしく）僕は親爺の葬式に出なかつたのが氣に懸つてたから、一

週年の忌日には歸つて來るつもりでしたが、此間から死んだ親爺の亡靈見たいなものに導かれたので、何の氣なしにうか〳〵と此處へ歸つて來ました。今日は死んだ親爺の誕生日でしたね。氣味の惡い演説をやらかして、僕等を脅かした日でしたね。

みや子　お父樣の亡靈に導かれたなんて、直さんも案外に迷信家なのね。（不快に感じてゐる）

直　去年姉さんは、親爺が兄弟中で僕を特別に贔屓にしてゐたやうなことを云つて、僕を喜ばしてゐなすつたが、僕たつて親爺に愛されちやゐなかつたんですね。親爺の申渡書のなかに、僕に對しても殘酷だつた。僕よりもあの子守見たいな女の方が、親爺には價値があつたのだから可笑なものさ。

久　（嚴かな口調で）しかし、親爺も心に疚ましいところがあつたと見えて、あの後安眠が出來なかつたらしいよ。絕えず催眠藥を用ひてゐたらしい。それで、過度にさういふ藥を用ひたことが、死亡の原因になつたんだね。……源七は親爺の死んだことについて何か云つてゐなかつたか。

直　いや、何も云はなかつた。此方から訊きもしなかつた。……しかし、親爺が安眠が出來なかつたと云ふのは、僕には少し呑込めないね。親爺は自分が子供の我儘な感情を害したのを神經に病んだといふのは、僕には合點が行かないね。

久　そりや、お前がまだ子供を有たないから分らないのさ。子供に對してあんな不實な事をしちや神經に障る譯だよ。

直　でも、あの親爺は世間一般の親とは違つてるんだからね。

久　（もどかしさうに）ぢや、お前はおれの言ふことを信じないのか。醫者がさう斷定してゐる。

直　僕はさう思つただけなんだが、……側にゐた兄さんやお醫者がさう認めたのなら間違ひはないだらう。

みや子　お父さんはあなた方御兄弟が思つてゐらつしやるやうな冷酷な方ぢやなかつたの。わたしには、以前から、父さんのお腹の中に溫いところのあることがよく分つてゐたんです。

直　まあ、そんなことはどちらでもいゝでせう。……僕は餓ゑてるから朝飯を源七に饗んで貰ふ筈になつたのだが、まだ支度が出來ないのか知ら……あちらへ行つて催促しませう。お話は腹がくちくなつてから伺ひます。

みや子　へえ、あなたはまだ朝御飯を召上らながつたの？

直　本當の一文無しで今日此處へ辿りついたんですよ。

（直はさう云ひながら出て行く。）

みや子　直さんも催眠藥の欲しさうな人ね。……だけど、あの人の催眠藥には結婚が一番なのよ。

久　まあお前のいゝやうにしてお吳れ。……おれは駄目だ。

（ベンチにぐつたり腰をおろす。）

みや子　駄目だなんて、あなたは何が不滿足なの。こんないゝ時候に、あなたは一家の家長として威張つてゐられるぢやありませんか。それにあなたのためには、人の出來ないことでも實行するやうなわたしが、蔭身離れずにあなたの側に隨き添つてゐるのぢやありませんか。くら子さんやさは子さんは、新しがつてえらがつても、とてもわたしの半分も、御自分のお匹偶のために眞心を捧げてやしないんです。……さあ、目をよく開けて青葉の美しい麗らかな景色を見て御覽なさい。あなたには御自分の幸福がちつともお分りにならないのね。

久　それは分つてるよ。……お前はあちらへ行つて、直の朝飯の世話をしてやつちやどうだ。

みや子　さうねえ。それに今日の持做しの準備に取掛らなきやなりませんわ。御馳走のことなんかわたしが考へて指圖しますから、あなたはそこらを歩いていゝ空氣でも吸つて、心を落着けてゐらつしやい。

（さう云つて出て行く。）

――幕――

（一）ノ二

（一）の三と同じ廣間。

久をはじめ四人の兄弟と、彼等の妻三人とが居並ぶ。

久　今日は珍らしい眞似はしなくつてもいゝんだが、皆んな珍らしく一しよになつて、直までも偶然此處に落合つたのをいい機會に、一言云つて置きたいと思つてるんだよ。（議長然として眞面目に云ふ）

（他の者は默つてゐる。）

久　他ぢやないがね。おれは家長の權を放棄しようと思つてゐる。

（他の者は默つてゐる。）

久　おれ達を除外して財產の處分をも勝手に極めかけた親爺は、實行に着手する間際になつて亡くなつたのだが、おれは、國家で極めた當然の權利をも自分の手で利用しなかつた。……おれ言葉の意味はお前達にも分つてるだらう。

（他の者は默つてゐる。）

久　おれはお前達の行動に少しも干涉をしなかつたし、第一、財產だつて、當然の相續者として當然に受繼いでいい筈のものを、充分には自分のものにしなかつたぢやな

いか、それはお前達も了解してゐるんだらう。

（他の者は默つてゐる。）

久　それだけではない、おれは今度も家長の權を放棄する前に、お前達のためには、出來る限りは自分の所有物を削がうと思つてゐる。

（みや子驚く。）

久　おれは決して、ひとり手におれの手に歸した物を私しようとは思つてゐない。だがら、今日から後は、おれの生活には關つて吳れないやうにして吳れ。お前達はおれの存在を心に置かないやうにして吳れ。おれを世にないもの同様に思つて吳ればいゝのだ。

（勉は氣六ケしく默つてゐる。四郎は微笑する。）

みや子　あなたはなぜ出し拔けにそんな非常識なことを仰有るんです？

久　（みや子の方を見て）お前は默つて聞いてゐればいゝのだ。

みや子　でも、わたしもこの會議に並ばされた一人ぢやありませんか。そんな氣紛れなことを仰有るもんぢやありませんよ。

久　いや、おれは一人で長い間熟考した揚句でから決心したのだ。

みや子　いゝえ、あなたは、つい先つき此處へ汽車で下りるまで、何も考へてなんかゐらつしやらなかつたぢやありませんか。あなたが此間うち物を考へてゐらしつたかゐらつしやらなかつたか、わたしにはよく分つてゐますわ。

勉　まあ、姉さんは默つてゐらつしやい。（と云つて、久に向つて）兄さん僕等に兄さんの生活に關つて吳れるなと云つたが、僕等は今までだつて、兄さんの生活に懸合つた覺えはない筈ぢやないか。僕は今まで、兄さん以外の兄弟の生活についても一言も、懸合ひをつけたことはなかつたよ。

久　ぢや、おれに對して少しも不平はないんだね。

勉　それは斷言する譯に行かないが。（氣六ケしい目で一座を見廻す）

四郎　皆んなが久兄さんに對しては一點の不平もないことに、衆議一決しようぢやないか。……お父さんが生きてゐて、去年此處でやつた演說の主旨が實行されてゐたなら、我々はみじめな目に會つてるんだからね。（快活に云ふ）

（一座暫く默つてゐる。）

直　僕は長い間留守をしてゐたので、實際の事情は分らないが、去年の親爺の演說に比べると、兄さんの今の演說は非常に貧弱だね。六十五の親爺でさへあんなに我々を

驚かしたのに、男盛りの兄さんの言葉は何と云ふ元氣のないことだらう。存在を認めるななんて、自分で云ふことぢやないね。

みや子　本當にさうですとも。

直　僕には合點が行かない。……僕は親爺が死んだ後では、皆んな慾を出して財産の奪合ひをやつてるに違ひないと思つてゐたよ。……僕が死んだ親爺の誕生日にノコノコやつて來たのも、內心慾に引かれて、分前をせびるために來たことになるんだが、さういふ野心を抱いてゐる僕が、歡迎されるは變だ。……かうして見渡したところ、皆んなが奧歯に物の挾まつてるやうな顏してるぢやないか。兄弟が若葉のいゝ時節に大磯の別莊に遊びに來てるといふ晴々した樣子はちつとも見えないぢやないか。……（四郞に向つて）四郞、お前はそんな思はせ振りな顏してゐなくつてもいゝだらう。

四郞　いや、僕にも云ひたくつても云へないことがあるよ。兎に角、親爺が死んだために、我々の時代が來たんぢやないか。……だから、過去のことを忘れて、不平のないことにしとかうぢやないか。久兄さんが自分の存在を忘れて呉れと云ふのなら、望み通りに忘れて上げたらいゝぢやないか。……（久を見て）兄さんはそれでいゝんだらう。會議はこれで終結したことにしようぢやないか。

直　贊成。

久　おれの云つたことに異議はないんだね。

（皆んな默つてゐる。久はなほ不安な顏をして出て行く。みや子隨いて行く。）

直　どうも腑に落ちない。……親爺の亡靈がこんな變な會議を見せに、おれを導いて來たのだな。

（久の後に隨いて出て行く。）

四郞　（勉に向つて）兄さんはまだお父さんの催眠藥に疑ひを挿んでるんだね。……だつて、いゝぢやないか。無用な事に精神を使ふのは馬鹿だよ。

（出て行く。さは子も隨いて行く。）

くら子　兄さんは蟲のいゝことを云つてるわね。……でも、あたし達は潔白なんですからね。死んだお父さんにだつて恨まれてやしないんだからいゝぢやないの。なにをまた詰らないことを考へてゐらつしやるの？　あたし、この廣間は大きらひなの。だつて去年のお父さんの顏が目に見えるやうなんですもの。さつきの兄さんの聲がお父さんによく似てるんだから、聞いてゐて氣持が惡いたらなかつたのよ！。さあ……、庭へでも出て行きませう。

（くら子、座を立つて出て行く。勉も隨いて行く。）

――幕――

(二)ノ三

(一)ノ二と同じい庭園の一隅。

直が木蔭に置かれた肱掛椅子に身を投げかけて午睡をしてゐる。そこへ、乞食姿のその男とその女とが、前の場に出た時よりも一層見窄らしく、且つ疲れた様子をして出て來る。そして、直を見つけて驚く。

その男　これは妙だ。またこの人がこんな所で午睡をしてゐるよ。

その女　この人はよつぽど午睡(ひるね)の好きな人なんだね。

その男　この前はこの人に怒鳴りつけられて追拂はれたのだが、今度はまさかあんな邪慳なことはしないだらうな。人のよさゝうな顔をしてゐる。……聲を掛けて目を開けさせようか。

その女　この人はこの前と同じやうに魘されてるぢやないか。

(二人は直の側へ寄る。)

その男　旦那樣。

(直、目を醒まして驚く。)

直　お前達も一年目で此處へ戾つて來たのか。おれも一年目で今日此處へやつて來たのだよ。

その男　へえ、旦那樣も何處かへ行つていらつしやつたんで御座いますか。

直　おれもお前達と同じやうに方々をうろついて來たよ。お前達は身延(みのぶ)へお詣りすると云つてゐたが、お詣りを濟まして來たのかい。

その男　お詣りはいたしましたが、何の御利益も御座いません。二人は喰ふや喰はずで一年の旅を續けました。

その女　身延には半年あまりも居りました。御信心が足らなかつたものですから、大した御利益は御座いませんのでした。何處まで行つても落着ける場所が見つかりませんので、生れ故鄕へ後戾りをして居ります。

直　お前達でも生れ故鄕へ歸りたくなるのかい。故鄕の者に相手にされる望みを有つてるのかい。

その男　わたくしは、家内に誘はれて身延へまゐりまして、また家内に連れられて、故鄕の方へポツ〱歩いて居りますが、ちつとも樂みに思つてるのぢや御座いません。……このお屋敷の後の山の洞穴にでも住まつてゐる方が、よつぽど氣樂なんで御座います。

その女　お宅樣の召上り物のおあまりでも頂けましたら、三日でも四日でも洞穴で草臥(くたびれ)休めをいたしたいので御座いますが。(女らしく媚びを浮べて云ふ)

(直はその女の媚びを見てギヨツとする。そして、そこを立去らうとしながら、足が縛りつけられてゐる樣

て動きかれる。）

その男　此方の御別莊番の方はお情深い方で御座いましたが、今も此方にゐらつしやるんで御座いますか。

直　あの男は無事で此處に住んでゐるよ、しかし、お前と同じ日に生れたといふ此處の御主人樣はあの後間もなく死んぢやつたよ。

その男　大旦那樣がお亡くなりなすつた？　御運のいゝお方だと思つて居りましたのに。……何御病氣で御座いました？

直　いえそれがよく分らないんだ。金があるから誰れかに呪はれたのかも知れないね。

その女　おや、毒藥でもお飲みになつたんで御座いますか。

直　（不機嫌らしく）　おれは知らないよ。お前達が呪つたのぢやあるまいな。

その男　飛んでもないことを仰有る？（取つてつけたやうに云ふ）

直　去年の今日は、お前達の來た後で、親爺は魔物にでも取付かれてるやうな樣子だつたよ。誰れかに呪はれてたらしかつたね。誕生日のお祝ひとは思はれなかつた……今日だつてさうだ。兄弟が大勢寄つてゐても、折角の御馳走があんまり賣れないらしいよ。お餘りがどつさりあるから、お前達に振舞つてやらう。……お前達に喰はせるために拵へてゐたやうなものだ。

その女　それはお有難たう御座います。

直　しかし、食物のなかに毒が入つてるかも知れないぜ。

その男　わたくしどもは毒ぐらゐは恐れやいたしません。御馳走を充分に頂いて、この屋敷でころりと往生が出來るものなら結構で御座います。

直　直ぐに持つて來させるから待つてゐろ。（直出て行く。その男冷嘲を含んだ目で見送る）

その女　人間の壽命は分らないもんだ。

その男　おれの呪ひが利いたのかも知れないぜ。

その女　そんな馬鹿なことがあるものか。

その男　おれと同じ日に生れた人間が一人くたばつたのだ。おれはいくらか胸が透いたやうに思はれる。

その女　お前がさう云ふ量見だから、身延樣でも御利益を授けて下さらないんだよ。

その男　人間がみんな死ぬるのだと思ふ外に、おれ達に樂みがあるか。ハヽヽ。

（さう云つて、彼れは、直の腰掛けてゐた肱掛椅子に腰をおろす。）

その男　さあ、お前も此處へ腰を掛けないか。おれと並んでお庭の景色を眺めてゐるやうぢやないか。

その女　あの若旦那がわたし達に親切さうな口を利いたの

は、どうも不思議でならないよ。

その男　追出されるまでは、おれは此處でかうして休んでゐよう。

（そこへ、源七が料理を盆に載せて持つて來る。その男が主人然と椅子にかゝつてゐるのを見ても咎めない。）

源七　一週年目にお前達の來たのは、佛のお導きのやうだ。さあ、そこで御馳走になんなさい。

その男　有難う。……大旦那はお亡くなりなすつたさうだね。若旦那の世になつて、お前さん達の給金は少しは增して貰へたのか。

源七　いや、誰れの世になつても、おれ達の懷中加減は同じことだ。

その男　それぢや詰らないな。（料理の盆を手に取つて、女を見て）さあ、御馳走にならうぢやないか。……おれ達は何年目でこんな結構な御馳走に有りついたことか。

その女　（源七に向つて）有難う御座います。（と云つて、箸を採る）

源七　今日の御馳走はお前さん夫婦に食べさせるために拵へたやうなものだ。そのつもりで頂きなさい。死んだ旦那樣の供養だ……。

（亡き主人の靈を追弔してゐるつもりで、目を瞑つて雙手を伸べて禮拜の眞似をする。その男夫婦は美食に舌鼓を打ちながら上目を使つて、不思議さうに源七を見る。）

（源七、目を開けて、夫婦と目を見合せていやな顏をする。）

源七　さあ、食べる物を食べたら出て行きなさい。今日はいゝお天氣だ。かういふいゝお天氣に夫婦連れで氣儘な旅の出來るのは羨しいよ。

その男　お世辭にもおれ達を羨んで呉れるのはお前さんくらゐなものだ。

その女　お前さんがこんな親切に惠んで下すつたことは、一生忘れませんよ。

その男　おれ達は直ぐに出て行かにやなるまいな。此處はおれ達の緣故のある家ぢやないのだから。……さあ出掛けようか。

（二人は源七に挨拶して出て行く。さつきから木蔭から覗いてゐた久とみや子とが入つて來る。）

久　氣味の惡い乞食だな。何處かで見たことがあるやうだが……。

みや子　あなたの氣の迷ひなのよ。

久　さうかなあ。おれの氣の迷ひなのか。……おれは、死んだ親爺と母親とがあゝいふ姿で現はれたのかと思つてたよ。（と沈んだ聲で云つてから、源七を見て）源七、

勉や四郎はもう東京へ歸つたのだらうな。

源七　ハイ、皆様お歸りになつたやうで御座います。

（直がつか／＼と入つて來る。源七は食器を持つて出て行く。）

直　僕だけはまだ此處にゐるよ。

久　お前はおれの云つたことに同意したのだらうな。

みや子　直さんは、氣儘な放浪生活なんぞ止して、いゝ加減で溫い家庭をおつくりなさいね。わたしは乾度あなたのお氣に入るやうなお嫁さんの候補者を見つけて待つてるんです。

直　それはまあ見あはせませう。去年の親爺の演說と今年の兄さんの演說で僕の心は腐つてしまつた。溫い家庭も冷たい家庭も、子供の製造は厭ふべきことですね。

みや子　兄弟中であなたお一人がいつまでも淋しさうぢやありませんか。

直　御好意は感謝することにして、僕はこれから、また一人で浮世を放浪しませう。あの冬は二人連れだつたが、僕は一人で放浪た。（ふと銳い目付をして久を見て）しかし、僕は分前を貰ひませう。

久　（ふと激昂して）何の分前だ？

直　（冷笑して）分つてるくせに。

久　お前も親爺の死因に疑ひを挾んでるんだな。

直　（芝居口調で）外の兄弟はどこにも疑ひを挾んぢやゐないよ。たとへ疑ひを抱いてるにしても、僕はハムレットぢやない。その疑ひのために煩悶苦惱はしないよ。……たゞ分前を充分に貰ひたいのだ。さうすれば、兄さんの望み通りに、兄さんの存在を忘れて、僕は放浪の旅へ出て行く。

みや子　（微笑して）今日は兄さんも直さんも、みんながどうかしてゐるのね。陽氣の加減で皆んなが逆上してるんですね。……もうお風呂が沸いたでせうから、二人で一しよにお入りになつて、頭をお休めになるといゝのよ。

―― 幕 ――

柿の木（一幕）

大磯のある別莊の庭に面した部屋。

庭の垣根に沿つて、一本の柿の木があつて、纍々と生つてゐる實が熟してゐる。しげ子はその下に立つて樹上を見上げてゐる。

青物屋の主婦が横から入つて來る。

主婦　柿が大分熟れてまゐりましたね。

しげ子　おや、いらつしやい。（主婦を顧みて）奇麗に熟れてるから、さつきから見惚れてゐるんですよ。

主婦　今年はどつさり生つたやうぢや御座いませんか。

しげ子　この木は一年置きに實が生るんですつてね。柿の木はどれでもさうでせうか。

主婦　さうでも御座いませんよ。お十夜を越しますと、この柿はタツプリ甘味がついて、そりやおいしくなるんですけど、それまでには數がポツ〱減つてまゐりますよ。

（微笑して云ふ）

しげ子　さうでせうね。（微笑して）時々石が庭へ落ちたり竿の音がしたりするんですから、月の明るい夜なんかには格別に、柿の實が減るんでせう。

主婦　お差支へがなければ、ソツクリわたしどもに讓つて頂きたいと思つてるんで御座いますが、いかゞでせうか。お宅樣ではお小さいのがいらつしやらないんだから、柿なんぞ召上らないんで御座いませう。

しげ子　わたしの家では、目の保養に見るばかりで、こんな不消化な果物は食べないんですけど、……でも、近所の子供が、柿が熟れた〱と云つて、欲しさうにして見てゐるんですから。

主婦　以前このお別莊をお持ちになつた方は、お前の家の商賣物になるのだから勝手に取れと仰有つて、ソツクリわたしどもにお任せになつてゐました。わたしども、店先へ並べるものを、決してたゞで頂きやいたしません。いつも相當なお禮はしてゐたので御座います。

しげ子　こんな柿でもお金になるんですかねえ。（氣乘りのしないらしく云つたが、ふと調子を變へて）主婦(かみ)さん、まあ休んでいらつしやいな。

主婦　わたしはこれから大辻樣へお伺ひしなきやなりませんのです。御後室樣がわたしに何か御用がおありになるので今お使ひを下さいましたから。

しげ子　大辻さんまでは遠くつて大變ですね。さう云へば、此間大阪屋の若主人が急に亡くなつたんですつてね。あ

んな丈夫さうな人が、どうしてそんなことになつたんでせう。

主婦　人間の壽命は分りませんさ。彼處の主婦(かみ)さんは病身だから、一人で商賣を續けるのは、なか〳〵骨で御座いませうよ。

しげ子　さうでせうとも。あんな大きく商賣をやつた家だから、女一人の腕では今までのやうに切廻せないでせうね、それに、青物屋もこの近所だけでも、この頃になつて二軒も新しいのが出來たやうだから、競爭が烈しいでせうね。

主婦　人間數と同じやうに、潰れる店よりも新奇に出來る店の方が數が多いんですからたまりませんよ。それに、わたしどもでは、小人數で手が足りないんですから、かなひません。

（青物屋の主婦は、さう云ひ〳〵、徐々にしげ子から遠ざかつたが、ふと足を留めて。）

主婦　あの大辻樣にお收めするつもりで、本場の葡萄のよろしいのを、甲州から取寄せたので御座いますが、お宅樣でも召上るのなら、お屆けいたしませうですか。

しげ子　入るやうだつたら、さう云つて行きますわ。……おや、左樣なら。

主婦　御免遊ばせ。

（主婦は出て行く。しげ子は緣側に腰を掛けて、なほ柿の木を見てゐる。）

（そこへ、しげ子の夫邦雄が障子を開けて出て來る。）

邦雄　柿を買ひに來たのかい。

しげ子　えゝ。でも、八百屋へ賣る譯には行かないわ。近所の子供が柿々と云つて、あんなに煩く騷いでるのに。

邦雄　僅かな金を貰つて、買ひ手に我物顔に取られちやいやだからなあ。

しげ子　アケビの實が一つ生つてゐたつて、子供はちやんと目をつけて、欲しさうにしてるんだからかなはない。この邊の子供はどうしてあゝ食物について敏感なんでせう。

邦雄　あの柿の木は邪魔つけだね。まるで落ち葉で庭を汚させるために有つてるやうなものだよ。この頃は毎日掃除をしても、次ぎから次ぎへ落ちて來る。いつそ切つちまふといゝんだね。

しげ子　味はよさゝうだし、見てると美しいんだけれど、あの柿の木のためには、わたしもこの頃、隨分神經を痛まされてるんですよ。……つまり、物を持つてるから苦勞があるんですね。

邦雄　さうだとも。こんな家だつて持つてるからこそ、手が掛つて爲樣がないんだ。

しげ子　いつそ今日のうちに、近所の子供に頼んで、柿の實をみんな取つちまはうか知ら。

邦雄　もう十日も置いとくとうまくなるんだがなあ。……しかし、どうせおれ達がいくつ食べる譯ぢやなし、今取つちまつてもいゝよ。

しげ子　わたしさうしよう。

邦雄　おれも子供の時分には木登りが上手だつたんだから自分で上つて柿を取つてもいゝよ。

しげ子　でも、あんな細い枝の上へ大人が登つちや危いでせう。

邦雄　隣りの子供を登らせて、若しも怪我でもさせたら親どもに恨まれるぜ。

しげ子　それはさうだけれど、子供はみんな喜んで登りますよ。

邦雄　（ふと後を顧みて）誰れか來たやうだな。おれが行つて見よう。（奥へ入る）

（しげ子は、垣根の隙間から此方を覗いてゐる人を見つけて「菊ちやんぢやないの？」と聲を掛ける。返事がなくつて、間もなく、新柄の派手な風をした酒井とく子が横から入つて來る。）

とく子　今日は。

しげ子　おや。あなたでしたの？　わたしはお隣りの菊太さんかと思つてゐました。今日は久振りで秋らしくなりましたわね。

とく子　此間うち毎日々々雨が降つて、家にばかり籠つてたもんですから、氣がくさ〳〵しました。この頃は東京の方へはいらつしやらないの？

しげ子　えゝ、秋になつてまだ一度もまゐりませんわ。……今日は近所の子供に頼んで柿を取つて貰はうと思つてますのよ。枝が往來へ出てゐるために、人に目をつけられて煩さくつて爲樣がありませんから。

とく子　庭園に果物を植ゑるのは罪惡ですわ。無邪氣な子供に盗み心を起させますから。

しげ子　まあ。酒井さんは六ケしいことを仰有るのね。さう云へば、女か派手な服裝をしてお化粧をして外へ出るのも、罪惡になるぢやありませんか。

とく子　（躊躇して）人間と果物とはちがひますわ。

しげ子　熟した果物は見てゐて美しいものですわね。

とく子　あたしは柿の實よりも木の葉に趣味を感じますわ。

しげ子　木の葉がすつかり落ちてしまつて、骨ばかりになつたところもいゝものですよ。

とく子　あたし、自分で別莊をつくるやうになつたら、木なんか一本も植ゑないで、庭一面芝生にしてしまひます

わ。

（そこへ、邦雄が緣側へ出て來る。）

邦雄　今來たのは支那人の燒つぎ屋だつた。……鳥屋の子のSが潛戸から覗いてゐたから柿を取つて吳れと賴んどいたよ。

しげ子　あら、Sをさきへ賴んぢやいけないんですよ。植木屋のKに賴んで、あの子の手で外の子を呼んで來させなければ。

とく子　そんなに面倒なんですの？

しげ子　子供同志でさへお出入りの繩張りが極つてるんですもの。

邦雄　外の仕事とはちがつて、柿はみんなに公平に配けてやるんだから、誰れに賴んだつていゝぢやないか。どうせ誰れかゞ一人木に登つたら、そこら中の子供が寄つて來るんだから、蟻が砂糖壺へたかつて來るやうに。

しげ子　（垣根の方を見やつて）あゝ、もう子供がやつて來ましたよ。……あんなに奇麗に生つてるのを今日は落してしまふんですね。（外の方へ向つて）Kちやん、垣根から登つちやいけませんよ。待つていらつしやい。

（三人が柿の木を見上げた時、熟した實が二つ三つ自から落ちて來る。）

――幕――

ある病室

人物

中塚鋭雄　患者（三十歳くらゐ）
丸山七郎　訪問客（三十歳くらゐ）
よね子　鋭雄の義姉（三十歳くらゐ）

バラック風の八疊敷の病室。机と火鉢が置かれてあるだけで、室内は甚だ殺風景である。机の上の白い壺にカーネーションとヒヤシンスとが生けてあるが、その花も萎びてゐる。ベッドには、患者中塚鋭雄が仰向けに寢ながら書物を讀んでゐる。その書物を枕許へ抛りだして欠伸を洩らしてゐるところへ、後のドアがノックされたので、彼れは頭を持上げて。

中塚　お入んなさい。（と、元氣のいゝ聲を掛ける）

（丸山七郎、つくり笑ひを浮べて入つて來る。）

丸山　昨日旅行から歸ると、君のことを西野に聞いて驚いたのだよ。（と云つて、ベッドの側に坐つて）病氣はどんなのだい。入院後もう一月にもなるといふぢやないか。

中塚　もうよつぽどいゝんだがね。しかし、僕も馬鹿を見た譯さ。ちよつとした傷を癒しに病院通ひをしたゝめに却つて丹毒に感染して、生きる死ぬるのひどい目に會はされたんだからね。

丸山　本當にひどい目に會はされたね。（强ひて調子を合せて）病院の方にも落度があるんだらう。……丹毒つて隨分怖い病氣なのだらう。

中塚　そりや怖いさ。（力を入れてさう云ひかけて、急におだやかに）しかし病氣の話はもう止さうよ。僕も訪ねて來る人ごとに同じ事を云つてるんだから話に飽いたよ。それよりもこの頃の世間の樣子を聞かせて呉れたまへ。君が今日見舞に來て呉れたのは丁度よかつた。僕が聞きたいと思つてることを聞かせて呉れるために君が來たやうにも思はれるんだから。

丸山　それはどういふことなのだ？　旅行の話なのか。

中塚　旅行話は外の日にゆつくり聞くことにして、それよりも、差迫つて僕が聞糺したい大切な問題があるんだ。……君は昨日西野に會つたと云つたね。

丸山　あゝ。

中塚　ぢや、西野から聞いたに違ひない。（獨合點をしてゐるやうに云つて）西野は知つてゐるくせに僕に隱してゐるんだから、僕は不平で堪らないんだよ。姉が僕に知ら

せたがらないのは止むを得ないとしても、西野までが隱し立てをするのは怪しからん。しかし、君は西野のやうに感傷的で、小さな人情に負けるやうな人間ぢやないから、テキパキした話を聞かせて吳れるだらう。それを僕が聞いたゝめにどういふ結果か現はれるにしても、君の性質としてそんな事を氣にしやすまいからね。

丸山　（呑込めない態度で）　何だか大變な事件らしいね。（二人は少しの間沈默。その間に、中塚は半ば身體を起して夜具に背を凭らせ枕で身體をさゝへる。）

丸山　一人で一ケ月も寢てゐちや窓屈たらうね。姉さんはよく來るのかい。

中塚　あゝ、姉は每日一度づゝは必ずやつて來るよ。この頃は親類や友人の訪問客が多くなつて、窓屈ところぢやない。ゆつくり考へようと思つてる場合に邪魔をされるくらゐだ。附添の看護婦もゐるんだが、今は用事で外へ行つてるんだ。幸ひ誰もゐなくつて君の話を聞くのに都合がいゝ。

丸山　ぢや、みんなが君に隱してゐる一大事件を僕に云はせようとするんだね。僕の責任は重い譯だな。（戲談のやうに云ふ）

中塚　僕の病氣がそのために惡くなる氣遣ひはないよ。却つてハツキリ分らないためにいろ〱に空想して神經を惱ましていけないんだ。（空想を浮べた目附をして）僕の家は僕の入院中に破產してるんだらう。兄の關係した事業は僕の入院前に大抵いけなくなりかゝつてゐたのだが、その後急轉直下の勢ひで、兄も破產の覺悟をするまでに惡運が進んだのに違ひない。病院の費用は前金で十分に拂つて吳れるし、兄は來なくつても、姉は機嫌のいい顏をして親身に世話をして吳れてるんだから、家の中に不吉な事が起つてゐようとは思はれない譯なんだが、姉の世間話のうちに、僕は勘付いたのだ、僕が問詰めると、そんなことはないから安心して養生して早くよくおなんなさい、退院後は溫泉へでも海岸へでも轉地療養に行けばいゝだらうなんて呑氣なことを云つてゐたが、僕は上べのうまい言葉で誤魔化さりやしないよ。僕に取つては大變な事件なんだからね。兄が破產して無一物になつたら、僕も一生の方針を立直さなけりやならんのだ。いつまでも悠長に構へちやゐられない。君や西野のやうに、生活のための職業を搜して、明日からでも働かなければならないんだからね。

丸山　君のいふ大事件はそんなことなのか。（冷笑を洩らして）破產の話なんぞ僕は聞きやしないがね。しかし何だらう。君の兄さんの事業が失敗したにしたところで、僕なぞとはちがつて、今日の生活に脅やかされるつてこ

とはあるまい。……俺は少しの病氣くらゐしてもいゝから、一月ばかり寢て暮して見たいよ。

中塚　君の云ひさうなことだね。僕も見舞人に憐まれるよりは羨まれた方が張合ひがあつていゝ譯だが、俺が全快してこの監獄のやうな病院を出る時には、世間がまるで變つてゐて、僕がこの羸弱な身體で勞働しなければならんと思ふと、外の患者のやうに退院を樂む氣にはなれないよ。

丸山　僕なぞは世間が變つて吳れゝばいゝと望んでゐるんだが、なか／＼變らないものだ。一月あまり社用で方々を飛歩いて歸つて來ても、東京は相變らず東京だよ。僕のためにはいゝやうにも惡いやうにも變つてやしない。ただ僕の留守中に、君が病院へ入つてゐたり、杉浦さんの妻君が家出をしたりしてゐたのが變つた噂の種になつてるくらゐなものだ。（詰らなさゝうに云ふ）

中塚　（吃驚して）杉浦の妻君が家出をしたつて？　そいつはいつのことなのだ。

丸山　さあ、もう十日も前のことなのだらう。僕は昨日西野に聞いたのだが、君はまだ知らないのか。

中塚　知らない。二三日前に見舞に來た時にも西野はそんな話はちつともしなかつた。姉からも聞かなかつた。

丸山　（冷然として）ぢや、病人にそんな話をしちやいけないと思つて云はなかつたのだらう。

中塚　それで、杉浦の妻君はどういふ譯で家出をしたのか分つてゐるのかい。事情を詳しく聞かせて吳れないか。（興奮を努めて壓へながら訊く）

丸山　僕が病人のところへ來て餘計なお喋舌をしたと思はれてもいけないね。

中塚　だつて君の方から話題を持出したんだから云つちまはにやいけないよ。僕は世間の出來事を知りたくつてならないんだ。世間の事情がひどく變つてるのをちつとも知らないで、退院して出拔けに世間へ歸つて行くのは何だか危かしいやうに思はれてならないんだ。僕は長い間高い熱でうなされて、いろんな夢を見たのだよ。その夢の中で、本當の事を見たやうにも思はれるので、どうかして夢を思ひ出さうとしてるんだが、ボンヤリして摑まへどころがなくつて困つてる。それで西野や姉に、僕の夢の糸口を開けさせようとしても、彼等は空呆けてゐて駄目なんだ。……君が來て吳れて丁度よかつた。

丸山　杉浦夫人の家出も、一つの新しい出來事に違ひないが、我々に取つて大して興味のあることぢやないからね。……杉浦さんは非常に煩悶をして、一たん無斷で家出をした妻君を、穩かに家へ呼入れるか呼入れないかで迷つてるさうだが、あのくらゐな程度の容貌で、あのくらゐ

な程度の人柄の女なら、一電車に一人くらゐは見つかる譯なんだから、どうたつたつていゝと僕には思はれるがね。夫婦となるとさう簡單には行かないものか知ら。

中塚　それで、妻君の行方はよく分つてるのかい。

丸山　實家へ歸つてるのだらう。家出した少し前には、夫婦で激しい言合ひをして、たまには取組合もやつたさうだが、別段妻君の身持が惡いのぢやあるまいし、主人が浮氣してるのでもあるまいし、問題はさう深刻ぢやなささうだ。……僕等よりも君の方が杉浦家とは懇意なんだから、あの夫婦の言合ひの事情をよく知つてるんぢやないか。西野はあの妻君に祕密があつて、杉浦さんがそれを嗅ぎつけたことから揉事が起つてるんだと極めてかゝつてるが、僕には信じられないよ。少し色つぽい樣子をする女を見ると、直ぐに男を拵へたがつてるやうに邪推するのは、世間の人間の惡い癖なんだよ。……人間は男でも女でも、さう大した不道德は出來ないものらしいよ。だからどつちを向いても世の中は平凡だ。（話にも倦怠を感じてゐるやうな風で欠伸を洩らして）さあ、僕はもうお暇にしようかな。君は横になつて安靜にしてゐなきやいけないんぢやないか。

中塚　まあもつと遊んで行つて呉れ。これで君に行つちまはれちや心殘りがしていけない。今に看護婦が戻つて來たら、見舞に貰つた葡萄酒の口を開けさせるよ。姉が午餐の副食物を持つて來る時刻にもなつてるんだから、君も久振りに姉に會つて呉れたまへ。

丸山　君の姉さんには旅行前にお目に掛つたよ。僕はいつになつても女の人には話がしづらくつていけない。杉浦さんの妻君に會つても窮屈で打解けられなかつたが、僕のやうな男は、結婚しても自分の女房にさへ打解けた口は利けないかも知れないね。

中塚　君がさういふ風だから、却つて婦人に信頼されてる。姉なぞは非常に君を信用してるよ。

丸山　さうかねえ。

中塚　だから今日は姉に會つて行つて呉れたまへ。僕は自分が死ぬるのぢやないかと思つてた時分に、君や石田さんの顏が頻りに目の前にちらついたよ。僕は深い谷底へ落ちかゝつてるのを、君や石田さんの手に縋りついて落ちまいと藻搔いてゐたのだ。それで君の事を譫言に云つてたらしい。熱に浮かされていろ／＼な譫言を云つてゐたのを、姉や看護婦にはよく聞かれてゐる譯だが、姉は僕の大切な譫言を聞いてゐながら知らん顏をしてゐる。今度こそ僕の腹の底まで姉に見透されてるやうで氣持が惡いね。（扉の方へ耳を留めて）あゝ、姉がやつて來るよ。あの足音がさうだ。

（丸山は居住ひを直す。中塚は寢床に横になる。）

中塚　もうよつぽどよくなつてゐるんだが、姉の前では苦しい樣子をしてゐるんだよ。

丸山　さうして甘えようと思つてるのかい。小細工をやるね。

（そこへ、年齡より華美な裝ひをしたよれ子が風呂敷を持つて、「御免なさい」と聲を掛けて入つて來る。丸山を見ると。）

よれ子　これはお珍らしい。いつ歸つていらしつたの？

（懷つこさうに云つて、押入から座蒲團を出して丸山にすすめ、彼女自身もベッドの側に坐つて）鋭雄さんの病氣には困りましたよ。一時は隨分ひどかつたんですが、元から神經質で病氣弱い人なんだから、御當人の騷ぎが容易ぢやなかつたんです。氣が弱いと病氣の癒り方もおくれますのね。

丸山　さうでせうね。

よれ子　（調子に乘つて）自分で死ぬることに極めて、遺言見たいなことを云つてゐたのですもの、私傍にゐて心細くつてなりませんでしたよ。私も氣の強い方ぢやないから、二人で泣いてゐたこともあつたのです。兄弟二人きりなんだから、どうあつても鋭雄さんに生きてゐて貰はなければ困るんですからね。

中塚　姉さんはまた誇張して話してる。僕は死ぬる覺悟はしてゐたが、姉さんと泣合つたりなんかしたことはありませんよ。三十にもなつてメソ〳〵泣くなんて人聞きが惡いな。

よれ子　ぢや、泣いたことは取消しね。（快活な笑ひを洩らして）だけど、あなたは大厄に會つた時に私と泣合ふのは恥かしいと思つてゐるの？　三十にも四十にもなつたら、人間は泣いちやいけないんでせうか。丸山さんはどうお思ひになつて？

丸山　（興がなさゝうに）そんな問題は僕には解りませんね。

中塚　そんな問題よりも、杉浦さんの家庭はどうしました。

よれ子　（怪訝な顏して）杉浦さんの家庭？　あしこは別段變つたことはないでせう。

中塚　あしこの妻君は家出をしたといふぢやありませんか。姉さんは知つてゝ僕に隱すんですね。（責めるやうに云ふ）

よれ子　あなたは誰からお聞きになつて？　あの奧さんは身體の加減が少し惡くつて、一週間ほど前から、保養を兼ねてお實家へ歸つてゐらつしやるのよ。そんなことをあなたに隱すも隱さないもないぢやないの。

丸山　西野君は何でも大袈裟に話すからいけないよ。

よね子　西野さんが杉浦さんのお家のことを何とか云つてらつしやつたんですか。……でも、二三日前に、あの奥さんから頂いたお手紙には、變つたことは何も書いてありませんでしたよ。近々に歸つてゐらつしやるんでせう。

中塚　本當にあの家庭には何事もないんですか。不思議ですね。

よね子　杉浦さんのお家に何事もないのはあたり前ぢやないの。あなたのお家へはよく遊びに行つてゐたのだから、内輪のことも知つてゐるでせう。

中塚　ぢや、杉浦家も無事だし、僕の家も破産の心配はないし、世間に變つた事はないのだから、僕は安心して退院していゝ譯なんですね。

よね子　さうですとも。あなたが退院したら、皆さんをお招きして全快祝ひをしませうよ……。丸山さん、その時は是非入らしつて下さいましな。

丸山　（外の事を考へてゐたのが我れに返つたやうに）　ええ。

中塚　姉さん、そこの葡萄酒の栓を拔いて來て下さいな。少しなら僕も飮んでもいゝでせう。

よね子　さうですね。お茶代りに丸山さんに差上げることにしませうね。

（よね子が葡萄酒の壜を提げて出て行くと、中塚は身體を擡げて。）

中塚　姉があゝ云つてゐても、僕はまだ疑つてるんだよ。あるひは姉は杉浦家の眞相を知らないのかも知れないね。君は、石原さんや西野によく聞糺して、詳しいところを手紙で僕に知らせて呉れたまへな。

丸山　それは知らせてもいゝが、知つてどうするのだ？　あの家の夫婦間の事が君にどういふ關係があるんだ？

中塚　君になら打明けてもいゝだらうな。（考へ深い目をして）實は何だよ。あの夫婦間の爭ひに僕自身の事が關係をもつてゐやしないかと思つて……。

丸山　（ニヤリと笑つて）　それは不思議だ。あんな妻君と君との間に變な譯があるとかないとか云ふことなのか。

（侮蔑するやうに云ふ）

中塚　僕にそんな後目たいことのあらう筈はないんだが、世間の人にさう誤解されてゐやしないかと思つて。

丸山　誰がそんな誤解をしてるんだらう？　僕はかつて誰からも聞いたことがないよ。

中塚　西野も僕の事に話を觸れてやしなかつたか。

丸山　うん。……全體君のやうな男があんな女とどうだのかうだのと云ふのは滑稽ぢやないか。僕には人情がかつたことは一切解らないが、しかし、杉浦さんの妻君と君との仲が怪しいなんて、想像も及ばない突飛なことだよ。

中塚　そんなに侮辱するものぢやないよ。僕は少し馴々しく交際し過ぎてゐたから、世間の分らずやから誇らないいかと思つてゐたのだ。……その事件と兄の破産の事と二つの事件が、病氣中に僕の頭の中に渦を卷いてゐたのだが、さつき偶然に君の話を聞いたので、そのうちの一つの事件は僕の杞憂でも妄想でもなかつたと思はれだしたのだよ。……斷じてそんなことがないものなら、僕も安心して退院が出來るんだがね。

丸山　斷じてそんなことはないから安心してゐたまへ。……君が病院生活から世間へ出て行つても、世間は平凡無事で別段に異つたことはないんだから安心してゐたまへ。

中塚　僕は二十日ばかりの間は、生きる死ぬるの苦しい目をして來たのだが、世間はその間に少しも異つてゐないのかなあ。（獨言のやうに云ふ）

丸山　誰れかゞ一つ變つたことをやらかさないものかなあ。（獨言のやうに云ふ）

（そこへよれ子、葡萄酒の口を開けて持つて來る。）

よれ子（中塚に向つて）此間足を切つた人が、もう松葉杖を突いてトン〳〵廊下を飛んで歩いてゐるのよ。血色のいゝ顏してニコ〳〵して。元氣のいゝのにわたし感心しちやつたわ。

中塚　病氣を治療して貰つても、一本足になつちやたまらないな。一本足になつて生きてるより死んだ方がいゝと僕には思はれるけれど。

よれ子（葡萄酒を二つのコップに注ぎながら）一本足でも大隈さんのやうにえらくなりやいゝぢやありませんか。

中塚　足が一本でも目が一つでも、天下の豪傑には大して不幸にはならないんでせうね。僕のやうな凡人にや、指にサヽクレが出來ても、眼の中へ砂つぽこりが入つたゞけでも、世に生きてる瀨がないやうにおもはれるんですよ。

よれ子　不斷はそんなでもなかつたのに。大病をしたせゐですかしら、氣が弱くなつたのは。

（中塚と丸山とは、よれ子が注いでだした葡萄酒を飲む。）

中塚　酒は久振りだから腸に染みるやうだ。……兄貴は晩酌のお相手がゐなくつて淋しがつてるでせう。

よれ子　でも、この頃は忙しくつて歸りが遲いから、家で晩の御飯を食べることは滅多にないのよ。わたしこそお相手がなくつて淋しいの。一人でボソ〳〵御飯を頂くのは詰らないものね。

中塚　だつて、兄貴はよつぽど遲くなつても、大抵は家へ

歸つて食事をしたのに、この頃はどうしたんでせう。いくら仕事が忙しいといつても、夜中外を驅廻つてる譯ぢやあるまいし、僕には得心が行かないな。

よね子　またあなたの心配がはじまつたんですか。退院したら解るわ。

中塚　兄が僕の入院した當時に一二度來たつきり、ちつとも顏を見せないのも、僕には得心が行かないんです。兄貴が一人の弟に對して冷淡でないことはよく分つてるんだから、兄貴が見舞に來て吳れないのは、外に理由があるに違ひないと、僕は思つてるんです。

よね子　ぢや、わたしがどう云つたら、あなたの得心が行くんでせう。いやでも、兄さんの事業が失敗して、わたしの家が破産したことにしなきやいけないの？（氣六ヶ敷い顏して云ふ）

中塚　それでは云ひますがね。姉さんはいくらお粉飾をして來ても、快活らしい風をしても、この頃は次第に窶れてゐますよ。僕の入院前に比べると姉さんは窶れてる。僕の病氣を苦に病んで窶れてるのだと思つてればいゝ譯だが、義理の弟の病氣のために義理の姉が神經を疼めて窶れるなんてことは僕には信じられないんです。もつと痛切に姉さんの胸を苦めることがあるに違ひないと思はれるんだが、さうぢやないんですかね。

よね子　（不平な顏に現はして）　鋭雄さんはわたしをそんな不人情な女と思つてるんですかね。あなたの病氣を心底から氣遣つてゐればこそ、毎日々々樣子を見に來るんぢやありませんか。そのためにわたしの神經も疼んで夜も眠れないことがあるんです。本當の弟と義理の弟との區別をつけたことは一度もない筈なんですがね。（次第に興奮して言語がきつくなる）毎日見舞に來るのも遊びぢやないんです。お粉飾をして毎日病院へ遊びに來るやうにあなたに思はれちや、わたしは立つ瀨がない。あなたはそんな風に思つてゐるんですかね。わたしは長い間思ひちがひをしてゐた。お腹の底は兄さんもあなたも同じなんですのね。

中塚　僕の言ひ方があなたの氣に觸つたら堪忍して下さい。……僕の病氣のために姉さんまで窶れさせちや濟みませんね。

よね子　口先だけで何を云つたつて駄目ですよ。……兄さんはあなたのゐないのをいゝことにして勝手な眞似をしてゐるぢやありませんか。夜更しも夜泊りも、仕事のためだか何のためだか……。

中塚　兄貴が僕のゐないのをいゝことにして遊ぶつてことはありませんよ。それは姉さんの誤解だ。兄貴はそんな男ぢやありませんよ。

よれ子　ぢや、さう思つてゐらつしやい。（丸山の方を向いて顔を柔らげて）丸山さんの前でこんなことを言合つたりして、お恥かしい譯ね。

丸山　なあに。（強ひて笑ひを浮べて）僕はもうお暇しませう。

中塚　（あわてゝ引留めるやうに）まあもつとゐて呉れたまへな。

（よれ子は、丸山を引留めるためのやうに、その前のコップに葡萄酒を注ぐ。壜を持つたよれ子の手付に、二人の男は一しよに目を注ぐ。見られてゐるのに、よれ子も氣がつく。）

よれ子　わたしの手付が變だと思つて見てゐらつしやるの？

（丸山は極りの惡さうに目を外らす。中塚は遠慮なく見詰めてゐる。）

中塚　姉さんの手は非常に瘦せてると思つたのです。

よれ子　だつてわたしの手は、以前から此處の看護婦さんのやうに太つたことはありませんよ。（自分の手を自分で見て）丸山さん、わたしの手は人並よりもさう瘦せてる方ぢやありませんわね。

中塚　世間の女と比較してどうだらうとも、以前の姉さんの手よりは瘦せてゐますよ。僕は入院前に、兄さんの晩酌のお酌をして上げてゐた姉さんの手をよく知つてゐるんだが、僅か一月あまりの間に、こんなに瘦せたのは不思議ですね。……それも僕の病氣を苦に病んだために瘦せたのでせうか。（皮肉に云ふ）

よれ子　（相手の皮肉は感じないで）さういへば、わたしの手は瘦せたかも知れない。一人で心配してるとこんなになるものですかね。（溜息を吐く）

中塚　だから一人で心配してゐないで、僕にでも打明けたらいゝぢやありませんか。あるひは姉さんは氣がついてゐないのか知れないが、兄貴は事業の手ちがひから失望して、家にゐつかなくなつてるのかも知れないんですよ。僕の兄は放蕩をする男ぢやなかつたんです。

よれ子　あなたが保證なされば確かでせうね。でも、あなたの保證なさるのは昔の兄さんのことで、今の兄さんのことぢやないかも知れないわね。

中塚　僕は人間の中では兄貴一人を信じてゐたのに、事業には失敗しようが破產しようが、兄貴の精神だけは、天地がひつくり返つても疑はないでゐたのに、姉さんは僕の信仰を破壞しようとするんですか。何年も一しよに居て平和に暮してゐたあなたがさう云ふんだから、僕も考へて見なけりやなりませんね。兄貴がこの頃一度も見舞に來て呉れないのを、破產の所爲（せゐ）にしてゐたんですが、

さうぢやなかつたんですか。來なくつても、腹のなかぢや僕の病氣を心配してるに違ひないと思つてゐたんですが、さうぢやないんですか。

よね子　それはあなたが退院して、兄さんにぢかに聞いて御覧なさい。毎日お見舞に來てゐるわたしと、此方へ寄付かない兄さんと、どちらがあなたのことを案じてゐるか、後であなたにもよく分るでせう。

中塚　僕があんなに苦んでゐた間に、世間に何事もないつてことはないと思つてゐた。（澁面をつくつて）丸山は興味をもつて聞いてゐるんだらうね。

丸山　たいして興味のある話でもないぢやないか。……姉さんは戯談に云つてゐらつしやるんだらうのに、君はムキになつてるから可笑しいことは可笑しいがね。

中塚　僕のやうな男が杉浦の妻君と何かの譯があると、人に思はれてると思ふのは滑稽だと君は云つてたね。僕が姉さんの話でムキになるのも君には可笑しいんかい。世間には滑稽なことが多いんだらうが、僕はどつちを向いても笑つていゝことはありやしない。

よね子　可笑しい話をしてあなたを笑はせて上げたいけれど、今日はわたし、そんな氣になれないから、お暇しますわ。

丸山　僕もお暇しよう。

（中塚は引留めようとはしないで目を外へ轉じる。丸山とよね子とは中塚に會釋して出て行く。よね子は扉を締めかけて、室内を顧みて、「都合でお午過ぎに來ますわ」と、お愛想を云ふ。中塚は相關せざるやうに默々としてゐる。）

（やがて、中塚は手を伸して葡萄酒の壜を引寄せて、コツプに注いで二三杯も飲む。）

（舞臺稍々暗くなる。）

中塚　（獨白）さつき姉が注いで呉れた時には、話に氣を取られて何の氣なしに飲んだが、この葡萄酒は質がよくなさゝうだ。安物だな。どうせおれの病氣見舞に寄越したものにいゝ物のあらう筈はない譯か。……馬鹿に暗くなつたが、空模様が變つたのかな。それにしてもあんまり暗過ぎる。（周圍を見てから立上つて、窓の側へ寄つて外を見る）雨が降つて來た。えらい雨が降つて來た。（しかし舞臺で雨の音はしない）丸山も姉も出拔けの雨に困つてるだらう。この頃の季節にこんな大雨の降るのは不思議だ。

看護婦の奴何處まで行つてるんだらう。この大雨に會つたら、歸りがおそくなるだらうが、おれは何だか氣色が惡くなつた。（ヨロ／＼と足を動かして寢床に戻つて倒れるやうに横になる）惡い葡萄酒のせゐか知ら。さつき

姉なんかの話に馬鹿に興奮したせゐだらうか。詰らないことに神經を痛めたためか。……非常に熱が出て來た。脈も早い。（自分で病狀を診察するやうに額や手に觸つて見る）以前のやうに病氣が逆戻りしなければいゝが。餘病が起つてるのぢやないか知ら……姉でももつとゐて呉れゝばよかつた。

（舞臺一層暗くなる。そこへ、突然姉が入つて來る。中塚、寢床の上に起上る。）

よれ子　雨がひどいから引返して來ましたよ。わたしズブぬれになつたの。

中塚　よく歸つて來て呉れました。僕は急に弱つてるところなんです。

よれ子　（相手を睨むやうに見て）あなたはわたしのやうなものでも手頼りにするんですか。義理の姉なんぞ心から自分を思つて呉れるものぢやないと云つたくせに。

中塚　だつて、此處には姉さんの外に誰もゐないぢやありませんか。看護婦でもゐて呉れゝばいゝんだが、いつまでも歸つて來ないし、獨りでゐると、僕の目の前にいろんないやな奴がちらついて、僕を苦めてしようがないんですよ。（自分の頭を掻毟るやうにする）

よれ子　だつて、わたしもあなたの目の前にちらつくいやな奴の一人ぢやないの？

中塚　（相手を注視する）そんな筈ぢやなかつたのに。……本當の姉さんは、此間僕の苦んでゐた時には、一しよに泣いて呉れたのに、あなたはちがふ。

よれ子　いゝ歳をして泣くなんて見つともないと、あなたは云つてゐたぢやないの。しつかりなさいよ。（外へ耳を留めて）ひどい雨だ。傘を持つてゐないし、容易に止みさうぢやなし、わたしどうしよう？

中塚　（無緣の人を見る如く、相手を見て獨白の如く）手が瘦せて目が窪んで、磨いた顏が雨で剝げて、骸骨のやうだ。

よれ子　なにを獨言を云つてるんですよ。あなたは熱に浮かされても、女の顏の事を氣にしてるの？

中塚　（獨白の如く）僕はかういふ兄や姉の家へ歸つて行かなきやならないのかなあ。

よれ子　氣分が惡いのなら、直ぐにお醫者さんに診てお貰ひなさいよ。わたしがさう云つて來るから。

（よれ子、扉を開けて行く。舞臺ます／＼暗くなる。間もなく中塚のうなり聲が聞える。花壺の落ちる音、机の倒れる音。暗闇の中へ入つて來た看護婦が何かにぶつつかつて倒れる音。キャッと叫ぶ聲。騷がしい廊下の足音。）

よれ子の聲　大變です／＼早く來て下さい。（けたゝまし

く叫んだあとで、獨白の如く）何といふ恥さらしだらう。
いつそ病氣で死ねばいゝのに。

――幕――

間違ひ

人物

秋山樂三
妻　あさ子
氷川榮吉
西田種雄
岸邊みどり子

輕井澤の林間のある別莊建ての小さな家。家の一方には車井戸があつて、そのほとりに秋草が茂つてゐる。

簡易な洋裝をしたあさ子（秋山樂三の妻、三十歳くらゐ）濡緣に置かれた小さな籐椅子に腰をおろして、氣取つた樣子で英書を讀んでゐる。

樂三（三十五歳くらゐ。羸弱らしい男）林の間から、浴衣の着流しで、ステッキを振り振り出て來る。

（あさ子、夫の足音に氣がついたらしく、讀耽つてゐた書物を目から離して、そちらを覗く。）

あさ子　もう歸つていらしたの？

樂三　あゝ、池の側へ行きつくまでにスッカリおれの考へが變つたのさ。（と、輕く云つて空を仰いで）今日はよく晴れてるから、外を歩くと可成り暑いよ。

あさ子　考へが變たつて、どう變つて？（冷淡に訊いて）全體あなたは何を考へていらしつたのか知ら。

樂三　お前の考と略々同じやうになつたのだ。

あさ子　あたしと同じやうに？

樂三　あゝ。氷川なんぞにどう思はれようと氣に留めなくつていゝんだね。

あさ子　なあんだ。（詰らなさゝうな顏して、嘲けるやうな口調で云つて）考へが變るとか變らないとか云ふのは、そのことだつたの？

樂三　だつて、お前もさつき熱心に主張してゐたぢやないか。

あさ子　それはさうですとも。あなたがあのくらゐなことを氣に掛けて、どうしても辯解しなければならないと云つて、いきり立つて出ていらしつたのは、あたしには可笑しくつてならなかつたんですもの。氷川さんやあの奧さんにはあたし達の心理狀態はとても分りつこはないんだから、何とでも勝手に思はせて置けばいゝのよ。

（彼女が次第に、思上つた口調で云ふと、今度は樂三の方で、妻の得意らしい言葉なんかを意に介しないら

しく。）

樂三　外が涼しくつて、足もだるくならなかつたら、豫定通りに氷川の家を訪問する筈だつた。

あさ子　いらしつたら言譯をなさるつもりだつたの？

樂三　さあ。あの二人の顏を見たら、言譯をしたかも知れないね。おれ達が氷川の舊惡を喋舌つたのは、二人の仲を氣まづくさせるためぢやなかつたと、言譯をしたかも知れないよ。

あさ子　どうせ、そんな言譯なんかは快く聞入れて吳れやしないでせうのに。

樂三　でも、友人に誤解されるのはいゝ氣持ぢやないからね。成るべくなら誤解を解いて置きたいと思つたのだが。……しかし、雲場ヶ池の側まで歩いて行くうちに、スッカリ考へが變つたのさ。今朝の離れ山登りでいゝ加減疲れてるところへ、疲れた足を引摺つて他人の御機嫌直しに出掛けるなんて、隨分詰らないことだと思ひ直して、風月へ寄つてレモンチーを飲んで、ビッコ引き〳〵歸つて來たんだ。

あさ子　（欠伸まじりに）ぢや、今日はお止めにしても、今度氷川さん御夫婦にお會ひになつた時には、言譯をなさるおつもりなのね。

樂三　明日の事は分らないさ。

あさ子　そんな詰らない事にでも拘つて日を暮さなければ、あなたも退屈なんですね。

樂三　兎に角、おれは疲れたよ。あのくらゐな山へ登つてこんなに疲れるやうぢや、おれの體力もよつ程衰へてるんだな。

（樂三は部屋へ上つて足を投出す。）

あさ子　でも、輕井澤へ來てからいくらか丈夫さうになつたぢやありませんか。（夫の方を見おろす）

樂三　此方は日が強いから、手足が日に燒けて、上べだけは丈夫さうになつたかも知れないが、それは見掛けだけだよ。

あさ子　上べが丈夫になつたら、自然と心も丈夫になるものなのよ。

樂三　さうだらうね。お前もこの頃は上べを元氣にして虛勢を張つてるから、精神も次第にしつかりして來てるんだらうね。結構なことだ。

あさ子　（微笑して）そりや、虛勢でも張通せると、結構なことなんですけれど。……あたし、さつき實彈で一發試みて見たのよ。

（彼女は、衣服のカクシから、六連發のピストルを取出して、空を目掛けて身構へをする。樂三、不快な顏をして身を起す。）

欒三　うつかり鐵砲の音なんかさせちやいけないよ。巡査にでも聞かれちや面倒ぢやないか。

あさ子　大丈夫よ。自動車がパンクした時ほどの音もしないんですもの。……今あなたが歸つていらつしやる時に、誰れかこの邊を通つてゐて？

欒三　いや、この邊には人間の影は見えなかつたけれど。

あさ子　ぢや、構はないわ。世間を離れたこんな所でこそ、稽古をしとかなければ、まさかの時に役に立たないから。

（あさ子、ピストルを一發放つ。）

欒三　いやな音だ。……それがお前の守護神なのかい。

あさ子　いゝ音だわ。意氣地のないあたしにも力を添へて吳れる音なのよ。

（そこへ、氷川榮吉（三十餘歳、事務的な背廣を着てゐる。堅實な男らしい風采態度）が、今の音を不思議に感じたらしい樣子で入つて來る。）

（あさ子、人の足音に驚いて、慌ててカクシへピストルをしまふ。やがて、榮吉の姿を見ると。）

あさ子　オヤ、氷川さん。（と、思はず云つて、不安らしい目で夫の方を顧みる）

（欒三も不安らしく立上つて、不意の來客の方を見詰める。）

欒三　僕は今、君の家へ行きかけて、途中から歸つて來たのだよ。

（彼れが率直にさう云ふと、あさ子は顏を蹙める。）

榮吉　僕の家へ行きかけたつて？　どうして？（緣側へ腰を掛けて、訝しげに）今こゝで變な音がしたやうだつたが……。

欒三　ハ、、。あれは何でもなかつたのだ。空氣銃で小鳥を脅かしただけなんだよ。

榮吉　退屈さましにそんなことをしたと云ふのかい。（腑に落ちぬらしくあたりに目を注いで）僕は今、意外な電報を受取つたので、ビックリして警察署へ行つたところなんだ。

欒三　警察署へ？

榮吉　家内の姪が遺書をして家出したといふことなんだがね。電報では事情がよく分らないんだが、淺間へ自殺に行つた虞れがあるらしいんだよ。

あさ子　奥さんの姪と仰有るのは表町のみどり子さんのことぢやなくつて？

榮吉　さうです。あの子は溫和な女で、そんな奇矯なことする譯はないんですが、分らないものですねえ。

欒三　しかし、若い女が單獨で出掛けたんぢやあるまいね。

榮吉　無論さうだらう。連れは誰れだか、電報ではよく分らないんだが。

あさ子　それは、奥さんは御心配ですわね。
榮吉　なに。あれは大して心配はしてやしませんがね。……
…兎に角、面倒なことが起つたものだ。僕はこれから淺間方面へ捜索に出掛けにやならないんだが、今朝の山登りでグツタリしてるところなんだから、東京から捜索隊がやつて來るのを待つてゐようかと思つてる。
あさ子　（稍々昂奮して）そんなにゆつくりしていらつしてもよろしいの？　一時ちがひで、助かる者までも殺すやうなことがないとは云へないぢやありませんか。
榮吉　さう云へばさうですが、（氣乘りのしないらしく）僕には電報だけでは雲を掴むやうで、當てのない捜索をはじめる氣になれないんです。これから淺間へ登るなんて大變ですからね。僕の身體がまいつちまふかも知れませんよ。まあ、東京から人が來て、よく事情を聞いた上で方針を極めることにしませう。家内もさう云つて居ります。電報を讀んだ時には、僕もハツと思つて、直ぐに飛出して、淺間へでも一氣に駈上らうといふ氣持になつたんですが、家内の方がそれを危險に思つて、極力反對しました。
（三人は、投身者のことでも考へてゐるやうに、暫く默してゐる。）
榮三　あんな高い山へわざ〳〵身を投げに登る人があるんだから、不思議なものだな。
あさ子　でも、噴火口を見ると何とも云へない莊嚴な感じがすると云ふぢやありませんか。
榮吉　莊嚴な景色を見ると死にたくなるものか知ら。僕のやうな俗物には理解されない心理狀態だね。（緊張してゐた氣持も次第に緩やかになつたらしく）ところで、奥さん。電報のお蔭で家庭の波瀾が一時鎭まつたんですから妙ぢやありませんか。
あさ子　家庭の波瀾ですつて？　氷川さんのお宅にも波瀾がおありになつたの？　不思議ですわね。
榮吉　奥さんは人が惡いな。豫想していらつしやつたくせに。
榮三　ハヽヽ。離れ山で、結婚前の君のローマンスを我々が話題にしたことなんだらう。あんなことが波瀾の原因になつたのかい。我々は決して君の奥さんを焚付けるつもりぢやなかつたのだよ。調子に乘つて少し誇張したやうだつたから、實は取消しをするために、君の家を訪問しようとしたのだがね。
あさ子　あの時奥さんは笑つて聞いていらしつたぢやありませんか。
榮吉　僕にしても、あんなことを今時持出されて座興にされるのは不愉快ですよ。あなたも秋山君も、どういふつ

もりであんな詰らないことを面白がつて話したんです?

外にいゝ話の種がなかつたからですか。

あさ子　わたくしどもは、別段あなたのお氣に障るやうなことを云つた覺えはないのですけれど……。

榮吉　（あさ子の顏をまじ〳〵見て）濟んだことは爲方がありませんが、今度からあんないやな話は御免蒙りますよ。僕も自分の過去の醜態を、輕井澤の山の上へ登つてまで、思出したかないんですから。

榮三　あれは謝るよ。

榮吉　謝つて貰はなくつたつていゝんだがね。（ふと何か思出したやうに立上つて）僕はかうしちやゐられないんだ。も一度警察へ寄つて様子を訊ねて、それから一先づ家へ歸つてゐよう。……あの子も餘計な人騷がせをしたものだ。

（彼れは、二人に輕く會釋してから、コツ〳〵と出て行く。）

あさ子　あれで鬱憤晴らしをしたつもりなのね。あなたは謝るからいけない。

榮三　腹から謝つた譯ぢやないが、お前は氷川のやうな生眞面目な男を揶揄つて何が面白いんだ。

あさ子　だつて、あすこの奧さんは御自分の御亭主ほどの品行方正な謹嚴な男子はないやうに思つてるのが、滑稽でならないんですもの。

榮三　さう思つてゐたつていゝぢやないか。

あさ子　お友達のよしみに、もつと本當のことを知らせたいと、あたし思つてゐたんですわ。

榮三　（笑ひ〳〵）お前にそんな親切があつたのかい。おれは、時のはずみでちよつと揶揄つただけなんだが、お前はさうぢやなかつたんだね。

あさ子　そのくらゐな事で家庭の波瀾も何もあつたものですか。お目出たいにも程があるわ。

榮三　さう云ふと、お前なんかは浮世の苦艱を脊負つてゐるやうだが……。

（彼れがさう云つて寢ころぶと、あさ子は椅子に腰を掛けて、讀みかけの書物に目を注ぐ。）

榮三　本當のことを云ふと、氷川の妻君の姪は本當に淺間へ身投げに行つたのだらうか。……氷川はそんなに驚いてゐなかつたし、おれ達も、近所にそんな大事件があつたやうな氣がしないぢやないか。

あさ子　でも。電報でさう知らせて來たのなら、噓ぢやないでせう。みどり子さんも身投げの決心をしたのならえらいのね。

榮三　それはえらいかも知れないが、身投げの決心がさう簡單につくだらうか。お前はあの子と可成り懇意なやう

だつたが、相手はどういふ男だか知つてゐるのか。

あさ子　あたし、なんにも知らないの。

（彼等が互ひに感興のない口調で、そんな話をしてゐると、そこへ、西田種雄（二十餘歳の活潑な男）帽子を取つて、長い髪の垂れかゝつてゐる額の汗を拭ひながら、家の樣子を伺ひ伺ひ入つて來る。）

あさ子　まあ、お珍らしい。西田さんは輕井澤へ來ていらつしやるの？

（あさ子愕然として立上る。）

種雄　今着いたのです。

あさ子　あなたもみどり子さんを搜しにいらしつたの？

種雄　みどり子さんと云つて、氷川の奥さんの親類の娘のことですか。それがどうしたんです？

あさ子　あなたはまだ御存じないの？　淺間へ身投げに行くと云つて家出をしたんですつて。

種雄　そりや大變だ。（顏色を變へる）それでまだ消息が分らないんですか。

あさ子　えゝ。氷川さんが今警察へ訊きに行つていらつしやるんです。今夜あたり東京から搜索隊がやつて來るんでせう。

種雄　さうですか。氷川さんは今年も、去年借りてた家にゐるんですね。……ぢや、ちよつと行つて樣子を見て來ませう。

（あさ子に會釋して行きかける。）

あさ子　そんなに慌てないで、まあ一休みしていらつしやい。あなたはあたしの家へ遊びにいらしつたんぢやないの？

種雄　（出掛けようとした足を留めて、今思出したやうに）僕は安井の叔父さんから大事な用事を頼まれて來たんでした。

（その時、欒三は緣側へにじり寄る。種雄ははじめて氣がついたやうに欒三に會釋する。）

あさ子　（今までの彼女の態度とは異つて熱意を顏に現はして）どういふ御用なの？　安井の叔父からどんなお言傳てがありました？（と訊き迫る）

種雄　（二人に遠慮して躊躇しながら）直接に叔父さんにお會ひになつてよくお訊きになるといゝんですがね。……まあ、あとでユックリ、叔父さんの傳言をお話ししませう。……僕は友人と一しよに鶴屋へ泊ることにしてゐるんです。

あさ子　なぜ率直に、叔父さんの用事を仰有らないの？　男らしくないのね。そこに立つてゐて、簡單に云つちまへることなんでせうに。

種雄　（相手の意外な權幕に驚いて）いづれ後で伺ひます。

（彼れは逃出すやうに出て行く。）

あさ子　何て卑怯な男だらう。（口では憎さげに云ひながらしよげる）

樂三　西田の奴、出拔けの劍突を喰つて膽を潰したらうよ。（勢ひのない笑ひを洩らしながら、妻の方を見て）安井からの言傳では、お前にも大抵察しがついたんだね。

あさ子　だけど、種雄さんなんかを使に立てるなんて、隨分あたし達を侮辱してるぢやありませんか。

樂三　（雷同的口調で）無論おれ達を馬鹿にしてるんだ。

あさ子　あなたの技倆を見くびつてるんですよ。

樂三　無論さうだ。おれにはあの職業が勤まらないと思つてるんだらう。

あさ子　身體が弱つてるから、この夏は輕井澤でゝも保養して來いと、口先ではうまいことを云つてゐながら、あたし達を疎外してゐるのよ。

樂三　無論さうだ。此方の滯在費だつて融通して呉れやしないよ。

あさ子　さうですとも。

樂三　さう事が極ると、こんな所に愚圖々々してゐられないよ。

あさ子　それであなたはどうしようと思つてるの？

（彼女は次第に椅子を離れて、夫の側へべたりと坐る）

樂三　どうと云つて、おれにもいゝ方法はないよ。氷川にでも旅費を借りて、早く東京へ歸つて、何とか將來の方針を極めることにするんだね。

あさ子　情ないことを云つてるのね。氷川さんなんかにお金を借せなんて、あなたの口から云へますか。

樂三　だつて、本當に困つてる時には、困つてると云ふより外に爲方がないぢやないか。

あさ子　あたし、そんなことは死んでもいやですよ。（改つた口調で斷言して）そんなことがあつたら、あの奥さんがどんなにあたし達を侮辱するか、あなたにはそれがお分りにならないのね。

樂三　お前も案外開けないんだね。舊弊なんだね。

あさ子　あたしを舊弊呼ばはりするよりも、御自分の無神經と無能力とを恥ぢるといゝのよ。

樂三　（相手の毒口に對抗しかねたやうに）ハ、、、。舊弊と無神經か。（苦笑して、わざと空呆ける）

あさ子　（いきり立つて）あたし舊弊ぢやありません。

樂三　そんな下らない爭ひはどちらでもいゝとしても、一度西田に會つてよく聞くんだね。

あさ子　それは聞かなければなりませんさ。では、あたし、あの人を一目見た時に大抵察しがついたのよ。種雄さん

は無邪氣にあたしの所へ遊びに來る人ぢやないんですもの。

樂三　あの男もみどり子といふ女にまゐつてるのかな。身投げの噂を一言聞くと、血相變へて出て行つたが、正氣の沙汰ぢやないね。

あさ子　あんなオツチヨコチヨイを使に立てゝ、安井のお爺さん、あたし達を絶望させようとするんだからひどいわ。あなたはいゝ處置を思ひついていらつしやるの？　あたし達はこれからどうしたらいゝんですよ。ボンヤリしてゐられる時ぢやないわよ。

樂三　おれには虚勢を張るだけの元氣もないから駄目だ。……氣晴しにそこらを歩いて來るといゝんだが、今日は山登りをしたゝめに、どうにも足が動かなくなつてる。……そのピストルでも貸して見ろ。

（彼れはあさ子の衣服のカクシからピストルを捜出す。あさ子は他の事を考へてゐるらしく、夫のなすがまゝに任せてぢつとしてゐる。）

（樂三、ピストルの筒口を外に向けて放しかけたが、ふと、自分の額へ狙ひを向ける。）

あさ子　どうしたの？

（あさ子は吃驚して夫に飛びついて、ピストルを奪ふ。樂三は、それをおとなしく妻に渡して、今まで妻の腰掛けてゐた縁側の椅子に腰をおろす。）

樂三　お前はピストルを持つてから、餘程元氣になつたやうだが、おれはピストルを持つとその筒先を自分の方へ向けたくなつて爲樣がないよ。

あさ子　物騷な心理狀態ね。（夫の言葉を信じないらしい口吻で云ふ）

樂三　お前の方が物騷だよ。自分を打つよりは人を打つ方が物騷ぢやないか。

あさ子　だつても、あたし、自分に害を加へない者なら、小雀を一羽だつて打たうとは思はない。

樂三　馬鹿に消極的になつたんだね。……おれには、そのピストルが危險だから、どうか奥の方へしまつといてお呉れ。離れ山へ登つた時にも、ピストルが帶の間に挾まつてゐたと知れたら、氷川夫婦も吃驚したに違ひないね。

あさ子　これが狂人に刄物見たいに危險なものに思はれるのなら、鞄の底へでも仕舞つて置いて、錠を堅くおろしといた方がいゝかも知れないわね。

（あさ子は靜かにさう云つて、ピストルを手に取つて暫く見詰めた。そして、樂三がそれを氣にして見てゐるのに、竊かに氣がつくと急に夫の方へ向直つて身構へして。）

あさ子　打つてもよくつて？

樂三　何を？

あさ子　この危險物の口は、あなたの額を狙つてるぢやありませんか。さつき御自分で狙つていらしたやうに。

樂三　だつて、おれはお前に害を加へはしないぢやないか。

（彼れは、相手の態度を戯れの如く見て、身動ぎもしない。あさ子は、それを牴牾しく感じてゐるやうに、身を進めて緊張した顏する。）

あさ子　あたしのピストルを子供の玩具と同樣に思つていらつしやるのね。

樂三　戯談ぢやないぜ。お前は本當に打つ氣なのか。

（彼れは思はず椅子を離れる。）

あさ子　あたしに、あなたの額の狙ひ打ちが出來ないと思つていらつしやるの？

樂三　馬鹿ッ？

（彼れはさう叫ぶとともに飛びついて、妻の手からピストルを奪はうとする。）

（その時、林の木の間から、岸邊みどり子（二十餘歳）物を案じてゐる風で入つて來て、片蔭から二人の樣子を見て驚いて入りかねる。）

（あさ子、ピストルを奪はれまいとして、暫く爭つてゐたが、やがてそれを夫の手に渡して、急に得意らしい笑ひをこぼして。）

あさ子　あなたもやうやくあたしを信じたのね、あたしが玩具にする氣でこんな物を持つてるんぢやないつてことを。

樂三　（險しい目を妻の方へ注いで）　時と場合で、自分の夫を殺さうと思つてるのか。おれにさう信じさせたいのか。

あさ子　さう信じて下すつてもいゝんです。ピストルが玩具でなくつて、あたしの精神に喰ひ入つてることが信じて貰へれば、あたしそれで滿足なのよ。（氣輕に云ふ）

樂三　馬鹿か狂人だ。

あさ子　あたし、何だか自分の心に力がついたやうに思はれてよ。種雄さんが訪ねて來たゝめに暗くさせられたあたしの心にも、急に明りがついたやうに思はれるわ。それはあなたも喜んで下すつてもいゝの。……あたし、自分の前途を祝するために、祝砲を放たせませうよ。

（あさ子は快活にさう云つて、夫が側に置いてゐたピストルを手早く引寄せて、外へ向つて放つ。みどり子、見惚れるやうにそれを見て、二三歩進み出ると、あさ子はふと、彼女に目を留めて、非常に驚いて、直ぐには言葉を出し得ない。みどり子も進みかねる。樂三、彼女に目を留める。）

樂三　こりや驚いた。みどり子さんは今輕井澤へ着いたん

ですか。（驚くよりも興味ある感じで）さあ、此方へお上んなさい。

あさ子　あなたお一人？……この家がよく分りましたわね。（やうやく笑顏をつくつて迎へる）

（みどり子、二人に注視されるのを極り惡さうに近づいて、勸められるまゝ、緣側に腰を掛ける。）

あさ子　あなた、どうなすつたの？　さつき氷川さんがいらしつて、大變心配していらつしやいましたよ。

樂三　お宅から氷川君の所へ變な電報が屆いたさうですが、（つとめて柔しい顏をして）……何かの間違ひだらうと思はれますがね。

みどり子　（氣遣はしげに）どんな電報が叔母の家へまゐりましたのでせうか。

あさ子　あなたは無斷でお家をお出になつたの？……なぜそんなことをなすつたのか、あたしに譯を聞かせて下さいましな。あたしども、あなたのおためになるやうに出來るだけのことはいたしますわ。

みどり子　あたし、氷川の叔母の家へ遊びにまゐりましたの。東京は先日から暑くつてたまりませんから、輕井澤へ避暑に行かせて呉れと、たび〳〵父に願つたのですけれど、頭から叱りつけられて、どうしても聞いて貰へませんでしたの。思立つたことを邪魔をされたゝめにお止めにするやうでは、意氣地がなさ過ぎるやうに思はれましたから、コツソリ旅仕度をして、一人で此方へまゐることにいたしました。……でも兩親に心配をさせないやうに、汽車の中から手紙を出して置いたんですわ。少しばかりの心配なら、兩親に心配させてもいゝと思つたのですけれど……でも、東京の家から叔母へ宛てゝどんな電報が屆いたんでせうか。

あさ子　それがどうも變なんですよ。あなたが厭世思想のためか何かで、淺間の噴火口へ投身なさる恐れがあると、氷川さんは仰有つて、氷川さんは大騷ぎをしていらつしやるんですわ。……早くお知らせしなきやなりますまいよ。

みどり子　本當にそんな電報が來たんで御座いますの？（呆れた顏をして）何を間違へてそんな氣味の惡い電報を打つたんでせう？　あたし、今まで、死ぬことなんか考へたこと御座いませんわ。……さつき輕井澤へ着くと、俥に乘つて直ぐに叔母を訪ねましたの。雨戶が締つてゐて、誰れも家の中にゐないやうでしたから、近所の方にお訊ねしようと思つたのですけど、お隣りの家だつてずつと離れてゐるんですもの。訊ねたつて駄目らしいんですわ。それで、あたしどうしようか知らと迷つてゐるうちに、秋山さんがお二人でこちらへ來ていらつしやる事を、

やうやく思出して、車夫に頼んで警察署で此方のお所を調べて頂いて、捜し／＼まゐりました。若しもあなた方がいらつしやらなかつたら、どうしようか知らと、途中で淋しくつてなりませんでしたわ。……輕井澤といふ土地は、隨分淋しさうな所ですわね。あたしなぞ、とても長くゐられさうぢや御座いませんわ。

樂三　ぢや、あなたの家出は何でもなかつたんですね。（と笑つて）兎に角、氷川君に早く知らせて來なければいけないね。

みどり子　叔母があの家にゐることが分りさへすれば、あたし、これから直ぐにまゐりますわ。今俥で通つて來た道は、よく覺えてゐますのよ。

（彼女が挨拶して緣側を離れると、あさ子は引留める。）

あさ子　あなたは折角いらしつたんだから、少し遊んでいらつしやいまし。それに、叔父さんや叔母さんが騷いでいらつしやるところへ出し拔けに顏をお出しになるよりも、前もつて、お知らせしといてからいらしつた方がよろしいんですよ。

樂三　叔母さんには僕がこれから直ぐに知らせて來ませう。

あさ子　ぢや、御苦勞でも大急ぎで行つて下さいね。

樂三　あゝ、僕には外に用事もあるんだから。……みどり子さんはユックリ此方で話していらつしやい。お迎へに誰れかを寄越します。

（樂三は、帽子を被つただけで出て行く。）

あさ子　心配していらつしやるでせうから、大急ぎでね。

（彼女は、緣側へ出て、夫の方へ聲を掛ける。）

樂三　分つてるよ。（輕快な返事をして木蔭へ入る）

あさ子　さあ、此方へお上んなさいな。

みどり子　え、有難う。御面倒をかけて濟みませんわね。

（緣側へ上つて、あさ子の出した座蒲團に坐る。）

みどり子　この邊は家が離れ／＼で、隨分淋しさうですね。

（あたりに目を注いで、ふとピストルに目をつける。）

あさ子　あなたは淋しいところはおいや？……でも、よく一人で思ひ切つて旅行にお出になれたのね。あたしでさへ、一人旅は不安心で出掛けられないんですのに。

みどり子　あたし、いけないことをしたやうで後悔してゐますわ。

あさ子　でも、叔母さんのお家へいらしつたことが分りさへすれば、御兩親も御安心なさいますよ。……氷川さんは電報を御覽になると、直ぐに警察署へ搜索願ひをお出しになつたさうですけど、隨分輕卒ぢや御座いませんか。

みどり子　（ビツクリして）警察へあたしのことを屆けまして？
あさ子　電報を讀むか讀まないかに、氷川さんは慌てゝ警察署へ驅けていらつしやつたんですつて。こちらの警察では、かういふことには馴れてゐますから、直ぐに手配りをして、方々へ電報を打つたり、大勢が自動車や自轉車で、淺間の方へ搜索に出掛けたりしたんですつて。
（あさ子は興味に驅られた口調で云つたが、みどり子は恐怖に打たれて、口も自由に利けないやうになる。）
あさ子　でも、間違ひつてことが分れば、それでいゝんですよ。此方では、淺間の身投げは毎日幾人となくあるんですから。
みどり子　でも、叔父の方から一度警察へ屆けたのなら、あたしも噴火口へ身投げする人のお仲間に入れられて、新聞なんかに出されるんでせう。
あさ子　そんなことはどうだつていゝぢやありませんか。
（みどり子、目を伏せて考へてゐる。）
あさ子　東京から、お家の方があなたをお迎へにいらつしやるんでせう。
（みどり子、それには答へないで、やがて。）
みどり子　淺間山はこゝからは直ぐ近くに御座いますの？
あさ子　えゝ。その窓からよく見えますのよ。朝と晩と、日の加減で色がちがつて、それは美しい山なのよ。噴火口は莊嚴で、勢ひのいゝ噴火を見てると飛込みたい氣持になるんですつてね。
みどり子　でも、その山は大變な高山で、途中が大變嶮岨なんぢや御座いませんの？
あさ子　そりや嶮しいことは嶮しいんでせうけれど、此處へ避暑に來てゐる人は、女でも隨分登る人がありますのよ。……此間、女工らしい女が三人連れで身投げをした話を聞きましたが、あたし、感動して聞いたんです。……三人は、手に手を執つて、麓から頂上まで面白さうに唄を唄ひ〳〵登つたんですつてね。それで、噴火口の緣まで來ると、先きへ立つた女が、連れの手を離して、パッと穴の中へ飛込んだんです。次ぎの女も續いて飛込まうとすると、もう一人の女が、帶を摑まへて引留めようとしたさうですが、それを力で振切つて飛込みました。すると、三人目の女も、前の二人が飛込んだ時の勢ひに惹かれて、同じやうな元氣でパッと穴の底へ飛込んだんですつて。麓から三人の女に隨いて山へ登つた男がそれを見て吃驚して、一目散に山を驅下りて、人に話した話なんださうですがね。あたし、また聞きに聞いても、大變面白いと思ひましたよ。
みどり子　怖いやうなお話ですわね。（沈んだ顏をしてゐ

ろ）

あさ子　あたしも、淺間へは登れるものなら、一度登りたいと思つてゐます。あなたが遊びにいらつしやつたから、叔母さんなんかもお誘ひして、大勢一しよに出掛けようぢやありませんか。

みどり子　あたし、とてもそんな嶮岨な山へは登れませんわ。

あさ子　まあ、此方へいらしつて、お山の姿をよく御覽になるといゝの、御覽になつたら、一度は登つて見たいやうな氣になりますよ。

（あさ子、みどり子の手を執るやうにして、窓際へ連れて行つて、樹間から山を見せる。みどり子氣乘りのしないやうな態度で、あさ子の差示す方を見やつてゐたが。）

みどり子　あら、西田さんが。（と、思はず、聲を立てる）

あさ子　あなた西田さんが輕井澤に來ていらつしやることを御存じなかつたんですか。

みどり子　えゝ、ちつとも。

あさ子　あの方はあなたを搜しにいらしつたのかも知れない。……少しの間奧へ隱れていらつしやいな。

みどり子　えゝ。

（あさ子が手を引いて行くので、みどり子は譯も分らずに隨いて奧へ入る。）

（種雄、活潑な足取りで入つて來る。みどり子の穿物に目を留めて、安心したやうに微笑を洩らす。）

種雄　御免なさい。

（暫く返事がない。種雄は家の中に目を注ぎながら、ふと、ピストルを見て驚き、それを手に取らうとして乘出したところへ、あさ子が奧から出て來る。）

あさ子　西田さん、どうなすつたの？　お忘れ物でも取りにいらしつたの？

種雄　さつきマーケットの側まで行くと、向うの道を俥で通つてる人の顏が、どうもみどり子さんのやうに思はれてならないから、途中から引返して來ました。

あさ子　へえ、みどり子さんが俥で？（空呆けて云ふ）

種雄　あの人はお宅を訪ねて來たんぢやないんですか。

あさ子　それは不思議ですね。みどり子さんがマーケットの側を通つていらしつたなんて。

種雄　（訝しげに）ぢや、こちらへ來てゐないんですか。

あさ子　あなたがお見違へをなすつたんぢやなくつて？

種雄　さうでせうか。

（椽側へ腰をおろしながらまた穿物に目をつける。）

あさ子　あなたがみどり子さんのことを思つていらつしやるから、何でもない人がさう見えたのかも知れませんわ。

種雄　そんなことはありませんよ。……たしかにあの人だつたのです。……ぢや、この家へ寄らないで他所(よそ)へ行つたのか知ら。こちらの方にあの人の知つた人が來てるんでせうか。

あさ子　いゝえ。あたしどもや氷川さんの知合ひの方は、この邊にはいらつしやらないんです。……變ですわね。……屹度あなたが人違ひをなすつたのよ。でなければ、あなたがみどり子さんの幻影でも御覽になつたのかも知れませんよ。

種雄　そんな馬鹿なことが……。

あさ子　だつて、今時分輕井澤の往來を、みどり子さんが俥で通る筈がないぢやありませんか。

種雄　さうでせうか……ぢや、僕が見そこなつたのか知ら。(落膽して)成ほど、あの人は今時分、淺間の噴火口へ行着いてる譯なんですね。もう噴火口の底へ飛込んでるかも知れないですね。……投身した人間が、僕の目の前を俥で通つてゐたのは不思議だな。(ゾッとした氣持で云つたが、氣を取直して)みどり子さんは、どういふ理由で投身自殺なんぞ企てたんでせうか。

あさ子　若い女はどうかすると、そんな氣持になるものですよ。あたしだつて、時々は淺間へでも華嚴へでも驅けて行きたいと思ふことがあるんです。

種雄　物騷ですね。

あさ子　今日も、あなたが安井の叔父さんのお言傳があると仰有つたから、あたし絶望してゐました。

種雄　僕が頼まれて來たことが、あなた方のためには、そんなに不愉快なことなんでせうか。

あさ子　でも、そのために淺間の噴火口を覗きに行くやうな御苦勞様なことはしませんから、安心していらつしやい。(ふと、氣がついたやうにピストルを見て)こんな物騷な物を拋出してゐるから、西田さんも變にお思ひになるでせうね。(と云つて、ピストルを引寄せる)

種雄　そんな物を不斷持つていらつしやるんですか。何のためにそんな物を持つていらつしやるんです？

あさ子　絶望した時、わざ〳〵淺間へ上つたりしなくつても濟むぢやありませんか。それにあたし達に害を加へた人に復讐するには重寶なんですわ。

種雄　危險ですね。

あさ子　御用心なさい。危險ですから。

(あさ子は微笑を浮べながら、眞劍らしくピストルを持つて、巧みに身構へをする。)

(種雄は戯談にして笑つてゐる。)

(みどり子、奥からそつと顔を出したが、他の二人は氣づかないでゐる。)

種雄　僕を打つちやいけませんよ。僕はあなたに復讐される理由はないんですから。

あさ子　あなたは何でもない方なんだけれど、あなたが使に立つて持つていらしつた安幷の老人の用向は、あたし達夫婦に侮辱を加へてるんです。あたし、その用向に復讐したいのよ。

（さう云つて、勢ひづいたやうに、ピストルを種雄の方へ向ける。顏面に憎みが現はれる。）

種雄　戯談にでもそんなことをしちやいけませんよ。驚いたなあ。

（種雄は立上つて、あさ子の手からピストルを奪はうとする。あさ子は奪はれまいとして爭つてゐるうち、彼女は魔力に動かされたやうに引金を動したが、彈丸は、おづおづ奥から出て來てゐたみどり子に命中した。みどり子、悲鳴を上げて倒れる。）

種雄　あなたが打つたんですね。みどり子さんを。さつきから此處へ來てゐたのを、僕に隱してゐたんだな。

（あさ子は、ピストルを持つたまゝ戰慄して默つてゐる。）

種雄　早く醫者を呼んで來なきやならない。

（みどり子の傷を見ながら、恐しさにドギマギしてゐる。）

（あさ子は力のない手でピストルを自分の喉に向けて、引金を引いたが、手答へがない。）

あさ子　彈丸がもうなくなつてるのだ。（氣拔けのした聲で云ふ）

――幕――

一日の平和

人物

森元作一郎　ある私立大學の教師（四十二歳）
たま子　妻（三十五歳）
參二郎　弟（二十一歳）
新兵衛　父（六十八歳）
くに子　妻の妹（十七歳）
唐崎秀一　新兵衛の亡妻の甥（二十七歳）

舞臺面

芝愛宕下町。
森元家の茶の間。茶簞笥長火鉢など、新しい家具がほどよく置かれてゐる。茶の間の横が玄關で、格子戸がはまつてゐて、父子の表札が並んで懸けられてゐる。長火鉢には鐵瓶がかゝつてゐて、その側の食卓には、茶器や菓子鉢が置かれてゐる。
十二月の中旬。午後二時頃。

一

たま子とくに子とが長火鉢の側に坐つてゐる。羽織も着てゐない服裝の見窄らしい秀一が、家を搜すやうな態度で入つて來て、表札に目を留めて立留つて、格子戸から内を覗くやうにしたが、何か考へてゐる風をして、忍び足で家を離れて、來た方へ出て行く。茶の間の二人はそれには氣づかない。たま子は、讀んでゐた新聞を傍へやつて、毛絲細工をしてゐるくに子に向つて、

たま子　それで春江さんはお葉ちやんと絶交したの？

くに子　（手を止めて顏を上げて）姉さんは今日は呆けてるのね。さつきあたしがあれほど熱心に話してゐても、返事もしなかつたくせに。よつぽど經つてから、だしぬけに訊かれちや、あたしお話する氣になれないわ。

たま子　ぢや訊かなくつてもいゝわ。どうせ他人のことなんだから、どうだらうと、强ひて聞きたかあないのよ。

くに子　（姉に調子を合せるやうに）あたしも、春ちやんや葉ちやんのこと、どうだつていゝと思つてゐてよ。二人があたしを味方につけようと思つて、あたしにいろんなことを云つて來るんだけど、あたし取合はないことにするわ。

たま子　あなた達は三人とも同い歳で競爭してるんだから

面白いわね。三人のうちの誰れに一番いゝ運が向いて來るか知ら。

くに子　運なんか、あたし當てにしないことよ。自分の力で出來ることを努一杯やつてけばいゝんでせう。(毛絲細工を休まずにしてゐる)

たま子　あなたはお父さんのお說法をよく覺えてゐて、まだ迷はないでゐるのね。正しい道を踏んで眞面目に働いてれば、不幸に落ちることはないと、お父さんは、尤もらしい顏してよくさう云つてゐたけれど、お父さん御自身は、この頃大して幸福でもなさゝうね。御自分で選んだお嫁さんの爲向け方がいけないつたつて、自業自得なんだから不平の持つて行きところがないぢやないの？(時計を見上げて)それよりも家のお父さんは何處へ廻つたんでせう。正午までには說教が濟むから、それから一寸道寄りして、一時頃には歸ると云つていらつしやつたのに。

くに子　ぢや、此方の伯父さんはまだ御飯前なのね。

たま子　途中で何か食べてるだらうよ。この頃は出歩くたんびに、好きな者を食べて來るの。それで、何處のお鮨がおいしかつたの、何處のお蕎麥がよかつたのと、歸つて來るとわたし達に話して獨りで樂んでゐるんだけど、話だけ聞かされてる者は詰らないわ。體裁をかまはないんだから、屋臺店へも寄つて立喰ひをしたりするらしいの。

くに子　(小聲で、顏を顰めて)いやな人ねえ。田舍の人は歲を取つてもお行儀が惡いのね。……さう云つちやいけないでせうけれど。

たま子　男も老人になるといやなものよ。慾が深くなつて、狡猾になつて、それに薄汚くなつて、そのくせ理窟ばかり達者になつて。……あなたのお父さんだつて次第にずるくなつて死慾を掻くやうになつたぢやないの。くにちやんはさう思はない？　どうせあの世へお金を持つてく譯には行かないのだし、この世へ殘したお金を、あとで後繼者やお嫁さんがどうするか分りやしないんだから、今のうちに、身內の者に氣前よく播きちらして、みんなを喜ばしたらいゝのだらうにね。

くに子　さうねえ(空虛な返事をする)……あ、兄さんが下りて來てよ。階子段に足音がする。(居住ひを直す)

たま子　お茶を飲みに來るのだらう。……さあお茶を入れよう。(鐵瓶の湯を急須へ注いだりする)

くに子　兄さんは日曜にでも勉強なさるのね。あんなにしよつちゆう西洋の本を讀んでゐてよく頭が疲れないと、あたし不思議に思つてよ。あたしなんか、とても眞似が出來ないわ。

たま子　くにちやんなんかゞ思つてるほどの勉強家でもないのよ。お午御飯のあとで今まで午睡をしてゐたのだらう。……それ御覧な。水道で頭を洗つてゐるぢやないの。

くに子　顏を洗ひなさるのなら、お湯を持つてゝ上げませうか。（鐵瓶を取らうとする）

たま子　（押留めて）いゝのよ〳〵。……くにちやんも兄さんの御機嫌取つたつて駄目なのよ。

（くに子はふと氣がついたやうに、自分が敷いてゐた座蒲團を食卓の側に置いて、兄のために席をつくる。佐一郎は、やうやく目が醒めたと云つたやうな顏して入つて來る。くに子笑顏で挨拶する。）

佐一郎　くにちやんが來てゐたのか。暫くだつたな。（懐つこさうに云つて坐る）おれはいゝ氣持で眠つて、さつきも、夢現で階下の話聲を聞いてゐたのだよ。

たま子　くにはお父さんのお伴をして、修善寺へ行くんですつて。溫泉で年を越すなんて洒落れてるぢやありませんか。

（たま子湯呑へお茶を注ぐ。佐一郎それを持つて一口飲みかけたが、熱いので下へ置いて、くに子に向つて。）

佐一郎　二階へ行つて煙草を持つて來て吳れないか。

くに子　ハイ。（快活な返事をして出て行く）

たま子　霞町の家でも、親子の折合が惡いから、父はくにを連れて他所でお正月をしようと思つてるんです。家の中の不折合なためにいゝ事をするのはくにばつかりなのね。わたしなぞ、どつち向いたつていゝ事はありやしない。

佐一郎　お前も溫泉場で越年したいのか。お互ひにもうお正月の面白い年齡ぢやないし、何處で歲を取つても同じことぢやないか。

たま子　それは溫泉なぞどうでもいゝんですけど、今年もこんな風にして暮してしまふのかと思ふと、お互ひに詰らないぢやありませんか。

佐一郎　お互ひにと云つたね……しかし、おれはこんな風にしてゞも暮して行ければ、まあ結構なことだと思つてるよ。おれも三十代には、年が變るたびに今年は〳〵と彈けるやうな望みを掛けたものだが、二三年この方は、大それた事は考へなくなつたよ。現狀維持を祈つてるんだね。少しでもいゝ事があれば、もつけの幸だと有難く思ふんだ。

たま子　あなたの三十代にはどういふいゝ事があつたんでせう。

佐一郎　さうだね。おれは二十年以上、大抵毎日日記をつけて來たが、日記に特筆大書されるほどの事には一度も出くはさなかつた。いゝ意味にも惡い意味にも、小說的

な事件や戲曲的な事件には出くはさなかつたが、それでいゝぢやないか。お前たつて波瀾のある生涯を好みやすまい。おれを悲劇の主人公にしようと望んでやすまい。喜劇中の人物になつてなりたくもないね。

たま子　そりや、世の中は平穩無事に越したことはないでせうけど、冷たい灰のやうな、貧乏な、働くにも目當てのないやうな平穩無事なら、お互ひに詰らないぢやありませんか。

佐一郎　またお互ひにか。……以前はお前の方が却つて現狀維持を望んでたのだが、この頃急にヤキモキしだしたのは不思議だね、……全體どういふ風に生活方法を立て變へたらお前の希望に適ふんだらう。云つて御覽。

たま子　（詰らなさゝうに）眞面目に聞く氣もないくせに。

佐一郎　さう見えるのかい（二階の方を仰いで）くに子は何を愚圖々々してるんだらう。

たま子　くには溫泉へ出掛けるまでに、あなたに溫かいセーターを編んで上げてお歳暮にするんですつて。

佐一郎　それは感心だ。

たま子　あの子は學問好きだから、あなたの御機嫌を取つて置かうと思つてるんです。女のくせに、もつと六ケ敷學問をしてそれで身を立てようなんて思つてるんだから。

佐一郎　そんなことを考へて樂んでるうちが人間は花なんだね。……さう云へば、親爺はまた歸つて來ないんだな。歸つて來たら、阿彌陀經の講釋の受賣りがはじまるんだから溜らないや。

たま子　でも、お爺さんやお婆さんに聽かせるお說教とはちがつて、お經の講義が、しつかりしてるから、非常に爲めになる。若い男や若い女も聽きに行つてると、お父さんは云つてゐましたよ。

佐一郎　東京は廣いんだな。今時お經の講義を聽きに行く青年もゐるんだから不思議なものさ。

たま子　でも、お父さんのやうに、お小使ひに不自由しないで、お說教だの寄席の講談だのと好きなものを聽きに行つて、東京が飽いたら、また郷里へ歸つて樂隱居をしてゐられるやうだつたら、世の中が面白いでせうね。

佐一郎　ぢや、お前もお說教を聽きに行つたらいゝぢやないか。芝居のやうに高い場代を取りやしないから、おれの晝寢と同樣に、無代で樂める譯だよ。

（佐一郎が、ふと思出したやうに、湯呑を取上げてグッと飲むと、たま子も側の茶碗に茶をうつして飲む。そこへ、くに子が煙草を持つて入つて來る。）

くに子　お二階に懸つてる水彩畫の景色いゝ景色ね。

たま子　あれを見てゐたのかい。欲しけりや買つて上げようか。お義理で無理に買はされた縮なんだから、元價ならいつでも賣つて上げるよ。

くに子　だつて、あたしお錢がないんですもの。

たま子　お父さんに買つたらいゝぢやないの？（ふと尖つた口調で云つて）お父さんはくに子の強請ることなら何でも聞いて呉れるんだから。

くに子　そんなことないわ。あたし、温泉へなぞ行かなくつてもいゝから、來年の四月から佛語學院へ入れて下さいつて賴んでるんだけど、お父さんは許して呉れないんですもの。

たま子　あなたはフランス語でもロシア語でも習つて、女學者になればいゝさ。年齢が若いんだからこれから自分の好きなことが出來るわね。……だけど、わたしを御覽なさい。お父さんは、わたしが、こんな茶の間に釘付のやうになつて暮してるのを見て、獨り合點で安心して、わたしの身體が年々にしなびて來たり、わたしの頭腦の中が一年々々暗くたつて行くのを、いくらさう云つても見ちや呉れないんです。わたしの目が潰れるか、五本の指が腐つて落ちるやうな病氣になるかしたら、お父さんだつて、少しは身に染みて、自分の生んだ子に同情するでせうけれど、今のやうぢや、無事でいゝ、平和で結構だと、お父さんに云はれるばかりで、わたしの苦しみの端しくれも、生みの親に背負はせることが出來ないから、ほんとに詰らないの。

佐一郎　（煙草に火を點けて、食卓に頰杖ついて）しかし、親爺にいくらせがんで、親爺が聞いて呉れたにしてもさ、親爺の力でお前の身體のしなびるのが止まりやしまいよ。

たま子　だつても、わたしが訴へる人は外にないぢやありませんか。松田さんだの塚本さんだの、いくら懇意にしてゐても、それは上べのお交際なんだから、不斷着や寢衣にくるまつてるわたしを見せられやしないですからね。そんなことでもしたら直ぐに馬鹿にされますよ。

佐一郎　馬鹿にされたつていゝぢやないか。しかし、何だよ。おれも、何年か前までは、一つ自分の勿體ぶつた教師の衣服を脫いで、素裸になつて、裸體で寒けりや褞袍でも着て往來を大手を振つて歩いて見ようかと思つたこともたび／＼あつたのだが、思つたばかりでつひに實行しなかつた。今になつて考へると實行しなくつてよかつたやうなものだね。おれが教師の衣服を脫いで、教師の面をかなぐり棄てゝ、假聲を止して地聲で口を利くやうになつたら、おれはその日から喰扶持に離れてしまふし、友人には除け物にされるし、お前の親爺にも信用されな

くなつちまふだらう。いや、お前にも愛想を盡かされるかも知れないよ。おれの裸體はあんまりいゝ格好ぢやないからね。

（くに子笑ふ。）

佐一郎　くにちやんくらゐな若さだと、裸體も奇麗だらうけれどな。（くに子の方を見て、ニヤ〳〵と笑つて）今夜は久振りで、みんなで銀座シネマでも見に行かうぢやないか。親爺を留守番にして。……參二郎が晩までに歸つて來たら連れて行くことにしよう。

くに子　あゝ悦しい。春ちやんに活動へ誘はれることもあるんだけど、お父さんが行かせて呉れないんだから、あたし、もう二月も三月も活動へ行かないのよ。此方の兄さんに連れて行つて頂いたと云へば、活動を見ても芝居を見ても、お父さんが小言を云はないからいゝの。

たま子　わたしも活動をいく月見ないか知ら。

佐一郎　たまに見るから、活動寫眞だつて面白いんだよ。お前は今から髪を結つたりお化粧をしたりして、いつでも直ぐに出られるやうにしとくといゝ。（外の方へ目をやつて）今日は小春日和見たいで温かいから、お父さんはいゝ氣持でブラ〳〵歩いてるだらうね。おれは活動なんぞ見るよりや、本當はお父さん見たいに、ブラ〳〵年末の市中でも見物して歩きたいんだが、まださういふ身分にはならないんでね。現狀維持がいゝと云つても、冬の日の八時の出勤は、あんまり氣樂でもないよ。（誰れに云ふともなく云ふ）

（そこへ、秀一が手土產を提げて入つて來る。再び表札を見据ゑてから格子戶を開ける。「お父さんか知ら」と、たま子が云ふと同時に、「御免なさい」と、秀一が改まつた聲で云ふ。）

（「ハイ」と、たま子は答へて、くに子に目くばせをする。くに子心得て取次に出る。秀一は主人の在否を訊いてから名刺を出す。くに子が茶の間へ戾つて佐一郎に名刺を渡すと、夫婦は一度にそれを見て眉をしかめる。）

（「お前たちはあちらへ行つて出支度をしろ。こゝへ通すから」と、佐一郎は云つて、玄關へ出て行く。姉妹は奥へ入る。）

佐一郎　（無愛想に）やあ、久振りだね。僕たち今出掛けようとしてるんだが。

秀一　僕もちよつとお目に掛つたらいゝんです。

佐一郎　おや、とに角上りたまへ。

（秀一は佐一郎に隨いて茶の間へ通つて食卓の側に坐る。茶の間に入つてはじめて帽子を取つた彼れの頭は綺麗に剃られてゐる。今まで打解けない顏してゐた佐

一郎も、ふと噴きだす。）

佐一郎　君はどうして坊主になつたのだ？　禿頭病にでも罹つたのかい。

秀一　いや病氣のためぢやありません。しやれに剃つたのでもありません。懺悔のためです。

佐一郎　罪亡しに頭の髮を剃落したのかい。少し古臭い考へだね。とに角寒いだらう。

秀一　寒いくらゐ何でもありませんよ。（あたりを見て）伯父さんはこの頃お宅へ來てゐらつしやるんださうですね。

佐一郎　あゝ、親爺は増上寺へお說教を聽きに行つてまだ歸らないんだ。

秀一　（意外に感じたらしく）伯父さんがお寺へ說教を聽きに？　それは不思議ですね。

佐一郎　老人(としより)がお寺詣りするのは、君が坊主頭になつたほどの不思議でもないよ。しかし、君は僕に會つても親爺に會ふ氣はないのだらう。親爺に會ふつもりで來たんぢやあるまいね。

秀一　いや、成るべくなら伯父さんにお目に掛りたいんです。（臆しないで相手を見詰めて云ふ）

佐一郎　何か大事な用事でもあるのかい。なんなら僕が聞いて置かうか。

秀一　そりや、あなたに申上げてもよろしいが、成べくなら伯父さんに直接にお話したいんです。

佐一郎　しかしね。……君がたとへ頭を剃つて懺悔の證據を見せたにしても、親爺は快く君に會ふだらうかしら。君は前觸れもしないで突然(だしぬけ)にやつて來たんだからね。（不機嫌を色に現はして）あの後二年も月日は經つてゐるんだが、親爺は君から受けた侮辱を忘れてやしないよ。僕だつて側にゐて見てゐたんだから忘れてやしないよ。君の方ぢやもう忘れてゐて、平氣で訪ねて來たのかも知れないが。……いや、君にしても忘れるにしちや、事が少し大き過ぎる。死んだ母の初七日の晩に、佛前で、君はその足で親爺を蹴倒して出て行つたんだからね。その事は君も覺えてるだらう。たとへ、親爺の言葉が君の氣に障つたにしても、親爺は君の義理の伯父ぢやないか。常識のある者なら打つたり蹴つたりが出來る譯ぢやあるまい。……今の君は罪を詫びる氣になつてるんだらうけれどね。

秀一　ところが、僕は、あの時の自分の仕打を罪惡とは感じてやしません。今髮を剃つて懺悔を現はしてるのも、あの事のためぢやありません。それは別の事なのですよ。

佐一郎　（呆れて）あの時の所行を、今になつてもまだ惡い事とは思つてゐないんだつて？　君は良心が痲痺して

るよ。

秀一　（平然として）そりや、あなた方の目で御覧になつたら、僕の良心が痲痺してるか狂つてるか、あるひは、はじめから良心なんてものを持つて生れて來なかつたやうに見えるかも知れませんがね。しかし、僕たつて、ある場合には、心の底から懺悔したい氣持になることもあるんです。現在、頭の髮は愚か、手でも足でも切つて、懺悔の氣持を現はしたいと思つてるんですが、伯母の初七日の逮夜に伯父さんを蹴つたことを、別段後悔はしてゐませんよ。あれは伯父さんその人を蹴つたのぢやない。伯父さんの握つてる不正な金を蹴つたんです。あの時の事情は、あなたのやうな頭腦の明晰な方にはよく解つてる筈ぢやありませんか。父親に早く死別れて貧乏してる僕の身を立てる元手にさせようと思つて、伯母が苦心して蓄へてゐた金を、僕が貰ふばかりになつてゐたところを、伯母がだし拔けに死んだのをいゝ機會に、伯父さんは橫取りにして、僕には一錢たりとも渡して與れまいとしたのぢやありませんか。遺言狀にそんなことは書いてないし、平生聞いてもゐなかつたと云つて、伯父さんは僕を强請者か何かのやうに取扱つたのだけど、僕は平生伯母に聞かされてゐたから、當然貰つていゝものだと思つて要求したまでゝす。天地に對して恥ぢることはありません。それも、伯父さんのお家が窮迫してゐるのなら、爲方がないが、相當の資產があつて、子供には十分な敎育も出來るし、財產の分配も出來る身分でありながら、伯母が、父親のない甥の身の上の不憫さに、自分の身を儉くして殘して與れた僅かな遺產までも橫取りしようとするのは、あんまり殘酷過ぎるぢやありませんか。

佐一郎　ぢや、君は、その遺產の事で、今日親爺に會ひに來たのかい。

秀一　なあに、そんなことは疾つくに諦めてますさ。あなたが强ひてあのいやな話を持出しなすつたから、僕もつい餘計なお喋舌をしたんですが、伯母の遺產の事なんぞ思出すこともないんです。

佐一郎　ぢや、君が今日出拔けに訪ねて來た用向はどういふことなんだ。

秀一　（ふと思出したやうに、傍に置いてゐた手土產を押やつて）これは詰らんものですが、そこで買つて來ました。

佐一郎　（橫目で見て）どうも有難う。

秀一　僕の用事といふのは、一年か二年、母を預つて頂きたいことなんです。僕は獨りになつて自由に活動しようと思つてるんですが、親一人子一人なので、母の處分に困つてるんですよ。母の兄弟は全くなくなつてるんだか

ら、どう考へても伯父さんのお家の外には預け場所がないんです。金錢上の御迷惑は決して掛けやしません。母は歳を取つてゝも身體はピンシヤンしてるんですから、手ぶらで人の家の飯を喰潰してゐることはありません。故郷のお家で仕事をおまかせになりや、相當な働きはするでせうし、若しもお家に置いて頂くのに差支がありや、御近所に住はせて頂いてもいゝんです。母は裁縫をしても自分の口過ぎぐらゐはするでせうから。……僕はよく考へた上に母にも承知させてお願ひに上つたんですから、是非とも聞いて頂かなきやなりません。

佐一郎　親爺に話すだけは話してもいゝが、承知するかどうだか分らないね。(氣乘りのしないやうに返事をして)……君は手足纏ひの母親から離れて、一人身になつて活動しようと云つて、全體、何をしようと思つてるんだい。

秀一　今詳しいことは云へませんが、海外へ飛出すつもりなんです。學問のない僕は日本の內地では碌な職は得られませんからね。

佐一郎　それはいゝことだ。僕も若い時分はそんなことを考へてたものだ。……君は若いからいゝ。(感慨を籠めて云ふ)

秀一　あなただつてまだ老人ぢやないでせう。働盛りの年輩ぢやありませんか。財産はあるし地位はいゝし、僕なんかとはまるで境遇が違ふですからね。

佐一郎　だから羨ましいのかい。よく人の云ふことだ。

秀一　いえ、僕は羨ましかありません。

佐一郎　(意外に感じたやうに)どうして?　(と思はず云ふ)

秀一　僕の方で羨ましいと云つたら、あなたはそれを皮相な觀察だと仰有るでせう。あなたの境遇を羨ましくないと云ふと、不快にお思ひになるでせうが。

佐一郎　(不快さうに)面倒くさいことを云ふね。他人の身の上はどうでもいゝぢやないか。

秀一　本當にさうですね。ことに物をお願ひに來て、あなたの感情を害するやうな口を利くのは詰らないことなんです。

佐一郎　君が僕の境遇を羨ましくないと云つたからつて、僕は不平に思やしないよ。君は僕の氣持が分らないんだね。(强ひて微笑を浮べる)

秀一　僕も餘計な口は利かないで、用事だけ申上げたらお暇しなきやなりませんが、伯父さんは何時田舍へお歸りになるんでせう。伯父さんの葬禮まで出てゐますが、東京に永住のおつもりぢやないんでせうね。

佐一郎　はじめは一年でも二年でも此方にゐるつもりだつたのだらうが、老人にはやはり住馴れた田舍がいゝと見

えて、近々に歸つて行くらしいよ。

秀一　さうでせうね。……伯父さんも、伯母さんに死別れてから、東京に住む氣におなんなすつたんでせうか、このお家にまで御自分の表札をお出しにならなきや得心が行かないんですかね。

佐一郎　……(不快の感じを現はす)

秀一　伯父さんはこの頃でも年齢の割には元氣がいゝんでせうね。

佐一郎　さうでもないよ。四五年前ほどの氣力はないね。

秀一　伯父さんは金持だから違ふかも知れないが、若い者が老人と同居するのはいやなものぢやないでせうか。僕なぞは顏に皺が出來て頭が白くなつて目がたるんで、ヨボ〳〵するやうになるまで生きてゐようとは思つてゐませんよ。醜いですねえ。それに老人は若い者の幸福を妨害するんですからねえ。

佐一郎　しかし、人間は六十一か幾つかになつたら殺してしまふと云ふ法律をつくる譯に行くまいしね。

秀一　(眞顏で)いけないものですかね。……しかし、若い者が立法者になつたら、そんな法律だつて出來ないとは限りませんよ。

佐一郎　馬鹿を云つちやいけない。

秀一　僕は學問がないから、しよつちゆう馬鹿なことを考へてゐていけませんよ。

(そこへ參二郎が入つて來る。格子戸の音を聞いた秀一は「伯父さんですか」と、小聲で云つて、ちよつとドギマギする。參二郎が茶の間に入るのを見ると。)

秀一　やあ、君だつたか。(と見上げる)

(參二郎は返事もしないで奥へ入る。)

秀一　(ちよつとしよげて)參二郎君は健康はいゝんですか。

佐一郎　君のやうに丈夫ぢやないね。

秀一　あなたには兄弟が多いんですね。

佐一郎　それは今はじまつたことぢやないよ。

秀一　しかし、兄弟の多い人を見ると不思議ですね。兄弟でも親でもないよりやある方がいゝのかな。(獨言のやうに云つてふと座を立ちかけて)大變お邪魔をしました。ぢや、今お願ひしたことを伯父さんにお願ひして下さい。名刺に住所が書いてありますから、手紙を寄越して下すつたら、いつでもおうかゞひします。

佐一郎　話だけはして見よう。何もおあいそがなくつて濟まなかつたな。

(佐一郎が秀一を見送つて、茶の間へ戻ると、たま子くに子參二郎の三人が茶の間へ入つて來る。)

たま子　くにと二人で次の室から覗いて、も少しで噴たす

ところだつたのですよ。あの坊主頭の可笑しいつたらないわ。それに、あなたがあんた人と眞面目に應對していらつしやるのを見ると、隨分滑稽なのよ。

參二郎　兄さんはなぜ秀さんを上へ上げたんです？　勝手な言懸りをつけてお父さんを蹴つたり踏んだりした人間を家の中へ通すつてことがあるものか。僕がゐたら玄關から突出してやるんだつたのに。……隨分づう〳〵しい奴だからなあ。

たま子　でも歳を取つた母親を他所へ預けて、自分一人身になつて外國へ飛出すなんて、嘘にしても云ふことが面白いぢやないの。嘘にしても口先だけにしても、このくらゐな痛快なことでさへ、わたしこの頃聞いたことがない。

佐一郎　死んだお母さんは本當に秀一に遺產をやるつもりだつたのだらうか。

參二郎　それはさうだつたか知れないが、若しも秀さんに財產をやつたら、いゝ氣になつて女遊びして費つちまふに極つてるさ。

たま子　わたしは、お母さんの初七日の晩の騷ぎを見なかつたから、秀さんを怖い人とばかり思つてゐたけれど、そんな怖い人でもなさゝうね。懺悔のために坊主になつたつて、落語の中の人間のやうで面白いぢやないの？　何の懺悔かしら。（佐一郎に向つて）あなたはその譯をお聞きになればいゝのに。

佐一郎　（今までとかはつた憂鬱な顏して）おれは今子供の時分に聞いた祖母さんの話を思出した。死んだお母さんには、女姉妹は二人きりだつたが、秀一の父親と家の親爺との何方へ姉妹の何方が緣組みをするか、初めのうちは極りがつかなくつて、暫くごたついてゐたのださうだ。それで、籤引見たいに、偶然に極りがついて、此方へ姉、彼方へ妹が行くことになつたのだが、その時の籤運次第で、お互ひの母親はちがつたのだよ。さうすると、おれや參二や秀一は、たとへ生れて來たにしても、身體も氣質もこんな風には生れて來なかつたにちがひない。

たま子　それで、あなたはそんな風に生れて來たことを喜んでゐらつしやるの？　悲しんでゐらつしやるの？

佐一郎　さあ、どちらにしようか。お前がお前の親爺の指圖でおれと結婚したことを喜んでいゝか悲しんでいゝか分らないやうなものだ。……しかし、そんなことを考へるのは馬鹿たね。……おれはこれから明日の下しらべをするから、晩餐を早目に食べて、直ぐに出られるやうに今から支度をしたらいゝだらう。

（佐一郎は座を立つて奥へ入る。）

たま子　參二さんも傍で見てゐたのでせう。秀さんがお父さんに亂暴をした時に。

參二郎　彼奴は親爺を蹴ると、直ぐに家を飛出して逃げたから、どうすることも出來なかつたのさ。

たま子　お父さんの何處を蹴つたの？

參二郎　横つ腹を蹴つたの。隨分ひどく蹴つたらしいんだ。親爺はしばらくころんだきり唸つてた。

たま子　ひどいわねえ。老人は若い者に蹴られちやたまらないわねえ。（さういふことに興味を感じてゐるやうに云つて）昔なら、あなたなんかゞ親の敵を打つところぢやないの？……足の當り所が惡かつたら、お父さんの生命にも關はつたんでせう。

參二郎　さうかも知れなかつたなあ。（考へて）さうだつたら、僕等の生活も今とは違つてゐたのだな。

たま子　よく違つてゐて？　惡く違つてゐて？

參二郎　それはどうだか。……しかし、僕も若い間に外國へ行つて見たいなあ。

たま子　……わたしなぞは、外國なんか行きたくもないけれど、明るい日の照つてる温かい、空氣のすがすがした所へ行つて見たいと思つてよ。

くに子　この家だつて明るい日がよく差してるわ。

たま子　こんな埃に汚れたあるい日の光ぢや駄目だわよ。

參二郎　僕は今日淸島の下宿へ寄つて來たんだが、下宿住ひは氣樂でいゝですね。

たま子　兄嫁なんかに監視されないから？

參二郎　さうぢやないけれど。

たま子　遠慮しなくつてもいゝわ。秀さんは面白いわね。さう思ふのがあたりまへなんですもの。秀さんは一人の母親をさへ他所へ預けて、自分一人で好きなことをしようと思つてるんだから。

參二郎　秀さんはえらいんかも知れないな。

たま子　ぢや、あなたは親の敵を打つ氣はないの？

參二郎　それは別問題だ。（兄の置いて行つた煙草を吸ふ）

（そこへ、田舍者らしい服裝をしたよぼよぼした老人新兵衛が入つて來る。）

（たま子座を立つて出迎へる。參二郎吸ひかけた煙草を、長火鉢の灰の中へ突込む。）

たま子　お說敎は面白う御座いまして？

新兵衛　（火鉢の側に腰をおろして）いや今日の講義は面白うなかつた。えらい學者でも日によつて出來不出來があるのであらう。講義の趣意がよう呑込めなんだが、講師の頭が今日は狂つとつたのか、わしの頭の加減の惡かつたのか、何しろ變てこだつたよ。

たま子　それはいけませんでしたね。折角樂みにして聽きにいらしつたのに。

新兵衞　佐一郎の學校の講義もあんなものだらうな。その日〳〵で出來不出來があるのだらう。……お寺の歸りには碁會所へ寄つて、今まで立續けに勝負をやつて來たのだが、いや、これも負け通しさ。今日はわしの頭がいけないんだな。（淋しく笑つて、たま子が注いで出すお茶を飲む）

參二郎　お父さん、さつき秀さんが來ましたよ。事もなげに云ふ）

新兵衞　秀が來た？　唐崎秀一のことか。（ふと氣色ばむ）

參二郎　えゝ。お父さんに頼みたいことがあるんですつて、詳しいことは、兄さんが聞いてるでせう。

新兵衞　金の無心だらう。わしの所より外には、何處へも泣きつく所がないからやつて來たんだな。しかし、彼奴どんな面を提げてわしの前へ出ようと云ふのだ？　恥知らずめ。

參二郎　どんな面つて、秀さんは頭を剃つて坊主になつて來ました。

新兵衞　坊主に？……さうしておれに謝らうと云ふのか。……馬鹿なことを、……（やゝ顏を和らげて）しかし、わしが多少の金を持つとればこそ、坊主頭になつてまでわしの所へ謝りに來る奴もあるんぢや。……今度秀の奴がやつて來たらよく云つて聞かせよう。

參二郎　何を云つて聞かせるんです？　金儲けの方法ですか。

新兵衞　人間の道ぢや。

參二郎　あゝ、阿彌陀經の講釋ですか。

（參二郎笑ふ。たま子も笑ひ聲を洩らす。くに子欠伸を洩らす。）

新兵衞　（はじめて氣づいたやうに）くにさんは日曜だから遊びに來たのかい。

くに子　えゝ。（改つた顏して會釋する）

參二郎　今夜はみんなで活動寫眞を見に行くんですつて。お父さんは一しよに活動へ行く譯には行くまいから留守番をして下さい。

新兵衞　よし〳〵。（機嫌よく云ふ）

二

同じ日の夜。

舞臺面、前と同じ。

新兵衞と秀一對座してゐる。

新兵衞　（恐れと憤りとを顏に現はして）それぢや、お前は、今夜はわしが一人で留守番して居ることを知つて、わしを脅しに來たのぢやな。わたしは歲は取つてゐても、まだお前なんぞに脅されやしない。

秀一　伯父さんを脅しに來るなんて、そんなことがあるものですか。わたしは母の一身をお賴みしに來たゞけなんです。伯母さんがわたしを憫れんで、死土産に頒けて下さる筈だつた財産を頂かうなんて、今はもうそんなことは思つてやしません。わたしは、自分の腕一つを力に働かうと思つてゐます。過去つた事に未練はありやしません。

新兵衛　お前の伯母さんが遺産をお前にやる筈であつたら、自分の死ぬ時まで待つて居らんで、もつと早うお前に頒けてやりさうなものぢや。

秀一　そりや、伯母さんも、他の老人と同じことで、生きてるうちは、金を離したくなかつたんでせう。わたしの母もさう云つたゐました。(口輕く云つて)しかし、遺産の事はどうでもいゝですよ。

新兵衛　お前の伯母さんは、死んだあとで調べたら、祕密の貯蓄はいくらもしとらなんだ。佐一に訊いても分ることぢや。

秀一　貯蓄がなかつたらばなかつたでいゝんです。わたしは、死んだ人間の約束を楯に取つて、强ひて伯父さんの懷中から金を取らうとは思つてやしません。

新兵衛　ぢや、わしの目の前へ顏を出して、わしに不愉快な思ひをさせんやうにして呉れ。お前もいつまでも老人を困らせる法はないと思はんか。

秀一　何時もと云つて、わたしは、あの時から二年目に伯父さんにお目に掛かるのぢやありませんか。

新兵衛　いや〳〵、お前の顏は、しよつちゆうわしの目障りになつてならんのぢや。……それは、頭に髮の生えとる、もつと色の白い顏ぢやつたが……(相手の頭と顏を見詰めて)お前はわしの家の閾が高いから、申譯に頭を剃つて來たのか。

秀一　なに、さうぢやありません。佐一郎さんもさう云つてゐましたが、さうぢやありません。わたしが頭を剃つたのは友人を一人殺したゝめなんです。それで坊主になつてお墓の前へ詫びに行つたんです。殺したと云つてお驚きになることありませんよ。わたしが刄物で斬りも突きもした譯ぢやないんですから。わたしはたゞ間接にその人の身をあやまらせて自殺させたことになつたんです。

新兵衛　なるほど、お前は伯父を蹴つたくらゐで頭を剃つて詫びるやうな、そんな殊勝な男ぢやないと思つた。

秀一　わたしは嘘を吐いて、伯父さんの御機嫌を取らうとは思つてやしません。……母も承知してるんですから、伯父さんはわたしのお賴みすることを聞いて下すつてもよろしいぢやありませんか。

新兵衞　お前は母親をわしの家へ置いてどうかしようと企んどるんぢやな。わしの家はわしが主權者で、わしに逆らふ者はないのぢやから、他所の家の者を置く譯にやいかん。

秀一　ぢや爲方がありません。……伯父さんは永生をなさるといゝ。

（秀一、諦めて立たうとする。）

新兵衞　わしもまだ十年は確ぢや。

秀一　あなたの生命を縮めたつて、喜ぶものはあなたの身内の人ばつかりなんだからなあ。

新兵衞　わしの耳はまだよう聞えるぜ。わしの身内でわしが早う死ぬのを喜ぶ者がどこにある。緣喜でもないことを云ふもんぢやない。

秀一　伯母さんは極樂淨土で伯父さんの來るのを待つてるぢやありませんか。早う行つてお上げなさい。

（秀、座を立つ。）

新兵衞　まあ待て。（秀一の足を捉へて）まあそこへ坐れ。

秀一　（坐つて）わたしの頼んだこと聞いて下さるんですか。

新兵衞　聞いてやつてもいゝ。

秀一　あなたが承知して下さりや、わたしは肩の荷物がおりたやうですよ。

新兵衞　お前はその足でわしを蹴つたんだが、わしはそれを許してやつた上に、お前の無理な頼み事でも聞いてやるのだぜ。

秀一　有難う御座います。荷厄介な母親さへお宅で預かつて下さりや、わたしは身一つで思ふ存分のことが出來るんですよ。（悅しさうにする）

新兵衞　お前は理由のないのにわしを恨んどつたな。蹴つたり踏んだりした甥の一生の頼みを聞いてやる伯父ぢや。お前は人間を見ちがへてゐたとは思はんか。……わしはこの世から佛ぢや。（得意な態度をする）

秀一　伯父さんはこの頃お說教をお聽きになつてるさうですから。（眞顏で云つて）

新兵衞　わしは早速鄕家の德三に手紙をやつてお前の母親を家に置いてやることにするからお前は安心しろ。死んだ婆さんの供養になるだらう。……お前は一人の母親を荷厄介に思ふくらゐぢやから、伯母さんのお墓詣り一度したことがあるまいな。今日此家でお位牌を拜んで行け。

秀一　そんな物があるんですか。

新兵衞　先祖の位牌は、わしより外に大切にするものがないから、わしが一しよに持つて來とるのぢや。お前も來て拜め。

（二人は奧へ入つて行く。そこへ佐一郎が歸つて來る。）

秀一の帽子などを見て不思議に思ふ。やがて、奥の襖を開いて竊いて、襖の間から覗く。そして其方へ入りかれて、茶の間でまご〳〵してゐるところへ、たま子くに子參二郎が歸つて來る。佐一郎は彼等の騷ぎを手眞似で押へて「そこを覗いて見ろ」と、たま子に囁いて指差す。たま子不思議さうに奥を覗いたが、危く噴きだしかけたのを壓へて。）

たま子　また秀さんが來てどうしたんでせう。お佛壇の前で阿彌陀經の講釋でも聞かされてるんでせうか。

（參二郎もくに子も覗く。）

參二郎　佛壇を拜むには坊主頭がよく似合つてらあ。

たま子　お父さんは秀さんが來てもお怒りにならなかつたのか知ら、

佐一郎　老人は老獪だからなあ。（手眞似でみんなを鎭めて）二人が佛壇の前で何を云つてるか、よく聞いてゐろ。

（やがて、新兵衞の聲で、「みんな歸つて來たのなら、此方へ來て佛樣を拜め。わしが佛樣の前で話して聽かせることがある。」）

（佐一郎とたま子と苦笑を浮べる。「行かなきや御機嫌が惡いでせうね」と、たま子は云つて入つて行く。くに子と參二郎とは火鉢の側に坐る。）

くに子　あの人本當に伯父さんを足で蹴つたの？　亂暴な人ね。

參二郎　そりやお父さんにいけないことがあるんだ。死んだお母さんは、生きてる時、時々秀さんの家へ行つて、お金やつてゐたのだよ。僕はお母さんに隨いて、たび〳〵秀さんの家へ行つたことがあるからよく知つてるんだ。死ぬる時には遺言して自分の溜めてる金を預けてやると云つてるのき聞いたことがあるんだ。お父さんがそれを知らない譯はないだらう。兄さんだつて知つてるかも知れない。

くに子　ぢや、何故預けてやらないの？

參二郎　何故故つてことはないさ。親爺は慾が深いから。

くに子　ぢや、秀さんていふ人可哀想ぢやないの？

參二郎　だつてあいつ亂暴だからな。それに、お母さんの溜めてた金を、他所へ持つて行かれちや、僕なんかの損にもなるんだから。

くに子　あなたも慾が深いのね。此處の姉さんだつて慾が深くなつたやうね。あたしのお父さんだつてお金のことになると慾が深いやうなのよ。あたし何だかいやになつてよ。

參二郎　そりや、何處にたつて慾の無い人はありやしないさ。

くに子　でも、秀さんていふ人は、お金の慾はなささうね。

參二郎　そんなことはないだらう。
くに子　でも、あの人が兄さんと話してゐるのを次の間で聞いてゐたら、さう思はれてよ。あたし慾のない人好きよ。
參二郎　（不平らしく）くにちやんは秀さんのやうな人好きなの？
くに子　好きつてことないけど。
參二郎　あんな坊主頭がいゝのかい。
くに子　頭の髮なんか直きに生えるわ。
參二郎　老人を足で蹴つたりする人か好きなのかい。彼奴僕の親を蹴つたんだからなあ。
くに子　だつて、伯父さんを蹴つたのぢやない、お金を蹴つたのだと言つてゝよ。
參二郎　そんな言譯が通るものか。……くにちやんは、そんなに秀さんが好きなら、今夜秀さんに家まで送つて貰ふといゝや。僕は送つて行かないから。
くに子　あたし今夜は此家に泊めて頂くつもりよ。あたしたまには他所のお家に泊まつて見たいんですもの。
參二郎　（俄かにニコついて）僕たつてたまには他所の家に泊つて見たいよ。……たまでなくつて、親や兄弟の家を離れてしまつて、自由に自分の好きなことして見たいな。
くに子　なぜ、さうしないの？　あなたにお金がないから？　伯父さんや兄さんが承知なさらないから？
參二郎　……秀さんは自分の家が貧乏だから無茶なことがやれるんだ。
くに子　（奥の方へ注意して）伯父さんはどんなお話してゐらつしやるでせう。あなたも行つて聞いていらつしやるといゝわ。
參二郎　お父さんのお說法が早くすまないと、今誂へて來た蕎麥を、秀さんにも饗んでやるやうになるだらうな。彼奴と一しよに食べるのはいやだよ。

――幕――

ある心の影

人物
神川大助
瀧村良一
妻　かね子
辰江
駒子

一

小山の途中で稍々平坦なところ。切崩された空所に石地藏が安置されてゐる。端の方にベンチが置かれてゐる。若葉や若草に色取られて、初夏の爽かな氣持が漂つてゐる。

神川大助（三十歳くらゐ。麥藁帽子、サックコート、ネクタイ、靴、ステッキなど、すべて瀟洒たる扮裝、頭髮もキザに目立つほどに新しい好みで、顏もクリームでも塗つたやうに艶々してゐる）帽子を取つて額の汗を拭つて、山を見上げて、「オーイ」と、大聲で呼ぶ。

大儀さうに山の方へ行きかける。が、いやになつたらしく躊躇して、やがてベンチに腰を卸す。うしろ向きである。朝井辰江（二十五六歳。容色の冴えない女。身裝も質素である）足の疲れたさまにて入場。

辰江　ア、苦しかつた（神川の側へ寄つて）かねちやんはゐませんの？（あたりを見廻す）

神川　僕が傍道をしてる間に、夫婦で上へ登つて行きましたよ。どうです？　一しよに行つて見ませうか。頂上は眺めがいゝんですよ。

辰江　わたし幾度も登つたことがあつてよく知つてますわ。別段珍らしくはないし、足も疲れてゐるから、今日は止しませう。それに夫婦連れで行つてるところへ、わたしたちが行つちや邪魔になつていけないでせうから。

神川　ハ、、、。新婚の夫婦ぢやあるまいし、われ〳〵を邪魔にしちやゐないでせう。

辰江　でも、昨夕から二人で内所話をしたさうな風だつたのですよ。あなたには氣がつかないでせうけれど、わたしはちやんと察してゐました。

神川　だつて内所話なら、東京へ歸つてからいくらでも出來るぢやありませんか。

辰江　それが、急に起つたことで明日まで待つてゐられないのかも知れませんわ。全體あなたが察しがなくつて、

一しよに隨いていらつしつたのがいけないんですよ。

神川　さうかなあ、しかし何を祭しるんでせう。瀧村夫婦は平々凡々の夫婦で、別段にわれ〳〵の注意を惹くやうなことはないぢやありませんか。妻君は從順で、御亭主は堅人だし。……辰江さんは瀧村のやうな平和な家庭を持ちたいとは思ひませんか。

辰江　人のことよりも、あなた御自身で、早くその平和な家庭とかをお持になつたらよろしいぢやありませんか（さういふ話をきらつてゐるやうな態度を現はす。）そして、わざと石地藏の方を見て）お地藏樣はいゝものですね。あんな穩かな氣持になつてゐたらいゝでせうね。

神川　あなたは、石地藏見たいな氣持になつてるのかと思つてたら、さうぢやないんですか。

辰江　まあひどい。わたしがそんなに冷淡な人間に見えますの？（不平らしく云ふ）

（神川はベンチから離れて、石地藏の方へ寄つて行く）

神川　あなたは冷淡どころぢやない、熱情があり過ぎるくらゐでさ。（極めて輕く云ひながら、石地藏を見詰めて）木や石で造つた佛樣でも、よく見てゐると、有難味があるから不思議ですね。どうです？　二人で藤田さんの病氣平癒の願を掛けちや。

辰江　あなたでも佛樣を拜む氣におなんなすつて？　不思議ねえ。……でも、藤田の伯父さんは、今度こそ、お醫者の力でゞもお金の力でも、佛樣の力でゞも、病氣がよくなりさうぢやありませんね。

神川　此處へ來て病氣に罹つたのが、よく〳〵運が惡かつたんですね。東京にゐたら、もつと充分手當てが出來たでせうのに。

辰江　伯父さんはまだ後の事なんぞちつとも考へてゐなかつたらしいから困るんですよ。自分ではまだ生命が危いとは思つてやしないでせうから、遺言なぞしてゐないらしいんです。わたしなぞ、名目だけの姪で緣は薄いんだし、年齡も若いんですから、差出た口は利けないんですけど、濃い身内の人があれだけ寄つてゝ、なぜ伯父さんに遺言をさせないんでせう。男の子はみんな小さいんだし、駒子さんがあとで家の處置に困りやしないでせうか。後見人になりさうな人には油斷が出來ない人があるんですからね。

神川　だつて、死にかけた人に遺言をしろなんて云へないでせう。駒子さんは、お母さんに死なれてから、一人で家を治めて來たくらゐなんだから、若くつても傍の人に掻廻されやしないでせう。

辰江　あなたはさう思つて安心してゐらつしやるの？（皮肉な笑ひを洩らして）

神川 （ドギマギして）何がです？

辰江 白ばくれてゐらつしつても駄目よ。わたしにはちやんと分つてるんですから。

神川 何がです？

辰江 何が／＼つて滑稽ね。あなたにも似はない。駒子さんはあなたよりもよつぽど正直ですよ。わたしにはよく打明けてゐるんですわ。……ですから、わたし伯父さんの大病のことを聞くと、伯父さんのことよりも、駒子さんがお父さんのお丈夫なうちに、きつぱり事を極めて置きなされればよかつたと、第一番にさう思つたのです。

神川 辰江さんは獨り合點でいろ／＼なことを云ふから溜らないな。駒子さんのお婿さんになつて、藤田家の遺産がうんと貰へるやうな男は果報者だが、僕なぞは夢にでもそんないゝ運に出くはせないんだから、憐れんで下さいよ。（やゝキザナ口調で云ふ）

辰江 なぜそんなに卑下なさるの？ わたしなぞが第三者として、平氣に考へても、駒子さんはあなたと縁組をなさるほど仕合せなことはありませんわ。藤田家の緣續きで、駒子さんをねらつてる人のあることはあなたも御存じでせう。でもあんな人は趣味は低いし、考へ方が古くつて無理解な人なんですからね。あなたなら、本當に理解のある愛情を注いで、駒子さんを一生幸福にして上げることが出來るんですわ。それに駒子さんは利口だから、御自分の一生を任せる人の選擇をあやまりませんよ。あたしあの人のお腹の中の考へは不斷よく聞いて知つてゐますわ。

神川 （熱心になつて）駒子さんは腹の中でどんなことを考へてゐるんでせうね。

辰江 あなたはそれをよく御存じのくせに。でもね神川さん。（あたりを憚るやうな態度で）今が大事な場合なんですよ。伯父さんが亡くなつたら、傍の人が何を企むか分らないんですからね。わたし、昨夕もいろ／＼勘付いたことがありますのよ。全體伯父さんが駒子さんを側から離したくなかつたために、方々から云つて來る縁談も斷つたのですけれど、伯父さんが亡くなつたら、後見人が駒子さんを氣儘にさせて打ちやつときやしませんわ。無理やりに、壓制的にでも、縁付かせるでせうから油斷がなりませんよ。それで駒子さんがいくら氣象がしつかりしてゐても、兩親に死別れたあとでは心が迷つて、傍の者の口車に乘せられないとも限りませんからね。あなたのためにも駒子さんのためにも、今が大切な時なんですよ。

神川 僕がどうかうつてことは、戯談見たいなものだけれど、藤田さんの、病氣かも一度回復するといゝんですがな。

辰江　今さらそんな奇蹟を望んだつて駄目ですよ。……あなたが駒子さんを何とも思つてゐらつしやらないのなら、わたしがこんなことをお話するのは無駄なことなんですけれど、若しもあの人に愛情を持つてゐらつしやるのなら、藤田家の今の境遇に注意してゐて下さいね。あんなに大勢來てゐても、藤田家のためや駒子さんのためを本當に思つてる人は、身内のうちには一人もないんですから、わたし、他人のあなたにでも力になつて頂いて、藤田家と駒子さんの邪魔物を排斥したいと思つてゐるんです。わたしが男だつたら、駒子さんのために矢面に立つて、冒險をするのもいとはないんですけど……

神川　僕も冒險的のことはやつて見たいんですがね。藤田さんには御世話にもなつたし、相當な信用はされてるらしいんですが、御親類の方の目にや僕なぞは青二才で取合つて貰へないんですから駄目ですね。

辰江　みんな頭が古くつて、あなたのやうな新しい考へを持つてゐらつしやる方を充分に認めることが出來ませんのね。でも、そんなことを氣にしてゐちやいけないと思ひますわ。……駒子さんもさう云つてゐましたよ。神川さんは上べは柔しくつても、いざとなつたら、どんな冒險的な事でもしさうな方だつて。……必要な場合には思切つた事の出來るやうなんでなくつちや、男としての本當の價値はないんですわね。

神川　そりやさうでせう。社會のためにでも人のためにでも、生命を棄てゝかゝるのは男子として愉快なのに違ひない。

辰江　わたし、冒險的な人大好き。亂暴で粗野な人はきらひですけれど。……駒子さんもさう云つてゐましたよ。

神川　ぢや、僕も一つ北極探險でもやつて、あなた方に喝采して貰ひませうかな。(戲談らしく云ふ)

辰江　北極探檢も星の世界の探檢も面白いでせうけれど、それよりも、手近かに、あなたのためにもつと張合ひのある探檢があるぢやありませんか。(思はせぶりの態度で云つて、山上の方を見上げて)かねちやん達は何を話してゐるんでせう。あなたはお察しがつかないの？　あなたは本當に、瀧村夫婦を平凡な穩かな家庭の人のやうに思つてゐらつしやるんですか。

神川　だつてさうぢやありませんか。

辰江　心からさう思つてゐらつしやるのなら、あなたは本當に善良な方ね。わたし敬服しますわ。變な譬へですけれど、後から刄物を持つてねらつてる人があつても、氣がつかないやうな方ね、あなたは。

神川　(目を欹てゝ)僕を傷つけようつて人が何處にゐるんですか。脅かしちやいけませんよ。……まさか瀧村君

が僕に敵意をもつてゐやしないでせう。

辰江　善良な人には、他人の心がみんな自分と同じやうに善良に見えますのね。わたしなぞ性質が悪人に生れついてるせゐですか、他人のお腹の中の黒いところや白いところが目について、いけませんのよ。……かねちやんも柔順で、わたしとは小さい時分からの仲よしなんですから、あの人の事、決して悪く思つてやしないんですけど、人間には慾があるから、いけませんのね。瀧村さんは學才はあつても、お金には不自由してゐるんでせう。それでかねちやんの縁で、伯父さんから多少の補助はして貰ひたがつたことは、あなたも御存知なのでせう。それだけなら、誰れしも考へさうなことなんだからいゝんですけれど、御自身の利益のために、駒子さんをある人に結びつけようと企んでゐるのが、わたしにはよく分つてるから、淺間しく思はれてなりませんの。一しよに汽車に乘つて同じ宿に泊つて打解けた話をしてゐながら、あの人達はお腹の中では何を考へてるか分らないんです。……でも、わたしがこんな餘計なお喋舌をして、あなたと御親友の仲に氣まづい思ひをさせては相濟みませんわね。

神川　いや、僕にも多少思當ることがあるんです（眞面目になつて）……しかし鋭吉君は立派な人物だから、瀧川君はじめ、藤田家の身内の方が、駒子さんのお婿さんに撰ぶのは當然なんでせう。

辰江　おや、あなたまでも、それを良縁だと思つてゐらつしやるの。あんな神經の鈍な無理解な男を、駒子さんのやうないゝ方におつつけるつていふ法はないと、憤慨してるのは世の中にわたし一人なんでせうか知ら。玉のやうな駒子さんが間違つた結婚をして汚されるのを氣に病んでるのはわたし一人なんでせうか知ら。

神川　だつて仕方がないぢやありませんか。

辰江　あなたは成行に任せて默つて見てゐらつしやるおつもり？

（神川考へ込む。辰江、聞耳を立てゝ慌たゞしく。）

辰江　かねちやんが下りて來ますよ。……今わたしの云つたことはお氣に留めないやうにね。

神川　僕は瀧村君に悪意を持つてやしませんよ。

辰江　近いうちにゆつくりお話しますわ。（意味ありげに云ふ）

（辰江は山上の方へ行きかけて、舞臺から姿を消す。神川は不安な態度をしてあちらこちらを歩く。間もなく、瀧村眞一（三十歳くらゐ、地味な服裝、兵子帶を締めて、麻裏を穿いてゐる）妻かね子（二十四五歳。辰江よりも容貌體軀が派手で生々してゐる。服裝も目につくやうに派手である）辰江と一しよに入つて來る。）

（夫婦ともだろさうな足取りをしてゐる。）

辰江　わたし、此處で一休みして動氣を鎭めてから、上まで上らうと思つてゐたのよ。

かね子　此處をもう一息登つたら、伯父さんの別莊がよく見えたのよ。でも、山登りなんて詰らないわね、疲れるはかしだから。

瀧村　神川君が寫眞機でも持つて來てゐればよかつたのだね。此處で四人揃つたところを寫しとけば記念になつてよかつたのだが。

神川　しかし、今度は寫眞機なんぞ提げて來るやうな悠長な氣持にはなれないからね。

瀧村　さう云へばさうだが。（神川の顏に注意して）君はどうしたのかい。何だか心配事でもありさうな顏してゐるぢやないか。

神川　藤田さんの病氣を心配してる外に、心配事と云つて別段ありやしないよ。

瀧村　さうかい。（輕く云つて）伯父の急病にはお互に脅かされた譯だが、來て樣子を見ると、お互にもう諦めるより外爲方がないね。

かね子　病人の話は止しませうよ。氣かくさつていけないから。

（かね子、瀧村、辰江の三人はベンチに腰を掛ける。神川だけは立つてゐる。）

辰江　病人を見舞に來て、こんな所へ遊びに來てゐちやいけないわね。いつどういふ知らせが來るかも知れないから、わたし一人は宿にお留守居してゐようと思つたのだけれど、みんなが遊びに出るものを、一人だけぢつとしてゐちや、自分が除け者にされたやうに思はれていやになつたの。

かね子　わたしは心配して急いで來たくらゐだから、徹夜して看病して上げたいんですけど、大勢看護人が揃つてるところへ、わたしなんぞが入つて行つちや、却つて邪魔になるだらうと思つて遠慮してゐるんだわ。

瀧村　看護人か大勢ゐるからいゝが、お互ひに徹夜の看病なんかさせられちや溜らないからね。

かね子　あなたはさうでせうけど、わたしなぞは看病は自分の方から望んでもして上げたいと思つてますわ。辰江さんだつてさうでせう。

辰江　さうですとも。どうかして伯父さんの壽命をせめてもう半歲でも延して上げたいと、さつきも神川さんと話してゐたところなのよ。お醫者の力でもどうにもならないのなら、みんなで神樣にでも佛樣にでも願を掛けたらどうだらうつて、さつき神川さんと相談してゐたのよ。

瀧村　神川君は本氣でそんなことを云つたかい。（辰江を指

して）この人はね、迷信家で、ある人をのろひ殺さうと思つたことがあるんだつて。神樣の力で呪ひ殺さうとした人が、神樣の力で人の病氣を癒さうと云ふんだから妙だね。

神川　それははじめて聞いたが、辰江さんがのろつた人は誰れなんです？

辰江　馬鹿なことを云つてゐらつしやるのね。（かれ子をぬすみ見しながら神川に向つて）瀧村さんは無神論者なんですよ。それで、人間の靈魂はこの世限りのものだから死んだ者のお墓へ參つたり追悼會をしたりするのは無意味のことだと思つてゐるんですよ。そんな現實主義のくせに、道德堅固で、人間の勤めは一分一厘も間違はないやうに勤めてゐらつしやるんだから、そこは感心なのね。

瀧村　神川君だつて、無信仰の點では僕に劣りやしないさ。辰江さんだつてあんまり神信心をする方でもなささうだし……さう云へば、藤田の伯父も隨分無信心な人だつたが、あゝいふ大病に罹つたらどんな氣持になつてるか知ら。僕はあんなに一生金の事ばかり考へてゐた人の死際の氣持を、當人に訊ねたかつたのだが、枕許へ寄つて病人に訊ねる譯には行かなかつたのでね。

かれ子　さあ、もう歸りませう。藤田から呼びに來た時に誰れも宿にゐないやうぢやいけないから。

瀧村　ぢや、お前と辰江さんだけで先へ歸るといゝ。おれは神川君ともつと遊んで行くことにしよう。

かれ子　ぢや、さうしませう。……辰江さん、二人でボツボツ歸りませうね。

（かれ子立上る。辰江躊躇する。）

辰江　瀧村さんの無神論の御講釋でも久振りに聞いて、もう少し此處で休んで、みんなで一しよに歸ることにしちやどう？

かれ子　六ケ敷い理窟なんか聞いたつて詰らないぢやないの？

瀧村　辰江さんは、いつまでも僕を理窟屋だと思つてるんだから可笑しい。無神論の理窟を捏ねてあなたなんかに傾聽させたのは五年も七年も前のことぢやないかな。あなたが人を呪ひ殺さうとした時分のことなんだ。

辰江　神川さん。わたしが呪ひ殺さうとした人は本當は瀧村さんなんですよ。（わざと戲談らしく云ふ）

瀧村　本當にさうなんだから驚くだらう。（わざとらしい峻嚴な顏して）その時僕が無神論者で靈魂否定主義者だつたからこそ、平氣で神經をも病まなかつたのだが、さうでなかつたら、辰江さんの呪ひに罹つて、死なないまでも病氣くらゐしたに違ひないんだ。

神川　（今まで沈んでゐたが、この話にふと興味を起して）

辰江さんは何のために君を呪はうとしたんだね。君はどの點からも、人に呪はれさうな男ぢやないが。

かね子　何だか詰らないお話ね。辰江さんは先きへ歸るのはおいや？

辰江　歸るのはいゝけど、わたしのことが今問題になつてるんだから、ちよつと此處が離れられないわ。

かね子　ぢや、わたし一人で行つちやうわ。（かね子は行きかけたが、辰江が隨いて行かないので、道の一端に立留つて、他の人には關係しないやうな態度で、あたりの景色を眺めてゐる。）

瀧村　それは何でもない理由なのさ。ある年の花時に、市川か小金井かへ四五人連れで遊びに行く約束をして辰江さんもその仲間の一人で、朝早くからお扮飾をして辨當もこしらへて待つてゐたのに、その日になつて、僕がうつかりして辰江さんの家へだけ誘ひに寄らなかつたのだ。恨まれた原因は、たしかそれだけなのだが、女に恨まれるのは恐ろしいものだね。

辰江　（緊張してゐた顏を稍々弛めて安心したやうに）だつて、何日も前から樂みにしてゐて、前の晩には夜中眠らないで待つてゐたものを、スッポカされたんですもの。呪ひ殺しても足りないほど憎くなるのはあたり前ぢやありませんか。（甘えたやうに云ふ）

神川　しかし、男もそのくらゐなことで呪はれちやたまらないね。

辰江　神川さんにも隨分そんな經驗がありさうですわね。用心してゐらつしやいな。

神川　なに、僕なぞは氣が小さいから、約束したことはちやんと守りますよ。

辰江　ぢや、さつき此處でわたしに約束なすつたことも確かに實行なさるでせうね。

神川　（訝しさうに）あなたに何を約束したのでせう？

辰江　あら、もうお忘れになつたの？　ひどいわねえ。男つてなぜさう忘れつぽいんでせう。

瀧村　ぢや、今度は神川君が呪はれるんだね。お地藏樣のやうな顏してゐても、腹の中は夜叉なんだからね。

辰江　（稍々氣色ばんで）それは誰のことを云つてゐらつしやるの？

瀧村　一般的のことなんです。すべての女をさうだと云つたら、あなたもそのうちの一人になるでせうけれど。

辰江　ぢやかねちやんもそのうちの一人なのね。あなたの奧樣も夜叉組の一人なのね。

（瀧村微笑してうなづく。神川何の氣なしに笑ふ。）

辰江　かねちやん。あなたも夜叉ですつて、よくつて？

かね子　（振返つて）いゝわ。……わたし一人でゝも歸つ

てよ。

辰江　ぢや、わたしも歸りますわ。

（座を立つて、二人で出て行く。）

瀧村　宿へ歸つたつて退屈たし、歩くと暑くなつていやだし。も少し此處で休んで行かうか。

神川　あゝ。

瀧村　君はさつきから馬鹿に元氣がないね。辰江さんに何の約束をしたのだい。

神川　何も約束なんかしないよ。

瀧村　さうか、（少し默つてゐて、やがて眞面目に）これで、伯父が危篤のまゝで、どちらとも極りがつかないやうだと、僕は歸るに歸られず、困るんだよ。

神川　僕だつて、藤田さんの病氣をよく見屆けてからでなくちや歸らないつもりだ。

瀧村　君はさうまで、伯父の生死に身を入れる義務はないだらう。

神川　いや、義務はなくつても、僕の人情からさう思つてるんだ。僕は藤田さんには非常にお世話になつてるんだから。

瀧村　さうかなあ。僕はお見舞の義務だけ果したら、さつさと歸りたいんだが、……伯父と云つてもワイフの緣を引いてゐるだけだから人情が起らないのかも知れないが、薬慾な老人が一人死ぬるのを、大變な事件のやうに、みんなが騷いでるのが、僕には馬鹿々々しくつてならないよ。何とかの注射だの何とかの藥だのと、醫者が臨爪らしくやつてるのも無駄なことなんだからね。あしこへ見舞に行つてると、高い聲は出せないし、足音にも氣をつけなければならないから窮屈で爲樣がない。しかし、そんなことを云はうものなら、ワイフはじめ親戚の奴に叱られるから默つてるんだが、君は僕に同感だらう。

神川　しかし、獨力であれだけの資產をつくつた人が、不斷は丈夫だつたのに、突然の病氣で死ぬるのは氣の毒だからね。遺族に對しても同情が起るのは當然ぢやないか。いくら資產があつても壽命を買ふことが出來ないのだから、人間は墓ないものだね。

瀧村　人間の墓ないことは、知人の死んだ時にはお互ひに感じてゐるが、あの病床に寄つて來てる者は、「墓なさ」と「おいたはしさ」を感じる外に、遺產のことを考へてゐますね。それから駒ちやんのことも考へてゐるね。

神川　（心の動搖を相手に見せまいとしながら）それは無論さうだらう。後をうまく處理しなければならない義務もあるだらうからね。君だつて考へてるだらう。

瀧村　多少は考へてるが、僕は實業や金の處分については極めて不得手なんでね。僕の云ふことなぞは藤田家の連

中には用ひられはすまいよ。しかし、駒ちやんの身の上については、用ひられるか、用ひられないかに關はらないで、僕に多少の考へがあるんだ。

神川　それはどういふ考へなんだ。(何氣ない風で訊く)

瀧村　君には隱す必要はあるまいがね。……駒ちやんを鋭吉君が非常に望んでゐて、伯父に承諾させようとしてゐたのを、伯父はなか／＼うんと云はなかつたのだが、死んだあとでは、それが鋭吉君の幸ひで、案外望みが達せられるかも知れないんだ。あの娘には傍の者の勸めを斥けて自分で夫を撰ぶつてことは出來さうぢやないからね。……しかし、僕はどうも駒ちやんを鋭吉君に嫁はせるのがいやなんでね。ワイフはあの二人の結婚をいゝことにしてるんだから、僕も上べは同意してるんだが、腹の中ではたまらなくいやなんだ。

神川　(胸の鼓動を壓鎭めて)なぜいやなのだ? 鋭吉さんは駒子さんのお婿さんになる價値がないと云ふのかね。

瀧村　そんなことはどうでもいゝんだがね。……あの娘は最初僕との間に縁談があつたのを、僕の家が貧乏なために、伯父に嫌はれて成立たなかつたのだ。この事は今はじめて君に打明けるんだが、辰江さんだけは知つてる筈なのだ。その當座はどうでもいゝと思つて、執念深く拘泥はる氣はなしに、今の妻と無雜作な結婚をしたのだが、自分ながら不思議なものだ。僕のあの時の縁談に邪魔をした伯父が急に死んで邪魔が無くなるのかと思ふと、未練くさい氣持が腹の中に湧いて來るのだから不思議だ。もう二三年結婚を延しとけばよかつたと、昨夕伯父の病床を覗いた時から考へられてならないよ。……君は馬鹿だと思つて笑ふだらうが、人間にはさういふ氣持があるんだから爲方がないね。

神川　しかし、君は今平和な幸福な家庭を持つてるんだからいゝぢやないか。

瀧村　それは、今までは幸福でなくつても、不幸でもなかつた。自分の結婚を不幸だと思つたこともなかつたが、今日になつて、しまつたことをしたと思はれてならないんだ。こんなことを誰れに話したつて眞面目に聞いて呉れるものはないから、君にでも話していくらか欝憤を晴らさうとする譯なのさ。

神川　馬鹿にしてらあ。(苦笑して)

瀧村　馬鹿げたことさ。しかし、僕自身が腹の中でさう感じてるんだから爲方がないさ。この結果はどうなるかな。第三者として君にも豫想は出來まいね。

神川　さあ、神樣でなくつちや分らないつて云ふ譯だね。……僕も今日は、辰江さんと君とから變なことを聞かされたよ。僕はお地藏樣ぢやないから、變なことを聞かさ

れて無感覺ぢやゐられないよ。

瀧村　辰江さんから變なことを聞かされたつて。さつき、僕が上へ上つてた間にか。

神川　あゝ……それは君には秘密だ。

瀧村　まさか、あの人が君を何とか思つてるのぢやあるまいしな。

神川　兎に角、山を下りよう。

（神川は相手に關はず歩きだして、「おい行かないのか」と、振返つて促してから姿を消す。

（瀧村はベンチの上へのび〳〵と仰向けに寢ころぶ。ふと、下の方を見おろして、また寢ころぶ。）

（辰江が入つて入る。忍び足で瀧村の側へ寄つて行く。ふと、それに目をつけた瀧村は愕然として起上る。我知らず警戒するやうな態度をする。）

辰江　そんなに驚かなくつてもよ御座んすよ。化物があなたの前へ姿を現はしたのぢやないでせう。

（皮肉に云ふ。顔付はさつきよりも險しい。）

瀧村　いや、僕には、辰江さんの姿を借りた化物がそこへ來たやうで氣味が惡いね。あなたはどうして一人で戻つて來たんです？

辰江　ベンチの側へ忘れ物をしたと云つて後戻りをしたのです。

瀧村　（あたりを見廻して）そんなものはないぢやないか

辰江　わたしの忘れ物は品物ぢやないのよ。……あなたに一言云ひ忘れたことがあるんです。

瀧村　あゝ呪ひの一件なのか。（微笑して輕く云ふ）つい口が辷つて濟まないことをしましたね。しかし、神川なぞにや氣がつきやしませんよ。

辰江　あなたは己惚れが強いから、わたしが今でもあの時分のことを根に持つてゐると思つてゐらつしやるのね。わたし、今はあの頃の辰江ぢやありませんよ。自慢ぢやないけれど、今のわたしのお腹の中はそりや奇麗なものよ。第一、いやな思ひを心に持つてゐれば、あなた達と一しよに病人の見舞に來たり、同じ宿に泊つたりなんか出來ない譯ぢやありませんか。

瀧村　（少しじれて）己惚れが強いと云はれゝば一言もないね。實のところ、僕はあなたに對しては、いつも煙つたい思ひをしてゐるんで、つい照れ隱しに、あんな毒口を利いたりするんですよ。……此處で正直にあなたに云つちまつてもいゝが、僕はこの頃は結婚をつく〴〵後悔してゐる。理由もないのに離縁は出來ないから、愚闇愚闇で日を暮してるんだが、本當なら獨身でゐればよかつたのですね。

辰江　（感傷的に）今あなたがそんなことを仰有つても、

わたしには何の足しにもなりやしないわ。かねちやんは可愛がつてお上げなさいね。昨夕からわたし勘づいてゐたんですよ。あなたがかねちやんに對して結婚當時のやうな情愛を持つてゐないことを。……それでわたしも恐ろしくなつたの？

瀧村　あなたは、あの時の決心を續けて、いつまでも獨身を守つてるだけあつて恐ろしいね。探偵以上に、神のやうに僕の腕の中を覗いて見るから怖いよ。僕は神を信じないかはりに、辰江さんだけは生きてる神のやうに思はれて、あなたが生きてる間は、枕を高うして眠られないやうに思はれてならないんだ。（面相が變つて、語調も人間離れがしたやうに）

辰江　世間の人はみんなお人よしのせゐだか、片つぽの目が死んでゐるせゐだか、あなたの本性を知らないんだから可笑くつてならない。あなたを世事に疎い生物學の研究者で、それも古い／＼大昔の生物をコツ／＼研究して新しい發見をしようとしてる人のやうに思つてるんだから、わたし可笑しくてならないの？　本當のあなたがこれまでにした罪惡や陰謀の片つぱしでも知つてるのは、わたしばかりなんでせうから。（惡魔的の笑ひを浮べて云ふ。面相も女性の柔しさをすべて失つたやうになる）二三年あなたの側にゐるかねちやんでさへ、本當のあなたをちつとも知らないんですもの。

瀧村　僕に陰謀があるんだつて？　うそを云つちやいけないよ。陰謀はあなたの方かも知れないね。あの時僕と駒ちやんとの緣談を伯父が承知しなかつた一つの原因は、あなたの忠告のせゐだつたかも知れないんだからね。しかし、僕は毛頭それを恨んでやしないんですよ。駒ちやんをあの時それほどに思つてやしなかつたんだから。

辰江　それはあなたの邪推です。その證據にはかねちやんとの結婚にわたし針の先ほどの妨害をもしなかつたぢやありませんか。……あなたは研究室に身體を置いてゐても、あなたの魂は、そこの窓から飛出して、他人の幸福の妨害をするために、方々を見て廻つてるんだわ。伯父さんの急病だつてあなたの所爲かも知れないの？

瀧村　さういふ力が僕の身體に備はつてゐればね。……僕は何年もさういふ力を望んでゐたのだけれど、サツパリ駄目ですよ。昔の生物が有つてゐなかつた智慧や力は僕にもなさゝうだ。……しかし、女のあたまにはさういふ力があるのかも知れないな。だから僕は怖いよ。僕の運命の糸はあなたの手に握られてゐるのかも知れない。

辰江　（醜い泣顏をして）だつて、あなたはわたしの一生を臺なしにしたのぢやありませんか。わたしが弱くつて、世間の女のやうに表立つた復讐の出來ないのをいゝ

ことにして。

瀧村　あんなことくらゐで臺なしになるもならんもないぢやないかね。あなたにも似合はない。二人の事は世間に知れてゐやしないんだから、なぜ早く結婚をしないんです。神川にでも求婚したらどうです？　僕等が仲介人になつてもいゝね。

辰江　馬鹿仰有い。わたしは、男といふ者を信じちやならないことをあなたに教はつてるんぢやありませんか。

瀧村　信じなければ結婚が出來ないつてことはあるまい。男と女と一しよになるのに信じる信じないが問題になるのは、僕には昔から分らない理窟だ。……それに、神川は詩人や小説家のやうに愛とか戀とかをしよつちう考へてる男らしいから、丁度あなたのお相手にはいゝでせう。

瀧江　あなたには分らないの？　神川さんは駒子さんを熱心に慕つてるんぢやありませんか。わたし此間から勘付いてるの？　見舞に來たのもさうした心があるためぢやないの。

瀧村　神川が駒ちやんに惚れてるんだつて？　さうとは知らなかつた。アゝ、おれは馬鹿だ／＼。

辰江　どうしたの？　駒子さんを銑吉さんに押しつけようと、あなたが企んでゐたのを後悔したんですか。

瀧村　なあに、さうでもない。

（「オーイ」と、下から神川の呼ぶ聲が聞える。）

瀧村　さつき嚊あを連れて山を歩いてた時に、神川の奴、あんな聲で頻りに呼んでやがつたが、嚊あは聞えない振りして、二人でもつと遊んで行きませうと云つてゐたよ。あなたはさう云はないかね。

辰江　かねちやんとはちがつて、わたしが此處にゐたつて柔しい話が聞かれるのぢやないし、下へ下りませう。……下界へ下りて、みんなの中へ行くまでに、たゞ一言云つて置きますわ。忘れないやうに覺えてゐらつしやい。わたしはあなたを呪ひもしないし、あなたに祟らうとも思つてゐないから、それは安心してゐていゝのよ。だけど、あなたのすることだけは、わたしの目の光つてるうちは見のがさないつもりなの。あなたが、闇の中でゝも、鍵を掛けた部屋の中でゞも、何處からか、それを見てるつてことをよく覺えてゐらつしやい。……さあ行きませう。

（辰江スタ／＼と山を下る。瀧村悄々として隨いて行く。）

二

宿屋の一室。四人が一つ部屋に泊つてゐるのである。晩餐のすんだ後。神川は、ビール罎などのまだ置かれ

てある食卓に向つて手紙を書いてゐる。瀧村は煙草を吹かしながら夕刊を讀んでゐる。かね子は端近く出て外の夕暮れを見てゐる。辰江は古いアケビの手提行李から羽織を出して着ながら、湯上りのテカ〳〵した顔を向けて。

辰江　ぢや、かねちやんはいらつしやらない？

かね子　えゝ。行きたくないわ。山登りで足が疲れてるから。

辰江　ぢや、わたし一人で行つて來てよ。買物だけして直ぐに歸つて來るわ。

（みんなに目禮して出て行く。瀧村は横目でそちらを見ゝニヤリと薄笑ひを浮べる。）

かね子　伯父さんの病氣が極りがつかないやうなら、わたし達は終列車でゝも一先づ東京へ引上げちやどう？　別莊の方へ行つてゐても邪魔になるやうで居づらいし、此處にゐても何だか不愉快に思はれてならないわ。（力のない聲で云ふ）

瀧村　伯父が極りがつかないと、東京へ歸つたつて不愉快だよ。まあ、も少し辛抱しといでよ。

神川　（筆を擱いて頭を持上げて）僕や辰江さんがあなたの家庭へ侵入してゐるやうではいけませんね。部屋が空いてると、外へ移るといゝんだが、僕とあの人と一つ部屋に泊る譯には行きませんし、困りましたね。

かね子　あら、あなたが邪魔だなんて、さういふ意味にお取りになつちや困りますわ。（極り惡さうに云ふ）

瀧村　かういふ旅行も變つてゝ面白いんだが、僕等よりも神川君が迷惑だらう。

神川　いや、僕は構はないがね。しかし、今夜は僕だけは別莊の方へ行つて、玄關にゐて夜番でもさせて貰はう。病人の樣子が變つた時に、こちらへ知らせる使くらゐにはなつてもいゝから。

かね子　どうしてです？　あなたに行かれちや困りますわ。わたし、先つきから辰江さんが怖いやうなんですもの。辰江さんとわたし達と三人きりで此處に泊つてられやしませんよ。

神川　ぢや、わたしが安全瓣になるんですね。いゝ役ぢやありませんね。

かね子　（よく考へる風で）神川さんはさう思ひなさらなくつて？　辰江さんは山を下りた時分から、餘程樣子が變つたやうに、わたしには思はれてならないんですけど、さうぢやないんでせうか。

神川　さあ。僕は氣がつきませんが、どう變つたんでせう？

かね子　どうつて、言葉でハッキリは云はれませんけれど。……あの人のわたしを見る目付が違つて來たやうに

も思はれますね。それで、わたし達の方を見ちや神川さんの方を見てゐるのが、何か合圖をしてゐるやうに思はれるんです。

神川　へえ。それはななたの氣のせゐですよ。

かね子　知らない人が見たら、あなたと辰江さんの間に何か深い譯がありさうに思ふかも知れませんわ。

神川　（不快らしい顏して苦笑して）これは驚いた。……だから僕一人ぢやあの人と一しよに歩けませんね。僕はまだ結婚前だから、詰らない誤解をされちや迷惑しますからね。

かね子　外の方とはどうだか知りませんけど、辰江さんとあなたとは何でもないことは、わたし達がよく存じてますから安心してゐらつしやい。それに辰江さんは、あの年齢になるまで、男に對していやらしい考へは少しも持たないで生きて來たんですからね。だから、昨夕のやうに、みんなで枕を揃へて寢てもあの人は平氣なんです。

神川　二十五六にもなるまでに、色も戀も知らなかつた女があるんですかね。少し信せられませんね。

かね子　でも、あの人はさうらしかつたのですよ。だから、辰江さんは心が奇麗でいゝと、わたし不斷から感心してゐたのですけど、今日はさう思へなくなりました。あの目が氣味が惡くなつたのです。不斷と異つた話をしてる譯ぢやないけれど、あの人の聲の調子が不斷とちがつて、わたしを脅かしてなりませんの。（心から恐怖を感じてゐる風に云ふ）

瀧村　そんな下らない話は止せよ。

かね子　（氣色ばんで）下らなかないわよ。……さつきお夕御飯を食べた時に、辰江さんは、伯父さんが死んだら、親類のうちでも遺産をいくらか頒けて貰へて得をする者があると云つたでせう。あれはわたし達に當てつけて云つたんです。あなたは神經が鈍いから當てつけられても感じないのね。

瀧村　遺産を頒けて貰へれば結構だが、生憎おれ達は、藤田家の身内のうちでは無勢力なんだから駄目だな。

かね子　わたしが不斷伯父さんに取入つてゐなかつたから、遺言狀に利益になることを書いといて貰へないと、わたしを責めるんですね。……神川さん、瀧村は見掛けによらない剛慾な男なんですね。

（神川は呆れた態度で、目を外して煙草に火を點ける。瀧村も呆れてゐるやうに妻を見る。）

瀧村　（强ひて笑ひを浮べて）おれの剛慾なことは神川君はよく御存じだが、お前は今夜はどうかしてゐるね。伯父の病氣をあんまり苦にし過ぎたゝめに、頭が疲れたのだね。アダリンでも買つて來させて飲んで早く寢るとい

いんだ。

紳川　それよりもみんなで散歩に出ようぢやないか。僕も少し喰過ぎたやうだから散歩したくなつた。（手紙を封に入れて宛名を書きかける）

かよ子　晝間あんなに苦しい思ひをして山登りをして疲れてゐるのに、散歩なぞ出來るものですか。

瀧村　山へ登つた時はお前は面白がつてゐたぢやないか。……辰江さんとお前と一しよに歸りかけた時に、あの人、から何か聞かされたのぢやないのか。

かね子　ないしよで聞かされて惡いことがあるの？。わたしあの時は何も異つたことを聞かさりやしないわ。

瀧村　あの人も伯父の病氣を氣にしてるせゐか、云ふことが變なのだよ。何を云つても眞に受けちやいけないよ。

かね子　辰江さんが何で伯父さんの生死を氣遣つてゐるものですか。わたしだつて、伯父さんのことなぞは何とも思つてやしないわ。あなただつてさうでせう。駒ちやんくらゐなものですよ、病人のことを心から氣遣つてる人は。

瀧村　だつて、お互ひにわざ〳〵此處まで來たんだからね。知らせを聞いた時には、お前も顏の色を變へてゐたぢやないか。

かね子　わたし、自分がどんな顏したか見たことがないから覺えちやゐません。自分が口の先で何を云つたかも覺えちやゐません。わたしの知つてるのは、辰江さんの顏だけなの。あの人の聲だけなの。それがわたしには怖くなつてならないんです。

瀧村　（持餘したやうに）お前は夢を見てるやうなことを云つてる。

（紳川は他の二人の話を耳に入れない風をして、超然とした態度で手紙を書終る。）

紳川　誰れも散歩に出ないのなら僕だけ、手紙を入れに行つて來よう。（獨言のやうにさう云つて、手紙を持つて出て行く）

（かね子、夫の側へ近寄る。瀧村は思はず後退りにする氣味。）

瀧村　お前が是非歸りたいと思ふのなら、終列車で歸つてもいゝよ。

かね子　あなたも辰江さんが怖くなつたのね。……でも男のくせにあの人を怖がつて逃げるなんて卑怯ぢやありませんか。わたしだつて、あの人を恐れて逃出したやうに思はれて、あとで二人に嗤れるのはいやです。辰江さんなんぞに後指を差されるやうなことを、わたしした覺えはないんですから。

瀧村　だつて、今お前は終列車で歸りたいなんて、自分で

云つてゐたぢやないか。……お前は今夜はどうかしてゐるよ。

かれ子　薄ボンヤリなわたしも、今日は目が醒めたのかも知れないの。あなたが本心から伯父さんの遺産を狙つてることも、今日はよく分つたんです。今までは戯談半分に云つてゐらつしやるのかと思つてゐたのだけど、あれは眞劍だつたのね。あなたがわざ／＼見舞に來て先方の御機嫌を取つたのも、眞心は微塵もなくつて慾一方の考へだつたのね。

瀧村　（當惑しながら）それはおれだつて、年中貧乏して、専門の研究にも不便を感じてるんだから、金が慾しくないことはないさ。しかし、お前たつて伯父の財産の事はよく話してゐたぢやないか。伯父が學問に理解があつて、おれの研究のために多少で補助して呉れゝばいゝと、たび／＼さう云つてゐたぢやないか。

かれ子　わたし、馬鹿だつたから、あなたをえらい人にするためには、どんな事でもしようと思つてゐました。ある日伯父の部屋へ御機嫌伺ひに行つた時に、伯父に痲醉藥でも嗅がせて、金庫の鍵を盗んで、大金を浚つて來たいと、大それた惡事を夢のやうに考へてたこともあつたのです。……わたしの方でそれほどに思つてゐても、あなたはわたしを御自分の出世の道具に使はうと思つてゐただけで、はじめからわたしに對して眞心は少しも持つてゐなかつたのぢやありませんか。

瀧村　今日になつてそんなことを云つておれを苦しめるのは可笑しい。辰江さんがおれだち二人の間を氣まづくさせるために、お前に何か餘計な入智慧をしたのぢやないか。老嬢（オールドミス）は嫉妬や邪推が深くつていけないよ。今度一しよに來て一しよに寢起きをするのがいけなかつたのだな。

かれ子　あなたは、今日山を下りてからは辰江さんに氣兼ねをしてゐるのね。あの人はわたしに入智慧なんぞ明らさまにしないのだけれど、あなたは胸の中に弱味があるから、それが氣になつてならないんでせう。わたし、心の目が開いてからは、言葉で云つて聞かされなくつたつて、顔付や、素振りだけで、あなたや辰江さんの本心が分るんです。

瀧村　（苦笑しながら）顔付や素振りだけで人の本心が分るやうになつたら、世の中は恐ろしくなるね。女といふ女がみんなそんな風になつたら、男は往生だ。

かれ子　そんなことを云つて誤魔化したつて駄目よ。……さあ白状なさい。

（かれ子は夫の側へ躙り寄る。今にも胸倉を掴みかゝりさうな權幕。）

瀧村　（呆氣に取られて）白狀をするつて何を白狀するんだ。狐に抓まれてるやうで、何のことやらおれにはサッパリ分らないよ。

かね子　あなたは神川さんなぞの前で、わたしに恥を掻せようとするんです。

瀧村　伯父が危篤だつていふ電報で、いそいで飛んで來たのぢやないか。餘計なことを考へる暇があるものか。（廊下の方を顧みて）オイ。辰江さんが歸つて來るやうだぜ。あの足音はさうらしい。

（かね子は俄に態度を和らげて夫の側を離れる。）

瀧村　あの女の前で泣つ面を見せちや、それこそおれ達の恥ぢやないか。

（二人は何氣ない樣をして暫く默つてゐる。誰れも入つて來なかつたので。）

瀧村　機嫌を直して濱の方へでも行つて見ちやどうだい。此方へ來た次手にうんと潮風を吸つて行かうぢやないか。

（さう云つて瀧村が立上つて、襖を開けて出掛ると、かね子もおとなしく隨いて行く。二人の姿が見えなくなると、辰江は庭の方からソッと入つて來て、部屋へ上つて、あたりを見廻したが、ふと、かね子の手提袋を見つけると、憎さげにそれを取つて投げつける。一度で飽足らないで、も一度取つて投げようとしてゐるところへ、神川が入つて來たので、極りの惡い樣子で。）

辰江　あなたは何處へ行つていらしつたの？

神川　息拔きにちよつとそこまで出てゐたんです。何故だか二人の間の形勢が不穩なやうだつたから、僕は氣をきかせて座を外したんですが、もう仲直りが出來たのか、二人はお揃ひで何處かへ出て行きましたよ。僕は廊下でぶつつかりさうだつたのを、わざと蔭へ隱れて見送つてゐたのですが、あの二人も言合ひをしたり啀み合ひをしたりすることがあるんですかね。あの夫婦は平々凡々に穩かな家庭を樂んでるのだとばかり思つてゐたのに、不思議ですね。

辰江　あなたは獨身だから、夫婦仲のことはお分りにならないのね。（いつの間にか行儀よく坐直して澄した顏をして）二人が何のために棘々してゐたのか、あなたには察しがつかなくつて？

神川　多少察しがついたればこそ不思議に思はれるんです。（ニヤ／＼笑ひを浮べて）あなたも獨身だから夫婦仲のことはよく分らないのぢやないかな。

辰江　仰有る通りよ。でも、さつきの二人の樣子は、わたし、あしこに立つてよく見てゐましたのよ。（庭の片隅を指差して）話聲はハッキリ聞えなかつたけれど、樣子を

よく見ると、大抵は察しがついたのです。

神川　あなたもなか〳〵好奇心が強いんですね。人が悪いな。尤も妻君はあなたを煙つたがつてるやうですね。

辰江　さうでせうとも。わたし、かねちやんに魔法を掛けたんですもの。（得意らしく云つて）今日山の上でお話したやうに、あの二人は伯父が亡くなつて駒ちやんが一人ぼつちになるのをいゝ幸にして、駒ちやんを抱込んで自分の都合のいゝやうにしようと企んでるんです。同じことを云ふやうだけど、あなたは、駒ちやんを大切に思つてゐらつしやるのなら、よく警戒なさらなきやいけませんよ。山を下りたあとで藤田の別莊へ寄つた時にも、あの二人は駒ちやんを別室へ呼んで、何だかひそ〳〵話をしてゐたでせう。駒ちやんも心細がつてる時なんだから、親切らしいうまい口には直ぐに動かされるんです。あなたは、藤田へ行つた時にはなぜいつも鹿爪らしく構へてばかりゐらつして、駒ちやんと打解けた話をする機會をつくらうとはなさらないの。傍で見てゐると齒痒いぢやありませんか。……あなたはなぜ早く駒ちやんを御自身の者にしておしまひなさらないの？　女といふ者はいくら心の中で思つてゐても、男の方から胸の中を開けて近寄つて來ないかぎりは、自分から進んでどうすることも出來ないものなのよ。それに駒ちやんは今時の女とちがつたところがあるんですから。

神川　辰江さんはいやに僕を煽てたりなんぞしませんよ。わたし

辰江　あら、あなたを煽てるから氣味が惡いな。

誠意をもつて云つてるんですわ。今夜でもあなたが駒ちやんにお會ひになる氣があるのなら、わたし駒ちやんを誘出して會せて上げますよ。あなたもお腹のなかでヤキモキしてばかりゐないで、男らしく實行なすつちやどう？　瀧村のやうな平凡らしい、あなたの目には平凡な堅人に見えてる男でさへ、隨分思切つたことをしてゐるんですもの、あなたが因循にしてるつて法はないのよ。……今夜お見舞に行つた時に、わたし駒ちやんをお庭の四阿へ連出しますから、あなたはそこであの人にお會ひなさいな。

神川　だつて、今は駒ちやんも遊びに出る餘裕はないでせう。

辰江　遊ぶ餘裕はなくつても、かういふ時にこそ心底から人を手賴る氣になるものよ。……何事もない不斷の時よりも、明日の生命も分らない病人を後に脊負つてるやうな時に、却つて戀の焰が燃えるものぢやないでせうか。……經驗のないわたしには分らないけれど。

（さう云つて辰江は、今まで見てゐた相手の顏から目を外らして、空想を描いてゐる。神川も辰江の言葉に

次第に動かされて空想を描いてゐる。)

辰江　わたし達が駒子さんを呼出さなければ、瀧村があの人を四阿へ連れて行きますよ。駒ちやんを瀧村の爪で引掻かさせて、あなたは平氣で見てゐらつしやるおつもり？……これはわたしだけが知つてることなんですけれど、瀧村ははじめ熱心に駒ちやんを戀してゐたのです。今も諦めてゐないかも知れませんよ。駒ちやんの方では何とも思つてやしないんですけれど。

神川　そのことは山の上で瀧村自身が僕に打明けましたよ。

辰江　さうでしたか……だから、なほ更油斷が出來ませんわ。かれ子ちやんはさつき愚図々々云つてゐたのも瀧村が外の女を思つてることが分つたからなのです。

神川　僕は瀧村には長く交際してゐるのだが、あの男の本心が今まで分らなかつたのかな。(暗然として考へ込む)

辰江　(強ひて無邪氣らしく笑つて)駒ちやんをあなたのものにして、瀧村に鼻を明せて御覽なさいな。面白いぢやありませんか。親類の人たちが苦情を云つたつても、あなたと駒さんとがしつかり結びついてゐれば大丈夫なのよ。それが男らしい冒險ぢやありませんか。戀のための冒險を一生に一度はして見たいとお思ひにならない？……わたしは傍で見物して、そして、喝采しますわ？……駒子さんは美しくつて氣立てがよくつて、その上、富豪のお父さんのたつた一人の後繼者なんだから、生命に掛けても手に入れたいと、誰しも思ふのは無理はありませんわね。

神川　しかし、僕に至醇な戀があると假定したら、僕はそれを慾得で濁さうとは思ひませんね。

辰江　假定なさらなくつてもよ御座んすわ。あなたの心の中の奇麗なことは、駒ちやんにもよく分つてゐますわ。……ですからあなたのお氣が進まなくつても、ためしに今夜四阿へ行つて御覽なさい。冒險がおいやなら直ぐにお逃げになつたらいゝぢやありませんか。

(そこへかれ子が入つて來て、訝かしげに二人の様子を見る。)

辰江　何處へ行つてゐらつしやつたの？

かれ子　海岸へ行きかけたのですけど、病人の事が氣になつて、瀧村は藤田の家へ行きましたよ。わたくしはどうしようかと思つて……

(かれ子はさう云ひながら、鏡臺に向つて扮飾に取りかゝる。)

辰江　ぢやわたしだちも行きませうよ。此處でぢつとしてゐても詰らないんですもの。(神川へ目くばせする)

かれ子　こんな所で病人の死ぬるのを待つてるのはいやな

ものね。

辰江　今に御通夜しなきやならないかも知れないけど、お通夜の晩にも、わたしだちは隅つこで小さくなつてゐるのね。

かね子　死んで行く人よりも、駒ちやんの淋しい氣持にわたし同情してよ。

辰江　でも生きてゐればまたいゝことがあるんでせう。わたしには分らないけれど。

（辰江も神川も出仕度に取りかゝる。）

――幕――

三

藤田家別莊の廣い庭園の一部で、四阿がある。星明りだけであたりは薄暗い。

神川は四阿のまはりを歩いてゐたが、何かを見つけて驚いたやうに、急ぎ足で木蔭の方へ行つて姿を隱す。

辰江は人を捜すやうな態度で奧から四阿の方へ出て來たが、あとから瀧村が隨いて來るのに目を留めて驚く。

瀧村　辰江さんは此處へ何しに來たの？（側へ寄つて冷眼を据ゑて云ふ）

辰江　人のなかにゐると氣が腐つていけないから、冷たい風にあたつて頭を休めようと思つてますの。あなたこそ何しにいらつしやつたの？

瀧村　僕もあなたと同じやうに、一人で冷たい風に吹かれようと思つて來たのです。みんなと同樣に悲しい顏をして謹しんでゐるのは、僕にはたまらなく苦しいんだから。

辰江　それればかりぢやないでせう。わたしに何か御用がおありなさるのぢやない？

瀧村　あるやうにも思はれるし、ないやうにも思はれるし。……まあ、そこへ腰を掛けませう。

（瀧村がベンチへ腰をおろすと、辰江は落着かない風をしてその側へ腰をおろして、あたりを見廻す。）

瀧村　醫者の見立てゞは、病人の壽命は明日の朝までだらうといふことが、こんないゝ時候に凉しい朝の空氣も吸ひきらないで、地獄の底へ落ちて行くのだと思ふと、剛慾な伯父でも不憫に思はれますね。

辰江　生きてゐれば、わたし達にも幸福な日が廻つて來ると思つてゐらつしやるの？

瀧村　伯父のやうに死んじまつちやそれつきりだが、生きてゐれば、憎い奴を苦しめようと企むだけでも面白いぢやありませんか。可愛いゝ奴を可愛がるだけが人間の樂みぢやなくて、憎い奴を憎むのも人間は生きてゐるうちの樂みなのだと、この頃僕は氣がついてゐるんです。辰江さんはそんな樂しみを知らないと云ふんですかね。

辰江　どうですかね。わたしそんな意地の悪い樂みを知りたかありませんわ。(再びあたりを見廻す)

瀧村　平生はどうだか知らないが、今日のあなたは、そんな意地の悪い樂みを樂んでゐたのに違ひない。おかげで僕は不愉快な思ひをしつゞけてゐますよ。

辰江　まさか、おとなしいかねちやんに小突かれたくらゐなことで、あなたがへたばつたのぢやないんでせうね。

瀧村　何とでもあなたの御自由に考へてゐて下さい。……僕は僕で自分の世のやり直しをしませうよ。(彼れもあたりを見廻してやゝ懷つこい口調で)それは兎に角、辰江さんは何のためにあしこを抜出してこんな淋しい所へやつて來たの？　誰れかいゝ人と密會するためぢやないだらうな。

辰江　巫山戯たこと仰有い。(わざと嚴しい顏して相手を見る)

瀧村　密會にはいゝ場所だしいゝ夜だと思つたから。空には星が光つてるし、沖には漁船の篝火がきらめいてる。戀し合つた同志が夢のやうな囁きを取りかはすに丁度相應した所だ。……辰江さんはあの晩のことを思ひ出さない？　初夏の若葉の風がそよいで、星がいゝ音樂でも演奏してゐるやうにキラ〳〵してゐた、丁度今夜のやうな夜だつたが……

辰江　あなたこそ意地惡くわたしを苦しめようと思つて、過去つたことを思出させるんですのね。(感傷的になる)

瀧村　云つて惡ければ、僕一人で思出してゐるばかりだ。あの時僕は何を話したか知ら。あなたはどんなことを云つたか知ら。

辰江　あなたはあの時のことなぞ、みんな忘れてゐらつしやるんでせう。(ます〳〵感傷的になつて涙を落す)わたし無理にも意地を張つて來たのですけれど、本心は、もう一度あの時のやうな氣持になつて見たいの。人の心の薄情なことが分つたつもりで、痩我慢を出して、賢女氣取りでその人との緣を切つたのだけれど、それがどれほどわたしの仕合せになつたのでせう。薄情な人にでも離れないで、その人に突飛ばされても縋りついてゐたなら、女としてもつと生甲斐のある日が送れたといふことが今日といふ今日ハッキリ分つたのです。……わたしよりもかねちやんが仕合せなのね。たとへどんな惡い事を企んだにしても、男のためなら、男と共謀(ぐる)になつてすることなら、張合ひもあるし、樂みにもなるぢやありませんか。女が一人ぽつちでは天下を引くりかへすやうなことしたつても、何處に樂みがある譯ぢやないんです。…　わたしは馬鹿よ。馬鹿だつたの。

(身もだえするそして瀧村に寄縋つて泣伏しかけた。)

が、ふと氣を取直して。）

辰江　わたしは馬鹿ね。馬鹿だつたのね。（感傷的だつたさつきの言葉とはちがつて）あなたとこんなところで話をしてゐるのを、かねちやんにでも見つけられちや大變た。わたしよりもあなたが迷惑なさるわね。

瀧村　僕の迷惑よりもあなたの方が迷惑するんぢやないかな。……（あたりを顧み）此處へは誰れかゞやつて來さうな氣がしていけない、庭木戸から拔出して少し散歩しちやどうです？

辰江　それは隨いて行つてもいゝわ。まさかあなたに暗殺さりやしないでせうから。

（辰江は緊張した體つきで、瀧村に隨いて行く。二人が庭から外へ出て行くと、やがて、神川は木蔭から四阿の方へ出て來て、瀧村のゐた所へ腰をおろして、呆然として煙草を吸ひだす。ふと、後の方で人の來る氣色がしたので、ベンチから立上つて、見ぬふりして見てゐると、かね子が近寄つて來たので、意外に感じるとゝもに失望する。）

かね子　あゝ、神川さん？（豫想の外れた顏して）あなたお一人？

神川　えゝ……大勢の人のなかにゐると氣が腐つていけないから、冷たい風にあたつて頭を休めようと思つて。（と辰江の口吻を眞似て云ふ）

かね子　さう？。……さつき瀧村がそつと庭へ下りたのを見たんですが、あなたは御存じないんでせうか。

神川　僕はよく知りません。

かね子　瀧村の樣子が變たと思つて、わたしも直ぐに庭へ下りかけたのですが、駒ちやんに摑まつて、いろ〳〵心細い話を聞かされたものですからおそくなつたのです。駒ちやんは辰江さんに勸められて氣晴しに四阿へ來る筈だつたのですけれど、そんな氣になれないから止しにしたのですつて。それで辰江さんは、駒ちやんよりも一足先きに此方へ來ることになつたさうですの。あなたは此處で辰江さんにお會ひにならなくつて？

神川　僕はまだ會ひません。

かね子　變ですわね。（不審に堪へない顏）

神川　僕も今度は變なことを見たり聞いたりしましたよ。僕も辰江さんに魔術をかけられたのかも知れませんね。

かね子　（眞面目に）さう云へばあなたは大變しをれてゐらつしやるのね……あなたは身體はお丈夫だし、外に心配事のある方ぢやないから、戀患ひでもしてゐらつしやらなくつて？

神川　（戲談らしく）さうかも知れませんね。一つあなたの御盡力でその戀患ひといふものを癒して頂けないでせ

うか。

かね子　（眞面目に）今度道連れになつたのを御緣に、辰江さんと握手なすつちやどう？　あの人は利口なんだけど、いつまでも獨身でゐるからいけないんです。……あなたと辰江さんと、駒ちやんとある人と、いゝ緣が結べたら、藤田家の將來のために喜ばしいことなんですがね。藤田家の身内として團結して駒ちやんを守立てゝ行くやうだと、みんなのためにいゝことなんですよ。

神川　それは藤田家のためにはいゝことなんですが、僕一人のためには決していゝことぢやありませんね。（灰でも舐めさゝれたやうな顏して）僕はこれから宿へ歸つて明日の朝の一番で歸りませう。藤田さんに對する義務は果してるんですから、こちらでマゴ／＼してるには及ばないんですね。

かね子　辰江さんのことを云つたのがそんなにお氣に障つたのですか。わたしが惡かつたのね。あなたにはいゝ人が極つてるのかも知れないのに、餘計なことを云つて。

神川　僕は庭木戸から廻つて宿へ歸りませう。あなたは此處でお一人で、星の光でも漁船の篝火でも見て休んでゐらつしやい。

（神川は不愉快な口調で言放つて、足早く出て行く。かね子は呆氣に取られて後を見送つてゐたが、やがて自分も同じ方へ向つて出て行く。間もなく、「待つて下さいな。暗くつて歩けないわ」といふかね子の聲が聞えて來る。）

（「あなたはそこの庭で篝火でも見てゐらつしやい。そして、宿に歸るにしても、瀧村君と一しよに歸つていらつしやい。」といふ神川の聲が微かに聞えて來る。）

（「瀧村はわたしを打やらかしといて一人で宿へ歸つてゐるんですよ」といふかね子の聲が聞えて來る。）

（「誰れか來て下さい」と、物に驚いたかね子の聲が再び聞えて來る。）

（瀧村はその聲に耳を留めながら庭の方へ入つて來る。そして、聲のする方を氣にしながら、そちらへ行かうともせず、家の中へも行かうとはしないで迷つてゐるところへ、駒子（二十三歳。豐艷な容色だが、看病に疲れてゐる有樣）が、星明りによつてあたりを捜しながら、四阿の方へ近づいて來て、ふと、瀧村と顏を見合はす。）

駒子　あなたお一人？。辰江さんはゐらつしやらないの？

瀧村　僕は今來たんですが誰れもゐないやうですね。辰江さんに用事があるんですか。……まあ、そこへ腰を掛けませう。あなたも疲れたでせうね。（二人はベンチに腰をおろす）

駒子　父はもう望みはありませんわ。わたし側についてゐると怖くつて。（同情を求めるやうに云ふ）昨日まではそれほどに思ひませんでしたけれど、今夜はいよ／＼臨終に近づいたせゐか、見てゐると怖くつてなりませんの。わたしをも引張つて行きさうに思はれるんですもの。わたし父に手を握られるとぞつとしますわ。

瀧村　でも、あなたはよく看病しましたね。長い間お父さんのお世話をした上に、今度の病氣についてはあんなに熱心に看護したのだから、お父さんも滿足してゐなさるでせう。大勢の人が集つてゐても眞心からお父さんの病氣を案じてる人は、あなた一人だつて、われ／＼は噂をしてゐたんです。

駒子　いくらわたしが心配しても、父はもう駄目ですわ。……今にも危いかも知れないんですから、わたしは側を離れちやいけないんですけど、辰江さんに誘はれたことを思出して、外の風に吹かれたくなつたのです。辰江さんはどうしたんでせう。四阿でわたしを待つてると云つてたのに。

瀧村　あの人が何のためにあなたを此處へ誘つたんでせう。あなたの健康を氣遣つたゝめなんでせうか。……お父さんはかういふいゝ別莊を持つてゐらつしやつても、健康を失つちや、あの篝火も見られなければ、空の星も見られないんですね。あなたはお父さんがいくら大切でも、お父さんと殉死しなくつてもいゝでせう。……氣を落さないやうになさいよ。

駒子　有難う。わたし落膽しないやうに氣をつけてゐますわ。どうかすると氣が滅入つて暗闇のなかへ引摺込まれさうで怖いんですもの。誰れか強い力でわたしを掴まへてゐてくれゝばいゝと思はれますのよ。

瀧村　あなたの手を執つて明るい所へ出して呉れる者でさへあれば、誰れに掴まへられてもいゝと、あなたは思つてゐるんですかね。

駒子　あなたの仰有ることはどういふ意味なんでせう？

瀧村　あなたが病室を拔出して今庭へ下りて涼しい夜風にあたつた時に、偶然會つた人間は僕だつたが、もつと早いか晩いか、僅かな時刻の相違で、僕の外の人間が此處にゐたかも知れませんよ。

駒子　でも、みんな病人の事に氣を取られてゐて、こんな淋しい所へ遊びに出る人はありませんわ。

瀧村　さうでもないんですよ。お父さんが病氣に罹られてからは、この四阿には毎晩人の影が差してゐるらしいんです。

駒子　（ふと足許を見て）さういへば此處に煙草の吸殼が一本落ちて澤山落ちてゐますのね。お父さんは庭に吸殼が一本落ち

てゐても、掃除人に小言を云つてゐたんですよ。お父さんが亡くなつたらこのお庭も荒れてしまふでせうね。

瀧村　庭ぐらゐどうなつてもいゝでせうが、あなたの身の上はよく考へとかなきやいけませんよ。お父さんは遺言はなすつたんですか。

駒子　わたしその遺言が恐ろしいんです。親類の人の前で、お父さんの勝手な遺言をされて、そのためにわたしの一生が束縛されるやうなことがあつちや困りますわ。外の人が遺言をさせようとしても、瀧村さんは傍から遺言をさせないやうにして下さいな。あなたにお願ひしたいことはそのことですの。若しも遺言狀が書付けられてゐたら、人に知れないやうに破つて反古にして頂きたいんです。……さういふわたしの望みを叶へて下さる人は、瀧村さん、あなたの外にはないやうに、わたしには思はれますのよ。

瀧村　それは大役だな。僕には勤まりさうぢやありませんね。あなたからそんなことを頼まれようとは思はなかつた。

駒子　わたしが大それたことを考へると思つてゐらつしやるの？

瀧村　とに角意外ですね。今日は女といふ女がみんな意外なことを云つて僕を脅かす日だ。

駒子　わたし、生れてはじめてこんな事を口外してお願したんですから、どうしても聞いて頂かなきやなりませんの、（今までのおとなしさと違つて權威をもつて）あなたは以前、わたしのためにならどんな危險でも冒すと云つてゐらしつたぢやないの。わたしそのことをよく覺えてゐればこそ、お願ひするんです。

瀧村　あの時には獨身だつたから、そんなことも云つたのですよ。今でも獨身になつたら、あなたのためにどんな危險でも冒す氣になれるでせうが、今のやうぢや駄目ですね。僕の方では獨身になつた氣でゐても、あなたはさう信じて呉れないから駄目です。

（瀧村がいらだゝしくさう云つてるところへ、辰江とかね子とが暗闇から此方へ入つて來る。駒子はそれを見つけると立上つて。）

駒子　辰江さんはわたしを打ちやらかして何處へ行つてゐらしつたの？　わたし今瀧村さんに虐められてゐたところなのよ。

辰江　さう？（氣のない返事をして、瀧村の方へ目をつけながら）さつきかねちやんが怖い者に脅かされて聲を立てたんですつて。わたし側へ寄つて見ると、生物は犬ころ一匹ゐないんですよ。

駒子　お二人とも眞靑な顏して（驚きながら二人を見詰め

て）化物にでもお會ひなすつたやうね。

かね子　えゝ、わたし化物に會つちやつたの。駒ちやんもその化物に喉笛を嚙みつかれないやうになさいよ。

（そこに三人の女を見た瀧村は、今までとちがつた生々した態度でベンチから立上つて。）

瀧村　僕には過去と現在と未來とが目の前に一度期に現れてゐるやうだ。……僕はこれから病人の枕許へうかゞふことにしよう。隨いて來たい人は後から隨いていらつしやい。

――幕――

一萬圓

人物

今村陽一　豐かな實業家（四十歲）
瀬川才三　俸給生活者（同年輩）
塚田鋭吉　學生上り（三十歲未滿）
渡邊さよ子　今村の元の妻（三十餘歲）
戸見田はつ子（二十五歲）
今村謙次　陽一の弟（三十餘歲）
老婢、書生、老婢の娘

年末のある日

（一）ノ一

今村陽一の書齋兼寢室。

テーブル、寢臺など、簡易な洋風の設備がされて、瓦斯ストーブが燃えてゐる。

彼れは四十歲で、今は獨身である。丸の内に根據を有つてゐるある會社で重要な位地を占めてゐて、可成りの資財を蓄へてゐる。それに、年末に多額な利益の配當をも得てゐる。彼れの體格はガッシリしてゐて、活氣が顏に現はれてゐる。

テーブルには、インキ壺やレターペーパーなど、當り前の用具が置かれてゐるが、異つてゐるのは、幾束かの百圓札が可成り嵩高に置かれてあることである。そして、彼れは今、その札束を見据ゑてゐる。

ふと、扉の音を聞いて、彼れは側にあつた新聞紙でその札束を蔽うて、座を立つて扉を開ける。

老婢が顏を出す。

老婢　瀬川さんがいらつしやいました。

今村（當てが外れたやうに）何だ、瀬川か。……お前に注意して置かうと思つてゐながらうつかりしてゐた。居ると云つたのなら仕方がない、此方へお通ししろ。……それから、女のお客樣が來るかも知れないが、さうしたら、瀬川さんが歸つて行くまで、その女のお客樣に階下で待つてゐて貰ふやうにして呉れ。忘れちやいけないぜ。

老婢　ハイ。（出て行かうとする）

今村　あ、それから。外のお客樣が來たら、旦那樣は今お出掛けになつて、いつお歸りになるか分らないと云つて、玄關から放擲ふんだぜ。

老婢　ハイ。（奥へ引込む）

（今村は、札束を新聞紙でよく蔽うて、テーブルの一隅へ押やる。それから、自分の椅子をも、來客用の椅子をも、瓦斯ストーブの方へ引寄せて、煙草に火を點けて、椅子に腰をおろして、戸口の方を見やつてゐる。間もなく、瀬川才三（今村と同じくらゐな年輩で、顔付は彼れよりも神經質らしく見える）が、着流して、ノロ／＼と入つて來る。）

（「ヤア」と、どちらも愛嬌笑ひを浮べて、快く挨拶する。）

瀬川　（椅子に腰をおろして）今日は家にゐないだらうと思つてゐたのに。……

今村　だつてまだ早いぢやないか。おれは今起きて朝餐を食べたばかりだよ。先日うちは日曜も祭日もなかつたのだから、今日は久振りの休日で、思切り朝寢をしようと思つたのだが、不斷の習慣でさうもいかないのさ。

瀬川　なに、僕が不思議に思つてるのはね、君が昨夕この寢室に寢たことなんだ。

今村　ホウ。詰らないことを不思議に思ふんだね。僕は近來この寢臺以外の寢床で眠つたことはないよ。いくら夜がおそくなつても、ちやんと此處へ歸つて來て、安眠を樂むのだ。

瀬川　（疑つてゐるやうに）それは本當なのかい。本野や新見の話によると、君はこの頃秘密で天國を見つけてるらしいと云ふことだが。

今村　秘密の天國といふのは何だい。

瀬川　何處かに我々に隱れて潛り込む穴を見つけてるらしいと云つてる。君の態度が少し變だと云つてた。

今村　だが、天國と穴とは明暗の差が非常に違ふぢやないか。（眞面目な態度で）おれはね、この頃、君達の伺ひ知らない天國が、雲の絶え間にちら／＼見えるやうな氣持になつてゐるんだがね。それは、君達の想像してるところとは、全然無關係なんだらうよ。

瀬川　いやに勿體ぶつてるぢやないか。……本當に君は孤獨に安んじて暮してるのかい。

今村　男も獨身でゐると、傍の者がいろ／＼に邪推を廻して呉れるんだね。しかし、何とか云つて貰へる間が花だと喜んでゐていゝ譯だらうな。

瀬川　邪推といふ言葉は少し荒過ぎるよ。僕は噂を聞いて喜んでたのだから。……相手が何者であらうとも、君を惹付ける者が此世に出て來たことは結構な譯ぢやないか。

今村　それで、お寒いのに、年末で忙しくもあらうのに、早くから探索にやつて來たといふのかい。御苦勞樣だね。

瀬川　いや、僕の爲めには、君が家にゐて呉れた方がよかつたのさ。

今村　どうして？（相手の全身を注意して）今日は暇なのかい　おれは　今日は、ゆつくり君のお相手をしちやゐられないのだ。

瀬川　ハ、、、。さつきは暇らしい口を利いてたくせに。……しかし、僕も今日は、いつものやうに長つたらしくお邪魔はしないよ。これで、なか／＼用事が溜つてるんだからね。御存じの通り、僕はヤクザな荷物を背負つてるんだから、年の瀬を越すのは容易ぢやないのさ。

今村　ハ、、、。お株がはじまつたね。年末になると、一度は君に聞かされなきやならない臺詞なんだね。……君は不斷は羽をのばして氣樂に飛廻つてゐながら、一年に一度の愚痴はどうしてもこぼさなきや收まらないのかい。……君は顏は神經質の相をしてゐながら、腹の中は無神經なんだね。

瀬川　假りにさうだとすると、僕は君に正反對なんだね。しかし、無神經な僕でも、この年末にはぼんやりしちやゐられないんだ。……なに大したことぢやないんだけれどね。

今村　ぢや、おれに御用金を仰せつけようと云ふんだね。（微笑を洩らして）君にいやな思ひをさせたかないが、今度だけは御免を蒙りたいよ。

瀬川　僕の方では今度だけと云ひたいんだが……（急に數顏の弱々しい樣子を現はして）實はかういふ譯なんだよ。

今村　（慌たゞしく遮つて）その事情は聞かないことにしよう。

瀬川　一時僕の信用を救つて呉れさへすればいゝのだ。決して君に迷惑を掛けやしないよ。

（瀬川は、テーブルの一隅へ何氣なく目を向ける。今村はそれを氣にして横目でそちらを見る。）

今村　その話は今日は許して呉れ。（頑なゝ態度を見せて）……一錢も一厘も他人に御用立する譯に行かないんだ。……どうかおれの決心を破らせないやうにして呉れ。

瀬川　そりや強ひてとは云へないが。僕の要求は僅かなものなんだよ。

今村　その金高も聞かないことにしよう。

瀬川　君は今日はひどく御機嫌が惡いやうだが、どうかしたのかい。

今村　おれが機嫌が惡い？　さう見えるのかい。……おれは昨夕ぐつすり眠つて、今朝はこの頃にないいゝ氣持で目を醒ましたのだよ。今朝おれの顏が御機嫌が惡かつたり萎れたりしてるやうぢや、おれの世も末になつた譯だが、さうぢやあるまい。君の目がどうかしてる所爲だらうよ。（顏を相手の方へ突出して、笑ひを洩らしながら）ま

あよく見て呉れ。おれの顏には、君がさつき云つた天國の後光でも差してやしないか。

瀨川　（わざと生眞面目に相手の顏を覗込んで）顏は不斷の君の顏に違ひないがね。……どうも僕の舊友の今村陽一に會つてるやうな氣がしないよ。……あの今村陽一なら僕の年末の歎願を聞いて呉れない筈がないから。

今村　それでいゝんだ。今日のおれは、昨日のおれぢやないんだからね。

瀨川　それはどういふ譯だ？　まさかTA會社を辭職して、新奇に自分の腕で何かやり出さうといふのぢやあるまい。さういふ噂はまだ聞かなかつたやうだが。……昨日の君が今日の君でないとは變だね。

（瀨川はさう云ひながら、テーブルの一隅が氣になるらしく、次第にそちらへ目が注がれる。今村も相手の目に誘はれたやうに、知らず／＼そちらへ目を注ぐ。と、そこへ、老婢が扉を叩く。）

今村　何だ？

（老婢扉を開けて顏を出す。）

老婢　新見さんからお電話で御座います。

今村　（舌打ちして）おれが家にゐると云つたのかい。何の御用だか、お前が代りに聞いてお呉れ。

老婢　御用をお伺ひいたしましたら、旦那樣に電話口まで出て頂きたいと仰有いました。

今村　煩いな。（不機嫌な顏して云つたが）ちよつと失敬。（と、瀨川に向つて云つて、慌たゞしく、老婢を突飛ばすやうにして出て行く）

（老婢、扉の側でまご／＼してゐる。）

瀨川　（振返つて）此方の旦那樣も、大變氣が短くなつたやうだね。やはり、奧さんがゐなきやいけないね。

老婢　左樣で御座いますとも。先の奧さんは大變お美しかつたさうですが、此方へはお戻りにならないんで御座いませうね。

瀨川　あゝ。前の奧さんは、この頃は異つた旦那樣を有つてるやうだから、此方へ戻つて來る氣遣ひはないよ。

老婢　左樣で御座いますか。

（老婢は、まだ何か話したさうにしたが、瀨川が顏を轉じて取合はないので出て行く。）

（瀨川は、手を伸して、テーブルの上の煙草を取つて火を點けながら、テーブルの一隅に目を留める。そして疑ひを起して、顏をそちらへ持つて行つて、新聞紙の隙間を覗き、それからそつと中を見て驚く。……扉の方を氣にしながら、震へる手で札束を取上げて、一枚だけそつと引出す。……そして、元の通りに新聞紙で蔽はんとしたが、また別の札束を取上げて、そのうち

から一枚だけそつと引出す。……もう一枚引出さうとしたが、それは思留つて、新聞紙で元の通りに蔽うて、元の座に腰を掛けて、二枚の百圓紙幣は袂の中に入れる。……そして、首垂れて煙草を吸ひながら、時時上目使ひをして、札束の方を見入つてゐる。）

（そこへ、今村は慌たゞしく入つて來て、またテーブルの方へ目を留めてから、椅子に腰をおろす。）

瀬川　君は今日は、何處へも出ないんだね。

今村　ムン。今日は大事な調べ物をしなきやいけないんだ。暇なら君を饗應したいんだが、まあ明けてからにしよう。折角來て呉れたのに氣の毒だつたね。（相手と話すのに氣乗りがしないらしく）書生が朝から出掛けてるので、老婢一人で忙しがつてゐて、お茶も差上げないで……。

瀬川　なあに。僕もいろ／＼用事を控へてるんだから、これでお暇しよう。（椅子から離れて）君も過去つたことはいゝ加減に忘れて、新たに妻君を貰つたらどうだ？　僕なんかこそ、かういふ獨身生活を見ると羨ましくなるが、君は温い家庭を有つた方がいゝだらうね。

今村　ハヽヽ。そりや變な理窟だね。おれと君と、そんなに人間が違ふのかい。

瀬川　僕は貧乏だから。

（ふと、歸りを急ぐやうに扉の外へ出て行く。）

（今村は、客を見送つて出たが、間もなく、戸見田はつ子（二十五歳。容貌風姿は派手であるが、服装は簡素である）を從へて入つて來る。）

（はつ子は、珍らしいところへ來たやうな感じを現はして、あたりを見廻す。）

（彼女は、數年前離別した今村の妻の從妹であるが、素質は甚だしく相反してゐた。兩親や親戚の勸告を斥けて、二三の青年の求婚をも斥けて、今まで獨身主義を保つてゐて、學問で自活しようとしてゐた。英語を學び佛語を學び、宗教にあこがれ文學を嗜んでゐた。今村は、妻と別れた前から、彼女に心を注いでゐたので、この一二年來は、ことに彼女を念頭に置いてゐる。女といふ女のうちで、誰れにも勝つて彼女を自己の空想に描いてゐた。）

今村　さあ、此處へお掛けなさい（と、今まで瀬川の腰掛けてゐた椅子を、もつと自分の方へ引寄せて）階下は寒かつたでせうね。

はつ子　えゝ。此處は温かですこと。（立つたまゝ部屋の中を見廻して）こゝなら落着いて御勉強が出來ますわね。

今村　勉強？　學問をするのにいゝ部屋だと云ふんですか。はじめてこゝの部屋を見てさう云ふのは、あなたらしい

言草だね。しかし、わたしは、横文字でも漢語でも、文字を刷つた本なんかを讀む人間ぢやないんだ。……わたしの新しい寢室をお日に掛けようとも云へないもんだから、書齋へお招きしようと云つたのだが、御覽の通り書物らしい書物は一冊もないんだよ。……まあ、その椅子へお掛けなさい。

はつ子　えゝ。（椅子に腰をおろして）ストーブのせゐばかりぢやなくつて、何だか温かさうなお部屋ね。飯倉のお家は何だか陰氣で寒さうに思はれたぢやありませんか。

今村　それは、あなたの氣のせゐだよ。……以前の家のことなんか思出すのもいやだが、……でも、あなたは今日、よく約束を違へないでやつて來ましたね。

はつ子　あなたこそ、よくお家にゐらしつたわね。……先日ホテルでわたしにお約束なすつたことは、戲談ぢやないかと、後で疑つてゐましたのよ。あんなことを本氣にして訪ねて來る馬鹿があるかと云はれさうに思つてました。

今村　あれを戲談にするやうぢや、あなたはまだ、わたしの本性をよく知らないんだね。

はつ子　無論、あなたの本性なんか、わたしに分りつこはありませんわ。わたしは、御存じの通りの世間知らずなんですもの。年齡だつて、明けて二十六にしきやならないぢやありませんか。あなたのやうな、歳を取つた男子の心なんか、とても分りませんわ。

今村　二十六が女の年齡として幼稚な方なのか知らん。（相手に見惚れるやうに）もう圓熟期に入りかける頃ぢやないかな。

はつ子　女が二十六にもなつて若い氣でゐるのを變に思つてゐらつしやるの？……でも、他人はどうでも、わたしはこれから、面白い世が見られさうに思はれてなりませんの。

今村　それはいゝことです。

はつ子　その案内者の一人があなたゞつてことを、わたしは面白いと思つてますのよ。

今村　面白いといふよりも皮肉な感じがすりやしないかな。

はつ子　先日うちから、いろ／＼な者を見せて頂きましたわね。十年も前に、佛蘭西生れの天主教のお爺さんに、片言の日本語で聞せて貰つた西洋の話よりも、もつとわたしには珍らしく思はれましたのよ。

今村　さうかねえ。わたしには何でもないことだつたが、はつ子さんには、そんなに珍らしかつたのかな。ホテルのダンスなんかゞよつぽど面白かつたのだな。

はつ子　何とかいふ鳥屋で御馳走になつたことも夢のやうに思はれますわ。

今村　ホウ。そんなものかな。
はつ子　これからはもつと生々した日を送りたいと、わたし塚田さんにも話してゐますのよ。
今村　あなたがよく褒立てる塚田さんとかに一度引合せて貰はうかね。そのうち晩餐を一しよに食べてもいゝ。
はつ子　でも、あの人はあなたにお引合せしない方がいゝかも知れませんの。
今村　どうして？　哲學研究者と、わたしのやうな俗物とは話が合はないと云ふのかね。
はつ子　えゝ。あの人にあなたの感化を受けさせたかありませんわ。
今村　ハヽヽ、ぢや、あなたゞけは、わたしの惡い感化を受けてもいゝつて云ふんだね。……まあ、そんな話は後廻しにして、先日の約束が戯談でなかつた證據を御覽に入れようか。（ふと氣づいたやうに、扉の方を見て、獨言のやうに）こんな所を老婢にでも見られちやたまらない。
（さう云つて立つて、扉の錠をおろして來る。はつ子は稍々不安を感じたらしい顔して扉の方を見る。それに目を留めた今村は、微笑を洩して。）
今村　この部屋へ婦人のお客を迎へたのは、あなたがはじめてなんだ。
はつ子　今は奥さんはゐないし、この部屋はあなたのために、清淨潔白な書齋でもあるし、寢室でもあるといふ譯なのね。（氣取つて云ふ）
今村　しかし、部屋の主人の心が、清淨だか何だか分らないからね。（元の座に就いて）これがあなたにお約束した代物です。（と云つて新聞紙を拂ひ退けて、机の一隅から、はつ子の側に近いところへ、すべての札束を移して、鷹揚に）これで、丁度一萬圓ある譯だ。よく數へて御覽。
はつ子　（異樣なものを見せつけられたやうに見詰めて）わたし、まだ百圓紙幣といふものを見たことありませんのよ。
今村　（得意らしく）それは、まあわたしの一年間の全收入見たいなものだ。……あなたは勝手に自分の懷中へでも袂へでも入れて持つて行つていゝよ。しかし、女がそんなことをして金を持つて行く譯には行くまいな。後で風呂敷でも貸して上げよう。
はつ子　一萬圓と云ふと、この百圓紙幣がこゝに百枚も重なつてある譯ね。
今村　極つてるさ。念のために改めて御覽な。
はつ子　でも、これがあなたの全財産てことありませんわね。
今村　そんなことはどちらでもいゝから今からあなたの物にしなさい。決して玩具の紙幣ぢやないから、銀行へ持

つて行つて預けたら、預金帳に一萬圓と書込んで呉れるよ。

はつ子　わたしこれを頂いて、あなたにどうお禮をしたらよろしいの？

今村　それよりも、あなたはその金をどうしようと云ふの？　何に使はうと思つてゐるの？　先日一萬圓々々々とあなたが熱心に一萬圓を望んでるから、その使ひ道を訊ねたら、それだけの金をちやんと自分の手に持つた時でなきや、使ひ道だけ話したつて詰らないと云つてゐたぢやないか。

はつ子　ぢや、わたしがこのお金を何に使ふか知りたいために、これだけ此處へ用意をして下すつたの？

今村　さう思つてゐてもよろしい。

はつ子　わたし、一萬圓で試驗をされますのね。……わたし、今思出してよ。二三年前にある婦人雜誌に、何人かの女に、一人當て百圓づゝやつて、勝手に買物をさせた記事が出てゐましたわね。

今村　それは面白い思ひつきだね。はつ子さんなら何を買ふ。

はつ子　さうね。わたし、百圓ばかりなら、買物しないで、救世軍の社會鍋へでも入れつちまひますわ。

（二人はこんな話を事もなげな調子で取りかはしながらも互ひに胸に一物を有つて、相手の心を索り合つてゐる。）

はつ子　（目を上げて相手を見据ゑて）あなたなら何をお買ひになつて？

今村　さうさ。わたしなら何を買ふだらうか。お正月が近くなつたが、わたしは何も買ひたいものはなさゝうだよ。

はつ子　嘘を仰有いよ。

（彼女の言葉は鋭い。今村はギヨツとする。意外な感に打たれたのだ。）

今村　嘘を仰有い？（と、相手の言葉を眞似て訊返す）

はつ子　（冷笑を洩らして）あなたは、この一萬圓でわたしを買收しようと思つてゐらつしやるでせう。わたしの靈魂までもあなたの奴隷にしようと企んでるんぢやなくつて？

今村　ハヽヽ。何を云ふかと思つたら、平凡なことを云つてるんだね。

はつ子　あなたには、平凡なことでもそれが本心なんでせう。……あたし、あなたの本心が怖かないけど。

今村　靈魂なんていふ古くさい言葉の濫用は、あなたのお師匠さんの宣教師の感化として、いつもおとなしく承つてゐたが、あなたが欲しいと云つた一萬圓を、耳を揃

へて提供したからと云つて、直ぐにわたしがあなたを買收する下心を有つてると思ふのは、あんまり世俗的だね。はつ子さんにも似合はない世俗的な考へだね。（悠然として云ふ）

はつ子　ぢや、わたしが先日一萬圓欲しいと云つたから、今日一萬圓わたしに下すつたのね。たゞそれだけのことなんですね。

今村　（相手の言葉は聞流して、獨言のやうに言葉を續けて）わたしが獨身の淋しさに耐へられないで、女が欲しくなつたのなら、一萬圓出しや、自分の好みにかなつた女を、幾らでも買收されるんだよ。

はつ子　（相手に向つて云ふよりも、自分で自分に云つてゐるやうに）わたし、あなたが大金を無雜作にお出しになつた氣持が分らない。……この部屋までも夢に見た家のやうに見えてならない。

今村　この金があなたにはそんな不思議に見えるのかな。銀行の出納掛は毎日不思議なものばかりいじくつてる譯だ。

はつ子　隨分不思議ですのよ。（札束と今村とを見比べて）あなたの奧さんだつたさよ子姉さんが、あなたは不斷儉約がお好きで、金錢のことについちや、隨分嚴格だと云つてゐたんですもの。

今村　あいつ、わたしをケチン坊だと、親類中へ吹聽してゐたんだな。

はつ子　ケチン坊だなんて、そんな汚い口は利きやしなかつたんですけど、……でも、一萬圓といふ大金を、あなたがさよ子姉さんの前へ投出して、勝手に使へと仰有るやうだつたら、あの人もこちらのお家を出て行きやしなかつたでせう。

今村　ぢや、あいつは好きなやうに金が使へないのが不平で、わたしの家を飛出したと、あなたは思つてるんだね。それをわれ／＼の夫婦別れの理由だと、あなた達は思つてるんだね。（ふと感情を昂奮させていま／＼しさうに云ふ）

はつ子　そればかりぢやないでせうけれど。

今村　重な原因だと云ふんだね……（いやな考へを振放つて）まあ、今日はあいつに關係した話はしないことにしよう。

はつ子　でも、あの人のことを心に思つてゐらつしやればこそ、あなたはわたしに親切にして下さるんぢやないでせうか。

今村　（心を動して）これは妙なことを聞くものだ。……ぢや、他所へ再婚してる女に、わたしが未練を殘してると云ふんだね。隨分見くびられてる譯だね。

はつ子　離別した奥さんを心に思つてゐらつしやると云つたつて、よくお思ひになつてるといふ意味にお取りにならなくつてもよろしいのよ。……お金のために、あなたゞつて、六十にも近いお爺さんの所へ行つたあの人を、よくお思ひになつちやゐないでせうから。

今村　はつ子さんもなかく穿つたことを云ふ。世間知らずぢやないね。……しかし、まあそんなことはどちらでもいゝさ。

はつ子　（獨言のやうに）あの人が憎さに、あなたはわたしに一萬圓といふお金を下すつたのか知ら。

今村　さういろくに考へて見なくつてもいゝだらうに。

はつ子　あの人が憎さにこれを下すつたのなら、わたし快く頂戴しますわ。

今村　（驚いて）どうしてゞす？

はつ子　わたしは、このお金でさよ子姉さんに復讐しますわ。あの人は、あなたのためにもわたしのためにも共同の敵なんですもの。

今村　共同の敵とは變たね。兎に角わたしはあいつに復讐しようなんて思つてやしないよ。

はつ子　ぢや、頂けませんわね。理由のないお金なんだから。

今村　あなたが欲しいと云ふ。わたしが上げようと云ふ。事は簡單で、それ以上、理由もへちまも入らないぢやないか。

はつ子　でも……

（彼女は、物欲しさうな目で札束を見るやうになる。）

（その時、扉のノックが聞える。）

（今村は、はつ子に小聲（見物には聞えないほどの聲）で注意して、新聞紙で札束を蔽うてから、扉へ近づく。不機嫌な顔して扉を開けて、そこから顔を出した老婢に向つて。）

今村　何だ？　またお客を取次いだのか。（と叱りつける）

老婢　郷里から弟さんがいらつしやいました。旦那様にお伺ひするまで玄關にお待たせしときました。

今村　弟が來た？　階下の座敷へ通して置け。

（老婢、返事もしないで引込む。）

はつ子　弟さんがいらしつたのなら、わたしはお暇しなきやなりませんわね。

今村　なに。かまやしないよ。弟は二三時間他所へやつとくことにしよう。あなたは此處にぢつとしてゐらつしやい。

（今村、扉の外へ出て行く。）

（はつ子、獨りになつたことを意識してから、札束の一つを手に取つて、夢見るやうに見惚れる。それから、

一萬圓全部を捧げて、その重味を檢べて、夢見るやうに見惚れる。自から微笑が目に浮ぶ。やがて、反省したやうに、札束を下へ置いて立上つて、扉の外へ出る。

（間もなく今村が入つて來る。はつ子のゐないのを疑つて、呼鈴を押す。）

（老婢、入つて來る。）

今村　此處にゐたお客樣はどうした？

老婢　女の方で御座いますか。あの方は只今お歸りになつたやうで御座いました。

今村　歸つた？（不機嫌な顏して）おや、それでいゝ。……お前はあちらへ行つといで。

（老婢、迂散らしい目で、主人の顏と、それから札束とを見て出て行く。）

（今村、椅子に腰をおろして考へ込む。）

――幕――

（一）ノ二

それから一時間くらゐ後の事。

今村家の女中部屋。

老婢、自分の持物を入れた行李の側で着物を着替へようとしてゐる。

そこへ、書生大島新吉（二十餘歲）が入つて來る。

老婢　ア、大島さん。丁度いゝところへ歸つてお呉れだつた。

書生　老婢さんは、お召替へになつて、これから何處かへお出掛けになるのかね。

老婢　娘のところから、大急ぎでちよつと來て呉れつて電話が掛つて來たのです。年末だから何か相談があるんだらうよ。

書生　娘さんは電話なんか掛けないで、自分で此方へ遊びに來たらいゝだらうにね。

老婢　年末で忙しくつて手が離せないんでせうよ。

書生　市へ出ると、世間は忙しさうだが、この家は今年はお正月の仕度も簡單で張合ひがないね。

老婢　さういへばね、大島さん。あなたが出て行きなすつたあと、間もなく、美しい若い女のお客樣がいらつしやつたんだよ。

（老婢は興ありげにさう云ひながら、古い着物を脫いで新しいのに着替へようとしてゐるうち、うつかりして、帶の間から百圓札を一枚落す。書生は目敏くそれに目をつけて驚いたが、老婢は氣づかないらしく、熱心に話をつゞける。）

老婢　堅氣なお孃樣らしかつたけれど、何だか譯がありさうなの。あなたに見せたかつたよ。……旦那樣のお居間

で錠をおろしてしまつて、長い間二人で、ストーブの前に差向ひで話込んでゐたのぢやないかね。あなた何者だと思ひなすつて？。

書生　さあ。僕は見ないから分らないね。（話には身が入らないで、百圓札の方をそつと見下す）

老婢　外のお客樣は玄關から追返して、二人はいつまでも、笑つたり泣いたりしていゝ氣になつてるんだからいやになつちまふよ。

書生　ぢや、そんな女が來るから、僕を邪魔にして、どうでもいゝやうな使に出したんだね。

老婢　さうですとも。わたしがお茶を持つて行つてさへ、旦那樣は怖い目をして、早く彼方へ行けつて追出さうとするんだもの。

（老婢はまだ百圓札に氣づかないで、話に力を入れるので、書生はもどかしがつて。）

書生　老婢さん、足下に大變なものが落ちてるぢやないか。

老婢　エッ。（と云つて、足下を見ると、顏色を變へて、慌てゝ拾つて袂へ入れて、急いで着物を着替へる）

書生　僕がまだお目に掛つたことのないやうな物ぢやないか。（冷かすやうに云ふ）

老婢　（着物を着替へてゐるうちに、心を鎭めて、空呆けた顏して）これはね。わたしが、小石川のお屋敷に御奉公してゐた時分に、お給金の殘りを何年も溜めて、やつとこれだけになつたのさ。娘の相談といふのも、年末のことで、大抵分つてゐるから、大事な〳〵虎の子を持つて行かうと思つてるんですよ。

書生　さうですか。……しかし、不景氣な年末に羨ましいことだな。（書生がさう云つて、部屋を出て行かうとすると、老婢は引留める。）

老婢　まあお待ちなさいよ。直ぐに旦那樣のお部屋へいらつしやるの？

書生　あゝ、使の返事を云はなきやならんから。

老婢　今、旦那樣のお部屋へ行きなさらない方がいゝんだよ。

書生　だつて、その奇麗なお客樣はもうゐないんだらう。

老婢　お客樣はもう行つちやんだけれど、旦那樣は、あとで寢臺でお眠つてゐらつしやるんだから。

書生　なに、戸口で一言御返事をしといたらいゝんだよ。

（書生がさう云つて行きかけると、老婢はふと手を掴まへて力を入れて引留める。）

書生　（不思議さうに）僕をどうするんだね。

老婢　あなたは、わたしが持つてるたつた一枚のお金を、疑つてゐなさるんだね。旦那樣に云付けようと思つてなさるんだらう。

書生　僕はそんなことを思つてやしないよ。

老婢　あなたはわたしが泥棒したやうに思つてるに違ひない。

書生　驚いたな。僕はそんなことは思つてもゐないのに。……その新しい、今銀行から出して來たばかりのやうな百圓紙幣は老婢さんが小石川のお屋敷に奉公してゐた時のお給金なんだらう（揶揄ふやうに云つて、出て行きかける）

（老婢、慌てゝ留めようとして、書生の羽織を掴む。羽織の袖が破れる。）

書生　（怒つて）オイ止さないか。僕の大切な一張羅を破つてどうするんだ。僕は何處へも出られなくなるぢやないか。……ひどい婆あだ。

老婢　（涙を浮べて、しを〱して）どうも濟みません。（跪づいて詫びて）わたくしが惡かつたんです……どうぞ旦那樣には内分になすつてお吳んなさいまし。（百圓札を袂から出して）これはあなたにお返しいたしますから。

書生　僕に返すたつて、それは僕の物ぢやないよ。僕は百圓札なんか持つてゐたことはないんだよ。

老婢　あなたが旦那樣に秘密で、元の所へお戻しなすつてお吳んなさいまし。

書生　元の所つて、どこにあつたのだ？

老婢　旦那のテーブルの上に、かういふお札がどつさり重なつてゐるんです。わたしは旦那樣が便所にお下りになつた間に、そのうちの一枚だけそつと拔いて取つたので御座います。娘にお正月着が買つてやれると思ひまして。

書生　ホウ、妙だな。そんなに百圓札を積んでどうするんだらう？

老婢　さつきの女のお客樣におやりになる樣子で御座いました。

書生　（憤慨したらしく）そんな大金を女にやるんだ？　いま〱しいな。……僕には年末の小使錢を、この百圓札の十分の一も吳れもしないで。（老婢の手から紙幣を取つて見詰める）

（そこへ、呼鈴が鳴る。）

書生　二階で呼んでるよ。老婢さん行つてお出で。何か云はれても知らん顏してればいゝよ。僕は決して大將に告口はしないよ。

老婢　どうも有難う御座います。

（老婢は、書生に對して、言語も動作も次第に卑屈になる。）

書生　（得意然として）僕は此處で待つてるから、安心して行つてお出でよ。大將があなたを疑つたら、僕が辯護を

して上げよう。

老婢　何分よろしくお頼み申します。

（呼鈴また鳴る。老婢おど〳〵しながら出て行く。）

（書生、百圓札を見詰めてから袂へ入れる。）

（だしぬけに襖が開く。書生ビックリする。）

（老婢の娘、おきぬ（二十歳未滿の可愛らしい女）入つて來る。）

娘　アラ。（書生を見て極りを悪がる）

書生　（微笑して）お母さんはゐるよ。

娘　（叮嚀にお辞儀をして）さつきお勝手の方で二三度聲を掛けましたのですけれど。

書生　さうですか。……お母さんはこれからあなたの所へ行くと云つて、着物を着替へたところなんだよ。

娘　母はあたしに急用があると申しまして？

書生　おきぬちやんの所から電話が掛つたと云つてたよ。

娘　アラ。あたし、電話なぞ掛けやしませんわ。

書生　（微笑して）成程、さうだらうな。

娘　どうした間違ひなんでせうか。

書生　まあい〻よ。……お母さんはね、あなたにお正月の着物を買つて上げると云つてたよ。

娘　さう？（書生の顔を見て）あなたがい〻加減なこと云つてゐらつしやるのね。

書生　嘘だか本當だか、今にお母さんが二階から下りて來たら分るよ。おきぬちやんには春着が出來ても、僕はこの通りだ。（ブラ〳〵に綻びた羽織の袖を見せる）

娘　アラ、どうなすつたの？

書生　老人に縋りつかれて破られたのぢや有難くないね。こんなになつてちや戸外へ出られやしない。きぬちやん縫つて呉れないかね。

娘　え〻。縫つて上げますわ。針箱は何處にあるか知ら。（娘が押入を開けて、針箱を捜してゐるところへ、老婢入つて來る。あたり前の顔付をしてゐる。）

老婢　おきぬ、いつ來たの？

書生　さつきから勝手口に來てゐて立聞きをしてたんだつて。

老婢　（眉を顰めて）來る時には電話を掛けろと云つといたのに。

書生　ハ、、。まあい〻さ。……大將は何かいやなこと云つたのかね。

老婢　い〻え、何も變つたことは仰有いません。

書生　それはよかつた。

老婢　お午御飯は二階のお部屋で召上るさうです。

書生　その用事だつたのか。ぢや、よかつたね。……僕は今羽織の綻びを、きぬちやんに縫つて貰ふことにしたの

だ。

（老婢、間が悪さうにする。書生、羽織を脱いで、おきぬに渡す。）

書生　ぢや、お頼みします。

娘　このお羽織いゝ柄ね。どうしてこんなに綻びたんでせう。アラ、こゝのとこは破れてますわ。

書生　どうにか誤魔化しとけばいゝんだよ。（老婢に向つて）あなたは、きぬちやんにお正月着を買つて上げると云つてゐたね。これから、一しよに三越へでも何處へでも行つて、一つ奮發していゝものを買つてお上げな。大將が許して呉れたら、僕もお伴をしてもいゝね。

老婢　（溜息を吐くやうにして）お金なんかありもしないのに。

書生　小石川のお屋敷のお給金の貯蓄を出したらいゝぢやないか。（鷹揚な調子で云つて、袂から百圓札を二人の前へ抛出す）

娘　（吃驚して）アラ。大きなお札。（と云つて、乘出して見る）

書生　構ふことはない。使つちまふさ。（と云つて、老婢に目くばせする）

――幕――

（二）ノ一

その日の午後。

下宿屋の一室。塚田鋭吉の部屋。

塚田は、私立學校の教師を勤めて生活して、哲學などの研究に耽つてゐる三十未滿の、溫厚な、現代離れのした男子である。

この部屋には、今村の部屋とは違つて、數多の洋書が置かれてゐる。

彼れと戸見田はつ子とが、机の側の火鉢に向合つて坐つて、しめやかな話に耽つてゐるところ。

はつ子　あなたはどうお思ひになつて？

塚田　僕にはそんな心理狀態は分りませんね。

はつ子　わたしも、今村さんの云つたことは、無論戲談だと思つて、そのつもりで遊びに行つたのですけれど、先方では、商賣の取引でもするやうに、ちやんと、一萬圓を百圓紙幣で揃へて待つてるんですもの。わたし吃驚してよ。……それが贋札ぢやなさゝうなのよ。

塚田　それで、先方ぢやあなたに獻上しようと云ふのをあなたは辭退して、一萬圓を棄てゝ來たんですね。

はつ子　はつきり斷つて來た譯ぢやなかつたのですけど

………

塚田　でも、つまりは大金を見せて貰つたゞけで、それをあなたの懷中へ突込んで、そこに持つてる譯ぢやないんでせう。

はつ子　でも、まだ一萬圓を手に入れる可能性がありさうですのよ。わたし、話の途中で座を外して此方へお伺ひしたのだから。……わたし、此方へまゐる間に、電車の中でも歩いてる間にでも、そのことばかり考へてゐました。無條件でやらうといふ者を斷わるには及ばないと、思はれてなりませんの。

塚田　今日あなたの入つて來た時の樣子が、どうも變たつた。何かに魅せられてゐたやうでしたよ。一萬圓の力なんですね。……そんなに欲しいのなら、遠慮しないで貰つて來ちやどうです？

はつ子　あなたの批判力で判斷して、それがいゝと仰有れば、わたし、これから、大急ぎで行つて貰つて來ますわ。

塚田　僕は貰つていゝとも惡いとも云やしませんよ。

はつ子　だつて、わたしはあなたの傑れた判斷力によつて判斷して頂かうと思つてますの。

塚田　金の事にかけちや、僕の判斷力なんか役に立ちさうぢやないな。

はつ子　だつて、わたしがそのお金を欲しがるのは、自分のためばかりぢやないんですもの。……あなたゞつて、いつまでもこんな日當りの惡い陰氣な下宿屋なんかにゐらつしやらないで、小ざつぱりした氣持のいゝ家をお持ちになつたら、御勉强がよく出來ていゝに違ひないと思はれますわ。今村さんの新築の家の書齋は、そりや居心地がよささうですのよ。あなたもあんな書齋をお建てになるといゝんですわね。わたしがお伴しますから、あなたも一度あの書齋を見にいらつしやいね。

塚田　いや、僕はこの部屋で結構です。他人の書齋を羨むのは詰らないことぢやありませんか。

はつ子　でも、書物を一册讀みもしない人が、あんないゝ書齋を有つてゐて、あなたのやうな方が、こんな物置小屋見たいな書齋にゐらつしやるのは、不當なやうに思はれますわ。

塚田　一萬圓の書齋か。夢見たいな話だ。……それに、貰つた金をみんな僕の書齋の建築費にしてしまつたら、あなたは御自分のために使ふ金がなくなるぢやありませんか。

はつ子　さうね。ぢや、あなたの書齋の建築費は五千圓に負けて頂いて、殘りの五千圓で自分の身の廻りを飾ることにしませうよ。

塚田　それは、あなたからはじめて承る言葉ですね。（嚴然たる態度で）心靈の修養ばかり考へてゐたあなたが、自

分の肉體を飾ることを考へだしたのは不思議に思はれますね。
はつ子　でも、神樣から授つた身體は、美しく飾るのが、人間としての正しい道ぢやないんでせうか。わたし、この頃になつてさう思はれますのよ。
塚田　（一層相手の身體に注意を向けて、）それはさうかも知れませんね。あなたが當時の流行の衣服を着たところを見せて呉れるんですか。さよ子さんのやうな服裝をしたところを。
はつ子　（ふと氣色ばんで）さよ子姉さんは、この頃もよくあなたを訪ねて來るんでせう。
塚田　滅多に來ませんよ。來たつて、あの人と僕とだけぢや話のしようがないんです。
はつ子　どうだか分らないわ。
塚田　あんな世間的な樂みしか知らない人と、僕と話が合ふ譯はないぢやありませんか。
はつ子　わたし、先日まではさう思つてましたけれど、この頃はそんなことは信じられなくなりました。あなたも、奇麗な衣服に魅せられる方なのよ。
塚田　僕でもさうか知ら。（考へる眞似をする）
はつ子　考へなくつたつてさうなんです。……わたし、さよ子姉さんなんぞに馬鹿にされたかありませんわ。あの人、三十をよつぽど過ぎて、身體はお婆さんになりかゝつてるくせに、身裝がいゝためばかりで、羽をのばして威張つてるんですもの。
塚田　あんな物質的な女と競爭する氣があるんですか。今日のあなたはどうも不思議でならない。
はつ子　（氣色ばんで）あなたはさよ子姉さんの外形に魅せられてらつしやるでせうけれど、わたしの肉體は決してあの人に劣つてやしないんです。たゞ美しい服裝で飾つてるのと飾つてゐないとの相違があるだけなのよ。
塚田　僕はあの人に魅されてやしませんよ。あなたの邪推だ。
はつ子　邪推なら邪推でもよ御座んすわ。……わたし、虚榮心のつよい女ぢやないんですけど、若い今のうちに着たいものを着て、自分のしたいことをしたいと思つてますの。それが神樣に對してもいけないことゝは思はれませんわ。
塚田　（笑つて）理窟は兎に角として、第一その一萬圓が無條件で手に入るんですか。それが根本の問題ぢやありませんか。
はつ子　（獨言のやうに）わたし、あの時遠慮なしに貰つて來ればよかつた。
塚田　（獨言のやうに）目が醒めてよく見たら、百圓札が枯

れつ葉だつたかも知れない。

はつ子　わたしは己惚れて云ふのぢやないんですけれど、一萬圓くらゐなお金は、誰れかゝら授つてもいゝと思はれますのよ。あなたどうつてさうよ。……なぜさうお思ひにならない？

塚田　ハヽヽ。人間はそのくらゐな自信がなきや駄目ですね。……だけど、あなたには、それだけの價値があるんでせうけれど、僕はそんな人間ぢやなさゝうですよ。あなたに時々訪問して頂けるのを、分に過ぎた幸福だと思つてるんです。

はつ子　謙遜も度を過ぎると卑屈に見えてよ。

塚田　（調子に乘つて）ぢや、明日の日、洋行費の一萬圓くらゐ、誰れかが出して吳れると當てにして待つてゐませうか。今日は書齋の新築費が五千圓。明日は洋行費が一萬圓。さうなると、僕も運が向いて來た譯だ。ハヽヽヽ。

（二人は、互ひに幸福を描いてゐるやうな風で顏を見合はす。）

はつ子　（ふと思立つたやうに）こんなこと云つてる暇に、わたし電話でも掛けときますわ。（立上る）

塚田　何處へ電話を掛けるんです？

はつ子　今村さんへ。（アタフタと出て行く）

塚田　一萬圓を引込められないやうにか。ハヽヽヽ。

（塚田が机の上の洋書を讀みかけてゐると、間もなく、襖の外から「御免なさい。入つてもよくつて」といふ聲がして、渡邊さよ子が、裾模樣の派手過ぎるやうな衣服を着け、指環でも頭のものでも華美な光を放つた、女優見たいな樣子をして入つて來る。手に風呂敷包を持つてゐる。）

（彼女は、ある不行跡のために、今村の家を出た後、ある老いたる實業家の後妻として再婚して、以前とちがつた奢侈遊惰な生活をしてゐる。塚田とは、はつ子と同樣に、少年時代からの知合ひである。）

さよ子　はつ子さんが來てるんでせう。

（會釋して火鉢の側に坐る。塚田は快い顏をしないで、少し後しさりする。）

さよ子　今、電話口に立つてる人の後姿がはつ子さんのやうでしたよ。來てるのね。

塚田　えゝ、來てゐます。

さよ子　よく來るんでせう。

塚田　さうでもありません。

さよ子　あの人はわたしを輕蔑して、わたしの家へはちつとも寄付かないんですよ。女は學問があると、あんなにお高く留りたがるんですかね。

塚田　さうでもないでせう。

さよ子　わたしは以前からはつ子さんが好きだつたし、今だつて惡意をもつてやしないのに、どうしたんでせう。わたしが時々此方へお伺ひするのが、あの人の氣に障るのか知ら。

塚田　(極りの惡さうに)そんなことはないでせう。

さよ子　あなたとあの人とはよくお話が合ふんでせうね。學者同士だから。

塚田　そんなことはありません。

(そこへ、はつ子が歸つて來る。襖を開けてさよ子の顏を見ると、思はず足を留める。さよ子、ニッコリして會釋する。はつ子、打解けぬ顏して、二人から少し離れて座に就く。)

さよ子　もつと此方へお寄んなさいなね。

はつ子　えゝ。

さよ子　暫くだつたわね。

はつ子　えゝ

さよ子　わたし、お正月の買物に三越と松屋とへ行つて來たのよ。あなたがお暇だつたのなら、お誘ひすりやよかつた。わたし、買物にでも、連れのあつた方が面白いのよ。

はつ子　わたし、今朝は大變忙しかつたのです。

さよ子　學校はもうお休みなんでせう。(風呂敷包を開けて反物を出して)わたし、この柄が塚田さんによく似合ふと思つたもんだから、氣紛れに買つて來たのよ。あなたどう思つて?

(はつ子、ふと緊張した態度で反物を手に取つて見る。)

はつ子　こんなニヤケた柄が塚田さんに似合ふか知ら。

さよ子　着物のことなんかあなたには分らないのね。大島なんかよりは、かういつたお召の方が、塚田さんにはよく似合ふのよ。寸法が分つてれば呉服屋に頼んで直ぐに仕立てさせるのだつたけれど。

塚田　(當惑したやうに)僕はかういふいゝ衣服を着る柄ぢやないんですから、誰れか外の人にお上げになつちやどうです。

さよ子　でも、折角わたしが見立てゝ買つて來たのぢやありませんか。恥をかゝせるもんぢやありませんよ。

塚田　困りますねえ。

さよ子　何が困るんです?(反物を擴げて、塚田の肩に掛けて)はつ子さん、見て頂戴。よく似合ふぢやないの?

はつ子　わたしには着物のことなんか分りませんわ。

さよ子　いや味なんか云はないでさ。わたしが買つて來たこの反物を、あなたが年内に仕立てゝ、塚田さんのお正月着にしたらいゝぢやないの。

塚田　まあ、今度は辭退しませう。

（彼は、はつ子の思惑をも憚つて、いかにも當惑したやうな態度を示す。）

さよ子　えこぢな方ね。……わたしが、今日偶然見付けて買つて來た反物が、來年あなたの運の開けろお祝ひにはならないでせうか。……塚田さんとはつ子さんとお二人の間には、來年はいゝことがありさうに思はれるのに。

（塚田とはつ子は、極りの惡さうな表情をする。）

さよ子　他人の好意のある贈り物は辭退するもんぢやありませんよ。百萬圓の財産でも、高が一反ばかりの反物でも、天の賜物だと思つて、快くお受けなさいなね。

（はつ子は、さよ子の言葉にも、思はず感動する。しかし、二人は何とも返事をしない。）

さよ子　（朗らかな笑ひを浮べて）わたしを前科者あつかひしなくつてもいゝぢやないの。わたしは詰らない人間なんでせうけれど、塚田さんにもはつ子さんにも好意は有つてるんですから、お二人とも、わたしを毛蟲のやうに見下げないやうにして下さいね。好いてる人に蔑視まれちや、わたしだつて淋しくなるわよ。

塚田　（生眞面目に）あなたを蔑視むなんてことはありませんよ。

さよ子　それでは、わたしの贈り物は快くお受けなさいね。何なら、はつ子さんが仕立てゝお上げになるといゝわ。（はつ子の方を見て）さう云へばね、わたし今日松屋で珍らしい人に會つて感じたことがあるのよ。

はつ子　珍らしい人？（氣のない受答へをする）

さよ子　瀨川さんのことなの。あなたも知つてるでせう。あの人、奧さんを連れて買物に行つてゐたのよ。

はつ子　瀨川さんて方は、今村の兄さんのお友達なんでせう。あなたはその方と話をなすつたの？

さよ子　いゝえ。わたしの方ぢやかまやしないけれど、先方では遠慮したのか、顏を外らしてゐたの。先方でさうなら、此方から頭を下げて行つて、御機嫌を伺ふには及ばないから、わたしも知らん顏してゐたのだけれどね。年末に御夫婦連れで何を買ひに來たのかと氣になつたから、時々そつと見てると、わたし驚いたのさ。あの貧乏自慢の瀨川さんが、新しい百圓札を出して買物の支拂ひをしてるぢやないの。今銀行から引出して來たばかりのやうな、手の切れさうな百圓札を振りまはしてるから、わたし驚いたのさ。

はつ子　さう？（瀨川の話には何の感じも起さないらしく、冷淡に受答へをする）

さよ子　だつて、以前は年末になると、僅かなお金の無心に來てゐた人なんですもの。……この頃はいゝ仕事に有りついてるのか知ら。

はつ子　でも、この頃のあなたが、百圓ばかりのお金に驚くつてことありませんわね。

さよ子　百圓ばかりなんて、はつ子さんも氣が大きくなつたわね。

はつ子　(ふと興に乘つたやうに)えゝ、わたし、百圓紙幣を一枚や二枚見たつて驚かなくなつてよ。

さよ子　(意外に感じたらしく)えらいことね。……それから、わたしは三越でも、思ひがけない人に會つたのよ。何だか、今日は不思議な日のやうに思はれてならないの。

はつ子　さう？(それを聞きたがらうとはしない)

さよ子　元、今村の玄關にゐた大島といふ書生のことなのさ。今もまだゐるのかも知れないけれど。……その男が、五十くらゐな女と、可愛らしい二十くらゐな娘とを連れて買物に行つてゐたのよ。わたし、見つからないやうに氣をつけてそつと見てゐると、今度も驚かされたのさ。だつて、瀬川さんの時と同じやうに、新しい百圓札を出して支拂ひをしてゐるんですもの。……今年の暮は世間一般にそんなに景氣がいゝのか知ら。わたし、不思議に思はれてならないの。

はつ子　でも、百圓ばかりのお金に驚くことはないでせう。

さよ子　今日、はつ子さんは變ね。(不思議さうに相手を見詰める)

はつ子　わたし、お金なんか、欲しいと思つたら、何處からか授かるやうに思はれてよ。瀬川さんだつて何處からか授かつたに違ひないわね。

さよ子　今までのはつ子さんとは思へないやうなこと云ふぢやないの。……瀬川さんも、瀬川さんの奧さんも、書生の大島も、身裝は、昔とちつとも變つてやしなかつたのよ。

はつ子　身裝はお金さへ出せば、今直ぐにでも變へられますわよ。塚田さんだつて、この反物を仕立てゝ着たら、直ぐに、何處かのお金持の若旦那見たいになるのぢやありませんか。

(さつきから不快な顏してゐた塚田は、この時、「ちよつと失禮します」と云つて座を立つて、襖の外へ出る。)

さよ子　何處へいらつしやるの？(と聲を掛けてから、はつ子に向つて)塚田さんは、わたしが出拔けに訪ねて來たことを怒つてるんぢやないか知ら。あなたと仲よくお話してゐたところへお邪魔をして。

はつ子　そんなことがあるものですか。

さよ子　あなたは、今日はお金々々と、お金のことばかり云つてるやうね。お金なんか汚れたものには目も呉れな

いのが、あなたの價値ぢやなかつたの？
はつ子　どちらにしたつて、あなたの前にはわたしは價値のある女ぢやありませんわ。
さよ子　あんないやみを云つて。……わたしね、あなたに會つたら訊かう〳〵と思つてゐたことがあるのよ。あなたはこの頃、今村によく會つてるんだつてね。
はつ子　えゝ。今村の兄さんには時々會つてますわ。わたしを誘つて帝國ホテルの洋食を御馳走して下すつたり、芝居や活動を見せて下すつたりするのです。
さよ子　いやねえ。あなた何だつて今村に隨いてそんな所へ行くんです？（さも侮蔑したやうに云ふ）
はつ子　（反抗的に）それがなぜいけないの？　わたしが洋食を饗れたり芝居を見せて貰つたりするのがなぜいけないの？　今村の兄さんは、この頃はお金がどつさり入るやうになつたのか、物惜みをしないで氣持がいゝのよ。わたしがお金を頂戴と云ふと、いくらでも出して呉れさうなのよ。
さよ子　（いきり立つて）何をお云ひだ？　あの人が一圓のお金だつて何で無意味に出すものかね。はつちやんの考へ無しにも呆れつちまふよ。
はつ子　（得意らしく）神樣が今村さんを使つて、わたしにお金を授けて下さるんぢやないかと思はれてよ。
さよ子　フン。（と嘲笑つて）蟲がいゝにも程があるよ。去年は西洋のお宗旨に凝つて尼にならうと云つてた人が、今村の誘惑に乘つたりして。
はつ子　あなたこそ、氣かどうかしてるんぢやないの？　御自分の方から愛想を盡かした前の御亭主のことを何だのかだのと云つたりして。
さよ子　生意氣お云ひでないよ。當り前の結婚さへしないのを自慢にしてた人が、今村なんかにお金で買はれる氣になつたのかい。……呆れたものだ。
はつ子　それは誰れのこと？……反物一反で塚田さんの歡心を買はうとする人の心が、わたしには可笑くつてならない。（ヒステリックに笑ふ）

（さよ子、怒るよりも呆れて相手を見据ゑる。）

（そこへ、下宿屋の女中が顏を出す。）

女中　あの、塚田さんは、御散歩にお出掛けになりました。夕方でなければお歸りにならないさうで御座います。
さよ子　塚田さんは散歩にいらしつたんですつて？
女中　はあ。お客樣にさう申上げるやうにと仰有いました。

（女中は不思議さうに部屋の樣子を見て引込む。）

さよ子　（獨言のやうに）塚田さんは變人ねえ。わたし達に

訪問されて悅しいとも思はないのか知ら。こんな穢しい下宿屋へ遊びに來て上げたのに有難いとも思はないのか知ら。

はつ子　あなたが此方へ來る時には、特別におめかしして、塚田さんを誑かさうたつて駄目よ。塚田さんは着物やお化粧に誑かされるやうな俗物とは人がちがふんだから。

（はつ子の物狂はしい權幕に、さよ子は恐怖を感じて後退りする。やがて、努めて穩やかな態度を保つて。）

さよ子　御主人のゐない部屋にゐたつて爲樣がないから歸りませうよ。あなたは一人で此處に待つてるんでせう。

はつ子　わたし、これから大切な用事があるんだから、愚圖々々しちやゐられないの。

さよ子　（なだめるやうに）ぢや、一しよに歸りませうね。わたし、自動車を待たせてあるのよ。

はつ子　でも、わたしは外へ廻らなきやならないの。

さよ子　何處へでも、あなたの行きたい所へ、わたしの自動車で送屆けてあげますよ。

（さよ子、反物は机の上に置いて立上る。しかし、はつ子は容易に立上らうとしない。）

（さよ子、相手を促して、手を執つて立上らせようとする。はつ子、その手を振放つて、夢見るやうな目付で。）

はつ子　わたし、これから今村さんの書齋へ行かなきやならないんだから、あなたに自動車で送つて頂く譯には行かないわね。

さよ子　今村の家へこれから行くんだつて？……送屆けて上げるわよ。何のために今村の家へ行くのか知らないけれども、送屆けて上げますとも。……どんな家を新築してるのか、わたし、外から見るだけ見てもいゝんだから。

はつ子　あなたが愛想を盡した今村の兄さんは、一しよ懸命、わたしの歡心を買はうとしてゐるのよ。

さよ子　（ふと忌々しくなつて）それで、あなたがいゝ氣になつて逆上せ上つたのね。

はつ子　無條件でわたしに一萬圓といふお金を呉れるんですつて。百圓札で百枚、書齋のテーブルの上に積上げて、わたしの來るのを待つてるのよ。

さよ子　あなた、目を開けて夢を見てるの？

はつ子　噓と思ふなら、これからわたしと一しよに行つて、書齋の窓の外から覗いて御覽なさい。

さよ子　あの人、こんな世間知らずを手懷けてわたしに復讐しようと思つてるんだな。

はつ子　わたし、早く出掛けなければ。

（つと立つて行きかける。その樣子が變なので、さよ

子抱き留める。）

さよ子　まあお待ちなさい。

——幕——

（二）ノ二

（一）と同じ今村の部屋。

テーブルの一隅には、前の如く札束が新聞紙に蔽はれたまゝ置かれてゐる。

今村陽一と、弟謙次（三十餘歳、田舍者らしい服裝をしてゐる）とが、瓦斯ストーブを前に椅子に腰掛けてゐる。

謙次　どうしてもいけないのか。

今村　氣の毒だが駄目だよ。おれの會社の內情は、お前には本當のことを打明けてもいゝが、見かけほどよくないのだ。……それで、お前の要求通りに資金を用立てる餘裕は、僕にはないのだから、今度は勘辨して呉れ。

謙次　（不平らしく）僕の方ぢや、こんな大事な場合に、三千や五千の金が融通して貰へん筈はないと思つてた。

今村　おれは、お前なんか田舍の人間が思つてるほど、經濟が豐かぢやないんだよ。

謙次　さうかなあ、何に使ふんだね。獨身生活でそんなに費用が嵩むのは不思議だね。

今村　獨身だから無駄な費用が入るやうな譯さ。

（謙次は六ケしい顏してうつむいてゐる。）

（今村は煙草を吹かしながら何か空想してゐる。）

（そこへ、書生が扉をノックして顏を出す。）

書生　（名刺を出して）この方が是非お目に掛りたいと云つてゐます。

今村　（名刺を受取つて）塚田銳吉。（と讀んで、ちよつと考へて）あゝさうか。こゝへ通して呉れ。

（書生退く。）

謙次　僕はゐてもいゝのか。

今村　さうだね。座を外して貰つた方が都合がいゝね。この他にも客がまだ來るかも知れないから、晚餐時分まで、何處かへ見物に行つて來るやうにして呉れ。

謙次　寒いのに、幾度も當てのない見物なんかさせられちや溜らない。階下で午睡でもしてゐようか。

（さう云つて、椅子を離れて出て行かうとしてゐるところへ、塚田が興奮した顏して入つて來る。今村、異つた事を豫想する。謙次も扉の側に立つたまゝ、出て行くのを躊躇する。）

塚田　わたくしが塚田と申します。

今村　お名前は承はつて居りますが、どういふ御用です？

塚田　大變な事が出來まして。

今村　大變なこと？　はつ子さんがどうかしたのですか。

（顔色を變へる）

塚田　さうです。あの人は、さつきわたくしの部屋で精神に異狀を起しました。そして、あなたの書齋のテーブルの上の一萬圓のことばかり口に出してゐました。

今村　それは不思議だ。（テーブルの上の新聞包みを氣にしながら）はつ子さんは發狂したんですね。

塚田　發狂したのかどうだか、まだ分りませんが、その一萬圓のことで、いろ／＼な妄想を起して苦しんでゐるんです。

今村　そりや不思議ですね（次第に冷靜な態度を持して）どんな妄想を起してゐます？　あなたは、まあそこへお掛けなさい。

塚田　（突立つたまゝ）直接にわたくしが見てゐたのぢやありません。……あなたの前の奧さんとはつ子さんと二人だけで、わたくしの部屋にゐたのですが、自分の身體は一萬圓の身體だと云つて自慢したさうです。

今村　それは本當ですか。

塚田　あなたの前の奧さんから聞きました。……それから、あなたに、天女のやうな步きぶりだと褒められたと云つて、天女のやうな身振りをして部屋の中を步廻つたさうです。

今村　（笑ひを壓へて）それが精神に異狀のある證據なんですか。

塚田　自分の肉體は、さよ子さんよりも美しくつて若いと云つて、帶を解いて見せたさうです。

今村　あなたはそれを御覽にならなかつたんですね。

塚田　わたくしは、二人の話を聞くに忍びないから、座を外してゐました。

今村　それで、はつ子さんは今何處に居ります？

塚田　あなたの前の奧さんが、はつ子さんを自動車に乘せてはつ子さんの家へ送屆けたさうです。……わたくしは、只今あなたの前の奧さんから譯を聞いて、はつ子さんの發狂は、あなたの責任だと斷定しました（責めるやうに云ふ）

今村　これは驚いた。どうしてわたしの責任になります？

塚田　あなたは、少くも一萬圓を餌に、はつ子さんの心を汚したのぢやありませんか。

（さう云つて、塚田は、テーブルの一隅の新聞包みを鋭い目で見つけるや否や、「これだな」と叫んで、手早く奪取つて、ストーブへ投込む。）

今村　馬鹿ッ。君はさよ子の賣女に唆かされたのだな。

（今村は塚田に摑みかゝる。譲次、呆氣に取られてゐる）

――幕――

みんな出鱈目

人　物

諸枝たより（二十五歳くらゐ。頭髪も服裝も、人に目立つほどの新しさを現はす。）

白川さく子（たよりの姉。三十歳くらゐ。白川洗吉の妻。妹よりも地味な風をしてゐる）

村上順三（實は高見敬助。三十歳くらゐの利口さうな顔した男）

ある男（顔は四十くらゐの年齢として見える。しかし、年齢に拘泥しない服裝をしてゐる）

白川洗吉（四十歳くらゐで、その年齢に相當した身裝をしてゐる）

時節は初春。

一

あるホテルの一室。壁やカーテンなどが緑色で色取られてゐる。窓は全く鎖されて、電燈が點いてゐる。

諸枝たよりといふ、心にも身體にも若さを有つてゐる女が、しどけない樣でダンスの獨稽古をしてゐる。時時、姿見鏡に自己の姿態を映しながら微笑を泄らしてゐる。他人の傍觀を意識しない自己惑溺のダンス獨稽古が暫く續く。

扉のノックを聞きつけて、思はず立竦んで、「どなた？」と聲を掛ける。

「ちよつと待つて下さいね」と云つて、慌だしく衣服を着替へて、さつきとはちがつた、澄ました顔して扉を開ける。

たより　いらつしやい。

（さく子といふ、たよりの實姉で、白川洗吉といふ學校教師に嫁してゐる、いくらか世疲れのした女が入つて來る。）

さく子　あなた一人？（と、部屋の中を見て、外衣を脱ぎながら）今夜のダンスは見に來られなくなつたから、今お斷りに來たのよ。

たより　さう？　どうせそんなことだらうと思つてましたわ。……さあ、お掛けなさい。今はあたし一人なのよ。ゆつくり遊んでいらつしやいな。

（姉妹は、差向ひの話に適したやうな位置を取つて椅子に腰をおろして、互ひに何かを思つてゐるやうに表情で顔を見合せる。）

（少しの間、言葉が止切れる。）

さく子　村上さんは？

たより　今朝早くから出て行つたの。方々馳けずり廻つてるんでせう。無論お金の工面よ。（ふと、笑ひをこぼしながら）事によつたら、あなたのところへもお金の無心を云ひに行くつもりかも知れないことよ。

さく子　さう云つて揶揄つてるつもり？　村上さんはあたし達の顔を見たゞけでさへ、すうつと逃げつちまふくせに。

たより　あの人、そんなに氣が弱かないのよ。（姉を責めるやうに云ふ）

さく子　誰れも、あの人が氣が弱いとは思つてやしないさ。

たより　あなたや義兄さんを嫌つてる譯でもないのよ。

さく子　（今度は、姉の方で反抗するやうに）嫌はれたつて關はないしね。

たより　さうでせうとも。村上なんかは取るに足らない人間なんだから。

さく子　あたし、さういふ意味で云つたんぢやないの。

たより　どういふ意味でもいゝわ。……あたし、誰れに嫌はれても關はない人間に成り切つたらいゝと思つてゐるよ。……（ふと、打解けた調子に變つて、姉の顔を見詰めて）それで、今朝姉さんがあたしに話したいことつてなあに？　またお父さんに頼まれて、あたしに忠告しにいらしつたの？

さく子　へえ。（呆れて）たよちやんは、あたしがそんな用事をもつていつも訪ねて來ると思つてゐるの？

たより　でも、何だかさうらしいんですもの。……その用事でなくつても、何か用事があるんでせうから、まづ、その大切なお話から片付けてしまひませうよ。

（さく子、沈默。）

たより　あたしが二三日前から東京に來てゐて、このホテルに泊つてることを、お父さんや兄さんは、誰れかゝら聞いて知つてるのね。

さく子　それはどうだか。……あたし、この頃暫く本郷の方へは顔出しをしないから、あなたが此方へ來てることも、あたしから知らしやしないの。

たより　（怪訝な顔して）さう？

さく子　あたしは、今自分の事であなたに相談したいことがあるの。

たより　姉さんの事で？　珍らしいわね。（氣を落して）ぢ

や、直接あたしに關係したことぢやないのね。

さく子　あたしがあなたの生活に餘計な干渉をしようと思つてやしないことは、あなたにはよく分つてるぢやないの。

たより　でも。……

（二人とも少しの間沈默。）

さく子　あたしね。當分何處かへ身を隱してようと思つてるのよ。さうでもしなきややり切れないの。家の中がうるさくつて。……あなたのやうな氣儘な、のび〳〵した氣持で日を送つたことは、一日だつてなかつたんですからね。

たより　……姉さんは無斷でお家を出ようと思つてゐて？

さく子　あたし、誰れもゐないところで、眠るだけでも飽きるほど眠りたいと思つてゐるの……だつて、この二三年以來、あたしは思ふ存分に睡ることとさへ出來なかつたぢやないの。

たより　……年を取つた舅姑さんが二人に、小姑が二人、おまけに小姑の一人は出戻りさんだから、大抵ぢやないわね。……でも、姉さんの無斷の家出は大變な事件になりやしないこと？

さく子　でも、あたしはよく考へて見て、當然のことのやうに思つてるのよ。このまゝでゐちや、あたしはぺちやんこにひしやがれてしまひさうなんだもの。

たより　それで、當分何處に隱れてようと思つてゐらつしやるの？　本郷へ？

さく子　（氣色ばんで）誰れが本郷なんかへ。……お父さんの家なんかであたしを匿まつて呉れるか呉れないか、考へて御覽な。

たより　（甚だ同感して）さうねえ。……ぢや、大森の兄さんのお家は？

さく子　あんな家に三日でも二日でも一日でもゐられるものですか。貨物自動車に一杯手土産を運んでつたら、どうだか分らないけれどね。

たより　ぢや、澁谷の叔母さんのお家は？　あしこには、人目をよけて住むにいゝ離れがあるのだから。

さく子　お止しよ。眞面目くさつて何をお云ひだ？。兄弟や親類の家を一軒々々數へて見たつて、何の足しにもなりやしないさ。あなた自身の經驗でよく分つてゐさうなものだ……あたしはたよちやんにだけ打明けといて、溫泉場へでも行かうと思つてるの。箱根か熱海か。少し遠くつても修善寺へでも行かうか知ら。

たより　姉さんのことだから、旅費は有餘るほど持つてるんでせう。

さく子　あたしがそんなにたつぷりしたお小使を持つてる

筈はないぢやないの。……でも、直きに親類に泣きつくやうな見つともない眞似はしないつもりよ。

たより　(ふと勢ひよく)ぢや、このホテルに泊つちやどう？　あたし、決して姉さんの秘密は洩らさないことよ。

さく子　さうねえ。(珍らしさうに部屋の中を見渡す)

たより　女一人で温泉場なんかへ行くのは不安心ぢやない？

さく子　そんなことを危がしがるの？

たより　でも……警察へ搜索願を出すやうなことはないでせうか知ら。

さく子　そんな氣遣ひはないの。

たより　義兄さんは學校の先生だから、家庭の不和が新聞に出されたりして、表沙汰になつて、世間的名譽に傷がつくのを恐れるのね。本郷のお父さんのやうに。

さく子　それもさうだけれど、あたしから、よく筋道の立つた詫手紙を書いて置くし、それにあたしの保證人になつて呉れる人を、一人こしらへておくつもりなんだから。

たより　その保證人はあたしぢやないこと？

さく子　まさか。

たより　あたしには人の保證人になる資格はないんですものね。……あたしの保證人になつて呉れる人もないんだし。……そんなことはどうでもいゝとして、このホテルに隱れてゐてもいゝと思つてるのなら、今直ぐにでも空部屋を訊いて上げてよ。あたし、姉さんの家出を勸めはしないけれど。

さく子　あたし、一應家へ歸つて、自分の物を整理して、身仕度をして來なきやいけないの。

たより　そんなことしてもよくつて？

さく子　大丈夫よ。あたし、傍の人に氣取られるやうなへまな眞似はしないことよ。

たより　本當に？……家出する人が一度歸つて出直すつてことあるものか知ら。

さく子　疑ひ深いのね。……とに角、あたしの決心を人に洩らしちやいけないよ。

たより　それだけは大丈夫よ。

(妹の確答するのを見て、さく子が座を立ちかけると、そこへ、たよりの同棲者である村上順三といふ、三十歳くらゐの才子らしい男が、西洋菓子の入つてゐるボール箱を提げて、何の豫報もしないで、扉を開けて入つて來る。)

(その瞬間、三人とも意外な感じを起して、互ひに間の惡さうな樣子を現はす。)

たより　大變お早かつたのね。(咎めるやうに云ふ)

順三　忘れ物があつたから、ちよつと歸つて來たのだ。直

ぐにまた出掛けるよ。

（彼れは、妻に向つて言譯をしながら、さく子に挨拶をする。）

さく子　暫く御無沙汰しました。お忙しくていらつしやるの？（なつつこく云ふ）

順三　さうでもありません。（よそ／＼しく云つて）ちよつと失禮。（と云つて、さく子の側を通つて洗面所へ行きかける）

さく子　あたし、急ぎますから、これでお暇しますわ。

（彼女は、二人のどちらに對するともなく云つて、戸口に向ふ。）

たより　あたし、待つてゐてよ、何處へも出て行かないで。

（扉の側まで見送る。さく子、何か小聲で云ひながら出て行く。）

（たより、元の座に戻つて、ボール箱を開ける。順三、洗面所から出て來る。）

たより　このお菓子はあたしに食べさせようと思つて買つて來て下すつたの？　おいしさうね。

順三　いや、それは伊藤さんへ持つて行くんだから食べちやいけないよ。

たより　こんな安つぽい手土産はお止しなさいね。……あたし頂くわ。今朝からよく運動してゐたから、お腹が空いちやつた。（西洋菓子を抓んで、貪るやうに口に入れる）

順三　そんなに腹が減つたのなら、みんな食べつちまふさ。（自棄らしく云ふ）

たより　怒つたの？　お菓子を一つ食べたくらゐで怒られちやたまらないわ。

順三　下らないことを云ふもんぢやない。……そんなことよりも、お前の姉さんは何しに來たの？　僕の顔を見ると、逃げるやうに歸つて行つたところをもつて見ると、何か秘密の用事があつたんだね。

たより　えゝ、大變な用事があつたのよ。

順三　例の忠告か。これまでとは違つた話を持つて來たんだね。どうもさうらしかつた。

たより　（食べかけの菓子を机の上に置いて、眞面目な態度を取つて）さうらしかつたなんて己惚れちや駄目よ。

順三　妙なことを云ふぢやないか。

たより　あたしも己惚れちや駄目なのよ。身内の人がいつまでもあたしのことを氣にして、いろ／＼に構つて呉れてると思ふのは、己惚れかも知れないわね。

順三　若しさうだつたら、煩くなくつていゝぢやないか。お前は先日までよくさう云つてたぢやないか。

たより　でも、身内から完全に除けものにされたと思ふ

と、淋しくないこともないわね。

順三　ハ、、、。弱いことを云つてる。お前にも似合はない。

たより　ところが、姉さんの話を聞いてるうちに、あたしにも元氣が出たのよ。……だつて、痛快なことを聞いたんですもの。

順三　（思はず乗出して）痛快なこと？

たより　とても痛快なことなのよ……でも、何だか當てにならないやうに思はれないこともないの。

順三　早く云つて御覽な。自分だけの獨合點ぢや駄目だよ。

たより　「姉さんがね。白川家の人に無斷で家出をするんですつて」（改つた口調で、これだけを重々しく云つて）あなたなんかは何とも思はないでせうけれど、あたしだけには非常に痛快に思はれるの。姉さんはあたしにかぶれたのよ。今まであたしに意見をしてゐながら、心のうちではあたしを羨んでたことが分つたのよ。あの見識ぶつた高慢ちきな白川の家の人がどんな顏をするか、思つても氣味がいゝぢやないの。子供の幸福よりも世間體ばかりを氣にしてゐるあたし達のお父さんがどんな顏をするか、思つても氣味がいゝぢやないの。（さも愉快さうにべらべらと云ふ）

順三　（詰らなさうに）何だ。僕にはちつとも面白くないことだ。

たより　でも、あなたの利益になることもありさうなのよ。……姉さんは、今日のうちに家出をして、このホテルに隠れてゐたいと云つてるのよ。

順三　（顏を顰めて）へえ、此處へ來るのか。

たより　姉さんはお金は隨分持つてゐるの。あたしはちやんと見破つてるわ。

順三　他人の懷中が當てになるものか。

たより　あなただつて他人の懷中を當てにして飛廻つてるくせに。

順三　（腕時計を見て）さあ、僕はまた出掛けなきやならない。午餐は他所で食べて來るかも知れないよ。

たより　晩の時刻を忘れちやいやよ。踊りはあるし、姉さんは來るし、大變なんだから。

順三　この頃は僕も忘れつぽくなつていけない。陽氣の加減か知ら。

（彼れは、デスクの上を捜して、一つの書き物を取上げて、ポケットへ入れて出て行く。たよりは、順三の方へは目を留めないで、空間を見詰めて物を考へてゐる。やがて、椅子に腰をおろしたまゝ、足でダンスの稽古をする。が、その足の運動は次第におろそかにな

る）

（ふと、外出を決心したらしく、力を入れて立上ると、そのトタンにノツクが聞える。）

（「お入んなさい」と、聲を掛けると、ある男が扉を開けて顔を出す。）

（「あの。……高見さんのお部屋はこちらで御座いましたね。」

「いゝえ違ひます」

「どうも失禮しました」

（その男出て行く。）

（「間抜け野郎」と、たよりは獨言を云つて、出仕度をしてゐると、ノツクとゝもに戸が開いて、さつきの男が再び顔を出す。）

ある男　こちらのお部屋は二十二番で御座いましたね。

たより　えゝ、さうですわ。（反抗的な目で相手を見詰める）

ある男　昨日銀座で高見さんにお目にかゝつた時に、ホテルの二十二番の部屋に泊つてると仰有つたのですが。

たより　それはあなたのお間違ひぢやないでせうか。わたしどもは高見ぢや御座いませんの。

ある男　わたくしの聞き間違ひぢやありません。たしかに二十二番と仰有つたのです。二度も念を押して仰有つたのだから、高見さん御自身の思ひちがひでもありますまい。

たより　（多少の恐怖を感じながら）帳場でお聞きになると分りますわ。たしどもの姓は高見とは違ひます。

ある男　御主人がゐらつしやると分るんですが、只今は御不在なんですね。

たより　ゐてもゐなくても、あなたのお訪ねになる方とは違ひますわ。

ある男　若しもわたくしの間違ひだつたら、お詫びのしやうも御座いませんが。……

たより　どうぞ帳場でよくお聞き下さいましな。

ある男　ハテナ。

（彼女がその男の前に立つて追立てるやうな態度を見せる。しかし、その男は頑なに動かないでゐる。）

たより　どうぞお引取り下さい。

ある男　（いやな笑ひを洩らして）わたくしは今日のうちにどうしても高見さんに會つてお話しなきやならない事情が出來たのです。お出先がお分りにならなければ、高見さんのお歸りになるまで、このお部屋でお待ちしてゐませう。

たより　あなたは失禮ぢやありませんか。他人の部屋へお入りになつて。……これほど譯を云つてもお歸りにならな

ないのなら、帳場へ知らせて、誰れかに來て貰ひます。

ある男　へ、、。わたしは狂人ぢやありませんよ。これでも高見さんの友人なんですよ。

たより　高見ぢやないと、これほど申上げてるのに。

（彼女は、興奮して、卓上電話の側へ驅寄る。それと同時に、電話の鈴が鳴る。彼女は受話器を耳に當てる。）

たより　モシ／＼。……あゝあなたですか。……丁度よかつた。今此方へどなたかいらしつて、あなたを高見といふ方と間違へて、どうしても此處で高見さんに會つて行くと云つて、あたし困つてますの。

（彼女の言葉の終らないうちに、ある男は傍へ寄つて來て、「高見さんから掛つて來たんですか。丁度よかつた。わたくしが直接にお話しませう」と云つて、奪ふやうに彼女の手から受話器を取る。）

ある男　ヤア、高見さん。昨日は失禮しました。……さうです……僕は今夜の汽車で西の方へ出掛けなきやならないので、その前に是非あなたにお會ひしたいと思つて、只今此方へうかゞつたのですが、あなたは何時頃ホテルに歸つていらつしやるでせうか。……左樣ですか。……ぢや、お言葉に從つてホテルでお待ちすることにしませう。それから。……アツ、電話が切れちやつた……

（ある男は、電話でかう云つたあと、たよりを顧みて、）

あなたは高見さんにお話しになることは御座いませんでしたか。高見さんはおそくも三十分後には歸つていらつしやるさうです。……わたくしが、このお部屋にゐちやお邪魔になりますでせうから、玄關の廣間で高見さんをお待ちしてゐることにいたしませう。

（たよりは、さつきから呆氣に取られた樣子をしてゐたが、ある男が出て行かうとすると。）

たより　あなたにちよつとお訊ねしたいことが御座いますの。まあ、そこへお掛け下さい。

ある男　ぢや、わたくしはまだこのお部屋にゐてもよろしいんですか。

たより　あなたはどうして、村上のことを高見々々と仰有いますの？

ある男　村上ですつて？　わたくしはさういふお名前は知りませんね。高見さんがいつの間にか、姓をお變へになつたんですか。御當人からまだ承はらないんですが。……

たより　（驚いて）今でも昔でも、村上に高見といふ姓が別にあつたつてこと、わたし少しも存じませんでした。

ある男　半年もお目にかゝらなかつた間に、高見さんは、この頃御養子にいらつしやつたんぢやありますまいか。それで姓が變つたんぢやありますまいか。

たより　いゝえ、そんなことは。……
ある男　尤もあの方は、二つや三つの變名は有つてゐさうに思はれないことも御座いませんね。さういふ趣味を有つてゐらつしやるんですね。……しかし、高見といふ姓は、あの方の大昔からの姓なので、それだけは間違ひないです。
たより　ぢや、あなたは何年ほど前から、高見を御存じでゐらつしやいますの？
ある男　左樣さ。……もう十年も十五年も前から知つてゐる筈ですよ。いや、もうと前から知つてゐたかも知れませんね。しかし最近は滅多に會はなかつたので、昨日往來でパッタリ行遇つたのが、實際不思議な緣のやうに思はれます。
たより　それで、今日は高見に特別な御用がおありになるんですね。
ある男　まあ、さうです。（ふと、氣づいたやうに立上つて）まだ御懇意でもないあなたに餘計なおしやべりをしてちやいけない。あちらへ行つてゐませう。
たより　わたし、も少しお訊きしたいことが御座いますの。あの高見は家柄のいゝ財産のあつた關西地方の舊家に生れたので御座いませうか。
ある男　さあ。何とお答へしていゝかな。（と、氣のない返事をして）それよりも、あなたは高見さんとどういふ御關係がおありになるんですか。
たより　（侮辱を感じたらしく）それは、高見に直接お聞き下さい。
ある男　成程、さうですね。……ぢや、わたしはあちらでお待ちしませう。……いづれ後ほど。
（ある男は會釋して出て行く。）
（たよりは、見向きもしないでゐる。そしてあとで、「馬鹿野郎」と叫んだが、意氣銷沈して、椅子にぐつたり寄掛つてゐる、暫くして。）

――幕――

二

その日の午後。
日比谷公園の一隅。風が荒く埃が烈しく、鬱陶しい光景を現はしてゐる。
いろ／＼な人間が通つてゐる。その後から、順三がある男と連立つて現はれる。
順三　かう埃が強くつちやたまらない。こゝで一休みしようか。こゝは木蔭だからいくらかいゝだらう。
ある男　あなたも物好きだ。ホテルの部屋を締切つてお話をなされればいゝのに。わたしはどう間違つたつて、あな

たに飛びついて、あなたの咽喉を締めたりする人間ぢやありませんからな。

順三　どうだか分らないね。

ある男　へゝえ。さう疑つた日にや、どちらがどうだか分りやしない。あなたの方に一層危險性が多いかも知れませんよ。……兎に角、わたしはさうお手間は取らせないつもりです。

順三　まあ、こゝへでも腰を掛けよう。

（ベチンの上に腰をおろす。ある男もそれに倣ふ。）

順三　君の顏を僕の同棲者に見せたくないし、君の話は尙更聞かせたくないと思つたから、こんなところまでわざわざ君を引張り出して來たのだ。

ある男　へゝゝ。暫くお目にかゝらなかつた間に、あなたは大變臆病になりましたね。わたしの話を傍の人に聞かれたつていゝぢやありませんか。わたくしはあなたを脅迫しに來たんぢやなし、お金の無心を云ひに來たのぢやなし、……わたしは、いつもあなたにお目に掛つても、好意を有つてゐなかつたことはなかつたぢやありませんか。

順三　僕だつて、昨日君に會つた時には、久振りでいゝ所で會つた、君の智慧を借りたいと思つたのだが、うつかりして、君に注意しとくのを忘れたのだ。同棲者の嫌疑を受けるやうなことは云つて貰ひたかなかつたのに、大しくじりをやつた。

ある男　そんなことが氣になりますかね。……同棲者と云つて、あの女（ひと）はあなたの奥さんぢやなささうですね。わたしは一目見てさう思ひましたから、敬意も表さなかつたのですよ。

順三　（叱るやうに）それだからいけないんだ。

ある男　へえ。……わたしの方から云ふと、あなたも、いつの間にか、文化的になつて、西洋風のホテルなんかへ婦人を連込んでいらつしやるのが、少し擽つたく思はれたのです。

順三　君がそんな氣持でゐるから、あしこでは君に會へなかつたのだ。君が不用意な事をしやべつて、僕の同棲者を傷けやしないかと氣になつてならなかつた。……君は、僕が歸つて來る前に餘計なことは云はなかつたらうね。

ある男　いや、なんにも。……しかし、あなたがそんなことを氣になさるのは意外ですね……へゝゝ。（卑しい皮肉な笑ひ）

順三　いやに冷かすぢやないか。薄つ氣味の惡い君の笑ひ聲を聞くのも久振りだが……君は相變らず獨身らしいね。獨身で、いよ／＼金に行詰つた時にや、芋の皮を嚙つて水ばかり飲んで平氣でゐられる人間だから、僕の今の氣持は分るまい。

ある男　いや、わたしは一目見て分つたつもりだ。……わたしの智惠と度胸は昔からよく知つてゐらつしやる筈だが、暫くお目に掛らなかつた間に、物忘れをするやうにおなんなすつたね。へゝゝ。

順三　（おとなしく同意して）物忘れはするやうになつた。

ある男　文化的におなんなすつても、懷中工合は有福ではなさゝうですね。

順三　その通りだ。そのために氣力が衰へて忘れぽくなつたのかも知れないよ。

ある男　ハテナ。貧乏をそんなに苦にするやうなあなたぢやなかつた筈だが。……お貯へがなくなつたにしろ、金はそこら中に轉がつてるぢやありませんか。わたしがお手傳ひして、少し黃金の採集に取掛つちやいかゞでせう？

順三　昨日さう思つて歩いてゐると、パツタリ君に出會つたのさ。

ある男　それはあなたの御運がよかつたのですよ。わたしは今夜の急行で關西へ出向くことになつてゐました。さうすると、當分お目に掛る機會は得られなかつたのですからね。

順三　君には續々うまい仕事があるんだらうね。こんな不景氣な世の中にでも。

（彼れは、さう云ひながら、相手の、可なり身窄らしい服裝に目を注ぐ。）

ある男　それは、どんな世にでも喰ひはぐれのないのは、わたしが生れながらに持つてる一得でさ。

順三　知らない人間は、君の服裝を見て、君の腹の中の價踏みまでするかも知れないが。……

ある男　ハヽヽ。……お互ひに忙しいのに、詰らない話をしましたね。「時は金だ。」下らない話は切上げて、わたしがあなたにお頼みしたいことを、短刀直入に申上げませう。わたしは、あなたから紹介狀を二三通頂きたいんです。それも、名刺の端つこへ、何々を紹介す、御引見下されたしと、通り一ぺんの文面を書いたゞけぢやいけませんよ。

順三　僕の紹介狀が役に立つのかい。君のお役に立つのなら、そんなものは何枚でも書いて上げるが、全體僕の紹介狀を何處へ持つて行くのだ？

ある男　それが、宛名は除いて書いて頂きたいんです。なに、御自分でお書きにならなくつても、あなたのお許しさへ頂いたら、わたしが必要に應じて、自分で勝手に書きますよ。

順三　それもいゝだらう。しかし、君は僕の身體にまだ世間的信用が殘つてると思つてるのかい。

ある男　ところで、世間は狭いやうで廣いものでね。關西地方ではあなたを高見敬善の遺族として買被る人間がありさうですよ。

順三　ハ、、。君は智慧者だと思つてゐたら、案外お目出たいんだね。今日の時世は人間が目敏くなつて、實力のない空つぽの人間には巾を利かせなくなつたよ。暫く會はなかつた間に、君は大分時世おくれになつたやうだね……さう云へば、君の服裝もよつぽど古ぼけて見えるよ。

ある男　時世おくれ？……あなたも衣物で人を價踏する組だな。

順三　「時は金だ。」こんな無用なおしやべりをしても爲方がないが、……

ある男　ところで、今わたしのこの古ぼけた平常服のポケツトには、生憎持合せがないんですよ。だから、今直ぐと云つて、あなたの要求に應じる譯には行きませんがね。

順三　それは分つてるよ。

ある男　だけど、わたしがあなたに求めると同樣に、あなたもわたしに求めるところがあるんでせう。

順三　まあ、さうだ。君の智慧でお察しの通りだ。

ある男　これ式のことに智慧も何も入りやしない。この忙しい世の中に訪問し合つたり、こんな埃つぽい風の吹きまくつてるロハ臺で、いゝ年をした男が話をし合つてゐるのは、どうせ腹の中は分つてゐまさあ。お互ひに相手に何かを求めてるにちがひはありませんさ。

順三　なる程、君のお說の通りだらうね。

ある男　どうです？　わたしと一しよに關西の方へお出でになる譯には行きませんか。

順三　さうは行かないよ。

ある男　あの方を打やつて他所へいらつしやる譯には行かないと云ふんですね。

順三　まあ、さう云つてもいゝね。君のやうな無經驗者には分るまい。

ある男　しかし、惚れた女と別れられないくらゐなことは、珍らしい話ぢやありませんね。わたしでも聞き飽きてゐますよ。經驗もへつたくれも入つたもんぢやない。……ところで、あなたはあの方と幸福な日を送つてゐらつしやるんですか。

順三　ちつとも幸福ぢやないね。以前、君に煽てられて馬鹿をやつてた時分の方がよつぽど面白かつたよ。

ある男　（得意らしく）さうだらうと、わたしは一目見ると思ひましたよ。……ぢや、氣分を轉換するために、わたしに隨いていらしつちやどうです？……時代が變つて

も、わたしには、まだ子分もあるし、金の蔓を見つける能も有つてますよ。……まあわたしの仲間に入つて御覧なさい。

順三　ところが、僕は探偵小說の英雄にはなりたくなかつたのさ。

ある男　それは御尤もだ。わたしだつてこの年になつちや探偵小說の端役は御免ですがね。……しかし、あなたが通俗小說の人物を一役勤めて、お目度出たく收つてゐらつしやるのは可笑しいね。……どうせ兇狀持のくせに。

（この言葉は威嚇の響きを有つてゐる）

順三　兇狀持？（今までになく、反抗的元氣をあらはして）そんな大きな聲で下らないことを云つちやいけないよ。

ある男　へゝえ。（平穩な聲で）兇狀持と云つたのは、あなたの昔の言葉の受賣りなんですよ。人間はみんな兇狀持見たいなものだ、おれ達ばかりぢやないと、昔のあなたが仰有つたことを、わたしは名言だと思つて思出しただけです。

順三　君は僕にも強ひて昔のことを思出させようとするんだね。

ある男　古馴染のわたしに會ひたいと、たしかあなたは仰有つた筈だが。

順三　君の手でも借りなきや、どうにもならんと、ふつと思ひついたところだつたから。（ふと反省したやうに）しかし、さう思つたのは、僕の迷ひだつたかな。

ある男　（相手の面に鋭く目を注いで）わたしの手でも足でも、御遠慮なくおつかひ下さい。

順三　……まあ、考直して見よう。

ある男　さうですか。强ひてお役に立てゝ頂かうとは思つてゐません。

順三　君は何でもやれさうな男だから、ふつと詰らんことを思出した。

ある男　分つてますよ。

順三　獨合點をされちや困るよ。

（二人は、互ひにある事を想像しながら默つてゐる。）

ある男　あなたは、わたしに隨いて今夜旅へいらつしやれば、それですべてが解決するんですけれど。……旅費は二人分くらゐは、わたしが持つてる。決してあなたに御迷惑は掛けません。

順三　この頃の僕を連れて行つたつて何の足しにもならないだらう。

ある男　ところが妙なものですよ。……惡魔でも友人かいるといふ譯ですか。わたしも獨旅は少し心淋しくつてね。

順三　自分で子分も崇拜者もあると、今云つてたぢやない

か。何か心淋しい。……心淋しいのは今のおれのことだ。

ある男　だつて、あなたには、一ときも離れてゐられないやうな文化的婦人がおありになるぢやありませんか。

順三　（相手の揶揄に動じないで、しみ〲した口調で）僕が同棲者のためにどんなに齷齪してゐるか、さすが君でも見透せないだらうね。

ある男　ハ、ア。

順三　何がハ、アだ?

ある男　今までのおしやべりは、要するに無用なおしやべりだつたのですね。……あなたは、あの文化婦人と同棲して幸福でないと仰有つたのは、あの同棲者に不平があるんぢやないんですね。金のために齷齪していらつしやるのが、第一の苦勞になつてもゐないんですね。わたくしといふあなたとは切つても切れない人間か、あなたの影のやうに世の中をうろついてるためなんですね。わたしだけはあなたの過去を知つてる。わたしだけはあなたの心の底の底までも知つてる。そいつがあなたを不幸にしてるんだ。

（順三は、さして感動しないで默つてゐる。）

ある男　しかしね、高見さん。わたしは死にたくつても死ねない人間ですよ。人の首を捻ぢ切ることは出來ても、自分の首に縄を掛けることの出來ない人間ですよ。

順三　（冷然として）誰れだつてさうだよ。

ある男　だからあなたとわたしは、形と影とのやうになつて、この世に長生をするんですね。

順三　それで、僕の影を關西へ連れて行かうといふのかい。

ある男　わたしを信じてゐらつしやい。決してあなたの幸福のお邪魔はいたしませんよ。……どうしても邪魔になるのなら、あなたの力で、わたしの首を捻ぢ切るんだが、今のあなたには、さういふ力はなささうですね。ハ、、。（あたりを見て）風がます〱ひどくなつたから、近所に人通りはなくなりましたよ。埃まみれでこんなおしべりしてゐるのは、馬鹿ですね。

順三　お互ひに忙しんだ。

ある男　話の續きは歩きながらやりませう。

順三　さうだね。

（二人、一しよに立上る。）

順三　君の今云つたことは出鱈目だよ。

ある男　若しさうだつたら結構ですね。

順三　君の旅行前に賴みたいことがあつたのだが、おしやべりしてるうちに、云へなくなつちやつた。

ある男　出立前に、も一度お目にかゝりませう。それはあなたのためだ。

――幕――

三

その翌朝。

同じホテルの一室。（一）の部屋よりも狭くて粗末である。

寢臺は二つ並べられてゐる。その一つには、さく子が寢たまゝ目を開けてゐる。たよりは起きて、窓際に置かれた椅子に腰をおろしてゐる。

さく子　（いくらか身を起して妹の方を見て）たよちやんは昨夜よく眠れなかつたのね。夜つぴて寢床がガサ〳〵音がしてるのが、あたし氣になつてならなかつた。

たより　姉さんは憎らしいほどよく眠つてゐたわね。

さく子　三年も五年もの疲れが一度期に出たやうな氣持なんだもの。

たより　いゝ度胸ねえ。お家ぢや大騷ぎをしてるんでせうのに。

さく子　どうだか。……あたし、家のことなんか、すつかり忘れてゐたのよ。……あなたが傍にゐて呉れたからこそ、あたしも昨夜安心して眠れたんでせうね。あなたとあたしと、姉妹で同じ部屋に寢床を並べて寢ることがあらうとは、あたし今まで想像もしなかつた。たよちやんはさう思はない？

たより　（さして感じないらしく）それは、あたしのやうな兄妹中の嫌はれ者が、姉さんのやうな模範的婦人と同居するのは、不思議なことに違ひないんですけれど。

さく子　（自分ひとりの樂しい空想に耽つてゐるやうに）あたし、本郷の家の二階で、あなたと一しよに寢起きしてゐた幼ない時分のことを、昨夕夢に見てゐたのよ。

たより　そんな夢が面白くつて？

さく子　あの時のあなたは、あたし達の話すことをおとなしく聞いてゐたわね。

たより　さうでしたわね。

さく子　あなたは幼い時分のことなんか思出さないでせうね。

たより　今はそんなことを思出す場合ぢやないわ。

さく子　どうして？　あなたは鎌倉にゐたりこんなホテルに泊つたり、氣儘勝手なことをして、今の生活が面白過ぎるから、昔のことなんかはどうでもいゝやうに思はれるんでせう。

たより　さうでもないわ。

さく子　あたし、何年となく、毎日同じ顔ばかり見て、つく〴〵いやになつてよ。お婆さんにお爺さんに、あの小娘に。それから出戻りさんの細つこい顔を見てるとうんざりしてよ。

たより　……毎日見てる顔の方が安心でいゝぢやないの？

（その時、姉妹は顔を見合せる。）

さく子　あなたはどうかしてゐるのね。あなたの顔は、不斷のたよちやんの顔とは思はれないよ。鏡を見て御覽なさい。

たより　（姉の言葉を氣にしながら、わざと動じないで）村上が高見だつたりするんですもの。あたしの顔だつて變るのが當り前なのかも知れないわ。

さく子　名前なんか、人間の符牒だからどうだつていゝぢやないの。あの人が働き者で、お金をつくることが上手で、それでゐて、あなたを愛してゐるのなら、何も言分はないやうに、あたしには思はれるのだけれど。

たより　姉さんは人の事だと思つて、冷淡な口が利いてゐられるのね。

さく子　さう思つてるの？……大ちがひよ。……あたし、昨日までは、冷淡であつたかも知れなかつたけれど、昨夜あなたと一しよに寢てからは、さうでなくなつたのよ。今もあなたのことを親身で考へてるの。……だつて、あなたと姉妹連れで、違つた土地へ旅行でもしてるやうに思はれるんですもの。夢を見てゐるやうなの。何とも云へないいゝ夢を見てるやうなのよ。

（起上つて、妹と向合つて椅子に腰を掛ける。そして晴々した顔して懐つこさうに笑つたが、妹は顔を背向ける。）

さく子　どうしてさう御機嫌が悪いの？　たよちやんにも似合はない。

たより　姉さんは家出したことがそんなに面白いの？

さく子　あたしにはあなたの不機嫌な譯が分らないよ。

たより　あたしには、姉さんの元氣な譯が分らないわ。……少しの間あたしには構はないでゐて下さい。あたし、何だか、氣がくさくさしていけないんだから。

さく子　今朝はいつまでも一しよに寢てゐて、お互ひに昔の話をしようと、昨夜約束したぢやないの？

（たより、煩さゝうにして返事をしない。）

さく子　あなたはやはり、あの人と同じ部屋に寢てゐなきや安心してゐられないのね。……ぢや、行つてゐらつしやい。あちらの部屋へ。あたし、一人で正午時分まで眠直したいから。……そして、お午御飯を三人で仲よく食べませうよ。

たより　だつて、あたしは昨夕あんな荒つぽい口を利いたんですもの。あたしの方から訪ねてなんか行けないわ。

さく子　氣が弱いつたらないわね。家庭の破壞者だの、道德の破壞者だのと、お父さんに云はれたあなたも、案外な弱蟲なのね。……ぢや、あたしが代りに行つて、あの

人の様子を見て上げませうか。あちらでも夜も眠らないで、あなたのことを心配してるかも知れないわね。
たより　え、行つて頂戴。あたしが姉さんにお頼みしたとは云はないで。……
さく子　行くことは構はないけれど、あの人あたしを氣嫌ひしてるやうだから、打解けた話が出來るかどうか。
たより　いゝのよ〳〵。
さく子　あなたも現金ね。
（彼女は急いで寢卷を脱いで、妹に手傳はせて他所行に着替へる。）
たより　あたしだつて、時々は、本郷の家へでも、身内の家へでも行きたくなることがあるんですけど、此方から折れて出ちやおしまひだと思つて、勢一杯意地を張つてゐるのよ、……痩我慢ね。
さく子　痩我慢でもいゝぢやないの。あなただけはさうして痩我慢を張つてる方がいゝのよ。みんなが親や兄の差圖通りになつてゐるのは忌々しいぢやないの。たよちやん一人が度外れの氣儘をしてゐるのを見て、あたしいつも溜飮を下げてるんだわ。
たより　さう思つてくれる人は、身内のうちで姉さん一人ね。
（さく子は、間に合はせに衣服を着てしまふ。）

さく子　ぢや、行つて來るわ。……こんなことが一日の出事だつたら、人間は氣樂でいゝわね。
たより　あたしが姉さんにお頼みしたやうなことを云つちやいやよ。
さく子　分つてゐてよ。
（さく子、出て行く。）
（たより、姉を目送したあと、ふと立上つて姿見鏡の前へ寄つて、おづ〳〵自分の顏を見詰める。そして、驚いて顏を外らしては見直す。元の椅子に戻つてガッカリしてゐると、電話が鳴る。）
たより　（受話器を手にして）モシ〳〵。あなたどなた？……白川のお義兄さん？……えゝ、さうです。あたしが此方にゐることよく御存じね。……義姉さんが此處にゐらつしやる筈ですつて？　あたし存じませんわ。……だつて。……あなたが此方へ訪ねていらつしやるの？……さう。……今直ぐですつて？
（電話が切れる。「何のことだか分らない」と呟いて、元の座へ戻ると、さく子が入つて來る。）
たより　（狼狽して）姉さん、大變よ。今白川の義兄さんから電話が掛つて來たのよ。あなたが此處にゐると云つて、ちつとも驚いてなんかゐないんだから變よ。
さく子　（不機嫌に）あたしがちよつと部屋を空けた間に電

話が掛つたりして。運の悪いつたらない。
たより　あたしの方からは、姉さんが此處にゐるつてこと、決して云はなかつたの。でも、義兄さんの方で、頭から極めてかゝつてるんですもの。今直ぐに訪ねていらつしやるさうだから、あちらの部屋にでも隱れていらつしやい。あたし、姉さんは此方にゐないと云通してよ。
（ふと氣づいたやうに）あの部屋では、まだ眠つてるの？
さく子　ボーイさんに訊くと、あの人は狹つくに起きて外へ出て行つたんだつて。
たより　あたしの部屋へ聲を掛けもしないで。……ひどい人ね。
さく子　あたしがゐるから遠慮したんでせう。
たより　（不機嫌に）昨日、變な人が突然に訪ねて來たからいけなかつたの。あの變な人はあたし達の仲を割くために來たやうなものよ。
さく子　（笑つて）あなた達の仲は、風來坊の變な人の差出口くらゐで仲を割かれるほどに薄弱なのか知ら。……だつて、親兄弟の意見さへ何とも思はないで我を通してゐたたよちやんぢやなくつて？
たより　（不思議さうに姉を見て）姉さんは此處にぢつとしてゐてもいゝの？
さく子　えゝ大丈夫よ。
たより　どうして？
さく子　あたしのことには構はないでゐらつしやい。……あなたの同棲者は、あなたと生活を樂むためのお金集めに、朝寢もしないで驅廻つてるのね。安心して樂みにして待つといでな。
たより　あたしは姉さんほどの度胸はないわね。
（この時、ノックが聞える。二人は聲をかけないでゐるのに、來訪者はソッと戸を少し開けて、顏を半分ほど出す。それは白川洗吉である。妹は不安な目付をしたが、姉は平氣でゐる。
（洗吉は、たよりの顏を見つけると微笑してツカ〳〵と入つて來る。）
さく子　（不機嫌に）なせこんなに早くいらしつたの？
たより　この近處で電話をお掛けになつたの？
さく子　あたし、飽きるほど眠つて、それから、久振りでたよちやんと、昔の話でもして氣保養をしようと思つてゐたのに。
洗吉　しかし、正午までには此處へ來る約束をしたのぢやないか。
さく子　あたし達、まだ朝の御飯も頂かないのよ。お正午まではまだよつぽどの時間があるんでせう。その時計を見せて御覽なさい。

（夫妻互ひに相近づく。さく子、夫の腕時計を見る。）

さく子　まだ十時前ぢやないの？

洸吉　まあ、いゝさ。（空いてゐる椅子に腰をおろして）おれも、今日は日曜だから、ゆつくり寢てゐようと思つたのだがね。どうも傍の者が騷ぐので、落着いてなんかゐられなかつた。それで、言譯をこしらへて、早く家を飛出したのだが、當てのないのにぶらついちやゐられないよ。それに、今日は外が寒くつていけない。まだ少し早過ぎると思つて、このホテルの近所を何度もぐる／＼廻つてゐたのだが、なか／＼時が經たないんでね。……それで、電話を掛けてこちらの樣子を訊ねて見たのさ。

（たよりはさつきから呆氣に取られて、二人の樣子を見比べてゐたが、この時二人の話のなかへ割込む。）

たより　義兄さんと姉さんとは、今朝こゝで會ふ約束をしてゐたのね。……あたし、何だか、誑されたやうな氣がしてよ。あんまり變なのですもの。

さく子　（妹に答へるよりも獨言のやうに）あたしも何かに憑かれたやうだつたよ。

たより　お二人で約束して、一日こんな所へいらしつたことが、そんなに變つた生活になるの？（冷笑して）安價な生活革新ね。

さく子　あなたゞつてさうよ。

たより　姉さんが、家出の保證人があると云つたのは、義兄さんのことだつたのね。それぢや大丈夫な譯ね。あまりに平凡過ぎるわ。

さく子　御自分のやうに非凡ぢやないと思つてるの？（と妹に向つて云つたあと、夫に非難の目を向けて）あなたがあんまり早くいらつしやるからいけないの。

たより　あたし、本氣で姉さんのために心配してゐたのに。姉さんに一杯喰はされたのを知らないで、馬鹿を見ちやつた。（腹立たしさうに云ふ）

さく子　一杯喰はしたなんて、そんな汚い口を利くもんぢやないわ。あたしは一日でも、ごた／＼した家の中のことを忘れて、あなたと二人つきりで本當の姉妹のやうに、のんびり日を暮したいと思つてゐたの。それは、嘘のないあたしの本心なのよ。

たより　あたし、のんびりしてゐられるどころぢやないわ。昨日姉さんに來られてからは、いやなことばつかり湧いて來るぢやないの。いやになつちまふ。（八つ當りのやうに云ふ）

さく子　それをあたしのせゐだとお云ひなの、呆れつちまふわ。溫泉へでも行かうと思つてゐたあたしに、此處に隱れてゐろと勸めたのは、誰れだつたか知ら。あなたぢやなくつて？

洗吉　（間の悪さうに）まあい丶ぢやないか。おれは様子だけ見たらい丶んだよ。さう長くはお邪魔をしないつもりだから、あとで二人で好きなことして遊ぶとい丶。

たより　（ツンとして）御遠慮には及びませんわ。……あたしの方でお邪魔になるのなら、あちらの部屋へ行つて丶もよろしいのよ。

さく子　いやみなことをお云ひでない。あたしと義兄さんと、二人きりでこの部屋に殘されたつて、話すことはなんにもありやしないよ。……二人で話すくらゐなら、わざわざ此處まで來て泊めて貰つたりなんかするものかね。

洗吉　昨夕(ゆうべ)は姉妹(きやうだい)で寢臺を並べて仲よく眠つたのだね。

さく子　さうですとも。

洗吉　よく眠れたかい。

さく子　眠れましたとも。（妹に向つて）あたしはたよちやんの側で、この柔かい寢臺に寢てると、今までは茨(いばら)の床に寢てゐたのぢやないかと思はれてよ。だから、たよちやんは幸福だと思はれてよ。

洗吉　成程寢心地がよささうだね。（寢臺にさはつて見て）おれの家でも奮發して、かういふものを買ふことにするかな。

さく子　寢臺の一つや二つで誤魔化さうたつて駄目よ。茨の床といふのはそんな外形のことぢやないの。精神主義のあなたは分つてらつしやるのに。白ばくれてるのね。

洗吉　妹が側にゐると思つて、いやに氣が強くなつたね。……たよりさんも、さく子にいろんな知惠をつけちやいけませんよ。（照れかくしに云ふ）

たより　まあ、義兄(にい)さんは何を仰有るの？　あたしは兄妹(きやうだい)中で知惠の足りないお馬鹿さんだと、みんなに云はれてるんぢやありませんか。姉さんに入れ知惠するやうな知惠は有つてませんわ。

洗吉　いや／＼。たよりさんは、お父さんが手におへないと見切つたほどあつて、僕は決してあなたに下手な意見をしようと思はないがね。しかし、さく子を感化しないやうにして下さい。

さく子　あたしが妹に感化されてると思つてゐらつしやるの？　あたしもさういふ女と思はれてゐるんですかねえ。

洗吉　いや、さういふ譯ぢやないがね。……

さく子　そりや二日も三日もたよちやんと一しよに暮したら、あたしも妹に感化されるかも知れないわ。たよちやん達の自由な生活に比べると、あたしの不斷の生活なんかは、奴隷の生活なんですもの。まるで女王と召使との相違なのよ。……だから、四五日一しよに暮してたら、あたしも本當に、あんな家庭から永久に出奔する氣にな

るかも知れないの。

洗吉　（澁面をつくつて）はたから見たら、何でもよく見えるものなのさ。

さく子　はたから見るよりも、内輪に入つて見てゐると、もつとよく見えるのよ。あなたも、三日でもたよちやん達のお仲間になつて暮して御覧なさい。

たより　あたし、頭がピン／＼していけないから、あちらの部屋へ行つて一ねむり眠つて來ますわ。義兄さんは御ゆつくり遊んでいらつしやい。

（逃げるやうに出て行く。）

洗吉　あの女には金があるのかい。こんな贅澤な眞似をして。

さく子　あろものですか。……でも、村上といふ男は、あの女の御機嫌を取るために、どこからかお金を工面して來るらしいのよ。えらいわね。

洗吉　危い綱渡りをやつてるんだね。（嘲笑するやうに云つて）われ／＼はそんな男にかまつちやゐられないよ。……しかし、お前は實家へ遊びに行つてることにしといたから、安心して一日二日、好きなやうに遊んでゐるといいよ。

さく子　そんなことはどうでもいゝんです。……あたしは妹を墮落から救ふために此處へ來たのよ。

洗吉　（苦笑して）お前の目的はいろ／＼に變るんだね。……そりや、妹を救ふのもいゝことだらうが、お前の力でそんな六ケしいことが出來るだらうか。あんな氣隨氣儘な生活をしてゐた人間が、まともな人間になれるものだらうか。おれには信じられないね。

さく子　あなたが打壞しさへなさらなきや、乾度うまく行くのよ。本郷のお父さんは、村上があたり前の職業を守つて身を立てるやうに決心をしたなら、二人を正式に結婚させてもいゝと妥協して、あたしに任せてゐるんですから。

洗吉　（嚴かに）それはいけないよ。あんな男がおれ達の身内の一人になつたら、おれ達の信用にも關はるぢやないか。あの男は內しよで何をしてるか分らんと云ふのぢやないか。……嘘だらうが、泥棒をしてるといふ疑ひさへあるんだから。（これは、あたりを顧みて低い聲で云ふ）

さく子　昨日こゝへ來てから樣子を見てると、そんな變な噂が、あるひは本當ぢやないかと、あたしにも思はれないことはないんですけれど。……

洗吉　（思はず高い聲を出して）假りにも泥棒の疑ひのある男と緣組みがさせられるものか。お前はどうかしてゐる。お前もそんな男に接近してかゝり合ひをつけられちやいけないぢやないか。

さく子　でも、見るから柔しさうな男よ。それに、たよりの前ではおとなしくつて、御機嫌ばかり取つてるのよ。あなたのやうに、夫の體面といふことにばかり拘つてる人ぢやないの。

洗吉　なに、上べの柔しいのは當てにはならないよ。柔しさうな顔してる奴が、案外腹の底は圖太いのかも知れないよ。

さく子　まあ、一度會つて御覽なさい。今日の正午に一しよに食事でもして御覽なさるといゝ。

洗吉　以つての外だ。……お前もさういふ男と食事なんかしちやいけないね。おれと一しよに歸ることにしよう。何處か外で飯を食べて、活動でも見たければ、おれもお突合ひをしてもいゝよ。

さく子　あたしも、今度はよく／＼の思ひで家を出たのに、食堂で丼物を食べて活動寫眞を見たくらゐで歸つて行つちや、あんまり情なさ過ぎるぢやありませんか。

洗吉　ぢや、お前は泥棒と食事を一しよにしたいのか。おれは御免だよ。

さく子　ぢや、あなただけ先へお歸りになるといゝ。

洗吉　お前は妹を陷落から救ひ上げるよりも、自分で妹にかぶれたのだね。

（そこへ、順三が、たよりへの土産物の小箱を抱へて案内も乞はないで、ノロリと入つて來る。洗吉を見て間の惡い顔して會釋をする。洗吉も間の惡い顔して挨拶する。さく子だけニッコリする。）

さく子　お歸んなさい、たよりは少し氣分が惡いと云つて、あちらのお部屋で休んでゐますのよ。そつと寢かしといた方がよ御座んすわ。

順三　さうですか。……わたくしは此處で休息させて頂いても、お差支へは御座いませんか。

さく子　どうぞ。

洗吉　僕はもう直きにお暇しますよ。

さく子　あたしども、一度あなたの腹藏のないお話を承りたいと思つてゐましたのですが。

順三　わたくしは、一つとしてあなたのお耳に入れるやうな興味のある話は持合せて居りません。

さく子　でも、あなたのやうな自由な生活をしてゐらつしやる方のお話は、わたしどものやうな平凡な人間は、承るだけでも世間が廣くなるやうに思はれますわ。

（洗吉はさく子に目くばせして、早く此處を出て行かうとする。しかし、さく子は澄してゐる。）

順三　どういたしまして。わたくしは當てのないのに、毎日齷齪して居ります。（彼れは、洗吉などにしげ／＼顔を見られるのを厭ふやうな態度を取る）

（話が止切れる。）

さく子　今朝は大層お早かつたぢや御座いませんか。

順三　朝つぱらから無駄足ばかり踏んで來ました。今日は戸外はひどい風でひどい埃ですよ。

洗吉　さう早く天氣が變つたんですかね。わたしが此處へ來る前には、ホカ〳〵と溫かい、春らしいいゝ天氣でしたよ。

順三　いや、目を開けてられないほどの恐ろしい埃でしたよ。

さく子　さう云へば、あなたは昨日お目にかゝつた時とは、違つた方のやうに疲れていらつしやる。（洗吉の方へ目を轉じて）あなたゞつて、顏からお召物から埃だらけよ。そこで顏を洗つていらつしやるといゝ。

洗吉　おれは氣がつかなかつたが、さうかなあ。（自分の顏を撫でて見て）まあ、いゝや。どうせ歸りにはまた汚れるのだ。

さく子　無性を云はないで、そこに浴室があるから入つていらつしやい。そして、四人揃つて御飯を頂きませうよ。……あたし、お風呂の仕度をして上げますわ。

（さく子は、部屋に附屬してゐる浴室へ入る。）

（洗吉は、順三と顏を合はすのを不快に感じて、立上つて、部屋の中を、何を見るともなく見てゐる。順三は、洗吉の態度を苦笑しながら、ポケットから葉卷を摑み出して。）

順三　どうです？　一本お吸ひになりませんか。

洗吉　有難う。わたしは、煙草はやらないんです。

順三　さうでしたか。

（自分でその葉卷の口を切つて、火を點けたが、ふと、持つて來た小箱を引寄せて、蓋を開ける。眞珠の首飾りがあらはれる。）

順三　こんなものを買つて來ました。

洗吉　何です？　大變立派なものですね。……わたしにはかういふ者の價値はちつとも分りませんよ。

（順三が差出すのを、洗吉は手に取つて見ようともしない。）

順三　安ものですよ。

（箱から出して、相手に見せつけるやうに、ぶら下げてゐるところへ、さく子、浴室から現はれる。）

さく子　眞珠の首飾り？　それをたよちやんにおやりになるの？

（彼女は近づいて見て、手に取つて見る。洗吉は不快な顏しながら、彼女の目の動くあとを彼れも追つてゐる。）

さく子　（ふと顏を上げて夫に向つて）あなたはお湯へお入

んなさい。そこへ衣服を脱いで。……さあ早く（と、叱るやうに急き立てる）

（洗吉は浴室へ入る。）

さく子　たよちやん、喜びますよ。

順三　ハヽヽ。まがひ物なんですよ。

さく子　そんなことないでせう。

順三　それはあなたにお預けしといて、わたしもあちらで顔を洗つて來ませう。

（相手にかまはないで出て行く。）

（さく子、その首飾りを自分の首に掛けて氣取つて見る。）

（洗吉、浴室から首だけ出して。）

洗吉　オイ、そんなものを見て現を拔かしちや駄目だぜ。眞珠の出所はどこだか分つたもんぢやない。

さく子　あなたも男なら、このくらゐな首飾りの一つや二つはあたしに買つて呉れたつていゝのよ。……よく見て御覽なさい。こんな飾りを身體につけてると、人間に位がつくぢやないの。

洗吉　（小聲で）馬鹿！（と云つて）早く返せ〳〵。（と、浴室から乗出して、手を振る）

さく子　羨ましいわね。腕のある御亭主を持つ女は仕合せだわ。

（洗吉、いま〳〵しさうに浴室の戸を締める。）

四

（一）と同じ部屋。

ある男、頭から夜具を被つて寢臺に寢てゐる。

順三はさうとは氣づかないで、椅子に腰を掛けてそちらを見てゐる。

そこへ、さく子が、首飾りを收めた箱をもつて入つて來る。

さく子　たよちやんはまだ眠つてゐますの？

順三　えゝ。よく眠つてるやうです。眠りたいだけ寢かして置きませう。（低い聲で云ふ）

さく子　昨夕はあなたのことが氣がゝりで眠づらかつたやうでしたよ。……でも、何といふ寢樣だらう。

（彼女はそつと枕許に近づいたが、ふと驚いた顔して、順三の傍へ來る。）

さく子　こゝは部屋が違ふんぢや御座いませんの？　寢てる人、たよちやんぢやありませんよ。

順三　部屋は此處です。

（枕許に近づいて、そつと覗いたあと、ふと勢ひよく毛布をめくる。）

（ある男の熟睡した顔現はれる。）

順三　こりや驚いた。……オイ、起きないか。

（揺起されたので、ある男、目を開ける。）

順三　君はどうしたのだ？

ある男　もつと寢かしといて呉れゝばいゝのに。

（目をこすり／＼起上る。）

順三　君は昨夕、夜汽車で立つた筈ぢやあなかつたのか。いつの間にこんなところへ潜り込んだのだ？

ある男　あなたのことが氣がゝりでしたから、一日出立を見合せました。

順三　嘘を吐け。……此處にゐた僕の連れを何處へやつたのだ？

ある男　へゝゝ。さう興奮なさらなくつてもよろしい。今に歸つていらつしやいますよ。昨日頂いたあなたの委任狀を利用して、あの方にあなたを呼びに行つて頂きました。……そのお留守にこの寢臺を拜借して一休みしようと思つて。……わたしもひどく疲れてゐますので。

順三　僕を呼びに？　僕の行先は分つてもゐないだらうに。

ある男　それは、無論出鱈目でさあ。

順三　爲樣のない奴だなあ。（さく子に向つて）この男は、昔わたしの家の玄關番をしてゐた男で、幼い時分から、この男はわたしに惡知惠をつけてならなかつたのです。

（ある男、不思議さうに順三を見たが、合點したらしく。）

ある男　ハヽヽ。さう安つぽくあつかはれちや、實も蓋もありませんね。

順三　（さく子に向つて）此奴は出鱈目を云つて爲樣がないんです。しかし、大した惡氣のある男ぢやありません。（ある男に向つて）昨日から君の惡戲のために詰らない騷ぎをやらかしたよ。

さく子　たよちやんはあんまりお調子に乘り過ぎてたから、たまにはそんな目に會つてもよろしいのよ。（小箱を順三に渡して）これをお返ししますわ。こんな見事な贈り物を見たら、あの女がどんなに喜ぶでせう。

ある男　それは何んです？（順三の手から小箱を引たくつて、開けて見て）ホウ、首飾りか。（と云つて、眠い目をこすつて、よく見て、ニヤ／＼笑ふ）

順三　どうだ？　いゝだらう。

ある男　すばらしい物ですね。

さく子　（首飾りの方へ目を注いだあと）わたし、白川を呼んで來ますわ。たよちやんが歸つて來たら、四人で一しよに午餐を食べませうよ。

順三　さういふことに話が極まると結構ですね。

（さく子、出て行く。）

ある男　あの方はどなたです？
順三　それよりも、こゝにゐた女を君はどこへやつた？
ある男　大丈夫です。
順三　君の謂ふ「子分」の手に渡しやしまいな。昨日、公園で僕の云つたことを誤解すりやすまいな。
ある男　あなたに頼まれりや、女一匹、どうにでもなると思つたが、あなたが未練がありさうだから、殺生はよした。しかし、今の女にわたしのことをひどく安つぽく吹聴しましたね。
順三　君でも、安つぽく吹聴されちやいやなんだね。虚榮心があるんだね。
ある男　それよりも今の女は何ものだか知らないが、夜店で賣つてる子供の玩具のやうなこんな首飾りを有難がつて見てるんだから滑稽だ。
順三　あの女よりも君の目の方がどうかしてるんだ。
ある男　そんな物であの同棲者を喜ばせようと思つてるんですか。
順三　さうだよ。……この隣室には模範的夫婦が來てゐるんだがね。おれ達二人と一しよに食事をしようと云つてゐる。君も加はるといゝよ。五人で午餐會を開かうよ。
ある男　そして、その席で、あなたの同棲者にその首飾りを掛けさせようと云ふのですか。
順三　それよりも、君は僕の連れの女をどこへやつたのだ？

（そこへ、たよりは今美容院から歸つて來たやうに美しく髪を結つて入つて來る。）

――幕――

解　說

本集に收められた二作家は何れも明治年代から昭和の今日まで引續き文壇に巨然たる存在を示して居る偉大なる文豪であつて、且つその傾向に於ては著しい對照をなして居る。從つてこれが解說をなすにあたつても兩々相比較して說く方が興味もあり、理解し易いかとも思ふが、同時に讀者の頭を混亂に陷らしむる危險があるやうにも思はれるので、從來の例に從つて二作家それぞれに說明することにするから、讀者は進んで兩者の比較を試みるやうにされたいと思ふ。

武者小路實篤篇解說

武者小路實篤氏は明治十八年五月十二日、東京市麴町區元園町一ノ三八に、その姓に依つても想像される通り、公卿華族の家に生れた。父が三十五歲、母が三十三歲の時に出來た第八番目の末子である。然し氏の兄姉は五人まで既に亡くなつて居て、當時七つの姉と四つの兄とだけが生きて居たといふことである。

氏は貴族の家庭の習慣に從つて、明治二十五年學習院初等科に入學せしめられた。成績は中の上であつたが、その兄が同じ學校で常に特別優等賞を得て居たために、母は氏を怠け者として心配の種にして居た。何んでも臆病で泣蟲な生徒だつたといふことである。續いて中等科高等科と同じ學校の過程を進んで行つたが、學課のうちでは作文、體操、唱歌、圖畫を好まなかつた。身體はよわく、競走などの時にはいつも最後から二番目位だつたが、なかなか癇癪持だつたといへば、およそどんな少年であつたかゞ想像がつくであらう。

殘つた兄弟の少い氏はその十五歲の時に、唯一人の姉を失つた。かけがへのない異性の同胞として深く愛して居た姉を失つたことは氏には大きな痛手であつた。それと關係があるわけではないが、氏は此年あたりから既に近視眼になて居つた。

明治三十三年、氏は十六歲にして初戀の經驗をもつた。對象はお貞さんといふ十三歲の少女であつたが、氏がいまだ戀を打ち開けないうちに、お貞さんは故鄕に歸り、氏の初戀は失戀に了つた。此事實は氏の生涯にいろいろな影響を與へて居るやうに思はれる。氏自らも「此失戀がなかつたら文學をやらなかつたかも知れない」と言つて居る程で

ある。事實そのまゝではないであらうが、その頃の氏の氣持は、少年の日の夢の色濃い戯曲「母親の心配」のうちに描き出されて居る。

氏の文學的傾向は此初戀時代から早く現はれて居た。十七歳の氏は、文章修業の必要を痛感して毎日その稽古を勵み、傍ら膽力の養成に資するつもりで禪學や王陽明などに眼を通したりした。聖書やトルストイの書物を讀み始めたのも此頃からであつて、これは叔父勘解由小路資承氏の影響に依るものであつた。かくして氏が所謂人道主義の闘士として旗あげする準備は、氏自身も知らぬうちに徐々になされつゝあつたのである。

明治三十九年學習院を卒業すると同時に東京帝國大學文學科社會學科に入學したが、此時氏は、志賀直哉、正親町公和、木下利玄の諸氏と語り合つて、始めて文學をもつてその生涯の仕事とすることを決心したのであつた。

明治大正の文學史上に消すことの出來ない偉大な功績を殘し、幾多有數な作家の搖籃となつた雜誌「白樺」は、武者小路氏の文學的生涯と離すべからざるものであるが、氏が最初に此雜誌發行の議をはかつたのも前記の四氏とであつた。當時の回想を氏は次のやうに書いて居る。

「白樺を本當に出したのは明治四十三年だ。しかしその三年前に、正親町公和、志賀直哉、木下利玄、及び僕の四人で雜誌を出さうとくわだてた。いよ／＼と云ふ處で出すのがこはくなつてやめたが、一時は隨分乘氣で、口繪にする畫を寫眞にとらしたり、いろ／＼のことを調べたり、計算したりした。そして雜誌の名をきめるのには隨分苦しんだ。始め正親町の二階に四人があつまつて考へたが、駄目。志賀の二階で考へて、もう考へあぐんだ結果、色をとりあはせて見てとう／＼出來た名が、白樺だつた。白樺の名を得た時、皆は白樺といふ樹を愛してゐたのであつた。しかし考へだす時は、色の方から考へた。」

此雜誌白樺に武者小路氏は全力を擧げて働き、常に白樺一派の總帥と目されて居た。從て氏の文學的活動は此雜誌の誕生と共に始まるといつていゝのであるが、その以前氏には二つの作がある。「荒野」と「芳子」とである。「芳子」は氏の兄の子の死の前後十ヶ月程を題材としたものであるが、氏は自ら此作品を處女作と呼んで居る。氏が二十三歳の作である。

大學を半途で退學して、白樺を發行し始めると共に氏はその健筆を縱横に振つた。小説に脚本に詩に隨筆に、毎年數篇若くは十數篇の作品が矢繼早に發表された。時に文壇は自然主義全盛の有様であつたが、氏は多くの同人と共に人道主義の大旆を高く掲げて勇敢に闘つた。志賀直哉、小泉鐵、長與善郎、里見弴、有島生馬、柳宗悦、千家元麿等

々——から並べて見たゞけでも如何に白樺同人が多士濟々であつたかゞ解るではないか。然かも何れも二十代の銳氣潑剌たる青年ばかりであつた。無視にもめげず、攻擊にも閉口たれず、當るを幸ひなぎ立てゝるばかりの勢であつた。多くの青年は忽ち白樺に、人道主義に、武者小路實篤氏に牽きつけられて行つた。熱情そのもののやうな氏の行きかたは特に青年に影響を與へる力が强かつたのである。

大正四年、戯曲「その妹」を書いた氏は、既に文壇の高いところに輝く大きな星の一つであつた。そして自然に白樺に執筆するよりも、一般の雜誌に執筆する機會の方が多くなつて來てゐた。氏は一時文壇全體に人道主義的轉向を與へた程に烈しい力で文壇を征服したのであつた。筆者の記憶するところでは、谷崎潤一郎氏、夏目漱石氏、それに此武者小路實篤氏の進出ぶりほど颯爽として華々しい文壇進出はほかになかつたやうである。

その後も引續き旺盛な創作力を示し、童話、童話劇まで執筆して常にその理想を語ることを怠らなかつたが、遂ひには文學上の仕事だけでば滿足することが出來ず、共に働き共に生活する一種共產的なユートーピアの實現を志し、同志と九州日向に下つて、大正七年有名な「新しき村」の建設に着手した。爾來氏は時々上京することはあつても主としてその土地にあつて「村」の經營をしつゝ創作の筆を執つて居たが、大正十二年關東大震災の起るに及んで出京した。此年春から藝術社より、武者小路實篤全集が出版された。續いて大正十四年家兄がルーマニア公使として赴任されたため、病身な母から遠く離れて居たくないといふので一時奈良に居を定めたが、目下は東京に住んで居られる。

最近の作品としては大正十四年の「愛慾」、その翌年の「ある畫室の主」とは更めて大いに文壇の問題となり、氏の底知れぬ創作力の深さは一世を驚倒せしめたのであつた。

氏の作品に接する讀者は、氏の風丰の如何を知りたいといふ興味を持つであらう。そして作者の風丰の一端を知ることは、作品の理解に必ずしも役立つところないものだとは思へない。幸ひ此處に氏の風丰を巧みに描き出した近松秋江氏の「武者小路氏の下駄と帽子」といふ一文を得たから、なるべく簡單に此處に拔萃して見よう。これは震災後の演伎座開場式に出かける秋江氏が偶然未知の武者小路氏と省線電車に乘り合せた印象記である。

「……例の脊のひよろ高い田舍の老爺さんであつたが、見るとその田舍漢は、婦人の他に男子の同行者が二三人あるらしく、……(中略)……ふと氣がつくと彼の田舍老爺に對して彼等は、やゝ謙讓の態度をとつてゐることが自然に分つた。さう思ひながら見ると、吊り手にぶら下つてゐるので、トンビの袖の下から表はれてゐるその田舍老爺の着物

がなか／＼上等な澁い好みの蚊がすりか何かの大島紬である ことが分つた。……(中略)……それでぢつと老爺の顔を遠くから見てゐると、彼は玉の大きい、銀色の縁の眼鏡をかけ、にがい、くすんだ顏色をしてゐる。私はその時全く直覺的にその老爺が武者小路實篤氏ではないかと思つた。……(中略)……武者小路氏と見える人は、それに對して、たゞ「やあ」といつて、無雜作に帽子を頭の上で一寸持ち上げて、すぐ又阿彌陀に載せた。その手附が如何にも無雜作である。そしてその帽子は古ぼけた屑屋の着て居るやうな帽子の縁を無恰好に下へたらしてゐるので、單にそれだけでも彼をして一見田舍漢の如く印象せしめるのであるが、鼠色した帽子のリボンの邊は汗か雨に色が滲んで穢く汚れて居る。……(中略)……最後に氣付いたのはその履物である。これが如何にも素朴を極めたものであつた。……………(中略)……そこらで八十錢か一圓の安物である。……(中略)……武者小路氏の帽子を見、下駄を見ると、恰も氏の文章そのまゝを見るやうである。が氏の素朴な風格に何處か常人に異る物の自然に表はれてゐるところを見て、氏の裝飾乏しい文章の風格にも、ある重味があると思つた。……(後略)」

武者小路實篤氏年齢四十四歳、これからの氏にこそ吾等は更らに大きな期待をかけることが出來るのではあるまいか。

武者小路氏は極めて自由なる形式を驅使する文學者である。小說家であり、戲曲家であり、詩人であり、隨筆家である。更らに考へて見れば、氏を文學者、作家といふ範疇だけに押し込むのさへ當らないかと思はれる。一種の宗敎家であり、社會改良家でさへあるかも知れない。然しその成して來た仕事の分量からいへばやはりまづ文學者であるといふのが當るであらう。そして同じ筆法で範圍を狹めてゆけば、小說家であり詩人であるよりも戲曲家であるといふことになると思ふ。作品數の全體のうちでは特に戲曲の數が多いし、氏自身も曾て、「自分は自分で小說家だとは思つてゐない。小說をかく時自分は自由を得られない。自分はさう云つて之からも小說を書く時があると思ふが。小說でなければ書けない材料にぶつかる時。しかし自分はもつと自由な、自己表現をする道として脚本、或は會話を選ぶべき人間だと思つてゐる。小說家と思はれるのは少し恐ろしい。」(白樺大正四年一月號)といふ感想を洩して居られるのだから、文藝家としての氏の本質を戲曲家と見ることに誤りはないであらう。又事實、氏の作品中特に有名なものは「二つの心」「その妹」「愛慾」等何れも戲曲であつた。

戲曲といふものは、元來舞臺上のいろ／＼な約束に制限されるので頗る窮屈な文學形式であるが、武者小路氏にか

かるとこれが極めて自由に取扱はれて居る。だが、筆者は此處で氏の作風に言及するまへに氏の思想的傾向の大體を說明して置く方が便利だと思ふ。

人間、自然、運命、人類、神、天、生命、生かす、耶蘇、釋迦、孔子――これらは武者小路氏の作品及感想文等のうちからその最も繰返して用ひられる言葉を拾ひ出して見たものである。讀者は之等の言葉が持つて居る汎神論的宗教の色彩と、一種英雄崇拜的な匂とに氣がつくであらう。これが氏の思想の基調をなすところのものである。

氏はその文學的生涯の發足に際してレオ・トルストイの影響を多分に受けた。そして所謂人道主義の鬪士として起つたといふことは小傳を述べる時にも書いて置いた。氏の人道主義とは何ぞ。狹くは個人としての自己を陶冶し、廣くは相協力して人類全體を鍛錬して、よりよき人生を生むために努力することである。そして氏は人生はよりよくなり、人類は進歩し發達するといふ假說に絕對の信念を有して居る。氏にとつては此ことは假說ではなくて確固たる事實である。卽ち氏は正面から人生を肯定してかゝつて居る。氏は現在「大調和」といふ雜誌を經營して居るが、たゞに人生ばかりでなく宇宙は大いなる調和を志して居るといふのは氏に取つては理窟をぬきにした強い實感なのである。此實感の源が、自然であり、運命であり、人類であり神であり、天である。神の意志と云ひ天の意志といふも、氏にとつては同一のものであり、これに叶はざるものは何時かは滅びなければならないものである。その滅びる日に對する信念、その信念から生れる熱情、それが氏の文學に生命を與へて居る。

かくの如く總てを肯定して居るが故に氏の宇宙觀、人生觀は當然樂天的である。戰爭がある、虐殺が行はれる、嫌ふべきことである。然しこれも大なる調和に到る過程であつて止むを得ない。生れるもよし、死ぬもよし、たゞ生きて居るうちは最善の努力をしなければならぬ。「わしも知らない」「桃源にて」等の作品にはさういふ思想が分りよく表はされて居る。「誰でも絕えず努力する者は我等が救ふことが出來る」(ファウスト第二部、天使の言葉)といふかの偉大なる樂天詩人ゲーテの思想と、「桃源」に於て語られて居る思想とには一脈相通ずるものがないとはいへない。

武者小路氏の作品は明るいといはれて居る。此暗い人生に光明を齎すものだといはれる。此強い樂天的な思想、人類の向上に對する宗敎的信仰が、その作品の核心をなす以上、それが明るいのはいふまでもない。氏の作品を讀むものは、朗らかな氣持で樂しんで讀むことが出來る。作品の中では常に好意と好意とがぶつかりあつて華やかな火花を散らして居る。「愛慾」のやうな悲劇を讀んでさへ、讀者の

心は暗くなるとはいへない。いつも未來に對する希望の輝きが行手を照らして居る。「わしも知らない」に於てさへ、最後の幕では、林の間に昨日の嵐も知らぬやうな和やかな陽が長閑にゆらめいて居るのである。

讀者は、さきに上げた自然、人類等の言葉が宗教的であると同時に著しく抽象的であることに氣づいたであらう。氏の說くところはそれらの言葉によつて代表されるやうに抽象的である。現世の具體的な生活に就いて觀察し思索してこれが解決を求めようとする傾向はあまりない。氏の自然、神、人間等の言葉によつて表はされた思想を知り、同時にその非現世的、非實際的である點を知るには「生命の王」が適當な作品である。その中では馘首されて來た印刷職工が如何なる管理方法に依つて工場の經營をして利益を收めるやうになつたのであるかといふ點はまるで問題にされて居ない。氏に取つてはさういふことはまるで問題にならないのである。「愛慾」が發表された時は眞先に立つて世界的傑作といふ最大の讃辭を惜まなかつた正宗白鳥氏が、此點に就いて次のやうに言つて居る。

「武者小路實篤氏の不器用には淸新味がある。生れたまゝで、傳統的文壇の垢に汚れないところがある。「藤房さん……」「正成さん……」と話を交してゐるところなど、氏ならばこそ、馬鹿々々しい思ひを讀者にさせないで讀み續けさせるのである。武者小路の世界へ讀者を惹込む力を持つて居るのである。しかし、氏を人生へ明るみを持來す人のやうに、多くの評家が云つて、氏自身もさう思つてゐるらしい口吻を屢々洩らすのは、私には合點が行かない。少年の修身讀本で人生に處する正しい道を知つた人は、武者小路氏によつて明るみを得るがいゝ。人類發生以來の重荷が氏の肩の上には分擔されてゐないやうである。「桃源にて」は、私は地震前に讀んで、これが武者小路式明るみを持つたいゝものであらうかと思つたが、甚だ單純なもので、現世の嵐の前には、こんな明りは一たまりもなく消えさうに思はれた。氏は生れたまゝの人らしいのに、傳統的英雄崇拜心はなかなか持つて居て、今日のなにがしは侮辱したくなる、今日の誰れ彼れは馬鹿である、釋迦はえらい耶蘇はえらい、トルストイには頭が下がる、楠正成はえらいなどと、小學生が先生に敎はつた通りに云つてゐるやうな調子で、頻りに單純な英雄崇拜をやつて居る。古を尊び今を卑んで居る。」（中央公論大正十五年一月號）

此不滿は武者小路氏の描く世界にあつては萬事があまりに都合よく行きすぎて、此現實の世界とはあまりにも違ひすぎるといふ事實から來るものではなからうか。武者小路氏の信仰を信仰として居る人でなければ、現世から氏の藝術的世界への飛躍に尾いて行けないからである。然し、そ

れにもかゝはらず、氏の驚くべき強い信仰と、燃えあがる熱情とは、人をその作品に惹きつけずには置かない力を持つて居ることも爭はれない事實である。

氏に英雄崇拜的傾向のあることは正宗氏も指摘して居るが、また氏は自身をも英雄として居るらしい。氏は恐ろしく自信の強い人である。「俺は……」といふ言葉、「今に見ろ」といふ言葉、それが此間の消息をよく語つて居ると思ふ。そして此心持が當然氏に英雄崇拜の感情を起こさせるのであらう。此意味に於て氏は精神上の貴族主義者である。作品に扱はれた英雄、耶蘇、釋迦、楠正成、淸盛、だるま、日本武尊、素盞鳴尊、一休等はすべて英雄そのまゝに扱はれて、屢々他の作家が試みるやうにこれを凡人化しようとして居ないのは此故である。

氏の作風は、その精神から直接に流れ出づるものに何等の技巧をも加へず　流れるまゝに流れさせるといつた趣がある。内にあるものが自づと溢れて來て作品となつたといふ趣である。從つて嚴密な意味でのリアリズムの作家とはいへない。勿論除外例はあつて、「その妹」「愛慾」の如く比較的に現實的なものもあるが、之等に於てさへ、その人物の出し入れ等はかなり眞實らしさに拘泥しない自由さがある。その文章に就いても同樣なことがいへるので、少しも絢爛なところのない極めて素朴質實なものではあるが、決して澁滯したところはない。古格に泥まぬとか、傳統に囚はれぬとかいふ程度を越えて、普通の文法や假名使をさへ無視して居ながら、一種の名文になつて居る。作風文章から言つても氏は疑もなく天才型の作家である。

以上の知識を用意して讀めば、個々の作品に就いては十分に理解し得ると思ふからそれ〴〵に解説を附することはさし控へることにする。

作品年表

二つの心	明治四十五年九月作
或る日の一休	大正二年三月作
三和尚	同　五月作
わしも知らない	同　十一月作
二十八歳の耶蘇	大正三年一月作
母親の心配	同　四月作
その妹	大正四年二月作
佛陀と孫悟空	大正九年八月作
一日の素盞鳴尊	同　十一月作
桃源にて	大正十二年八月作
だるま	同　十一月作
運命と碁をする男	大正十三年十二月作

愛　慾　大正十四年十一月作
みない鳥　大正十五年六月作
ある畫室の主　同　八月作
生命の王　同　十月作

正宗白鳥篇解說

正宗白鳥氏名は忠夫、明治十二年三月三日、岡山縣和氣郡伊里村穗浪に、正宗浦二氏の長男として生れた。本年五十歲になつたわけである。

氏の生家は村では相當の資產家であつたらしい。そしてその父は數年間小學校の教師をして居たことがあるといふのだから、田舍での知識人であつたといはねばなるまい。氏は三代實子がなかつたといふ此家に長男として生れたのであつたから非常に我儘に育てられた。氏の容貌はその兩親の顏を打つて一丸としたものゝやうだといふことを氏自身が語つて居る。胃弱を父から、不眠症を母から、二つの肉體上の弱點を父母から受け繼いだといふことであるが、恐らく氏の精神上の性質も兩親の各々からやゝ均等に繼承して居るのではあるまいか。物事に恬淡な氣質を父から、神經質な氣象を母から——。

正宗氏は學齡に達すると村內の穗島尋常小學校に入學し「糸、犬、錨」の繪入讀本に依つて始めて文字を學んだ。此學校を卒業すると隣村片山村の高等小學校へ進んだが、引續いて成績は良好であつた。たゞ圖畫、算術、體操の諸學課を甚しく厭つた。十四歲になつて小學教育を終つた氏は、土地の私塾「閑谷黌」に入學した。その頃のことを氏は次のやうに書いて居る。

「私は小學校を卒業して、田舍の私塾へ入つたのだが、その時父は下男に荷物を背負はせて、一しよに來て吳れた。それで、父が歸つて一人になると、私は泣いた。私の學業の成績がよかつたことは父を喜ばせてゐたらしく、私を呼んで十八史略や文章軌範などの素讀や講義をさせた。柴刈船が沈沒して七八人が溺死した村の大事件のあつた時に、私にその記事を書かせて新聞へ出させた。日淸戰爭の出征軍人の送別會のあつた時、私に送別の辭を述べさせた。次男や三男に對しては父もさういふことはなかつたらしい。」

「閑谷黌」にあつて漢籍を學ぶ傍ら民友社の出版物などを愛讀して、居ること一年半、身體の衰弱、殊に胃病を治療するために岡山市に出で、病院通ひをする傍、ミツションスクール薇陽學院に英語を學んだ。尤も岡山市に出る前に生家の近村香登村の基督教講義所に赴いて既に基督教に關する若干の知識は得て居た。これが日淸戰爭の始まつた二

十七年のことであつて、その翌年は生家の二階に蟄居して盛に文學書類を耽讀した。氏は後年早稻田の文學部を卒業した頃にも、まだ別に作家にならうといふ氣持はなかつたといふことであつたが、既に此十七歳の頃に文學に對する愛好心が強く表はれて居たことが窺はれる。此前後のことは氏の初期の小說「二家族」のうちによく描き出されて居る。

二十九年二月、氏は遂ひに笈を負うて上京、牛込横寺町の下宿に投じて早稻田專門學校英語專修科に入學した。此頃の氏は郷里以來の基督教熱が盛で、その翌年は植村正久氏に依つて洗禮を授けられ、市ケ谷日本基督教會の會員となつた。三十一年史學部に轉じ、更らに翌年史學部が廢止されたため文學部に移り、越えて三十四年文學部を卒業した。同時に漸く懷疑的となつた氏は、此年基督教の信仰を捨てるに至つた。

卒業後の氏は直ちに母校附屬の出版部に職を奉じて文學科講義錄の編輯を擔當した。此卒業の年の在學中、氏は島村抱月氏指導のもとに同級生數人と共に讀賣新聞月曜附錄に批評文を寄稿した。氏の第一の批評の題目は泉鏡花氏の「註文帳」であつたが、此文章は氏が公の機關に發表した最初のものである。

三十六年六月讀賣新聞に入社、美術、文藝、教育に關する記事を受持つて居たが、翌年から劇評の筆を執り、四十三年退社に至るまで此仕事を續けて居たが、これは後年氏が戲曲家としての活動を始めるに當つて大いに助けとなつたことであらうと思はれる。小說家としてのみ長く仕事をしたのち、漸く最近に至つて戲曲に筆を染めた氏が、その社會に表だつて始めてした仕事が劇評であつたことは面白い事實ではあるまいか。

劇評の筆を執り始めた同じ年、即ち明治三十七年、氏は處女作小說「寂寞」を新小說誌上に發表した。だが此一篇をもつて大いに認められるといふことにはまだならなかつた。此時の原稿料一枚五十錢、全額二十餘圓の半ばを割いて蒲團を新調したといふことが、氏自身の執筆した年譜にあるから、五十枚足らずの作品であつたわけである。

當時は日露戰爭漸く終結に近づかんとする頃で、全世界の思想界に澎湃として漲りかへつた自然主義の新潮が極東の島國の岸邊にも押寄せて來て、わが文壇の風潮は一大轉向を取らうとして居る時であつた。作家としては國木田獨歩、田山花袋が大いに擡頭し、批評家としては島村抱月、長谷川天溪が「早稻田文學」の牙城に據つて天下に呼號した。文壇は所謂早稻田派が全盛の勢を致さうとして居た。わが白鳥氏は乘るともなく此潮の勢に乘つて忽ちに文壇の表面に浮びあがつたのである。翌四十年氏が「趣味」誌上に

發表した小說「塵埃」一篇は大いに文壇の視聽を惹いて、氏は新進作家として矚目さるゝに至つた。新時代を代表する讀賣新聞文藝欄を主宰し、當時旭日昇天の勢であつた早稻田派の文士として門出した氏はまた運命の寵兒であつたといはねばなるまい。勿論氏の深刻犀利なる觀察と、淡々として自由暢達なる描寫とがなければ、此運命の恩寵も結局無意味に終つたに過ぎなかつたであらうことはいふまでもない。

「塵埃」發表以後の氏は頓に創作力が旺盛になり、「二家族」「地獄」「泥人形」等の名篇を釣瓶擊に連發して、多作な年には十數篇を越えた。そして數年ならずして一流作家の位置を占めて、文壇に隱然たる一大勢力をなした。

明治四十四年四月、淸水つね子氏と結婚したが、子はなく今日まで靜な然し寂しい家庭生活を送つて居る。此子供がないといふことに關して氏がある雜誌の記者に答へた次の言葉は氏の性格の一端を語つて居て面白いと思ふ。

「子供があつたら宜いとも思はんです。男だから…… 併し女と云ふものは子供がなくちや詰らんものでせうね。」

大正三年になつて氏は始めて一つの戲曲を發表した。それは「祕密」といふ作品であつたが、別に大して問題とならず、戲曲家として認められる機緣とはならなかつた。翌四年小說「牛部屋の臭ひ」「死者生者」等の傑作によつて大いに文壇を騷がしてのち暫くは、さすが多作家の氏も製作に疲れたのか、創作力が衰へて居た。尤も六年には痔疾のために肛門病院へ入院して居た等の事實もあるから、身體の惡かつたためかも知れない。「近年次第に執筆難を感じ、且つ人生に對する倦怠を覺ゆること甚し。」と氏の手記にあるところから見ると、創作力の減退は寧ろその人生感から來たと認めなければならないかも知れぬ。さういふ氣持に襲はれた氏は、大正八年十月になると當時の住居であつた麻布我善坊町の家を離れて、夫人を伴つて旅に出た。伊香保に赴き、中仙道を經て京阪に遊び、十一月下旬に郷里岡山に歸省した時の氏は、出來ることなら文學を棄て都會生活をもやめたいとさへ思つて居た。だが、やがて故鄕の生活にもたへられなくなつて翌年半ば頃再び旅に出た氏はもうその年のうちに二つの小說を書いて居た。氏自身何の執着も持つて居ないやうに考へる文學も、いざとなればさうやすやすと捨てられるものではなかつたのだ。氏はその翌年、即ち大正十年六月に大磯に家を購つて居を定めた。そして今は、その足かけ九年も住みなれた大磯の家をもたゝんで外遊の旅に出かけようとして居るのだ。

大正十二年九月大震災の時には、氏の家は半壞の厄に遭ひ、辛うじて生命を免れる程の打擊を受けたのであつたが、氏が戲曲家としての活動を始めたのは實に此大地變以

後なので、此意味に於て、氏の戯曲と大地震との間には密接な關係があるのである。勿論震災が氏の心持に何等かの影響を與へて戯曲を書かしめたといふわけではない。たゞ氏が專ら戯曲の筆を執るやうになつたのが偶然震災後であつたといふ風に記憶するのが便利であるといふまでゝある。氏は小說から戯曲に轉向した理由を「小說に倦いたから。戯曲の方が小說よりも自分のうちに出來上つた型に囚はれないで形式として自由だから。」といふ二點に簡單に片づけて了つて居る。

何れにせよ、氏は大正十三年改造四月號に、本篇の巻頭に掲げた「人生の幸福」を發表すると同時に、一躍戯曲界に於ても覇を稱へるに至つたのであつた。そして此戯曲が同年十一月新劇協會の手に依つて帝國ホテル演藝場に於て上演されるや、その不思議なる舞臺上の魅力は一層戯曲家正宗白鳥の名を燦然と輝かしめ、川端康成氏の如きは天才白鳥の讃辭を之に呈したものであつた。

爾來五年氏はその異常なる創作力を再び發揮して、矢繼早に殆ど三十篇に餘る戯曲を發表し續けた。それらのうち「安土の春」、「隣家の夫婦」、「光秀と紹巴」、「梅雨の頃」等は何れも脚光を浴びて大いに劇壇を騒がせたものである。

正宗白鳥氏の戯曲に表はれた中心思想は何か。これを闡明するに先だつて筆者はまづ正宗氏の藝術、正宗氏の思想を簡單に跡づけて見なければならぬ。この探求は今日の正宗氏の辿りついた最後の作品たるその戯曲の核心に吾人を導いて行つて呉れるに相違ない。

凡そ最近の文學では、その流派の如何を問はず、十九世紀後半にエミイル・ゾラに源を發した自然主義の洗禮を受けなかつたものはない。從つて日本文壇に於ける自然主義以後の文學、新浪漫主義、人道主義、新技巧派、新感覺派無産派等の文學も亦當然、多少深淺の程度の相違こそあれ自然主義の影響を蒙らないものはない。見方によれば、之等の諸流派は自然主義から派生したものだといへないこともない位である。由來自然主義とは物質的、機械的、科學的な態度を以て人生に臨まんとする文學上の主張である。從つてその作品は純粹に客觀的である點を最も著しい特色とする。超越的なもの、神靈的なものゝ一切を認めない。人間をもたゞ一個の生物としてのみ觀察しようとする。だが、人間が神と動物との中間的存在であるといふニイチエ以來の事實の前には、此主張も半面の眞理を捕へて居るに過ぎないのであるから、文學は、あまりに空想的非現實的になり過ぎた浪漫主義文學に對する反動であつた此主義のみの支配を、長く受けることに甘んじなかつた。此處に自然主義によつて濾過された各種の新主觀主義の文學が生れて來るといふ順序になるのである。

正宗白鳥氏は此自然主義の文學が最もわが文壇に旺盛であつた時に登場した作家であつた。氏の小説の大部分は純粹に自然主義の文學であるといつて大した過りはない。けれども、氏には元來懷疑的な一面が早くより强かつた。若くして「開谷鐘」に漢學を學んだ氏は、その頭腦が比較的單純であつた筈の十六七歳の時に於てさへ、漢學の與へる儒教思想に滿足することが出來ないで、香登村の基督教講義所に通つて當時での新宗教の教義を聽き、數年にして洗禮まで受けて居る。ところがその基督教をも四年の後には捨てゝ居る。かういふ極めて懷疑的な、卽ち一つの思想を信奉することの困難な氏に取つて、自然主義の機械觀が滿足を與へたことは寧ろ當然であつた。懷疑的であるといふ事實は、强く主張すべき主觀を把持しないことで、此點が主觀を否定する自然主義の主張と相一致することは見易き必然であつた。

かういふ次第で、氏は先づ自然主義の鬪士としてその最前線に立つて華々しく活躍して居たが、いつか客觀的である筈の氏の作品に懷疑の主觀が色濃く表はれるやうになつて來た。化學者の實驗と文學者の思想上の創作的實驗とを混同したゾラの理論上の誤謬が此處に表はれて來たのである。結局、作家は嚴密な意味に於て客觀的では竟にあり得ないのである。

人生に對する懷疑は、その結果一定の信念に達しない以上、當然人生に對する冷淡さにまで陷ちて行く。出來るだけ客觀的な態度をもつて深刻に且つ微細に人生を觀察研究した正宗氏は、遂ひにその間に氏を頷かしむべき理法を發見することが出來なかつた。熱意をもつてその運動に參加し得べき人生の合理的進行を見出すことは出來なかつた。從つて氏は人生に積極的興味を感ずるわけに行かないのである。すべてに對して否定的な態度に傾かざるを得ない。此思想的段階まで達した時の氏を批評家は虛無主義者と呼んだ。けれども正宗氏自身が別に虛無主義者をもつて任じて居るのでないことはある雜誌記者との次の對話を見れば明かである。

「あなたのことを、よく虛無的だと、一般で言つて居りますが、あなた自身は、自分の思想なり、人生觀なりを反省して見る時に、どんな風に思つて居られますか。」

「僕自身は、虛無主義といふものを信奉してやしないさ。さうしようと思つて、さういふことをかんがへたこともない。自分の書いたことや、言つたことが、ハタの人にさう見えるなら仕方がないが、それだからと言つてそれにとらはれる必要もない。さう見るのは讀者や批評家の標準なんだけれども、併し作者がそれを標準にして書いて居るわけでもないし、虛無といつてどういふ點を虛無といふかそれ

も……」

要するに正宗白鳥氏が、以上述べて來たやうな思想的段階まで進んで來た時に、戯曲の處女作ともいふべき「人生の幸福」があらはれたのである。本篇に集錄した戯曲のすべては此作以後の製作にかゝるものであるが、氏の戯曲全體に虛無主義といふ言葉だけでは片づけ切れない或物が現はれて居るのを見落してはならない。

「人生の幸福」を取つて考察して見るに、主人公寛次郎は、異母妹かよ子の幸福のために之を絞殺してやらうとする、ところが却つて彼は妹に殺されて自ら幸福になつて了ふ。けれども、兄を殺しながら何の嫌疑も受けずに生き殘つたかよ子はその罪を煩悶して、自分は兄に殺されたほうが幸福ではなかつたかと迷つて居るところで幕になる。これだけなら、いつも通りの人生否定的な虛無主義といふ消極的な主觀の表れだけである。然し全篇に漲り亙つて居る凄慘な鬼氣、魔力的な無氣味さを讀者は見のがさないであらう。これは解剖的にいへば、喜多雄が御嶽さんの女殺し犯人らしくもあれば、さりでなささうでもあるといふ事實、かよ子の非人間的な冷靜さなどから來て居るものであらうが、結局一種の神祕的な影が作品の上に大きくかぶさつて來て居る事實は否みがたい。そして此神祕的陰影の方が此作品の生命をなして居る觀がある。殊に第三幕の夜の街道の場の如きは、眞黑の夜な中にポツンと點つた街燈の下で、かよ子と幸濱とがひそ／＼話しあふとき、突然けたゝましい行人の笑聲を聞かされるので、觀客は總身に水を浴びされたやうに感ずるのである。

「光秀と紹巴」「雲の彼方へ」「梅雨の頃」「歡迎されぬ男」「作頴の家」何れにも同じやうな無氣味な運命の影といはうか、神祕の雲といはうか、さういふものが必ず強く作品を締めつけて居る。

自然主義——懷疑——虛無——神祕、さういふ風に正宗氏の思想の發展を跡づけることは大した間違はなからうと思ふ。そして筆者は氏の戯曲を神祕的虛無主義の作品と呼びたいと思ふ。

以上をもつて不十分な解説の筆を收め、武者小路篇の場合に倣つて、各篇に就いての解説は避けることにする。

作品年表

人生の幸福

發表　大正十三年四月「改造」

初演　大正十三年十一月　於帝國ホテル演藝場　新劇協會

梅雨の頃
發表 大正十三年六月「演劇新潮」
ある病室
發表 大正十三年六月「女性」
ある心の影
發表 大正十三年六月「改造」
農村二日の出來事
發表 大正十三年九月「中央公論」
隣家の夫婦
發表 大正十四年一月「中央公論」
初演 大正十五年十一月 於大阪辨天座 喜多村一座
雲の彼方へ
發表 大正十四年八月「改造」
老醜
發表 大正十四年十二月「改造」
初演 大正十四年十二月 於市村座 兄弟座
安土の春
發表 大正十五年二月「中央公論」
初演 大正十五年三月 於新橋演舞場 左團次一座
勝頼の最後
發表 大正十五年三月「改造」
歡迎されぬ男
發表 大正十五年四月「改造」
初演 昭和二年六月 於帝國ホテル演藝場 新劇協會
一日の平和
發表 大正十五年四月「女性」
光秀と紹巴
發表 大正十五年五月「中央公論」
初演 昭和二年二月 於帝國ホテル演藝場 新劇協會
柿の木
發表 昭和元年十一月「文藝春秋」
勝敗
發表 昭和二年一月「中央公論」
間違ひ
發表 昭和二年一月「婦女界」
保瀬の家
發表 昭和二年二月「改造」
一萬圓
發表 昭和三年三月「改造」

みんな出鱈目
發表　昭和三年五月「中央公論」

（編輯部編）

編輯校訂責任

吉田甲子太郎
清水義政
佐藤十三郎

日本戲曲全集・第四十五卷
現代篇第十三輯・第九回配本

著作權者檢印

禁無斷上演

昭和三年十一月二十五日印刷　（非賣品）
昭和三年十一月二十八日發行

著作者　武者小路實篤
　　　　正宗白鳥
發行者　和田利彦
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所　春陽堂
電話京橋六五二　四四一五
振替東京一六一七

東京市本郷區眞砂町・日東印刷株式會社印刷